

# 長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—原 村 その5—

昭和51・52・53年度

本 文 編

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

# 長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

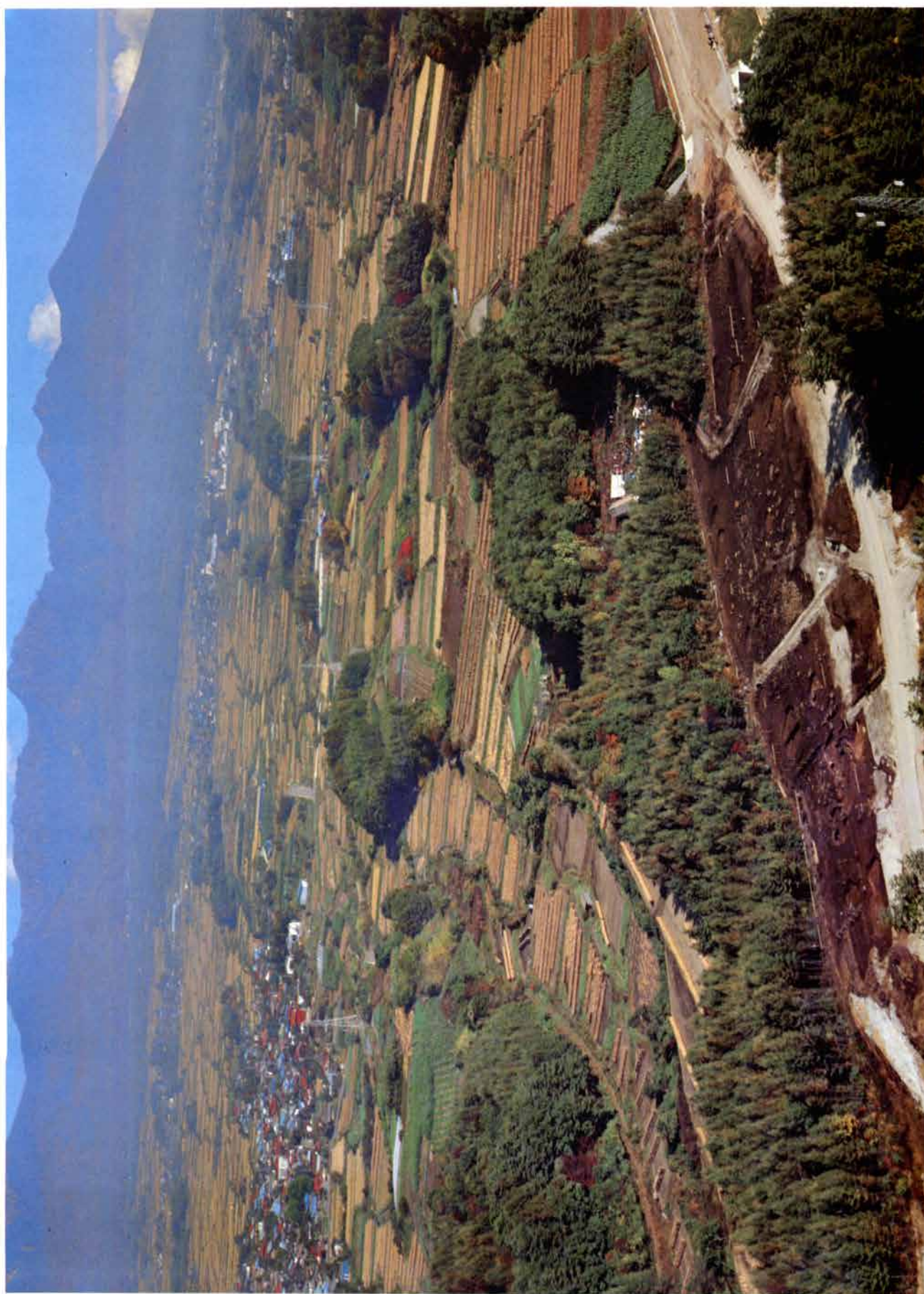
—原 村 その5—

昭和51・52・53年度

本 文 編

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会





阿久遺跡全景(第4次調査・西上空より)





阿久遺跡全景(第4次調査・北上空より)



彩色土器

## 例 言

1. 本書は、昭和51・52・53年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行なわれた発掘調査のうち「原村その5」内の諏訪郡原村阿久遺跡の調査報告書であり、本文編、図版編と付図からなる。
2. 本報告書は多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。特に下記の諸氏からはそれぞれの立場からご指導・助言をたまわった。  
現地指導者：上智短期大学学長八幡一郎教授、明治大学杉原荘介教授、奈良国立文化財研究所坪井清足所長、  
慶応義塾大学江坂輝弥教授、明治大学戸沢充則教授、国学院大学永峯光一講師、文化庁水野正好・  
小林達雄・稲田孝司各調査官  
岩石鑑定：信州大学齊藤豊助教授
3. 調査結果については、検討会で何回か協議を重ねたが、遺跡の性格上、統一見解に至らなかった点もある。また、基本的事項の統一はできる限り計ったが、表現方法等に多少の相違のある点は了解されたい。
4. 整理作業と原稿執筆は、遺構および遺物については、各項目別にそれぞれ担当者が、遺構図のレイアウト、遺物の整理復元、実測、レイアウト、トレース、執筆まで、原則として一貫作業とし、執筆分担は文末に記した。  
なお、小項目を連続して執筆した場合は、その最終項目にのみ記し、他は省略してある。  
整理復元作業：笹沢浩・青沼博之・山下泰男・百瀬新治・土屋積・和田博秋・小柳義男・小松原義人・堀知哉・  
福沢幸一・木下平八郎・松永満夫・中島庄一・坂野和信・矢島宏雄・藤森美枝・岩崎孝治・小池孝・高桑俊雄・  
島田哲男・市村勝己・石上周蔵・村井実・関喜子・矢崎つな子・矢島恵美子・加藤美智子・篠原由美子・三ッ  
井きみ子・中殿章子・山野井由美子・山口紀代子・青木裕子・安斉由深・桑原正枝・生島清子  
住居址：笹沢・百瀬・青沼・土屋・和田・岩崎・佐藤・小松原・福沢・小池・松永・(石器の一部を小柳・市村・石  
上が実測)、集石・立石・列石：笹沢・山野井、方形柱列：土屋・中殿、分布図・一覧表作成：土器——土屋・高桑・  
島田・中殿・安斉、石器——小柳・佐藤・小池・石上・安斉・三ッ井・山口・桑原・青木、遺物実測・トレー  
ス：土器——百瀬・土屋・岩崎・佐藤・高桑・島田、石器——樋口昇一・笹沢・小柳・岩崎・佐藤・小池・市  
村・石上・村井、土製品——島田、鉄製品——土屋、拓本——高桑・山口、写真図版作成——青沼・小池・高  
桑・島田・生島  
写真撮影：遺構関係は笹沢と木下ならびに遺構担当者(青沼・山下・土屋・岩崎・佐藤・松永・中島・平出・矢島)が、遺  
物は木下が専ら行なった。  
土器復元：福沢幸一が専ら行ない、桑原・山口・篠原が一部を分担した。
5. 本書における実測図の縮尺は、各実測図に記載のない限り、以下の如く統一し、その記載は省略してある。また、ドット図中の番号のうちゴチック体は土器番号を、他は取り上げ番号である。  
遺構実測図——1/200、環状集石群実測図——1/100、住居址・方形柱列・立石列石の各実測図ならびに遺物出  
土状態図——1/60、土壌・集石・かまど実測図——1/40、土器実測図——1/4、拓影図——1/3、石鏃等の小形  
の石器——1/1.5、打製石斧等——1/4、石皿——1/6または1/8、土製品・鉄製品・ミニチュア土器——1/2  
なお、写真図版にはその縮尺を記した。
6. 本書の方位は真北であらわし、標高は日本道路公団が設置したB・M No.H-2 H=904.486を、測量の基準点は、  
同様にSTA 235(X=-4,269,3291 Y=-27,817,7611)とSTA 234を用いた。
7. 本書で報告されている各種の分類基準は多量の資料を整理、情報化する目的のものであるが、一部に資料の特  
殊性もあり、かならずしも全体での統一はとれていない。
8. 昭和52・53年度の集石の実測は、写真測図研究所に依頼し、空中測量でおこなった。
9. 花粉分析はパリオ・サーヴェイ株式会社、放射性炭素の測定は学習院大学へ依頼した。
10. 本書の編集は全員の協議のもとに笹沢浩が行ない、樋口昇一が総括した。
11. 本書で報告された図面類は長野市に設置予定の財団法人長野県埋蔵文化財センター内に、遺物は原村教育委員  
会が保管している。

# 本文目次

序	
例言	
第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査にいたるまで	1
1 中央道関係の経過	1
2 発掘調査委託契約	2
3 長野県中央道遺跡調査会	3
第2節 調査の実施と経過	4
1 長野県中央道遺跡調査団—阿久班—	4
1) 発掘調査・整理	4
2) 発掘・調査協力者	5
2 調査の経過	6
1) 昭和51年度(第2次調査)	6
2) 昭和52年度(第3次調査)	8
3) 昭和53年度(第4次調査)	10
4) 昭和54～56年度	12
3 現地視察・見学者・報道関係・調査協力者	12
第3節 発掘調査と整理の方法	14
1 調査地区の設定	14
2 調査の方法	15
3 整理の方法	16
第2章 遺跡の概観	17
第1節 遺跡の立地と範囲	17
第2節 周辺の遺跡	20
第3節 土層	32
第4節 遺跡の時期区分とその概要	33
1 遺跡の時期区分	33
2 遺跡の概要	33
第5節 出土遺構・遺物の分類	36
1 遺構等の類型化	36
1) 住居址内遺物の出土状態の類型	36
2) 住居址の類型	36
3) 方形柱列の類型	38

4) 集石の種類	39
5) 土壌の種類	41
2 遺物の分類	43
1) 土器の分類	43
(1) 分類の基本的態度	
(2) 阿久II期	
(3) 阿久III期	
(4) 阿久IV期	
(5) 阿久V期	
(6) III群土器	
2) 石器の分類	52
(1) 石鏃	
(2) 石匙	
(3) スクレイパー	
(4) 石錐	
(5) ピエス・エスキーユ	
(6) 有袂頭磨石器	
(7) 使用痕ある石核・剝片・原石	
(8) 石核状石器	
(9) 打製石斧	
(10) 横刃型石器	
(11) 磨製石斧	
(12) 凹石・磨石・叩石	
(13) 丸石	
(14) 石皿	
(15) 固定式石皿	
(16) 砥石	
(17) 先端研磨石器	
(18) 敲打器	
(19) 円礫状石器	
(20) 滑石製品	
(21) 軽石製品	
第3章 遺構と遺物	63
第1節 阿久I期	63
1 住居址	63
(1) 住居址 38	
第2節 阿久II期	64
1 住居址	64
1) 阿久II-a期	64
(1) 住居址 25	
(2) 住居址 26	
(3) 住居址 28	
(4) 住居址 32	
(5) 住居址 36	
(6) 住居址 39	
(7) 住居址 48	
(8) 住居址 54	
(9) 住居址 55	
(10) 住居址 57	
(11) 住居址 64	
(12) 住居址 78	
(13) 住居址 80	
2) 阿久II-b期	84
(1) 住居址 14	
(2) 住居址 15	
(3) 住居址 24	
(4) 住居址 29	
(5) 住居址 30	
(6) 住居址 31	
(7) 住居址 35	
(8) 住居址 40	
(9) 住居址 44	
(10) 住居址 53	
(11) 住居址 65	
(12) 住居址 69	
(13) 住居址 71	
3) 阿久II-c期	103
(1) 住居址 37	
(2) 住居址 56	
(3) 住居址 63	
(4) 住居址 68	
2 方形柱列	109



(1) 方形柱列 I	(2) 方形柱列 II	(3) 方形柱列 III	
(4) 方形柱列 IV	(5) 方形柱列 V	(6) 方形柱列 VI	
(7) 方形柱列 VII	(8) 方形柱列 VIII	(9) 方形柱列 IX	
(10) 方形柱列 X III			
3 土壤 .....			115
(1) A 型土壤	(2) B 型土壤	(3) C 型土壤	
第 3 節 阿久 III 期 .....			118
1 住居址 .....			118
(1) 住居址 4	(2) 住居址 12	(3) 住居址 13	
(4) 住居址 27	(5) 住居址 33	(6) 住居址 41	
(7) 住居址 42・43	(8) 住居址 49	(9) 住居址 50	
(10) 住居址 51	(11) 住居址 59	(12) 住居址 61	
(13) 住居址 66・81	(14) 住居址 70	(15) 住居址 74(旧)	
(16) 住居址 76	(17) 住居址 77		
2 方形柱列 .....			145
(1) 方形柱列 X I			
3 土壤 .....			145
(1) B 型土壤	(2) C 型土壤		
第 4 節 阿久 IV 期 .....			147
1 住居址 .....			147
1) 阿久 IV-a 期 .....			147
(1) 住居址 5(旧)(中)(新)	(2) 住居址 6		
(3) 住居址 9(旧)(新)	(4) 住居址 11	(5) 住居址 52	
(6) 住居址 58	(7) 住居址 75	(8) 住居址 79	
2) 阿久 IV-b 期 .....			160
(1) 住居址 34	(2) 住居址 45	(3) 住居址 67	
(4) 住居址 74(新)			
2 立石・列石 .....			165
3 環状集石群 .....			166
1) 单位集石群 A .....			167
(1) 单位集石群 A-1	(2) 单位集石群 A-2		
(3) 单位集石群 A-3	(4) 单位集石群 A-4		
(5) 单位集石群 A-5	(6) 单位集石群 A-6		
(7) 单位集石群 A-7	(8) 单位集石群 A-8		
(9) 单位集石群 A-9	(10) 单位集石群 A-10		
(11) 单位集石群 A-11	(12) 单位集石群 A-12		
(13) 单位集石群 A-13	(14) 单位集石群 A-14		

(15) 単位集石群 A-15	(16) 単位集石群 A-16	
(17) 単位集石群 A-17	(18) 単位集石群 A-18	
2) 単位集石群 B		172
(1) 単位集石群 B-1		
3) 単位集石群 C		173
(1) 単位集石群 C-1	(2) 単位集石群 C-2	
4) 外側集石群 A・B		173
4 方形柱列		173
(1) 方形柱列 X	(2) 方型柱列 XII	
5 土 壙		175
1) 阿久IV-a期		175
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
2) 阿久IV-b期		176
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
第5節 阿久V期		178
1 住居址		178
(1) 住居址 7	(2) 住居址 72	
2 土 壙		187
1) 阿久V-a期		187
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
2) 阿久V-b期		188
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
3) 阿久IV・V期の土壙		188
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
4) 所屬時期不詳の前期土壙		189
(1) A型土壙	(2) B型土壙	(3) C型土壙
第6節 阿久VI・VII期		192
(1) VI期の土器	(2) VII期の土器	
第7節 阿久VIII期		193
1 住居址		193
(1) 住居址 8	(2) 住居址 10	
2 包含層出土の土器		193
第8節 阿久IX期		194
第9節 阿久X期		196
1 住居址		196
(1) 住居址 1	(2) 住居址 2	(3) 住居址 3
(4) 住居址 16	(5) 住居址 17	(6) 住居址 18

(7) 住居址 19	(8) 住居址 20	(9) 住居址 21	
(10) 住居址 22			
第 4 章 阿久遺跡をめぐる諸問題			207
第 1 節 出土遺構の検討			207
1 住居址			207
1) 類型別住居址の細部特徴			207
2) 住居址構造上の 2・3 の問題			210
(1) 入口施設	(2) 支柱穴		
3) 類型別住居址の時期別変化			210
2 集石			213
(1) 集石の類型別構造	(2) 集石掘り方と土壌との関係		
(3) 集石内の炭化物	(4) 集石を構成する礫		
(5) 集石の年代	(6) 集石の性格		
3 立石・列石			220
1) 立石・列石の特徴			220
2) 類似遺構にみられる山岳信仰との関係			220
3) 立石・列石の性格			221
4 方形柱列			222
1) はじめに			222
2) 類例			222
3) A・B 類型の遺構			225
(1) 掘り方の形態と配置	(2) 上層・検出面・掘り方の遺物		
(3) 床面施設と周辺	(4) 上部構造		
4) C 類型の遺構			228
5) 集落における位置			229
(1) 時期	(2) 占地	(3) 機能と変遷	
6) 小括			233
5 土壌			234
1) 県内を中心とした土壌研究			234
2) 土壌の形態と構造的特徴			234
(1) A 型土壌	(2) B 型土壌	(3) C 型土壌	
3) 埋土の堆積状況			236
4) 出土遺物			236
5) 土壌の時期別・形態別分布			237
6) 土壌の性格			239
7) 小括			241
第 2 節 遺物の出土状態の検討			243



1	住居址内遺物の出土状態	243
2	グリット出土土器の分布	245
	(1) II期I・II群土器	(2) III期II群土器
	(3) IV期I群土器	(4) V期I群土器
	(5) III～V期縄文施文・無繊維土器	(6) III群土器
	(7) その他	(8) まとめ
3	グリット出土石器の分布	248
	(1) 原石・石核・剝片・屑片	(2) 石鏃 (3) 石匙
	(4) スクレイパー	(5) 石錐 (6) ピエス・エスキーユ
	(7) 使用痕ある剝片	
第3節	出土遺物の検討	267
1	土器	267
1)	阿久I期	267
2)	阿久II期	267
	(1) 研究小史	(2) I群Aの諸特徴
	(3) I群Aに共伴する他の土器	
	(4) II期の編年的位置と細分案(I群Aを中心として)	
	(5) I群Aの分布	(6) 小括
3)	阿久III期	272
	(1) 研究小史	(2) I・II群土器の特徴
	(3) I群土器の出自	(4) I・II群土器の編年的位置
	(5) III期細分案	(6) I・II群土器の組成
4)	阿久IV期	276
	(1) 研究小史	(2) IV期の土器の特徴
	(3) 編年的位置および細分	(4) 小括
5)	阿久V期	283
	(1) 研究小史	(2) V期の土器の特徴
	(3) 編年的位置と細分	(4) 小括
6)	III群土器	289
	(1) 研究小史	(2) II期 (3) III期
	(4) IV期	(5) V期 (6) III群土器とI・II群土器との関係
7)	彩色土器	292
	(1) 漆塗り土器	(2) 漆塗り丹彩土器 (3) 丹彩土器
8)	阿久II・III期の土器成形	293
	(1) II期I群土器A	(2) III期I群土器 (3) 土器の成形手順
9)	土器の使用痕	294
	(1) II期	(2) III期 (3) IV・V期

(4) III群土器		
10) 阿久X期	297	
2 土製品・その他	298	
(1) 土製袂状耳飾	(2) 環状土製品	
(4) 土器片錘	(5) 土製円盤	
(6) 焼成を受けた粘土塊	(7) 顔面把手	
(8) ミニチュア土器		
3 石器	300	
1) 石器の型式的変化	300	
(1) 原石・剝片類	(2) 石鏃	(3) 尖頭状石器
(4) 抉入刺突具	(5) 石匙	(6) スクレイパー
(7) 複数抉入石器	(8) 石錐	(9) ピエス・エスキーユ
(10) 有抉頭磨石器	(11) 使用痕ある剝片	(12) 石核状石器
(13) 打製石斧	(14) 横刃型石器	(15) 磨製石斧
(16) 凹石・特殊磨石	(17) 丸石	(18) 石皿
(19) 固定式石皿	(20) 砥石	(21) 先端研磨石器
(22) 敲打器	(23) 円礫状石器	(24) 滑石製品
(25) 軽石製品		
2) 石器組成の変化	317	
3) 使用痕	318	
(1) 作用痕	(2) 装着痕	(3) 小括
第4節 阿久遺跡の変遷	326	
1 集落構造把握の基本的態度	326	
(1) 居住域と非居住域	(2) 竪穴式住居址の入口部の設定	
2 集落の変遷	328	
1) 阿久I期以前	328	
2) // I期	328	
3) // II期	328	
(1) II-a期	(2) II-b期	(3) II-c期
4) 阿久III期	331	
(1) III期古段階	(2) III期新段階	
5) 阿久IV期	333	
(1) IV-a期	(2) IV-b期	
6) 阿久V期	336	
7) // VI・VII期	336	
3 阿久IV・V期における宗教的儀礼	336	
1) 阿久III期以降の集落構造の性格	336	

2) 宗教的儀礼発生の契機 .....	337
第5章 まとめ .....	340
引用文献 .....	341
阿久遺跡関係文献目録 .....	347

---

別章1 写真測量 .....	写真測図研究所 杉本幸治...350
別章2 放射性炭素年代測定結果報告書 .....	学習院大学木越研究室 木越邦彦...353
別章3 花粉分析(付 大石遺跡) .....	パリノ・サーヴェイ株式会社...354
別章4 ウォーターフロテーション・セパレーション .....	361

---

付 表  
跋  
あとがき

## 挿 図 目 次

挿図 1	年次別調査区設定図	6
挿図 2	調査風景(写真撮影)	7
挿図 3	見学会風景	9
挿図 4	道路設計変更図	10
挿図 5	地上測量	11
挿図 6	地上測量(脚立利用)	11
挿図 7	調査風景	12
挿図 8	発掘区区割図	15
挿図 9	水糸くばり・実測用紙配布基本図	16
挿図 10	阿久遺跡付近の地形図(1:50,000)	18
挿図 11	阿久遺跡付近の地形図(1:10,000)	19
挿図 12	諏訪地方の縄文時代前期前半の遺跡分布図	22
挿図 13	諏訪地方の縄文時代前期後半の遺跡分布図	23
挿図 14	柏木尾根土層柱状図	32
挿図 15	発掘区土層図	32
挿図 16	時期別遺構・遺物分布概念図	34
挿図 17	住居址類型図	37
挿図 18	集石類型図	40
挿図 19	土壙類型図	42
挿図 20	土器分類図(II期)	45
挿図 21	土器分類図(III期)	47
挿図 22	土器分類図(IV期)	49
挿図 23	土器分類図(V期)	50
挿図 24	石鏃の型式分類図	53
挿図 25	石鏃の破損状況分類図	54
挿図 26	石匙の型式分類図	54
挿図 27	スクレイパーの型式分類図	55
挿図 28	石錐の型式分類図	55
挿図 29	ピース・エスキューの型式分類図	56
挿図 30	使用痕のある剥片の型式分類図	57
挿図 31	打製石斧の型式分類図	58
挿図 32	横刃型石器の型式分類図	58
挿図 33	磨製石斧の法量分類図	59
挿図 34	磨製石斧の型式分類図	59
挿図 35	磨製石斧の破損状況分類図	60
挿図 36	石皿の型式分類図	61
挿図 37	石皿の破損状況分類図	61
挿図 38	住居址 38 実測図	63
挿図 39	住居址 38 出土土器拓影図	63
挿図 40	住居址 25 実測図	64

挿図 41	住居址 25 土器出土状態図	65
挿図 42	住居址 25 石器出土状態図	65
挿図 43	住居址 26 実測図	66
挿図 44	住居址 28 実測図	67
挿図 45	住居址 32 実測図	68
挿図 46	住居址 32 土器出土状態・接合関係図	69
挿図 47	住居址 32 石器出土状態図	69
挿図 48	住居址 32 石器出土状態細部図	70
挿図 49	住居址 36 実測図	71
挿図 50	住居址 36 遺物出土状態・接合関係図	72
挿図 51	住居址 39 実測図	72
挿図 52	住居址 39 出土石槍実測図	73
挿図 53	住居址 48 実測図	73
挿図 54	住居址 54 実測図	75
挿図 55	住居址 55 実測図	76
挿図 56	住居址 57 実測図	78
挿図 57	住居址 57 遺物出土状態図	79
挿図 58	住居址 57 出土土器拓影図	79
挿図 59	住居址 64 実測図	80
挿図 60	住居址 64 石器出土状態図	80
挿図 61	住居址 64 礫出土状態図	81
挿図 62	住居址 78 実測図	82
挿図 63	住居址 80 実測図	83
挿図 64	住居址 14 実測図	84
挿図 65	住居址 15 実測図	85
挿図 66	住居址 24 実測図	86
挿図 67	住居址 29 実測図	87
挿図 68	住居址 30 実測図	88
挿図 69	住居址 31 実測図	89
挿図 70	住居址 35 実測図	91
挿図 71	住居址 40 柱列配置図	91
挿図 72	住居址 40 内の土壌 995 埋土内遺物分布	92
挿図 73	住居址 40 実測図	92
挿図 74	住居址 44 実測図	93
挿図 75	住居址 53 実測図	95
挿図 76	住居址 53 土器出土状態・接合関係図	96
挿図 77	住居址 65 実測図	97
挿図 78	住居址 69 実測図	98
挿図 79	住居址 69 土器出土状態・接合関係図	99
挿図 80	住居址 69 変遷図	99
挿図 81	住居址 71 実測図	101
挿図 82	住居址 71 土器出土状態・接合関係図	102
挿図 83	住居址 71 床面上の黒曜石集積状態図	102
挿図 84	住居址 37 実測図	104
挿図 85	住居址 37 変遷図	104

挿図 86	住居址 37 土器出土状態・接合関係図	105
挿図 87	住居址 56 実測図	106
挿図 88	住居址 63 実測図	107
挿図 89	住居址 63 土器出土状態・接合関係図	108
挿図 90	住居址 68 実測図	109
挿図 91	方形柱列Ⅴ焼成粘土位置図	113
挿図 92	Ⅱ期土壌分布図	116
挿図 93	住居址 4 実測図	118
挿図 94	住居址 12 実測図	119
挿図 95	住居址 13 実測図	120
挿図 96	住居址 27 実測図	121
挿図 97	住居址 33 実測図	122
挿図 98	住居址 33 遺物出土状態・土器接合関係図	123
挿図 99	住居址 41 実測図	124
挿図 100	住居址 42・43 実測図	126
挿図 101	住居址 49 実測図	127
挿図 102	住居址 49 遺物出土状態図	128
挿図 103	住居址 50 実測図	129
挿図 104	住居址 51 実測図	130
挿図 105	住居址 59 実測図	131
挿図 106	住居址 61 実測図	132
挿図 107	住居址 61 遺物出土状態・接合関係図	133
挿図 108	住居址 66 実測図	135
挿図 109	住居址 70 実測図	136
挿図 110	住居址 74 実測図	136
挿図 111	住居址 74 土器出土状態・接合関係図	136
挿図 112	住居址 74 石器出土状態図	138
挿図 113	住居址 74 変遷図	139
挿図 114	住居址 76 実測図	141
挿図 115	住居址 76 土器出土状態・接合関係図	142
挿図 116	住居址 76 礫出土状態図	143
挿図 117	住居址 77 実測図	144
挿図 118	Ⅲ期土壌分布図	145
挿図 119	住居址 5 実測図	148
挿図 120	住居址 5 遺物出土状態・土器接合関係図	149
挿図 121	住居址 5 変遷図	149
挿図 122	住居址 6 実測図	150
挿図 123	住居址 6 遺物出土状態・土器接合関係図	151
挿図 124	住居址 9 実測図	152
挿図 125	住居址 9 遺物出土状態・土器接合関係図	153
挿図 126	住居址 11 実測図	154
挿図 127	住居址 11 遺物出土状態・土器接合関係図	155
挿図 128	住居址 52 土器出土状態・接合関係図	155
挿図 129	住居址 52 実測図	156
挿図 130	住居址 58 実測図	157

挿図 131	住居址 75 実測図	158
挿図 132	住居址 79 実測図	159
挿図 133	住居址 34 実測図	160
挿図 134	住居址 45 実測図	162
挿図 135	住居址 45 変遷図	163
挿図 136	住居址 67 実測図	164
挿図 137	単位集石群分布図	167
挿図 138	類型別単位集石群分布模式図	168
挿図 139	長軸方向別集石分布模式図(1)	169
挿図 140	長軸方向別集石分布模式図(2)	169
挿図 141	長軸方向別集石分布模式図(3)	170
挿図 142	IV期の土壌分布図	176
挿図 143	住居址 7 実測図	179
挿図 144	住居址 7 変遷図	179
挿図 145	住居址 7 土器出土状態・接合関係図	180
挿図 146	住居址 7 石器・礫出土状態図	180
挿図 147	住居址 72 実測図	180
挿図 148	住居址 72 礫出土状態図	181
挿図 149	住居址 72 土器出土状態図	182
挿図 150	住居址 72 石器出土状態図	183
挿図 151	住居址 72 土器接合関係図	184
挿図 152	住居址 72 変遷図(1)	185
挿図 153	住居址 72 変遷図(2)	186
挿図 154	V期の土壌分布図	187
挿図 155	住居址 8 実測図	193
挿図 156	住居址 10 実測図	194
挿図 157	住居址 10 出土土器実測図	194
挿図 158	阿久IX期の土器拓影図	195
挿図 159	住居址 1 実測図	196
挿図 160	住居址 1 遺物出土状態図	197
挿図 161	住居址 1 かまど実測図	198
挿図 162	住居址 1 出土丹彩灰粘陶器実測図	198
挿図 163	住居址 2 実測図	199
挿図 164	住居址 2 かまど実測図	199
挿図 165	住居址 3 実測図	200
挿図 166	住居址 16 実測図	200
挿図 167	住居址 16 かまど実測図	201
挿図 168	住居址 17 実測図	201
挿図 169	住居址 18・19 実測図	202
挿図 170	住居址 18 かまど実測図	203
挿図 171	住居址 20 実測図	203
挿図 172	住居址 20 かまど実測図	204
挿図 173	住居址 21 実測図	204
挿図 174	住居址 21 かまど実測図	205
挿図 175	住居址 21 出土土器実測図	205

挿図 176	住居址 22 実測図	206
挿図 177	住居址 22 出土弥生土器拓影図(1/2)	206
挿図 178	住居址変遷図	212
挿図 179	時期別住居址長軸方向	208
挿図 180	集石の類型別法量分布図	215
挿図 181	集石 200 掘り方内の炭化物・焼土出土状態図	216
挿図 182	集石の類型別礫数分布図	217
挿図 183	方形柱列 a 号実測図	223
挿図 184	方形柱列 a 号付近土器出土状態図	224
挿図 185	方形柱列 b 号実測図	224
挿図 186	方形柱列 c 号実測図	225
挿図 187	方形柱列Ⅳの掘り方配置と池部第 14 遺跡 19 号長方形柱穴列〔坂上・石井 1976〕(1 : 120)	227
挿図 188	上原遺跡小堅穴・不整形ピット〔大場他 1957〕(1 : 120)	227
挿図 189	住居址 72 の主柱穴配置と方形柱列 X I の掘り方配置(1 : 120)	228
挿図 190	西田遺跡の長方形柱穴列 I 類〔佐々木他 1980〕(1 : 120)	229
挿図 191	井口遺跡の住居址〔橋本 1976〕(1 : 180)	229
挿図 192	方形柱列の方向	230
挿図 193	方形柱列変遷図	231
挿図 194	十二ノ后遺跡の方形配列土壌群 I〔樋口他 1976〕(1 : 120)	232
挿図 195	土壌 983 土器出土状態図	237
挿図 196	土壌 965 土器出土状態図	237
挿図 197	類型別土壌分布図	237
挿図 198	グループ別土壌分布図(A・B型)	238
挿図 199	グループ別土壌分布図(C型)	239
挿図 200	グリット出土土器分布図(Ⅱ期)	247
挿図 201	グリット出土土器分布図(Ⅲ期Ⅱ群)	248
挿図 202	グリット出土土器分布図(Ⅳ期)	249
挿図 203	グリット出土土器分布図(Ⅴ期)	250
挿図 204	グリット出土土器分布図(Ⅲ～Ⅴ期、縄文施文・無繊維)	252
挿図 205	グリット出土土器分布図(Ⅲ群)	251
挿図 206	グリット出土土器分布図(押型文・Ⅰ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ期)	253
挿図 207	グリット出土剝片・屑片分布図	256
挿図 208	黒曜石原石集中状況図	257
挿図 209	グリット出土の石鏃分布図	257
挿図 210	グリット出土石器の型式別割合	258
挿図 211	グリット出土石鏃の基部と側辺との関係	258
挿図 212	グリット出土石鏃の重量分布	258
挿図 213	グリット出土石器の石質の割合	259
挿図 214	グリット出土石鏃の破損の割合	269
挿図 215	グリット出土石匙の型式別分布図	260
挿図 216	グリット出土石匙の石質別重量分布	260
挿図 217	グリット出土スクレイパーの石質別重量分布	261
挿図 218	グリット出土石錐の型式別分布図	261
挿図 219	グリット出土石錐の型式別重量分布	262
挿図 220	グリット出土ピエス・エスキーユの型式別分布図	263



挿図 221	グリット出土有抉頭磨石器・先端研磨石器分布図	263
挿図 222	グリット出土使用痕のある剥片分布図	264
挿図 223	グリット出土の打製石斧・横刃型石器・磨製石斧分布及び接合関係図	264
挿図 224	グリット出土凹石の分布図	265
挿図 225	グリット出土石皿分布及び接合関係図	265
挿図 226	グリット出土滑石製品分布図	266
挿図 227	施文順序模式図(IV期)	279
挿図 228	口縁部形態図	279
挿図 229	獣面把手実測図	285
挿図 230	施文順序模式図(V期)	286
挿図 231	II期I群Aの擬口縁	294
挿図 232	土器の使用痕(1)	295
挿図 233	土器の使用痕(2)	296
挿図 234	顔面把手実測図	299
挿図 235	住居址出土石鏃・石匙・スクレイパー・石錐・使用痕ある剥片の時期別型式(左)と時期別石質(右)	300
挿図 236	住居址出土石鏃の型式別重量比較(II-a・III・V期)	301
挿図 237	住居址出土石鏃の時期別破損	301
挿図 238	尖頭状石器の大きさ	302
挿図 239	住居址出土石匙の重量分布(II-a・II-b・III期)	302
挿図 240	住居址出土スクレイパーの石質別重量分布(II-a・II-b・III期)	303
挿図 241	住居址出土ピエス・エスキューの時期別型式	304
挿図 242	住居址出土ピエス・エスキューの型式別重量分布(II-a・II-b・III期)	304
挿図 243	有抉頭磨石器素材別重量分布図	305
挿図 244	住居址出土使用痕のある剥片の型式別刃部の長さの比較(II-a・III・V期)	305
挿図 245	住居址出土使用痕のある剥片の重量分布(II-a・III・V期)	306
挿図 246	住居址出土石核状石器の大きさ(II-a・II-b・III期)	307
挿図 247	打製石斧の類型別個体数	307
挿図 248	凹石の形態別重量分布図	311
挿図 249	凹石の使用痕別重量分布図	311
挿図 250	石皿の時期別型式割合図	312
挿図 251	時期別一棟あたりの石器数	317
挿図 252	出土地別石器組成	318
挿図 253	石器の使用痕(1)	320
挿図 254	石器の使用痕(2)	321
挿図 255	石錐の使用痕	322
挿図 256	住居址出土剥片・石核重量分布(20gまで)	325
挿図 257	集落変遷図(II-a期)	329
挿図 258	集落変遷図(II-b期)	330
挿図 259	集落変遷図(II-c期)	330
挿図 260	集落変遷図(III期古段階)	331
挿図 261	集落変遷図(III期新段階)	332
挿図 262	集落変遷図(IV-a期)	334
挿図 263	集落変遷図(IV-b期)	334
挿図 264	集落変遷図(V期)	335

## 表 目 次

表 1	諏訪地方の縄文時代前期遺跡地名表	24
表 2	阿久遺跡の時期区分と遺構集成表	34
表 3	列石集計表	166
表 4	類型別土壌集計表	190
表 5	時期別の類型別住居址集計表	211
表 6	時期別住居址拡張、建て替え一覧表	213
表 7	類型別集石集計表	214
表 8	規模別土壌集計表	241
表 9	遺物出土状態類型別住居址一覧(各期毎)	244
表 10	原石・剥片類出土数	256
表 11	住居址出土Ⅲ群土器集成	289
表 12	Ⅲ群土器対比表	291
表 13	凹石集計表	310
表 14	固定式石皿出土状況表	314
表 15	住居址出土石器時期別組成	317
表 16	石錐形式別使用痕数	319
表 17	石器にみられる石匙型使用痕	322

## 別 章 図 ・ 表 目 次

図 1 写真測量の工程 ..... 350 2 環状集石群実測図(1/20)シート割り図 350 3 作業計画 ..... 351	図 4 花粉・孢子化石産出状況図 ..... 355 5 資料採取区割図 ..... 361 表 1 地区別遺物出土数集計表
---	--

## 別 表 目 次

別表 1 住居址一覧表 別表 2 集石一覧表 別表 3 土壌一覧表	別表 4 方形柱列掘り方・土壌対比表 別表 5 石器集計表 別表 6 石器一覧表
---	--

## 付 図 目 次

付図 1 阿久遺跡発掘全体図(1/500) 付図 2 阿久遺跡集石群全体図(1/200) 付図 3 阿久遺跡集石群全体図(1/1000)	付図 4 阿久遺跡遺構全体図(1/200) 付図 5 阿久遺跡遺構全体図(1/1000) 付図 6 阿久遺跡出土土器編年図(1/4)
--	--

# 第1章 調査の実施と経過

## 第1節 調査にいたるまで

### 1 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道西宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルを経て飯田盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

買収された用地は、昭和54年3月現在6,994,000㎡の広さに及ぶ。ルート内に含まれる埋蔵文化財包蔵地は延216遺跡を数え、調査対象面積も280,000㎡以上に及んでいる。昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、昭和45年までの数年にわたり度重なる協議が日本道路公団名古屋支社との間に続けられ、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年度で12年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を待って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に進められ、昭和53年までに216遺跡(最終的には193に統合)の発掘調査が終了し以後56年度まで、整理期間となっている。

発掘調査には県独自の組織が持たないので「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。調査団の運営には、団長と共に、県教育委員会文化課に在籍する指導(専門)主事が調査主任として現地へ長期出張し、業務に当たった。昭和45・46年度には調査主任2名からなる2班編成であったが、昭和47年度から増員され5名(他1名は一部担当)の調査主任が数班編成で業務に当たってきた。昭和51年度は調査地区の関係もあって指導主事が4名に減員され、かつ、茅野市・原村地区で、本報告の阿久遺跡や既報告の居沢尾根・判の木山西等の大遺跡に遭遇してしまい、調査進行上極めて大きな支障をきたすことになった。4月12日、茅野市・原村その2地区10遺跡(調査費91,744,000円)を契約し、3班編成で調査が開始されたが、各班とも前記のようなそれぞれ大遺跡のため、年度内調査終了は不可能な事態に立ち至り、阿久・居沢尾根・判の木山西遺跡は次年度へ延伸せざるを得なくなった。更に前年度までの遺物整理作業の遅れは年々累積され、同時に工期に迫られて発掘調査が強行されるという、単年度契約方式の弊害が次第に露呈し、度々の公団交渉で実情を訴えてはきたが、その解決策が見出されず苦慮した年度であった。

そこで52年度は指導主事3名を増員し、4月5日、茅野市・原村その3地区5遺跡(内継続3遺跡、調査費100,283,000円)、岡谷市その4地区5遺跡(調査費25,864,000円)の発掘調査と、茅野市・原村その2地区の整理作業(調査費12,779,000円)を公団と契約し、5班編成で調査が開始された。だが中心となる調査員が集らず、岡谷地区の調査は市当局のご好意で市職員2名の1年間出向という協力で実施できたことは幸いであった。しかし、茅野市・原村地区では、阿久遺跡を除く4遺跡、岡谷地区でも用地買収が一部残った船霊社遺跡を除き、他の4遺跡を相当無理な日程消化で調査終了させたが、阿久遺跡が次第に大規模な姿を現わし、その重要性が全国的に指摘され始め、3年目へ入る継続調査のやむなきに至り、船霊社遺跡と

ともに、53年度へ持ちこされることとなった。一方、整理作業班は、大遺跡を抱えた発掘調査班に主力を置かざるを得ない状況から当初予定より縮少せざるを得ず、主任1名、調査員2名の構成となり、整理作業の進展を著しく遅れさせてしまった。しかし、道路公団との間で、月1回の工程会議が設置され、事態の改善に向けての努力もなされるようになった。

53年度は昨年度より継続調査となった阿久遺跡・船靈社遺跡とともに、茅野市御社宮司遺跡の調査が昨年度の範囲確認調査に引き続き着手された。船靈社遺跡は用地未買収のためその着手に遅れをきたし、5月中旬より調査が開始され、7月末に終了した。なお、この年には、諏訪南インターチェンジの早期着工に、県及び地元市町村よりの強い要望があり、用地内発掘調査が実施されることとなった。これに対し、指導主事4名の増員がなされていたが、用地内立木の処理、取付道路等の問題から年度当初から調査に着手できず8月21日より開始せざるを得なかったが、幸い大規模な遺構検出もない中で12月7日に調査を終了した。一方、阿久遺跡は全国的な注目をあび、保存運動の高まる中で、再三に亘る道路公団、地元原村、長野県考古学会、文化庁の話し合いの中で、取付道路のう回、本線部分の土盛、遺跡前後の設計変更等から遺跡保存が行われることとなり、発掘調査も今年度で終了することとなった。また、御社宮司遺跡も期限内一杯を費やして中世遺構、縄文晩期の良好な遺物を多量に検出し成果をあげた。昭和45年より行われてきた、中央道西宮線用地内遺跡の発掘調査はこれによりすべて完了し、次年度の昭和54年からは、発掘調査のため大幅に遅れている整理作業に主力が注がれることとなった。

昭和54年度からは、各遺跡とも抱えている膨大な発掘資料の整理に終始した。また、昭和48年より辰野町に置かれていた中央道遺跡調査団本部は、借用している辰野町立東小学校の学級増にともない、長野市への移転の止むなきに至り、その準備、荷造り、引越し、新本部での受入れ、整理に、昭和54年10月より12月まで費やされ、整理作業に大きな支障をきたした。その間の事業としては、55年3月に「岡谷市その4」、56年3月に「茅野市・原村その3」、「茅野市その4・富士見町その3」、昭和56年10月に「原村その4」の4冊の報告書が刊行され、本報告の阿久遺跡(原村その5)と他1冊となる御社宮司遺跡(茅野市その5)の2報告書の刊行をもって、昭和56年度末に、一切の業務が完了することとなった。

## 2 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定し発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施してきた。本遺跡についてはつぎのような発掘調査委託契約が両者間で締結された。

### 発掘調査委託契約書

- |   |         |   |
|---|---------|---|
| 1 | 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査(茅野市・原村その5)                                     |
| 2 | 委託期間    | 昭和51年4月14日から昭和52年3月20日まで。(以後契約変更により、発掘調査は54年3月20日まで継続調査となる) |
| 3 | 委託金額    | 金91,744,000円(52年度100,283,000円、53年度140,218,000円)             |
|   | (以下略)   |   |

なお、昭和54年以降の整理作業事業については、54年度(67,185,000円)、55年度(57,862,000円)56年度(77,902,000円)の契約がなされた。( )内は他遺跡分も含む)

## 3 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会に再委託し、更に同調査会が組織する調査団が発掘調査に当たってきた。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会と調査会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。昭和51年度から56年度役員はつぎのとおりである。なお、中央道遺跡調査会規約は既刊の中央道報告書を参照されたい。

昭和51年度～56年度中央道遺跡調査会役員名簿(役職の次の算用数字は在職年度)

顧問 一志 茂樹(県文化財保護審議会々長)50～56

会長 水口 米雄(県教育長)51～55

内山袈裟一(県教育長)56

理事

金井喜久一郎(県文化財保護審議会委員)	51～56	中村 文武(諏訪市教育委員会教育長)	51～53
米山 一政( " )	"	今井 正明( " )	54～56
桐原 健( " )	51～55	木川 千年(茅野市教育委員会教育長)	51～55
永峯 光一( " )	56	小島与四郎( " )	56
原 嘉藤(信濃史学会理事)	51～56	小泉 真澄(原村教育委員会教育長)	51
村上 一(県教育委員会教育次長)	51	松沢 達( " )	52～55
毛涯 修( " )	52～55	鎌倉徳之丞( " )	56
大友 博幸( " )	56	小林 繁治(富士見町教育委員会教育長)	51～53
太田 波夫(県教育委員会文化課長)	51～52	藤森 純一( " )	54～56
千野 久義( " )	53・54	小島与四男(諏訪教育会長)	51・52
池田宗兵衛( " )	55・56	名取 又男(諏訪地区教委協議会長)	51
下平 晃(伊那教育事務所長)	51～53	花岡 文吉( " )	52・54・55
原山 光政( " )	54～55	三浦 邦次( " )	53
山口 敬治( " )	56	金原 安雄( " )	56
熊谷 大一(辰野町教育委員会教育長)	51～56	八幡 栄一( " )	53・54
久保 義幸(岡谷市教育委員会教育長)	51	篠原 菊弥( " )	55・56
岡西 良治( " )	52～55	林 茂樹(宮田小学校長)	51～56
八幡 栄一( " )	56		

監事

小栗栄重郎(県教育委員会文化課課長補佐)	51～52	青木 昭一(県教育委員会庶務課長)	55・56
青木 和久( " )	53	西村 弘(県教育委員会庶務課長)	55・56
青沼 茂二(県会計局会計課長)	54	上原 寛(茅野市教育委員会教育次長)	51
竹本 春男(県会計局会計課長)	55	矢島 雅幸( " 社会教育課長)	52・53
豊田 元繁( " )	56		

幹事

松下 文平(県教育委員会庶務課課長補佐)	54	深山 金二(県教育委員会文化課課長補佐)	54・55
----------------------	----	----------------------	-------

会津 衛 (県教育委員会文化課課長補佐)	56	平野 益雄 (県教育委員会文化課庶務主事)	51
青沼 一之 (県教育委員会文化課文化係長)	51~53	西沢 宏明 ( " )	51~53
若林 伝 ( " )	54	佐藤 正志 ( " )	53
山下 四郎 (県教育委員会文化課庶務係長)	55	竹村 義和 ( " )	54
小池 康雄 ( " )	56	佐藤 俊明 ( " )	55・56
浅井 舎人 (県教育委員会文化課文化財係長)	51	今村 善興 (県教育委員会文化課指導主事)	51~53
久保 浩美 ( " )	52・53	山田 瑞穂 ( " )	51・52
原山 広 ( " )	54・55	丸山敏一郎 ( " )	51~54
桜井 清志 ( " )	56	関 孝一 ( " )	52~56
水品 良彦 (伊那教育事務所総務課長)	51	郷道 哲章 ( " )	55・56
吉沢 乙一 ( " )	52・53	臼田 武正 ( " )	53~56
星野 政清 (伊那教育事務所社会教育課長)	51	樋口 昇一 (県教育委員会文化課専門主事)	51~56
片桐 光男 ( " )	52・53	岩佐今朝人 ( " )	54~56
小口 幸雄 (伊那教育事務所諏訪支所長)	51・52	伴 信夫 ( " )	51~54
武井今朝人 (伊那教育事務所主査)	51・52	笹沢 浩 ( " )	51~54
久保田秀明 ( " )	51	小林 秀夫 ( " )	52~54
寺沢 公明 (伊那教育事務所主事)	51・52	青沼 博之 ( " )	"
木藤 辰男 ( " )	53	百瀬 長秀 ( " )	53・54
小山 民雄 (伊那教育事務所社会教育課主事)	52・53	山下 泰男 ( " )	"
小林 正良 (県教育委員会文化課庶務主査)	52・53	土屋 積 ( " )	"
堀内規矩雄 (県教育委員会文化課庶務主事)	51~53	和田 博秋 ( " )	"
宮島 孝明 ( " )	51・52		

## 第2節 調査の実施と経過

調査会より発掘調査の実務を委託された調査団は、会長より委嘱された団長・調査主任・調査員・調査補助員が中心となり現場作業は地元市町村教育委員会の協力で応募された作業員の方々と共に、4月当初の準備期間を経て、4月中、下旬から現地での発掘調査に従事し、冬季に入るほぼ11月下旬~12月上旬に終了し、以後3月末まで一整理期間に入る。昭和54年後半から調査団本部が辰野町から長野へ移動し、助手を加えた。阿久班は以下のように組織された。

### 1 長野県中央道遺跡調査団—阿久班(昭和51~56年度)(・印は重複)

#### 1) 発掘調査(51~53年度)・整理(51~56年度)

調査団長	大沢 和夫	51~52	・樋口 昇一	54~56
総括	今村 善興	51~53		
調査主任	笹沢 浩	51~56	山下 泰男	53・54
	青沼 博之	52・56	百瀬 新治	55・56

調査主任	・土屋 積	56	小柳 義男	56	
調査員	小松原義人	51~54	中島 庄一	51・52	
	堀 知哉	52	・岩崎 孝治	52~56	
	福沢 幸一	51~56	土屋 積	52	
	木下平八郎	52・56	矢島 宏雄	51・52	
	松永 満夫	51	佐藤 信之	53~56	
	平出 一治	52	・藤森 美枝	52~54	
	高桑 俊雄	52・56	原 明芳	51	
	小池 孝	56			
	調査補助員	岩崎 孝治	51	石上 周蔵	56
		藤森 美枝	52	市村 勝己	53~55
島田 哲男		56	村井 実	56	
助 手	中殿 章子	54~56	加藤美智子	55	
	山口紀代子	54~56	青木 裕子	56	
	篠原由美子	54・55	生島 清子	56	
	小野いずみ	54	三ッ井きみ子	56	
	山野井由美子	55・56	桑原 正枝	56	
	安斎 由深	55・56			

2) 発掘・整理協力者(市町村別、五十音順)

原村	秋山きみえ	阿部 嘉子	荒木 弥生	今泉かめ子	牛山 いね	牛山いね志	
	牛山 英子	牛山きよの	牛山とく子	牛山ひるえ	牛山よしみ	岡本 絹子	
	岡本 常幸	笠原 隆光	鎌倉 末男	鎌倉たけみ	上島なつ江	菊池 正志	
	北原みね子	木下とくよ	久保田美子	小池一二三	小池むつ子	小林あさえ	
	小林 静子	小林せき子	小林 波次	小林 初江	小林 巻美	小林 ミサ	
	小林 みよ	小林 美映	五味かづえ	五味けさき	五味トキ子	五味 憲彦	
	五味ふさ子	五味 文男	五味ゆき江	篠原ふくよ	清水 幸次	清水さわの	
	清水しげ子	清水志げよ	清水 しま	清水たけよ	清水たつみ	清水千代子	
	清水つねえ	清水としみ	清水 初江	清水 弘之	清水 みち	清水 了	
	武田まつ江	田中よし子	長田 秋子	中村ふさえ	長林ときわ	長林みね子	
	長林 百代	林 やす子	原 英子	平林 一三	平林かつみ	藤沢 真澄	
	藤原 節子	藤原 千文	藤原智恵子	藤原由希子	藤原 礼子	堀内おこの	
	堀内 政子	堀内 美江	堀内よしえ	宮坂多敬夫	宮坂とし子	宮坂美智恵	
	宮坂 八重	松沢 正二	芳沢つねよ	芳沢 花江	芳沢 光世	芳沢みよ子	
	茅野市	伊藤 夏夫	岩崎 孝治	岩崎 治朝	岩崎はつえ	小林 琴好	五味 貞好
		五味 文夫	田中 文六	平林 朝治	宮坂 収一	守屋 くに	守屋 里子
		守屋 好	矢崎弥太郎	矢嶋恵美子	矢嶋 千雪		
	諏訪市	伊藤 倭男	岩波けさえ	岩波やよひ	小林 花子	関 隆範	野沢 明子
		野沢 和代	野村志めよ	野村 文彦	原 とめ	藤森 正子	藤森ミツ子

	細野たつよ	守屋 かの	守屋 くに	守矢 たつ	矢崎 彰一	矢崎みさを
下諏訪町	藤森 建芳	山口 功				
岡谷市	鮎沢 静子	鮎沢八重子	岩本よし子	大槻 周治	小林三八子	小松亥之一
	清水 喜造	高木 保人	花岡 貞雄	浜 幸助	浜 園枝	堀川佐源次
	山岡 岩雄	陸川 三郎				
辰野町	赤羽 淑子	赤羽三千代	市川 信子	岩佐 哲男	山下 正康	
伊那市	上島 公恵	菊池 賢	久保田英子	羽場 光子	平出美穂子	福沢 春美
	水品 紫乃					
高遠町	山岸 三代					
県 外	内田 利生	大高富士子	山田 和子	渡辺 儀訓	江里口省三	(青沼 博之)

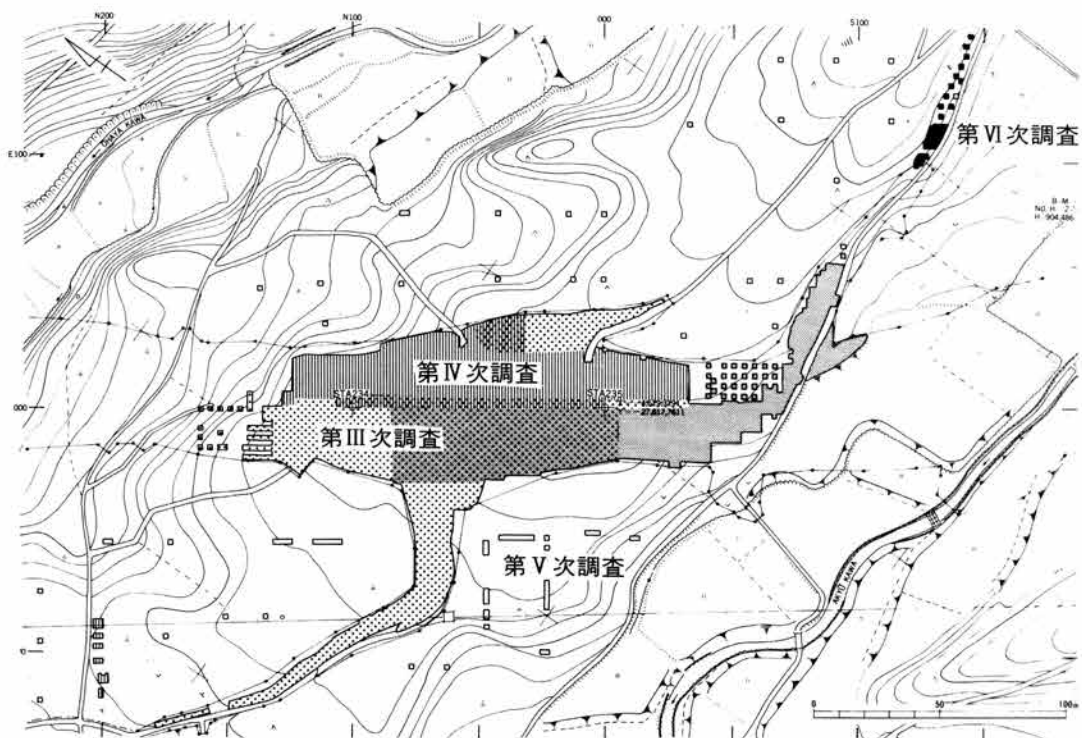
## 2 調査の経過

### 1) 昭和51年度(第2次調査)

- 4月19日 旧原村体育館で発会式。
- 5月17日 柏木南遺跡から資材運搬。STA234・235を中軸線として地区割設定し調査開始。柏木南遺跡は小人数で調査続行。本年度の調査対象面積は全掘予定で7,000㎡、調査終了予定日は11月10日である。
- 5月24日 調査は南斜面から始まり、平安時代の集落址が予想された。田植時期と重なり作業員少なくなるが、本日から柏木南遺跡の調査終了に伴い全員そろろう。
- 5月26日 調査が尾根上に伸びるに従い、発掘当初と異なり、縄文時代中期ではなく前期の大遺跡であろうと予想されるに至った。このために、山林に

覆われた未知の尾根上で、遺物の包含状態を早く知るために、いくつかの試掘トレンチを、B・D・E地区のAライン上に設けて、部分的に試掘をする。これは、昨年度の予備調査(第1次調査)がセンターE地区の一部にしか及んでおらず、尾根上の状態を知るにはあまりにもデータ不足であったからである[伴1976]。また、同時に、バックホーによる表土剥ぎ作業の際のデータも得る目的もあった。

- 6月17日 尾根中央のCM50・51地区を中心に地表から手掘り作業で調査開始。バックホーで除去される前の表土層の内容をある程度面的に確認したいという目的等があったからである。この地域で



挿図1 年次別調査区設定図



- も他の一部トレンチ内と同様、礫の集積がみられ、尾根のかなりの地域にその存在が予想された。しかし、この時点では構造物があるかどうかは全くわからなかった。ただ、大町市上原遺跡等で縄文時代前期の石積遺構が検出されているので、類似する可能性もあり、ともかく、全体発掘の中で明らかにする事とし、検出した礫はそのまま残すこととした。
- 6月18日 バックホーによる表土剥ぎ作業開始。大石遺跡で実績のある富士見町丸真工業の牛山オペレーターに依頼する。自動車道のセンター杭の西側Bライン(東寄りをAラインと呼称)側のD・E地区から作業を進める。この際、試掘トレンチの検討結果から、除去する表土は15cm内外とし、松等の大木根の抜根は尾根上には礫群の所在が予想されるので、すべて残し、人力で行うこととした。のちに、礫群との関係がなく、遺構に影響の及ぼさない地域はバックホーを用いたが、その範囲はわずかでほとんどが人力を用い、抜根数は300本以上に及んだ。この間調査区に遣り方設定。
- 6月21日 表土剥ぎ作業終了地域の地区割設定。南斜面の遺構検出作業続行。平安期のみならず、縄文時代前期の住居址群も検出され始める。
- 6月24日 公団と定例協議。以後、阿久遺跡の調査完了まで、ほぼ月に1回、定期的に開かれ、現地の諸問題を協議する。
- 6月28日 表土剥ぎ作業ほぼ終了。この地域も調査着手。



挿図2 調査風景(写真撮影)

- 集石群の一部が検出され始める。検出時の遺物は住居址埋土上と集石部分では特に多い。石器は地区杭から出土位置を略測する。
- 7月13日 尾根上の集石群の検出作業続行。尾根先端に住居址11を検出。前期の住居址群が南斜面から尾根上まで伸びることが判明した。午後降雨、土器洗いに切りかえる。
- 8月11日 D・E地区の集石群の検出ほぼ完了する。調査区を東西に横断するように帯状に検出される(環状集石群南辺部)。C地区の一部に集石群がみられるところから、あるいは環状に集石群が分布するかも知れないと予測する。一部アルバイト学生の応援を求めて集石群の平面実測開始。南斜面に2基の集石検出。
- 8月23日 入の日陰遺跡調査のため準備。矢島調査員を担当事者として、作業員8名で調査班を組む。本年度の阿久班の作業員が24名前後で構成されていたので3分1減は痛手であったが止むを得ない。
- 8月30日 C地区では集石面下方に下層遺構のあることが確認された。しかし、集石の下方30~40cm掘り下げたロー面直上でないと、これら遺構の検出は不可能であることから、とりあえず、集石のない59ライン西側を掘り下げることにした。
- 9月1日 C地区で住居址15を確認。しかし、約半分が農道下にかかるために調査は見送る。出土遺物から、集石群よりも古そうであり、下層遺構の中に住居址25の一部が確認されており、かなりの住居址群の存在が予想され、調査は予定通り進めることは困難であるとの結論をだし、その旨、文化課に連絡、善処方を依頼する。
- 9月7日 調査は南斜面と尾根上のかかなりの部分に及び、調査員等の不足を痛感。C地区に地床炉と床面の一部を検出(住居址14)。土壌群地帯にあり、壁の検出はできなかったが、下層遺構の存在がほぼ確実となり、中越式土器の存在を知る。C地区の土壌群の調査に主力が移る。
- 9月20日 公団との定期協議で調査が予定通り進行しないことと、遺跡の重要性を改めて強調。調査期間の延長もあわせて要望し、理解が得られた。つまり、本年度はすでに着手したC地区Bラインより南側の上層遺構と南斜面農道取り付け地区を調査対象地域とすることにした。翌日C地区遣り方設定。
- 9月29日 南斜面農道取り付け地域(東部地域)の調査に入る。表土層が一部浅い地域があることにより、本線部分同様に人力で表土剥ぎをおこなう。
- 10月8日 南斜面東部地域でも住居址群が出現し始める。C地区土壌群の調査・実測。土壌は原則として2分1分割をする。C~E地区の集石の平面実測と一部断面立ち割り断面図の作成。今年は降雨が多い上に、入の日陰遺跡の調査と併行するため、作業員数少なく調査難航する。
- 10月13日 土壌の調査が進行するにつれて、その内容が豊富となる。特に立石をもつ土壌とともに、ロー

- △粒を多量に含んだ大形土塊が並列して検出され、他の土塊群と性格の異なることを予想したが、そのまとまり方等は判断できなかった(方形柱列Ⅰ)。入の日陰遺跡の調査完了し合流する。
- 10月22日 集石群の写真撮影に入るも唐松の落葉はげしく難航する。
- 10月30日 昨日のひえこみで発掘区全面霜柱たち調査困難となる。この分だと調査予定日をオーバーすること確実となる。
- 11月10日 本日が終了予定日であったが延期。

## 2) 昭和52年度(第3次調査)

- 4月14日 原村公民館で発会式。直ちにテント設営と地区割を設定し本調査2年目を迎える。室内作業中に図面等の最低限の整理はおこなったが、種々の事情により、遺物の整理等は皆無に近く、たいした反省のないままに、調査に入らざるを得なかったのは残念であった。本年度の調査もまた、残り全面積を調査対象としていたが、昨年の経験から無理は承知であり、調査不可能の場合も予想し、まず、調査未了のBライン側からおこなう事とした。調査体制も昨年よりは若干補強された。調査は昨年より除いた集石地帯の下層および、C地区北半とB地区から始めた。
- 5月6日 D地区で土塊群が検出され始め予想的中した。
- 5月9日 北斜面に昨年度一部テストピットを設けたが不十分であり、早く全体像を知ることと、Aライン側に工事用道路の設定上、この部分が破壊されるためであった。しかし、その結果は、遺物が一個所に数点出土したのみで、北斜面は直接に生活の場と結びついていないことが判明した。工事用道路は道路建設上不可欠であるという公団の要請も受け、Aライン側に、遺構に全く影響のない状態で建設してもらい事とした。つまり、地表上に2m前後の盛土をし、さらに砂利を覆った上で簡易舗装することとし、その工事には立ちあった。また、事故防止には関係者が万全の処置をとることとし、道路上から生じる砂ぼこりも、水まき等を工事担当者が極力おこなうことで防止することとした。
- 5月11日 D地区遣り方設定。
- 5月16日 北斜面調査終了。B地区調査開始。表土剥ぎは昨年終了済。
- 6月6日 居沢尾根班の一部合流。C地区北半の調査開始。早くも集石群が始め、環状になるという予想はますます強まる。B地区でⅡ・Ⅲ期の住居址群がいくつか検出され始め、一部それらの調査にとりかかる。B・C地区の遣り方設定。
- 6月10日 バックホーと4トントラックによる西農道地区(C地区64ライン以西)の表土剥ぎ開始。この頃、工事用道路完成。
- 6月21日 B地区の住居址群(住居址29~33・35)の遺物とり上げ作業進む。公団との協議で中央農道地区の橋脚設置地区の調査を早くしてほしいとの要請をうける。C地区北半部の写真測量の検討始め

- 11月23日 勤労感謝の日であったが休日出勤。すでに冬将軍が渡来しつつあり、少しでも期間短縮を考えたのであった。しかし、吹雪かれ、特製の暖房具を用いて集石等の断面実測はほぼ終了。残すは南斜面の平安期の住居址群となる。
- 12月9日 調査済の集石はすべて数量をかぞえてとり除く。一部未調査の集石(単位集石群B)は盛土をし、本年度の調査予定はすべて終了。機材撤去。室内作業に入る。
- 6月27日 西側の農道取り付け地域にも集石群が予想通り検出され始める。また、東側農道取り付け地域にも、集石群とⅣ・Ⅴ期の住居址群が検出され始める。このような事実から、環状集石群の規模がほぼ想定できるようになり、土塊群、住居址群のあり方から、本遺跡の重要性が確認されるに至った。かように調査地域が尾根上一帯に広がるに及んで改めて各自の分担を十分に認識した上で調査体制を組むこととした。
- 6月28日 C地区で始めて方形柱列(当初方形配列土塊群と仮称)2基の全体が確認され、(方形柱列Ⅱ・Ⅲ)、昨年注目した土塊群もこれにあたる事が再確認された(方形柱列Ⅰ)。同時にこれらが環状集石群の空白地帯にあることにより、両者の関係付けを考えたが、のちに集石下にも検出されるに及んで、この考え方は撤回されることとなった。
- 7月7日 写真測図研究所(長野市)と写真測量について打ちあわせ。この頃から見学者が多くなる。
- 7月11日~14日 C地区北半(環状集石群北辺部)の空中撮影をクレーン車を用いておこなう。
- 7月20日 西側農道取り付け地域に遣り方設定。この地域ではさらに土塊群、住居址群なども検出され始める。D地区の土塊群の調査はほぼ終了する。
- 7月25日 調査終了地域の一部(D・Aから南斜面までの6m幅)が工事工程上必要とのことで土取りがされ、一部土塊を失う。
- 7月26日 公団との定期協議で、本年度の調査は当初の予想以上に遺構が多様で数も多いので、全面調査はおろか、Bライン側と農道取り付け地域でも手一ぱいの状態にあるが、Aライン側も可能であれば少しでも調査に入りたい旨を話しあう。また、遺跡の重要性を強調し、保存方法も打診する。
- 7月30日 東・西集石群の空中撮影終了。環状集石群北辺部の集石の断ち割り断面図の作成開始する。
- 8月4日 東京電力塩尻送電所に送電線巡視時に依頼してあった空中撮影をおこなう。
- 8月14日 文化庁小林達雄調査官来跡。遺跡の保護について協議。
- 8月20日 C~D地区49~45ライン(Aラインの一部)の集石群検出始める。環状集石群北辺部の下層に多



挿図3 見学会風景

- 数の住居址群露呈はじめ、さらに方形柱列も確認される。
- 9月6日 方形柱列IVで柱痕跡確認。以降、方形柱列の調査は2分1分割法ではなく、歴史時代の掘立柱建物址と同様の調査方法をとることにした。なお、住居址の柱穴調査の一部はすでに前年度からこの方法を用いていた。
- 9月22日 長野県考古学会(会長大沢和夫氏)代表として森島稔事務局長来跡。学会として本遺跡の保存にとりくみたい旨伝達される。毎日新聞全国版にトップで本遺跡紹介される。
- 10月5日 C・D地区のAライン側の集石群の清掃終了。西農道取り付け地区の集石下部の調査続行。土壌・住居址など下層遺構がつつぎに検出される。原村小林庄吉村長以下村当事者再度視察。
- 10月6日 中央道遺跡調査会理事会在本遺跡の視察をかねて原村でおこなわれ、調査期間の延長、保存問題を協議。信濃毎日新聞社会面トップに本遺跡の保存をうったえる。以後、マスコミ関係の取材と報道がひんばんとなり、見学者も一日平均20名余をこすようになり、調査以上に神経がとぎすまされるようになる。判ノ木山西遺跡の一部調査員・補助員本日から応援に来る。
- 10月7日 原村々長、教育長、議員諸氏見学。
- 10月13日 慶応大学江坂輝彌教授現地指導のため来跡。
- 10月14日 Aラインセンター寄りの空中写真、このため工事用道路の交通止め。
- 10月15日 明治大学戸沢充則教授現地指導のため来跡。西取り付け農道地域の農道の仮りとり付け作業を工事担当者によって、盛土によっておこなう。
- 10月18日 西農道取り付け地域の旧農道下およびその西側部分の調査のため、表土剥ぎ作業をバックホーと4トントラックを用いておこなう。ただちに調査に入る。翌日、平板状の平石8枚が列状に検出される。環状集石群の中心位置にあるだけに一同驚愕する。文化課を通してただちに文化庁へ連絡する。信濃毎日新聞大きく報道。
- 10月24日 文化庁へ公団関係者とともにおもむき現状説明。
- 10月25日 列石の西側に立石検出。一部用地外にかかるため、地主の篠原氏に了解の上、約1㎡前後用地外を調査。信濃毎日新聞文化欄に戸沢充則氏の阿久遺跡の重要性を強調した論文2回に亘って掲載される。
- 10月27日 戸沢氏のご教示により、ラッテックスを用いて集石129の上面の型取りを開始。上智大学八幡一郎教授現地指導のため来跡。福井大学広岡公夫助教授残留磁気の資料採取。
- 10月28日 長野県考古学会の学術調査団一行7名来跡。
- 10月30日 長野県考古学会の見学会(参加者約250名)に協力し説明。終了後、学会は原村公民館で臨時総会。阿久遺跡の保存運動を展開する由、学会の総意として決議される。明治大学杉原荘介教授現地指導のため来跡。
- 11月5日 現地説明会(参加者約300名)。午後、原村公民館でスライドを用いてさらに補足説明会。原村村議会全員協議会で保存の方向で問題処理にあたる事を議決する。
- 11月7日 遺跡の保存が決定されるまで、工事は事実上見合わせることになり、調査完了地域は凍結防止のための花崗岩の砂(11トントラック約50台分)を本日から搬入し始める。
- 11月11日 遺跡全面に霜柱たつ。調査は列石地域と住居址39・40の土壌群を残すのみで、他はほぼ終了。
- 11月14日 住居址内の炉址・柱穴等のチェック終了。列石・立石の下部調査終了。凍結防止のための砂による埋め戻し作業、人力により開始する。
- 11月16日 文化庁小林達雄調査官来跡。県教育委員会、村当局、公団と長野県考古学会阿久遺跡保存対策特別委員会等と協議。
- 11月24日 列石部分の細部実測終了。機材撤去。室内作業に入る。
- 12月3日 人力による埋め戻し作業を遺構全面と検出面10cm上までおこない、本日で終了する。なお、検出面上にはダイアシートを全面に敷き、その上に砂を盛った。このあと重機を用いて、さらに20cm程度砂を盛った。
- 12月8日 長野県考古学会代表と県教育委員会の協議を、原村当事者等を混じえて原村でおこない、保護対策を話しあう。
- 12月13日 原村主催による保存対策協議会を県教委・県土木部・村と柏木地区々民と協議。

2月11日 長野県考古学会による「阿久遺跡を守る県民集会」が諏訪市でもたれ、600余名の参加者が集まった。調査団も2年次にわたる調査状況を学会の要請を受けて報告した。また、奈良国立文化財研究所長坪井清足、慶応大学教授江坂輝彌両氏によって、学術的にみた阿久遺跡の重要性が強調された。以降、学会は文化団体・地域住民とともに、国・県・公団への陳情・請願にむ

けて、街頭署名活動を活発化させ、日本考古学協会も前記三者への陳情をおこなった。これに対して、県・公団・村も地元柏木区民との協議の中で、保存処置を検討していった。国会・県会でも再三にわたり、阿久問題はとり上げられた。

3月18日 県会阿久遺跡保存問題の意見書採択。政府・国会・公団へ送付する。

### 3)昭和53年度(第4次調査)

4月4日 本年度は昨年度秋以降問題化した本遺跡の保存問題が、目下、県会ならびに国会の審議過程にある以上、ただちに調査に入る訳にもゆかず、調査団はこの問題の決着がつくまで、2年度に亘る調査概報を作成することとした。これは、社会問題化している本遺跡の学術的価値を少しでも早く理解してもらい、問題解決の一助になればと願ったからにはかならない。しかし、保存問題がどう決着するにせよ、調査せざるを得ない事態にたちいった場合に、そのタイムリミットは7月上旬におき、この時を失えば本年度の調査終了はおぼつかない旨は確認しあっていた。できればこのまま調査せずに永久保存できればと誰しも願ったことではあるが。

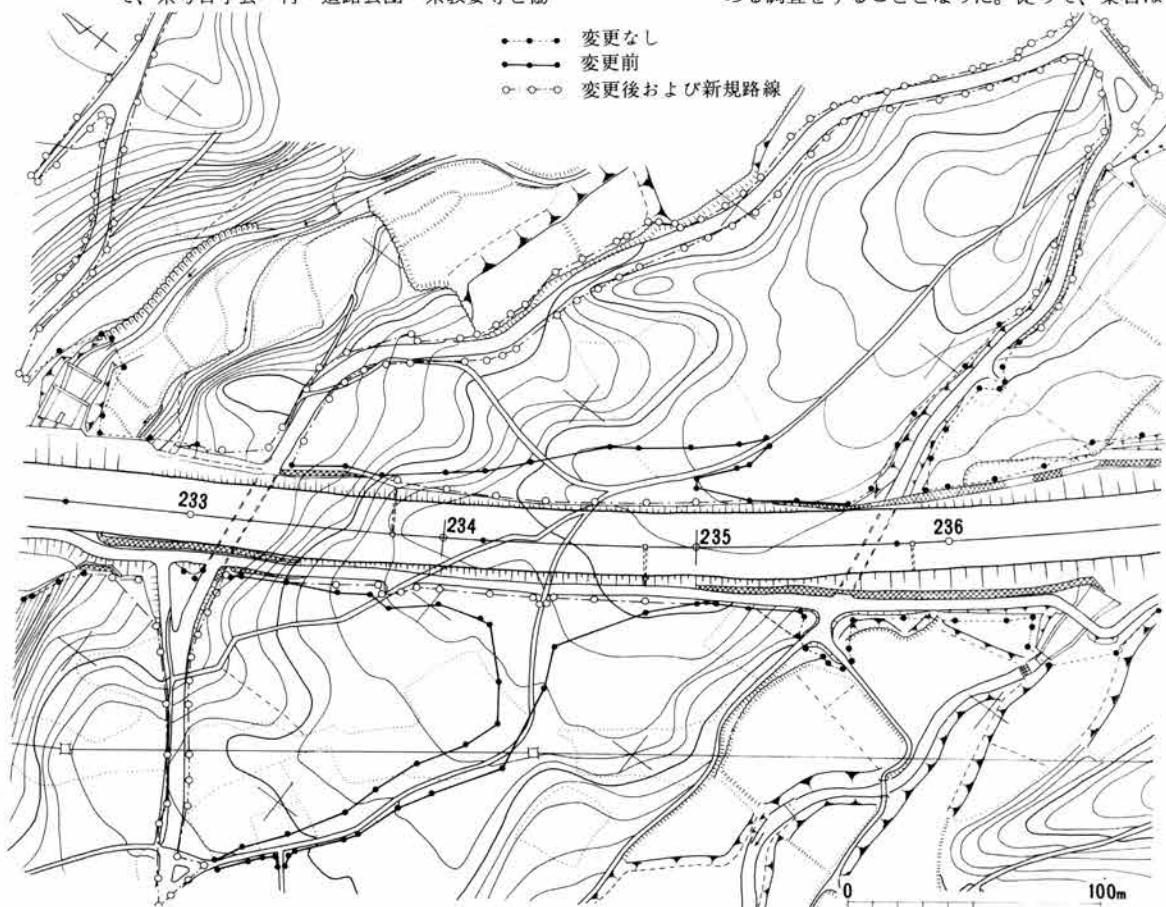
4月16日 文化庁水野正好調査官現地視察。これは4月12日の衆議院決算委員会における原茂議員の質問に答えた文化庁長官の答弁にそったものであって、県考古学会・村・道路公団・県教委等と協

議したあと、記者会見をおこない、「トンネル案・迂回案ともに非常に困難な状況下にあるが、“天啓”を待って独自の保存案を検討し、近い将来提案したい」と発表する。

5月6日 日本考古学協会総会席上で「阿久遺跡に関する決議」が採択。翌日、協会員の資格で調査団代表者が研究発表の席上、調査概報を報告。

5月16日 水野調査官再度来県。原村役場で関係機関代表に最終の文化庁案「土盛り方式」が示される。

5月21日 長野県考古学会総会において、「土盛り方式」が「次善の策として同意せざるを得ない」という統一見解が承認される。すでに、道路公団・村・地元柏木区も了解済みであり、この線で、保存問題は一応の決着をみ、以降は、国指定の史跡化にむけてあらたな動きをみせ始める。従って、調査団も、保存を前提としながらも、半永久的に道路下に埋もれる遺跡の性格を可能な限り求める調査をすることとなった。従って、集石は



挿図4 道路設計変更図





挿図5 地上測量

すべて検出面で止め、その下層の調査はおこなわないこととした。すでに他遺跡の調査の進行状況等もからめて、本年度調査を7月3日から始めることとした。

- 6月20日 『長野県諏訪郡原村阿久遺跡調査概報一昭和51・52年度』発行。B 5版42頁。
- 6月28日 阿久遺跡範囲確認調査会・調査団・(団長大沢県考古学会長)発足。調査団も可能な限り協力してゆくこととした。
- 7月3日 本日から本年度の調査開始。現地にて発会式ののち地区割設定等をおこない、調査に入る。調査はAライン側で、工事用道路下とそれ以外の調査未了地域である。まず、工事用道路の土砂の撤去はすでに工事担当者によって、調査団立ちあいの上でおこなわれていたので、表土剥ぎ作業からおこなう。調査開始後再び、連日のように見学者は後を絶たず、その対応にもいそがしい。
- 7月13日 B地区で住居址24を検出。集石群からはずれるためにサブトレンチを十字に設定して調査開始。一方、工事用道路下の集石群検出作業急ピッチで進む。さらに集石をさけて、下部遺構の調査もあわせておこなう。
- 7月17日 原村主体による遺跡の範囲確認調査開始。
- 8月12日 一部実測等を残すも、確認調査はほぼ終了。環状集石群が北西・南西部に予想通りに存在することが明らかとなる一方、東部地域にも、これも予想通り縄文時代中期の集落址が包蔵されていることが確認された。
- 8月21日 C地区において、平石と略完形土器をともなう土壌982・983・979をそれぞれ検出。ともに隣接しており、環状集石群内のあらたな事実として注目される。なお、当日早朝、単位集石群C-1の一部に、集石上面で土器の出土状態を知るために残しておいた土器片(約100片)が盗難にあらう。シート等で覆ってあったものの、残念であった。さっそく、所轄警察署に被害届を提出。
- 8月22日 中央農道の下部調査のための農道付けかえ工事に先立った集石群と、範囲確認調査でトレンチ内に検出された集石群もあわせて写真測量をおこなう。狭い範囲内であるために、空中に横位に張ったロープにカメラを吊して連続撮影する

方法を用いた。

- 9月1日 原村は県教委を通じて文化庁に国史跡の指定を申請する。
- 9月20日 住居址40ほぼ完掘。北壁に張り出しピットをもち、整然と区割された柱穴をもつ大形住居址であり注目された。その他の遺構調査も順調に進む。
- 10月20日 ヘリコプターによる航空撮影をおこなう。このため前日から、調査団一体となって清掃。
- 10月22日 現地説明会。参加者は1100余名を数え、本遺跡への関心の高さが示された。文化庁・文化財保護審議会から史跡指定が答申される。
- 10月27日 文化財保護審議会総会で本遺跡が国の史跡に指定される。
- 11月2日 尾根東部地域で南斜面の農道拡幅工事に先立つ事前調査(第6次)を村教育委員会によって開始。
- 11月7日 各遺構群の調査ほぼ完了。あとは集石上面のエレベーション作図と大形住居址72の調査が残り、これらに集中する一方、遺跡が「土盛り保存」されることにより、特に北回り農道は遺跡を大きく迂回することになったが、遺跡の一部(尾根西部地区)はさげられないということで、この部分のみ本日から調査に入る。すでに一部は範囲確認調査のおりに試掘されていた。遺物は微量のIV・V・VII・IX期の土器片と黒色土から落ちこむ溝が一本検出されたにとどまる。
- 11月14日 砂を用いて手作業で埋め戻し作業開始。



挿図6 地上測量(脚立利用)

- 11月17日 集石エレベーション作図完了。住居址72の実測・土層図の作成、農道拡幅地域でⅧ期(井戸尻Ⅲ式期)の住居址101と集石315が検出される。後者は環状集石群との関係で注目される。
- 11月24日 手作業での砂の埋め戻し作業もほぼ終了。あとは機械力による作業が残る。本日でかくもあわただしかった阿久遺跡3年間の調査終了。機材撤去。室内作業に入る。  
農道拡幅ともなう調査もすでに終了(22日)。検出した住居址は村の配慮で一部設計変更し、残されることになった。
- 12月14日 重機を用いた埋め戻し作業もほぼ終了。道路公団は土盛り方式による遺跡への影響を知るための実験を、遺跡内にモデル地区を設定しておこなう。土盛り方式による道路建設の基本設計は、遺構面を砂100、砕石20cmで順次盛って路床を作り、ついで、セメント等で約20cmの路盤、さらにアスファルト舗装約25cmを重ねるものであ



挿図7 調査風景

り、実験は種々の計器を用いて、これらの構造物による影響の程度を調査した。約1週間の実験結果はほとんど影響なしという結論で、基本設計通り道路が建設されることとなった。

#### 4)昭和54年度～56年度

##### 昭和54年度

- 7月2日 官報告示15735号文部省告示128によって本遺跡が正式に史跡指定される。指定面積55,940・97㎡(実測面積)。うち、道路公団所有地は14,675・15㎡。
- 11月6・7日 文化庁は「広域遺跡保存対策事業」の一貫として、本遺跡も含めた八ヶ岳西南麓遺跡群の広域保存を考える研究会を開く。
- 11～12月 調査団本部を辰野町から長野市へ移転。ひき続き資料整理と報告書の作成に従事する。しかし、種々の事情により、すべての遺物の整理および図化は無理であり、遺構内出土遺物から始め、時間の許す限り、包含層の遺物へと輪を広げてゆくこととした。

##### 昭和55年度

- 4～3月 住居址関係等遺構図の作成、住居址出土遺物の復元・実測。

- 3月28日 原村は阿久遺跡整備委員会を結成。第1回会議をもち、史跡の整備・公園化に動き出す。

##### 昭和56年度

- 4～3月 報告書作成準備
- 8月31日 原村第2回の整備委員会開き、報告書作成後の遺物保管のための収蔵庫を遺跡に隣接して設けることとし、建設にとりかかる。
- 3月25日 報告書完成。

付記 本来が調査日誌であるので、県考古学会による保存運動の経過やそれへのわれわれの対応等は必要最小限にとどめた。ただ、調査に関係する事項ならびに、阿久遺跡の動向が左右される事項については特にふれておいた。なお、保存運動の経過等については、長野県考古学会「阿久通信」1～3号(1978)を参照されたい。

### 3 現地視察・見学者・報道関係・調査協力者

会田 進	青木 和明	青山富士夫	赤羽 義洋	安達 厚三	阿部 嘉治
甘粕 健	新井 和之	五十嵐幹雄	一志 茂樹	市沢 英利	市原 寿文
井出 正義	井上美代子	今井 野菊	今井 堯	上野 佳也	鶴飼 幸雄
梅沢太久夫	氏原 暉男	遠藤 令仁	江崎 武	江里口省三	大久保知巳
太田 正臣	岡田 篤子	岡田 正彦	乙益 重隆	小野 真一	小原 晃一
折井 敦	河西 清光	金子 裕之	金井 汲次	金井 正三	金井 晴美
神沢昌二郎	神村 透	片山 徹	唐木 孝雄	河合 良樹	川上 元
川崎 義雄	河野 喜映	川原 純之	木村幾多郎	菊地 則子	清藤 一衛
草場 啓一	梶 国男	黒坂 周平	工楽 善通	倉科 明正	気賀沢 進
郷原 保真	小出 義治	小平 和夫	児玉 卓文	小林 公明	小林 重義

小林 孚	小林 深志	小林 正春	小林 康男	小松 虔	五味 一郎
小山 修三	酒井 幸則	佐々木高明	佐藤 甦信	佐藤 攻	佐原 真
鷺山 快夫	C・T・キリー	塩入 秀敏	塩澤 仁治	塩沢 仁志	柴 登己夫
清水多嘉二	杉山 利夫	杉山 博久	末木 健	十菱 駿武	高見 俊樹
高林 重水	高橋 一夫	高橋 桂	高村 博之	竹入 洋子	武田 安弘
武居 幸重	館野 孝	田中 琢	田中豊三郎	田中 基	谷川 徹三
勅使河原彰	友野 良一	外山 和夫	直井 雅尚	中川 充弘	中島 豊晴
中村 良男	中村 龍雄	長崎 元広	長沢 宏昌	新津 健	新津 茂
西沢 寿晃	西村 正衛	能登 健	野村 正美	長谷川 孟	服部 敬史
花岡 弘	原 嘉藤	原田 勝美	林 幸彦	広瀬 昭弘	平林 彰
福島 邦雄	藤森みち子	本田 秀明	前原 豊	松沢 亜生	松沢 芳宏
松谷 暁子	丸山 弥生	三村 肇	宮川 信子	宮坂 虎次	宮坂 光昭
宮崎 博	宮下 健司	宮島 章	武藤 金	武藤 雄六	村上 洋子
望月 静雄	百瀬 忠幸	百瀬 久雄	森嶋 稔	守矢 早苗	森山 公一
矢口 忠良	矢崎 孟伯	矢崎 勝郎	山浦 寿	山口 明	山越 正義
山崎 丈	由井 茂也	吉留 秀敏	吉村 振一	米田 明訓	和田 長治
綿田 弘実	渡辺 弘実	渡辺 重義			

青山学院大学考古学研究会 学生4名 愛知大学考古学研究会 小畑 孝他2名 飯  
 山市外様小学校生徒・PTA役員足立 信造他24名 伊那市西箕輪中学校 矢沢 力  
 他職員9名 岡谷市 林市長他市議会議員30名 岡谷東高校 社会科職員6名 地  
 歴班16名 岡谷市長地史談会 小松原 重義他10名 岡谷市南部小学校職員 三石  
 尊他1名 岡谷考古学友の会 遠藤 令仁他8名 小川村教育委員会 北田 真治他  
 11名 上伊那教育会 20名 上伊那郡宮田村考古学友の会 小木曾清他19名 上  
 伊那郡南部PTA会長・校長会 一ノ瀬 康男他29名 上伊那市町村教育委員会事務  
 局職員研究協議会 唐沢 保美他29名 川上村文化財専門委員 他30名 関東農政  
 局長野統計情報事務所 木下 千年他5名 近畿大学理工学部 太田 正臣他5名  
 北安曇郡池田小学校母親文庫 伊藤 敏子他30名 県議会文教委員会 10名 国立  
 民族学博物館 信大植物学教室合同有用植物研究会 佐々木 高明他3名 国学院大学  
 考古学専攻生 40名 古部族研究会 今井 野菊他17名 相模原考古学研究会 36  
 名 更級郡上山田小学校 柳沢 邦雄他職員24名 昭和薬科大学学生 宇野 勝徳  
 他15名 塩田史談会 衆議員議員 原 茂・小川平二 諏訪小学校長会 八幡  
 栄一他20名 諏訪市合同庁舎職員 小木曾 広他23名 諏訪二葉高校考古クラブ  
 今井 洋子他5名 諏訪農業改良事務所 平野 善英他3名 高森町下市田史学会  
 小川 光男他25名 武石村議会教育委員会 橋詰 欽一他20名 千葉県文化財セン  
 ター 所員4名 中央大学考古学研究会 井上 尚明他学生4名 茅野市教育委員会  
 6名 茅野高校地歴部 河西 克造他6名 茅野北部中学校考古学クラブ 小平 瑞  
 穂他15名 茅野市金沢小学校歴史クラブ 樋口 今朝人他16名 茅野市永明小学校  
 職員 吉田 等他3名 小県郡長門町 教育長他10名 筑波大学歴史人類学系 禿  
 仁志他2名 東京大学考古学教室 学生5名 東京都羽ヶ田上山根坂上遺跡調査団  
 C・T・キリー他25名 豊科高校地歴部 山浦 寿他24名 長野県市教育長会 約

10名 長野県臼田高校職員 依田 謙 長野市郷土を知る会 森下会長他約100名  
長野県富士見高校職員 浜 栄助他11名 中州小学校職員10名 名古屋大学工学部  
原子核研究室 池辺 幸正他3名 西伊豆戸田村職員11名 野沢北高校職員 柳沢  
正明他2名 原村教育委員会 原村史編纂室 林 国治他7名 原中学校 矢島  
教道他10名 原村青年団 10名 原村高齢者学級 約100名 埴科郡坂城町郷土  
史研究会 塚田 喜重他28名 東アジアの古代文化を考える会 村上 洋子他10名  
富士見高原中学校歴史班生徒 10名 文化財保存全国協議会 甘粕 健・市原 寿文他  
61名 別府大学考古学研究室 草場 啓一他1名 松本県ヶ丘高校社会科研究室職  
員 松島 功幸他7名 松本県ヶ丘高校風土研究部 篠宮 正他3名 町田市玉川学  
園高等部 山口 高弘他20名 箕輪町教育委員会 約10名 南箕輪村長 三沢 準  
他議員32名 南安曇郡三郷小学校職員 広沢 渡他5名 山梨県明野村文化協会  
深沢 孝重他51名

報道関係

赤旗 朝日 岡谷市民 サンケイ 信濃毎日 諏訪市民 中日 南信日日 毎日 読売  
NHK NBS SBC TBS

調査協力者

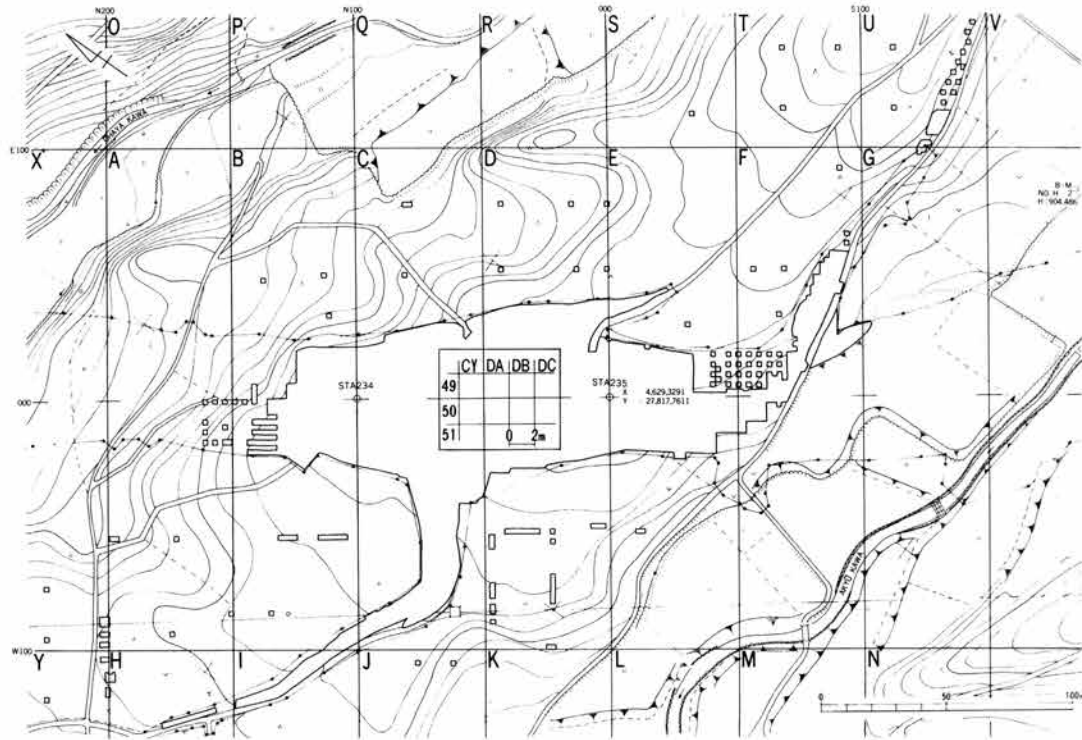
日本道路公団名古屋建設局・同諏訪工事事務所 吉川建設 県土木部諏訪中央道事務所  
原村 原村教育委員会 原村柏木区 丸真工業 写真測図研究所

### 第3節 発掘調査と整理の方法

#### 1 調査地区の設定

昭和55(1970)年度試掘調査の資料が若干あるものの、試掘範囲が、阿久尾根のほんの一部にしか及んでいないために、ほとんど遺跡範囲を知るためには参考とならなかった。従って、調査対象地域を路線内および農道取付地区も含めて考えることとした。このために、尾根全域を真北に方眼で地区割することを理想とするが、従来の中央道の調査地区設定の方法から逸脱するのも統一性を欠くことになるので、調査地区の設定は、基本的には従前の方法を踏襲した。つまり、従来は路線内に設けられている工事用のセンター杭を、必要に応じて、調査区設定の基準点としていた。しかし、中央自動車道の建設は事故防止のため、直線部分を極力さけるという建前であるために、従前の方法であると、調査面積が広くなればなるほど、重複またはずれる調査区が生じてしまう。従って、この点を是正するために、センター杭のうち、STA 234と235を基準点とし、その二点を結ぶ直線100mを基準線として調査区を設定することとした。すなわち、従来と同様に名古屋寄りから東京にむけて地区割設定するという立場から、大地区の設定は北斜面をA地区とし、以下、阿久川までをGとした。しかし、その後、国史跡指定のための範囲確認調査が実施されるに及んで、地区設定を西側にH～Nを、東側にD～Vを、さらに、Aの北にX、Hの北にY地区をそれぞれ設定した。大地区は東西200m、南北50mの方眼とした。小地区は2×2mで設定し、東西方向は算用





挿図8 発掘区区分割図

数字を、南北方向はアルファベットを用いるという従来の方法を踏襲した。しかし、この方法では基準線東側は100 mまでしか地区割ができないことになり、止むを得ず、大地区は0から99までの番号を付すことにした(挿図8)。

以上のように、地区割設定は調査対象地域に限定せず、遺跡全体を網羅するよう試みたつもりではあったが、従来の中央道方式を一部取り入れたために、その設定が変則とならざるを得なかった部分がある。

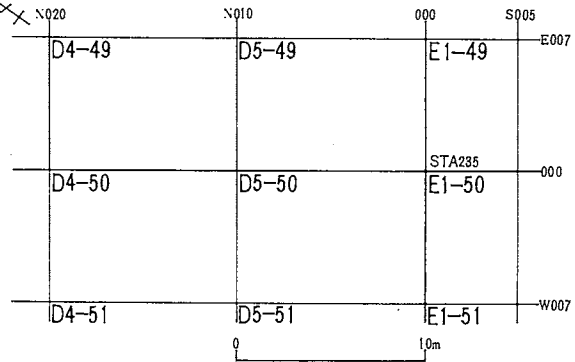
## 2 調査の方法

前年度の試掘は丘陵の一部にしか及んでいないために、調査予定地域内の遺跡の広がり、土層を知るために小試掘坑を丘陵全域にあげた。その結果、予想以上に遺物の広がりがみられる所から、全面発掘を建前とし、観察用の土手を一部残して行うこととした。また、遺跡の大半は山林であるためにC地区の一部(C J~C N、50~54)と南斜面を除いて、バックホーによる表土剥ぎ作業を表土下-10 cm前後まで実施した。この場合に、事前の試掘坑から集石群の存在が確認されていたので、松根等の大木についてはすべて残し、手作業で抜根したが集石群の欠除する地域については一部重機を用いた。

遺構の検出作業は従来の方法を踏襲している。遺構についてはすべて断面図を作成した。土壌・集石は2分割を原則としたが、必要に応じて多分割による立ち割りをおこなった。また、土層図は立石をもつ土壌と集石の一部については見通し図をとった。住居址の調査は平面観察以外に、土層観察を重視した。これは重複以外に拡張が予想されたことによる。従って、当初の数棟は土層観察用の土手を十字形に残して、他を平面発掘したが、中途から、住居址中央に幅50 cm~1 mのトレンチを入れ、土層観察および床面の状況を一部確認しながら、次第に全面発掘に切り替えていった。これは、調査後に土層を観察する事の無意味さを確認したからに他ならない。方形柱列の調査はその類例が知られないだけに慎重を期した。特に方形柱列IVで柱痕跡が確認されてから、歴史時代の掘立柱建物址の掘り方調査と同様の方法をとった。

遺物の出土状態の記録はすべての遺構についておこなった。原則として点で記録したが、必要に応じて実測図とした。ただし、住居址 59・67 は点による繁雑さをさける意味で、実験的に 50×50 cm の方眼を住居址上に設定し、さらに 10 cm 毎の厚さでブロック化した上で、土層観察を参考としながら、分層発掘を試み、遺物の取り上げはブロック別でおこなった。しかし、両住居址ともに遺物の出土量が極端に少なく、その試みはたいして成果はあがらなかった。集石群内においても、一部地域を定めて、点による出土状態を記録した。特に調査時に確認された石器及び原石・石核は調査カードに略測の上記録した。

微細遺物の取り上げと記録のために、ウォーターフロテーション・セパレーション法を用い、特に炭化物の出土がみられた住居址 29・33 と一部土壌についておこなったがその方法は別章で触れる。その他、花粉分析資料を得るために、住居址 30・32・33・36・65 で土壌および焼土を採取した。この場合に、時期毎に異なり、しかも住居址埋土の安定した堅穴を選択し、春季をさけて、夏季から初秋にかけて、さらに径 20 cm のビニールパイプを観察用土手に打ちこみ、パイプ両端を採取後ただちに石膏で密封した。この外、熱残留磁気による年代測定のための資料採取、集石 129 の型取りをラテックスを用いておこなった。



挿図9 水糸くばり・実測用紙配布基本図

測量は遣り方実測と空中写真測量とを併用した。前者の基準点は地区割のそれを用いたが、後者は、任意に設定したものと併用した。遣り方実測に用いた水糸くばり図および実測用紙の配布図の基本は挿図9に示した。空中写真は次年度から2年間に亘って集石群についておこなった。必要に応じて、クレーン車、ヘリコプター等を用いた。いずれも基本は20分1図を作成した。なお、遣り方実測用紙は2年次目から奈良国立文化財研究所で使用しているものを複製の上使用させて頂いた。

### 3 整理の方法

遺構実測図の整理方法は、遣り方実測と写真測量とでは実測図のシート割付けが異なるために、相違する(別章1 図2)。集石図はマイラーペース及び青図で、1/20、1/100、1/200、1/500を、他の遺構図は1/20、1/200、1/500、1/1000および細部図がある。

遺物台帳は各住居址毎に作成したが、他に、調査カードに遺構外出土の石器類を通し番号(ただし、石皿、先端研磨石器は遺構内も含む)で記録し、さらに、器種別台帳を作成した。

遺物実測の基本は手作業であったが、石器の一部を写真測量で図化した。打製石斧・石皿等の大形石器については効果があった。

(笹沢 浩)

## 第2章 遺跡の概観

### 第1節 遺跡の立地と範囲

阿久遺跡は、長野県諏訪郡原村9,308の2番地を中心に所在し、国鉄茅野駅の東南約5km、柏木部落の南西に広がる尾根上にある。四囲に、八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰、南・北アルプス、富士山を望み、西方には諏訪湖が遠望される眺望のよい地であり、広大な八ヶ岳西南麓の裾野が、糸魚川―静岡構造線による断層崖で断ち切られる縁の約1km内側に位置している(挿図9・10、図版1～3)。

遺跡の立地する八ヶ岳西南麓は、成層火山である八ヶ岳の新旧二期の噴火による泥流の上へ、古期・新期ローム層がパミス層をはさんで厚く堆積し広大な裾野が形成され、南西向きの緩傾斜をもっている。さらに裾野は、成層火山の重なり目からの湧水によって、大小の河川・溪流の開析と浸触により、長峰状の尾根が形づくられており、この尾根上には、縄文時代中期を中心とした遺跡が多数立地しており、総遺跡数は裾野にある、富士見町・原村・茅野市で408を数え、そのほとんどは標高800～1200mの範囲に集中し、各遺跡はいくつかの群を構成して存在している。

阿久遺跡は、北接する旧石器、縄文前・中期を出土した柏木南遺跡〔岩崎1976〕、南接する縄文中期後半の集落址である居沢尾根遺跡〔青沼他1981b〕、縄文時代中期初頭を中心とした集落址の大石遺跡〔伴他1975〕、北東1.5kmに位置する縄文中期後半の集落址上前尾根遺跡〔平出1980〕等々の大遺跡と、他の中小遺跡とともに阿久遺跡群を構成している。

阿久遺跡が立地する通称阿久尾根は、八ヶ岳山麓より西流する阿久川に南を、大早川に北側を浸触された、ほぼ東西に細長く伸びる尾根で、東から西へ緩く傾斜し、遺跡の西下方で二つに分れ、約1km西で宮川の谷となる断層崖で切れる。尾根南斜面は、阿久川による比較的広い沖積層へと続き、阿久川との比高差は約10m前後と緩傾斜面をもっているのに対し、大早川によって浸触された北側斜面は急峻であり、川との比高差は38mに及び、中途に中位段丘面がある。尾根上の平坦部は遺跡のある部分で最大幅をもち250mを測るが、遺跡の東西部分は一旦瘦尾根となって再び広がりを見せる。縄文前期の遺構が集中したもっとも広い平坦部を中央地域、その東側につづく地域を東部地域、西側のそれを西部地域と呼ぶ。

縄文時代前期のうち、阿久I期は中央地域の西端、標高900m付近に、II期はI期の占地地域の東寄りから、尾根中央地域の150×100mの範囲内となる。この他、尾根南斜面につづく中央地域の一部でも遺物の集中する箇所もみられ、以上の占地地域外にも若干の遺構が存在する可能性がある。III期は中央地域東端部、IV期・V期は中央地域のほぼ全域にわたって遺物がみられるものの、その遺構群の占地は西端部を除いた全域となる。VI・VII期は遺物の広がりのみであるが、中央地域から一部西部地域に及ぶ。

VIII期の縄文時代中期は、中央地域南斜面から東部地域にその中心があり、IX期の同後期は西部地域と中央地域に遺物のみが散在するが、やや西部地域に中心があるように思われる。

X期の平安時代になると、南斜面の全域が占地され、それは東部から中央地域に及ぶが西部地域まで広がるかどうかは不明である。

(青沼 博之)

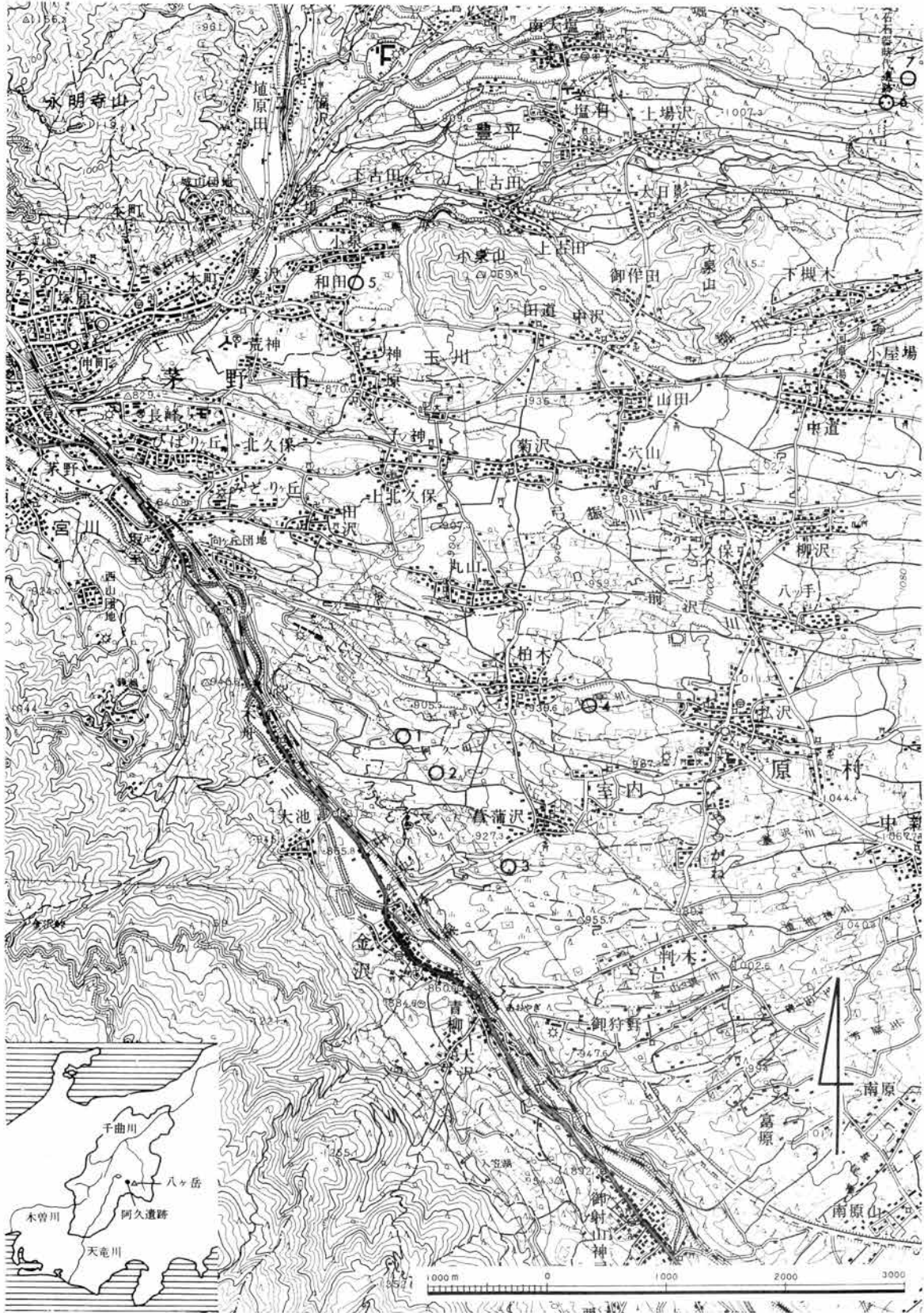
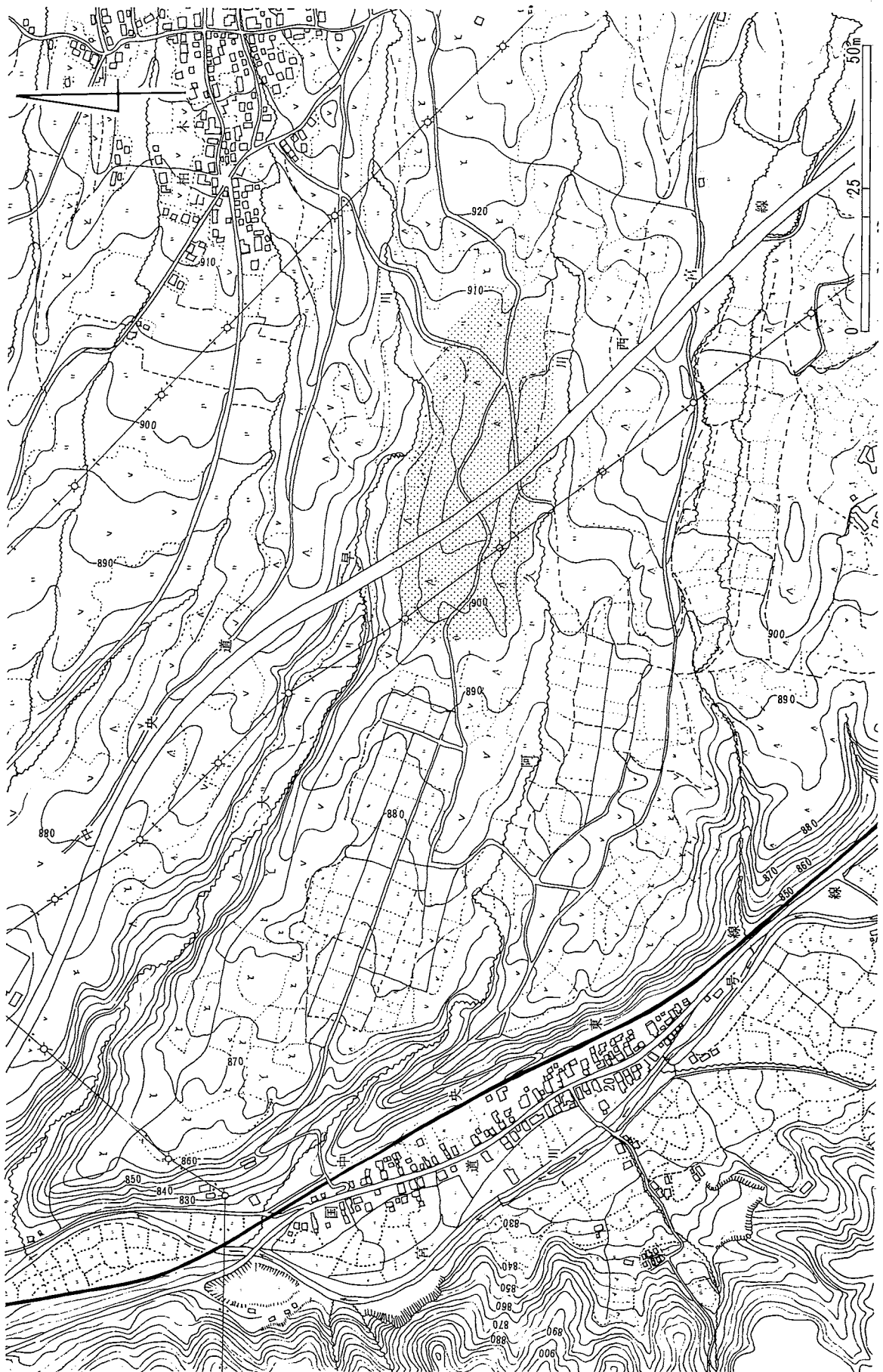


插图 10 阿久遺跡付近地形図(1:50,000)



挿図11 阿久遺跡付近地形図(1:10,000)

## 第2節 周辺の遺跡

八ヶ岳の西～南麓から諏訪湖盆にかけてのいわゆる諏訪地方には、旧石器時代より中世までの各時代を通じ、総数 919 遺跡が確認されている。<sup>(1)</sup>このうち縄文時代に属する遺跡数は 811 遺跡で、全体の 88% を占め、いかにこの地に縄文文化が栄えたのかを示している。縄文時代遺跡数の内訳は草創期 8、早期 79、前期 149、中期 424、後期 98、晩期 25、不明 28 となり、前期より遺跡数が増加し、中期になり縄文時代の 52% を占め、最多となり、後期に激減し晩期ではさらに減少していく。この傾向は長野県全体においても同じであり、縄文時代中期を中心とした文化が中部高地で隆盛を極めた事実を物語っており、その前段である前期において中期文化の萌芽がすでに始まっている様相が指摘できる。これら各時期の遺跡分布のあり方を、八ヶ岳山麓と諏訪湖盆に分けてみると、草創期～前期・晩期は 6 : 4 の割合で諏訪湖盆に多いのに対し、中・後期は逆に 6 : 4 の割合で八ヶ岳山麓に集中している。これは当時の人々の生活基盤の相違—食糧の獲得方法、地域、気候、集落立地条件等々—を表わしていると思われ、当時の文化内容を知る上での資料を提供してくれる。これら諏訪地方における遺跡分布、集落等々については、中央道報告書や種々の論文で触れられているので、ここでは阿久遺跡の属する縄文時代前期に限り、二、三の遺跡紹介を含めてその遺跡分布について概観してみる。

諏訪地方における縄文時代前期の遺跡は、前述したように 149 箇所ある。挿図 11・12 に見られるように、これらの遺跡はおおむね次の三箇所に集中しているといえる。すなわち、諏訪湖周辺の、海拔 800～900 m の地域、八ヶ岳・白樺湖等に源をもつ、音無川、滝湯川、上川等の比較的大きな河川周辺で、海拔 800～1,000 m の地域、八ヶ岳の西南～南麓にかけての山麓縁で、海拔 900 m 前後の地域、の 3 地域である。これらの 3 地域には、縄文時代中期の遺跡も集中しており、前・中期を通じ遺跡の占地に差異はないといえる。149 遺跡中 118 遺跡(82%)は海拔 800～1,000m 内に所在しており、他の 31 遺跡は 1,000～1,300m 内に点在する。最高海拔に立地するのは霧ヶ峰高原の強清水遺跡(海拔 1,640 m)である。また、発掘調査により住居址等の遺構が検出された 19 遺跡はすべて海拔 800～1,000m 内にあることを考えあわせれば、当時生活に適した地域は海拔 1,000m 前後が限度と思われ、それ以上の高所にある遺跡は、狩猟・採集等自然食糧を得るための前進基地的な遺跡と考えると差支えないであろう。

各遺跡より出土・採集された土器により、遺跡を前期前半と後半に分けてその分布状態を示した(挿図 11・12)。<sup>(2)</sup>前期前半に属する遺跡は 27 箇所、後半 91 箇所、不明 31 箇所を数える。前半期は、20 箇所が八ヶ岳西南麓部に集中し、諏訪湖周辺部にはわずか 7 箇所が認められるのみであり、集落址が検出された遺跡も 6 : 3 の割で山麓部に多い。後半期に入ると地域による差はほとんどなく、全地域に遺跡が平均して所在し、その数も増加しているが、諏訪湖周辺地域に 50 箇所、山麓部に 41 箇所と諏訪湖周辺における遺跡数が激増している。この事実は、自然環境・生産手段の変化等による人口増が考えられ、また、それにともない、諏訪湖を対象とした漁撈活動も盛行していったと考えることができようが、各遺跡における出土遺物等の詳細な検討を行っていない現在速断はできない。後半期においても集落址の検出されている遺跡は 9 : 4 と山麓部に多く、149 遺跡中約半数の 75 遺跡が発掘調査されている現状から見ても、縄文時代中期における生活の中心となった地域は、八ヶ岳山麓であったことが窺える。

次に発掘調査され住居址が検出された二・三の遺跡についてその概略を述べてみる。茅野市よせの台遺



跡⑩は、上川の西岸、朝倉山に西接する山塊からのびる舌状台地上に立地している。昭和51年茅野市教委によって調査されているが、その結果、前期前半期の住居址3棟と後半終末期の住居址1棟、小堅穴が検出されている〔宮坂虎・鶴飼1978〕。前半期に属する、5・7・11号住居址はともに隅丸長方形のプランをもち、炉は地床炉である。5号住居址は7号住居址に切れ、7号住居址には3回の建て直しが確認されている。11号住居址は5・7号住居址の北約20mに位置しているが、発掘面積が460㎡と狭いため、集落規模はつかみ得ないが、いずれにしても大規模な集落形態にはならないと思われる。3号住居址は前期最終末の下島期に属する住居址である。神ノ木遺跡⑨は昭和27年宮坂英弼氏の担当で調査された。その結果不整五角形の住居址1棟と土器・石器が検出された〔長野県教委1971〕。この住居址は埋没後再利用されており、周溝の状態から4回は拡張・利用されたとしている。よせの台遺跡の東方3km、渋川の南方台地上に位置し、住居址1棟の検出とはいえ、神ノ木式土器の標式遺跡として注意される。また、茅野和田遺跡⑨からは前期前半期の単一時期である5棟の住居址が検出されている〔林・宮坂虎1970〕。住居址は長方形ないし不等四辺形のプランと地床炉をもち、台地平坦面の南縁に集中している。西～南へ広がる可能性もあり、山麓部において阿久遺跡に次ぐ集落規模をもっている。諏訪湖周辺では、十二ノ后遺跡⑩が最大の規模をもつ遺跡としてあげられる。中央道用地内の遺跡で、前期前半期の住居址32棟、後半期24棟の住居址の他、方形柱列も発見されており〔樋口・宮沢他1976〕、その内容、規模ともに阿久遺跡に匹敵する遺跡である。また、同じ中央道用地内で隣接する千鹿頭社遺跡⑩からは6棟の前半期に属する住居址が発見されており〔宮沢他1974〕、同じく金鑄場遺跡⑩も同じ地形上にあることから、この二つの遺跡は十二ノ后遺跡と同一と考えてもよく、かなり広範囲に広がりをもつ大規模な集落址であったことが窺える。富士見町の机平遺跡③は、八ヶ岳南麓における前期後半期に栄えた集落址である。昭和56年の調査により、諸磯期の住居址28棟、土壙、集石が検出されている〔武藤・小林1981〕。遺跡は尾根の南急斜面に立地しており、3時期に分けられる住居址群と、半月状の特異なプランをもつ住居址とカリントウ状炭化物の出土等興味深い内容をもっている。他に前期終末～中期初頭へかけての集落址である扇平遺跡⑩〔会田他1974〕も諏訪湖西岸地域で最大の規模をもっている。

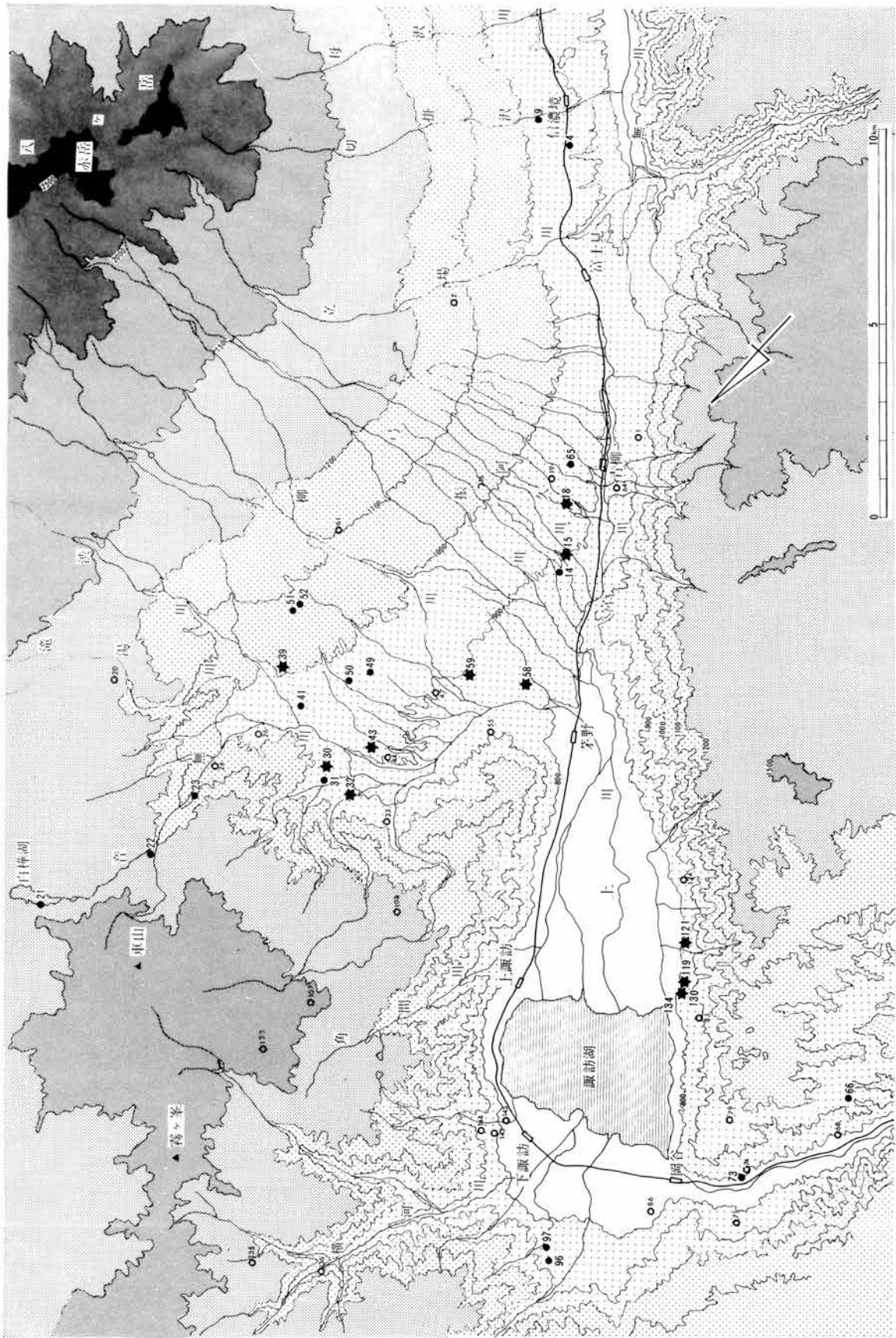
中央道用地内遺跡は発掘面積が広範囲に及ぶため、検出される遺構数も他に比べ非常に多くなっており、同等に比較するわけにはいかぬが、発掘調査されている75遺跡中では、阿久・十二ノ后遺跡はその規模・内容ともに諏訪地方における前期遺跡で最大のものであり、また、両者は共通した文化内容をもち、八ヶ岳山麓と諏訪湖畔という対象的な地にあることも注意される。前期前半期においては、山麓部で阿久、諏訪湖盆で十二ノ后遺跡を中心とし、後半期になると、山麓部では阿久・机平遺跡、湖盆で十二ノ后、扇平遺跡を拠点集落とした結合体があったと類推するのは早計であろうか。

なお遺跡地名表・分布図作成にあたり、原村教育委員会平出一治氏、諏訪市教育委員会高見俊樹氏の協力をえた。(青沼 博之)

註1 【長野県史】考古編遺跡地名表の遺跡数を用いたが、縄文時代各期の遺跡数は、富士見町・原村・茅野市は【八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書】〔長野県教委1980〕を、諏訪市・岡谷市分は【中央道報告書、諏訪市その4、岡谷市その4】〔長野県教委1976・1980〕を、下諏訪町は県遺跡台帳を使用し求めた。

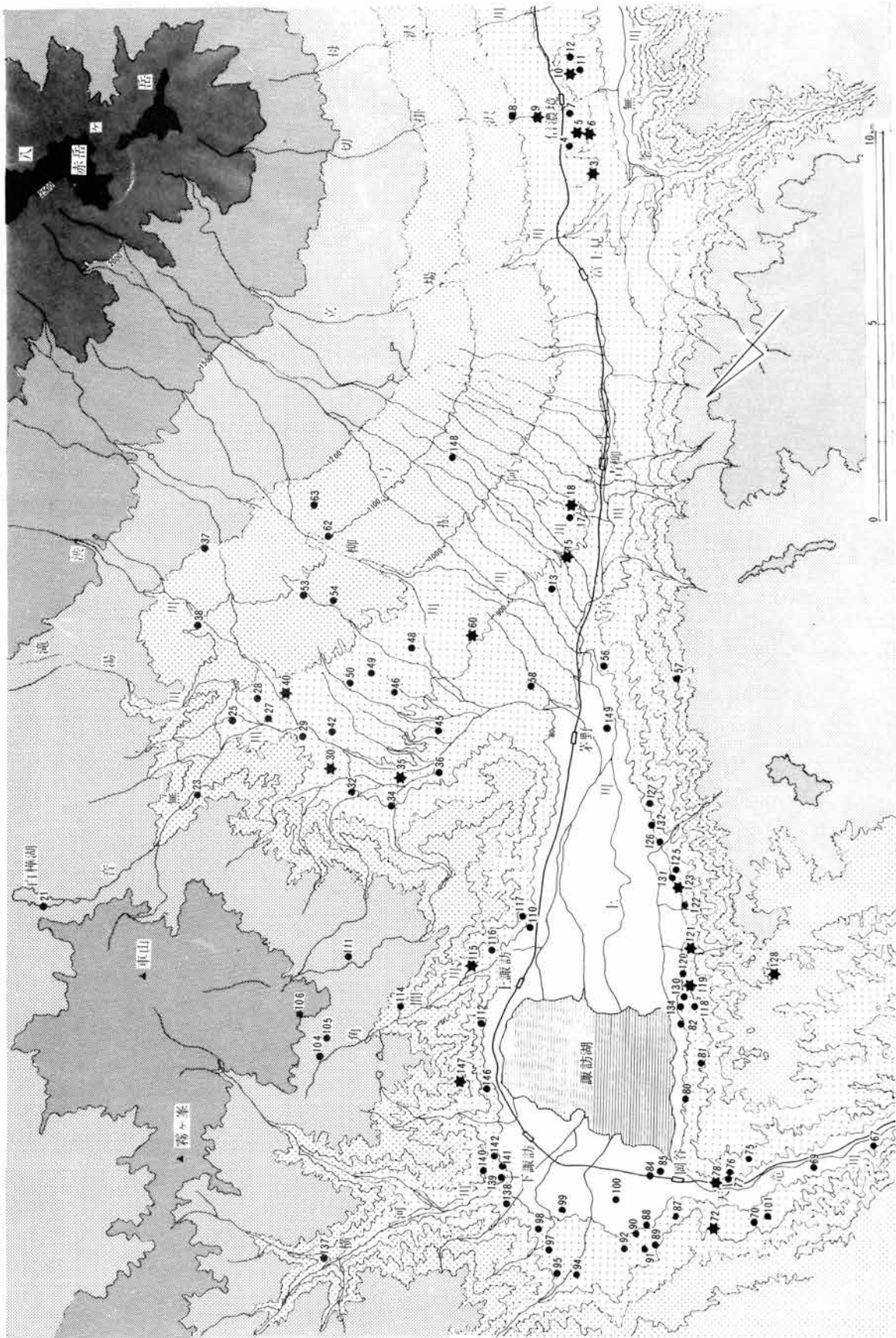
2 【中央道報告書、諏訪市その4、茅野市・原村その2、岡谷市その4】。長崎元広「中部地方における縄文前期の堅穴住居」(信濃31-2)、宮坂光昭「八ヶ岳山麓に見られる縄文中期後半の様相」(国分直一博士古稀記念論文集)他がある。

3 各遺跡から出土している土器より、諸磯式土器以前を前半期、以後を後半期として扱った。



挿図 12 諏訪地方の縄文時代前期前半の遺跡分布図





挿図 13 諏訪地方の縄文時代前期後半の遺跡分布図

表1 諏訪地方縄文時代前期遺跡地名表

No.	遺跡名	所在地	遺構	調査年	採集・出土土器形式	文献
1	小テングク	富士見町神戸			前期土器片	
2	薬師尾根	〃 立沢			〃	1
3	机平	〃 落合	諸磯期住28、土壙、集石	56	諸磯a~c、黒浜	2~4
4	梨木原	〃 〃			関山、諸磯a~c	5~6
5	唐渡宮	〃 〃	諸磯期住4	49・52	黒浜	7・8
6	上の原	〃 〃	諸磯期住3、環状列石、土壙	38・51	〃	
7	森平	〃 〃			〃	
8	大泉	〃 境			諸磯c	
9	箆畑	〃 〃	日向期住5、箆畑期住7	28・37	関山、日向I・II、箆畑I・II	9~11
10	日向	〃 〃	諸磯期住5	40	諸磯b・c	12・13
11	井戸尻	〃 〃		33	諸磯a~c	14~23
12	地藏平	〃 〃			箆畑	
13	比久尼原北	原 村柏木			〃	
14	柏木南	〃 〃		51	木島	24
15	阿久	〃 〃	関山期住31、黒浜期住19、諸磯期住15、方形柱列13、環状集石、土壙	51~53	花積下層、中越、関山、黒浜、神ノ木、有尾、諸磯a・b・c	24~42
16	向尾根	〃 払沢		50	前期土器片	
17	ヌシキ	〃 菖蒲沢		51	有尾、諸磯a・b	24
18	大石	〃 〃	神ノ木期住4、黒浜・諸磯期住各1、土壙	50	関山	43~49
19	姥ヶ原	〃 〃			前期土器片	
20	蓼科	茅野市北山			〃	
21	御座岩	〃 〃		28・29	木島、有尾、諸磯b・c、南大原、上原、下島	50
22	ナロウド	〃 〃			花積下層	
23	栃窪岩陰	〃 〃		38・42・43	木島、北白川下層、関山、諸磯b、下島、神ノ木	51~53
24	上ノ棚	〃 〃		44・52	前期土器片	
25	上ノ段	〃 〃		10~16 27	有尾、南大原、上原、下島、諸磯	54~58
26	高風呂	〃 〃			前期土器片	
27	粧形	〃 〃		42	諸磯	
28	イモリ沢	〃 〃			下島	
29	横山	〃 米沢			諸磯c	
30	よせの台	〃 〃	前半住2、後半住2、小竪穴	51	花積下層、関山、神ノ木、有尾、南大原、下島、諸磯a・b、北白川下層	59~61
31	一の瀬	〃 〃			花積下層	
32	駒形	〃 〃	木島期住1	36・41	木島、花積下層、箆畑	62~64
33	三軒屋	〃 〃			前期土器片	
34	大桜	〃 〃		27	諸磯c、下島	
35	丸山	〃 〃	下島期住1	48	〃 〃	65
36	棚畑	〃 〃		34	箆畑	66・67
37	瘦尾根	〃 湖東			諸磯	
38	床並	〃 北山			〃	
39	神の木	〃 〃	神の木期住1、柱穴、炉	27・37	神ノ木、有尾、関山、北白川下層	68・69
40	下島	〃 〃		24	下島	70
41	中ツ原	〃 湖東		48	木島	
42	辻屋	〃 〃			諸磯	
43	中村	〃 〃	花積下層期住1	50	前期初頭土器片	71
44	下菅沢	〃 豊平		50	前期土器片	71
45	宮ノ上	〃 〃		44	諸磯	
46	日向	〃 〃		13・14	下島	
47	梨の木	〃 〃			前期土器片	
48	師岡平	〃 〃			下島	

No.	遺跡名	所在地	遺構	調査年	採集・出土土器形式	文献
49	向原	茅野市豊平			花積下層、下島	
50	鎮辺坂	〃			〃	
51	与助尾根	〃		21~25 27	〃	72~79
52	与助尾根南	〃		54	〃	80
53	竜神平	〃			下島	81
54	金掘場	〃			〃	
55	棚畑	〃 永明		45	前期土器片	
56	山の神	〃 宮川		34・44	諸磯	82・83
57	晴ヶ峯	〃			〃	84
58	下の原	〃 玉川	前期初頭住2	49・51・53	花積下層、木島、下島	85・86
59	和田	〃	中越期住5	44・48	中越、関山	87~90
60	上御前	〃	下島期住3	45・46	下島、晴ヶ峯	91~94
61	馬捨場	〃 泉野			前期土器片	
62	丸生戸	〃			諸磯	
63	菖蒲沢I	〃			〃	
64	向反	〃 金沢			前期土器片	
65	判の木山東	〃		51	前期前半土器片	24
66	太ノ田I	岡谷市川岸			繊維土器	
67	中ノ沢	〃			諸磯a・b、下島、晴ヶ峯	
68	昌福寺裏	〃		49	前期土器片	95
69	後田原	〃		43	諸磯c、下島	96・97
70	広畑	〃		26・28	下島、踊場	98
71	西除入	〃			前期土器片	
72	岡屋	〃	下島期住4		下島	99・100
73	志平	〃		42・52	木島、北白川下層、諸磯	101~104
74	追平	〃			前期土器片	
75	沖ノ沢	〃		54	諸磯c、下島、晴ヶ峯	
76	柄久保	〃			下島	
77	経塚	〃		52	諸磯c	101
78	洩矢	〃	諸磯期住1	52	諸磯b	101
79	須ヶ平	〃 湊			前期土器片	
80	船霊社	〃		52・53	諸磯a	101
81	矢垂	〃			下島	
82	新井南	〃		50	諸磯	105
83	狐穴	〃			前期土器片	
84	岡谷丸山	〃 岡谷			羽島下層、黒浜、諸磯a~c	106・107
85	海戸	〃		大11・昭21 41・42	黒浜、諸磯a・b	108~113
86	間下丸山	〃			前期土器片	114
87	下り林	〃		23・24	黒浜、晴ヶ峯、下島、鶴ヶ島台	115~119
88	ウツギ	〃			下島	
89	化木	〃			〃	
90	堤上	〃			〃	
91	市営球場南	〃			〃	
92	神明町	〃			〃	
93	膳棚	〃			前期土器片	
94	上向	〃		41	下島	120~122
95	扇平	〃 長地	諸磯c式期住10、小竪穴	46	十三菩提、下島、晴ヶ峯	123
96	上ノ原	〃			神ノ木、黒浜	
97	梨久保	〃		24・25・38 39・44・45 47・51・52	花積下層、神ノ木、下島、晴ヶ峯	124~138
98	清水田	〃			下島	

No.	遺跡名	所在地	遺構	調査年	採集・出土土器形式	文献
99	榎垣外	岡谷市長地		49・50	下島	139
100	庄ノ畑	〃 〃		26・40	諸磯b	140~144
101	中島	〃 〃			諸磯a・b	
102	出の洞	〃 〃			前期土器片	
103	横河山おおだくみ 作業遺1-11	〃 〃			〃	
104	科の木	諏訪市桑原			諸磯c	
105	細久保	〃 〃			黒浜、諸磯	145
106	池のくるみA	〃 〃			〃 〃 踊場	146~148
107	池のくるみD	〃 〃			前期土器片	〃
108	霧ヶ峰農場	〃 〃			〃	
109	若宮	〃 岡村			諸磯c	
110	アカツバナ	〃 赤羽根			諸磯	
111	蛇子原	〃 桑原			黒浜	
112	大和	〃 〃			諸磯	149
113	片羽町A	〃 〃		39	子母口	150
114	山の神	〃 岡村			諸磯c	
115	唐沢	〃 上諏訪	ピット5、配石址	55	〃	
116	南沢	〃 〃			諸磯	
117	大黒様	〃 赤羽根			〃	
118	鋳上げ	〃 豊田有賀			北白川下層、諸磯	
119	十二ノ后	〃 〃	前半住32、後半住24、不明5、 整穴、集石、方形柱列	50	花積下層、中越、関山、黒浜、清水上I、 神ノ木、有尾、諸磯a・b、他	151
120	清水	〃 〃		48	諸磯	152・153
121	本城	〃 湖南	諸磯期住1	48・49・55	関山?、中越、諸磯b・c	152・154・155
122	御屋敷	〃 〃			諸磯	
123	荒神山	〃 〃	諸磯期住1	48~50	上原、日向、竈畑	151・156 ~159
124	荒神山上	〃 〃	炉址		前期土器片	
125	三月畑	〃 〃		51	諸磯c	160
126	湯の上	〃 中洲			〃	
127	武居畑	〃 〃		43・52	諸磯b・c	161
128	明星屋敷	〃 豊田有賀	諸磯期住1	39	諸磯b	162~164
129	旧御射山	〃 霧ヶ峰		34・38・39	前期土器片	165~173
130	千鹿頭社	〃 豊田有賀	前半住6、集石	49・50	関山、中越、神ノ木、有尾、南大原	151・174・175
131	城山	〃 湖南		48・49	諸磯c	152・176
132	宮の脇墓地	〃 〃			〃	
133	強清水	〃 霧ヶ峰			前期土器片	
134	金鋳場	〃 豊田有賀		50	関山、中越、下島	151
135	ハウロク	下諏訪町焙烙山		50	前期土器片	
136	赤浜山	〃 赤浜山			〃	
137	浪人塚下	〃 樋橋		49	諸磯a・b	177・178
138	一ノ釜	〃		45	諸磯b・c	179・180
139	駒形	〃 社ヶ丘		36	諸磯c	181~183
140	秋葉山	〃 下原		47	〃	184・185
141	宮ノ上	〃 〃			〃	186
142	天白	〃 〃			有尾、下島	187
143	秋宮境内	〃 横町			前期土器片	188・189
144	入道	〃 武居		37	〃	190・191
145	富部	〃 富部			〃	192~195
146	高木城	〃 高木			諸磯c	
147	武居林	〃 東山田	諸磯・竈畑期住8、土塙・集石	53	〃	196・197
148	臥竜	原村弘沢		50	諸磯	198~201

## 地名表関係文献一覧(『長野県史』考古資料編遺跡地名表より抜粋)

- 1 平出一治「長野県富士見町薬師尾根出土の顔面把手」(『長野県考古学会誌 18』1971)
- 2 小林公明「机原遺跡発掘概要」(長野県考古学会昭和56年度大会発表要旨)1981
- 3 武藤雄六「カリントウ状炭化食品発見の意義」(『どるめん』27号)1980
- 4 〃 「縄文前期農耕のムラ?」(『日本の屋根』10)1980
- 5 武藤雄六「梨の木遺跡」(『日本考古学年報』26)1975
- 6 小林公明「梨木原遺跡」(『日本考古学年報』27)1976
- 7 武藤雄六「原始絵画のある縄文土器」(『考古学ジャーナル』28)1969
- 8 田村和幸「唐渡之宮 21号住居址を掘って」(『山麓考古』2)1975
- 9 武藤雄六「信濃境籠畑遺跡出土縄文前期末の土器について」(『信濃』Ⅲ・15-7)1963
- 10 武藤雄六「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」(『考古学集刊』4-1)1968
- 11 武藤雄六「長野県諏訪郡富士見町籠畑遺跡」(『日本考古学年報』20)1972
- 12 武藤雄六「八ヶ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡—長野県諏訪郡富士見町日向遺跡の調査」(『信濃』Ⅲ・18-4)1966
- 13 武藤雄六「長野県諏訪郡富士見町日向遺跡」(『日本考古学年報』18)1970
- 14 藤森栄一「井戸尻遺跡の土器(1)」(『井戸尻』1)1961
- 15 武藤 盈「井戸尻遺跡」(『井戸尻』1)1961
- 16 藤森栄一編『井戸尻』(中央公論美術出版)1965
- 17 藤森栄一「井戸尻遺跡の土器(2)」(『井戸尻』2)1965
- 18 武藤雄六・宮坂光昭「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡第2次調査概報」(『信濃』Ⅲ・20-10)1968
- 19 藤森栄一「井戸尻」(『日本考古学年報』18)1970
- 20 武藤雄六「長野県諏訪郡富士見町井戸尻遺跡」(『日本考古学年報』18)1970
- 21 武藤雄六「井戸尻遺跡の土器(その3)」(『井戸尻』3)1971
- 22 小林公明「井戸尻遺跡の土器(その4)」(『井戸尻』4)1974
- 23 武藤雄六「遺跡案内—井戸尻遺跡」(『日本考古学の視点』上)1974
- 24 日本道路公団名古屋建設局、長野県教委『中央道報告書—茅野市・原村(その2)』1979
- 25 長崎元広「諏訪原村の阿久遺跡から」(『地歴』17)1977
- 26 長野県中央道遺跡調査会調査団阿久班「諏訪郡原村阿久遺跡調査速報」(『信濃考古』43)1977
- 27 長野県中央道遺跡調査会調査団阿久班「阿久遺跡調査概報」(『信濃考古』44)1977
- 28 長野県中央道遺跡調査会調査団「長野県諏訪郡原村阿久遺跡の調査」(『考古学ジャーナル』142)1977
- 29 青沼博之「阿久遺跡」(『日本の屋根』19-1)1978
- 30 今村善興・笹沢 浩・青沼博之「長野県諏訪郡原村阿久遺跡の調査」(『日考協要旨』53)1978
- 31 江坂輝弥「縄文時代の配石遺構と阿久遺跡」(『阿久通信』1)1978
- 32 大沢和夫・笹沢 浩「阿久遺跡」(『日本考古学年報』29)1978
- 33 笹沢 浩「阿久遺跡」(『百科年鑑』)1978
- 34 滝沢忠義「阿久遺跡の周辺」(『信州の東京』776)1978
- 35 長野県中央道遺跡調査会調査団『長野県諏訪郡原村阿久遺跡発掘調査概報—昭和51・52年度』1978
- 36 長野県中央道遺跡調査会調査団「長野県諏訪郡原村阿久遺跡発掘調査中間報告」(『信濃』Ⅲ・30-4)1978
- 37 長野県中央道遺跡調査会調査団阿久班「座談会—八ヶ岳西南麓阿久遺跡のスケッチ」(『どるめん』16)1978
- 38 平出一治「原村の阿久遺跡」(『信州リポートニュース』3)1978
- 39 笹沢 浩「長野県阿久遺跡」(『日本考古学年報』30)1979
- 40 笹沢 浩「阿久遺跡の調査をおえて」(『館報はら』98)1979
- 41 樋口昇一「中越と阿久」(『伊那路』23-12)1979
- 42 武藤雄六「阿久遺跡と古代の原村」(『阿久』1)1979
- 43 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書—原村その2』1975

- 44 長野県中央道遺跡調査会調査団「大石遺跡で禾本科種子炭化魂？を発見」(『考古学ジャーナル』113)1974
- 45 松永満夫「大石遺跡の発掘」(『館報はら』84)1975
- 46 松永満夫「大石遺跡—アワ類炭化種子」(『どるめん』13)1977
- 47 松本 豪「長野県諏訪郡原村大石遺跡で発見された炭化種子について」(『どるめん』13)1977
- 48 長野県中央道遺跡調査会調査団「長野県大石遺跡」(『日本考古学年報』29)1978
- 49 五味一郎「長野県原村大石遺跡発見の尖頭器」(『長野県考古学誌』41)1981
- 50 宮坂英弼・宮坂虎次『蓼科』(尖石考古館)1967
- 51 宮坂英弼「長野県茅野市栃窪岩陰遺跡(第1次)」(『日本考古学年報』14)1967
- 52 八幡一郎・宮坂英弼「長野県栃窪岩陰」(『日本の洞穴遺跡』)1968
- 53 茅野市教委『栃窪岩陰遺跡』1971
- 54 宮坂英弼「長野県諏訪郡北山村上の段遺跡発掘に依る縄文弥生両文化接触に関する一資料」(『歴史地理』73-5)1939
- 55 宮坂英弼「北山浦地方石器時代の文化1・2・3(上の段遺跡地調査)」(『郷土』2-9, 10, 11)1940
- 56 宮坂英弼「長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡発掘報告」(『史前学雑誌』14-1)1942
- 57 大矢昌彦「上ノ段遺跡出土の遺物から」(『鴨台考古』2)1973
- 58 柳沢一夫「上ノ段遺跡」(『かやの』1)1975
- 59 藤森栄一「茅野市寄の台の土器」(『信濃考古』28)1969
- 60 宮坂虎次・鶴銅幸雄「よせの台遺跡緊急発掘調査概報」(『信濃考古』37)1976
- 61 茅野市教委『よせの台遺跡』1978
- 62 宮坂英弼「縄文早期終末の住居址」(『信濃』III・13-8)1961
- 63 宮坂英弼「長野県茅野市駒形遺跡」(『日本考古学年報』14)1966
- 64 宮坂英弼・宮坂虎次「長野県茅野市駒形遺跡」(『日本考古学年報』19)1971
- 65 茅野市教育委員会『丸山遺跡』1974
- 66 茅野市教委『棚畑遺跡』1971
- 67 山本寿々雄「山梨長野両県境八ヶ岳山麓における石器時代遺跡の分布」(『信濃』III・6-4)1954
- 68 戸田哲也・大矢昌彦「神之木式・有尾式土器の研究(前)—茅野市神ノ木遺跡採集の資料を中心として」(『長野県考古学会誌』34)1979
- 69 長野県教委「神ノ木遺跡」(『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』)1971
- 70 宮坂英弼「長野県諏訪郡下島遺跡」(『日本考古学年報』2)1954
- 71 茅野市教委『下菅沢遺跡・中村遺跡—中大塩団地内埋蔵文化財緊急調査報告書』1976
- 72 青木茂人「与助尾根発見の一釣手土器」(『史実誌』4)1949
- 73 手塚昌孝「与助尾根集落小考」(『史実誌』4)1949
- 74 戸沢充則「与助尾根発見の新資料」(『史実誌』4)1949
- 75 諏訪清陵高校史実会「豊平村与助尾根遺跡集落図」(『史実誌』4)1950
- 76 宮坂英弼「八ヶ岳西麓与助尾根先史聚落の形成についての一考察(上・下)」(『考古学雑誌』36-3, 4)1950
- 77 宮坂英弼「長野県諏訪郡与助尾根遺跡」(『日本考古学年報』1)1951
- 78 宮坂英弼「長野県諏訪郡与助尾根遺跡」(『日本考古学年報』3)1955
- 79 宮坂英弼『尖石』(茅野市教委)1957
- 80 茅野市教委『与助尾根南遺跡』1980
- 81 吉江邦彦・守矢昌文「竜神池遺跡」(『かやの』1)1975
- 82 旧宮川村史編纂会「長野県茅野市宮川西茅野(山ノ神・横山)遺跡概報」(『旧宮川村誌編纂会研究』5)1959
- 83 岡谷南高校歴史部考古班「山の神遺跡発掘報告書」(『縄』1)1970
- 84 宮坂昭久・戸沢充則「宮川村晴ヶ峯発見の土器—中期初頭縄文式土器の研究資料篇II」(『諏訪考古学』7)1951
- 85 宮坂虎次「下ノ原遺跡」(『日本考古学年報』27)1976
- 86 宮坂光昭・宮坂虎次「長野県下ノ原遺跡発見の一遺構について」(『日考協要旨』45)1979
- 87 茅野高校社会科学クラブ考古班「和田遺跡東地区における縄文中期の集落展開について(その1)」(『かやの』1)1975

- 88 守矢昌文「和田遺跡採集特殊小型土器考」(『かやの』1)1975
- 89 茅野市教委『茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書』1970
- 90 茅野市教委『中ッ原・和田遺跡』1974
- 91 岡谷南高校歴史部考古班「上御前遺跡発掘中間報告」(『縄』1)1970
- 92 岡谷南高校歴史部考古班「第2回上御前宮遺跡発掘」(『縄』2)1971
- 93 岡谷南高校歴史部考古班「第1・2回上御前宮遺跡発掘調査」(『縄』3)1972
- 94 岡谷南高校歴史部考古班「第3回上御前遺跡」(『縄』3)1972
- 95 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書—岡谷市その1・その2』1975
- 96 戸沢充則「岡谷市後田原遺跡」(『信濃考古』28)1969
- 97 岡谷市教委『後田原遺跡—長野県岡谷市川岸地区』1970
- 98 長崎元広「長野県岡谷市広畑遺跡発見の埋甕と蜂巢石」(『カウリイ』11)1970
- 99 宮坂英弼『岡屋遺跡第1集』(岡谷遺跡研究会)1958
- 100 伊藤正和『岡屋遺跡第2集』(岡谷遺跡研究会)1960
- 101 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書—岡谷市その4』1970
- 102 岡谷市教委『長野県岡谷市川岸志平遺跡発掘調査報告書』1965
- 103 中村竜雄「岡谷市志平第2地区遺跡」(『信濃考古』27)1969
- 104 中村竜雄「岡谷市川岸志平遺跡第2地区」(『日本考古学年報』20)1971
- 105 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書—岡谷市その3』1976
- 106 両角守一「信濃諏訪丸山堅穴遺跡」(『人類学雑誌』35-6・7)1920
- 107 藤森栄一「長野県岡谷市丸山遺跡の資料」(『日本考古学年報』3)1955
- 108 今井真樹「平野村小尾口海戸遺跡」(『県史蹟報告』2)1924
- 109 藤森栄一「長野県岡谷市海戸遺跡」(『日本考古学年報』1)1951
- 110 武井正己「長野県岡谷市の海戸遺跡」(『考古学ジャーナル』3)1966
- 111 岡谷市教委『海戸—岡谷市海戸遺跡第1次調査報告』(『長野県考古学研究報告書』2)1967
- 112 桐原 健「岡谷海戸遺跡第二次調査について」(『信濃考古』22)1967
- 113 岡谷市教委『海戸—岡谷市海戸遺跡第2次緊急調査報告』(『長野県考古学研究報告書』4)1968
- 114 金松直也「岡谷市間下丸山遺跡調査報告」(『史実誌』3)1949
- 115 戸沢充則「下り林の一年」(『清陵地歴部報』2)1949
- 116 塚原富士子「岡谷市下り林遺跡の土器について」(『二葉地歴部報』2)1950
- 117 戸沢充則「岡谷市下り林遺跡の早期縄文式土器」(『信濃』III・2-7)1950
- 118 戸沢充則「岡谷市下り林遺跡調査報告」(『諏訪考古学』8)1952
- 119 藤森栄一「長野県岡谷市下り林遺跡」(『日本考古学年報』2)1954
- 120 小松 虔「下諏訪町入道遺跡発掘概報」(『信州ローマ』9)1966
- 121 中村竜雄・宮坂光昭「岡谷市上原遺跡・岡谷市今井上ノ原遺跡調査」(『諏訪考古』)1966
- 122 中村竜雄「岡谷市上ノ原縄文早期遺跡」(『信濃考古』19)1967
- 123 岡谷市教委『扇平遺跡—長野県岡谷市扇平遺跡発掘調査報告』1974
- 124 戸沢充則・宮坂光昭「長地村梨久保遺跡調査報告」(『諏訪考古学』7)1951
- 125 戸沢充則「梨久保遺跡について」(『中仙道』2)1952
- 126 藤森栄一「長野県諏訪郡梨久保遺跡」(『日本考古学年報』2)1954
- 127 宮坂光昭「長野県岡谷市梨久保遺跡の再調査—梨久保式土器を中心として」(『長野県考古学会誌』3)1965
- 128 藤森栄一「長野県岡谷市梨久保遺跡」(『日本考古学年報』16)1968
- 129 武藤雄六「岡谷市梨久保出土の石器について」(『信濃』III・20-4)1968
- 130 岡谷市教委『梨久保遺跡—第3・4次発掘調査報告』1972
- 131 諏訪二葉高校地歴部考古班「梨久保遺跡第4次発掘調査報告書」(『いにしゑ』1)1973
- 132 中山幸恵「梨久保遺跡発掘報告」(『ふたば会報』4)1973

- 133 宮坂光昭「梨久保遺跡」(『日本考古学年報』25)1974
- 134 岡谷市教委『梨久保遺跡』1976
- 135 岡谷市教委「めずらしい甕被葬の跡かー梨久保遺跡」(『市報おかや』573)1977
- 136 岡谷市教委「梨久保遺跡第9次発掘調査をおえて」(『市報おかや』576)1977
- 137 岡谷市教委『梨久保遺跡ー昭和52年度第9次発掘調査概報』1977
- 138 諏訪二葉高校考古クラブ「梨久保遺跡発掘調査記録第1次〜第9次」(『いにしゑ』6)1978
- 139 両角守一「信州諏訪郡長地村覆海戸遺跡」(『考古学雑誌』22-1)1932
- 140 手塚昌孝・青木茂人「庄之畑遺跡調査報告書」(『史実誌』1)1948
- 141 戸沢充則「庄之畑遺跡発掘の記(上・下)」(『史実誌』1・2)1948
- 142 戸沢充則「長野県岡谷市庄之畑遺跡の再調査」(『信濃』III・5-10)1953
- 143 藤森栄一「岡谷市庄之畑遺跡」(『長野県考古学会研究報告書』1)1965
- 144 宮坂光昭「長野県岡谷市庄之畑遺跡」(『日本考古学年報』18)1970
- 145 松沢亜生「諏訪市細久保遺跡調査略報」(『清陵地歴部報』4)1951
- 146 金井典美・石井則孝「長野県霧ヶ峯池のくるみ遺跡調査略報」(『古代』47)1966
- 147 金井典美・石井則孝・大脇 潔「長野県霧ヶ峯池のくるみ先土器文化遺跡調査報告」(『考古学雑誌』55-2)1969
- 148 金井典美「長野県霧ヶ峯池のくるみ遺跡」(『日本考古学年報』19)1971
- 149 小池浩文「諏訪湖底首根遺跡の石器と同一形態の石器を出土すると思われる遺跡について(大和遺跡とその周辺)」(『縄』1)1970
- 150 藤森栄一・桐原 健・宮坂光昭「諏訪市片羽町の低地性遺跡調査報告」(『信濃』III・17-4)1965
- 151 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書ー諏訪市内その3』1975
- 152 日本道路公団名古屋建設局・長野県教委『中央道報告書ー諏訪市内その1・2』1974
- 153 伴 信夫「清水遺跡」(『日本考古学年報』26)1975
- 154 岡田正彦「本城遺跡(第1次)」(『日本考古学年報』26)1975
- 155 岡田正彦「本城遺跡(第2次)」(『日本考古学年報』27)1976
- 156 岡田正彦「金山北遺跡」(『日本考古学年報』26)1975
- 157 岡田正彦「諏訪市大熊荒神山遺跡」(『信濃考古』32)1975
- 158 伴 信夫「荒神山遺跡」(『日本考古学年報』26)1975
- 159 大沢和夫・岡田正彦「荒神山遺跡」(『日本考古学年報』27)1976
- 160 諏訪市教委『諏訪市大熊三月畑遺跡緊急発掘調査』1976
- 161 宮坂光昭「武居畑遺跡」(『日本考古学年報』30)1978
- 162 諏訪清陵高校地歴部考古班「諏訪市豊田明星屋敷(縄文早期)遺跡発掘調査」(『土』1)1965
- 163 中村竜雄「諏訪市明星屋敷・ハタ河原遺跡調査報告」(『信濃』III・17-4)1965
- 164 藤森栄一・中村竜雄「長野県諏訪市明星屋敷遺跡」(『日本考古学年報』17)1969
- 165 金井典美「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査概報」(『考古学雑誌』46-1)1960
- 166 桜井清彦・金井典美・石井則孝「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡について」(『日考協要旨』30)1964
- 167 金井典美「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査報告(2・3次)」(『考古学雑誌』51-2)1965
- 168 金井典美「旧御射山祭祀遺跡の発生ー山中聖地の一形態」(『長野』11)1967
- 169 金井典美「奥霧ヶ峯旧御射山遺跡について」(『信濃考古』25)1968
- 170 金井典美「長野県諏訪市霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡(第2次調査)」(『日本考古学年報』16)1968
- 171 金井典美『旧御射山遺跡ー諏訪の歴史』(諏訪市教委)1968
- 172 金井典美『御射山』(学生社)1968
- 173 伊藤富雄「下社旧御射山遺跡ー御射山祭の話」(『ヒュッテ御射山』)1969
- 174 宮沢恒之「諏訪市有賀十二后遺跡」(『信濃考古』32)1975
- 175 大沢和夫・宮沢恒之「十二の後遺跡」(『日本考古学年報』27)1976
- 176 岡田正彦「城山遺跡」(『日本考古学年報』26)1975

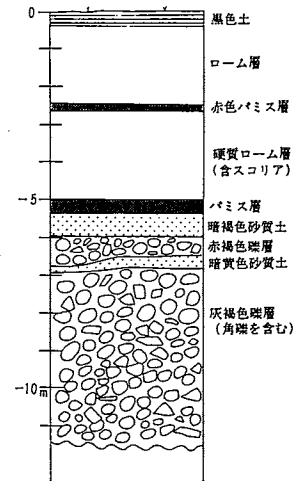


- 177 下諏訪町教委『浪人塚下遺跡—長野県下諏訪町浪人塚下遺跡第1次緊急発掘調査概報』1975
- 178 宮坂光昭「浪人塚下遺跡(第1次調査)」(『日本考古学年報』27)1976
- 179 諏訪清陵高校地歴部考古班「一の釜」(『土』5)1971
- 180 中村竜雄「一の釜遺跡」(『日本考古学年報』24)1973
- 181 藤森栄一・宮坂光昭・中村竜雄「ポイント文化期の堅穴住居址」(『上代文化』31・32)1962
- 182 藤森栄一「諏訪郡駒形遺跡」(『日本考古学年報』14)1967
- 183 中村竜雄「環状住居址群の立石—長野県下諏訪町駒形遺跡調査補報」(『古代』42・43)1964
- 184 下諏訪町教委『下諏訪秋葉山遺跡発掘調査報告』1972
- 185 中村竜雄「下諏訪秋葉山遺跡」(『日本考古学年報』25)1974
- 186 中村竜雄「下諏訪町宮の上出土の顔面把手と蛇頭把手」(『信濃』III・15—8・9)1963
- 187 新村良雄「縄文早期遺跡としての天白遺跡研究」(『清陵考古学』1)1948
- 188 藤森栄一「秋宮経塚下の埋藏金と経塚」(『信濃』III・13—12)1961
- 189 大場磐雄「諏訪大社秋宮発見の経塚」(『信濃』III・15—10)1963
- 190 小松 虔「下諏訪町入道遺跡・発掘概報」(『信州ローム』9)1966
- 191 小松 虔「長野県諏訪郡下諏訪町入道遺跡」(『日本考古学年報』15)1967
- 192 高林重水「長野県下諏訪町富部発見の土偶」(『信濃考古』23)1968
- 193 中村竜雄「下諏訪町富部立体交叉出土後期縄文土器」(『長野県考古学会誌』13)1972
- 194 藤森栄一・中村竜雄「長野県下諏訪町関屋弥生中期遺跡」(『古代学研究』31)1962
- 195 下諏訪町教委『関屋遺跡発掘調査報告書』1974
- 196 下諏訪町教委『下諏訪町東山田—武居林遺跡』1979
- 197 諏訪清陵高校地歴部考古班「武居林遺跡発掘報告」(『土』13)1979
- 198 武藤雄六「長野県諏訪郡原村上横道遺跡の調査」(『信濃』III・20—6)1968
- 199 平出一治「上横道遺跡第2次緊急発掘調査概報」(『信濃考古』38)1976
- 200 平出一治「上横道の発掘調査から」(『館報はら』87)1976
- 201 平出一治「長野県原村臥竜遺跡出土の有頭石棒」(『茅野』6)1979

### 第3節 土 層

阿久遺跡の立地する阿久尾根の地質的構造は、基本的には隣接する柏木南・居沢尾根両遺跡と共通するものと思われる。中央道建設のための掘り割り断面での観察では、地表面から、黒色土(腐植土)、火山性堆積物(ローム・パミスの互層)、八ヶ岳泥流堆積物(砂質土・礫層の互層)が、約11m下まで確認された(挿図14)。地質学的な土壌分析はおこなっていないので、信州ロームとの対比はできないが、八ヶ岳山麓におけるいくつもの尾根状丘陵の成因は基本的には共通するであろう。

なお、後述される集石群の構成礫は八ヶ岳泥流の礫を用いたものと思われる。八ヶ岳泥流の礫層は暗褐色砂質土を挟んで、上部にこぶし大の赤褐色礫層が、下部に人頭大の礫を中心とした灰褐色礫層がある。上部礫層は円礫が主体であるのに対して下部礫層は角礫を含んでいる。



挿図14 柏木尾根土層柱状図

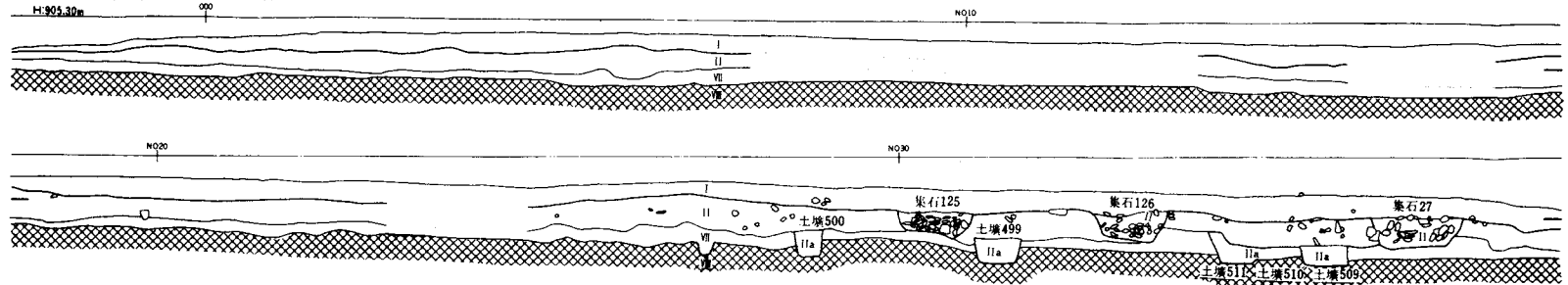
阿久尾根は南と北では西流する河川との比高差の相違で、斜角が異なる。つまり、南斜面の緩傾斜に対して、北では急である。従って、地表上面での層位(挿図14)は若干の変化が南北斜面ではみられるが(挿図15-5・7・9)、しかし、基本的には阿久尾根全体での層位は黒色土(表土)層、黒褐色土層、漸移層、ローム層の4層からなる(挿図15)。すなわち、阿久尾根の尾根上部部は下部への流出により、漸移層が浅いのにに対して、斜面下部では逆に黒色土等の堆積が厚く、漸移層が深い。従って、これら上部部に検出された住居址の中などには、壁高が極端に低いもの(住居址67)がみられる(挿図15-3)。同様に南斜面で検出された住居址群の大多数は表土の流出等により、住居址下端での壁高は低く、上端ではその逆となる。

遺物包含層は黒色土と黒褐色土層であり、主として後者に集中して出土したが、漸移層までに及ぶことは原則としてなかった。また、遺物の層位的出土は一部の住居址埋土以外では確認できなかった。

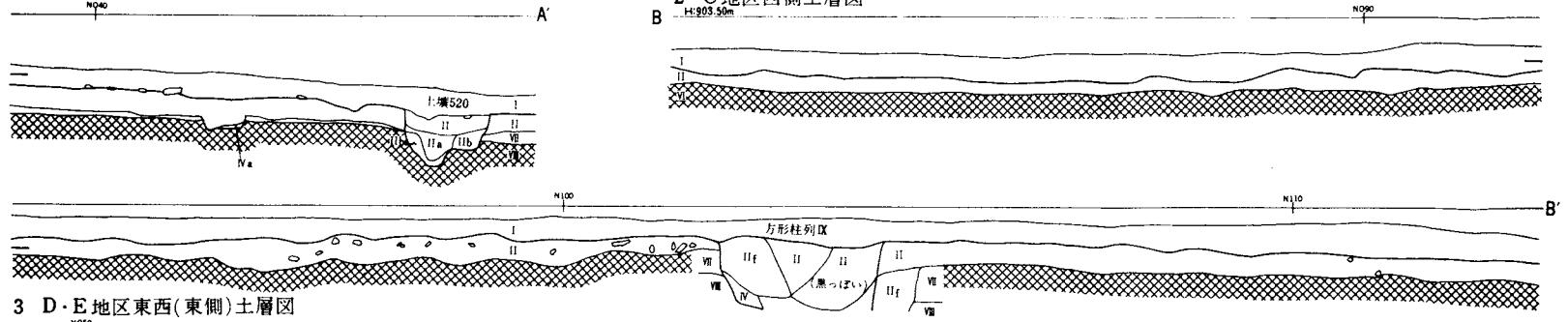
遺構は上・下層に重複してみられた。上層には集石群が黒褐色土上部に検出された(挿図15-1)。下層遺構は上・下層の住居址、方形柱列と土壌群があり、その検出面は黒褐色土下部または漸移層であるが、一部はローム面で検出したものもある。しかし、土層観察および空中写真(図版13・84)では住居址群の落ち込みが、集石構築面で見られることから、下層遺構の構築面は集石群とさして変わらない黒褐色土上部にあるといえる。

(笹沢 浩)

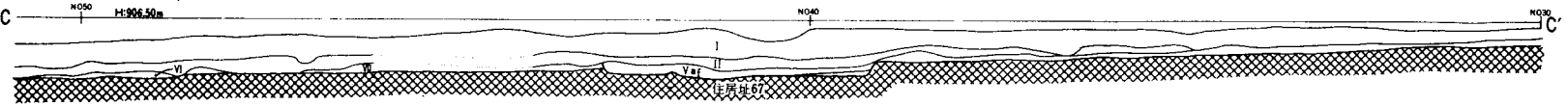
1 D・E地区東西(西側)土層図



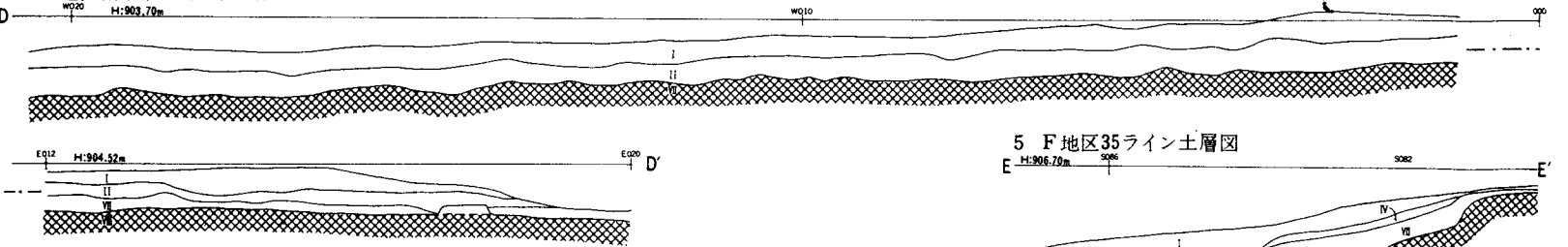
2 C地区西側土層図



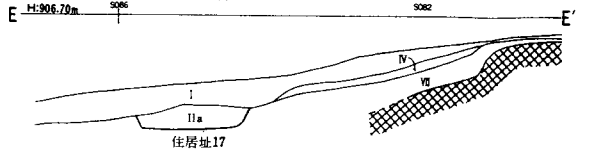
3 D・E地区東西(東側)土層図



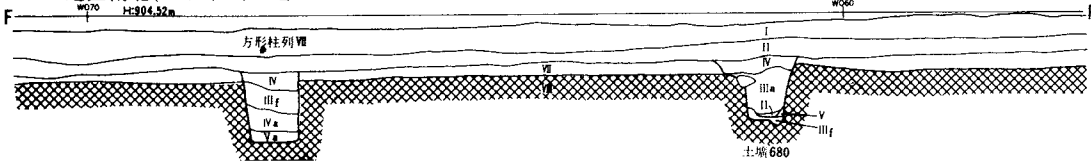
4 C地区南北(Iライン)土層図



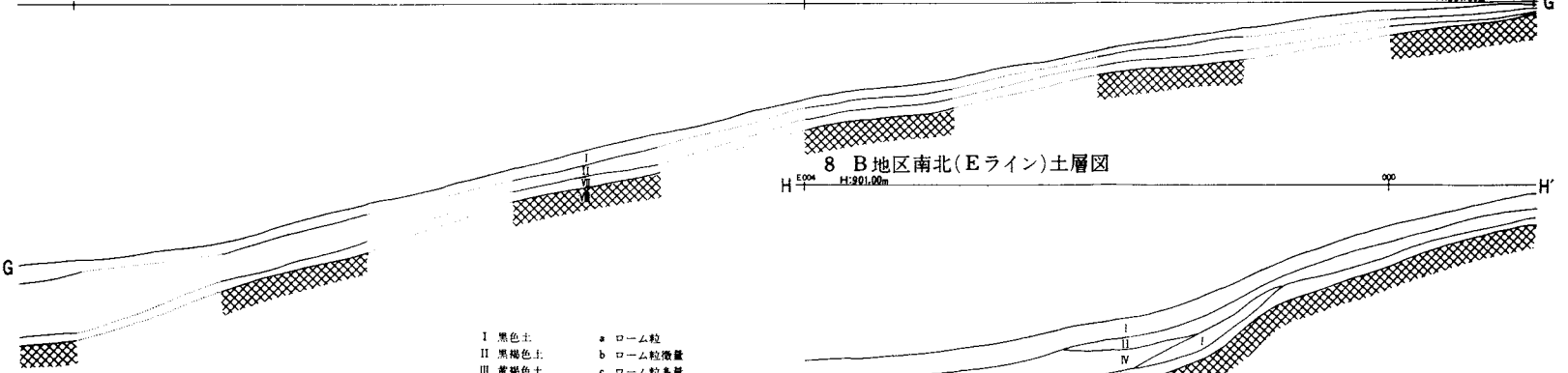
5 F地区35ライン土層図



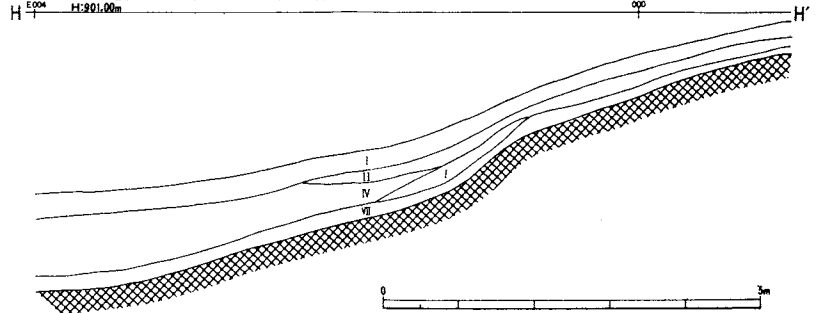
6 C地区南北(Mライン)土層図



7 A・B地区東西(Oライン)土層図



8 B地区南北(Eライン)土層図



- |            |           |
|------------|-----------|
| I 黒色土      | a ローム粒    |
| II 黒褐色土    | b ローム粒微量  |
| III 黄褐色土   | c ローム粒多量  |
| IV 暗黄褐色土   | d ローム細粒微量 |
| V 暗褐色土     | e ロームブロック |
| VI 粘質暗黄褐色土 | f 炭       |
| VII 漸移層    |           |
| VIII ローム層  |           |

挿図15 発掘区土層図

## 第4節 遺跡の時期区分とその概要

### 1 遺跡の時期区分

われわれは本報告書で阿久遺跡独自の時期区分をおこなった。これは、阿久遺跡には、縄文時代前期を中心としてほぼ一貫した歴史がみられるからであり、また、八ヶ岳山麓における縄文時代前期の歴史を語る時に、阿久遺跡で示された考古学的事象は、その一貫性と断絶性、さらに内容の豊富さゆえに、重要な位置を占めると思われるからである。つまり、阿久遺跡で示される縄文時代前期の時期区分は、決して十分なものではないにしても、諏訪地方、ひいてはわが国の縄文前期を究明する上で、一つの指標になればという思い上がった考え方ではなく、一つの遺跡の歴史を、その遺跡の時期区分を用いることで、発展的にとらえようと思ったからにほかならない。

長野県の縄文時代前期の編年観は1956年の『信濃史料』第1巻でほぼ固定されたといつてよい〔大場他1956〕。それは関東地方の編年観をベースとしながら確立されたが、基本的には今日に受け継がれている〔長野県史刊行会1981〕。勿論、細部にわたっては、検討する余地はあるにしても、その大綱は何ら変更する必要がないと考える。この点については後に述べられようが、われわれはかような先学の研究業績を基礎とし、さらに、阿久遺跡で得られた成果を踏まえて、遺跡の時期区分をおこなった。この場合の基礎資料は、阿久遺跡での遺構の重複関係と配置関係、住居址出土遺物の型式的検討、住居址等の遺構そのものの型式的検討から得られた資料を、他遺跡で得られた資料との比較検討する中でおこなった。

このような方法で得られた「阿久遺跡の時期」区分は、すべて阿久何々期あるいは略して「期」で示されるが、従来の編年観とその基本は変るものではない。しかしながら、阿久遺跡が中心的な役割をはたす時期は前期にあり、中期以降は断続的に、しかも小規模な遺跡としての役割しかはたさない。従って、前期においては、考古学上の土器編年による小時期で「期」をあらわしたが、中期以降は考古学上の6期区分法、あるいは日本歴史上の時代区分をあてた。つまり、阿久VIII・IX期は縄文時代中・後期に、阿久X期は平安時代にあたる。

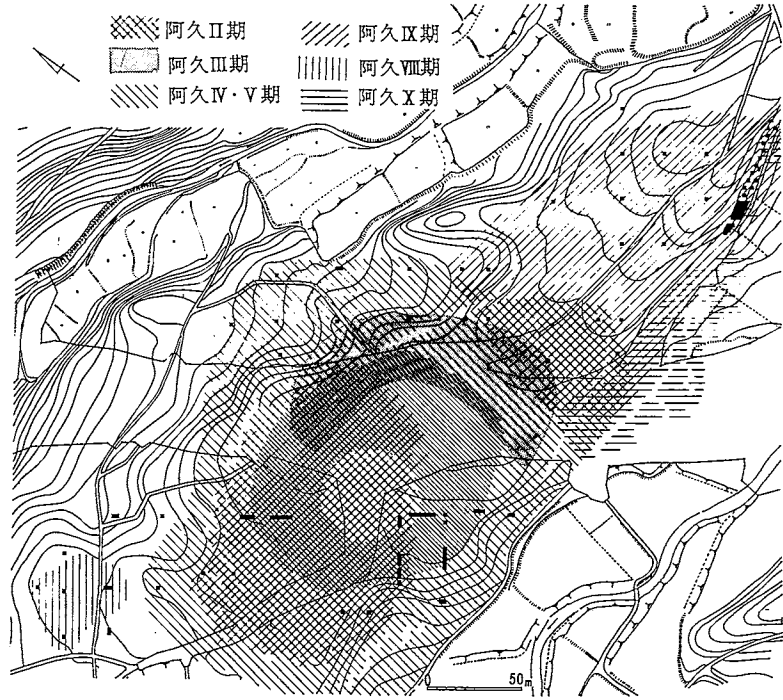
### 2 遺跡の概要

中央道用地内および史跡指定のための範囲確認調査、さらに農道拡幅工事にともなう事前調査によって阿久遺跡のほぼ全容は把握できた(挿図16)。以下、時期区分に従って述べる。

阿久I期 住居址38一棟のみ検出されたにとどまる。遺跡の最も西南寄りに占地する。調査地区が西取り付け農道の最も狭い範囲であったために、その広がり是不明であるが、調査地域内にはI期に属する遺物は住居址38の周辺を除いては見あたらず、さして広い占地をもつとは考えられない。

阿久II期 尾根の中央地域の北西部に主として占地する。a・b・cの3小期にわたって、その占地地域を微妙に移動させているが、その基本的な範囲を超えるものではない。方形柱列といくつかの土壇を広場の中央にとりこむ馬蹄形集落を形成している。広場の開口部は尾根南側であろう。占地地域は径120m余りの円形状になるであろう。a期13棟、b期13棟、c期4棟が知られる。

阿久III期 尾根中央地域の北斜面上端の縁辺に沿いながら、尾根を横断し南斜面までの径160m余に及ぶ範囲内に弧状に占地する。土壙群がその内側の広場にあるが、時期が明らかなのは、尾根中央地域南側のD地区のものである。住居址群は北側でII期と、南側でIV・V期の多くと重複する。また、南斜面とその上端部を除いては、IV期以降の環状集石群と重複する。住居址数は19棟あり、時期別では最もその数が多い。



挿図 16 時期別遺構・遺物分布概念図

阿久IV期 住居址群の占地はほぼIII期と同様であるが、北側

では住居址 52 のみで、他はすべて尾根中央地域の東南部から南斜面に集中する。尾根上の最も広い中央地域平坦部は中心遺構の立石・列石を核として、土壙群と方形柱列からなる内帯 I、集石群からなる内帯 II がドーナツ状にとりまく。従って、住居址群は内帯 II の東から南に外帯として占地することになる。内帯の北側はII・III期の、西側はII期の遺構群と重複する。IV期の占地範囲は円形状に径 160 m 余に及ぶものと思われる。a・b の 2 小期に区分され、住居址数は a 期 8 棟、b 期 4 棟である。

阿久V期 遺構の占地はIV期とさして変わる所がない。しかし、住居址数は 2 棟とその数を激減する。すなわち、尾根東縁部に住居址 72、南斜面に住居址 7 があるに過ぎない。

阿久VI期・VII期 遺構の検出はなく、土器片が尾根上に散在するが、特に集中する個所もみられない。

表 2 阿久遺跡の時期区分と遺構集成表 (長野県編年および関東編年との対比は「長野県史考古資料編 1」(1981)、小林達雄「縄文土器 I」『日本の原始美術 1』(1979) を参照とした)

時代	阿久遺跡編年	おもな検出遺構	長野県編年	関東編年	
縄 文 時 代	阿久 I	住居址 38	中 越	花積下層	
		阿久 II		a 住居址 25・26・28・32・36・39・48・54・55・57・64・78・80、方形柱列 a・IV・XII	関 山
				b 住居址 14・15・24・29・30・31・35・40・44・53・65・69・71、方形柱列 I～III・V・VII	
		c 住居址 37(新)・56・63・68、方形柱列 VIII			
		—		神ノ木 有尾	
	阿久 III	住居址 4・12・13・27・33・41・42・43・49・50・51・59・61・66・70・74(同)・76・77・81、方形柱列 XI、土壙群		黒 浜	
	阿久 IV	a 住居址 5・6・9・11・52・58・75・79、立石、列石、方形柱列、環状集石群、土壙群	南 大 原	諸 磯 a	
		b 住居址 34・45・67・74(新)、方形柱列、環状集石群、土壙群			
	阿久 V	a 方形柱列、環状集石群、土壙群	上 原	諸 磯 b	
		b 住居址 7・72、方形柱列、環状集石群、土壙群			
阿久 VI	(不明)	下 島	諸 磯 c		
阿久 VII	(不明)	籠 畑	十三 苔 提		
中期	阿久 VIII	住居址 8・10・101	(略)		
後期	阿久 IX	(不明)	(略)		
平安時代	阿久 X	住居址 1・2・3・16・17・18・19・20・21・22	(略)		

阿久Ⅶ期 南斜面上に住居址3棟が検出されている。また、範囲確認調査では今次調査地域の東南側の尾根、東部地域上に遺物の分布が濃密にあることが把握されており、従って、その地域が、南斜面も含めたⅦ期の占地地域ということになる。しかし、検出住居址の時期が、藤内期・井戸尻Ⅲ期・曾利Ⅰ期とすべて異なり、また、出土土器も断片的ながら、貉沢・新道期を除いて、ほぼⅦ期を通してある。こうみると、Ⅶ期の阿久尾根は小時期別にはさらに狭い占地を示すことになろうが、その実体は不明である。

阿久Ⅸ期 検出遺構はない。尾根が北斜面側に張り出す平坦面を作りだした最も西寄りの西部地域にⅦ期の土器片とともにやや集中して出土した以外に、ほぼ遺跡全体に少量散在するのみである。堀ノ内式と加曾利B式土器であるが、後者は数点にとどまる。小規模の遺構の存在が予想される。

阿久Ⅹ期 10棟の住居址がすべて南斜面上に弧状に連なって検出された。しかし、南斜面前面の阿久川に至る緩斜面上に灰粘陶器片等が採集できるので、Ⅹ期の占地は東西70m、南北30mの範囲内ということになる。ただ、南斜面の東限はほぼ限定されているが、西限は不明で、さらに西に住居址群が検出される可能性は残されている。

以上、阿久遺跡は縄文時代前期以来、いくつかの断絶期を何回もくり返しながらも、平安時代まで居住地を異にしながらか残された遺跡であるといえる。しかし、資料が乏しく、現段階では確定的なことはいえないにしても、神子柴型石槍の検出や、数点の押型文土器の出土は、阿久Ⅰ期以前の前史があった可能性もあり、阿久尾根の歴史はさらに遡りうると思われる。

(笹沢 浩)

## 第5節 出土遺構・遺物の分類

### 1 遺構等の類型化

#### 1) 住居址内遺物の出土状態の類型

縄文時代前期の住居址に限定して、遺物の出土状態の類型化を試みた。その目的は住居址内遺物出土状態に関して各住居址間、また各期間にどのような違いがあるのかを探り、さらに住居の廃絶と遺物廃棄という問題に発展させることにより、当時の人間の行動様式的一端でも垣間見ることができればと考えたからにほかならない。

類型化には、様々な角度からのアプローチが考えられるが、ここでは特に、床面一括遺物、無遺物層、埋土中の一括遺物の3点に注目し、これらの組み合わせにより合計10通りに類型化した。もとより、対象を同一基準にあてはめようとするれば、無理が生ずるがほぼ大筋はとらえられるであろう。

まず、床面に A 一括遺物がある、B ないで大別し、さらにそれらを次の5項目で細別した。

- 1 無遺物層はなく、埋土中の遺物は散在状態を示す。
- 2 無遺物層はなく、埋土中の遺物は散在状態を示すがその中に一括遺物がある。
- 3 無遺物層があり、埋土中の遺物は散在状態を示す。
- 4 無遺物層があり、埋土中の遺物は散在状態を示すがその中に一括遺物がある。
- 5 その他

従って、類型は具体的には、A・Bと1～5の組みあわせによって表記される。例えば「A<sub>1</sub>」となる。

(岩崎 孝治)

#### 2) 住居址の類型(挿図17)

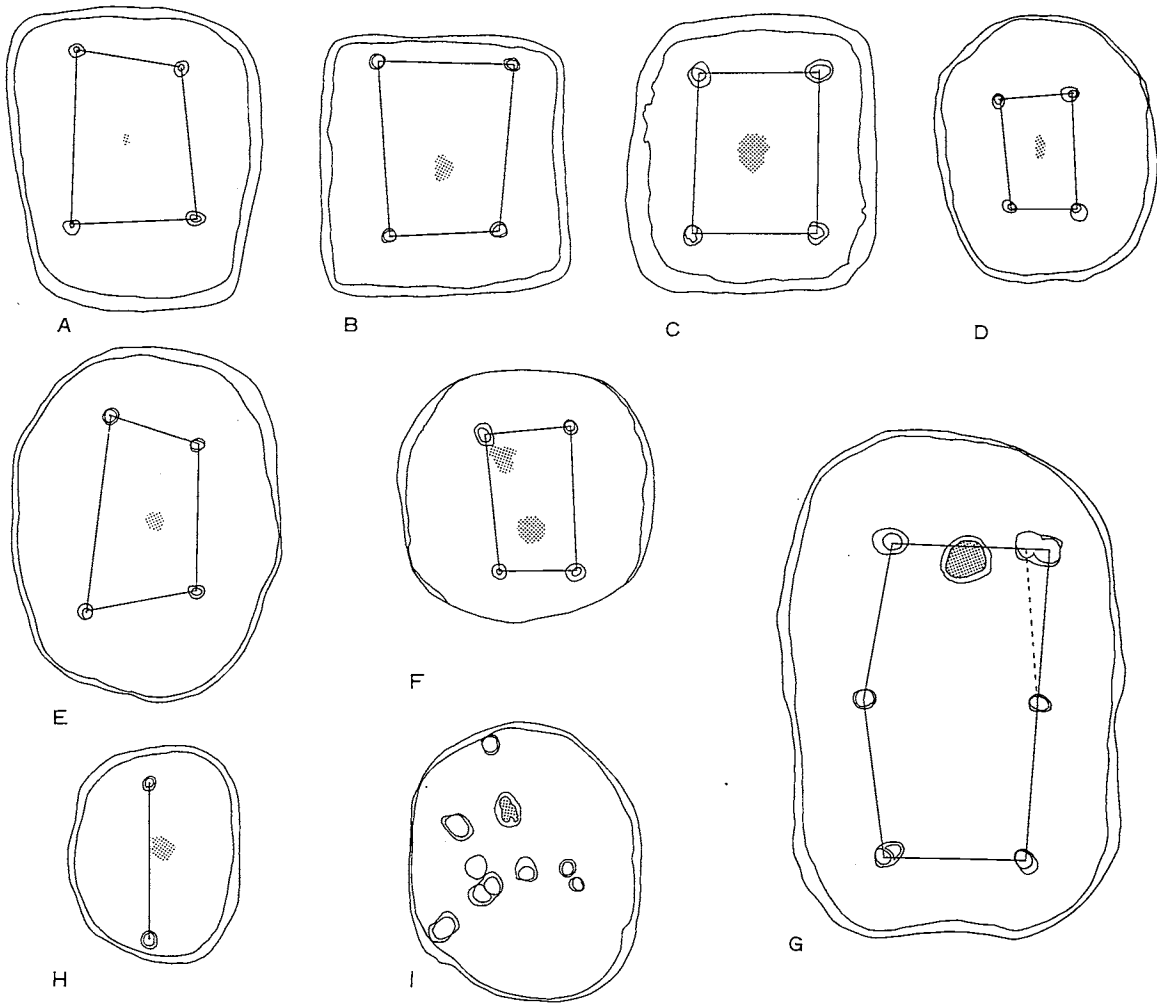
本遺跡から検出された住居址は、縄文時代前期64棟、同中期3棟、平安時代10棟計77棟である。そのうち大多数を占める縄文時代前期のみをとりあげて分類を試みた。その内訳は、I期1棟、II-a期13棟、II-b期13棟、II-c期4棟、III期19棟、IV-a期8棟、IV-b期4棟、V期2棟であり、II期とIII期の間に断絶期はあるが、長期にわたる居住のあとを知ることができる。これらの住居址を分類することによって、住居の変遷・構造上の変化を把握しようと考えた。分類は、従来行なわれてきた平面形のみによるのではなく、上屋構造を支えた主柱の位置、数や並び方等と炉の位置を問題とした。これは上屋構造の変化を最もよく伝えているのが主柱穴であり、炉の位置と考えたからである。また、上屋構造と重要な関係を持つ支柱穴についても、その位置による分類を後に付け加え、より確実なデータの集積を意図した。

##### ① 平面形と主柱穴からの分類

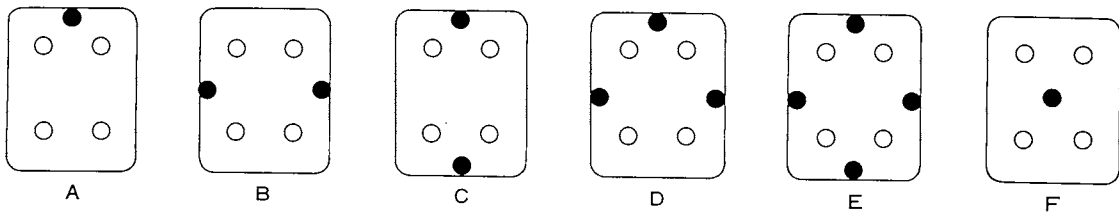
- A 平面形・主柱穴の並びがともに台形状となるもの。平行するものと逆行するものがある。
- B 平面形がほぼ長方形で、主柱穴の並びが台形状となるもの。
- C 平面形・主柱穴の並びが、共にほぼ長方形であるもの。あるいは平面形が不整形になるが、主柱穴の並びが長方形になるもの。
- D 平面形が隅丸長方形か楕円形で、主柱穴はほぼ長方形に並ぶが、主柱穴の位置が住居址中央に寄り、主柱穴を結ぶ線と、壁との間に広い空間ができるもの。



住居址類型



支柱穴類型(概念図)



挿図 17 住居址類型図

- E 平面形が楕円形で、支柱穴の並びが台形状となるもの。
- F 平面形が隅丸方形で、支柱穴の並びがほぼ方形となるもの。
- G 平面形が隅丸長方形か長楕円形で支柱穴が6本となるもの。
- H 平面形に関係なく、支柱穴が2本となるもの。
- I 平面形が隅丸方形か楕円形で、支柱穴が認められないもの、あるいは一定の並びを示さないもの。

② 支柱穴のあり方からの分類。

- a 住居址の一辺のほぼ中央部分にあるもの。
- b 住居址両長辺のほぼ中央部分にあるもの。
- c 住居址両短辺のほぼ中央部分にあるもの。
- d 住居址両長辺のほぼ中央部分と一方の短辺のほぼ中央部分にあるもの。

e 住居址の四辺のほぼ中央部分にあるもの。

f 住居址のほぼ中央部分にあるもの。

なお、「主軸」という用語は住居址の入口部が確定できる場合にのみ用いるべきであると考え「長軸」を用いた。長軸は炉を通ることを原則とし、平面形・支柱穴の並びを考えて、左右が対称になるようにし、住居址の壁下端まで引いた線とした。また、支柱穴が方形に並ぶ場合は、それを優先し、住居址短辺側の支柱穴間の中点を通ることとした。長軸方向は北からのずれを、規模は長軸×短軸であらわした。短軸は長軸の垂直二等分線をとった。いずれも住居址壁下端までを計測した。これは壁上端部が崩壊している可能性もあるからである。

#### 重複・建て替え・拡張

阿久遺跡においては、22棟の住居址で建て替え・拡張が確認されている。建て替え・拡張は上屋構造と密接な関係を持っており、上屋構造が究明されなければ、建て替え・拡張を区別することは難しい。したがって本報告では下部構造として残った住居址の壁・床・柱穴・周溝・炉・長軸方向と遺物の出土状態等の、現象面での変化に注目し、重複をも含めて、下記のように考えた。

重複：旧住居が廃絶後、かなりの時間を経過したのちに、旧住居を破壊して新住居が構築された場合をいう。多くの場合、旧住居の埋没後に新住居が構築されたために、新・旧住居址埋土等から、考古学的に型式差が認められる遺物が出土し、セクションなどに現れる。

建て替え：系譜を同じくすると思われる集団あるいは個人が、旧住居の一部を利用して新住居を構築する場合をいう。多くの場合、壁・柱穴の一部を再利用することがあっても床の再利用はしない。また新・旧の住居址には構造の特徴に共通性が認められる。

拡張：系譜を同じくすると思われる集団あるいは個人が、旧住居の施設を積極的に利用して新住居を構築する場合をいう。求心構造と有軸対称構造とは、大形住居の獲得の方法に差がある〔都出1975〕とはすでに知られているが、阿久遺跡の場合、多くは、有軸対称構造であり、床と壁・柱穴・炉・周溝の一部を再利用している。

原則として本報告書では、重複の場合には住居址番号を、建て替えの場合は古い住居址から(旧)・(中)・(新)を、拡張は拡張前のプランより、a・b・cとしたが、住居址37・45・74の(旧)・(新)は重複関係であり、本来住居址番号を付けるべきであるが、整理の段階で一部変更したもので、従って、遺物の注記等で混乱を生ずる可能性があるために、あえて住居址番号はつけなかった。(佐藤 信之)

### 3) 方形柱列の類型

概報〔笹沢他1978〕で「方形配列土壙群」と報告した遺構は、調査当初、埋土中に多量のロームブロックを含む規格化された大形の土壙が方形に配列される点に特徴を認め、仮称したものである。その後、調査が進行する中でこれら土壙内に柱痕跡が確認される例が増え、方形配列土壙群は柱を建てるための掘り方群であることがほぼ確実となった。この遺構の特徴は柱を建てて方形の区画を作り出すという点にある。このような構造物は後世の例からすれば、掘立柱建物址とされるであろうが、現在までのところ堅穴住居以外の建物について、縄文時代前期にまで系譜的関連を求めうるような例は、十分明らかになってはいえない。この遺構が示す構造物が上屋構造をもつ建物であったかどうかの結論を出すためには、しばらく時間が必要であろう。今は、現象を忠実に表現して「方形柱列」と名称を変更するにとどめたい。

これら遺構は類似するものを含めて16基認められている。他にもピットの規則的と考えられる配列はいくつかあるが、完全に方形とはならないので一応除外しておく。この16基は、規模・形態の点で3種に大別される(「分類記号要覧」参照)。

- A 最も小形で、2×2間、3×1間の2種があるが、後者は1間の辺が長く、前者同様にほぼ方形になる。これは掘立柱建物址に最も類似する。柱痕跡は確認されていないが、掘り方が小さいために観察が難しかったことと、そのような注意が不十分であったことにもよると思われる。
- B 基本的には、大形の掘り方が一辺5個、計16個で方形を画する。うち平行する二辺は掘り方を直列させ、その間の二辺(各3個)は外側へやや張り出したり、他より小形であったりするものが多い。部分的に掘り方を欠いて計16個にならないもの、一辺4個で構成されるものなど、変化が大きい。各掘り方の形態は径・深さとも1m前後で共通性がある。明瞭な柱痕跡の認められたものがあり、柱の直径は20cm程度と推測されるものが多い。
- C 特に大形の掘り方4個で構成されるのを基本とし、中間に小形の掘り方をもって6個となるものもある。一応、方形柱列の一種としておけるが、柱痕跡の確認されたものがなく、検討が必要である。

この三類型のうちA型は遺物がほとんどないが、方形柱列XIIIが住居址65(II-b期)と切りあって貼り床されており、住居址より古い。B型は掘り方内からII期の土器を出すものがある。住居址との切りあいが3例あり、その新旧は、住居址54(II-a期)→方形柱列VIII→方形柱列VI、住居址57(II-a期)→方形柱列Vと、いずれも住居址より新しい。方形柱列IVも住居址36(II-a期)より新しい可能性がある。C型は掘り方内から比較的多くの遺物を出し、土器はほとんどがIV期であるが方形柱列XIはII・III期が多い。方形柱列XIIは集石128を壊して掘り込んでいる。

以上、直接に時期決定できるものは少ないが、およその時期は次の如くまとめることができよう。A型およびB型はII-a期およびII-b期、C型はIV期であり、II-c期およびIII期にも継続して構築されたとすれば、B型のいずれかにその可能性がある。XIはIII期の可能性が強い。B型の多様なありかたは年代幅が大きいことを示唆しているのかもしれない。(土屋 積)

#### 4) 集石の類型(挿図18)

われわれが「集石」と呼称した遺構は、学術的にはいくつかの呼ばれ方がある。現に、本遺跡の集石も、すでに「積石遺構」と呼称された例もある[大塚1979]。その是非はともかくとして、この種の遺構は、その用途がほぼ推察できるものについては、「集石炉」「積石墳墓」などと呼ばれている。その他「積石」[大場他1957]、「配石」、集石土壙等の名称があり、それぞれ、微妙な違いがあり、明確な基準がかならずしも定められているとは限らない。その最大の原因は、遺構の性格付けと密接に結びつくからであろう。従って、調査当初、その呼称についてはいきおい慎重にならざるを得なかった。なぜならば、阿久遺跡で検出された集石は多様であり、上述の呼称のいずれかにあてはまるものもみられ、さりとて、それらの呼称を一部に使用することは、集石の性格付けにも及ぶ場合もあり得ることを考慮したからにほかならない。その結果「石の集合した遺構」という意味で「集石」と呼称したのである。

集石は10数個から数百個のこぶし大から人頭大の石を、一定場所に集めた遺構をいう。検出数は調査範囲内で265基であり、規模・平面形・石積・掘り方の状態から、以下のごとくいくつかの類型化ができる。

##### ① 規模による分類

- A 短径が130cmをこえるもの    B 短径が100cmをこえ130cm以下のもの。  
C A・B・D以外の規模をもつもの。    D 長径が70cmをこえないもの。

##### ② 平面形による分類

- I 円または楕円形    II 方形または長方形    III 多角形    IV 不定形。

##### ③ 石積形態による分類

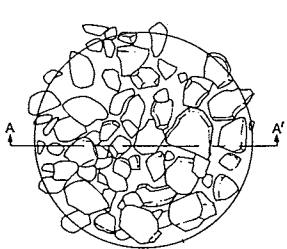

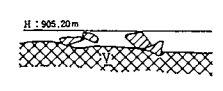
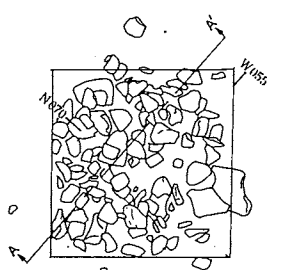
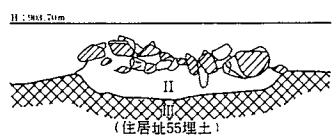
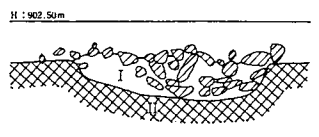
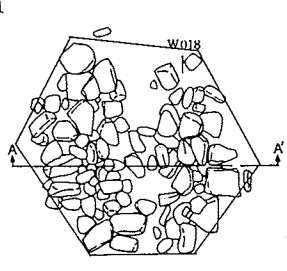

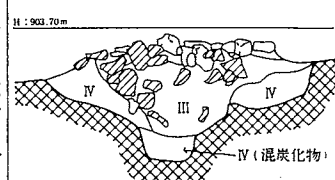
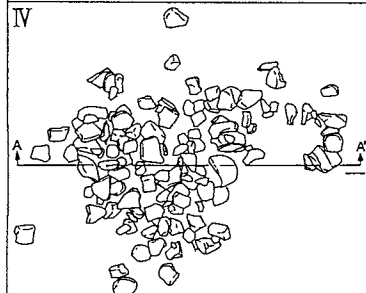

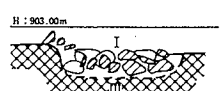
- a 1段積    b 2段積    c 3段以上の多段積    d 2段以上に積むが、積み方が粗なもの。

④ 掘り方の有無と断面形による分類

1 掘り方のないもの。 2 逆梯形状 3 播鉢状 4 掘り方はあるものの断面形態がはっきりしないもの。

さらに、集石はそれを構成する礫のあり方によって、細分もできようが、繁雑化するので避けた。従って、ここでは、上述の細分項目を組みあわせることによって、集石の類型化をした。

しかし、第3次調査では、保存のために集石の断ち割りはおこなっていないので、断面形と掘り方については不明であり、このような場合には、判断できる項目で類型化をしてある。また、平面形の識別は、集石の崩壊等もあり、かなり困難なものがある。特にC・Dの集石に顕著であり、この場合には便宜的に判断した面もある。長軸方向の決定もまた確固とした根拠がある訳ではない。これもまた、多分に機械的に、集石の中心を通る長軸を決めたにすぎない。そのため、円形または円形状の多角形を平面形とする集石の長軸方向の決定は、この方法ではできない。しかし、後述するように、集石は単位集石群を構成する場合に、この一見、機械的に定めた長軸方向が重要な意味を持つので、それとの関係の中で、円形プラン

平面形	石積状態	掘り方断面形
I 	a 	1 
II 	b 	2 
III 	c 	3 
IV 	d 	4 

挿図 18 集石類型図

の集石の、いわゆる「主軸」の決定はある程度可能である。集石の法量もまた、平面形同様に、崩壊部分があることを前提としている。

個々の集石は、さらに10数個集まって、単位集石群を作る。単位集石群は、別類型からなり、個々の集石の長軸方向を順次求めるとほぼ環状となる。従って、単位集石群そのものが重複している場合の群別の根拠とした。一部群別化のできない集石もあるが、原則的には上述の方法を用いて調査範囲内の単位集石群は1～21群を抽出しえた。

環状集石群は、かように、いくつかの集石からなる単位集石群の集合体と思われる。(笹沢 浩)

### 5) 土壌の種類(挿図19)

土壌の検出総数は、調査範囲内で784基に及ぶ。その大部分は立石・列石から環状集石群の中ほどにかけて、立石・列石を取り巻くように分布しており、環状集石群の外郭にはほとんどみられない。

まず、土壌は次の如く三種に大別した。

A 平板状あるいは角柱状の比較的大きな石を伴う。

B こぶし大以上の礫を1～10個程度もつ。

C A・Bにみられる石・礫を全くもたない。

このうち、A・B型はそれぞれ80基前後にすぎず、大多数はC型である。遺物を出土する土壌も少なく、完形に近い土器を出土した土壌は10基程度である。従って、帰属時期が明確に推定できる土壌は100基前後で、II～V期にわたる。

以上を踏まえつつ、下記に示した土壌を構成する諸要素と、上述の大別を記号で組みあわせて類型化した。土壌を構成する諸要素は1.平面形、2.断面形、3.石・礫の検出位置、4.石の検出状態であり、3はA・B型の、4はA型のみのものである。また、別に埋土の堆積状態についても6類別した。

#### ① 平面形(底面形も考慮)による分類

- I 円形(短径と長径の比が1:1.2以下のもの)。 II 楕円形(短径と長径の比が1:1.2以上のもの)。  
III 隅丸方形。 IV 薔玉形。 V I～IV以外。

#### ② 断面形による分類

- a 深さと長径の比が1:3以上の、浅く断面形が方形または逆梯形。  
b 深さと長径の比はaと同様で、断面形が弓状などのa以外。  
c 深さと長径の比は1:3～1:1で、断面形が方形または逆梯形。  
d 深さと長径の比はcと同様で、断面形が弓状など。  
e 深さと長径の比はcと同様で、二段底あるいは底部にピットをもつ。  
f 深さと長径の比が1:1以下で、断面形が方形または逆梯形。  
g 深さと長径の比が1:1以下で、逆三角形などf以外。

#### ③ 石・礫の検出位置による分類

- 1 土壌検出面あるいは埋土上層。 2 埋土中位。 3 底面近くあるいは接する。

#### ④ 石の検出状態による分類

- $\alpha$  ほぼ垂直。 $\beta$  斜めの状態。 $\gamma$  水平に横たわる状態。

#### ⑤ 埋土の堆積状態による分類

- a 埋土が同一層。 b ほぼ水平な堆積。 c 中央部が「U」字形に凹むような堆積。  
d 凹みが片寄った堆積。 e ブロック状に土層が入り込むもの。 f a～e以外。

土壌の計測は、原則として以下の基準により測定をおこなった。長径は検出面における長軸線の長さ、

	平面形	断面形	石の位置
A型土壌	I	a	1
	II	b	2
	III	c	3
B型土壌	III	d	石の状態
	IV	e	$\alpha$
	V	f	$\beta$
C型土壌		g	$\gamma$

埋土の堆積状態				
a	b	c	d	e

挿図 19 土壌類型図

短径は長径の垂直2等分線の長さ、深さは最深部から検出面までの垂線の長さで、いずれもcm単位まで測定し、切りあいなどで推定数値になる場合は( )をつけた。土壌の規模は、長径120cm以上を大形、長径60~119cmを中形、長径59cm以下を小形と表現することとした。土壌の帰属時期の認定は、土壌内から一括土器が出土するか、同一個体の土器片が数多く出土した場合、あるいは底面およびそれに近い位置から土器片が出土した場合と、遺構との切りあいでその帰属時期が明らかになったものに限定した。

(百瀬 新治)

## 2 遺物の分類

### 1) 土器の分類

#### (1) 分類の基本的態度

阿久遺跡で出土した土器は縄文時代前期を中心とし、中期・後期と平安時代のものがある。他に、縄文時代早期と弥生時代中期の土器細片が数点ある。これらは、一部住居址等から出土した完形土器を除けば大半は小破片であり、その総数は整理箱(40×60×15cm)1300個に達する。従って、これら土器群のすべてに亘って資料化することは限られた時間と費用の中では不可能に近い。もとより、可能な限り復元化を試みたものの、特に環状集石群出土の土器については、それとても不徹底に終わってしまった。このため、膨大な資料を整理・理解する上で、従来の先学諸氏の業績を踏まえつつ、本遺跡での分類を試みた。もとより、問題点が多々あることは承知の上であり、今後の課題としたい。

分類は主体となる阿久II~V期とX期についておこなったが、後者(平安時代)については諏訪市十二ノ后遺跡の分類[樋口・宮沢他1976]によったので、ここでは前者の縄文時代前期についてのみふれる。

分類の基本は地域性を示すと考えられる土器群を群別でとらえ、それを横糸とし、他方、型式的变化をとらえ、それを縦糸とし、これらを組みあわせることとした。

「群」の概念は、1つの地域で編年的に限定された土器群には、主体となる土器群と、明らかに他地域から運ばれたか、あるいは影響を受けて成立した土器群からなる場合がある。これらは型式として把握できるものであり、前者は1つの地域の主体となる型式であり、後者は客体としての型式を示す。いくつかの型式は、基本的な共通要素で統一されて、より広い地域に分布する。多くの場合には、このいくつかの型式の統合体を「様式」の概念でとらえられるが、一型式が一様式となる場合もありうる[田中1978]。

様式一型式という概念は、観念的にはその把握がある程度容易であろうが、具体的には土器のもつ属性の理解が難解で、非常に困難な場合が多い。従って、われわれは明らかに主体・客体に明確に分離できる土器群を「群」という概念で把握することを基本とし、さらに、主体・客体が今日のところ、未分離とならざるを得ないものもまた、一括して「群」としてとらえた。この意味では「群」という概念は、従来からいわれてきた「様式」「型式」という概念に明確にはあてはまらない面をもつ。

阿久遺跡出土の前期の土器は、後述されるように、ほぼ一貫して「群」の把握が可能である。それは、各期別にわたる。

I群 諏訪地方またはその周辺を含めた地域の主体となる土器群

II群 関東地方を中心に分布する土器群

III群 関西・東海地方を中心に分布する土器群

これら以外に、北陸・東北地方などと深い関係を持つ土器群も予想されるが、その分離が困難で本書では群別は試みなかった。また、諏訪地方の前期土器の特徴として阿久III期以降は関東地方の土器との融和が著しく、従って、阿久III期II群土器は、型式的にはI群土器に含まれる内容をもっているのであって、先述したように「群」という概念に不明確さを残す。同様に阿久IV期以降にはII群土器の群別は試みてい



ない。それは、IV期以降にII群土器が欠如していることを示すものではなく、I群とII群の識別が困難なほどに、関東地方との融和が進んだ事を示しているのである〔永峯 1965〕。

型式的変化の把握は器種の変化・消長を知ることによってなされる。器種は人間の用途に応じて作られ、材料・製作技術と社会的規制等に制約される〔田辺 1966〕。器種の厳格な把握は逆に当時の社会規範なり土器製作の技術なりを知る手がかりとなろう。一方、器種は具体的には器形と文様によって具現する。従って、文様の追求は同時に土器の型式変化を追求する有力な手がかりとなる。

阿久遺跡では前述したように大半が土器片である。また、他遺跡での前期の完形土器は非常に少ない。われわれは可能な限り、器形の復元化を、従来の研究業績を参考としながら試みたが、器種の判断にはおのずと限界がある。そこでわれわれは器種分類を試みる一方、単位文様の分類を別途に試みた。これは本来的には文様分類は器種分類の中に含まれるものであるが、器種判断の限界の中にあっては、これら分離も現段階では、止むを得ないと判断し、同時に小片でも資料化したいと考えたからである。

群別はアラビア文字、器種分類はアルファベット大文字で、文様分類は同小文字で表現し、必要に応じて組みあわせを行なった。ただし、阿久II期とIII期以降およびIII群土器はそれらのもつ土器内容に大きな相違が認められることにより、それらの分類基準は異なる。しかし、阿久III期からV期に至る土器の分類基準は基本的には共通する。また、土器の時間的变化は型式的検討を経て得られた阿久遺跡独自の編年観を加えることで表現した。例えば、阿久III期II aはIII期のII群 aの土器を意味する。 (笹沢 浩)

## (2) 阿久II期(挿図20)

II期の土器はI・II・III群がある。中でもI群はII期の主体となる。胎土に繊維を含まず、やや薄手から中厚手の尖底となる所謂「中越式」と呼ばれる土器を含め、繊維の有無、文様等によりA~Eの5種に分類できる。II・III群の出土量はわずかであり、客体的な存在である。なお、II期の土器はa・b・cの3小期に細分されるがここでは触れない。また、III群土器は別項で述べるので、ここでは扱わない。

### I群土器


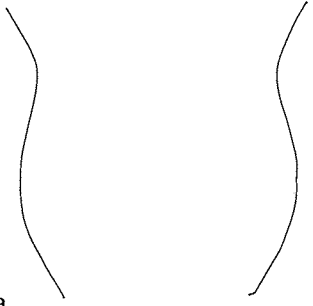
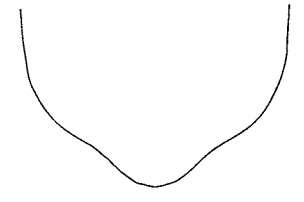
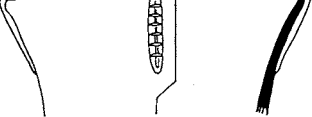
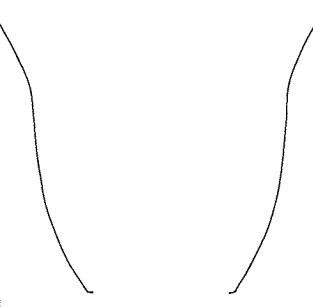
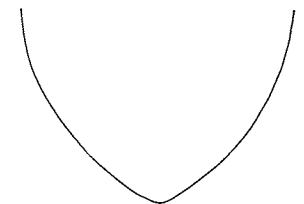
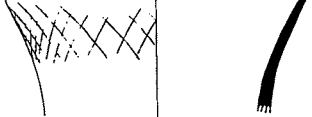
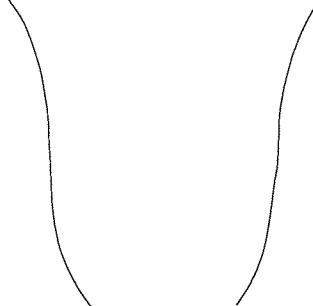
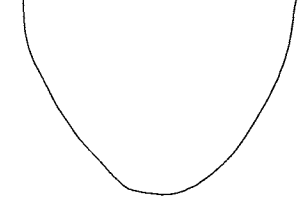

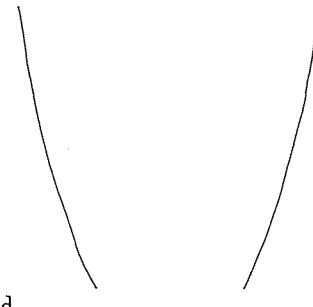
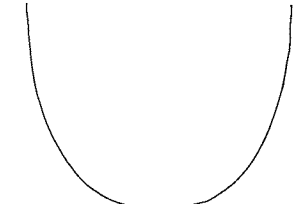
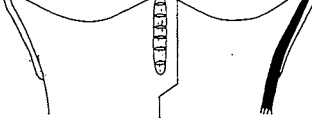


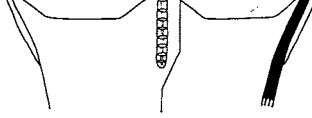
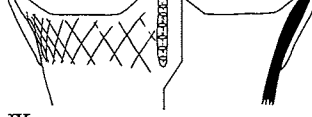
- A 胎土に繊維を含まず、やや薄手から中厚手の尖底となる土器で、口縁部から垂下する粘土紐貼付文や細線格子文、まれには列点文が施され、II期の主体となる。文様帯は口縁部にあるだけで他は無文であり、文様のみによる分類は難しい。土器を口縁部から頸部、頸部から胴部、胴下半から底部の3部位に分け、それぞれの形態差で分類した。しかし、口縁部から頸部については、形態差に文様帯の相違も含ませてある。従ってAはこれらの項目を組みあわせた3桁で表わすことになる。
- B 胎土に多量の繊維を含み、作りが粗く器厚の厚い土器で、文様をもたず尖底となる一群である。
- C 胎土に多量の繊維を含む作りの粗い土器で、粗い縄文が施されている。器形は不明である。
- D 胎土に繊維を含まず、口縁部に施される爪形文、櫛による列点文をもつ類と縄文のみの二者があるが、前者は少ない。神ノ木式土器に類似した一群である。
- E 胎土に繊維を含まず、縄文のみの尖底となる土器で、器形・胎土はAに、文様はDに類似する。

### II群土器

胎土に繊維を含み、口縁部に竹管による平行沈線・コンパス文・爪形文と、貼付文等による文様帯を持ち、胴部にはループ文、組紐、異条斜縄文などで種々の縄文を施した、関東地方で主体となる関山式土器の一群である。 (佐藤 信之)

## (3) 阿久III期(挿図21)

III期の土器はII期のそれに比較して、土器組成・器形・文様構成等で大きな相違があり、系譜的ヒアタ

口縁部形態・文様	頸部形態	底部形態
 <p>I</p>	 <p>a</p>	 <p>1</p>
 <p>II</p>	 <p>b</p>	 <p>2</p>
 <p>III</p>	 <p>c</p>	 <p>3</p>
 <p>IV</p>	 <p>d</p>	 <p>4</p>
 <p>V</p>		
 <p>VI</p>		
 <p>VII</p>		
 <p>VIII</p>		
 <p>IX</p>		

挿図 20 土器分類図(II期)

スを認めざるを得ない。反面、IV・V期の土器とは、系譜その他で共通認識が可能である。もちろん、土器の様式的性格は各時期ごとの特徴を強く示し、一律に時期を超越した共通認識は細部にわたっては不可能である。従って、III期以降V期までの土器群の分類はII期のそれとは分類基準を一部変え、III期からV期にわたる統一した分類基準に立脚し、共通認識できる部分は統一項目で示し、各時期特有の分類項目は、その都度、それを理解できるように表示した。

分類基準は「群の概念」を基本とし、以下、器形と文様構成による分類、単位文様による分類をおこなう、これらに時期表示の項目も加えて4桁で表現することとした。この場合に、器形と文様構成の分類は、同時に器種分類も含めているので、4桁表示に器種名を加えて表現されることになる。実際にはIII期のI・II群土器は浅鉢が知られていないので、すべて深鉢ということになり、この点では繁雑さを加えることになろうが、土器のもつ性格をより具体的に表示する一つの手段となろう。具体的には、III期I群深鉢Aaは、単位文様aをもち、Aの器形と文様構成からなるIII期I群の深鉢ということを示している。

一方、われわれが資料として入手する土器の大半は破片である。しかし、土器片はいうまでもなく、本来は「器」としてのひとつの形をなしていたものであって、常にこの点に留意し分類を試みた。つまり、分類項目は土器片の一部でも網羅できるようにした。

III期の土器はI・II・III群のすべてがある。I群土器は諏訪地方に分布の中心をもつと思われる、胎土に繊維を含まず、縄文のみが施される底部が小さく不安定な深鉢である。器内面に指頭圧痕が著しく、胎土内に雲母等を含む。II群は関東地方に分布の中心をもつ黒浜式に比定される繊維土器である。III群土器は関西・東海地方に分布の中心をおく一群をあてた。

従来、長野県の黒浜式併行段階の土器は有尾式土器を比定させてきたが、かならずしも正確とはいえない。III期の土器はI群が主体で、II群が従であり、これに若干のIII群が伴ない、いわゆる有尾式土器の様相をとどめる土器は皆無に等しい。

器形と文様構成による分類はA～K、単位文様による分類はa～iがある。なお、A～Gは文様帯をもたず、H～Jはもつ類であり、I群は主としてE～G、II群はA～D・H～Jに分類される。なお、ここでいう文様帯とは、本来的に器面調整をかねた文様以外に、一定の規則性のもとに器面を装飾する単位文様、またはそれらで構成される文様をいう。具体的には器面の一部または全面に施文される縄文、撚糸文、条痕文等は文様帯から原則的にははずされる。

#### ① 器形と文様構成による分類

##### 深 鉢

- A 底部から口縁部へ、緩い角度で直線的に開く平口縁。
- B Aの口縁が波状となる。
- C 頸部がくびれ、胴部が丸みをもってふくらみ、底部に直線的にほぼ収約する。平口縁である。
- D Cの口縁が波状となる。
- E 不安定な、径の小さな底部をもち、口縁部にほぼ直口する。平口縁である。
- F 全体的にはEに似るが、ややくびれた頸部をもち、波状口縁となる。
- G E・Fと同様に底部が小さく、胴部は丸味を帯び、口縁部は小さく立ち上る。平口縁である。
- H Aの口縁部に文様帯をもつ。
- I 全体の器形はCに似るが、口縁部は内湾ぎみに立ち上り、そこに文様帯をもつ。
- J 全体の器形はDに似るが、口縁部は内湾ぎみに立ち上り、そこに文様帯をもつ。
- K その他

#### ② 単位文様による分類

器形と文様構成		単位文様	
<p>深鉢 A</p>	<p>B</p>	<p>a</p>	
<p>C</p>	<p>D</p>	<p>b</p>	
<p>E</p>	<p>F</p>	<p>c</p>	
<p>G</p>	<p>H</p>	<p>d</p>	
<p>I</p>	<p>J</p>	<p>e</p>	
<p></p>	<p></p>	<p>f</p>	
<p></p>	<p></p>	<p>g</p>	
<p></p>	<p></p>	<p>h</p>	

挿図 21 土器分類図(Ⅲ期)

- a 縄文のみを施すもの。
- b 横位に平行沈線、有節平行沈線等をめぐらすもの。
- c 縦位に4単位を原則とする円形竹管文、垂下隆帯等を施すもの。
- d 横位の無文帯をもつもの。
- e 平行沈線等を格子目状に施すもの。
- f 平行沈線、有節平行沈線等で4単位を原則とする菱形文を描くもの。
- g 縦位にほぼ等間隔の平行沈線、円形竹管文等を施し、その間を平行沈線等で結ぶもの。
- h 横位の平行沈線、有節平行沈線等に、4単位を原則とする縦位の平行沈線、円形竹管文、垂下隆帯等を施すもの。
- i その他。 (岩崎 孝治)

#### (4) 阿久IV期(挿図22)

IV期はIII期の器形や単位文様などの要素を受け継ぐ土器もかなりあるが、原則として胎土に繊維を含む土器が存在しないこと、土器組成の上で浅鉢が確実に伴うことなどで、III期と区分することができる。また、全面に縄文を施した土器を中心に、III期の影響を色濃く残す土器、胎土に雲母を含み口唇部へ特徴のある加飾をする土器などとともに、関東地方の諸磯a式と類似した器形、単位文様をもつ土器が共存するIV-a期(古段階)と、前述した縄文をもつ土器や特徴のある口唇部文様をもつ土器などが姿を消し、より諸磯a式に類似した土器が多くなるIV-b期(新段階)に分かれる。

IV・V期の「群の概念」による分類は本節の最初で述べたように、I群とII群土器との識別が困難であるので、一括してI群土器として扱った。また、器種は、主として煮沸用に使われる土器を深鉢、それ以外の目的に使われる土器を浅鉢として2分した。器形、単位文様ともにさらに細分も可能であるが、あまり煩雑にならないことと全体に適用できることに主眼を置いた。

##### ① 器形と文様構成による分類

###### 深 鉢

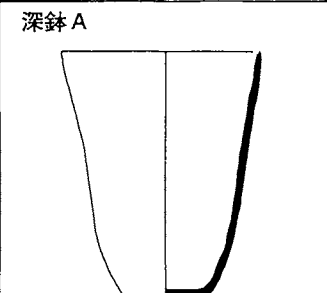
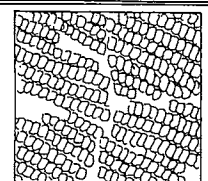
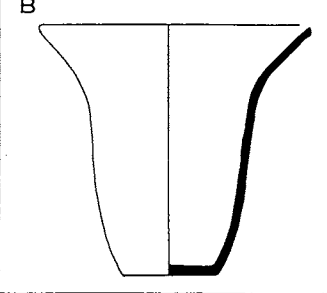
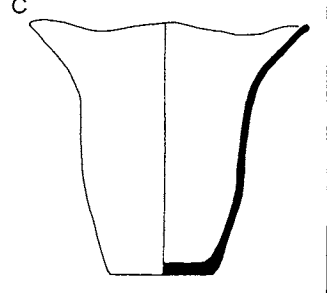
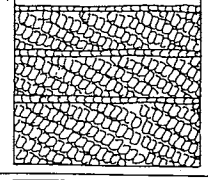
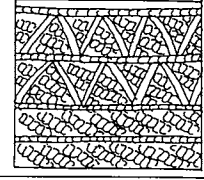
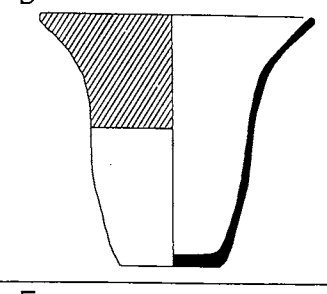
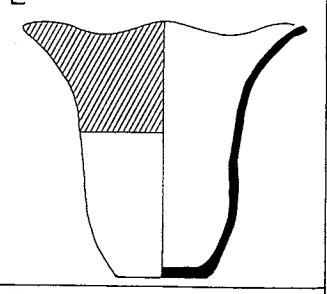
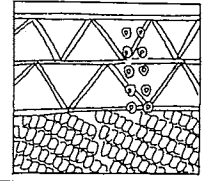
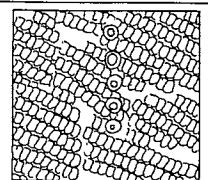
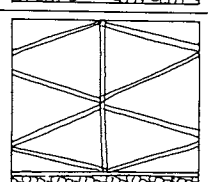
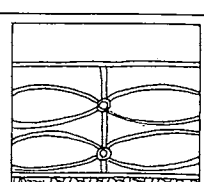
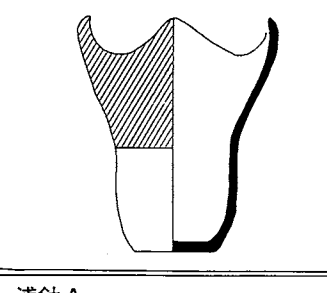
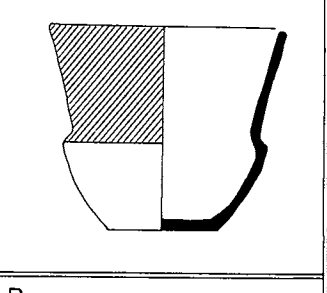
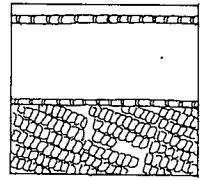
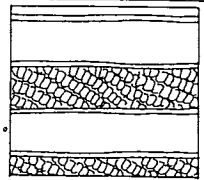
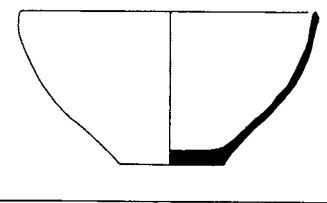
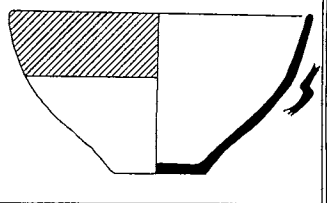
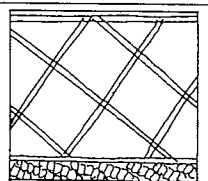
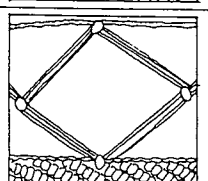
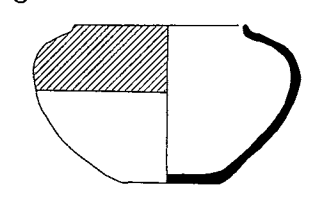
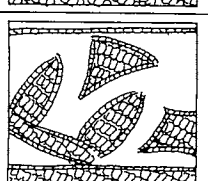
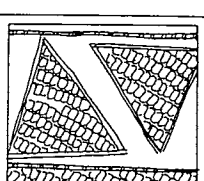
- A III期Aと同じ。
- B III期Cに類似するが、口縁部の外反度が増す。
- C III期Dに類似するが、口縁部の外反度が増す。
- D Bと同様の器形の深鉢。文様帯をもつ。
- E Cと同様の器形の深鉢。文様帯をもつ。
- F 口縁部が内湾し、胴部下半でくびれたのち、ややふくらみながら底部に至る器形で、大きな波状口縁をとる深鉢であり、文様帯をもつ。
- G 口縁部が直口し、胴部下半ですどい屈曲部をもつ平口縁の深鉢で、器高が低く文様帯をもつ。

###### 浅 鉢

- A 底部から内湾ぎみに口縁部に立ち上る平口縁の浅鉢で、文様帯はない。
- B 器形は浅鉢Aとほぼ同形であるが、文様帯をもつ。胴部に屈曲部をつくるものもある。
- C 胴部が丸く内湾し、口縁部ですどくくびれ、小さく立ち上る浅鉢で、胴部上半に最大径を有する有孔の浅鉢。文様帯をもつ。
- D その他の器形をもつ土器。

##### ② 単位文様による分類

- a~h III期と同じ。

器形と文様構成		単位文様	
<p>深鉢 A</p> 		<p>a</p> 	
<p>B</p> 	<p>C</p> 	<p>b</p> 	
<p>D</p> 	<p>E</p> 	<p>c</p> 	
		<p>d</p> 	
		<p>e</p> 	
<p>F</p> 	<p>G</p> 	<p>f</p> 	
<p>浅鉢 A</p> 	<p>B</p> 	<p>g</p> 	
		<p>h</p> 	
<p>C</p> 		<p>i</p> 	
		<p>j (無文)</p>	

挿図 22 土器分類図(IV期)

- i 平行沈線、有節平行沈線などの弧線による複雑な区画文を施すもの。
- j 無文のもの。
- k その他の単位文様を施すもの。

(5) 阿久V期(挿図23)

V期は大部分が環状集石群内から出土し、住居址出土の資料は2棟分と少ない。しかし、住居址7の埋土より出土した一連の土器群は、その出土状態などから良好なV期の一括資料であり、また、IV期以上に

器形と文様構成		単位文様	
深鉢 A 	B 	a 	
C 	D 	b 	
E 	F 	c 	
浅鉢 A 	B 	d 	
C 	D 	e 	
		f (無文)	

挿図 23 土器分類図(V期)



V期では、より関東の諸磯b式土器に酷似した内容をもつようになる。したがって、住居址7の土器群を基本に、長野県内および関東地方の研究成果を踏まえながら、V期の土器について観察・分類を試みた。その結果、住居址72を中心に朝顔形に外反する器形の深鉢と幅広の連続爪形文に代表されるV-a期(古段階)と、住居址7のいわゆるキャリパー状の器形をもつ深鉢と沈線文、浮線文を多用するV-b期(新段階)のあることが判明した。

## ① 器形と文様構成による分類

## 深鉢

- A III期Aと同じ。
- B III期Bと同じ。
- C 口縁部が内湾し、やや張り出した底部をもつ波状口縁の深鉢で、文様帯をもたない。
- D IV期Dと同じ。
- E Cと同様の器形の深鉢。文様帯をもつ。
- F 口縁部が内湾ぎみにするどく屈曲する波状口縁の深鉢で、文様帯をもつ。

## 浅鉢

- A 胴部を内湾させながら、直立した口縁部に至る台付の浅鉢。文様帯はない。
- B 口縁部から底部にかけて強い屈曲部や突出部を2段以上持ち、胴部上半に最大径をもつ平口縁の有孔浅鉢。文様帯をもつ。
- C Bと同様の器形の浅鉢。文様帯をもたない。
- D 胴部から口縁部にかけて外反する平口縁の浅鉢で、文様帯はもたない。
- E その他の器形をもつ土器。

## ② 単位文様による分類

- a II期-aと同じ。
- b III期-bと同じ。浮線文を施すものが加わる。
- c bに縦位の4単位を原則とする隆帯、平行沈線を施し、区画内を有節平行沈線などの弧線で充填するもの。
- d 平行沈線、有節平行沈線、篋描沈線などによる渦巻文や区画文を施すもの。
- e 平行沈線、浮線などにより、4単位を原則とする突起、円文、渦巻文などを施すもの。
- f IV期jと同じ。
- g その他の単位文様を施すもの。 (百瀬 新治)

## (6) III群土器

III群とは関西・東海地方に分布の中心がある土器群をさし、搬入品と模倣されたものがある。両者は胎土その他から識別のできる例もあるが多くは困難である。また、関西と東海地方の土器も一部に相違が認められる〔増子・紅村1975・1977、森川他1979〕ので、一括することは適当でないが、両地域の対比が不十分な現段階では分離せず、必要に応じて述べることにした。また、東海地方の前期土器の型式認識も資料的制約もあって、研究者間に混乱がみられる。このため、III群土器の分類は、従来用いられてきた型式別分類ではなく、単位文様別に、A~Jに分類し、さらに条痕の認められるものを1、ないものを2として、単位文様別分類項目と組み合わせて用いた。条痕は時期判断の基準となるからである〔森川他1979〕。つまり、III群土器の分類は、従来の型式内容を標示できるように可能な限り配慮した。従って、単位文様別分類項目は、I・II群土器と異なり、アルファベット大文字を用いた。

III群土器の破片総数は約2,000点あるが、その大部分が破片で器形のわかるものは少ないので器形別分類はおこなわなかった。また、彩色土器は別途に扱ったが、その場合に、必要に応じて本分類を適用した。

#### ① 単位文様による分類

- A 斜走沈線文土器。篋または半截竹管を用いて深鉢の口縁部に施文する。頸部が段状になり、刺突文(B)をめぐらすものもある。清水ノ上I式[杉崎・山下1976]併行であろう。
- B 刺突文土器。棒・竹管・櫛・指頭による刺突を横位に施文する土器で、刺突文が単独の場合と、A・D・E・Fの頸部文様帯となる場合とがある。竹管刺突文は爪形文に類似するものと、向いあわせに刺突した「ハ」の字状となるものもある。列点文も含む。
- C 「3字文」[森川他1979]「向い3字文」の一群で、清水ノ上II式あるいは羽島下層式[間壁他1975]に併行する。竹管で描く。
- D 大形爪形文の一群。竹管あるいは貝殻腹縁で描く。
- E 連続爪形文(棕櫚状文)の一群。北白川下層I・II a式に該当する。
- F 平行沈線文の一群。竹管で描く。
- G 爪形文の一群でCとD[佐原1956]がある。北白川下層I b式に該当する。
- H 凸帯文の一群で北白川下層II c式に該当する。
- I 縄文をもつ一群で、単独の場合とD~Hの胴部文様帯となる場合がある。
- J 条痕文をもつ一群で、単独の場合とA~E・Iの地文・胴部文様・内面文様に用いられる場合がある。
- K その他 (笹沢 浩)

## 2) 石器の分類

原石、剝片等をも含めた、石器類の出土総数は59,000点程にもおよぶ。この大半は、出土地点と出土層位が明確であり、時間的な幅もかなり限定された範囲におさまるので、できる限りその資料化に努めた。この場合に、石器のもつ機能的側面から器種分類すべきであるが、限られた条件の中では十分検討して対処する余裕がなく、基本的には十二ノ后遺跡等で試みた分類[樋口・宮沢他1976]に従い、一部本遺跡独自の方法もとった。すなわち、原石・石核・剝片・屑片と、その形態より同一器種に分類された石器類とに大別し、後者は次の名称を使用した。石鏃、尖頭状石器、挟入刺突具、石匙、スクレイパー、石錐、ピエス・エスキーユ、複数挟入石器、有挟頭磨石器、使用痕のある石核・剝片・原石、石核状石器、打製石斧、横刃型石器、磨製石斧、凹石、丸石、石皿、固定式石皿、砥石、先端研磨石器、敲打器、円礫状石器、滑石製品、軽石製品等である。

なお、これらの石器類の型式分類・計測基準・図化方法等についても、原則的には十二ノ后遺跡で試みられた方法を踏襲している。

以下、各石器の器種分類ならびに器種の型式分類にあたっては、本遺跡で独自に試みた器種を中心に記述し、すでに触れられたものについては、その概要を述べるにとどめた。

### (1) 石鏃(挿図24・25)

原則的には判ノ木山西遺跡での分類に基づいている。つまり茎部の有無、基部の挟りの深さ、逆刺の形状、側刃の形状、先端の鋭さによる分類である。

大分類は、茎部の有無による。このうち無茎のものを凹基、平基、凸基(円基・尖基)とし、さらに挟りの深さ(全体の1/3以上、1/4以上、1/4未満)と逆刺の形状(鋭い、鈍い、円い)の組み合わせによるA~Iの9細分、

側辺の形状からの五角形(I)、内湾(II)、三角形(III)、最大幅下端(IV)、最大幅下方(V)の5区分、また、先端部の形状をもとに、鋭い(a)、ふつう(b)、鈍い(c)、円い(d)、平ら(e)と5分類し、これらを組み合わせた。
























一方、破損状況はその部位から、先端(A)、片脚(B)、両脚(C)、先端と片脚(D)、片側辺(E)、基部(F)、先端と基部(G)、茎部(H)に類別した。なお、「調整剥離の際、末端までのびた1つの剥離によって、その加撃点の反対端の欠失している例」(図158-268、図159-305など)は、破損(製作時)として扱っている。尖頭状石器、抉入刺突具の扱いは石鏃と同様である。

(2) 石匙(挿図26)









十二ノ后遺跡での分類に依拠している。つまみと刃部の関係から縦型(A)、横型(B)、斜型(C)とし、つまみ部の形状を、抉りを入れただけの大型のつまみ(I)、中型(II)、小型(III)、極小型(IV)に区別し、さらに刃部の形状を外湾(a)、直(b)、内湾(c)に類別して、これらを組み合わせて型式分類とした。ただし、つまみを欠いた石匙の中には、スクレイパーに含めた可能性もある。なお、刃部が1個体に2つある場合には、A I (a+b)のように表現した。

(3) スクレイパー(挿図27)



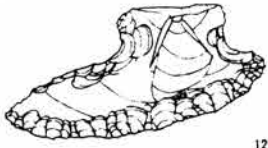
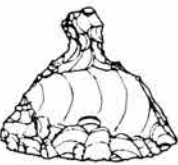
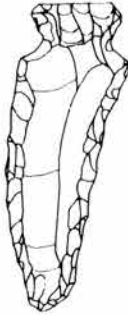
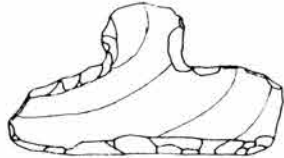
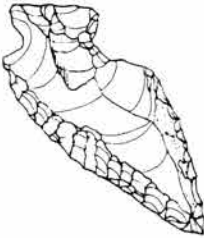
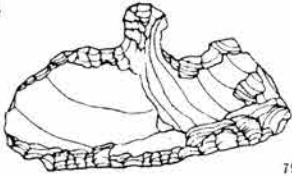


石匙同様十二ノ后遺跡分類を用いた。搔器、削器類が大部分であるが、不定形石器等の名称で呼ばれた種類も含む一群である。型式分類は、刃部の形状から舌状または拇指状(A)、外湾(B)、直(C)、内湾(D)と区分し、さらに二次加工の種類によって、片面加工(I)、両面加工(II)とに二分し、素材からは剥片(a)、石核(b)、原石(c)と分けて、これらを組みあ

茎	基部	側辺	先端	
有茎  1248	A  216	I  1256	a  154	
	B  1254		II  401	b  575
	C  400	III  1261		c  1250
	D  162			
	E  1253	IV  398	d  901	
	F  1252			
	無茎  147	G  158	V  761	e  1267
		H  156		
I  151		尖基		
平基  1275				
円基  1280				

挿図24 石鏃の型式分類図

破損状況	A	B	C	D	E	F	G	H
破損部所	 152	 150	 149	 897	 565	 592	 889	 1249

挿図 25 石鏃の破損状況分類図

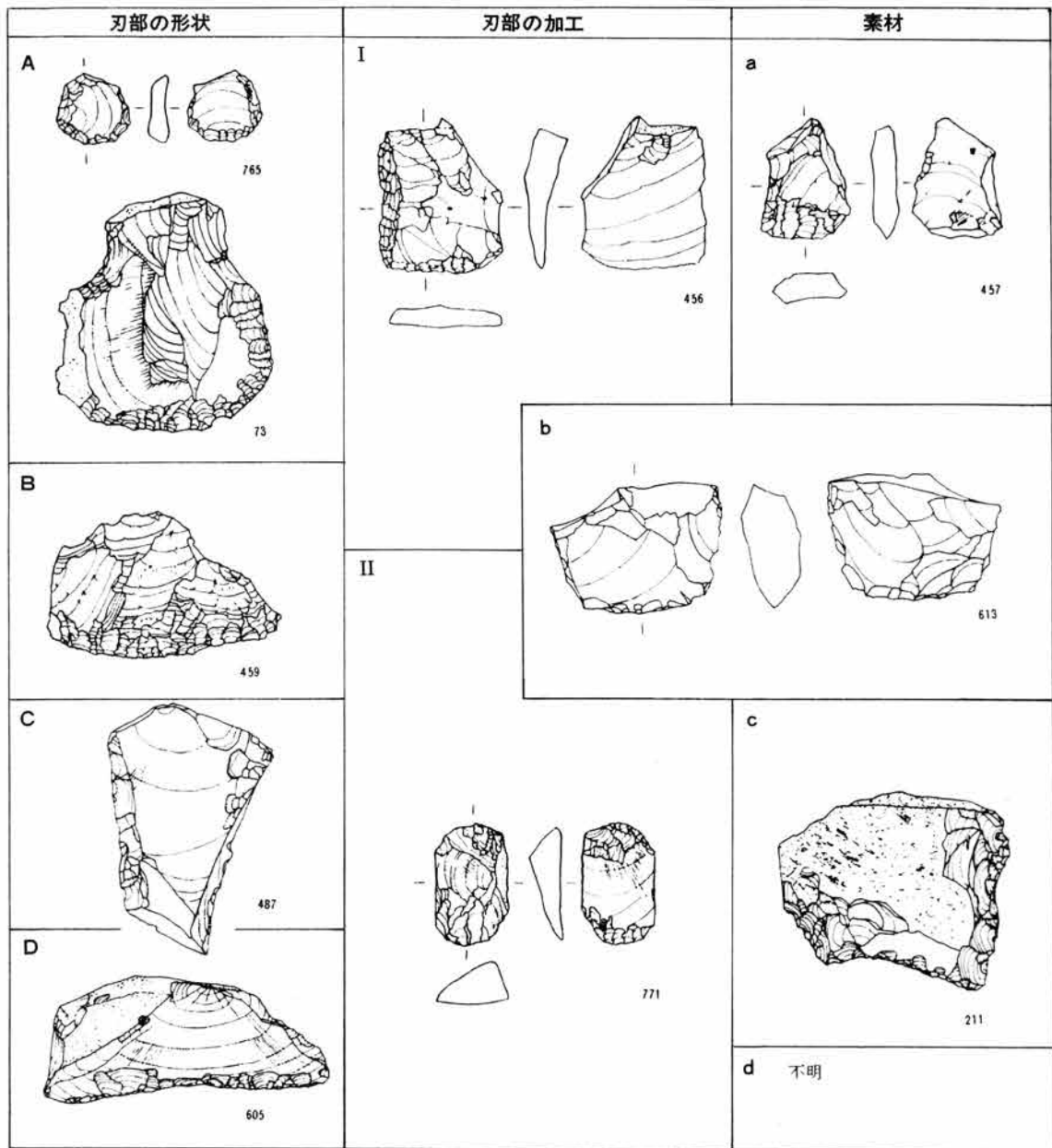
つまみと刃部の関係	つまみ部の形状	刃部の形状
A  791	I  176	a  1297
B  1296	II  525	b  528
C  795	III  792	c  173
	IV  1291	

挿図 26 石匙の型式分類図

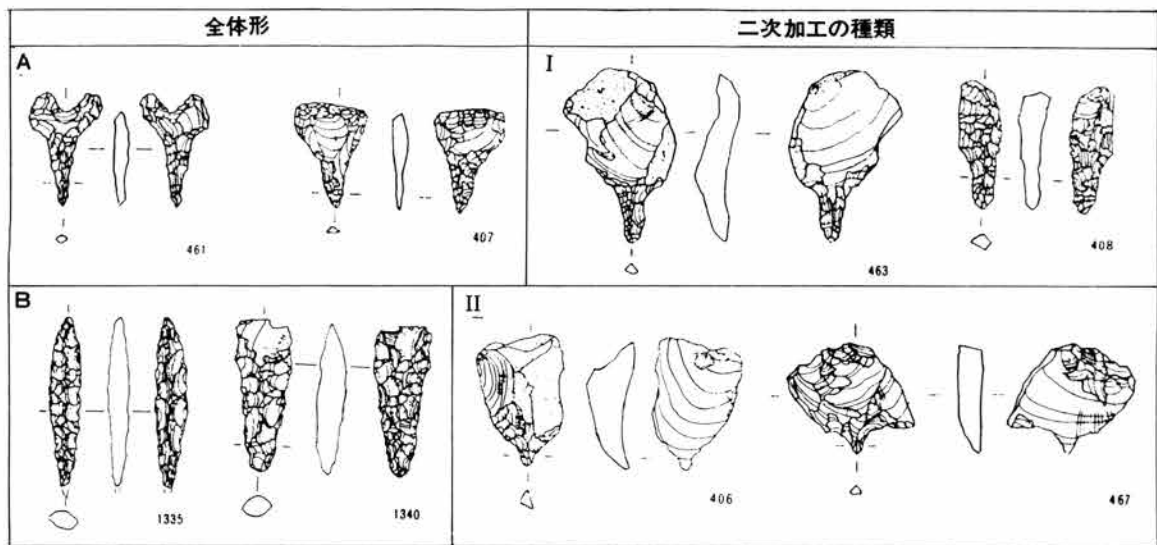
せて表現した。2つ以上の刃部や2種類の加工がある場合は石匙と同様の表現をした。複数挟入石器の扱いはスクレイパーのそれと同様である。

#### (4) 石錐(挿図28)

「素材の一部または全体に二次加工を施して棒状に尖った部分あるいは全体を作出したもの」を識別の基準とした。型式分類は、全体形よりつまみ部を有するもの(A)、棒状のもの(B)とを区別し、二次加工の種類から、両面加工(I)と片面加工(II)とに分け、これらを組みあせている。なお、Bタイプの両端が錐



挿図 27 スクレイバーの型式分類図

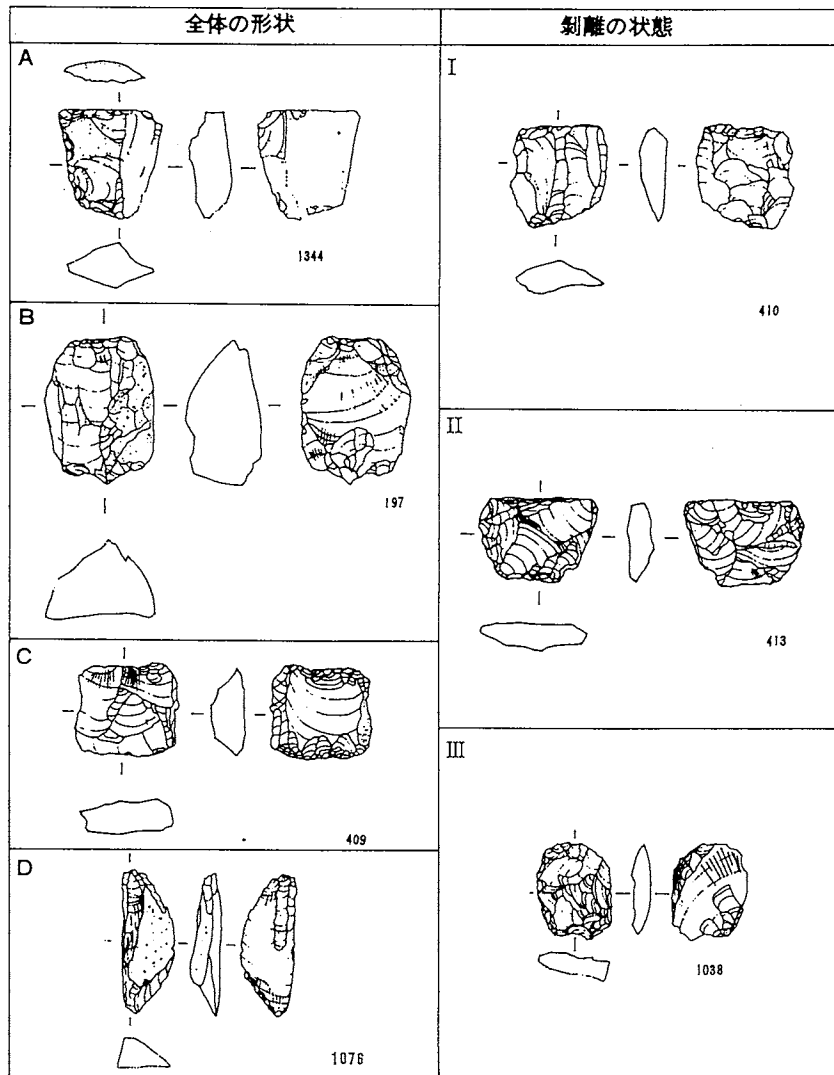


挿図 28 石錐の型式分類図

部と思われる場合は「両頭」とし、Aタイプで錐部を2つ有するものは「錐部2」というように記してある。

(5) ピエス・エスキュー(挿図29)

ピエス・エスキューは岡村道雄氏によって定義されたが〔岡村 1976〕、本遺跡では岡村氏がその定義としてあげたうち「上下両縁辺または両尖端からほぼ平行に剝離痕が入り、両端には細かい碎屑の剝落した痕跡が連続して残され、多くはステップ・フラクチャー(階段状剝離)を残す。」ことを特徴として分類している。これらを形態により、剝離痕の連続する縁辺を上下に置いた場合、上下両端いずれかに打面のような平坦部を残す(A)、全体が塊状(B)、



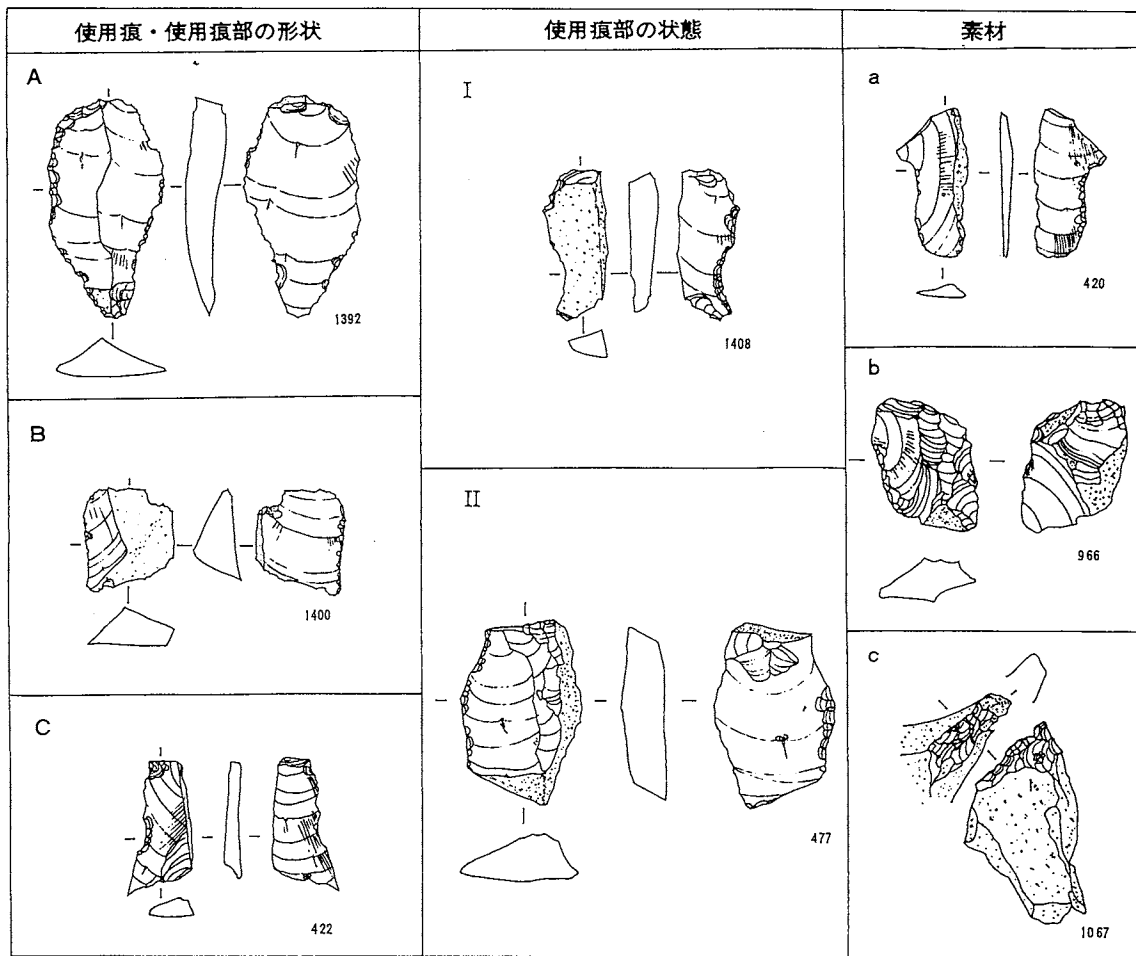
挿図 29 ピエス・エスキューの型式分類図

平面形がおもに四辺形(C)、紡錘形(D)として区別し、さらに剝離痕の種類から、上下両端にみられる(I)、上下と左右いずれかにある(II)、上下・左右両方にある(III)ものに分けた。図は剝離痕を上下に置き、素材の正面を表面とすることを原則としている。

(小柳 義男)

(6) 有抉頭磨石器

名称からも判断されるように、かつて、対となる抉入部をもつことと、抉入部を結ぶ部分を除く全体に顕著な点状痕を有することをもってこの石器の分類基準とした〔小池 1976〕。しかし、形態分類という基本から外れるばかりでなく、使用痕である点状痕の存在を基準の1つとしたのは、分類に不明確さを招いていた。1つは使用痕のみられない対の抉入をもつ石器の扱いであり、2つは抉入刺突具、石匙等に有抉頭磨石器と全く同様の使用痕がみられる場合、重複して分類されていたという点である。前者は、本遺跡においてすべての剝片・石核を精査する中で、比較的多く検出されている。そこで、本報告書では使用痕の問題を切り離し、有抉頭磨石器を、原則として素材へ対の抉入を入れたのみの石器と規定し、石匙、抉入刺突具等に点状痕のみられるものは、それぞれの使用痕の問題として扱うことにした。抉入以外には縁辺の薄い部分を欠き落とす程度の二次加工がわずかにあるのみで、かつての石匙形・抉入刺突具形・分銅形の形態分類は無意味であり用いず、小型有抉頭磨石器と呼称していた「小型」も略した。抉入部を結ぶ線を水平方向の基準線として、素材の正面を表面としたが、図の安定性からより大きな部分が下位へきている



挿図30 使用痕のある剥片の型式分類図

例が多い。

(小池 孝)

(7) 使用痕のある石核・剥片・原石(挿図30)

出土した全部の石核・剥片・原石を肉眼観察する中で、刃こぼれ、刃つぶれのあるものを取り出したが詳細に観察すればさらに多くなる。型式分類は使用痕部の形から、外湾(A)、直(B)、内湾(C)と区別し、さらに使用痕部の状態で、刃こぼれ(I)、刃つぶれ(II)に、素材によっても剥片(a)、石核(b)、原石(c)とで区分し、これらを組みあわせている。2箇所以上に使用痕のあるものはスクレイパーの例に従っている。

なお、以後本群を総称して「使用痕のある剥片」と呼ぶ。

(8) 石核状石器

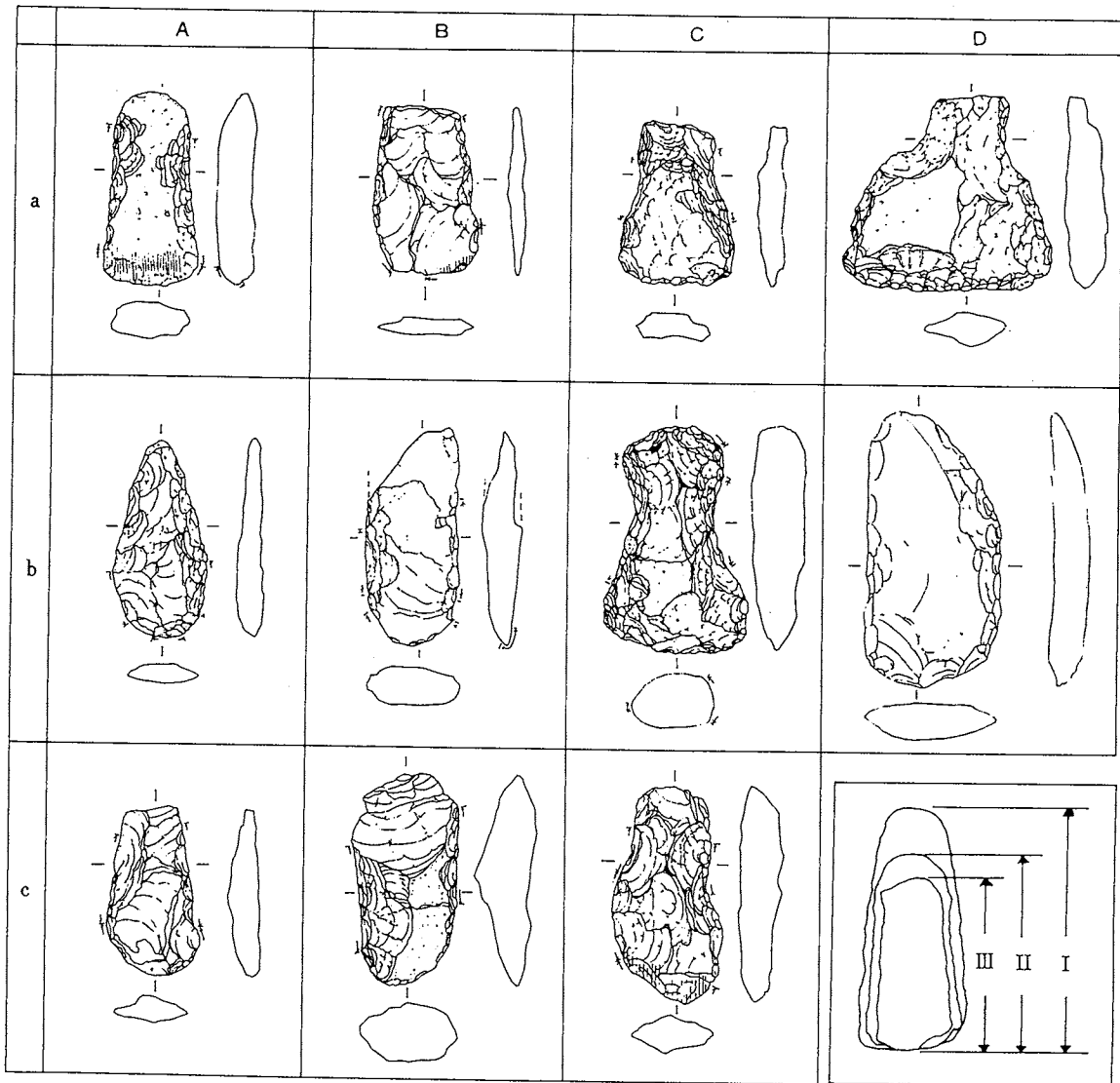
千鹿頭社遺跡において初めて仮称された石器で、その特徴として、(1)平面形が方形に近い。(2)フラットな打面を持っている。(3)石核状の剝離は貝殻状であり、一打面から何度となく剝離されている。(4)大きさは横3~4cm前後、縦3cm前後、厚さは1cm以下のものが多い。(5)一部に自然面を残す資料が多い。などの点が指摘されている[佐藤1980]。

(小柳 義男)

(9) 打製石斧(挿図31)

基本的には従前の方法[樋口他1980]に従った。つまり、器形・法量・刃部形態による分類である。楔形(A)、短冊形(B)、分銅形(C)、直刃(a)、円刃(b)、偏刃(c)とした。ただし、法量分類の基準は若干変え、本報告では斧身長が13cm以上(I)、13cm未満10cm以上(II)、10cm未満(III)とし、以上を組みあわせた。



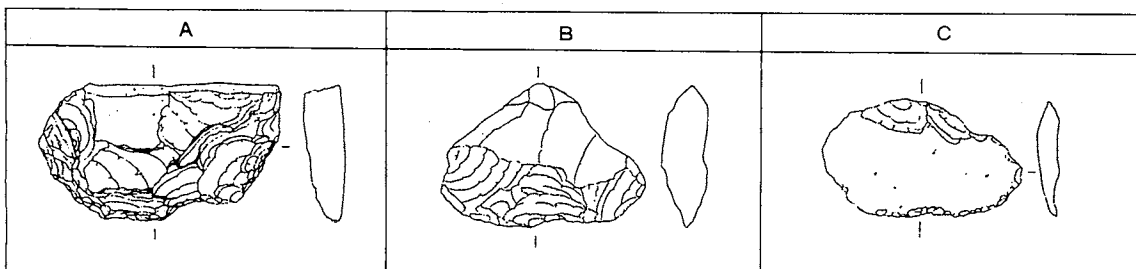


挿図 31 打製石斧の型式分類図

(10) 横刃型石器(挿図32)

出土量は少なく、かつ、中期のものに比較すると形態も若干異なる。従って、ここでは独自に3種に分類を試みた。

- A 平面形は三角形形状、断面はくさび形となる。主として、緑色片岩を用い、ラフな階段状剥離により、刃部成形したもので、基部側は自然面を残し肥厚する。大形が多い。
- B 平面形はAに類似するが、器厚が極端に薄く、主要剥離面裏側は自然面を残している。これは母岩から打ち欠いた薄い素材の先端に刃部を作りだしたものである。砂岩等を主に用いている。
- C 平面形は長方形が多い。黒色片岩等の薄い素材を用いて、刃部とその反対側に加工を加えてある。な



挿図 32 横刃型石器の型式分類図

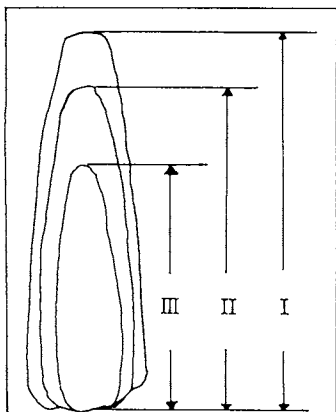
お、蛇紋岩等を用いる場合には厚手の素材を使い、打製石斧と同様の成形方法をとるが、打製石斧のような刃部成形はなされていない〔笹沢・矢島 1979〕。

以上、横刃型石器の器種は特に素材となる岩石の相違と深いかゝわりがある。

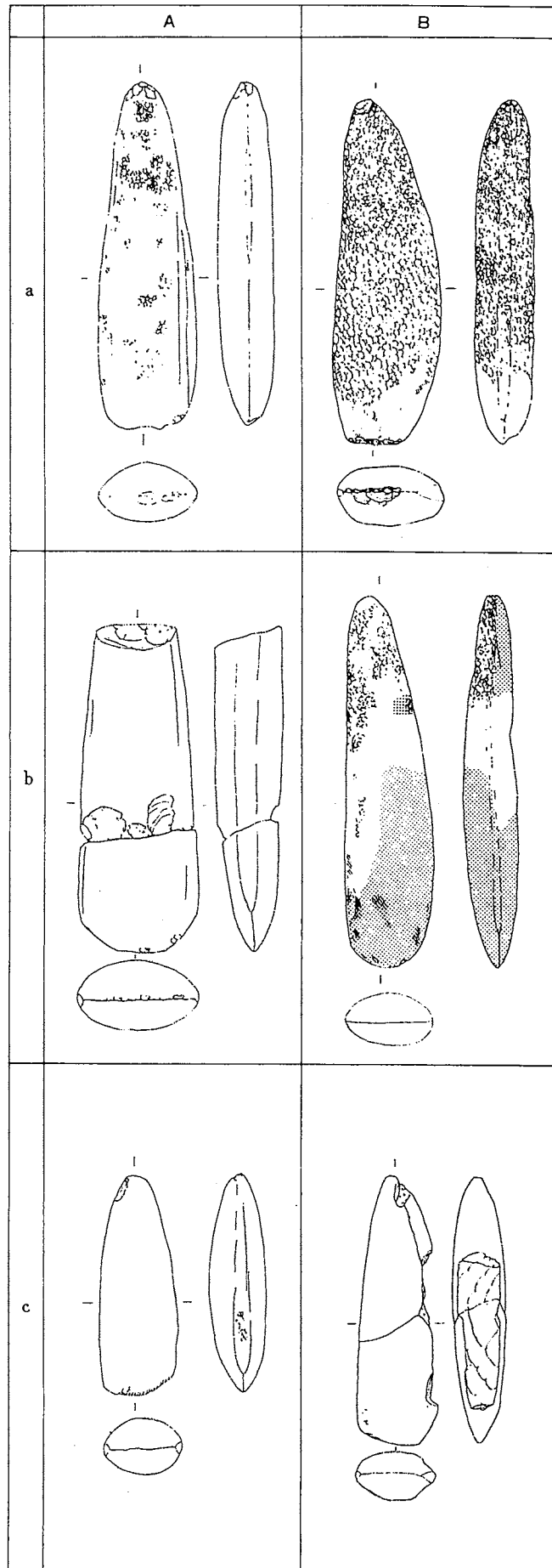
(11) 磨製石斧(挿図33~35)

磨製石斧を総合的に検討し、その機能性を明らかにしたのは佐原真氏〔佐原 1977〕であった。本報告でも、基本的認識は佐原氏論文に従い、その上で分類をおこなった。

磨製石斧には乳棒状・定角・小形の3種がある。後二者は出土量も少なく一括してとらえ、前者のみ、器形・法量・刃部の形状により分類を試みた。器形は斧身の中軸線からシンメトリーになるものをA、あらゆるものをBとし、法量は、斧身長を原則とし、その計測が不可能なものは最大幅によった。これは、斧としての機能の一つに、斧身の重量のみならず柄の重量も加味されると考えられており〔森川他 1979〕、本来重量も含めた分類が必要であろうが、得られた資料を最大限に活用するために、完形品から器形・法量別のモデルを作成し、それに従って、最大幅も活用した。ただし、IIとIIIについては最大幅に大きな相違が認められず、最大幅4.0cm以下をIIIとしたが、4.0cmを越えるものも若干あるが、5.0cmは

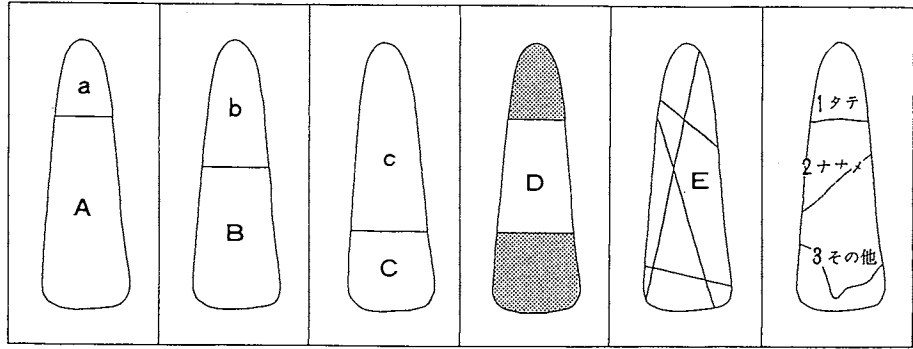


挿図 33 磨製石斧の法量分類図



挿図 34 磨製石斧の型式分類図

越えない。IIは4.5 cm以上、Iは5.5 cm以上である。斧身長は20 cm以上(I)、20 cm未満16 cm以上(II)、16 cm未満(III)とし、刃部の形状は佐原氏に従い、直刃(a)、円刃(b)、偏刃(c)とした。



挿図 35 磨製石斧の破損状況分類図

以上、乳棒状磨製石斧の分類は必要に応じて、器形・法量・刃部の各細分を組みあわせておこなった。

(笹沢 浩)

### (12) 凹石・磨石・叩石

本来、凹石・磨石・叩石は固有の石器名であり、個々に区別して使用されるべきであろうが、すでに多くの研究者によって指摘されているように、三者の性格を複合所有する例が多く、それらを区別する事は難しい。同様に凹み・磨滅面・敲打痕が、使用痕か整形痕かの区別も困難である。したがって、三者を区別することなく一括し、以下特別にことわりのない限り、凹石で総称することとした。

以下、その型式分類を行う。まず石器の形による大別から、原材の形を残さないものをI、残すものをIIとした。ほとんどが安山岩製であるために、中には風化が進み、凹み・磨滅面・敲打痕を識別することが困難なものがあり、特に後二者の識別は難しく、以下の分類は一部に主観的とならざるを得ないものもあり、とくに敲打痕には、凹み・磨滅面も含まれている可能性がある。

#### ① 形態による分類

##### I 原材の形を残さない

- A 石けん形      B 円形で厚みをもつ      C 円形で扁平      D 楕円形で厚みをもつ  
E 棒状で断面形が方形      F 棒状で断面形が円形

##### II 原材の形をのこす

- A 棒状で薄い      B 棒状で厚みをもつ      C 楕円形で薄い      D 楕円形で厚みをもつ  
E 円形に近く薄い      F 円形に近く厚みをもつ      G 不定形

#### ② 凹み・磨滅痕・敲打痕による分類

- a 1・2面に凹みをもつ、      a<sub>1</sub> 3面以上に凹みをもつ、      b 磨滅面をもつ  
c 敲打痕をもつ      c<sub>1</sub> 面をなした敲打痕をもつ。

なお、実測図の破線は敲打痕、実線は磨滅面を表している。

また従来、特殊磨石と呼称されている石器は、その形態や使用面(研磨面)の在り方が、ここで分類した凹石・磨石・叩石類とは明確に区分できるため、その型式分類は三者に従わず、「特殊磨石」として区分した。この種石器については後章で再度触れたい。

### (13) 丸石

球形を意図し、全面を敲打して作られた石器である。球形またはその一部を平坦としたものの2種がある。後者の平坦部には研磨痕がみられる。直径5～3 cmであるが、径10 cmと大形のものが一点あり、別に

細分が必要かも知れないが、量が少ないのでここに一括した。

(佐藤 信之)

(14) 石皿(挿図36・37)

磨石・凹石などとセットをなし、対象物を破碎・粉化する機能を持ち、中央が弧状に凹んだ形態のもの、あるいはそれに相当する磨面をもつ石器を石皿とした。

分類は主に皿部形態と、側縁部の断面形によって行ったが、製作痕にも注目した。A 凹みのある皿部をもたない、B 凹みのある皿部をもつ、C 彫刻をもつ三種に大別し、更に細部形態によって以下の区分を行った。

- A I 平板な自然石利用。
- II 割り石利用。
- B I 狭長な皿部とその上端に明瞭な稜をもち、断面形が三角形形状となる。
- II 方形の皿部とその上端に明瞭な稜をもち、断面形が三角形形状となる。
- III 楕円形の皿部とその上端に明瞭な稜をもたず、断面形がまるみを帯びる。
- IV 楕円形の皿部をもち、断面形が「コ」の字形となる。
- V 長方形の皿部をもち、断面形が「コ」の字形となる。小形石皿が多い。
- VI その他——極小品、未製品、分類不能なもの。
- C 周縁部に彫刻を施す。

(15) 固定式石皿

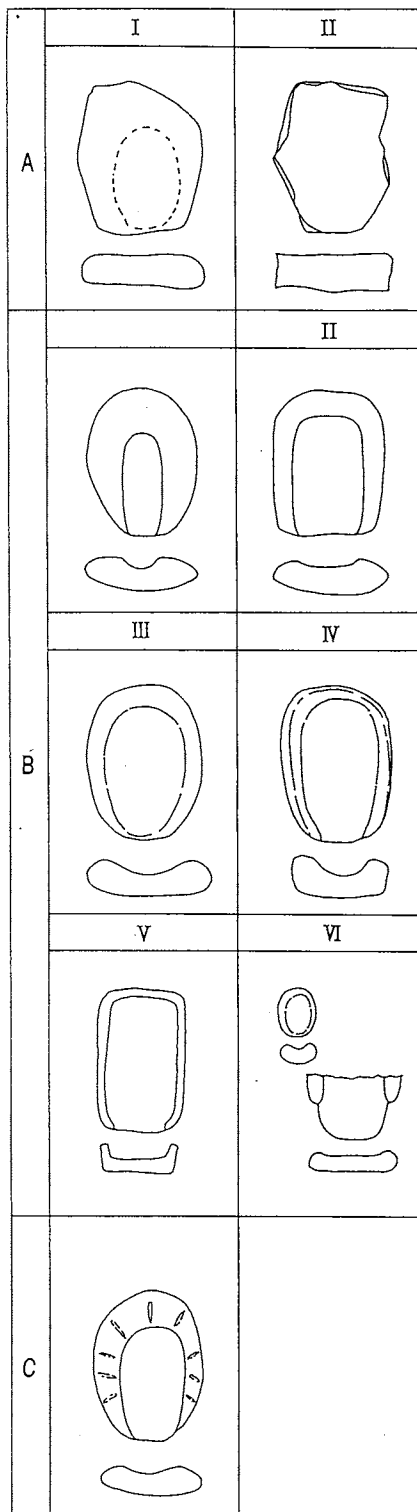
住居址の内部施設と考えられる扁平大形の板石。台石等の用途も推察されるが、使用痕などから、単に台石とは限定できず、ここでは固定式石皿の名称を用いた。阿久II期に特有の石器(施設)と考えることができる。

(16) 砥石

緻密で均一の石材を利用した研磨面を有する石器を砥石として区分した。対象物、工程、機能などによって、固有の分類がある

が、ここでは出土数も少なく一括して扱うことにした。

(石上 周蔵)



挿図 36 石皿の型式分類図

A	B	C	D	E	F

挿図 37 石皿の破損状況分類図

#### (17) 先端研磨石器

先端研磨石器とは、叩石、敲打器等に類似した性格をもつが、その形態的属性は、それらと明らかに異なり、本報告で始めて仮称した石器名である。

10 cm内外の細長い自然円礫を素材とし、素材の一端または両端に長軸に対して斜行する平坦面がみられることを特徴とする。この平坦面は使用痕で、その多くは敲打痕と考えられるが、一様ではなく、線状の擦痕や磨痕も合わせて認められ、またこの使用痕は素材の側辺にも少なからず存在する。したがって先端研磨石器とは、先端部に使用の結果生じた長軸に対して斜行する平坦面をもつ石器と定義づけておこう。

この小石器の分類は、使用痕が一端にある場合をA、面端の場合をBとに大別し、ついで平坦面の数を細別の基準とした。この場合には面の数を具体的にカッコ内にコンマで区切って並記した。ただし、使用痕は認められるが不鮮明の場合にはX、認められない場合は0を使う。また先端部に欠損のある場合、面の数を表わす数字またはXの肩の部分にダッシュをつけた。なお、明らかに欠けている自然礫を素材として使っている場合この項には該当しない。

以上の分類基準を組みあわせてA(1・0)、B(2'・X)のように表記した。(岩崎 孝治)

#### (18) 敲打器

礫の一端あるいは両端に、敲打にともなう剝離のあるものを一括した。数も少なく分類は試みていない。計測は剝離のある辺(面)を下端とし、縦の最大値を長さ、横の最大値を幅、最大厚を厚さとしている。

#### (19) 円礫状石器

円板または楕円板状の角のとれた自然礫またはその一部に研磨痕のある小円礫を一括した。変質流紋岩・緑色片岩・輝緑岩等の外部から持ち運んだ石材を素材としている。

#### (20) 滑石製品

滑石で作られた装飾品で、瑛状耳飾・管玉・小玉とそれらの未製品がある。後者はメンコ状、角柱状などがあり、独立した石器とは考えられないところから、未製品とした。また、滑石の剝片の中には一部成形痕のみられるものもあるが、あえて区別せずに剝片とした。これらの滑石製品は出土量も少ないところから型式分類は試みなかった。

#### (21) 軽石製品

製品も含む本遺跡出土の軽石を一括した。量も少なく、型式分類はおこなっていない。(小柳 義男)

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 阿久I期

#### 1 住居址

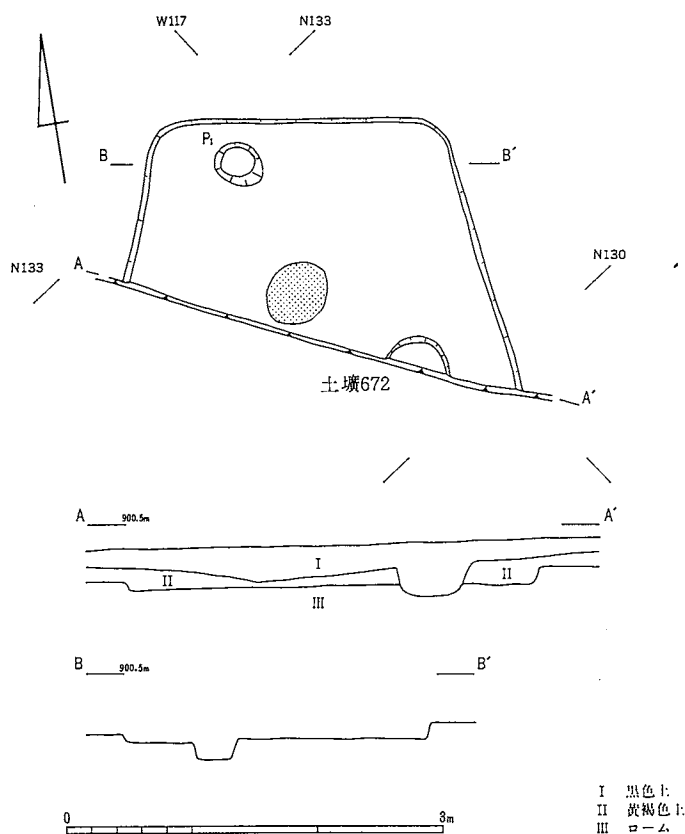
##### (1) 住居址38(挿図38・39、図204、図版16・132)

遺構 IJ08を中心に検出された住居址で、調査区内では最も西に位置している。したがって標高は最も低い。上層に土壌672があり、また南側は農道下にあるため全体を調査できなかった。

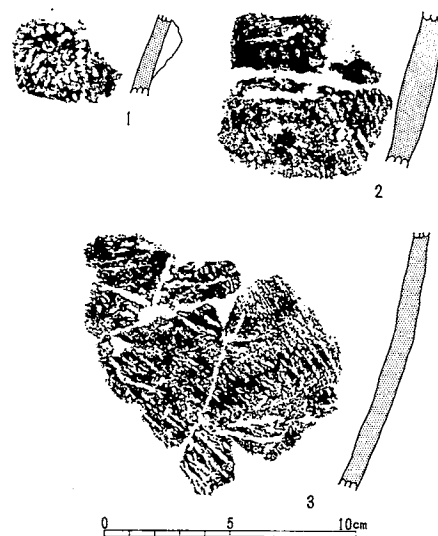
規模は不明であるが、約3×3m程度の台形となるであろう。壁高は東隅が最高で16cmである。部分的にかたい床面も検出されたが、全体に軟弱である。炉は調査部分からほぼ住居址の中央部分にあると考えられる。地床炉で掘り込み等はない。北壁寄りのP<sub>1</sub>は深さ19cmで柱穴の可能性はある。周溝はない。

出土遺物 遺物はいずれも床面より出土しておりその出土状態はA<sub>5</sub>型である。土器は5点(挿図39-1~3)と少なく、すべてI期に属する。1は直径2cm、高さ1.5cmほどの円形の粘土を貼り付けて、その上に絡条体圧痕文が施してある。他は細かな撚糸文で、内面のナデが比較的丁寧であり、5点とも同一個体の可能性が高い。ともに胎土に繊維が含まれている。

類例は本住居址の周辺の包含層において30片(2292~2297)ほど出土している。2292は唯一の口縁部で平坦な口唇部に撚糸文が施されている。2293~2296は口縁部の一部



挿図38 住居址38実測図



挿図39 住居址38出土土器拓影図

I 黒色土  
II 黄褐色土  
III ローム

と思われるもので、絡条体疋痕文が口縁部に平行して数条巡らされ、さらにその下に弧を描くように施文されている。2297 は撚糸文で、おそらく口縁部に絡条体疋痕文があり、胴部から底部にかけて撚糸文となる例であろう。絡条体疋痕文の原体はRであるが、撚糸文はRとLが見られる。

遺物の出土位置から見て、別に I 期の住居址が周辺地域にある可能性がある。(佐藤 信之)

## 第 2 節 阿久 II 期

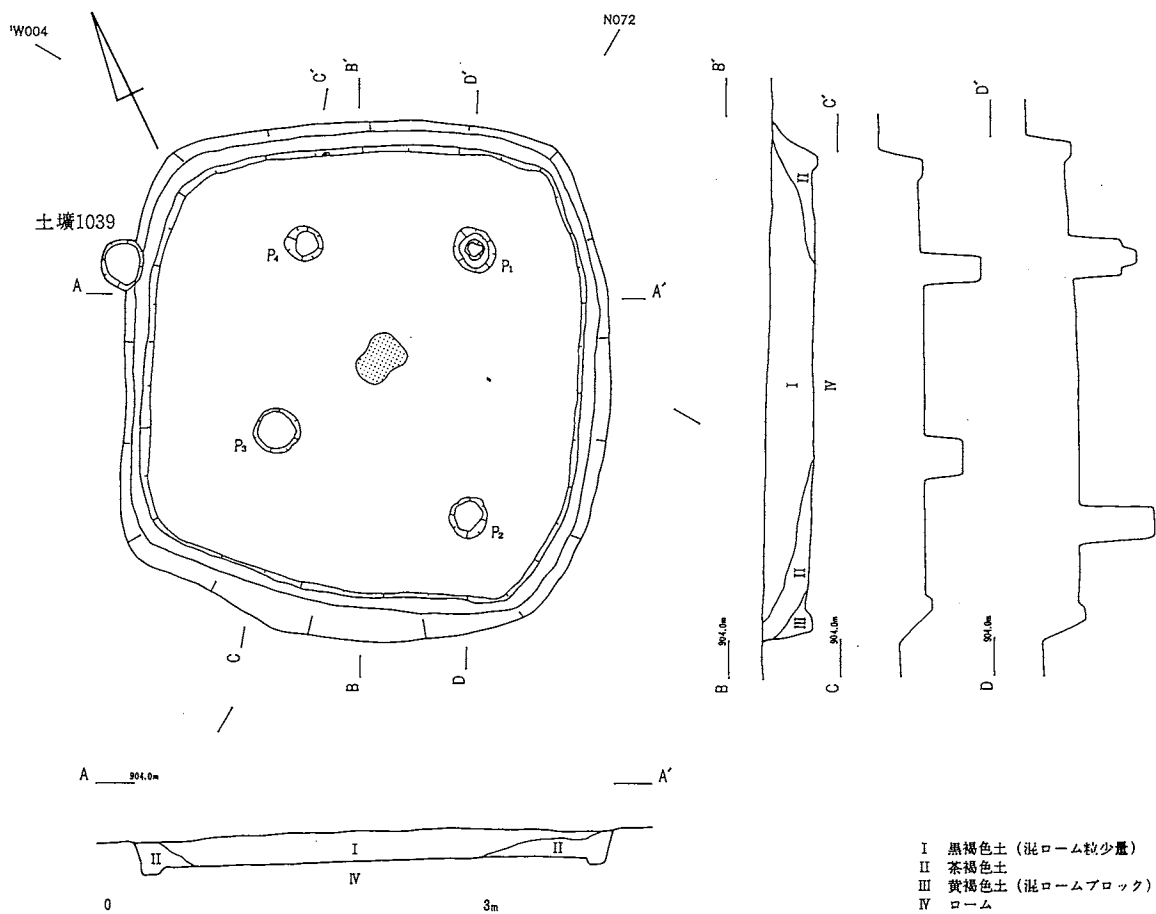
### 1 住居址

#### 1) 阿久 II-a 期

##### (1) 住居址 25(挿図 40~42、図 106・148、図版 16・133・182)

遺構 阿久尾根上のほぼ中央部の CN 52 付近に位置する A 型の住居址である。環状集石群下部の漸移層中に検出された。

プランは方形に近い台形で、規模は 3.80×3.50 m、長軸方位 N 33° E である。壁は堅固で南西壁を除きほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高 34 cm である。床面は堅く良好である。周溝は幅 20 cm、深さ 5 cm で壁直下



挿図 40 住居址 25 実測図

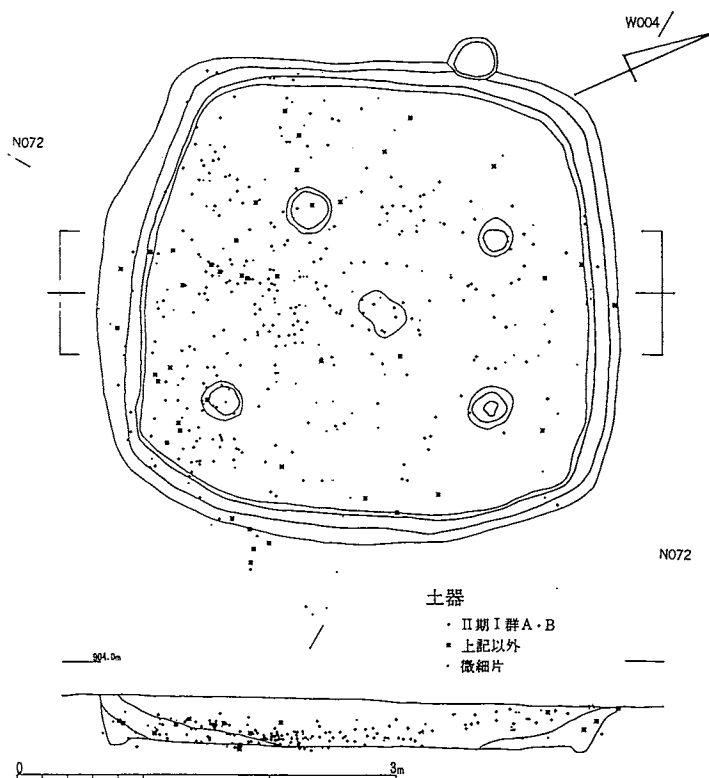
を全周する。支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>でプランと合致した形で台形に並ぶ。地床炉が相対する支柱穴を結ぶ交点上に認められた。なお、西壁を切って土壌 1039 がある。

遺物の出土状態 検出当初より、多量の黒曜石の剥片・屑片が出土した。それらは住居址北隅よりやや東に寄った部分に中心をもちながらも、住居址のほぼ全体に及び、検出面から床面までの全域に出土した。総数は約 960 点にのぼり、住居址内遺物総点数(1754 点)の約 55%を占める。なお、住居址南壁に接したやや外側にも、一箇所これらの黒曜石の剥片・屑片の集中箇所がある。石器製作時に生じる剥片・屑片類が、一箇所にかかなりの長期間継続して廃棄されたものと考えられる。また、土器は平面的には南側にやや片寄った分布をみせ、層位的には主に I 層下部から出土し、壁際の II・III 層にはほとんどみられない(出土状態 B<sub>4</sub>型)。

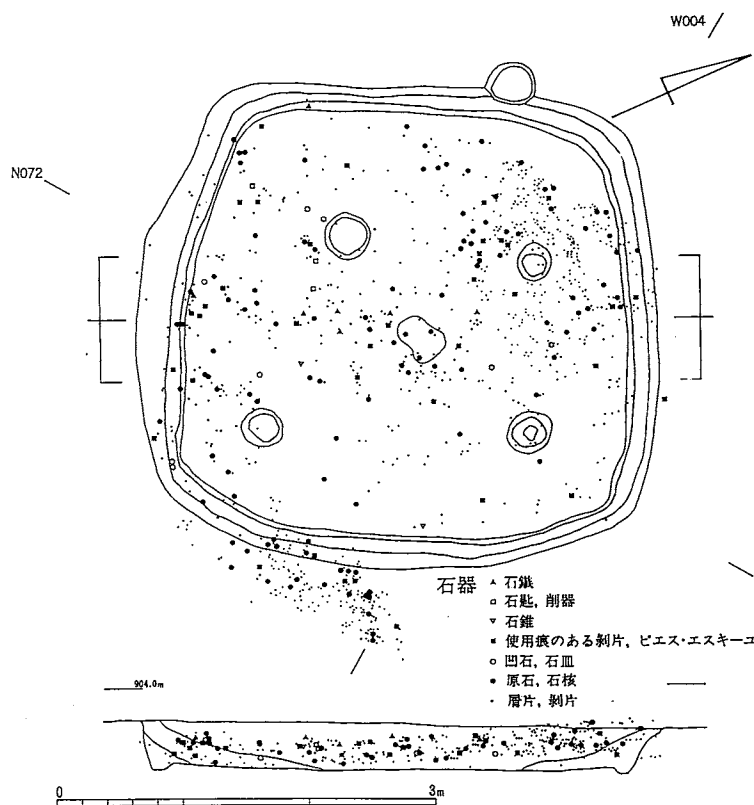
遺物 総数1,754点のうち土器は470点(約27%)ある。大多数がII期IA(1674～1677)であるが、小片が多く、器形のうかがえるものは、IbとIdにそれぞれ形態分類される1674と1677の2点のみである。なお、II期IBは18点で土器全体の4%弱である。

定形石器は多量の剥片類に比較して多くない。石鏃12(24～30)、スクレイパー3(31・36)、石錐2(32・33)、ピエス・エスキーユ8(35)、使用痕ある剥片類39(37・38)、磨製石斧1、凹石9、石皿1の計75点ある。

(岩崎 孝治)



挿図 41 住居址 25 土器出土状態図



挿図 42 住居址 25 石器出土状態図

(2) 住居址 26(挿図 43、図 51・106・149、図版 17・57・104)

遺構 住居址 80 の東側に位置し、CN 46 付近を中心にして検出された。住居址上面には集石 325 があるために完掘できず、柱穴・炉などは部分的に確認できていない。推定規模 4.55×4.05 m である。



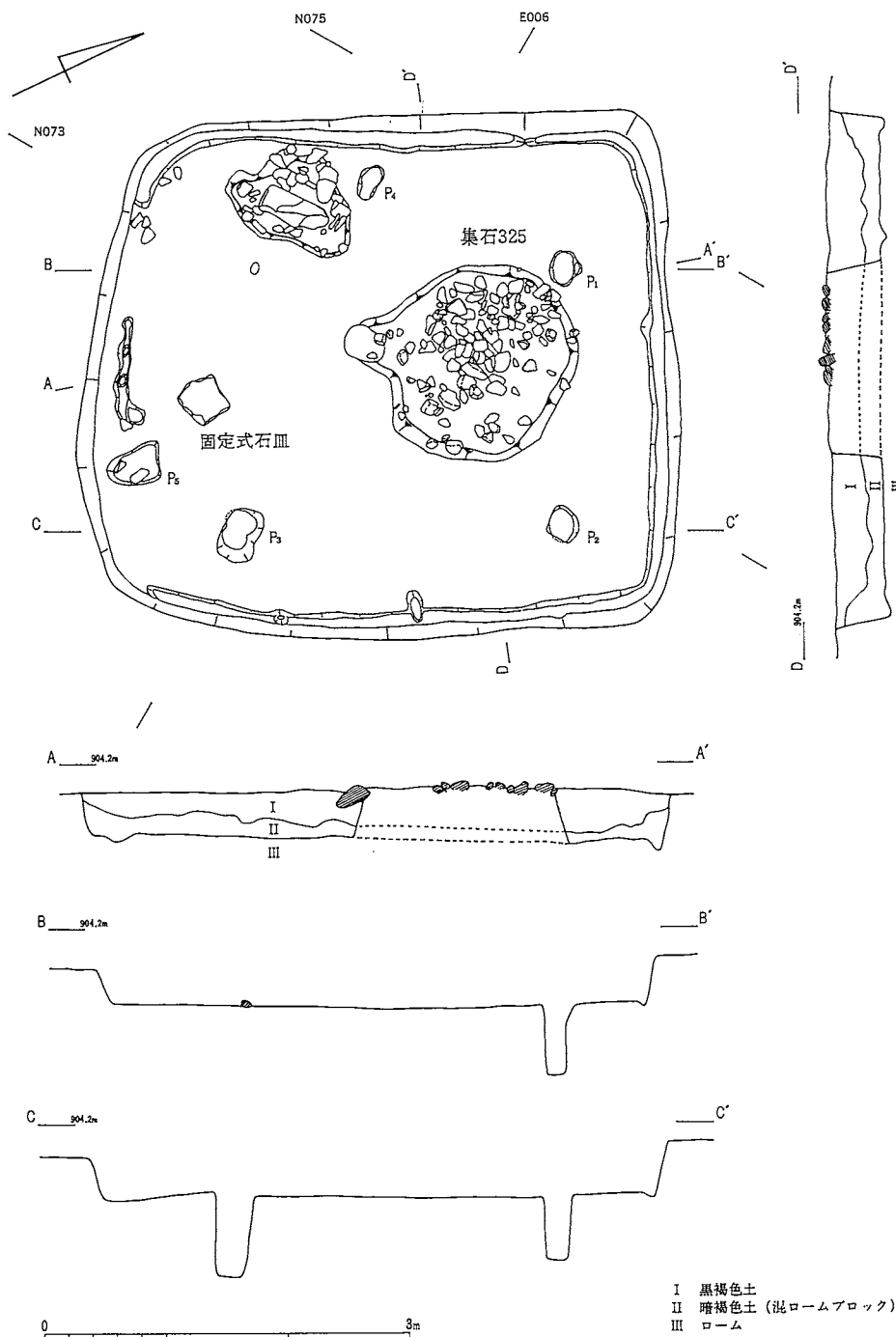
南壁がやや張り出した台形の平面形で、柱穴1箇所は確認できていないが、おそらく台形に4個の支柱穴をもつA型の住居址であろう。かなり急角度に立ち上がる壁に沿って周溝がめぐるが、南側は内側に部分的にみられるのみでありズレが生じている。平面形でも南壁は他壁に比較して不規則に外へ張りだしており、本来の壁は周溝沿いに考えられ、両壁で示される落ち込みは堅穴の掘り方であろう。支柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>が検出でき、他に南西隅の集石下にもう一つの支柱穴の存在する可能性が強い。P<sub>3</sub>は柱が北へ傾斜するように斜めに穿っている。炉も確認できていないが、集石325の下に設けられていると考えられる。また南壁近くの床面上に固定式石皿が置かれていた。

遺物の出土状態 床面上にほぼ完形あるいは半完形に復元できるII期の一括土器が出土している。南壁下の東西隅にそれぞれ1個体ずつ、中央部南側に2個体(1679・1682)が近接する位置で、北壁下中央に1個

体分(1678)がそれで、他にもかなり大形の土器片が数箇所に見られた。I・II層ともに遺物が散在するA<sub>1</sub>型の出土状態を示すが、下層(II層)の方がより濃密である。

遺物 床面上の一括土器はいずれもII期I群であり、深鉢VIIIa1(1678・1680)とIa(1679)、Ic(1681・1682)がある。約250片出土した土器片の70%がII期I群であり、そのほとんどが無文で、格子目(24)などは数片にすぎない。上層出土の40片程のIII・IV期土器(25~30)ではI群が大多数を占める。30は住居址上面のグリットより出土した土器片と接合しており、集石群と関連するものであろう。

石器は出土点数が多く、総点数は94点



挿図 43 住居址 26 実測図

にのぼる。わけても石鏃(46~54)の出土が目立ち28点を数える。石匙(55・56)は5点のうち4点までがB(横型)である。その他の石器としてスクレイパー8点(59~62)、石錐4点(57・58)、ピエス・エスキーユ12点(66)、使用痕ある剥片34点(64・65)、有扶頭磨石器2点等が出土した。(百瀬 新治)

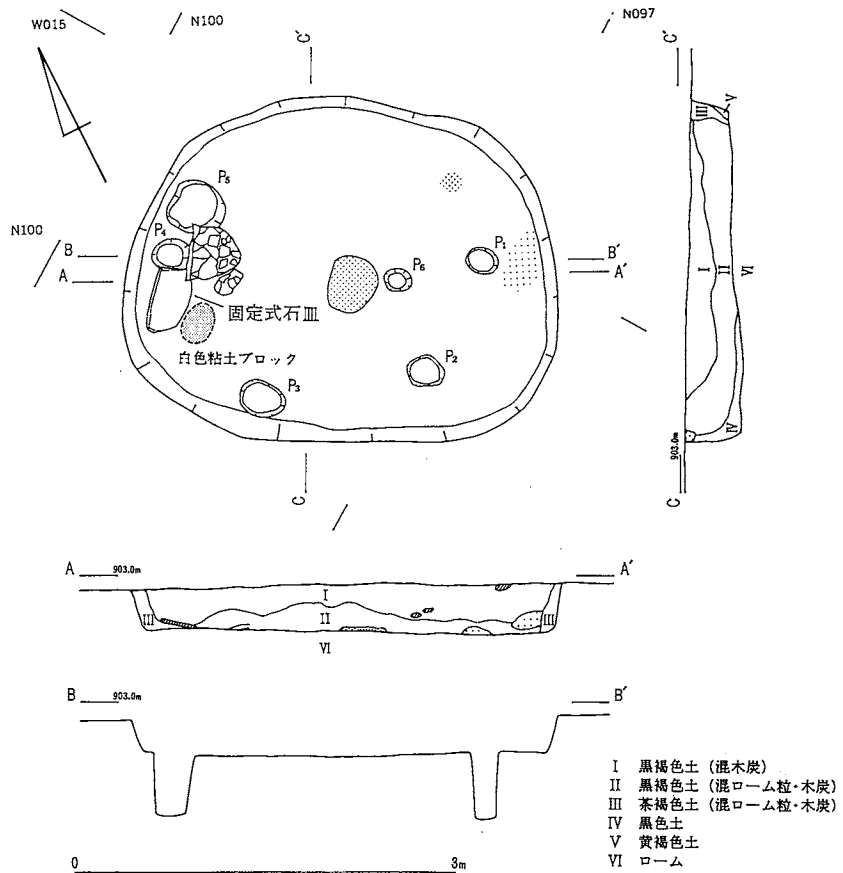
(3) 住居址 28(挿図 44、図 107・148・229・241、図版 104)

遺構 CA 57 周辺に検出された 3.20×2.55 m の規模をもつ、本遺跡では最小の住居址であり、III期の住居址 51 とともにH型に属する。調査当初はその規模から、土壙であろうと判断をあやまったほど小形である。支柱穴は P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub> の 2 個でともに 50 cm 前後である。他に 20 cm 前後の深さをもつピットが 3 個あるが、さして深くもなく、その配列にも規則性がみられず性格不明である。周溝はない。P<sub>4</sub> に接して、II-a 期 I 群の完形土器 2 個体(1683・1684)、白色粘土ブロックと固定式石皿が共に床面上で検出されたが、後者の一部はやや浮いていた。炉は支柱穴の線上のほぼ中央に設けられている。埋土中ならびに床面に焼土の堆積と焼けた床が部分的に認められ、また、埋土全体に木炭片が混入しており、焼失住居としてよいであろう。

遺物 土器・石器のほか白色粘土塊がある。土器は床面出土の完形 2 個体を除いてすべて破片であり、多くは埋土出土である(出土状態 A<sub>3</sub>型)。上層出土の少量のVI期土器片を除いては量は多くないがすべて I 群である。II 期 IA の口縁部片は 6 例あり、うち細かい格子目文をもつものと刻目がある細い粘土紐を垂下させたものが各 1 例ある以外は無

文である。完形土器は大形と中形があり、後者は口縁部と底部の一部を欠く。いずれも刻目はみられない。他に II-a 期 IB が 8 例ある。

石器は石鏃 1 (39)、挟入刺突具 2 (40・41)、石匙 3 (42・43・45)、使用痕ある剥片 7 (44)、小形磨製石斧 2 (1525・1526)、玦状耳飾 1 (1734)、凹石 1、固定式石皿 1 の計 18 点がある。このうち、小形磨製石斧、玦状耳飾は床面から、他は埋土出土であるが、埋土での相伴土器の出土状態から一括遺物と考えられる。石匙 B (45) には顕著な使用痕が認められ、小形磨製石斧はいずれも片刃である。玦状耳飾は良質の滑石を用いて丁寧に磨かれ黒色を呈する。(笹沢 浩)

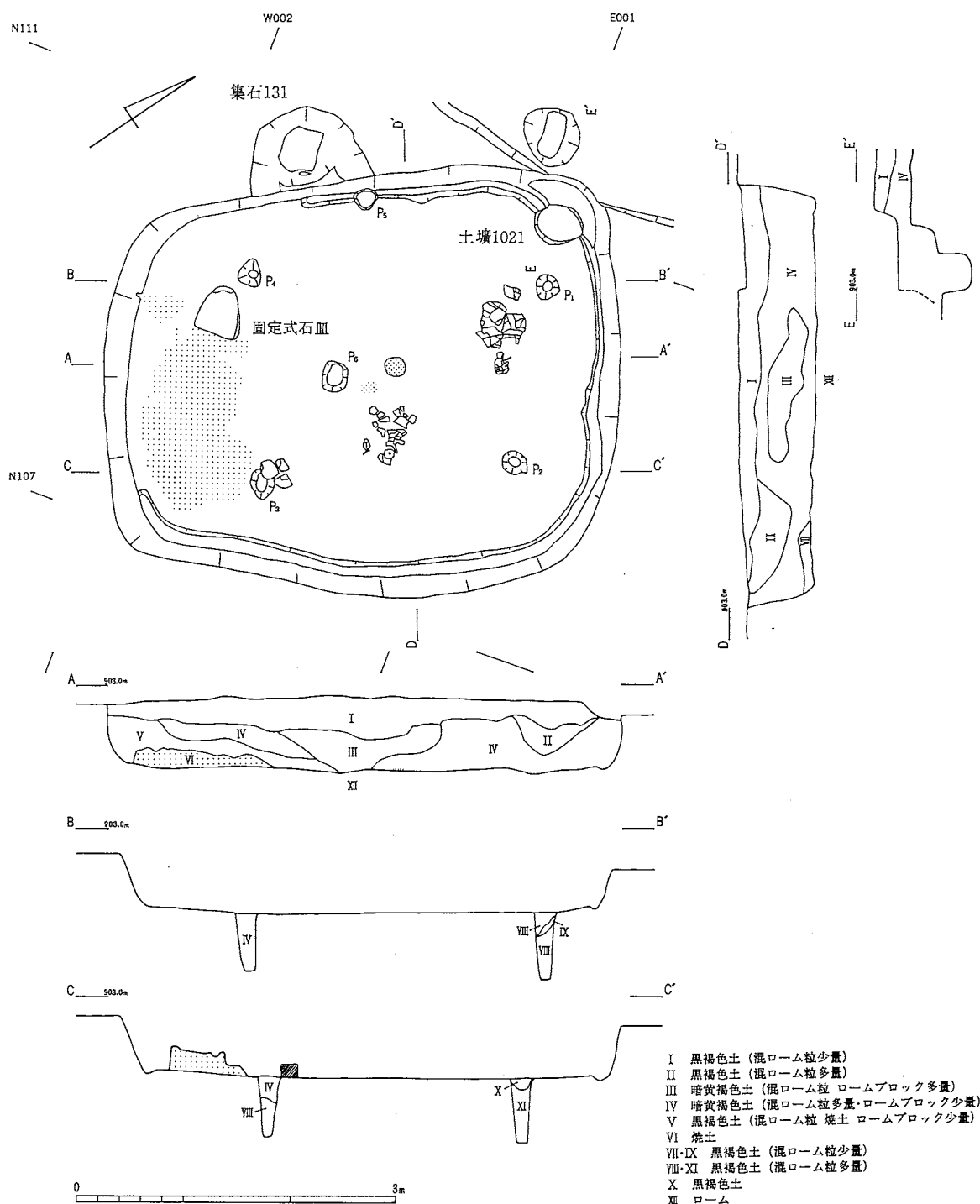


挿図 44 住居址 28 実測図

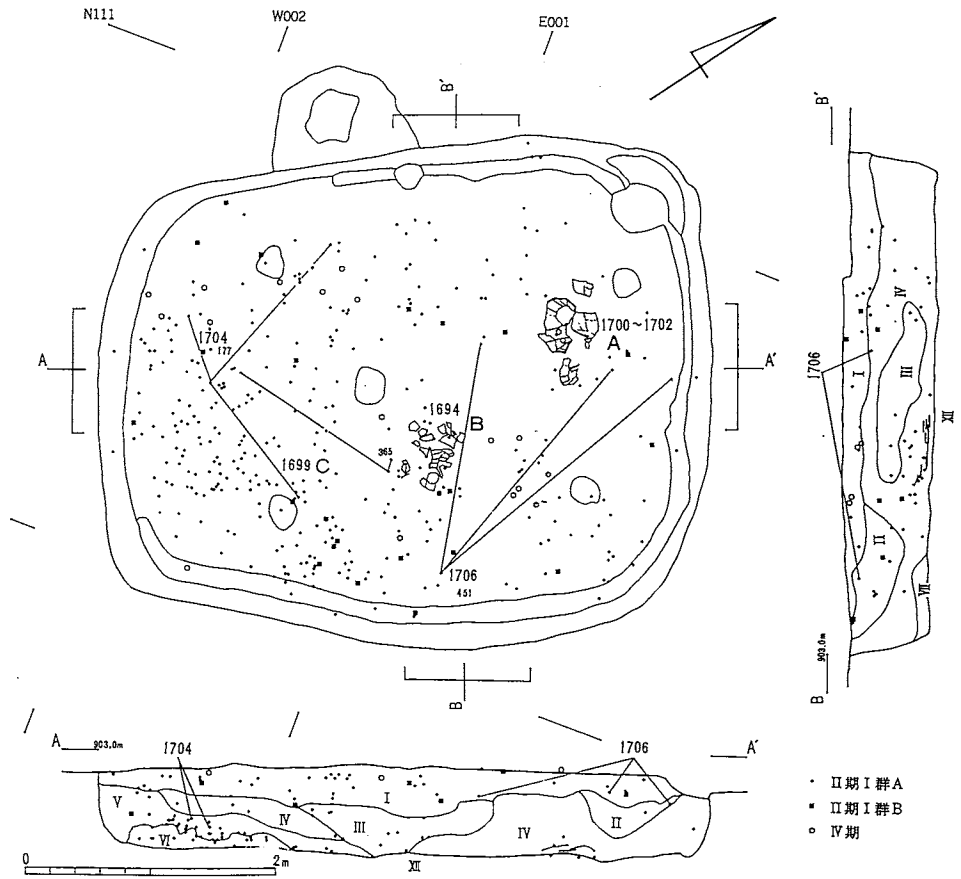
(4) 住居址 32(挿図 45~48、図 108・109・154・155、図版 18・105・106・181・182)

遺構 北側は住居址 33 と近接し、BA 50 を中心として検出された 4.45×3.60 m の A 型住居址である。上層は環状集石群の北限にあたり、集石 131 が西壁の一部上端を切りこんでいたが、壁・床等の遺存状態は非常に良好である。支柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> で、いずれも径 25 cm 前後あり、深さもほぼ一定である。幅 9 cm、深さ 4 cm 前後の周溝を、西壁の南壁よりと南壁を除いてめぐらしている。炉は支柱穴を結ぶ交点上にあり、径 25 cm の円形状地床炉である。西壁中央に P<sub>5</sub>、地床炉南寄りに P<sub>6</sub> があるが、前者は壁柱穴であろうが後者は性格不明である。北西隅に土壌 1021 があり、本住居址を切っているために壁も若干変形している。

遺物 土器と石器があり、その出土状態は典型的な A<sub>1</sub> 型であるが、かなり片寄りがみられる。すなわち、

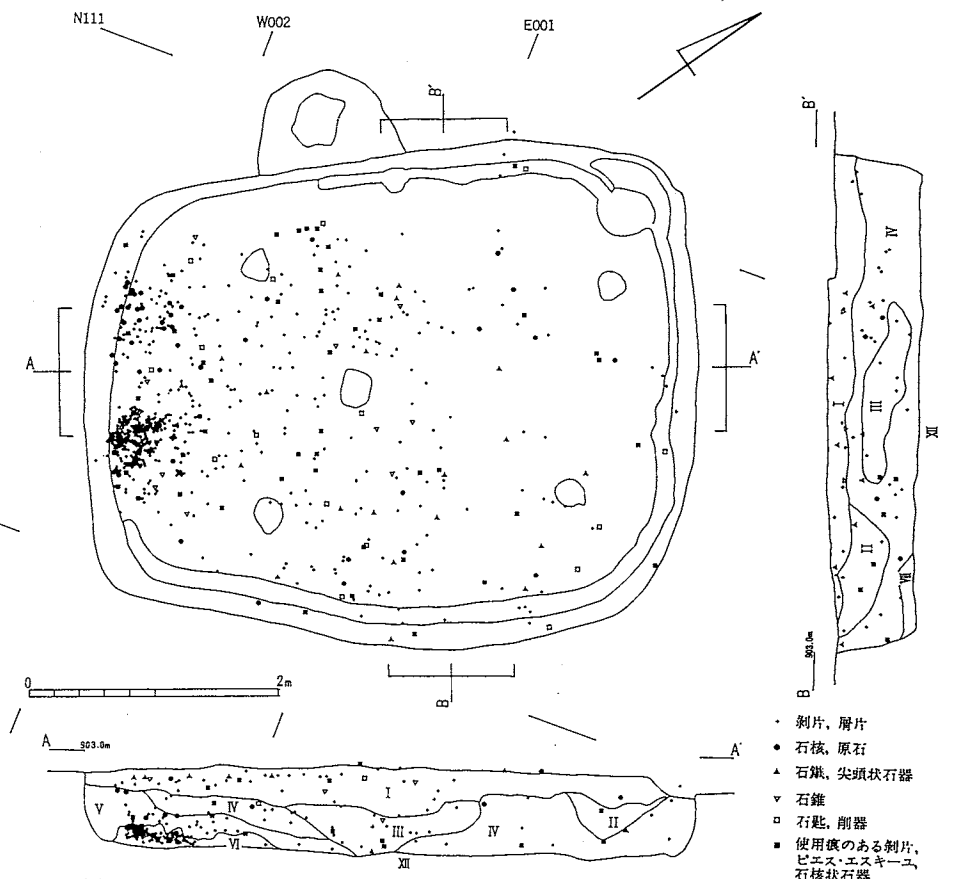


I層にはII期の土器とともに若干のIII期の土器片(1697・1698)が混在して出土したが、II層以下はすべてII期の遺物で、それらは床面に近づくにつれて南壁寄りに集中する。この傾向は石器や剥片等で特に顕著である。層位的にはI~IV層は自然埋没の堆積状況を示すが、南壁寄りに焼土粒等を含んだ黒褐色土層(V層)とその下部に床面に接して焼土塊(VI層)が20cmの厚さで堆積していた。石器類はV・VI層、特にVI層から集中して出土した。層位観察によれば、層序形成はVI層から順次堆積した過程がみられる。また、床面上には焼けた痕跡や炭化材の検出がない所から、この焼土塊は遺物とともに他からここへ

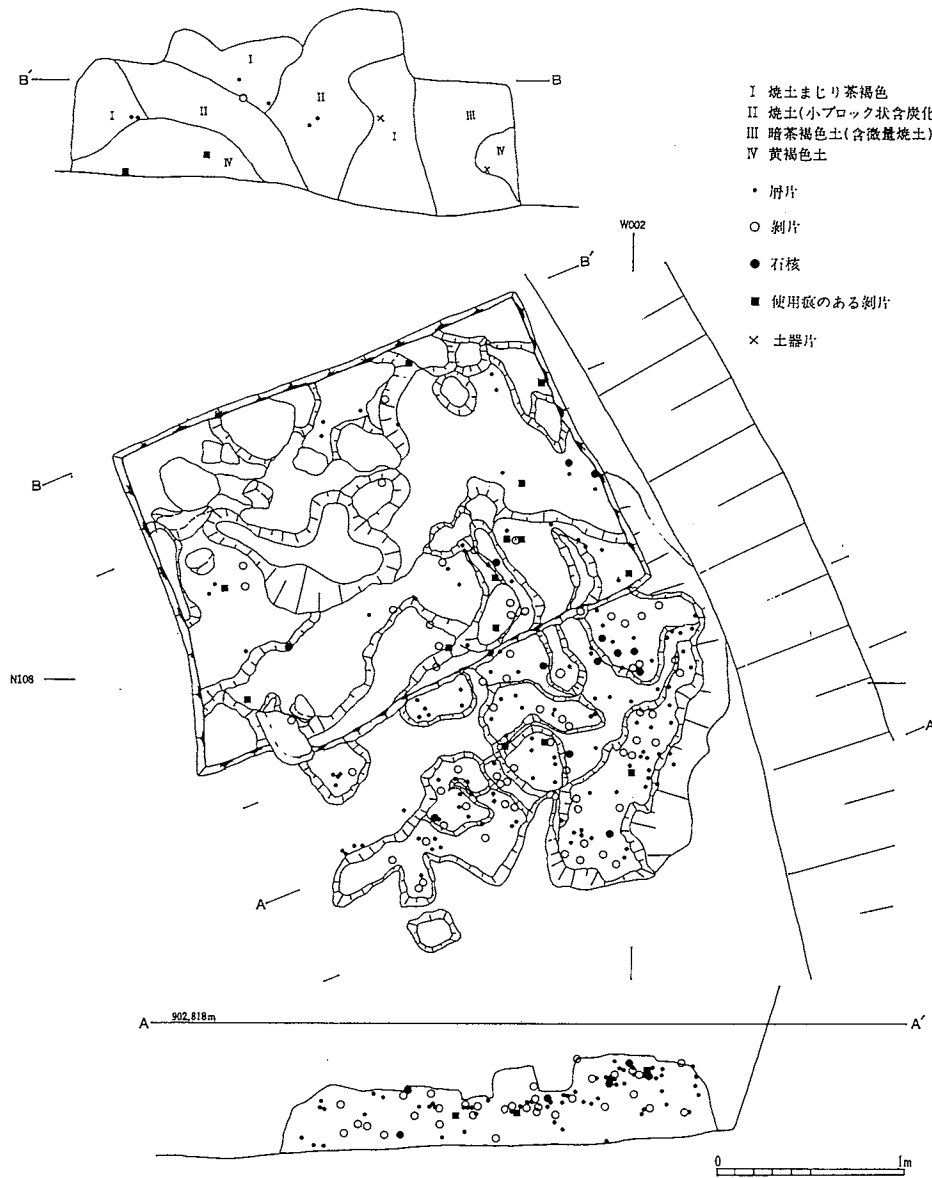


挿図 46 住居址 32 土器出土状態・接合関係図

また、床面上には焼けた痕跡や炭化材の検出がない所から、この焼土塊は遺物とともに他からここへ



挿図 47 住居址 32 石器出土状態図



挿図 48 住居址 32 石器出土状態細部図

廃棄したとの考  
え方もあろうが  
確定はできな  
い。

床面上および  
10 cm ほど浮い  
て、II 期 IA の  
一括遺物が A  
(1700~1702)、B  
(1694)、C(1699)  
の 3 個所にあ  
り、うち C のみ  
床面に密着して  
いた。他に器形  
の分る 6 個体  
のうち、2 個体  
(1693・1706)は  
I 層、他は IV 層  
以下の出土であ  
る。従って、上  
層出土の II 期  
IA は土器群と  
して一括するに  
は検討が必要で  
あろう。III 層以  
下 II 期 IA 189

片、同 IB 10 片で、II 期 II・III 群土器はない。

石器は総数 131 点出土したが、うち III 層以下は 81 点で、使用痕のある剥片(198・201・202)が 38 点で最も多く、ついでスクレイパー(175・177~182・194・195)が 12、石鏃 10(147・149・151・152・155・156・160・162・166・169)、石錐 8(187・189~192、ピエス・エスキーユ 8(197・199)の順となり、この他では、石核状石器 3、石匙(173)、固定式石皿各 1 の順となり、石匙の少ないのが目につく。これらの石器は、土器の出土状態からみてほぼ一括資料といえよう。なお、固定式石皿は住居址南壁寄りの焼土塊に接した床面上に出土した。

本住居址では、粘土塊中および埋土から多量の黒曜石片が出土した。その内訳は原石 1、石核 56、剥片 414、屑片 383 点であり、総重量は 3,345 g に及ぶ。この中には石器の素材としては不適と思われるツブ入りの石核が 56 点のうち 20 点を占めているのが注目される。(福沢 幸一・笹沢 浩)

(5) 住居址 36(挿図 49・50、図 53・110・156・230、図版 19・106・107・138)

遺構 CA 96 付近に位置し、環状集石群の西外郭にある。すぐ西側に方形柱列 IV が接し、東側には住居址 65 がある。ローム漸移層上面で検出しており、重複・拡張などはない。

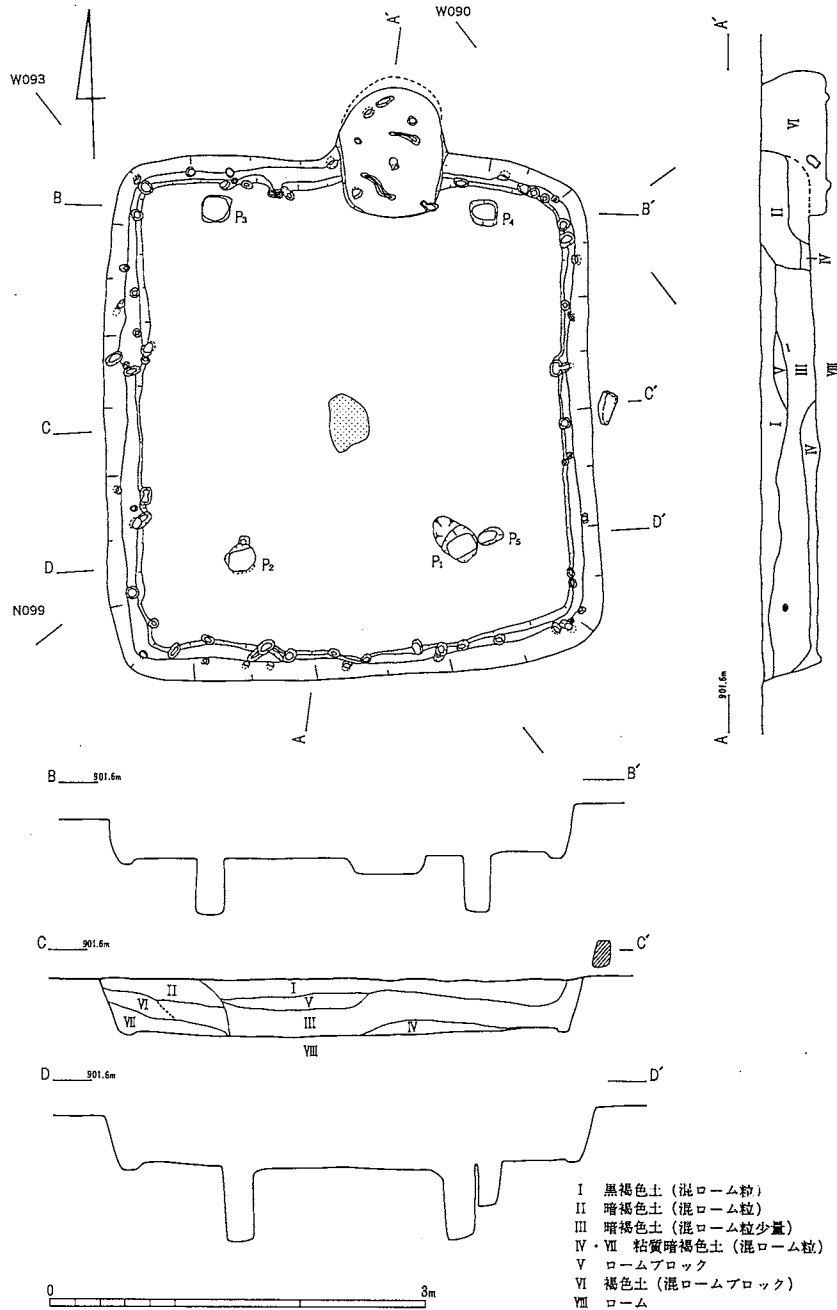
本址の検出時にはその埋土に多量のロームブロック・ローム粒が認められ、その一部はロームが特に密で、土壌が掘り込まれたような観を呈する部分もあった。西側の方形柱列IVの一部とも考えられたが、結果は床面に達するような掘り込みはなく、断面観察によっても明らかな掘り込みは認められなかった。埋土のロームブロックの均一でないひろがり、方形柱列IVから掘り上げられたものが投げ込まれた結果と考えられた。住居廃絶以後、完全に埋没する以前のことと考えられよう。土層断面図において西壁から北壁寄りが特殊な堆積を示しているのは、これが方形柱列に沿う側であったからだと理解でき、相互の時間差は大きくなかったものであろう。

北壁には外へ張り出す土壌が認められた。この土壌内外では埋土がロームを多量に含んでおり、明瞭では

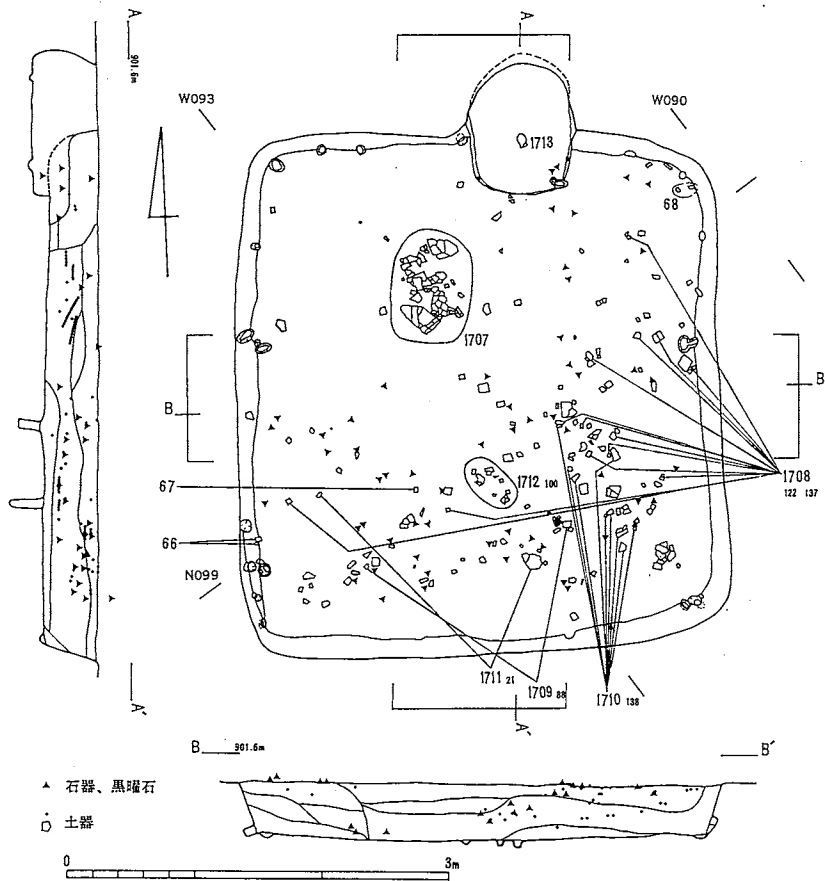
ないが、少なくとも土壌が新しいという根拠は見出せなかった。墳底に近くほぼ完形の小形土器 1713 が斜めに倒立して出土した。この位置は住居が新しいとすれば、住居構築時に破壊されると思われる部分にあたるので、住居に伴うものと判断した。

長軸方向はほぼ真北(N 1°W)に向き、東壁がやや内湾する 3.90×3.45 m の隅丸台形のプランをもつ B 型の住居址である。北壁に土壌が張り出し、入口部は南壁になると思われるが、それを示す施設は認められない。周溝中の小ピットは、すべてが本来のものであるとは断言できない。床面は凹凸があり北から南へわずかに傾斜しており、その差は北壁下と南壁下で 10 cm 前後である。炉は掘りくぼみの少ない地床炉で、住居址ほぼ中央にあり、断面で観察できるほどの焼土はなかった。柱穴 P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub> があり、P<sub>5</sub> は P<sub>1</sub> の補助あるいは補強と考えられ、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> が支柱穴であろう。いずれも貼り床などはされていない。

遺物の出土状態 埋土の堆積状態は先述したが、北西側では上・下層ともに遺物はほとんどない(出土状態 B<sub>4</sub>型)。ただ、この部分の中層で深鉢一個体分(1707)が破碎して出土しており、これは住居址埋没当初に



挿図 49 住居址 36 実測図



挿図 50 住居址 36 遺物出土状態・接合関係図

II期 IB が 4 点ある。また、66～68 は II 期 ID に属すると思われるものである。II 期 IA の口縁部破片は図示したものの以外に 18 点あり、内訳は刻目のない垂紐貼付文をもつ波状部 1、口唇部に刻目をもつもの 1 点あるほかはすべて平口縁の無文である。1709 の小形土器は小破片を残すのみであるが、口縁下に突起をめぐるした後、篋描の格子目文を施している。

石器は多様である。石鏃 4 (203～205)、石匙 4 (206～208・215)、石錐 3 (213)、スクレイパー状のもの 7 (209～212)、ピエス・エスキーユ 8、打製石斧 1、磨製石斧 1 などがあり、他に石皿 1 (1538)、凹石 3 と使用痕を有する黒曜石剥片 28 の計 60 点と黒曜石の石核・剥片類が 116 点ある。(土屋 積)

(6) 住居址 39(挿図 51・52、図 54・111・158、図版 20・107)

遺構 CF 49 を中心に検出された G 型に属する住居址で、東側を住居址 71、西側を住居址 40、南側を住居址 55 によって切られている。上部には環状集石群がのり、集石 319 がある。床面は 16 基の土壌によって切られていた。

平面形は楕円形でその規模は残存壁から 9.25×8.40 m の II 期最大の住居址である。長軸方向は N 10°E であろう。壁は北側では良好であったが、西側は立上がりも明確でなく、不鮮明であり、床面も壁と同様北側を除いては軟弱であった。支柱穴は P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub> と集石 319 の下層にあると思われる 6 個が考えられ、うち P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub> は住居址 40 内に検出されている。P<sub>5</sub> 上面にある石は土壌 853 に伴うものであろう。その土壌 853 の北側にわずかな焼土が検出されたが、位置からみて、本住居址の主体をなす炉とは考えられず補助的なものであろうか。本来の炉は住居址 40 によって失われたであろう。

遺物 約 2,900 点が出土しており、うち土器片が 2,400 点を占める。しかし、土壌と上層にある環状集石群にともなう遺物の混入があり、II 期と判断できる土器片は 60 片と少ない。II 期の土器は II 群に属する

人為的なロームの堆積が行なわれたことに伴う遺物と考えられる。床面においても小円礫がいくつかある以外ほとんど遺物はみられない。図示した土器は、すべて中層を中心とするもので、一部が上層および下層のものと接合している。これらの点から、本址の遺物は、北西側からのロームの投げ込みに伴う、かなり短期間のうちに残された、時間幅の小さいまとまりのある遺物群と考えることができよう。

遺物 土器と石器があり、そのうち土器片は 118 点ある。土器はほとんどが II 期 IA (1707～1713) で他に

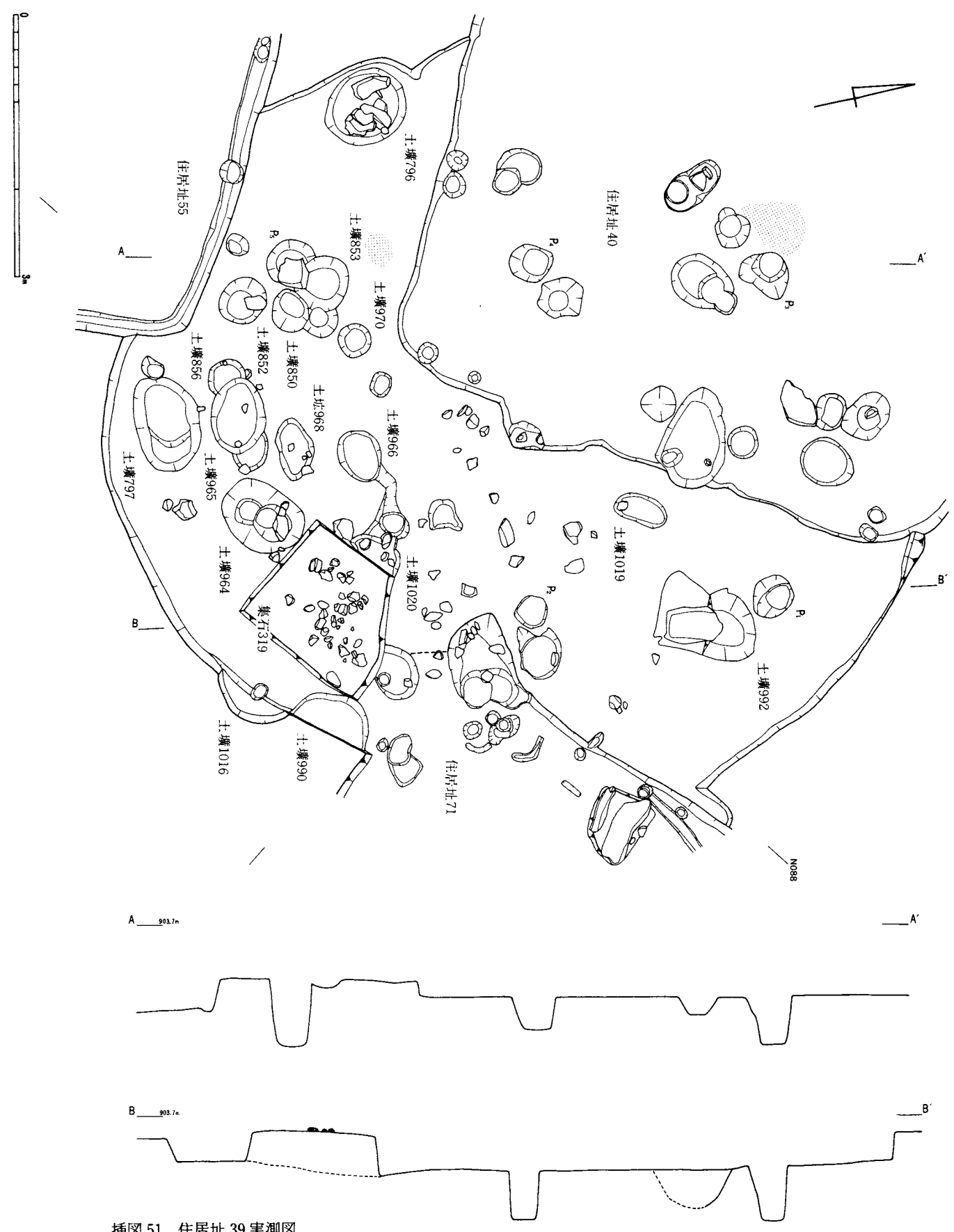
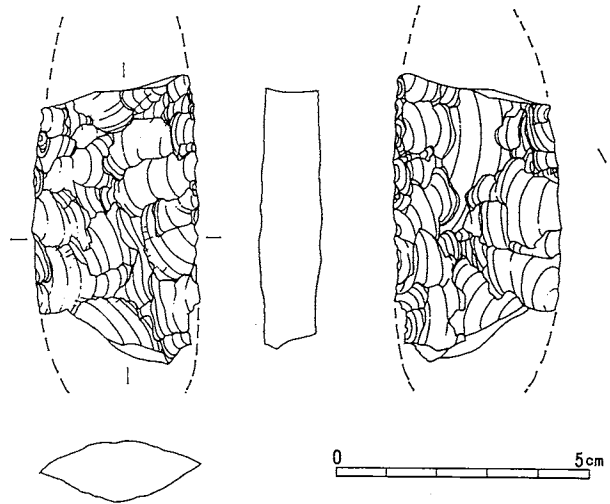


插图 51 住居址 39 实测图



95を除くと、他はすべてI群Aである。1714は床面より出土した小形土器で、口縁部に焼成後、途中までの穿孔痕がある。95は住居址29の遺物(1692)と接合している。

石器は石鏃45(252~271)、尖頭状石器1、石匙2(272・273)、スクレイパー11(274・282)、石錐7(275~280)、ピエス・エスキーユ8、使用痕ある剝片類24、有袂頭磨石器1(281)、石核状石器1、乳棒状磨製石斧1、凹石9、石槍1(挿図52)の計111点が出土している。II期からV期までの石器が混入しているであろう。石槍は埋土中より検出されたもので、先端と基部を欠いているが、長さ13cmほどの神子柴型に類似し、旧石器時代のものであろう。

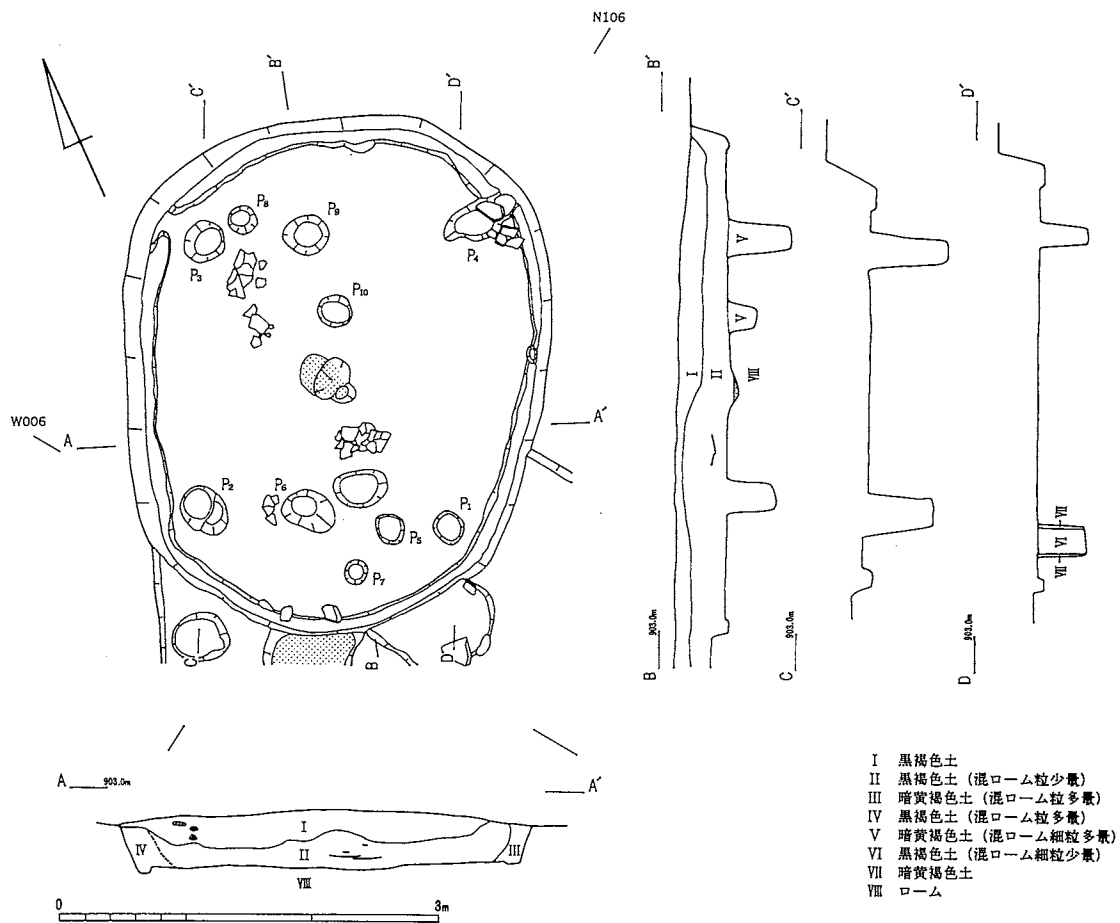


挿図52 住居址39出土石槍実測図

(佐藤 信之)

(7) 住居址48(挿図53、図114・162・227、図版20・39・109)

遺構 南壁辺が住居址49の一部に切られ、その下層に床面が検出された。住居址類型はA型であるが、平面型は4.00×3.05mで楕円形に近く、北壁側の幅が広い台形状である。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>で、平面形に対応した台形状となる。他にも支柱穴と思われるピットが7箇所にある。周溝は北西隅で15cmほど切れる他は全周する。壁・床面ともに遺存状態は良好で、特に床面は全体に堅い。地床炉は支柱穴を結ぶ交点上に



挿図53 住居址48実測図

あり、その規模は30×30 cmで、炉外の床面上にも一部火熱が及び焼けていた。

遺物 土器・石器があり、出土状態はA<sub>4</sub>型である。床面上、およびP<sub>4</sub>付近に1個体分(1736)、炉の南寄り床面上に3個体分(1738・1740・1741)が一部分を床面に密着して検出され、さらに、炉からP<sub>3</sub>にかけての部分に、床面より20~30 cm浮いた状態で2個体分(1735・1737)が出土した。これらは、II層上部の土器片とも接合しており、II層出土の他の土器類とともに一括遺物といえる。なお、I層からの土器の出土は少ない。

土器はII期IAがすべてである。1735は太い筥で格子目文を描いている。石器は石鏃6(383~386)、石匙1(387)、スクレイパー6(388・394・391・393)、石錐3(389・390・392)、使用痕のある剥片8(395)、石皿1、ピエス・エスキュー1、磨製石斧1(1481)の計27点である。これらの石器類はほぼ土器の示す時期のものであろう。

#### (8) 住居址54(挿図54、図56・116・164・165・230・231、図版21・135)

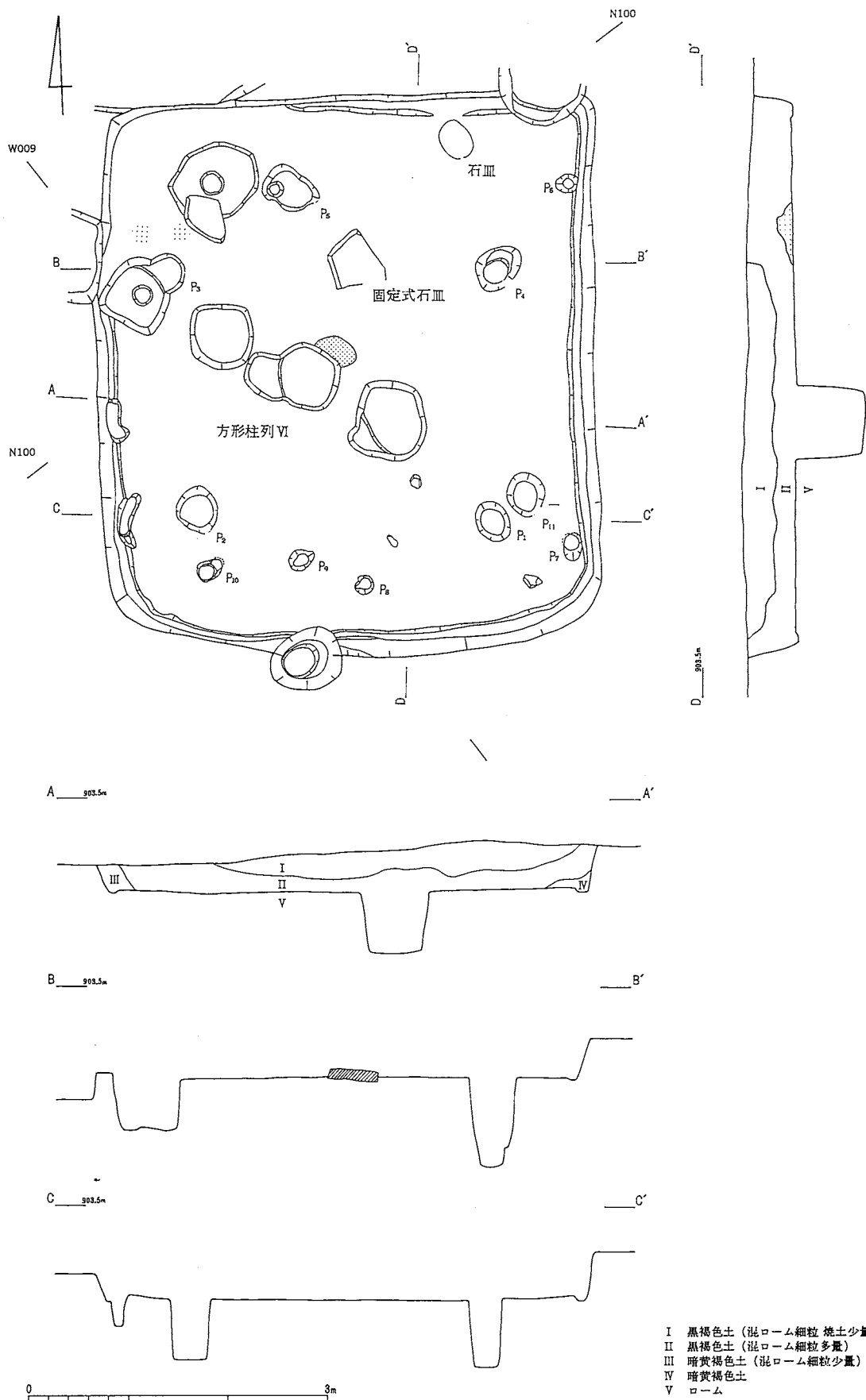
遺構 CB52を中心に検出された5.40×4.24 mのB型の住居址である。上層には環状集石群があるが、壁および床面の遺存状態はきわめて良好であった。壁および床面の一部は方形柱列VI・VIIIに一部分切られていた。周溝は北西隅を除いてほぼ全周する。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>で、住居址平面形の短軸方向に長軸をもって長方形に配置される。柱穴と思われる小規模のピットにはP<sub>5</sub>~P<sub>10</sub>があり、P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は壁柱穴であろう。地床炉は支柱穴を結ぶ交点のやや北側にあるが、方形柱列VIの一部が切られている。固定式石皿が地床炉のさらに北側の床面に設置されていた。また、北西隅の床面上には焼土塊が径30 cmの範囲に円形状に2箇所で見られた。

遺物 土器と石器があり、遺物の出土状態はB<sub>3</sub>型である。I層およびII層上部からは、III期I<sub>a</sub>の土器(186~188)がII期の土器群(156・159・161・164・168~170・172~174・183)とともに出土したが、II層下部(床面上20 cm)からはみられない。そのII層下部からは細片をのぞくとII期IA(155・157・158・160・162・165・166・1749・1750)49片、IB(167・169)4片、II群(175~182)11片、III群A<sub>2</sub>(192)、B<sub>2</sub>(191)各1の計66片である。そのうち器形の分るものは2個体にすぎない。

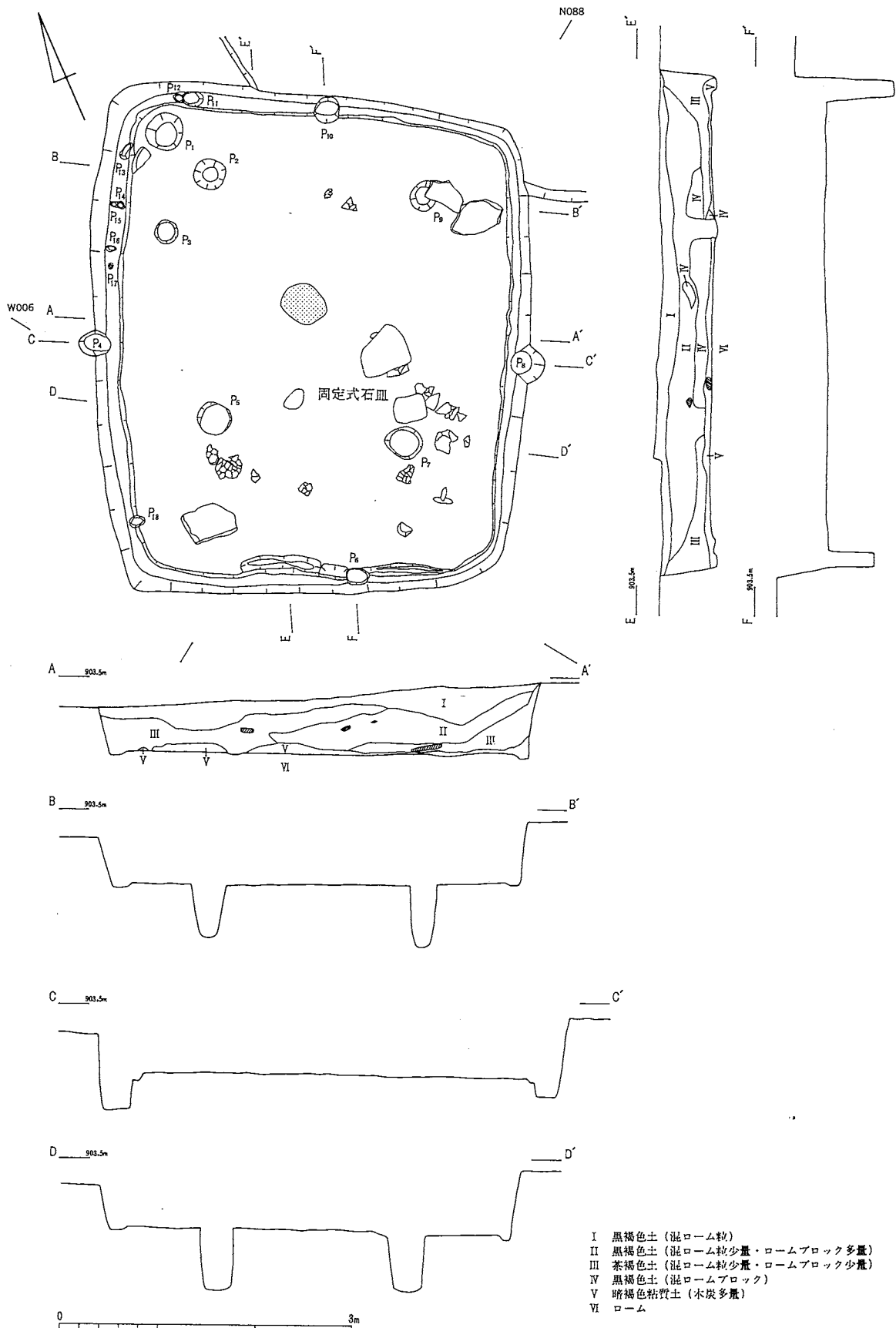
石器の出土数は総計163点に達する。その中でII層下部からは石鏃11(427・430~432・435~439・442・444・446・447)、尖頭状石器1(448)、石匙1(453)、スクレイパー7(454~457・459)、石錐3(461・463・466)、ピエス・エスキュー6、使用痕ある剥片が38、有袂頭磨石器1(450)、袂入刺突具1(458)、凹石2、固定式石皿1(1535)、石皿2(1540・1544)、円礫状石器2、先端研磨石器2の計77点が出土し、使用痕のある剥片52%で最も多く、次で石鏃15%、スクレイパー9%の順となる。このほか埋土全域から黒曜石石核・剥片類の出土が多く、総計は1,005点で総重量は2,784 gとなる。II層下部出土の石器はほぼII期に所属すると考えてよいであろう。

方形柱列と住居址埋土の土器の出土状態はかなり明確に区別できる。住居址埋土出土の土器の接合関係は、I層でのIII期I<sub>a</sub>の1例をのぞいてすべてII期で5例がある。いずれもII層下部での接合関係であり、方形柱列掘り方埋土出土土器との接合関係は認められなかった。他方、方形柱列の掘り方下部からはII期が主として出土するが、その上部ではIII期I<sub>a</sub>(185・189・190)が、II期(171・184)とともに出土している。土壌埋土のIII期I<sub>a</sub>の出土レベルは、住居址埋土のそれよりも若干下るかほぼ等しい。その層位(II層上部)は住居址54の検出面より10 cm前後下る。

従って、この場合には2通りの解釈がなりたとう。その1は住居址54の埋没がII層上部までの堆積終了後、方形柱列が作られ、その廃絶後に住居址54 II層上部からI層へと堆積が続行した場合、すなわち、方形柱列構築にあたっては、整地がなされなかったことを意味する。その2は住居址54の埋土堆積がほぼ終



挿図 54 住居址 54 実測図



挿図 55 住居址 55 実測図

了したのちに方形柱列を構築した場合である。この場合はⅢ期の堆積層(Ⅰ層)を切ることになり、その構築時期はⅢ期を含めた以降となろう。しかし、方形柱列には環状集石群がその上部に構築されていることにより、Ⅳ期以前となり、方形柱列Ⅵの構築時期はⅢ期の中に求められる。以上の解釈は決定的な根拠は持ちえなかったが、方形柱列掘り方内の土器の出土状態ではⅢ期の土器片がいずれも住居址 54 Ⅱ層上部からさほど深くなく、掘り方下層からの出土土器片はすべてⅡ期のものである点を考慮すれば、Ⅱ層上部が方形柱列の掘込面であり、掘り方上部でのⅢ期の土器片は何らかの理由による混入と考えるべきであろう。従って、方形柱列Ⅵの構築はⅠの解釈がほぼ妥当といえよう。すなわち、住居址 54 廃絶後、さほど整地されることなく構築されたもので、阿久Ⅱ-b 期後半か、Ⅱ-c 期にその時期が求められよう。方形柱列Ⅷも住居址 54 を切る所から、ほぼ同一時期と思われるがはっきりしない。(笹沢 浩)

(9) 住居址 55(挿図 55、図 116・117・172・229・230・231、図版 21・110・137)

遺構 CF 52 を中心に検出された AE 型の住居址である。Ⅱ期の住居址群の東部にあたり、北東側で住居址 39 と切り合う。また住居址南辺埋土中に立石をもつ土壇 670 があった。

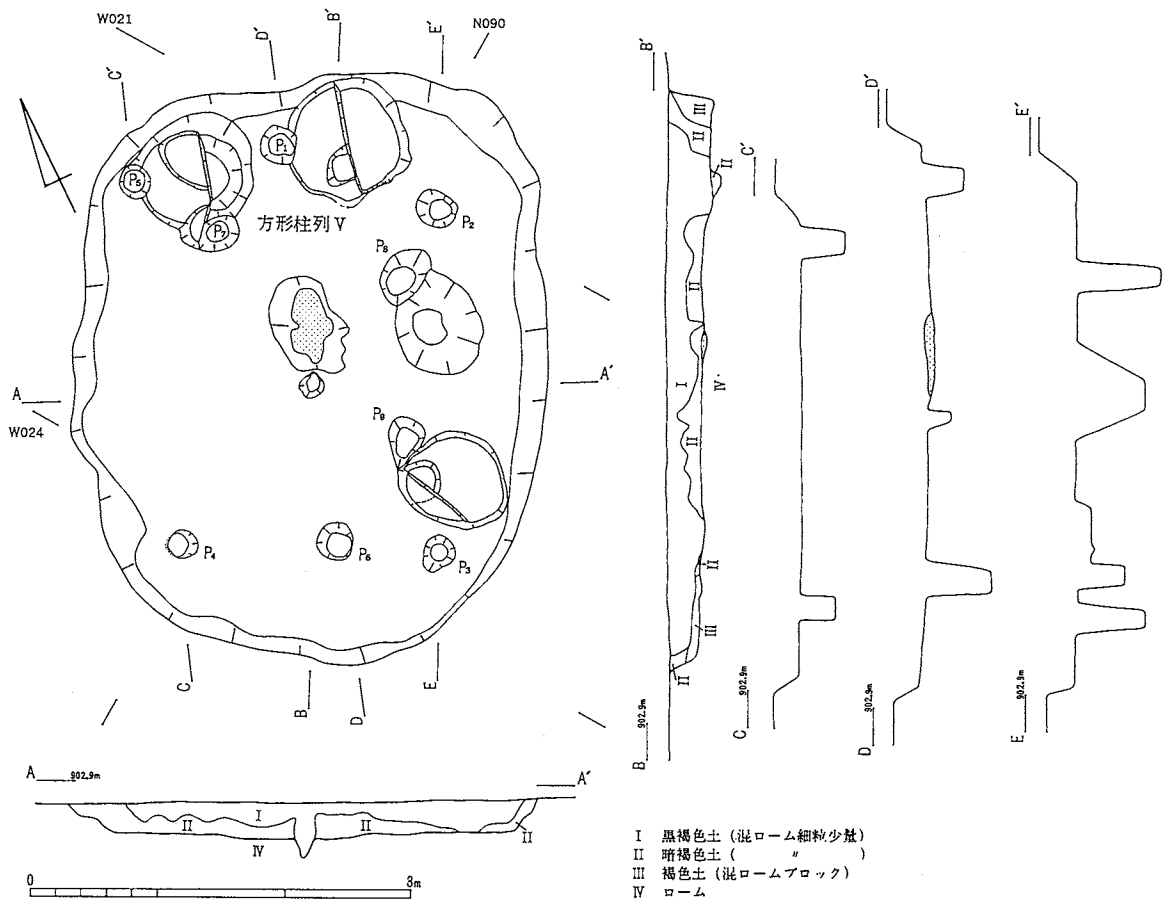
プランは台形で、規模 5.00×4.24 m、長軸方位 N 25°E である。ローム層に深く掘り込まれた壁は、非常に堅くしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がる。東側コーナーから北壁の約 2/3 までの範囲は、同じⅡ期に属する住居址 39 の床面を深く切り込んでいる。最大壁高は 55 cm である。床面は全体に平坦で、堅くしまり良好であった。周溝は深さ平均 5 cm で全周する。北隅周溝内に深さ約 10 cm の小ピットが数個検出されたが、その性格は不明である。また、南壁にある P<sub>6</sub> の両側には約 2 m にわたって 2 本の周溝がみられた。支柱穴は P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>9</sub> である。また各壁のほぼ中央部分に P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub> があるが支柱穴であろう。P<sub>4</sub>・P<sub>8</sub> は壁外に一部で。地床炉は支柱穴を結ぶ交点上にあり、焼土の厚さは 2～3 cm とごく薄かった。

遺物 土器と石器があり、出土状態は A<sub>4</sub> 型に分類される。遺物総数は 1,980 点あり、その約 70% が土器、30% が石器類である。土器はほとんどがⅡ期 IA であり、大きめの破片も比較的多いが、土器片総数が多い割には器形がうかがえるところまで復元できたものはやや少ない。床面一括土器は 1755・1756・1758・1759 で、1755 は P<sub>7</sub> のすぐ東側、1756 は同じく北側、1758 は P<sub>6</sub> の南西、1759 は長軸上の南壁より約 1 m 内側から、それぞれ出土した。1751～1754・1760・1761 は、埋土中に検出された。なお 1762～1765 はⅣ期で、すべて検出面近くの出土で、上層の集石に伴うものであろう。

石器は比較的多い。石鏃 27(624～643)、石匙 5(645・649・650)、スクレイパー 15(644・646～648)、石錐 3(651～653)、ピンス・エスキーユ 27、使用痕ある剝片 74(654)、有袂頭磨石器 2、石核状石器 1、打製石斧 1、磨製石斧 1(1517)、先端研磨石器 1、尖頭状石器 1、凹石 15、石皿 2(1545)、敲打器 1 の計 176 点がある。石皿はいずれも埋土上層からで、この他に、固定式石皿と呼べるものが、P<sub>7</sub> 北側の床面から 2 点(1536) 出土している。(岩崎 孝治)

(10) 住居址 57(挿図 56～58、図 165・228、図版 21・137・177)

遺構 CF 62 を中心に検出された C 型の住居址である。北東方向に少し離れて住居址 56 がある。ローム漸移層中で検出され、当初から方形柱列Ⅴと切り合っている状態がはっきり確認された。すなわち、方形柱列Ⅴの北辺の掘り方 2 個と、東辺の掘り方 3 個の合計 4 個(1 個は重複する)が、軸方向をほぼ同じくする住居址 57 のプランの北辺部と東辺部の内側に、それぞれ沿った形で予測されるという状態を呈していた。この時点で、住居址 57 と方形柱列Ⅴとの新旧関係は、住居址 57 の埋土が一様であることから、住居址 57 が方形柱列Ⅴより新しいという判断をした。しかし、最終的に、土層観察、遺物の出土状態、床面の状態



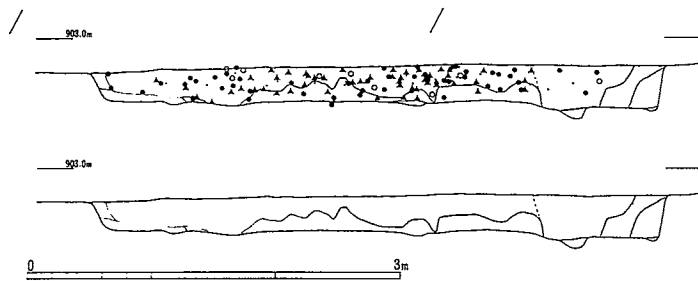
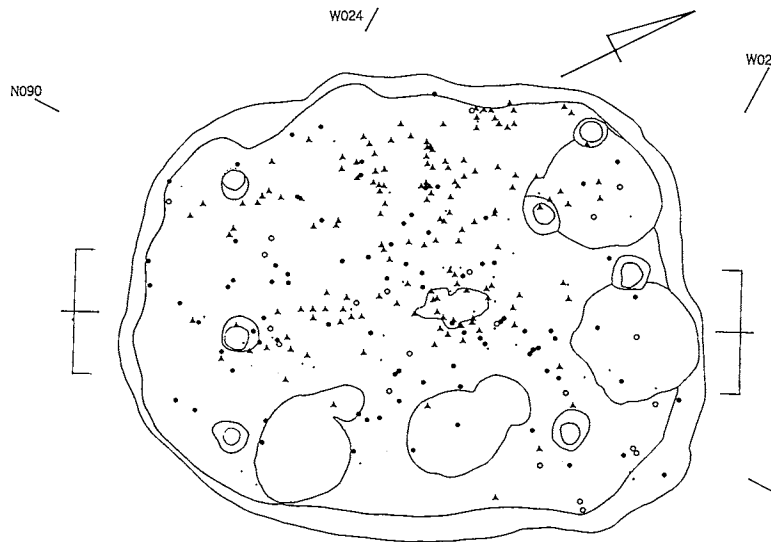
挿図 56 住居址 57 実測図

等を総合的に検討していく中で、当初の判断とは逆の結果が出た。すなわち、住居址 57 内の方形柱列の掘り方にはいずれも貼り床がみられないことと、住居址 57 の出土遺物中には焼成を受けた粘土塊が多数あるが、方形柱列 V の掘り方部分にはそれらがみられない(挿図 57)という事実から、方形柱列 V が新しいという結果となった。これは住居址 57 の埋土がある程度堆積したのちに、方形柱列が構築されたことを示しているといえよう。

住居址プランは、隅丸長方形で、規模 4.30×3.36 m、長軸方位 N 26°E である。ロームに掘り込んだ周壁は堅くしっかりしており、最大壁高は 28 cm ある。床面は多少の凹凸はみられるが、堅くしまっていてほぼ平坦である。支柱穴は P<sub>2</sub>~P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>で、他は補助的な柱穴と思われる。なお、P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>と方形柱列 V との切り合いは明確にできなかった。地床炉はやや北寄りに位置し、床面をやや掘り込み、厚さ約 10~15 cm の硬化した焼土が検出された。その周囲もかなり広範囲にわたって熱を受けたと思われ非常に堅かった。

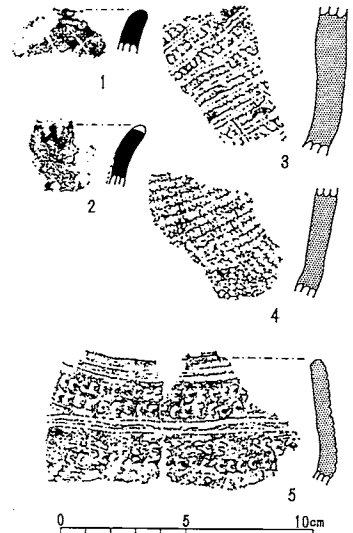
遺物 黒褐色土の I 層にほとんど含まれ、壁際と床面付近にはみられない(出土状態 B<sub>3</sub>型)。土器、石器や焼成をうけた粘土塊があり、それらはほぼ同様な出土状態を示し個々に際立った特徴はない。ただ、平均 4~5 cm 大の黒曜石の原石及び石核十数個が、北隅付近に床面から約 15 cm 程浮いて出土している。その広がり約 50 cm 四方であり、一括遺物と考えられる。

出土遺物総数は 540 点である。剥片・原石等も含めた石器類が多く約 44% を占め、次いで焼成をうけた粘土塊が 29%、土器片はわずかに 27% である。土器はほとんどが II 期 IA(挿図 58-1・2)の細片で器形を推定できる例はない。他に繊維土器が 3 点出土しているが、3 は II 期 II 群、4・5 は III 期 II 群と思われる。定形石器は、石鏃 2(469・470)、石匙 1(471)、スクレイパー 3(473・474)、ピエス・エスキーユ 7、使用痕ある剥片 8(472・475・477)、石核状石器 1(476)、磨製石斧 1(1494)、凹石、滑石製品 1 の計 28 点のみで少な



- |  |   |
|--|---|
| <p>土器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● II期I群A</li> <li>○ 上記以外</li> <li>・ 微細片</li> <li>▲ 焼成を受けた粘土塊</li> </ul> | <p>石器</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>石鏃</li> <li>石匙、削器</li> <li>使用痕のある剥片、ピエス・エスキュー</li> <li>凹石</li> <li>原石、石核</li> <li>層片、剥片</li> </ul> |
|--|---|

挿図 57 住居址 57 遺物出土状態図



挿図 58 住居址 57 出土土器拓影図

く大半が剥片・原石類である。

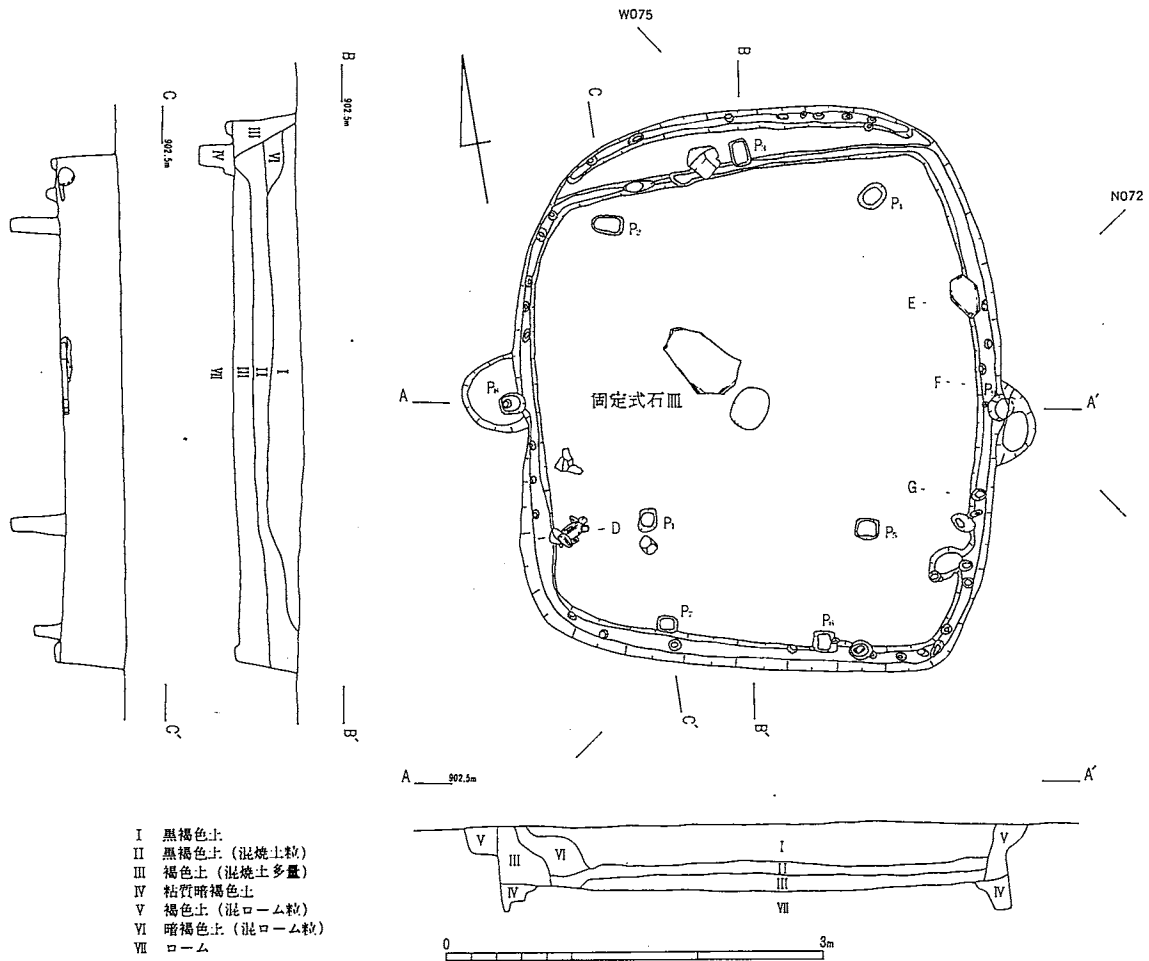
なお、本址特有の遺物として、焼成を受けた粘土塊がある。砂粒をほとんど含まない橙褐色のきめ細かい胎土の塊である。ただの粘土の塊だが、その中には半截竹管による沈線がわずかに認められるものがある。土器作りと何らかの関連がある遺物と考えてよいだろう。(岩崎 孝治)

(11) 住居址 64(挿図 59~61、図 57・120・121・166~169・230・231・235・239、図版 22・111・112・138)

遺構 CN 88 付近に位置し、環状集石群の下層、ローム漸移層上面で検出した。上層(I・II層)は円礫を含んでおり、南西壁際には集石状のものも認められる。礫のひろがりの下端は住居址中央で床面より 15 cm、壁際で 50 cmほどである。

本址は周溝の状態から、北側へ一度拡張されたと考えられるが、それに伴う柱の建て直しは確認できなかった。P<sub>3</sub>が拡張によって増設されただけである。拡張後の床面はそれ以前のものよりわずかに高くなっており、周溝は以前のものに接続していない。拡張前は整った隅丸台形であり、拡張によって北側がややまわくなっている。規模 4.30×3.75 m、長軸方位 N 7° E の AD 型の住居址である。現壁高 40~55 cm で壁の上半は漸移層中であってやや不明瞭である。床面は平坦で堅く、その直上は焼土を多量に含む層であった。周溝の深さは 5~10 cm 程度で、小ピットが多数あり、その深さは 10 cm 弱のものが多い。支柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> であり、P<sub>5</sub>~P<sub>9</sub> は支柱穴であろう。そのうち P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub> は入口部の施設と考えられる。壁中の P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub> の周囲は土壌状になっているが、漸移層中への掘り込みのため明瞭ではなく、柱穴の掘り方の可能性もある。炉はほとんど掘り込みのない地床炉であり、焼土は薄い。

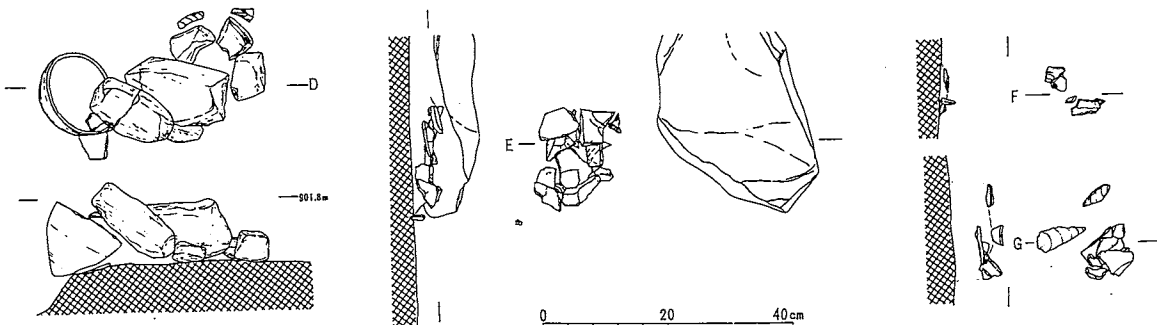
遺物の出土状態 埋土下層の焼土を多量に含む層は東壁側で薄く、北壁・西壁側で特に厚い。また、北西側には I 層との間にローム粒を含む間層がある。以上のことから、本址は火災を受けて廃絶した直後に、



挿図 59 住居址 64 実測図

北西側で人為的な堆積が行われたものと判断できよう。ただし、炭化材はほとんど出土していない。遺物はI層と床面からが大部分であり、焼土粒を含む層の堆積が短期間であったことを示している。床面では、器形わかる土器3個体、石器3群(挿図60のE・F・G)、炉の近くに大形の平石(石皿)、壁際に裏返しの状態で出土した石皿など多くの遺物が検出された。他に褐鉄鉱塊7個(D)と石皿の周囲に赤色顔料(酸化鉄と思われる)が3個所で出土した。褐鉄鉱は土器下半とともにあって、それに入れられていたようである(遺物の出土状態A4型)。

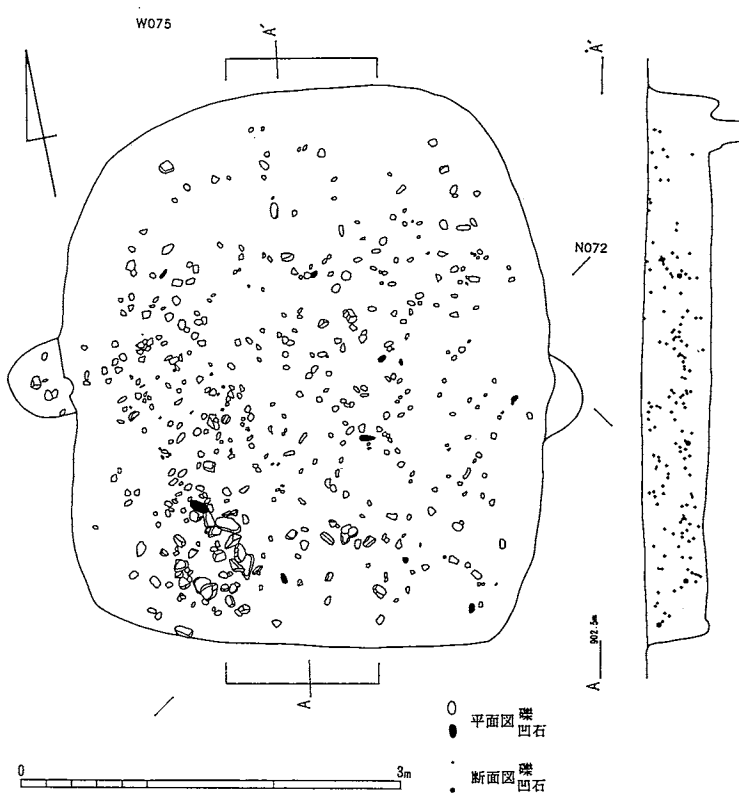
遺物 土器片は総数約600点あり、そのうち1782、1794、1795が床面出土である以外、すべて埋土出土の接合したものである。口縁部形態が多様であり、厚手と薄手の二者があり、前者より後者が整形も丁寧で焼成が良いものが多い。埋土出土の口縁部片は40個体以下である。このうちII期IAは34片で12片が口縁部に刻目があり、他はない(1796~1829)。その他は小波状で櫛描の施文があるもの(197)、同じく連続爪



挿図 60 住居址 64 石器出土状態図



形文があり口唇に刻目をもつもの(198)、列点文を持ち頸部に横位貼付隆帯を有して、口唇部と隆帯に刻目のあるもの(199)がある。他に無節斜縄文の粗製繊維土器(200)、突起を有したコンパス文をもつ関山式土器(201)、羽状縄文で口唇部をナデで整形するもの(209)がそれぞれ1片ある。波状部分の破片や粘土紐を貼付した例がほとんどないことから、平口縁、無装飾の深鉢(II期I A)が組成のうえで主体を占めるといえよう。これら以外の拓影は、検出面あるいはその前後で見出されたもので、集石面と明確に区別できないが、202・203・207・208のII期II Bは本址に伴うであろう。



挿図 61 住居址 64 礫出土状態図

器形を復元しうる土器のうち床面

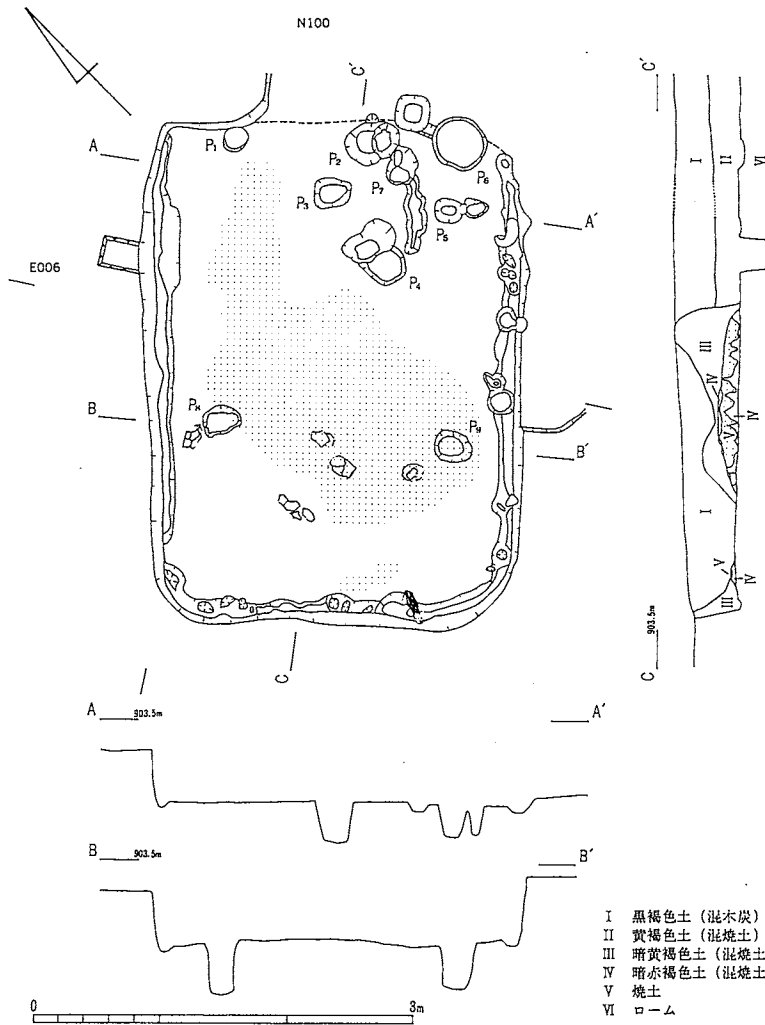
出土の3点は良好なセットである。1782・1795は非常に丁寧に作られ、明るい色調で、1794は厚手でやや粗製である。いずれも尖底部の形態に特徴があるI Aである。II期II Bは1791と200の2個体があり、いずれも粗い無節斜縄文を施し、多量の繊維を含み内外面とも粗雑な仕上げである。

石器は床面より一括して出土したものが多く、他と比べてもかなり多い。石器群Eはスクレイパー11(479・481~486・488・491~493)、石錐状の石器1(496)、石匙1(495)、剝片1(506)の合計14点で構成される。頁岩製が多く、黒曜石製品は3点あるだけである。また、スクレイパー2点がそれぞれ剝片と、1点が破片と接合しており、検出時には17点で構成されていた。石器群Fは、スクレイパー2(480・489)、石鏃1(490)、有扶頭磨石器の破片1(497)、剝片1(505)で構成され、すべて黒曜石製である。石器群Gは、スクレイパー2(478・487)、尖頭器状の石錐1(494)、剝片4(498・501・502・504)、石核1(500)で構成され、すべて頁岩である。以上の3群のほかには床面からは石皿の完形品1点(1542)、固定式石皿1点(1537)、剝片4点(499・503)などあり、剝片はすべて黒曜石である。

埋土中から出土した石器は石鏃16(507~522)、石匙6(523~525・527~529)、スクレイパー15(526・530~541)、石錐5(542~546)、有扶頭磨石器5(547・549・550・552・553)、挟入刺突具2(548・551)、凹石11、小形磨製石斧1(556)、ピエス・エスキーユと思われるもの18、使用痕を有する剝片25、細石核状のもの1(555)、先端研磨石器1(1671)など計106点と、黒曜石の石核、剝片類197点がある。石材は石匙・スクレイパー類に頁岩が多いが、他はほとんどが黒曜石である。

床面では、石皿から約15~40cm離れた位置に赤色顔料を3箇所検出した。いずれも径4~10cm、厚さ0.5~4cm程度で、出土状態からみて、何かに包まれていたものと考えられる。出土時はかなり鮮やかな橙赤色を呈していたが乾燥するにしたがって、褐鉄鉱に似た赤褐色となった。乾燥重量でそれぞれ54.3g、5.5g、18.8gの合計78.6gあり、極めて微細な粉末で不純物はほとんど含んでいない。また、Dで示した褐鉄鉱塊は計7個で2.25kgあり、中に植物遺体を含むものである。これを粉碎、精選すれば前者のような顔料になると思われる。以上のように完形土器はないものの、本址の床面遺物は多種多様であり、特に石

(12) 住居址 78(挿図 62、図 59・124・125・174、図版 23・113)



挿図 62 住居址 78 実測図

遺構 住居址40に近いCA 47を中心として検出された住居址である。北東部を住居址66・81に切られているが、床面のレベル差及び周溝により、ほぼ住居址の全容を把握できH型と認定できる。

長方形の小形の住居址で、規模は3.90×2.82mである。火災を受けているため中央部には、かなり大きな広がり焼土や炭化物を含む層が、10~20cmの厚さで検出された。III層が中央部分で検出面までもり上がっており、単なる自然堆積とは考えにくい。床面はロームを掘り込んでおり、一部焼土化した部分もあったが、堅くしまっており、壁もほぼ垂直で良好であった。

北東の一部を除いて周溝は全周しており、その中には小ピットが検出されているが5cm前後で浅い。北東部に見られる7個の

ピットは、本住居址のものとしたが、住居址 66・81 との関係もあり明確ではない。支柱穴は P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub> の 2 個か、P<sub>3</sub> を加えた 3 個が考えられる。炉はおそらく P<sub>3</sub>、P<sub>9</sub> の中央に見られる焼土化した床面の部分であろう。

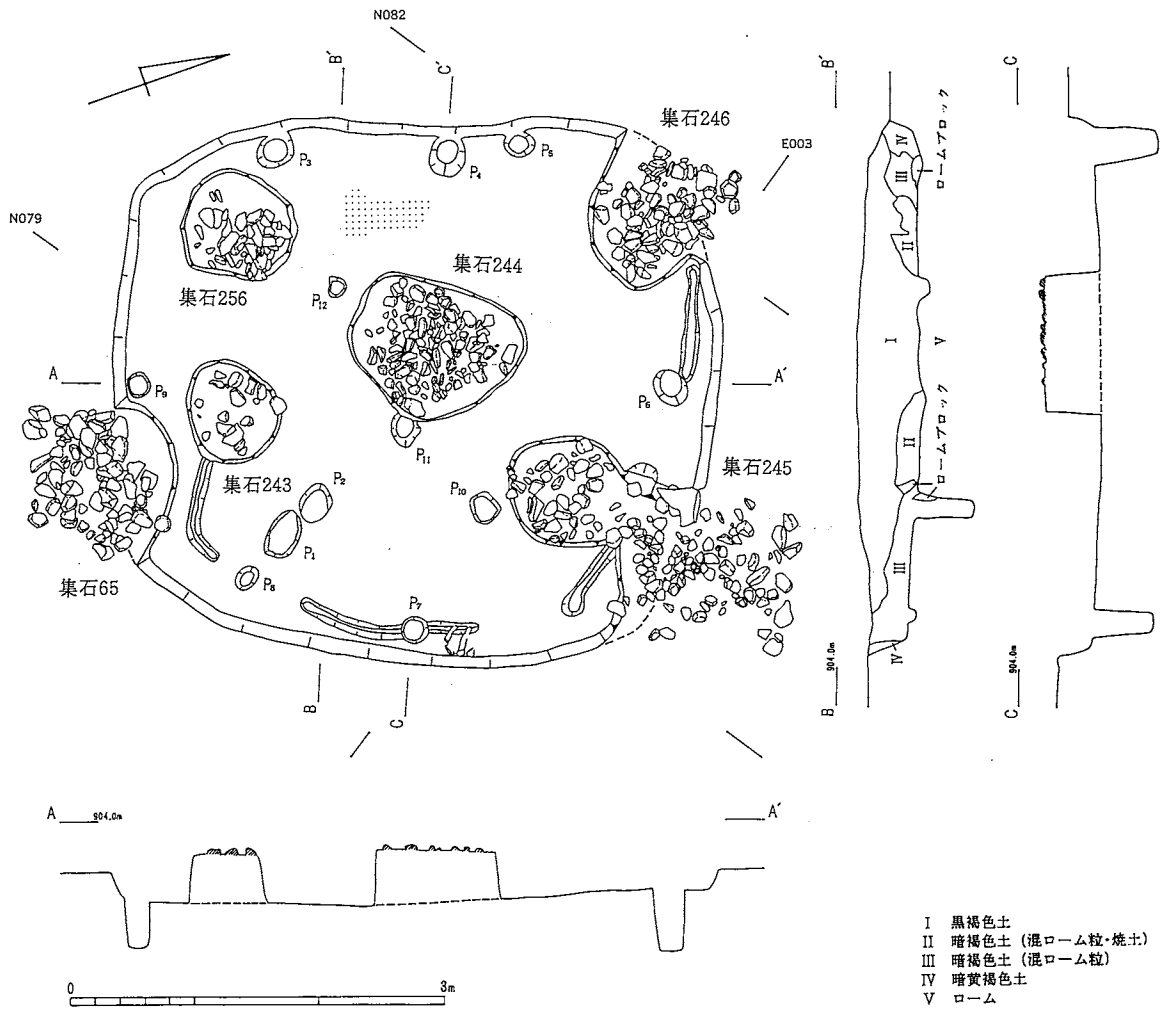
遺物 全体的に少ないが、接合可能な土器が一括して 3 個体床面より浮いた状態で出土している(出土状態 B<sub>4</sub>型)。床面や焼土内からの遺物は少ない。土器は II 期 I A(265・266・1855・1857~1859)と II 期 I B(1856)があるが、ほとんどが薄手の I A である。1856 は繊維を多量に含んでおり、内外面に粗い指オサエが施されている。

石器は石鏃 1(711)、抉入刺突具 1(714)、石匙 1(715)、スクレイパー 2(712・713)、使用痕ある剝片 4 の計 9 点が出土しているのみである。

(13) 住居址 80(挿図 63、図 59・118・175・225、図版 23・111・142)

遺構 CJ 49 を中心として検出された住居址であり、住居址 25・26・71 が隣接する。上面には 5 基の集石(集石 65・244~246・256)があり、それを残しての調査であるため、完掘はできなかった。周溝・柱穴より拡張のあったことが考えられる。

壁のかなり内側を巡る周溝が拡張前の a で、プランは西側部分の周溝を欠くために、明確にできなかった



挿図 63 住居址 80 実測図

だが、住居址類型 A の可能性が強い。

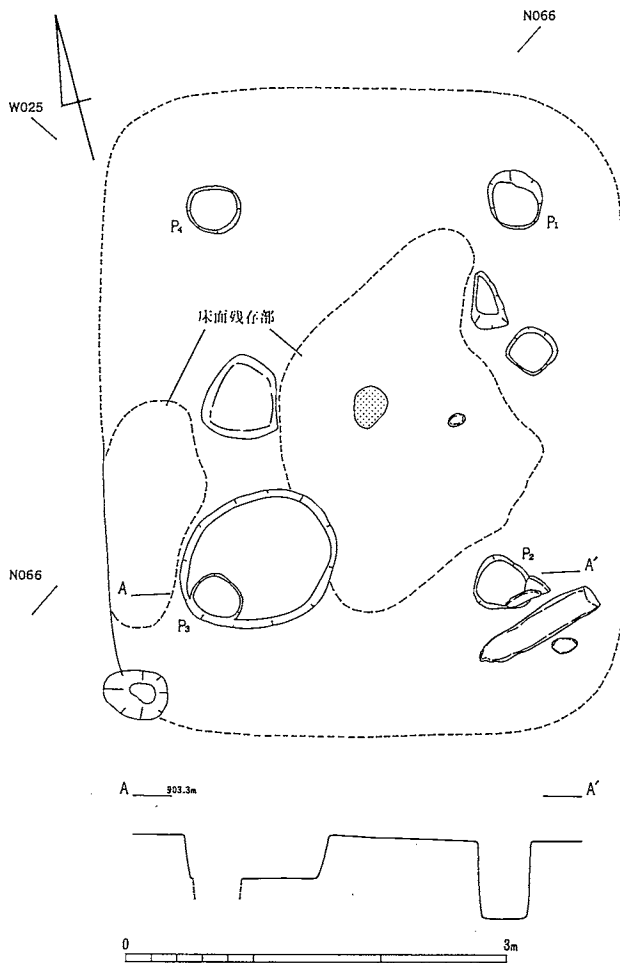
拡張後の b は東壁がやや膨らみをもつ住居址類型 A となり、規模は 4.32×4.08 m である。床面はロームで堅く、炭化物などの出土はなかったが、ほぼ全面が焼けていた。周溝は認められない。

支柱穴は位置・規模から、a が P<sub>2</sub>、b が P<sub>1</sub> と考えられるが、他の位置には集石があり明らかではない。各壁の中央部には支柱穴があり、その配置は C 型に属する。このほか壁寄りに 3 本の壁柱穴と思われるピットがある。

遺物 約 700 点があり出土状態は A 型である。そのうち土器は床面からの一括土器 2 点(1767・1768)のほか、267~274 など II 期 I A が過半数を占める。特に頸部から口縁部にかけて、細線格子文が施されているものが多い。1767・1768 は共に薄手である。274 は頸部に横位の隆帯があるが、本遺跡では類例は極めて少ない。275 は半截竹管による平行線上に無造作に爪形を施したもので II 期とは断定できない。276・277 は III 群である。

石器は石鏃 13(716~720)、抉入刺突具 1(721)、石匙 2(722・723)、スクレイパー 4(726)、石錐 3(727・728)、ピエス・エスキーユ 3(729・730)、使用痕ある剝片 23(724・731・732)、複数抉入石器 1(725)、石核状石器 1、打製石斧 1(1415)、先端研磨石器 1、凹石 1 の計 54 点が出土している。種類が多く、石鏃と使用痕ある剝片の出土の多いのが目につく。しかし、本社が 2 回にわたる拡張のある住居址であることを考えれば一般的であるといえよう。

(佐藤 信之)



挿図 64 住居址 14 実測図

遺物が床面レベルまで出土しており、角柱石はIV期の段階である可能性が強い。つまり、本住居址の少なくとも一部はIV期段階に破壊されたと考えられる。

(笹沢 浩)

## 2) 阿久II-b期

### (1) 住居址 14(挿図 64、図 51)

遺構 IV期土壌群密集地域にあたるCR 62を中心に検出された。竪穴掘り方の掘込面が漸移層中にあり、かつ浅かったらしく、壁の確認はほとんど不可能であった。しかし、支柱穴・床面の一部、地床炉の検出からその存在が確認できた。支柱穴は $P_1 \sim P_4$ でほぼ方形に配置されていた。地床炉はそれら支柱穴を結ぶ交点上にあり、床面は地床炉の周辺および西側に良く残っていたが、他は不明確であった。

遺物 住居址掘り方の確認が床面に達するまでできなかったために、遺物の出土状態類型は不明である。わずかに一部の床面上にII期IAの土器片(1~5)が検出されたことにより、その所属時期が決定できたにとどまる。また、黒曜石の石核類が炉周辺の床面上に10数点出土した。その他、 $P_2$ に接して安山岩の角柱石が横転して出土した。この付近にはIV期の

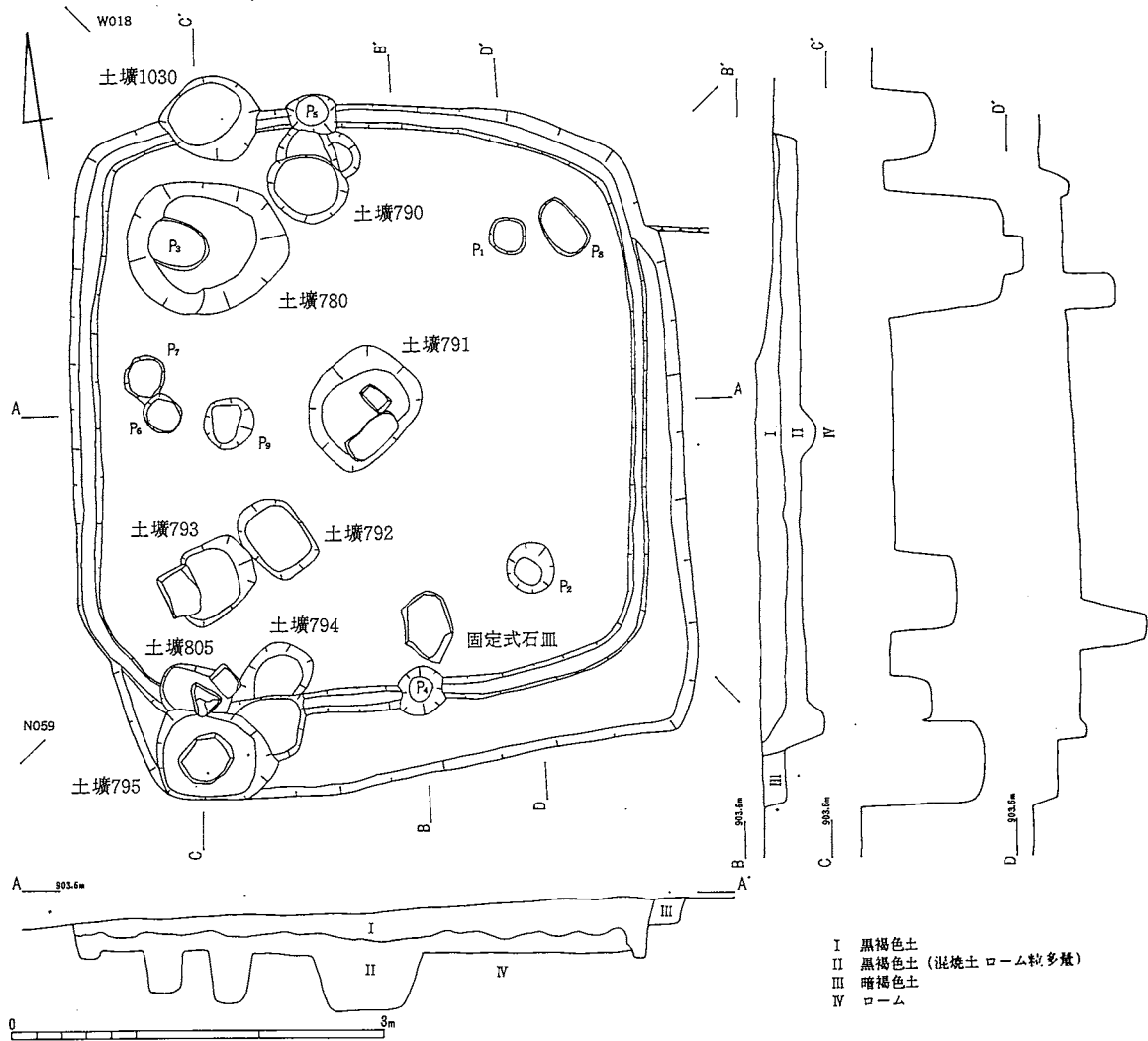
### (2) 住居址 15(挿図 65、図 51・105・151・229・240、図版 24・104・132)

遺構 CU 58 付近のII期住居址群の中では最南端に検出されたC型の住居址である。初年度にその存在を確認していたが、大部分が農道下であり、次年度に調査を見送ったものである。また、IV期土壌群の中心地帯にあるために、土壌 780・790~795・805・1030の9基が壁および床面に穿たれていた。従って、一部柱穴と炉の検出はできなかったが、その全体像は確認できた。

床面や遺物の出土状態等から新・旧2回にわたる建て替えを想定した。住居址 15(旧)は周溝がなく、南壁と西壁およびそれに続く床面の一部を検出したが、その遺存状態は良好であった。平面形は(新)とほぼ同一であろうと思われる。推定規模4.50×3.90mである。

住居址 15(新)は(旧)の西北寄りに、床面を20cm掘り下げて構築しており、壁および床面の遺存状態は、IV期の土壌に一部切られているものの、その部分を除いては極めて良好である。支柱穴は $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ とさらに西南隅に土壌 793によって破壊されたとと思われる1個の計4個であろう。他に壁柱穴らしい $P_4 \cdot P_6$ があるが、(旧)にともなうかどうか不明である。地床炉は存在したであろう中心部分に土壌 791があり不明である。長軸方向は $N 8^\circ E$ で、4.82×4.55mの規模である。

遺物 土器と石器があり、出土状態は $B_1$ 型であるが、土壌部分及びI層上部にはIII期(1665)やIV期の遺物がみられる。細片を除くII期にはI・II・III群土器がある。IAが175(6~14・1663・1664・1666・



挿図 65 住居址 15 実測図

1668~1670)、IB 11(1667)、II群が4(15~17)、III群A<sub>2</sub> 1(9)の計191片である。II群はループ文(15)と異条斜縄文(16・17)が半数ずつある。III群A<sub>2</sub>は床面上で安定した状態で出土しており、本住居址にともなうものであろう。

石器は総数58点のうち、II層は石鏃7(84~88)、石匙1(90)、スクレイパー3(91・92・94)、石錐2(93)、有袂頭磨石器2(96・97)、ピエス・エスキーユ2(99)、使用痕のある剥片14(98)、凹石2の計33点である。なお、後日検討の結果、住居址内遺物のうち、石匙(89)、瑛状耳飾(1706)は土壌794、小形磨製石斧(1524)は土壌791埋土出土となった。が、その帰属時期等は明らかでない。(笹沢 浩)

(3) 住居址 24(挿図 66、図 51・105・146・147、図版 25)

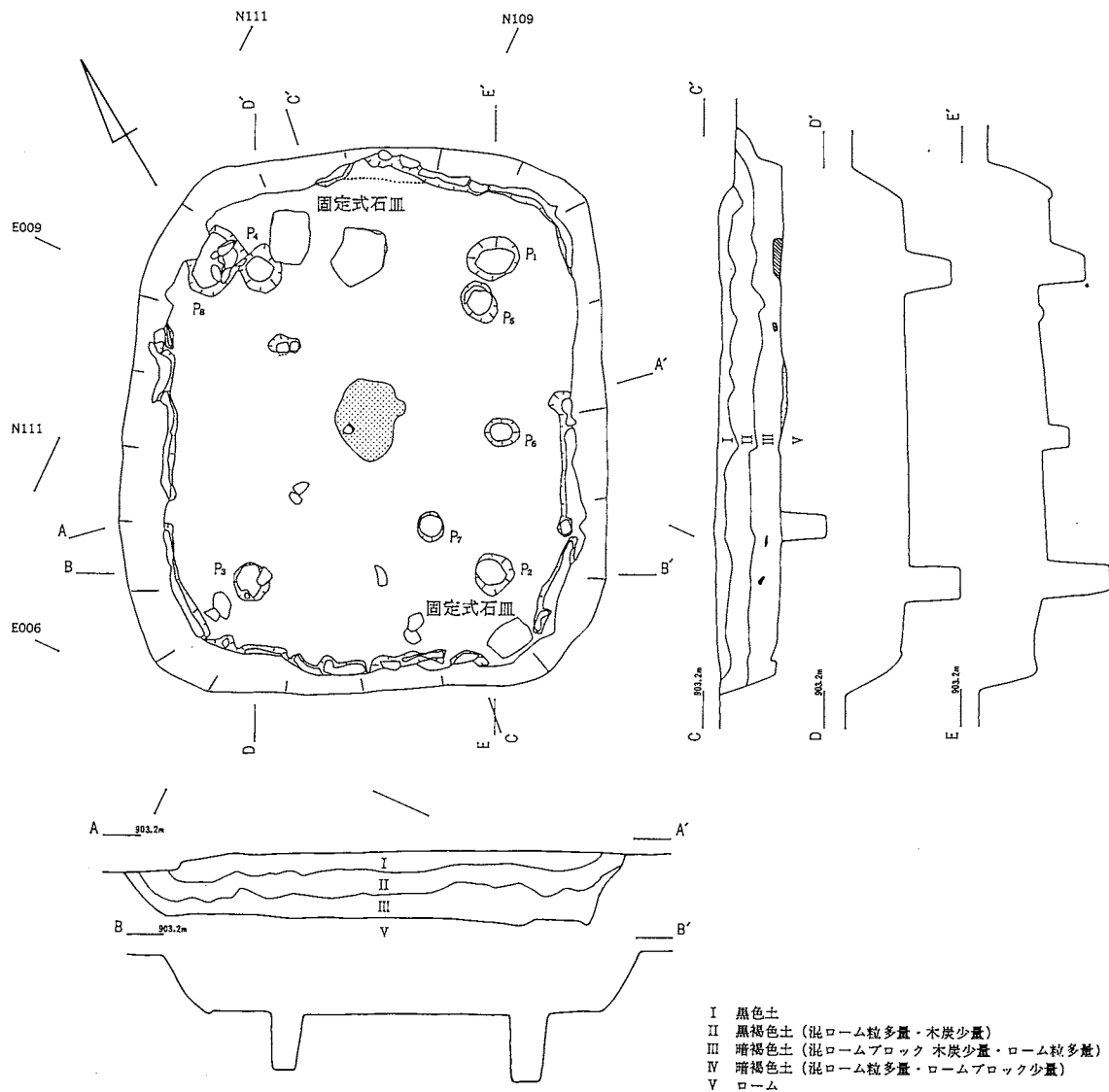
遺構 住居址 32の北東、BU 45付近のわずかな北西向き傾斜面上に検出された。隅丸方形のプランで方形にP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4個の支柱穴をもつC型の住居址である。長軸方向はN 32°Eでありほぼ等高線に沿っている。壁高は南側が高く、北・西側が低い約40cmを測る。緩やかな傾斜をもって立ちあがるが、壁上端部の崩落が考えられ、本来のものではないであろう。床面は堅くしまっており平坦で良好である。周溝はかなり凹凸があり、東壁および北西隅が途切れる。支柱穴以外のピットではP<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>のほぼ2等分線上に位置するP<sub>6</sub>や、30cm以上の深さをもつP<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>は支柱穴と考えられる。支柱穴の交点上に大きく楕円形に掘り下げた地床炉が設けられており、4cm前後の焼土が堆積していた。また、床面上の北壁近くに2個、南東隅

に1個の固定式石皿が置かれていた。

遺物の出土状態 土器は住居址中央部で床面より10cm程高い位置に、II期の半完形土器1個体分(1671)が一括出土したほかは、ほとんどが細片でI~III層に散在しており、出土状態はB<sub>2</sub>型である。よく観察すると土器片は住居址北西部にやや集中する傾向があり、石器も同様だがその割合は土器片ほどでない。下層(III層)からは1671を含めすべてII期の土器片のみが出土している。したがって、住居址帰属時期は該期と考える。

遺物 約150片出土した土器の60%以上はII期I群の無文土器で、器形の判明したものはIb2(1671)1点のみである。II期II群もループ文をもつもの(19)など数点が出土した。III期も50片程あるが、I群(22・23)がほとんどである。

石器の出土点数は総計87点と多く、特に石鏃17(1~10)、ピンス・エスキーユ19(18~20)とその占める割合が高い。その他は石匙5(11~14)、スクレイパー3、石錐5(15~17)、使用痕ある剥片27(21~23)、磨製石斧1、凹石5、石皿1、先端研磨石器1などがあり、円錐状で中央に孔のある土製品も(2125)1点出土した。  
(百瀬 新治)



挿図 66 住居址 24 実測図

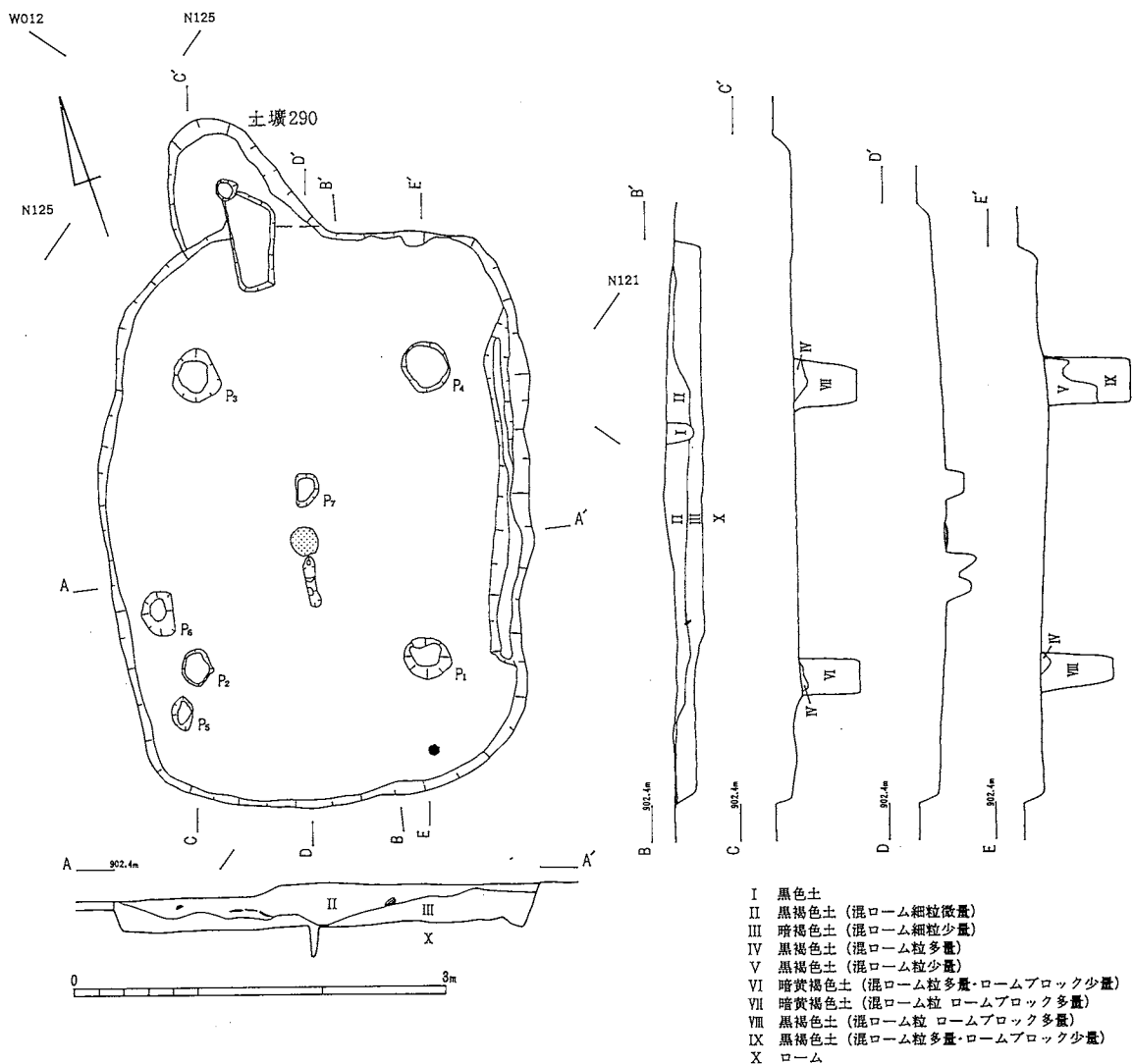
(4) 住居址 29(挿図 67、図 52・108・150、図版 26・105・132)

遺構 BN 56 を中心として検出された 4.55×3.30 m の C 型の住居址で、住居址 30 が西側に近接する。主柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> で、規模・深さ等はほぼ共通する。他にピットは P<sub>2</sub> に近接して、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub> が、炉の北寄りに P<sub>7</sub> があるが、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub> のみが支柱穴であろう。地床炉は主柱穴を結ぶ交点上にある。壁および床面の遺存状態は良好である。周溝は東壁の一部分にのみ認められた。北壁の西寄りに張り出しピットが設置されている。住居址床面とほぼ同一レベルであるが、ピットの中央から床面にかけては 10 cm の落ちこみがみられた。

遺物 土器と石器があり、その出土状態は A<sub>1</sub> 型であるが、総数は細片まで含めて 490 点でそう多くない。地床炉西寄り(1689・1691)と P<sub>1</sub> に近接した床面上(1692)、および張り出しピット床上(1690)にいずれも床面に密着して一括土器が出土した。細片を除いた土器は II 層上部のわずかな III 期(43)・VI 期以外はすべて II 期であり、II 期 IA 72(33~36)、IB が 7、II 群 7(37~41)、III 群 1(42)の計 87 片である。ただし、一括土器による割合では I 群 75% に対して II 群は 25% である。

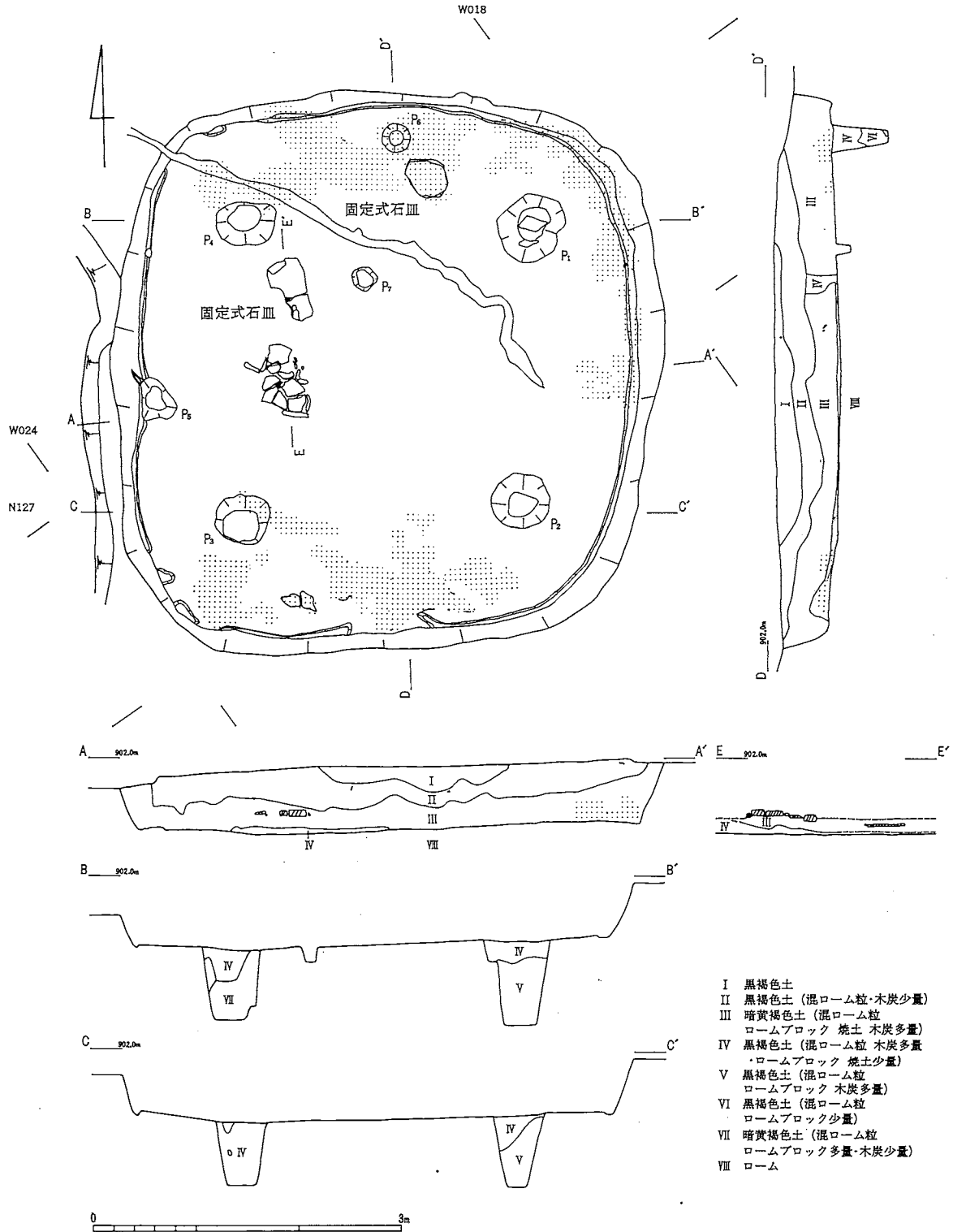
石器総数 48 点のうち、III 層出土は石鏃 7(67~71)、挟入刺突具 1(72)、スクレイパー 4(76・81・82)、ピース・エスキーユ 3、有袂頭磨石器 1(83)、使用痕ある剝片 16(74・77・80)、凹石 2 の計 34 点である。凹石には赤色顔料が付着していた。

以上の土器と石器群はほぼ本住居址の一括遺物と考えてよいであろう。(福沢 幸一・笹沢 浩)



(5) 住居址 30(挿図 68、図 52・107・151~153、図版 27・105・133・183・184)

遺構 住居址 31 の北に近接し BL 61 を中心として検出された。土壌 291 が北壁と接し、新しい時期の攪乱溝が北西壁から南東へ床面を切って細長く伸びているが、プランは明瞭に確認された。Ⅲ層(下層)からは焼土と炭化物が多量に出土し、特に北と南の壁際には焼土が堆積していた。また西壁近くからは丸い建築材の一部と思われる炭化材がほぼ直立する状態で検出され、住居址の焼失を物語っている。さらに住居址中央西寄りのⅢ層上面には、割れた平石が水平に置かれた状態で出土している。



挿図 68 住居址 30 実測図

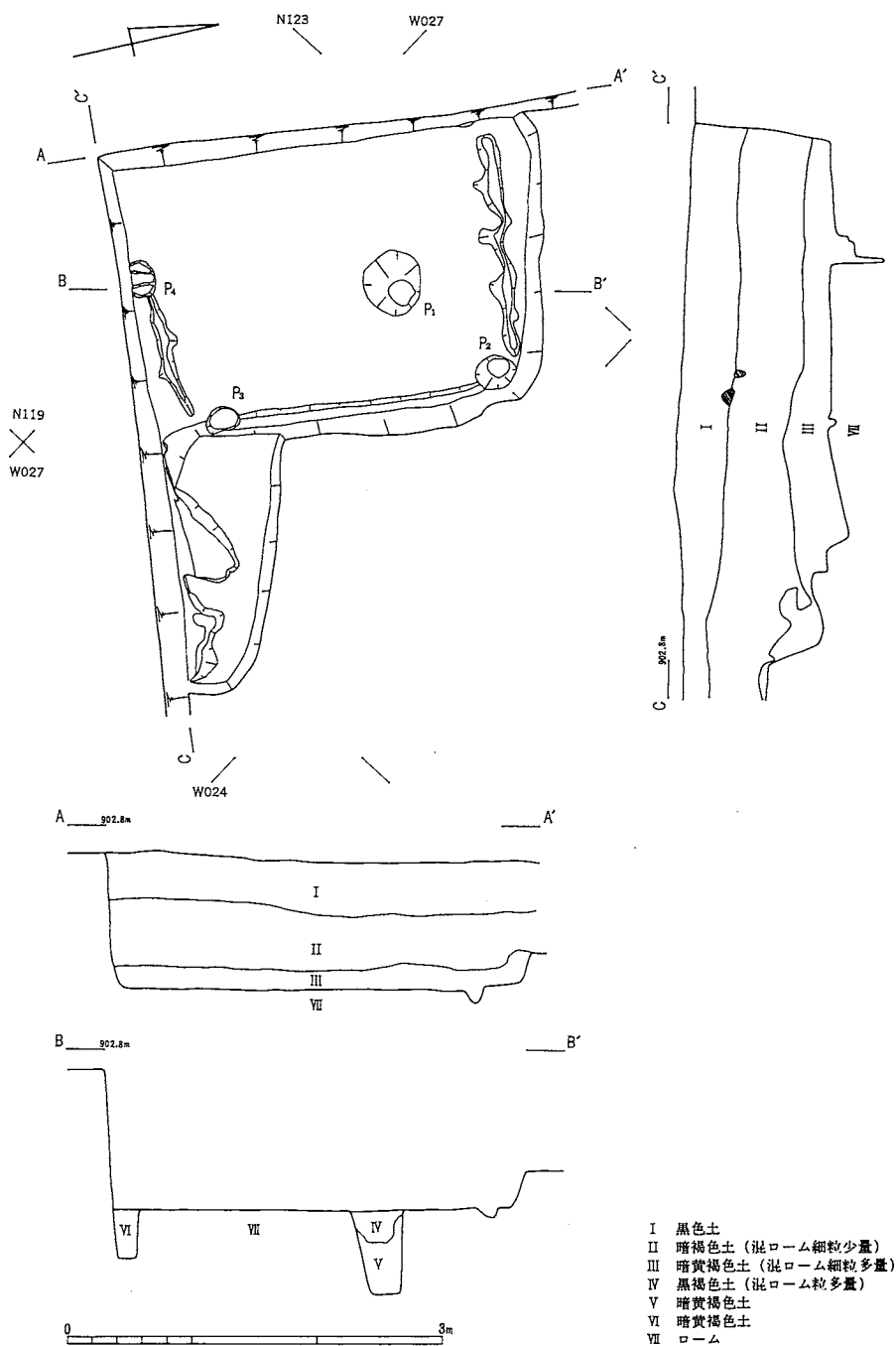


5.12×4.90 mの隅丸方形の平面形をもつ典型的なC型の住居址である。長軸方向はN 2° Eとほぼ真北を指す。壁は東側が高く西が低いが、ほぼ直立する壁面は堅いロームが部分的に焼けており、良好な遺存状態であった。浅い周溝が南壁中央部などを欠く以外にはほぼ全周する。床面は堅くしまり中央部に向かって緩やかに傾斜しているが、全面にわたって焼けていた。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>ではほぼ正方形に規則正しく配置されている。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は主柱穴とほぼ同じ深さをもっており、支柱穴と考えられる。炉は床面上にある焼土のため検出できなかったが、中央部付近やや東寄りの若干レベルの低い場所が想定できる。また中央部北西寄りと北壁下中央の2箇所の床面上に安山岩製の固定式石皿が置かれていた。

遺物の出土状態 住居址のほぼ全面から遺物は出土するが、床面に近づくとも出土量が増し、特に黒曜石の石核・剝片が目立ち住居址の南西隅から西壁中央にかけて、1 m程の幅で焼土とともに検出された。南壁東寄りに壁に立てかけられるように小形の完形土器(1688)が出土したが、他はすべて小破片であった。遺物の出土状態はA<sub>1</sub>型である。

土器はII期IA(1685・1686・1688)、IB(50・1687)、III群(44～49・51～54)がある。IAは深鉢Ic2(1688)とほぼ器形の復元できた2点(1685・1687)を除くと、ほとんどがII期I群の細片である。しかし、約40点の口縁部片の大多数は深鉢Ic(1685)、Id(1687)である。II群は約30点あり大部分は異条斜縄文を施す同一個体(45～47・51・53・54)であるが、風化が進んでいることもあって、接合・復元が十分にできなかった。III群もわずかに出土しており、中にD<sub>2</sub>(55)もある。

石器の出土点数は多く総計127点を数えるが、特に石匙8



挿図 69 住居址 31 実測図

(107~109)、スクレイパー14(110~114)の多さが指摘できる。他に石錐7(115・116)、ピエス・エスキーユ26(117~120)、石鏃23(100~106)、使用痕ある剝片32(131~133)、凹石3、打製石斧・磨製石斧各1点などがある。なお、有扶頭磨石器(121~130)の10点も注目されるが、2点(121・122)を除き使用痕は観察できない。

(百瀬 新治)

#### (6) 住居址 31(挿図 69、図 52・105・153・241、図版 28)

遺構 住居址 30 の南側 BO 63 付近にある。住居址南西側が用地外のため調査できず、住居址北東部分のみを検出したにとどまった。住居址の東側で、南に向かう暗黄褐色土のダラダラの落ち込みと切りあうが、両者の新旧関係などはとらえられなかった。

未調査部分を残すために平面形は確定できないが、おそらく隅丸方形を呈する住居址であろう。壁面はロームであり、かなり急角度に立ち上がり、壁高は 30 cm 内外である。床面は堅いロームでわずかに凹凸はあるが水平で良好である。周溝は東壁ぎわと北壁からやや離れて検出されたが、北壁は東壁に対して外へ張り出しぎみにあるところから堅穴の掘り方であろう。また用地外にかかる部分でも東西に伸びる溝が検出された。ピットは 4 箇所あるが、 $P_1$ のみが支柱穴で、 $P_2$ ・ $P_3$ は壁ぎわに穿かれた補助的な柱穴と考えた。炉ま確認できなかった。

遺物の出土状態 全体に散在するが床面に近づくと少なくなり、黒曜石の石核・剝片の割合が高くなる。東側の落ち込み部分からの遺物はほとんどない。土器の 80% 近くは II 期であり、下層(III層)出土の大部分は該期土器片である。

遺物 土器は約 160 片の大部分が細片であり、そのうち II 期 I 群(56・58・59・1672)が 120 片程である。器形全体が判明するものはないが、深鉢 Ic(1672)が数例見られる。II 期 II 群(60)は 2 点、III 期(61~63・65)も上層を中心に約 40 点ある。III 群(64)は上層からの出土である。

石器は 46 点と少なく、石鏃 15(134~140)と使用痕ある剝片 12(145・146)が 70% を占める。他に石匙 1(141)、スクレイパー 3(142)、石錐 2(143)、ピエス・エスキーユ 12(144)が出土している。ほかに滑石製小玉 1(1731)がある。

(福沢 幸一・百瀬 新治)

#### (7) 住居址 35(挿図 70、図版 29)

遺構 II 期住居址群の北限にあたり、住居址 33 によって大半が壊されていた。しかしわずかに床面が住居址 33 の下位にあり、周溝の検出がこの部分で可能であったために、ほぼ住居址の全体像が明らかにされた。しかし、北壁は漸移層に構築されており、遺存状態はあまり良くない。支柱穴は  $P_1$ ~ $P_4$  で、それらを結ぶ交点上に地床炉がある。周溝は南壁および西壁の一部に認められた。住居址類型は C 型に属すると思われるが、北壁が一部不鮮明なためにはっきりとしたプランは不明で、推定規模は 4.70×3.50 m である。

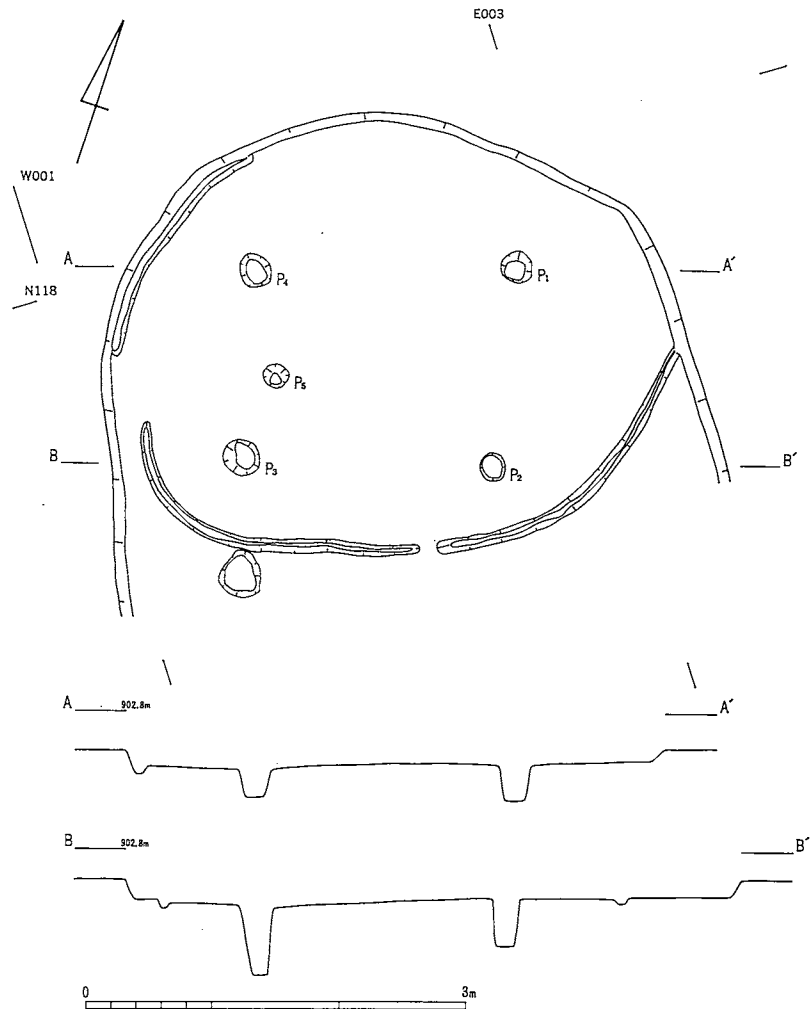
遺物 埋土中に II 期 IA の土器片が少量認められたにすぎない。住居址 33 からも II 期 IA がかなりの量で出土しているので、住居址 33 構築の際、本住居址の遺物の大半は失われたものと思われる。

(福沢 幸一)

#### (8) 住居址 40(挿図 71~73、図 54・111・112・146・159~161・226・231・237、241、図版 30・108・135)

遺構 CD 49 を中心として検出された住居址で、上部に環状集石群がのり、東壁と西壁の一部が住居址 39 を大きく切っている。また、住居址内にある 4 基の土壇(土壇 981・995・997・998)のうち、土壇 981 が埋土中で検出された以外は、すべて床面の検出時に確認されたものである。しかし遺物の出土状態等からみて、住居址より新しい時期(IV・V 期)の構築と思われる。

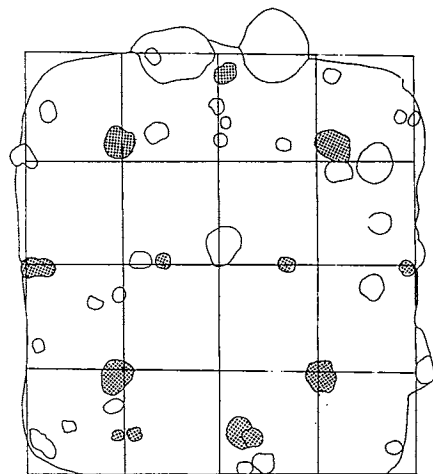
住居址類型Cに属する典型的な住居址で、6.60×6.18 mと大形住居址であり、北壁には2箇所の張り出し部がある。これは当初住居址とは無関係の土壌と考えたが、埋土中に壁が検出できず底部は住居址床面同様に堅く固められ、また出土遺物が住居址と同時期のものであることから、住居址の張り出し部と考えた。深さは東側の張り出し部が70 cmで西側のそれより深い。底部のレベルはほぼ同じで住居址床面より10 cmほど低い。また断面形も類似し、底部より湾曲しながら立ちあがり、ほぼ垂直になって上端に至るものである。住居址床面はローム層を掘り込んで作られており、全体に強く叩きしめている。また壁もほぼ垂直で良好であった。北西



挿図70 住居址35実測図

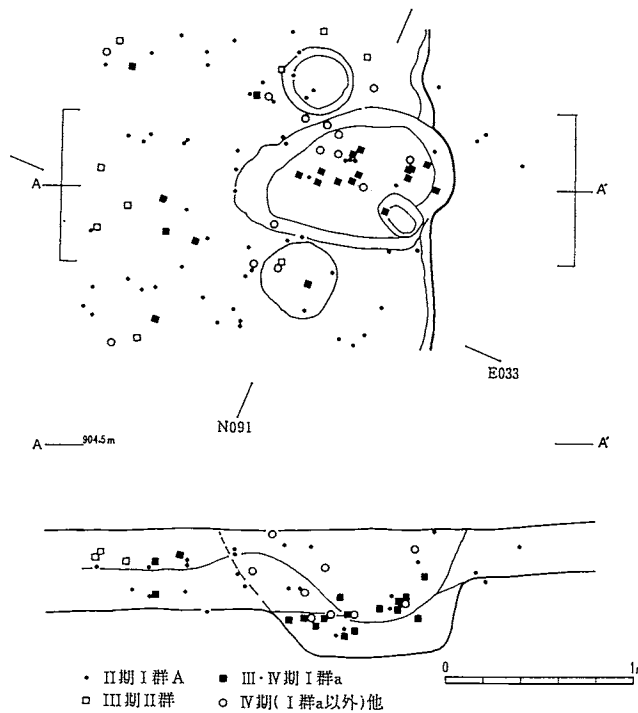
隅に一部周溝がみられるが浅く、溝底も凹凸が著しく明確ではない。

本住居址の特徴には大形であることとともに、柱穴の配置があげられる。支柱穴 $P_1 \sim P_4$ は80 cmをこえる深さを持ち、それが住居址の各辺を4等分する線上にある。また長辺を2等分する線上には、等間隔に4個の支柱穴が並び、しかも内側の2個( $P_{20} - 36 \text{ cm} \cdot P_{21} - 40 \text{ cm}$ )に比べて壁側の2個( $P_5 - 79 \text{ cm} \cdot P_{22} - 54 \text{ cm}$ )が深い。そのほか支柱穴と考えられるピットには、北壁張り出し部の間にある $P_9$ がある。しっかりとしたピットであるが、上屋構造との関係は不明である。南壁側には相接した2個のピットが2組( $P_{30} \cdot P_{31}$ 、 $P_{32} \cdot P_{33}$ )あり、それらは南壁から50 cm内によった場所に南壁と並行に設けられており、両者の距離は $P_{31}$ と $P_{32}$ の心心で1.8 mである。入口部の施設に関すると思われる。その他に深さ25~50 cmのピットが壁ぎわにある程度の間隔をもって一周している( $P_6 \sim P_{12} \cdot P_{24} \sim P_{29}$ )。上部構造を考える上で重要な役割を果すであろう。炉は住居址中央部やや北東寄りにあり地床炉である。支柱穴 $P_4$ の南西寄りの床面には、固定式石皿が置かれている。



挿図71 住居址40柱列配置図

遺物 約5,000点の多量の出土があり、そのうち土器片は約3,700点を占める。しかしその多くはIV期・V期の土器片であり、上層の環状集石群との関係が考えられる。出土状態は水平分布で見



挿図72 住居址40内の土壌995埋土内  
遺物分布

ると南東側に集中するが、II期の土器だけはほとんど片寄りを示さない(出土状態A<sub>1</sub>型)。断面では下層にII期、上層にIII・IV・V期の土器が明瞭に分かれる。同様に土壌995は、IV期の土壌であることがわかる(挿図72)。一括土器2点はいずれも床面からで、1718はP<sub>2</sub>東側、1719は西側張り出し部より出土している。

土器・石器・土製品・石製品がある。土器の大部分は上層の環状集石群に伴うものであり、本住居址と直接関係がないので省いた。土器はII期IA(96~111・1718~1720)、IB(1721)ID(114)、II群(112・113・1722)、III D<sub>2</sub>(115)がある。IAのうち器形の分るもの(1718~1720)では、明瞭な頸部をもたない深鉢cである。垂紐貼付文に施される刻目は、刻目というよりも強い押え痕である(96~101)。1722はCC56よりの出土例と接合した。口縁部は平行沈線上に連続爪形文がめぐり、その上に貼付文が施され、胴部は

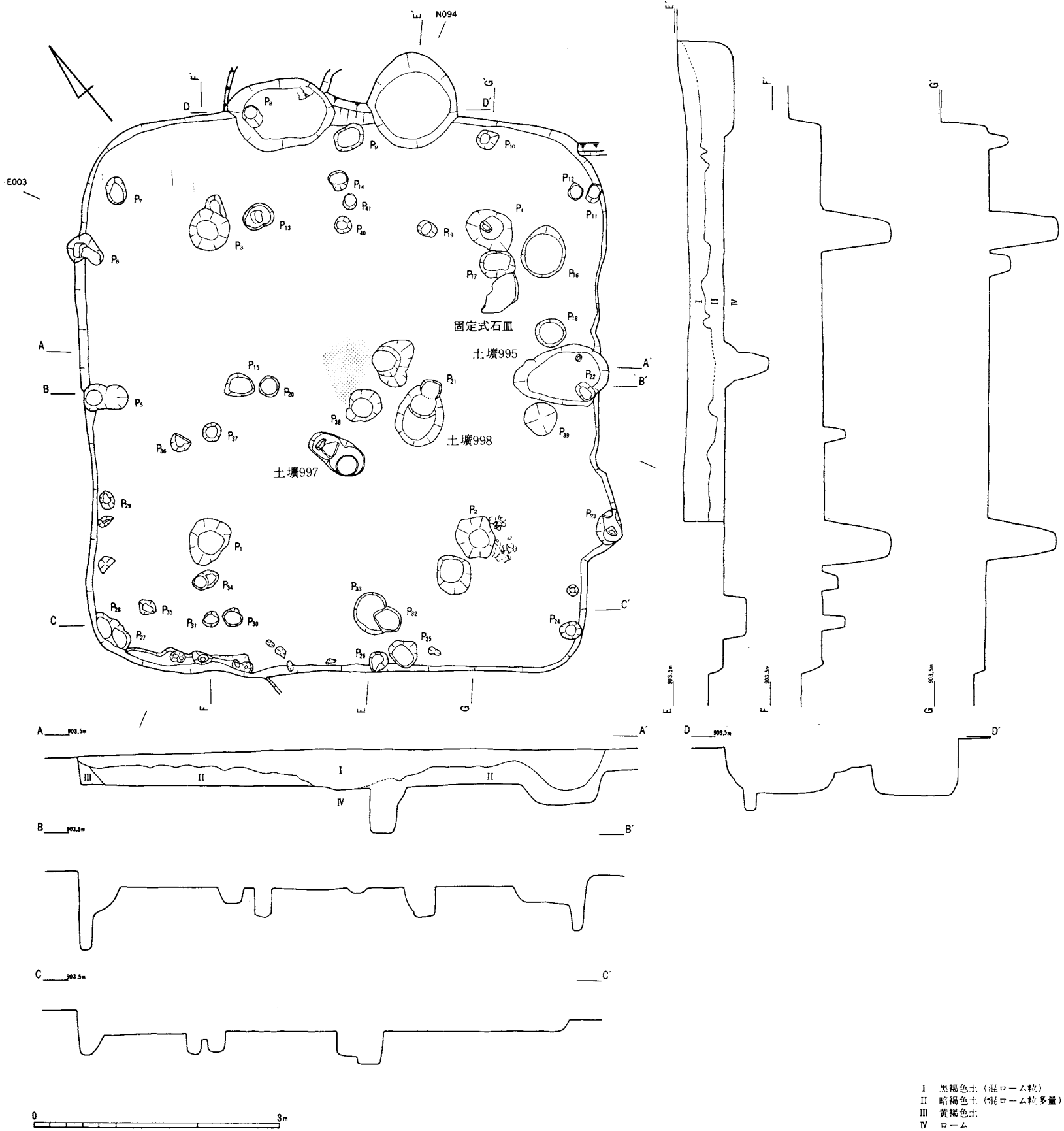
ループ文と羽状縄文で覆われており、関山式でも古い段階に位置する。1721は多量の繊維を含みかい指ナデが施されている。

石器は石鏃48(283~316)、石匙9(317~323)、スクレイパー19(324~329・353~355)、石錐17(330~343)、ピエス・エスキーユ34(344~348)、有扶頭磨石器4(349~352)、使用痕ある剝片104(356~362)、打製石斧1、横刃型石器(1454・1461)、石皿2(1546)、固定式石皿1、凹石17(1644~1651)、先端研磨石器1、滑石未製品2(1712・1715)の計261点が出土している。これらは土器同様に、上層遺構に伴うものも含み、その所属年代は検討を加える必要があり、すべて本住居址に伴うとはいえない。そのほか土製品1(2121)がある。筒状の土製品は側辺中央部がしまった繭玉状をしており竹管による沈線が中央部分に施されている。床面から出土していること、胎土がII期IAの土器と同じであることなどから、該期の遺物と考えられる。

(佐藤 信之)

#### (9) 住居址44(挿図74、図53・113・161・162、図版30・108・133)

遺構 尾根南西斜面近くの、CR84を中心に検出された。西方約8mに住居址63・64が、北西6mに方形柱列VIIが位置している。他は土壌が散在するのみで、II-b期の住居址群の南端に所在する。北壁にはIV期の土壌が検出されたが、浅いので本址を破壊するまでに至っていない。埋土は一次埋没土であるローム混じり暗黄褐色土が壁に沿い落ち込み、その上へローム混じりの暗褐色土が厚さ15cm程堆積し、さらに黒褐色土で全面が覆われ、典型的な自然埋没の状態を示している。周溝・柱穴の状態から、1回拡張のあったC型の住居址であることが観察できた。拡張前のaは残存する周溝から、4.30×3.60mの隅丸長方形のプランをもち、支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>の4個で、壁際にP<sub>9</sub>・P<sub>12</sub>の2個の支柱穴をもつ。地床炉は厚さ2cm程がよく焼け、15cm下までに火熱が及んでいた。拡張後のbは、aと南壁を共用し、東・西・北へ拡張されている。5.10×4.40mでaと同様に隅丸長方形だが、東南隅がやや張り出す。壁は15~20cmと低く、しっかりとした掘り込みではない。壁直下には、北壁両隅と南壁の一部を除き、幅10cmの周溝が認められた。

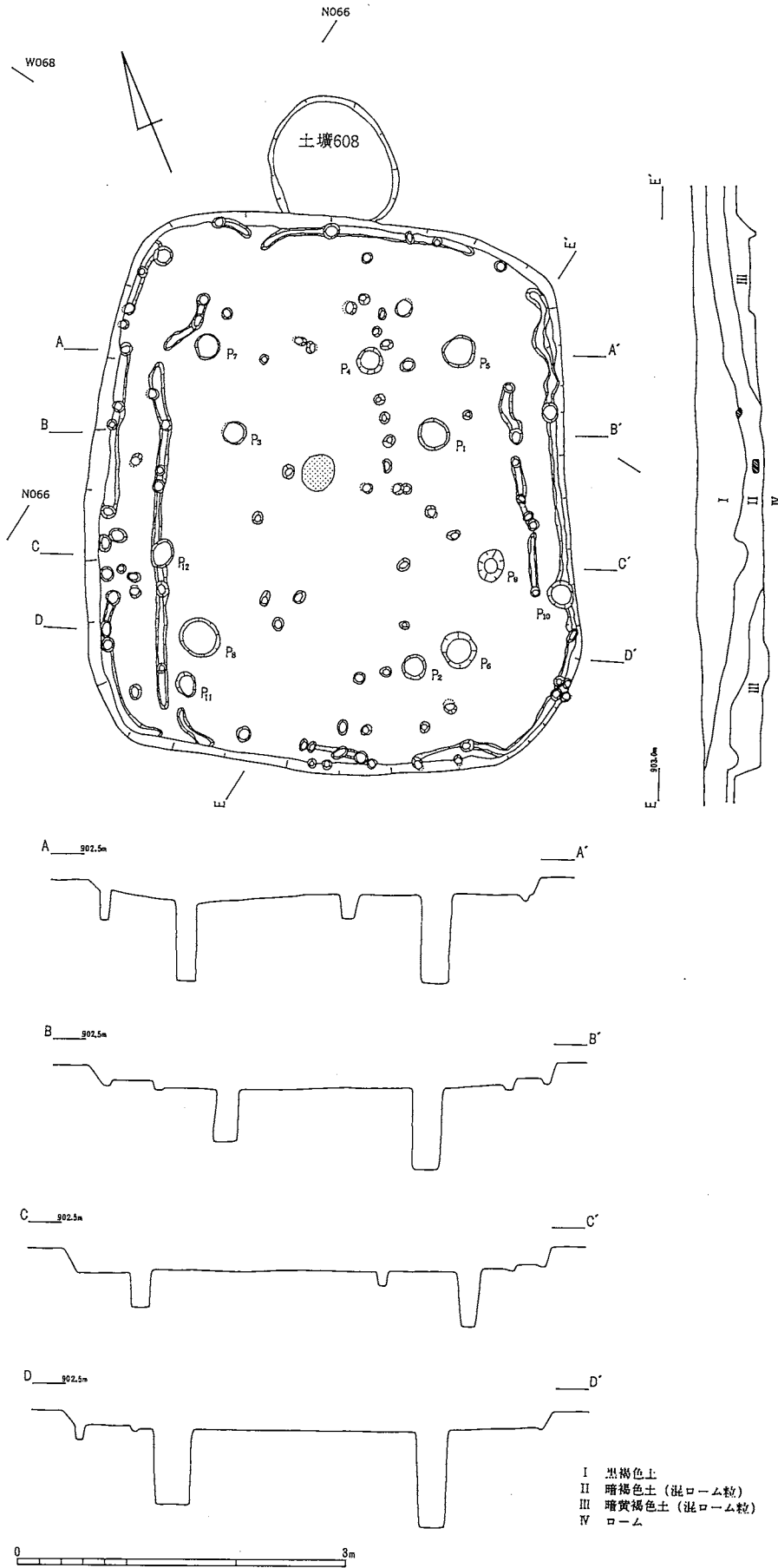


挿図73 住居址40実測図72

- I 黒褐色土 (混ローム粒)
- II 暗褐色土 (混ローム粒多量)
- III 黄褐色土
- IV ローム

炉はaのものを再利用したであろう。a・bともに周溝中には直径10cm前後の小ピットが見られ、壁防護のための施設と判断される。支柱穴はaと共有するP<sub>8</sub>とP<sub>6</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>であり、aにあった壁際の支柱穴は用いられていない。a・bに共用されたP<sub>8</sub>を除き、aの支柱穴は住居址規模と同様、径も小さく掘り込みも50~70cm程度であるが、bの柱穴の規模は、径も大きくなり、掘り込みも80cm前後としっかりしている。床面は平坦で堅いが、北西隅の一部がやや凹んでいる。また、床面に30数個の、周溝中と同規模の小ピットが検出されたが、規則性はなく、中には、間仕切りのな性格をもつピットもあろうが、大部分は地表から浅い位置であることもあり、木根によるものと思われる。

遺物の出土状態 B<sub>4</sub>型に相当する。一括土器(1729・1731・1733・1734)は住居址北東部にあり、いずれも一次埋没土の上層に落ち込んでいるのに対し、1730・1732は住居址中



挿図 74 住居址 44 実測図

央南側部分に散在し、出土層位はI層下部で、その入り込みに若干の時間差が考えられる。この他に303点の土器片と、石器・剥片類が212点出土しているが、住居址壁際には少なく、比較的 inner 側へ集中する傾向をもち、出土層位も床面の15~20 cm上層に帯状に散在しており、II期・V期の土器片間における差は認められない。

遺物 土器と石器がある。土器はII期IAが273点あり、出土土器総数の実に90%を占める。他にII群が9片(76~84)、IDが3片(85~87)あり、V期の5片が混在している。II期IA(1729~1734)は口縁部が波状で尖底となるもの(1729・1732)と、平口縁で丸味をもった尖底をもつもの(1730・1731・1733・1734)、頸部は明確ではなく、胴部径が口縁径よりも小さくなるものがすべてである。頸部より口縁部にかけての細線文は一本線がほとんどである(75)。垂紐貼付文は断面かまぼこ状が多く、刻目も篋で押えた大きな例が多い(69・74・1729)。整形は繊維を束ねたものでナデられたらしく、その痕跡が顕著に残る。胎土には金雲母が多量に入れられ、焼成もよく、器厚は7 mmとやや厚い。

石器は45点出土した。石鏃8(363~367)、石匙2(368)、スクレイパー4(369~376)、石錐3(377~378)、有扶頭磨石器2(380)、ピエス・エスキーユ8(379)、凹石11の他に、使用痕が認められる剥片7(381・382)、他に石核15、黒曜石剥片139、原石5などがある。380は遺跡中より検出された約100点の有扶頭磨石器中最大法量をもち、二次調整も多く丁寧に作られている。374のスクレイパーはP<sub>5</sub>内より出土している。

(青沼 博之)

(10) 住居址53(挿図75・76、図55・115・163・241、図版31・50・109・110・136)

遺構 住居址52の東側に隣接し、BW54付近に検出されたC型の住居址である。東壁南寄りの壁の一部が検出困難のために部分的に掘りすぎたが、他の壁および床面は良く残されていた。周溝・柱穴・炉址より2回の拡張が認められる。

住居址53aは推定規模4.46×3.55 mであり、台形状配置の支柱穴P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>と内側の周溝とからなる。P<sub>7</sub>は厚さ10 cmのロームによる貼り床がみられた。炉はF<sub>1</sub>とF<sub>2</sub>の間にある小範囲の焼土が支柱穴を結ぶ交点上にあり、地床炉の残存部と認定したい。従って住居址類型ではA型に属するであろう。

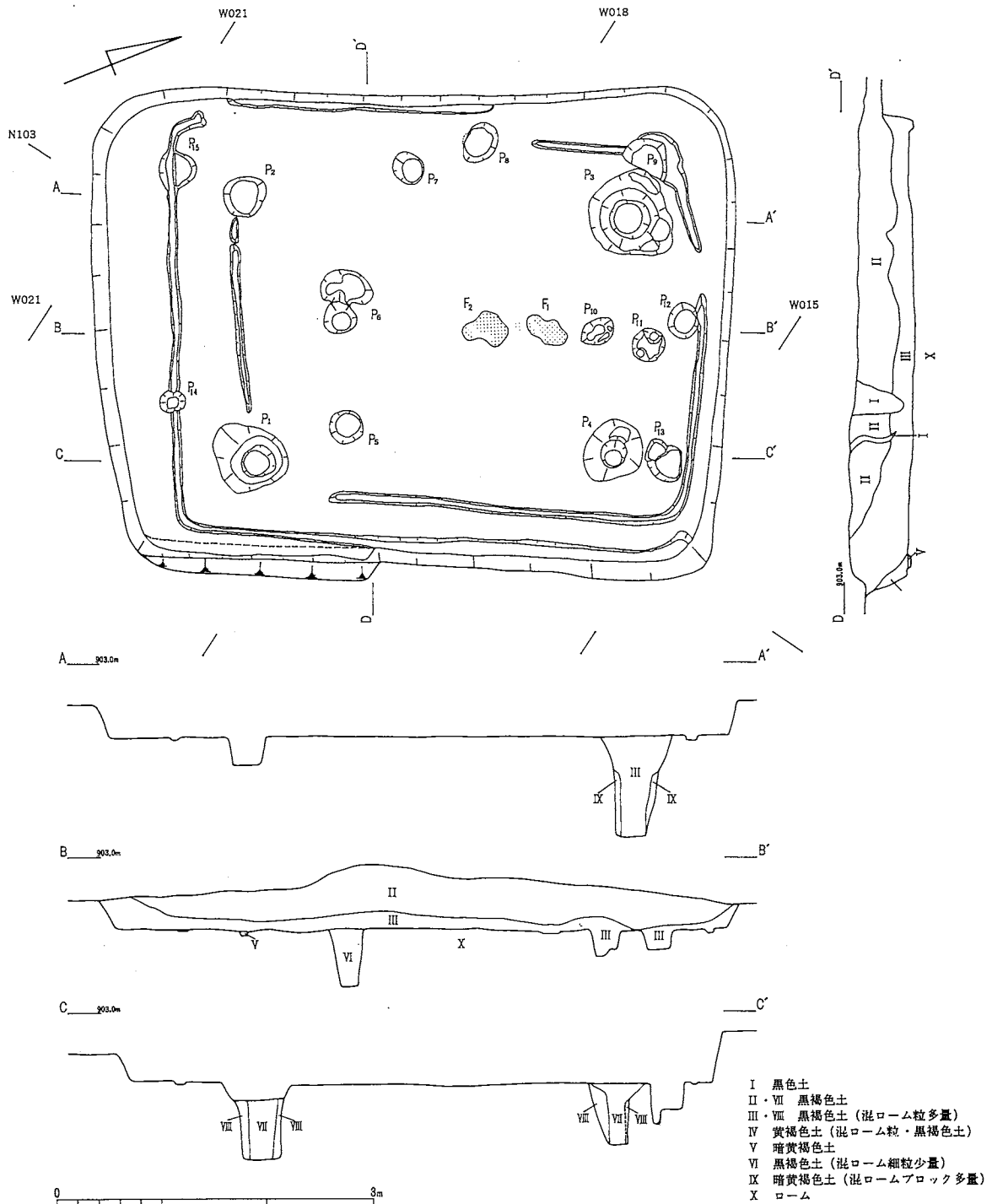
住居址53bは支柱穴P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>で炉はF<sub>1</sub>になろう。周溝は外側のそれにあたり、北壁と西壁の一部を欠く。推定規模は5.05×4.21 mであろう。

住居址cはbの支柱穴と南壁以外の壁を共有する。炉はF<sub>2</sub>であろう。従って、cはbの住居を南へ拡張したことになる。支柱穴以外のピットは他に8箇所みられる。これらのうち、P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>15</sub>以外は柱穴と思われるもので、壁柱穴と支柱穴であろう。住居址規模は5.80×4.21 mである。

出土遺物 土器の出土状態はB<sub>2</sub>型である。すなわち、I層上部にIII期Ia(143~150・1744・1745・1748)II A・II B(138~142)の土器群が、II期の土器群と混在して、レンズ状に包含されていた。その割合はIII期の方が多し。II層下部からIII層はすべてII期の土器であるが量は少ない。一部分に縄文をもつ土器片が数点みられたが、いずれもIII期の混入であろう。接合関係にある土器は4個体であり、うち、II層出土の土器片と関係あるのは、II期I(1747)とII(1742)の2個体である。前者はすべてIII層からの出土であり、後者はII層下部に集中しており、一部II層上部とIII層から出土している。従って、接合関係にある土器群のうちIII期に属するものは本住居址にともなう遺物とは考えられない。

II層下部からIII層にかけて出土した土器はIA158(123~129・1743・1747)、IB5、II群21(130~135・1742・1746)の計184点で、II群土器の占める割合は12%である。またID(136・137・151)、III期(138~150・1744・1745・1748)およびIII群(152~154)はいずれもII層上部出土である。

石器は総数72点出土したが、そのうちII層下部からは石鏃5(398~401)、スクレイパー2、石錐2(406・



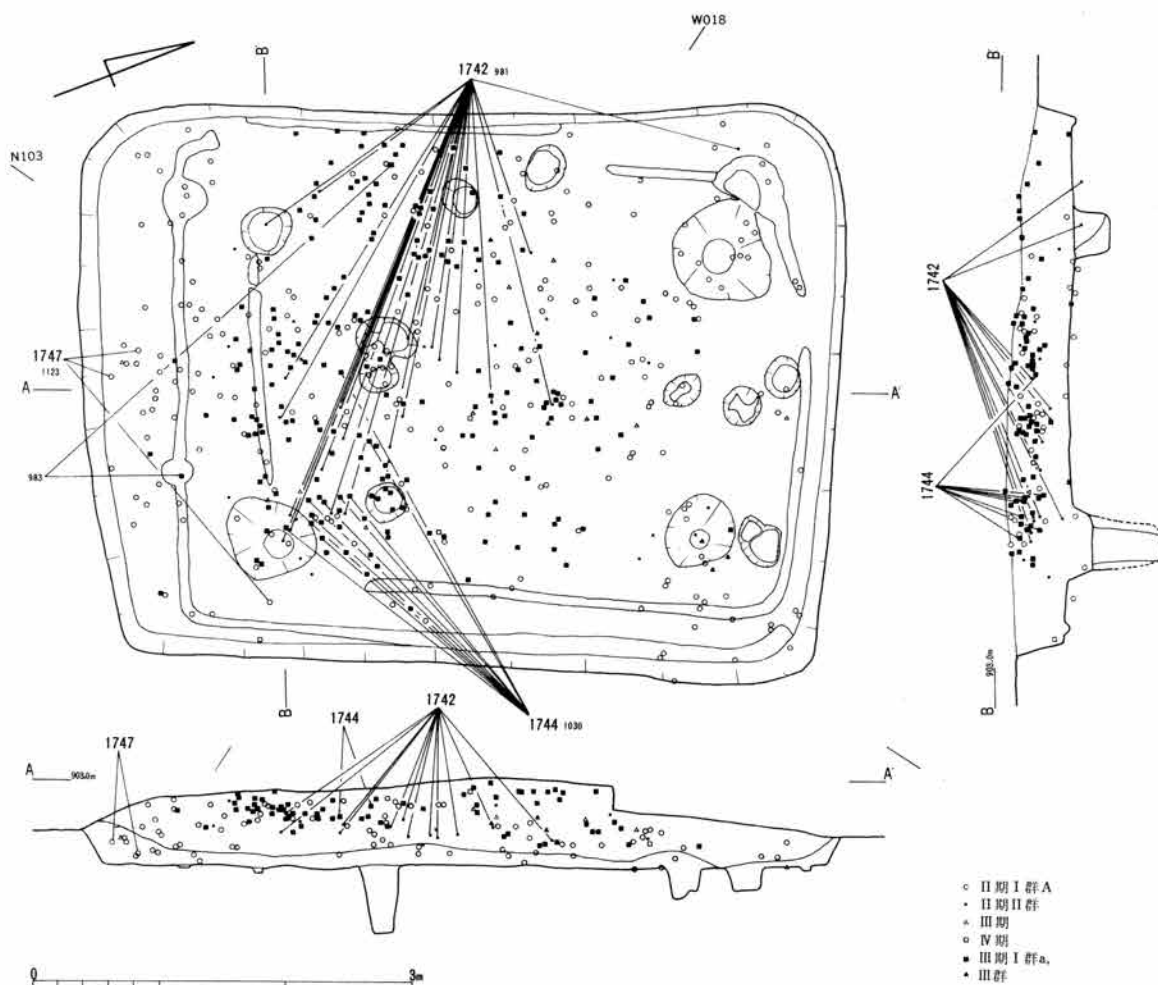
挿図 75 住居址 53 実測図

408)、ピエス・エスキーニ 1 (409)、使用痕のある剥片 18(417・418・421・422)、円礫状石器 1 (1745)、凹石 4 の計 33 点であり、これらは上層出土石器より、より本住居址にともなり可能性が強いものである。なお、凹石には赤色顔料が付着している。

遺物とその出土状態及び住居址類型から、II期の遺物は住居址 c の年代をほぼ示していると思われるので、阿久 II-b 期である。拡張前の a の構築は、住居址類型からみて II-a 期になされたものであろう。

(笹沢 浩)





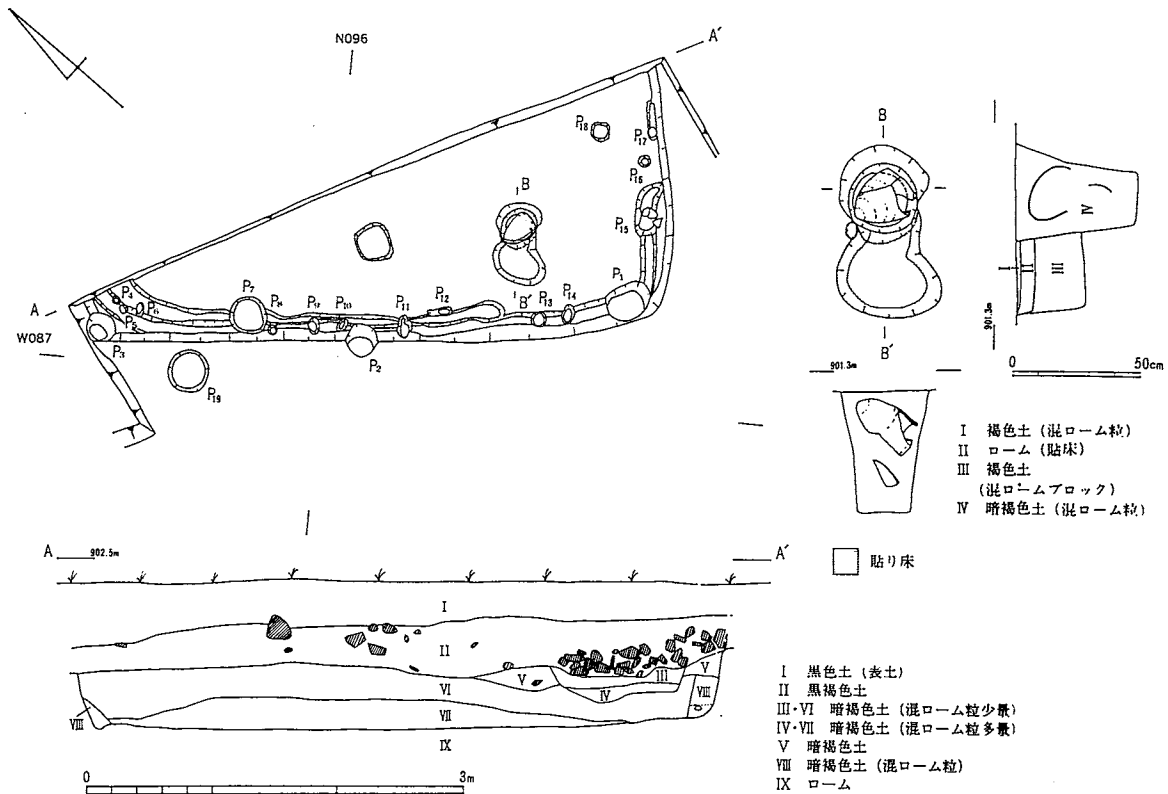
挿図 76 住居址 53 土器出土状態・接合関係図

(11) 住居址 65 (挿図 77、図 57・118・170・231、図版 32・111・138・)

遺構 CC 92 付近に位置し、用地外にかかるため全体の約 1/4 を明らかにしたに過ぎない。環状集石群の西端にあたり、上層には礫が散在するとともに集石 219 がある。用地境の土層断面を住居址検出後に検討できたので上層、下層の各遺構の関係を模式的に示すことができる。ローム漸移層上面で検出しており、掘込面は集石面とほとんど変わらないレベルにあったものと考えられる。

住居址類型 C 型の平面形を推測できるが確実ではない。南西側の周溝内側に床面より 2～4 cm ほど高いテラス面があり、北西壁側で幅を増していることから、未掘部分中心に拡張が行なわれていると考えられる。テラス面が拡張後の床面であり、それより低い内側のローム面が旧床面であろう。遺物も新床面と考えられるレベルから検出されており、拡張後の床面の大部分は初めからロームが露出していなかったと思われる。ただ、土層ではこの遺物分布面が層位的には現れておらず、生活面として継続して堆積し VII 層を形成したものであろう(出土状態 A<sub>4</sub>)。

本址は方形柱列 XIII と重複しており、貼り床されたピット 2 個はその一部であり本址に伴うものではない。この貼り床はロームをピットの形に合わせて整形してはめ込んだ一塊のものである。土器一個体(1770)が倒立して埋められていたピットは、この方形柱列のピットを切っており、貼り床はされていない。床面精査により検出され、住居址埋土中への立上りが認められなかったことから、本址の施設と考えられるが、その性格は明らかでない。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は柱穴と思われるが、いずれも壁に接し住居址中央へ内傾している。P<sub>18</sub>



挿図 77 住居址 65 実測図

も柱穴と考えられ、周溝中には小ピット群がある。ただ土器埋設ピットの位置は柱穴位置として適当であり、これが拡張前の柱穴であった可能性はある。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>を支柱穴とすれば、他の住居址に例をみないものである。本址は発掘区域外に予想される住居址群の南端にあり、類例は将来、未発掘区域で見出されるかもしれない。

遺物 土器片は埋土より 99 点、検出面上層にあたる II 層下部でも約 100 点検出した。後者は集石面の土器であり、ほとんどが III 期である。前者のうち文様を有するものは 214・216・218・219 だけで他はすべて II 期 IA の深鉢である。これ以外の文様をもつ土器は II 層出土である。器形を復元しえたものでは 1771 が床面、1769 が埋土下層、1772 が埋土上層からの出土である。1770 はピットからであるが、貼り床のないことや、埋設にあたって床面レベルを意識したと考えられることから本址に伴うと判断した。口縁の一部を欠いているが、容器としての機能をもったものが埋められたものである。他にいずれも波状の口縁部破片が 3 点ある。また、口縁直下の破片で刻みをもつ垂紐貼付文を有するもの 1 点、II 期 IB 1 点がある。

石器は少なく、石鏃 2 (564・565)、片面加工の石錐 2 (567・568)、スクレイパー 2 (566・571)、ピエス・エスキーユ 3 (569・570) 使用痕ある剝片 25、凹石 2、石皿 1 (1541) など計 37 点があるだけである。それ以外の剝片、石核などが 109 点ある。石鏃 2 点は床面から出土しており、石皿は上層の集石面である。

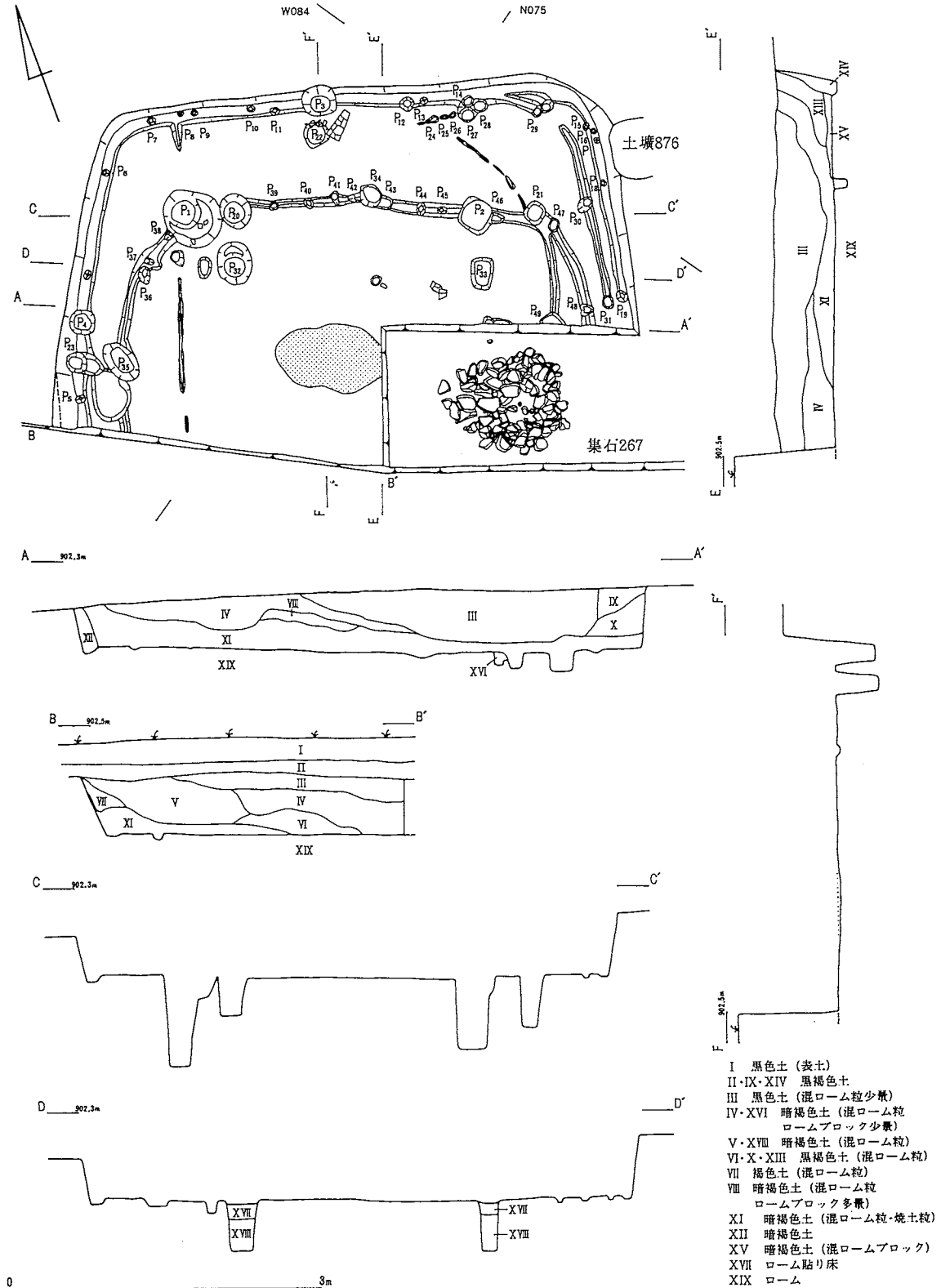
(12) 住居址 69 (挿図 78~80、図 58・122・123・170・171、図版 32・112・113・141)

遺構 CM 93 付近に位置し、上層は環状集石群の南西端にちかく、集石 267 がある。一部発掘区域外にかり、ほぼ北半を検出しただけであるが、集石 267 の下は発掘していない。ローム漸移層中で検出し、地表から検出面まで約 45 cm ある。しかし、断面観察では、検出面より約 10 cm 上の II 層下面にまで壁の立ち上りが認められ、旧地表面はそれより上にあったことを示している。おそらく集石のレベル(現地表下 30

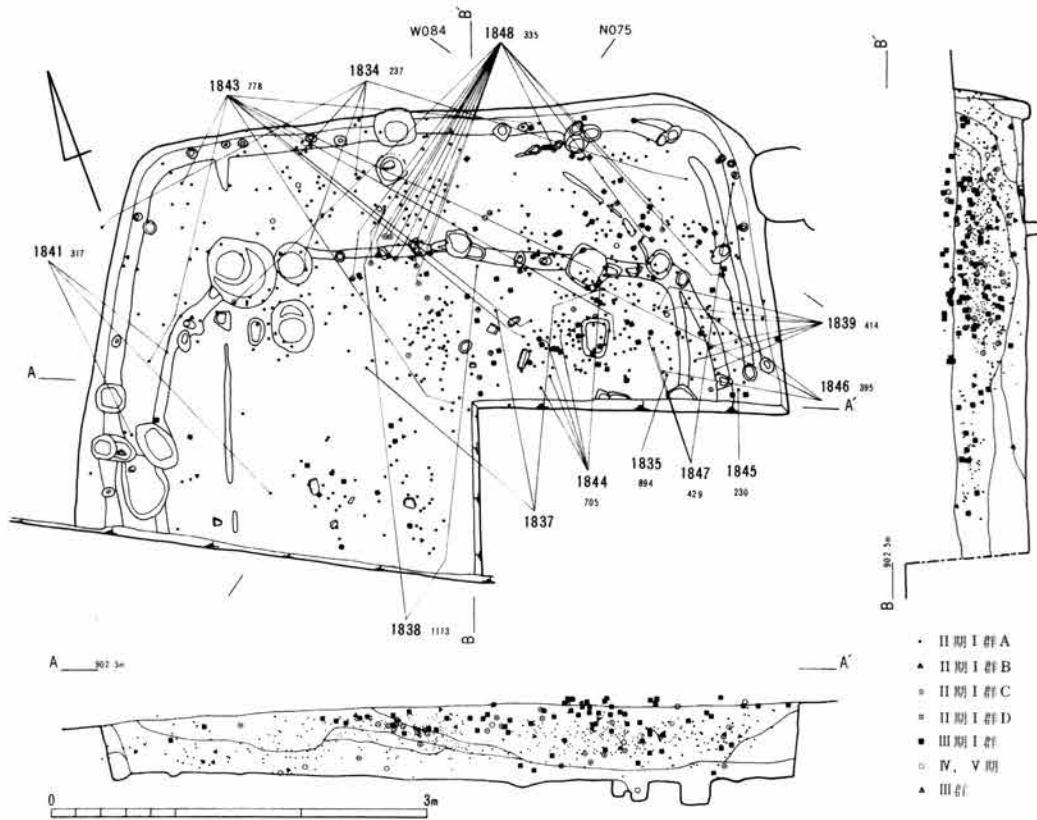
cm)程度であったと考えられる。

C型に属する本址は、周溝と柱穴の状態から少なくとも3回の拡張が行なわれたと考えられ、それに伴う柱の建て替えも2回行なわれている。以下に古い順に示す。

aはP<sub>32</sub>・P<sub>33</sub>を支柱とし、P<sub>34</sub>・P<sub>35</sub>を壁中の支柱とする。P<sub>49</sub>が伴う可能性があり、内側の明瞭な周溝が内縁を示している。



挿図 78 住居址 69 実測図



挿図 79 住居址 69 土器出土状態・接合関係図

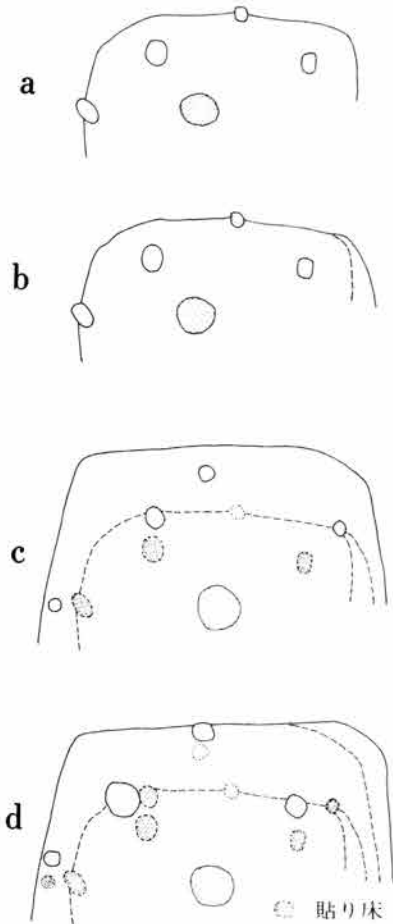
bはaから東側にだけ拡張され、柱の建て替えは行なわれないが、未掘部に増設の可能性がある。

cは全面的に拡張され、 $P_{20} \cdot P_{21}$ を主柱とし、 $P_{22} \cdot P_{23}$ を支柱とする。aとbの柱穴はロームで丁寧に貼り床される。

dはcの壁が東側にだけわずかに拡張されるが、柱は全面的に建て替えられ、 $P_1 \cdot P_2$ を主柱とし、 $P_3 \cdot P_4$ を支柱とする。cの柱穴はロームで貼り床される。 $P_8$ 付近から直線的に南にのびる周溝状の浅い溝はこの時期の施設を示すものと考えられるが断言はできない。なお、 $P_{21}$ からのびる同様の溝の性格は明らかではない。

以上を通じて炉の位置はわずかに東へ移動するだけで、床面の高さはほとんど変化がないが、わずかに高くなるようである。主柱・支柱は基本的な位置に変化がなく、柱の建て替え2回に伴う3本ずつのセットを同様な位置に見出せる。しかし、北壁ぎわの支柱穴はいずれも貼り床されていない。

未調査地域を多く残し、住居構造の詳細は明らかでないが、検出した柱穴の位置関係から考えて、拡張前後を通じて東西にやや長い隅丸台形ないし方形になると思われる。最終時で東西5.3m、検出面から床面まで60cm前後で、壁・床ともしっかりし平坦である。周溝は幅3～6cm程度で、ほぼ全周するが部分的に欠ける。特にc・dでは共通して東壁中央部分にないのが注意される。周溝中にはピットがある程度規則的にならび、深さは約7cm程度で、周溝からやや



挿図 80 住居址 69 変遷図

はずれるものは15 cm程度と深く、やや大形である。炉は同一面で2～3次にわたって使用された状況を示す地床炉であり、焼土の厚さは約5 cmある。

遺物の出土状態 埋土中で最も遺物の量が多いのはⅢ層(黒色土)である(A<sub>4</sub>型)。この土層は住居址北西側で厚く、南西側で消失しており、遺物の平面的分布量もそれに比例している。特にⅢ期Ⅰ群土器の分布は断面図で見てもほとんどⅢ層に限られる。AA'の断面図中でⅣ層中にあるものは断面部分より南側で西側へ伸びているⅢ層中のものが投影された結果である。この下層のⅣ層はロームブロックを含むが遺物はほとんどない。Ⅱ期ⅠAは出土数のすべては投影していないが、Ⅲ期Ⅰの分布に似る。しかし、住居址西側では他の土層にもかなりある。埋土は全体としてみれば、住居址全面に及ぶ土層がなく、埋没過程が単純ではなかったことを示している。焼土粒を含むⅤ層は直接床面を覆っているが、南西部では認められない。この層には遺物が少なく、Ⅳ層とともに一次的埋没によるものと思われ、この2層の間層であるⅤ～Ⅷ層も同様に考えられよう。床面とⅢ層のⅡ期ⅠA土器との様相に大きな差はないので、この埋没はかなり短時間と考えられる。Ⅲ期の土器がⅢ層に限られるので、Ⅲ層の形成は一段階遅れるものであろうが、Ⅲ期Ⅰ群とⅡ期ⅠAの混在は注意される。確実な床面上の遺物は少ない。

遺物 土器片は1162点ある。そのうち床面出土は238・1836・1840がある。Ⅱ期ⅠAの深鉢は垂紐貼付文や刻目などの装飾をもつものや波状口縁は少ない。細線格子文は図示したものを含め6点(236～239)だけで、口唇部に刻目を有する例は、口縁部片95点のうち20片(22%)、垂紐貼付文をもつもの3片(3%)、波状を示すもの10片(11%)である。以上、Ⅱ期ⅠAがほとんどで他に、Ⅱ期ⅠB 16片、縄文繊維土器17片(Ⅱ期ⅠBまたはⅢ期Ⅱ)、縄文無繊維土器75片、沈線などをもつⅢ群土器9片がある。これらの繊維土器、縄文土器は大半が検出面または埋土Ⅲ層出土でⅢ・Ⅳ期に属する。240～251は、中層・下層出土であり、ループ・羽状・結節などが認められる。全体の組成はⅡ期ⅠAが圧倒的であり、これは頸部のくびれがほとんどなく、底部が丸底にちかいという形態的特徴がある。

石器は床面からはスクレイパー2(605・612)、凹石1がある。他は埋土からであり、石鏃24(573～596)、石匙5(597～599・601・602)、スクレイパー16(600・603・604・606～611・613)、石錐8(614～620)、有袂頭磨石器3(621～623)、打製石斧1、凹石13、横刃型石器1、使用痕のある黒曜石剥片150、先端研磨石器1、ピンス・エスキューユと考えられるもの60など計285点と黒曜石の剥片、石核類が359点あり多種豊富である。石錐に片面加工で突出の小さいもの(AⅡ)が多い。玦状耳飾が床面より8 cm程上で出土したという記録があるが、現在不明である。

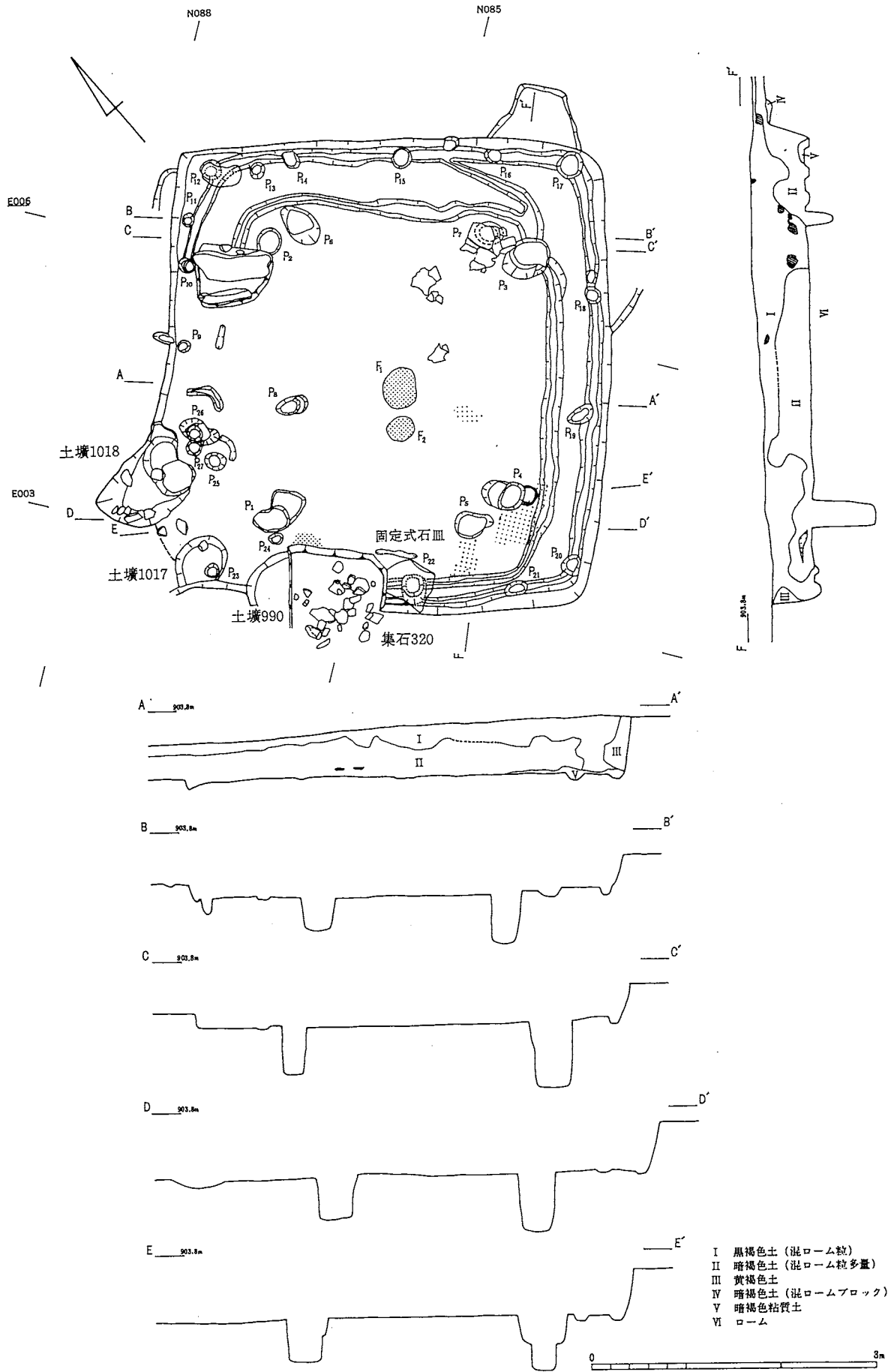
(土屋 積)

### (13) 住居址71(挿図81～83、図53・124・174、図版32・113)

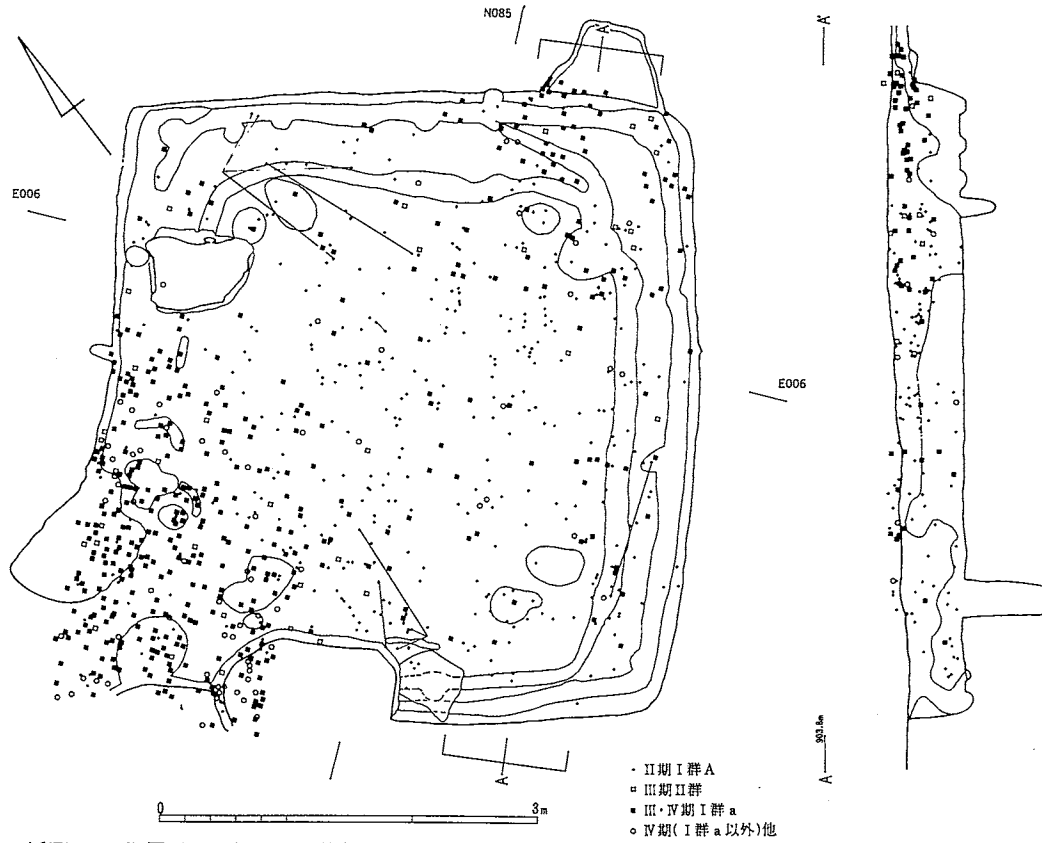
CG47を中心に検出された住居址で、住居址39・70と重複し、さらに土壙990・1017・1018によって、西壁および南壁の一部が切られていた。また、南壁の上部には集石320があり、北隅付近には角柱状の石が2本並んで集石面より検出されていた。したがって、この下部の調査は保存のためできなかったが、ほぼその全体は把握できた。すなわち、西壁の一部は住居址39を切り、上面には住居址70が構築されていた。柱穴および周溝より同一床面上に1回の拡張が考えられる。

遺構 拡張前のaの支柱穴は、一括土器(1852)に覆われていたP<sub>7</sub>の存在と、内側の周溝等から考えると、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>となり住居址類型Bに属する。炉はおそらくF<sub>2</sub>であろう。東隅に内側と外側の周溝を結ぶ溝がみられるが、周溝とするには他に根拠がない。

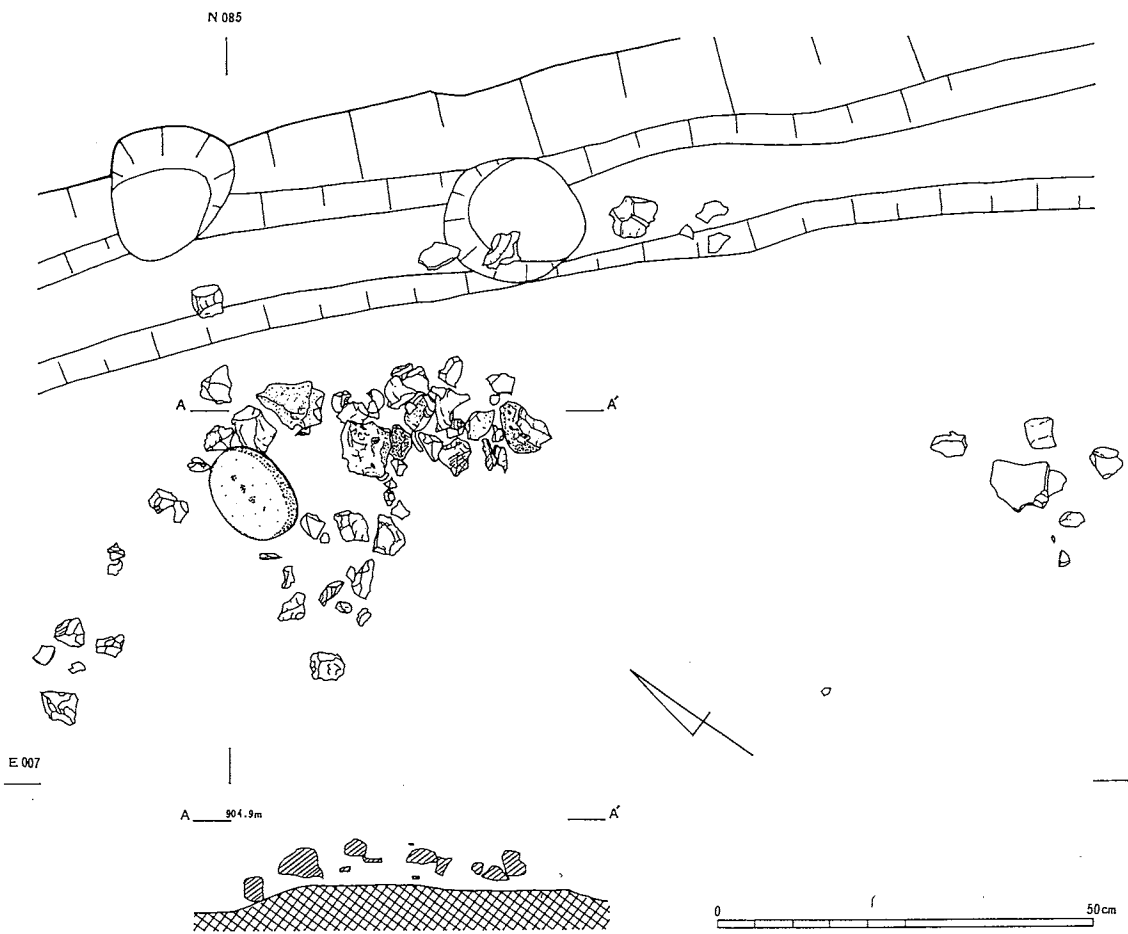
bも住居址類型Bに属し、規模は4.86×4.50 mである。壁は垂直に近く床とともに遺存状態は良好である。壁直下には幅10～20 cm、深さ10 cmほどの周溝がaと同様に西壁を除いて、しっかりと掘り込まれていた。支柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>が考えられる。その他周溝内またはその存在が予想される壁ぎわには、17



挿図 81 住居址 71 実測図



挿図 82 住居址 71 土器出土状態・接合関係図



挿図 83 住居址 71 床面上の黒曜石集積状態図

個のピット(P<sub>9</sub>~P<sub>23</sub>・P<sub>25</sub>・P<sub>26</sub>)がある。いずれも壁柱穴であろうが、各ピットは相対する壁のピットと、ほぼ対応する位置にくるよう一定間隔に穿たれている。すなわち、各隅にP<sub>12</sub>・P<sub>17</sub>・P<sub>20</sub>・P<sub>23</sub>があり、東壁ぎわにP<sub>18</sub>・P<sub>19</sub>、西壁ぎわにP<sub>10</sub>・P<sub>26</sub>、北壁ぎわにP<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>1</sub>、南壁ぎわにP<sub>21</sub>・P<sub>22</sub>と土壌990によって破壊されたと思われるピットがそれである。炉はF<sub>1</sub>であろうがP<sub>24</sub>付近の床面も焼けていた。そのほか床面上には数箇所の焼土があり、焼失住居の可能性が高い。P<sub>22</sub>上には固定式石皿がある。

遺物 遺物の出土状態はA<sub>1</sub>型であるが、北壁中央部の床面上に凹石とともに黒曜石の原石・石核がまわって出土しているのが注目される(挿図83)。2,000点余の遺物のうち土器片が1,350点あるが、II期は約400点で、他は上層の環状集石群ともなるIV期である。400点のほとんどがII期IAで頸部から胴部にかけて明確なくびれをもたない頸部類型cが多い(1849・1850・1852・1853)。しかし、床面出土の1851だけがくびれをもっており、住居址との関係を考える上で重要であろう。また、90のような細線格子文のある例は少ない。1854は口縁部付近に竹管による爪形文が施された土器でII期とは断定できない。

石器は石鏃22(689~701)、石匙3(702・703)、スクレイパー9(707・709・710)、石錐7(704~706)、ピエス・エスキーユ35(708)、使用痕ある剝片21、石核状石器4、乳棒状磨製石斧1、凹石3など計106点が出土しており、ピエス・エスキーユの多いのが目につく。そのほか剝片・石核などが500点ほど出土している。

### 3) 阿久II-C期

#### (1) 住居址37(挿図84~86、図60・61・125・156・157・239、図版33・114)

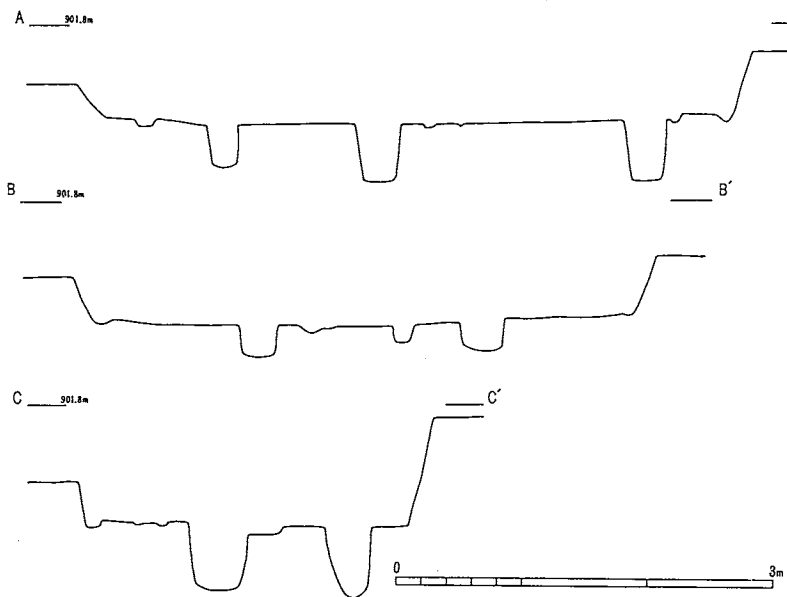
遺構 IR00を中心として検出された住居址で、調査区内II期の住居址として最も西に位置している。北側の一部は用地外であり調査できなかった。西側の張り出し部は、調査開始時には確認できなかったが、掘り下げが進むにつれて明確な掘り込みとして確認できた。床面にレベル差があり、セットになると考えられる4本の柱穴も検出されたため、張り出しと考えた部分は住居址の隅であり、2棟の重複であることがわかったが、ここでは(旧)・(新)とした。

住居址37(旧)は西側隅を残して(新)に破壊されている。壁は軟弱でなだらかに立ち上がる。(新)の床面より5cmほど上に(旧)の床面があったと考えられ、残存部の状態は内側に傾斜しており軟弱である。(新)の床面から検出されたP<sub>4</sub>~P<sub>7</sub>が、規模や位置より(旧)の主柱穴であったと思われ、長軸方向は(新)に比べると45°の差がある。

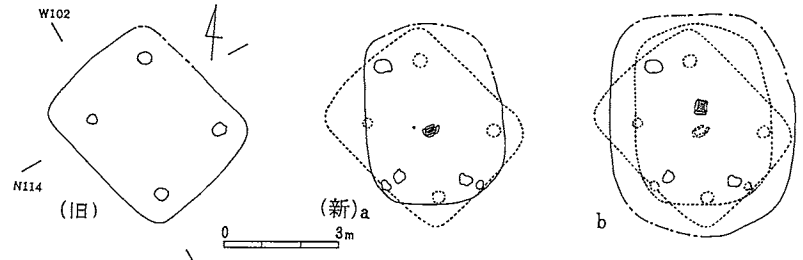
住居址37(新)は床面を同じくする1回の拡張(aとb)がみられた。拡張前のaは内側の周溝でほぼプラン(C型)が知られるが、規模はおおよそ4.80×3.60mである。主柱穴は4個であろう。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>まで検出したが、他は未調査地域にその存在が予想される。南側のP<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>は径は小さいが共にしっかりしており、上屋構造に重要な関係をもつ柱穴と考えられる。炉はF<sub>1</sub>でbと同じく、石囲い炉であったと思われる掘り方がみられた。bは住居址類型Dで規模は5.70×4.70mである。火災を受けており、焼土・炭化材が多量に出土した。床面はa同様にローム面を固めており遺存状態は良好であった。主柱穴はaのそれをそのまま利用しているため、プランに対して柱穴の間隔が短くなる。周溝中のピットは、深さ15cm前後が多いが、中には30cmをこえるものもあり、住居址aにみられたP<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>と同一の役割が考えられる。また住居址中央から貼り床を施したP<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>が検出されているが、所属する住居址は不明である。主柱穴を結ぶ交点上に前期の住居址では本址1棟のみの方形石囲い炉が設けられていた。直径1m、深さ10cmほどの掘り込みがあり、ほぼ中央部に長さ30cmほどの角礫を4個用い、炉底部より少量の焼土が検出された。

遺物 一括土器が床面付近より4個体(1861~1864)出土している。遺物の平面的分布は、壁寄りには少なく東側に集中する。断面では埋土内から一様に出土しているが、II期が下部、III・IV期の土器が上部と明瞭に分かれる。II期の土器はIA(278~286・1860~1866)、ID(293~312)、II群(287~292)、III群(313・314)が



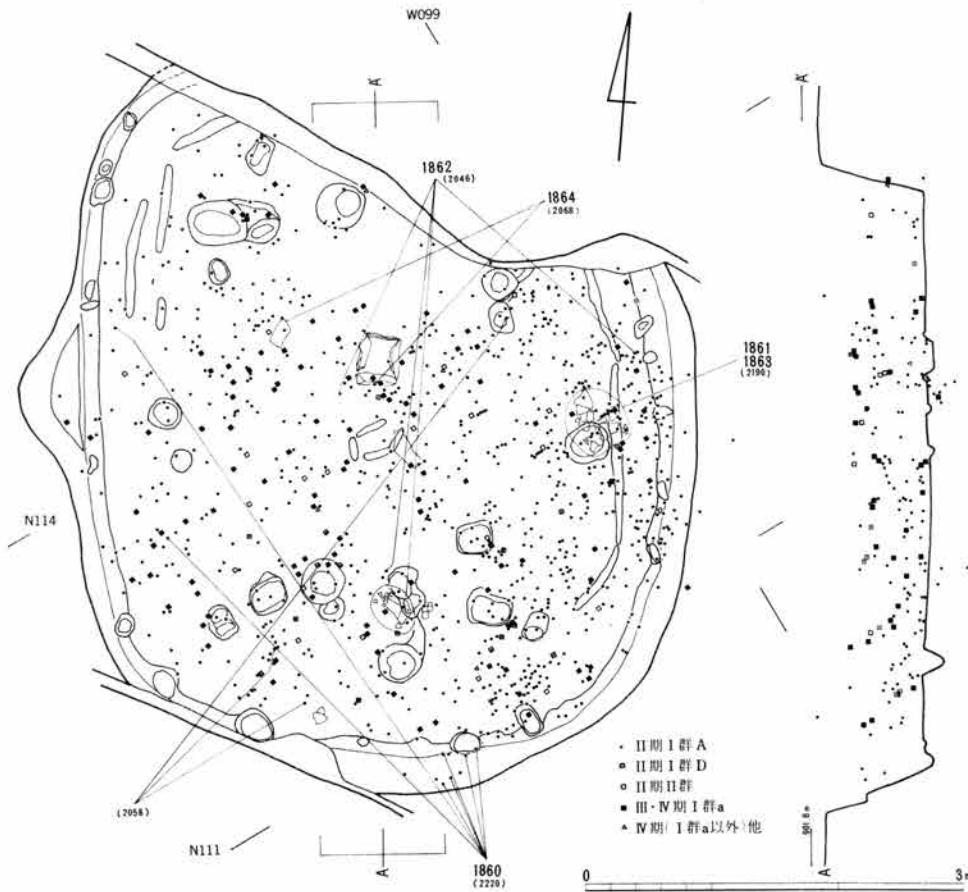


挿図 84 住居址 37 実測図



挿図 85 住居址 37 土器出土状態・接合関係図

ある。IA が 900 点ほどで、本住居址の主体をなしている。そのうち、器形のわかるものは 5 個体あるが 1860 を除くと他は平口縁である。これらは頸部の形態にもいくつかの変化がある。頸部のくびれ方がゆるやかで頸部類型 c (1860)、口縁部より直線的に下がる d (1864)、頸部径が胴部径より小さい a (1861~1863) の 3 種があり、後者は IA の中では様相が異なる。279~281・286 は IA と思われるが、押し引きに近い列点文が施されている。294~301 は III 期 I 群との判別は明確ではないが、本住居址の土器は内面のナデが丁寧である。そのほか櫛による列点文が施された 293、結束・



挿図 86 住居址 37 変遷図

ーユ 10 (238・239)、有抉頭磨石器 4 (240～243)、使用痕ある剥片 70 (244・245・247・248・250・251)、先端研磨石器 2 (1680)、凹石 13 と計 154 点あり量・種類とも豊富である。

(佐藤 信之)

結節を使った 308～312 などもあり、I 群 D を多く出土した住居址である。II 群とした 288・291・292 は III 期 II 群の可能性が高い。

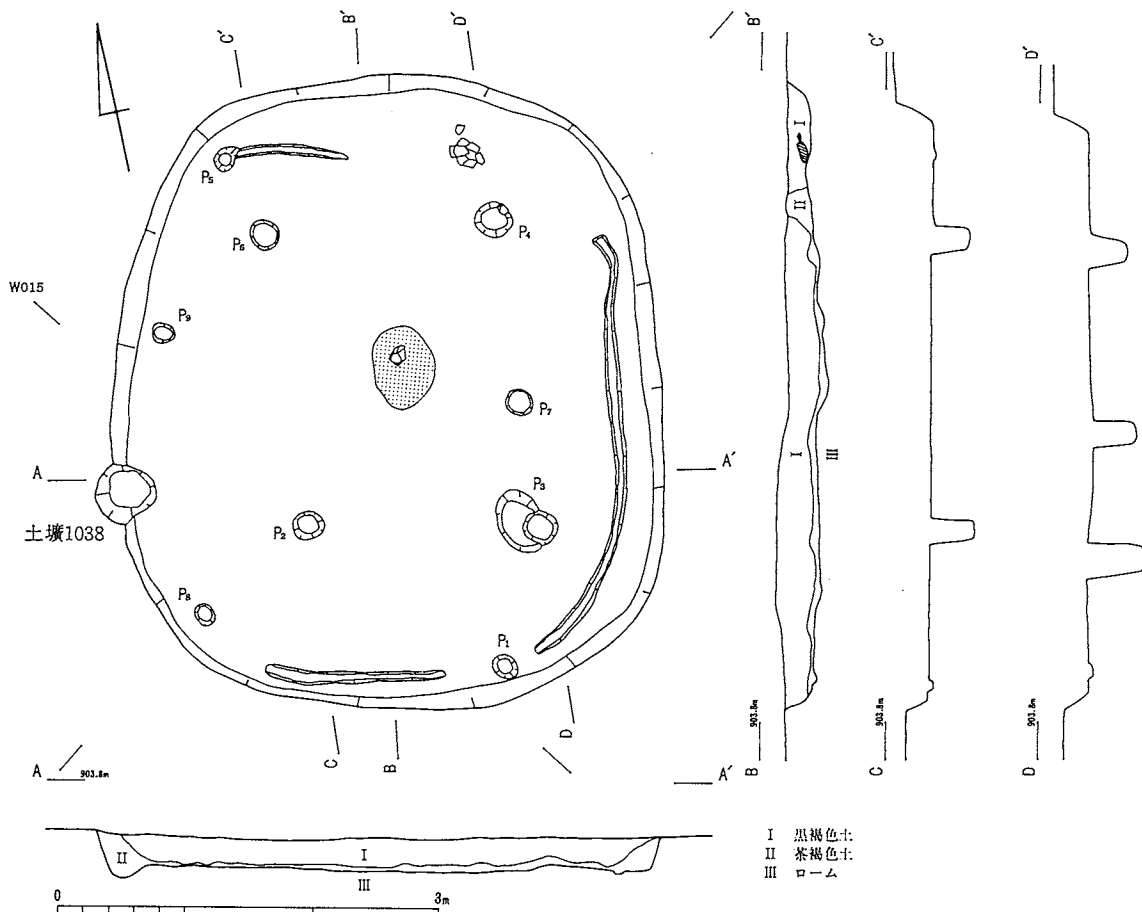
石器は出土状態や伴出土器から、多くは II 期に属すると思われる。石鏃 26 (216～226)、尖頭状石器 1 (227)、石匙 7 (228～232)、スクレイパー 9 (246)、石錐 12 (233～237・249)、ピエス・エスキ

(2) 住居址 56 (挿図 87、図 54・118・172・173、図版 34・110・137)

遺構 CD 56 を中心に検出された D 型の住居址である。西に住居址 28 があり、北西側に方形柱列 VI が隣接している。住居址プランは隅丸方形で、規模 4.82×4.00 m、長軸方位 N 18° E である。壁は比較的しっかりしており、最大壁高 30 cm である。床面は凹凸が著しく、やや軟弱さみで良好とはいえず、床面中央部は多少窪みがあるが、はっきりした段差はみられない。周溝が西壁部分を除き断続的にめぐっている。その位置からみて、住居の拡張が行なわれたと考えられる。ピットは 9 個検出されたが、支柱穴は P<sub>2</sub>～P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub> で、他は補助的な柱穴であろう。拡張に際しては、P<sub>3</sub> のみ柱が建て替えられたのであろう。地床炉は床面のほぼ中央にあり、若干掘り込んで焼土が 5～6 cm の厚さに堆積していた。

遺物 大半は I 層より出土し、II 層からはほとんどない。なお、北壁と P<sub>4</sub> との間の床面に約 60 cm 離れた 2 箇所より一括土器 (1766) が出土した (出土状態 A<sub>3</sub> 型)。

遺物総数は 630 点であるが、40% 強が土器で、残りが原石・剥片も含めた石器類である。土器は II 期 IA (116・117・1766)、I D (118)、II 群 (120～122) のほか III・IV 期がある。そのうち II 期 I A は出土土器の 85% を占めるが大多数は細片 (60%) である。1766 は波頂部を欠くが、おそらく波状口縁と思われ、頸部がややくびれ胴部が張り出した器形 A になる。口唇部は鋭い刃先をもった篋状工具による幅の狭い連続した刻目をもち、オサエ痕は残るものの、やや厚手 (8～9 mm) の焼成の良い堅緻な土器である。117 は頸部のくびれ



挿図 87 住居址 56 実測図

部にオサエ痕のある隆帯を横位にもつ小片である。118は楕円による特徴的な押し引文をもち、住居址のやや南側のI層中位から、互いに約60cm離れて出土した2点が接合したもので、内面に丁寧なナデがみられる波状をなす口縁部片である。また、やや薄手で堅緻な表裏縄文土器(119)が上層より出土しているがその編年的位置は不明である。なお、III・IV期は約8%あるが、いずれも上層からの出土であり混入と考えられる。

石器類は全体の約60%と多いが、定形石器はわずかである。内訳は石鏃7(655~658)、石匙2(660)、スクレイパー6(662・663)、石錐4(664~666)である。他にピエス・エスキーユ24、使用痕ある剥片68(659・661)、凹石4の計115点のほか、原石・剥片類が269点ある。(岩崎 孝治)

(3) 住居址 63(挿図 88・89、図 61・62・119・173・229、図版 35・111・139・140・185)

遺構 尾根が最も狭まる部分の南斜面上方、CP 89付近に検出された。上層に環状集石群がある他は、重複する遺構はない。北に住居址 64、西に住居址 69がある。プランはN 72°Eを長軸とした北辺のふくらむ隅丸方形で、規模4.20×3.70mのD型の住居址である。西へわずかに傾斜する検出面までの壁高は約20cmを測る。ほぼ垂直の壁やローム層中の床面は比較的軟弱であった。床面は平坦でなく、特に西側は5~8cm低くなっており、周溝はみとめられなかった。主柱穴はほぼ長方形に配置されたP<sub>11</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>4</sub>と思われる。P<sub>11</sub>・P<sub>2</sub>の床面からの深さは50cm前後あるが、P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>は30cm前後であり、P<sub>8</sub>・P<sub>14</sub>もまた柱穴の可能性が強く、床面の状態と合わせ、西への拡張が考えられる。地床炉は住居址のほぼ中央にあり、3~4cm低くなった床面が、30×10cmの範囲に、厚さ1~2cm焼けている。炉の西に接して、石をもつ径45cmのほぼ円形のピットがある。床面から2~3cm浮いて数個の平石を据えた上に径30cm弱の平石を置き、脇に

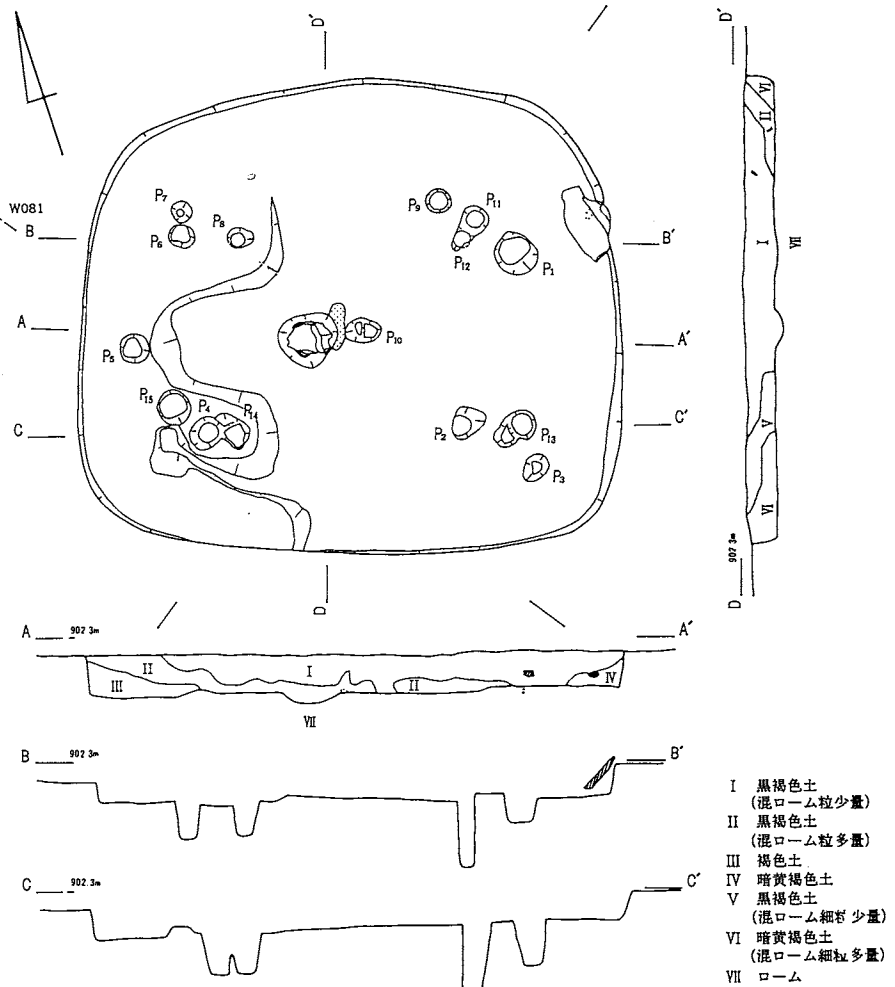
1個の平石を重ねた形である。ピットの埋土にローム・焼土小ブロックが混入しており、炉の一部を破壊して築かれたものと判断される。住居址埋土はピット上で切られておらず、ピット構築時は住居址廃絶直後と考えられよう。東壁やや北寄りには壁に斜めにかかる平石がある。埋土は褐色・暗黄褐色の一次堆積土が少なく、混ローム粒黒褐色土がレンズ状に入り込んでいる。東壁下のIV層中には炭化粒・焼土粒が含まれ、上部に焼土塊もみとめられた。

遺物の出土状態 B<sub>4</sub>型に相当する。一括

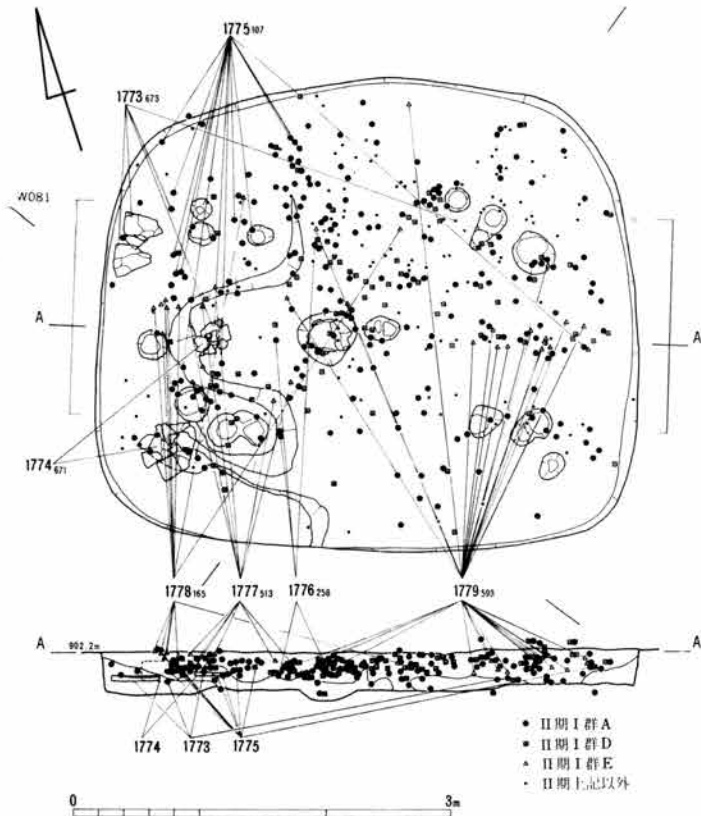
土器II期IAの2点(1773・1774)は住居址西側のII層下部から、共に口縁部を住居址外側へ向けて、押しつぶされた状態で出土した。1773の底部は中央東寄りのI層最下部から出土した。これ以外の土器はすべて破片である。II期IA(1775・1781)・ID・IE(1776~1778)があり、住居址中央部の、多くはI層中位にほぼレンズ状に分布し、II層と中央付近のI層下部には少ない。1775はほぼ完形まで復元されたが、1776~1778・1781は図化された部分の1/2~1/4個体程度である。1775~1777は西寄り、1778は東寄りの、共に遺物包含層中でも比較的上位に分布している。石器は土器片と同一包含層からほぼ均等に出土した。

以上の出土状態は一括土器が住居址埋土下部にあり、1775~1778・1781などはより上部にある形である。つまり、1776~1778が、1773・1774よりも、埋土の堆積過程からみれば後出的ということになる。しかし、1775の一部がII層にも及んでおり、必ずしも土器の層位別出土状態が明確に区別できない面もある。加えて、II期IEと共伴する土器の大部分はII期IAであり、これ等には1773・1774と基本的な相違はみられない。従って、埋没過程の中で一括土器と、より上層の土器群との間に若干の時間差はみとめられるにしても、形式的時間差とはならないであろう。

遺物 土器と石器、炭化物がある。土器は図化した深鉢9個体の他、約400片の深鉢片がある。完形の一括土器はいずれもII期IAである。口縁部が直線的で、刻目をもつ垂紐貼付文を付し底部が丸味を帯びるもの(1773)と、無文で尖底のもの(1774)である。IAは他に、口縁のわずかに外反するもの(1775)、ミニチュア土器(1781)がある。後者は焼成前に口縁直下に1対の孔が穿たれ、内面の孔より下部に漆が厚く附着して



挿図 88 住居址 63 実測図



挿図 89 住居址 63 土器出土状態・接合関係図

おり、特殊な用途が考えられよう。IA と判断されるものは多く、約 270 片と破片の 7 割強を占める。細線格子文 1 (315)、垂紐貼付文 2 (318)がある他は無文で、口縁部は直線的かわずかに外反し、23 片ある口唇部のうち 10 片に刻目をもつ。II 期 ID は破片で約 70 片、2 割弱である (324~344・346~351・353~358)。積み上げ時のゆがみがなく内面も平滑であり、口縁部はゆるい波状を呈する (335・341)か突起をもつ (325)。地文の縄文はループ文を伴う単節斜縄文が主体である。II 期 IE は、口唇に縄文を付すもの (1776)、刻目をもつもの (1778) および底部 (1777) で、頸部でくびれる器形である。胎土や調整・器形は IA に類似し、縄文をもつという点では ID に共通する。1776 と 1777 は胎土・色調・施文共に酷似し、出土地点も重なることから同一個体である可能性が

強いが、図化の結果一応別個体とした。IE の破片は数点 (345・352) である。II 期は他に、I 群 B または C と思われるもの約 10 片、II 群 5 片 (319~323) がある。埋土上層からは III 群 5 片 (359~363) と若干の III 期 (364~367・1779) も出土している。以上、住居址 63 出土土器は、阿久 II-C 期の良好な資料としてとらえられる内容である。

石器は多くなく、石鏃 3 (677~679)、石匙 1 (670)、スクレイパー 9 (671~675)、石錐 1 (676)、ピエス・エスキュー 7 (677~679)、有袂顕磨石器 1 (680)、使用痕ある剥片 25、石核状石器 1、円礫状石器 1、小形磨製石斧 1 (1529)、凹石 4 の計 54 点の他、黒曜石を主とする原石 6、石核 31、剥片・屑片 81 がある。石匙に有袂顕磨石器と同様の、スクレイパーの一部 (671・674) に顕著な使用痕が観察されている。

炭化物は、埋土出土のクルミ 1 点である。

(小池 孝)

(4) 住居址 68 (挿図 90、図 58・122、169 図版 35・112・141)

遺構 CK 94 付近に位置し、東側は住居址 69 に隣接する。用地外と現農道にかかる部分は、調査できず、全体のはぼ半分を明らかにしただけであり、平面形は定かでないが D 型の住居址となろう。南斜面上端に近く、表土層が薄く、住居址自体の保存もあまりよくない。したがって、壁・床なども全体に軟弱、不明瞭である。柱穴と思われるものは P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub> で、特に P<sub>6</sub> は 85 cm の深さがあり主柱穴であろう。P<sub>7</sub> は 74 cm、P<sub>3</sub> は 29 cm あって支柱穴と考えられる。浅い周溝が東壁にある以外に炉などの施設は何も検出していない。

遺物の出土状態 229~234 は III 層の出土であり、II 期 I A の土器は III 層から IV 層にかけて出土している。II 期 I A と I D は層位的には、分離できるといえよう。つまり、本址埋土下部では縄文をもつ土器 (主に織維土器) を伴わない状態が認められる。これは住居址 63 における状況とも関連して注意してよい (出土状態 A<sub>1</sub> 型)。

遺物 土器と石器がある。土器は I A 158 片 (228・232・1830~1833)、I B 3 片、I D 1 片 (233)、II 群

2片(229・230)、と羽状縄文をもつ繊維土器1片(231)などの計165点があり、このうち、床面出土は少なく(1831)、大部分はIII・IV層出土である。I Aのうち床面出土の1831は補修孔を一对もち焼成がよく頸部にわずかにくびれが認められるのに対して、III・IV層出土のものは直口縁あるいは内湾する口縁をもち、頸部のくびれはほとんど認められない。この形態差はI Dのあり方とともに注目される。口縁部片は19点あり、口唇部に刻目をもつものは3点で、他はない。

石器は少なく、石鏃の未製品と考えられるもの1(558)、小形のスクレイパー3(559・561・562)、同じく小形の有袂頭磨石器1(560)、凹石10、ピエス・エスキー

ユ2、使用痕を有する剝片8の計25点のみである。黒曜石の石核・剝片類も同様に少なく、いずれも埋土出土品である。

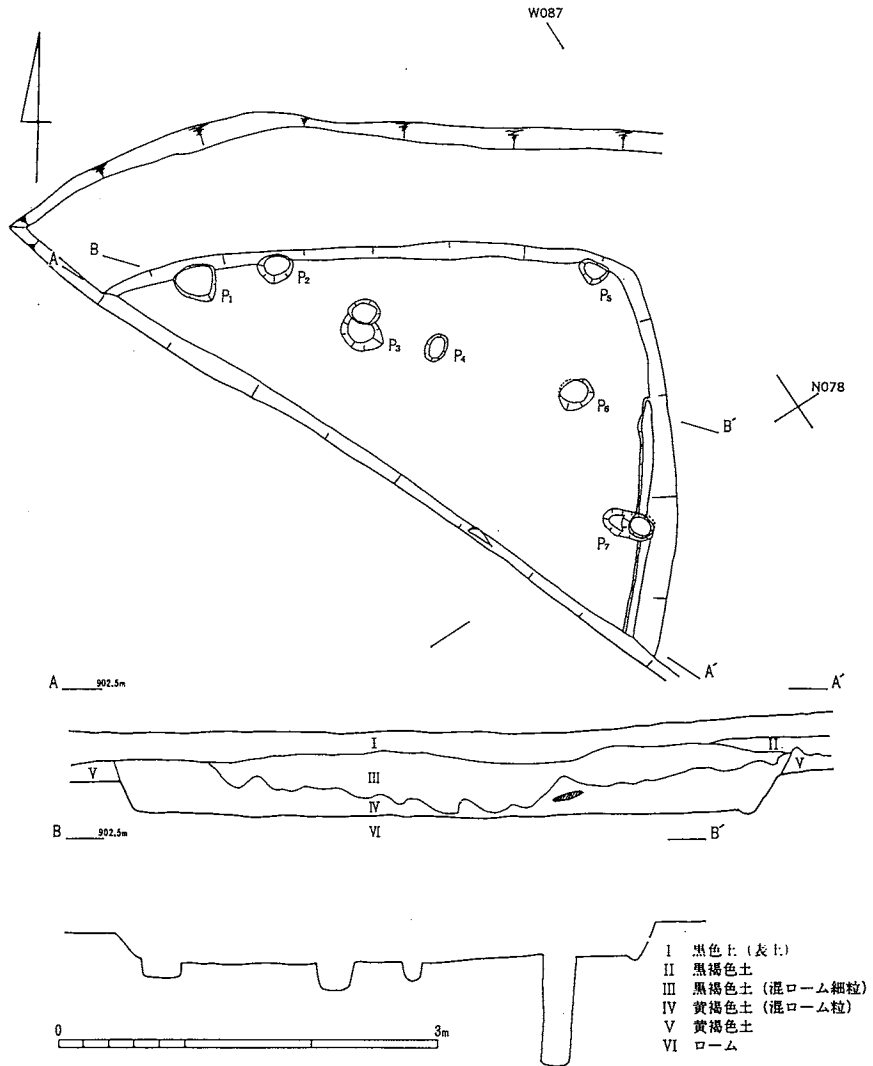
以上、本址の遺物は土器の層位的所見に特徴がある。上層のII期I Aの深鉢は、1830のように直口縁で、底部に向けて直線的に細くなっていくものと、1832のようにやや内湾ぎみになるもので構成され、これにはI BとI Dが伴う。これに対して下層のI Aは1831のような口縁直下でわずかにくびれ状を呈し、底部に向けて内湾しつつ細くなるものである。しかし、これらが型式差として認められるかは明らかでない。住居址プランではII-c期ということになる。(土屋 積)

## 2 方形柱列

### (1) 方形柱列I(図33・195、図版64)

環状集石群内縁に接するCJ 65付近に位置する。掘り方1および12以降が発掘区域外にかかり未掘である。掘り方2~8が第1次、9~11が第2次調査で検出・調査され、当初は一連の遺構としての認識はあったものの十分に読みとれなかった。

本址は基本的には南・北辺に5個の掘り方が直列し、その間に東西にやや張り出して3個を置き、計16個で構成されるB類型と思われる。南辺外にある11は本址に伴うものと断言はできないが、埋土のありか



挿図90 住居址68実測図

たが共通し、後述する方形柱列Ⅲ等の例から考えて、南辺に2列となる可能性もあり、本址に含めておいた。内部にある土壙20・78は、前者が形態・埋土ともに掘り方と類似し、後者も30cmとやや浅いがロームブロックを含む黒褐色土を埋土とする点は類似している。本址の掘り方には確実な柱痕跡は検出していないが、土層断面図によれば、非常に不規則な堆積状況を示すものが多く、人為的な埋戻しであることはほぼ確実であろう。特に5・11は縦方向の土層が著しく、中央部にローム含有量の少ない暗褐色土層があり、注目される。また、最下層のほとんどは黒褐色粘質土が薄くあり、壁寄りには立ち上っている。ローム粒を含む褐色土も、底部に接した部分は粘性を帯びており、これら最下層の粘質土はローム底による水分保持にも関連するものであろう。

柱位置が明らかでないので明確なことはわからないが、南北5.8m弱で東西はやや短く考えられ、N64°Wとなる。掘り方の規模は径1mほどの円形ないし楕円形で、深さは検出面であるローム漸移層下面より60~70cmのものが多く、これは推定される旧地表面からは90cm程度の深さである。

ほとんどの掘り方内からはⅡ期の土器数片が出土したが、11ではⅡ・Ⅳ期がほぼ同量で計10片(2170)ほどであった。石器は、11に石鏃が1点、他に黒曜石剥片数点出土した。これらの遺物は本址の機能に関連があるとは考えられないが、Ⅱ期の土器は本址の時期を示すものと考えたい。

## (2) 方形柱列Ⅱ(図34・195、図版64)

方形柱列Ⅰのすぐ南に隣接するCM67付近で検出されたが、上層は環状集石群をはずれる。東西辺にそれぞれ5個、南北辺にやや張り出して3個ずつの掘り方を配列するB類型であるが、整然とはしていない。掘り方は小形で住居址の柱穴とそれほど変わるものではない。土層の状態は他例と同様にロームブロックを多量に含んでおり、最下層は粘性を帯びている。柱痕跡は確認されなかったが、掘り方6のローム粒を含まない暗色土などはその可能性があろう。

本址の掘り方の1~5・11~16は形態的にも類似し、配列も整っているが、6~10・17はより小形で配列にも乱れがみられる。一辺5個配列の原則もこの東辺のありかたにより変形したものとなっている。掘り方の規模は前者が径70cm、深さは検出面から75cmでほぼ一定しているが、後者は径40cm前後で、深さは25~80cmとやや差がある。東西3.7m、南北3.5m、方向N38°Wとなり、東西に多少長い。

掘り方内出土土器は、Ⅱ期3片、Ⅲ・Ⅳ期各2片(2171~2174)の小片であり、時期の決めてとするのは難しい。

本址の外側には土壙356・360・362・363・382・412、内側に土壙594~596・598がある。深さは382・595・596が20cm前後、412が36cmである他は40cmから70cmまであり、40cmを越えるものは本址の掘り方と類似した形態をもつ。また、356・363・594~596・598は埋土にロームを含み、掘り方と類似性が認められる。しかし本址にともなう遺構であるかどうかの判断は難しい。

## (3) 方形柱列Ⅲ(図35、図版65)

CQ74付近に位置し、遺跡のほぼ中心にちかい。計28個の掘り方を検出しており、全体としては方形となるが、南辺と西辺では掘り方が複雑に切りあい、その状態は明確に整理して述べることは困難である。しかし、基本的には南北の4~7を直列辺とするB類型と考えられる。なお、保存のため埋土の一部は掘り残してある。

各掘り方はローム漸移層下面で検出された。現地表より検出面までは50cm前後の深さがある。検出当初から、ロームブロックの含有率の差などから複雑な切りあいが予想され、本址に付属しない土壙の存在も考えられたが、結果は、形態・埋土の共通性と切りあいが南辺と西辺に限られていることなどから、すべ

てが本址に属するものと考えに至った。周辺および内部には掘り方以外に土壌は存在しない。

切りあいは土層観察によるかぎり、西辺では内側のものほど新しく、逆に南辺では外側が新しいという傾向を示している。しかし、これらの多くは底面のレベルがほとんど等しい。また、一部を除いて、大量に含まれるロームブロックのために土層観察が非常に微妙であったために、壁面が屈曲する位置など平面形を土層判断の参考としたものもある。そのため、これらの切りあい部分が、個別に掘り込まれたものの集合体であることはその平面形からも明らかであるものの、これらが掘り方として別個に時間差をもって機能したものであるかどうかは判断しがたい。底面レベルなどの共通性は、掘り込みがきわめて近接した時間内に行なわれたことを示すと考えられるが、切りあい関係にある掘り方の一方が完全に埋められた後でなければ掘り込まれないという点で、時間差を考えなければならないということも事実である。

一方、切りあいの認められない他の二辺の掘り方は、きわめて整然と配置されており、平面形や深さも当初からの規格性を良く示している。これに対して切りあいのある二辺は、平面形・深さともに形態差が大きく、配置も整然としない。もし、これらの中から、北辺と東辺に対応するかたちで、全形が整然となるように抽出するとすれば、最も外側にあるものということになる。しかし、その場合でも、東辺が直列して4個、西辺が5個で中央が小形、その間の南北辺に3個ずつを置くという、他に例のないものとなる。このことと、切りあい関係についての所見を考え合わせるならば、本址の西辺と南辺における無規格性は、構築時の規格意識の混乱にその原因を求められるかもしれない。この切りあいが上部構造の平面的拡張または縮小を示すものであるなら、掘り方12~14のように二次にもわたる間に他の二辺が、全く当初のままであり続けるということは、堅穴住居の例などからみても無理と思われる。

本址では確実な柱痕跡は見出されていない。しかし、北辺と東辺では、縦方向のローム含有量の少ない土層が認められるものがあり、これらがそのまま柱痕跡であると断定はできないが、埋没過程において柱痕の形成に類することがあったと考えることはできよう。また、切りあいの認められる二辺において同様な事実が観察されなかったことは、観察の不備も考えられるにしても、ほとんどが他の二辺とは異った状態で埋没したと考える必要がある。つまり、これらのいくつかは掘り方としての機能を果すことなく埋め戻された可能性があるということである。

以上のように、本址はB類型の変形と考えるが、その場合、柱間寸法が不明であるものの、およそ東西5.4m、南北5.1mのやや東西に長い形態となろう。直列辺の方位はN 37°Wである。掘り方は検出面から80cm前後の深さが多く、発掘区境にかかって表土まで土層観察ができた部分の所見では、120cm以上の深さを有したことがわかる。ただし、この部分は現農道面であり、第I層以上の部分の層序は遺跡の他の場所と異っており、掘り込み面および検出面までは浅くなっている。本址の内部および周辺では床面、焼土面などはなく、遺物の特別な散布も認められなかった。埋土上層を中心にII期の土器片十数片が出土しているが、埋め戻し時に偶然残されたものと考えられ、遺構の時期を示すものであろう。

#### (4) 方形柱列IV(図36、図版19・33・66・67)

BW 97 付近にあり、遺跡西端にちかい。この部分の発掘区は幅6m程度と狭いが、本址は偶然その中央に位置し全形を明らかにすることができた。B類型としたものの典型であるが、すでに調査概報で述べたように本址には極めて明瞭な柱痕跡が観察された。このことは、この種の遺構で初めてのことであり、以後の方形柱列の調査方法を切り替える契機となった。なお、本址は保存のため柱痕跡が確認された部分はそのまま埋め戻してある。

掘り方はローム漸移層下面で検出しており、現地表より検出面までは90~100cmの深さがあるが、断面観察では検出面より20~30cm上まで立ち上りが認められた。周辺および内部には掘り方以外に土壌などは



ないが、掘り方2の東側に隣接してII期の住居址36があり、その項で述べたように住居址36より新しいと考えられる所見がある。

掘り方の土層は、水平堆積を示すものが多く、ロームブロックの含有率の差によって分層することができた。掘り方11～13などは、ロームをほとんど含まない黒褐色ないし暗褐色土とロームを多量に含む層との互層が顕著であった。しかし、これらの堆積土は硬くはなく、柱痕跡部分とあまり差はない。本址もまた最下層は粘性を帯びており、ロームをほとんど含んでいない。確認されている柱痕跡は11～13の3箇所である。これらの掘り方は、いずれも外側が浅くなり二段の掘り込みをもつもので、当初、方形柱列IIIのように切りあいがあるかとも予想されたが、最初から一連のものとして掘り込まれたことが明らかとなった。11の柱痕跡は直径26cmで掘り方底まで達しているが、上部は検出されていない。12のそれは径20cmで底まで達していない。13では上部で径45cmあり、これは他の2例と異なり掘り方壁に接している。同径で底に達する土層があるが下部は土質が異なっており、底まで達するものかどうか明確ではなく、また、上面にみられる礫が本址に関連するものか、上層集石面に関連するものなのかは明らかにしえない。上層の土層が確実でないので確言はできないが、二段目の掘り込みの埋土が12の上に乗って及んでおり、これは12が埋め戻されてから掘り込まれたことを示すものであろう。ただ、それが13の二段目以上の部分に限られるのか、下半部も含めて13全体が12の埋め戻しの後に掘り込まれたのか決定はできない。柱痕跡の上部が不明瞭であるものが多いことを考えれば、二段目の掘り込みは柱の抜きとり穴である可能性もあろう。しかし、埋土の状態は下半と上半で変わるところがなく、もし、掘り込みが二次にわたったとすれば、一次と二次の埋め戻しが同様に、掘り上げてすぐ行なわれたものであり、その時間差はきわめてわずかであったと考えなければならない。

3箇所の柱痕跡はほぼ直列し、これは東・西両辺の掘り方の方向とも一致しており、ここから推定される規模は直列辺方向に5.6m、北辺および南辺が5.0mの南北にやや長い形となる。直列辺の方位はN31°Eである。掘り方の形態は東辺では径90cm程度の隅丸形状が多く、検出面からの深さはいずれも120cmほどである。西辺は二段の掘り込みをもち、下部は長円ないし隅丸長方形、上部は東辺に類似する。深さは二段目までが40cm、底までが130cmでほぼ共通する。北辺および南辺では、中央にある7・15が径60cmで深さ100cmと60cm、その他が径50cmで深さ90cm程度であり、この方向は柱痕跡の認められた東西辺の方向と直交せず、極端にいえば本址は平行四辺形ということになる。そのため推定しうる方位にはある程度の幅があるが、ここでは一応、3箇所の柱痕跡を結ぶ方向としておく。これらの掘り方の深さについては、観察しえたいくつかの例からみて、少なくとも検出面より30cm以上立ち上っており、旧地表から直接掘り込まれたとすれば、ここで示した数値に約50cmを加えた数字が本来の深さであったということになる。

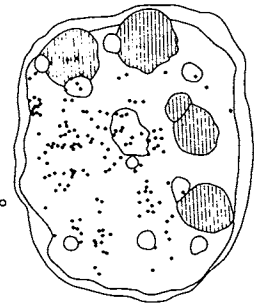
遺物は2の中層から無文厚手の繊維土器の大形破片(II期I群B)、12の中層からスクレイパーが出土している。本址には、掘り方以外に床面・焼土などは認められていない。

#### (5) 方形柱列V(挿図91、図38、図版67・68)

方形柱列Iの北、CE62付近に位置する。西端の掘り方13は発掘区域外のために未掘であるが、南辺および北辺にそれぞれ5個の掘り方を直列させるB類型である。II期の住居址57と切りあっている。切りあい部分以外の掘り方埋土は検出面で特徴的なロームブロックが認められたのに対して、切りあい部分では住居址埋土と土質に変化がなかったために、当初、住居址の方が新しいと判断した。しかし、切りあった掘り方の住居址床面レベルには貼り床や床面は認められず、住居址57の埋土に特徴的な遺物である焼成をうけた粘土塊の出土位置が、掘り方上面にはほとんどないことなどから、本址の方が新しいと結論した。

切りあい部分の掘り方埋土上層にロームブロックが少なかったのは、掘り上げた住居址埋土を埋め戻したために、住居址埋土と掘り方埋土の判別が困難になったことからと思われる。これらの床面レベル以下に残された掘り方埋土が他と比べてローム含有量が少ないのも、このことを示していると考えられる。この土層の状態からすれば、本址は住居址 57 が、本址の機能に障害とならない程度に埋没した段階に構築されたことになろう。他に 1 の上層には集石 163 が構築されている。

本址の周辺および内部には、土壌 625 があるだけである。土壌 625 は径 80 cm 弱、深さ 70 cm ほどで埋土中にロームをほとんど含まず本址に付属しない遺構と考えられる。



○ 方形柱列

柱痕跡と考えられる暗褐色土層は掘り方 1・3～5・8・9 で検出されており、挿図 91 方形柱列 V 焼他に掘り方 2・7・11 にもその可能性がある。これら以外にも縦方向になんらか成粘土位置図の土層が認められる例があるが、上面にまで達するものは少ない。明瞭に確かめることができたものは、すべて中層まで掘り下げた段階で、平面的に確認した後その断面を観察しえたものであった。このような状況は、遺構の遺存状態に関係するだけでなく、なんらかのかたちでその機能にも関連すると思われる。柱痕跡は最大で径 32 cm、最小で径 12 cm あり、特に隅に位置するものは径の大きいことが注意される。また、9 では柱痕跡が 3 箇所を検出されており、上層の礫は根固めと考えると良い位置にある。このうち実線で示した 2 箇所は上層にあり下部には達していない。より明瞭な 1 箇所はその下層にあり、底まで達していない。これらの先後関係は不明であるが、少なくとも上層の柱痕跡 1 箇所が下層のものより新しいと考えねば層序の説明ができない。以上の柱痕跡と考えられる一群の他にも埋土中には縦方向の土層が認められる例が多く、掘り方のほとんどすべてに柱痕跡が存在した可能性が想定できよう。

以上から推定される規模は 5.6×5.6 m の正方形で、直列辺の方向は N 72° W となる。掘り方は径・深さとも 110 cm 前後の円形ないし長円形で底は径をやや小さくし、ほとんど同形態であるが、深さがやや不揃いである。旧地表は 1 と集石との関係からみて、検出面上 30 cm 程度と考えられる。掘り方 1 にみられる二段の掘り込みは、方形柱列 IV 号例に類似するが、むしろ集石構築にともなう掘り込みであろう。他と同様、本址も床面・炉・遺物の特別なまとまりなどは見出されていない。

掘り方埋土中からは II 期 44 片、IV または V 期 3 片の土器が検出されており、石器、剝片なども 23 点ある。特に掘り方 1 は直上にある集石 163 に伴うと思われる遺物が多いが、他はほとんどすべてが II 期 I 群 A である。これが本址の時期を示すと考えてよいであろう。

#### (6) 方形柱列 VI (図 39・195、図版 31・69)

方形柱列 V の北 10 m、CA 55 付近に位置し、上層は環状集石群北辺にあたる。南辺および北辺を直列させる B 類型であるが、東辺の掘り方 6 が欠ける。住居址 54、方形柱列 VIII と切りあっており、切りあい部分の土層観察、住居址に貼り床がないなどの点で、住居址 54 → 方形柱列 VIII → VI の順に構築したと判断される。なお、住居址 54 との関係についての詳細は前述したので省く。

内部に土壌 671・715 がある。前者は深さ 30 cm 程度で上面に礫を置き集石状になるが、本址には直接関係するとは思われない。後者も明褐色土を埋土とし、深さは 34 cm であるが同様に考えてよいだろう。

柱痕跡と考えられるものは、掘り方 1・2・9・11・12 で検出されており、13・14 もその可能性がある。いずれも検出面では明確ではなく、40 cm 程度掘り下げて初めて検出できた。径は上部で 20～30 cm、下部で 15～20 cm 程度が多く、すべて掘り方底に達している。9 では炭化材が残っていた。9～13 に認められた柱痕跡はほぼ直線上にならび、南辺を推定できる。北辺の 1・2 はこれに平行とはならないが、1 の位置で

北辺を推定しておきたい。西辺は他の B 類型同様、やや外方へ張り出すが、東辺はほとんど張り出さない。しかし、この二辺の掘り方は、他の二辺のそれが隅丸方形であるのに対して円形であり、B 類型に共通する特徴を示す。掘り方の深さは南辺と北辺が 100 cm 前後、東辺と西辺が 80 cm 前後でよくそろっているが、例外的に南辺中央の 11 が 135 cm と深いことが注意される。埋土はロームブロックを含む点で他例と共通するが、水平方向の土層がほとんど認められないことが特徴的である。

以上より本址の規模は南北 5.0 m、東西(直列辺)4.3 m、直列辺の方向 N 61° W と推定される。掘り方 6 が欠ける点は、方形柱列 VII の掘り方 10 でみられるように隅から 2 つ目が欠けるという共通性がある。

掘り方内からは土器小片 67 点(2175~2180)が出土した。うち 63 点は II 期の土器であり、これが時期を示すと考えられる。他に黒曜石剝片などが 41 点ある。

#### (7) 方形柱列 VII(図 37-1・195、図版 22・71)

方形柱列 IX の西、CM 84 付近にある。大部分が発掘区域外にかかり全体の 3 割ほどを調査したにすぎない。南辺と北辺を直列させる B 類型とすれば、未掘の掘り方は北辺 4 個、西辺 3 個、南辺 2 個または 3 個と思われる。南辺の掘り方 9・11 の間は他例より考えて間隔が広すぎ、10 が未検出あるいは欠けるものと想定しておきたい。本址は環状集石群中にあり、その下層でローム漸移層中に検出された。9 の上の大形礫、6 周辺の礫などは上層の集石に関連し、本址に直接関係するとは思われない。また、周辺および内部には他の土層は存在せず、切りあい関係にある遺構もない。

発掘時に柱痕跡としてとらえられた例はないが、7 にみられるローム含有量の少ない土層などは可能性があろう。また、6~9 の掘り方底にみられる径 30 cm、深さ 5 cm ほどの一段深くなる部分も、土層観察では明らかにならなかったが、柱を建てた痕跡を示すものと考えられよう。埋土は、3~5 層のローム含有量の異なる土層より成り、ほとんど水平な堆積を示すが、断面観察は通常の土層として行なわれたので、柱痕跡が観察されないものにも存在した可能性は否定できない。

東辺に推定される 3 本の柱位置を B 類型にあてはめると、直列辺方向の長さは不明だが、方位 N 56° W、東辺の長さ 4.15 m を推定できる。掘り方は径 80 cm 程度の円形ないし長円形で深さは検出面より 80 cm 前後ある。1・11 の土層断面によれば、旧地表は集石面である II 層中にあり、検出面より 20~30 cm 上にあったと考えられる。本址もまた掘り方以外の施設は認められなかった。

掘り方埋土中より土器小片 7 点(2181・2182)が出土し、うち 5 点が II 期 I 群 A である。

#### (8) 方形柱列 VIII(図 39)

CA 53 付近にあり、方形柱列 VI、住居址 54 と切りあう。先述したように、前後関係は住居址 54、方形柱列 VIII、VI の順となるが、VI の北に平行して位置し、一辺のみが切りあう点からも VI とは密接な関連が予想される。

本址の掘り方は計 8 個が考えられるが、その配置は他と比べて異例であり、形態も多様である。これらは掘り方 5 が 50 cm とやや浅い以外、掘り方 2~4・6~8・10 はいずれも検出面より 100 cm 前後の深さがある。2~4・10 は大形で形態も類似するが、5~8 は小形である。B 類型と考えるならば 1 と 10 が欠けるが、その場合でも北辺、南辺各 4 個で、その間の東西に 1 個ずつを置くという形態でやや異質である。むしろ各辺 3 個の A 類型にちかいと考えるべきかもしれない。また、北辺および西辺と、東辺および南辺のありかたが異なるということは、方形柱列 II においても認められることであり、掘り方の大きさも似ている。一応、B 類型の変形と考えておきたい。

柱痕跡の確実なものは掘り方 10 で、可能性あるものは 3 と 4 で検出されている。いずれも埋土下半で検

出され、掘り方中央にあって底まで達している。径は10が22 cm、3が28 cm、4が18 cmある。これらの位置から推定できる規模は、2～4の直列辺方向で4.25 m、南北3.8 mであり、直列辺の方向はN 61° Wで、方形柱列VIと一致するが、東西にやや長い形となる。方形柱列VIと一辺がほぼ共通し方向も一致することからみて、それを可能とする地表上の目標物が残存した間にあいついで構築されたものと考えられる。

掘り方内からは土器小片20点が出土した。そのうちII期I群Aは12点、I群Bが5点である。他に石器が5点ある。

#### (9) 方形柱列IX(図37-2)

方形柱列Vの北西、BX 62付近にある。主要部分は用地外にあり、2個の掘り方の一部を明らかにしたにすぎない。掘り方の形態はB類型であり、その北東隅にあたる部分と思われる。土壌775・776が切りあい、断面観察によれば、掘り方1および2、土壌775・776の順に掘り込まれている。土壌は埋土にロームをほとんど含まず、立ち上りがII層上面にまで達し、I層中に掘り込み面があったと考えられるなどの点で、掘り方とは異っており、他例でも方形柱列の掘り方がこのような状況を示すものはなく、土壌775・776は本址と関連がないと考えられる。

柱痕跡と考えられる部分が掘り方1にあり、径は上部で22 cm、下部では10 cmあるが、掘り方底には達していない。2は断面部分が中心をはずれているが、ロームブロックの含有量の異なる土層がやや複雑に堆積する。

未掘部分が多く断言できないが、掘り方の規模、深さは方形柱列Vと類似する。1・2をそれぞれ方形柱列Vの掘り方5・6にあたる部分と考えれば、方向・規模ともに方形柱列Vと同様の推定が可能であり、方向がN 72° E、一辺5.6 m程度の方形を覚えておきたい。周辺には他に土壌はみられず、本址と関連すると考えられる床面・焼土などはなく、掘り方内からも遺物の出土はない。

#### (10) 方形柱列XIII(図40、図版71)

方形柱列IVの東、CB 93付近にある。北隅に予想される掘り方1が発掘区外で未掘である。住居址65と切りあっており、掘り方2・3はその床面下に、他はローム漸移層中に検出された。Aタイプの典型である。2・3には整形したロームブロックをはめ込んで貼り床があり、住居址より古いことは明らかである。3に接する土器を埋設するピットは貼り床がなく、住居址に伴うものと判断される。

柱痕跡は明らかでないが、掘り方5～7では径20 cm、深さ5 cm程度の一段低い部分が掘り方底にあり、柱位置を示すと思われる。埋土はローム粒を含む暗褐色または褐色土である。掘り方の深さは、5～7が50～70 cm、4・8が20～30 cm、2・3は住居址の検出面から計って55～65 cmとなる。

5～7の柱推定位置はほぼ直線上に並び、それに平行に対応する辺を考えると、この二辺間の4・8は方形柱列IVにみられるようにやや外へ張り出し浅くなっており、B類型での直列辺は2・3と5・6・7にあたる。これから考えて南北2.7 m、東西2.5 m、直列辺の方向N 29° Wとなる。周辺には他の土壌はなく、掘り方以外の施設も認められない。しかし、東側の土壌631・633は埋土・形態が類似する。遺物は5～7の各中層でII期I群Aの土器小片各1片があるにすぎない。(土屋 積)

### 3 土 壌

II期の土壌は出土遺物等から10基がとらえられ、同時期の他の遺構群と同じく、いずれも中央地区西寄りにある(挿図92)。A・B型土壌が各1基あるほかはすべてC型土壌である。

(1) A型土壌(土壌 670)

土壌 670 があり、住居址 55 の埋土中に検出された。一辺 30~40 cm の平石が土壌中央と壁際に 2 点検出された。いずれも検出面近くに斜めの状態(1β)で出土している。埋土からⅡ期Ⅰ群の土器片 40 点や黒曜石の剝片とともに炭化クルミ片 10 点が出土した。



挿図 92 II期土壌分布図

(2) B型土壇(土壇 878)

土壇 878 のみで、住居址 69 に切られた土壇 876 を切っている。径 100 cm 以上、深さ 74 cm である。住居址の壁際に接するように 2 個の礫があり、埋土内からはII期 I 群の土器片と黒曜石の石核・剝片などが出土した。

(3) C型土壇(土壇 291・402・603・636・669・729・872・876)(図 48)

長径 100~200 cm と大形の C II 型 (291・729) と、長径 50 cm 前後の小形の C I 型 (603・636・669・729・872・876) とがある。

土壇 402(図 47) は方形柱列 b の内に位置し、C I a 型の中形土壇である。径 70 cm の壇底には土器小片を一重にぎっしりと敷き詰め、中央部には土器片はなく、径 2~3 cm の小礫を透き間なく敷きつめていた。埋土は「U」字形堆積(c)と考えられ、埋土中からは土器細片が数点出土したのみである。敷かれた土器片は 2 個体のみで、いずれも接合できた(2274・2275)。内湾した口縁部内面には炭化物の付着が観察される(2274)。両者ともに基本的にはII期 I 群 Id 2 の土器である。(百瀬 新治)

### 第3節 阿久III期

#### 1 住居址

##### (1) 住居址4 (挿図93、図63・126・175、図版142)

遺構 尾根南斜面のES 52を中心として検出された。III期住居址群では住居址8と共に最も南側にある。西壁の一部が土壙1033によって切られた長楕円形を呈し、3.44×2.52mの小形の住居址である。長軸方向はN 10°Wであり、斜面の最大傾斜線にある。壁は北東部が最も高く床面より垂直に近く立ち上がり、20cmほど上がった所で外側に傾斜している。床面は全体に凹凸が激しく、中央部がやや凹むが、南側の一部を除けば堅くしまっている。柱穴・炉等は検出されなかった。

遺物 出土状態はA<sub>3</sub>型に属する。遺物総数は72点と少なく、うち68点が土器片でIII期I(371~375・1867)、II(368~370)、III(376~377)の各群がある。1867は床面より出土した器形の分かる唯一の土器で、単節と無節による羽状縄文が施された深鉢Fである。住居址内出土のIII期の土器は、ほとんどIaである。他に若干のIII期II群土器があり、369・370は網目状燃糸文が施されている。

石器は石鏃(733)1点のみである。

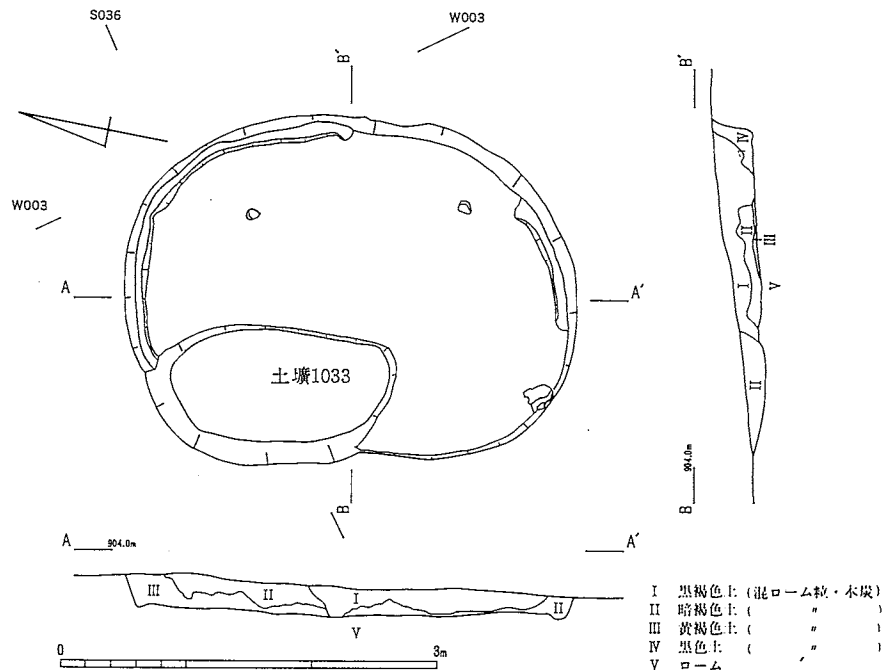
(佐藤 信之)

##### (2) 住居址12 (挿図94、図65・126・176、図版36・44・114・142)

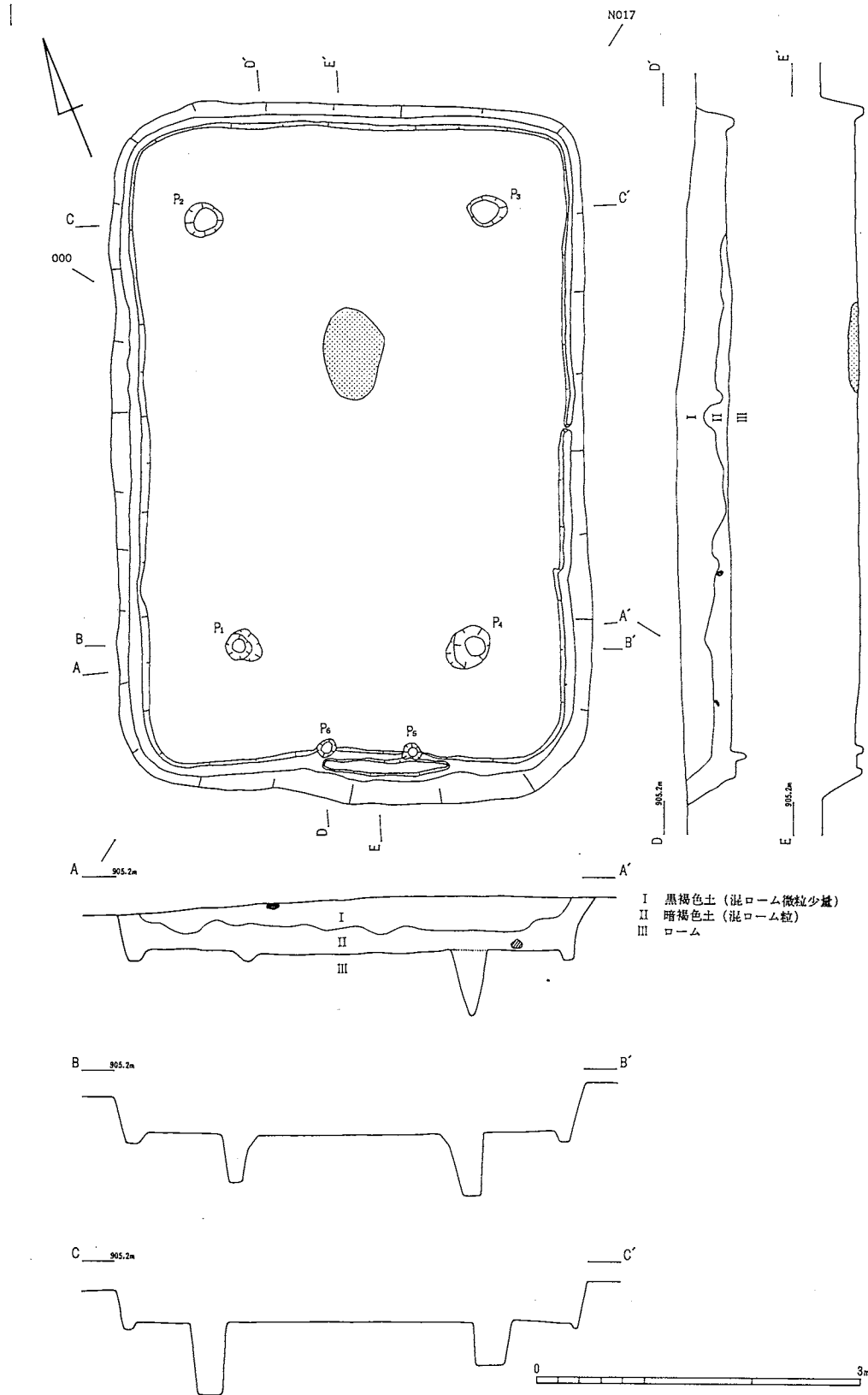
遺構 調査区のほぼ中央、DQ 50を中心として検出されたB型の住居址である。住居址59の西南部分の一部と切りあっているが、本址の調査終了後、住居址59の検出時に両者の切りあい関係を確認したために、十分に検討できなかったのが不明な点が残った。住居址12の検出面と住居址59の床面がほぼ同一レベルにあるという点等、問題

があるが、後者の貼り床に相当するものが確認されなかったことなどから、住居址12が住居址59を切っていると判断した。

住居址の規模は6.20×4.10mで、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向はN 19°Eである。壁と床面はロームに比較的深く掘り込んでおり遺存状態は良好であった。壁高は30~40cmである。周溝は



挿図93 住居址4実測図



挿図 94 住居址 12 実測図

遺物 総数は 676 点で、うち約半数が土器である。II 期 IA、III 期 I・II・III 各群、IV 期があるが小片が多い。しかも文様の不鮮明な細片及び磨滅片が半数を占めるが、III 期 Ia(427~435)は、土器全体の約 25% に当り、うち IV 期 Ia の混入が若干考えられるが大半は III 期 Ia とみてよいだろう。縄文原体は LR+RL が 24% と一番多く、以下、RL 18%、L 17%、R と L+R 9%、LR 5% である。なお、III 期 I 群の底部が 5

幅 10~18 cm、深さ 5~9 cm でしっかりしており、全周するが南壁中央部では、約 1.30 m に亘って 2 本に別れている。ピットは 6 個検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> が支柱穴で、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub> は補助的な柱穴であろう。地床炉は長軸上のやや北寄りにあり、焼土の厚さは 5~10 cm であった。

遺物の出土状態 土器と石器があり、ともに住居址のほぼ南半分に片寄った分布を見せる。床面付近と壁際に遺物は少なく、ほとんど I 層から散在した状態で出土した(遺物の出土状態 B<sub>4</sub> 型)。なお長軸上南寄りの床面から 35 cm 浮いて、本址唯一の一括土器(1868)が出土した。



点(1869・1871~1874)出土しているが1870はV期であろう。III期II群(423~426・1868)はわずか17点と数は少ない。III群はD<sub>1</sub>(446・447)・D<sub>2</sub>(445)の他計6点がある。II期IAは土器出土量の約10%で、住居址南側の埋土上層に集中して、またIV期(436~443)は4%で埋土上層全面に亘ってVII期(448)とともに出土した。いずれも混入品であろう。なお、444は胎土・内面調整にIII期I群の特徴がみられるものの、器形、さらに編年の位置についてはなお不明な点が多い。

石器は比較的多い。石鏃12(737~747)、石匙2(748・749)、スクレイパー8(750~753)、石錐3(754~756)、ピエス・エスキューユ7(757)、使用痕ある剝片55(758・759)、石核状石器1、凹石11の計99点がある。

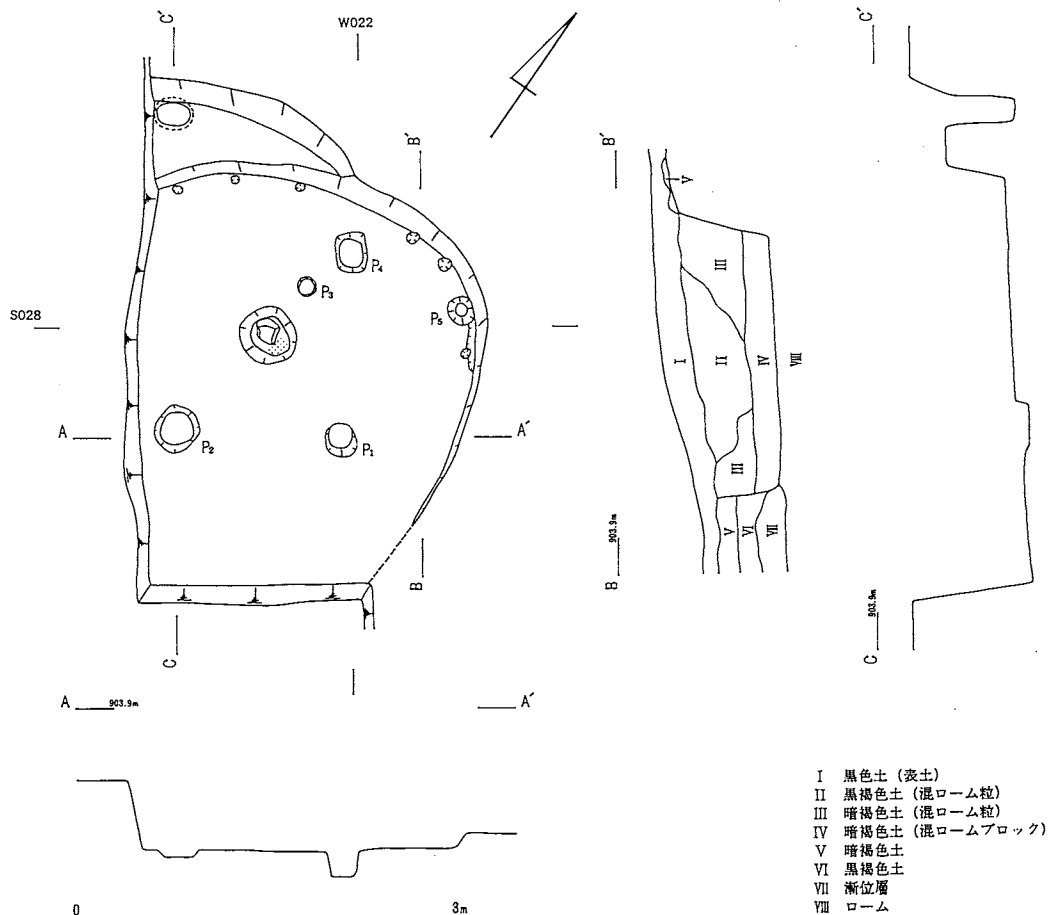
(岩崎 孝治)

(3) 住居址13(挿図95、図64、図版36・143)

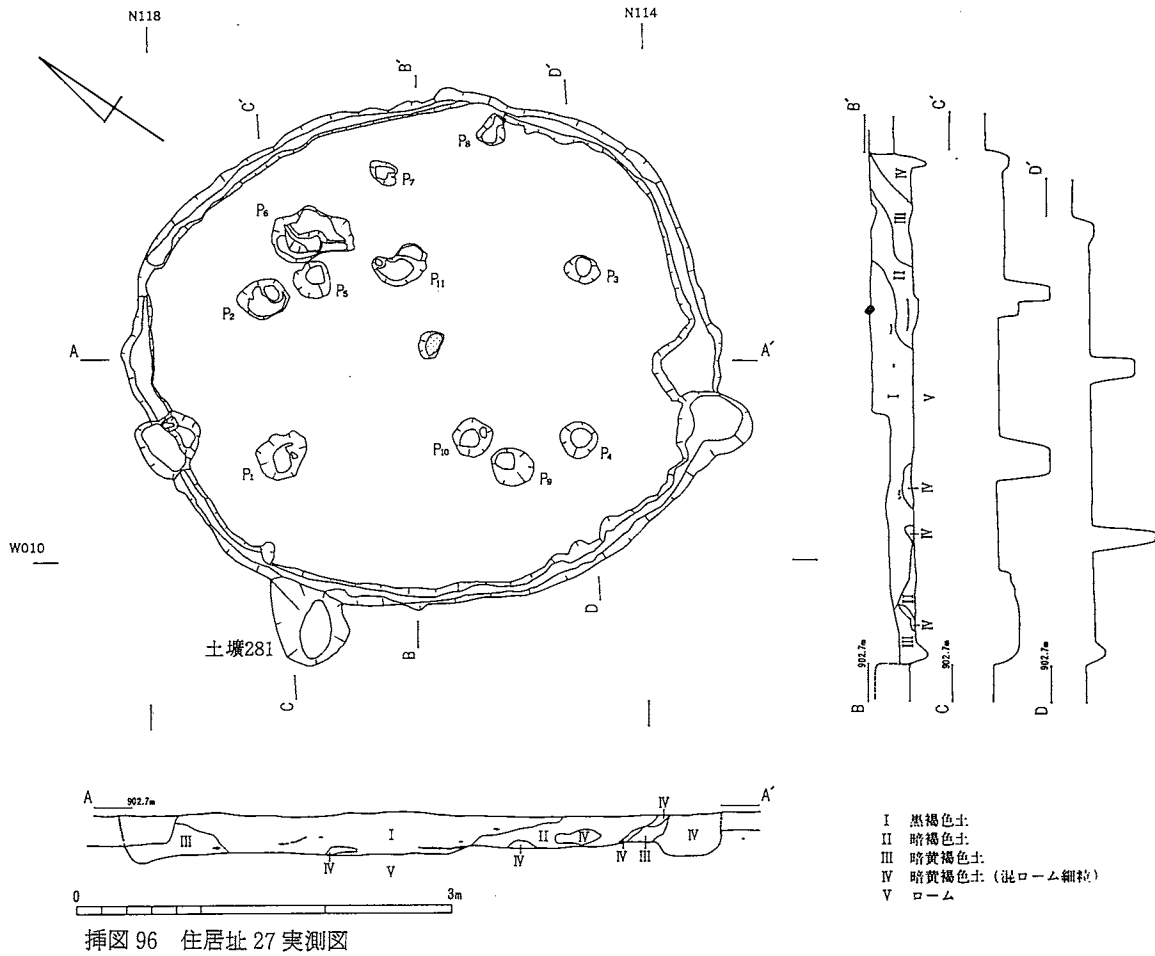
遺構 EN 61で中期の住居址8の下方20cmの位置に検出されたが、西および南側は用地外にのびて調査はできなかった。従って、全形は不明であるが、調査範囲内での壁の状態から、その平面形は隅丸方形のD型の住居址が想定される。地床炉は床面中央の北壁沿いにあり、径45cmの円形状で、中央に小礫が置かれていた。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>が認められたが、支柱穴と思われるものはP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>のみで、その配置は台形状であろうか。壁および床の遺存状態は良好で、最大壁高は73cmある。

遺物 黒曜石の剝片類と凹石1点を除いてすべて土器片であったが、その量は40点余で少ない。遺物の出土状態はB<sub>4</sub>型である。上層からIV期の土器片数点が検出されたのみで、他はIII期ですべてIV層(下層)出土である。III期I a(401~407・409)、II a(410~412)、III DI(408)があり、一括遺物と考えてよいであろう。

(笹沢 浩)



挿図95 住居址13実測図



挿図 96 住居址 27 実測図

(4) 住居址 27(挿図 96、図 64・128・175、図版 37・115・143)

遺構 BQ 53 を中心に検出された 4.50×3.93 m の D 型の住居址であり、南側に住居址 50、西側に同 29 が近接し、上層は環状集石群の北限にあたる。床面はローム層上面にあるために住居址の落込面の確認が困難であって、本来の壁高の検出はできなかった。壁と床には木根による攪乱が一部見られ、西壁の一部は土壤 281 が切っている。支柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> であり、深さには差があるものの規模は似る。他に P<sub>5</sub>~P<sub>11</sub> があるが、P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub> を除いては、柱穴とは考えにくく攪乱であろう。地床炉は支柱穴を結ぶ交点上にあり、周溝はほぼ全周する。床は西北隅が軟弱である以外は、多くの凹凸はあるものの良好である。

遺物 I・II 層から土器と石器が出土したが総数は 316 片で多くない。出土状態は B<sub>4</sub> 型である。一括遺物は 3 個体(1893・1894)があり、いずれも床面より 20 cm 前後浮いた状態で出土した。すべて III 期 Ia であり、L(1893)、L+R、LR(1894)がある。1894 は RL の原体を数条回転させているが、基本は LR であろう。L+R (414) は口縁部をわずかに外反させている。その他 II 期が少量あり、うち II 群は 2 点(413・418)で 418 は 419・420 とともに検出面出土である。

石器は石鏃 2 (734・735)、スクレイパー 1、ピエス・エスキーユ 1、複数抉入石器 1 (736)、使用痕ある刮片 2、凹石 1 の計 8 点で出土量は少ない。(福沢 幸一)

(5) 住居址 33(挿図 97・98、図 66・67・129・130・177、図版 29・114・116~118・143・186)

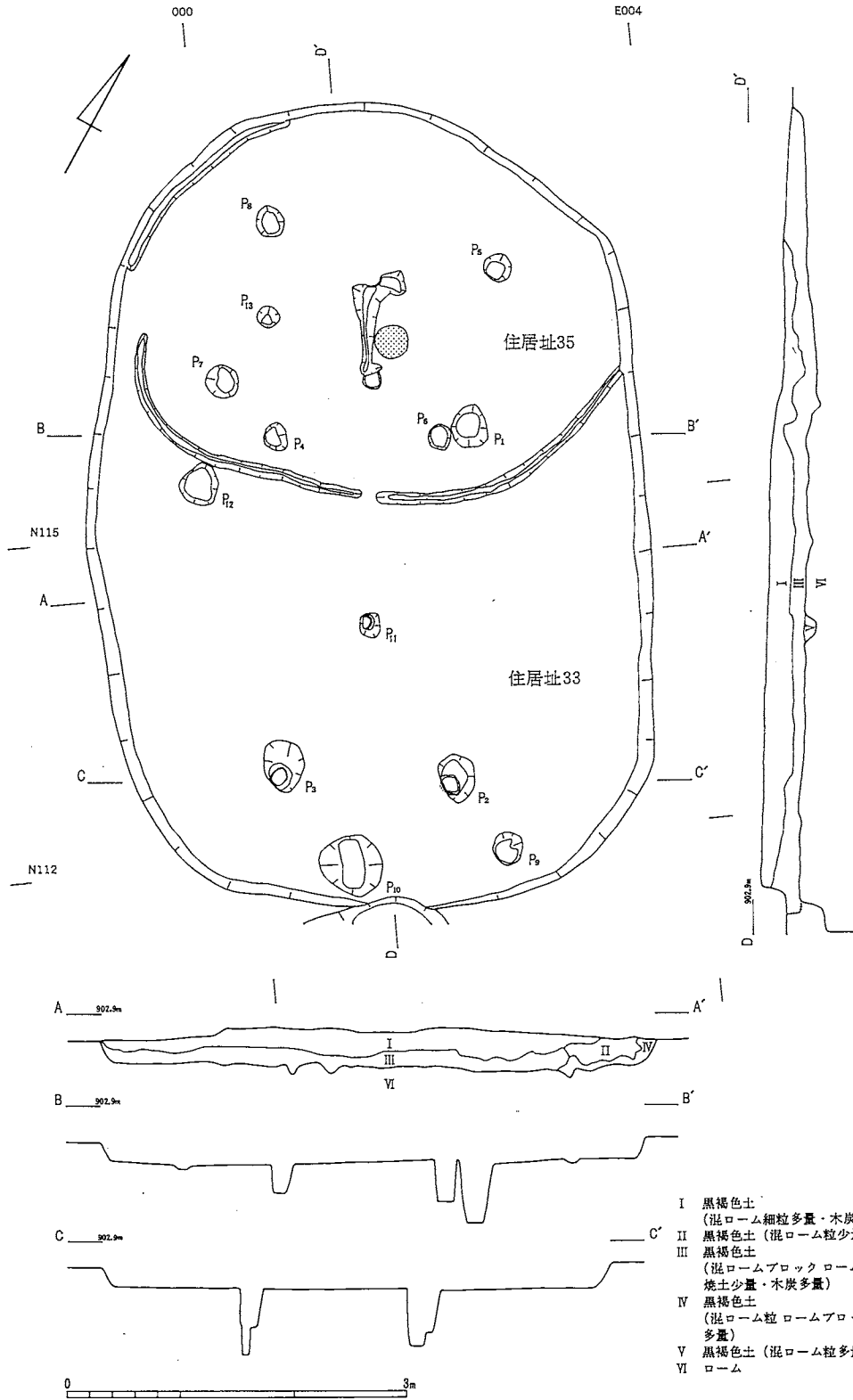
遺構 BR 48 を中心とした地域に検出された D 型の住居址であり、南壁の一部は土壤 1021 によって切られている。また、北壁は住居址 35 と重複関係にあり、土層観察からは十分な前後関係を知ることはでき

なかった。しかし、住居址35の床面がわずかに低く、かつ、住居址33の遺物の出土状態、両住居址の柱穴の埋土と規模および配列から、住居址33が新しいと判断した。かように、住居址33の北壁と重複部分の床面は検出できなかったが、北東隅の住居址35との接点から、住居址33の規模は、短軸4.72m、長軸が6.3m前後と推定できる。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>で、その規模は直径30cm前後で比較的小さい。その他、本址にともなうピットはP<sub>9</sub>~P<sub>12</sub>があり、P<sub>11</sub>は支柱穴を結ぶ交点上にあるが、断面形は搗鉢状を呈し柱穴とは

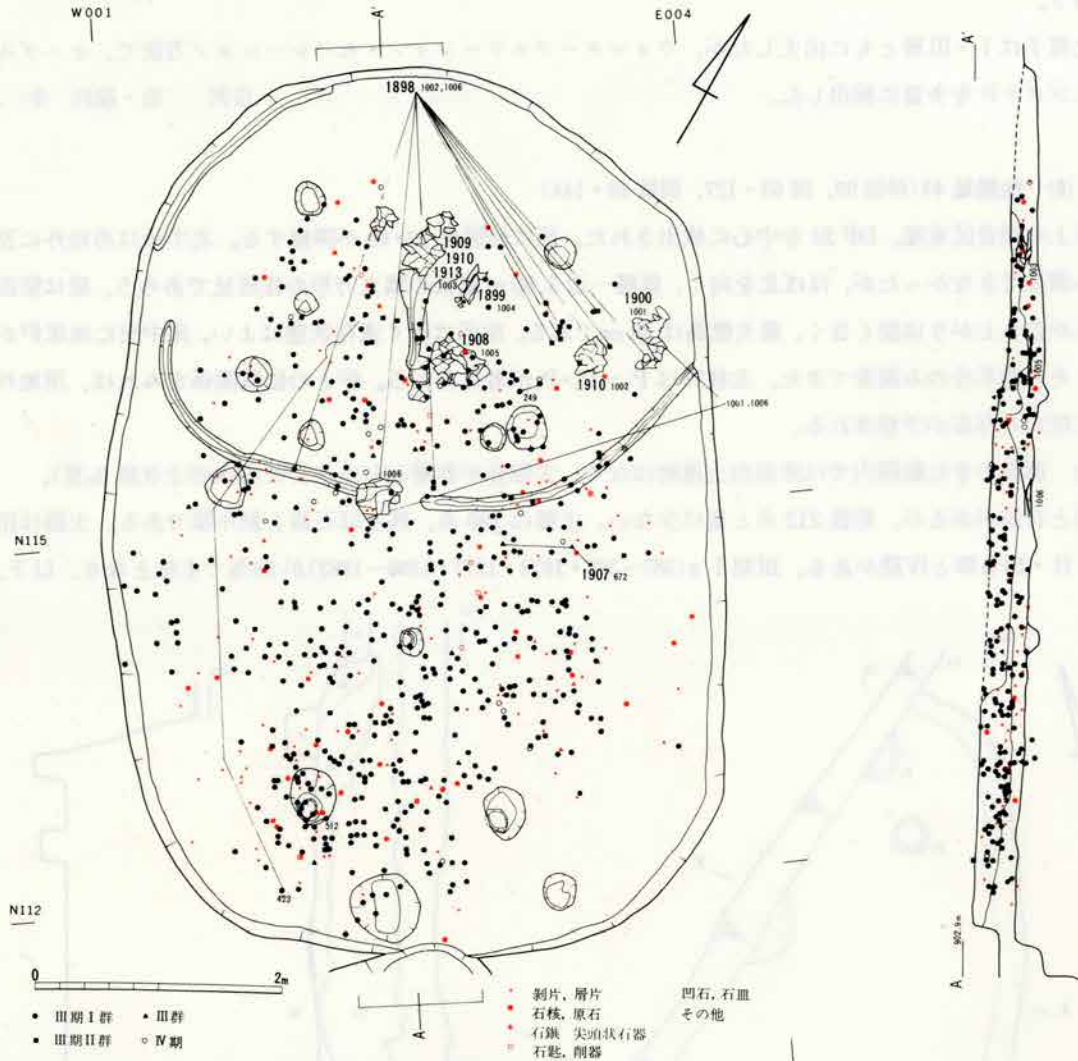
考えられない。

P<sub>11</sub>とその周辺にはさして焼けたと思われる痕跡は認められないものの、本址にともなう炉が他に求められないところから、P<sub>11</sub>は構築後使用の炉である可能性が強い。床面はほぼ良好であり、周溝は認められなかった。

本址の埋土中には多量の炭化物片、焼土粒が認められたが、ピット内には全くなかった。また、床面と壁面には焼けた痕跡は認められなかった。したがって、本址が確実に焼失住居であるという手がかりは得られないものの、遺物の出土状態からの判断ではその可能性は強い。



挿図 97 住居址 33 実測図



挿図 98 住居址 33 遺物出土状態・土器接合関係図

遺物 土器・石器と炭化種子があり、出土状態は A<sub>1</sub> 型である。住居址中央より北壁寄りに床面上に密着して一括土器が 7 個体分(1898~1900・1908~1910・1913)出土した。ただし、住居址 35 との重複部分の一括土器は、床面から浮いた状態にみえるが、その床は本址のものではない。埋土には各層ともに炭化材細片、炭化種子、焼土粒をローム粒とともに含み、遺物の多くは I (上)層により集中したが、III (下)層にもかなりの出土量がみられた。土器の大半は II 期 IA と III 期であるがわずかの VI 期(502~508)が上層上部の住居址中央部西寄りに特に集中してみられ、しかも、床面上 10 cm に浮いた位置まで出土しており、この部分に VI 期段階の何らかの落込みのあったことが考えられる。総じて各層ともに III 期の土器が主体である。つまり、細片以下を除いた破片総数 467 片のうち、III 層出土は 179 片となり、うち II 期 IA が 14% で他は III 期の土器である。その内訳は II 群が 14%、III 群が 8% を占める以外はすべて I a であり、後者は L が 38%、R が 19%、L+R が 20% で単節縄文は 8% と少ない。しかし、床面出土の一括土器の比率は、I a が 5 点、II 群は 2 点で II 群土器の比率は高くなり、破片数との比較とは異なるが、いずれにしても繊維土器の占める割合は少ない。III 群土器は C<sub>2</sub>(467・1907)、B<sub>1</sub>(470)、C<sub>2</sub>(471)と J(509)があり、J は I 層下部出土であり、III 層の土器群とともに III 期に属するであろう。

石器は総数 54 点あり、うち III 層出土は石鏃 6 (760~764)、石匙 2 (767・768)、スクレイパー 2 (765・769)、有抉頭磨石器 1、ピエス・エスキーユ 2 (771・772)、使用痕のある剥片 10(770)の計 23 点がある。凹石 3、石鏃 1 などの上層出土の石器も含めて、その多くが本住居址に属するであろうが、II 期のものの混入も若

干あろう。

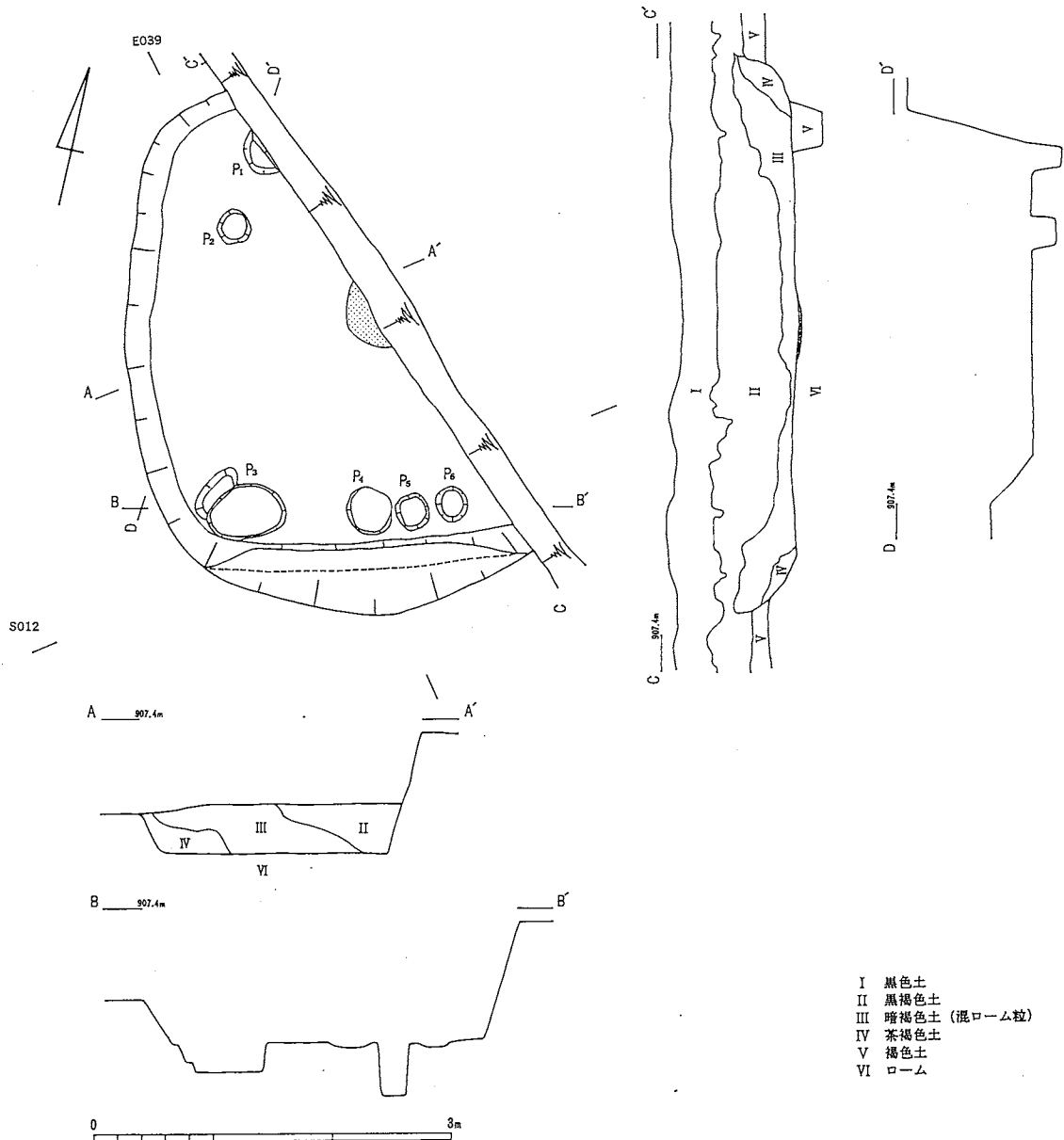
炭化種子はⅠ・Ⅲ層ともに出土したが、ウォーターフロテーション・セパレーション方法で、オニグルミ・ドングリ片を多量に検出した。  
(笹沢 浩・福沢 幸一)

(6) 住居址 41(挿図 99、図 63・127、図版 38・144)

尾根上の調査区東端、DF 30 を中心に検出された。西に住居址 42・43 が隣接する。北半分は用地外に及ぶため調査できなかったが、ほぼ北を向く、規模一辺 3.80 m 前後の隅丸方形の住居址であろう。壁は堅固であるが立ち上がりは鋭くなく、最大壁高は 38 cm である。床面は堅く遺存状態はよい。床中央に地床炉があり、その約半分のみ調査できた。支柱穴は  $P_1 \sim P_3 \cdot P_5$  が考えられる。炉との位置関係をみれば、用地外にも支柱穴の存在が予想される。

遺物 調査できた範囲内では床面出土遺物はなく、大部分がⅡ層から出土した(遺物出土状態 B<sub>2</sub>型)。

土器と石器があるが、総数 212 点と量は少ない。土器は 180 点、残りは石器と剥片類である。土器はⅢ期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ各群とⅣ期がある。Ⅲ期Ⅰ a(387~396・1876・1877・1880~1882)が 50%で主体となり、以下、



挿図 99 住居址 41 実測図

III期II(378~386)が8%、III群(399・400・1878・1879)が8%、IV期(397・398)が9%である。1875は器形がはっきりしないが、内外面とも丁寧に磨かれ、繊維を多量に含み他に例をみない。一応III期II群ととらえておきたい。1878はきめ細かい胎土の堅緻な土器で、口縁部下に先端がやや櫛状になった篋による横位連続刺突文が3条走り、口唇部には別の竹管工具による刻みがある。1879もまた薄手堅緻で、口縁直下から竹管による沈線が不規則に斜走し、口縁部は背竹管による連続したオサエによりひだ状になっている。1878・1879ともにII層下部からの出土である。

石器類は非常に少ない。石鏃1、スクレイパー1、使用痕ある剝片7、凹石2の計11点、その他石核・原石は11、剝片は9点がある。

#### (7) 住居址42・43(挿図100、図68・127、図版38・144)

遺構 調査区の東端、EC31を中心に住居址42・43が切りあって検出された。東側にIII期の住居址41が隣接する。漸移層上面近くで、黒褐色の落ち込みが確認され、検出当初より住居址の重複が予想されたが、新旧関係は、検出面では把握できなかった。しかし土層観察により、住居址42が43を切っていると判断した。また、検出面ではとらえられなかったが、住居址42の埋土中に新しい落ち込み(土壌1035)が認められた。これは住居址42の床面下約20cmに達するものであった。

住居址42はプランは台形で、規模3.30×4.00m、長軸方向N15°Eである。住居址43の床面レベルより若干深く掘り込んで構築されたものと考えられる。東隅は用地外にかかるため、調査できなかった。壁はいくぶん軟らかく、なだらかに立ち上がり、最大壁高は47cmである。床面は若干の凹凸があるが、全体に一律の堅さであった。壁に沿ってごく浅い周溝がめぐっているが、西側の一部は欠けている。支柱穴はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>であろう。地床炉はF<sub>1</sub>とF<sub>2</sub>が切りあって、やや北寄りに検出された。断面観察から、F<sub>2</sub>がF<sub>1</sub>より新しく、炉がつくり直されたものと考えられる。

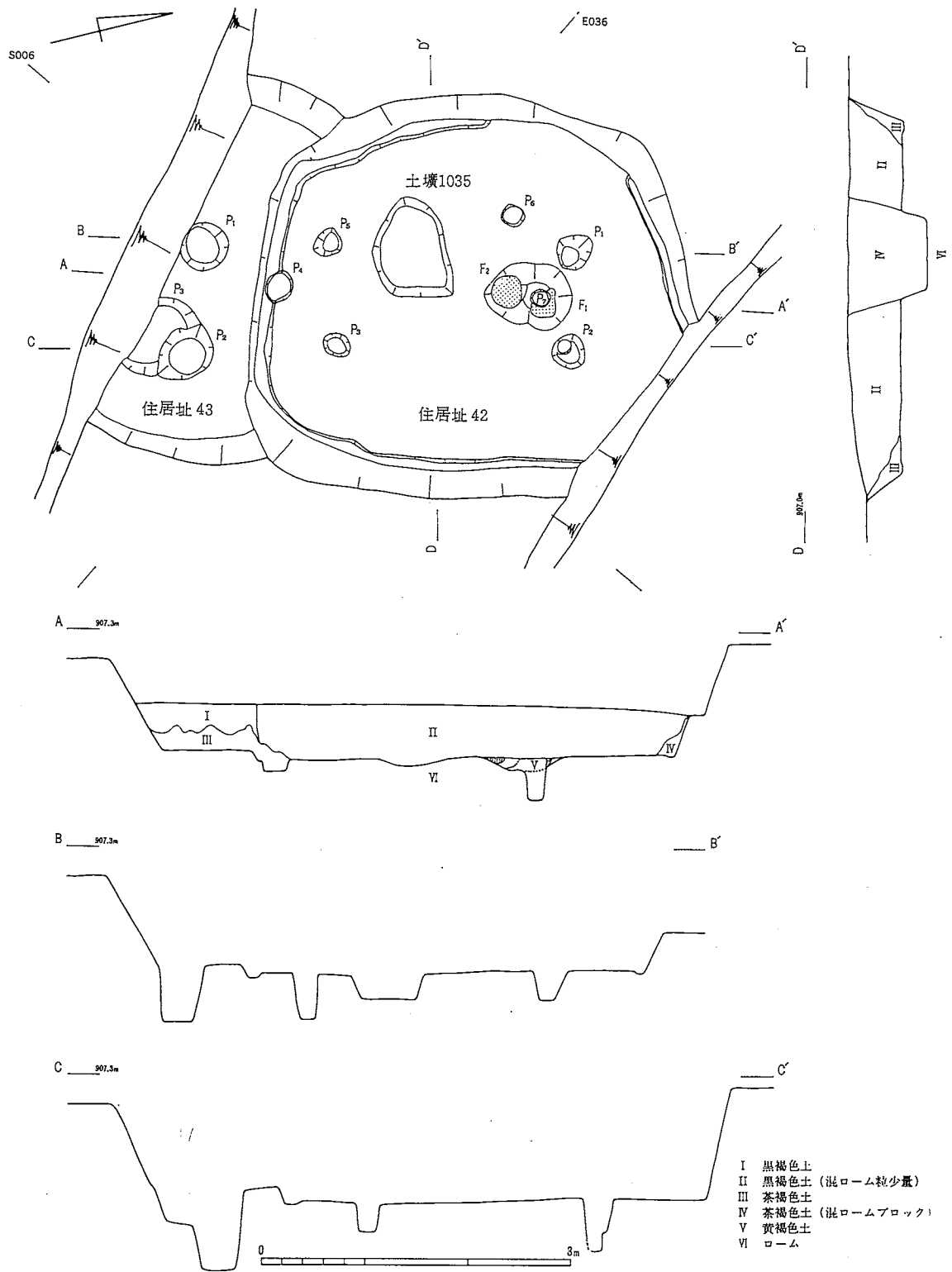
住居址43は北東部分を住居址42により切られ、また南西部分は用地外まで及ぶため、その構造は不明な点が多い。壁は比較的しっかりしており、立ち上がりは緩やかで、最大壁高は27cmある。床面はしまりがあり平坦である。ピットは3個あり、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>を支柱穴と考えてよいだろう。P<sub>3</sub>については他の用途の可能性も残す。周溝、炉は検出されなかった。

遺物の出土状態 B<sub>4</sub>型に分類される。大半の遺物はII層からの出土であり、壁際にはみられない。平面分布は北東部に、垂直分布ではやや床面近くに、それぞれの分布の中心をもちながら全体に広がっていた。520は北東部で床面より約15cm程浮き一括して出土し、その同一個体10数片がほぼ同一レベルを保ちながら南側へ約1.5m四方に散らばっていた。

なお、住居址43のプラン内からも遺物が約60点出土しているが、特に片寄ることはなく埋土中に点在しその大半が細片土器と黒曜石の剝片であることから、住居址43の遺物として区別することはせず、住居址42の遺物とともに一括して扱った。

遺物 土器と石器がある。土器はIII期I・II・III各群とIV期がある。III期I aは約55%を占めるが、そのほとんどは金雲母を含み指頭圧痕が顕著である。縄文原体の割合は、L12%、R9%、LR21%、RL24%である。また、底部が小片も含めて12個体分(1883~1888)出土しているが、その大部分はIII期I群と思われ、半数に木葉痕が見られた。1888はIV期の可能性もある。III期II群は約8%あるが、大多数が縄文のみの小片である。また約7%のIV期はいずれも上層から出土している。530は暗褐色を呈する非常に堅緻な土器で、内面には横位の粗いヘラミガキ痕が顕著である。他に類例を見出せず、器形もつかみかねる。537~540はIII群であり、他に小片が3点ある。

石器類は39点あるが、定形石器は非常に少ない。内訳は石鏃1、石錐1、使用痕ある剝片5、ピース・



挿図100 住居址42・43実測図

エスキュー1、凹石2、石皿1、それに磨製石斧1の計12点で、その他に原石・剥片が27点ある。

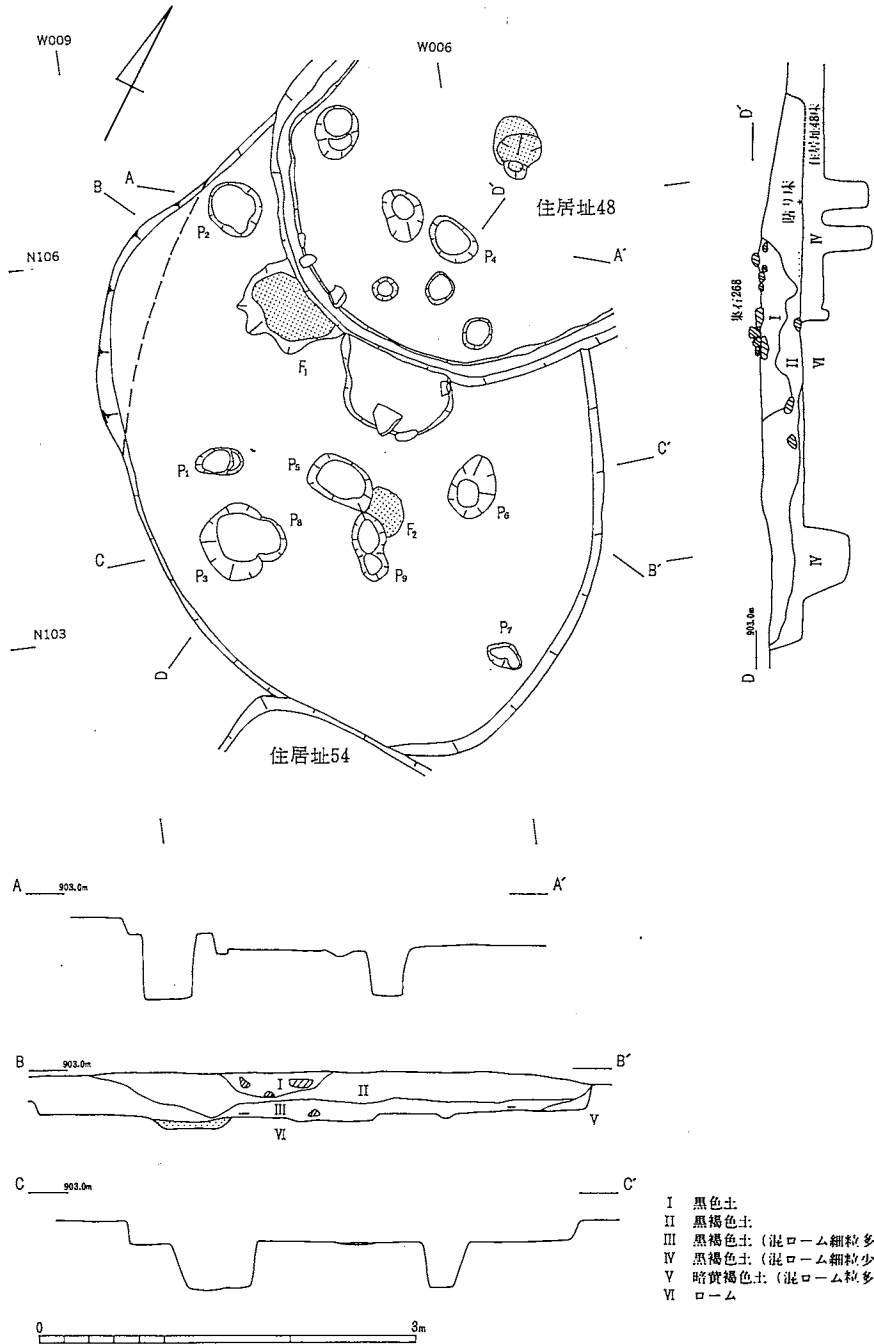
住居址42・43の帰属時期についてであるが、住居址42は出土遺物からみてⅢ期で間違いのないと思われる。したがって住居址43は、切りあい関係からⅢ期以前ということになるが、遺物から住居址の時期決定はできない。しかし、Ⅱ期の土器はみられないところから、Ⅱ期まで上がることはあり得ない。つまり、住居址42・43は同じⅢ期内での切りあいという想定が妥当であろう。(岩崎 孝治)

(8) 住居址 49(挿図 101・102、図 69・70・127・178、図版 39・114・145)

遺構 BW 52 を中心に検出された。南壁をわずかに住居址 54 によって切られ北壁側は住居址 48 の南辺部分の床面上 16 cm に本住居址の床面を構築していたが、粘土による貼り床はみられなかった。従って、その部分の北壁は、埋土による相違がわずかに認められたものの明らかにできなかった。しかし、のちに遺物の出土状態を検討することによって、ほぼその部分の推測が可能となった。また、本住居址の中央北寄り部分には集石 268 が構築されていた。

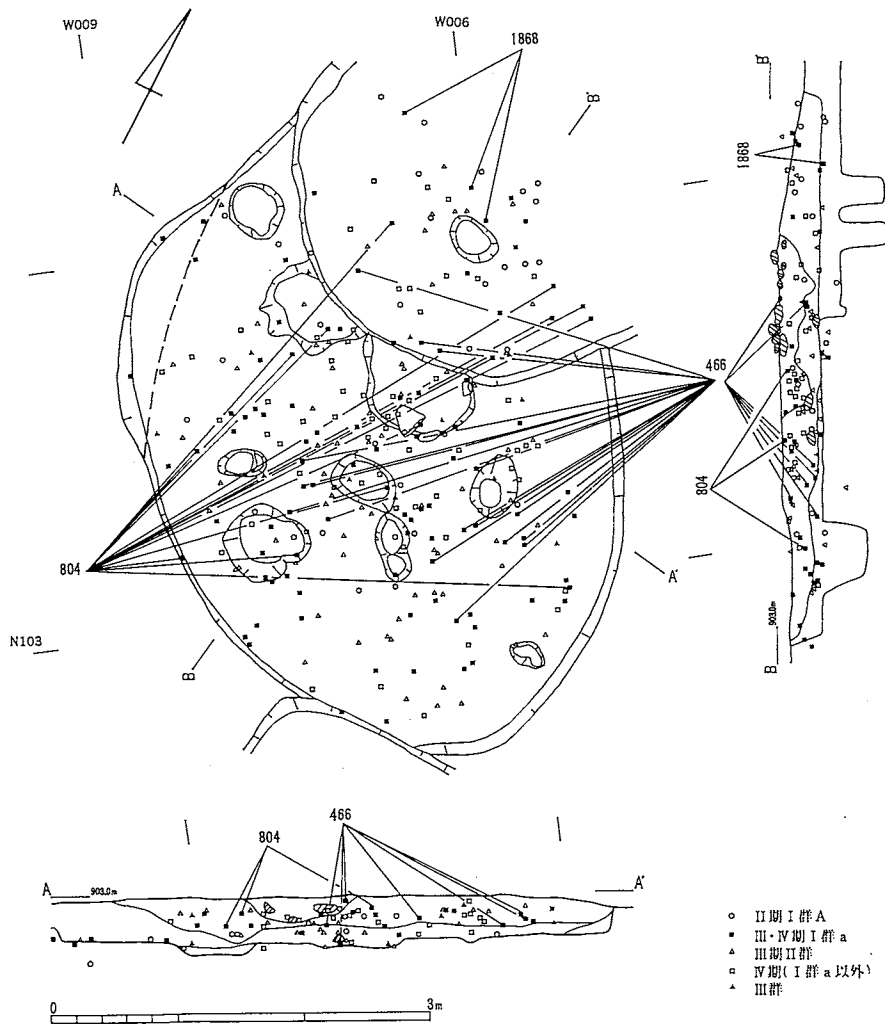
床面が漸移層にあり、西壁部分の検出が困難である上に、切りあい関係も加わり、平面形は、十分には明らかにできなかったが、ほぼ楕円形となる。床面はかなり良好であるが、西壁に接する部分と住居址 48 の上部は軟弱であった。支柱穴は  $P_2 \cdot P_3 \cdot P_4 \cdot P_6$  で台形に配置されている。深さに若干のパラッキはあるものの、規模等がほぼ一致する。柱穴になりうるピットは他に  $P_1 \cdot P_5 \cdot P_8 \cdot P_9$  があるが  $P_8$  を除いてはその性格は不明である。

地床炉は北辺部( $F_1$ )と南辺部( $F_2$ )に認められ  $F_1$  は  $70 \times 60$  cm、深さ 7 cm で焼土が充満していた。 $F_2$  は  $P_3 \cdot P_5$  の間に設けられ、 $P_5 \cdot P_9$  によって切られているところから、 $P_5 \cdot P_9$  は住居址 49 にもなり可能性は薄いかも知れない。これらが同時存在だとすれば、 $F_1 \cdot F_2$  の残存状態からも  $F_2$  から  $F_1$  への移動が考えられる。この点では  $P_3$  と  $P_8$  に切りあいが認められ、 $P_8$  が古いとするならば、 $F_2$  と  $P_2 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_8$  からなる先行住居があり、拡張が 1 回おこなわれたことを示すであろう。 $F_1$  の東寄りはずかに床面が凹められており、土層観察では十分になし得なかったが集石 268 の掘り方である可能性が強い。集石面より 25 cm 下がった位置であり、この部分に IV



挿図 101 住居址 49 実測図





挿図 102 住居址 49 遺物出土状態図

II期 33(541)、III期 73、IV期 62 (573~587) となり、さらにIII群土器は 13、無繊維の縄文をもつ土器(564・566~572・1890・1891)は 70 片となる。後者はIII期とIV期のいずれかに伴なうものであろうが、その識別は困難である。ただ出土状態と形式的検討からある程度の比定が可能である。すなわち、縄文をもつ土器は単節と無節があり、それらのうち LR と RL がほぼ同数で全体の57%を占め、他は10%前後となる。この傾向はIII期 I a に共通する要素なので、566 以外はそれになる可能性が高い。III期 II a は単節縄文が多く無節は1例あるにすぎない(542)。また、付加縄文第1種をもつものがある(550・551)。これは、1段の原体を付加させたものであり、器外面に種子圧痕らしき痕跡がみられる。また 1892 は R の原体を右まわりに施文し、口縁部に補修孔がある。III群土器は E<sub>2</sub>(590・591)・I<sub>2</sub>(588・592~594)と J(589)があるが、これらはIII期に伴うものであろう。

石器は石鏃 7 (784~786・788・789)、尖頭状石器 1 (787)、石匙 5 (791~793・795)、スクレイパー 8 (790・794・796・803・805)、石錐 3 (798~800)、ピエス・エスキーユ 3 (804)、使用痕ある剥片 16(797・801・802)、定角式磨製石斧 1、乳棒状磨製石斧片 2、滑石未製品 1、凹石 12、尖頭状石器 1 の計 59 点ある。しかし、これらの石器のすべてがIII期に属する可能性はその出土状態から断言できないであろう。

(9) 住居址 50(挿図 103、図 71・131・179・238、図版 40・119・146)

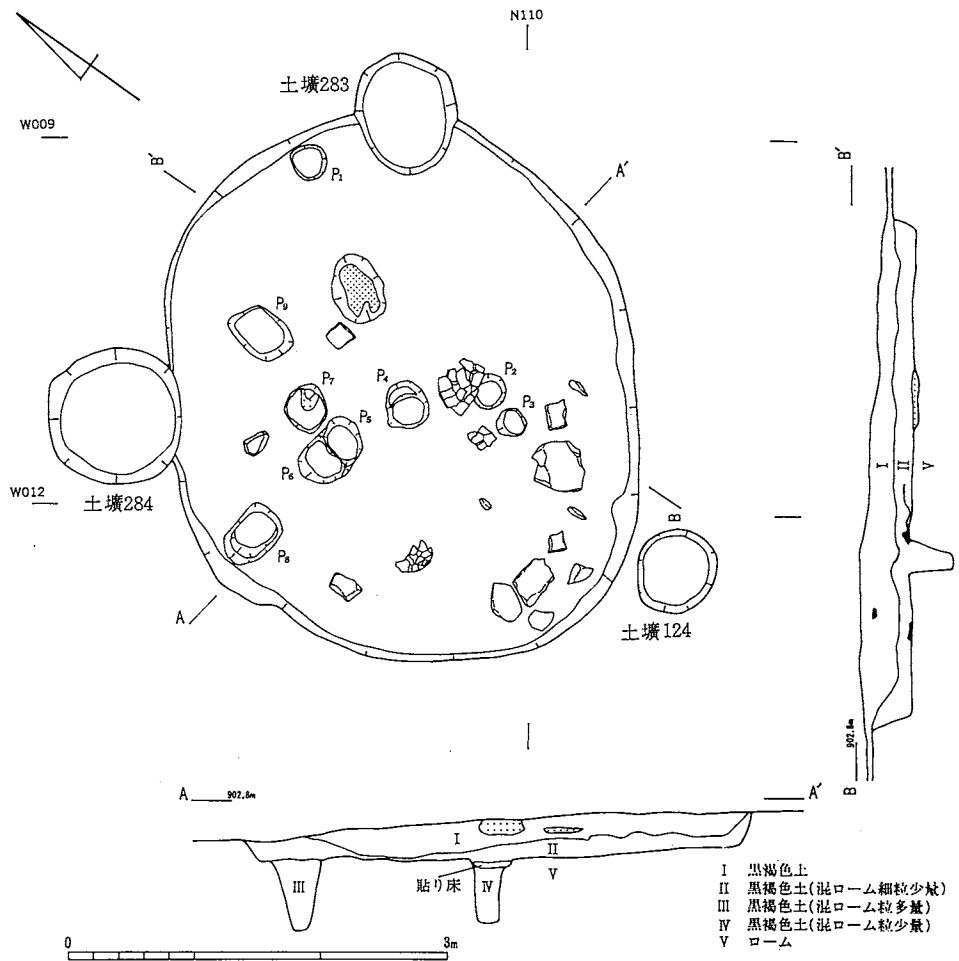
遺構 住居址 51 の北寄りの BT 55 を中心に検出された 4.30×3.65 m の規模をもつ I 型の住居址である。やや不規則な楕円形プランの点では住居址 49 と共通する。主柱穴は住居址の北に片寄っているが

—a 期の遺物が認められる点からいえそうである。本址は住居址類型 I 型に属し、推定規模は 5.1×3.7 m である。

遺物 土器と石器がある。2 棟の住居址と集石 268 がかみあうために、遺物の出土状態は複雑であるが、基本的には B<sub>1</sub> 型に属する。すなわち、I 層ならびに集石 268 の部分は、II・III期の土器と混在するが、IV—a 期の比率が高い。しかし、II 層になると、集石 268 を除いては、III期が主体となり、II期が混在する。

細片を除く土器の総点数は 259 片で、うち

その配置、規模、形態が共通するP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とP<sub>5</sub>あるいはP<sub>6</sub>の3個からなると思われる。他は規模、形態にバラツキが著しく、柱穴かどうか不明である。P<sub>3</sub>とP<sub>5</sub>あるいはP<sub>6</sub>のいずれかは支柱穴であろう。P<sub>4</sub>には貼り床がみられるが、これらと組みあわされる先行する柱穴の確認はできなかったため、その性格は不明である。地床炉は深さ5cmで、55×45cmの楕円形状で、支柱穴を結ぶ三角形のほぼ中央部にあるが、住居址全体の中では北壁寄りとなる。



挿図 103 住居址 50 実測図

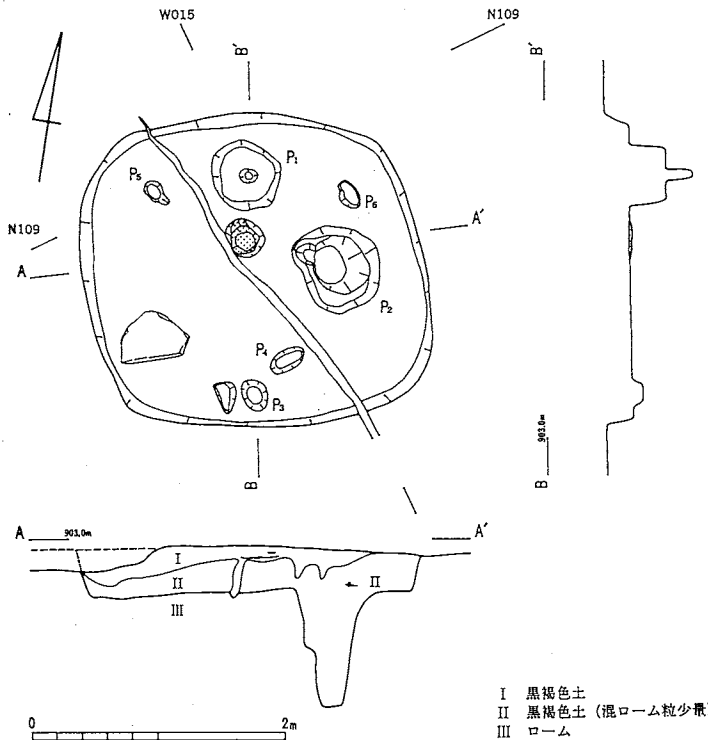
床面、壁とも良好であり、周溝は認められなかった。北壁と西壁に接して土壌 283 と 284 がある。前者は底面に住居址と同様の堅く踏みしめられた床が認められ壁外施設と考えられよう。後者は本住居址よりも後出である。

遺物 土器と石器があり、出土状態はA<sub>1</sub>型である。遺物はII層に集中する(595~609・612~615)が一部I層下部にも及び(620~624)、これらにはII期の土器(595~598)とともにIII期が主体的に出土した。I層上部にはIII期(616~618)とIV期が混在する。床面上にはIII期II群(1920)とI a(610・611)がみられた。従ってI層下部(床面上30cm)からII層出土の遺物はほぼ一括と考えられるものであろう。土器の破片総数は189片で、うち、II期は28%を占め、他はすべてIII期に属する。後者はI aが全体の55%を占め、III期の中では85%となる。I aは無節縄文が主体でL+Rが最も多く、ついでL・Rの順となるが、LまたはRの大半は羽状縄文の一部であろう。単節縄文は極端に少なく、I aの中では5%を占めるにすぎない。他方III群土器は全体では3%、II期は4%強と少ない。III D<sub>2</sub>は2片(612)、III I<sub>2</sub>は4片(613)がある。II期の土器は混入であろう。

石器は、石鏃9(806~811)、石匙1(813)、スクレイパー6(812・814~816)、ピエス・エスキーユ4(819)、有袂頭磨石器1(818)、使用痕のある石器11(820)、磨製石斧1、凹石7(1652~1655)、軽石1の計41点である。スクレイパーの中には頁岩製の筥状石器に類似したもの(815)がみられる。その他に焼成をうけた粘土塊が一点ある。

(10) 住居址 51(挿図 104、図 72・131・177、図版 41・50・119・147)

遺構 住居址 52・53 に近接した BU 57 付近に検出された 2.55×2.35 m の I 型の小形の住居址である。平面形は隅丸の平行四辺形である。北壁隅から南壁隅の壁上面から床にかけて、細い溝状の痕跡が認められたが木根の痕跡であろう。支柱穴は P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub> であるが、P<sub>1</sub> は規模、深さともに大きく深いものに対して、P<sub>3</sub> は小さく、かつ浅い。P<sub>1</sub> の底部には柱痕跡らしい小ピットがみられる。他にいくつかのピットがあるが、



挿図 104 住居址 51 実測図

その位置、形態、規模等から柱穴ではないであろう。P<sub>2</sub> は II 層を埋土としており、本住居址にともなう何らかの施設であろう。従って、大・小の 2 本の支柱穴によって上屋を構築したものと思われる。床面は総じて軟弱であった。地床炉が P<sub>1</sub> に近接した北壁寄りにある。西南隅には平石があった。

遺物 土器と石器がある。床面上での出土は認められず、すべて埋土中である(出土状態 B<sub>1</sub> 型)。特に I 層下部から II 層上部に集中し、II 層下部は少ない。

土器は、II 期に属する小形尖底土器(1914・1915)と少量の II 期 I 群 A・微量の IV 期の細片(640~643)を除いては、大半が III 期である。その内訳は、I a 32(635~637・644・1918・1919)、II a 11(625・626・

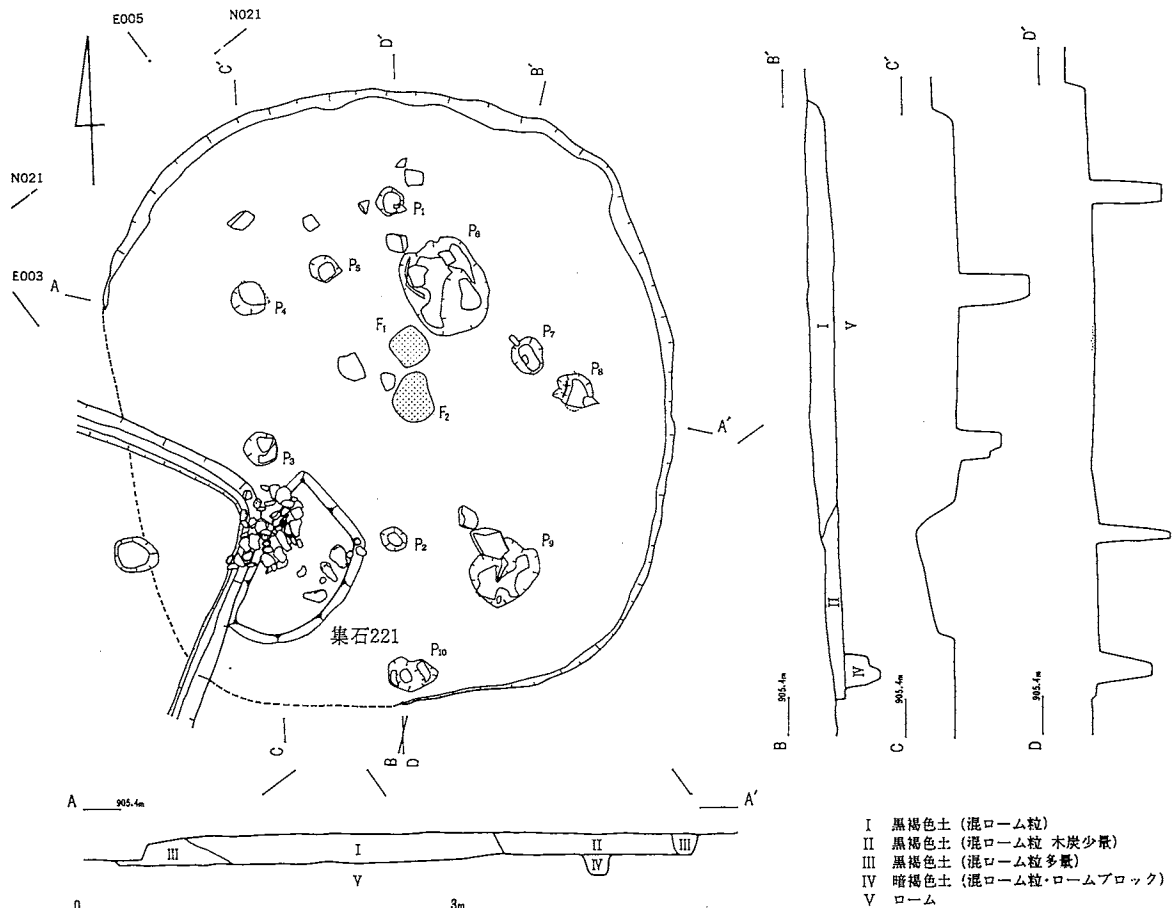
1917)、II b 10(627~633)、III D<sub>2</sub> 1(639) III I<sub>2</sub> 1(638) の 50 個体分となり、I a が 50% 強を占める。I a は LR と LR+RL が最も多く、単節縄文は少ない。II a には付加縄文が 1 例ある。

石器は石鏃 2(773・774)、石匙 2(775・777)、スクレイパー 1、石錐 3(776・779・780)、有扶頭磨石器 1(783)、使用痕ある剥片 8(778・781・782)、乳棒状磨製石斧片 1、凹石 3 の計 21 点ある。779 は先端に磨耗痕がみられるところから、石錐としたが類例がなく今後の検討が必要であろう。(小松原義人・笹沢 浩)

#### (11) 住居址 59(挿図 105、図 73・133・179、図版 42・44・146)

遺構 DP 47 付近に位置し住居址 12 と南西部で切りあっている。住居址 12 のプラン確認作業中に黒褐色土の落ち込みとしてその存在が認められたが、住居址上面にかかる集石群などのため、プランを明確にするまでに手間どり、壁をかなり掘り下げた段階でその存在がはっきりした。また、西壁および南壁の半分は住居址 12 検出時の掘り下げで失われてしまい、切り合いの新旧関係を観察することはできなかったが、より深い床面をもつ住居址 12 の埋土中に貼り床などが認められないので、住居址 12 が住居址 59 を切っていると判断した。さらに、切りあう部分の上面には集石 221 がある。

西壁と南壁の一部を欠くが、平面形はやや胴の張り出した隅丸長方形で、プランと同形の 4 個の支柱穴をもつ類型 D に属する住居址である。長軸方向は N 5°W で等高線に沿い、規模は約 4.75×4.30 m であろう。壁は掘り下げられて、ほとんどが壁高 10 cm 前後しかなくその状態が明らかにできないが、立ち上がりはやや急角度である。床面はかなり軟弱であり、凹凸をもちながら全体としては中央部に向けて緩やかな傾斜をみせている。支柱穴は P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub> があげられ、集石 221 下に存在するもう 1 個の柱穴とで、長方形に配置されると考えられるが、その形状、長径および深さにかかなりの差がみられる。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub> は



挿図 105 住居址 59 実測図

支柱穴と似た深さを持ち、各柱穴とほぼ等間隔の位置に配されており、補助的な柱穴と考える。地床炉は住居址の中央から北にかけて薄く2箇所(F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>)に認められた。

遺物の出土状態 住居址埋土がかなり掘り下げられているので、遺物の出土状態を類型化することが難しいが、遺物はやや濃密な分布をみせている。床面より15cm程高い位置から一括土器が1個体分出土している。大多数がIII期であるが、II期が混在する。なお、住居址上面のグリッドから出土した遺物と接合する例が10例ほどあった。

遺物 土器と石器がある。土器は約320片の90%がIII期I a(652~667・671・676・1932)である。器形の知れるものは深鉢Eの2個体(653・1932)のみである。他ではI c(668~670)が目立つ。II群土器(647~651)はわずか10片程、II期I群土器(645・646・673)は約30片出土している。III群土器(677~679)は数点のみだが、E<sub>2</sub>(677)以外は判然としない。このE<sub>2</sub>は北白川下層II b式に類似しているが混入であろう。

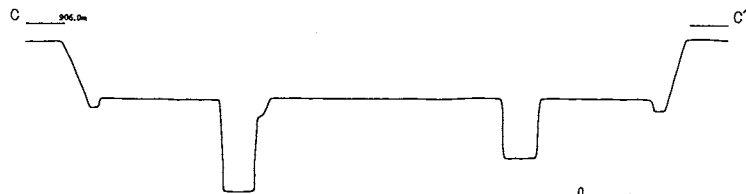
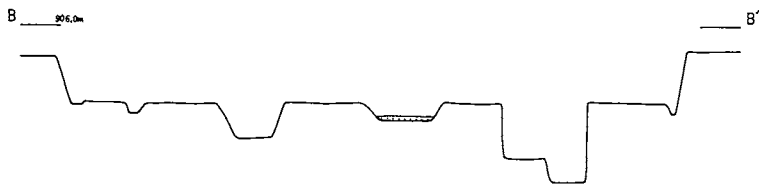
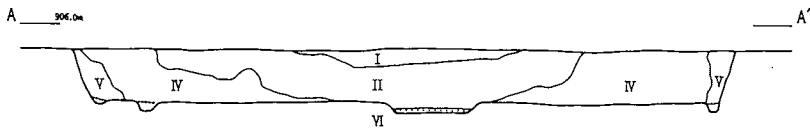
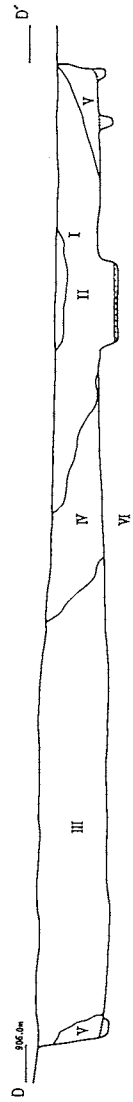
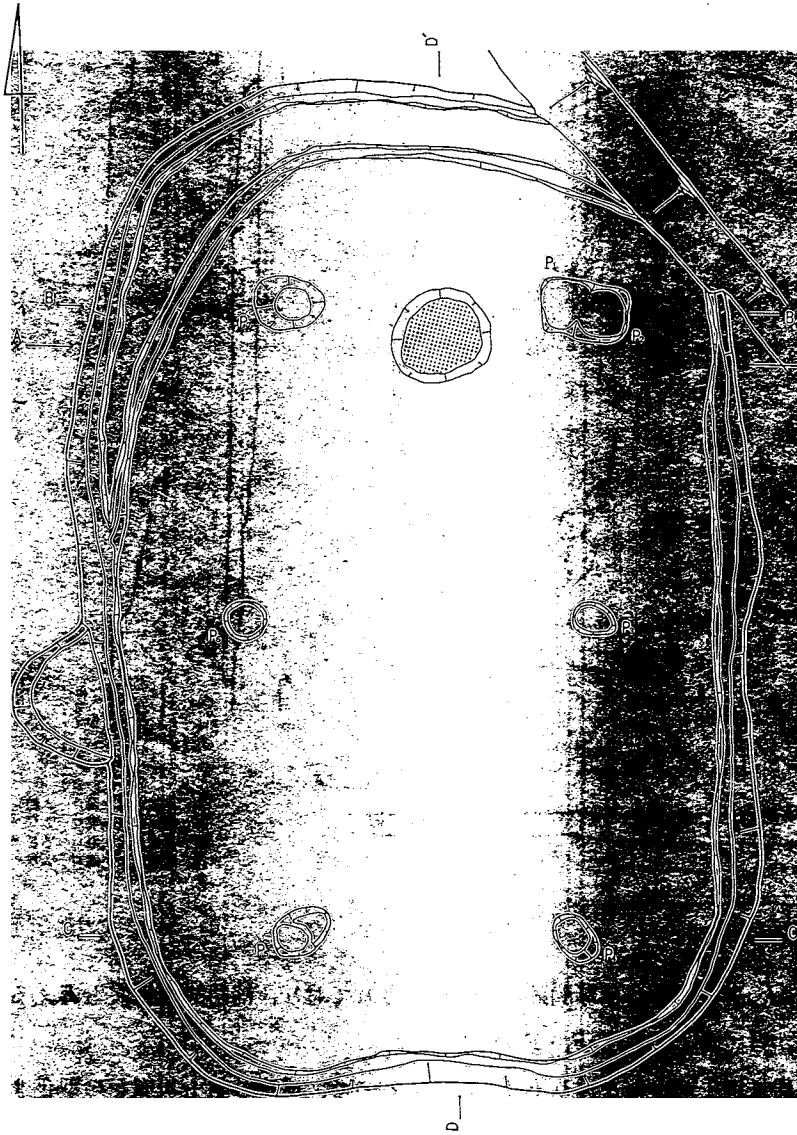
石器は出土総数30点と少ない。特に石匙1(828)、スクレイパー3(829・830)と少なく、また小形である。この他に石鏃8点(821~827)、ピエス・エスキーユ8(831~833)、使用痕ある剥片8、石皿1、凹石1が出土している。  
 (百瀬 新治)

(12) 住居址 61(挿図 106・107、図 74・75・136・137・180・233・239、図版 53・122・151・152)

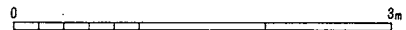
遺構 住居址 45 に近接し、DN 33 付近に検出された G 型の住居址である。調査区東限であるために北東隅の一部が未検出であるが、平面形の確認には何ら支障はない。壁・周溝・床等の遺存状況は極めて良好である。西壁の一部に土塊状の掘り込みがみられ、断面播鉢状で壁の崩落と思われるが、積極的根拠はない。周溝・柱穴および遺物の出土状態から、拡張が1回あったことが理解できる。つまり、拡張前の a は、

E033

N025



- I 黑褐色土
- II 黑褐色土  
(混ローム粒多量・木炭)
- III 黑褐色土  
(混ローム粒少量)
- IV 茶褐色土  
(混ローム粒)
- V 暗褐色土
- VI ローム

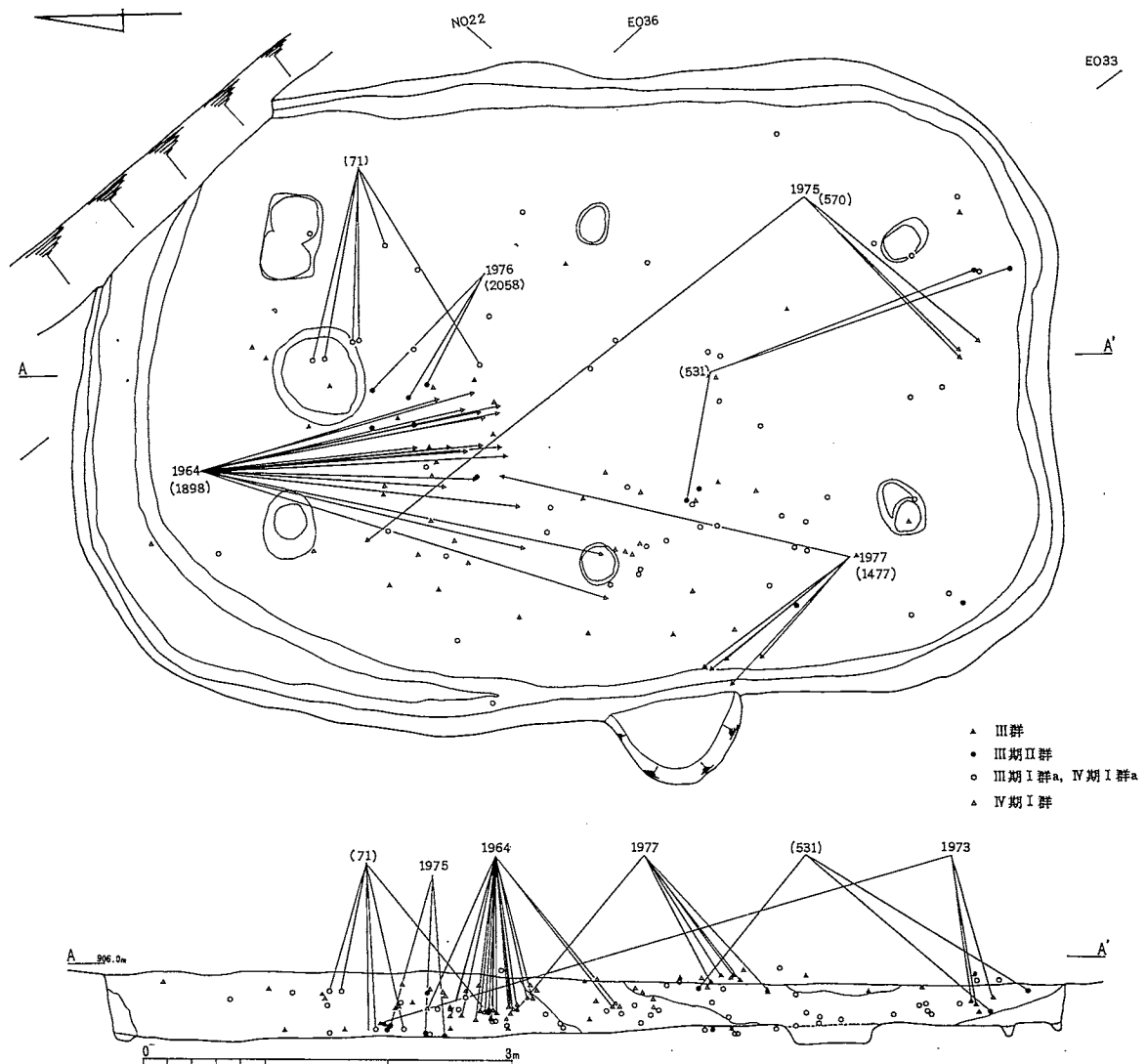


挿図 106 住居址 61 実測図

P<sub>1</sub>(P<sub>2</sub>)~P<sub>7</sub>の6個を支柱穴とし、P<sub>1</sub>とP<sub>7</sub>間に地床炉をもち、北壁を内側の周溝ぞいにめぐらした、7.20×5.00mの住居址であったが、次に北壁のみ北へ約50cm拡張してbを構築したものと考えられる。北壁構築の際に西壁の一部も手直しをし、東北隅の支柱穴P<sub>1</sub>あるいはP<sub>2</sub>も掘り直している以外には、すべて上層以外の構造物を再利用したと思われる。なお、P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の前後関係は確認されなかった。周溝は幅15cm、深さ10cm前後である。地床炉は径75cmの円形で床面を20cm掘り込んでいた。

遺物 土器と石器と酸化鉄片があり、遺物の出土状態はB<sub>4</sub>型であるが、埋土堆積状況と型的にとらえた土器の出土状態とはかなりの相違がみられる。すなわち、本住居の埋没過程は、南北方向では主として南側から始まったことを土層観察では示しているが、土器の出土状態からは、これを示す積極的根拠は得られず、Ⅲ・Ⅳ層の把握には疑問視せざるを得ない。しかし、発掘時の所見であるので、ここでは参考程度にとどめ、土器の出土状態から床面上10cm以上を上層、以上を下層としてとらえて説明を加えたい。

上層は主としてⅣ期(694・695・699~730・733・734・1964~1967・1976)で、これにⅢ期(683・685・686・688・689・691~693・698・1962・1972・1974)が加わる。下層はⅢ期Ⅰa(680~682・684・690・696・697・1960・1961・1963・1968・1969・1973)、Ⅱa、Ⅱb(1975)がある。Ⅲ群土器はB<sub>2</sub>(740)、C<sub>1</sub>(1977)、D<sub>2</sub>(735~739・741~746)とI<sub>2</sub>があるが、うち、C<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>(735~746)とI<sub>2</sub>は上層出土である。いずれもⅢ期のうちに含まれるであろうがC<sub>1</sub>については検討が必要である。下層出土の土器群の中に、無繊維の土器(731・732)があり、731は無文、



挿図 107 住居址 61 遺物出土状態・接合関係図

732 は太い篋で弧線文を描いているが、後者はⅢ期に含められるかも知れない。

下層出土のⅢ期Ⅰaは107片で、単節縄文と無節縄文の割合はほぼ等しい。Lが21%で最も多く、Rは12%、L+Rが18%、LR19%、RL18%、LR+RLが12%となる。斜縄文が羽状縄文を上まわるのは、斜縄文とした中に、羽状縄文の一部となるものがあるからであろう。Ⅲ期Ⅱ群の占める率は8%、Ⅲ群は7%であり絶対量はⅠ群土器ということになる。

石器は石鏃11(834・835・838・840・841)、石匙3(842・843・845)、スクレイパー4(846)、石錐1、使用痕ある剥片6(844)、磨製石斧4(1489)、凹石11、石皿3(1563)、先端研磨石器1(1676)、の計44点あり、うち、下層遺物は石鏃3(836・837・839)、使用痕ある剥片5(844)のみである。石核、剥片類は黒曜石が大半を占めるが、石英1点がある。(笹沢 浩)

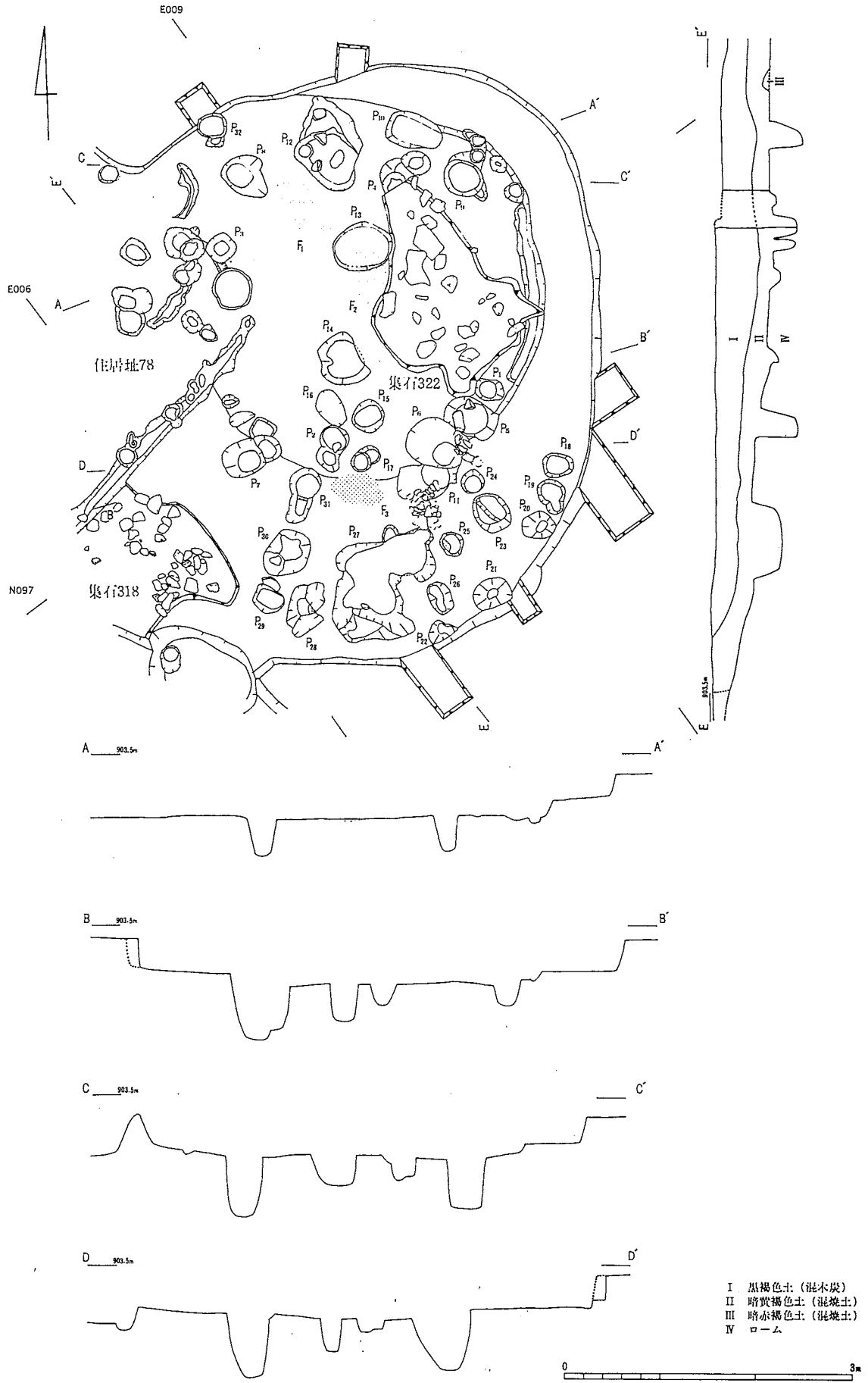
### (13) 住居址 66・81(挿図108、図76・132・180・181・229、図版42・119・120・148)

遺構 CB46を中心に検出された住居址で、上層は環状集石群の北外郭地域である。また、西側では住居址40・78と切りあい、さらに、住居址66内に住居址81が床面を10cmほど掘り下げて構築されている。このように複雑な切りあい関係と、集石群下の調査ができないために本住居址の検出は困難を極めた。また住居址66の南壁の一部が、住居址40の北壁の一部上端を切り、さらに住居址78の西壁の一部をも切って構築されたことが確認されたが、掘り下げの際のミスで切りあい部分の壁を失ってしまった。

住居址66は6.00×5.20mの変形した楕円形でD型に属する住居址である。壁は軟弱で不明確な部分が多く、トレンチを入れて検出にあたったが、南東部でははっきりとした壁はつかめなかった。床も同様で一部堅い所もあったが、全体に軟らかく、特に壁際は軟弱であった。南辺部より多くのピットが検出されたが、落ち込みが明確ではなく、平面形も変化に富んでおり、木根などによる攪乱とも考えられる。支柱穴はおそらく、ほぼ方形に並ぶP<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>であろう。P<sub>8</sub>も支柱穴ともとれるが、上部にV期の土器(1929)が出土しており、V期の土壌とも考えられるのでP<sub>11</sub>とした。住居址南側の支柱穴P<sub>7</sub>・P<sub>11</sub>のほぼ中央部にある焼土(F<sub>3</sub>)を炉と想定したいが、焼け方が弱くむしろ住居址81によって破壊された部分にあった可能性の方が強い。

住居址81は住居址66の建て替えとも考えられるが、住居址構造上に大きな相違があり、重複と判断した。しかし遺物においての違いは見い出せなかった。ほぼ円形のプランでおよそ4.00×3.60m前後と想定され、住居址類型はE型となり、長軸方向も約20°西側によってN26°Wとなる。床面は中央部に向うほどレベルが低くなるが、堅くしまって良好である。壁は北東部で住居址66の床面から10cmほど下がって検出したが、南半分は床面がせり上がり、住居址66の床面と接するため確認できなかった。東壁の直下に一部検出された周溝は、5cmほどの掘り込みをもっている。集石322の下部の調査ができないため不明部分も多いが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>と思われる。また住居址西壁と考えられる部分には小ピット列がみられた。地床炉はF<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>が確認されており、F<sub>2</sub>はP<sub>13</sub>の埋土の一部にまで入り込んでいる。共に掘り込みはなく範囲も明確ではない。

遺物 遺物はすべて住居址66として取り上げた。総数3,500点あり、土器は住居址40・78と切りあうところから、Ⅱ期の遺物が多いが、ほとんどは細片である。住居址全面にⅡ～Ⅴ期の土器が混じりあって出土した。しかし、Ⅳ期は比較的少なく、層位的区別はできなかったものの、Ⅴ期は上層と土壌の存在を示すところに集中して出土した。Ⅲ期の土器はⅠ(757～763・1921～1924)、Ⅱ(747～756)、Ⅲ(773～777)の各群がある。1921は床面より一括出土した土器で、器形・胎土ともに典型的なⅢ期Ⅰ群とは大きく異なり、淡い褐色で焼成が良く、頸部が大きくくびれ、いわゆる黒浜式に近い器形をもっている。またⅠ群の底部の中には、安定した平底(1924)がある。これらの土器は無繊維で半截竹管を上下に施し、円形文様を作るも



挿図108 住居址66実測図



のや、押し引き文が施されるなどの頸部文様帯をもつもの(762・763)などがあり、IV期的特徴がみられる。II群は単位文様 a(753~756)と b(747~752)があり、またIII群は A<sub>2</sub>(777)、E<sub>2</sub>(774・776)、F(773)、I<sub>2</sub>(775)などがある。IV期の土器(764~772)は、コンパス文・押し引き文など、III期と類似する文様構成をもつものも含まれているが、すべて繊維の混入はみられない。

石器は、石鏃 28(847~862)、抉入刺突具 1(863)、石匙 9(864~867)、スクレイパー 9(868~870・876)、石錐 2(871・872)、ピエス・エスキーユ 10(873~875)、使用痕のある剥片 25(877~879)、石核状石器 3、打製石斧 1、横刃型石器 1(1460)、磨製石斧 3(1515)、凹石 10 の計 102 点が出土している。II・IV・V期のものが混入している可能性がある。

(14) 住居址 70(挿図 109、図 77・133・181、図版 149)

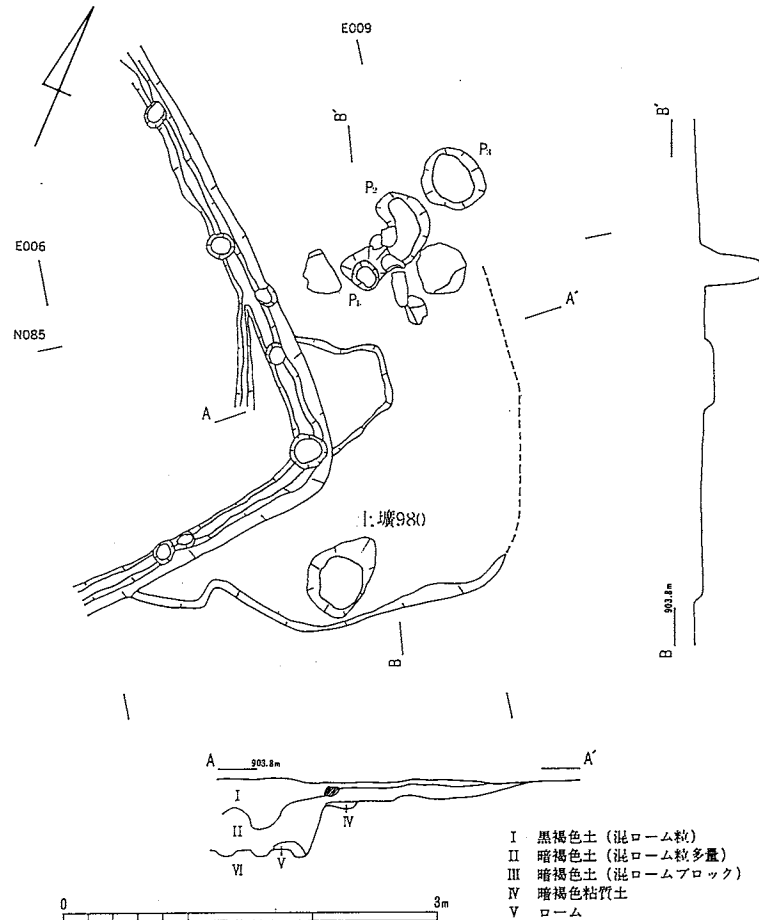
遺構 CH 47 を中心とし住居址 71 と重複して検出された。南東には住居址 26・80 が構築されている。本址の北西側の大部分は住居址 71 の調査時にそのプラン等が検出できずに、住居址 71 の方が新しいという判断で破壊してしまった。しかし、遺物の出土状態の検討では調査時の判断と逆転した。住居址東側は木根による攪乱があり、平面形と規模は不明である。わずかに残存する壁は壁高 10 cm ほどで、床面はローム漸移層中に作られており、同レベルで土壌が検出されている。土壌周辺の床面は堅いが東側は軟弱である。北壁寄りに、直径 50~20 cm のピットが 3 個と安山岩の平石が検出されているが、本住居址に伴うかどうかは不明である。

遺物 168 点の遺物があるが、住居址 71 の上層で本住居址の遺物がかかなり取りあげられている。多くは III 期の遺物で II 期はほとんど見あたらない。785~787・1934 が III 期 I 群であり、778~784 が II 群で 29 片ある。1934 は深鉢 F になると思われ、淡い褐色で内側に指圧痕があり、口縁部附近には無文帯を残して、半截竹管による平行線が施されており、他にあまり例を見ない。787 は波状口縁の波頂部にのみ刻目があり、II 群の 782 は附加条の縄文が施されている。石器はいたって少なく、抉入刺突具 1(880)、スクレイパー 1(881)、ピエス・エスキーユ 2(882)、凹石 6 の計 10 点のみである。

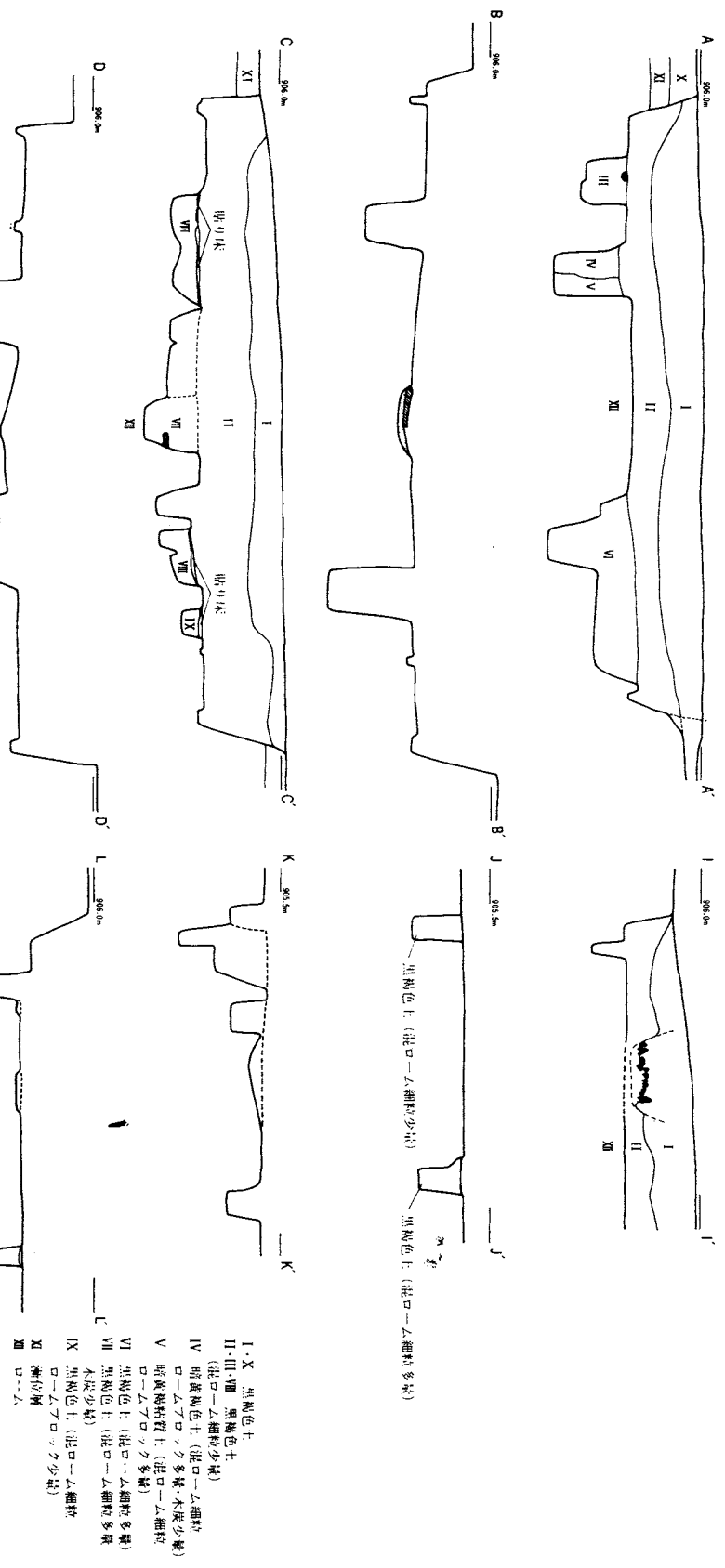
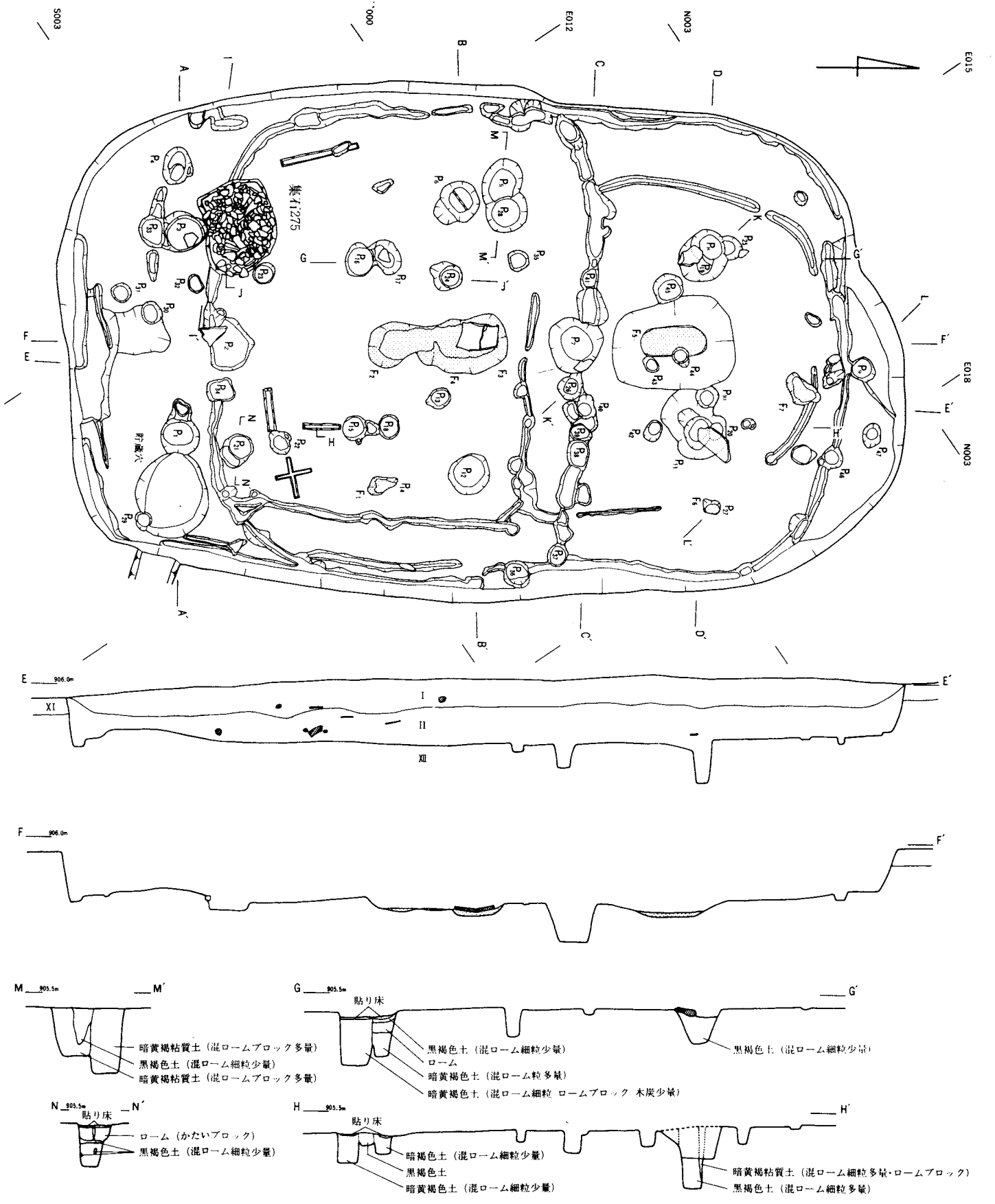
(佐藤 信之)

(15) 住居址 74(旧)(挿図 110~113、図 78~80・135・182・232・241、図版 43・44・121・149)

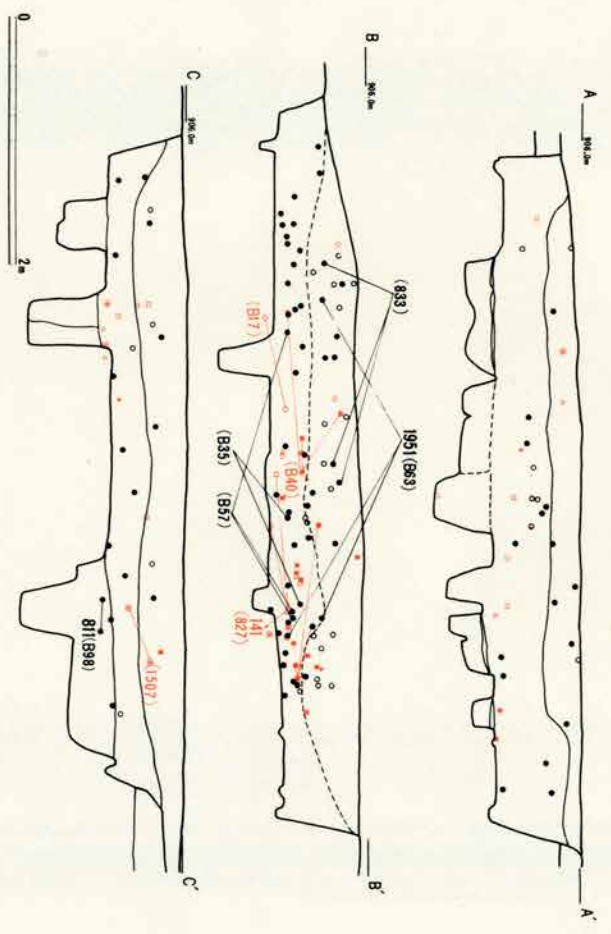
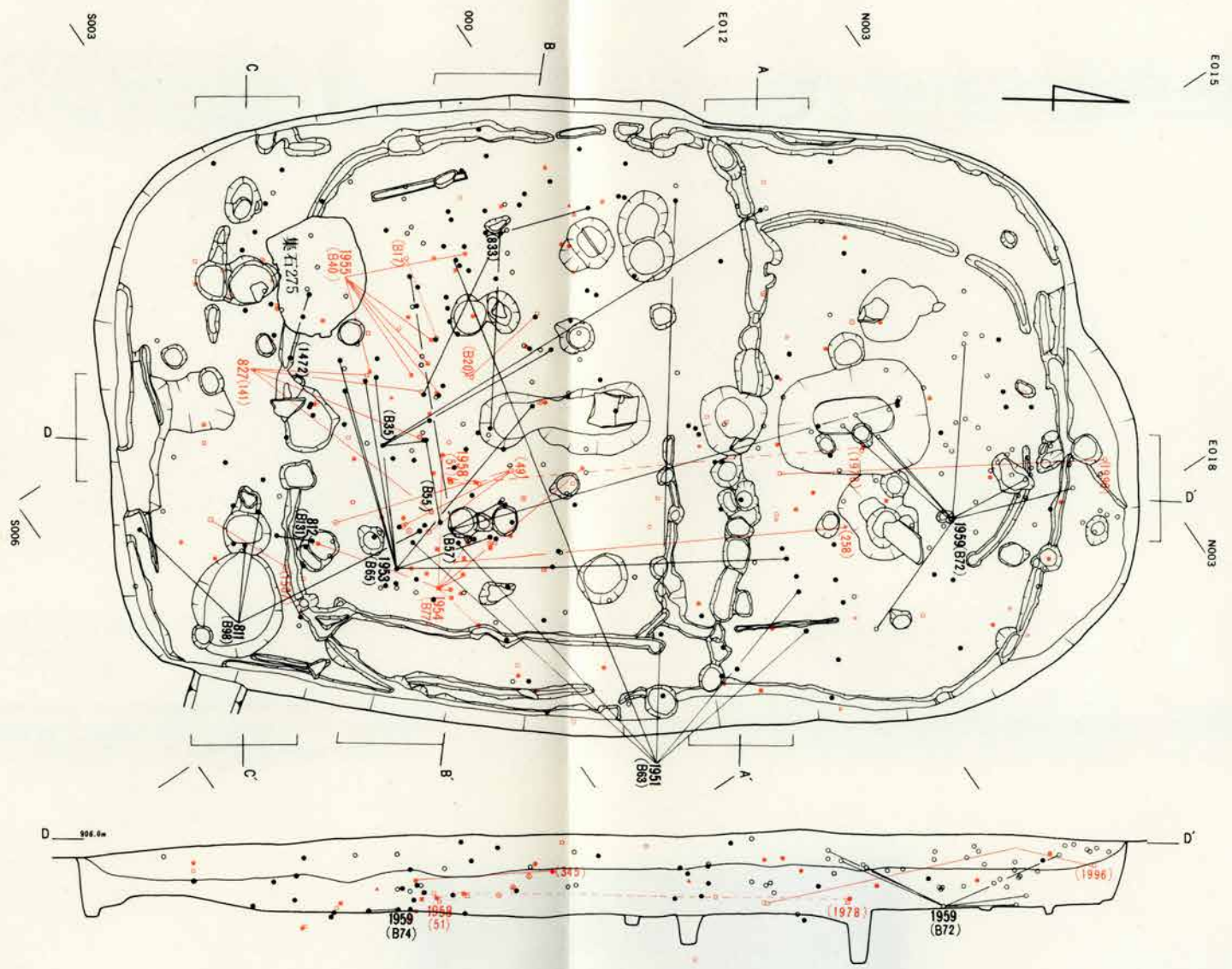
遺構 環状集石群の南外郭地域の EC 42 を中心に検出された大形住居址である。上層の集石群はその崩れが僅かに認められたにすぎないが、後述のように集石 275 のみが住居址埋土中に検出された。従っ



挿図 109 住居址 70 実測図



挿図110 住居址74実測図



- III期
- IV期
- 無筋縄文(L)
- 無筋縄文(R)
- 羽状縄文(L+R)
- 甲部縄文(LR)
- 甲部縄文(RL)
- 羽状縄文(LR+RL)
- III群

插图111 住居址74土器出土状态・接合関係图

て、住居址の検出も良好で、壁および床面の遺存状況もよい。しかし、プラン確認時から、少なくとも、2棟の住居址の存在は判断できたが、平面での切りあい関係の把握は困難で、このために、断面観察・遺物の出土状態・床面の状態等から判断せざるを得なかった。その結果、住居址74は明らかにⅢ期とⅣ期の2時期にわたる重複関係のあることが認められ、Ⅲ期はさらに、4回の拡張が想定された。従って、相異なる2時期の住居址ナンバーをつけねばならなかったが、整理の都合上、ここでは、Ⅲ期の住居址を(旧)、Ⅳ期を(新)、とあらわし、(旧)をさらにa・b・c・d・eと区分した。

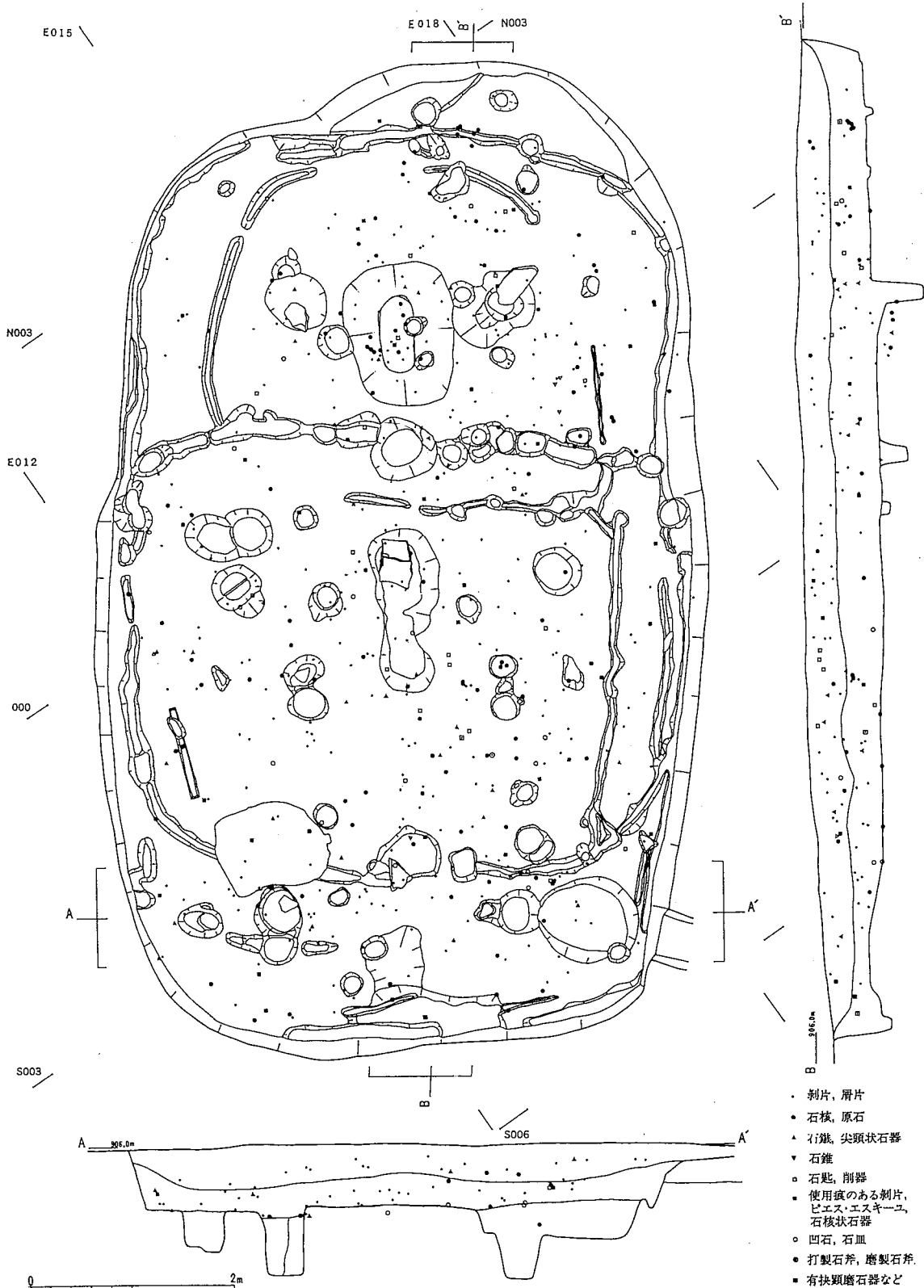
住居址74(旧)a 住居址74の中央南寄りに存在が考えられるもので、支柱穴は $P_{13} \cdot P_{22} \sim P_{24}$ の4個があり、台形状に配置される。径が24cm前後で、深さは45cm内外である。 $P_{21}$ は粘質ロームで貼り床されていた。 $P_{13} \cdot P_{24}$ ラインにそって、本住居址では最も細く(幅6cm)、浅い(3cm)周溝が部分的に検出されたが、同様の周溝は東壁ぞいの壁下端から6cm離れた床面上にも一部認められ、支柱穴との関連から(旧)aのものと考えられ、その周溝は南側まで伸びるが、北壁ぞいは不明である。地床炉 $F_1$ も残存部が認められ(旧)aのものであろう。推定規模は東西・南北とも約3.70mで主軸方向は $N 90^\circ W$ である。

住居址74(旧)b 周溝の残存から南壁を再利用し(旧)aの東・北壁をそれぞれ60cm前後拡張して壁を作ったと思われる。すなわち、住居址74中央部北寄りに、多数のピットをもった20cm前後の幅広い周溝が検出されほぼ一周する。そのうち、東・西の周溝は住居址74の東・西壁の直下に検出され、北西・南東隅は壁がわずかに張り出すことにより、これら検出した壁は(旧)bのものが一部残ったものであろう。周溝および周溝内のピットは $P_7$ と壁際の $P_{36} \cdot P_{37}$ を除いてはロームによる貼り床がみられた。支柱穴は $P_{12} \cdot P_{21} \cdot P_{28}$ (あるいは $P_5$ )の3個と、集石275下に予想される1個のやや台形状配置の4本柱からなるであろう。いずれも径30~40cm、深さ50~70cmと大形である。 $P_5$ と $P_{28}$ は切りあい関係がみられ $P_5$ が古い。また $P_{21}$ には貼り床されていた。地床炉 $F_2$ がその位置から本住居址にともなうであろう。推定規模は東西5.40m、南北4.40mであり、長軸方向は $N 90^\circ W$ である。

住居址74(旧)c (旧)a・bと同様に同一床面を利用して拡張されたと考えられる。長軸方向は(旧)a・bが東西方向であるのに、(旧)cでは南北方向となる( $N 0^\circ S$ )。支柱穴は配列と規模の類似性から、 $P_{10} \cdot P_{17} \cdot P_{19}$ の4個が考えられる。これらは(旧)d・eと切りあい関係がみられ、それらよりいずれも古い。 $P_{17}$ は(旧)dの $P_{16}$ と $P_{10}$ は(旧)eの $F_5$ と、 $P_{19}$ は(旧)eの $P_8$ にそれぞれ切られている。また、 $P_{17}$ には貼り床がある。いずれも径が35~40cm、深さ40~50cmである。住居址74床面の北辺部と西辺部に断続的ではあるが周溝がめぐる。幅10cm、深さ2~3cmであり、支柱穴の配置と一致するところから、(旧)cのものと考えられる。南側については $P_{33}$ 付近に周溝らしき痕跡が認められるが、断定できないことと、柱列からかなり離れたところから(旧)bの周溝部分になると思われる。だとするならば、(旧)cは(旧)bの南壁を再利用し、長軸方向を90度かえて、北方向に拡張したことになろう。地床炉は $F_3$ または $F_4$ と考えられ、 $F_4$ には鉄平石が1枚密着させて置かれていた。推定規模は $7.20 \times 3.90$ mとなり、D型の住居となろう。

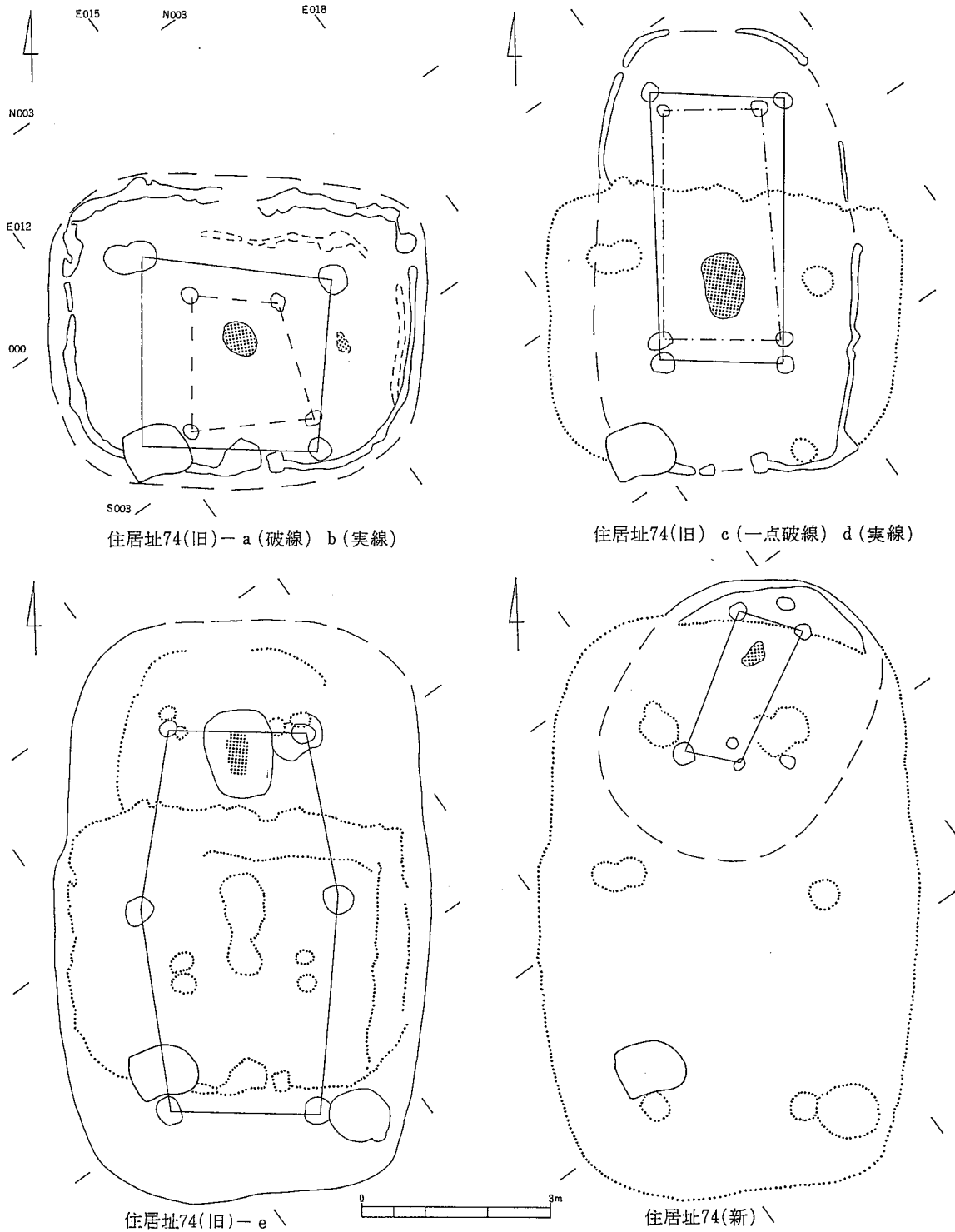
住居址74(旧)d 支柱穴は(旧)c・eの炉・柱穴との切りあい関係から $P_{15} \cdot P_{16} \cdot P_{20} \cdot P_{25}$ が想定される。しかし、これにともなう周溝は見あたらず、(旧)cの再利用と考えられる。だとするならば、(旧)dは(旧)eの主柱のみ構築し直したものとなろう。

住居址74(旧)e Ⅲ期住居址の中では拡張し終った最後のものである。 $9.37 \text{ m} \times 5.74 \text{ m}$ の大形でG型に属する。すなわち、(旧)c・dの長軸を中心線として、各壁を拡張させている。この場合に北壁側の拡張はわずかである。つまり、長軸線が北壁と接する点を基点として、長軸線の左右を拡張するが南壁側の拡張部分が特に広い。拡張の結果、東・西両壁のそれぞれの中央部分は、かつての(旧)bの壁の一部を再利用した形となっている。北壁の一部は住居址74(新)(Ⅳ-b期)に切られている。周溝は住居址北半分と東壁、さらに南壁の一部に認められた。幅・深さとも10cm前後で断面は逆梯形でしっかりしている。支柱穴は



挿図 112 住居址 74 石器出土状態図

P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>の6個となる。径50cm前後で深さも60~70cmともっとも大形である。柱穴埋土は(旧)段階の柱穴がいずれもローム粒子を多量に含んだものが多いのに対して、黒褐色土で共通している。主柱の配置は中央の2本がやや外に張り出す。地床炉はF<sub>5</sub>で北側の主柱間にあり、140×120cmで底面を10cm掘り下げている。P<sub>1</sub>に接して100×90cm、深さ35cmの大形ピットがあり、その底部は堅く踏み固められていた。貯蔵穴であろう。



挿図 113 住居址 74 変遷図

遺物の出土状態 住居址(旧)・(新)の出土状態はA<sub>1</sub>型に属する。しかし、(旧)・(新)ともに埋土の土層観察では、両者を明確に区分しうる根拠は得られず、I・II層がともに自然堆積の状態を示したにすぎなかった。しかし、土器片のドット操作をする中で、両者の境界線として上・下の遺物包含状態に大きな相違が、住居址(旧)の方に顕著にみられた。つまり、住居址(新)の埋土は接合関係の分かるIII期II h(1951)に象徴的に示される。これはF<sub>7</sub>とP<sub>20</sub>付近の床面上に2箇所に分散して出土したが、この破片は住居址(新)の埋土中3 m四方の範囲に散在しており、そのうちのあるものはI層上部にまで及んでいた。この傾向は接合の不可能な土器片にもいえることであって、IV期土器群はI・II層に関係なく若干のIII期土器群(1366・1371)

とともに出土した。この限りでは、住居址(新)の埋土中のⅠ・Ⅱ層の識別は間違っていたことになろう。

しかし、住居址(旧)埋土では、Ⅳ期の土器片はⅡ層上部に数点出土したものの、基本的には、大半が、Ⅰ層出土である。さらに検出面直下ではⅤ期以降が少量みられ(883~887)、Ⅱ層および床面上では特に住居址(旧)の中央から南寄りに集中して出土した。この出土状態だけをみれば、遺物は住居址(旧)cの範囲内に収まるものであって、(旧)cが古段階ではもっとも新しいと判断されようが、接合関係を知りうる資料(811・812・827・1951・1953~1955・1958)の空間的広がりには、まさに住居址(旧)eの範囲内にあることを示している。なお、遺物番号B57はⅢ期の繊維を含む底部に穿孔のある土器片であるが、その破片の一部は住居址(新)の埋土からも出土しており、明らかに、住居址(新)構築の際に生じた結果であろう。

Ⅰ・Ⅱ層分割の根拠は遺物の出土状態を検討してみても、少なくとも住居址(旧)の埋土中ではほぼ妥当性が指摘されるが、分層作業ののちの調査過程の中で、埋土中に集石275を検出し、そのレベルがⅡ層上部にあることが判明した。このことは分層の根拠を得ることにもなると同時に、集石275はⅡ層堆積後構築されたことを示しているであろう。つまり、集石275はⅢ期より新しく、Ⅰ層の遺物が示す年代の時期かそれより後出的であることを示すといえよう。住居址(新)の分層結果が根拠のないものである可能性が強いとすれば、集石275はⅠ層によって包含されていることになり、住居址(新)の示す年代はⅣ-b期よりは古い段階に構築されたことになろう。

以上、遺物の出土状態を分析した結果、その空間的・垂直的分布状態から、遺構での検討結果の妥当性、つまり、住居址74(旧)eが古段階では最も新しく、その廃絶後まもなく、土器群の廃棄がなされたのち、Ⅱ層堆積が終了し、集石275が、さらにおくれて住居址74(新)がそれぞれ構築されたことを示しているであろう。少なくとも住居址(旧)Ⅰ層(848~882)・Ⅱ層上部を除いた、下部から床面出土の土器群はほぼ一括遺物として何らさしさわりのないものと思われる。

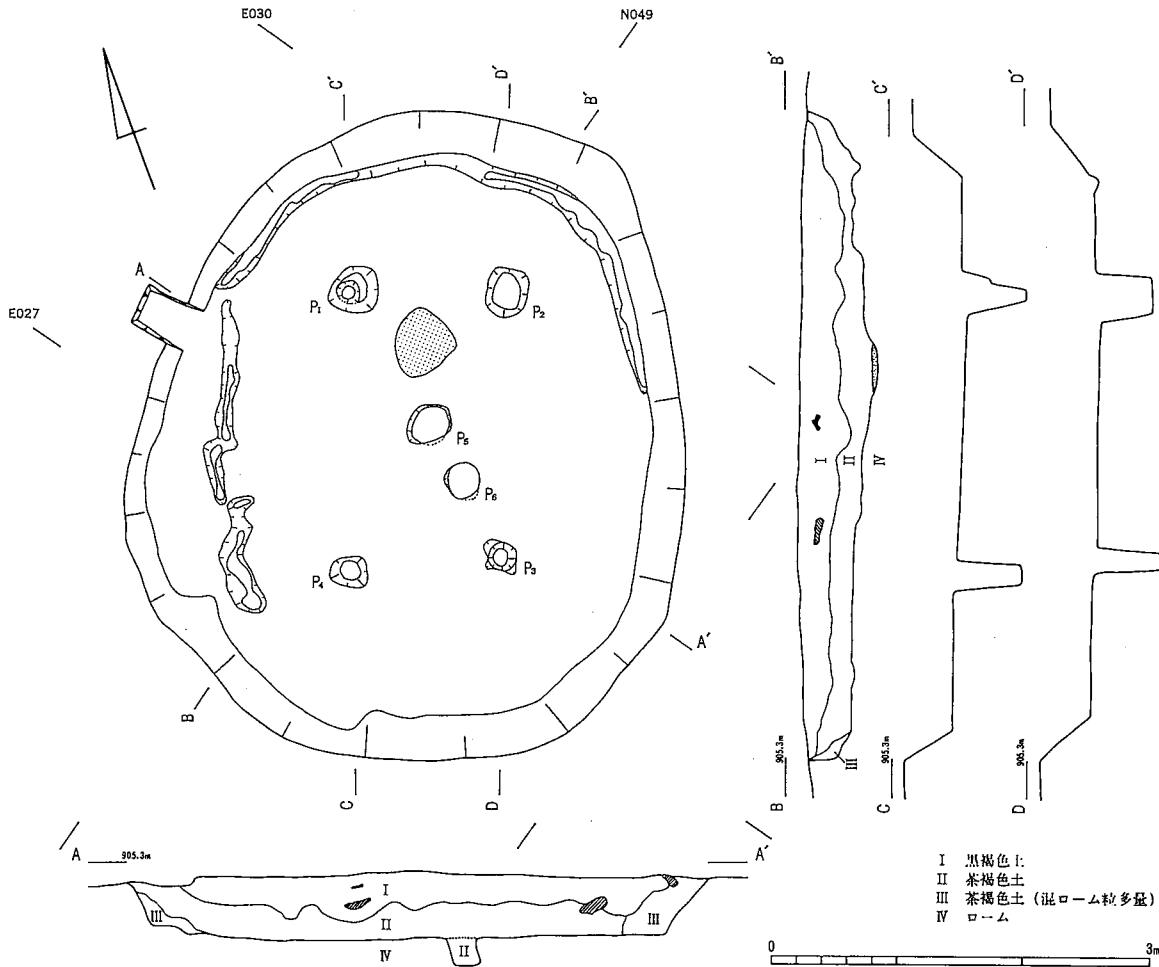
遺物 土器と石器がある。土器はⅡ層下部からはⅢ期Ⅰa(820~841・1955・1957・1958)、Ⅱa(805・806・811・812・1953)、Ⅱb(814~817・819・1952)、Ⅱh(818・1951)、Ⅲ群Ⅰ<sub>2</sub>(846・1954)・E<sub>1</sub>(843~845)・G<sub>2</sub>(847)などがある。なお、842・1956は繊維を含まない竹管文であるもので、その文様帯はⅢ期の土器群に共通する。出土状態からⅢ期に含ませて考えるべきであろう。Ⅰaは少片を除く総数(7cm×7cm以上)は103片で内訳はLRが38点と40%を占め、LR+RLが18%、RLが15%で、単節縄文が73%と無節縄文の27%を凌駕している。また、Ⅲ期各群土器の占める割合はⅠ群77%、Ⅱ群20%、Ⅲ群3%となる。なお、Ⅱaのうちには附加条1種の土器(812)が1点ある。

石器は総数91点で、石鏃23(883~903)、石匙2(904・905)、スクレイパー8(911・913・917・919)、石錐(906~910)、ピエス・エスキーユ2、有袂研磨石器1(912)、使用痕のある剝片32(915・916・920)、打製石斧1(1428)、滑石未製品4(1722・1723・1739・1740)、凹石9、石皿4(1549・1550)円礫状石器1(1742)である。  
(笹沢 浩)

(16) 住居址76(挿図114~116、図81~83・133・134・183・227・232、図版45・52・120・121・150・187)

遺構 DA35を中心に位置するD型の住居址で、南西側にⅣ期の住居址79が隣接する。ローム漸移層上部で検出され、プラン西側部分は環状集石群東郭部分と一部重複していたが、そこには核になる集石はみられず、礫が散在するといった状態であった。従って、礫の出土状態を実測した上で取り除くという方法を取りながら調査を進めた結果、礫は西壁から住居址中央部まで広がり、一部は埋土深くまで入り込んでいた。検出当初、北西部分は黒褐色土が広く分布して、プラン確認は困難であった。従って、トレンチを入れ下層の様子を探ったが、はっきりした壁の立ち上がりは認められなかった。このため、中央部分で床面をとらえ、壁の立ち上がりに注意しながら徐々に壁にむかって調査をすすめるという方法をとった





挿図 114 住居址 76 実測図

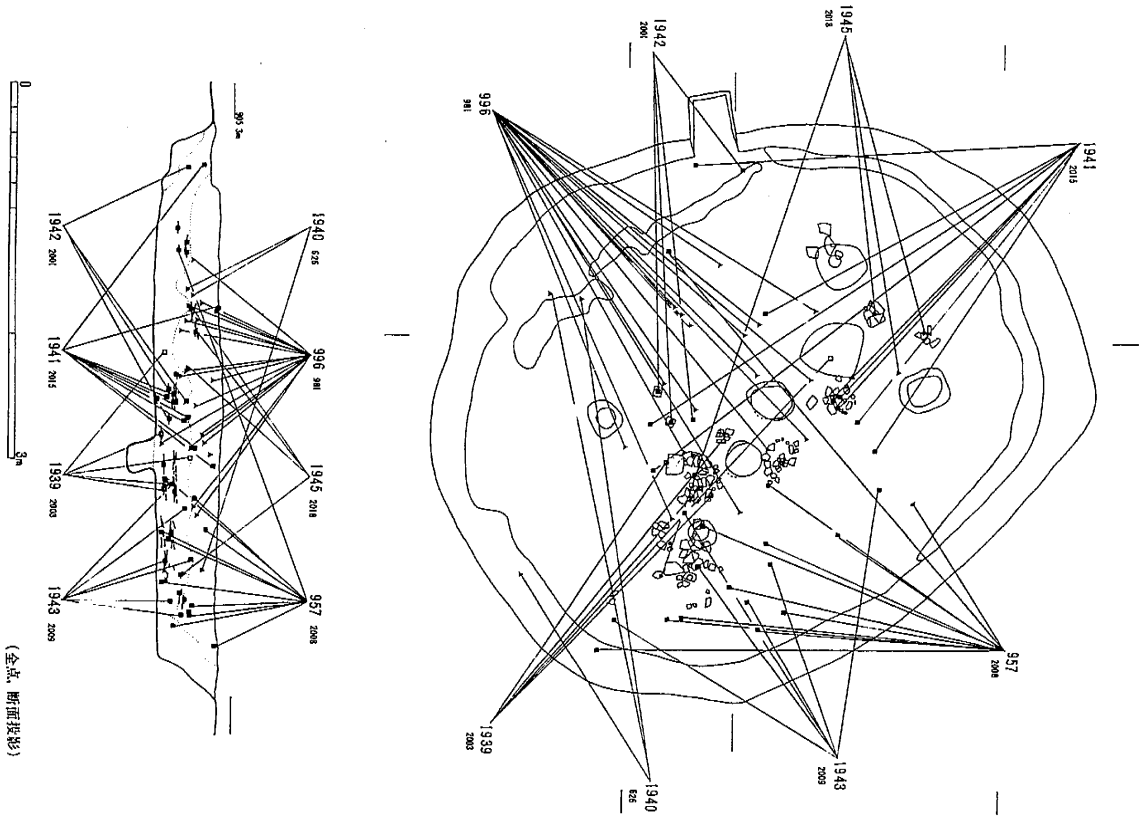
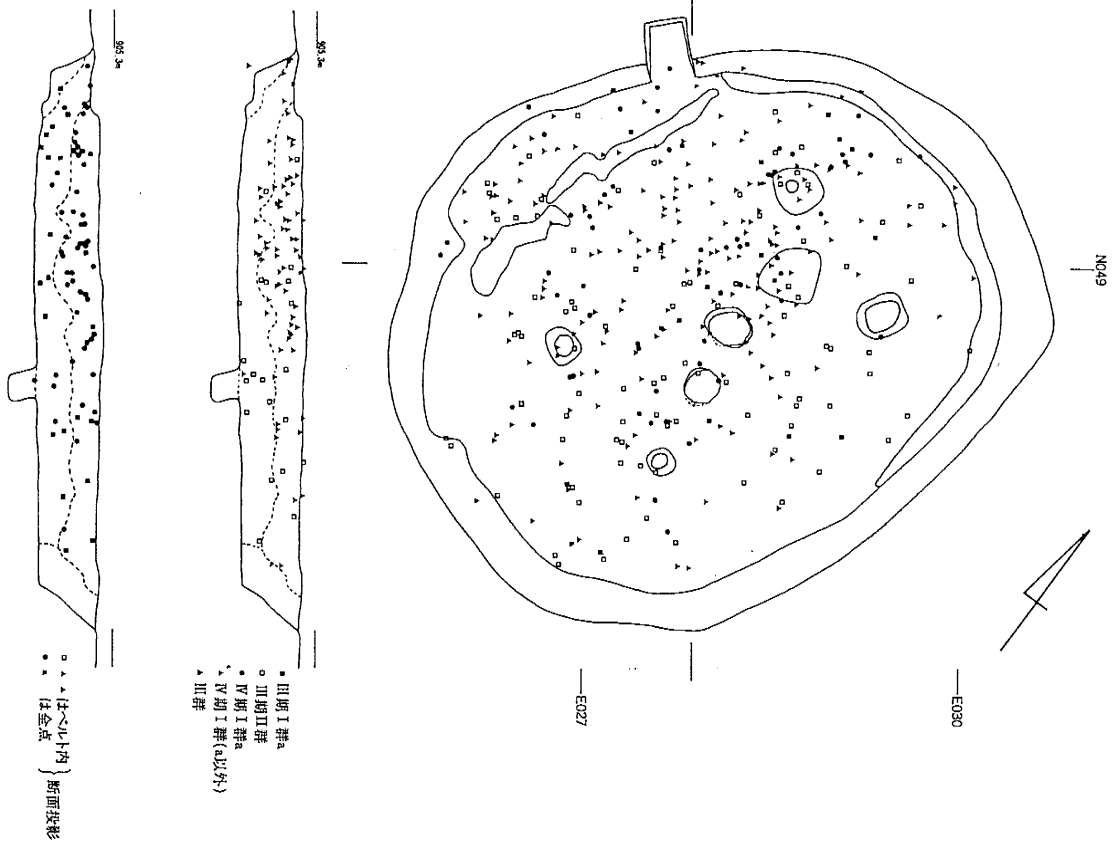
が、西壁はついに確認できなかった。実際の住居址プランは、柱穴、周溝、および炉の配置等から判断して周溝がめぐる範囲であろう。

プランは楕円形に近い隅丸方形で、規模 4.44×3.80 m、長軸方向 N 20° E である。壁は北西部を除き緩やかではあるが明確な立ち上がりを示している。全体に堅くしまり埋土との区別は容易であった。最大壁高は 46 cm である。床面は小さな凹凸があるものの、北西部分の一部を除き全体に非常に堅い。周溝は浅く南壁から東壁の一部を欠く。ピットは 6 個あり、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> が主柱穴であろう。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub> はやや断面フラスコ状で他にくらべ浅い点から、貯蔵穴的なピットと考えられるがはっきりしない。地床炉は北寄りに位置し、若干掘りくぼめられ、その上に堅くなった厚さ約 1 cm の焼土が検出された。

遺物の出土状態 遺物の出土分布は壁際を除いては水平的・垂直的に広く分布し、しかも、中央寄りの床面付近 7 箇所に一括土器があった(出土状態 B<sub>4</sub> 型)。埋土は基本的には 3 層に別れるが、遺物包含は I 層と II 層であり、両層から出土する土器はほぼ型式的分類に合致する。つまり、III 期はほとんどが II 層から、IV 期は I 層から出土しており、接合関係においても矛盾はみられない。II 層下部の一括土器は本址に直接伴わず、II 層中の他の土器と同様な性格をもつものと考えられる。平面的分布では III 期の土器は全体に広がるが、IV 期はやや北側に片寄りをみせて分布する。以上、本址は廃絶して以後、完全に埋没するまでにはかなりの時間を要し、その間、III 層と II 層が形成されたあと I 層が堆積するまでの間に、何らかの理由による若干の断絶があったことが考えられる。

住居址埋土出土の礫は、土器にみられたような層位による差はこれといって認められず、II 層にはやや少ないものの全体に分布していた。これは、環状集石群の一部の礫が、本址廃絶後まもなく埋土の堆積と





挿図 115 住居址 76 土器出土状態・接合関係図

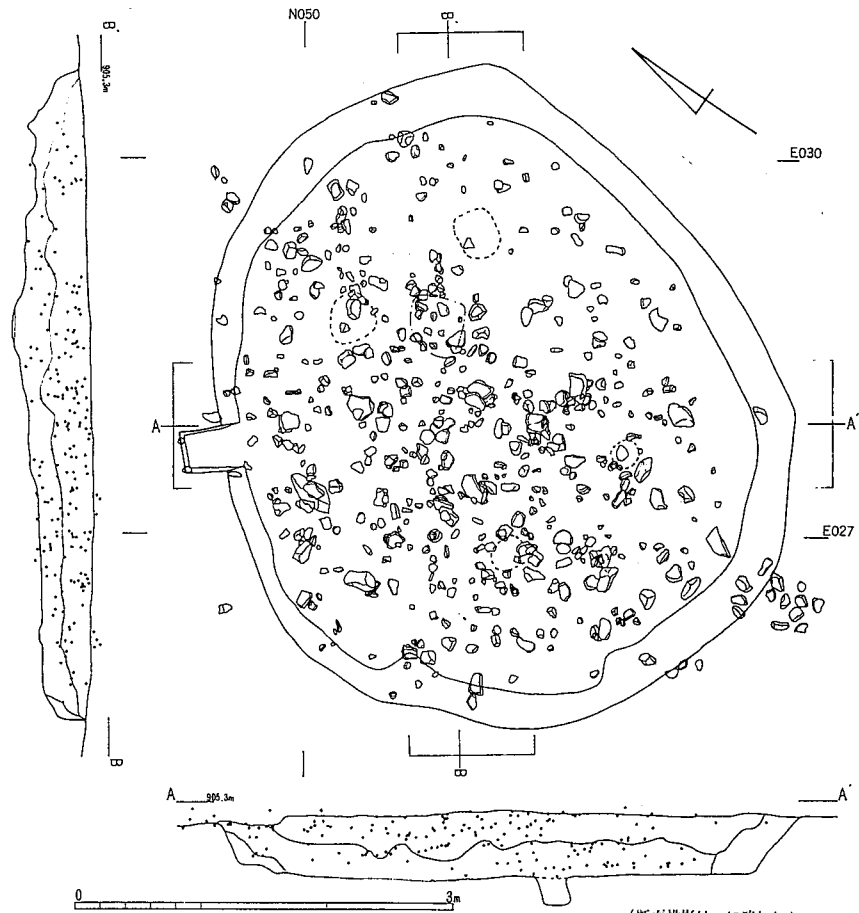
ともに入り込み、その状態が住居址が完全に埋没する過程で、途切れることなく続いたことを示している。つまり、本址とかわる部分が環状集石群の東端にあり、単位集石がみられない地域である点、今一つははっきりしないが、環状集石群の形成が本址の廃絶時とそう大差ない時期に、すでに始まっていたということになる。

遺物 総数は約2,030点で、そのうち土器が約80%、20%が石器類である。土器は縄文のみの破片が多く、縄文原体のわかる例だけでも全体の26%を占める。Ⅲ期 Ia

(910~943・957・1941~1943・1946・1947・1949・1950)約60%、Ⅳ期 Ia (944~956・958・959・1940・1944・1948)が35%である。両者の相違は主に内面の指頭圧痕の有無、及び胎土中の雲母の量等であり、それによって分類したものを住居址埋土の土層図に投影してみると、Ⅱ層とⅠ層にそれぞれ別れる傾向にあり(挿図115)、分類に関してはそう大きな誤りはないものと思われる。Ⅲ期Ⅱ群(888~909・1939・1949)は、全体の約6%であるが小片が多く器形のうかがえるものはわずかに1点だけである。また、Ⅳ期の文様帯をもつ土器(960~987・1945)は9%、Ⅲ群(988~999)は3%である。

1939はⅡ群中実測できた唯一の土器で、Ⅲ期Ⅱ群Ihに分類できる。内面は丁寧に磨かれ、繊維を多量に含んで遺存状態は非常に良好である。904~909もほぼ同様であろう。1941はⅠ群に含まれるものの、典型的なⅢ期Ⅰ群のE・Gとは趣の異なった土器である。色調は茶灰色、胎土に雲母・白砂を含み、内面に顕著な指頭圧痕があり、RLの縄文が施文されているが、ところどころに縄目がつかなかった部分がみられる。1942も同じ系統と思われるが、器厚も9~10mmと比較的厚く、内面も口唇部付近には指頭圧痕が残るが、下部は概して篋でナデられ平坦である。1943は床面近くから出土したものでやはりⅠ群に含まれよう。少なくとも2種類の原体による単節羽状縄文が施され、口唇部は約1cmの幅でヨコナデされている。赤褐色を呈し、雲母・白砂粒を含むが多くはない。内面はオサエのあとナデられている。よりⅣ期的な感じのする土器である。994・995はⅢ群で同一個体である。他に小片が十数点あり、住居址ほぼ中央のⅠ層下部に、約2m四方の範囲で広がっていたが、器形をうかがうまでには至らなかった。

石器の出土量は少ない。石鏃が比較的多く17点(922~930・932~934)、他に、石匙3(935・936)、スクレイパー2(937)、石錐2(938・939)、ピエス・エスキーユ3(941)、使用痕ある剥片13(940)、有袂頭磨石器1(942)、石核状石器2、凹石10、石皿1(1552)、磨製石斧1(1467)、先端研磨石器1、尖頭状石器1(931)の



挿図116 住居址76 礎出土状態図

計 57 点がある。石皿は側縁部に刻みがみられ、住居址南西部の床面から少し浮いたところから隣接して出土した 2 点が接合した例である。また、磨製石斧も、住居址ほぼ中央の I 層中で、約 1.5 m 離れて出土した 2 点が接合したものである。  
 (岩崎 孝治)

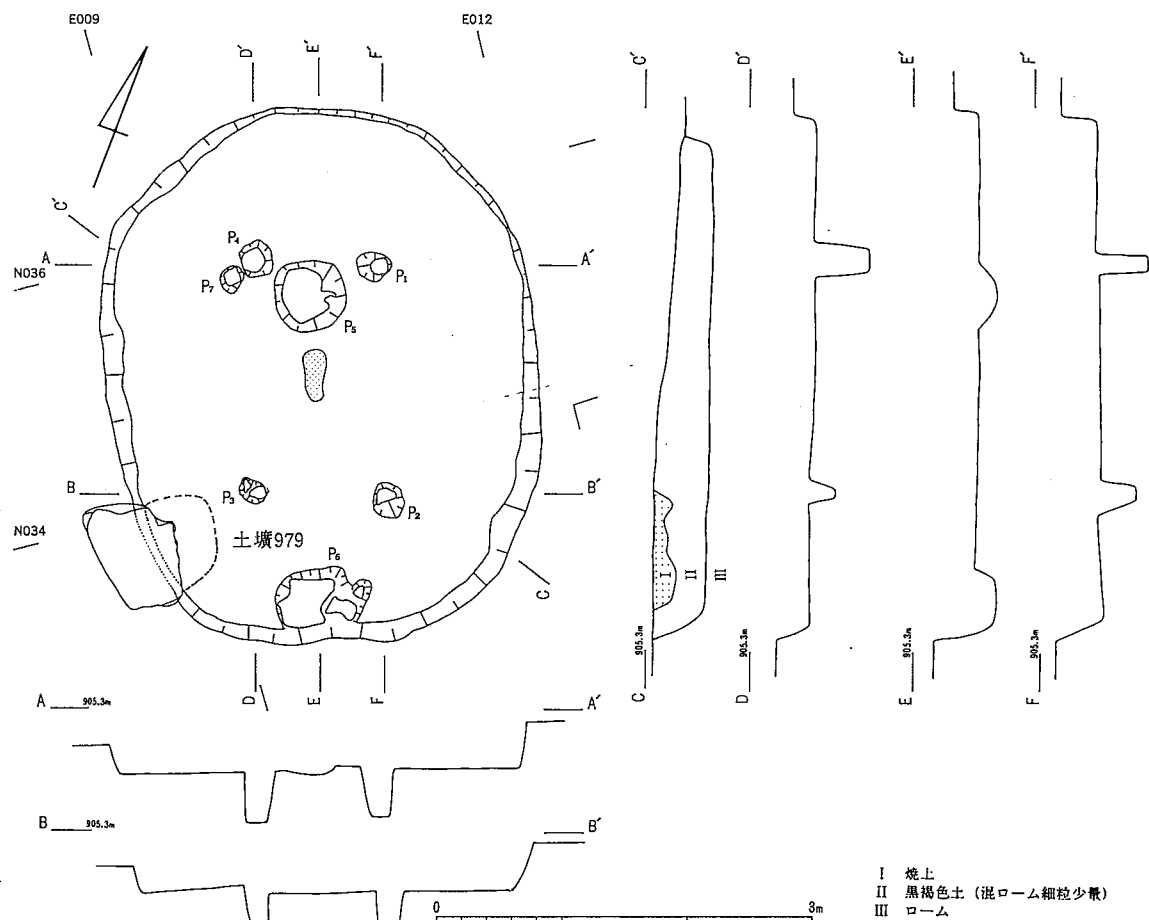
(17) 住居址 77 (挿図 117、図 77・133・183、図版 46・120)

遺構 調査区域のほぼ中央、DH 45 付近に検出され、住居址 12 の北方に位置している。住居址の上には環状集石群があり、また住居址南西隅には安山岩の平石をもつ阿久 IV 期の土壌 979 がある。また南東部分にも埋土にかかるかなり厚い焼土の堆積が認められた。平石の下部は壁を含め完掘してない。

住居址平面形は楕円形または隅丸長方形で、4 個の支柱穴は長辺が短辺のほぼ 2 倍になる細長い長方形に配置されており、典型的な D 型の住居址である。規模は 4.00×3.17 m、長軸方向は N 24° W である。壁高は 20~40 cm を測るが東が高く西は低い。壁は傾斜がやや緩やかな部分が多いが良好である。床面は堅くしまりわずかに西に傾斜している。周溝は認められない。支柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> で、径はやや小さいが 40 cm 前後の深さをもっている。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub> は柱穴以外の施設であろう。支柱穴を結ぶ交点上に床面を楕円形にわずかに掘り窪めた地床炉が構築されており、薄く焼土が堆積していた。

遺物 II 層に散在しており、一括土器は認められない。土器片は床面より 10 cm 程高い位置により集中する傾向があり、黒曜石の剝片、屑片などは床面に近くなるに従って多くなる。平面的分布は、住居址南半に集中する傾向にあり、特に炉から P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub> にかけて密集する。II 期と III 期の土器が混在して出土した。

土器は約 350 点あるが、ほとんどが小破片であった。そのうち III 期が 60% 以上を占め大部分が I a (793~797・801~803・1935~1938) である。器形のわかるものは小形土器 2 点 (1935・1936) のみで、いずれも深鉢 A



挿図 117 住居址 77 実測図

である。Ⅲ期Ⅱ群(791・792)は細片のみ10片程で、器形、単位文様の明らかになるものはない。Ⅱ期は100片をこえるが、ほとんどがⅠ群(788)で、Ⅱ群(789・790)は2片のみであった。Ⅳ期(798～800)の中には、上層のグリッド出土遺物と接合したり、土壇出土土器と同一個体となるものがあった。

石器は石鏃11(943～947)、石匙3(948・949)、スクレイパー4(953)、石錐5(950・951)、ピエス・エスキーユ5(954)、使用痕ある剝片11(952・955)、凹石2の総計41点の出土をみた。特に石錐は5点のうち4点までが片面調整の形状AⅡ型である。  
(百瀬 新治)

## 2 方形柱列

### (1) 方形柱列Ⅺ(図41・195、図版70)

CO 81 付近、方形柱列ⅢとⅦの間であり、上層は環状集石群西辺の内縁ちかくにあたる。掘り方1～4の4個で構成されるC類型である。

内部には土壇がないが、周辺には比較的多くの土壇・集石がある。埋土中にロームブロックを含むものが多く、特に860(-60 cm)、554(-62 cm)は形態的にもB類型の掘り方に類似する。位置的関係からみれば543・548(-75 cm)・558(-52 cm)・559(-50 cm)・565(-63 cm)・570(-25 cm)などは、1と2、2と3を結ぶ線に平行して置かれている。他に1の北側にある679(-26 cm)・544(-30 cm)・549(-83 cm)・546(-23 cm)・547(-50 cm)・710(-50 cm)、1と4の間にある556(-30 cm)・557(-45 cm)もロームを含んでいる。これらが本址になんらかの関係をもつかどうかは明らかでないが、680と554などは埋土中よりⅡ期の土器を出土し、方向もB類型に一致するものがある点からも別に考えるべきかもしれない。

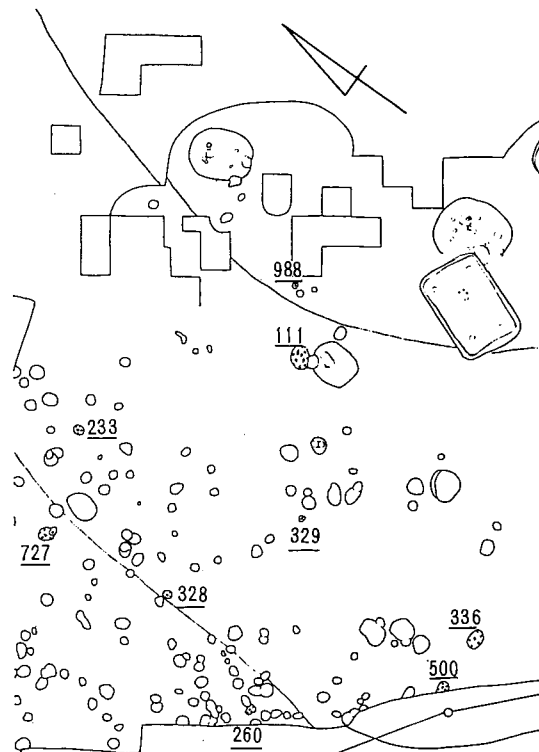
1～4の埋土は多量のロームブロックを含むことは他と共通するが、本址では、その有段部に切りあい関係が指摘されている。しかし、水平方向に伸びる土層は切りあい部を越えて連続するものが多く、多量のロームブロックによって土層観察が容易でなかったこともあって、先入観によってあえて分層した結果でないとは断言し難い。一応、他例のように本址の堆積状態は切りあい関係を示さないと判断しておきたい。なお、柱痕跡状のものは観察されなかったが、1の最深底部には径10 cm、厚さ5 cmほどの焼土塊が認められた。

本址は各最深部を結ぶと一辺3.65 m程度の方形に配置されていることになり、その方向はN 28° Eとなる。深さは検出面より1が150 cm、2が100 cm、3が115 cm、4が130 cm程度を最深とし、最浅部が50または45 cm前後になるが、他の段部の深さはあまり共通性は認められない。

土器は計65点(2196～2203)あり、そのうちⅡ期が47点、Ⅲ期が8点、明らかなⅣ期以降は1点しかなく、集石群下層であることから考えても、本址がⅢ期に属する可能性は強い。  
(土屋 積)

## 3 土壇

Ⅲ期に属すると思われる土壇は9基であり、すべて



挿図 118 Ⅲ期土壇分布図

遺跡のほぼ中央、D 地区内に集中していた(挿図 118)。 B 型土壙 2、C 型土壙 7 基がある。

(1) B 型土壙(土壙 233・326)

ともに B II 型であり、径 20 cm 前後の角礫を 1 個伴うが、その検出位置は土壙 233 が中央部中位、329 が検出面より上面の壁際と異なる。出土遺物は少なく土器片数点のみである。

(2) C 型土壙(土壙 111・127・260・325・336・500・988)(図 49・50・199、図版 76・125)

C II a 型または浅い C II c 型が大半で、長径 130～150 cm の大形(111・127・336)、80～90 cm の中形(500)、50 cm 前後の小形(325・329・988)とがある。埋土は単一のものが多い。遺物は土壙 500 を除いて、土器細片や黒曜石剝片など少量出土したにとどまる。土壙 500 は北側部分埋土上層に、径 30 cm 位の範囲でやや中央を高くして同一個体の大形土器片が重なって出土した。胴部下半が復元できた阿久 III 期 II 群の土器(2276)で、胴部最大径 50 cm 以上の大形の深鉢である。土壙 260 は断面形が f の土壙である。西側の土壙 259 と薄い壁を隔てて接しており、壁際からは石鏃が 2 点出土した。

(百瀬 新治)

## 第4節 阿久IV期

## 1 住居址

## 1) 阿久IV-a期

## (1) 住居址5(旧)・(中)・(新)(挿図119~121、図84・184・226、図版47・153・188)

遺構 尾根南斜面上方に検出されたが、南壁は斜面下方では流されていたことと、後世の溝によって一部が切られており、その痕跡を検出したにすぎなかった。漸移層上部での検出状況では、プランから2棟の切りあいが予想されたが、切りあい関係は判明せず、断面および床面観察にゆだねた。その結果、床面レベルの相違が著しく認められ、また、貼り床等もないところから、住居址5(旧)が新しいと調査時では判断した。しかし、その後、遺物の出土状態ならびに接合関係を検討した結果、調査時の判断とは全く逆の結果がでた。

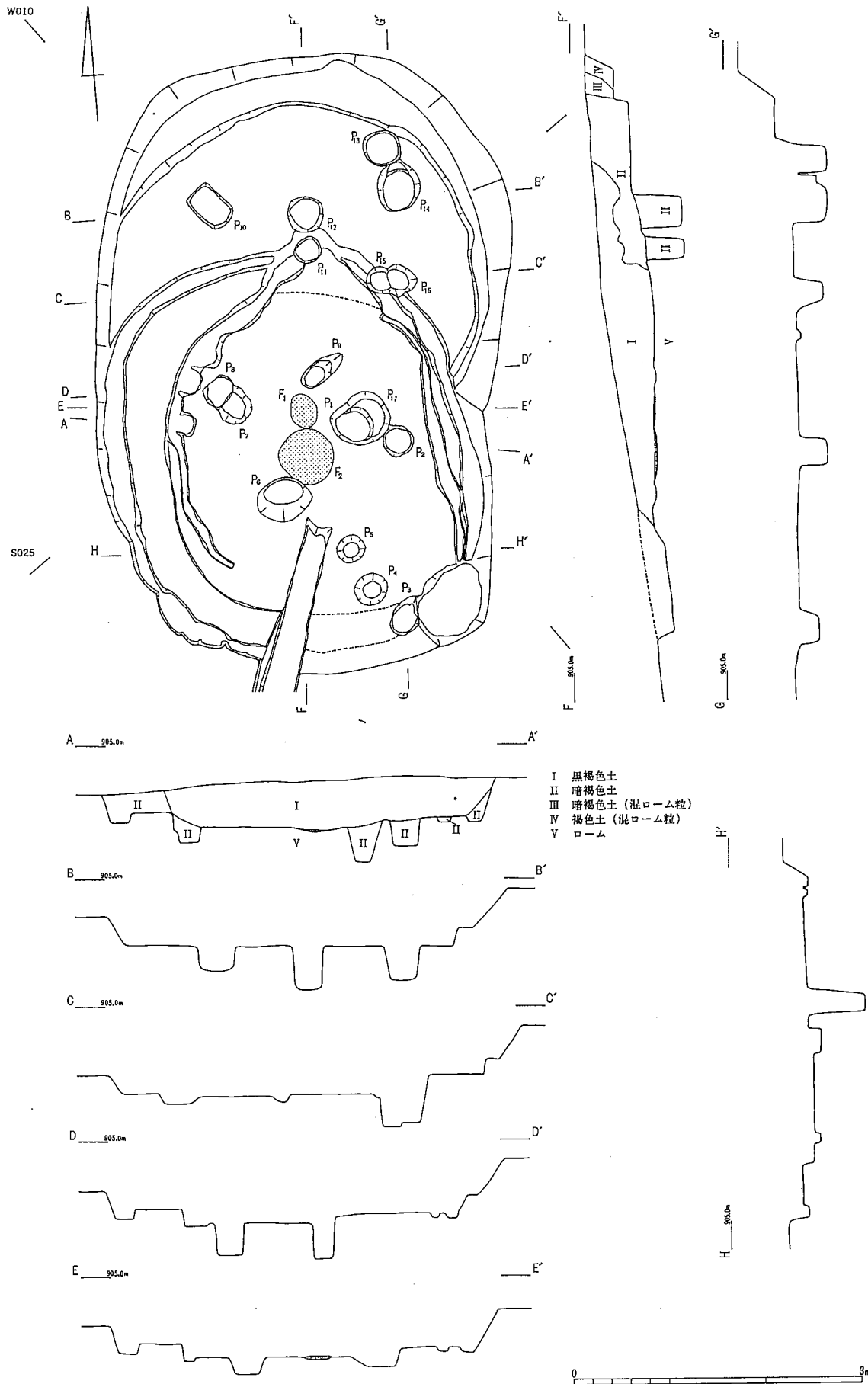
住居址5(旧)(新)の床の下部に検出された。拡張前のaと後のbが、周溝・炉等より認められた。aは周溝の残存部から約3.30×3.00mの小判形の住居址で、F<sub>1</sub>がこれに属すると考えられるが、柱穴は未検出である。bはaのほぼ同一床面上に、主軸方向をほぼ同じくして東壁側を小さく、他壁側を大きく拡張したものである。支柱穴はP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>で深さは30~50cmとややバラツキがある。住居址5では最も径の小さな柱穴である。炉はF<sub>2</sub>であろう。(旧)の年代を想定しうる遺物の出土はなかった。

住居址5(中)(新)(旧)の約半分ほど北にずれた位置に検出された。従って(中)の南辺部と(旧)の北辺部は25cmの比高差をもって重複する。つまり、旧住居の北辺部上に一部重複させて構築したものであるが、貼り床は認められなかった。

(新)は(中)より若干南側にずらし、(中)の東壁の一部を再利用し(中)の床面を約25cm掘り下げて建て替えており、長軸方向は(中)(N30°E)より東側にずれる(N25°E)。住居址規模は両者ともほとんど同一(推定4.30×3.80m)と思われる。(中)の支柱穴はP<sub>7</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>17</sub>で、台形状に配置され、柱穴検出面からの深さは20~30cm前後であるが、(中)の床面上のレベルに補正すれば、いずれも50cm前後の深さとなり、支柱穴の役割りを十分にはたす。住居址5で検出された柱穴の中ではいずれも長径が最も大きい。(新)の支柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>16</sub>の4本で、台形に配置され、補正深度は50cm前後である。なお、(中)と(新)の新旧関係は(新)の北壁が(中)の埋土中に認められたことと、(中)の床面が(新)に認められなかったこと、および、P<sub>1</sub>とP<sub>17</sub>、P<sub>7</sub>とP<sub>8</sub>の切りあい関係で決定した。両者に属する炉は検出できなかった。遺物は、(新)に属するものが大半であり、(中)からの出土はほとんどない。このことは(中)に土器が廃棄されたあと、あまり時間的経過を経ることなしに(新)が構築されたことを示している。

住居址5は(旧)を除いては住居址類型E型に属し、(旧)aの構築に始まり、以降(新)まで、拡張・建て替えを継続して行なったと思われる。そして、(新)の廃絶は阿久IV-a期のうちと考えられるので、本址の推定年代も該期として一応とらえておきたい。

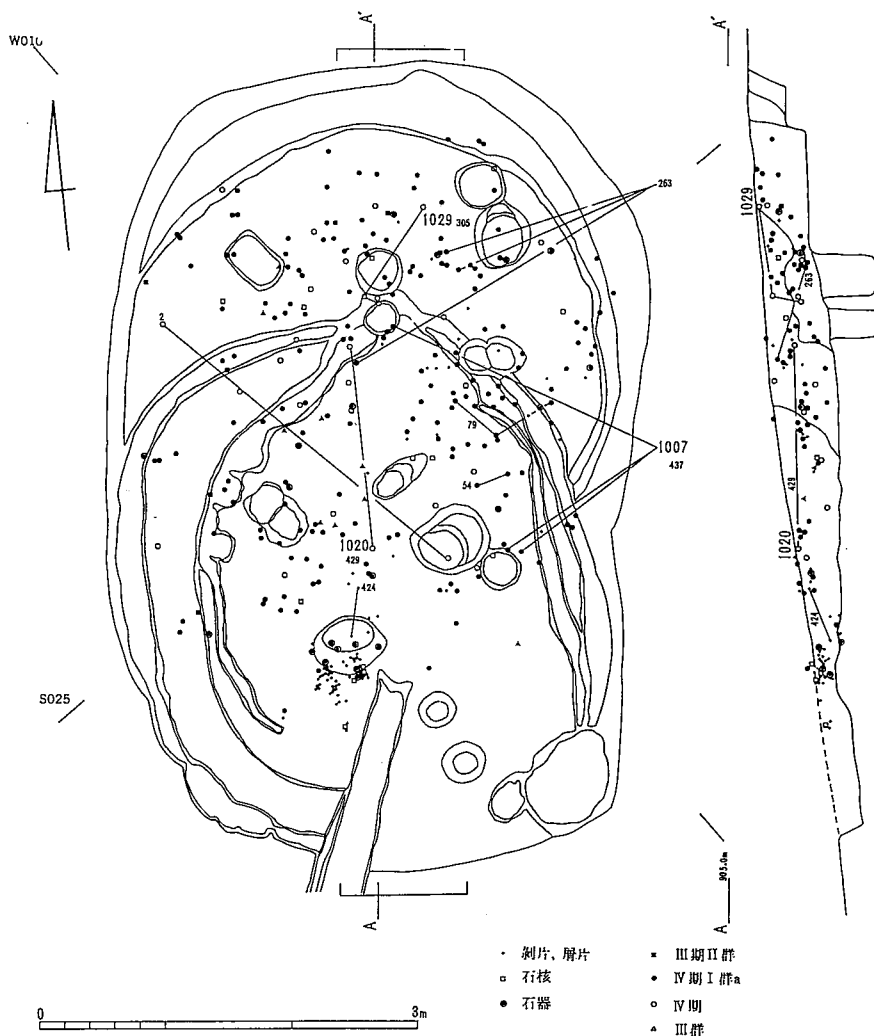
遺物の出土状態 B類型の典型で、(旧)a・b、(中)からの遺物の出土はほとんどみない。わずかに、P<sub>6</sub>の南側に接して、一群の黒曜石の石核・剝片・屑片と石鏃(956・957・960)、石匙(963~965)が一括出土したにすぎない。これより南側は埋土の削平が著しく、不明であるが、これら石器群の出土状態と位置からみ



挿図 119 住居址 5 実測図

て、(新)に属する一群の遺物とは切り離され、(旧)bのもの可能性が高い。遺物の接合は6例に認められ、すべて(新)の埋土内にあった。したがって、(新)の範囲内にまとまりある出土した遺物群は若干の混入はあるにしても、ほぼ一括資料として把握できるものと思われる。

遺物 土器と石器がある。土器はすべて破片であり、しかもその大多数は細片である。細片を除いた土器片の総数は158点あり、そのうち、混入と考えられるIII期I群土器が10片(1000~1003)あるが、他はすべてIV-a期である。後者の内訳はI aが78%で圧倒的に多く、それ以外が13%、北白川下層II a式土

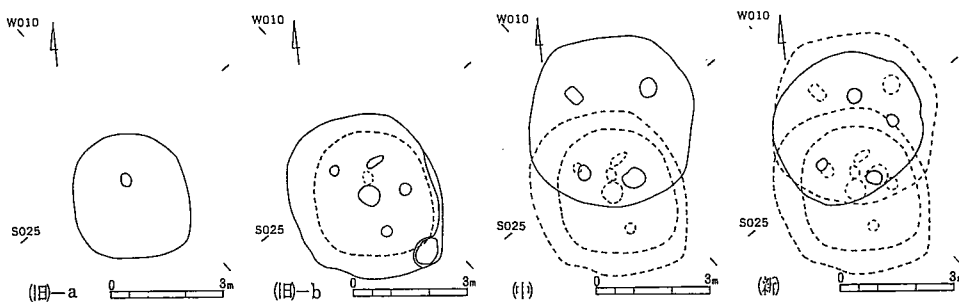


挿図 120 住居址5 遺物出土状態・土器接合関係図

器が3%、無文が7%となる。I aは単節縄文が全体の72%を占め、単節羽状縄文は3%と少ない。I aは単独または他の文様帯をもつ土器の胴部文様帯として用いられたものと思われる。I a以外では、I b(1020)、I e(1021・1026~1028・1030~1032)、I f(1022~1025・1029)と浅鉢D(1033)がある。後者は浅鉢の胴部文様帯と考えられるもので、有節平行線を2本1単位でくびれ部から2条垂下させて、縦区画帯を作り、それ以外に弧線文を配置していると思われるが、細部は不明である。1033と30を除いてはすべて深鉢であろう。

石器は石鏃7(956~961・971)、石匙3(963~965)、スクレイパー1(970)、使用痕ある剥片7(962・968~979)、乳棒状磨製石斧1、半磨製石斧1(1447)、凹石4の24点のほか、原石・石核26、剥片・屑片218点がある。石鏃はF IV bが多く、石匙はすべてB型である。半磨製石斧は本遺跡出土の唯一例であり、側縁部と剝離面稜線上は著しい磨きがみられる。

(笹沢 浩)



挿図 121 住居址5 変遷図

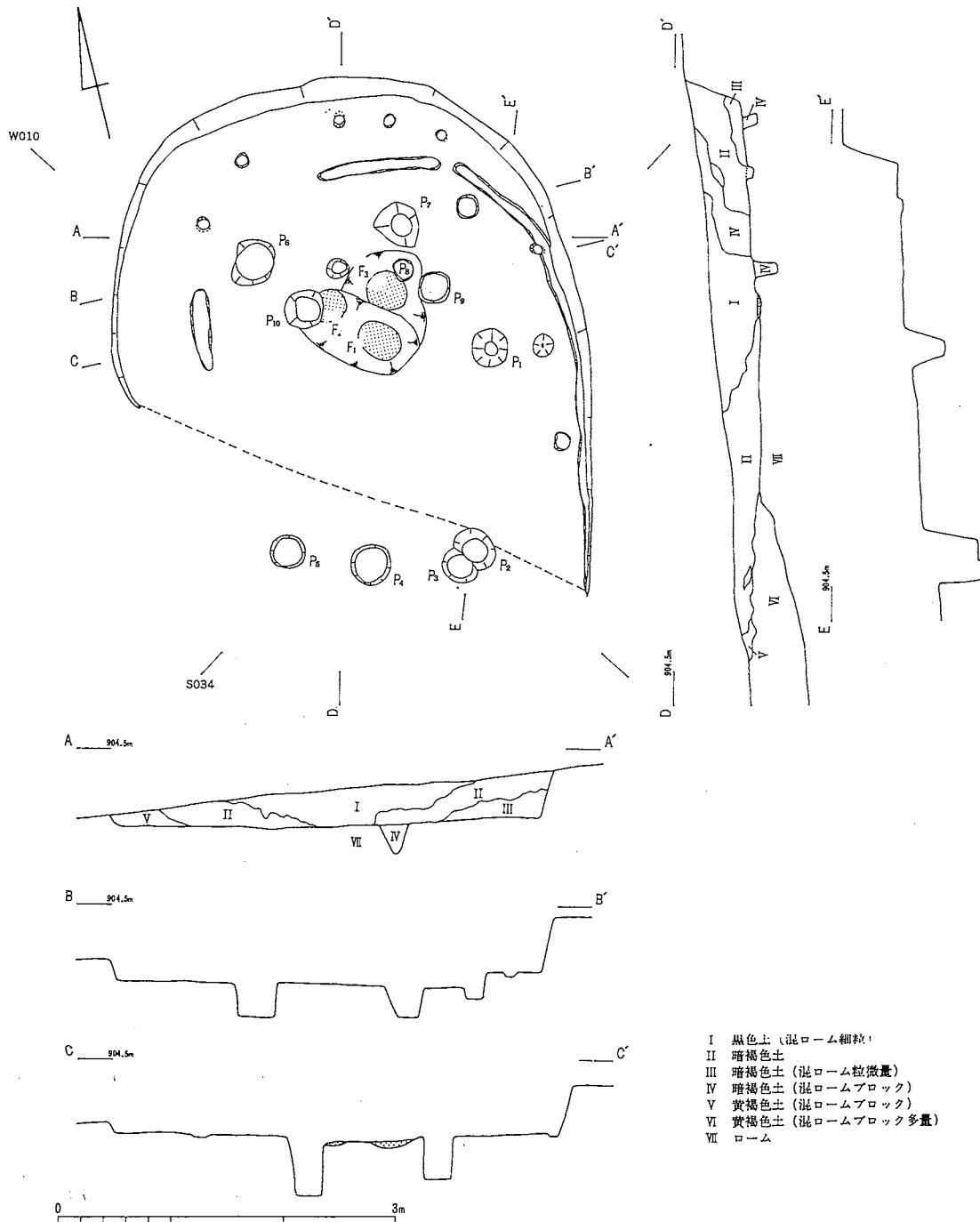


(2) 住居址 6 (挿図 122・123、図 85・138・185、図版 48・153)

遺構 尾根南斜面に検出された D 型の住居址である。EQ 54 を中心に位置し、北西側上方には、同じ IV 期に属する住居址 5 が隣接する。南西部は斜面がより大きく傾斜して落ち込んでいく部分に当たるため、壁・床面を確認できず、明確に全体のプランをとらえることはできなかった。

検出当初は、単独住居址と考え調査を進めたが、柱穴・周溝・炉などの位置、さらには遺物の出土状態及び接合関係を検討した結果、a から b へ拡張が行なわれたと判断するに至った。拡張は、床面と東壁を再利用し、北及び西側へ広げたものと思われる。主柱は 4 本とも建て替えられたが、長軸方向にはほとんど差がみられない。

住居址 a 周溝の内側部分で推定規模は 3.30×4.30 m、長軸方向は N 2°E である。主柱穴は、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>・



挿図 122 住居址 6 実測図

P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>が該当すると思われる。地床炉F<sub>1</sub>が北寄りに位置する。約15cm程掘り込まれ、焼土が7～8cm堆積していた。

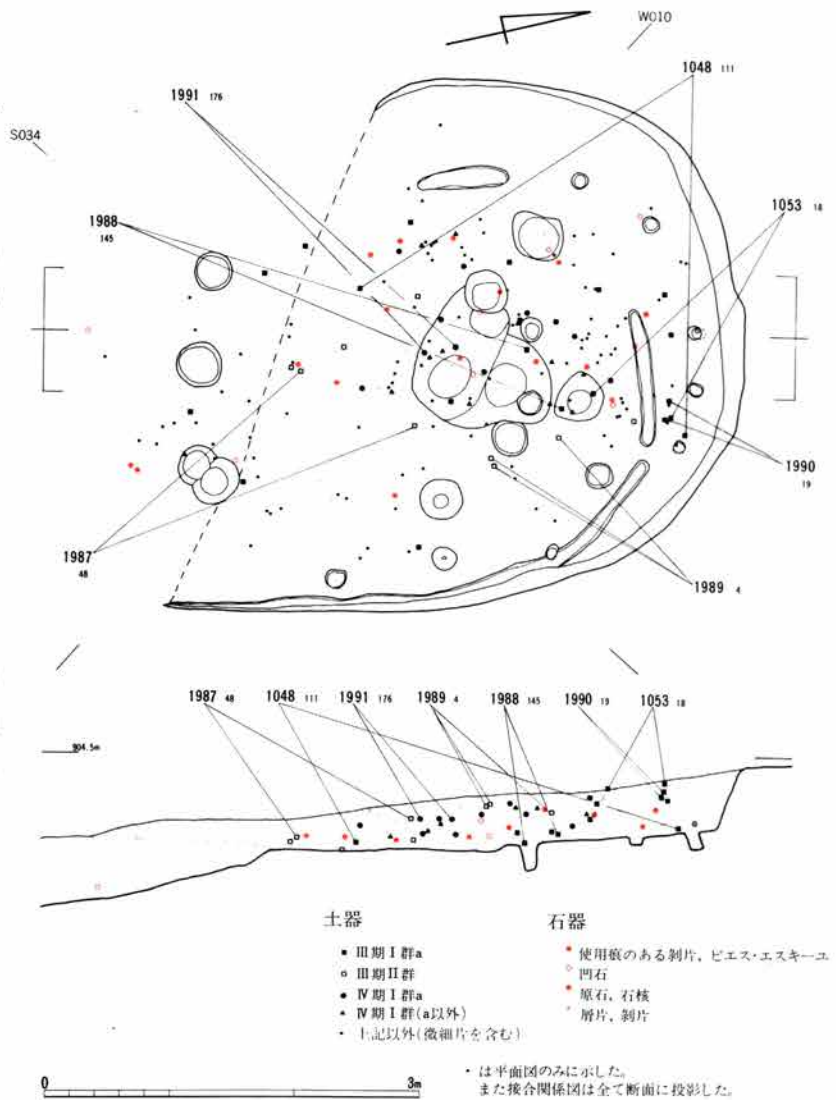
住居址b 想定されるプランは規模4.00×5.10mほどの、隅丸長方形で、長軸方向はN5°Eである。北壁と東壁、それに北・東側の床面は遺存状態が極めて良好であった。南・西側は先述した通り不明瞭ではっきりしないが、セクションD-D'に、床面と考えられる線を読みとることができる。支柱穴は、P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>～P<sub>7</sub>と考えられる。P<sub>5</sub>は、わずかに痕跡だけ確認されたに過ぎないが、当時の床面レベルに補正して考えれば、柱穴として十分な深さになる。なお、aのP<sub>4</sub>についても同様なことがいえる。また東・北壁に沿う小ピット群については、掘り込まれている穴の向きにばらつきがあって、その用途は決めかねる。地床炉(F<sub>2</sub>・F<sub>3</sub>)はaのF<sub>1</sub>同様北寄りに位置する。炉の移動を考慮したが、新旧関係はつかめなかった。

遺物 土器、石器共に同様な出土状態を示し、A<sub>3</sub>型に分類される。すなわち、水平的には壁際に遺物はほとんど出土せず、中央に向かってより濃密になる傾向がみられ、垂直的には、大部分がI層からで全体にまんべんなく分布していた。なお、北側の床面に2箇所まとまりをもった土器が出土している。住居址に直接伴う可能性がある。

遺物は204点、その約80%は土器片である。大半は小片で、細片が約30%を占める。III期I(1987・1989)21、III期II(1035～1038)10、IV期(1054～1058)21、III群(1060)1の計53点ある。残りの約50点は縄文のみの土器で、破片だけでは、III期かIV期か決めかねるものである。LRが23点であとは、RL・L・R、その他がそれぞれ10点ずつである。接合資料は6例あるが、そのうち5例は近距離の接合例で、他は北側床面出土のまとまりある土器に約2.8m離れた、中央よりやや西寄りの床面出土土器が接合したものである(1048)。

原石、剥片等を含めた石器類は42点と非常に少ない。石鏃、石匙等の小形定形石器は出土していない。ピエス・エスキーユ1、使用痕ある剥片7(978・979)の他、少ない点数の中で凹石の7点が目につく。

本址の最終的な帰属時期は、床面出土土器、それにIV期の土器の内容、つまり、IV期の中心となる単位文様iが一片もなく、またe(1055・1058)も、より古い感じの直線的である点から判断してIII期の終末か、あ

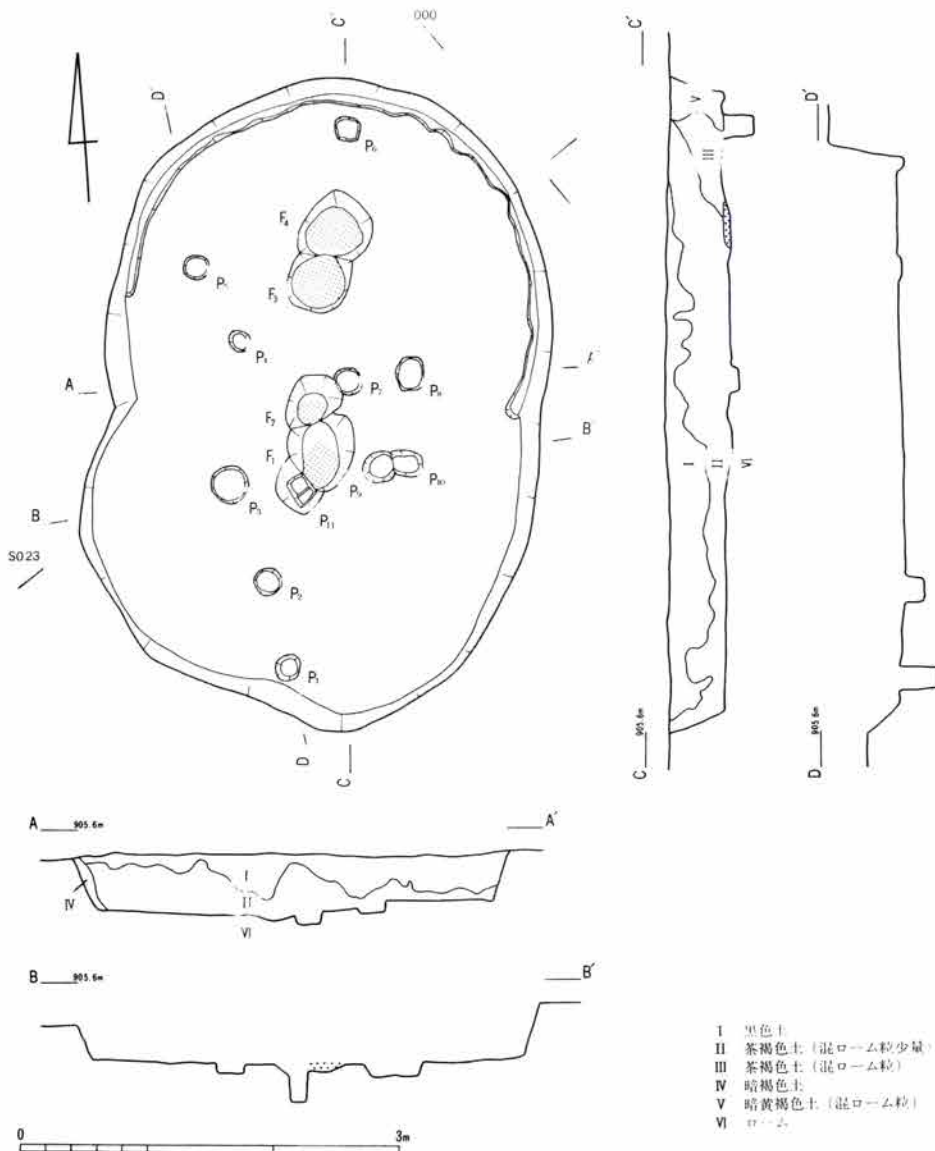


挿図123 住居址6 遺物出土状態・土器接合関係図

(3) 住居址 9 (旧)・(新)(挿図 124・125、図 86・138・227、図版 49・123・154)

遺構 住居址 5 の北西に近接して検出され、尾根の南斜面、EL 51 付近に位置する。プラン確認の時点では一棟の住居址と考えていたが、埋土を掘り下げるなかで、北側に別の住居址(新)の輪郭が明らかになり、床面の状況や土層から 2 棟の建て替えであることが判明した。遺物の出土状態および接合関係の検討でも調査時の判断と同様の結果を得た。

住居址 9 (旧) 半分以上が北側の住居址 (新) に重複している。長軸方向は N 7° E で、楕円形プランをもち、床面が住居址 (新) より数 cm 低いいため、炉などは残っていた。柱穴の位置ははっきりしないが、規模 3.70×3.30 m 程度の住居址類型 I 型であろう。住居址のかかなりの部分が切られているため、北側の壁と柱穴は精査しても明確にとらえることができなかったが床面はきわめて良好であった。P<sub>1</sub> が支柱穴として考えられるが、他のピットはいずれも極端に浅い。周溝は存在せず、地床炉 (F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>) は中央部南寄りにあり、



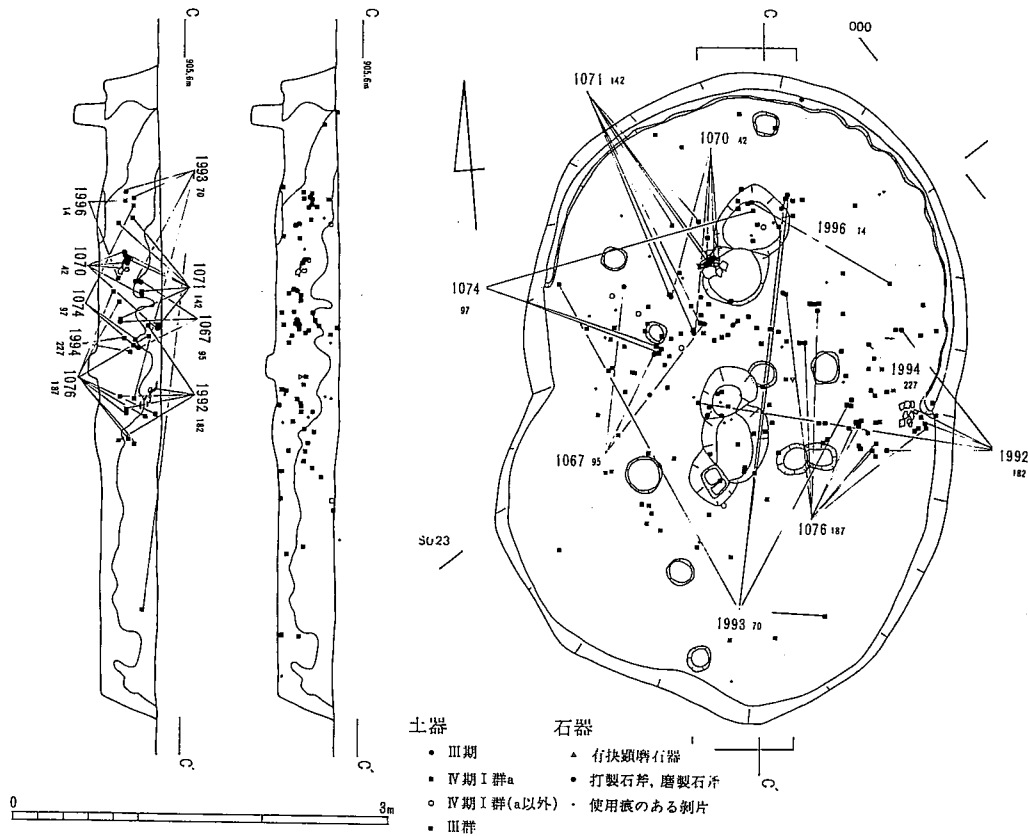
挿図 124 住居址 9 実測図

両者とも床面をわずかに掘りくぼめて検出されており、良く焼けた堅い焼土をもつ。

住居址 9 (新) 住居址 (旧) の北側に、(旧) の床面より若干高い位置に建て替えられた I 型の住居址である。規模、長軸方向など(旧) とほぼ同様に構築されている。南半の壁は旧住居址との切りあいで明らかにできなかったが、北半では急角度に立ち上がる壁をもち、浅い周溝が南側にめぐっている。床面の状態、炉 (F<sub>3</sub>・F<sub>4</sub>) の位置は(旧) に類似する。柱穴は P<sub>6</sub> が主

柱穴として考えられる以外ははっきりしない。

遺物の出土状態 遺物は住居址 (新) の埋土内に集中して出土した。特に II 層に多いが、床面上の一括土



挿図 125 住居址9 遺物出土状態・土器接合関係図

器はなく、出土状態 B<sub>4</sub> 型である。土器片は全出土量の約 50%(130 片)が接合関係をもつ(挿図 125)。ほぼ完形に復元できたもの(1992)を含め 9 例であり、いずれも住居址(新)内の接合に限られている。土器のほとんどが IV-a 期で、若干の III 期と IV-b 期があるが、IV-b 期は I 層上位出土であり、これらを除くと、住居址(新)に伴うほぼ一括資料として把握できよう。住居址(旧)の埋土からの遺物の出土はほとんど認められない。石器も土器と同様の出土状態を示すが、小形磨製石斧が住居址北壁に接して出土した。以上の結果から住居址(新)の帰属時期は IV-a 期と考えられ、住居址(旧)は時期を決定する資料がなく不明である。

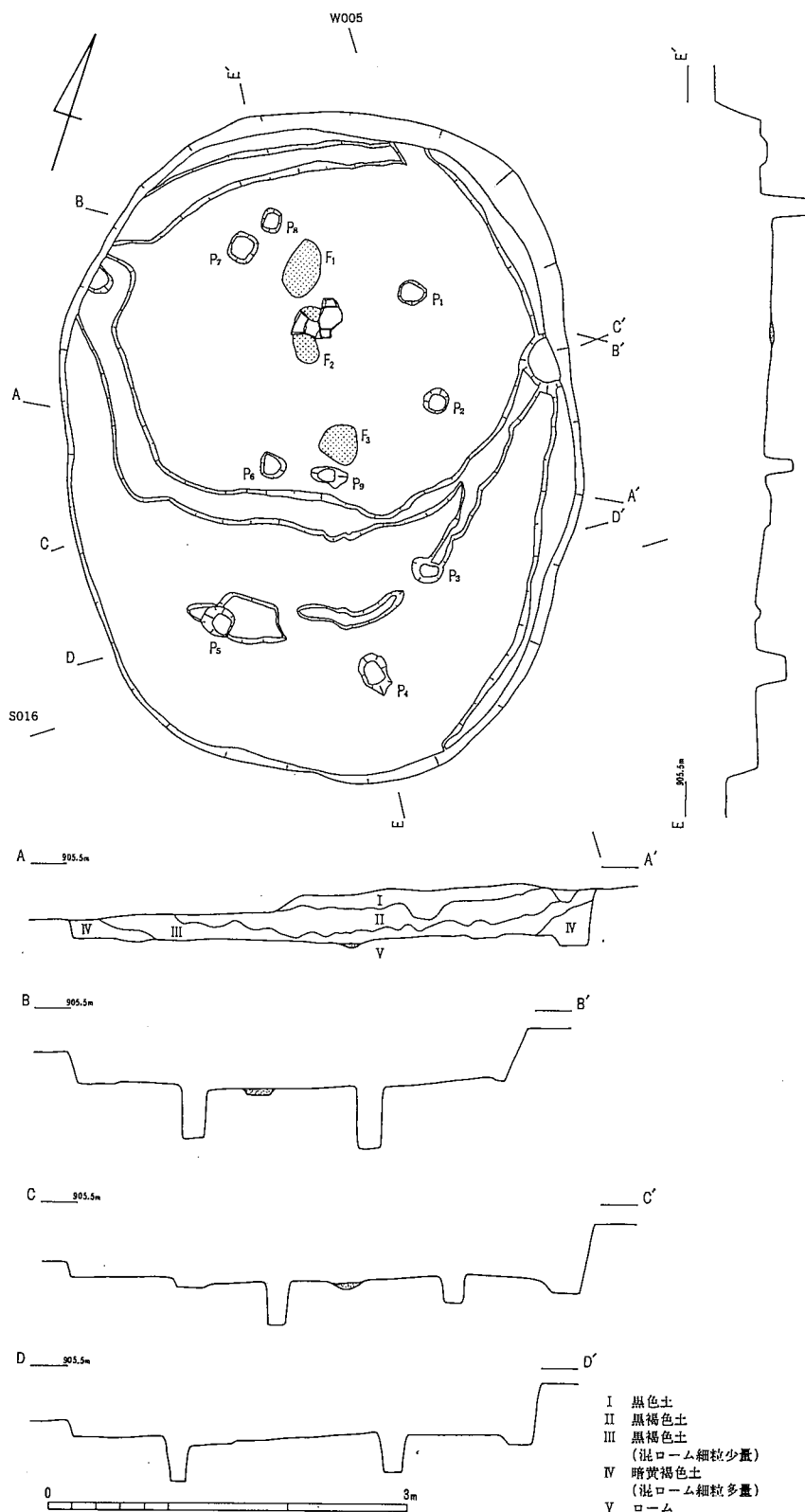
遺物 土器は III 期(1061・1066)、IV-b 期(1063・1069)のそれぞれ数片の細片以外は、IV-a 期である。縄文のみを全面に施す単位文様 a が大半であり、器形は深鉢 A(1071・1992)、B(1074・1075・1993)の 2 つがある。また、内面の整形技法などに III 期の特徴を残す例も多く、ごく微量の繊維が不均一に含まれているものもある(1062・1067・1070)。内面整形では棒または篋を横方向に用いたもの(1076)もある。なお、単位文様 e(1068)は、住居址 6 出土の土器(1056)と接合した。石器は石鏃 1、磨製石斧 2(1479)、打製石斧 1、有袂頭磨石器 1、ピエス・エスキーユ 1、凹石 2 の総計 8 点と少なく、小形品が目立つ。(百瀬 新治)

(4) 住居址 11(挿図 126・127、図 87・184、図版 50・154)

遺構 DH 53 を中心に検出された E 型の住居址である。遺構の配置および遺物の出土状態から、北から南へ、b・c への 2 回の拡張が考えられる。a は長軸方向が N 56°W で、ほぼ全周する周溝から、3.60×3.20 m の規模が想定でき、地床炉 F<sub>1</sub> と支柱穴 P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub> が伴う遺構であろう。b は長軸方向が N 11°E で、4.60×3.90 m の規模をもち、地床炉 F<sub>2</sub> を当てたいが支柱穴は不明である。a の支柱穴を再利用したとも考えられる。c は a と b の北壁をほぼ用い、南側のみ大きく拡張させたプランで、長軸方向は N 24°W、5.60×

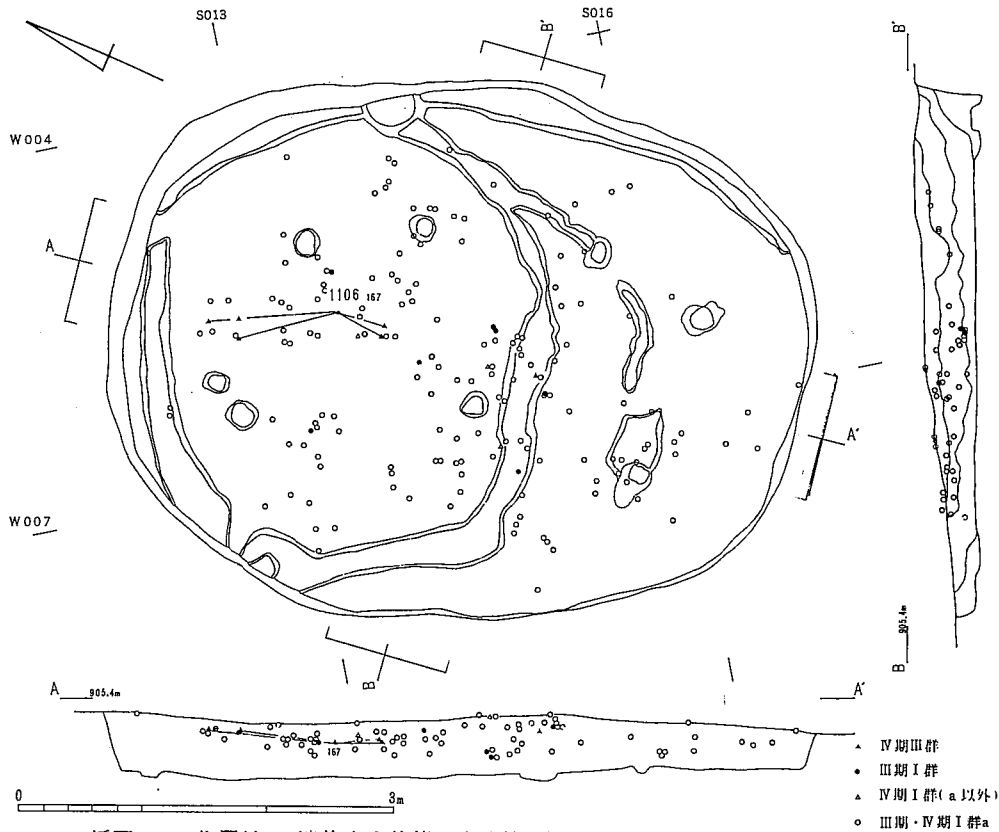
4.30 mの規模をもつ。地床炉 F<sub>3</sub>と支柱穴 P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>7</sub>がcのものである。支柱穴の配列は台形状で、aを除いて地床炉は、柱穴を結ぶ交点上にある。ピットは、他にP<sub>4</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>があるが、支柱穴であろうか。壁・床等の遺存状態は良好で、またa~cの床面レベルは同一である。なお、aの周溝幅は30 cmと広い。

遺物 土器と石器があり、細片も含めて総数 244 点と量は少ない。その出土状態は B<sub>3</sub>型である。遺物の平面的広がり住居址全面にわたる所から拡張順序の根拠とした。



挿図 126 住居址 11 実測図

土器はIV-a期のも  
のが主体である。III期  
II a(1078・1079)が5片  
のみあったが、IV期 Ia  
としたものの中にIII期  
Iaが混入している可  
能性もあろう。無繊維  
の縄文をもつ例は、細  
片を除いて総数 74 点  
あり、その内訳はLR  
が 20(1089~1090、  
1095)、RLが 21(1091~  
1092)とほぼ同数で、両  
者の占める割合は  
55%を占める。単節羽  
状縄文 14(1093・1094・  
1096・1087)で 18%、L  
が 2 (1084)、Rが  
10(1082・1083)、L+R  
が 6 (1080・1081・1085~  
1087)、RL+Lが 1で、  
無節縄文の占める割合  
は 20%余となり非常  
に少ない。内面調整は  
いずれもオサエまたは  
ケヅリであるが、篋ナ  
デ、あるいは篋ミガキ  
も少量ある。単節縄文  
には撚りの小さい原体  
を用いた細縄文(1094・  
1097)も少量みられる。  
IV期の Ia 以外は 4 点  
あり、If (1098)、Ie  
(1100) Ii(1101)がある。  
III群土器は I<sub>1</sub> (1106)、



挿図 127 住居址 11 遺物出土状態・土器接合関係図

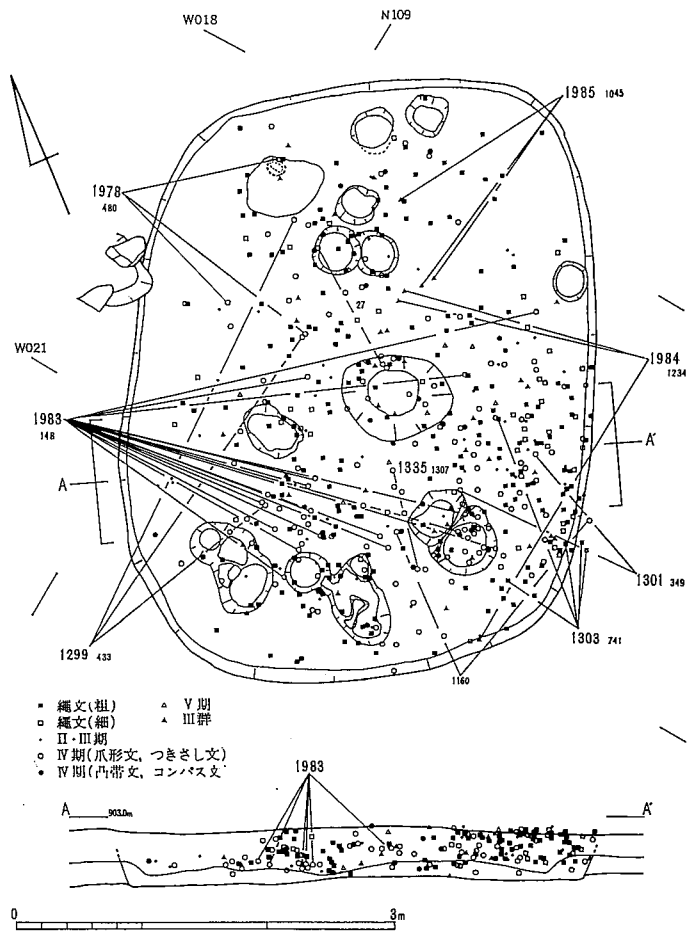
I<sub>2</sub>(1102・1103)、J(1104・1105)がある。

条痕はいずれも浅く擦痕状である。

石器は石匙 1 (976)、スクレイパー 2 (972・974)、石錐 1 (975)、使用痕ある剝片 2 (973・977)、凹石 1 の計 7 点と石核・剝片がある。

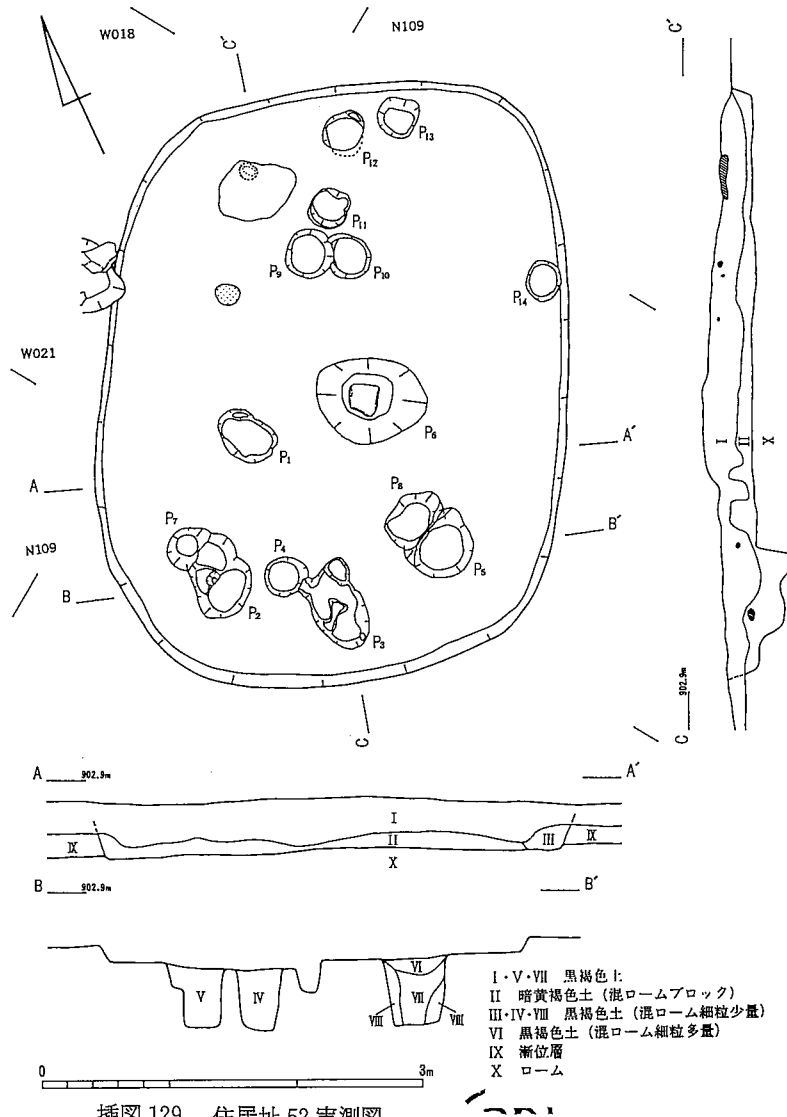
(5) 住居址 52(挿図 128・129、図 93~95・137・187・233・238、図版 50・122・158~160)

遺構 住居址 53 の西に接し、BV 60 付近に検出された I 型の住居址である。壁の大部分が黒褐色土層から切りこんで構築されていたことと、壁の状態が不良のために、プラン検出は困難であった。ピットは 13 箇所認められたが、規模・配置と P<sub>5</sub>・P<sub>8</sub> の切りあい関係から少なくとも 1 回の拡張が知られる。すなわち、b は P<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>12</sub> を支柱穴とするが規模は不明、a は P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>11</sub> の三本柱の支柱穴からなる 460×3.55 m 程度の住居址が推



挿図 128 住居址 52 土器出土状態・接合関係図





挿図 129 住居址 52 実測図

定できる。他のピット群の性格については不明である。床は中央西側の一部分を除いては軟弱であった。炉と思われる痕跡は特に認められず、P<sub>9</sub>の西寄りに焼けた部分と焼土の堆積が2cmほど認められたが、その位置から炉といえるかどうか判断しかねる。住居址中央部に90×70cm、深さ56cmの大形ピットがあり、その埋土中に角のある平石が検出されたが、どのような性格なものか不明である。また、北西隅近くに塊状の大石が平面より20cmほど浮いて出土したが、本住居址に関係するものではないであろう。なお、西壁に接して立石をもつ土壌773が壁を一部切って検出された。

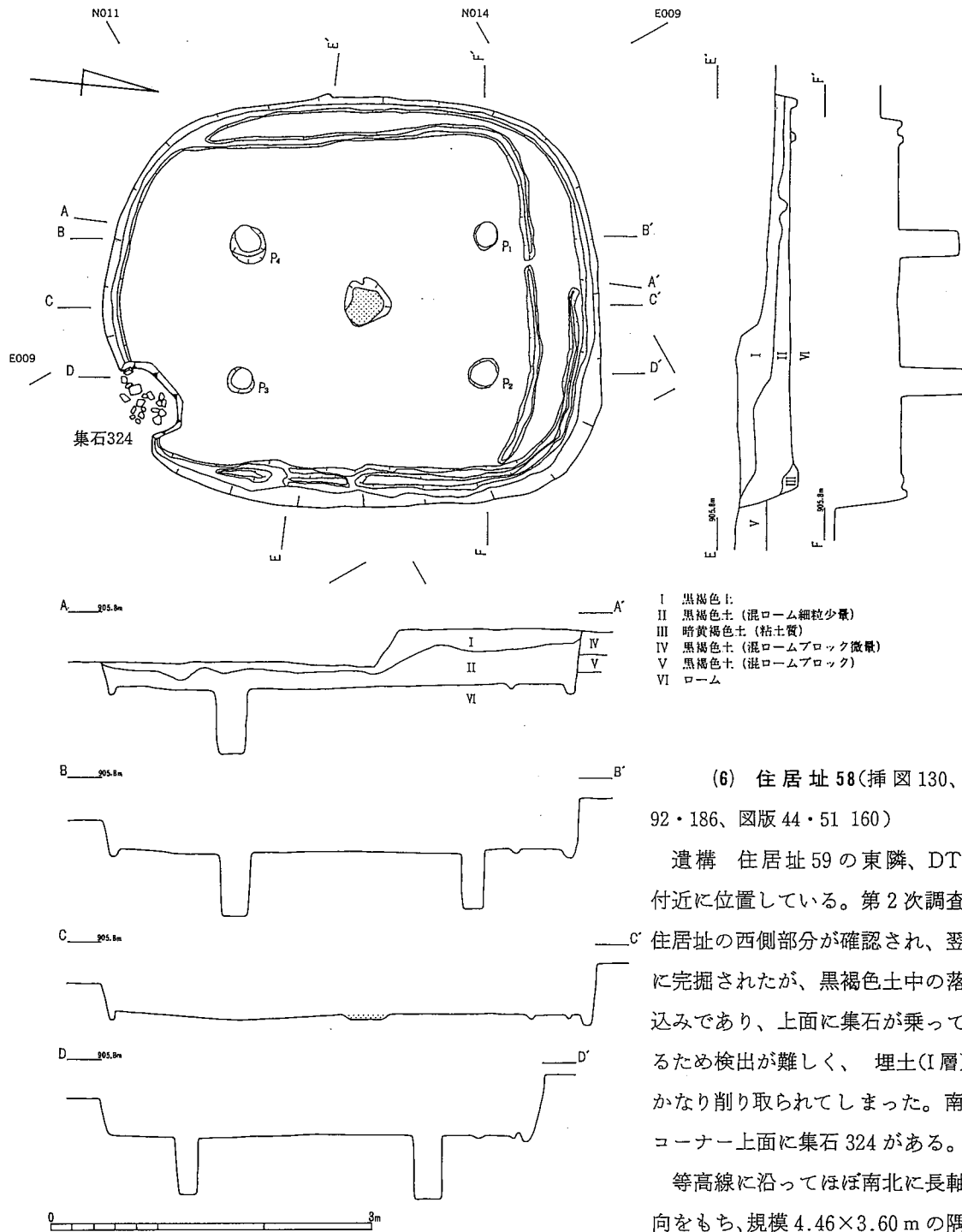
遺物 土器と石器であり、出土状態はB<sub>4</sub>型である。10個体に接合関係がみられるが、いずれもIV-a期であり、住居址内埋土の中でかなりの広がりをも

つもの(1299・1983・1984)がある。総的に遺物は住居址の西壁ぎわは稀薄であり、南壁寄りから東壁南寄りの地域に集中する傾向にある。しかもそれらはI層上部から下部にかけて集中的に包含されていた。

土器は総数376片のうちIV期以外は13%で、V期5片のうち1片を除いてはI層で出土した。IV期IaはIV期中で70%と主体を占める。そのうちRLが60%(1269・1272~1283・1288~1291・1293~1295・1297・1298・1980)、LRが25%(1268・1270・2271・1284~1286・1979)あり、他の縄文(1267・1292・1296・1981)は極端に少ない。また、単節羽状縄文(1287)の比率も少なく、Iaの主体はRLとLRといえる。深鉢Aの口唇部には刻目のあるもの(1268~1281)が多いが、その中には指頭による例もみられる(1272~1277)。また、凸帯を設け刻目をつけたもの(1981)もある。これら口唇部の加飾はIb(1326~1328・1333・1334・1335)、Ie(1300~1304・1306・1307・1313・1983)などと共通し、IV-a期の土器の大きな特徴といえよう。III群土器はE<sub>2</sub>8点(1359・1360・1362~1365)、I<sub>2</sub>17点(1357・1358・1361・1984)、F<sub>2</sub>(1985)、K<sub>2</sub>(1355)がある。K<sub>2</sub>は綾杉状文(1355)と半截竹管による平行沈線で鋸歯文と直線文を交互に描いたものである。III群土器の占める率は8%である。

石器は石鏃9(1022~1027)、石匙4(1028~1030)、スクレイパー6、石錐4(1031~1034)、ピエス・エスキーユ2、使用痕のある刮片12、磨製石斧片1、凹石7(1656~1659)、石皿1(1559)の計46点である。

本住居址出土の遺物は、混入らしきII期の土器を除いては接合関係、包含状態からほぼ一括遺物と考えられ、IV-a期の標式的資料となりうる。(笹沢 浩)



挿図 130 住居址 58 実測図

柱穴を配し、住居址類型 D に属する。壁に沿って深さ 5 cm 程度の周溝がめぐると、東壁・南壁には 2 本、北壁の一部には 3 本の溝が検出され、少なくとも 1 回以上の拡張がおこなわれた可能性を示している。しかし、柱穴の移動等の痕跡は床面を精査しても確認できなかった。西壁がかなり削られているが、壁高 60 cm 前後で、垂直に近く立ち上がる壁面をもつ。床面は非常に堅くしまっていて良好であり、南側に向かってわずかな傾斜をみせる。支柱穴は P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> で P<sub>4</sub> のみが深さ 70 cm と他の支柱穴より約 20 cm 深い。住居址中央部に床面を円形に約 5 cm 掘り窪めて地床炉が築かれていた。

遺物の出土状態 上層と床面に接する遺物以外は 50 cm を一辺とする方眼に区切り、2 層に分けて遺物を取り上げる方法によった。出土遺物はやや少なく、住居址全面にほぼ均一に散在する (B<sub>1</sub> 型)。一括遺物は

(6) 住居址 58 (挿図 130、図 92・186、図版 44・51 160)

遺構 住居址 59 の東隣、DT 45 付近に位置している。第 2 次調査で住居址の西側部分が確認され、翌年に完掘されたが、黒褐色土中の落ち込みであり、上面に集石が乗っているため検出が難しく、埋土 (I 層) がかなり削り取られてしまった。南東コーナー上面に集石 324 がある。

等高線に沿ってほぼ南北に長軸方向をもち、規模 4.46×3.60 m の隅丸長方形のプランに長方形に 4 箇所の



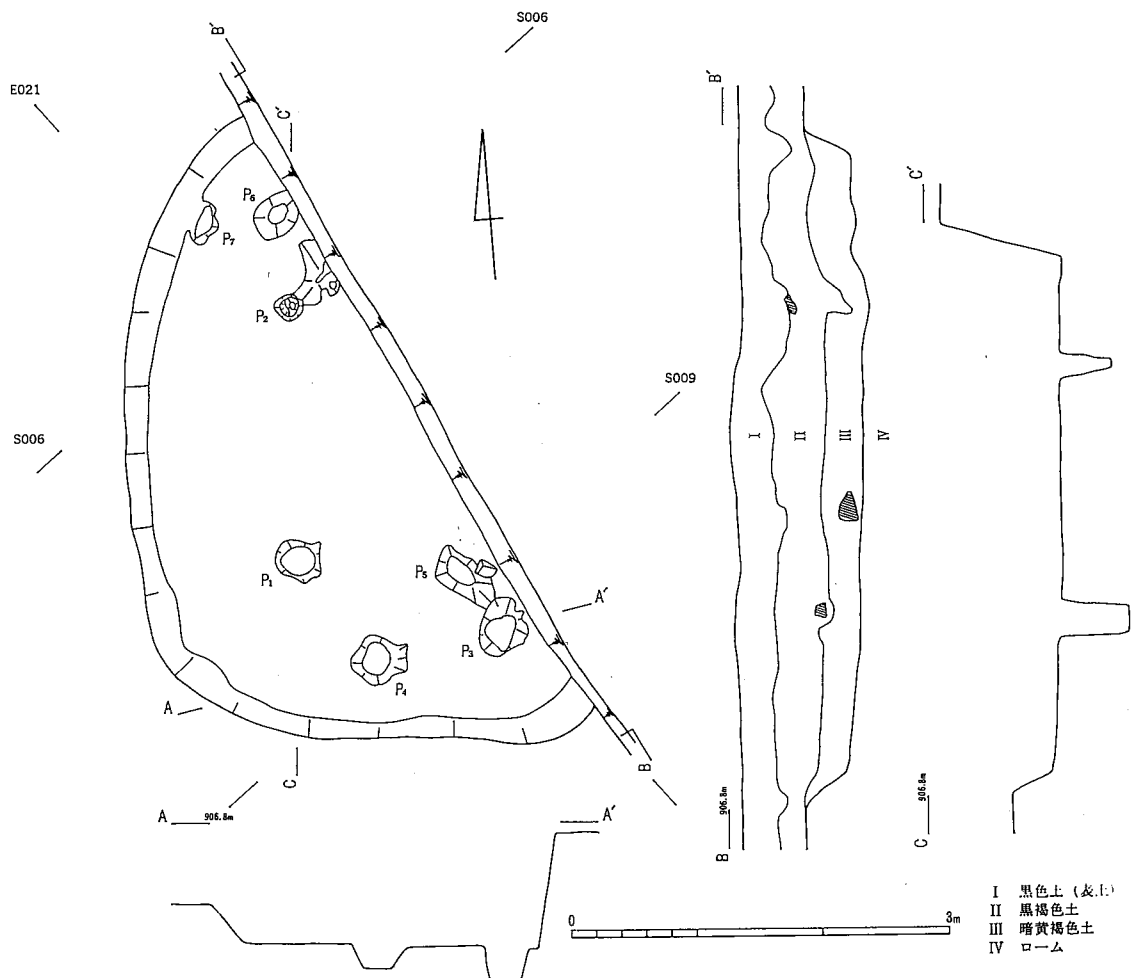
なく、土器片は細片が圧倒的に多い。IV期と、数は少ないがII期の土器片が混在して出土している。床面からはIV期がほとんどである。石器も出土数が少ないが、南壁下中央床面と北西隅床面にそれぞれ約 20 点の石核・剥片などの集中する箇所がみられた。

遺物 土器は大半が小破片で約 120 片を数える。IV期はすべて I 群土器で、その過半数は a(1261~1265)であり、口唇部に刻目を施す土器(1263・1265)が目立つ。単位文様 e(1251・1254~1256)、f(1249・1250・1253)、i(1258~1260)の深鉢が比較的多く、浅鉢は単位文様 i(1266)がある。II・III期も I 群土器を中心に 10 片ほど出土している。石器は石鏃(1017)、石匙(1018)、スクレイパー(1019)が各 1 点と使用痕ある剥片(1020・1021)が 8 点、凹石 4 点、石皿 1 点(1539)の計 16 点が出土した。 (小松原 義人・百瀬 新治)

(7) 住居址 75(挿図 131、図 96・97・141・187、図版 44・51・155)

遺構 ED 39 を中心として検出されたが、用地外へかかるため、北西から南東隅の住居址西半分を調査できたにとどまり、調査範囲内では建て替えや他遺構との切りあいは認められなかった。平面形は南北方向にやや長く、約 5.00×4.00 m の隅丸方形と考えられる。床は堅くしまっており、深さ約 40 cm を測る。壁は 60° くらいの角度で立ち上がり、壁高は約 30 cm である。周溝は認められなかった。支柱穴は 4 個と思われるが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub> のみの検出にとどまった。他のピットは柱穴とはならないであろう。炉は検出されず、用地外に存在するらしい。未調査地域を残すが、本住居址は D 型となる。

遺物 出土状態は B<sub>1</sub> 型で、特に集中する箇所は認められなかった。土器と石器があり、遺物総数は 254 点と少ない。土器片は 197 点あり、うち細片が 160 点と大半を占める。これらのうち II 期 II b 2、III 期 II



挿図 131 住居址 75 実測図

群3、V期1点は混入であろうが、他はIV期に属すると思われる。IV期ではIII群E<sub>2</sub>の北白川下層II a式3(1404~1406)と形式不明の2点を除けば、すべてI群(1391~1403・2017・2018)である。1404はおそらく先端を二又状にした半截竹管工具で施文しているであろう。

石器は破損した石鏃1(1037)、スクレイパー2(1035・1036)、ピエス・エスキーユ1(1038)、使用痕ある剥片3(1039・1040)の計7点で、他に黒曜石の剥片30、石核15、原石5点が出土したのみである。

(和田 博秋)

(8) 住居址79(挿図132、図97・141・187、図版52・161)

遺構 III期に属する住居址76の南西に隣接したCY38を中心に検出された。保存のために上層の集石群をさけたので、幅50cmのサブトレンチを設けて調査を進めた結果、本住居址の所在を確認した。しかし範囲が限定されたために、住居址の全構造を知ることはできず、東壁と北壁の床面、柱穴の一部を確認したにとどまった。床面は凹凸が著しく、しかも全体に軟弱である。壁は最大壁高33cmあるが、全体にしまりがない。住居址の東南部分にはルーム・マウンドに切られ、床面もその影響を受け窪んでいる。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>の3個があるが柱穴と考えてよいだろう。炉は検出されなかった。

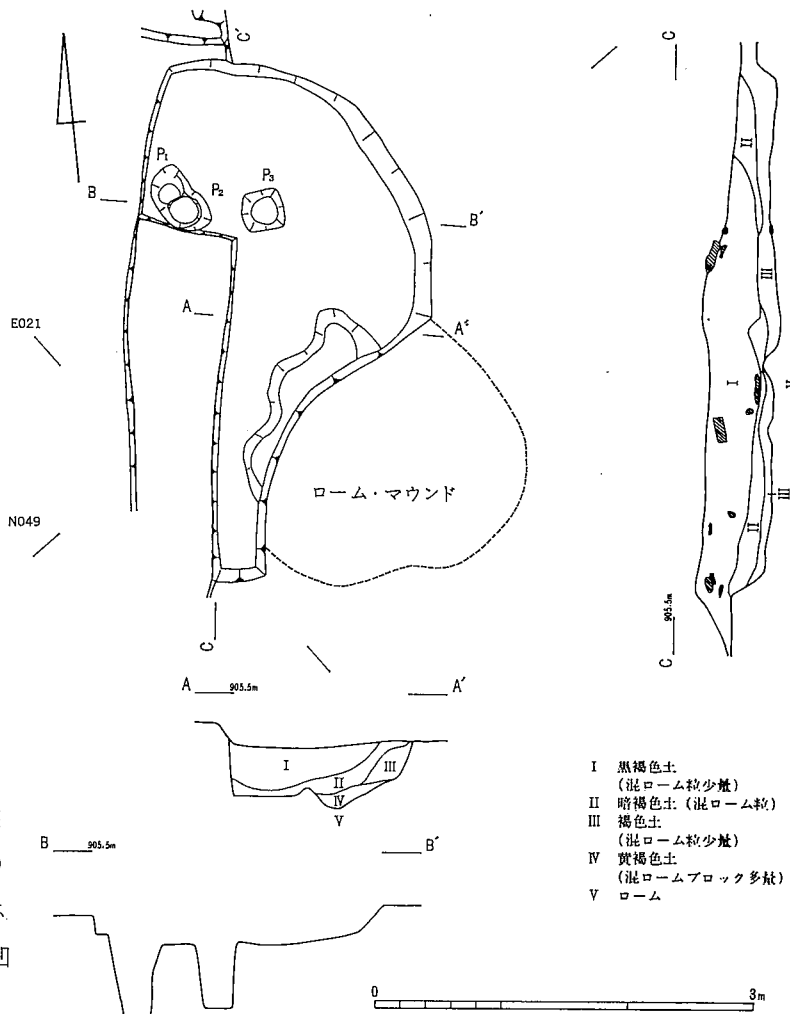
遺物 床面での一括遺物と埋土中での遺物のまともはみられず、全域にわたって出土した(B<sub>3</sub>型)が大部分はI層からであった。土器はIII期とIV期が混在しており、上層の集石との関係からみても、出土状態が注目される場所であるが、

限定された調査区内ではその性格を読み取るところまでは至らなかった。

遺物総数は約340点で、そのほとんどは土器である。すべて破片でしかも細・微片がその半数を占める。III期II群16(1407~1410)、III期I群13(1411~1413・1417)、IV期28(1414~1416・1418~1436)、III群7(1437)点ずつである。残りの約100点は縄文のみの破片でその帰属時期は決定しかなかった。縄文をもつ土器は、RLが約2/3で、残りはLRとわずかのL、R等である。

剥片、原石等も含めた石器類は約30点である。石器は、石鏃3(1041~1043)、石匙2(1044)スクレイパー2、ピエス・エスキーユ2、使用痕ある剥片5、凹石4の計18点で少ない。

本址の帰属時期は、完掘していないが一応IV期としたい。(岩崎 孝治)



挿図132 住居址79実測図

2) 阿久IV-b期

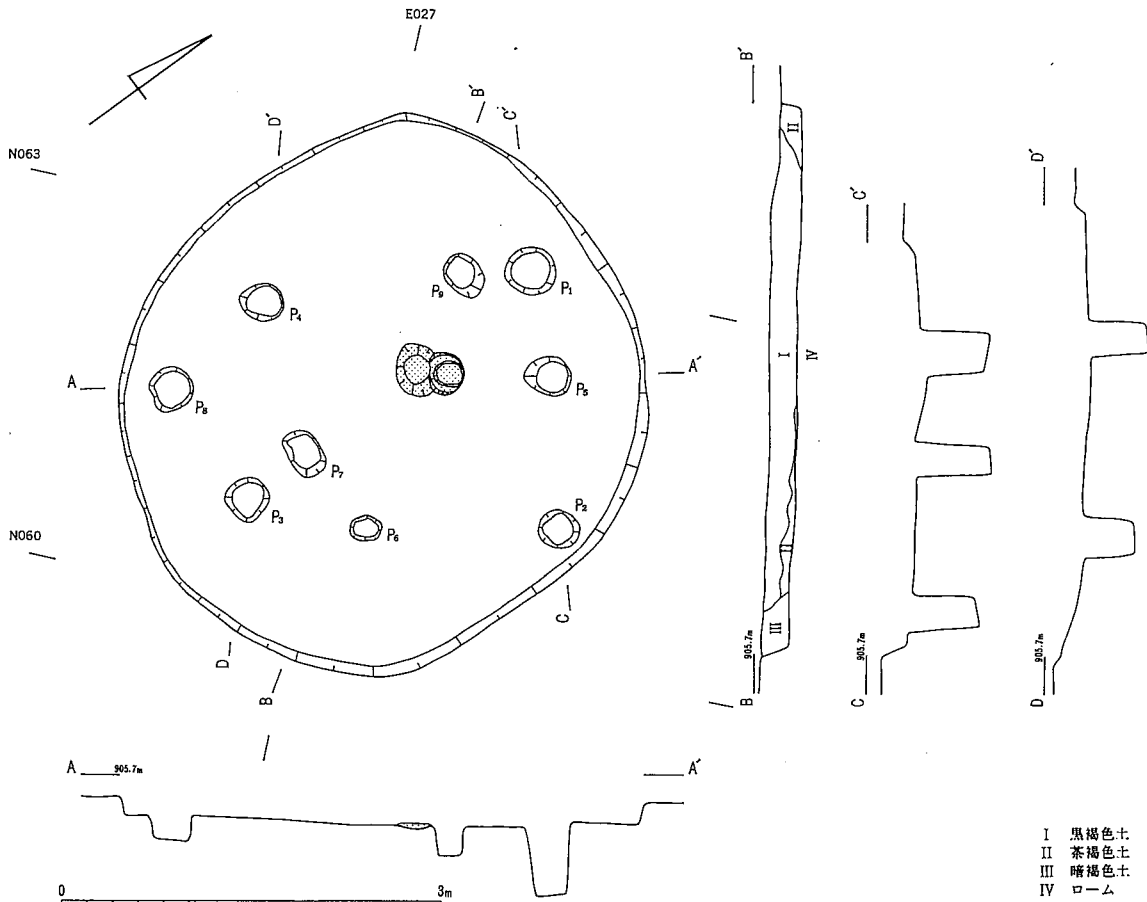
(1) 住居址 34(挿図 133、図 88・141・232、図版 52・155)

遺構 尾根北側のなだらかに北に傾斜が始まる肩部分、CT 36 付近に検出された I 型の住居址である。少し離れた西側に住居址 72 がある。

ローム漸移層中に検出されたもので、ロームへの掘り込みは浅く、壁は全体に軟弱で、立ち上がりのはっきりしない部分もある。最大壁高は 24 cm であるが平均 15 cm 前後である。床面は小さな凹凸が広がり、良好とはいえない。床面には 9 個のピットがあり、 $P_6 \cdot P_8$  を除き柱穴と考えられる規模をもつ。これらから住居址の重複の可能性もあるが、床面の状態、遺物の出土状態、土層観察等からはその根拠は何ら見い出せなかった。したがって、支柱穴として  $P_1 \sim P_4$  をあて、他を補助的な柱と考えたい。規模は  $4.06 \times 4.30$  m、長軸方向は  $N 37^\circ E$  である。地床炉はやや北寄りに位置し、焼土が 3~4 cm 堆積していた。なお、炉の北東部分の焼土の下に深さ 23 cm のピットがみられたが、性格は不明である。

遺物 壁際は無遺物層の茶褐色土があり、遺物はその上の黒褐色土である I 層全域に出土した(出土状態  $B_2$  型)。接合資料は数例あるが、近接した土器片の接合程度であった。

土器と石器で約 400 点と比較的少ない。土器は大半が縄文の小片で、器形をうかがえるものはなかった。III・IV期があるが、III期II群(1107~1110)はすべて上層からの出土である。1111~1122 はIII期 I 群の特徴である指圧痕・金雲母がみられるが、器形がわからないので断定はさけない。なお、これらの分布は I 層全体に及んでいる。IV期は a、e(1123)、f(1124・1125)、k(1126)があるが量は多くない。底部(2012~2015)は、



挿図 133 住居址 34 実測図

内面の丁寧な調整からみてIV期と考えてよいだろう。2013は一部表面が剝脱しているが、その下にも同じ原体によるものと思われる縄文がみられる。

石器は、石鏃1、ピエス・エスキーユ1、使用痕ある剝片3、磨製石斧2、打製石斧1、凹石6、石皿3(1554)の計17点と滑石片1と原石、剝片類12点があるのみである。(岩崎 孝治)

(2) 住居址45(挿図134・135、図90~92・139~141・185・186・233・240・241、図版53・123・124・156・157)

遺構 尾根の背の部分にあたるDQ33を中心に検出され、住居址61が西側に隣接する。調査時には3棟の重複と考えたが、住居址の長軸方向、床面、柱穴の規模と配置、遺物の出土状態等から、重複と建て替えが各1回行なわれたものと判断した。しかし、ここでは(旧)・(中)・(新)として扱った。

住居址45(旧) 住居址の大部分は(中)を構築する際に破壊されており、南側に残る壁・床面と、支柱穴が残存していたにすぎない。壁・床面は共に軟弱で凹凸が著しい。支柱穴は $P_1$ ・ $P_2$ (あるいは $P_{12}$ )・ $P_3$ ・ $P_4$ が考えられ、おそらく住居址類型Eに属すると思われる。

住居址45(中) (旧)より70cmほど北にずらし、規模をほとんど変えずに建て替えたものである(規模5.34×4.92m)。(新)が住居址中央部を10cmほど掘り下げて作られており、従って、壁とその周辺の床面部のみが残されていた。この床面残存部はローム層中に作られているものの、軟弱で凹凸が激しい。壁も立ち上がり不明確で軟弱である。東壁側には周溝が見られるが、掘り込みは明確ではない。支柱穴は北側では(旧)と同様の $P_1$ ・ $P_4$ が、南側は $P_2$ あるいは $P_{12}$ と、 $P_3$ あるいは $P_{17}$ の内のそれぞれ1個が考えられる。また北壁より60cmほど入った所に、床面が一段さがった部分があるが、他では見られず建て替えがあった可能性は少ない。

住居址45(新) ほぼ円形のプランで、長軸方向と構造上に共通部分がなく、重複と判断した。南側では床面が高くなり、(中)の床面とレベル差がみられず、壁の全体は未検出であったが、北壁が10cmほど残されていた。床は小さな凹凸があるが、ほぼ良好であった。また、北壁内側に住居址の壁状の段が認められるが、その部分のみ底面が低くなっているに過ぎず、壁とは考えにくい。 $P_6$ ・ $P_{11}$ ・ $P_{13}$ ・ $P_{18}$ が位置から支柱穴と考えられ、従って住居址類型Eとなり、規模は4.00×3.96m程度となる。炉は $F_2$ であろうが他にも2箇所床面が焼けていた。最も南寄りにある $P_5$ は住居址の付属施設と考えたが、遺物の出土状態などを見ると土塋とすることもできる。

遺物の出土状態 平面観察では(新)部分に多く、特に南側の $P_5$ 付近に集中していた。断面観察では土器片は全面より出土しているが、壁より少なく、床面から20cmほどに上がったI層とII層の境に集中している。接合資料で見るとさらに顕著で、ほぼ床面より上の20~40cm内におさまり、床面付近にはほとんどない。しかし、石器・剝片等を見ると、それほど集中する傾向は示していない。

遺物 IV期の最も良好な資料を出土した住居址である。約2,500点あり、そのうち、土器片が約2,000点でほとんどがIV期である。図化できた土器は、住居址内のかなり広範囲の中で接合したものである。浅鉢と深鉢がある。深鉢は平口縁のB(1997・1998)、D(2000~2003)、波状口縁のE(2004)があるが、平口縁が多い。単位文様別では、f(1198~1215・2001)、h(1188~1197・2003・2004)が圧倒的に多く、a(1176~1180・1997・1998)、e(1181~1187・1999・2000・2002)は少ない。そのほか、b(1219~1221)、c(1218)、d(1216)なども少量ある。文様は、1997のように、胴下部はケズリだけのものもあるが、他は全面に施されていたと思われる。単位文様b・cは小形の土器に多いようであり、一方fは大形に多い。dはfとセットで使われており、fで口縁直下に横位の隆帯が付く場合は内湾する傾向が強い。口縁部の断面形には、口唇部が平坦か尖るかの二つがあるが前者が一般的である。

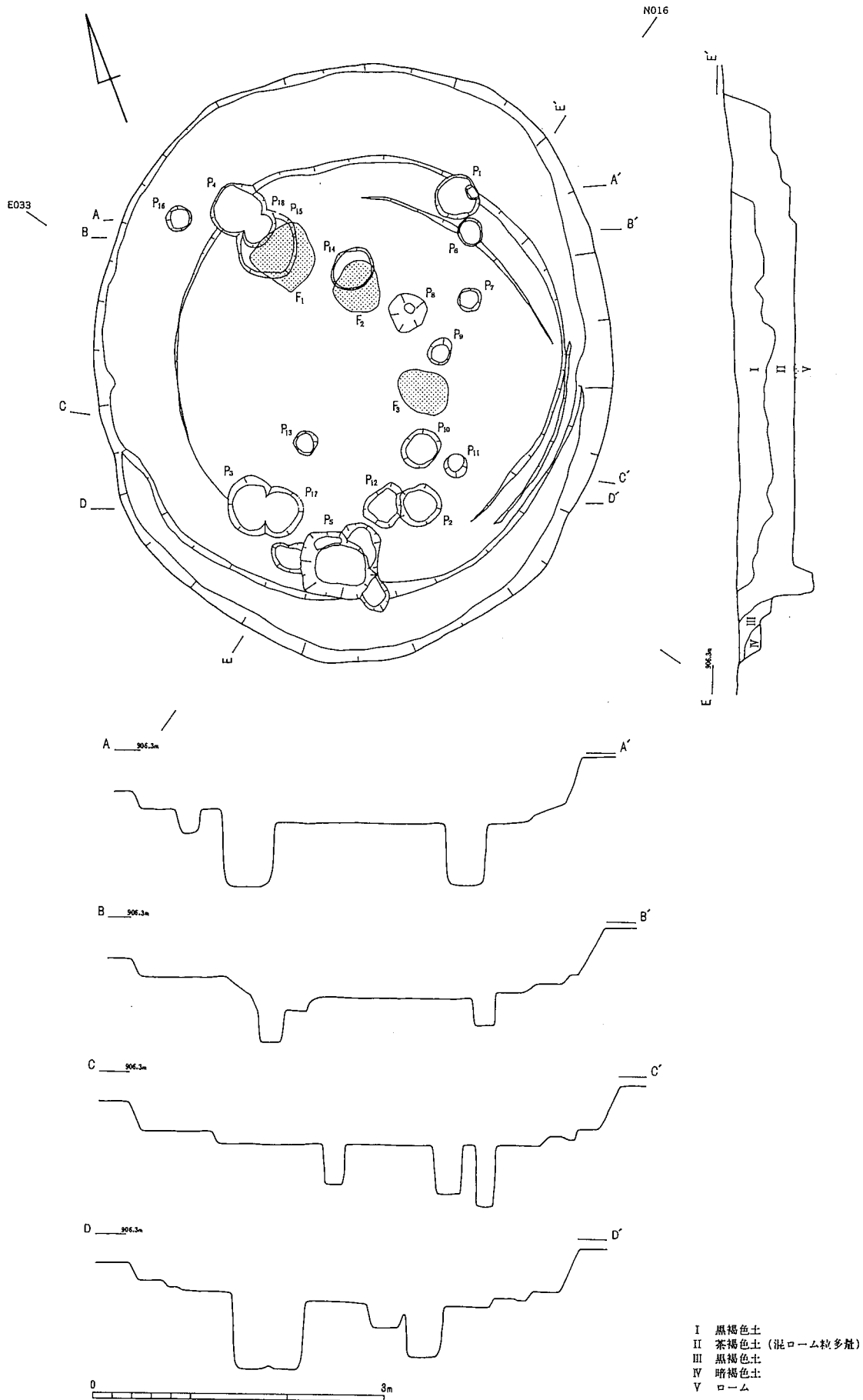
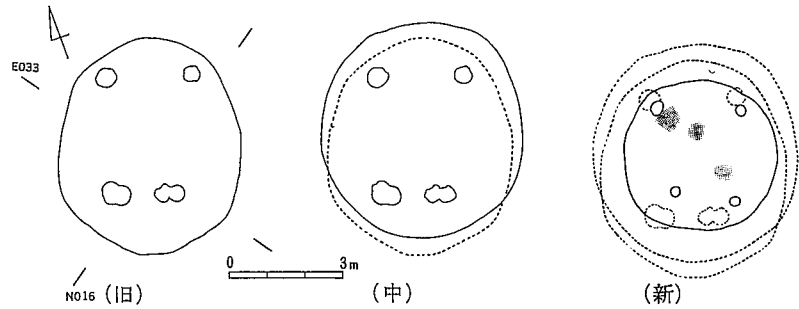


插图 134 住居址 45 実测图

浅鉢はB(2009・2010)とC(2011)の器形が判明できた。単位文様はfの1229を除くと他はすべてiである。1230は無文部に赤色塗彩が行なわれている。1228は波状口縁をもち、波頂部は粘土紐の貼付によって飾られている。1236~1242はⅢ群土器で、1235はV期であろう。



挿図 135 住居址 45 変遷図

石器は石鏃 33(980~997)、尖頭状石器 1(998)、石匙 4(999~1002)、スクレイパー 8(1003~1005・1014)、石錐 4(1006~1008)、ピエス・エスキーユ 4(1009・1010)、使用痕ある剝片 52(1011~1013・1015・1016)、石核状石器 2、乳棒状磨製石斧 3、凹石 21、石皿 2(1560)、の計 134 点がある。そのほかに滑石製品の耳飾と管玉が各 1 点(1685・1721)出土している。石鏃は粗い作りのものがめだつ。(佐藤 信之)

(3) 住居址 67(挿図 136、図 88・89・141・189・239、図版 54・152・188)

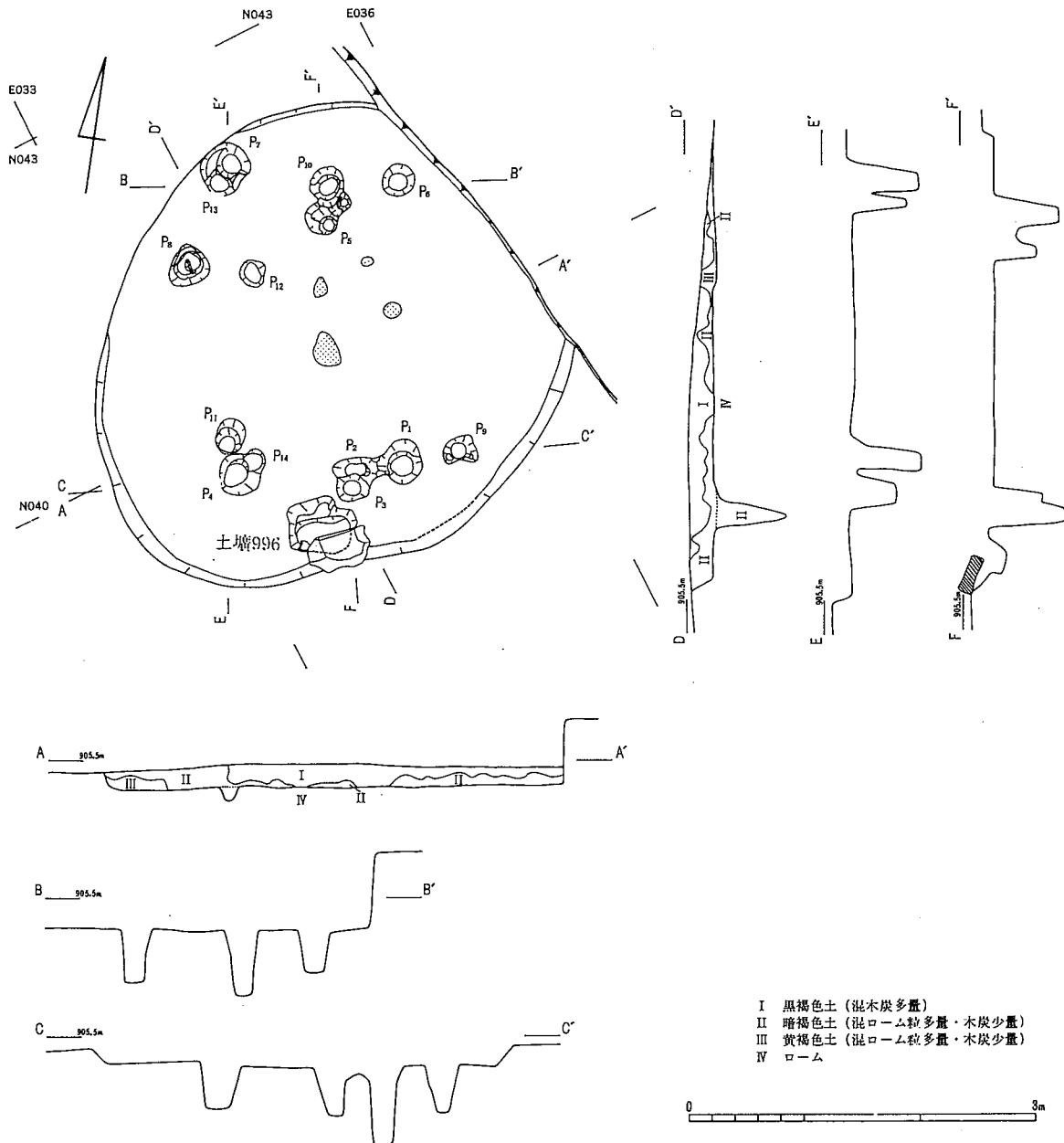
遺構 CE 32 を中心に検出された。西へ少し離れて、Ⅲ期に属する住居址 76 がある。住居址の北東部分は一歩用地外にかかるために調査できなかった。規模 3,90×3,90 m 前後で I 型の住居址であろう。

ローム漸移層中で、土の色の違いが認められプラン確認に努めたが、はっきりした線はつかめず、検出面からの掘り込みはローム層に達するかどうかという極めて浅いものであった。壁は東・南側で一部しっかりしているものの、他は不明瞭な部分が多く、特に西側では、壁の立ち上がりを確認できなかった。床面は概して軟弱であり凹凸が著しい。ピットは 15 個検出された。敷、配置等から住居址の重複の可能性もあるが、それを裏づける積極的な資料を得られず、一応単独の住居址を考えた。支柱穴は P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub> をあてた。南壁を土壌 996 が切っている。

検出当初より炭化材の出土が目についた。大は長さ約 30 cm、平均 10 cm 前後である。床面にも全体に広く分散しており、また、4 箇所焼土がみられるなど、本住居址が焼失住居であることを示している。地床炉は支柱穴間のほぼ中央にある。なお、本址でも住居址 58 と同様に遺物の取り上げをブロックごとにまとめて行なったが、住居址埋土が非常に浅く、また遺物が思いのほか少なかったこともあり、あまり成果は得られなかった。

遺物 遺物の出土状態は B<sub>1</sub>型である。遺物総数は約 430 点で、土器が約 70%、石器類が 30%である。土器は小細片が多く(約 44%)、復元できたものは 1 点にすぎない。Ⅲ期とⅣ期の土器が混在している。土器の大半は縄文のみの破片で、土器全体の 31%である。そのほとんどは、内面が丁寧に整形されたⅣ期 Ia であり、RL が 42%、LR が 12%と両者が過半数を占める。Ⅲ期は、II a(1127・1128)、II h(1129)があるが、量はそう多くない。Ⅳ期には、I a(1142~1149)、I c(1168)、I e(1154・1155)、I f(1160~1162・1165・2016)、I i(1156~1159)があり、I a と I f は内面が篋で丁寧に磨かれている。1158 は浅鉢Cであろう。1151~1153 は、胎土内に雲母を含んだ橙褐色の土器でⅣ-a 期に、他はⅣ-b 期のものと思われる。なお、1145 はⅢ期的特徴を残している。Ⅲ群土器は g(1174)、I(1173)、f(1172)があり、g は丹彩されている。

石器は多くない。石鏃 8(1079~1085)、石匙 1(1086)、スクレイパー 7(1087~1089)、石錐 1(1090)、ピエス・エスキーユ 5、使用痕ある剝片 7(1091・1092)、凹石 4、先端研磨石器 1(1674)の計 34 点である。他は剝片、原石等が 94 点ある。(岩崎 孝治)



挿図 136 住居址 67 実測図

(4) 住居址 74(新) (挿図 110~113、図 96・188・239・240、図版 44・121・149・155)

遺構 住居址 74(旧)の北辺部で、その北壁の一部を切って構築された E 型の住居址である。しかし、大部分が住居址 74(旧)の埋土中にあるためにそのプランは検出できなかった。しかし、IV期遺物の広がりや柱穴から、およその推定規模は 6.40×3.60 m となろう。住居址 74(旧)e との床面の比高差はほとんどない。支柱穴は P<sub>46</sub>・P<sub>42</sub>・P<sub>45</sub>・P<sub>9</sub> で規模は共通するが、深さが北側柱列(-45 cm 前後)に比較して浅い(-24 cm 前後)。地床炉 F<sub>7</sub> は、住居址北寄りにある。

遺物 出土状態についてはすでに住居址 74(旧)で述べたので省略する(A<sub>1</sub>型)。出土遺物は土器と石器である。確実に本住居址にともなう土器はIV期 Ie の 1959 のみである。これは口縁部及び底部を欠く他はほぼ完存し、頸部を磨いて調整して、再び口縁部を作りだしている肋骨文をもつ土器である。胴部内面には巻き上げ痕が著しい。他の埋土出土土器の大半もIV期で I 群土器は a(1368)、b(1375・1377・1378)、c(1384・1385)、e(1374・1379・1380・1382)、h(1376・1381)等がある。1383 は櫛描文が描かれているが、細片のため

文様構成は不明である。III群土器はD<sub>2</sub>(1387)、E<sub>1</sub>(1386)、E<sub>2</sub>(1388)、I<sub>2</sub>(1389・1390)がある。うち、E<sub>1</sub>は条痕をもつもので、連続爪形文が胴部上半部にくるであろう。またE<sub>2</sub>は貝殻文で、これらは住居址74(旧)に伴うものであろう。総じて、III群の一部と混入したIII期(1366・1367・1371)を除いてはほぼ阿久IV-b期土器群と考えてよいであろう。

石器は総数58点あり、石鏃7(1045~1051)、石匙3(1052・1053)、スクレイパー8(1055・1057・1059・1060・1063)、石錐2(1054)、ピエス・エスキーユ5(1068・1069・1075~1077)、使用痕ある剝片22(1058・1061・1062・1064~1066・1070・1078)、石核状石器4(1071~1074)、凹石4、敲打器1、袂状耳飾1(1684)、先端研磨石器1(1673)がある。住居址(古)からの混入もあり、すべてIV期に属するか否かはさらに型式的検討が必要と思われる。(笹沢 浩)

## 2 立石・列石(図21・22、図版80~83、表3)

環状集石群のほぼ中央、CT 65からCU 69にかけて検出された石組をとまなう立石と、その前面の列石からなるもので、いずれも環状集石群と同様の、黒色土下部から黒褐色土上部で検出された。

立石と呼称した角柱状の石は、長さ120cm、幅・厚さとも35cm前後の花崗閃緑岩を用い、石組の中央に、N 35°Wの方向に横転した状態で検出された。全面に火熱を受けた痕跡—深成岩特有の火熱による風化と煤煙の付着がみられた。

立石の南側に径30~50cm前後の板状の安山岩が、半月形に立石をとり囲む状態で検出された。これらの多くは立石にむけて内傾させている。立石北側の土壌960の埋土上にも板状石が1個みられた。やや検出位置が内側に寄る所から若干の疑問もあるが、ほぼ原位置を保っていると思われる。だとするならば、これら板状の石は、本来は半月形ではなく、円形石組であり、その径は2.5m前後であったものと思われる。つまり、角柱状の石を立石として中央に据え、その周囲に円形石組を配したものであろう。このような遺構に類似したものは、秋田県大湯町環状列石〔後藤1953〕等に見ることができる。また、祭壇をもつ立石は茅野市与助尾根遺跡〔宮坂虎1957〕等八ヶ岳山麓の縄文時代中期の住居址内にかなりみられる例であり、「円形石組をもつ立石」が決して想像の世界だけのものとは思われない。

以上、われわれが「円形石組をもつ立石」を略して立石と呼称した根拠の一つである。

立石の下部遺構を知るために、いくつかのトレンチを漸移層上部まで入れた。その結果、立石の北東寄りに、1m前後の範囲内で焼土が黒褐色土中に認められた。また、土壌960が、立石の北西側に、一部焼土を切った状態で検出された。その他、小ピットがいくつか認められたがいずれも浅かった。土壌960は立石の一部に南壁部分が接し、壁の切りこみは暗褐色土で、立石の接地面とほぼ一致する。埋土の堆積は原則として成層堆積であり、埋土中からV期の土器片が出土しているところから、その構築は火床よりは新しい段階—阿久V期の中に求められるであろう。同時に立石が倒れた時期も、土壌960が埋没したV期か、それよりさほど下らないであろう。なぜならば、土壌960の埋土の堆積状態は自然埋没というよりも、人為的に埋め戻された性格を示しているからである。

列石は立石から約2.5m北に寄った所に、N 28°Eの方向に5.2×2.0mの範囲にわたって、8個の板状の安山岩塊(S1~S8)が列状に検出されたものである。それらは、ほとんどが三角形状で、大きさに若干の変化はあるものの、厚さは10cm前後でほぼ均一である(表3)。いずれも、尖端部分を外側にむけ、2個が1対で近接し、中には重なった状態のものもみられ、また、S3とS4は中途から折れていた。このような検出状況は、列石は単に平面的に並列させたものではなく、尖端部分を土中に埋めて、2列に並列させて立ってあったものが、倒れた状態を示していると思われる。列石下部の一部分は、列石の原位置を保持するた



めに、未調査であったが、一部トレンチ調査では、列石にそって大形の土壙 958・959・972・974・948・945 が検出された。これらは土壙 960 と規模・構造とも類似し、かつ、それらの年代は土壙 948 からIV期の、土壙 974・960 からV期の、土壙 958・959 からIV期・V期の土器片が、いずれも埋土中に出土していることから、列石の想定年代と一致する。

以上、列石の本来の姿は、これら土壙群上に立てられた立石群と考えられよう。つまり、2個一対となって、回廊状に並列して立っていたと思われる。そうだとすれば、円形石組の中央にある立石の前面に列石による回廊ができ、立石からこの回廊を通して蓼科山を遠望できることになる。

径 110 m 余におよぶ環状集石群の中心施設としての構造物は、検出状況にみられるような平面的なものではなく、立体的構造物と考えるのが自然であろう。いわんや、立石の素材となった花崗閃緑岩は茅野市永明寺山塊等、阿久遺跡から 10 数km離れた場所でないと求められない石材であり、これら構造物のもつ意味は重要である。

立石・列石の構築年代は、検出状況が環状集石群と共通し、立石・列石によって覆われた土壙埋土内出土土器片から、明らかに阿久IV・V期のうちに求められよう。

### 3 環状集石群(挿図 137~141、図 11~20・194、図版 84~88、付図 2・3)

尾根にそって南東から北東方向を長軸とするドーナツ状に人頭大からこぶし大の安山岩礫を集めた遺構で、核となる集石と、10 数個の集石がグループ化する単位集石群ならびに散在する礫とからなる。その規模は長軸方向が 120 m、短軸方向(北東-西南)が 90 m、幅 30 m 余である。これは、ほぼ環状となることはまちがいないものの、未調査地域をかなり残し、馬蹄形となるかどうか、なお不明である。

環状集石群からやや離れた南斜面の 2 箇所にも集石 100・101 と集石 315 が検出された。このことは、環状集石群の外側にも、いくつかの単位集石群があることを示している。この部分も未調査地域を多く残し、その実体は不明であるが、これらが、環状集石群から離れた位置にあることは、まず間違いがない。ここでは、これらを外側集石群と呼び、集石 100・101 を外側集石群 A、集石 315 を同じく B とすると、環状集石群から最短距離で A は 40 m、B は 160 m となる。

単位集石群は、外側集石群を除くと、21 群確認されている。しかし、未調査地域にもかなりの数が予想され、さらに、それら地域の集石との関係で、実数はさらに 21 群をうわまわるであろう。また、単位集石群の把握は、それら自体に重複等がみられ、困難な面が多く、21 群という数字は、今後の調査なり、検討で変動する余地が残されている。

単位集石群の把握は、集石が「一定の法則性」にあるものについて行なった。しかし、「一定の法則性の認識」は後述のようになり曖昧な面もあるが、認識できる最低のものとした。単位集石群 A・B・C がある。

なお、個々の集石内出土遺物は、集石を構成する礫の代用として用いられた凹石を初め石斧片などとともに、少量の土器片(図 194)が集石内から出土している。いずれもIV・V期の土器片で、若干のII・III期とも共存した。集石構築時における混入と考えられ、構築時期の一点を示すものである。集石 27~29・51・61・74・136・139・142・147・173・219・268・273 でみられた。環状集石群内からは多量の遺物が出土したが、それらについては後述する。

表 3 列石集計表

石	平面形	長	幅	厚さ	備考
S 1	三角形	65	50	10	
S 2	長方形	70	45	10	
S 3	"	70	55	10	折半
S 4	三角形	102	65	12	折半
S 5	"	110	70	15	
S 6	"	120	57	15	
S 7	"	94	80	22	
S 8	"	55	55	11	



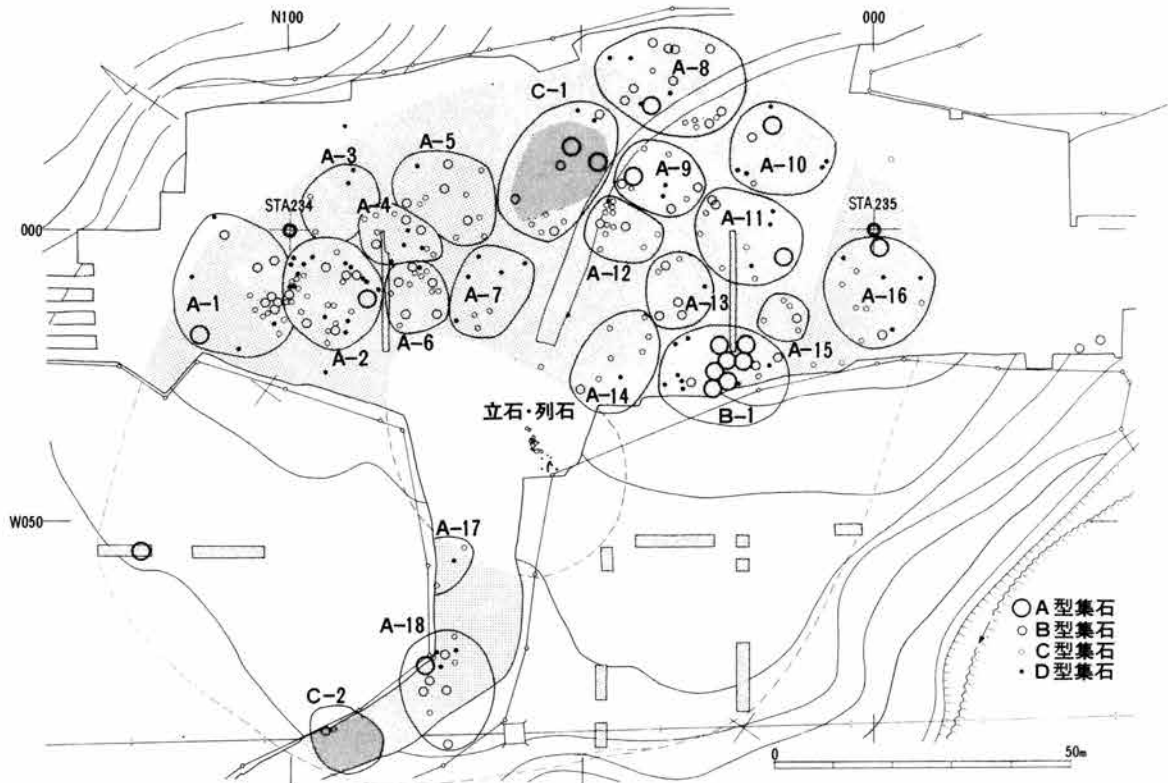
挿図 137 単位集石群分布図

1) 単位集石群 A

10 数基前後の集石が環状に重なって、一つのまとまりをもつ型である。しかし、これだけでは、単位集石群が複雑に接した場合には、それらを識別することはむずかしい。このために、明らかに単位集石群として把握できるいくつかのモデルを抽出し、そこから法則性を見出そうと試みた。その結果、単位集石群 A には、外周に連なる個々の集石の長軸が、その外周の方向にある程度その傾向が読みとれた(挿図 139~141)。この傾向を単位集石群 A の外周の「方向の規格性」と呼ぶ。しかし、この「方向の規格性」は、完全な形で知ることはできない。なぜならば、すでに集石の類型化を試みた中で、遺存した集石の中には本来の姿から崩落等で変形したものも含まれ、また、平面形が円形のものでは長軸方向は求められないなど集石の長軸方向はかなり不確実な要素が含まれているからである。従って、原初の姿に復元した上で、「方向の規格性」を求めるべきであろうが、恣意的になる恐れがあるので、あえてそれは行わずに、現段階での「方向の規格性」を単位集石群把握の一つの手段とした。A-1 から A-18 までである。

(1) 単位集石群 A-1 (図 17・18)

環状集石群北西部外郭を構成する。A 型集石 129、B 型集石 131・142・268、C 型集石 141・147-2・173、



挿図 138 類型別単位集石群分布模式図

D型集石 130・132・162 で外周を形成し、集石 147-2 に近接して、B型集石 136~139、C型集石 134・135・140-2・174・176、D型集石 140-1 がある。特に集石 136~139 は互に接している。集石 129~131 は環状集石群の外周となる。A-1 はまとまりがやや不規則であるが、一般に環状集石群の外郭を形成する単位群は、まとまり方に規格性が乏しい。

### (2) 単位集石群 A-2 (図 18、図版 13)

単位集石群 A 型のモデルとした典型的な集石群である。A 型集石 169 を含め B 型集石 149・154・156・160・166・178、C 型集石 144~148・150・152・157・170・180・205・208・213-2・214、D 型集石 143・153・155・158・159-2・161・167・168・179・209・210・213-1・177、207・215 の計 36 基からなる。N 55°E に長軸をもつ 15×12 m の楕円形状に二ないし三重に密接してめぐるが、集石 209 のみ北側にややはずれる。単位集石群 A-1 と A-4 にはさまれた位置にある。集石の「方向の規格性」もほぼ保たれている。また、B~D 型の集石もほぼ一定地域に集中している。環内部に集石はない。

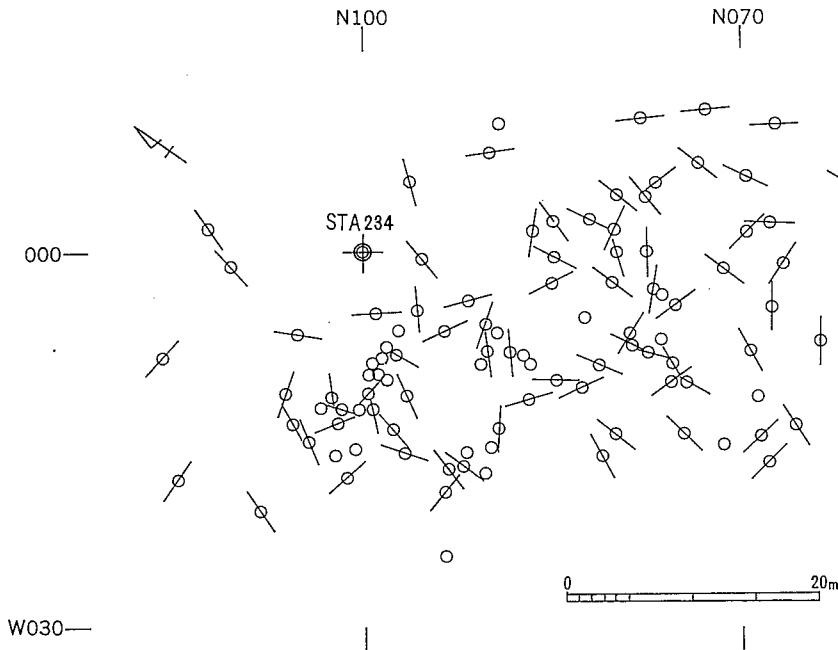
集石 169 は類型 A IV b 4 で、掘り方は不鮮明である。また、集石 147-1 は中央に 60×40 cm の角のある安山岩の大石が上面にのせてある。

### (3) 単位集石群 A-3 (図 11)

環状集石群北外郭部を構成し、単位集石群 A-2・A-4 と接する。C 型集石 151・318 と D 型集石 313 が環状になり、「方向の規格性」も保つが、間隔は離れる。D 型集石 317 は環の内側にある。また、A-4 とした集石 319・320 は本群に属する位置にあるが、配列からはむしろ A-4 に属すると判断した。散在礫もほぼ A-3 のまとまり方に一致する。集石 151 以外は下部調査はおこなっていない。A・B 型集石はなく、数基の小形集石群からなるものの、径 15 m と集石群の占める面積は大きい。

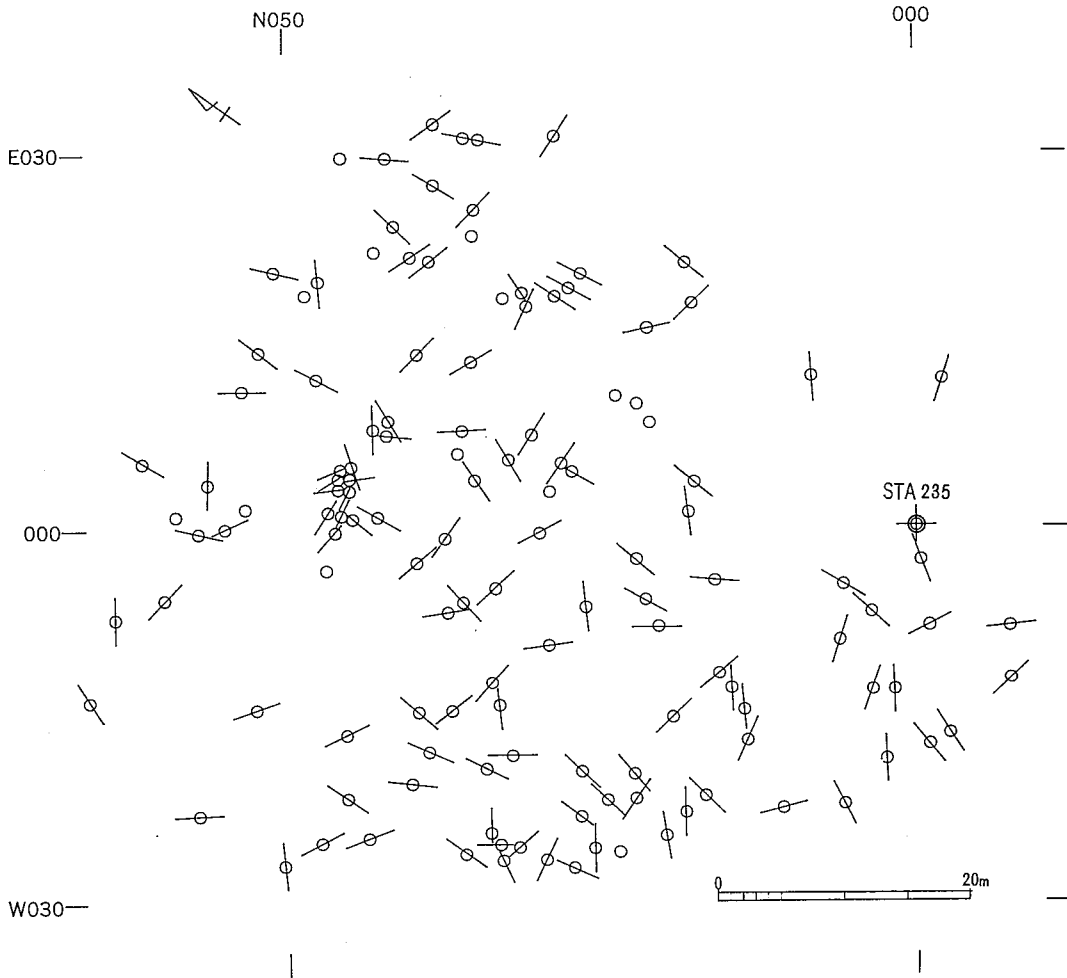
(4) 単位集石群 A-4(図11、図版130・131)

環状集石群北辺部中央にあり、A-2・3・5・6のほぼ中央にある。集石 65・67・69・165・244・246・319・320 が環状に連なり、内部に集石 68・121・164・256 がある。外周を形成する集石のうち 66・164・

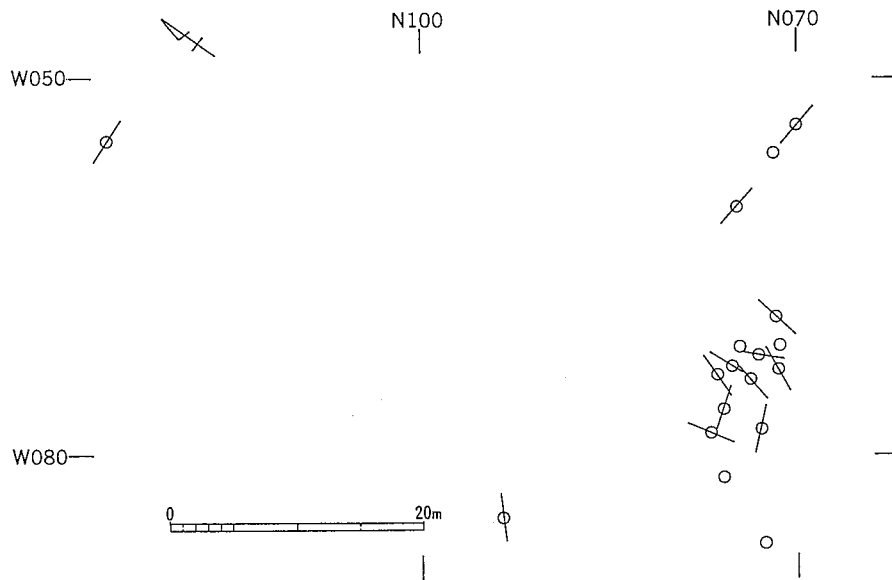


挿図 139 長軸方向別集石分布模式図(1)

244を除いては、「方向の規格性」がみられる。しかし、集石 244 は平面形が不定形(IV型)であり、66 は円形(I型)であって、両者はともに方位を90度振っても、何ら差障りがないものであって、だとすれば、これも「方向の規格性」を示すことになり、集石 165 も不定形で本来の姿を示すものでないと思われ、その長軸方向ははっきり



挿図 140 長軸方向別集石分布模式図(2)



挿図 141 長軸方向別集石分布模式図(3)

しないといえる。A-4の長軸方向はN7°Wでその規模は14×8mである。B型集石の3基(集石65・165・244)を始め、C型6基(集石66・67・164・246・319・320)とD型4基(集石68・69・121・256)で外周を構成する。集石66と121は相接し、他の多くの集石と異なり、その上面から50cmの深い掘り込みを

もち、集石下端と墳底との間隔がある。両者は切りあい関係にあると思われるが、前後関係は明らかにできなかった。

(5) 単位集石群 A-5 (図11、図版99・130・131)

環状集石群東辺部北寄りにある。集石は二重となって、環状にめぐる。外側に集石87・90・240・245・309・310が、内側に集石239・241・242・248・249・325がある。ともに「方向の規格性」が認められる。外環は直径が15m、内環は8mである。この二重構造が本来のものか、あるいはダブリなのかははっきりしない。B型集石242・245・309・325、D型集石310以外はすべてC型である。集石87・90を除いては下部は未調査である。

(6) 単位集石群 A-6 (図14、図版98)

単位集石群A-2・4・7と接し、土壙群と一部重なる。B型(集石70・75・78・120・127)とC型(集石13・71~74・76・77・79)D型(集石195)からなる。径11mのほぼ円形となるが、東側は二重になる。「方向の規格性」は集石70・71と127にみられないが、前二者は不定形プランで、その長軸方向は不確定であり、後者は円形プランであって、90度振れば合致する。集石74と120とは切りあい関係にあり、集石74は小礫を、集石120は人頭大の礫を用い、集石74が120の一部にくいこませて構築しているところから、集石74が新しいと判断できた。また、集石120の中央部分の礫は欠除している。

(7) 単位集石群 A-7 (図14)

単位集石群A-6の南にあり、土壙群と一部重複する。散在礫ともども集石がもっとも稀薄である。各集石の「方向の規格性」もはっきりしない上に、南側は旧農道によって失われたものも予想され、群としての把握は難しい。C型集石82・83・117・128、D型集石80・115・116・172・190からなり、小規模の集石が多い。集石間の間隔も広い。

(8) 単位集石群 A-8 (図12)

環状集石群の東外郭部を構成するが、東側は旧農道によって、一部は失われていると思われる。A型集

石 299、B 型集石 184~186・258・263・300、C 型集石 262、D 型集石 187・264・298・302 の計 12 基からなり、「方向の規格性」にもほぼ合致し、集石 262 を除いて、環状にめぐる。その径は 12 m である。さらに、旧農道をはさんで南寄りに B 型集石 257・279・281、C 型集石 280・282~284 があり、257 を除いては互に接して弧状に並ぶ。これらの集石群は旧農道で失われた集石群のあり方で、別個の単位集石群を設定できる余地があるものの、その帰属は難かしい。本群に属するとしても、A-5 のような外環部とも異なる。ここでは一応本群に含めておく。いずれも下部は未調査である。

(9) 単位集石群 A-9 (図 12・19)

単位集石群 A-8 の西寄りにある。A 型集石 287、B 型集石 227・230・289、C 型集石 228・285・290、D 型集石 229・253・254 からなり、「方向の規格性」をもちながら環状となるが、集石 229・253 は中央寄りにある。規模は 12×10 m である。集石の下部は未調査である。

(10) 単位集石群 A-10 (図 12・13)

環状集石群南東外郭を構成する。A 型集石 276、B 型集石 278、C 型集石 222、D 型集石 223・224・277・321・324 からなる。「方向の規格性」はかなりバラツキがみられるが、一つには集石の検出が散在礫との関係で十分に検出できていないことにもよる。集石 321 を除いて、北側に集中し、南側にはない。集石下部の調査もおこなっていない。なお、集石 321 の南東 10 m の所に、集石 275 が孤立してある。

(11) 単位集石群 A-11 (図 13)

環状集石群南辺部のほぼ中央で、単位集石群 A-9・10・12~15 に囲まれる。A 型集石 20、B 型集石 225・226、C 型集石 25・30・31・231、D 型集石 220・221 が、「方向の規格性」をもちながら、楕円形に配列する。長軸方向は N 12°E で、規模は 17×15 m である。D 型集石 53 はやや内寄りに、同じく C 型集石 54 がほぼ中央にある。集石 220・221・225・231 の下部は未調査である。

(12) 単位集石群 A-12 (図 19)

単位集石群 A-9・13 と C-1 に囲まれた位置にある。北側は旧農道によって一部欠失している。B 型集石 295、C 型集石 32・36・37・234・235・291、D 型集石 237 が「U」字状に並び、東側にはない。北辺部では、さらに、B 型集石 294、C 型集石 35・291~294・296 が集中してみられ、この部分はダンゴ状となる。外周部を構成する集石には「方向の規格性」がある程度認められる。径 10 m である。中央部には B 型集石 273、C 型集石 297 がある。273 の集石埋土内からは IV・V 期の土器片が出土している(図 216・217)。

(13) 単位集石群 A-13 (図 20)

単位集石群 A-11・12・14 に囲まれた中に位置する。西と南側に集石はみられないが、ほぼ環状となる。「方向の規格性」は集石 33・34・110 では平面形が円形で任意に求められるものであり、全体として、ほぼ合致する。11×10 m の規模である。B 型集石 34・38・107、C 型集石 33・110、D 型集石 124 が弧状に並び、B 型集石 39 が 38 に近接して、やや中央寄りにある。B 型集石が主体で構成されている。

(14) 単位集石群 A-14 (図 20)

内帯の土壌群と一部重なる位置にある。C 型集石 42・57・63・104・106、D 型集石 58 が楕円形に配列する。規模は 14×8 m である。C 型集石 89 は環の中にあり、さらに外には、B 型集石 103、C 型集石 118、

D型集石 123 があるが、103 を除いては離れすぎのきらいがあり、本群に属さないであろう。103 は掘り方が他に比較して深く、壁の一部にかなりの火熱を受けた痕跡がみられるなど、他の集石と様相が異なる。

(15) 単位集石群 A-15(図 20)

単位集石群 A-11・16 と B-1 に囲まれた位置にあり、8×7 m の小規模のものである。B 型集石 17、C 型集石 16・18・19 と 111 からなり、「方向の規格性」もほぼ認められる。南辺部は 4 基のほぼ同規模の集石が弧状に並ぶ。A・D 型を欠く単位集石群である。

(16) 単位集石群 A-16(図 15)

環状集石群の南外郭を構成し、IV-a 期の住居址群に近接した位置にある。17×15 m の規模である。A 型集石 6、B 型集石 4、C 型集石 2・9・12、D 型集石 1・55 がほぼ環状に、一定距離をおいて配列する。さらに、C 型集石 8・11、D 型集石 50 がやや内側に寄って弧状に、C 型集石 7 が外側に張り出した位置にそれぞれある。また、D 型集石 48 がほぼ中央にある。集石群と散在礫のまとまりも一致する。「方向の規格性」もほぼ合致する。

A-16 と B-1 との中間に、C 型集石 10・14 がみられるが、これらは西寄りの未調査地域に本体があると思われる。

(17) 単位集石群 A-17(図 16)

土壌群地帯にあり、環状集石群の西辺部内側を構成する。C 型集石 191、D 型集石 192・193 の 3 基を検出したにすぎないが、これらは弧状に分布しており、その本体は北側の未調査地域にあると思われる。集石 192 に接して土壌 691 がある。

(18) 単位集石群 A-18(図 16)

単位集石群 A-17 の西方にあり、同様に未調査地域を多く残すために不明な点が多い。今後の調査により性格がはっきりすると思われるが、ここでは A-18 としてとらえておきたい。A 型集石 201、B 型集石 202・203・267、C 型集石 194・204・216、D 型集石 197 が外周を形成し、これに近接して、B 型集石 196、C 型集石 199、D 型集石 198・217 が、さらに中央よりに B 型集石 200 がある。径 18 m 前後の環状になると思われる。しかし、東側の一部には集石と散在礫が存在しない点など、むしろ、集石 194・198・199・200・204 を外周とすれば、「方向の規格性」と散在礫の分布範囲とが一致することとなる。反面、環状内部に集石が集中することになり、単位集石群 A 型というよりも B 型となる。今後に期待するとして、ここでは A-18 としてとらえておきたい。

2) 単位集石群 B

(1) 単位集石群 B-1(図 20)

環状集石群の南辺の一部を構成するが、予想される集石群の約半分が未調査のため、全体形は不明である。A 型集石 24・26~29・51・61、B 型集石 21・23・114、C 型集石 113・125、D 型集石 22・41・45・46・47・59・112・126 が、ほぼ 20×10 m の範囲内に互に接して存在する。ただし、集石 41 と 112 はやや離れる。A 型 7、B 型 3、C 型 2、D 型 8 の計 20 基が検出されており、A と D の多いのが目立つ。また、B 型とした集石 21・144 も、むしろ A 型に近い規模をもち、その意味では、本集石群は規模の極端に異なる A と D 型の集石が主体となって構成されているといえよう。一般に A 型集石が単位集石群に占める数は、1

基があっても2基が最高で、このように多量のA型集石が集中する点に特徴の一つがあるといえる。また、AとD型の集石は地点を異にして分布している。集石の長軸方向もバラツキが著しく、一定の規則性は見い出せなかった。集石24と61は切りあい関係にあるが、その前後関係は明らかにできなかった。環状集石群の中ではもっとも遺物が集中して出土した。

### 3) 単位集石群C

単位集石群は多かれ少なかれある程度まとまりをもって、散在礫を多量にともなう。しかし、単位集石群C型としたものは、集石自体を中にとりこみながらも、一定地域に密集する多量の散在礫の下に集石あるいはその掘り方はみられない。これらほぼ円形状に集中する散在礫は、集石の自然崩壊したものとは考えにくい。当初から意図的に作られた集石の一変形したものと考えざるを得ないのである。従って、特に礫が掘り方をもたずに集石の10数倍の面積の範囲内に密集しまとまりをもつ個所を、単位集石群C型とした。C-1とC-2がある。

#### (1) 単位集石群C-1(図19)

単位集石群A-5・8・9・12に接した位置にあり、南辺部は旧農道で一部が失われている。24×12mの根拠は特にない。

集石は外周部に多くみられる。西外周にB型集石171・238が、C型集石250～252・314とともにあり、東南外周部にはA型集石306・326、B型集石303・307、D型集石304・305がある。306と307はやや中央寄りにある。南外周部は旧農道により破壊されていると思われるので、集石314から306まで、集石が弧状に並んでいたのかも知れない。あるいは前述したように単位集石群A-12の一部がこれに加わるのかも知れないが確証はない。

#### (2) 単位集石群C-2(図16)

環状集石群の西外郭を構成するもので、単位集石群A-18の西にある。未調査地域を多く残すため、実体は不明である。B型集石219、C型集石218が中央寄りにある。礫は集石219の附近に特に集中する。しかし、これらの下に特に集石の存在を示す痕跡はみられなかった。ただし、前代の下層遺構とともに、土壌群がみられ、そのうちに時期決定の困難なものもあり、集石群と関係ある土壌の一部が存在する可能性もある。

### 4) 外側集石群A・B(図17)

外側集石群Aは阿久尾根中央地区南斜面の、IV-a期の住居址群のすぐ下方の斜面上にあり、V期の住居址7が近接する。B型集石100・101と散在礫が弧状にみられるが、未調査を多く残し、その広がり是不明であるが、単位集石群は、まず、まちがいなく存在するであろう。散在礫とともに、IV・V期の土器片が多量に集中して出土する点は、尾根上の環状集石群と全く共通する。この点から、外側集石群Aが環状集石群と同時存在で、密接な関連ある遺構といえよう。

外側集石群BはAより直線距離で東に150mよった、阿久尾根東部地区南斜面上で、縄文時代中期の住居址101に近接してある。集石315の一基のみで、若干の散在礫をともなったが、併出遺物は不明である。調査範囲がせまく、くわしいことはわからない。C型の集石で、小角礫を用いている。(笹沢 浩)

## 4 方形柱列

### (1) 方形柱列X(図42・195)



方形柱列IIの南、CL 71 付近に位置する。環状集石群の内側で上層はほとんど礫が存在しない部分である。用地外にかかり全体の半分ほどを明らかにしたのみである。掘り方の形態はC類型であるが、配置はやや異例で、掘り方1～5は他のC類型のように方形とはならない。むしろ未掘部分に2～3個の掘り方の存在を考えて、径6.7m程度の円形配置となる可能性がある。しかし、2と3、4と5はそれぞれの最深部を結んだ線がほぼ直交し、隅部に掘り方が存在しない方形とすることもできる。その場合は南北5.4m、方向N 8° Eとなり、未掘部分の西辺は2・3に平行に2個、計7個で構成されることになる。

内部、周辺には多くの土壌があるが、明らかに本址に属するものは掘り方1～5の5個である。6は5に接しているが形態的にはB類型に似ている。他の土壌はほとんどが埋土にロームを含み、含まない土壌は421・426・430・461・470～472・477・479・604だけである。各掘り方中間にある土壌421(-62cm)・425(-58cm)・467(-58cm)・469(-32cm)などは位置、埋土、深さなどの点から本址に属する可能性がある。また、土壌597(-78cm)・467(-58cm)・480(-78cm)は直線に等間隔に配置され、掘り方2・3を結ぶ線に平行する。土壌477(-17cm)・601(-16cm)・479(-36cm)または480・465(-30cm)はほぼ長方形になり、土壌478(-26cm)・599(-28,-50cm)・689(-22cm)・466(-13cm)も同様であり、いずれも本址南辺に接して平行に位置し、何らかの関連をもつように思われる。

各掘り方の埋土はロームブロックを多量に含み、その含有率によって2～3層に分層できる。ロームを全く含まない層が、底や壁寄に薄く認められるが、柱痕跡的なありかたではない。掘り方底の有段部分は土層からみても、数次にわたる切りあいの結果ではなく、一時に掘り込まれた直後に、すぐ埋め戻されたと考えられ、当初からこのような不整形の掘り方で構成されたことを示すものと思われる。段部は4段程度あって、その部分の深さは検出面より、最も深い底が、掘り方2で深さ125cmあるのを除き、100・85・60cmなどの深さとなる例が多く、ある程度の規則性がある。

掘り方内からは土器99点(2183～2195)が出土しており、そのうちIV期が87点、III期とII期が各6点、他に黒曜石剝片類が49点ある。周辺の土壌の大半は遺物が出土せず、あってもII～IV期がそれぞれ数点のみである。土器も石器も混在して掘り方中位に比較的多いが、底近くから検出面ちかくまで散在する点、埋土中に偶然含まれた状態と思われる。

## (2) 方形柱列XII(図43・195、図版71)

住居址25の南、CN 52 付近に位置し、上層は環状集石群北辺の内縁ちかくにあたり、周辺にも集石116・128がある。128は本址の6に切られている。検出面は集石面下20cmのローム漸移層中であり、B類型と同じく多量のロームブロックの存在によって当初より一連の遺構と考えられた。南北それぞれの間掘り方を置き6個で構成されるC類型である。

周辺および内部には他の土壌が多い。土壌242、489は黒褐色土を埋土とし20cm程度の深さがある。土壌487・490は褐色土を埋土とし10cm前後と浅い。土壌199はローム粒を含む褐色土を埋土とし45cmと深く、本址と類似する点がある。以上と土壌148・149は総体として本址と大きな時間差は考えられないが、深さや埋土、位置などから本址には属しないと考えられる。集石128が本址より古く、集石116およびその周辺の礫群の形成が本址に関連なく行なわれたとすれば、本址の時期は環状集石群形成期間のうちのかなり狭い時間幅に限定される。また、土壌のほとんどは少量ではあるがIV期の土器を出土するので、これらも集石群形成の時期と重なるものが多いと考えられる。このように集石、土壌、本址は継続して形成され、一連の遺構ではないが相互になんらかの関連を持ったと想定できる状況を示す。

柱痕跡は認められなかった。土層観察が単純な二分割法で行なわれただけなので、なかったとは断定できない。埋土はロームブロックを多量に含むものが多いが、2と6ではロームを含まない層があり、やや

複雑になる。いずれも自然堆積の状態ではない。5、6の南側に張り出す部分は先行する別の土壌と考えられ、3の南側部分もその可能性がある。このようにみると、各掘り方は四隅にあるものすべて底が四段になり不整形、中間の2・5は円形で段を持たないことになる。深さは前者が80～110 cm、後者が90 cmあり、最も深い部分を結ぶとほぼ方形となって中間の2・5はやや外側へ張り出す。仮に3.5 mの方形ということにすれば、方向はN 8° Eということになる。

掘り方内からは土器86点(2204～2210)が出土した。このうち77点はIV期、7点がIII期、2点がII期である。黒曜石剥片なども20点ある。 (土屋 積)

## 5 土 壌

IV期に属すると思われる土壌は全部で44基確認できた。そのうち、IV-a期は13基、IV-b期が31基であるが、IV期-b期の中にはIV-a期との区別が明確でないものも含めた。

### 1) IV-a期

土壌13基のうち、8基はD区の西半分に集中し、他はC区の西側部分に検出された(挿図142)。A型4、B型3、C型6の計13基がある。

#### (1) A型土壌(土壌130・173・202・979)(図44・45・200、図版74・75・126)

長径80～100 cm、短径70 cm前後の断面形cの土壌である。石の数、検出位置、検出状態などは定まっていない。すべてD区西側に位置する。

土壌130 A I c型で、壁に沿うように50×30 cmの平石がほぼ垂直に検出された。石の上半部は検出面上方にあり、その直下には30×15 cmの薄い他の平石がやや斜めの状態で出土した。埋土は「U」字形堆積である。土壌300を切っている。上面から中位にかけて、土器片15点、黒曜石剥片、木炭片等が出土した。

土壌202 A II c型である。平石は土壌に一部接して、検出面から10 cm以上高い位置に横位状態で検出された。検出面が漸移層であったためやや掘り過ぎており、断面で検討すると実際の構築面は石の下端に近いところに求められ、平石は土壌に伴なうものとする。また、土壌中央部に角柱状の石2個が土壌中位に斜めに傾いて検出された。埋土は「U」字形堆積である。中位から壙底にかけて土器片、黒曜石の原石・剥片等が出土している。またIV期I群土器(2216)の大形破片が中央部の石に接するように出土したが、これは住居址7出土の土器片と接合した。

土壌979 住居址77の埋土中に構築されているため、その形状や土層等は明らかにできなかった。しかし、ほぼ完形に復元できたIV-a期I群深鉢Db(2279)の出土範囲から、径100 cm前後の土壌が推定できる。90×60 cmの大形平石が検出面近くに横になって検出され、その直下から前述の土器が出土した。土器の器面はかなり風化している。

#### (2) B型土壌(土壌80・129・248)(図版74)

すべて長径70～80 cmでB I cまたはB I d型である。10個程度の石を上面に伴なうもの(80)と、中位に比較的大きな石と小礫数個を伴なうもの(129・248)がある。土壌129・248は約3.5 mの間隔で近接し、規模・形状・土層堆積状況と遺物出土状態等が酷似している。

#### (3) C型土壌(土壌28・120・197・261・348・739)(図49・196)

平面形は変化に富むが、いずれも深さ30 cm前後とやや浅い土壌で、遺物は比較的多い。規模は長径120

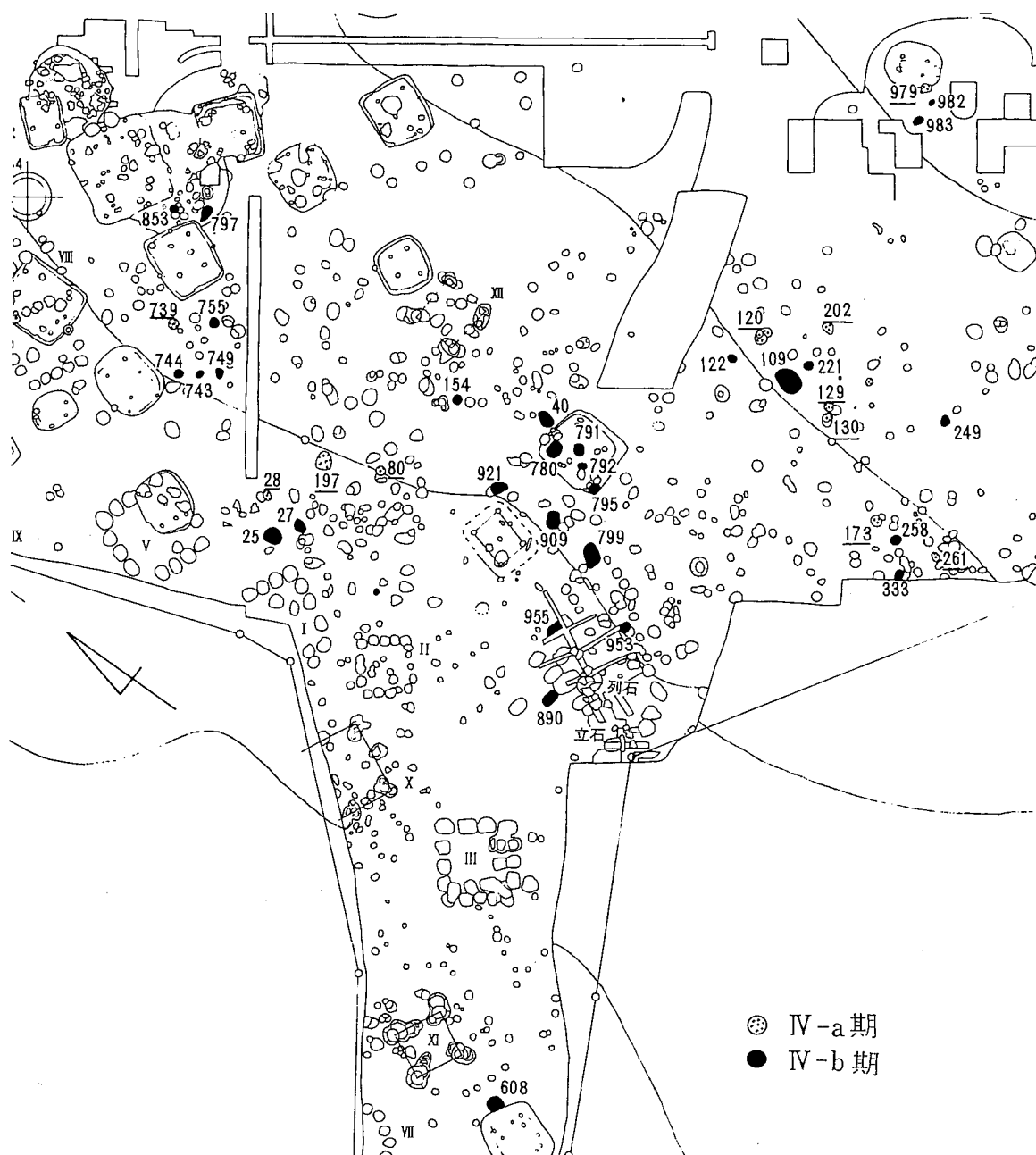
cm前後(120・197)、80 cm前後(28・261・739)、40 cm前後(348)の三種類がある。

土壌 28 C II a 型である。長軸線上(N 20°E)西側部分上層に同一個体の土器 15 片が出土した。土壌 348 の上層からも単位文様 a をもつ同一個体の土器片が数十片出土している。

土壌 197 C II b 型であり、埋土中に木炭片が少量と浅鉢 Aa(2225)や大形土器片が数点出土した。

## 2) IV-b 期

総計で 31 基あり、その大半が立石・列石の周辺から環状集石群の内側部分までに分布する。A 型土壌 10 基、B 型 4 基、C 型 17 基に類別される。D 地区の土壌の大半は A 型であり、B・C 型のほとんどは C 地区内に位置する。



挿図 142 IV期の土壌分布図

(1) A 型土壌(土壌 122・154・249・258・608・791・795・953・982・983)(挿図 196、図 44~46・199・201、図版 75・76・79・126)

断面形はaとbであるが、長径に比して著しく浅い土壌で、上面に水平の状態で大きな平石を伴う(608・982・983)か、長径80~100cmで深さ60cm以上と深く、石の検出位置が中・下位であるもの(154・791・795・953)、あるいはA I d型で中央部上面に比較的小きな石をもつ土壌(122・258)に3区分できる。

土壌982 ほぼ円形に数cmの落ちこみしかみられなかった土壌で、その北西部分に壁に一部接して70×30cmの平石が検出面上に横になった状態で検出された。石の下面と土壌の北寄りに、III期あるいはIV期I群深鉢Aa(2277)の同一個体の大形土器片が、半分は表面を上に向けて水平に、他は壙底から垂直に立ち上った状態で出土した。

土壌983 982と酷似した土壌で、35×25cmの平石が土壌中央部上面に壙底に接して出土した。石の下方から同一レベルで、IV期I群深鉢De 1個体分(2287)が、ほぼ水平の状態でも出土した。

土壌249 形の上では浅い土壌の中に含まれるが、長軸線上の壁際に60×30cmの角柱状の石が、そのほとんどを検出面より上にやや傾けて検出された。

土壌791・795 共に住居址15埋土内に構築された土壌で、形状や遺物が多く出土する点などに共通点をもつ。791では凹石・石匙・スクレイパー等の出土が目立ち、795では石核16点など黒曜石が多く出土した。

#### (2) B型土壌(土壌109・755・797・799)(図46・47・50)

規模は長径約200cm(109・799)と、100cm前後(755・797)とがある。いずれも長径に比較して浅く、石が上面で検出された。

土壌109・797 長軸線上の壁際に比較的大きな石があり、A型土壌に近い形態をとる。遺物の出土量が多い。ともに凹石・特殊磨石を複数出土した。

#### (3) C型土壌(土壌12・25・27・40・221・333・743・749・780・792・853・890・891・909・921)(図49・50)

形状等に変化があるが、長径140cm前後、平面形は楕円形を基本とし、著しく浅い土壌(40・890・891)、同じく長径130cm以上と大形で深さ100cm以上の深い土壌(780・909・921)、長径70cm前後でC I c型およびC I d型(333・743・744・749・792)、長径50~70cmと比較的小形で深いC I f・C I g型(12・853)がある。

土壌40・891 共に類似した規模と形状をもつ土壌であり、埋土上層に単位文様aの一括土器と大形土器片が伴出した。

(百瀬 新治)

## 第5節 阿久V期

### 1 住居址

#### (1) 住居址7(挿図143~146、図103・104・142・189、図版55)

遺構 尾根南斜面にあるIV・V期の住居址群の西側、EL 59を中心に検出された。当初、遺構は北側部分がローム・マウンドに切られるものの、単独の住居址であろうとの判断に立ち調査を進めた。しかし、調査の結果、周溝・地床炉・柱穴等に2回の拡張のあることが知られた(挿図144)。

aは最初の住居址で、推定規模2.60×2.60m、長軸方向N4°Wの円形に近い隅丸方形になると考えられる。周溝は西側にだけ認められる。深さ4~5cmで、さほどはっきりしたものではない。支柱穴は主に周溝との位置関係から、P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>が想定され、P<sub>13</sub>・P<sub>26</sub>はaに伴う支柱穴であろう。炉はF<sub>1</sub>で、非常にかたい焼土が2~3cmの厚さで検出された。

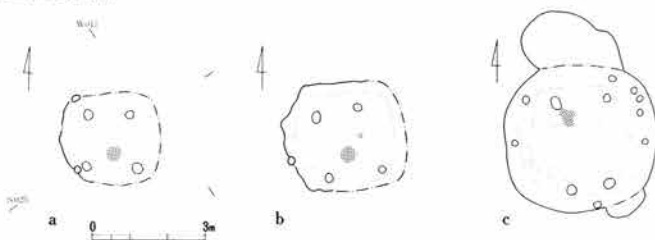
bはaの床面を利用し、aより全体にひとまわり大きく拡張されたらしく、推定規模3.20×3.20m、長軸方向N17°Wで、隅丸方形のプランであろう。周溝は西・北側に認められ、北側は深さ約10cmとしっかりしているが、西側は深さ4~5cmで不明瞭な部分が多い。支柱穴はP<sub>3</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>である。P<sub>13</sub>・P<sub>20</sub>及び周溝中にあるP<sub>27</sub>~P<sub>29</sub>は、bに伴う支柱穴であろう。炉はF<sub>1</sub>かF<sub>2</sub>と思われるが、F<sub>1</sub>であれば、拡張後も引き続いて使用されたものとなる。

cはbをさらに拡張した最も新しいF型の住居址である。前述した通り、北壁はローム・マウンドにより切られており、その一部は検出できなかった。プランは隅丸方形で、規模3.80×3.60m、長軸方向N6°Wである。南斜面の比較的傾斜の強い地形に構築されているため、北壁はローム層への掘り込みは相当深く50cmを越えるが、南壁はその大部分が黒褐色土中に構築されていたために、かすかに確認されたにすぎない。壁は全体にもろく、触れるとポロポロとくずれる部分が少なからずあった。床面は堅固で良好であったが、全面に小さな凹凸がみられた。なお、a・bに伴う柱穴、周溝に当たる部分に特に床を貼った様子は認められなかった。周溝は南側部分を欠き、部分的には深くしっかりしたところもあるが、概して不明瞭である。支柱穴はP<sub>1</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>12</sub>が考えられ、壁際の小ピットP<sub>16</sub>~P<sub>25</sub>・P<sub>30</sub>・P<sub>31</sub>は本址cに伴う壁柱穴であろう。P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>の所属は不明である。炉は位置的に問題が残るものの、厚さ2~3cmの堅い焼土が認められたF<sub>3</sub>を考えたい。

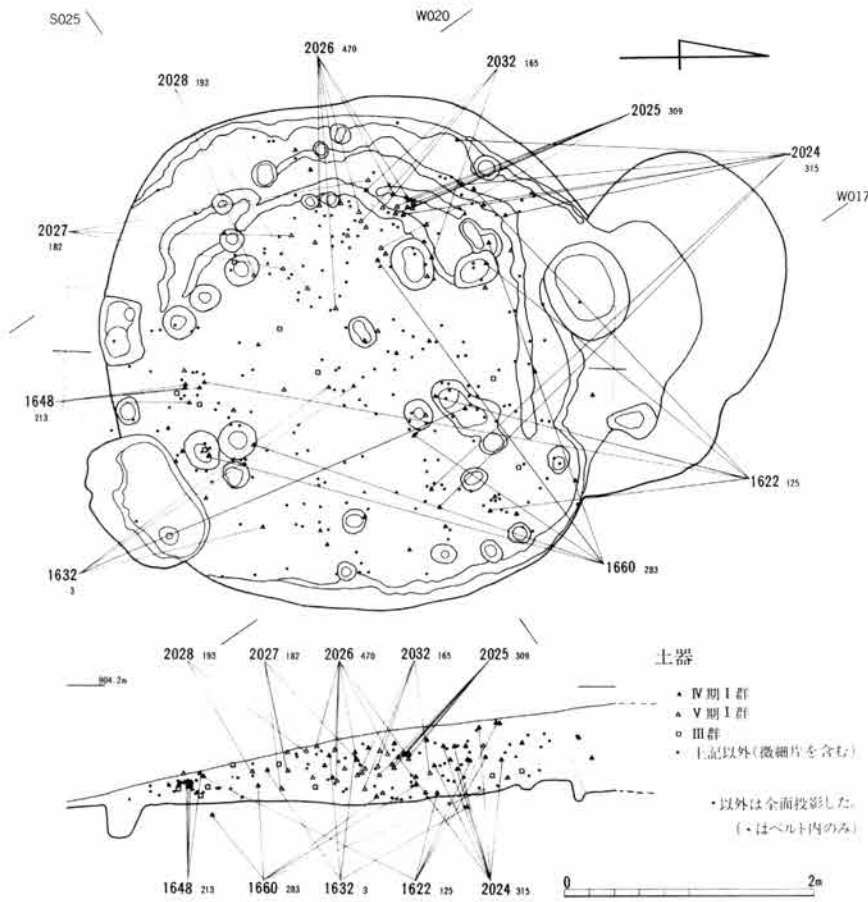
住居址7は、系譜を同じくする者が、2回にわたる拡張を行ないながら継続的に生活を営んだ跡と推定され、その最終的な廃絶時期はV期であろう。

遺物の出土状態 住居址埋土は、壁際の明茶色土(II層)を除けば、基本的には検出面から床面まで単一の土層(I層)としてとらえられ、遺物はほとんどこのI層から出土しB<sub>4</sub>型に属する。その分布状態は全体としてみると、水平的にも垂直的にも特に片寄り認められず、床面出土遺物もみられなかった。土器は主にIV期とV期が混在していたが、その中でV期が住居址の西側にまとまりをもつ傾向があった。全体に小片が多いが一部に接合資料もあり、また、原石・剝片等を含めた石器類は、東側にやや片寄りをみせて出土した(挿図145・146)。

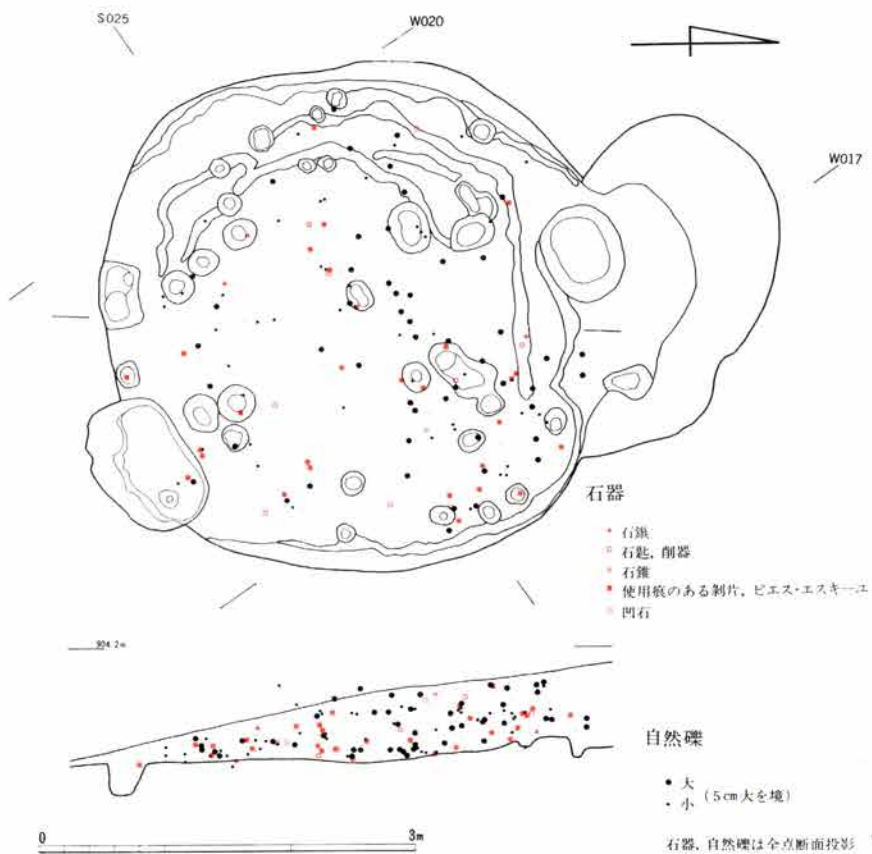
なお、本址では自然礫の出土状態も調べ遺物との比較をしてみた(挿図146)結果、礫も人工遺物と同様にI層全体にわたって出土していることがわかった。これは、住居址埋土の形成を解明する上で、ひとつの



挿図 144 住居址 7 土器出土状態、接合関係図



挿図 145 住居址 7 土器出土状態・接合関係図

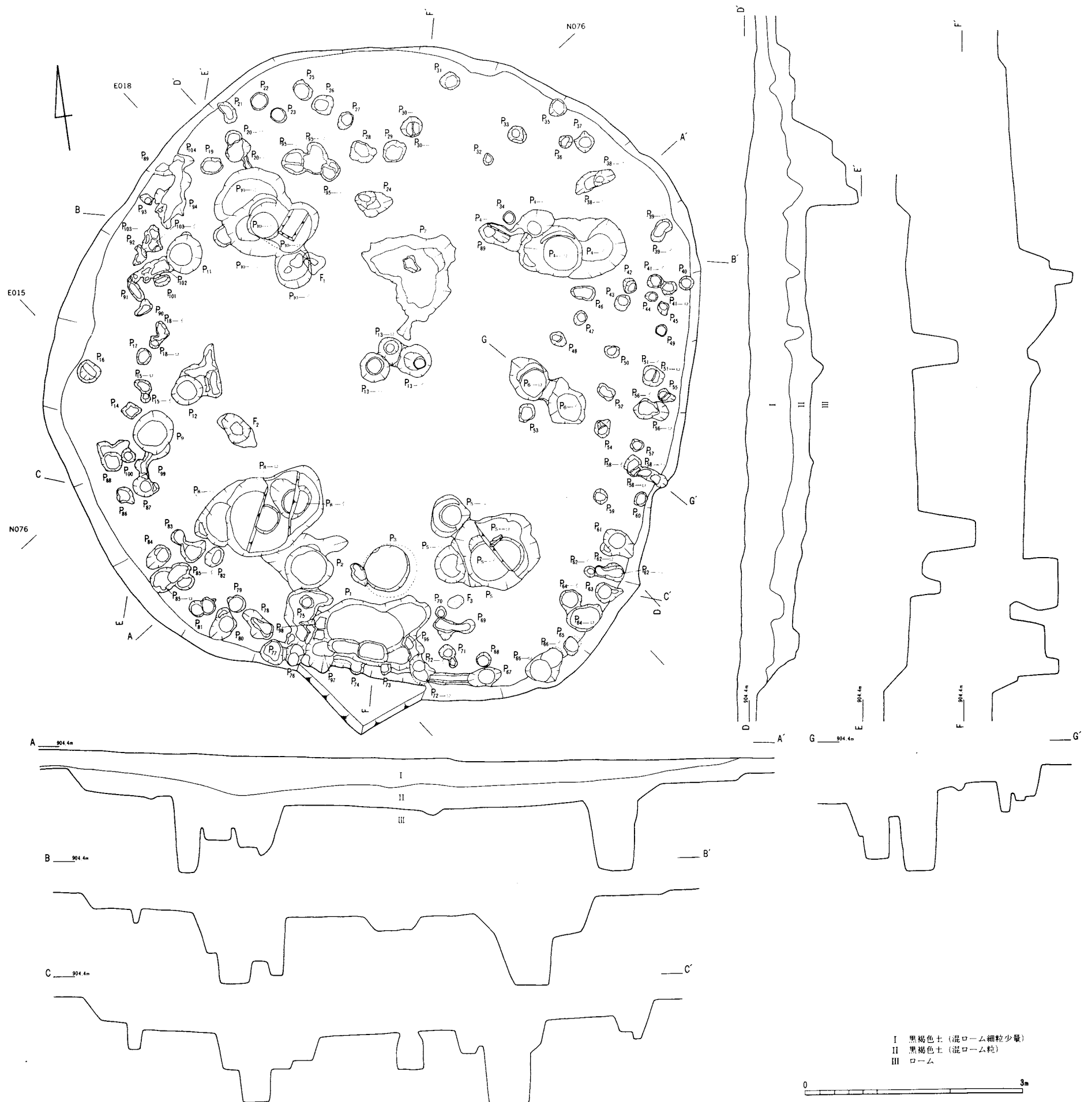


挿図 146 住居址 7 石器・礫出土状態図

手掛りとなる。

遺物 遺物総数は約 420 点と少なく、土器と石器類との比はおよそ 7:3 である。土器の主体は V 期であり、キャリパー形の深鉢 E と浅鉢 C (2032) がある。単位文様は e (2025~2031) が最も多い。2033 の縄文は不鮮明で、複節羽状縄文と思われるが、器形、時期は不明である。2022~2024 は IV 期、1631~1636 は III 群であろう。なお、住居址南側の土層から出土した 1648 は、約 70 m 離れた尾根上の土層 202 出土の土器片と接合した。これは、住居址出土の土器と土層のそれが接合した唯一の例である。

石器は多くない。石鏃 3 (1093~1095)、石匙 1 (1099)、スクレイパー 6 (1097・1106)、石錐 1 (1102)、凹石 3、使用痕ある剥片 21 (1096・1098・1103~1105)、ピエス・エスキュー 3 の計 38 点がある。原石・剥片類は非常に少なく、それぞれ 7 点と 16 点である。(岩崎 孝治)



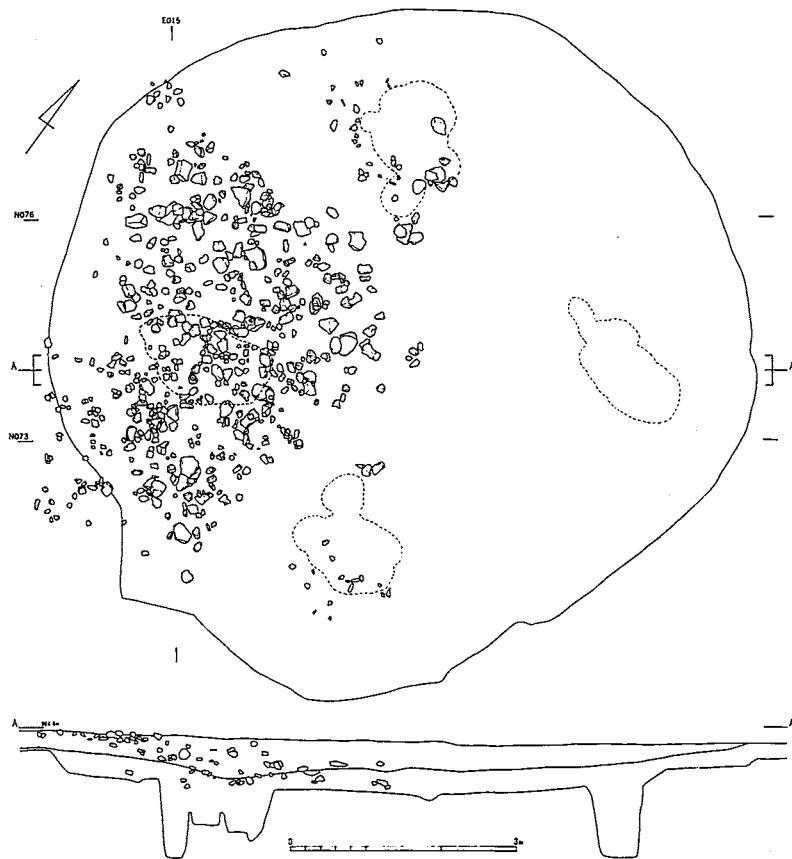
挿図147 住居址72実測図



## (2) 住居址 72(挿図 147~153、図 98~103・143・190~193・225・238、図版 56・57)

遺構 緩やかな北向き傾斜面上、CN 40 付近に検出された。環状集石群東外郭に接している F 型の大形住居址である。住居址の西側部分の埋土から環状集石群の礫が多数検出されたが、その位置は住居址中央に近づくとつれて下がり、埋土の堆積状態とほぼ一致する(挿図 148)。したがって、礫は住居址廃絶後あまり時間を置かずに入り込んだと思われる。埋土からの遺物出土点数が極めて多く、また时期的な幅もっていることと、落ち込み部分が広い範囲にわたることから、遺構の切りあいなどが予想され、サブトレンチなどを入れながら埋土内の調査を進めた。埋土を床面近くまで掘り下げた段階で、内側に落ち込みらしい部分の一部検出されたが、床面がかなりの傾斜をもっていることもあり明確にプランをとらえることはできなかった。検出された多数かつ複雑な柱穴の状況や、遺物の出土が量、質ともに豊富なことから、時期の異なる住居址など、切りあう遺構が存在する可能性が強い。検出時に一部確認された落ち込みなどをもとに、 $P_6 \cdot P_2 \cdot P_{12} \cdot P_{24}$  を支柱穴とするプランが想定されるなど、柱穴の組み合わせは何通りか考えられるが、いずれも住居址とする決定的な根拠をもたない。従って、平面形が隅丸方形を呈し、4 個の台形の支柱穴と多数の壁柱穴をもつという、構造上の共通性を抽出することによって、本住居址の拡張の過程を明らかにした。いずれも住居址類型 F に属し、支柱穴の埋土とおよびその切り合い状況、壁柱穴の並びから、住居址 a の構築に始まり、b から d へと 3 回にわたって拡張されたことが確認された(挿図 152・153)。

住居址 a は、支柱穴  $P_{10}-イ \cdot P_4-ニ \cdot P_5-ニ \cdot P_8-イ$  を 4 箇所に配し、 $6.60 \times 6.60$  m の隅丸方形プランをもつ、4 棟の中で一番規模の小さい住居址であることが推定される。台形に配される支柱穴の下底部分が、他の 3 棟は北側に開くのに対し、a は東側に開くなど、やや支柱穴の配置に違いがみられる。長軸方向は  $N 13^\circ E$  で、他とほぼ同一方向を示す。壁柱穴は南側の一部分などが新しい住居址の構築によって失われているがほぼ全周している。



挿図 148 住居址 72 礫出土状態図

住居址 b は a を南・北・東の各方向に拡張して構築されており、支柱穴として  $P_{10}-ホ \cdot P_4-ハ \cdot P_5-ハ \cdot P_8-ハ$  が a よりも外側に配される。規模は  $7.50 \times 7.20$  m とかなり大形化し、壁柱穴も深いものが多い。

住居址 c は壁柱穴が b とほぼ同様の位置にあることから、b とほぼ同一の規模・平面形と考えられる。支柱穴として  $P_{10}-ロ \cdot P_4-イ \cdot P_5-ロ \cdot P_8-イ$  が b より東側に数 10 cm 移動させて穿たれており、各柱穴の位置と間隔は b とほぼ同様である。東側および南側の壁は d の壁とほとんど重複し、壁高 30 cm 程のかなり急角度の立ち上がりをもつ。

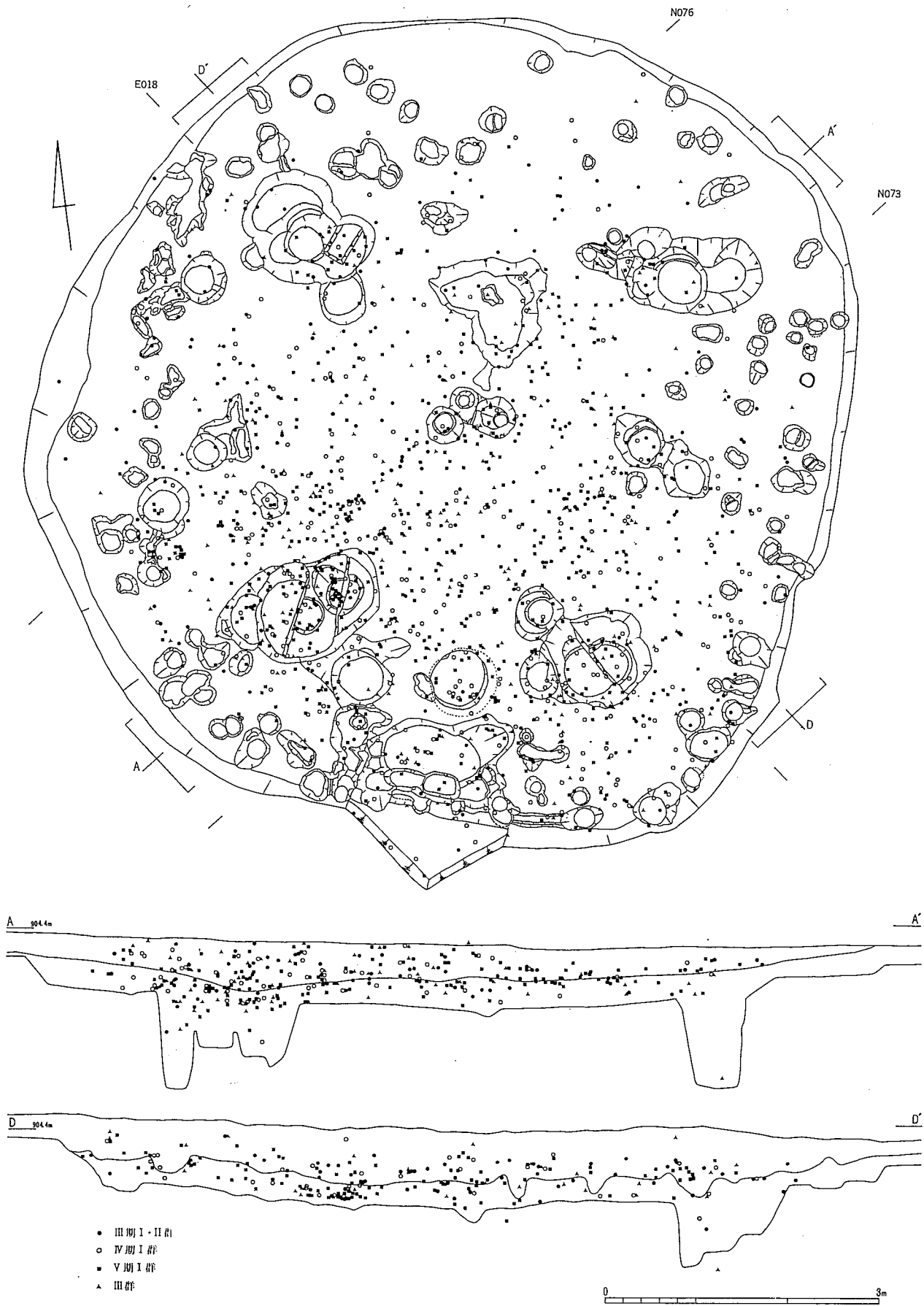
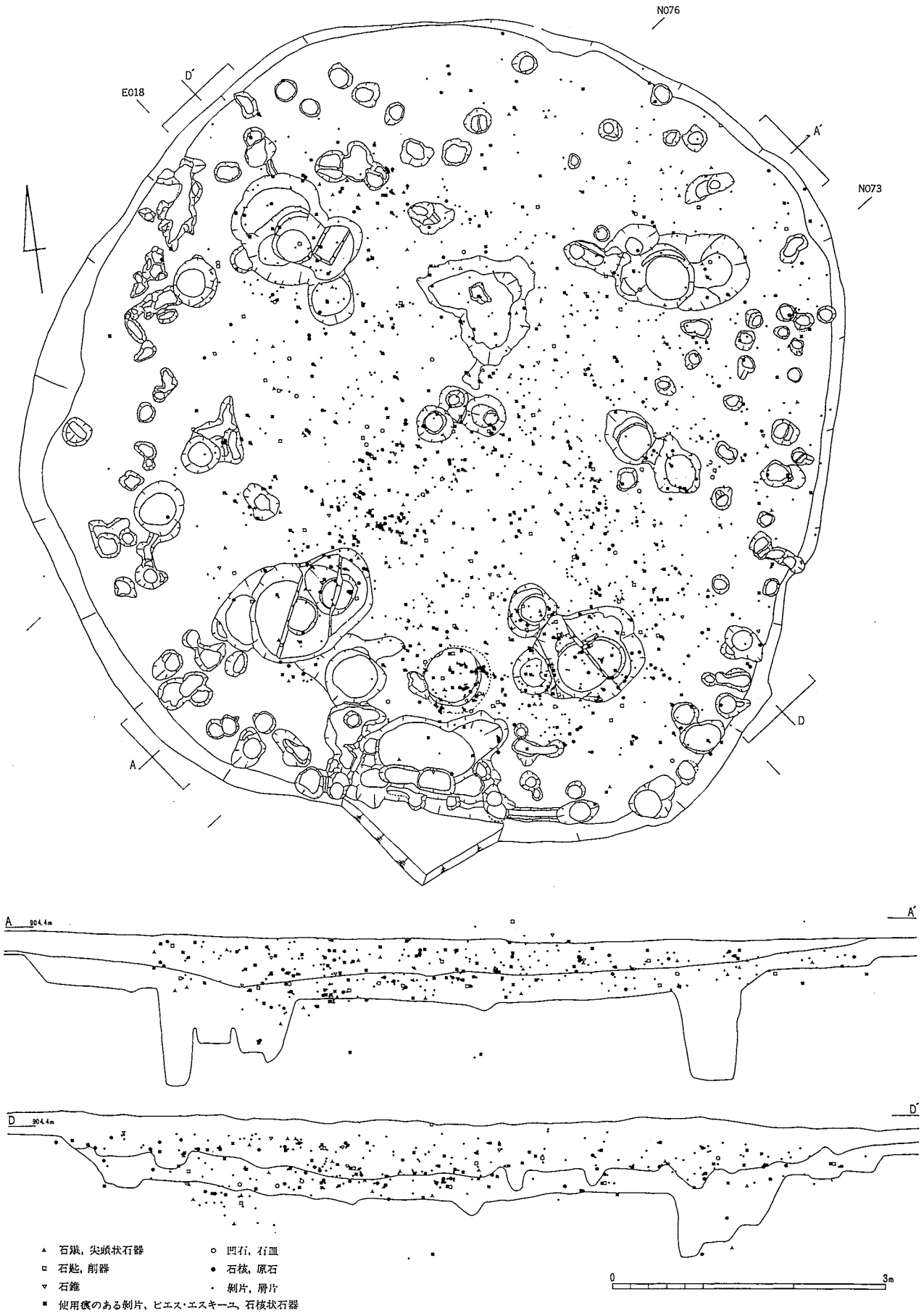


插图 149 住居址 72 土器出土状态图



挿図 150 住居址 72 石器出土状態図

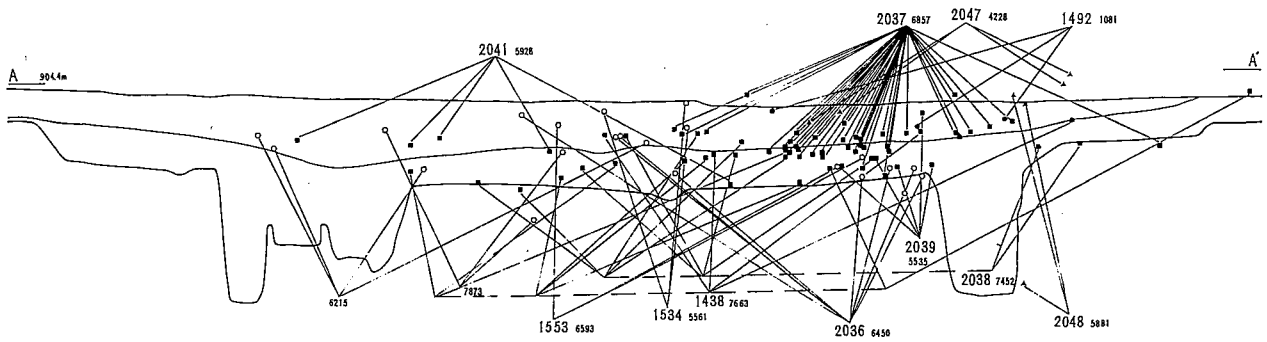
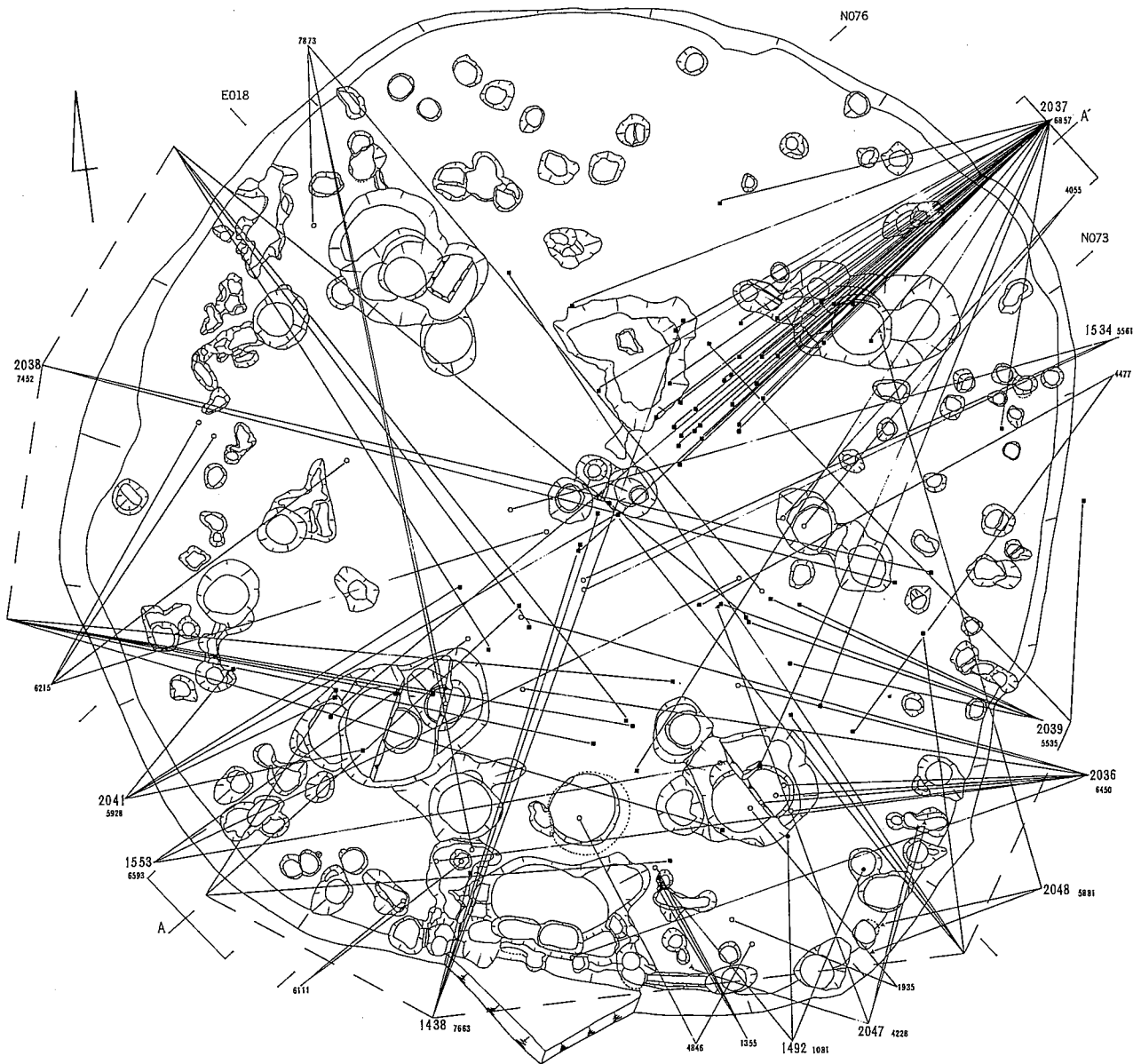
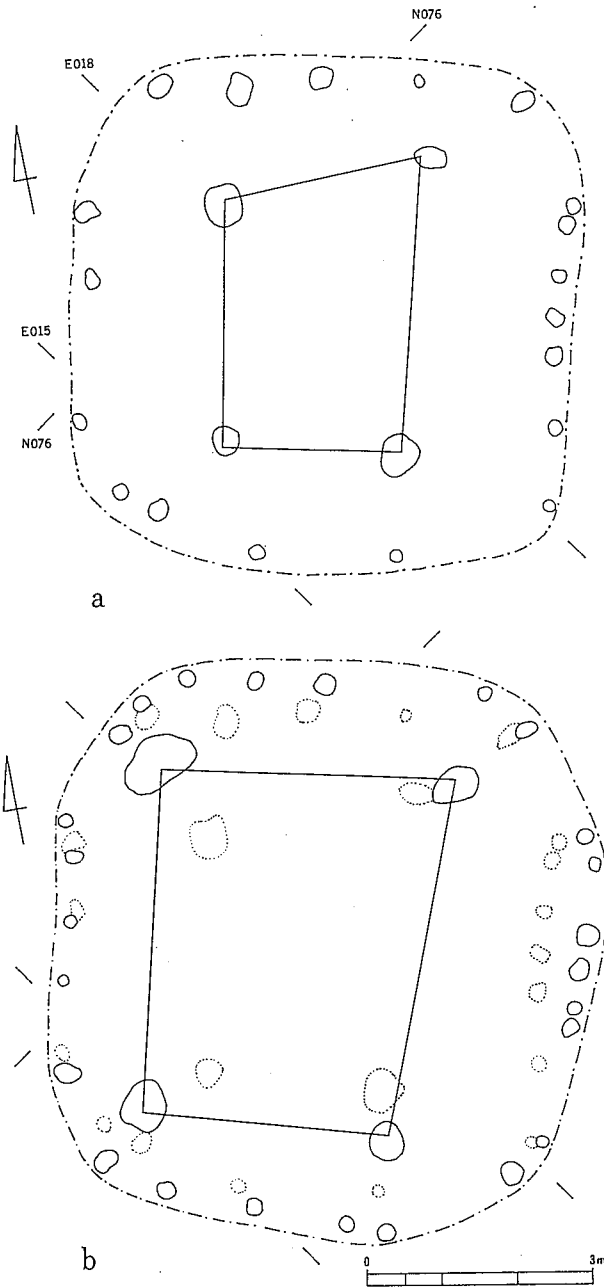


插图 151 住居址 72 土器接合関係図

- III期 I・II 群
- IV期 I 群
- V期 I 群
- ▲ III 群



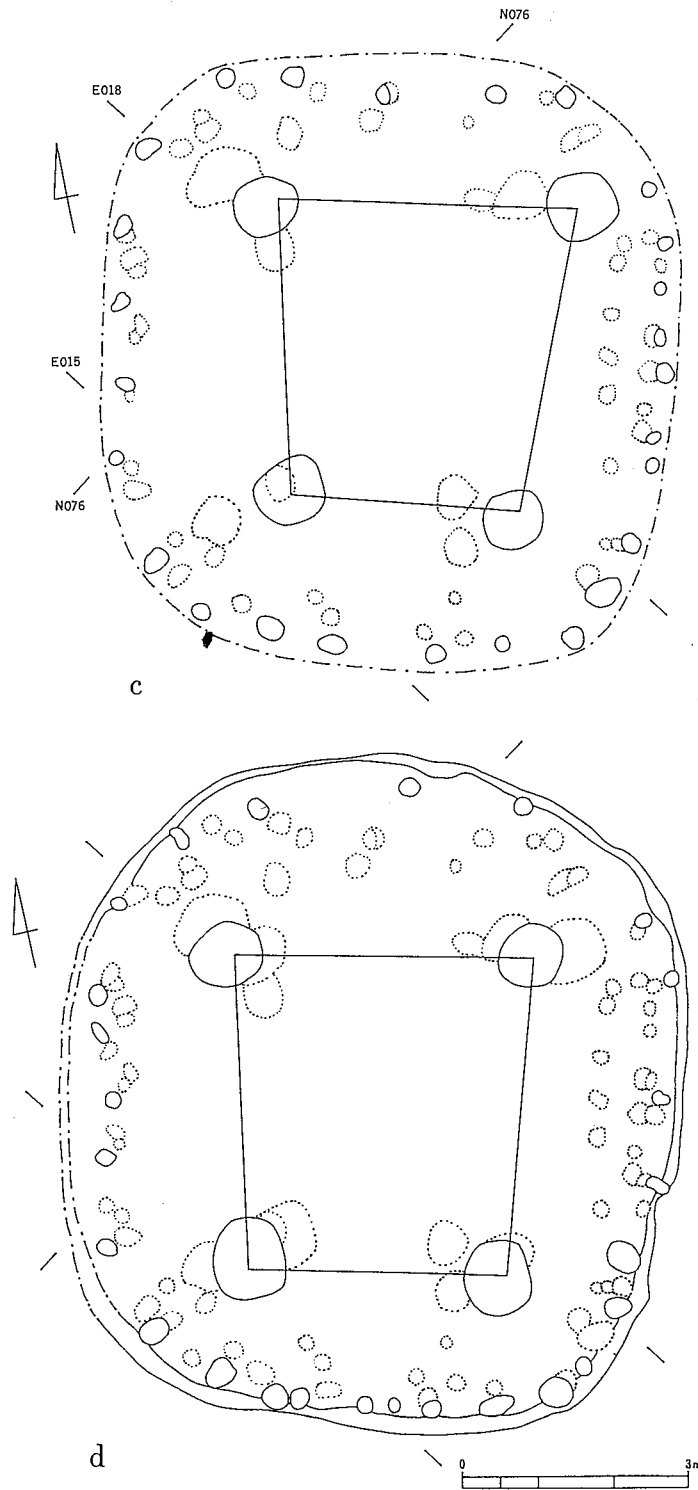
挿図 152 住居址 72 変遷図(1)

に住居址南側部分に集中する傾向がある。この傾向は土器に顕著であり、南半は壁際にまで濃密に分布するのに対し、北壁に近づくにつれ疎になる。層位的な分布をみると、上層(I層)と下層(II層)の境界を中心にして分布しており、床面近くからは比較的少ない。また土器片の接合状況も同様の傾向を示すものが多い。阿久Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の遺物が平面的にも層位的にも混在して出土するが、住居址中央部東寄りの床面上には大形土器片があり、その他の床面やピット内出土遺物にⅤ期の遺物が数多く存在することなどから、住居址 d(最終住居址)は阿久Ⅴ期に比定されよう。住居址 a・b・c の帰属時期は明確にできないが、d とあまり時間的に間隔を置かない時期に溯るものと思われる。

遺物 土器は約 7,050 点に及ぶが、ほとんどが細片であり、点数の多い割に接合できる例は少ない。それらの内訳はⅡ期 4、Ⅲ期 309、Ⅳ期 345、Ⅴ期 590 の計 1,248 点である。この他に明確に時期を定められないものが多数あり、そのうち縄文のみを施した土器片約 1,150 点、Ⅲ群土器が約 220 点出土している。Ⅴ期は比較的器形の判明したものが多い。深鉢は D(2039・1566~1574)と E(1578~1585・2038・2041)、F(2037)に大別される。単位文様も深鉢 D は口縁部に c(2039・1577)、d(1448・1449・1575・1576)、胴部に a を配す

住居址 d は c を北側に若干拡張させた、 $9.03 \times 7.80$  m と本遺跡中最大の規模をもつ住居址である。やや胴の張った隅丸方形で、主軸方向は  $N 14^\circ E$  と他の住居址とあまり変わらない。南・東両壁は立ち上がりも急角度でかなりしっかりしているが、北側は壁高数 cm であり、西側の壁は部分的に不明確であった。ほとんどの壁柱穴が壁に食い込むように穿たれており、北側部分を除いて 70~100 cm の、ほぼ等間隔に配置されている。南側に周溝が部分的に検出された。凹凸はあるが堅くしまった良好な床面は、中央部に向かって播鉢状にかなり急な傾斜をみせており、壁際と中央部の比高差は 30 cm 以上ある。主柱穴として  $P_{10}$  - ハ・ $P_4$  - ロ・ $P_5$  - イ・ $P_8$  - ロが c よりわずかに西寄りに位置している。なお、 $P_8$  - ロは  $P_8$  - イとともに柱痕跡が観察された。 $P_1$ ・ $P_3$  はその形状から、貯蔵穴など付属施設と考えられる。また  $P_7$  も似た形状をもつが不整形であり、内には焼土・炭化物が含まれていた。 $P_9$ ・ $P_{11}$ ・ $P_{13}$  は大形住居址に伴う補助的な柱穴の可能性もある。焼土( $F_1$ ・ $F_2$ ・ $F_3$ )が何箇所かに検出されたが、炉と想定できるものは  $F_2$  のみであり、住居址との関係は全くわからなかった。

遺物の出土状態 総計約 8,000 点を数える出土遺物がほぼ住居址全域に分布し、特



挿図 153 住居址 72 変遷図(2)

1605・1607・2048)、E<sub>2</sub>(1612・1613)、F(1608・1609)、G(1601・1602・2047)、H(1614~1616)などである。II期の土器(1486・1487)は細片がごく少量出土したのみである。

石器は多量に出土したが、土器のあり方から、III・IV・V期のものが混在している。各石器の出土数は石鏃 118(1107~1150)、石匙 20(1151~1163)、スクレイパー 37(1164~1170)、石錐 29(1171~1185・1188)、ピエス・エスキーユ 41(1186・1187・1189・1190)、使用痕ある剝片 228(1191~1208)、石核状石器 6、打製石斧 1(1420)、磨製石斧 4、凹石 43(1660~1667)、石皿 7、先端研磨石器 4 の計 538 点がある。(百瀬 新治)

るのに対して、深鉢 E・F は口縁部を単位文様 e(1578~1585)、胴部を単位文様 b(2040・2041)としており、明確な相違がみられる。縄文のみの土器は深鉢 C(1528)など特徴的な縄文原体を用いるものもみられるが、IV期との判別が明確にならない。浅鉢 C(2042~2045)がかなり多く出土しており、いずれも無文である。IV期は細片が圧倒的に多く、器形全体を復元できる例はなかった。口縁部破片より想定できる器形は、深鉢は A(1519)、B(1509・1511)、C(1523)、D(1547・1550)、F(1535)であり、IV期の器形のほとんどがある。単位文様もIV期の大半がみられるが、eが多く、cは少ない。縄文のみを施す深鉢は、出土した土器片のかなりがIV期に属し、内面の整形を丁寧に施し口唇部に加飾を加えたもの(1518~1524)などがあげられる。浅鉢は浅鉢 C(1470)に代表される。なお、この土器は赤色塗彩がなされている。櫛描沈線と櫛による刺突文を施した土器(2036)は文様構成の上でも特異であるが、胴部上半を擦って再利用した可能性があり、補修孔が4個穿たれている。III期はI群(1505・1515~1517)とともにII群(1451・1452・1488~1504)がかなり多い。I群では器形の判明するものはなく、II群でも深鉢 Da(2034)が復元できたのみである。深鉢 H(1494~1497・1499~1501)と想定される土器が目立ち、単位文様 a(1488~1492)、b(1494~1497・1502)などがある。III群も多様な単位文様をもつものが出土している。D<sub>2</sub>(1604・

2 土壌

合計 31 基であり、V-a 期は A 型 3、B 型 3、C 型 9 の計 15 基、V-b 期は A 型 5、B 型 1、C 型 10 の計 16 基がある。環状集石群の内側に沿うように分布し、立石・列石付近にはほとんどない(挿図 154)。

1) V-a 期

(1) A 型土壌(土壌 115・136・274)(図 44・46、図版 74)

いずれも D 区西側部分に位置する。規模・形状等は個々によって異なる。出土遺物は土器片 10 片程度で多くない。

土壌 115 A I c 型で、大形の平石(60×30 cm)が塙底に横になって検出され、上層に小礫が数個ある。

土壌 136 A III c 型で、北側に土壌状の落ちこみがある。東壁に沿った検出面に厚めの平石(35×25 cm)がほぼ垂直に立っており、その下端に接して平石が検出された。埋土中位より有孔の浅鉢片が出土した。

土壌 274 A II 型に属する。中央部と長軸線上壁ぎわの検出面上に横位の状態で 2 個の平石が検出され、さらに中央の石の下方にも長さ 25 cm の角柱状の石が横たわっていた。

(2) B 型土壌(土壌 201・964・965)(図 46・47、図版 74)



挿図 154 V 期の土壌分布図

長径 100 cm内外、深さ 30~40 cmの規模で、出土遺物は多種にわたり量も多い。

土壌 201 B I c型で、墳底近くに径 25 cm程の 1 個の円礫を伴う土壌である。中央部 I 層と III a 層の間に多量の焼土を含む層が約 5 cmの厚さでレンズ状に堆積していた。上層には土器片が水平に敷き並べられたように出土し、焼土を含む層からは炭化物と骨片が出土した。下層からの遺物の出土はない。

土壌 964・965 共に B II型である。中央部に比較的大きな石を含む数個の礫をもつ土壌で、埋土内からは土器片 50 片以上を含む多量の遺物が出土した。土壌 965 からは破損した磨製石斧、石鏃 2 点をはじめ黒曜石の剝片が多数出土した。

### (3) C 型土壌(土壌 20・140・269・328・330・425・493・747・759)

長径 100 cmとやや大形の C II a 型(269・747)と、径 60 cm前後のやや小形の C II 型(140・328・330・493・759)とがある。土壌 269 を除いて遺物の出土量は少ない。

## 2) V-b 期

### (1) A 型土壌(土壌 35・82・133・335・992)(図 44、図版 74)

V-a 期の A 型土壌と同じく、規模・形状等は変化に富むが、土壌 335 を除いてはかなり深い土壌である。すべて上層に石をもち、遺物の出土量は少ない。

土壌 35 小形の A I c型で比較的深い。一辺 20 cm程の角柱状の石が傾いた状態で検出された。埋土中より彩色土器(図 242-1)が 1 点、他に凹石 1 点と数点の土器片が出土した。

土壌 82 未完掘のため形状を確認できないが、A I c型の深い土壌と考えられる。一辺 40 cm程の 2 個の平石が立った状態で重なるように検出され、上面のそれは検出面より上方につきでていた。

土壌 133・992 漸移層中や住居址床面で検出されたため、掘り下げられているが、ともにかなり深い土壌であったと推定できる。

### (2) B 型土壌(土壌 796)(図 198・200・201、図版 126)

住居址 39 の床面上に検出された B I c型の土壌 796 の一基がある。径 40 cm前後の大きな角礫 4 個をはじめ多くの礫を伴っており、A 型土壌との区別が難しい。中央部で中位に径 40 cm、厚さ 20 cmの焼土を多量に含むブロック土があり、埋土全体に木炭片が多数包含される。本遺跡の土壌の中で最も遺物量が多い。V 期 I 群のキャリパー形深鉢(2251・2252・2255・2256・2286)が目立つ。灰褐色の色調をもつ浅鉢(2284)は、器形は III 群土器に近いが、単位文様・胎土等は特異である。

### (3) C 型土壌(土壌 60・195・245・251・324・758・862・966・972・990)(図 48・49・201、図版 127)

他の遺構との切り合いや調査区域外にかかることで、形状等が確定できない土壌が半数近くある。径 90 cm前後の C I 型(60・195・758・990)が多い。

土壌 972 列石下に位置するため未完掘であり、形状等は明らかでない。列石の下にかかる位置に、ほぼ検出面と同一レベルで高台付角形浅鉢(2288)が口縁を上に向け完形に近い形で出土した。

## 3) 阿久 IV・V 期

縄文のみを施し、内面の整形が丁寧な土器片を出土した土壌は 15 基ある。しかし、この種の土器が、阿久 IV 期、V 期いずれに属するのか明らかにできない現状では、これらの土壌の帰属時期が求められないので本項で一括した。しかし、その多くは IV 期に帰属する可能性がある。



## (1) A型土壌(土壌26・305)(図版73)

ともに小形で、大きな平石または、角柱状の石を伴い、遺物の出土は少ない。

## (2) B型土壌(土壌146・220・232・295・928)(図44・46、図版75)

規模、形状等はかなり違いがあるが、土壌928を除いて埋土上層に数個の礫を伴う。また土壌746を除いて遺物の出土は少ない。

## (3) C型土壌(土壌4・39・346・576・813・911・912・945)(図47~49、図版78・79)

規模は長径80~130cmと差がみられるが、C II a型であり、極く浅い土壌(4・346・911・912)が過半数を占める。この種のすべての土壌からは、上面に水平の状態で10数片の縄文をもつ胴部上半部の深鉢の同一個体片が出土した。土器片が土壌中央部に集中するか、長軸線上の壁際に出土するかの二者がある。なお、土壌4では土器片のすぐ横から凹石が1点出土した。

## 4) 時期不詳

帰属時期のきめられる土壌は109基に過ぎず、他の675基は時期を決定する積極的根拠がない。ここでは形状の細分類に従ってその概要を述べ、時に記述すべき内容のある土壌についてのみ列記した。なお、類型別の土壌数(表4)および規模別土壌数(表8)はそれぞれ表に示した。

## (1) A型土壌(図44~46、図版73・74・76~78)

A I a・A I b型 径80cm前後の規模で、深さ10~25cmと浅い土壌である。検出面に横位の状態で平石が検出された。埋土は単一のものがほとんどである。

A I c型 A型土壌の中では18基と検出数がもっとも多い。規模60~80cmと中形が大半を占め、100cmを越えるものはない。深さ25~40cmと比較的浅い例が多く、埋土は単一土層と「U」字形堆積とに2分される。総じて石の検出位置は埋土上層であり、一辺40cmを越える大形の平石が壁際などに斜めまたは水平の状態で検出された。黒曜石の石核・剥片等15点程が出土した土壌770を除いて遺物はほとんどない。

A I d・A I e型 規模・深さともA I c型に類似する。ほとんど単独の石が検出面近くに横位の状態で検出された。土壌250では径5cm前後の黒曜石の原石13点が出土した。

A I f・A I g型 径50~60cmの小形の土壌であり、2個の平石が水平に重なって検出された土壌11を除き、単独の比較的大きな平石か角柱状の石を伴う。埋土は「U」字形堆積が多い。

A II a・A II b型 長径100cmを越える大形であるが、深さは15cm前後ときわめて浅い土壌が多い。いずれも長辺50cm以上の大きな平石が水平状態に伴出しており、複数の石をもつ土壌も半数ある。石の平面的位置が土壌上面では、ほとんどが長軸線上壁際に寄り、中・下位ではほぼ中央部にある。埋土は「U」字形堆積が多い。

A II c型 規模や石の検出位置とその状態は個々の土壌でかなり違うが、やや浅い土壌と深い土壌に2分される。土壌461では転用した石皿が土壌検出面から斜めに傾いた状態で出土した。

A II d型・A II e型 径60~70cm、深さ20~40cm程の類似した土壌で、石を検出面あるいは上層に伴う。土壌503では欠損した柱状の凹石が垂直に立った状態で検出された。

その他のA型土壌は11基ある。A III c型の3基を除いては平面形等の形状が異ったり、形状不明の土壌である。土壌267は長径に対し極端に深い土壌であり、85×30×25cmの角柱状の大石が土壌を半分覆うように上部に横になって検出され、埋土からは土器片約30点と凹石、石鏃等が出土した。

(2) B型土壌(図46・47、図版74・

76・77)

表4 類型別土壌集計表

B I a・B I b型 径60~80 cm前後、深さ15~20 cmとほぼ類似した規模をもつが、B I b型の規模はやや大きい。いずれも礫を上面に伴い、A型土壌に近い形態を示すものもある。土壌671は埋土内に小礫がかなり入り込み、集石との区別が難しい。埋土にはかなりの木炭片が含まれていた。

B I c型 長径が30~100 cmと変化に富むが、A I c型と同じく大形の土壌はない。深さが長径とほぼ同値である深い土壌と、比較的浅い土壌とに2分される。10~20 cmの角礫を1~4個伴う例が多い。土壌631・632は多数の小礫をもち、土壌272は上面に径2~5 cmの小礫が約40個水平に敷き並べられたように検

	断面形 平面形	a	b	c	d	e	f	g	h	計
		A型土壌	I	4	1	24	7	2	1	5
II	5		3	11	4	2		1		26
III			1	3				1		5
IV								1		1
V	1									1
小計	10		5	38	11	4	1	8		80
B型土壌	I	5	1	26	2	1	1	2		39
	II	8	4	12	3	3				31
	III	1		1	1					3
	IV					1				1
	V	1			1					2
	小計	15	5	39	7	5	1	2		77
C型土壌	I	40	16	125	47	33	16	36		327
	II	60	18	58	25	18	1	9	2	200
	III	11	2	11	5	5		2		37
	IV	4	2		2	3				12
	V	4	4	9	4	11				35
	小計	119	42	203	83	70	17	47	2	627
合計	144	52	280	101	79	19	57	2	784	

出された。土壌934は転用した石皿(1547)を用いている。

B II a・B II b型 長径30~100 cmの中形と、150 cmを越える大形とがある。いずれも、長径に比較して、浅い土壌である。上面に礫を1~数個伴うが、平面的位置は個々で異なる。

B II c型 長径70~100 cmの土壌が大半であり、A II c・B I c型と同様に、70 cm前後の深いものと、30 cm前後の浅い土壌がある。礫の検出位置、個数等は個々でかなり相違がある。

B II d・B II e型 長径200 cm近い土壌799を除いて、規模や深さはB II cに似る。

その他のB型土壌は、他の遺構との切り合い等ではっきりしないものも多い。平面形が隅丸方形(III)の土壌3基のうち、土壌302は上面に約15個の小礫がほぼ水平に並び、また、土壌332では比較的大形の礫4個を上層に伴っていてA型土壌に近い。

(3) C型土壌(図47~50、図版73・74・76・78)

C I a型 径50~60 cmの小形と90~110 cmのやや大形があり、深さは20 cm前後が大半を占める。埋土は単一か「U」字形堆積が多い。遺物は土壌264で約50点、土壌116・188・759・1003で10数点出土したが、他ではみられなかった。

C I b型 土壌308のみ長径が200 cmと大形で、他は40~100 cmの小・中形である。深さは15~20 cmと浅く、壊底が一方に傾斜するものと凹凸のあるものが目立ち、小ピットをもつものも数例ある。遺物の出土量は少ないが、土壌308は50点の土器片、黒曜石の剝片などとともに、多量の木炭細片が出土した。

C I c型 径50 cm以下が30%強を占めるなど小形土壌が多い。また、浅い土壌が多いが、径50~70 cmのものには、50 cm前後の深いものも10数基ある。遺物の出土量は少なく、皆無の土壌が70%弱を占める。

C I d型 C I c型と同様に小形が多いが、径60~80 cmの中形土壌の割合が高くなる。壊底は鍋底形が多いが、梯形状もある。深さは30 cm前後でC I c型よりも深い例が多い。遺物の出土は少ないが、土壌625では凹石と土器細片とともに、住居址57で検出されたと同じ焼けた粘土塊3点が出土した。

C I e 型 規模は大小の変化に富むが、径 60～90 cm の中形が比較的多い。二段底になるもの、径 30 cm 以上の大形ピットをもつものも多く、小形ピットを穿った土壌は 73・598 等数基に過ぎない。I d 型と同じくやや深い土壌が多く、埋土は「U」字形堆積が一般的である。

C I f 型 径 60 cm 以下の小形土壌である。径と深さがほぼ近い値を示す土壌から、深度が 1.5 倍ぐらいの特に深い土壌までであるが、土壌 710 以外に出土遺物はない

C I g 型 C I f 型と同様に小形である。土壌 303 は壙底に小ピットをもつが、他はやや丸い逆円錐形の壙底である。

C II a 型 長径 70 cm 以上の中・大形が多く、深さは逆に 10～20 cm と浅い土壌が目立つ。ほとんどは長径と短径の比が 1 : 0.7 前後で、極端に長円形になる土壌は数基だけである。土壌 351 は上面に焼土が、土壌を半分覆うように、120×80 cm の範囲で楕円形状にごく薄くみられた。土壌 219 でほぼ中央壙底近くから滑石製品(1738)をはじめ、約 15 点の遺物が出土した以外出土遺物は少ない。

C II b 型 長径 150 cm 前後の大形土壌の割合が高いが、深さは 15～30 cm とごく浅く、壙底に凹凸のある例が多い。土壌 995 で凹石が 2 点以上出土した以外に、遺物はほとんどみられない。

C II c 型 長径 70 cm 以下の小形土壌で、深さ 30 cm 前後とやや浅く、埋土も単一土層のものが多い。

C II d 型 小形が多い。点数は少ないが、遺物のある土壌が半数近くある。

C II e 型 長径 60～100 cm の中形で、二段底となる例が多い。土壌 181・1017 は小ピットをもつ。

C II g 型 ほとんどが長径 50 cm 以下の小形であるが、深さは 60～80 cm と深い。逆円錐形の壙底が多い。

C III a・C III b 型 長径 60～100 cm の中形が多いが、平面が楕円形に近いものや方形になるものなど、個々の土壌によってかなりの違いがみられる。深さ 10～20 cm とごく浅く、埋土は単一土層が多い。

C III c・C III d・C III e 型 土壌 641・792 に代表される。平面形は整然とした隅丸方形から、不定形のものまでであるが、深さは 30～40 cm のしっかりとした土壌が多い。

C IV 型 複数の土壌が切り合った結果、このような平面形になった可能性もあるが、埋土は単一土層と「U」字形堆積があり、同一時期に構築されたと判断できる。

C V 型 土壌 30・159 にみられるように三角形のものと、全く不定形のものがある。

(百瀬 新治)

## 第6節 阿久VI・VII期

八ヶ岳南麓地方の編年で、阿久VI期は日向I・II(諸磯C)式期、VII期は籠畑I(十三菩提)式期〔武藤1966・1968〕に該当する。完形品はなくすべて破片で、VI期が約60片、VII期が約40片あり、遺跡の全体から散漫に出土した。特にC・D区の西側からは、多くはないが集中して出土している。遺構の検出はみられなかった。

### 1) VI期の土器(図212-2511~2523、図版176)

半截竹管による集合沈線で直・曲線のモチーフを描くものが多く、その上にボタン状突起、結節状浮線文、篋切浮線文を貼付するものも見られる。胎土は長石・石英・雲母その他の砂粒を含み、多くが薄い黄褐色を呈する。器形ははっきりしないが、口縁部は平口縁と波状口縁が見られ、外反する形態が主である。口唇部は、平坦(2511・2512・2520・2521)、やや内傾(2519)、外傾(2513)か、また外側に粘土紐を貼付するか折り返し肥厚化させたもの(2514)などがある。外側に張り出す底部が主である。

### 2) VII期の土器(図212-2524~2532、図版176)

半截竹管の腹部、背部による結節状沈線<sup>(1)</sup>で曲線、直線のモチーフを描く土器が主で、地文に半截竹管による平行沈線があったり、最初に棒状工具による沈線を施文するものも見られる。胎土は長石・石英・雲母などの砂粒を多く含み、赤褐色のものが多い。器形は口縁部が外反する波状口縁が主である。口唇部はやや外傾させ肥厚化するもの(2525)、外側に粘土紐を貼付するか折り返し肥厚化させたもの(2526~2528)があり、底部はVI期同様外側に張り出す例が大半である。VII期は波状口縁が主であることなどから、日向I・II式期の波状口縁の土器に近似する器形になると思われ、籠畑I式期の古いタイプに比定してもよいであろう。

以上、両期の土器を簡単に記述したが、すべて遺構外であるのでこれらが共伴した可能性も考えられる。VI期の器形は、V-b期の深鉢Aの波状口縁の波状部分が大きくなり、外反した大波状口縁に変化していったと考えられる。それがVI期後半には口縁が肥厚化し、VII期へと受けつがれ、籠畑〔武藤1968〕・荒神山〔岡田他1975〕等の諸遺跡に見られる、口唇部が内屈し、塔状把手状の波状口縁をもち、胴部に4個の把手をともない、底部が強く外反しながら張り出す土器へと変化したものであろう。また、波状の大形化は北白川下層IIc式土器からの影響もあったと考えられる。V期に多い深鉢E・Fは、VI期には相当減少したらしくほとんど認められないが、VII期にはいと再び増加しはじめ中期へとつながっていく。文様はV期からの沈線文、浮線文が受け継がれる。浮線文はV期の斜位の篋切浮線文が、VI期になり結節状浮線文に変化し、VI期後半には縦の篋切浮線文が出現する。VI期後半の篋切浮線文は、V期のそれに比較すれば、2~3本の隆線を1度に篋切りしている手抜き手法ではあるが、結節状浮線文と同じ文様効果であるので、これの退化した姿と思われる。VII期の結節状沈線文は、結節状浮線文が変化したものと考えられる。V期からの沈線文は、VI期に集合沈線化し、綾杉状の平行沈線が多用されるようになるが、VII期には消失する〔武藤1965・1968〕。

本遺跡の両期の遺物は、C・D区の西側に集中していることから、その未発掘地区に遺構が存在すると予想される。また、E・F区の東側等からも量は少ないが両期の土器片が出土しているので東側にも遺構が存在する可能性がある。

註1 岡谷市扇平遺跡(会田他1974)ではこれを、半截竹管の使い方により、結節状沈線文と結節状凹線文に分類している。

(島田 哲男)

## 第7節 阿久VIII期

### 1 住居址

#### (1) 住居址8(挿図155、図213、図版176)

遺構 EN 61 付近の丘陵南斜面に検出されたが、その西側は用地外になるために、約半分は未調査に終わった。III期の住居址13の北壁の一部を切り、さらにその埋土中にロームを貼って床面を作っていた。また、南壁部分は黒色土となり、検出はできなかった。加えて、未調査地域をかなり残しているところから、その平面形は不明であるが、多分、中期に一般的な円形プランとなるであろう。住居址中央部と予想される場所に石囲い炉があった。安山岩の転石利用の方形石囲い炉で、径58cmである。北壁に接して断面形がややフラスコ状となる小ピットが検出されたが、他に柱穴等は検出できなかった。

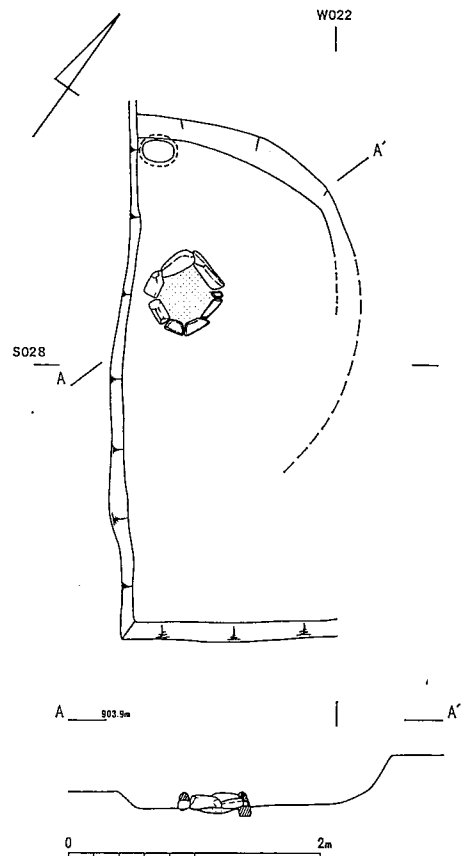
出土遺物 少量の土器片が埋土内から点在して出土した。いずれも縄文中期藤内期で、石囲い炉の特徴からもその年代はほぼ妥当といえよう。

#### (2) 住居址10(挿図156・157、図213)

遺構 南斜面のEY 49を中心として検出された小形の住居址で耕作等の攪乱により一部壁が確認できなかった。浅い不整形円形のプランで、壁はなだらかに立ち上がる。床面はローム層内に作られているが、小さな凹凸があり軟弱であった。ほぼ中央部にあるP<sub>1</sub>は、掘鉢状の掘り込みで、底部付近に少量の焼土がみられ、炉址であろうが、石組の石は抜かれている。南側には胴下半部欠損の深鉢を口縁部を下にして埋設していた。北壁側には立石らしい角柱状の自然石(長さ55cm、幅15cm)が折半された状態で倒れていた。周溝・柱穴等は検出できなかった。

遺物 埋土中の13点の土器細片と埋設土器がある。埋設土器は口縁部に横帯区画文を施し、胴部にLRの縄文を縦にこころがした典型的な加曾利E III式で、八ヶ岳西南麓ではきわめて少く、胎土も当地方の土器とは異なり搬入品と考えられる。

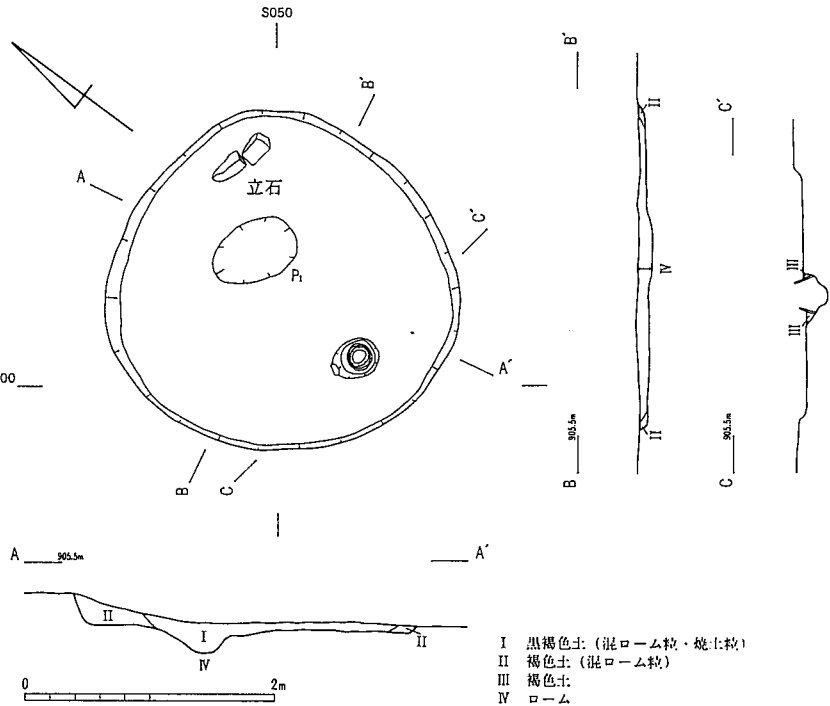
(佐藤信之)



挿図155 住居址8実測図

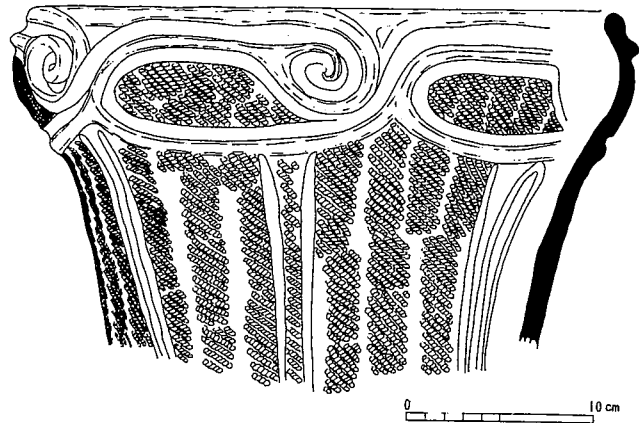
### 2 包含層出土の土器(図212・213、図版176)

九兵衛尾根 I・II、新道、藤内 I・II、井戸尻 I・III、曾利 I～V 各式計 200 余片出土した。九兵衛尾根 I・II、新道、藤内 II、曾利 II 式は 1～3 片と微量であった。藤内 I 式はキャタピラ状結節沈線の施文された土器が主体で約 20 片、井戸尻 I 式は沈線文、隆帯による区画文、三叉文、楕形文などや縄文、撚糸文ある土器片が約 50 片、井戸尻 III 式は井戸尻 I 式と同様の文様要素もつ土器片が約 60 片で、阿久 VIII 期の中ではもっとも



挿図 156 住居址 10 実測図

多い。曾利 I 式は条線、縄文を地文として隆帯や沈線で施文した曾利式系、唐草文(梨久保式 B 類)系から約 30 片、曾利 III 式は縄文や斜行する条線を地文とし、沈線で直線や波状の懸垂文を施文した約 15 片、曾利 IV 式は縄文や綾杉状の条線を地文とし沈線で直線や波状の懸垂文を施文した約 15 片、曾利 V 式は縄文を地文とし沈線を施したり、磨消縄文及び微隆帯あるものなど約 30 片ほどが出土したが、量はやや少ない。

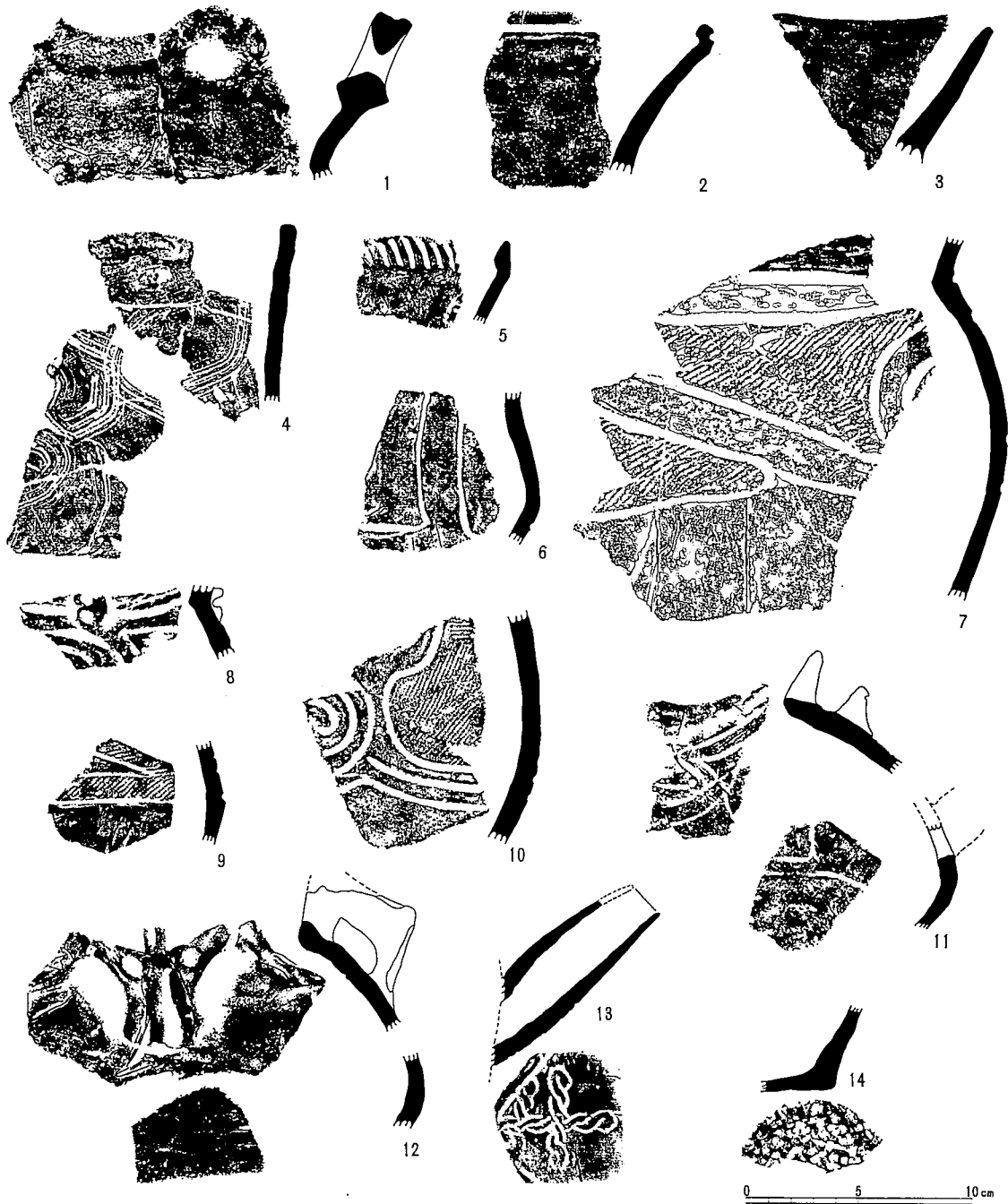


挿図 157 住居址 10 出土土器実測図

VIII 期の前葉・中葉においては各系統土器の様相がはっきりとはしないが、後葉においては曾利 I 式期では曾利式系・唐草文系・加曾利 E 式系、曾利 III・IV・V 式期では曾利式系・加曾利 E 式系が共存している。なお、付近で同時期の土器を出土した遺跡は藤内 I 式期では北隣の柏木南遺跡、井戸尻 III・曾利 I 式期では南隣の居沢尾根遺跡があるので、何らかの関係があったとも考えられる。(島田 哲男)

## 第 8 節 阿久 IX 期

阿久 IX 期は縄文時代後期に属するが、これに該当する遺構は検出されない(挿図 158、図版 176)。遺物は土器片約 60 片がほぼ遺跡全域に散在するように出土したが、その半数は D 地区からである。すべて破片であり、器形全体が窺える個体はない。大半が堀之内 I・II 式土器に対比でき、深鉢と注口土器がある。深鉢は口縁部を大きく外反させ、頸部で強く屈曲して張り出した胴部にいたる器形(1～3・5～10)が多い



挿図 158 阿久IX期の土器拓影図

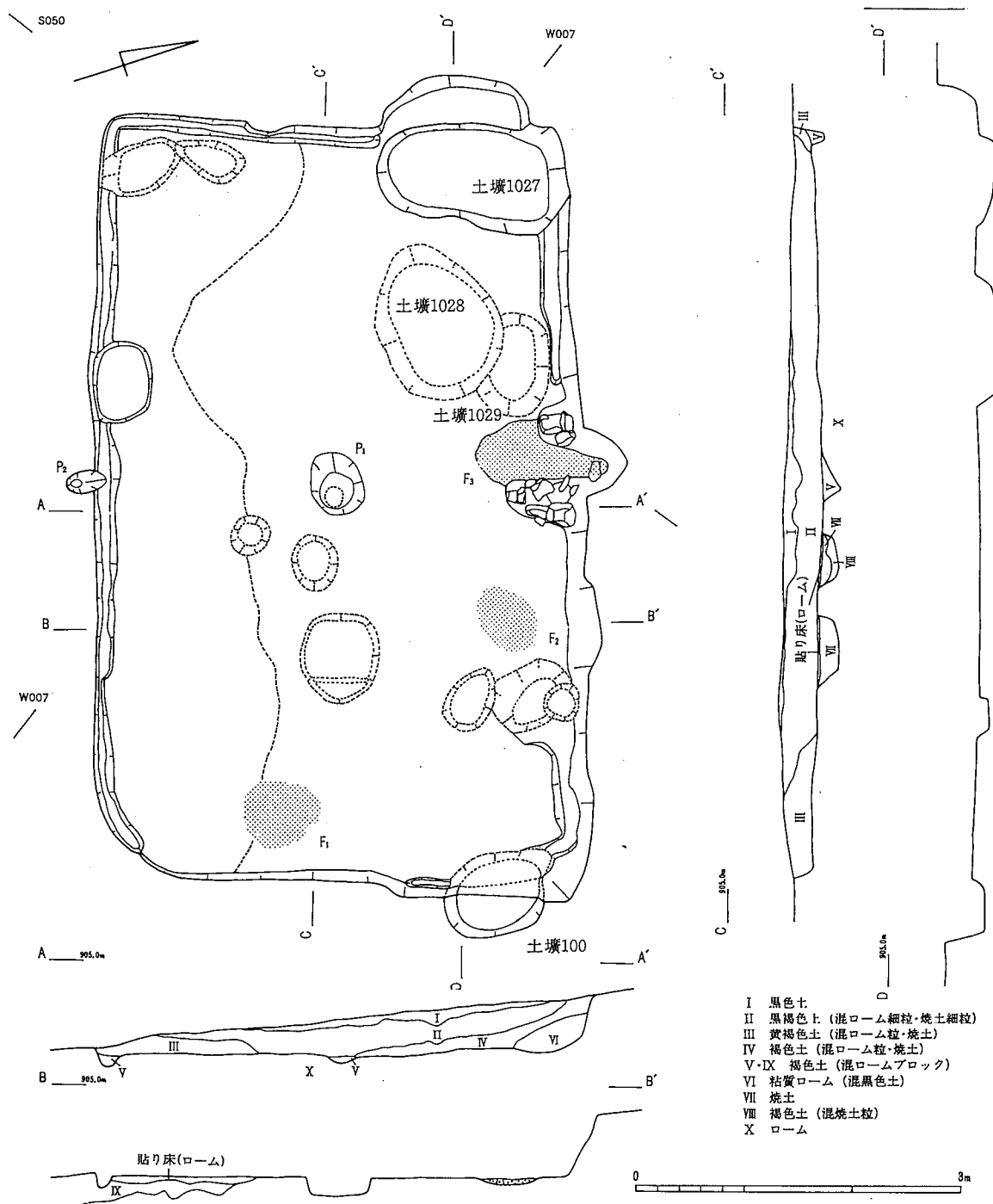
が、口縁部がわずかに外反するだけで、底部まであまり屈曲しない器形(4)もわずかに存在する。篋などを用いて太めの沈線による直・曲線の区画文を描き、その中に縄文を施した土器(7~10)が目立つ。無文の深鉢(1~3)もあるが、いわゆる精粗の差は明瞭にとらえることができない。注口土器は2個体(11・13)ある。陰刻された文様を注口部下側にもつ土器(13)は加曾利 B 式土器に比定される。また、口縁に堀之内式土器に類似した把手をもつ土器(12)も注口土器の可能性はあるが、13が精製粘土を用い、表面の調整はミガキを施しているのに対し、11・12は胎土、整形等あまり良好とはいえない。網代痕をもつ底部(14)が1点出土している。調査範囲内で遺構が確認されていないが、比較的遺物が集中した西部地区に小規模の遺構群があるものと思われる。

(百瀬 新治)

# 第9節 阿久X期

## 1 住居址

(1) 住居址1 (挿図 159~162、図 144・146、図版 59・203)



挿図 159 住居址1 実測図

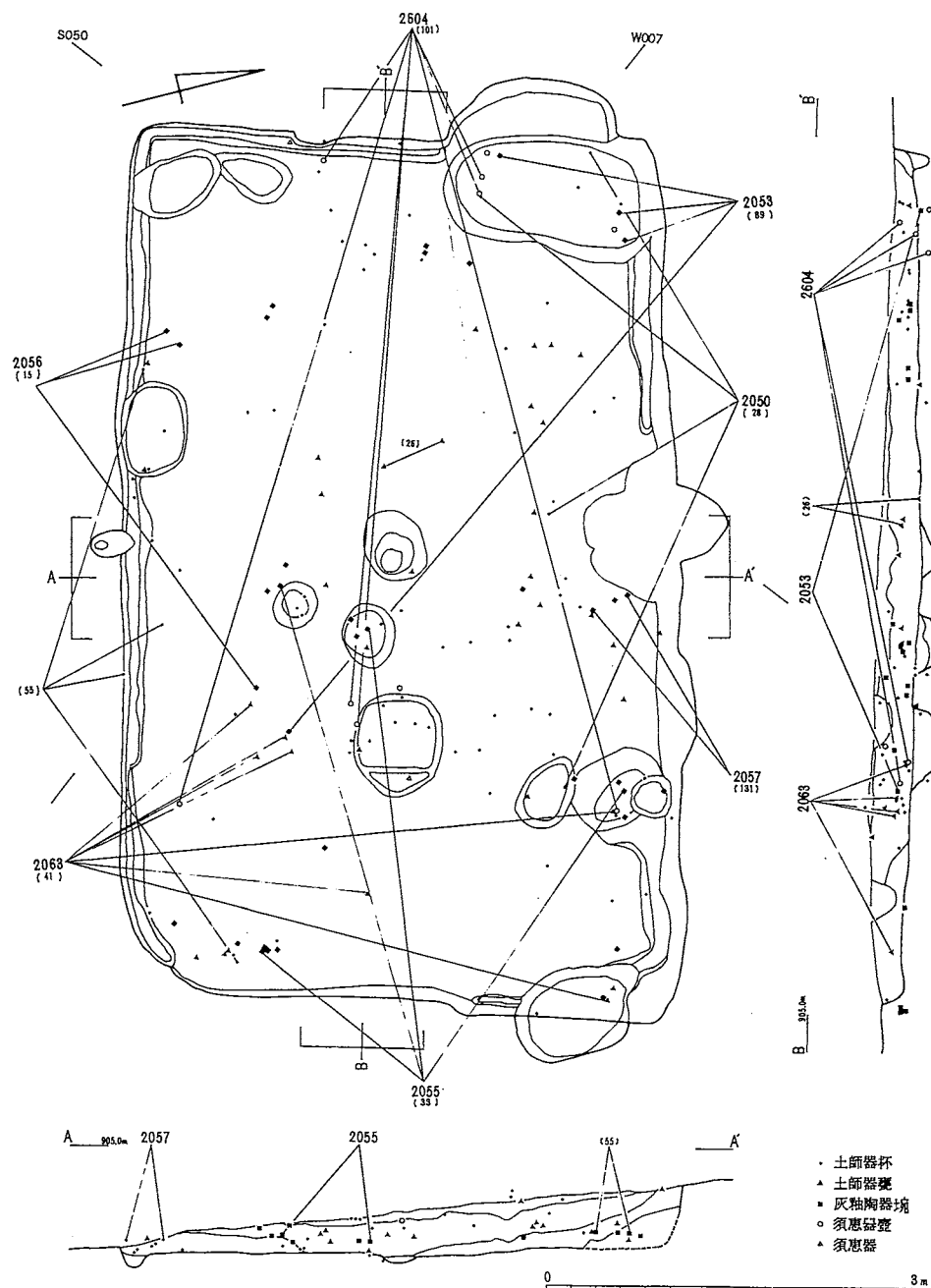


EY 49 を中心に検出されたX期最大の住居址である。阿久尾根南斜面にあるため、南壁のみは流出しており周溝だけであった。

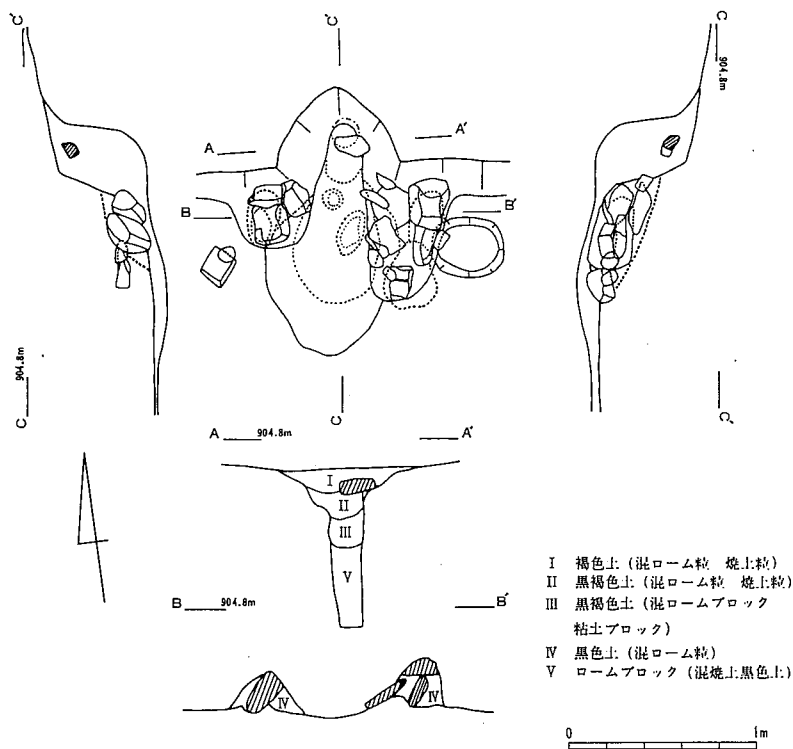
東西に長い住居址で、北西隅に張り出し部がある。床に1.80×0.99m、深さ15cmの掘り込みがあり、調査時は上面が堅かったため、別の遺構と考えたが、遺物の接合、張り出し部との関係を考え、住居址の付属施設とした。床面はほぼ全体がローム層上の褐色土層までであったものを、褐色土を掘り取ってロームブロックにいれかえて、上面をたたきしめたものと考えられる。この南壁東側はそのような造作がなされていないためにやや床面が軟弱であるが、全体には小さな凹凸があるものの堅くたたきしめてある。床面はこのほか各所に掘りかえされた痕跡があり、その大半はロームブロックと焼土粒で埋まっているが、中には焼土粒と熱で変質したローム粒で埋まるもの、焼土粒とローム粒を含む褐色土で埋まるものなどがある。いずれも何のために構築したかはわからないが、埋められるまでの時間の経過はあまりないものと考えられる。またいずれも上面がたたきしめられていることから、住居使用中に行なわれたものであること

とは間違いはない。

かまどは痕跡を含めて3箇所(F<sub>1</sub>~F<sub>3</sub>)あり、最終かまどF<sub>3</sub>は北壁中央やや西寄りの石組粘土製かまどである。かまど右側石はロームを掘り残した部分に小さな穴を掘ってすえており、この掘り方部分に掘削工具痕がみられた。このロームが床面より高く掘り残されていることから、拡張前の住居の規模を知る手がかりになるものかもしれない。煙道部の下にロームブロックで埋められたピットがある。かまど構築



挿図 160 住居址1 遺物出土状態図



挿図 161 住居址 1 かまど実測図

は欠ける。周溝の形状は幅 15 cm、深さ 10 cm内外の断面逆台形の掘り込みがある。住居ほぼ中央で検出された直径約 25 cm、深さ約 70 cmの柱穴 P<sub>1</sub>は、底にとどく直径約 15 cmの丸太材と思われる柱痕跡がみられた。かまど煙道部のものこの他には柱穴と断定できるものは検出されなかった。かまどの移動を伴う拡張のあったことが考えられるが、拡張前の住居の規模を知る積極的な手がかりはない。

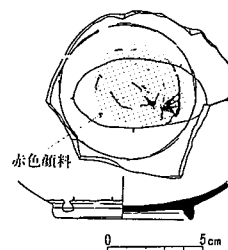
遺物 住居址内のほぼ全域より出土したが、中央部からは少ない。また接合できた土器は、ほとんどが床面付近でかなり広範囲に見られる。

出土量が多く良好な資料が得られた住居址である。土器と鉄製品がある。土器は供膳形態では、土師器坏 B 3 (2049~2051)、灰釉陶器碗 7 (2052~2058)・皿 1 (2059)のほか土師器坏片 42、灰釉陶器碗片 19、須恵器坏片 1がある。貯蔵・煮沸形態は、須恵器長頸瓶 1 (2064)、小形甕 A 1 (2060)・同 C 1 (2063)のほか甕の破片が 31 点出土している。長頸瓶はX期の貯蔵形態と考えられる唯一の土器である。これと碗の 1 点(挿図 162)には朱が付着している。パレットであろう。そのほか鉄製品として、刀子・鎌(2114・2113)などが出土している。

(松永 満夫・佐藤 信之)

(2) 住居址 2 (挿図 163・164、図 144、図版 20・30・204)

遺構 尾根の南斜面東部にあるX期住居址群の中の西側、FM 43 を中心に検出された。住居址の南半分は農道による攪乱を受け、南西隅は壁・床面とも完全に壊されていた。プランは方形で規模は 3.90×3.60 m、長軸方向 N 2°E である。北壁部分はしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高は 52 cm である。床面の遺存状態は良好で、周溝はかまど部分を除き一周する。なお、かまどの西側は、約 80 cm にわたって床面より一段高くなっている。主柱穴は 2 本、西壁と東壁のそれぞれの中央に、壁に食い込んだ状態で検出された。石組粘土製かまどが北壁の少し東寄りに位置する。左側壁部分に一部くずれがみられるものの遺存状態はよい。石組は粗粒子を含んだ灰色ローム質粘土で固められ、火床部は多少くぼんでいたが、はっきりした焼土は認められなかった。また、煙道も明確でなかった。かまどの前に長方形の土塊 1034 があるが、貼り床がないことから、本址より新しいと考えられるが、土層にはそれを裏づけるような資料

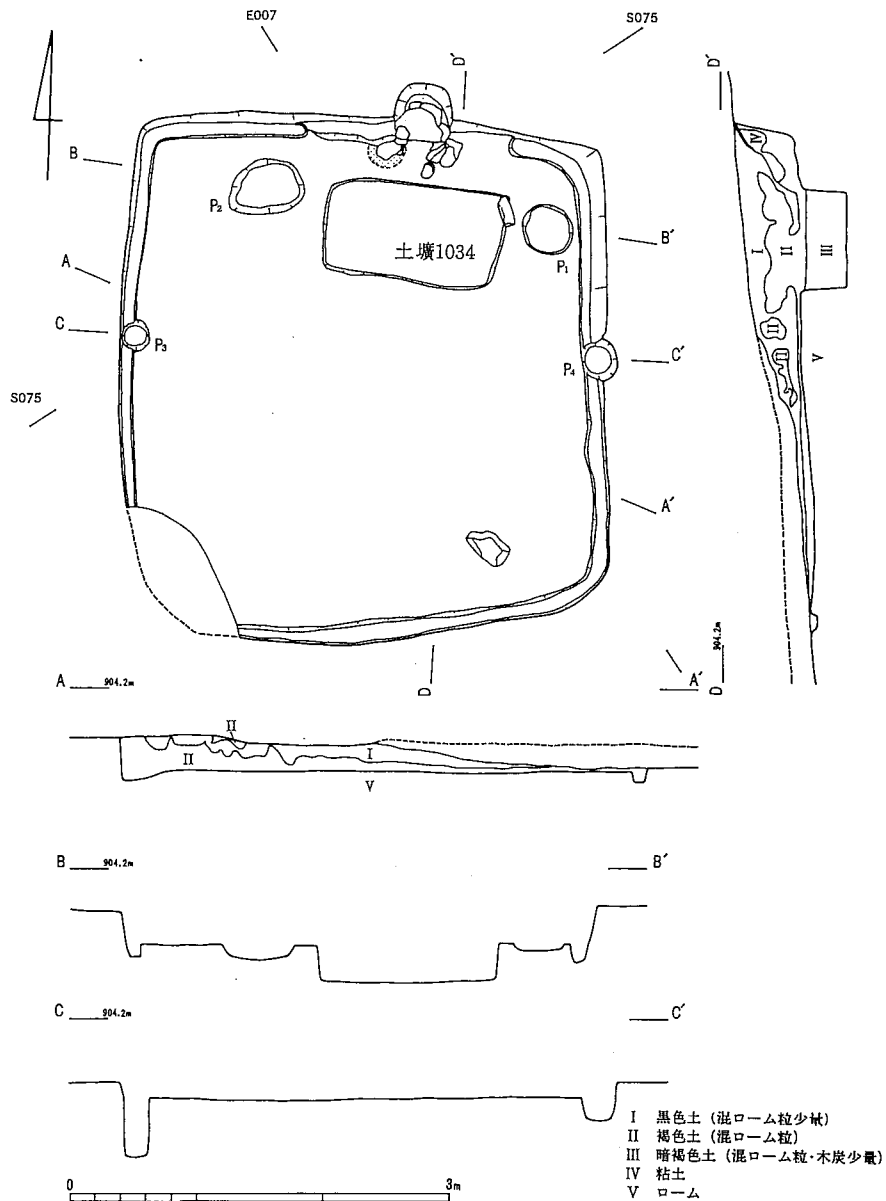


挿図 162 住居址 1 出土丹彩灰釉陶器実測図

前の柱穴で、かまどの移動を伴う上屋の改造で廃止されたものであろう。F<sub>3</sub>の東横に F<sub>2</sub>の火床と考えられる焼土があり、壁面も熱を受けて変質していた。さらに東壁ぞいの床面にも F<sub>1</sub>の火床と思われる焼土があった。周溝は壁直下をほぼ全周するが、かまど付近と、東壁南寄り

はみられなかった。したがって新しいにしても住居址廃絶時との時間差がごく短いものと思われる。

遺物 土器が30点あるがそのほとんどは、かまど左側の北壁に近いところから、床面より少し浮いた状態で出土した。出土点数が少ない割には、器形をうかがえるものは多い。供膳形態では土師器坏B 1 (2068)、坏C 2 (2065・2066)、皿C 1 (2067)、黒色土器坏C 2 (2069・2070)、坏B<sub>2</sub> (2071~2073)の9点があり、また、灰釉陶器の碗1 (2074)、皿2 (2075・2076)の3点がある。煮沸・貯蔵形態では土師器小形甕A が3点 (2077・2078)がある。



挿図 163 住居址 2 実測図

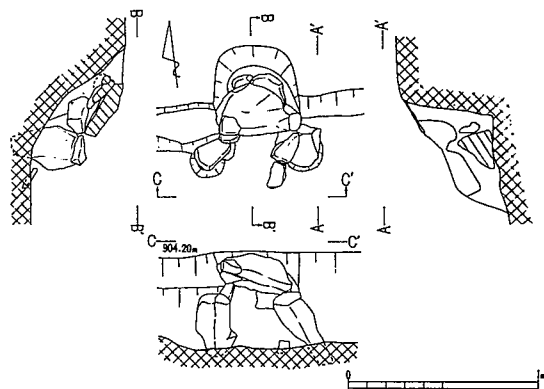
(3) 住居址 3 (挿

図 165、図 146、図版 60)

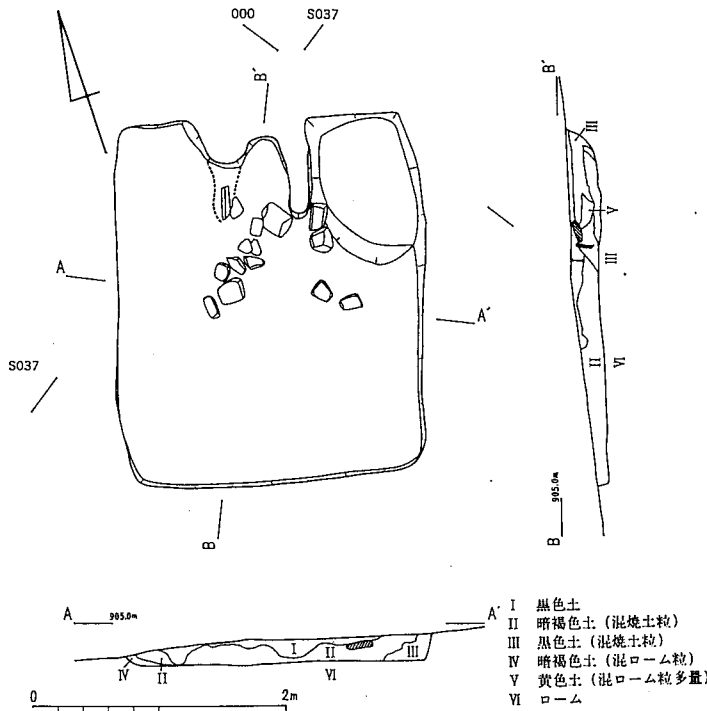
遺構 尾根の南斜面や

や上方、ES 50 を中心に検出された。10 軒からなる X 期住居址群の中では西側グループの中に位置し、西側には縄文時代阿久 III 期の住居址 4 が接している。

住居址が、南斜面につくられていることに加え、ロームへの掘り込みが浅いため、西及び南側は流失しており、わずかに壁の立ち上がりが認められるという状態だった。プランは方形で規模は 2.40×2.80 m、長軸方向 N19°E である。確認できた東・北側の壁の一部は、ほぼ垂直に立ち上がり最大壁高 22 cm を測るが良好ではない。床面は凹凸がありかつ軟弱であった。柱穴は検出されなかった。かまどは石組粘土製であろうが、崩壊が著しく、特に左側石は住居址中央まで散乱していた。火床部には、焼土が約 10 cm の厚さで認められた。なお、かまどの右側に東壁まで及ぶ大きな落ち込みがあるが後世の攪乱である。

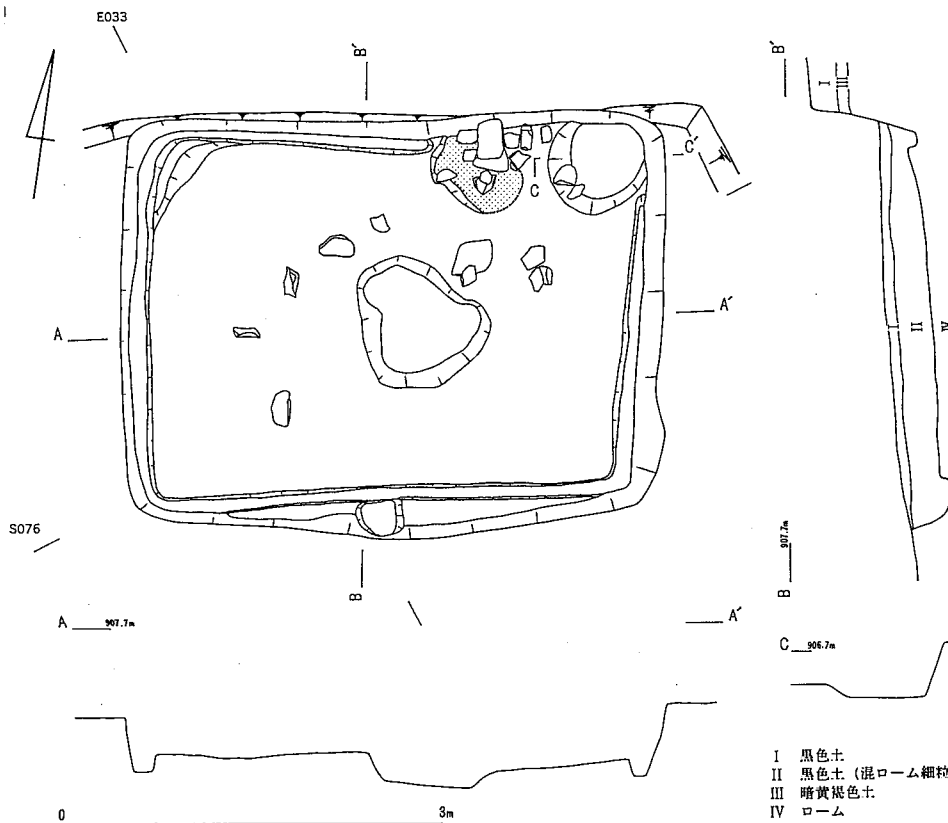


挿図 164 住居址 2 かまど実測図



挿図 165 住居址 3 実測図

の間に空間が生じ、その部分で南壁のほぼ中央に深さ 15 cm の小ピットがみられる。南側周溝のラインは、他辺の周溝と形態上は一致するところから、この空間部分は竪穴掘削の過程で生じた掘り方の可能性が強く、住居址本来のプランは周溝が示すことにならう。床面中央部に 10 cm 前後の不規則な形の掘り込みがみられた。貼り床はみられず、その性格は不明である。



挿図 166 住居址 16 実測図

遺物 きわめて少なく、かまど及び東壁付近から土師器が十数点と刀子と思われる鉄製品(2115)が 1 点出土しただけである。(岩崎 孝治)

(4) 住居址 16(挿図 166・167、図 145・146、図版 60・177・204)

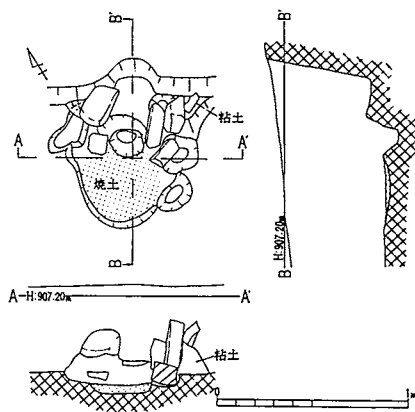
遺構 尾根南斜面上端部に位置し、F-N 32 を中心に検出された。長方形プランをもち、石組粘土製かまどが、北東隅に近接した北壁に設けられている。周溝はかまどと、かまどに接して北東隅に設けられた貯蔵穴(径 80 cm、深さ 10 cm)を除いて全周する。幅 15 cm、深さ 8 cm 前後で断面形は「U」字状を呈する。壁・床・周溝ともに遺存状態は良好である。壁は南壁部分が外側にやや張りだし周溝部分と

かまど(90×80 cm)はかなり崩落が著しいが、側石掘り方と遺存した側石から、ほぼその規模は推定できる。すなわち、右側壁は掘り方 4 個で遺存側石 3 個、左側壁は掘り方 2 個、遺存側石 1 個であり、壁面での掘り方等の検出はできなかったが、小形の側石が本来設置されていたと思われ

る。従って、右側壁は左側よりも、側石1個にあたる20cmほどが床中央部に張りだすことになる。

遺物 土師器坏B(2082)、坏F(2080・2081)、小形甕A(2079)、羽釜(2083)があるが量は少ない。他に、南壁に接した床面上に磨製石鎌(2119)が出土した。平安期の磨製石鎌が住居址から出土したのは、岡谷市海戸遺跡等〔桐原 1967〕でもみられ、形態上も類似する。出土状態からみて、確実に本住居に属するものであろう。

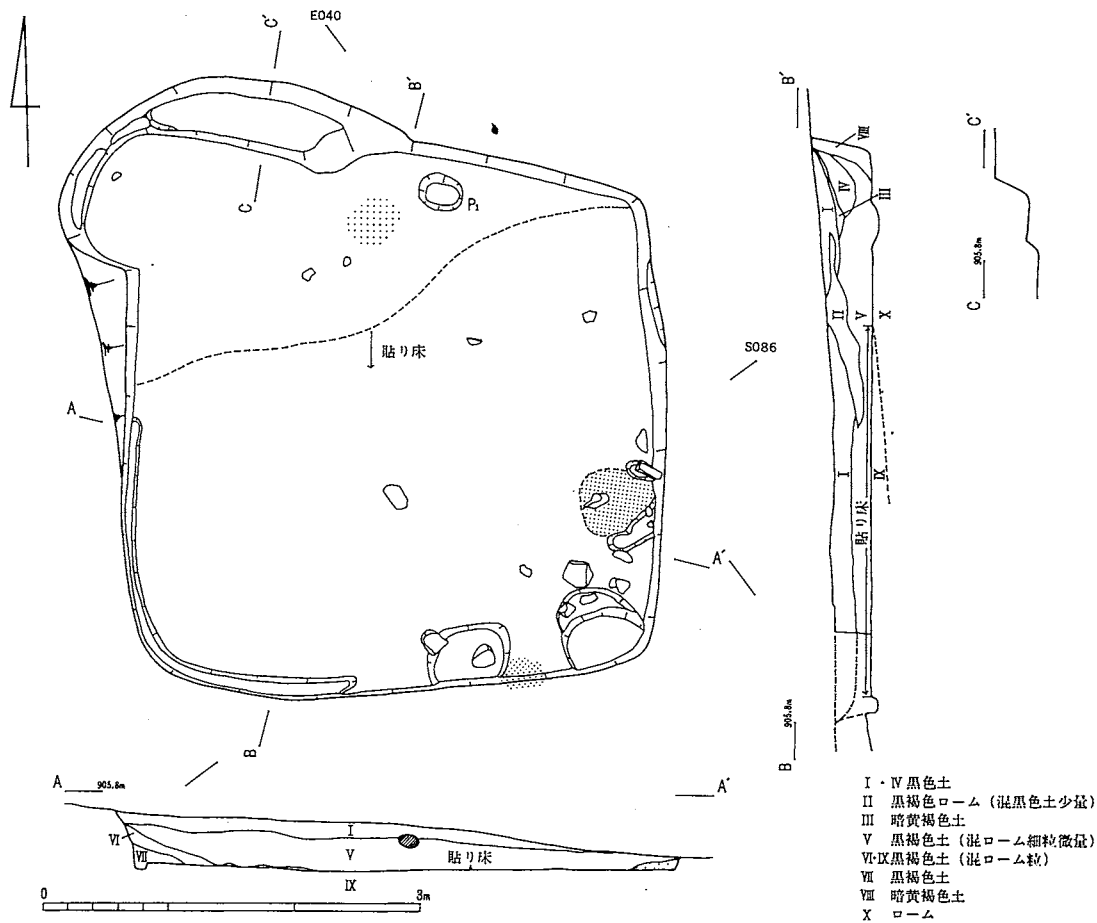
(笹沢 浩)



挿図 167 住居址 16 かまど実測図

(5) 住居址 17(挿図 168・図 145、図版 61・205)

遺構 FR 30 付近に検出されたほぼ方形の平面形をもつ住居址であるが、北西隅に張り出し部分がみられる。南斜面(現地表面傾斜角8°前後)に構築されているため、確認された壁高は各辺で異なる。最高は北壁で66cm、最低は南壁で15cmであった。床面は北辺部の一部を除いて、粘質ロームが貼られていた。北壁中央に近接してP<sub>1</sub>が検出されたが、他に柱穴は未検出のため、P<sub>1</sub>の性格も不明である。周溝は西壁中央から南壁中央部にかけてみられた。北西部の張り出し部は北壁部に最大長1.5m、最大幅0.35mの長楕円形状で、床面より10cm高い棚状のものと、同一床面上で、西壁に半円形に0.6m張り出した部分からなり、住居に伴う何らかの施設と考えられよう。南壁と西南隅にも床面より10cmほど掘りくぼめたピットが検出された。後者の埋土には黄色粘土が少量みられた。また、前者の南辺には焼土層が壁外までみられたが、本住居構築以前のものである。石組粘土製かまどは東壁中央よりやや南壁に片寄った所にあり、左側石の



挿図 168 住居址 17 実測図

一部と火床のみが残存していた。また、P<sub>1</sub>に近接した床面に、床面をレンズ状に掘り凹め、そこに、最大厚4cmで焼土が堆積していたが、床面は焼けていなかった。

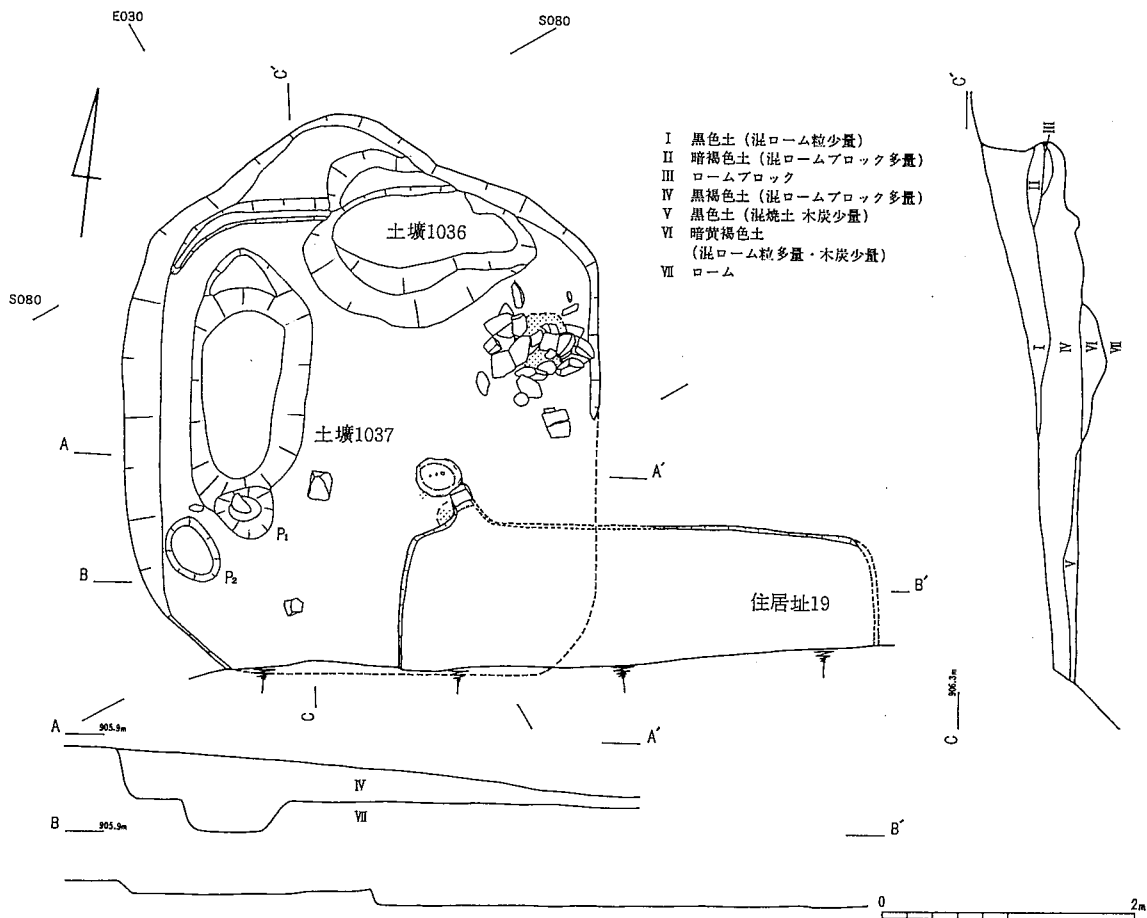
遺物 40点が出土した。うち、縄文時代中期の遺物と接合関係にあるダブリを除くと、出土点数は29点となる。土器は土師器坏F II a<sub>2</sub> 5 (2084)、坏D III a<sub>2</sub> 2 (2086・2087)、皿AI、皿CI(2088)、甕CI(2091)、甕FI(2090)、黒色土器坏1、灰釉陶器壺1、長頸瓶片1の14個体が最低知られる。いずれも、床面または床面直上および、かまど内からの出土で埋土中からは少ない。黒色土器坏の底部には墨書が見られるが、破片のために字体は不明である。

(6) 住居址18(挿図169・170、図145、図版61・205)

遺構 FP 34 を中心に急な南斜面(地表角20°)に検出された。東南四半部は住居址19とさらに北壁と西壁ぎわは土壌1036・1037によって切られ、さらに南壁の一部は農道によって破壊されている。従って、全プランは定かでないが周溝および、西壁のありかたから、ほぼ隅丸方形の住居址が考えられる。ただし、北壁は周溝から1m外方への張り出し部が見られるが、堅穴の掘り方であろう。張り出し部と住居址埋土の埋没状態は一貫性がみられる所から、住居廃絶後の崩落の可能性もあろう。周溝は北壁の一部に設けられていた。

石組粘土製かまど(95×75cm)は北壁寄りの東壁に設けられていた。崩落が著しいが、右側壁に側石3、左に1個遺存していた。側石の掘り方も左右に認められた。掘り方のありかたから、右側壁が左より20cm中央部に突き出していたかまどが想定できる。煙道の立上り部は壁上端にみられた。

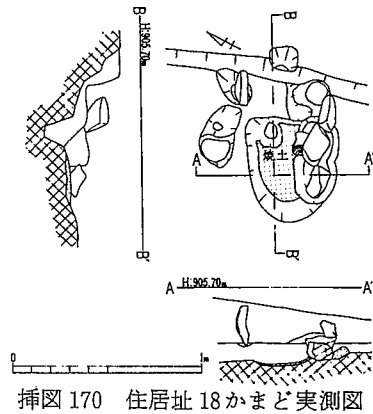
土壌1036・1037は西壁と北壁ぞいにそれぞれ長軸をもち、ともに楕円形プランであり、断面形は播鉢



挿図169 住居址18・19実測図

状となり、ローム粒子を多量に含んだ自然堆積の層位が確認された。貼り床は認められない。従ってこれら土壌は本住居に附属するというよりも、後出の遺構という可能性もあろう。

遺物 すべて土器であり、30点と出土量は多くない。埋土および床面に散在した以外にかまど内からややまとまって出土した。土師器 坏C III a<sub>2</sub>(2095・2099)、坏D III a<sub>2</sub>(2100)、D III(2101)、坏E II b<sub>1</sub>(2093)、坏I(2099・2096)、F II(2098)、小形甕 A(2097)、甕 E、黑色土器坏、灰釉陶器皿等がある。2098・2101には判読不能の墨書がある。

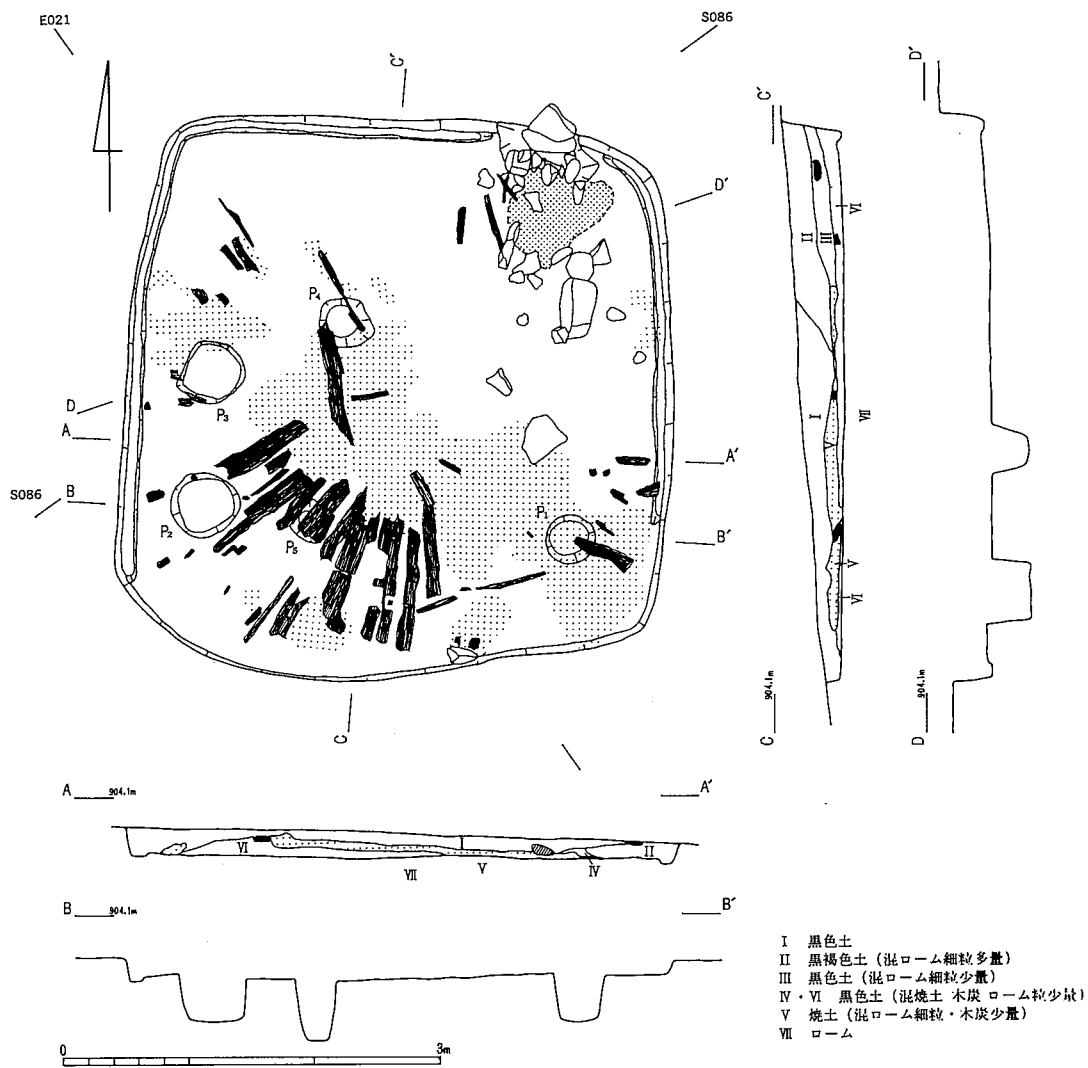


挿図 170 住居址 18 かまど実測図

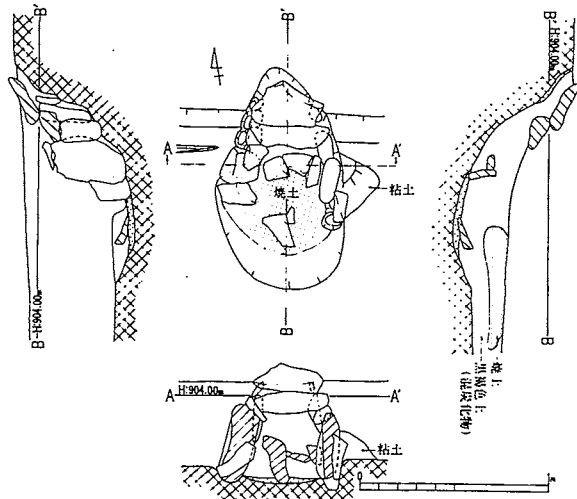
(7) 住居址 19(挿図 169)

遺構 住居址 18 の東南四半分を切って構築した住居址であるが、北・西壁の一部を残すのみで、大半は農道によって破壊されていた。石組粘土製かまどが北西隅にみられたが、石組の大部分は崩壊し、僅かに火床の一部が検出されたにすぎなかった。なお石組の中にいわゆる蜂ノ巣石が転用されていた。遺物は出土してない。

(小松原 義人・笹沢 浩)



挿図 171 住居址 20 実測図

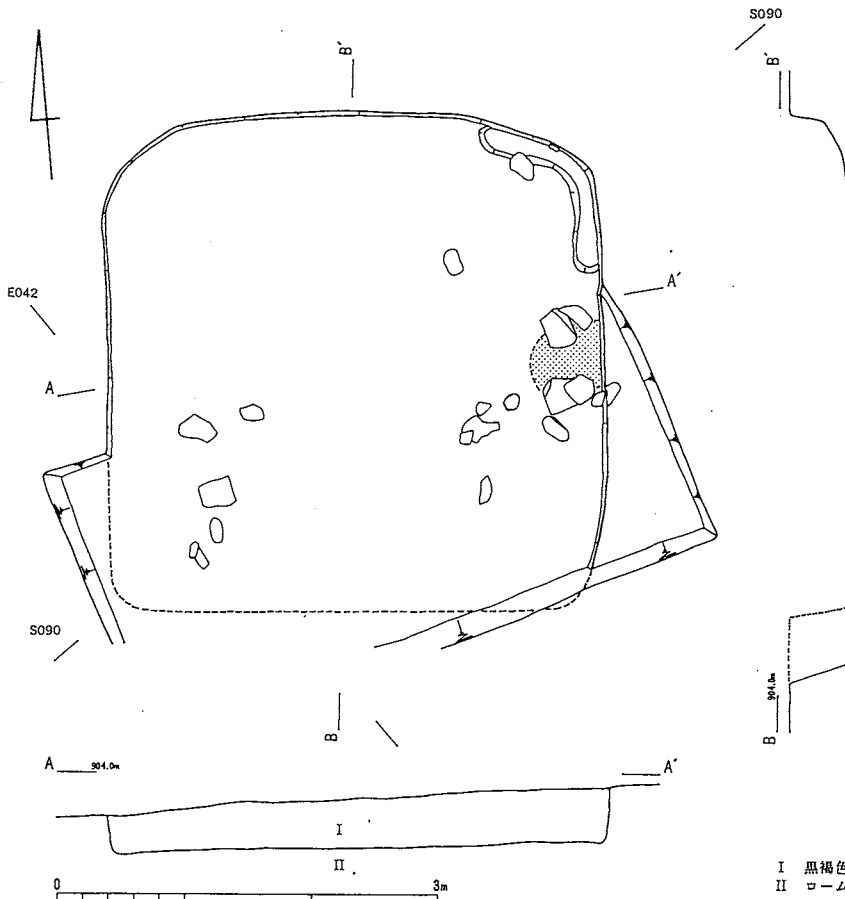


挿図 172 住居址 20 かまど実測図

(8) 住居址 20 (挿図 171・172、図 145、図版 62・205)

遺構 FS 43 を中出に検出された焼失住居址である。南壁のみ黒褐色土を、他はローム層を切りこんで壁を構築している。平面形は隅丸方形で、石組粘土製かまどが北東隅に偏した場所に設けられていた。南壁を除いた壁および床面は良好である。南壁の確認は、本住居址が焼失住居であるために、埋土の相違によったが、他の壁に比較して、西寄り部分のふくらみが著しいので、あるいは、この部分は 8. cm ほど内側に本来の壁面があった可能性がある。周溝はかまど部分と南壁部分には検出できなかった。後者については壁同様に未検出に終わった可能性がある。

周溝の幅・深さともに 5 cm 前後で、断面「U」字状である。かまどは遺存状態が非常によい。側石は左右ともに安山岩製の川原石と割石を各々 5 個ずつ用いて構築している。いずれも側石裾え付けの掘り方がみられ、掘り方からみた場合にはすべての側石が遺存していたことになる。側石は壁に向かうにに応じて小さくしている。側石の掘り方と、かまど底部は明らかにローム層を掘りこんでおり、堅穴構築当初より、計画的にかまどの設定がなされていたことを示している。なお、右側石の方が、左より 20 cm ほど前面にでている。天井石は壁側 2 枚のみ遺存していたが、これらがすべてではないであろう。一部の天井石は壁外に一部はみださせて、煙道の役割を荷なわせている。天井石および側石は粘土で部分的に固定させており、角柱状の支柱石がかまどのほぼ中央部にあった。ピットは P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub> があったが、その性格は不明である。

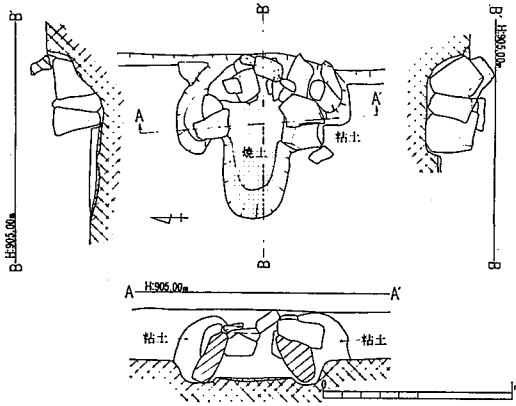


挿図 173 住居址 21 実測図

本住居址はⅢ層以下に多量の焼土、炭化材がロームとともに出土したが、いずれも床面上ではなく、5~10 cm 浮いた状態にあった。つまり、床面上にはⅥ層があり、その上部に炭化材等がのっていた。炭化材は住居址中央から壁にむかって放射状に出土したが、かまど部分にはほとんどみられなかった。炭化材の大部分は垂木類であろう。

遺物 土器と炭化材がある。大半はⅥ層上部と焼土内から出土したが土器類は 17 片と極めて少なく、土師器 坏 C Ⅲ a<sub>2</sub> (2103~2106)、灰釉陶器 壺 (2107)、甕 E (2108)、羽釜 (2109)、須恵器





挿図 174 住居址 21 かまど実測図

甕片がある。

(9) 住居址 21 (挿図 173~175、図版 63・205)

遺構 FR 45 を中心として検出された。南斜面 X 期住居址群の東限を占める。住居址は南斜面上端から流出した黒褐色土を基盤としているため、平面確認はかなり困難であった。また、住居址南半分は農道下であり、削平が著しく、南壁と西壁の一部は未検出に終わった。しかし、南東隅に近い壁が確認されたので、ほぼ本住居址の平面形および規模は推定できる。石組かまどは東壁中央に設

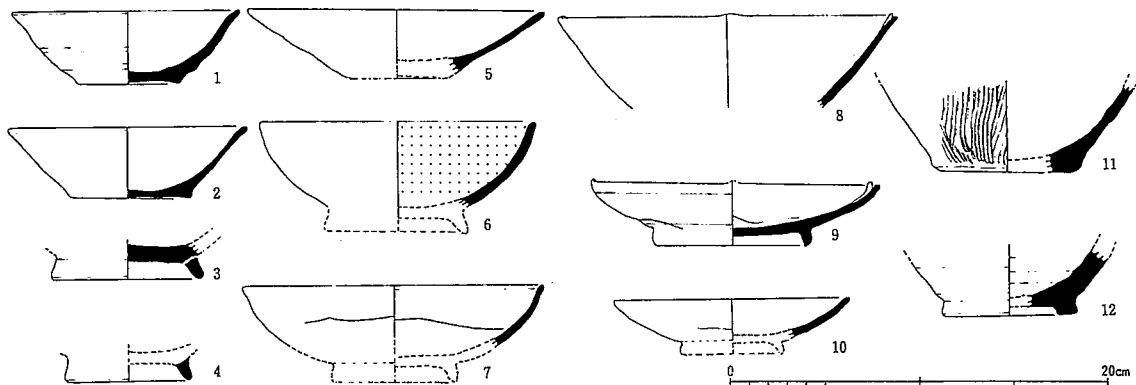
けられており、その遺存状態はかなり良好である。側石には主として安山岩の平板状割石を用い、川原石を少量併用して、粘土で固めている。天井石、支柱石は失われている。長径 100 cm、幅 60 cm である。煙道の立ち上りは、壁に接しているが遺存状態はあまりよくない。周溝は東北隅にのみ検出された。床はかまど周辺部から東北隅にかけて、黄色粘質土が貼ってあったが、他は地山で軟弱であった。

遺物 埋土からは少なく、ほとんどが床面出土で、北西部分を除いて、ほぼ床面全域に散在していた。土師器杯 C III a<sub>2</sub> (挿図 175-1)、F III a<sub>2</sub> (2)、B II a<sub>2</sub> (3・4)、皿 C (5)、甕 (11)、黒色土器杯 B II (6)、灰釉陶器碗 A (7・8)、皿 A (9・10)、須恵器長頸壺底部片 (12) がある。灰釉陶器碗と皿には輪花がみられる。十二ノ后編年で X 期のものである。 (笹沢 浩)

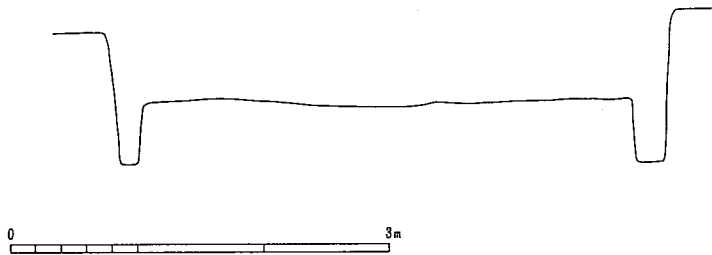
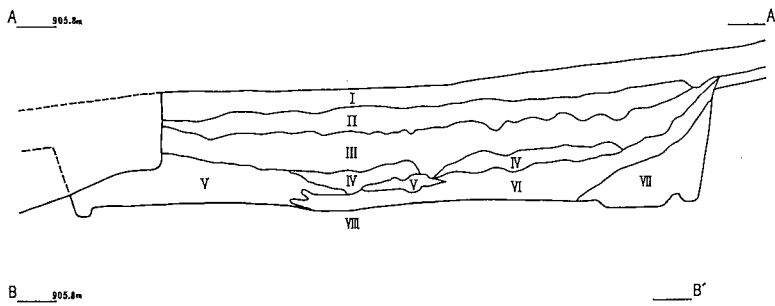
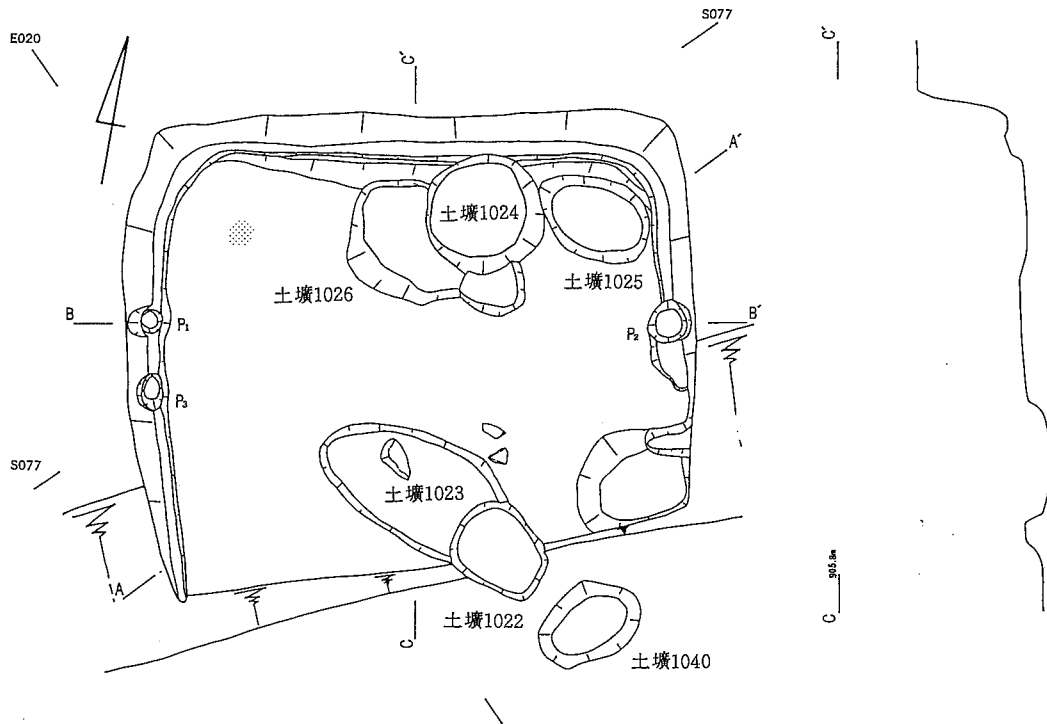
(10) 住居址 22 (挿図 176・177、図 145・146)

遺構 FN 39 を中心に検出された住居址である。南側を農道によって切られており、住居址の 2/3 ほどが残存していた。住居址内には 6 基の土壇があるが、そのうち土壇 1022・1025・1026 には貼り床がみられず、土壇 1023・1024 は住居址の一部と前記の土壇を切っている。したがって前者の土壇群は住居址より古く、後者は新しいことになるが、土壇 1040 は上部が削平されているため不明である。

床面および壁の遺存状態はよく、壁は垂直に立ち上り、最大壁高は 70 cm と高い。周溝はかまど附近を除いて全周する。特に北側の周溝は内側に土手状の盛り土を施している。柱穴は東壁のほぼ中央に 1 個、西壁に 2 個の計 3 個が確認された。いずれも周溝内から一部壁に食い込んで作られていた。石組粘土製かまどは、東壁に設置されていたが、農道で西側が破壊されている。側壁残存部は黒色土混じりのロームで作られていたが、石はなかった。また火床部と思われる部分は 10 cm ほど掘り込まれていたが、ほとんど焼土



挿図 175 住居址 21 出土土器実測図



- I 黒色土 (表土)
- II 黒色土
- III 褐色土
- IV 褐色土 (混ロームブロック)
- V 黄褐色土 (混ローム粒)
- VI 暗褐色土 (混ローム粒)
- VII 暗褐色土 (混ローム粒)
- VIII ローム

挿図 176 住居址 22 実測図

がみられなかった。北西部床面より少量の焼土が検出された。

遺物 土器と鉄器がある。土器は供膳形態では、土師器坏 BI(2111)、DI(2110)、沸煮形態では土師器甕 CI(2112)があり、他に土師器坏破片 6、灰釉陶器碗破片 9、土師器甕破片 17 点が確認されている。また埋土中より弥生土器と思われる破片が 1 点 (挿図 177) 出土している。そのほか刀子と思われる鉄製品(2116)がある。



挿図 177 住居址 22 出土弥生土器拓影図 (1/2)

(佐藤 信之)

## 第4章 阿久遺跡をめぐる諸問題

### 第1節 出土遺構の検討

#### 1 住居址

関野克氏によって、住居址の平面形の変遷〔関野 1938〕が示されて以来、その目的は、編年の位置、民族問題、上屋構造の変化等とさまざまであったが、多くの研究者によって扱われてきた。しかし、単に平面形の変化のみを問題とし、炉・柱穴といった付属施設については、あまり目が向けられなかった。戦後になり、住居址の構造の問題が注目されるようになり、最近では、橋本正氏による支柱穴の配置から主軸を求め、それを主にした分類〔橋本 1976〕、あるいは、宮本長二郎氏による建築学の立場からの上屋構造の想定が行なわれている〔宮本 1979〕。また県内においても多くの研究者により、平面形・上屋構造を中心とした分析が行なわれている〔大場他 1955、樋口 1957、友野 1972、長崎 1979〕。

本遺跡の住居址の類型化を試みたのも、そうした住居址の研究動向を参考として、一つには石野博信氏の試みた堅穴式住居址の様式的変化〔石野 1975〕を本遺跡でもとらえてみたいという点と、住居址のさまざまな属性を追求する中で、いわゆる「家」の復元を試みる基礎資料とする点に目的があった。前者については伴出土器からある程度の目的は達せられたが、後者については、問題点も十分に指摘できないままに終わった。今後の検討課題としたい。

#### 1) 類型別住居址の細部特徴

縄文時代前期の住居址は64棟検出され、平面形・柱穴の並び等によりAからI型に分類した。以下、各類型別の細部特徴(属性)について述べる(表5)。

A型は住居址25・26・32・48・55・64・80の7棟があり、すべてII-a期である。柱穴は全体に北壁寄りにあり、南壁寄りには柱穴と壁の間の床面積が広い。炉は住居址の中央というよりむしろ、柱穴を結んだ対角線の交点に位置している。壁・床面共に良好な住居址が多い。

B型は住居址36・54・71・12があり、II-a期2、II-b期1、III期1の計4棟である。II期の住居址はA型の、III期のそれはC型の影響を強く受けているものと思われ、一定の傾向を示さない。

C型は住居址57・14・15・24・29・30・35・40・44・53・69があり、II-a期1、II-b期10の11棟である。支柱穴の配置は各壁とも平行し、炉はその対角線の交点にほぼ重なってくる。同時にそれは、住居址中央部分に位置することになる。柱穴は長軸に沿って短辺を4等分した線上にある。

D型は住居址37・56・63・13・27・33・42・59・66・76・77・6・58・75があり、II-c期3、III期8、IV-a期3の計14棟である。炉は中央部分と北側に寄るものがある。柱穴は長軸に沿って、短辺をほぼ3等分した線上に乗ってくる。

E型は住居址49・81・11・45・74(新)があり、III期2、IV-a期1、IV-b期2の計5棟である。壁・床面共に明らかでない住居址と、拡張・建て替えがみられる住居址が多い。床面には柱穴とは考えにくい多

II-a期

II-b期

II-c期

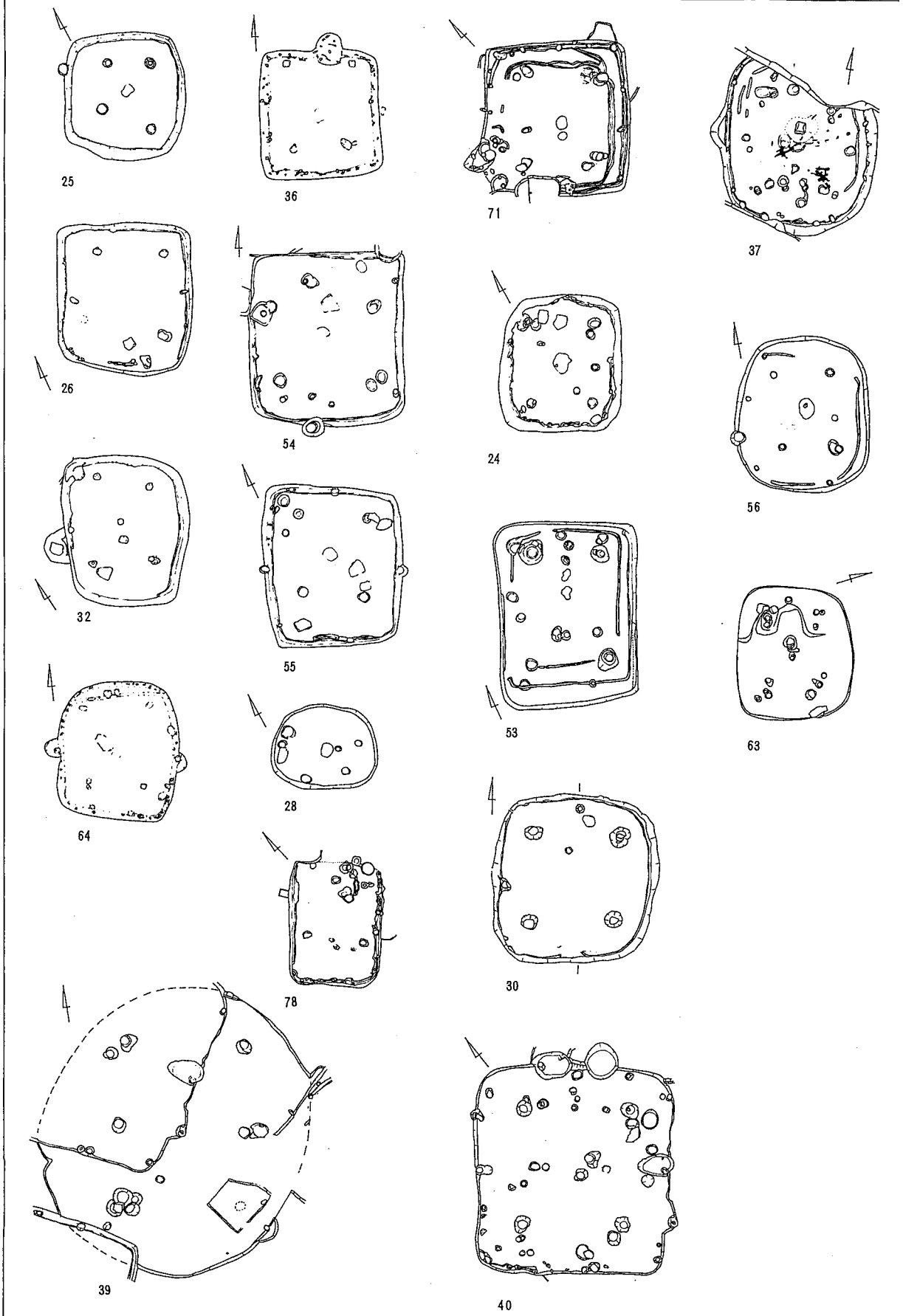
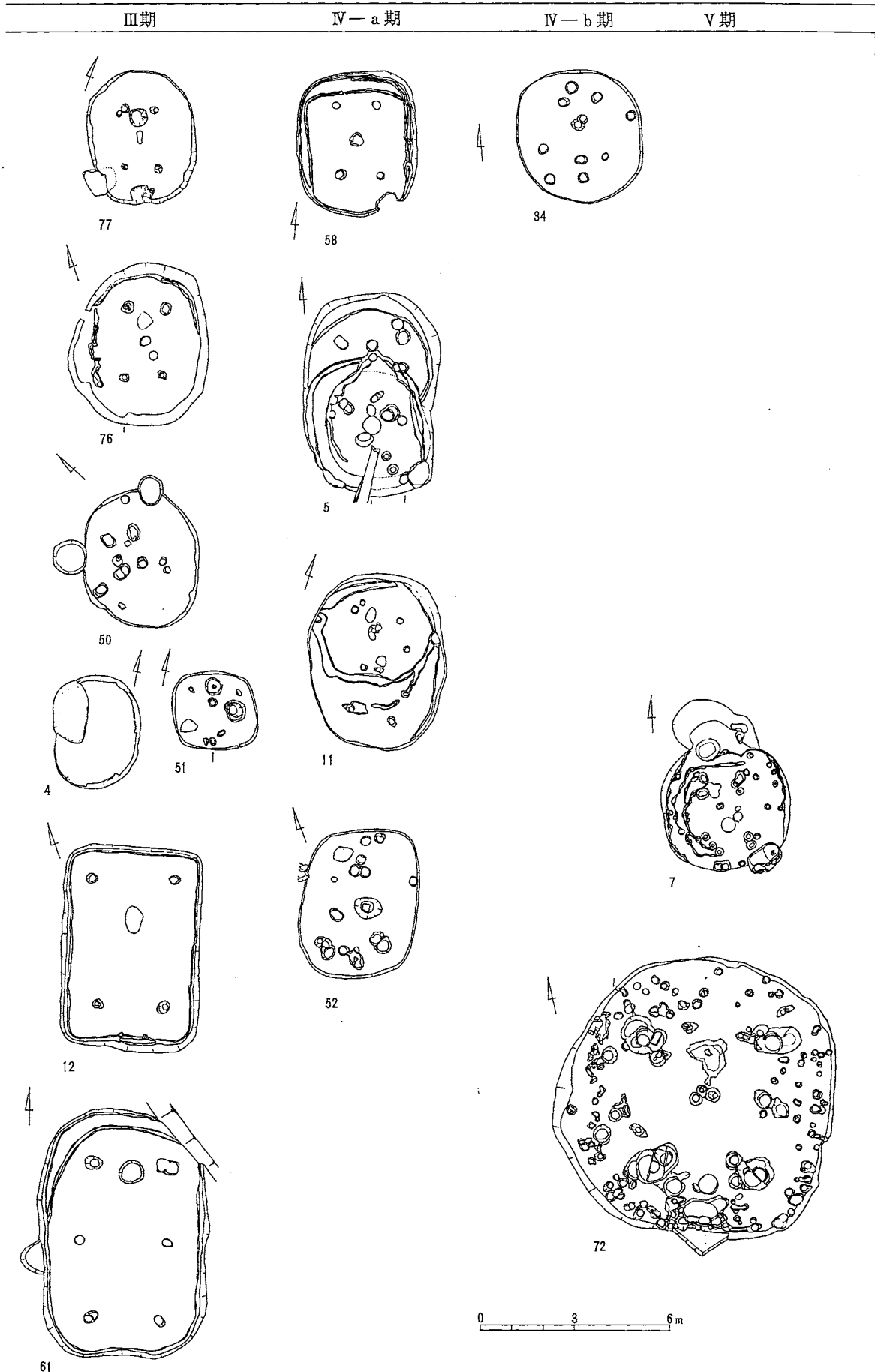


插图178 住居址变迁图



くのピットがみられる。

F型は住居址7・72とすべてV期の住居址で、円形に近く2棟とも2回以上の拡張が行なわれている。中央部分に支柱穴(F型)をもっており、壁柱穴が巡っている。炉は一定の位置を示さないようである。住居址72は大形住居である。

G型は住居址39・74(旧)・61があり、II-a期1、III期2の3棟である。いずれも大型の住居址である。住居址39を除くと中央の柱穴が若干外側に張り出している。

H型は住居址28・78があり、すべてII-a期で小型であり、炉は長辺側と短辺側にあるものがそれぞれ一例ずつある。

I型は住居址4・50・51・9・52・34・67があり、III期に3、IV-a・b期に各2棟ずつの計7棟である。住居内にピットが多く柱穴となるか不明なものが多いが、3本支柱となるものが含まれている。

## 2) 住居址構造上の2・3の問題

### (1) 入口施設

住居址の入口部は、上屋構造、住居内での床面利用、集落構造等を考える上で、きわめて重要である。しかし、発掘調査から入口部が推察できる資料は少ない。本遺跡でも同様であるが、若干のそれと思われる痕跡が得られた。それは壁寄りの床面上にある2個並列のピットと、周溝の在り方とからである。

2個並列の小ピットは住居址12・40・54・64で認められた。いずれも長軸の南壁ぎわにある。特に住居址40は対辺に張り出しピット2個があり、これらを奥壁に設けているとすれば、その反対側が入口部として望ましい位置となろう。同様の小ピットをもつ例は中期の富士見町藤内遺跡第9号住居址[武藤他1965]や、本遺跡に隣接する居沢尾根遺跡第15号住居址[青沼他1981]などにみられる。もし、これらが入口部の構造物に関係があるとすれば、ひさし状の屋根を支えた柱穴と考えられる。

周溝は入口部と想定される位置に、若干内側に入り、その部分が切れるもの(住居址30)と、2本並列するもの(住居址12・55)とがある。後者の住居址12では、先にあげた小ピットが同一場所にみられ、この例から、周溝の変化が入口部の構造と関係する可能性がある。しかし、周溝の構造が、都出比呂志氏が明らかにした構造物[都出1975]とした場合には、基本的には、周溝の細部変化はあまり関係がないことになる。事実、大半の住居址は周溝が巡るのである。しかし、住居址12の小ピットとの併存は、入口部における構造が単一でない可能性を示し、一概に否定できない面もあろう。問題点のみの指摘にとどめる。

### (2) 支柱穴

支柱穴は支柱穴より径・深さとも規模が小さく、支柱を補助する機能をもっていたと考えられるピットであり、19棟で認められた。内訳はA型4、B型1、C型5、D型2、E型2、F型2、不明3の各棟であり、それらは住居址内と壁ぎわに設置されている。これらの支柱穴は規則性はみられるものの、並び方がどのような上屋構造と関係するのかは不明である場合と、中央部分に設置されている場合がある。ただ住居址40・44・64等に見られる壁寄りの支柱穴は位置・規模から、棟持柱が考えられる。特に住居址40は大形住居で、長い棟を必要とするために、長軸を2等分する位置にP<sub>5</sub>・P<sub>20</sub>～P<sub>22</sub>の4個のピットが並べられている。これが棟を支えた柱であり、先に推定した入口部を想定すれば、平入りとなろう。しかし、問題点も多く今後の課題である。

## 3) 類型別住居址の時期別変化(挿図178・179、表6)

II-a期 A型7、B型2、C型1、G型1、H型2の計13棟が検出された。A型は住居址25・26・32・

48・55・64・80、B型は住居址36・54、C型は住居址57、G型は住居址39、H型は住居址28・78があり、A型が大半を占める。A型住居址は平面形および支柱穴の配置が台形状となるものであるが、関東地方の関山期の台形状住居址とは平面形および、柱穴の配置と炉の位置等が大きく相違する。前者すなわちA型住居址は、壁の2辺が平行し、他辺の1辺が平行する2辺とほぼ直交するが、その対辺は直交しない変則的な台形となるか、平行四辺形状で、支柱穴もほぼ各辺に並行

表5 時期別の類型別住居址集計表(住居址37(旧)は除く)

期	類型	A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明	計
II-a		7	2	1				1	2			13
II-b			1	10							2	13
II-c					3						1	4
III			1		8	2		2		3	3	19
IV-a					3	1				2	2	8
IV-b						2				2		4
V							2					2
計		7	4	11	14	5	2	3	2	7	8	63

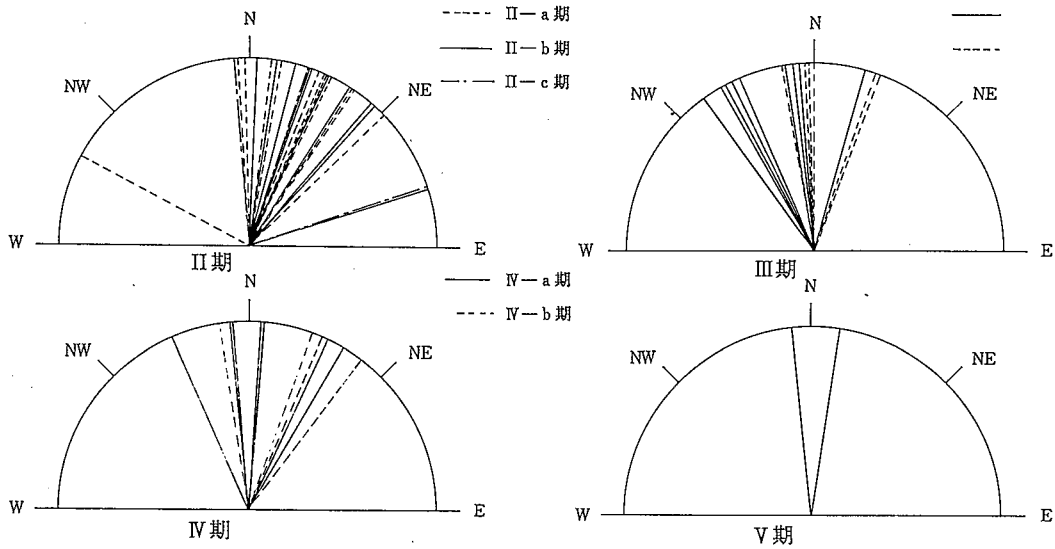
する。ただし、住居址32のみは辺と逆行した柱配置となる。炉は支柱穴を結ぶ交点上にある。これに対し、後者の関東地方の住居址では、平面が細長の台形で、支柱が6本の場合には、上底壁と下底壁の直下におのおの2本が、そして、これらのほぼ中央部分に2本が配置され、炉は北壁寄りに設けられ、さらに、壁にそった壁柱穴がほぼ連続してみられるなど同時期であっても地域差を明瞭に示す。

住居址55は同一時期のG型の大型住居址39を切っている。出土土器の検討ではII-a期に属するところから、本期に含めたが、支柱穴の配置は長方形に近く、この点ではC型に近い。その意味では、住居址55はA型からII-b期に主流を占めるC型への過渡的様相を示し、切りあい関係と矛盾しない。つまり、住居址55の存在は住居址類型A型からC型へ移行する中で生じた一つの類型と考えられる。C型の住居址57は方形柱列Vに切られるところから、II-a期に置いたが、出土遺物も少なくその点からの決め手はない。あるいはII-b期に属するかも知れない。B型の住居址36・54は、先述したようにA型とC型の要素をもつので、住居址55と同様に、II-a期の中でも後出する可能性がある。しかし、出土遺物からはこの点は確認できず、本期に含めた。II-a期の中の新しい要素をもつ住居址類型ということになる。G型は大型住居、H型は小形住居で、それ相応の柱穴をもち、II-a期の他の住居址群とは異なる性格をもつものである。従って、II-a期の住居址類型の基本はA型で、これにB型が少数加わるということになるであろう。

II-b期 B型1、C型10、不明2の計13棟がある。B型は住居址71、C型は住居址14・15・24・29・30・35・40・44・53・69である。ともに柱穴間(柱間)が広い。これは橋本正氏の指摘した共同平面〔橋本1976〕が広いことを意味する。拡張・建て替えはII-a期に比較して多く、5棟にみられる(表6)。その回数は1回が最も多い。B型住居址71は、住居址39を切って構築しており、あきらかにそれより後出である。また、壁柱穴が一定間隔を保持しながら配置される住居址は、II-b期の住居址40に類似し、他期にはみられない。出土土器もII-b期に共通する点など、本住居址の帰属は本期に求めて良いであろう。

II-c期 D型の住居址37(新)・56・63の3棟と不明の住居址68の計4棟がある。住居址68はD型となる可能性が強い。だとするならば、本期の住居址はすべてD型となる。支柱穴の配置が、長辺側の壁から、住居址中央に寄り、共同平面が小さくなる。これは関東地方でも、関山期末から黒浜期にかけて、短辺側に寄っていた柱穴が中央に寄ってくる指摘され〔宮本1979〕、併行関係からほぼ軌を一にすることとなる。柱穴の径もII-a・b期が30cm前後で比較的大きいのに対して、D型住居のそれは、径20cm前後と小さい。これはA・B・C型住居とD型住居の上屋構造と密接な関係があるものと思われ、II-b期からII-c期への住居形態の変化が背後に予想される。

炉は中央にある点、前代と変化はない。しかし、住居址37に石囲炉がほぼ中央にみられ、本遺跡では唯一の例であるが、中越遺跡9号住居址にも存在する〔藤沢他1969〕。拡張の痕跡は住居址68が全掘されていないので不明であるが、他の3棟にすべて認められた。



挿図179 時期別住居址長軸方向

II期の住居址の長軸方向はN 20°Eを中心にN 5°WからN 40°Eの範囲に集中し、II期を通じて大差がない(挿図179)。

III期 II-c期と同様にD型が8棟で主流を占め、他にB型が1、E・G各型が各2、I型が3、不明3の計19棟がある。B型は住居址12、D型は住居址13・27・33・42・59・66・76・77、E型は住居址49・81、G型は住居址61・74(旧)、I型は住居址4・50・51、型式不明は住居址41・43・70である。II期と比較して、多種の住居址類型がみられる。特にI型は、床面に支柱穴と考えられる柱穴が不規則にあり、支柱穴の指定が難しい。II期の規則的な支柱穴配列とは大きな違いがある。I型住居の中には、支柱穴の拾い方によっては、かなりゆがんだE型類似の支柱穴配置が推定できる(住居址49)が、それらと、IV期以降に一般化するE型住居址との関係づけは今のところ困難である。しかし、住居址49・50などにみられる平面形は小判形が多く、すでにE型住居址の祖形と思われる、これらがD型住居址と共存しているのは注目されねばならない。また、多くの住居址に柱穴とは思えないピットが、床面上にいくつか見られるのもIII期の特徴といえよう。

炉はB・G・I型で北壁寄りに設置され、特にG型では広い掘り込みがみられる。住居址12も比較的大形住居で同様の位置に炉をもつ。このように、大形地床炉が住居北辺側に設けられたことは、大形住居であることと深いかかわりがある。しかし、I型住居の炉の位置が、D型と異なり、G型に近いことは、その平面形と柱穴の配置とともに注目したい。ただし、I型の住居址51は小形住居である点を考えれば、その特質から、一概に結論は出せず、さらに検討が必要であろう。

長軸方向はN 5°W前後がもっとも多く、II期と異なる。この傾向は、さらに詳細にみればN 36°WからN 23°Wと、N 10°WからNの間、そしてN 15°EからN 20°Eの三グループがある。これを土器による細分からみた場合、N 5°Wを中心にして西寄りがIII期古段階、東寄りが新段階となる。

拡張・建て替えは住居址61・74(旧)にある以外には認められなかった(表6)。

IV-a期 D型3、E型1、I型2、不明2の計8棟がある。D型は住居址6・58・75、E型は住居址11、I型は住居址9・52、不明は住居址5・79である。III期と異なり、本期以降V期の住居址には一回の建て替えや数回の拡張がみられるものが多く、本期では住居址75に認められなかったのみである。床面上には、III期と同様に性格不明のピットがいくつかある。炉も住居址中央や北辺部に寄るものなど不定である。拡張が多いためであろうか、軟弱な壁・床面が多い。長軸方向はN 10°WからN 40°Eの間にほぼおさまり、III期と異なる。D・E・I型住居の平面形はほぼ小判形といえるもので、III期にみられた長方形プランは完



全に姿を消すなど新しい傾向が指摘できる。

IV-b期 E型の住居址45・74(新)、I型の住居址34・67の計4棟がある。住居址74(新)を除いて拡張が認められる。D型住居がないなど住居址類型に限られてくる。調査例が少ないこととは余り関係なく、V期にみられるF型住居への一歩手前の様相がうかがえる。

V-b期 F型の住居址7・72の2棟である。支柱穴が4本でほぼ方形配置、平面形は隅丸方形を基調とするが円に近い。両者ともに中央に支柱と思われる柱穴があり、ために炉は中央からずれる。2棟ともに同心円状に拡張が認められる。これらは明らかに縄文時代中期の住居址に一般的な求心構造の住居形態を示している。住居址7と72はその規模が小形と大形という差はあるにしても、共通する要素が強いのは興味深い。

表6 時期別住居址拡張、建て替え一覧表

	拡張1回	拡張2回	拡張3回	建て替え
II-a期	64, 80			
II-b期	44, 71	53	69	15
II-c期	37, 63?, 56			
III期	49, 61		74	
IV-a期	5, 6, 52, 58	11		5, 9
IV-b期				45
V期		7	72	

以上、本遺跡にみられる前期の堅穴式住居址の類型を時期別にみてきた。そこには平面台形状の住居址A型から方形住居址C型を径て、以降、D・E・F型の小判形から円形住居址への変遷が迎れる。つまり、平面形では台形、方(長)方形、楕円形、そして円形への変化であり、それは柱配列と炉の位置等から、有軸対称構造の住居から求心構造への変化を示している。このことは中期的住居址への変遷を意味し、そのきざしはIII期の中に求められ、V-b期が転換期といえよう。V-b期に後続するVI・VII期の住居址は本遺跡では検出できなかったが、隣接する富士見町籠畑遺跡〔武藤1968〕や、北安曇郡桜沢遺跡〔鈴木1967〕等でみられ、その中にはV-b期の住居址に酷似するものがある。従って、F型住居は中期初頭の住居址〔藤森他1965・伴他1981〕へ移行するものと考えたい。

長野県下の前期の住居址の調査例は決して多くない。しかし、II期・III期の住居址は、中越・十二ノ后・千鹿頭社・大石・よせの台等の諏訪地方から上伊那地方にかけての諸遺跡で検出されており、そこで明らかにされた住居址形態と本遺跡で明らかとなった類型とは基本的には一致する。しかし、不定形の住居址がこれらの遺跡でも多く、本遺跡の成果をそのままあてはめることはできない。その点を追求する中で、広い地域での住居址の変化をその構造上の復元まで含めて、検討する必要性を痛感する。

(佐藤 信之)

註1 関野氏はすでに、住居内の柱穴の有無に注目し、上屋構造の変化をとらえている。

## 2 集石

### (1) 集石の類型別構造 (図23~32、図版89~101、表7)

集石は「集石」「集石土壙」「積石遺構」「焼石炉」「積石墓」等の呼称がある。このうち「焼石炉」と「積石墓」はほぼその呼称から、性格を知ることができる。しかし、他は考古学的事象の多くがそうであるように、遺構そのものの構造を示すだけで、その性格まで示すものではない。本遺跡の「集石」もまた後者である。その意味でここでは271基検出された集石の性格づけを、構造、分布のあり方からまとめてみたい。しかし、検出された集石の約1/3は、保存のために下部調査は行わず、ほぼ全容が知りうる集石は179基である。従って、前者は参考程度にとどめ、後者を中心に述べる。

A型集石 短径が130cmを越える大型集石である。下部構造が未調査の6基を除き12基を調査した。

平面形は円形または楕円形の I 型が多く、方形(II型)または多角形のものもある。しかし I 型も実際には多角形状ともとれるものもみられ、一概にその平面形の規定はむづかしい。掘り方は、集石 169 を除いて、断面梯形状(II型)で、石は 2 段(b 型)ないし 3 段に(c 型)にが充満している。礫数は 198~838 個で平均 409 個となる。底部にローム粒を微量に含んだ薄い 3~5 cm の層があり、その層に炭化材を含む例もみられる(集石 24・27~29・51・61)。しかし集石内には炭の出土は認められない。また、数個の礫を立てた状態で縁辺を囲うものもある。かように A 型集石は、Alc<sub>2</sub>が約半数以上も占め、非常に計画的に構築された可能性の強いものといえる。

大部分は B~D 型の集石とともに 1 ないし数基で約半数の単位集石群を構成する。A 型集石の含まれる単位集石群は A-

2、A-8、A-9、A-10、A-11、A-16、A-18、B-1、C-1 と、その他の集石 270 がある。これらのうち単位集石群 A は 1 基の、C では 2 基の A 型集石がある。単位集石群 B-1 では、7 基で検出集石数の約半数弱を占め、むしろこの点に一つの特徴が見出せる。つまり、A 型集石は単位集石群の中で、ある種の役割を特に強くもった集石であるといえそうである。

B 型集石 短径が 100~130 cm あるもので C 型集石について数が多い。ほとんどの単位集石群にあるが、A-3、A-7 では欠く。単位集石群の中では数基ずつあるが一基のものもある(A-14・A-15・A-16・C-1)。総計 72 基検出して、うち 39 基を下部構造まで調査した。その平均礫数は 193 個である。平面形 I 型が 42、II 型が 10、III 型が 3、不定形の IV 型が 17 基ある。礫の積み方では a 型が 5、b 型が 15、c 型が 19 基で、2 ないし 3 段積が A 型集石と同様に多い。掘り方の断面形は 1 型が 26 で最も多く、3 型 4、4 型 9 と少ない。つまり B 型集石は、BIc<sub>2</sub>が 8 基、BIb<sub>2</sub>が 7 基、B II c<sub>2</sub>・B I a<sub>4</sub>が各 4 基で過半数を占め、平面形が円形を呈し逆梯形状の掘り方で、2 段ないし 3 段積みの集石が大半を占めることになる。また B 型集石 103 のみ掘り方の壁の一部はかなり焼けており、他の集石と様相が異なる。

C 型集石 A・B・D 型以外の法量をもつ集石であり、総計 106 基と検出集石数の約 30% を占めもっとも多い。うち、76 基について下部調査を行なった。平面形は I 型が 47、II 型 13、III 型 5、IV 型 41 となる。礫は a 型 25、b 型 28、c 型 21 でほぼ同数で A・B 型集石と比較して a 型が多くなる。掘り方の断面形は 2 型が 33 基でもっとも多く、ついで 4 型が 21、1 型が 17 で、3 型は 5 基とほとんどない。掘り方の認められない 1 型が多いのは、礫の一段積と深い関係がある。つまり、礫を地表に単に集めた集石 CIa<sub>1</sub>型が多くみられるということになり、C 型集石の 21% を占める。その他 CIc<sub>2</sub>が 8 基と多い。

D 型集石 短径 70 cm 以下の小形の集石で、総計 69 基検出し、うち、下部調査は 52 基で行ない、その平均構成礫数は 66 個である。平面形は I 型 33、II 型 6、III 型 1、IV 型 29 と圧倒的に I・IV が多い。石積みは a 型が 21、b 型が 17 で、75% となる。掘り方の断面形は 4 型がやや多いものの、1 型から 4 型まで大きな相違は認められない。1 型が多いのは一段積みの集石が多いことと相互関係にあり、この点では C 型集石と同様である。しかし、3 段積み集石が少なく、掘り方の断面形が均一化される傾向は、A~C 型には認められない面で、ここに小形の D 型集石としての特徴を示すことになろう。特に平面形と掘り方断面形に不定形が多い点は、小形集石であるために大形集石以上に、何らかの自然現象等による変形を受けた結果とも受けとれる。つまり、D 型集石は、構築当初の形態を残していないものも含まれている可能性もかなりあるといえよう。

表 7 類型別集石集計表

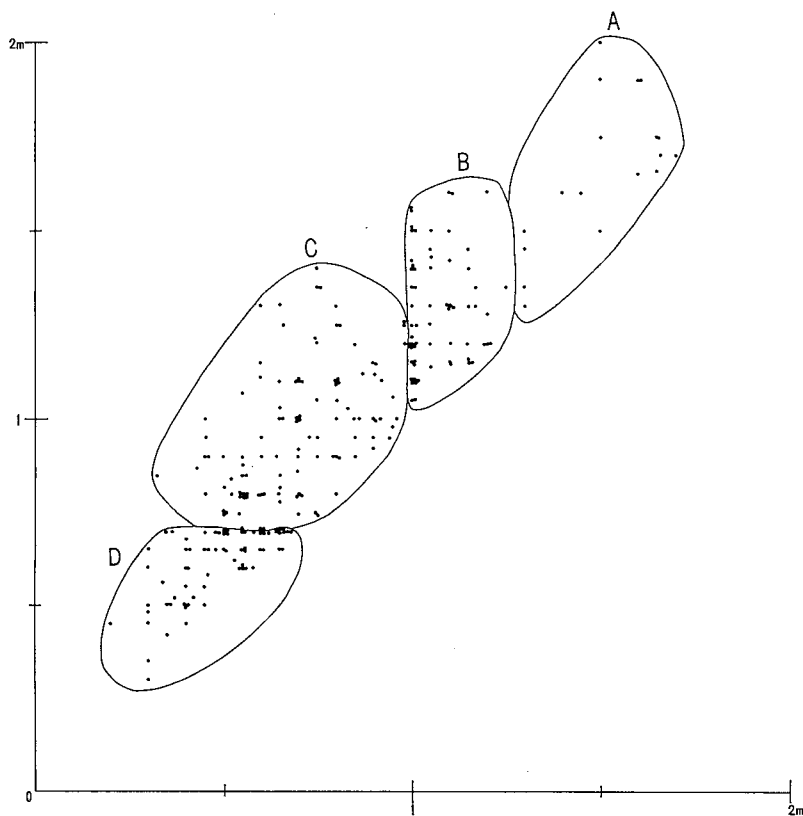
形別類型		規模別類型				計
		A	B	C	D	
平面形	I	10	24	35	28	97
	II	1	5	9	4	19
	III	0	1	5	0	6
	IV	1	9	27	20	57
礫の積み方	a	0	5	25	21	51
	b	2	15	28	17	62
	c	10	19	21	9	59
	d	0	0	2	5	7
掘り方の断面形	1	0	0	17	12	29
	2	9	26	33	11	79
	3	2	4	5	10	21
	4	1	9	21	19	50
計		12	39	76	52	179

(2) 集石掘り方と土壌との関係

掘り方断面形は本来は集石の断面形態を示すものである。すでにA型集石で述べたように、大部分の集石は掘り方底部までが、5cm前後の間層を挟んで入れられており、間層がほぼ10cmに達するものは集石66・116・135・140・200・146・152・157・168・195・210の11基である。さらに間層が20cm以上のものは、集石121・131・143・155の4基がある。これは2段ないし3段積み等の集石に一般に認められる傾向である。この関係は、集石そのものの構築面は黒褐色土層であるが、多段積み集石の掘り方の多くは、漸移層またはローム層に一部掘り込み、これらで十分に確認されている。従って、多段積み集石の掘り方底部が、ローム層または漸移層に達せず、黒褐色土中であつたとしても、それは集石底部の位置とさほど大きな隔りはないものといえる。

集石掘り方と土壌との区別は非常に難しい。掘り方は集石を入れるために掘られた穴だとすれば、集石を構築することに大きな意味があることになり、掘り方底部と集石下部とが一致することになる。しかし、前述したように、かなりの集石には、掘り方底部と集石下部との間に間層が見られ、そこに一致点は見出せない。しかし、その間層があつたにしても、そこにみられる集石のあり方は、礫を丁寧に掘り方の中に入れたとしか思えない状態が認められるのである。特に一部A・B両型の大形集石上面にみられる立石状の礫は、単に投げ込んでできる状態ではなく、また、周縁部が掘り方の壁にそつて礫を放射状に入れたと思われる状態はかなり意識的であり、乱雑に投げ込んだものでは決してない。ここに、「掘り方」を用いた理由がある。

しかし、集石の一部には、掘り方底部と集石下部との間層が20cm以上に達し、かつ、集石上面から底部まで、50cm以上の深さをもつものがある。集石66・121・131の3基がそれであり、集石の断面形が掘り方の断面形と一致しない。礫の積み方が1段のものや、礫の構成数が少ないものについては何ともいえないが、かなりの礫をもつ集石66・121は、掘り方断面形は逆梯形状(2型)であるのに集石はすり鉢状である。



挿図 180 集石の類型別法量分布図

集石131は逆に掘り方はすり鉢状(3型)であるのに対して、集石断面は逆梯形状である。このような不一致は、掘り方底部と集石下部との間隔が10cm前後あるものにもみられる。集石155・190・192・195などである。これらは、集石を入れるための掘り方というよりも、むしろ、土壌としての意味をもつものと思われる。つまり、比較的深い穴を掘ることに意味があり、集石は二次的ということになる。すべてC・D型集石であり、環状集石群を構成する集石とは明らかに異質であり、むしろ、「集石土壌」の呼称の方がふさわしい。また、土壌606・631などは埋土上部に礫が10数個み

られるものである。これら礫の集りは、集石と認識した状態と異なるという理由で、土壌に含めたけれども、集石 66 などと礫の集り方こそ相違するものの、構造的に類似するものといえよう。

他方、集石 C・D 両型に多くみられる 1 段積み集石の多くは、掘り方の確認の不十分のものがある(掘り方断面形 4 形)。これは、前述したように、黒褐色土上面に構築されたために、掘り方の有無の判断ができなかったからである。しかし、集石 D 型の一部には、黒褐色土が薄く、漸移層に構築したものもみられ(集石 187・316)、これらには確実に掘り方は認められなかった。また、集石埋土は黒色土が多く、この点でも掘り方の有無は確認できたが、これから、1 段積み集石の多くは掘り方を作ることなく、単に構築時の生活面にはほぼ集石を 1 段に構築したと考えてさしつかえがないであろう。つまり、多段積みの集石は、礫を積む(入れる)目的から、掘り方を必要としたのであり、この点では 1 段積みの集石は、それを必要としなかったということになる。

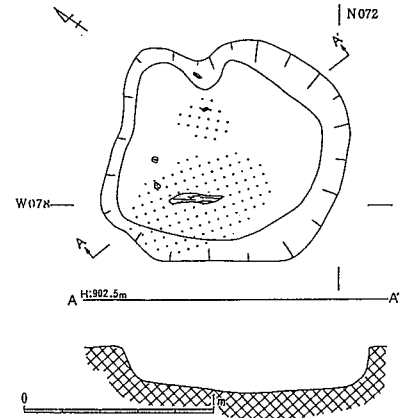
集石の下部調査は、単に個々の集石についてのみ行なったのではなく、環状集石群の下部(下層)遺構の検出もあわせて行なった。その結果では、集石直下に土壌が検出された例は、前述した集石 66 など 7 基のみであって、他に掘り方または土壌は検出されなかった。その意味では、もし、調査時に掘り方の検出を失敗したにしても、その掘り方は、下部遺構の検出面までのレベル差が 10 cm 前後であるので、集石 66 などみられる構造の集石ではなく、あってもレベル差の範囲内での掘り方にすぎないということになる。

### (3) 集石内の炭化物

集石内から炭化物が検出された集石は 39 基がある(別表 2)。内訳は A 型集石 8 基で A 型集石の中に占める率は 66%、B 型集石は 11 基で 28%、C 型集石は 13 基で 17%、D 型集石は 7 基で 13% となり、集石 63 のみ埋土内にあり、他はすべて掘り方底部である。いずれも微細な木炭片がわずかに認められる程度であるが、一部の A・B 型集石の底部には炭化材が認められた。最大は径 5 cm、最長 20 cm であるが、量は多くない。B 型集石 200 では、集石下部に炭化材とともに、焼土細粒を含む層が検出され(挿図 181)、集石 103 では壁の一部が相当焼けていた。このように集石下部に炭化物を含む例は大町市上原遺跡の積石遺構[大場他 1957]にもみられ構造も似る。しかし集石 103・200 を除いては、掘り方に焼けた痕跡は認められなかったので、長い期間にわたる火の使用はこれら集石内ではなかったものと思われるが、掘り方底部または壁面に火熱の痕跡を残さない程度の火の使用がおこなわれたことは、残存する炭化材の存在でも明らかであろう。

### (4) 集石を構成する礫

前述したように、集石は大小の安山岩の礫を用い、その数量は算出した地域だけでも、20,000 個に達する。こぶし大がもっとも多く、人頭大から鶏卵大ぐらいまであり、角礫と円礫がある。表面は赤褐色と青灰色をしたものが多く、前者は明らかに火熱を受けている。しかし、八ヶ岳山麓地域に一般に見られる礫は両者があり、いわゆる八ヶ岳泥流の中に含まれる礫である(挿図 14)。従って、集石内で火熱を受けて変色したというよりは、泥流形成時に火熱されて変色したと考えた方がより妥当といえる。事実、人為的の火熱を受ける際に生ずる炭素の吸着した礫は皆無である。しかし、礫が弱火熱を受けたかどうかはわからない。



挿図 181 集石 200 掘り方内の炭化物・焼土出土状態図

(5) 集石の年代

集石内から、その年代を想定しうる土器が出土したのは集石 27・28・29・51・61・134・136・138・268 である(図 194)。いずれも集石内部から出土し、集石 27・29 がIV-b期、他はV-b期のそれぞれの構築時の下限を示す土器片が出土した。これらは集石構築時に混入したものと思われ、集石の構築時期はIV-b期からV-b期までに求められるであろう。しかし、大多数の集石は、その上面で遺物の出土はみられるものの、確実にその年代を想定しうる資料的価値は乏しいといわざるを得ない。

他の遺構と重複する集石はいくつかある。まず、環状集石群は間違いなく、阿久II期の上層にすべて構築されており、この点では、環状集石群の構築時期の上限は、絶対にII期まではさかのぼり得ないことになる。従って、問題は阿久III期以降の遺構との重複関係であろう。

III期の住居址との重複関係は集石 130 と住居址 27、集石 132 と住居址 33、集石 268 と住居址 49、集石 318・322 と住居址 66、集石 220 と住居址 12、集石 221 と住居址 59、集石 275 と住居址 74(旧)の7例がある。このうち、集石 268 は住居址 49の、集石 268 は住居址 74(旧)の埋土中途にみられ、これらの住居址の埋土形成途中で集石が構築されたことを意味するものである。他はいずれも住居址の検出面近くの埋土上部に構築されていた。

IV-a期の住居址と重複関係は2例がある。集石 162 と住居址 52、集石 324 と住居址 58で、これらは明らかに住居址がほぼ完全に埋没したのちに構築されたことを示している。

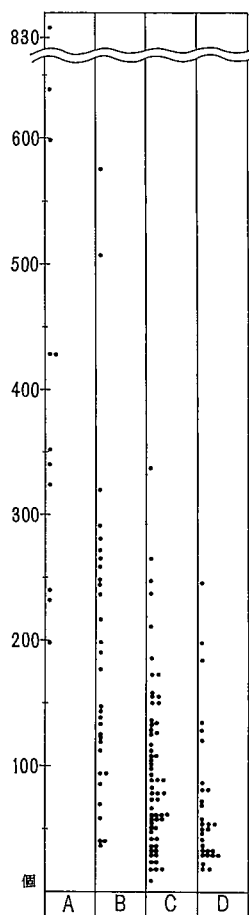
環状集石群の立地地域が、III期以降の住居址群の占地地域とズレがあるために、集石との重複関係は意外と少ない。しかし、環状集石群という一つの大きな単位でみた場合に、環状集石群の構成礫の多くが、II期とIII期の住居址埋土上層にあることは発掘時の所見で得られている。しかし、III期新段階の住居址 76では、環状集石群の構成礫の一部が、埋土内の一角に崩れ落ちた状態で検出されており(挿図 116)、これは住居址 76が廃棄後埋没する中で礫が落ちこんだものと考えられ環状集石群の構築時期を示す資料となる。すなわち、住居址 76の廃絶後、さして時間的隔りのない段階に少なくともこの部分で集石の構築があったとみられる。

他方、住居址 12・27・33・49・59・66・74(旧)等にみられる集石は、明らかにこれらIII期の住居址が埋没中途か、終了後に構築されたものである。また、IV-a期にも住居址埋没後構築された住居址 52・58が認められるのである。

以上、集石内出土遺物ならびに、集石と住居址との重複関係をみる限り、環状集石群の構築は、阿久IV-a期に始まりV期まで継続していたことが理解できる。

環状集石群の占地地域にはおびただしい石器および土器片が出土したことはすでに述べた。その所見に従えば、石器は型式学的には、II期住居址群地域から出土する石器群よりも後出的であることが明らかにされている。土器片の分布も、III期以降のものが、環状集石群の立地地域と一致している。IV期以降の土器群が一致する点は遺構との重複関係から理解できるものであり、何ら矛盾しない。問題はIII期の土器片の分布が、環状集石群の分布地域よりもややせまいもののほぼ一致する点である。土器片の細部の型式的検討は残されているが、この所見に従えば環状集石群の構築開始はIII期の中に求められるであろう。

III期以降の居住地域と環状集石群の占地は一部重複するものの、基本的には別である。その意味では、



挿図 182 集石の類型別礫数分布図

環状集石群が居住地域をさけて構築されている点で、Ⅲ期の中にその開始時期が求められよう。しかし、遺構との重複関係では、Ⅲ期の遺構が集石群を確実に破壊した例が現在のところ見られない点で、ここでは、その可能性のみを指摘しておきたい。

以上、集石の上・下限について、Ⅲ期までさかのぼり得る可能性はあるものの、ほぼ構築時期が推察できる。しかし、その構築が長時間の中でなされてきたことは考えられるが、構築過程の理解できる積極的資料は現在持ちあわせていない。環状集石群出土の膨大な土器片の整理作業が不十分である以上、その分析も傾向としてしか提示できず、今後の再整理が必要であろう。だが、傾向としてではとらえられるが単位集石群 C-2 付近にⅣ期の土器片が少なく、逆に単位集石群 A-13 付近に多いことは、単位集石群にも年代差のある可能性がある。

単位集石群内の個々の集石の重複関係は A-1 で集石 136~139、A-4 で集石 121 と 66、A-6 で集石 120 と 74、A-8 では集石 184 と 185、B-1 で集石 23・24・61 の間等でみられる。また、重複関係には至らないものの、きわめて密着した集石はかなり多い。これらのうち、集石 66・74・61 が構成礫の相違と構築状態から、新しいと判断される。集石は V-a 期の土器群を集石内から出土し、ほぼこの時期に構築されたとすれば、それより古い集石 24 は V-a 期か、それよりも年代が上ることになる。B-1 内には、集石 27・29 がⅣ-b 期、集石 28・51 がⅤ-b 期に構築されたと推定できる。A-1 内の重複関係のある集石 136 はⅤ-b 期に、138 はⅤ-a 期に出土遺物からほぼ帰属年代が求められる。だとするならば、単位集石群内の集石にも時期差があり、単位集石群そのものが一時期に作られたものではないことになる。

帰属時期の求められる集石数がきわめて少ないところから、かように判断することは、冒険ともいえようが、環状集石群内の土器の分布が、時期によって一部に片寄りみられるものの、ほぼ一様にみられることは、以上の点を裏付けることになる。また、単位集石群内にみられる、密接する集石が多いことも、もし、後述のように、単位集石群の構築がある規格性のもとになされたとすれば、時間差のあらわれと理解するのが、もっとも妥当といえよう。環状集石群内の時期別にみた土器の分布に、時期によって片寄り一部みられることは、単位集石群の構築時期にバラツキがあったことも意味する。それは環状集石群が、立石・列石を中核とした、きわめて規格性のある構築物と考える以上、その構築当初から環状を考え、その範囲の中で単位集石群を順次構築し続けた中でのバラツキと想定したい。

単位集石群には「方向の規格性」が認められることはすでに指摘した。つまり、それは周縁部を構成する集石が一定の方位を持ちながら、環状に巡るものであった。しかし、いくつかの単位集石群には、周縁部が二重になったり、環内にいくつかみられるものがある。逆に、集石が点在し、環状とはならないものもある。これらは、環状集石群の外郭部に多くみられる(単位集石群 A-1・A-3・A-10)。単位集石群がほぼ環状に巡ることを基本とするならば、これらの差は、前者は単位集石群が完成された後の飽和状態の結果であり、後者は構築過程の状態を示し、完成することなく終わったものといえよう。

以上をまとめれば、環状集石群は、Ⅲ期の可能性はあるものの確実にはⅣ-a 期に始まり、Ⅴ-b 期まで、ある規格性のもとに構築し続けられた、構築物であろうということになる。

#### (6) 集石の性格

本遺跡でも、集石の性格を決定づける決定的な資料は見出せなかった。しかし、個々の集石の分析の結果、一部に「集石土壌」と思われるものが少数あるものの、基本的には、環状集石群は、「単一構造」の集石からなると考えられる。ただし、一言で、「単一構造」といっても、その内容はすでに述べたように、複雑な様相をもつ。しかし、それは掘り方をもたない小規模の集石と、掘り方をもつ集石を核とした単位集石群がいくつか集まった環状集石群が、かなり長い期間にわたって構築された結果として受けとめられよ

う。単位集石群にみられる「方向の規格性」や、立石・列石遺構を中核とし、土壌群地帯、方形柱列、さらに居住地帯と占地を異にしなが、環状に継続しながら構築されていた背後にはかなりの規格性と集団規制があって初めて可能となったものと考えたい。このような規格性と集団規制の中で何の目的で環状集石群が構築されたのかという点に、集石の性格づけがなされよう。

規格性は核となる個々の集石に認められる。集石の大部分が、平面形、礫の積み方にみられるように、規模の大小にかかわらず、円を基調として、逆梯形状の掘り方内に2段以上の礫を積むものが圧倒的に多く、また小規模集石(C・D型)では1段積みが多いのは、そのあらわれといえよう。また、単位集石群の構成がC・D型を基調とし、さらにB型集石が加わるもの、あるいはA型集石が加わったA～D型集石で構成されるものなどの種類はあるものの、その変化は、まさに、単位集石群が、随意に構築されたものではなく、それ自体がある一つの規格性を示すものと理解したい。

個々の集石の構造上の特徴は同じ縄文前期の大町市上原遺跡の積石遺構と共通する。上原遺跡では、配石遺構をもち、いくつかの積石遺構があるなど、環状集石群に似る一面がある。同様の例は、北安曇郡有明山社、東筑摩郡唐沢遺跡がある。これらの遺跡は調査地域が限定されているために、その全体像は不明であるが、本遺跡と同様に縄文時代前期後葉であり、環状集石群となる可能性が高い。

すでに集石の中に「集石土壌」と呼称し得るものがあることは指摘した。これらは、北海道などにみられる積石墓[河野・藤本 1961]と構造的には類似するものの、大多数の集石は異なるといえよう。なぜならば、もし、集石が墳墓と仮定した場合に、すでに詳述した集石の構造上から、遺体を埋葬するだけの空間を見出せないのである。すなわち、集石の掘り込みの深さは20～30 cmが多く、集石下部と掘り込み底部との間隔は10 cm以下が多い。この点を考えれば、遺体を埋葬したのち土盛をし、そののち、集石を構築したと考えることは困難であろう。強いて墳墓とするには、遺体を直接礫で覆うか、再葬でなければならない。しかし、掘り込みのない集石や炭化材の存在を説明することができない。また、単位集石群Cの状態の理解も不可能に近い。A型集石の中に中央がやや凹むものがみられ(集石 28・129・270)、これらは遺体埋葬後に礫を多数覆ったために、中央が陥没した証拠と考えられないこともない。しかし、これは少数例であり、むしろ、それらは整然とした礫の積み方をした典型であって、自然陥没の結果とすることはできないと考える。

従って、墳墓の可能性を完全に否定できないものの、現在のところ、極めて少ないといえよう。むしろ土壌の中で述べたように、これらの中に墳墓が求められるのである。

ここで再び、遺構群の中に占める環状集石群の位置関係を確認しておきたい。環状集石群は立石・列石を中核とする土壌群を囲むようにある。しかも、土壌群自体に立石等で特徴づけられるいくつかの群がみられる。これは、単位集石群の変化とそれ自体は一致する。つまり土壌群は単に同一構造の土壌からなるだけではない。いくつかの構造上の特徴をもつ土壌が、その構造上の特徴をもつ土壌群でまとまりのある分布を示している。つまりそれ自体の中に規格性が読みとれるのである。単位集石群もまた、規模の大小、構成集石数などで変化がみられる。これらの変化は、これらを構築した集団の差とも考えられはしないだろうか。土壌群の性格が再葬墓であるとすれば、個々のグループ化された土壌群は特定集団の再葬墓群となり、単位集石群もまた、特定集団の構築した記念物であり、再葬儀礼に伴う何らかの祭式の跡と考えたいのである。

(笹沢 浩)

註1 「集石」を総合的にとらえ、その学史と考察をおこなったのは杉山博久氏[杉山 1977]であり、多くの啓示を受けた。

### 3 立石・列石

#### (1) 立石・列石の特徴

立石・列石は阿久IV・V期の遺構群のほぼ中央に検出された遺構で、それらは円形石組の中央に立てられた立石と、その北東前面に8個の平板状石塊を用いて、2個一対で対峙させ、回廊状に立てた列石からなる。立石は回廊状列石の空間を通して蓼科山腹と相対するであろうという根拠はすでに述べた。また、立石下部に多量の焼土があり、立石自体も焼け、かつ大形土塊が本遺構の下部および付近に集中してみられることと、特殊と考えられる高台付角形浅鉢(2288)[百瀬1981]が出土したことも指摘した。

かような特徴をもつ立石・列石は土塊群、方形柱列、環状集石群、住居址群の中心にあることと、立体的構造物であることから、これら諸遺構の中核的遺構といえよう。すでに、この中核的構造物を囲む諸遺構のうち、住居址を除く他の遺構群の性格が多分に宗教的性格のあることは各項で指摘した。だとするならば、立石・列石は、これら諸遺構のシンボリック構造物として、宗教的性格が付与されるであろう。

この性格は、相対峙する蓼科山との関係の中で求められるであろう。立石の背後の発掘調査は未了であるが、ボーリング調査の結果では、立石の東北前面の回廊状列石を予想させるような石塊群の存在は確認できていない。従ってないと断定することはできないまでも、その可能性はきわめて薄いといえるであろう。つまり、回廊状列石を通して示される方向は、現在のところ、間違いなく、蓼科山にむけられていると理解されよう。本遺跡の眼前にせまる男性的な八ヶ岳連峰ではなく、コニーデ型の、なだらかな斜面をもつ蓼科山にむけられている点で非常に暗示的である。

#### (2) 類似遺構にみられる山岳信仰との関係

類似する遺構は特に東日本に認められ、縄文後期が多いけれども中期にもみられる。北海道に分布するストーン・サークルは著名である[駒井1952]。これらは墳墓の性格が強いといわれ、また、大湯町環状列石も類似遺構のひとつであり、これも祭祀説[後藤1953]とともに墳墓説が有力である[江坂1954]。

大場磐雄氏は大町市上原遺跡で検出された配石遺構について、本遺跡を性格づける上で参考となる重要な発言をしている[大場他1957]。上原遺跡で検出された配石遺構を慎重に復元を試みた結果、それは相接近して作られた二群からなる環状石籬とその中間の西立石、そこから東に5.2m離れた東立石からなるであろうとした。1号環状石籬は1個の中心柱と12個の側石柱からなり、3.6×2.2mの楕円形状を呈し、中心柱は高さ75cm、幅45cm、厚さ20cmで、直下に木炭を含むピット(P<sub>2</sub>)がみられた。2号環状石籬は1号の南2.4mの位置にあり、1.8×1.5mで規模・立石数は縮小されているものの、構造はよく類似するという。これら環状石籬の周囲には積石・土塊とともに、方形柱列C型に類似したピット群がみられる。大場氏は、いくつかの類似遺跡を紹介する中でこれらの遺構の性格を、以下のように推定しておられる。すなわち「上原石器時代住民の集落の端に存する共同祭場の場とみるべきで」それは「眼前に迫るアルプスの連峰は(中略)狩人たる石器時代人にとっては神々の世界である。その山の糧を与え給う山霊の聖所である。故に、その恩恵に感謝し、山霊を仰いで祭儀を行ったことがあり得べきではあるまいか」[大場1957]。ここで、始めて、配石遺構と山岳信仰との結びつきが指摘され、かつ、配石遺跡の祭祀遺跡説が提案されるに至った。

同様の考え方は静岡県千居遺跡の調査報告書で小野真一氏が提示している。千居遺跡は縄文時代中期後半で、時期的にはかなりの隔りはあるものの、地域的には、中部山岳地帯とそう遠く離れるものではない。ここでは2本の帯状の列石と、その間を結ぶ部分にあるいくつかの環状配石等からなる大配石址である。帯状列石は40mと49mで、約30mの間隔をもって並列し、その東側に同時期の5棟程度からなる集落址



がみられる。まさにこれらは馬蹄形集落の広場空間に、配石址が構築された状態を示している〔小野 1975〕。配石址もまた、馬蹄形を呈し、内部にそれ自身の広場空間がみられる。この状態はまさに阿久遺跡における遺構配置に類似するといえよう。小野氏はこの配石遺構が、富士山と相対するように作られているところから、千居遺跡の配石は富士山を意識して作られたものではないだろうか、配石遺構と山岳信仰との結びつきを指摘されている。

また、最近山梨県牛石遺跡でも千居遺跡と同時期の環状列石が調査され、ここでも富士山との関係が指摘されている〔奈良 1981〕。

千居遺跡に類似した環状列石は埴科郡巾田遺跡でも検出されている〔森島 1967〕。中期後半で時期もほぼ一致する。調査地域が限定されているために、その全体は不明であるけれども、この遺跡が、古来より当地方で親しまれてきた、コニーデ型の姨捨山(冠着山)(1252.2m)の裾野にある。

上原遺跡のある松本平のほぼ中央にある北安曇郡有明山社遺跡でも、いくつかの集石が群をなして検出されている。阿久遺跡とはほぼ同時期に考えられており、調査地域が限定されているため定かでないが、環状になることも予想される。ここでも、富士山型の山容をもち、信濃富士と地元で親まれている有明山(2268.3m)が眼前にある。

以上中部高地の縄文時代前・中期の大規模な集石・配石遺構の存在が予想される地域では古くから親しまれた「名山」があり、それとの関係が予想されるのである。

### (3) 立石・列石の性格

すでに中部山岳地域における縄文時代前期の大規模な配石・集石遺構と山との関係は指摘してきた。ここで、上原遺跡と本遺跡の遺構との比較を試みたい。ただ、上原遺跡は調査範囲が狭く不明な点が多いので確定できない面が強い。

共通性は時期・地域と遺構内容である。後者は上原遺跡では角柱状の立石を中心に、それとほぼ同様の石が円形に囲む2種の石籬があり、その中間と東に2個の立石と、これらの遺構を囲むように積石(集石)、土壇、方形柱列がみられる。本遺跡では角柱状立石を中心に円形石組があり、その北東前面に列石がある。その相違は円形石組が、上原遺跡では中心の立石と同様の角柱状の石塊であり、本遺跡では板状の小石塊である。また、上原遺跡ではやや小形の同一の環状石籬があるのに対して、本遺跡では板状の石塊による回廊状列石であり、環状と回廊状の相違があるものの、ともに立石群からなる点とともに、本遺跡の角柱状立石を除いては、遺跡周辺で容易に入手しうる石塊を用いる点で共通するといえる。しかも、上原遺跡では、東立石の存在等方向を示す立石がみられる点では、方向を示すという点で本遺跡の回廊状列石と類似する点があるように思われる。また、立石下部に火を使用した痕跡がみられるのも共通する。

以上、角柱状か平板状の相違はみられるものの、それは遺跡付近で入手できる石材の相違であって、根本的相違とはならないであろう。あるいは、石材の相違が遺構の形態上の相違となってあらわれたとも考えられる。ただ、重要なことは東立石の逆の方向は北アルプスの山容、特に鹿島槍ヶ岳方向をさし示すことになり、あるいは上原遺跡での復元が、2つの環状石籬ではなく、2つの環状石籬と回廊状立石であったという考え方も成立しようが、これも大場氏の復元方法に疑問をさしはさむ余地がないとすれば、これ以上の追求は意味ないであろう。なぜならば、両遺跡とも、本来の形態を残していたものではない。立石というの推定にすぎないのであって、これ以上推定の上にこれを重ねることは想像の世界に立ち入ることになる。従って、今後の資料増加をまって検討すべき課題とし、ここでは、大略の類似点を指摘するにとどめる。

両遺跡の最大の相違は遺跡内における占地位置である。阿久遺跡では遺構群のほぼ中央に構築されてい

るのに対して、上原遺跡では、台地縁辺に近い位置にあり、もし、阿久遺跡にみられるような大規模な環状集石群を予想し、その中核的遺構とするには、その占地から無理である。立石遺構の形態上の相違は、あるいはこの点に求められるのかも知れないが、先に指摘したように上原遺跡の調査範囲が狭いこともあって、これ以上の比較は困難である。

両者から、山岳信仰と結びつく立石遺構が、中部山岳地域において少なくとも縄文時代前期後半に構築されたということは、その当時何らかの祭式がおこなわれたことを示している。そして、その祭式のひとつに、民俗例から祖先崇拜の祭式を考えたいのである〔藤井 1980〕。「阿久村」を中核集落とした祖先崇拜の祭式が、共通の集団意識のもとに、幾世代にもわたって行なわれた結果が多量の集石群と土壇群の構築となって今日に残されたといえようし、その数量の膨大さも理解できる。阿久IV-a 期以降の住居址数の減少に対して、集石数が増加したと考えられるこの現象は、以上の祭式の存在を裏づけることになろうが、この点はさらに後述する。

(笹沢 浩)

## 4 方形柱列

### 1) はじめに

縄文時代における堅穴式住居以外の構造物は近年その類例を増してきている。それらのうち後期を中心とする長方形柱穴列については最も早くまとまった検討が行なわれた〔坂上・石井 1976〕。類例は長野県〔宮坂 1980 a〕、新潟県〔駒形・寺崎 1981〕などでも見出されつつあり、この種遺構が後期集落の中でかなり普遍的な位置を占めるものであることが明らかになりつつある<sup>(1)</sup>。また、時期的にも中期前半〔新藤 1981〕・〔佐々木 1980〕・〔坂上・今井 1980〕などの例が加わり、少なくとも中期から後期にかけて堅穴式住居同様その系譜をたどりうる可能性がでてきたといえよう。一方、このような掘立柱建物とされるものの他にも、金沢市チカモリ遺跡の環状列木、北陸から東北地方に類例の多い堅穴式大型住居など、一般的な住居址以外の構造物が集落遺跡内で明らかにされつつある<sup>(2)</sup>。縄文集落は、堅穴式住居、種々のピット群などとともにこれら特殊な構造物をその構成要素として複雑な景観を呈したであろうことを考えないわけにはいかない(長崎 1980)。

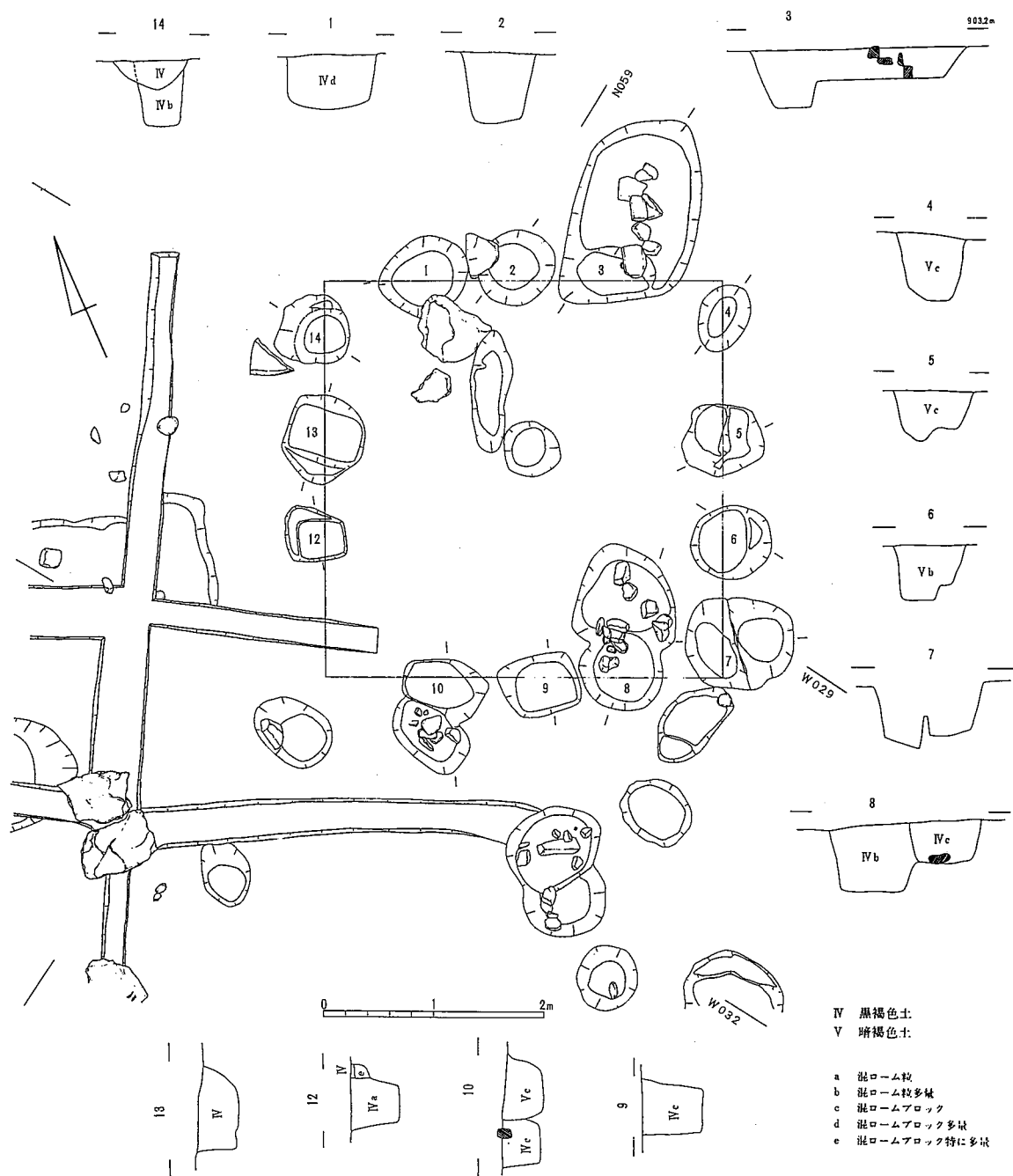
本遺跡において検出された方形柱列の時期および形態について類例としてあげるのは諏訪市十二ノ后遺跡の数例〔樋口・宮沢他 1976〕以外には知られていない。中期前半および後期に知られる長方形柱穴列と方形柱列の間には、なお大きな時期と形態上の落差がある。早期末の可能性を指摘された埼玉県打越遺跡〔高橋他 1978〕の「大形方形ピット列」は、本遺跡と同時期の遺跡から見出されたが、形態的にはむしろ長方形柱穴列に類似する。資料の増加にともない堅穴式住居と異なる構造物は、縄文時代の長期にわたって存在したことが明らかになりつつあるものの、それらがどのような系譜的関連をもつものであるかはまだ検討の課題として十分とはいえない。以下、本遺跡を中心に二、三の検討を行なうが、筆者には建築史の素養がないために不十分な点があることをお許し願わなければならない。

### 2) 類例

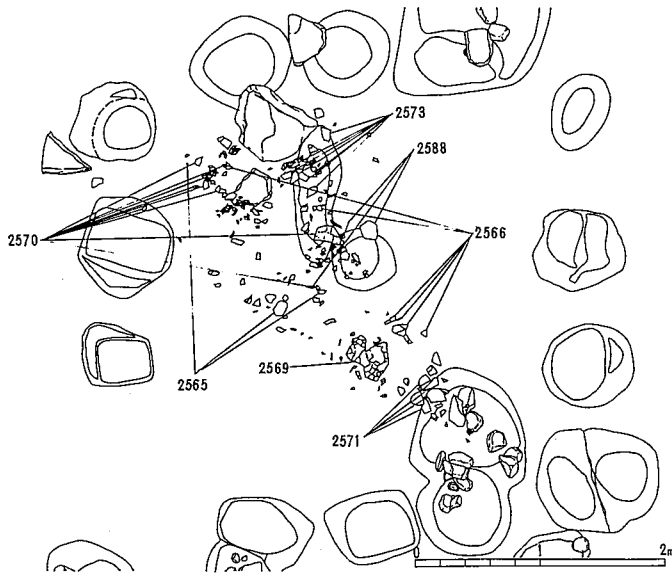
現地調査終了後の検討により抽出した類例が3基ある。その1つは、B 類型の方形柱列であり、a 号としておこう(挿図 183)。これは CU 64 付近にあり、列石北東に隣接する。掘り方の平面形は他と比べてやや不揃いであるが、深さ、埋土の状況などはほぼ共通する。規模その他は方形柱列 II によく似るが、東西両辺に4個ずつ、その間に3個ずつを置くのはやや異例といえ、南西角の掘り方 11 は検出されていない。方向 N 23°E、一辺 3.6 m の正方形を推定できる。柱痕跡・掘り方以外の施設は認められていないが、内部の

検出面付近でII期I群A(2565・2566・2569~2571)がIV・V期と思われる土器(2567・2588)とともに土器溜り状にまとまって出土している(挿図184)。位置関係からみると掘り込み面上に本址に伴って存在したとも考えられるが、他に遺物をまとまって出土した例がなく、その性格ははっきりしない。

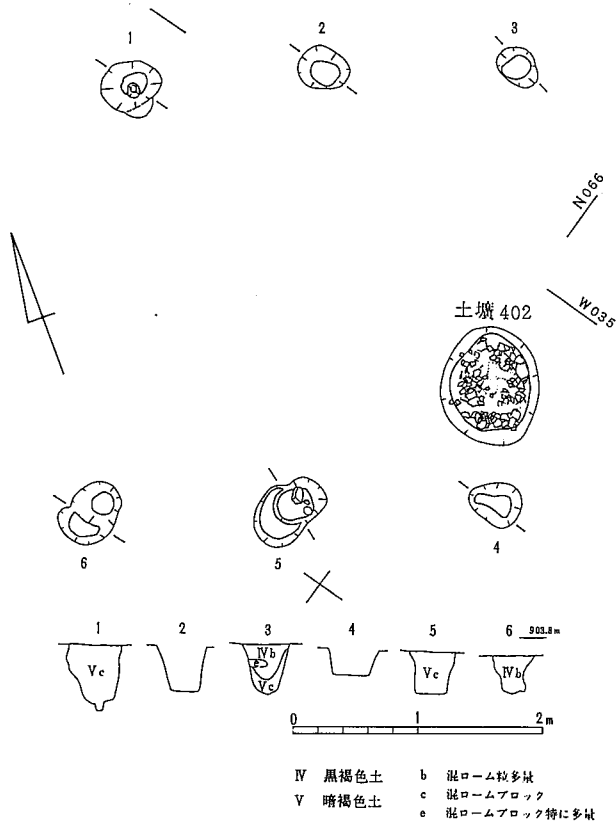
他の2例はA類型に規模は似るが、配置はA・B類型それぞれに通ずるところがある。b号(挿図185)はCQ 67付近にあり、周辺は集石、土壌などの分布の空白域で、6個の柱穴と考えられる掘り方を一体のものとするのは容易である。南北両辺に掘り方3個ずつを置くが、東西両辺を欠く点がA類型と異なる。ややゆがんで平行四辺形的になるのはB類型の方形柱列IVなどと通ずる。方向N 19°Eであり、一辺3.4mの規模はB類型の方形柱列IIとはほぼ等しい。内部に土壌402があり、これはII期の土器(2211・2212)を敷き詰めて焼土も伴うものであり、柱列と関係あるものかどうか明らかではないが、時期的には大きな差はないと思われる。



挿図183 方形柱列a号実測図



挿図 184 方形柱列 a 号付近土器出土状態図



挿図 185 方形柱列 b 号実測図

次に D 区西南部、上層に集石が集中する部分の北側に、長方形配置を想定させるものがある。

③土壌 131・130・136・168 であり、深さ、形態ともほぼ同様に立石様の礫をもつ点も共通する。柱穴の様相はあまり感じられないが、長軸方向は方形柱列 V などとほぼ一致する。

以上 3 例ほどでないが、規則性が考えられる配置は他にもいくつかあるが、ここでは触れない。これらは、柱穴的なもの、土壌的なものなど種々あるが、この 3 例を含めて、方向が方形柱列のそれに近似するものが多い。

c 号(挿図 186)は遺跡西端に近い IP 02 付近にあり、住居址 37 の西側である。南西角の 1 個が発掘区外で未掘と考えられる。b 号と類似するが、南北辺ではなく東西両辺に掘り方 4 個ずつを置き、南北両辺にはない。一辺 4 個配置は A 類型にはなく、前記の a 号などにみられる。掘り方の大きさや深さは不揃いであるが、その間隔は東西両辺で良く似ている。周辺は土壌などの遺構分布の空白域であり、遺跡全体からみても最も西端に位置し、形態・占地とも特異といえる。

以上の 3 例は方形柱列のうち A または B 類型と良く類似し、その一種と考えるほぼ誤りはないであろう。これ以外に土壌の規則的配置はいくつかみられるが、それがどのような性格をもつものかは明らかにしえなかった。しかし、中には柱穴状のものもあり、方形柱列とした A~C の 3 類型と同一視できないとしても、柱が建てられることに意義のあったものの存在も十分考慮する必要がある。一応、そのまとまりを列記して参考としたい。まず、方形柱列 XIII の東側には、直線的に等間隔に並ぶものが集中する。この位置は上層の集石の礫が特に密な部分でもある。

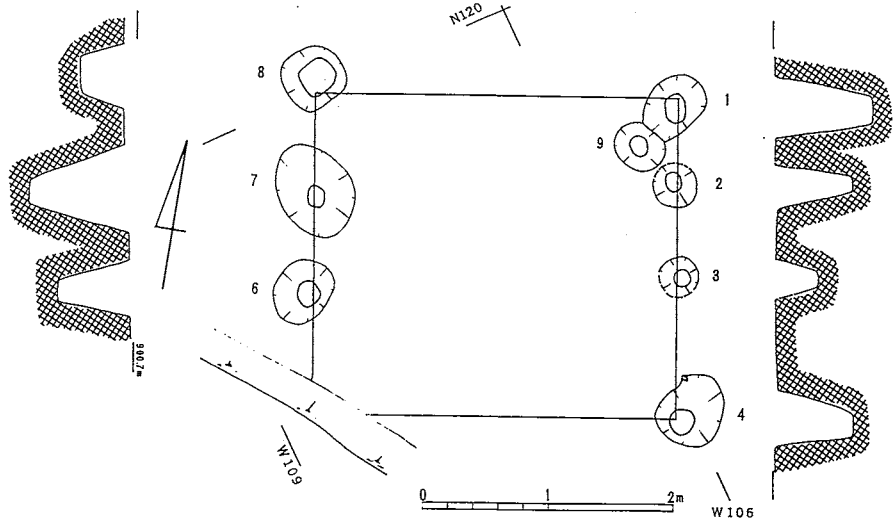
①土壌 631・663・634 は根固め状に礫が詰められたものが直線、等間隔に並ぶ。

②土壌 643~647 は直線に 5 個並び、さらに 647 から北へ直角に 648・651 と続き、644 から南へ 654・662 と続く。これらはいずれも柱穴状の形態をもっている。

### 3) A・B類型 の遺構

#### (1) 掘り方の形 態と配置

分類の項で述べた3  
類型の掘り方の形態と  
配置を細かく観察する  
と、共通性とともな  
微妙な差異のあること  
を指摘できるので、以  
下に列記して系統的関  
連を考える材料とし  
た



挿図 186 方形柱列c号実測図

- ① 一辺5個配列となるB類型には、直列する辺と外方へ張り出す辺とがあり、この特徴が著しい方形柱列IVなどは直列辺を除外するとb号と似た配置となる。
- ② B類型には一辺4個配列や3個配列の例があり、これらは共通して北西2辺が掘り方形態・配置が整っているのに対して、南東2辺は切り合ったり、小形であったり、配置が乱れたりする。
- ③ この3または4個配列はA類型と配置数の点で共通するものがある。
- ④ B類型の掘り方には、円形で径に比較して深いものと長円径で比較的浅いものがある。後者は全体の規模が大形のものに限られるが、前者は大形から小形のものまでである。掘り方の形態においても方形柱列IVは特殊である。
- ⑤ A類型はすべて小形であり、B類型の小形例とほとんど等しい規模のものがある。

以上のように、遺構の形態は相互にかなり密接な系統的関連が予想され、得られた資料のみでもその変化は漸移的にたどれそうである。ただ、この変化が時間的変化だけではなく、同時的なバリエーションも含むであろうことは十分に予想される。

#### (2) 上層・検出面・掘り方の遺物

検出面に至るまでの遺物の平面的分布は別項に示した。それによっても各遺構と明らかに結びつくような分布密度の変化は認められない。ただ、あえて指摘すれば以下のような点がある。

- ① 方形柱列IV、a号周辺はII期の土器が多く、方形柱列Xの周辺もわずかに多い。
- ② 方形柱列X周辺はIV期の土器がわずかに多い。

石器は器種別にみても、土器同様変化はない。ただ、掘り方(VI-9・10)から出土した石皿(1548)が住居址35付近出土のものと接合したこと、C類型の方形柱列X内部の土壌461、方形柱列X検出面でそれぞれ石皿が出土している点は、本址と関連あるものかどうか不明であるが注意される。

一方、付近の土壌などで特徴的な遺物の出土状態は次の4例がある。

- ① B類型のa号内部の検出面でII期IAの5個体分以上が破砕して集中出土している。
- ② A類型の方形柱列XIIIの掘り方に接する住居址65の施設と考えられたピット中から、半完形のII期IAが出土している。
- ③ A類型のb号内部の土壌402からは、2個体分のII期IAが破砕して出土している。
- ④ B類型の典型とした方形柱列IVの排土と考えられる部分から、II期IA1個体分が破砕して出土してい

る(住居址 36 の項参照)。

この4例は状況は異なるが、いずれもII期IAの土器が半完ないし1個体分まとまって方形柱列の至近から出土している。これが機能的関連を有したものでどうか明らかではないが、A・B類型がII期に中心を置くとき、特に①③④の例などは、付近に同時期の遺構がほとんどないことでもあり、全く無関係とするには無理がある。土壌または検出面において、II期の土器がこのような状況で出土した例は他にはなく、これが方形柱列に関わるものである可能性は強い。特に、いずれも人為的に破碎されたと思われる出土状態を示す点は、方形柱列の機能と結びつく何らかの儀礼的行為を示すものとも考えることもできる。

### (3) 床面施設と周辺

遺構の検出面とその上層および周辺において、炉など掘り方以外の施設は認められていない。しかも、掘り方に囲まれた内部空間に土壌が存在する例も少なく、少数の例外も時期が異なるものであることが推測された。この内部の面は、掘り方の掘り込み面が確認された例がないために、全く掘り込まれない平地式であったとする積極的根拠はない。しかし、集石面とほとんど変わらない面に掘り込み面が予想されるにもかかわらず、堅穴の様相を示すものが全くないことから、この内部は周囲の地表と高底差がなかったと判断したい。ただ、住居址と切り合い、それより新しい方形柱列V・VI・VIIIの場合は、住居部分が自然埋没あるいは人為的埋没によって、完全に周囲の地表と同レベルになってから構築されたというようには観察されていない。もし土間面として機能していれば、その機能上の要求は多少の凹凸を許容したと考えられる。また、集石面との関係からみて、集石構築時に失われる可能性もあるものの、その下層の検出面に至る20~30cmの間層中にも何ら痕跡が見出されていない。平地式の遺構は、後世の例でも遺物が少ないという性質はあるとしても、このことは、その使用が住居のように長期繁雑に行なわれなかったことを示すと同時に高床の可能性も否定しない。

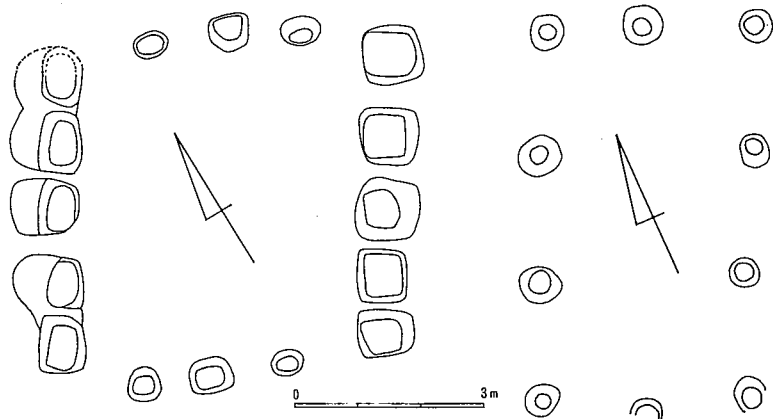
いずれにしても、遺跡全体の遺構の分布からみて、方形柱列周辺、特に内部空間には土壌が少なく、掘り方との切り合いもほとんどない。土壌の時期決定が確実にこなえるものが少ないという制約はあるとしても、このような状態は、方形柱列周辺がかなり長期にわたって特定の場所として意識され続け得る要因が存在したことを意味するのではなからうか。これは、内部空間の使用が先に述べたようであったとしても、構造物自体は長期間存在したか、または、方形柱列が存在する地区が、その用途について何らかの禁忌をもって意識されていたことを示唆する事実と解釈したい。

### (4) 上部構造

柱の位置と直径の大略が推測できるだけのこの種遺構に、住居址に匹敵するような上部構造を復元することは困難である。しかし、たとえば方形柱列IVのような、各辺および相対する掘り方間における規格性は、そこに建てられた柱が、特定の対応する上部構造の荷重を支えたと考えさせるに十分であろう。もし、上屋を想定すれば、今日まで明らかにされた縄文時代家屋が堅穴で、すべて垂木が地面にふきおろされる形態であるのに対して、相当異なったものとならざるを得ない。以下あえて上屋を想定するのも可能性の一例としてであり、結論として屋根をもつ構造物が方形柱列のすべてであったと考えるわけではない。

長方形柱穴列と比較すると、短辺中央を棟持柱とする切妻式と考えられたものにB類型の南北二辺のありかたはよく似ている(挿図187)。この棟持柱の間隔は長方形柱穴列の例示したタイプの場合ほぼ5m前後に画一化されており、短辺長も同様に3m程度であるという[坂上・石井1976]。これはA類の辺長2.5m~3.0m、B類の5m前後と似ており、構造上の制約による限界値を示す結果とは考えられないであろうか。一辺5個あるいは3個配列のA・B類型については、このように長方形柱穴列との類似点を指摘できる。

一方、4個配列のものも、長方形柱穴列のなかにみられる短辺2個の例などから考え、<sup>(5)</sup>同一構造ではないとしても一定のバリエーションに含まれると思われる。しかしながら、このように棟の存在を考えると、桁方向としての二辺(直列辺としたもの)の掘り方のありかたが、長方形柱穴列の場合と非常に異なっている。方形



挿図 187 方形柱列IVの掘り方配置と池部第 14 遺跡 19 号長方形柱穴列  
〔坂上・石井 1976〕(1 : 120)

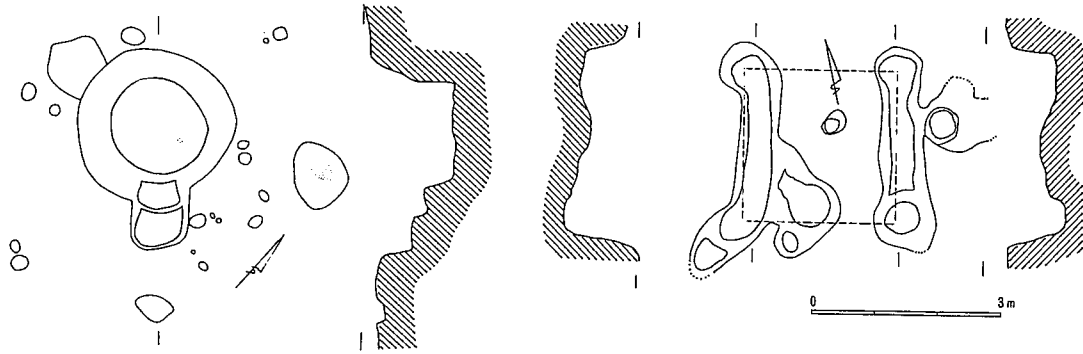
柱列の場合、直列辺の方が大形で深い掘り方を持ち、構造的にはより堅固であると思われる。長方形柱穴列の掘り方が上部構造を支える以上の規模を持つのではないかという指摘〔佐々木他 1980〕もあり、方形柱列の一部にもこの指摘は適用できないことはないが、むしろこのような逆転は構造上の大きな差を示すものと考えられる。

方形柱列の直列辺の両端(角部にあたる)にあるものは、柱痕跡が太かったり、掘り方が深かったりする傾向があるが、このことから桁部分に相当の荷重がかかることを考慮してよいのではなかろうか。先のように棟木の存在を想定して、そこから渡された垂木をこの桁で支えるとする、長方形柱穴列で可能性が指摘された、平地式切妻より大きな荷重がかかる構造として、高床の可能性も考えられよう。つまり、5組の対応する柱は、垂木を乗せる桁を支えるとともに、梁行に5本の横架材を渡して床をも支えたとするのである。それが間に束柱をもたない点は、先の棟持柱間隔 5 m 前後という値に対して、本址が正方形プランをとって梁行も 5 m 前後となるということから、材の横架の限界内であると考えれば、床構造自体は不可能ではないと思われる。本址が長方形でなく正方形という形をとることは、横架技法の限界という点からも意味のあることかもしれない。しかしながら、後世の高床倉庫が束をもって総柱となるように、この床は存在したとしてもさほどの荷重を支え得るものではなく、その機能も限定されてくるであろう。

さらに、これらのいわば妻側と桁側の構造的な差は、それぞれが別構造であったことを示すと考えることもできないわけではない。つまり、床状のものを考えるとしても、屋根構造とは切り離されて作られ、二者の組み合わせで一体の構造物を成した可能性である。もとより構造的にこれが成立し得るものかどうか判断すべくもないが、本例の構造についてはいかなる可能性も考慮の外におくべきではないと考える。

一方、掘り方配置の多様性には先に述べたようにある程度の共通性を指摘でき、以上の推測がおおよそあてはまるが、A 類型のうち平行する二辺で構成されるものは、やや異なった構造を考えるべきかもしれない。つまり、これらの直列辺としたものと直交して棟を考えた場合、桁を支える柱は角にあたるものだけであり、垂木を支える以上の負荷を考えることは難しくなる。その限りでは平地式としての様相がより強いともいえるが、逆に弥生の高床倉庫のように、柱間を桁で結び対応する 2 本 1 組の柱の間を横架材でつなぐとすれば、床下と床上とが構造的に切り離された建物を想定できないわけでもない。しかし、桁行と梁行が等しい点にやや問題を残しており、切妻としての様相は強いとしても、棟方向をいづれと考えるか平地式かどうかという点は確言し難い。<sup>(6)</sup>

いづれにしても、本址の上部構造が屋根を有する建物であるとするのは無理のない想定であり、将来、類例が見出されて系譜上の空白が埋められることがあれば、建築史上の意義も明確となろう。



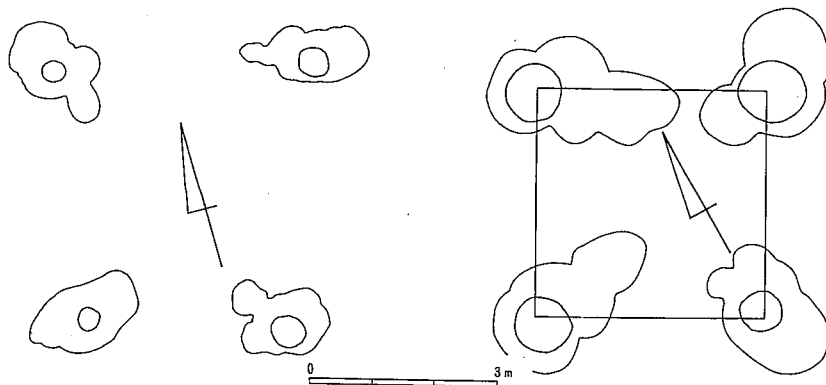
挿図 188 上原遺跡小竪穴・不整形ピット(大場他 1957)(1 : 120)

#### 4) C 類型の遺構

A・B 類型は掘立柱建物の様相を強く感じさせるのに対して、C 類型は全く異なった遺構と考えられるほど差がある。平面的には方形配置を原則とするようであるが、方形柱列 X などは円形配置の可能性もある。また、掘り方の埋土は多量のロームブロックを含み、掘り上げられた直後に一時に埋め戻されたと考えられ、掘り方以外に機能を示すと思われるような痕跡は何もない。この三点を除けば、A・B 類型と共通する様相はほとんど認められない。ただ、方形柱列 XII のように南北二辺の中間に 1 個ずつ置くのは、A 類型の配置にちかいはいえるかもしれない。

この C 類型に類似するものに大町市上原遺跡例[大場他 1957]がある。そのうちの小竪穴(挿図 188)は階段状の施設をもち、周辺のピット群を柱穴として、小形の住居址を想定している。これは、底面に火床が 2 箇所あり、完形にちかいた器の発見をその理由としている。埋土は床面上に 15 cm ほどの木炭を含む黒色土層、その上に壁の崩れとするロームがあったという。火床、土器、埋土、いずれも様相が異なるが、掘り方の形態はよく似ており、唯一の例であるが方形柱列 XI の掘り方 1 の最下部でわずかの焼土が認められており、これも共通性といえる。上原例はトレンチ発掘であるために単独であって、本遺跡のような複数の規則的配置があったかどうか明らかではない。一方、不整形ピットとされたもののひとつに方形配置を示すようにもみられる例がある(挿図 188)。これは遺物はないが、埋土の状態は前例と類似し、1 箇所ではあるが焼土面が認められている。以上の二例は阿久 IV・V 期に対応する年代が考えられており、時期的にも一致する。報文では住居的遺構としての可能性を指摘して、さらに早期末の炉穴との類似にも触れている。なお、上原遺跡に環状の配石址が存在することは本遺跡の集石との関係からも興味深い。

もうひとつ形態上の類似を示すものとして、V 期でも最も大規模で計 3 回の拡張が推測されている住居址 72 の支柱穴を挙げておきたい(挿図 189)。支柱穴の建て替えの結果、C 類型の掘り方に似た 4 個 1 組の掘り方群が形成されたものである。もとより、これは竪穴住居址の支柱穴であって、同一視するわけでは



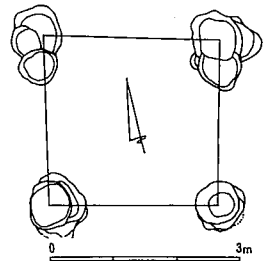
挿図 189 住居址 72 の支柱穴配置と方形柱列 XI の掘り方配置(1 : 120)

ないが、時期的にも接点があり、掘り方の形態や全体の規模、方向などの類似は無視できない。埋土もロームブロックの含有、堆積状態などかなり似ており、掘り込みと埋め戻しが似た状況のなかで行なわれたことを示すように思われる。

前章で述べたように方形

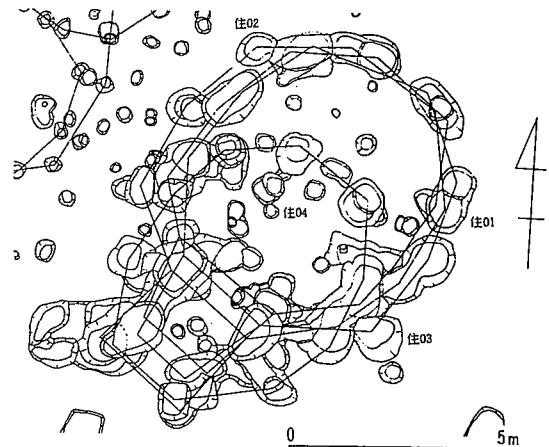


柱列X・XI・XIIの3基は土壌の分布域と重なる位置にあり、周田と内部にも多くの土壌がみられる。これらの大部分は、IV・V期の遺物を少量出土し、遺跡内の他の地区と比べ概して小形で深い柱穴状のありかたを示すものが多く、また、方形柱列の方向と一致する方向に並んだり、等間隔、方形など規則的配置を示すと思われる例もある。特に方形柱列Xの内部および南側、方形柱列XIの北側および東側などには規則的配置がみられ、大形の掘り方と一体として理解する必要があるかもしれない。もし、この点が認められるとすれば、先の上原例が周田のピットを柱穴として上屋を復元したことと通ずる状況とも考えられよう。しかし、本址の掘り方が比較的小形であり、火床などの生活痕跡がほとんどないことからして、掘り方自体を堅穴としたことは考え難く、これらの方形に配置される4個の掘り方が個別に機能を果たし得たものとすれば、これほどの規格性は必要がないであろう。



挿図190 西田遺跡の長方形柱穴列I類〔佐々木他1980〕(1:120)

掘り上げて直後に埋め戻される必要があるものとして、柱穴の他に墓塚が考えられる。本址の掘り方は規模のみをとれば、墓塚として十分な大きさである。しかし、他の土壌のうち墓塚と考えられるものと比べて、埋土、遺物、配置など差は大きく、墓塚としての可能性はほとんどないといってよいだろう。



挿図191 井口遺跡の住居址〔橋本1976〕(1:180)

掘り上げて直後に埋め戻される必要があるものとして、柱穴の他に墓塚が考えられる。本址の掘り方は規模のみをとれば、墓塚として十分な大きさである。しかし、他の土壌のうち墓塚と考えられるものと比べて、埋土、遺物、配置など差は大きく、墓塚としての可能性はほとんどないといってよいだろう。

遺物の出土状態は埋め戻しに伴う混入と考えられ、主体はIV期であった。これは周辺の集石群と本址の構築が時期的にはほぼ一致することを示すと考えられ、占地在環状集石群内縁に接する位置であることと重ね合わせるならば、本址の機能が集石群形成に密接に関連したことを、十分物語っていると見えよう。その点で岩手県西田遺跡〔佐々木他1980〕で長方形柱穴列I類とされたものに類似例のあることが注意される(挿図190)。西田例は大木8a式とされ、同時期の土壌墓群との関連が指摘されており、本例とは時期的にやや間隔があるものの、その遺構相互の位置関係には、墓塚と集石のちがいはあるにせよ、相通ずるところがあるといえよう。

方形柱列Xは円形配置の可能性を指摘し、さらに周辺ピット群との関係も考えたが、この形態は後期の富山県井口遺跡〔橋本1980〕にみられる例(挿図191)との類似が認められる。これは集落中央にあり、平地式としては扱われていないようであるが、遺跡全体に対する特殊な位置を占めるとされている。B類型が後期の長方形柱穴列に類似を示すのに対して、C類型にも同じく後期に類似例を認めることができるのはきわめて興味深い。

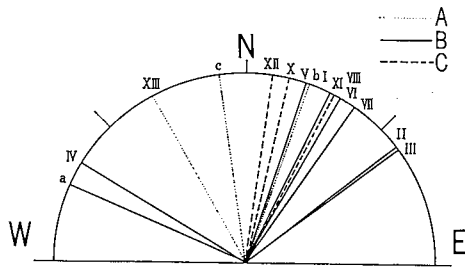
## 5) 集落における位置

### (1) 時期

方形柱列のうち切りあい、遺物、その他で時期を限定しうる例を列記して相互の時期差、住居址との関連などを考えてみる。

まず、切りあい関係は4例ある。

- ①方形柱列V(B類型)は住居址57(II-a期)より新しい。
- ②方形柱列VI・VIII(B類型)は、住居址54(II-a期)→VIII→VIの順に構築された。
- ③方形柱列XII(C類型)は集石128(IV期)より新しい。



挿図 192 方形柱列の方向

④方形柱列XIII(A 類型)は住居址 65(II-b 期)より古い。

掘り方内の土器は次のような時期的傾向がある。

①II期の土器を少量出土し、それ以降はほとんど出土しないものとして方形柱列II~VIIIとa号(すべてB 類型)・b号(A 類型)。IはII期とIV期が少量だが同数出土している。

②II期の土器が多く、III期がそれにつき、IV期以降はほとんどないものとして、方形柱列XI(C 類型)。

③IV期の土器が多く、II期・III期を少量出土するものとして、方形柱列X・XII(C 類型)。

④方形柱列IX・c号の2基は遺物が検出されていない。

他にa・b号付近では先述したようなII期の特殊な出土状態があり、方形柱列IVは住居址 36(II-a 期)より新しい可能性がある。

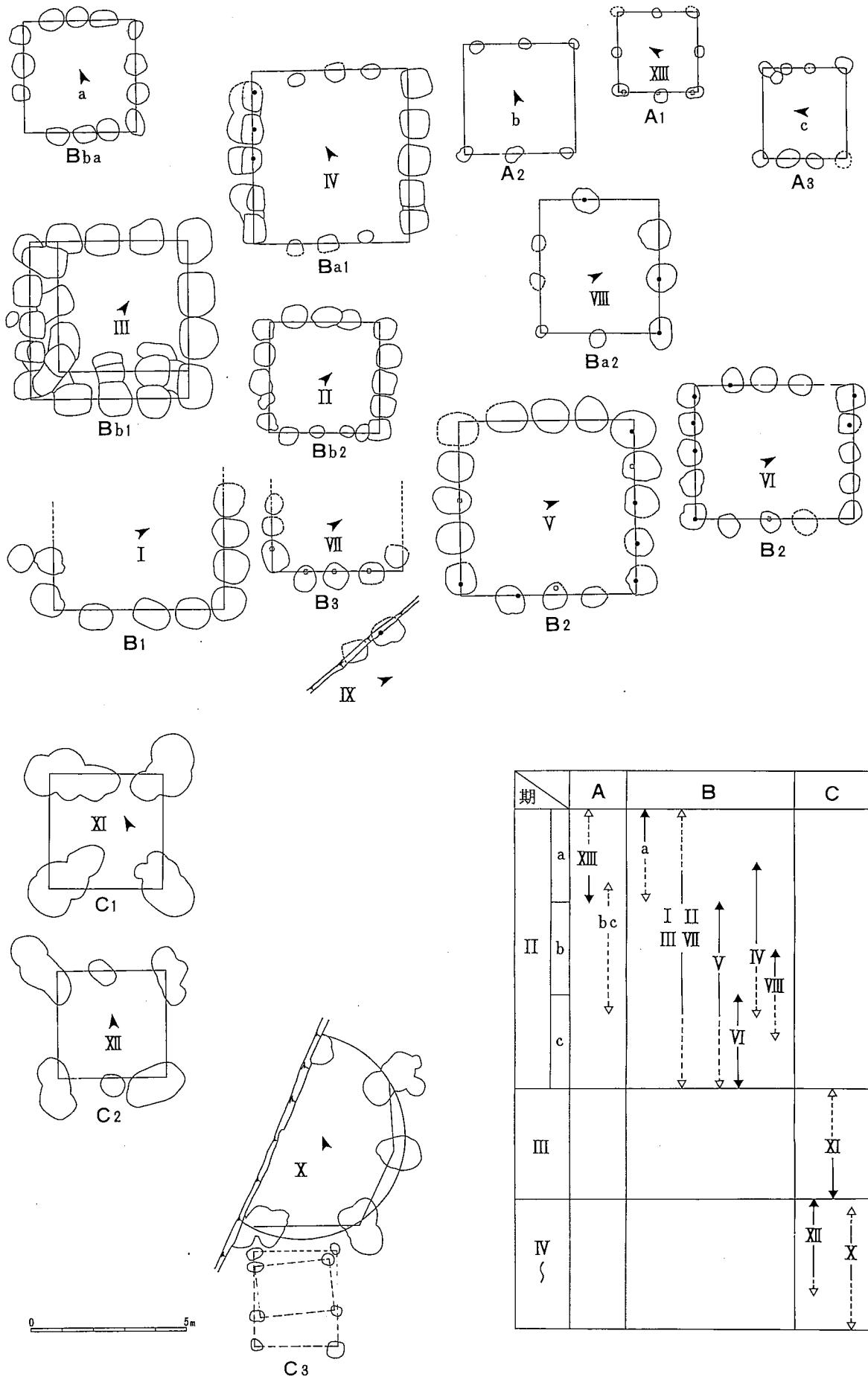
方向は各期の住居址の長軸方向の傾向が把握されており、それと比較して方形柱列の方向(挿図 192 に示したが、ここでは仮に棟方向と想定した線と直交する方向を示した)はII期の住居址の方向の範囲とほぼ一致する。特異なものとしてB 類型ではIVとaのように西に寄るものがある。これは90°ずらせば他とちかくなり、視覚的には差は感じられないが、上部構造を考えれば他とほぼ90°ずれたものである。II・IIIは逆に東に寄り、住居址ではこのような方向を示すものはなく、わずかに住居址 65(II-b 期)に近い可能性があるだけである。A 類型はB 類型とずれるだけでなく、相互の差も大きい、C 類型はあまり大きな差がない。

以上を整理すれば、挿図 193 の編年表のようになろう。II期におけるA・B 類型の併存、III・IV期におけるC 類型の存在はほぼ確実であるが、さらに各期の細分期に対応させるには遺物の検討からは無理である。しかし、住居址と切りあってそれより古いものはA 類型の方形柱列XIIIのみであり、しかもその住居はII-b 期であり、他はB 類型がII-a 期の住居を切ることから、この2 類型が時期差を持つらしいことは指摘できよう。さらに、方位の類似、掘り方配置の特徴などが同時性や系統性につながるものと考えて、切りあい関係と遺物で時期限定できるものと比較して挿図 193 の系統図のように細分できる。これがそのまま編年の序列とは考えないが、いくぶんかの妥当性をもつと思われる。少なくとも、II期においては各細分期に対応して、3ないし4基の存在を考えることはできる。しかし、III・IV期ではむしろ方形柱列XI→XII→Xという順に構築された可能性が考えられ、この点からもA・B 両類型とC 類型とは機能的に異なるものではないかと考えられる。

## (2) 占 地

方形柱列が総体として、住居址群内部に取り込まれる位置にあることは間違いない。C 類型は住居址よりも集石群との関連を指摘したが、これは位置も住居址群から離れるということでもある。これに対してA・B 類型は、住居址群内部の中心近くに位置する例がある一方で、II期の住居址群と重なる部分もあり、未掘地区も考えると住居址群との位置関係はその内縁に接するといつてもよいかもしれない。しかし、遺跡西南部では発掘面積が少ないためかもしれないが、住居址群との分布はほとんど一致している。

III・IV期にはC 類型だけが対応すると考えたので、A・B 類型がII期の各細分期とどのように対応するかが問題となる。先の編年観によっておよその傾向を推測できるとすれば、住居址群の分布が新しいものほど南西寄に多くなる傾向があるのに対して、どちらかといえば逆の傾向、つまり住居の占地しない部分へ移って行く傾向がある。これは池辺第 14 遺跡(坂上・石井 1976)での長方形柱穴列の住居群に対する関係と似ているともいえる。池辺例においては、集落内において長方形柱穴列が住居と対応し、墓塚と関連をもって分布する可能性が述べられており、これは先の西田例にも共通する。後期と中期に類似するありか



挿図 193 方形柱列変遷図

たが指摘されたこととなるが、本遺跡の場合、II期の墓塚あるいは墓域の実体は不明確であり、住居地域と区別されながらも密接な関連をもって位置することがいえるだけである。

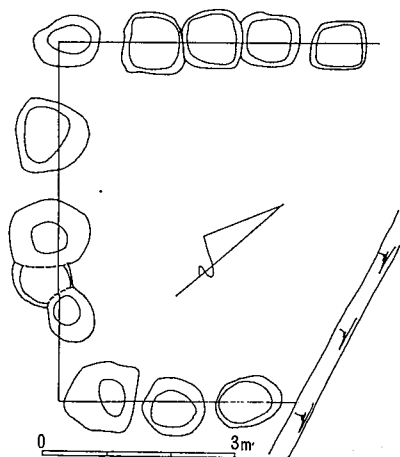
これに対してC類型の3基は、集石群との関係とともに、III～V期の土壌のうち、特定の形態をとるものが集中する地区との関係も考慮する必要がある。これらの土壌群のいくつかは墓域として扱えられる可能性もあるからである。

### (3) 機能と変遷

方形柱列のA・B類型については、以上の検討により、ほぼ同様の機能を有する構造物と考えたい。これらはII期に中心を置き、その細分期に対応させて考えることもできる。個別に特定することは困難であるが、1基に対しての住居址数は、おおよそ、II-a期で4棟前後、II-b期で2棟前後、II-c期ではほぼ1棟となり、時期の下降とともに住居に対して方形柱列数が増える傾向がうかがえる。しかし、これは分布域が異なるので、特定の住居群に対応するかたちでは扱えられず、集落全体としての対応関係である。方形柱列の構造は、初期にはA類型の小形で変化のある構造をとるものとBb型のような後のB型に続くものが成立し、直後にBa型がA・Bb両型の要素を取り入れて成立したと考えられる。このBa型の成立が方形柱列の定型化であり、以後若干の小形のものを併存させつつ、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>型など大形化の傾向を示す。B<sub>2</sub>型がBa型から発展して完成した形であり、方形柱列のひとつの典型であろう(挿図193)。これら継続して構築された方形柱列群には、複数の社会集団に対応する系譜的關係を形態上の類型に認めうるかもしれない。もしそうであれば、方形柱列の機能は、たとえば双分制組織[大林1971]のような集団各々に対応し、各集団が継続して構築する必要があったとすることもできよう。

A・B類型の上部構造は、初期にはかなり多様であったかもしれないが、定型化して後は基本的には変化がなく、また、その用途は居住、貯蔵など生産活動に直接関わるものではなかったと考えたい。

C類型は、III期に1基、IV期以降に時期差をもって2基が予想され、構造、占地とともに集落との関係も、II期におけるA・B類型のありかたとは差がある。これは機能的にも差があると考えべきであろう。つまり、住居域とはより関係を薄くし、集石および土壌との関連をより強めるのであり、未掘域に存在する可能性は否定できないものの、一時期1基の存在である。集落全体の饗礼、特に埋葬饗礼との関わりを想定するのは、中期の西田遺跡、後期の池辺第14遺跡の例からも相当に可能性ある解釈といえる。C類型の構造は、掘り方の規模では小形化、数では増加の傾向として扱えられ、その上部構造もより複雑化の過程をたどったと考えられ、最終段階における方形柱列Xなどは、平面プランの円形への志向さえ窺われ、中期へのつながりさえも類推できる。



挿図194 十二后遺跡の方形配列土壌群I [樋口他1976] (1:120)

A・B類型とC類型との関係については興味ある例がある。諏訪市十二ノ后遺跡[樋口・宮沢他1976]では、方形柱列B<sub>1</sub>またはB<sub>2</sub>型に比定できる類例が検出されており、その時期は阿久IV期以降の可能性が強いという(挿図194)。また、他にも方形柱列らしい土壌群がみられるが、いずれも大形で比較的浅い掘り方をもつ時点でB<sub>1</sub>型との共通性を指摘できる。これらが本遺跡例より時期的に新しいことを認めるならば、本遺跡におけるB類型の中でB<sub>1</sub>およびB<sub>2</sub>型が最も時期的に降る可能性があることから、C類型との併存の可能性を考慮してよいであろう。そうであれば、B類型からC類型への展開はスムーズではないが、一連の発展過程として考える必要もあることになろう。もちろん、そこにはかなり大き

な質的变化さえ予想しなければならないことも事実である。

#### 6) 小括

方形柱列がいかなる上部構造をもったのか、その可能性は以上に述べた以外にも指摘できよう。しかし、掘立柱をもつ構造物が建物であり、その建物が土間あるいは床をもつとするのは、遺構の形態からみる限りでは最も無理のない想定である。問題は日本建築史の上でその系統性が認め難いという点にある。本例の孤立が将来資料的に埋められるとすれば、本稿の推測も妥当であったかどうか検証されるであろうが、今のところは特異例としか位置付けることができない。

建築史上、高床建物の系譜は弥生時代以降に〔八幡 1978〕、平地式建物は長方形柱穴列を含めても縄文時代中期以降までしかたどれず〔工藤 1977〕、本例は床の有無に関わらず、現段階でその系譜、起源などを検討することは差し控えておくのがむしろ責任ある態度といえよう。

長方形柱穴列が今のところ最も近い例といえるが、時期、構造とも差が大きく、直接結びつけるのは現段階では無理であろう。しかし、これらの平地式と考えられる構造物が特に埋葬儀礼との関連で捉えられている点は、方形柱列の性格に関して重大な示唆を与えるものであり、同様な機能を有したことは十分に可能性のあることである。なかでもC類型はよりその可能性が強い。プランが長方形あるいは方形であり、環状集石群あるいは環状配置の土壇群などと関連をもって位置する点、後期の方形配石遺構などとの関連も、縄文人の精神活動のながれの中で理解するならば、意味のないことではないかもしれない。

ともかく、縄文時代集落において堅穴住居以外の構造物が、その重要な構成要素として存在していたことが、すでに前期から後期まで明確になったという事実だけでも、これまでの縄文時代集落観への重要なインパクトを与えるものである。後期さらには中期については坂上・石井両氏の論文〔坂上・石井 1976〕以後、長方形柱穴列の様相はかなり明らかになってきており、今後は前期における類似例の増加が期待される。

(土屋 積)

註1 新潟県小千谷市城之腰遺跡(1981年調査)新潟県教委文化課諸兄の御教示による。

2 前掲論文〔坂上・石井 1976〕で明らかにされたように特に神奈川県内の後期遺跡で多いが、今後他地域でも例は増えると思われる。

3 調査を担当された金沢市教育委員会の南久和氏の御教示によれば、建物としての用途よりも、御柱行事などにつながる祭祀的遺構としての意義を強く考えておられるようである。このように掘立柱構造物に建物以外の機能を考えるのは充分可能性のあることと思われる〔稲垣 1977〕。

4 住居址54と切り合うVI、VIII号で遺物の出土状態から住居埋没途中で掘り形が掘込まれた可能性が述べられている。

5 池辺第14遺跡〔坂上・石井 1976〕では認められないようであるが、西田遺跡〔佐々木他 1980〕、下ノ原遺跡〔宮坂 1979・1980〕などには短辺2個配列の例がある。

6 こう考えるならば、床上の構造が存在しない場合、つまり屋根を持たない構造物の可能性さえあることになる。もし、屋根を考えれば、その主要構造は叉首組であって、先の棟持柱を有するものと二種類の構造を考へることになる。住居址の上屋構造については不明な点が多いが、II期のうちでも形態の異なるものの存在を推測できる点がある(別項参照)。II期の細分期に対応するものか同時存在か微妙な点はあるとしても、方形柱列においても同様な可能性を示す例といえよう。

一方、屋根構造については梁上に束柱を組んで屋根を支えたという意見〔渡辺 1980〕があるが、ホゾ技法は今のところ縄文時代にまでさかのぼるものとは考えられていない〔荒木 1980〕。それ故、A類型の直列辺方向に棟を考へることも難しいということになる。縄文時代木工具の総合的な分析が待たれる。

7 西田遺跡〔佐々木他 1980〕の報文中で佐々木氏が指摘された「集石と方形柱列が時間的接点を持つのではないか」という点に関しては、このように方形柱列C類型において認められ、卓見というべきである。ただし、集石と墓壇との関

連、A、B 類型の方形柱列に関しては一律には扱えない。

- 8 集落が全掘されたわけではないので、この数値は確実ではないが、全体として増加傾向にあることはほぼ誤りないと思われる。

## 5 土 壙

### 1) 県内を中心とした土壙研究

最近の大規模調査ともなう調査面積の拡大により、縄文時代の遺跡においてもほとんど例外なく「土壙」と呼称される遺構が検出されその数も多い。しかし、土壙に関する資料の増加と、土壙そのものの考古学的研究は必ずしも一致しない現状にある。それは土壙が人為的に構築されたかどうかという根幹に触れる問題も含めて、その構築過程、あるいは構築目的が極めて多様でありながら、付属施設や出土遺物など、土壙の性格を示す資料が乏しいことに大きな原因があろう。本遺跡の土壙も例外ではないが、以下、構造・出土遺物・分布や他の遺構との関連など様々な角度から検討を加えたい。

土壙の本格的論及は戦後 1952・53 年の秋田県大湯環状列石の調査報告〔後藤他 1953〕が最初とされる。それまでの研究は、主として人類学上の研究対象である人骨およびその出土状況等にとどまっており、その埋葬施設でもある土壙自体については研究の眼が注がれずきた〔小金井 1922・清野 1946〕。大湯環状列石や岩手県樺山遺跡〔江坂 1954〕・上原遺跡〔大場他 1958〕における配石址下の土壙をめぐる論議を振り出しに、土壙そのものに対する研究が始まった。しかし、人骨等の伴出遺物、付属施設等をもたない土壙の研究は遅れ、ようやく、1965 年頃から開始された大規模調査に伴って土壙の発見例が増すとともに、その性格等にまで及ぶ研究がなされるようになった。

長野県下の土壙研究は、1951 年駒ヶ根市山田遺跡〔大場他 1951〕で陥穽の一種として報告された例が最初であろう。続いて上原・尖石両遺跡〔宮坂 1957〕などで報告例が相次ぎ、土壙と集落などの位置関係等が具体的に明らかにされた。さらに藤沢宗平氏による上伊那郡萱野遺跡〔藤沢 1965〕の縄文時代早期の土壙 2 基に対する土壙ねぐら説、翌年、宮坂英弼・宮坂虎次両氏による茅野市城ノ平遺跡〔宮坂他 1966〕における陥し穴説など、土壙の性格が具体的に提示され、特に縄文時代早期の土壙の究明が盛んとなる契機となった。ねぐら説は駒ヶ根市舟山遺跡で林茂樹氏によって補強され〔林他 1971・1972〕、陥し穴説は宮本常一・今村啓爾氏による神奈川県霧ヶ丘遺跡〔今村他 1973〕で具体的な狩猟方法にまで触れた研究へと受け継がれ、小県郡男女倉 C 2 地点遺跡〔笹沢他 1975〕、更級郡鍋久保遺跡〔森島他 1976〕などでも陥し穴説が支持された。同じ早期の土壙例として上伊那郡元宮東遺跡〔桐原他 1971〕があり、消極的ながらも墓穴説が示されている。

前期の土壙の本格的調査例は岡谷市扇平遺跡〔河西他 1974〕に始まる。小竪穴として把握された約 180 基の土壙のほとんどが前期末から中期初頭の限定された時間内に属する好資料となった。長崎元広氏はその分類および構造的検討、分布状態などから、具体的用途を陥し穴、墓穴、貯蔵穴、ごみ捨て穴に求めた。特に土壙内外のピットを用いて土壙の上屋根の構造を想定したことにより、貯蔵穴の姿がより具体化された。また、集落の分析に土壙を関連されたことも県下の土壙研究の新しい方向といえよう。上水内郡丸山遺跡〔高橋他 1978〕では、土壙内から浅鉢が完形で出土した例をもとに、浅鉢を副葬あるいは納骨に使用したとする墓穴説が唱えられた。同様の土壙内からの浅鉢など土器埋設例は、千葉県飯山満東遺跡〔清藤 1975〕を代表例に各地に類例がみられるようになってきた。

### 2) 土壙の形態と構造的特徴

分類基準によって細分された土壌を、遺物の出土状態を加味しながら、共通する形態にグループ化し、以下のように整理した。なお、各形態の土壌の具体例は図44～50に示した土壌の中から代表例を選んで示した。

### (1) A型土壌

#### ① A-1グループ(11・63・82・83・130・133・136・249・314・660・731・898・949)

土壌の上面に石が立つ、いわゆる立石をもつ土壌である。立石をその下部で小礫によって支えた例(136・249)があるので、それら立石は主として壁際に直立し、石の上半は当時の地表面上に出ていると推定できる。明らかに立石をもつ土壌だけで22基あり、さらに立石の存在を想定できる土壌を含めると約50基に達する。長径80cm前後で平面形I(円形)が多く、浅い土壌(63・136・731)と深い土壌(11・82・660)に分かれる。遺物は比較的多出するが同一個体片は少ない(A I a～A I g・A II a・A II c～A II eなどA型土壌の過半)。

#### ② A-2グループ(732・796・855)

複数の大きな石が組み合わされるように伴う土壌である。明確なものは3基、B型土壌に分類されているもの(796)などを含めると5基がある。径100cm前後の円形で浅い土壌であり、土壌796を除いて遺物はごく少ない(A I b・A I cの一部)。

#### ③ A-3グループ(982)

大きな平石が土壌上面に水平に置かれ、その下に完形、半完形の深鉢が押しつぶされた状態で検出された土壌3基があり、いずれもごく浅く、他の出土遺物はない(A II b)。

#### ④ A-4グループ(115・947・953・969)

石が底面あるいは底面近くに水平に置かれる土壌で5基存在し、石が直立するもの(168)などを含めると7基になる。規模等は個々の土壌でかなり異なり、遺物は少ない(A I c・A II a・A II cの一部)。

### (2) B型土壌

#### ① B-1グループ(118・201・753・754・755)

比較的大きな石を1～2個伴い、A型土壌に類似した要素をもつ土壌。円形で浅いものが大多数であるが、規模は径50～120cmまで大小様々である。12基存在し、類似土壌まで含めると17基になる。ほとんどは遺物を伴うが、大形土器片、同一個体片はほとんどない(B I a・B I c・B I eの約半数、B II a・B II cの一部)。

#### ② B-2グループ(232・606・631・633)

小礫を1～15個伴う小形で比較的深い土壌。礫は埋土上部に多く6基存在する。遺物はごく少ない(B I cの一部)。

#### ③ B-3グループ(155・591・746・799・864・967)

数個の礫を埋土上部に伴う土壌。楕円形で浅いものが多く13基存在するが、形状や礫の位置の異なる土壌を含めると相当数にのぼる。遺物の出土は少なく土器細片などに限られる(B I a・B I bの一部、B II a～B II eの約半数)。

#### ④ B-4グループ(796・797・964・965・968)

数個の礫を伴い、遺物が多出した土壌。土器は細片が多く同一個体片はあまりない。直径70～110cmの楕円形で5基存在する(B II a～B II cの一部)。

### (3) C型土壌

すでに遺構の項で形状を主に概略を述べ、それぞれの特質等にも触れているので重複を避け、付属施設や遺物の出土状態などに特徴をもつ土壌を中心に摘出した。

#### ① C-1 グループ(125・127・303・310・976)

底面にピットをもつ土壌。何らかのピットを底面にもつ土壌は断面形 e を中心に約 20 基存在するが、ピットは径 10 cm 以下(303)から 20 cm 以上(125)まで大小様々であり、複数穿たれている例(125・310)など個別の変化が著しい。土壌の形状も同様に変化に富む。出土遺物は少ない(C I e・C II e・C V e の約半数)。

#### ② C-2 グループ(265・308・324・729・758・862・1008)

遺物の多出した土壌。土器片、石器を中心に 20~80 点が出土したが、同一個体になる土器片は少ない。形状は個々の土壌によって変化が大きく全部で 14 基存在する(C 型土壌全体に散在)。

#### ③ C-3 グループ(346・402・576・891)

完形土器あるいは同一個体土器片を多数伴う土壌。完形土器(972)は少なく、深鉢胴部の同一個体片が土壌上部に水平に出土する例が多い。長径 100 cm 前後の楕円形で、浅い土壌が大多数であり、14 基ある(C I a・C I b・C II a の一部)。

#### ④ C-4 グループ(7・57・68・284・306・307・308・323・912・999)

円形で浅い土壌(C I a・C I b)。

#### ⑤ C-5 グループ(88・262・286・324・417・554・576・692・693・758・920・1008)

円形でやや深い土壌(C I c・C I d)。

#### ⑥ C-6 グループ(176・184・197・300・346・351・729・747・891)

楕円形で浅い土壌(C II a・C II b)。

#### ⑦ C-7 グループ(14・89・111・261・505・862・907)

楕円形でやや深い土壌(C II c・C II d)。

#### ⑧ C-8 グループ(480・565・645・662・710・765・814・827)

深い土壌。円形の土壌が多い(C I f・C I g・C II f・C II g)。

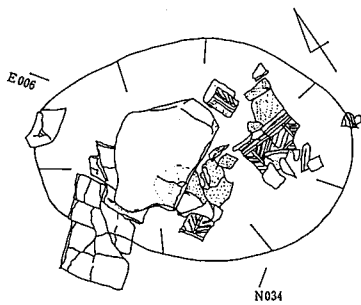
### 3) 埋土の堆積状況

土壌埋土の堆積状況はその土壌の性格と密接に関連する。土壌全体の 50% 近くが類型 a(埋土が単一層)で、c(「U」字状堆積)30%、b(水平堆積)、d(凹みが片寄る堆積)、e(ブロック状土層が入り込む)が各 6% 程度を占める。浅い土壌に a が比較的多いことや土壌 C I g は b がほとんどであるなど、一部の土壌に特有の埋土をもつ傾向がみられるが、A・B・C 型各土壌における構成率はあまり変わらない。埋土 c・d の堆積状況は住居址等の埋土堆積例と共通し、自然堆積の可能性が高い。これに対し埋土 e は、<sup>(5)</sup>ロームブロックを均一に含むなど自然堆積とは考えられず、埋土 a・b も人為堆積の可能性はある。しかし、土壌検出面がローム層または漸移層であるために多くの土壌埋土は必ずしも埋土のすべてが示されている状況にはないことと、遺構の性格から生ずる埋土の堆積を住居址と同一視できるかという問題もあり、埋土のみで人為あるいは自然堆積と速断するのは危険である。埋土堆積の相違によって構築時期を決定する試みもあるが、<sup>(6)</sup>本遺跡では時期的に限定された幅の中で構築されていることもあって、この点は全くとらえられなかった。

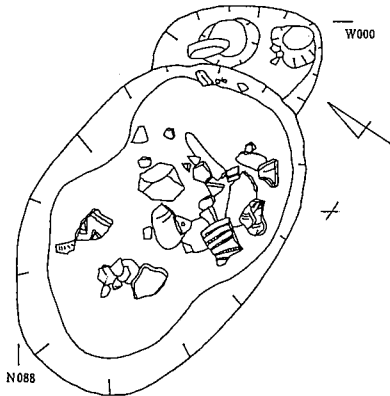
### 4) 出土遺物

何らかの遺物の出土した土壌は、320 基で全体の 40% に及ぶ。特に A 型土壌では 70%、B 型では約 60%

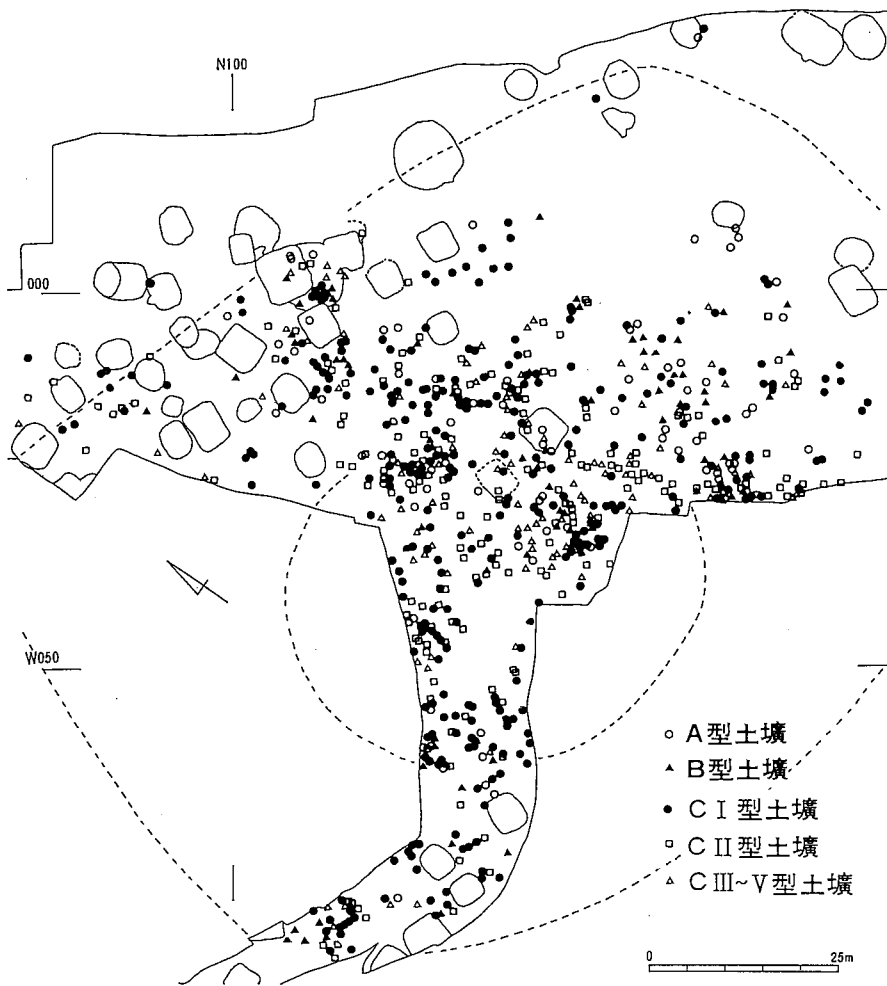




挿図 195 土壌 983 土器出土状態図



挿図 196 土壌 965 土器出土状態図



挿図 197 類型別土壌分布図

にみられた。しかし、半数以上は微細な土器片が数片出土するにすぎず、これらの遺物は埋納したものは考えにくい。

土壌から出土する土器のあり方には3種類がある。①完形に近い土器や同一個体の土器片を多数伴う(挿図 195)、②数個体の土器片が多数混在する(挿図 196)、③細片が1、2片伴う場合等である。①はその形状に共通点をもち、②の大多数は石器や剥片などを多く伴出する。同一個体の土器片は多くが接合でき、そのうち数例は完形に近く復元できた。

石器は84基の土壌から出土した。このうち3点以上の出土は8基(109・269・729・791・796・797・965・968)あり、いずれも遺物の出土点数の多い土壌で、②と共通する。滑石製品が底面・壁面に接するように出土した土壌は3基(219・234・264)あり、また、A・B型土壌に凹石が利用されたり石皿が平石として転用されている。しかし、特定の石器と土壌の結びつきは認められなかった。

炭化物は多くの土壌にみられたが、そのほとんどは炭化材で、炭化したクルミ片は4基(188・330・331・670)のみであった。

骨片は土壌 201 に検出されたが、微細であり、動物の同定はできなかった。なお、水晶が伴出しており、中層に焼土が見られた点に

注意したい。

#### 5) 土壌の時期別・形態別分布

(挿図 92・118・142・154)

土壌群は時期別にとらえた場合、地域的にかなりのまとまりがみられる。II期の土壌群は遺跡の西側部分、B・C地区に集中し、該期住居址群の付近に位置するものが多い。これに対してIII期土壌群はD地区に集中し、III期住居址群からやや離れた地域に分布する。IV-a期はこの傾向がさらに顕著でD地区に分布の中心を置き、さらに環状集石群の内縁部にも点在する。

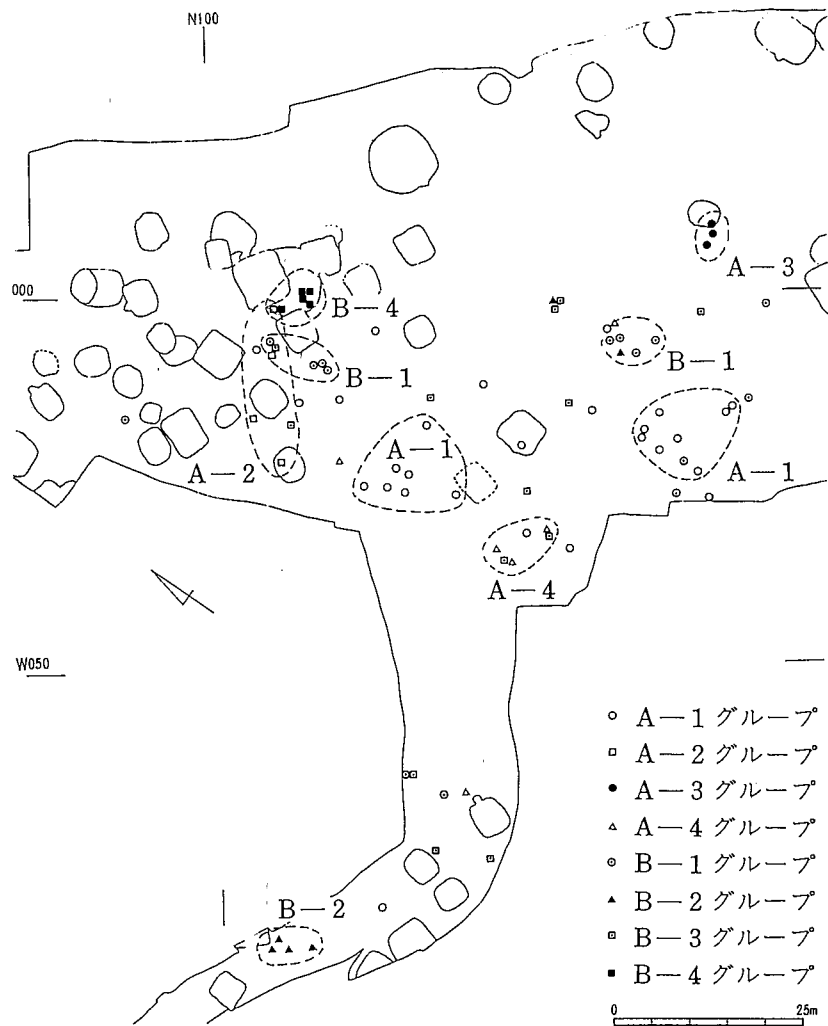
IV-b期では土壌分布範囲のほぼ全域に広がり、特定地域への偏在はみられなくなる。V期になると立石・列石付近にないのが特徴であるが、他はIV-b期と共通した分布を示す。これらは時期のほぼ判明した土壌の分布状況を示すにすぎないが、時期別の分布のあり方は環状集石群や住居址群との関連の強いことが指摘できよう。

土壌の形態別分布はA~C型土壌に部分的な集中傾向はみられるものの、個々の類型による特徴的变化はない(挿図197)。しかし、前述したグループ別の分布をみると、共通した形態の土壌が特定の範囲に集中する傾向がある(挿図198)。例えば、A-3グループは住居址77付近に限定され、他には全く存在しないというケースが挙げられよう。同様の集中傾向はA-1グループの2箇所をはじめ、A-2、A-4、B-1、B-4にみられ、A・B型土壌の共通した構造的特徴をもつ土壌のほとんどにあたる。C型土壌もC-3グループの分布範囲が限定されるのを始め、C-5、C-8グループに集中する地域が存在する。C-6、C-7グループも立石・列石付近や住居址14の西側に、規模・長軸方向をほぼ同じくする土壌の集中箇所がみられる(挿図199)。それぞれ径10m以内の範囲に3~10基の土壌をもって構成される例が多い。

形態別集中分布を時期的にみると、A-3グループはいずれもIV期の土壌であり、C-2グループもIV期に属する可能性が高いなど、部分的ながらも同一時期に存在したと思われる例がある。何度も繰り返すように時期の決定できる土壌が限定されており、前記2グループのように土器を伴う土壌以外は時期の確定が難しい。ここではA-1、B-1グループがIII期~V期まで場所を移しながら集中範囲をもっていること、B-4タイプがV期に属

することが、時期の決定できる複数の土壌の存在を根拠にして、可能性が高いという指摘にとどめる。隣接する住居址39・40・66では住居址埋土から完形に近い、いわゆる特殊浅鉢(浅鉢C)やV期の小形土器が出土している。その出土状態からII・III期の住居址内に構築された土壌に埋置された土器と推定でき、これら浅鉢や小形土器を伴うV期の土壌集中範囲であった可能性が高い。

ここで形態別に分布の集中することがある程度明らかになった土壌は全体の20%未満に過ぎず、この現象が土壌全体の傾向を示すことにはならないであろう。また、B-3グループのように分布が集中しないことにその特質があると考えられる土壌も存在する。



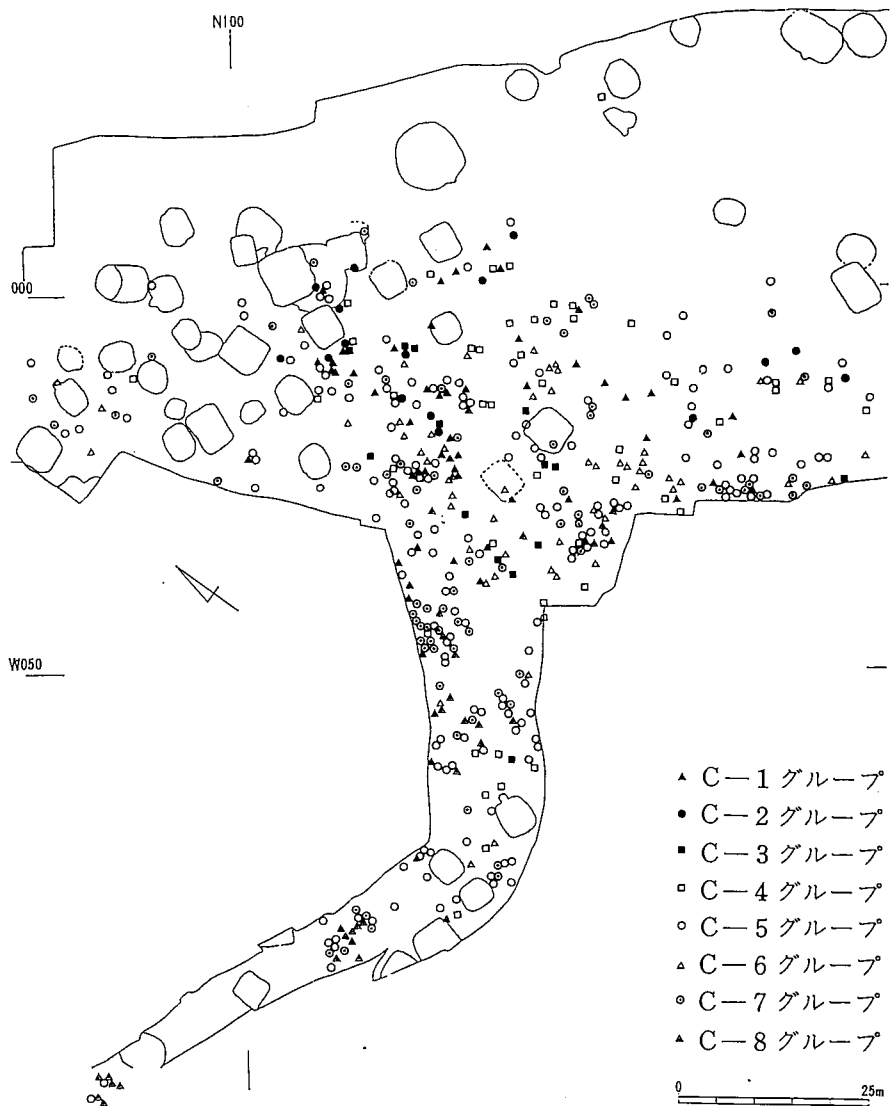
挿図198 グループ別土壌分布図(A・B型土壌)

しかし、部分的ではあるにせよ、ある単位で同一形態の土壌が集中してみられることは注目すべき事実と考える。住居址、環状集石群、方形柱列等とも関連させ、さらに整理・分析を進めれば、集中分布を示すものとそうではないものがより明らかになるだろう。

6) 土壌の性格

土壌の性格については、陥し穴、ねぐら、炉穴、祭祀、貯蔵穴、墓穴、ごみ捨て穴、風倒木などの諸説がある。それと本遺跡の土壌の実態をまず具体的に検討してみたい。

陥し穴・ねぐら・炉穴の各説は、主として縄文早期の遺構で検討



挿図199 グループ別土壌分布図(C型)

されている。しかし、本遺跡では時期・形態・立地条件に共通性がないこと、他の遺構群との関係からこの3説の可能性は極めて低いと考える。

祭祀説は配石を伴う土壌について論じられている。本遺跡のA・B型土壌、特に立石土壌は形態的に類似するであろう。また、単位集石群や立石・列石等と何らかの関わりをもつと考えられ、これらの土壌が多時期にわたって場所を移動させながら構築されることなどから、何らかの宗教的儀礼あるいは祖先崇拜と関係した送葬儀礼に関連する可能性もある。しかし、祭祀説とする積極的根拠は以上の諸点のみで、明確にならない現状であり、土壌の性格としては可能性の範囲にとどまる。ほぼ完形のII期の深鉢2個体分を細片にして敷きつめた土壌402も、近くに位置する方形柱列との関係を含めて、宗教的儀礼と結びつく可能性がある。

貯蔵穴説は時期・場所などが比較的近似する岡谷市扇平遺跡でとりあげられている。ここでは食糧貯蔵穴とする論拠を5項目にわたって示しているが、要約すると、次の5点になる。①いわゆる袋状の土壌や2段底の土壌は貯蔵穴として最適であり、現在使われている貯蔵ムロに近似する。②小ピットの穿たれている土壌が多く、これらは上屋根があったと考えられる。③分布から住居と組をなすように配置されている。④埋土の状況が自然堆積である。⑤1例ではあるが木の実の炭化物が土壌埋土中から出土した。これらと比較して本遺跡で問題となる点は、①・②の形態をもつ土壌が全体の10%存在することと、③ではII

期の土壌が住居に近く位置する例が多いこと、④の埋土の堆積状況も類似例が多く、⑤もクルミの炭化物片が出土した土壌が4基存在することなどである。

まず、類似形態の土壌では袋状がなく、2段底と小ピットをもつ土壌が問題となる。いずれも断面形eに含まれるが、平面形や底面は変化に富んでおり、形状等の共通性には乏しい。分布も同様で特定の地域に集中する傾向はない。このように形状等が個別で異なることやピットを複雑にもつ土壌が少ないこと、規模の小さいものが相当数を占めることなど、目的をもって構築された一群の土壌とは考えにくく、特に上屋根をもつと考えるには無理がある。また住居址との関係からも全体を貯蔵穴ととらえることはできない。しかし、逆に住居址群近くに位置し、貯蔵穴としてとらえられうる土壌もあり木根等の痕跡や複数の土壌の重複の可能性を含め、多様な性格を有すると考えることがより妥当であろう。II期の土壌は住居址群近くに分布するものが多く、大型で楕円形という共通した形状がほとんどを占める。また、時期不明の土壌のうち住居址群近くにあるものも、住居址群に付属する貯蔵穴あるいは後述するごみ捨て穴の可能性はある。炭化クルミ片を出土した土壌は、食糧貯蔵穴説の根拠として有力な事例である。<sup>(9)</sup>しかし、本例に属する4基の土壌の中には住居址と20m以上離れる例もあるので、即断は避け類例の増加を待ちたい。

墓穴説には梅沢太久夫氏による土壌墓に関する10要素の指摘[梅沢1971]があるのでこれを中心に対比して論じる。墓穴とする直接的根拠はいうまでもなく埋葬された人骨の存在である。本遺跡では骨片が1例に認められたものの人骨の可能性は少ない。土壌の規模および形状は静岡県蜷塚遺跡[向坂他1962]や新潟県堂の貝塚[本間1977]の人骨を伴う土壌では長径100~150cmの円形または楕円形が一般的である。しかし、本遺跡では形状は大半が似るものの、概して小形である。長径100cm以下の土壌を墓とするには確かにやや無理が生ずる。しかし、A・B型土壌、とりわけ立石土壌は堂の貝塚等にも類似例があり、墓穴の上部施設としての可能性は強い。土壌内外の炭化物・焼土等が埋葬儀礼に関係した疑いもある。III期以降の土壌に住居址群から離れて形成されるものが多いことは前述したが、その中に深鉢の大形破片が埋土上部から水平に出土する土壌が出現する事実は重要である。IV期にも同様に深鉢の胴部大形破片が単独に土壌上部から出土したり、さらにその上に大きな平石が水平に検出される例は、意識的であり明らかに埋置されたといえる。V期には浅鉢・小形土器が土壌内にみられる。これらは総計約20基と検出数は多くないが、地域的にまとまりがあり、これも地域を限定して構築されたことを意味しよう。滑石製品・赤色塗彩土器片・水晶等の出土も、土壌の底面や壁に接しての出土が多いために、副葬品と理解できる。かようにみれば、本遺跡の一部の土壌にみられる構造上の特徴、特に立石、大形土器片、平石等は、立石土壌墓、石蓋土壌墓、土器片蓋土壌墓とでも呼称されうるであろう。しかもこれらが地域的にまとまりをもちながら、さらに集落あるいは環状集石群の内帯部を構成することは墓域の設定を物語り、これらの土壌を墓穴として性格づけてもよいであろう。B・C型土壌の一部に、共通した形態が集中して分布することは、その構築にある種の規制が働いていたことを意味し、墓域が厳格に存在したことを裏付ける。このように梅沢氏が示した要素10項目の中で、人骨の検出以外の要素は一応満たしており、土壌の中に墓穴が存在した可能性は大きいといえよう。

ごみ捨て穴は土壌の転用例として考えられる[長崎1974]。C-2グループに典型的にみられるように、土器片・石器・剝片・炭化物等が多出するが、副葬された状態ではなく、複数の土器細片等が雑然と出土したり、形状が一定せず、住居址に近く位置する例が多いことなどから、この一部はごみ捨て穴として再利用されたかも知れない。II期の土壌およびB-4グループも遺物の出土状態が類似しており、同種の可能性もあるが、廃棄物としての量は多くなく、土壌構築時の混入遺物とも考えられはつきりしない。

風倒木等自然作用でできる小穴も当然考えられる。特に小規模あるいは底面に凹凸の多い土壌などはその可能性を検討する必要がある。<sup>(10)</sup>

表8 規模別土壌集計表

分類	0~40 (%)	41~50 (%)	51~60 (%)	61~70 (%)	71~80 (%)	81~90 (%)	91~100 (%)	101~110 (%)	111~120 (%)	121~150 (%)	151以上 (%)
A I	2(5)	5(11)	6(14)	9(20)	12(28)	5(11)	3(7)	1(2)	1(2)		
A II	1(4)	1(4)	1(4)	4(16)	3(12)	3(12)	5(20)	2(8)	3(12)	1(4)	1(4)
A全体	4(5)	7(9)	8(10)	14(19)	16(22)	9(12)	9(12)	3(4)	4(5)	1(1)	1(1)
B I	2(6)	10(25)	7(18)	3(8)	7(18)	4(10)	2(5)	4(10)			
B II		2(6)	1(3)	4(13)	6(20)	5(17)	4(13)	2(6)	2(6)	1(3)	4(13)
B全体	2(3)	12(16)	10(13)	9(12)	13(17)	9(12)	6(8)	7(9)	3(4)	1(1)	4(5)
C I	46(15)	67(21)	71(22)	56(18)	31(10)	19(6)	9(3)	11(3)	3(1)	4(1)	1
C II	6(3)	27(15)	33(18)	24(13)	24(13)	16(9)	12(7)	10(6)	8(4)	14(8)	7(4)
C全体	56(10)	102(18)	115(21)	94(16)	66(11)	43(7)	26(5)	23(11)	14(2)	23(4)	14(2)

以上、土壌の性格について述べてきたが、それは墓穴、貯蔵穴、祭祀施設に絞られる。最後にそれぞれの性格に合致する具体的な土壌の形態を摘出する。まず墓穴は、A型土壌、B-4グループを除くB型土壌、C型土壌のうちのC-3グループがあてられよう。また、C型土壌の中で、中・大形の円形か楕円形で底面が平坦な形態をとり、他の性格を考えにくい土壌も墓穴の可能性が強い。特にC-6・C-7グループのうち集中分布をする一群は、石や遺物を除けば、他の墓穴としての要素は前述の形態の土壌と全く変わらない。貯蔵穴はC-1グループを中心とする断面形eの土壌、炭化クルミ片の出土した土壌、住居址に隣接する土壌などの中の相当数が該当しよう。祭祀施設は埋葬あるいは祖先崇拜と密接に関係した儀礼の存在が予想され、A・B両型土壌の一部はこれに該当すると予測したい。

## 7) 小 括

本遺跡の土壌の性格およびその分布を略述してきた。その結果、墓穴と思われる土壌がより明確にとらえられその数も多い。しかし、従来から指摘されてきた土壌自体の常につきまとう不明確な特質は依然として残り、新たにいくつかの問題点が提起される。

まず第一に、墓穴と思われる土壌は、規模と埋土の堆積状況の点で、墳墓とするには合致しない点の問題となる。規模は長径100cm以下が大半を占め、とりわけ60cm以下が30%あることは、従来からの墓穴に比べて明らかに小さい(表8)。さらにいえば、成人遺体を土壌内に収容できるかどうかという根本に触れる問題<sup>(11)</sup>につき当たる。時期的に近い新潟県堂の貝塚[本間1977]の土壌墓は最小長径65cmであり、本遺跡で墓穴と推定できる土壌の約70%はそれより規模は大きい。しかし、他遺跡の墓穴例に比べて小規模である。この点では、幼・小児埋葬とも考えられるが、中期例を知見するのみで前期までは遡<sup>(12)</sup>られず、またこれらの土壌すべてが幼・小児とするにはその数が多すぎる<sup>(13)</sup>。むしろ小規模という本遺跡における構造上の特徴から再葬墓の可能性を考えたい。

埋土の状態から自然堆積を窺わせる土壌も存在するが、前述したように、本遺跡では埋土から人為か自然かを速断できないので、墓穴の要素を根底から覆すことにはならないと考える。

特定の形態の土壌が、地域を限って構築される事実は重要な意味をもつ。特に土器を埋設した土壌、立石を伴う土壌が、Ⅲ期からⅤ期にまたがって、その構造と構築規制が系譜をたどれることは、両者が墓穴を強く想定させる土壌であるだけに問題が大きい。想像を逞しくするならば、埋葬儀礼を同じくする集団(血縁集団)が複数で墓域を専有しており、それはかなり時間的な幅をもって続けられたことになる。

(百瀬 新治)

註1 土壌の呼称については桐原健氏の用語として適切かどうかの問題提起がなされた[桐原1979]。土壌と呼称することの問題点も理解するが、これら小穴の性格が明確にされないこと、名称がいくつか存在することなどから中央道遺跡調

査団内で用いられている呼称を踏襲した。小堅穴の呼称が最適かも含めて、用語の統一および概念の明確化は痛感する。

- 2 能登健[能登 1974]、笹沢浩[笹沢・森島他 1976]両氏の指摘があり、風倒木等の自然作用が示された。
- 3 県外の研究史は梅沢太久夫氏の論文[梅沢 1971]に負うところが大きい。
- 4 中央自動車道西宮線の長野県内調査分で検出された土壌だけでも数千基にのぼる[池田・林 1981]。
- 5 扇平遺跡では自然推積と断定して貯蔵穴説の有力な根拠としている。
- 6 茅野市判ノ木山西遺跡[小林他 1981]では、土層による分類を試みており、時期区分も層位の共通性で決定している。構築時期に著しい差があり、土層の観察に共通認識をもつなどの条件下では有効であろう。
- 7 研究史で述べたように、このような土壌の類例は丸山遺跡、飯山満東遺跡等を始めとして、近年検出例が増加している。
- 8 樺山遺跡[江坂 1954]の土壌例は立石の位置等に類似点をもつ。
- 9 扇平遺跡で長崎元広氏は堅果類の多出土壌例をもとに、炭化した食用植物の土壌内出土を食糧貯蔵穴の裏づけとしているが、炭化した堅果は食用にはならないと考えるのが妥当であり、ごみとして捨てられるなどの行為の結果が想定される。
- 10 ロームマウンドは別に存在しており、風倒木の結果としての小穴が存在するかどうかは判然としない。
- 11 縄文時代を通しての普遍的な埋葬姿勢は屈葬であり[梅沢 1971]、堂の貝塚例も総て屈位で葬られている。
- 12 青森県下において土器内から成人上顎骨が検出された例[林謙作 1965]を唯一とする。
- 13 堂の貝塚でも 2 体の幼年人骨が検出されている。

## 第2節 遺物の出土状態の検討

### 1 住居址内遺物の出土状態

「何故、住居址内から遺物が多出するのか」、この一見単純なようでありながら実に重大な疑問は、古くから新しい問題である。小林達雄氏が、いわゆる「吹上パターン」論〔小林1956〕を提唱して以来、住居址内遺物の出土状態に関して多くの研究者が論議してきた。しかし、この問題は土器の型式認定をはじめ多くの問題点を含むだけに、その研究成果は必ずしも一定の方向に向っているとは思われない。ひとつには、「吹上パターン」の解釈上の混乱がある。すなわち、小林氏は住居址内遺物の出土状態を、単なる現象面での問題に留まらず、それを一定集団の規制された行為の結果であるとしてとらえたところに問題があった。そこで、現象面の確実な把握という原点に戻って考え直そうとする動きがあったのは当然といえるが、ここでも、住居址埋土(特に一次埋没土)の生成原因をめぐる二つの解釈、すなわち一方ではそれを自然堆積とし、他方では人為的な埋め戻し行為の結果であろうとする両極端の考え方が提示され、すでに出発点から(1)く違いを生じ、当然議論の内容に大きな相違をみせている。

住居址内遺物の出土状態というひとつの現象に注目し、それを検討することにより当時の人間の生活復元を試みようとする方法論はまさに考古学的であって正当である。しかし、あまりにも先を急ぐあまり、結論が先行しすぎるきらいがある。ここで大切なことは、個々の具体的事例について慎重な解釈が必要であることはいうまでもないが、個々の資料の限界もまた認識しておかなければならない。

さて、さきに、住居址内遺物の出土状態の分類基準をあげたが、その用語について若干の説明をしておこう。本稿で用いた住居址内遺物は土器を中心としたが、それは、土器のもついくつかの性格からとり上げたままで、石器やその他の遺物をおろそかにした訳ではない。一括遺物の用語は分類の項でも述べたとおりその規定が難しい。ここでは、器形のうかがえる程度に復元可能なまとまりをもって出土した土器という意味で用いた。しかし、個々の具体的資料ではかなりの相違がみられ、その判断が難しいが、発掘時の所見を重視したより幅のあるとらえ方をしている。なお、石器類についても本来の意味においては当然一括遺物が存在する訳であるが、ここでは分類の項からははずした。しかし、特に土器との関連で重要と考えられる場合は、文中で説明した。無遺物層は(2)いわゆる一次埋没土といわれているものを想定して使用したが、実際には土層観察の層位と遺物出土状態とは必ずしも一致する事例ばかりではない。従って、原則として、垂直的に遺物の稀薄な部分が土層観察による層位と一致した場合を無遺物層としたが、その判断には内容に大きな違いが生じない範囲での余裕をもたせた。また、土層観察は、発掘時にある程度の共通認識を試みたものの個々にバラツキが見られるが、基本的にはそう大きな問題はないものとする。

以上のように、分類基準用語の使い方等にかかなりの含みをもたせた。また、個々の事例について詳細なる検討が不十分な上に土器の接合関係、それに各住居址のプラン、規模等と遺物総数、埋土等の関係についての検討がほとんどなされていないのが実情である。従って本稿は資料提示の点においてさえも十分でない面があることをあらかじめ断っておきたい。

住居址内遺物の出土状態類型を各期毎にみる(表9)と、A類型とB類型の住居址数は、それぞれII期16棟と10棟、III期5棟と11棟、IV期1棟と10棟となり、またV期はB類型だけになる。すなわち、II期に

表9 遺物出土状態類型別住居址一覧(各期毎)

時期	類型	住居址	時期	類型	住居址	
I	A <sub>s</sub>	38	III	A <sub>1</sub>	33、50、74(II)	
II-a	A <sub>1</sub>	26、32	(A <sub>1</sub> )	A <sub>1</sub>	81	
	A <sub>s</sub>	28		A <sub>s</sub>	4	
	A <sub>4</sub>	48、55、64		B <sub>1</sub>	49、51、77	
	(A)	80		(B <sub>2</sub> )	59	
	B <sub>s</sub>	54、57		B <sub>s</sub>	41	
	B <sub>4</sub>	25、36、78		B <sub>4</sub>	12、27、42、61、76	
II-b	A <sub>1</sub>	29、30、40、71	(B <sub>4</sub> )	B <sub>4</sub>	13	
	A <sub>4</sub>	65、69		不明	43、66、70	
	B <sub>1</sub>	15		IV-a	A <sub>s</sub>	6
	B <sub>2</sub>	24、53			B <sub>1</sub>	58、75
	B <sub>4</sub>	44			B <sub>s</sub>	11、79
	不明	14、31、35			B <sub>4</sub>	9、52
II-c	A <sub>1</sub>	68	(B)		5	
	A <sub>s</sub>	56	IV-b		B <sub>1</sub>	67
	(A)	37(新)		B <sub>s</sub>	34	
	B <sub>4</sub>	63		(B <sub>2</sub> )	45	
		不明		74(新)		
			V-b	B <sub>4</sub>	7	
				不明	72	

(注) ゴジックは固定式石皿出土住居址

A 類型が多く、III期以降は少なくなるということがいえる。II期の特徴的な遺物である固定式石皿は、床面に密着して出土しており、これは住居廃絶後もそのまま置き去りにされたと考えられるものである。この固定式石皿をもつ住居の70%強がA 類型であり、床面出土の一括土器の多くはこの固定式石皿と同様な出土状態を示している。

さらにII期には、時期差のある土器群の混在がほとんどみられないという点が指摘できる。大半の住居址埋土には、II期の土器だけが出土する。II期以外の土器を伴出しても、それらはほぼ層位的に別れる。すなわち、上層にIII期以降の土器、下層にII期の土器という状態で出土している(住居址28・40・53等)。この現象は、集石等上層遺構の影響と考えられ、基本的には、混在がほとんどないものとして差しつかえない。それに対してIII期以降は、同一土層内において時期差のある土器群が混在する例が珍しくない(住居址12・50・77・6・79・7等)。これは、

住居址帰属時期の決定が出土土器のみでは判断

できないことを示し、他の角度からのアプローチ、例えば住居址形態、占地の問題等も含めて、総合的に検討した上で結論づけることがより強く要求されることを教えており、また、単に一片の土器をもってそれをすぐその住居址の出土土器として編年資料に使うことの危険性をも暗示している。

このような、II期とIII期以降との埋土中の土器の在り方の相違は、II期とIII期の間にはっきりした時間的断絶が存在することも関係しているであろうが、すでにいくつかの点でII期とIII期の考古学的知見の相違が明らかにされており、これらと密接に関係していると思われる。すなわち、彼らの社会の中で、土器に留まらず生活様式にまで及ぶ、とくに生産活動における大きな変化があったのではないだろうか。これをより説得力あるものとするには、なお多方面からの追求が必要である。

さて、全体を通してみると、以上のようにII期とIII期以降とに大きな相違があることがわかった。では各期内ではどうであろうか。表9のように、各期ともある類型に片寄るところはみられない。特に一括遺物に限ってみても、それがどの住居址にも存在する訳ではない。すなわち、II-a 期段階は、5つの類型に別けられ、以下II-b 期5、II-c 期3、III期6、IV-a 期4、IV-b 期3となり、また埋土中に一括遺物の存在しない住居址数は、II-a 期5、II-b 期5、II-c 期2、III期8、IV-a 期5、IV-b 期2となる。これは小林達雄氏が指摘するような「パターン」が、少なくとも本遺跡では存在しないことをはっきり示しているといえ、また、各住居址の出土遺物の内容及び総点数にかなりのバラツキがあることから裏付けられる。つまり、同時期の住居址から出土する遺物の在り方に、はっきりした斉一性がみられないことにこそ注目すべきであって、これこそ住居の廃絶及び埋没にかかわる問題を解明する上での重要なポイントであると考えられる。

同時期の住居址内遺物出土状態に、ある特定の類型がみられず、バラツキがあるということはその現象



の背後にある人間の行為に違いがあったということの何よりの証明である。すなわち、個々の住居の廃絶および埋没過程は、基本的にそれぞれ異なるということをはっきり認識すべきであり、住居の廃絶にかかわる一連の行為には、一定集団をして同一方向に導くような強力な規制はなかったということでもあり、また、その反面、住居址は単なるゴミ捨て場の穴というような単純な扱いはされていなかったということでもある。その意味するところを探ることが当面の問題であろう。これを解くには、さらに多くの資料と時間が必要であり、簡単に結論が出せる問題ではない。ここでは問題提起ということに留めておきたい。

以上、本遺跡の住居址内遺物出土状態について概略を述べたが、残念ながら冒頭に掲げた問題にはほとんど触れられなかった。ここで、2、3の問題点を指摘してまとめに代えたいと思う。

まず床面一括遺物をどうとらえるかという問題がある。住居と直接関係するのか、つまり、その住居の住人が使用していたものなのかどうか。床面一括遺物と埋土中のそれとの関係をどう解釈するか、さらに、それらは廃棄されたのか、それともある意味をもっておかれたのかなどの問題に波及し、それを解くには、埋土層位の観察、また一括遺物以外の多量な遺物の在り方、さらには自然遺物、例えば礫の出土状態等の個々の資料を細かく分析し、その上で総合的に関係づけて検討すべきであろう。中でも埋土層位の観察は、埋土の生成原因を判断する上で非常に重要な作業であり、今我々が行っている方法での土層観察の意義をもう一度根本から考え直してみる必要があると思う。

「住居の廃絶」とひとくちにいうけれど、一体どのようになされたのであろうか。上屋構造は解体されたのか、それともそのまま放置されたのか、また、焼失住居をどのように関連づけるかなど、その結論はここでの問題の流れを大きく左右するものであり、より慎重な判断が要求されよう。

本稿では、住居址内の遺物のみ扱ってきたが、遺物は住居址を中心としながらも一定の広がりをもって分布しているのが通例である。遺構外も含めた遺物出土状態を検討すべきであろう。しかし、それには莫大な時間と労力が必要であり、現実問題として不可能に近いが、そのような数多くの遺跡における地道な作業に裏づけされた価値ある資料の集積こそが、ここで取り上げた問題を解決するのに必要にして最低の条件であることもまた事実である。

(岩崎 孝治)

註1 一次埋没土の生成原因を自然推積とする考え方は、末木氏[末木 1975]や石丸氏[石丸 1977]等にもみられ、一方、人為的であるとする考え方は、古くは大場氏[大場 1955]、最近では山本氏[山本 1978]等にもみられる。

2 小林氏の「吹上パターン＝パターン A」-④堅穴住居が埋没しはじめる(これを第一次埋没土と仮称する)による[小林 1974]。

3 新山遺跡の報告[戸沢・後藤他 1980]は注目に値する。

4 この点に関して、桐原健氏[桐原 1976・b]が「上屋を有する廃棄堅穴の埋没が地表に摺鉢状の凹みを残すほどに進行するにはどれほどの時間が必要なのか」という疑問を投げかけ、岡谷市広畑遺跡の復元家屋を例にとり、興味深い事実を報じている。

## 2 グリッド出土土器の分布

遺構検出面に至るまでの遺物は2 m方眼のグリッド単位で層位別に取り上げられた。遺構が検出されて以後の遺物は各遺構別に扱われているが、特に上層の遺物については本項で取り上げたものとの間に意味の変わらないものを含んでいると思われる。これら遺構外出土の土器片のほぼすべてを観察したが、その総数は97,141点に達した。時間的制約もあり、決して十分な観察ではないが、遺跡内における各期の土器の分布の概要を把握しえた。ただ、土器片の実数については小片は数えていないし、操作途上で別に扱われたものなどがあり、これらを加えれば10万点を越えることは確かである。これに、遺構埋土及び床面

出土土器を加えた数が発掘調査で得られた土器のすべてということになり、土器片1点ごとに対する観察が出土土器のほぼすべてに行なわれたということになる。以下、時期ごとに説明を行なう。なお、分布図中でF区については特別なものを除き記入していないが、量はきわめてわずかで全体の傾向に影響を与えるものではない。また、C・D区の45ラインより東は、保存のため最下層まで全掘していない部分があるので遺物量がやや少なく、遺跡中央を横断する旧農道面は包含層がほとんど失われているため遺物はない。空白部として表現されている部分は、土器の出土がなかった場合だけでなく、出土しても観察がなされなかった場合もある。これは遺構分として扱われた場合と紛失などであるが、これらもわずかである。

#### (1) II期Ⅰ・Ⅱ群土器(挿図200)

II期の土器片は計7,508点であり、そのすべてを図示した。分布は大略、該期住居址群の分布と一致し、以下の場所に特に集中する。

- ①下層に該期住居址の存在する部分として、B・C区東半、I区住居址37、方形柱列IV付近、C区取付道路部分、C区列石北側など。
- ②住居址の存在しない部分でD区東半。
- ③確認調査のトレンチでは、B区・D区で発掘区と連続して環状になるような分布が認められ、さらにF区東側に集中出土したグリットがある。

以上の分布状態からみて、CH75付近を中心に径40m程度の分布の空白域があり、その周囲に幅35m程度の帯状に分布が集中すると考えられる。②は大きくみれば、この環状部分に含まれるが、これを別とすれば、主要な分布域は径110m程度の環状となる。これはほぼ住居址の分布と一致し、これ以外の②は土壌群との関係、土器廃棄パターンなどとの関連を考えるべきであろう。③のF区の集中地点では、付近から完形土器(II期ⅠA)の出土もあり、住居址などの遺構の存在を考えるべきであり、B・C区を中心とする集落との関係で今後の問題を残している。なお、①のうち、方形柱列IV・aの部分は周囲と比べ多くなっているが、これ以外の方形柱列は住居址の分布と一致して差は認められない。

#### (2) III期Ⅱ群土器(挿図201)

III期のうちII群土器のみを図示した。計2,557点ある。ほぼ環状に分布し、内部はCS70付近を中心とする径50~60m程度の空白域となり、その周囲に幅30m前後の集中域があり、全体では径約125mの円形となる。このほかE区東半と南端にやや集中する部分がある。前者には該期の確実な遺構はなく、後者は集石群が存在する位置である。住居址群との関係は、その内縁に多いといえる。C区取付道部分は分布の幅が狭いがこれは環状集石の礫の特に密集する部分と一致し、全体としての分布も集石群の分布にちかい。

II期と比べて分布域を拡げながら、東へ移り、内部の空白域はより大きくなっているといえよう。

#### (3) IV期Ⅰ群土器(挿図202)

明らかにIV期と考えられる土器のみを図示した。計16,126点ある。III期とほぼ同様の分布域を示すが、絶対量は多い。中心はIII期と同じくCS70付近にあるが、分布の空白域は径20m程度と狭く、外径は150m程度と広くなる。しかし、特に集中する部分をみると、内径50m、外径110m程度の環状であり、III期の分布とほぼ一致する。さらに、E区南端の集石群付近に多い点もIII期と同様である。これらの分布は住居址群内縁であり、環状集石群の位置と一致している。特に集石が集中したD区西半の集石群に隣接する位置に多く、この部分はII期も多かったことは注意される。なお、列石の位置は中心をわずかにはずれるが、ほぼ空白域内といえる。

## (4) V期I群土器(挿図203)

明らかにV期と考えられる土器のみを図示した。計8,528点ある。分布の傾向はIV期とほぼ同様であるが、絶対量は少なくなる。特に集中する部分もIV期と同じである。中心の空白部分は径20mほどで、環状の外径は約130mと小さくなり、東側への拡がりが目立たなくなるのが注意される。

## (5) III～V期縄文施文・無繊維土器(挿図204)

挿図200～203に示したものの以外の縄文のみをもつ無繊維土器を示した。これらはIII～V期に含まれ、内面に指頭圧痕の著しいものと磨きが丁寧なものがある。前者はIII期に、後者はIV・V期におおよそ属するが、破片のため判断し難いものも多い。内面調整の二者は、ほぼ等量あって各グリット単位でも、その比率に大きな差は認められない。III～V期の明確に型式分類可能なものの分布には各時期別に大きな差がないから、本図は絶対量としてはIII期とIV・V期に2分すべきとしても、分布の傾向という点では、III～V期の各期の様相が強調して表われていると考えてよい。

計60,531点ある。III期以降の分布の大勢を反映しており、トレンチ部分の状況からみても、内径65m、外径130m程度の環状となり、その集中度は著しい。特にD区西半の集中部はIII期以後の集積を示して、特殊な場所であることを考えさせる。この部分は特に土壌の分布に特徴があり、それとの関連も考える必要がある。E区南端の集石付近にも特に集中するのはIII期以後変わらない。

## (6) III群土器(挿図205)

III群土器は細片が多く、各期に区分するのが困難なため一括して図示した。計1,891点ある。分布はIII期II群土器の分布と同様であり、中心の空白部分大きい。他はIII～V期のいずれの傾向とも似ているといえる。C区取付道部分で西側への拡がり全くみられないのは特徴的である。

## (7) その他(挿図206)

(1)～(6)以外の各期の出土位置を示した。図では量は示さず、グリットにおける出土の有無として表わしてある。

押型文土器はD区南端、E区東半に散在し、I期はB区取付道部分に集中する。VIII期はF区東端、E区東半に集中するほかC、D区にも散在する。IX期はD区中央に集中するほか全域に散在する。X期はE区南端に集中し、記入してないがF区にも多い。

これらのうちVIII・X期は遺跡東南部の該期集落に対応して分布し、それとの関係が認められる。押型文およびIX期は明確な遺構がなく、絶対量もわずかで居住に関わるものかどうか明らかでない。I期は取付道のさらに西側、集中地点から35m程離れたところに住居址38があり、それとの関連が考えられる。

接合関係は、遺構外についてはごくわずか試みただけであり、そのほとんどはIV・V期の土器であって、環状集石群との関連が考えられるものである。広範な分布を示すものは土器が特徴的なために接合し易かった結果を示しており、特にその廃棄についての特徴とは考えられない。他はほとんどが至近で接合しただけであり、意図的行為の結果を示すとは考えられないだろう。しかし、2579の大形土器などの分布は径50m程に及んでおり、集石群形成との関わりを示唆している。

## (8) まとめ

以上の時期別分布を概観すると、II～V期までは基本的には環状分布を示し、その外側に別の集中域がいくつかみられるというパターンが継続している。その中でもII期とIII期以降にはやや断絶があり、これ

は住居址、方形柱列、環状集石群、土壙群などの様相の変化とも関連しており、集落構成の原理の変化に対応する結果であろう。遺物が住居域に多い点は当然としても、D区中央部の非住居域の土器の集中がII期以降継続することと、中央部に空白域を持ち続ける点は、集落内におけるその機能の点で注意される。これらの分布は、いわば中期貝塚における環状ないし馬蹄形集落の貝の分布とも対応させて考えることができるようなあり方を示している。貝塚の形成が内部に埋葬を伴う例がある点などから、「物送り」に通ずる意義があるのではないかと考えられているように、この土器分布の形成には単に生活痕跡を示すだけではなく、それ以上の意味を考えることも可能である。集石が形成されることが何らかの儀礼的意義を持っていたとすれば、土器がこのような分布を持って廃棄されることにもそれにちかい意義があるのではなからうか。そう考えなければ、住居域の時期的変化に影響されず、環状で中央に空白域を持つという分布が継続することは説明が難しい。

集落内における土地の用途はIII期以降、土器が棄てられない中央広場とその周囲の土器廃棄場所という点では強固な規制が持続したものと考えられよう。住居址群はその外縁外側に接して位置し、全体の分布からみて未掘地区での遺構のあり方について示唆する点がある。

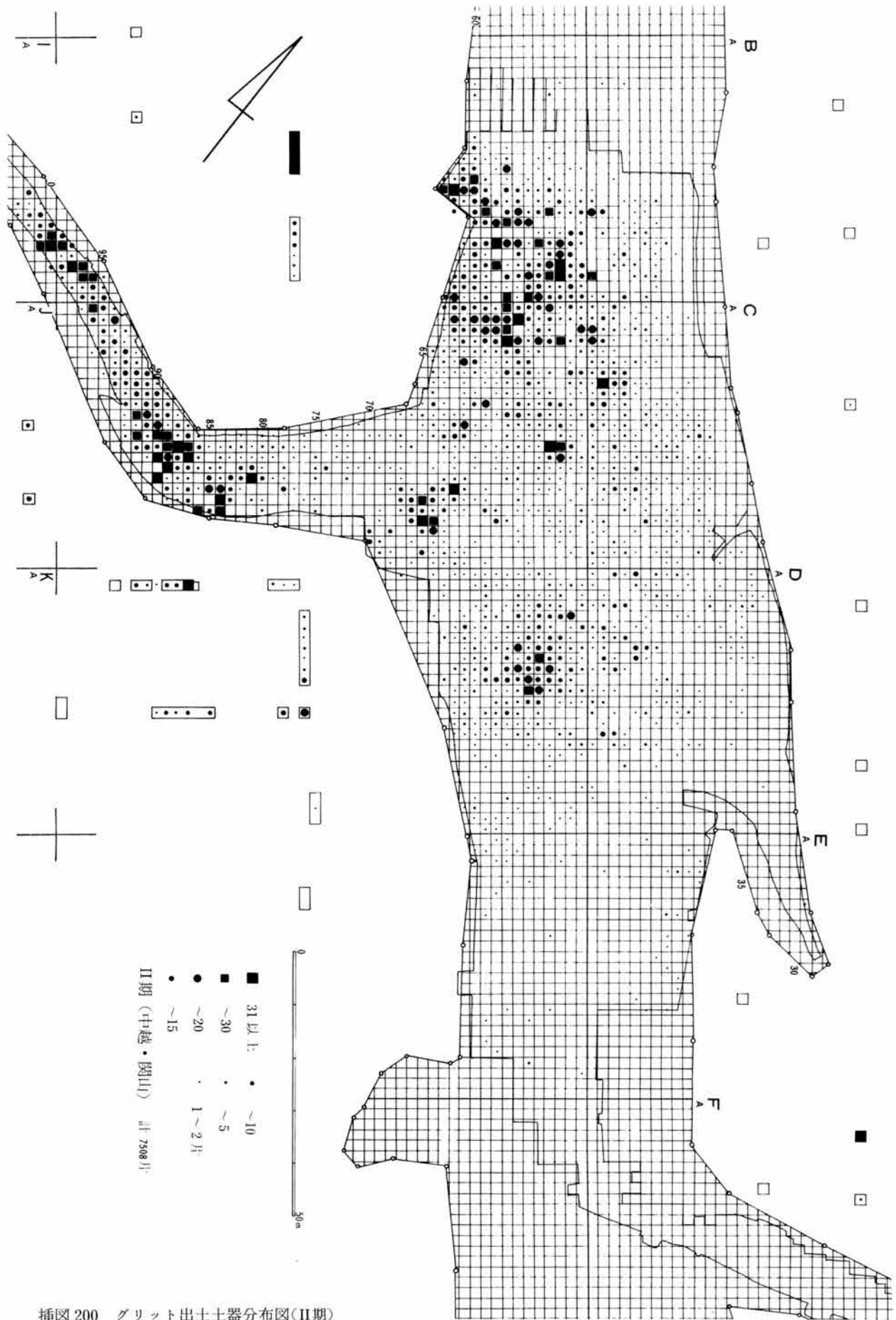
次に土器の量について触れておきたい。10万点弱の土器片を扱ったわけであるが、1片の平均的重量は、III群土器が7g前後であるほかは、いずれもほぼ12g前後である。遺構外から出土した土器の総重量はII期で約90kg、III期II群で30kg、IV期で190kg、V期で100kg、これ以外のIII～V期が700kg、III群が13kg、総計1,100kg前後ということになる。完形土器は1～1.5kgのものが多くことから、仮に1個体の完形土器が100片に割れるとすれば、その個体数はII期で75個体、III期II群で25個体、IV期で160個体、V期で85個体、これ以外のIII～V期が600個体、III群が20個体程度となり、それが遺構外に廃棄されたという計算をすることもできよう。III～V期としたものは、ほぼ等分してIII期とIV・V期に割当てることができる。これらと遺構埋土および床面出土土器を合わせれば、時期別の土器総量を推定することもできよう。

従来、縄文時代集落のオープン・スペースの機能分析は、環状集落における中央広場論などに示されるように、遺構相互の位置関係を重視して鳥瞰的に推測される場合が多かったといえる。旧石器研究におけるユニットの概念が、破損することにより機能を失う土器にそのままあてはまるとは思われないが、土器の量的分布とその変化を把握することにより、土器の廃棄行動だけでなく空間の機能的分割を明らかにする一方法が得られるのではなからうか。土器の廃棄についての分析は今まで遺構内中心に行なわれ、遺構外で扱われたとしてもまとまって出土した場合が多く、散在して破片が分布することには大きな注意が払われてきたとは思われない。表面採集により遺跡の範囲、さらに遺構の位置を探る方法は有効性を持ってきたが、遺構と直接的関連の把握できない遺物の分布がより以上の情報を持つことは本項の検討でも明らかである。今後は遺跡内の局所的な出土パターンのみでなく全体を統一的にとらえる方法の検討がより一層重要となろう。環状集石群形成期は一応別に考えるとしても、それ以前の状態について認められる遺構外出土土器の分布状態を、散在して出土する状態における「阿久パターン」と名づけて今後の研究のための第一歩としたい。

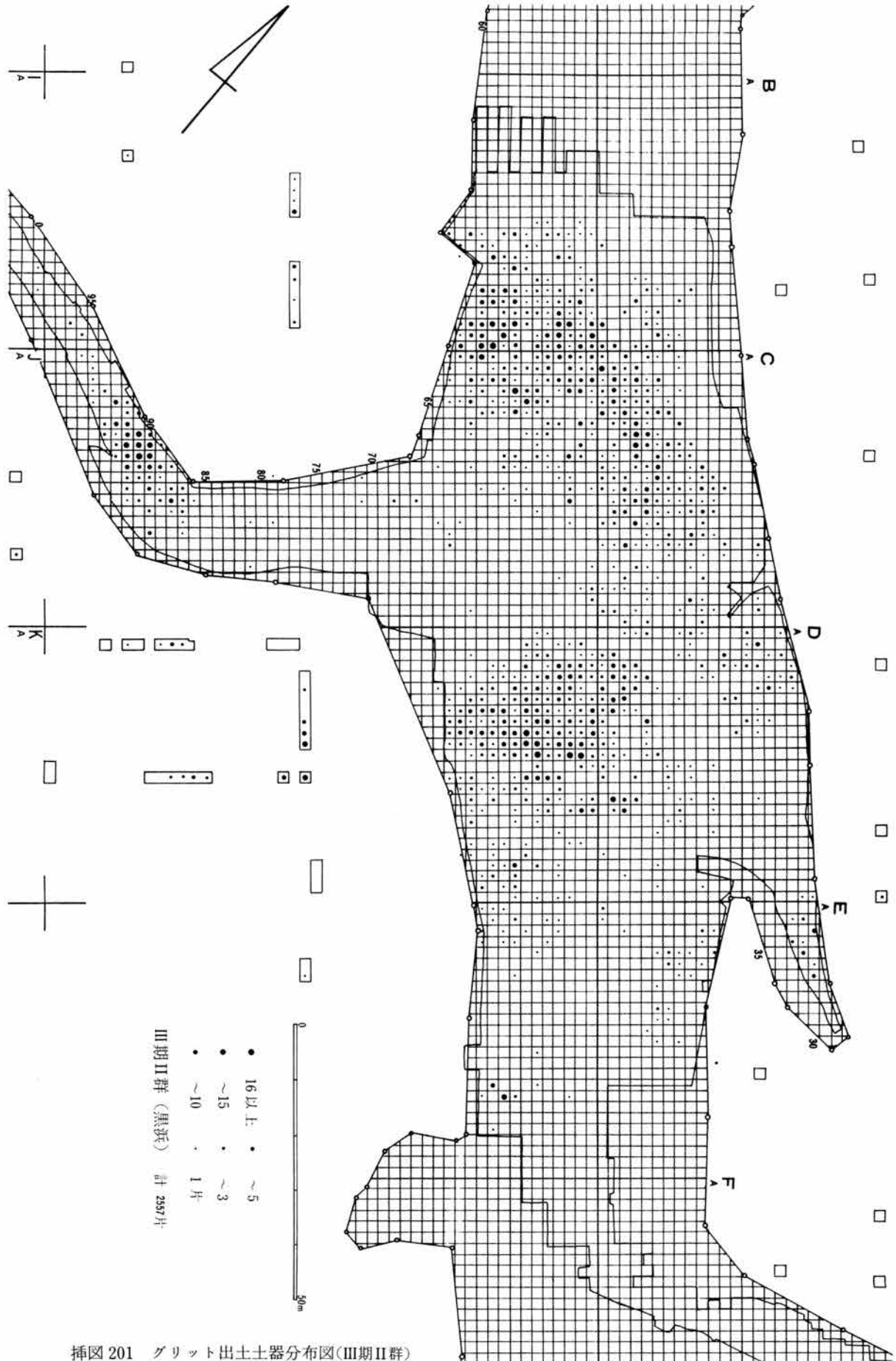
(土屋 積)

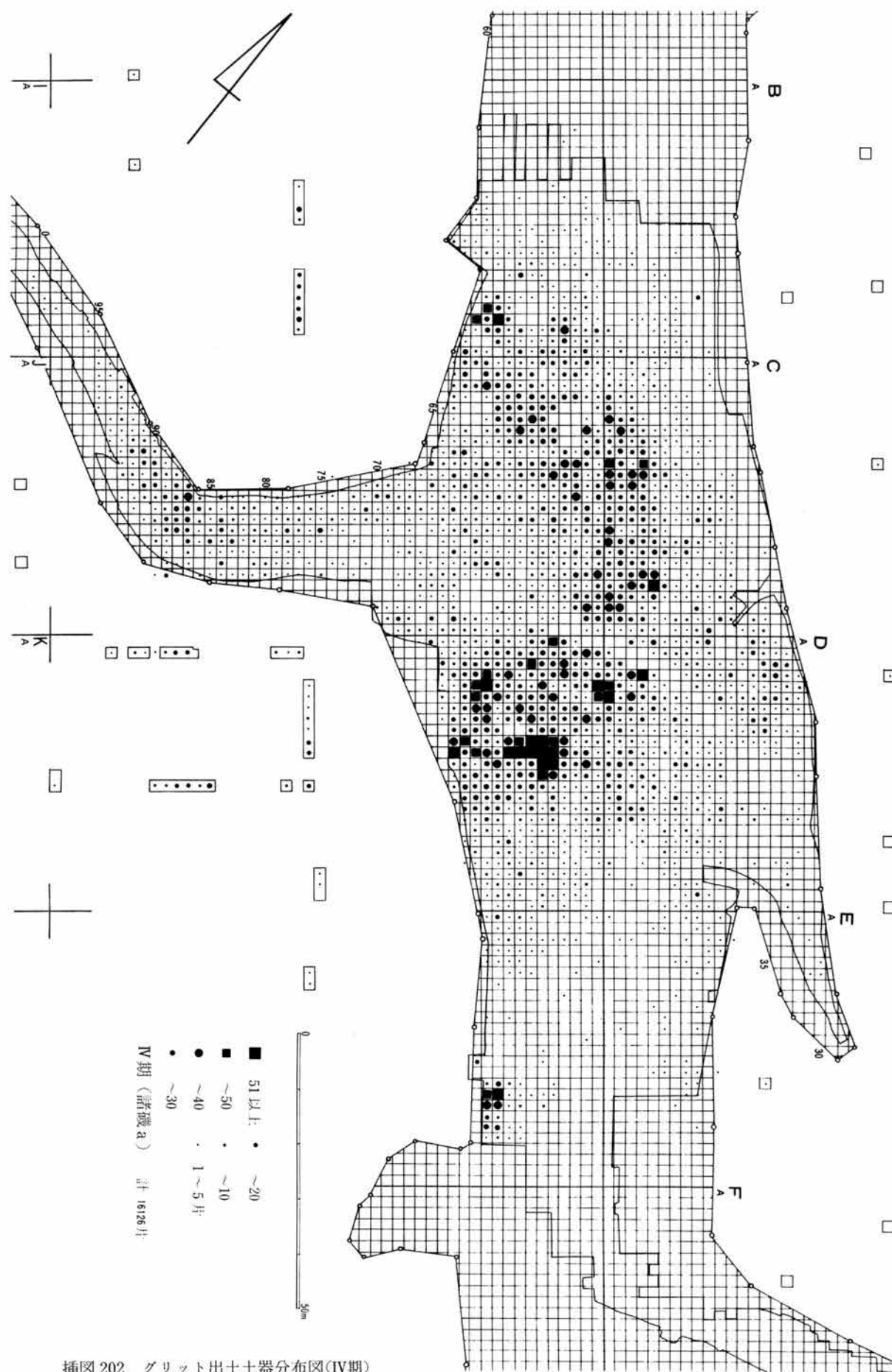
### 3 グリット出土石器の分布

グリット出土の石器は6,774点に及んだ。これに出土地点の明らかな原石・石核・剝片・屑片を加えると35,170点にもなる。このため本項では器種ごとにその分布、型式、石質などをまとめてふれることにした。なお一部については「石器の型式的検討」でまとめて扱っている。



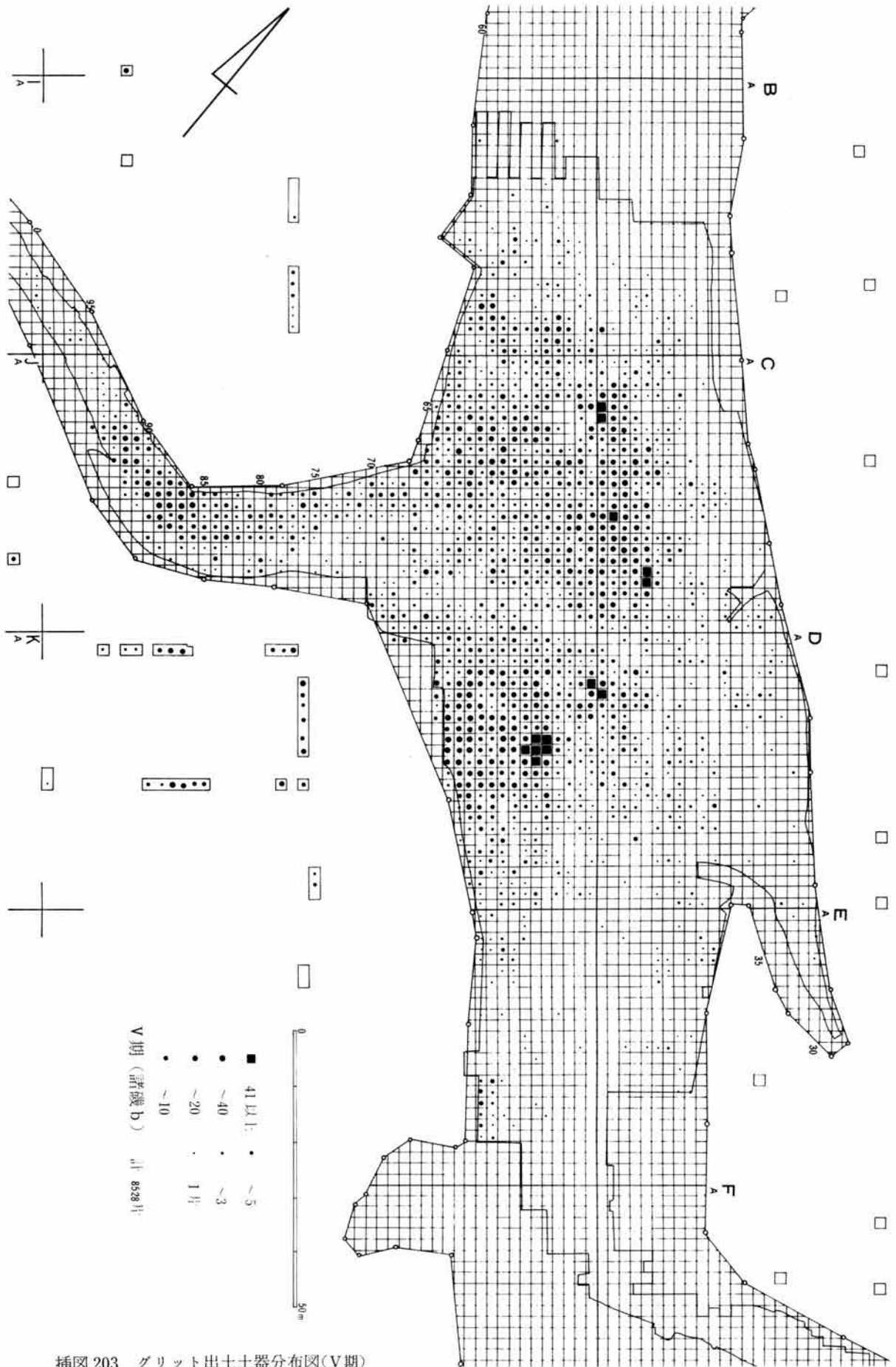
挿図 200 グリッド出土土器分布図(II期)





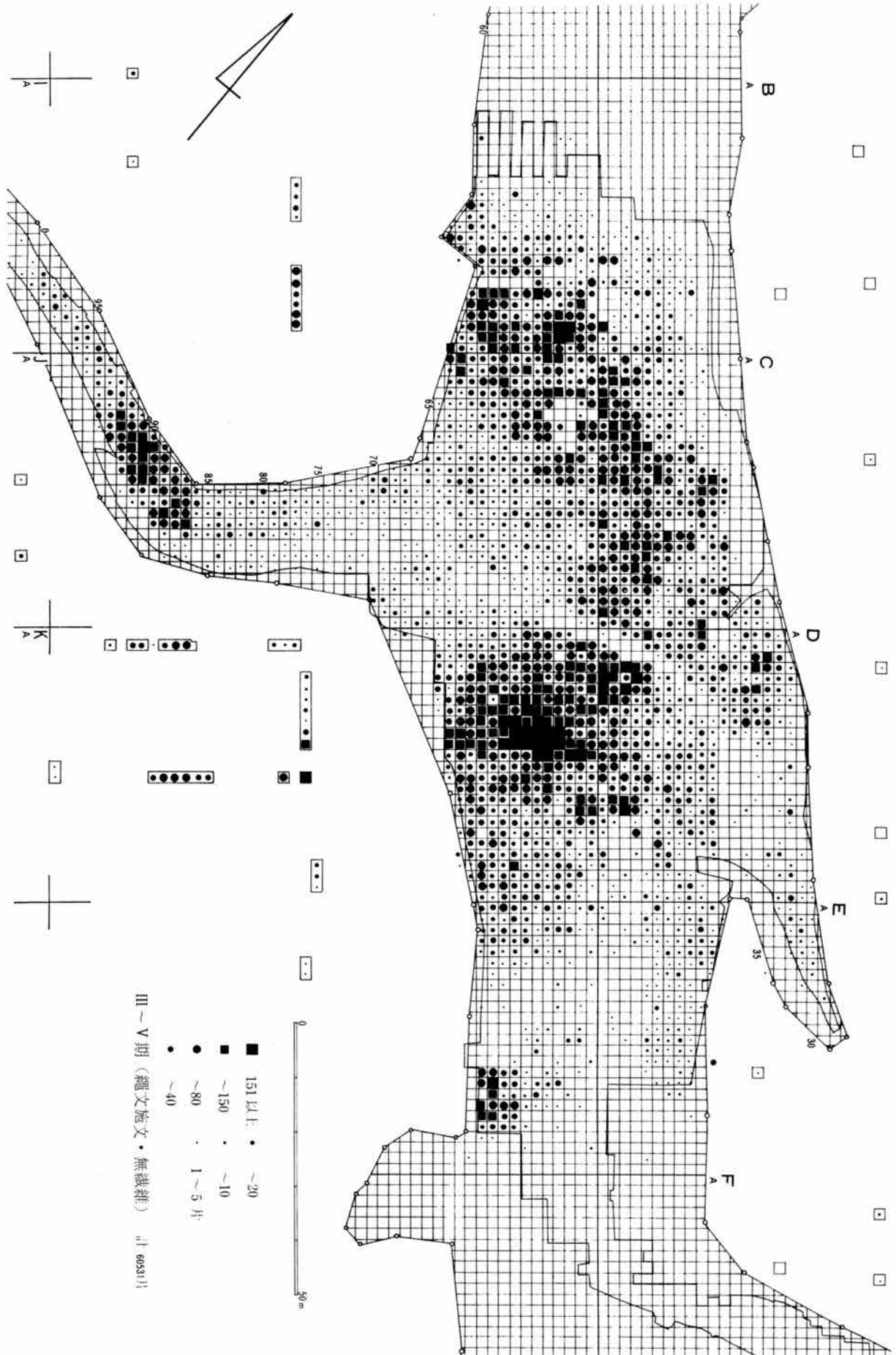
挿図 202 グリッド出土土器分布図(IV期)



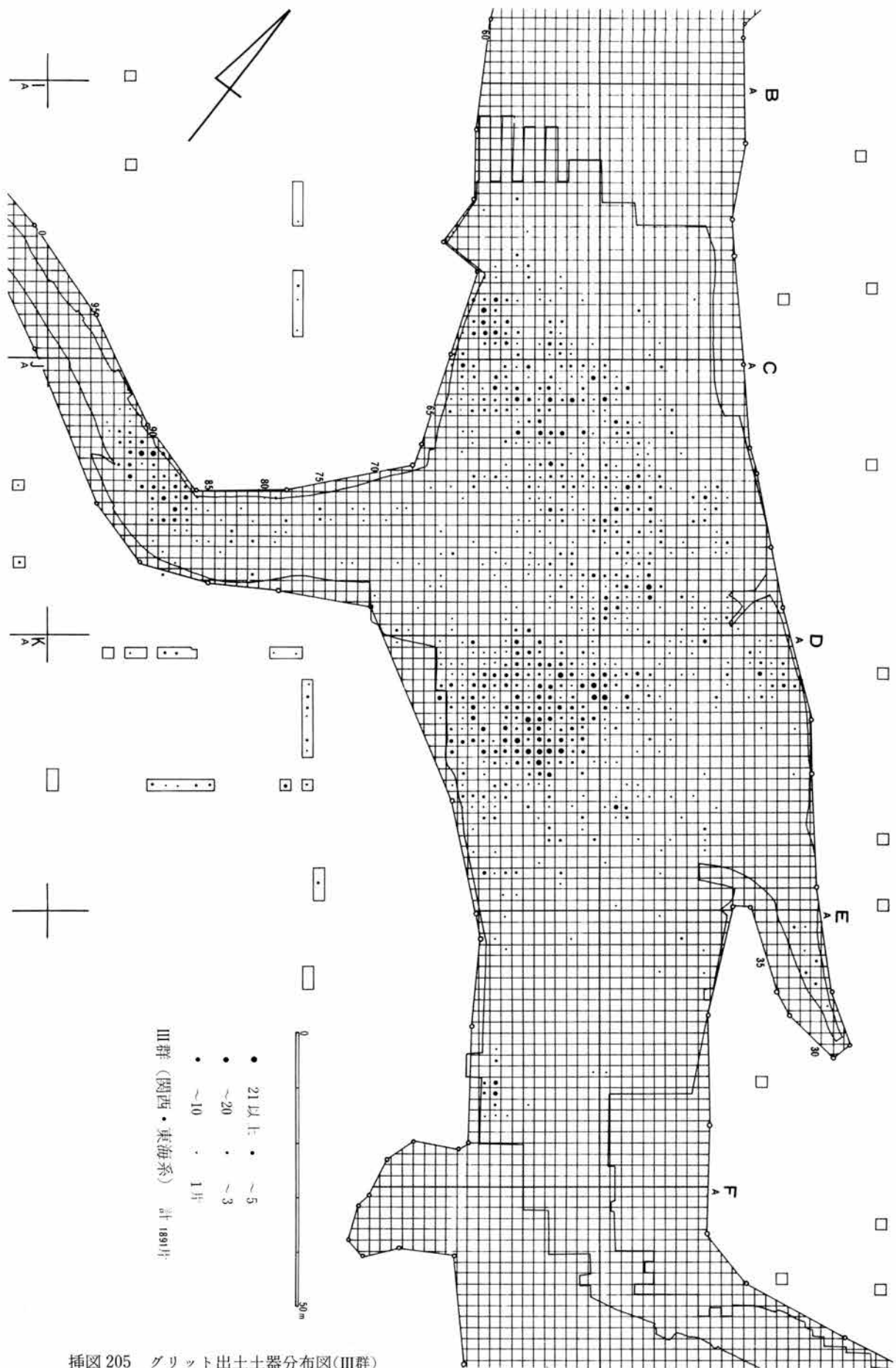


挿図 203 グリッド出土土器分布図(V期)

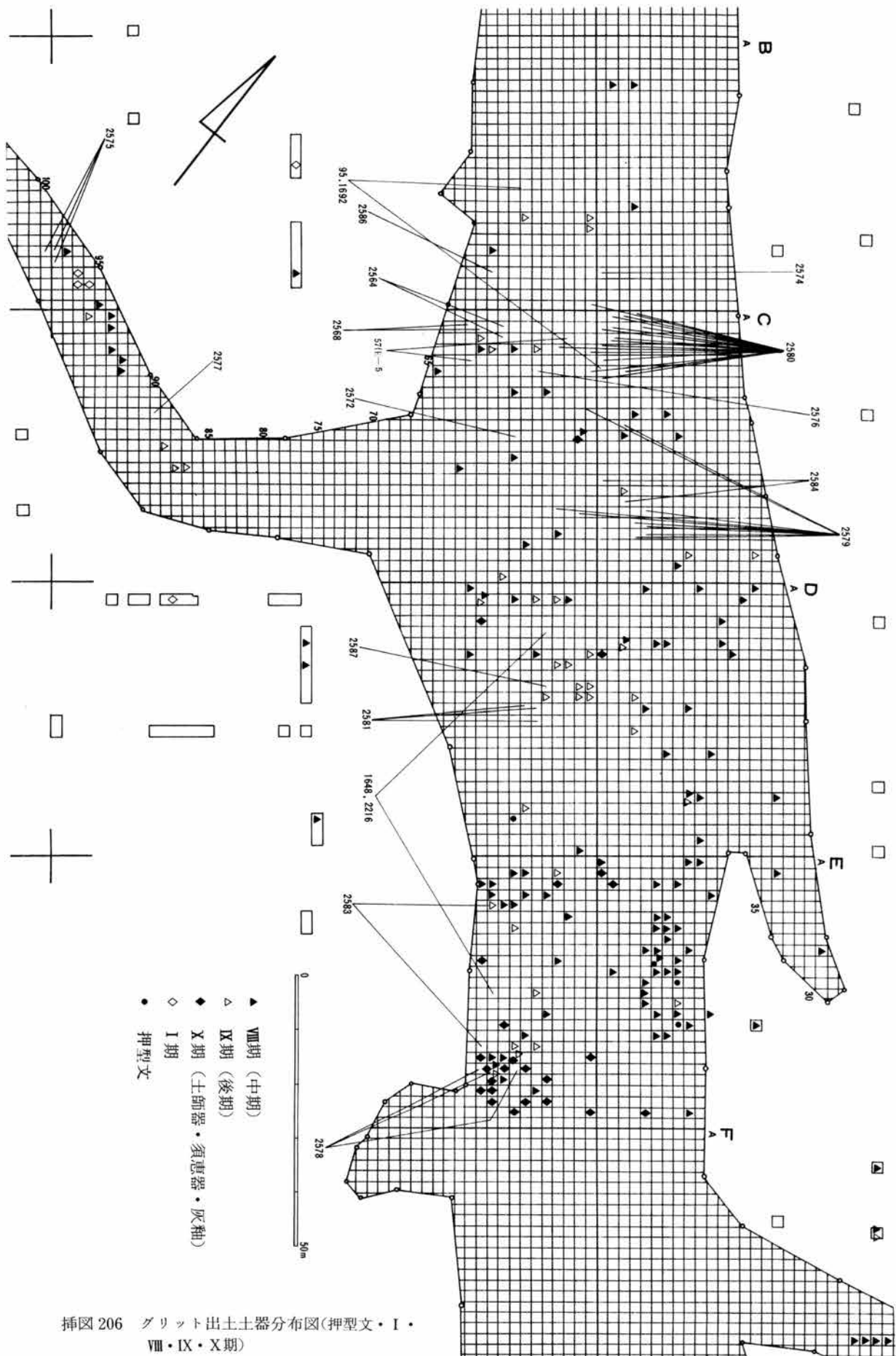




挿図 204 グリッド出土土器分布図(III~V期、縄文施文・無織維)



挿図 205 グリッド出土土器分布図(III群)



挿図206 グリット出土土器分布図(押型文・I・VIII・IX・X期)

(1) 原石・石核・剝片・屑片

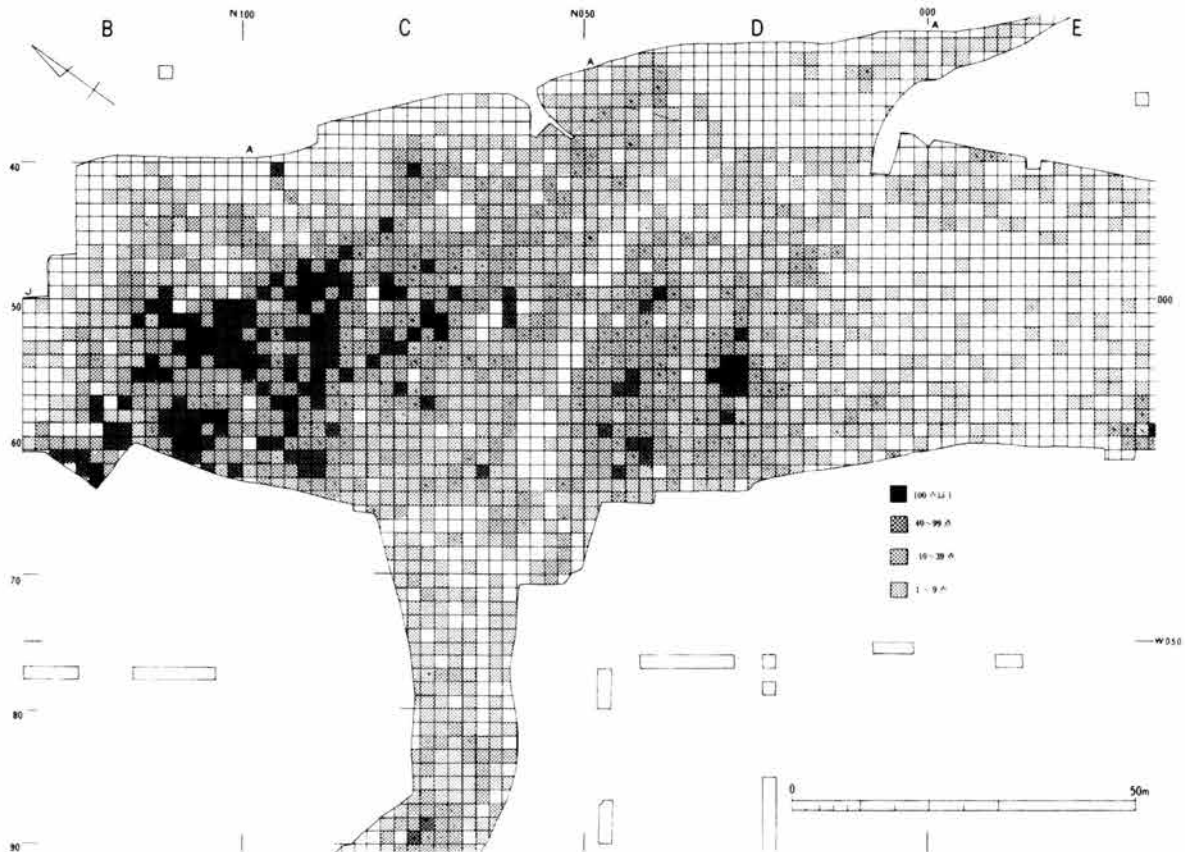
本遺跡からは黒曜石を主体とした大量の原石・石核・剝片・屑片(以下、原石・剝片類と略す)が出土し、総数 47,361 点に達する(表 10)。このうちの 60%にあたる 28,396 点がグリットより出土した。それらのグリットごとの分布は濃淡はあるが、全体としてほぼ環状となり、環状集石群の分布地域と一致する(挿図 207)が、特にその中でも、阿久 II 期の住居址群地域と DK 55 付近に密集する。また、個々の住居址が存在する地域で密集度が高くなる傾向をみせる。その他、単位集石群外側 A-1 周辺に濃い分布地点があることも注意される。原石・石核もこれと類似した分布をしめしている。

なお、CX 37 では周辺グリットを含め、石核・剝片・屑片の出土の少ない地点であるにもかかわらず、28 点の黒曜石塊の集中地点が検出された(挿図 208)。これらはほとんど原石であり、18×20 cm の範囲に積み重なっていたが、掘り込み等は確認できなかった。このような黒曜石の集中事例はすでに長崎元広氏により 13 遺跡 22 例が集成されている[長崎1980a]。その後塩尻

表 10 原石・剝片類出土数

時期	原石	石核	剝片	屑片	計
I-a	75	733(1)	2,441(7)[1,210(8)]	1,735	6,194
II-b	124	834(1)	1,383(12)[1,460(10)]	759	4,560
II-c	15	133	260(4)[288(4)]	69	765
III	90 [116]	326(4)	735(27)[631(23)]	707	2,605
IV-a	54	107(1)	377(1)	252	790
IV-b	19	137(2)	455(1)	24	635
V	68	152	1,205(25)	368	1,793
74 住	85	54	412(12)	107	658
集石	40(9)	61	255(7)	9	365
土壇	60	74(1)	285(5)	181	600
グリット	942(35)	2,968(35)		7,550	28,396
計	1,572(44)[116]	5,579(45)	24,744(895)[3,589(45)]	11,761	47,361

- ・( ) 内は ob 以外の石材数。碎片は分けてない。
- ・土壇の中には方形柱列内より出土した数を含む。
- ・[ ] 内の数については、いずれか分類できていない。
- ・住居址74については新・旧各の数を確定していない。



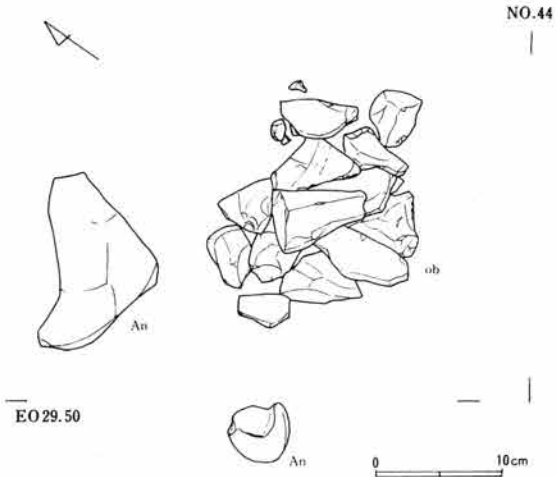
挿図 207 グリット出土剝片・屑片分布図

市中島遺跡〔小林 1980〕や本調査団の報告〔小林他 1981・1981青沼他 1981 b〕で類似資料が追加されている。このような例は縄文時代中期に特に多く見られ、諏訪盆地に集中していることが指摘されているが、本例ではCX 37及び周辺グリッドで発見された土器の検討から、その時期はIV期ないしV期であり、中期以前にも好例が存在することを証明したといえよう。

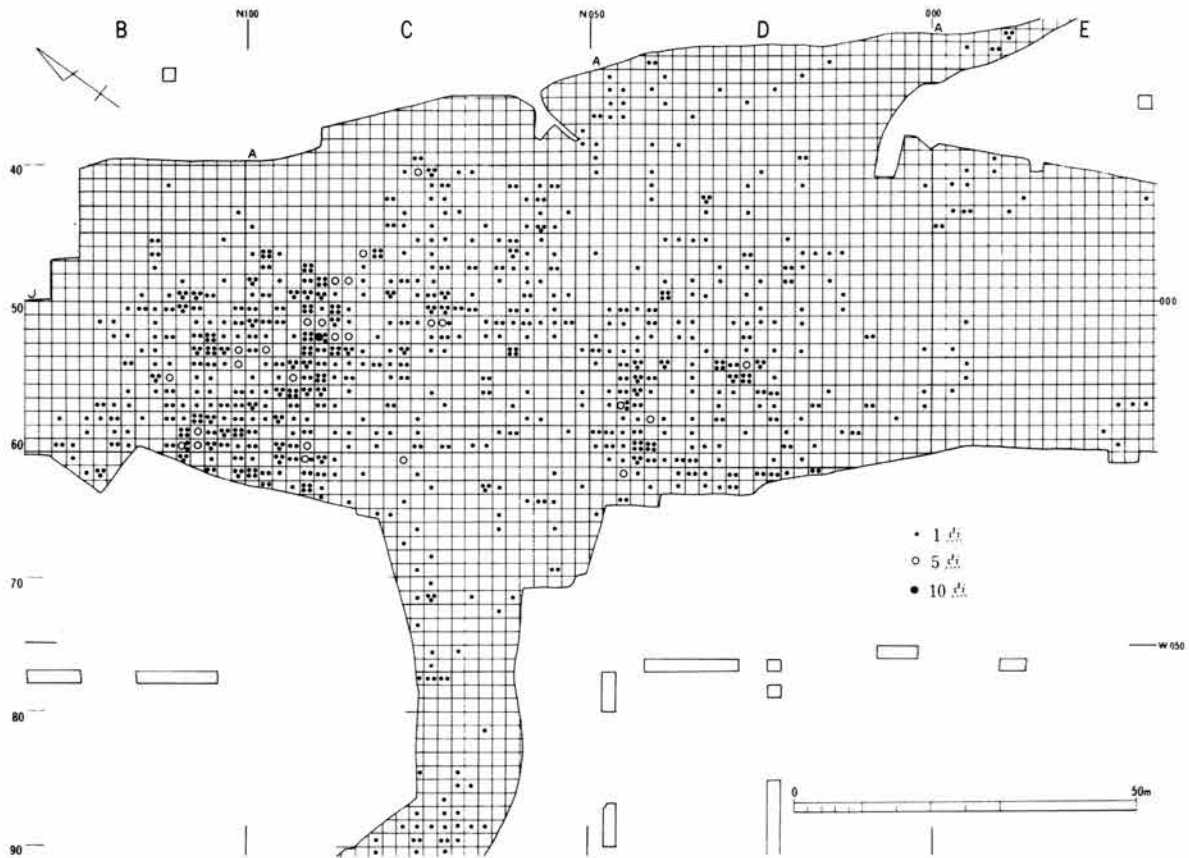
原石・剥片類の石質は96%が黒曜石であった。その他、変質流紋岩、チャート、頁岩(珪質頁岩)などあるが、安山岩、花崗岩、閃緑岩、花崗閃緑岩、輝緑岩、砂岩、粘板岩、緑色片岩等もわずかに確認されて

いる。これらの石材は遺跡の西方1kmにある赤石山系をはじめ、湖盆地域周辺で求められるものである。

このうちチャート・頁岩は、本遺跡においては石器の素材としての使用度が少ないが、グリッドで検出された素材と石器の関係を調べてみると、原石はチャート3、頁岩2、石核はそれぞれ4、6とわずかな点数しかなく、剥片もそれぞれ190、139点と同様であり、原石・剥片類の中で占める割合はチャート0.9%、頁岩0.7%となり、その集中箇所もみあたらなかった。これに対して石器はチャート359点(5.4%)、頁岩159点(2.2%)と原石・剥片類の数を上まわっている。この傾向は住居址内ではより顕著であり、さらに後章で触れてみたい。



挿図 208 黒曜石原石集中状況図



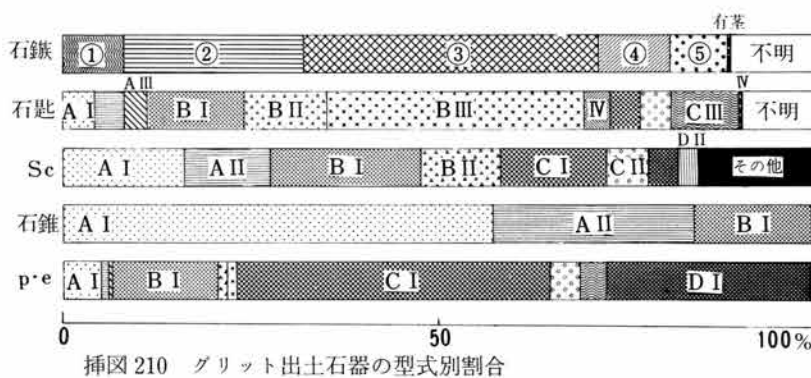
挿図 209 グリッド出土の石録分布図



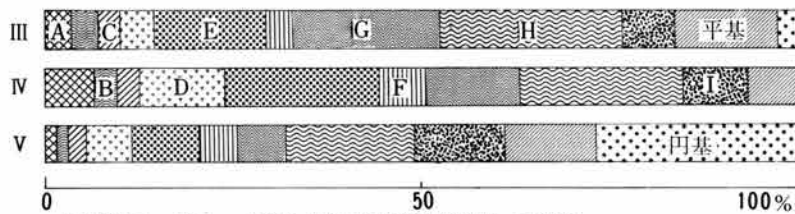
## (2) 石 鎌

グリッドから1,178点出土しており、使用痕のある剥片、凹石に次いで多い。石鎌の分布は、全体的には剥片・屑片と同様に環状集石群の立地範囲と一致する(挿図209、但し図外の49点は除外)。また、阿久II期の住居址群地域とDK55、ER59の付近に特に石鎌が密集するなど、剥片・屑片と類似した分布を示している。

型式別数量は、G III aの44点をもっとも多く、ついで円基V bの30点、H III aの28点となっている。これらをさらに抉りの深さから、①全体の1/3以上(A・B・C)、②1/4以上(D・E・F)、③1/4以下(G・H・I)に区分し、これに④平基、⑤円基(尖基)を加え基部の形状を5項目とし、それらの占有率を図化してみた(挿図210)。その結果は、①8%、②24%、③39%、④9.5%、⑤7.5%となった。この他、有茎石鎌が5点ある。また判別できないものは全体の11.5%(128点)あった。側辺の形態ではIII、IV、Vが主体であり、Iは0.6%、IIは4.6%にすぎないがIIIは30.4%、IVは27.1%、Vは25.5%を占める。判別できないものは11.8%あった。さらに数量の多いIII・IV・Vについての基部と側辺との関係は、IIIにはE・G・H・平基であるものが、IVではD・E・G・Hが、Vでは抉りの深いものは少なくH・円基が多いことなどを指摘できる(挿図211)。

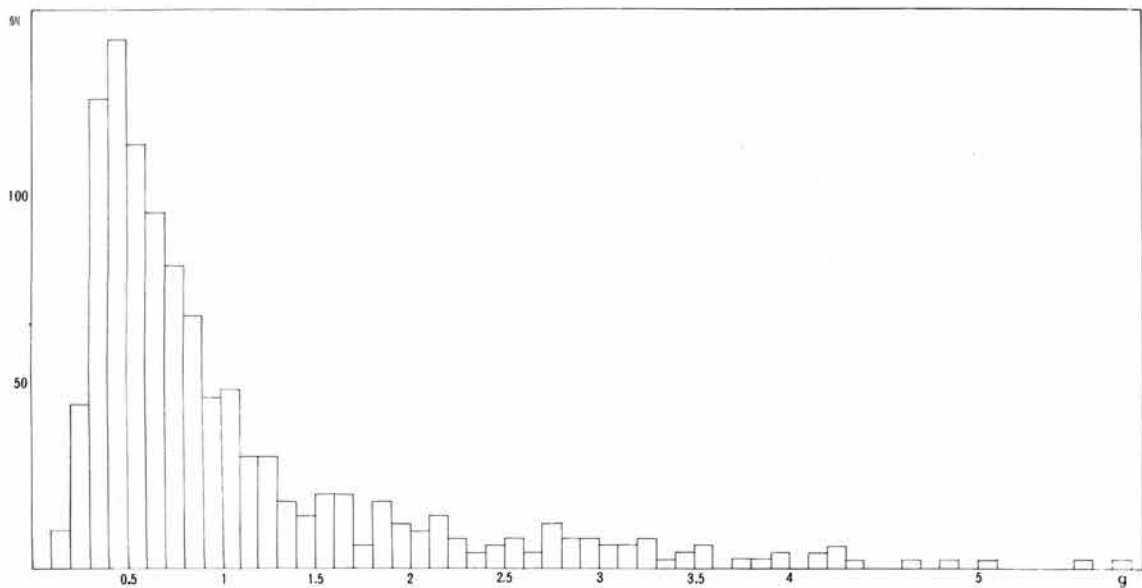


挿図210 グリッド出土石器の型式別割合

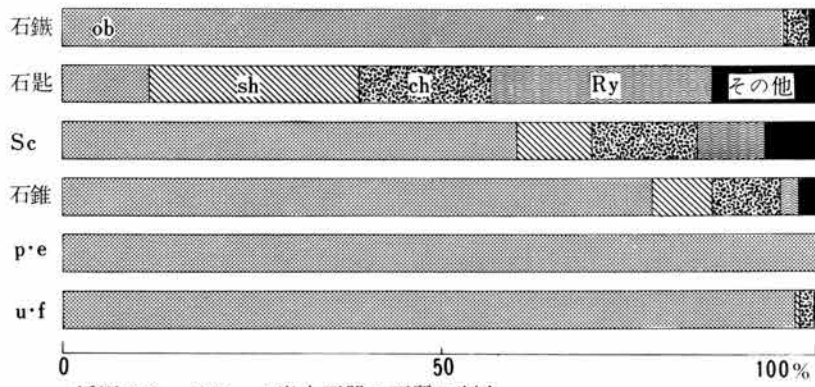


挿図211 グリッド出土石鎌の基部と側辺との関係

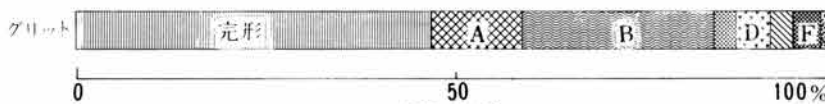
は11.8%あった。さらに数量の多いIII・IV・Vについての基部と側辺との関係は、IIIにはE・G・H・平基であるものが、IVではD・E・G・Hが、Vでは抉りの深いものは少なくH・円基が多いことなどを指摘できる(挿図211)。先端はa、bが主体であり、判別できた856点のうちaが312点、bが331点と両方で75%を占める。なお、cは117点、dは54点、eは42点であった。基部・側辺との関



挿図212 グリッド出土石鎌の重量分布



挿図 213 グリット出土石器の石質の割合



挿図 214 グリット出土石鏃の破損の割合

係では、aではGが79点(Ⅲ44点)、Hが62点(Ⅲ28点、Ⅳ21点)、Eが54点(Ⅳ26点、Ⅲ21点)と決りが浅く側辺の直な形に多いことがわかる。bではHが75点(Ⅴ26点、Ⅲ23点)、Eが55点(Ⅳ25点)、円基37点となるが特定の型式に集中することは少ないようである。

石鏃の重量は完成品のみ548点から集計した(挿図

212)。0.5g未満の極めて軽いものが40%を占め、66.4%は1g未満のものである。重くなるに従って急激にその数が少なくなり、2gを超えるものは14%(77点)にすぎない。このなかには、未製品と考えられた側辺あるいは基部に未加工の部分を残す71点の52%にあたる37点が含まれている。

石質は黒曜石が95.5%を占め、チャート3%、頁岩0.5%となっている(挿図213)。チャート製では重量のわかるもの17点のうち、0.5g未満は2点(12%)にすぎず、1g未満の軽いものでも35%(6点)である。石質による重量の違いは明らかであり、主として黒曜石が選択された理由も、小形軽量な石鏃づくりに最適であったためであろう。

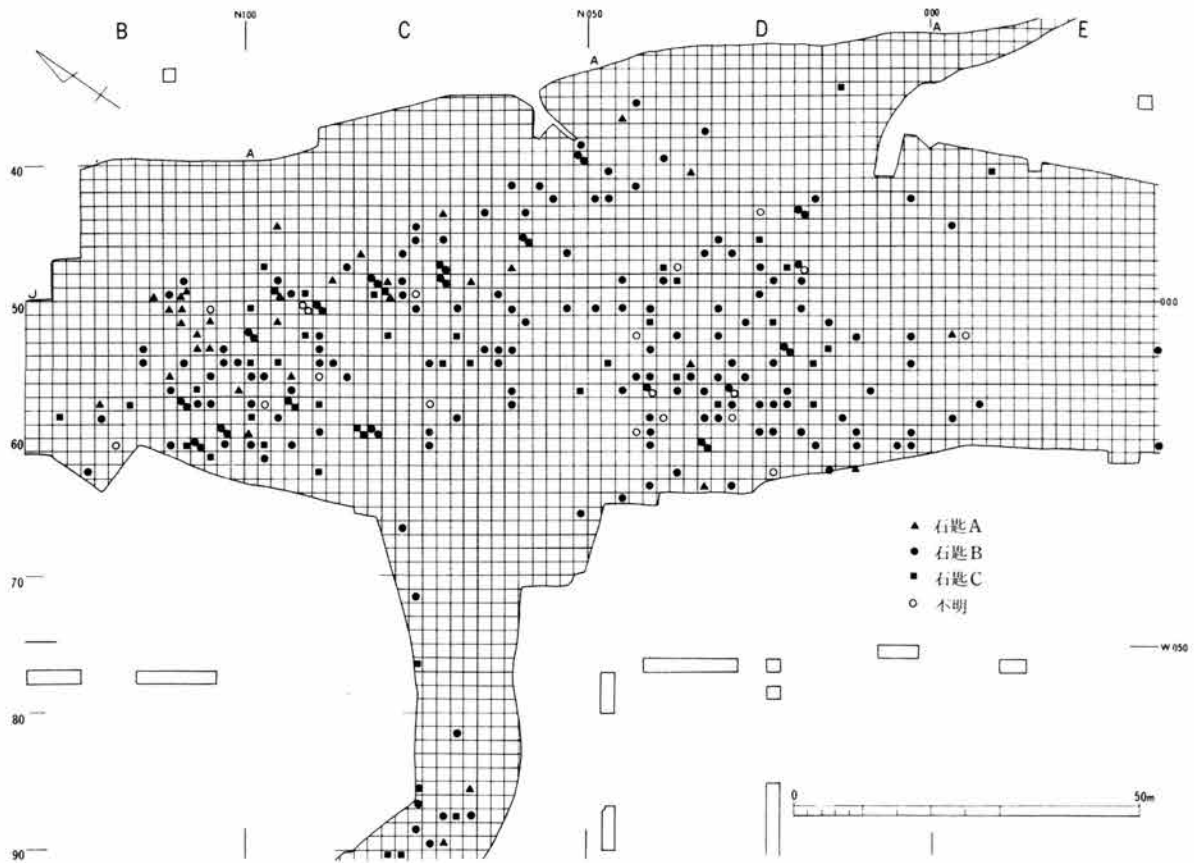
グリット出土の石鏃は53.5%が破損していた。破損の状況はBが301点と48%近くを占め、ついでAが138点(22%)となっており、脚部と先端にかかわる例が大半である(挿図214)。なお、破損品及び未製品と考えたものの分布はとくに集中するなどの特徴はみられなかった。

### (3) 石 匙

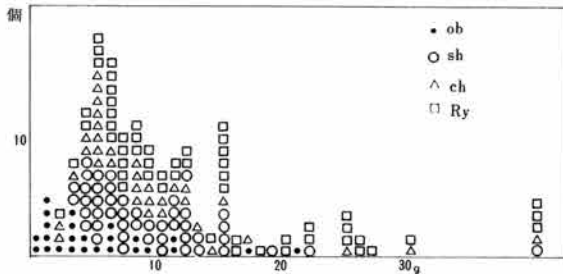
グリットより309点出土した。A・B・Cの各型式毎に分布図(挿図215)で示したが、図の範囲外の石匙14点は略した。全体的には、これまでと同様に環状集石群の立地範囲と一致し、また個々の住居址の分布地域にも比較的はっきりみられる。各型式毎に検討すると、Aでは分布に偏りがみられる。遺構との関連を考えると阿久II期の住居址群地域に集中しているといえる。後述するようにAは阿久II期に多出する型式であり、住居址群との強い関連をうかがわせる。BはAほど顕著なまとまりをみせないが、環状集石群、さらにはD区の土壙群地域に多く分布する傾向が指摘できる。また、BがIII期以降から多出する型式であることを考えれば、Bの分布地域の遺構の年代とも、ある程度の一致をみることになる。CはII期の住居址群地域に馬蹄形に比較的多い分布をみせる。これらの事実から一見環状に分布しているようにみえるが、かなりの時間的幅をもって形成されたことを示しているといえる。

型式別点数はA34(I13、II12、III9)で全体の11%にあたり、Bは188(I39、II34、III104、IV11)で61%、Cは53(I13、II12、III27、IV1)となる。刃部の形状は判断できた256点のうちa166、b61、c18で、二箇所刃部をもつものも11点ある。これらの割合はAにおいてはI・IIとつまみの大きなものが多く、また二箇所の刃部をもつものが30%(10点)近くあり、他にみられない特徴となっている。Bはつまみの大きなIIIが多く、その半数以上はIIIaである。

CはBと同様につまみの小さなIIIが多いが、刃部が直になるbが38%と多いことも特徴となろう。



挿図 215 グリット出土石匙の型式別分布図



挿図 216 グリット出土石匙の石質別重量分布

石質は黒曜石が 11.5%と少なく、変質流紋岩 29.5%、頁岩 27.5%、チャート 17.5%となっている(挿図 213)。先にふれた石鉄の石質とは大きな違いがある。これについては「石匙はある程度の大きさ(4 g 以上)が必要であってより小さい黒曜石の剥片は敬遠された」との説がある〔小池 1981 a〕。完形品で石質別の重量を比較してみると、黒曜石製は全体の 54%

が 5 g 未満の軽量なものであるのに対し、頁岩・チャート製では 5 g 前後が多いものの、10 g 以上がそれぞれ 41%、35%ある。さらに変質流紋岩製では 55%以上が 10 g を越えており石匙の大きさと石質との間には密接な関連を認めることができる(挿図 216)。つまり、黒曜石製が比較的小形品が多いのに対して、他の石質の石匙は大形品が多いということになる。なお破損品は全体の 40.5%にあたり、住居址全体の破損率 24.2%を大きくうわまわっている。

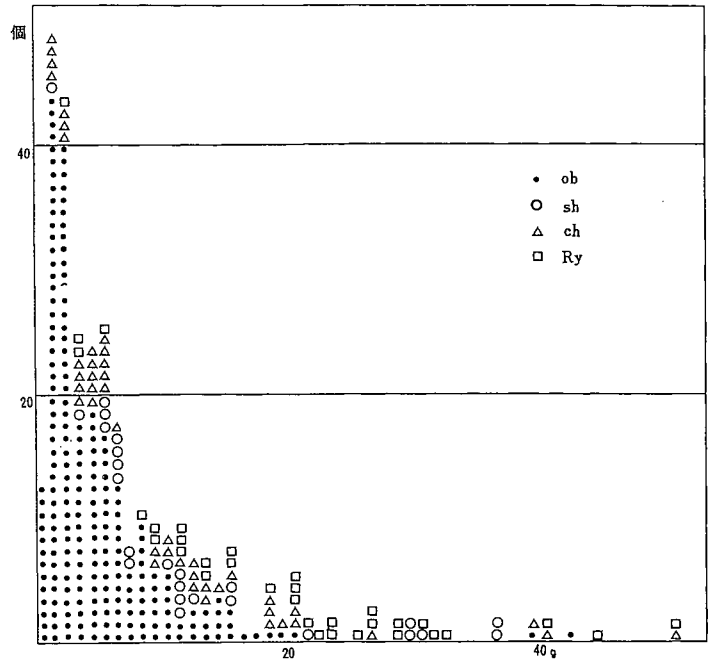
#### (4) スクレイパー

グリットからは 375 点出土している。分布の傾向は他の石器と同様に、環状集石群と II 期住居址地帯により濃くみられる。

型式別占有率は A 27.5%、B 30.5%、C 19.5%、D 6.5%である。このほか刃部を二箇所にもつものも 16%に達した。二次加工は A で I が 58.5%、II が 41.5%、B で I が 65.5%、II が 34.5%、C で I が 72%、II が 28%、D で I が 61%、II が 39%という割合であった(挿図 210)。また、素材は 79%が剥片で、石核が 10%、原石 5%であり、型式によって素材を使いわけるといった傾向は認められない。



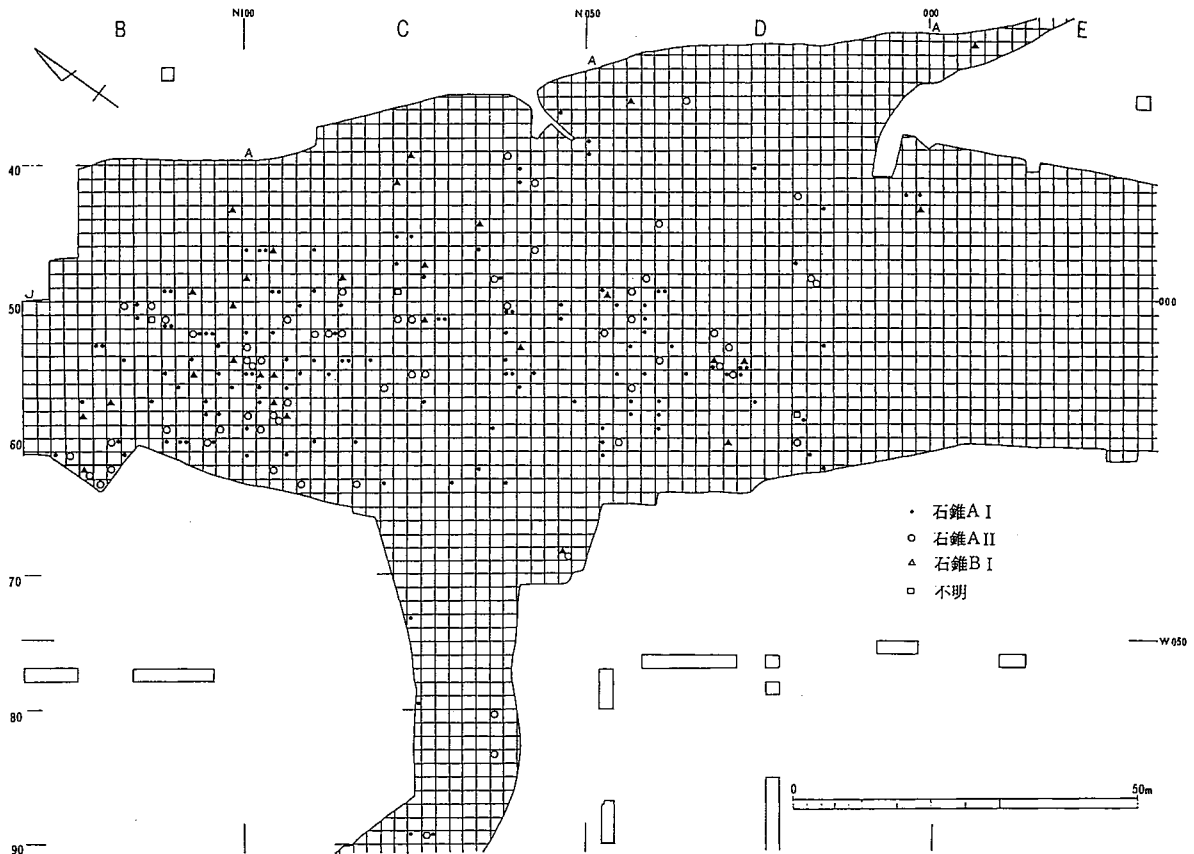
石質は黒曜石 60%、頁岩 10%、チャート 14%、変質流紋岩 9%で、石鏃と石匙の中間的値を示している(挿図 213)。石質ごとの重量は黒曜石製が 2 g 前後に集中し、ほぼ 20 g まで漸減し、20 g を越えるものは極端に少ない。頁岩・チャート製は 5 g 前後が中心であるが、バラツキも大きい。変質流紋岩製では 20 g 以上が 55% と多く、全体に大型品が多い(挿図 217)。このような傾向は石匙で確認されている。石質ごとの石匙との重量差は、黒曜石製ではスクレイパーがより軽量な部分に集中しているのに対し変質流紋岩・頁岩製ではスクレイパーがより重い部分へ集まり、この点では十二ノ后遺跡の所見との違いをみせている。



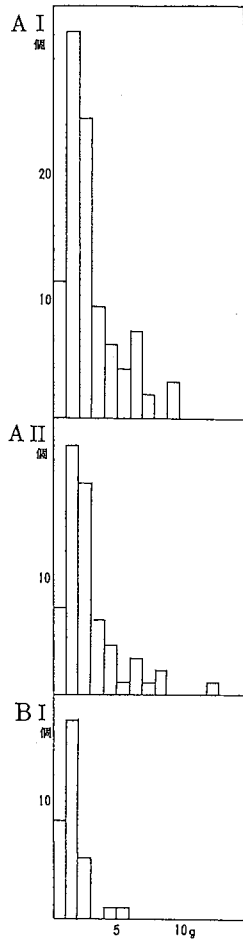
挿図 217 グリット出土スクレイパーの石質別重量分布

(5) 石 鏃

グリットからの出土は 254 点ある(挿図 218。なお図範囲外に 14 点がある)。分布状態は他の石器とほぼ同様で、型式差による分布の違いも認められない。型式別数量は A I が全体の 57% と多く、次いで A II 26。



挿図 218 グリット出土石鏃の型式別分布図



挿図 219  
グリット出土石錐の  
型式別重量分布

5%、B I 15.5%という割合であった(挿図 210)。錐部の長さは、A I・B Iともに5 mm未満から2 cmを越えるものまでまちまちであり、平均1 cm前後であるが、A IIは5 mm以下に集中している。石質はA IIの大半が黒曜石である(99%)のに対して、A I・B Iは、62%、77%となり、黒曜石の占める率が下る(挿図 213)。

また、A IIは使用痕の観察からも、石錐とするのに疑問もあり、A I・B Iとのいくつかの相違から、別の機能をもつ器種としてとらえなおす必要がある。重量は各型式とも1~2 g台に集中し、うち5 gを越えるものはA I 16.5%、A II 13.3%で、全面加工のB Iでは3.3%(1点)と極めて少なくなっている(挿図 219)。破損品は全体の24%程であり、そのほとんどは錐部を欠くものであった。住居址内の破損率は18%であるので若干高めになっている。

#### (6) ピエス・エスキーユ

グリットからの出土は734点と多い。分布状態はほぼ環状集石群の占地地域と一致する。しかし、型式差による分布上の特徴は見い出せなかった(挿図 220)。ただ分布の濃淡が顕著でいくつかのまとまりを想定できそうな部分のあることは注意したい。

型式別数量の割合はAが4%、Bが14%、Cが49%、Dが28%となる(挿図 210)。各型式ともIが大半を占める。II・IIIはそれぞれ8%近くを占めているがDにはまれである。なお、Iを90°回転させ両端からの階段状剝離を加えたものがIIIであり[阿部 1979]、この一辺がいわゆる断面により剝離されたものがIIであるように観察された。

重量はA・Bが5 g前後に集中するのに対し、C・Dでは1~2 gが一般で、5 gを越えるものはまれである。石質は2点のみチャート製で他はすべて黒曜石製である。住居址等遺構内出土のものはすべて黒曜石製であり、石材を選択しているようである。

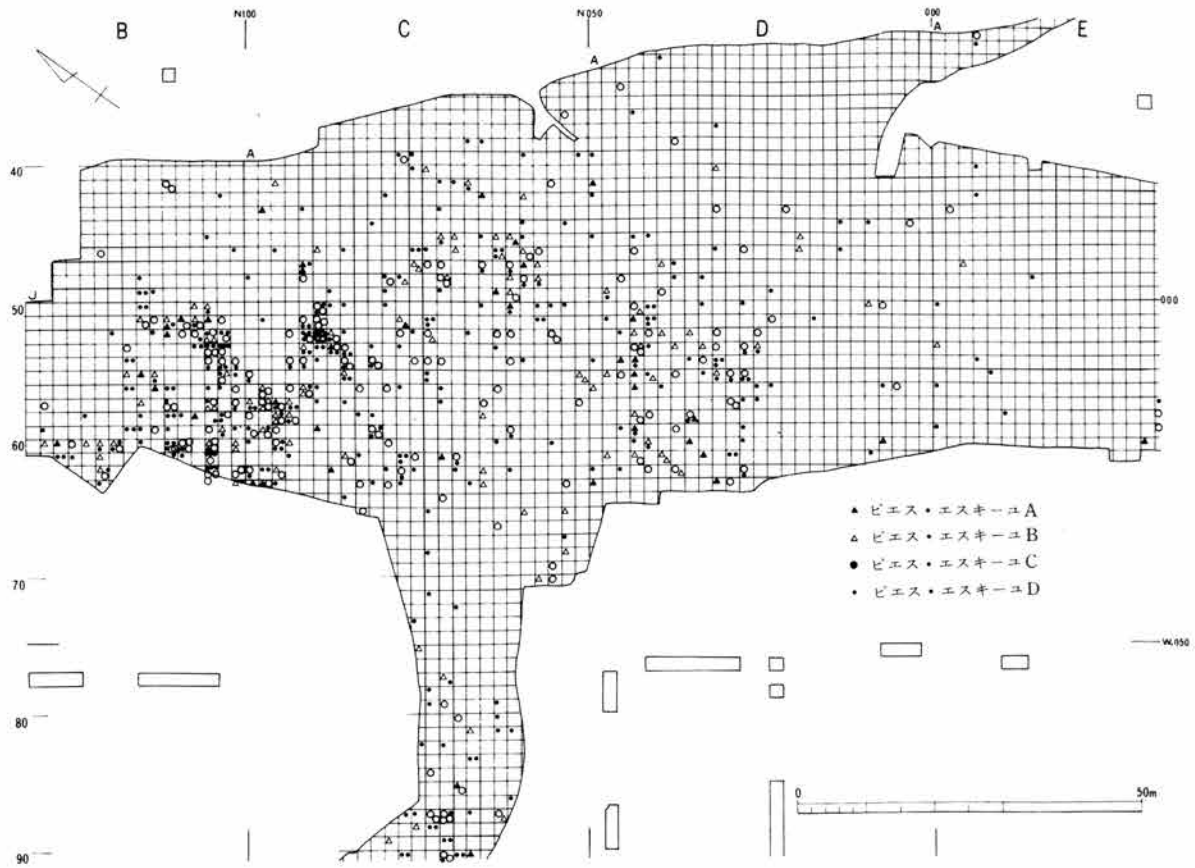
#### (7) 使用痕のある剥片

1,709点とその出土数は最も多いが、この分析はいまだ不十分である。分布もより広範囲な広がりを見せている(挿図 222)が、全般的傾向は、他の石器とほぼ同様である。石質は97%が黒曜石で、石鏃と類似した組成を示している(挿図 213)。

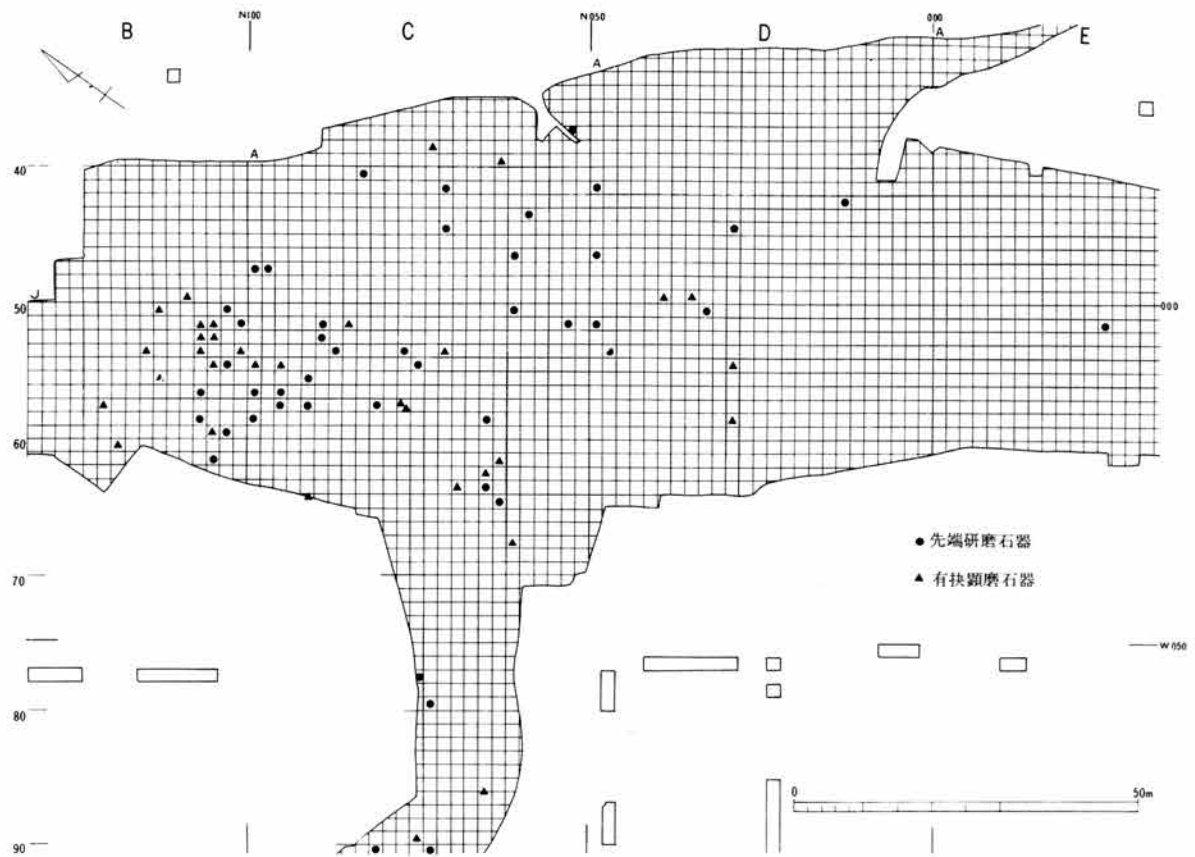
(小柳 義男)

注 1 住居址 33 でのウォーターフロテーション・セパレーションによれば、全体の 1/6 にあたる量の中から 5100 に及ぶ屑片が検出されており、本遺跡での原石・屑片の総数はこれの数十倍に達するであろう。

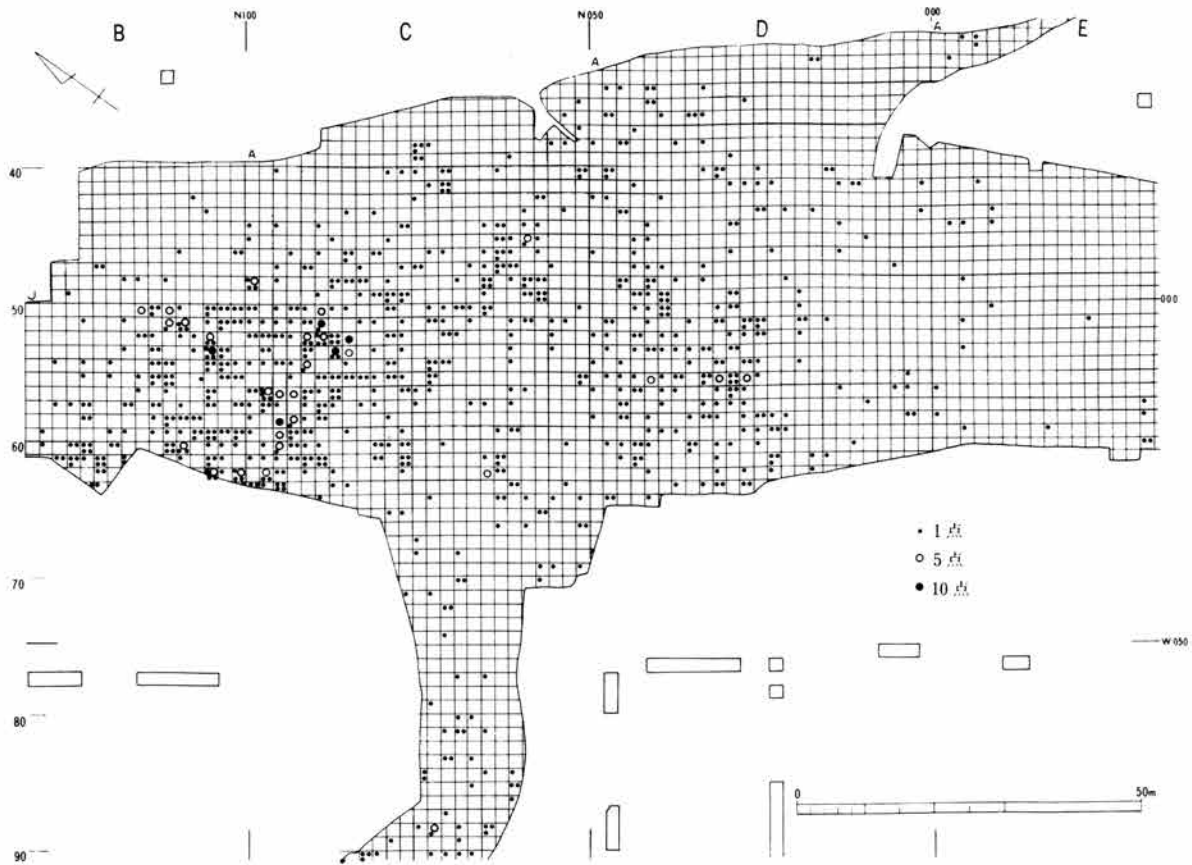
2 本群は両極打法による石核との間に明確な区分をしがたく、両極からの階段状剝離を持つことのみを分類の基準としたため、石核を含めて数えている可能性がある。この傾向は A・B においてより強いものと思われる。



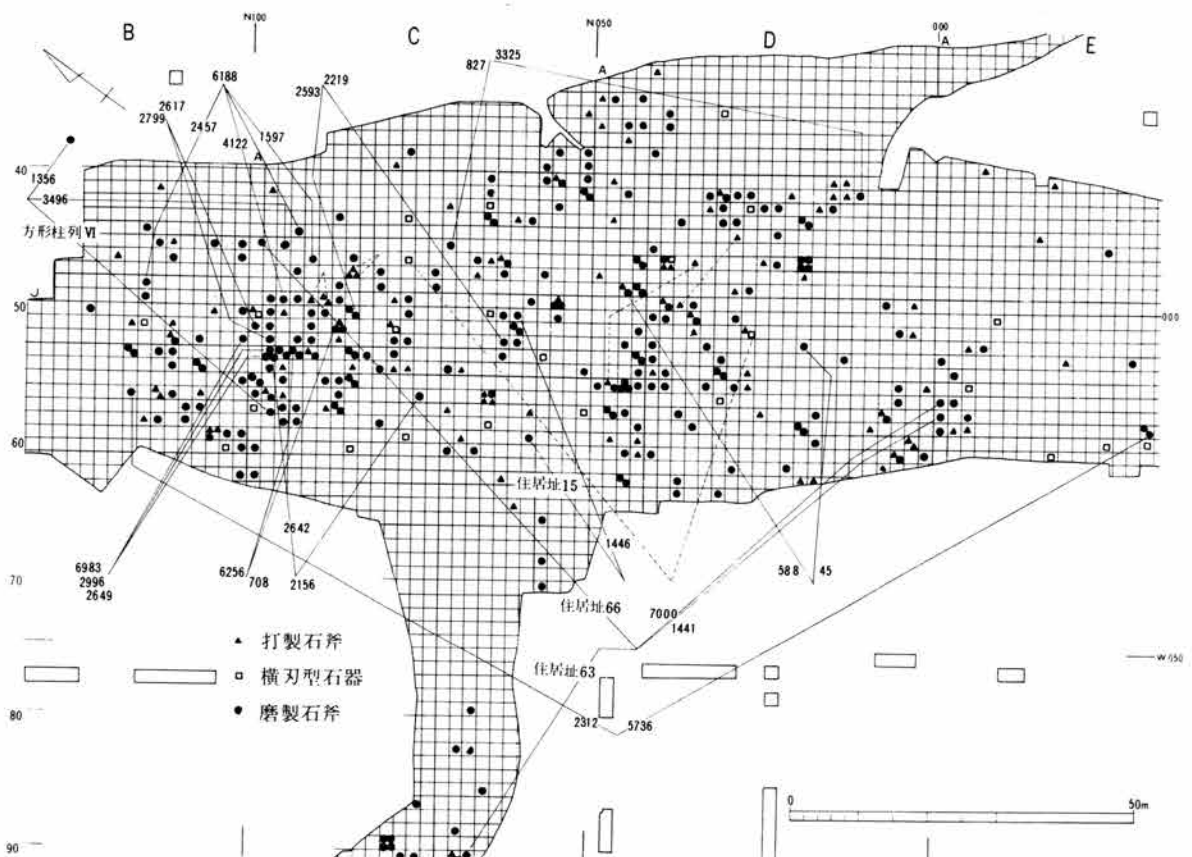
挿図 220 グリッド出土ビエス・エスキューの型式別分布図



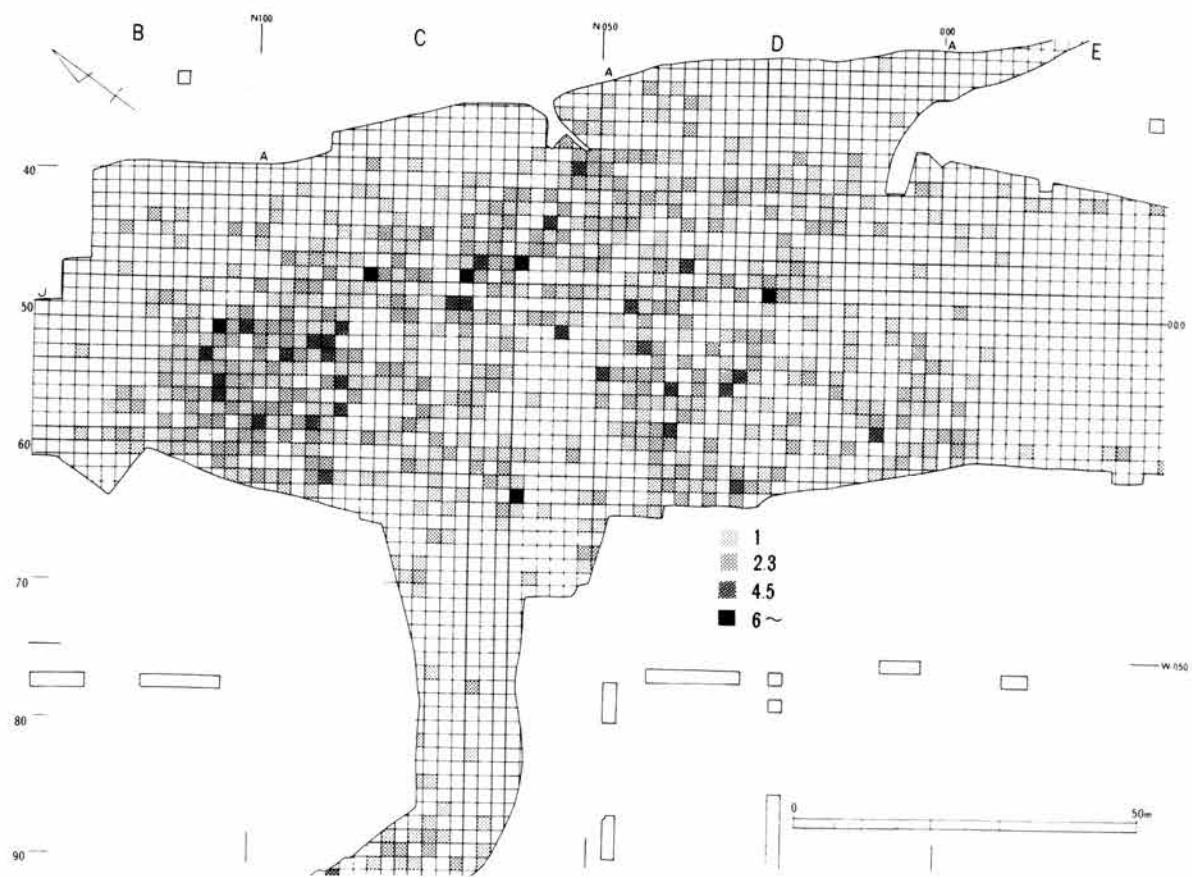
挿図 221 グリッド出土有袂顕磨石器・先端研磨石器分布図



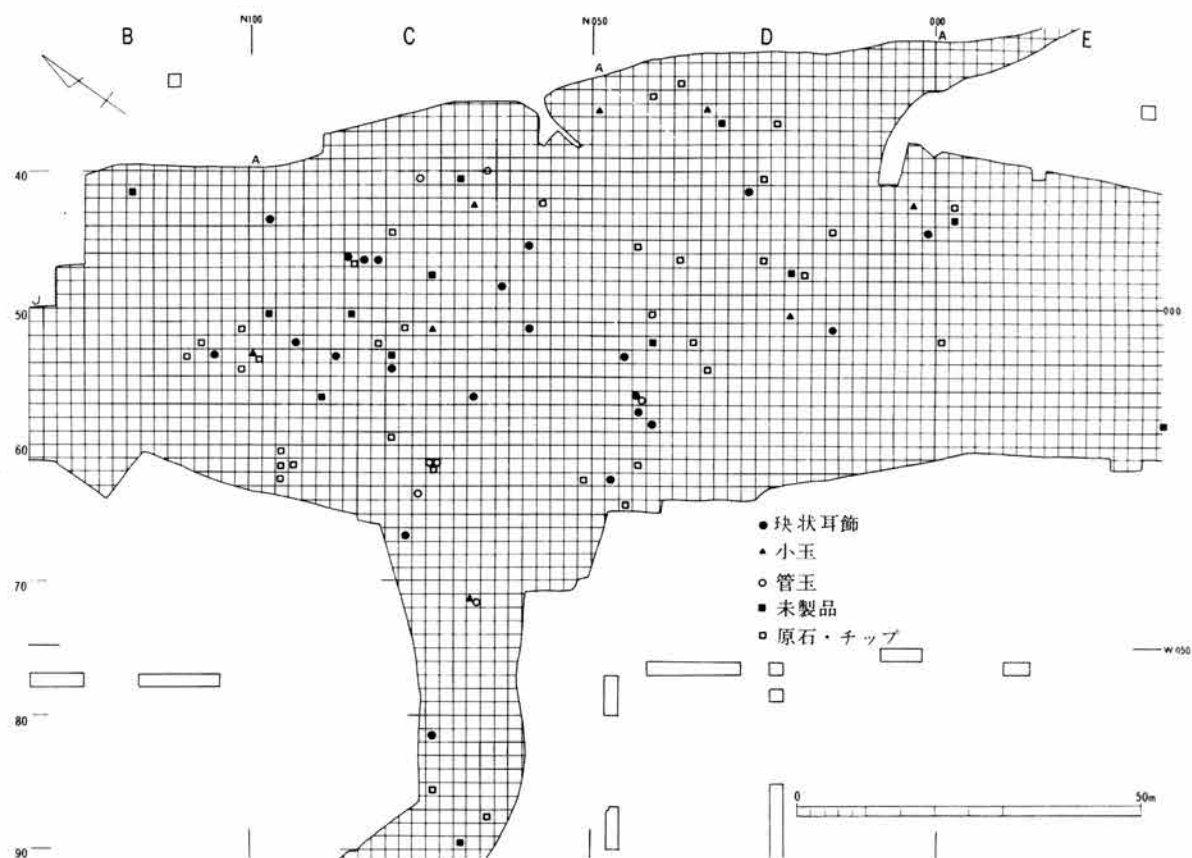
挿図 222 グリット出土使用痕のある剥片分布図



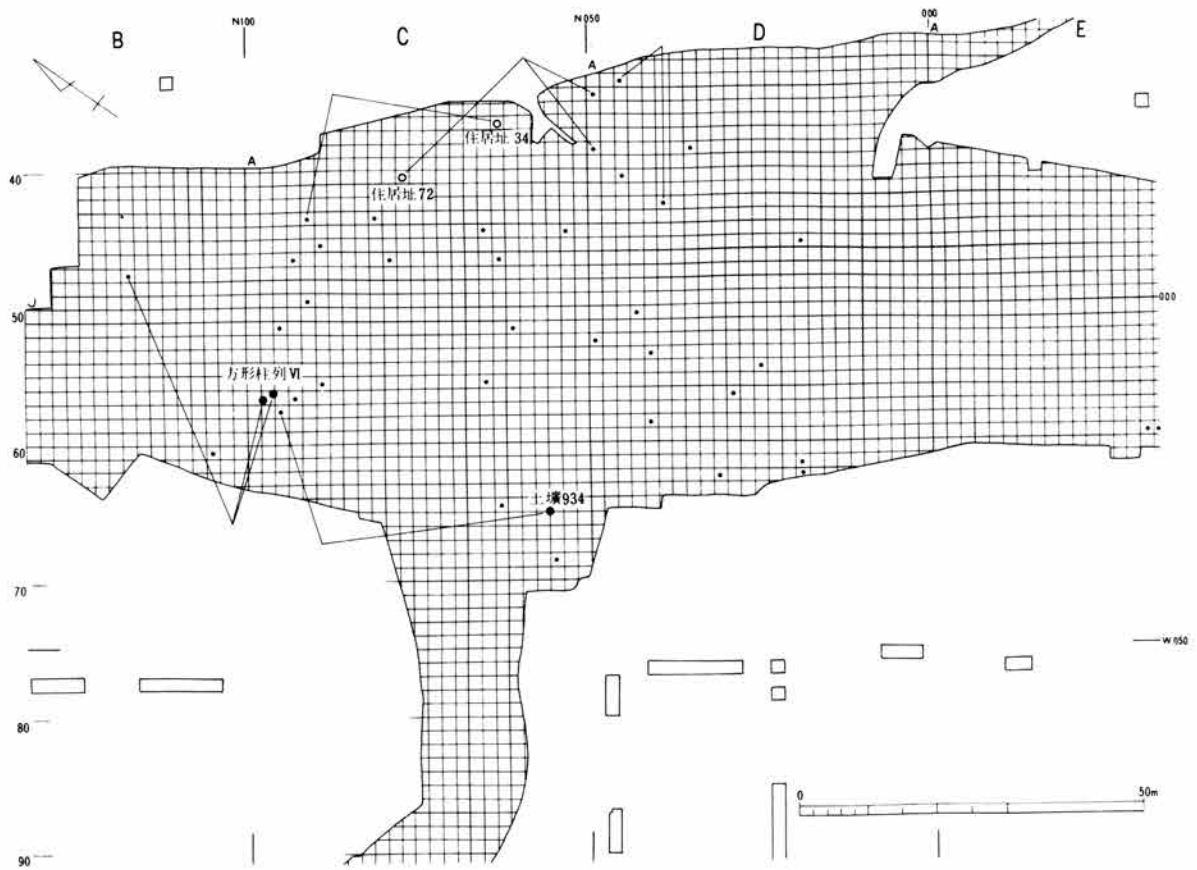
挿図 223 グリット出土の打製石斧・横刃型石器・磨製石斧分布及び接合関係図



挿図 224 グリット出土凹石の分布図



挿図 225 グリット出土石皿分布及び接合関係図



挿図 226 グリット出土滑石製品分布図

### 第3節 出土遺物の検討

#### 1 土器

##### 1) 阿久I期

胎土に繊維を含み、捺糸文・絡条体圧痕文をもつ一群の土器である。住居址38とその周辺より、30点ほどが出土した。小片が多く器形は不明であるが、内面のナデは比較的丁寧で、厚さは6～10mmであり、胎土には繊維のほか、長石と思われる白色粒が含まれている。文様は口唇部・口縁部・胴部にあり、口唇部および胴部には捺糸文を、口縁部には絡条体圧痕文を施す。後者は口縁部と頸部に数条、横方向に連続して絡条体を押捺し、その間におそらく2条の連弧文か鋸歯文を描いたと思われる。そのほか、住居址38出土の円形貼付文の上に絡条体圧痕文を施したものもある。捺糸文・絡条体圧痕文は、ともに1mm前後幅の細い原体が推定でき、確認できるものはほとんどRである。

絡条体圧痕文土器は、県内では北安曇郡有明山社〔樋口他1969〕、茅野市御座岩〔宮坂1966〕、同棚畑〔宮坂1970〕、同金山沢北〔小林他1981〕、小県郡男女倉C<sub>2</sub>地点〔笹沢他1975〕等の遺跡から出土している。有明山社遺跡では、隆帯の存在などから早期末から前期初頭を、男女倉C<sub>2</sub>地点遺跡では、共存する茅山下層式土器の存在から早期末と比定している。

これらの多くは、内外面に貝殻条痕を施している。つまり、口縁部文様帯として絡条体圧痕文があり、胴下半部は条痕文となるのが一般的である。ただし、金山沢北遺跡では貝殻条痕ではなく、絡条体条痕を用いたものがある。この点では、貝殻条痕といわれるものの見直しが必要であろう。I期の土器もまた金山沢北遺跡と同様に、同一の原体で絡条体圧痕文と捺糸文を施文している点で類似する。しかし、条痕とならず原体を回転させている点が異なっている。

以上のように、絡条体圧痕文は貝殻条痕、絡条体条痕、捺糸文を地文とするか、または胴下半部にそれぞれ併用するのが県内には存在することになる。この他、無文地と思われる例が岡谷市丸山遺跡〔大場他1956〕等でみられる。その編年的位置は、かつて男女倉遺跡等で指摘されているように、少なくとも長野県下では子母口式土器の段階でなくそれ以降であろう。このことは該種土器の多い東海地方東部で検討した瀬川氏の分析でも明らかにされている〔瀬川1976〕。一方、捺糸文の多用は前期初頭の花積下層式土器と深い関係が予想され、先の見解とあわせて本土器の帰属もほぼその時期に求められよう。だとするならば、男女倉C<sub>2</sub>地点でみられる茅山下層式併行の土器群等の存在も考慮して、口縁部文様帯として絡条体圧痕文をもつ土器の一群は、貝殻条痕をもつものから、絡条体条痕を施すものそして捺糸文へと変遷した可能性を予測できよう。しかし、「絡条体圧痕文」自体の認識にも問題があり、類例の少なさなども含めて課題が残る。今後類似資料の増加を待ちたい。

##### 2) 阿久II期(図51～62・105～125、図版104～114・132～142)

II期はI群Aが主体となる時期であるが、それ以外にI群B・C・D・E、II群、III群によって構成される。I群Aは所謂「中越式」と呼称されてきた土器である。中越式土器の発見は、尖底から平底への変化が、早期から前期への転換であり、放浪から定住への証であるとする一般的な考え方を覆した地方色豊か

な土器で、中越遺跡をはじめ、諏訪市十二ノ后〔樋口・宮沢他 1976〕・千鹿頭社〔宮沢他 1975〕・茅野市茅野和田〔宮坂 1970〕遺跡等で良好な資料が得られている。しかし、中越式土器の型式的内容のとらえ方が、研究者によって異っており、その編年的位置をはじめ、不明確な点の多いのが現状である。

以下まず、I群Aを中心に検討し、同時にII群土器(関東系)、III群土器(関西・東海系)とのかかわりの中で、II期の土器群全般についての若干の見解を述べたい。

### (1) 研究小史

中越遺跡は、1956年に上伊那考古学会や藤沢宗平氏らによって、はじめて発掘調査がおこなわれ、以来1977年までに断続的ではあるが8次にわたる調査を実施し、59棟の住居址と配石、集石、土壇等該期集落址を検出した〔藤沢 1969・1970、友野・赤羽 1978〕。その出土土器は藤沢宗平氏により、① 口縁部に有文帯をもち、胴部以下に文様を欠く尖底土器、② おせんべ土器といわれるもの<sup>(1)</sup>、③ 関西系の爪形文の系統をもつと思われる薄手土器、④ 縄文施文の土器の四種類に分類された〔藤沢 1957〕。その中で④は関山式と神ノ木式土器に細分できること、①と②は伴うらしく、③と④は伴出するらしいが、①は③・④とは明確に区別できることなどを指摘し、①は神ノ木式土器より古く前期初頭とした。また、江坂輝弥氏は1号住居址出土の無繊維尖底土器(本報告のI群A)を木島I式として早期末に位置付けた〔江坂 1959〕。しかし、その後の愛知県塩屋遺跡の発掘調査で、木島I式とII式の編年的位置が逆転することが証明され〔磯部他 1965〕、この江坂氏の考え方は今日では通用しない。林茂樹氏は、一部の研究者の間でのみ使われていた「中越式」という型式名を初めて公のものとし、それを3型式に細分した。すなわち、中越I式は無繊維尖底の薄手土器(本報告のI群A)、中越II式は無繊維尖底土器と平底の縄文をもつ土器で、前者には東海地方に中心があると思われる、口縁に沿って爪形文を連続させる一群なども含むとした。中越III式は今日、神ノ木式とよばれている土器をあてた〔林 1965〕。この林氏の3型式細分案は、中越遺跡1号住居址出土の、無繊維尖底土器に与えられた「中越式土器」なる型式名を、さらに広く求めたために、かえって混乱をまねくことになった。

1970年代後半に入って、関野哲夫氏によって発表された編年表では、中越I・IIに分類されているが、分類基準についてはなんら触れられていない。編年的には木島I式あるいは石塚下層式に併行するようである〔関野 1976〕。小林達雄氏も編年表の中で、木島式を花積下層式に併行させている〔小林 1979〕。その後、岡田篤子氏により、はじめて無繊維尖底土器がA~Dに類型化された〔岡田 1979〕。しかし、分類の根拠が記されていないのが惜まれる。発表された図から判断すれば、器形により2種に分類し、それぞれを細線格子文の有無に区分しているようである。

以上学史的にみれば、「中越式土器」は無文尖底土器に対して与えられた型式名であり、木島式土器に併行関係にあると解釈できよう。しかし、「中越式土器」の型式認識は研究者間で一致しておらず、また木島式自体もその型式内容と編年的位置がいまひとつ不明確な状態<sup>(2)</sup>というのが現状であろう。その要因のひとつは、中越遺跡の正式報告書が未刊な点に求められるが、近く刊行予定というので期待したい。

### (2) I群Aの諸特徴

器形 すでに明らかにしてきたように、基本形は深鉢尖底で、波状口縁と、平口縁の二者があり、口縁部はかるく外反または直口するものである。頸部と底部はかなり密接な関係をもつ。すなわち、a型の頸部の多くは1あるいは2型の底部をもち、同様にb型には2・3型、c型には3型が、d型には3・4型がそれぞれ多いことがわかる。しかし、こういった関連性は口径15cm以下の土器については該当しない。

文様 すべて口縁部から頸部にあり、口縁部から垂下する垂紐貼付文、口縁部周辺の細線格子文、頸部



に施される横位の隆帯、口唇部の刻目と列点文などがある。垂紐貼付文は刻目をもつものもたないものがあり、いずれも器面を丁寧にナデた後に貼り付けられている。後者は器面へのナデが入念なため、断面は三角形を呈している。前者の刻目はV字状(1683)、オサエ(1701)、かるい沈線(1860)の三者がある。断面形を見ると、三角形からかまぼこ状へと変化していくようである。細線格子文は平行沈線(1782)と一本の沈線(1704)があり、いずれもかなり密に施されるものから粗いものまでである。施文は原則として左下がりをまず描き、次に右下がりに順次施す。垂紐貼付文が付けられた後に細線格子文を施すものが多く、細線文だけを一周させる土器は少ないために、施文方向までは判断できない。横位の隆帯は頸部を一周するが、粘土紐の乾燥が進んでから貼付しており、オサエをもつもの(2564)もたないもの(274)とがある。本遺跡では非常に少ない資料で、類例は花積下層式、オセンベ土器などに見ることができる。口唇部の刻目は断面U字状(1839)と沈線(1678)がある。列点文は口縁直下あるいは頸部付近に施されて、先端がとがった工具(281)と、平坦な工具(279)によるものがある。共に刺突状と押しき状がある。また、4本が一単位になって無造作に施された列点文とは考えにくいものも1点(199)ある。

器形と文様 器形と文様の関係は、頸部がくびれ胴部が張り、底部が乳頭状となるa1と、底部が丸底ぎみに尖るa2の二者があり、刻目がないか、あるいは、かるく沈線をV字状に刻みこむ垂紐貼付文ある土器が多い。また細線格子文は平行沈線、一本の沈線の双方があり、共に密に施されている。横位の隆帯が付くのもこの型である。口唇部の刻目をみると、軽い沈線が多いようである。横位の隆帯をもち頸部上半を無造作な刺突で覆ったものも1点みられる。b・c型で2・3の底部をもつ場合は、刻目というより、オサエの施される垂紐貼付文が多く、細線格子文もあまり用いられず、細線格子文自体かなり間隔が広くなっている。口唇部の刻目は、a1あるいは、a2と大差はないようである。b・c型は無文か、あるいは垂紐貼付文だけが一般的である。D型の胴部を呈するものは、住居址63出土の1773を除くと垂紐貼付文はない。この1773の垂紐貼付文は、平口縁上部に突出し軽い沈線が施されており、断面形はカマボコ状を呈し、左右にナデがない。明確な細線格子文はないが、破片(278)などをみると一概にないともいえないようである。列点文は破片のみで明確ではないが、おそらくD型あるいはC型の頸部をもつと思われる。

整形・胎土 整形は原則として指オサエののちナデとなる。ナデは指または植物繊維を用いたらしい。<sup>(3)</sup>小形土器(口径15cm以下)には指ナデのみもあるが、ほとんどが両者を併用しており、指ナデの上に繊維状のナデを施すのが一般的で、このナデは軽い例から、かなり密なものまで種々あり、頸部上半は横方向に、底部までは縦方向に行なっている。内面は頸部付近までが横方向の繊維状のナデ、胴部から下はかるい指ナデのため指圧痕が著しい。

胎土は整形・焼成との関係、あるいは遺存の違いなどにより明確ではないが、器面に小さな凹凸があり砂質で茶褐色の色調の一群と、指圧による凹凸はあるものの、砂粒の含有量が少なく全体に滑らかな黄褐色の色調の一群とがある。混和材は雲母・石英・長石などがあり、雲母は量の多少はあるものの、ほぼ例外なく混入され、石英・長石の含有量は少ないが、中には長石を多量に含むものもある。

### (3) I群Aに共伴する他の土器

I群B 花積下層式に併行すると考えられてきた土器〔宮坂他1966〕である。図化できた土器が7個体あり、指圧痕を顕著に残すか、ナデを施し指圧痕をすり消すものがある。前者は住居址55・64・78などから、後者は住居址30・40から出土しており、前者に比べて薄手である。そのほか、住居址15出土の頸部に太い沈線を巡らすものもある。しかし、これらI群Bをもつ住居址からは、確実な花積下層式土器は出土していない。

I群C I群BとII群の間接的な土器で、器面調整などは粗く繊維が外面にかなり露出しているものが

主となるが、住居址 64・69(1791・1848)以外は小片である。器形は不明であるが、大きな尖底にさほど胴部の張らない土器と思われる。口縁部は小さな波状(1791)か平口縁(1848)で、縄文は無節縄文だけである。

I 群 D 神ノ木式土器に類似する一群であり、住居址 37・63 に集中してみられる。口縁部に連続刺突文(118)、平行線文(325)、あるいは爪形文(324・326)を施したものと縄文のみ(335)とがあるが、前者は少なく 10 片にも満たない。縄文はループ文が多用され、整然と横位に施され、結束などを用いた羽状縄文も目に付く。器形は明確ではないが、口縁部からほぼ直線的に平底の底部に至る単純な深鉢が多いようである。口縁は平口縁と波状口縁があり、口唇部に縄文・オサエ等が付けられるものもある。また、波頂部がわずかに凹む 341 などは器形面でも関山式土器との類似を感じさせる。器面調整が丁寧で、胎土に白色粒が含まれる点などは神ノ木式土器と共通するが、複合口縁がないほか、口縁部文様帯にも相違が認められ、またループ文が多用されている点等から、神ノ木式土器でも古い段階と考えたい。

I 群 E I 群 A と D の中間的特徴をもつ土器であり、住居址 63 より出土している。胎土・器形は I 群 A に、文様は I 群 D に類似する。

II 群 関東地方の関山式土器に該当する。住居址からは図化のできた 4 点のほか、80 片をこえる出土があり、住居址 63 出土の組紐がある関山 II 式(320)以外は、口縁部を半截竹管による平行沈線や貼付文で飾り、胴部にループ文、異条斜縄文による羽状縄文等を施した関山 I 式の特徴を示している〔庄野他 1974〕。住居址 30・44・53・54 からの出土が特に多い。

#### (4) II 期の編年的位置と細分案(I 群 A を中心として)

本遺跡における II 期の住居址の切りあいは、住居址 39 を切る住居址 40・55・71 だけであり、住居址 39 は遺物が少なく、これらによって新旧関係をつかむのは不可能に近い。したがって、I 群 A の器形・文様の型式変化を中心にし、これに伴出する土器群、あるいは編年的に前後関係にあると思われる土器群を検討し、阿久 II 期の土器細分の根拠とした。

I 群 A がオセンベ土器(細線文指痕薄手式土器)の影響下に生まれてきた土器であることはすでに一般的な考え方になっており、尖底、文様、胎土等でもそれを知ることができる。オセンベ土器の器形は、口縁部が平口縁と波状口縁の 2 種があり、くびれた頸部と大きく膨らむ胴部の I 群 A の胴部器形 a が大半を占め、両者の共通性が指摘できる。特に底部は、底部器形 1・2・3 のすべてがみられる。1 は早期末の乳頭状の底部に起源が求められ、その系譜的つながりが明らかである。

垂紐貼付文の祖源は、田村原〔酒井他 1974〕、清水柳〔関野他 1976〕等で観察された、土器内面からの指圧による押し出しか、天神山式土器〔紅村・増子 1975〕にみられる太い粘土紐貼り付けからの変化等に求められるであろう。また、細線格子文はオセンベ土器に見られる細線文の変化であることは明瞭である。また、頸部にある横位の隆帯も、東海・関東地方の早期末から前期初頭に類例を数多く求めることができる。このように I 群土器 A は、オセンベ式土器系の系譜につらなる土器であることは間違いないであろう。

なお、I 群 D と A が住居址 63 において明らかに共伴する点から、下限を考えてみると、I 群 D が神ノ木式類似の土器とすると、神ノ木式が関山式の後半に位置づくことがすでに指摘されているので、I 群 A の一部もほぼその同時期となろう。I 群 E はまさに、I 群 A と D の中から形成されたタイプと思われる。

以上をまとめると、本遺跡の I 群 A は花積下層式土器に後続し、関山式後半期の一部にまでくいこむ時期の土器群ということになろう。以下の細分は住居址内における相対的な傾向によるものであり、個々の土器について検討すると例外もある。I 群 A のうち、オセンベ土器の影響の強いものを II-a 期、I 群 D と共伴するもの、あるいはそれに近いものを II-c 期とし、その間をつなぐものを II-b 期とした。

II-a 期 I 群 A は平口縁と波状口縁があり、底部器形 1・2 を基本とし、頸部はくびれの著しい類型

a が一般的で、特に波状口縁をもつ土器に著しい。器厚は5mm前後と薄手である。垂紐貼付文は原則として、波状口縁の土器には付けられており、断面三角形が多く刻目をもたないものとV字状に刻みこむものがあり、頸部に横位の隆帯もみられる。また、細線格子文もかなり密に施されている。整形はナデに近い丁寧な指オサエの後に、軽く繊維束状の工具でナデたため、表面はなめらかで光沢をもったものもある。他の土器ではI群Bのうち指圧痕を顕著に残すものやI群Cが共伴する。

II-b期 I群Aは平口縁と波状口縁があり、底部器形は2・3で乳頭状の1はみられない。頸部は類型b・cが一般的で、器厚は7mm前後とやや厚くなる傾向を示す。垂紐貼付文は断面かまぼこ状が多く、刻目はむしろヘラなどで押さえたと思われるものが大半を占める。しかし、垂紐貼付文は少なく、波状口縁でもない場合が多い。細線格子文も同様で、一本線でかなり粗く引かれている。整形は繊維束状のナデが顕著になる。II群土器のうち、関山I式土器は、II-a期からの存在も考えられるが、II-b期には確実に共伴する。またI群Bのうち、ナデがあるものも同様である。

II-c期 I群Aは平口縁と波状口縁があるが、平口縁が多くなり、口唇部の刻目はU字状である。底部は類型3と丸底の4が出現し、頸部は類型c・dが一般的になるが、器形に変化が認められるようになる。器厚は1cmをこえるものもあるが多くの場合は8mm前後である。垂紐貼付文は少なくなるが、確実に存在しており、太い粘土紐を簡単に貼り付けるか、細い粘土紐を丁寧に貼り付けるかの両方があり、共に軽い沈線が施されている。細線格子文は原則的にはない。I群D・Eと関山II式土器が共伴する。

以上のようにI群Aは、器形では頸部がくびれ、底部は乳頭状あるいは尖底から、直線的に底部へ至り、丸底に近い尖底となるものと変化していくようである。また文様面では簡略化がみられ密から疎への変遷過程をたどることができる。

#### (5) I群Aの分布

I群Aの分布は、中信地方では塩尻市舅屋敷遺跡〔藤沢1973〕、東信地方では小県郡六反田遺跡<sup>6)</sup>で類似する土器片がそれぞれ数片出土しているようであるが明確ではなく、今のところ天竜川流域と諏訪地域に限定される。東・北信ではI群Aに替わる土器として、花積下層式と関山式とが存在している。中信では今のところ明確ではないが、今後の調査により検出される可能性が強い。また、八ヶ岳南麓においても本遺跡でこれだけの集落を形成していることから、同様のことが予測できる。

#### (6) 小括

上記のように、細分案を中心に編年的位置、若干の分布について検討を加えた。検討は器形の変化に主眼をおいて行ない、ほぼその大枠を押えることができた。しかし、住居址内における土器のあり方等も含めて、さらに細かな分析が必要である。また今回の分類は、本遺跡のみを中心としたが、最近の発掘調査により、県内各地の良好な資料が得られており、それらとの比較検討が必要なことはいうまでもない。

最後に簡単ではあるが、最も典型的な該期土器をもつ中越遺跡の資料と比較してみると、II-a期としたI群Aは、地域的に東海地方に近いこともあろうが、器形・施される細線格子文等が、より古い段階のオセンベ土器に類似する土器もみられ、II-a期より一段階古いI群Aのある可能性が強い。II期にIII群土器が少ないのも、地域性だけでなく編年的な問題があるのかもしれない。従って、I群A(中越式土器)の成立の問題は、中越遺跡の報告を待って検討する必要がある。住居址63では明らかにI群AとDが共伴しており、折中的な住居址63の土器Eも出土している。現在のところ、いわゆる神ノ木式とI群Aが明確に共伴する遺跡は知られておらず、本遺跡のI群Aは、中越系列の土器の最終段階に位置することはほぼ間違いない。しかし、I群Aと神ノ木式土器の間には、大きな相違があり、土器の上からだけではそ

の変化は追えない。

今後の資料の増加を待ち、多方面からの究明を今後の課題としたい。

(佐藤 信之)

- 註1 木島式土器の硬く薄い凹凸のある特徴的な作り方がせんべいに似ているため、木島式土器の俗称として一般化している。現在はカタカナを使う場合が多い。
- 2 本報告では木島式なる型式名を使わず、いわゆる細線文指痕薄手土器を一括してオセンベ土器と記した。
- 3 細かな線が集合した植物繊維を束ねたような工具によるもので、以下、繊維状のナデと記す。
- 4 増子康真氏は、I群A(中越式土器)をオセンベ土器の第三段階と考えているが、I群Aがオセンベ土器と密接な関係がある点においては変りない[増子1977]。
- 5 東海地方では、今だ器形の明確な資料の出土はなく、神奈川県菊名貝塚[桑山1980]によった。
- 6 児玉卓文氏より御教示を得た。六反田遺跡は1981年に調査され、花積下層式、関山式等の土器が主体をなしている。

### 3) 阿久III期(図63~83・126~137、図版114~122・142~152)

#### (1) 研究小史

III期は関東的な黒浜式比定土器(II群土器)を含む。従来長野県では有尾式土器として、型式認識されてきた一群である。ここではまず、研究史を簡単に振り返ってみたい。

黒浜式土器は関東地方の縄文時代前期中葉の土器型式として設定され、早期後半に始まる繊維土器の最終段階として位置づけられてから久しい。その型式内容は、繊維を含み羽状縄文をもち上げ底を呈するなど、前段階の土器とつながりを強くみせている。しかし、粗い斜縄文がかなり支配的となり、口辺部の文様も割竹による簡単なもの(平行沈線・波状文)にかぎられ、関山式に比較すると退化した印象を受ける。その分布は関東一円に及ぶが、若干の地域差がある[戸沢・岡本・1965]というのがほぼ一般的認識であろう。その後、資料の増加にともない多くの研究者によってその型式的検討がなされてきた。そうした中で、小林達雄氏による黒浜式土器の新旧2分案が今日一般化しつつある[小林他1965]。それは、旧段階は粗い縄文で器面が覆われほとんど文様帯をもたないが、新段階は極めて装飾的な土器群からなるという内容である。その後、いくつかの報告書中に細分案が提示されているが、最近、新井和之氏は黒浜式土器を5期に細分する思い切った試案を公表した[新井1980]。しかし、黒浜式の発生、諸磯a式土器との関係、地域性の問題等未解決の部分も多く、さらに今後の検討が必要であろう。

有尾式土器は、樋口昇一氏等により設定された[大場他1956]型式で、「黒浜式、即ち、有尾式土器」ととらえ、「有尾式の中で連続刺突文、爪形文、および平行沈線文を施文した無繊維土器と関東的な繊維土器が共存している」と説明された。しかし、ここでは有尾式土器と黒浜式土器との関係は十分に追求されることなく終わっている。その後、有尾式土器はいくつかの報告書中にみられるものの型式的な面に言及している例としては、埴科郡巾田遺跡[森島・笹沢1966]だけで、本格的な型式論は県内外ともになかったといえる。むしろ東海地方の資料を用いた積極的な論考がみられるのは興味深い[大江1981]。こうした状況の中で最近戸田哲也・大矢昌彦両氏が「神之木式・有尾式土器の関係」をとり上げた論文[戸田・大矢1979]を発表した。ここでは、有尾式土器の定義が、器形、文様、色調、胎土の面から細かく行なわれ、結論的には『信濃史料』でいう無繊維土器を有尾式ととらえ、それをまとめたものと受けとれる。即ち、有尾式と黒浜式との明確な線引きがなされたわけである。しかし、この論文は前編ということであり、黒浜式との関係についてはあまり触れておらず後編に期待するところが大きい。

以上、黒浜・有尾式土器の研究史の概略を述べ、いくつかの問題点を指摘したが、その中で、有尾式と黒浜式との線引きが特に問題になろう。一部研究者の間に、有尾式に特徴的にみられる菱形文に固執しすぎる傾向が強い。しかし、神ノ木式からの系統である櫛描列点状刺突文の存在を無視した上で、菱形文を

語っても無意味になろう。同様に胎土中の繊維の問題がある。これまで、たとえ櫛描列点状刺突文の菱形文構成の土器があっても、繊維を含んでいれば有尾式ではないとの考え方があったが、このような土器は以外と多く、また、よせの台遺跡〔宮坂他 1978〕のように同一遺跡内でも、含繊維と含まないものの両者がみられるなど、もはや胎土中の繊維の有無のみでは有尾式認定の決め手とはならないといえよう。

今後は、以上の点に加え、文様帯をもたない縄文だけの土器の究明、編年的に隣り合う型式との関連等の検討が必要であろう。現在、標式遺跡である有尾遺跡出土土器の再検討が進められていると聞く。その結果が期待される。

## (2) I・II群土器の特徴

III期I群土器は、その器形と内面調整および胎土中の雲母等によって特徴づけられる一群であるが、他に量的には少ないが、II群から影響を一部受けたと思われる折中的な無繊維土器が若干加わる。後者は原則的には分離して考えるべきかも知れないが、前者との識別に不明確さを残し、また細分による煩雑さを避けるということからI群に含めた。

I群土器は深鉢EとGが大半を占め、少量の深鉢AとEがある。ただし、1957の様に深鉢FかBかその区別の難しいものもある。EとGではEがやや多い。法量は口径、高さとも30cmをこえる土器が大半であるが、10cm前後の小形品もある。文様構成面からみると、文様帯をもつものは皆無に等しく、縄文で飾られる単位文様aのみである。無節と単節の斜縄文、羽状縄文が大半で、これらがひとつの個体で重複する場合も多い。しかし、深鉢Eは無節の縄文が無造作に重ねて施文され、Gは単節の斜縄文がかなり整然と施文された例がともに多い。胎土は雲母と白色の硬い砂粒を含み、概してきめは粗い。色調は暗褐色が一般的で、明暗の多少の変化がある。内面には成形時の指圧痕が顕著でオサエがそのまま残ったり、オサエの後ナデたり、また軽くケズられたものなどがある。口唇部は断面が三角形状につまみ出されている。

II群から影響を受けたと思われる折中的な土器は、1921・1992・2575が代表例であろう。両者ともに器形のみII群の影響を受けた無繊維の土器であり、先述のI群の土器群と胎土、色調、内面調整等に相違が認められる。即ち、内面調整は比較的丁寧で、顕著な指圧痕は少なく、胎土中の雲母も微量で白色砂粒を多く含む。色調は黄褐色、赤褐色、茶灰色等個体による変化が大きい。深鉢AとCが多く、単節の斜縄文、羽状縄文が帯状に整然と施文されている。

II群土器は胎土中に繊維を含むが、繊維は多量に含むものから微量のものまで変化に富み、前者の内面は丁寧にミガかれる例が多く、繊維少量のものにはミガキはあまりみられないなど、繊維の量と器内面の整形とはある程度の相関関係が認められる。このII群土器には、器形をうかがえる資料が少ないが、深鉢IとJにほとんど含まれ、深鉢A・C・Hが若干あるのみである。単位文様aの大半は深鉢I・J等の胴部片と思われる。単節羽状縄文が圧倒的に多く、他に単節・無節の斜縄文、捺糸文等がある。羽状縄文は結束によるものはほとんど無く、原体を変えることによって施文している。捺糸文には単に斜行するか、網目状の二者がある。施文具には半截竹管が多用され、単位文様を描く最小の基本的文様としては平行沈線文、爪形文、コンパス文の多いのが目につく。

## (3) I群土器の出自

すでに研究史で述べたように、I群が有尾式土器としての認識の中にないために、他型式として記述された例が多い。I群土器の明解な型式的位置づけは、千鹿頭土遺跡〔宮沢他 1975〕が最初である。ここでは主に、伴出土器から「神ノ木式終末か直後に連続する時期」ととらえている。その後、十二ノ后遺跡〔樋口・宮沢他 1976〕でも注目され、はっきりした編年の位置づけはなされていないが、「中越式・神ノ木式・有尾式」

という地域的特色をもつ土器群の構成要素としている。

本遺跡では先述したように、I群土器は明らかにII群土器と共伴し、千鹿頭社・十二ノ后両遺跡で注目された土器群と系譜を同じくすることが明確となった。すなわち、関東的繊維土器の影響を受けながらも、中越式の系統をひく一群の中に生まれたII期I群D・Eに祖源が求められ、直接には千鹿頭社遺跡3号住居址出土品に求められる。

#### (4) I・II群土器の編年的位置

長野県の縄文時代前期前半から中葉の土器は、神ノ木式→有尾式という編年が組み立てられ、神ノ木式は関山式の後半に、有尾式は黒浜式にほぼ併行するといわれている〔戸田・大矢1979〕。この考え方は型式論からも妥当であろう。しかし、先述したように、III期I・II群土器には有尾式土器は全くみられず、むしろ黒浜式比定のII群土器がかなりの量を占める。III期I・II群土器が明らかに黒浜式土器に併行関係が求められる以上、ここでは有尾式土器との関係をはっきりととらえておく必要がある。

県内における有尾式土器の分布は、現在のところ南信地方を除くほぼ全県的にみられ、しかも、諏訪地方では、十二ノ后・千鹿頭社・神ノ木・よせの台・大石〔伴他1976〕・机原〔武藤1980〕<sup>(6)</sup>の各遺跡などかなり広い分布をみせる。この事実、本遺跡にみられる有尾式土器の欠如が、地域性のみでは解決しえない問題を含むことを示唆している。また、有尾式土器は明らかに神ノ木式土器からの系譜を追え、例えば、神ノ木式か有尾式か判別し難い土器がかなり存在するなど、両者の関係が非常に密接であることがうかがえる。これは、反面では有尾式が黒浜式の古い段階に位置づけられるとする根拠のひとつでもある。<sup>(7)</sup>

本遺跡では神ノ木式土器がほとんど存在しないといってよい状態であり、先の有尾式土器の分布の問題と考え合わせると、本遺跡における有尾式土器の欠如は、時間差によるものと理解するのが妥当であろう。なお、III期II群土器は黒浜式土器に比定され、その内容は単位文様bが主体となり、新井氏のいう第III段階にほぼあてはまるものである。

以上のごとく、阿久III期I・II群土器は、有尾式の次の段階に位置づけられ、黒浜式の中葉以降に併行する、つまり、有尾式土器より時間的に新しいということになる。

#### (5) III期細分案

阿久III期は合計19棟の住居址が検出されたが、そのうち住居址12と59、42と43、66と81の3例に切りあいがあり、住居址の占地からもこれらが同時存在したとは到底考えられないので、少なくとも新旧の2時期に細分の可能性がある。

ここでまず、細分検討の方法としてIII期I群土器の器形・内面調整等を軸に、その変化をIV期I群に追ってみたい。もっとも典型的なIII期I群土器は、住居址33の1900・1908等であり、一方、IV期の典型的な単位文様aの土器は住居址45の1997がある。両者の違いは器形、内面調整、縄文原体等にみられる。IV期には底部の小さなIII期I群土器特有な器形はなく、口縁部の外反する朝顔型の器形をとり、また指頭圧痕はみられず、内面は丁寧なナデによりきれいに調整される。さらに、不規則な乱れた縄文がなくなり、概して細い原体の整然とした単節の斜縄文が一般的となる。これらはI群土器におけるIII期からIV期への変化ととらえられる現象であろう。そこで、この流れの中で過渡的な段階と考えられる一群を求めると1877・1940・1957・1993・2017等があげられる。しかし、その出土した住居址を、即III期の新しい段階と結論づけるには無理がある。縄文時代前期においては、住居址内で型式差のある土器が混在する例が多く、本遺跡においても例外ではなく、わずかな土器片をもってその住居址の性格づけをするには危険が伴う。そこで、出土状態を考慮の上、各住居址出土土器を典型的なIII期I群土器と、IV期への過渡的な土器とに

区分し、その比率を中心にして傾向をみてみると、前者が主体となる住居址と、後者が多くみられる住居址との区別がある程度可能であり、前者に住居址 27・33、後者に住居址 66・76 等があげられる。そこで、伴出するⅡ群土器をみると、前者は横位の沈線文が主となり、コンパス文・爪形文はみられず、後者は、反対にコンパス文・爪形文が中心となる。また、前者には網目状撚糸文(1898)と内傾する形態の口唇部がみられるが後者にはなく、さらに、Ⅰ群とⅡ群との折中的な土器は後者からのみ出土するという結果が認められる。つまり、Ⅱ群土器自体にも、相違がみられるのであって、前者をⅢ期古、後者を新とする考えをより説得力あるものとする結果となった。

以上、典型的なⅠ群土器をもつ各住居址におけるその量的な在り方と、伴出するⅡ群土器の型式的内容差を検討すると、Ⅲ期の新古2分案がかなり妥当性をもつことになる。典型的Ⅰ群土器が主体となる住居址を古段階と考え、それが少なくなり、代りにⅣ期への過渡的な土器、またⅠ群とⅡ群との折中的な土器が出土する住居址を新段階とすると、古は4・27・33・42・43・50・59・77、新は12・41・49・51・61・66・70・74・76 となろう。この点は後述されるⅢ群土器の分析で、十分ではないものの補足されるが、しかし、未だ検討を要するので、本報告書ではあえてⅢ期の2期分割はおこなわず、その試案を述べるにとどめた。

#### (6) Ⅰ・Ⅱ群土器の組成

Ⅰ群土器がまとまりある一群としてとらえられることは先にも述べた。しかし、Ⅰ群土器には文様帯をもつ土器がほとんどみあたらない点に問題がある。このⅠ群と同一系統である神ノ木式や有尾式には、文様帯をもつ土器と胎土・器面調整等の特徴を一にする縄文だけの土器が併存するようである。<sup>(8)</sup> だとするならば、Ⅲ期Ⅰ群土器の中にも、胎土・器面調整等に共通した特徴のみられる文様帯をもつ土器群が存在してもよいであろう。だが、それらしい土器は破片として若干認められる(762・763・2314)程度で、全体としてみれば無いにも等しい。

そこで別の視点に立ち、Ⅰ・Ⅱ群土器の共存の仕方に注目してみたい。Ⅰ群土器のⅣ期へ向けての変化はあるものの、Ⅱ群土器とのあり方はⅢ期全般を通じて変化していない。その点はⅢ期の古段階の住居址 33 と、新段階の住居址 76 の土器組成をみれば理解できる。つまり、数量的に主体となるⅠ群土器は縄文のみの土器だけであり、従であるⅡ群土器のほとんどは文様帯をもつ土器である。この現象は一住居における土器のセットとしてとらえられるであろう。これは、粗製・精製土器というとらえ方にも関係する問題であり、その意味では、かつて米島貝塚の報文[小林他 1965]で、黒浜式の古い段階とされた、太く粗い縄文原体が全面に施文される作りの雑な土器が、Ⅱ群の中にみられないということとまんざら無関係ではないと思われる。

いずれにしても阿久Ⅲ期とは、明らかに系譜を異にする土器群が、補完関係の様相を示しつつ共存するという非常に特殊な状況下にあるということになり、単に土器論に留まらず、型式・様式論、さらには文化論にも発展する問題であり、多方面からのより詳細なる検討が加えられなければならないことはいうまでもない。その十分な検討ののち、はじめてⅠ群土器の型式設定がなされるべきであろう。

註1 主なものは[寺門 1975]、[新井 1977]、[並木 1978]、[梅沢 1978]等である。

2 巾田遺跡の報告の中で、巾田式土器の型式設定案が示され、有尾式土器は巾田式土器より新しくしかも黒浜期と諸磯 a 期との過渡的な時期の所産である水子式土器に近いとしている。これは明らかに誤りである。つまり、有尾式土器が無繊維土器であるということの理解の仕方に問題がある。有尾式土器は、関東的土器の影響を受けているものの直接系譜がたどれるものではない。黒浜式土器から諸磯 a 式土器へ、すなわち繊維土器から無繊維土器へという流れの中へ有尾式土器を位置づけることは大きな誤りである。巾田遺跡出土土器を、黒浜式の古い段階に位置づけたことは結

果的には正しかったと筆者は考えるが、方法論がまちがっていたのでは意味がない。なお巾田式なる土器型式の設定〔児玉 1980〕には問題が残る。"型式"の概念には混乱がみられ、ともすれば一遺跡一型式になりかねない。新しい型式設定には、より慎重な態度が望まれる。

- 3 『信濃史料』でいう"神ノ木式と異なる連続刺突文"〔樋口 1956〕、戸田・大矢両氏のいう"櫛状施文具による連点状刺突文"〔戸田・大矢 1979〕と同じものをさす。
- 4 報告書中の第 23 図-1 は僅かに繊維を含むが、2~6・7・10 等は繊維を含まない。また、図示されていないものの中にも、単位文様、及び色調、胎土等がそっくりでありながら一方は繊維を含み、片方は繊維を含まないという資料があるのを発見した。
- 5 古くは、戸沢充則氏が「岡谷南部遺跡群研究」〔戸沢 1950〕の中で注目し、諸磯式に伴うものと考えられるとしている。おそらく同種の土器であろう。その後も、器形わかる資料がみられず、無繊維土器ということから諸磯 a 式段階として扱われてきたようである。なお、他県では、埼玉県富士見市御庵遺跡第 1 地点〔荒井他 1979〕の 5 号住居址〔関山式期〕出土土器の中に同類と思われる資料がみられる。
- 6 長野県内での有尾式土器の主な分布は、北信地方では、飯山市有尾遺跡、戸倉町巾田遺跡、中信地方では、北安曇郡松川村有明神社遺跡、山形村唐沢遺跡、塩尻市舅屋敷遺跡等である。
- 7 大石遺跡〔伴・土屋他 1981〕の第 4 図の 4、第 128 図の 14~17、等が好例である。
- 8 茅野市神ノ木遺跡、塩尻市舅屋敷遺跡、諏訪市千鹿頭社遺跡の資料を発見し確認した。縄文だけの土器は器形をうかがえる資料が少ないが、その点は大きめの口縁部片を探ることによってある程度補えると思う。つまり、両型式とも文様帯をもつ土器は口縁部文様帯と胴部縄文との区別が明瞭であり、口縁直下に縄文のみが施される土器のほとんどは、全面に縄文が施文される土器として差いつかえないと考える。
- 9 もちろん、住居址出土土器が、その住居と直接関係するというような短絡的な考え方によるのではなく、あくまでも、全体の傾向としてみた上でのことである。

#### 4) 阿久IV期(挿図227・228、図84~97・138~141、図版122~124・153~161)

##### (1) 研究小史

阿久IV期は南大原式土器、諸磯 a 式土器と基本的には併行関係にあると考えるが、細部では様相がかなり異なる。ここではまず該期土器についての研究成果をふり返り、その理解を深めたい。

「諸磯式土器」なる名称はすでに 60 年前に榊原政職氏によって与えられた〔榊原 1921〕らしいが、その後山内清男氏による縄文時代前期後半への編年の位置づけ〔山内 1928〕と、諸磯式土器の細分〔山内 1936・1939〕によって、今日の諸磯式土器把握の基礎が確立したといえる。これに対して、江坂輝弥氏は諸磯式土器の 4 区分案〔江坂 1951〕を示し、a 式を水子・矢上の 2 型式に分離させたが、型式設定における方法論上の問題点から型式として広く理解されるまでには至っていない。

一方、長野県内の編年研究は、藤森栄一氏が戦前からの研究〔藤森 1935 等〕に立脚した丸山式土器の提唱〔藤森 1950〕から始まった。昭和 31 年に刊行された『信濃史料』第 1 巻はそれまでの諸資料を体系化し、県単位での縄文前期編年観を確立した。その中で昭和 25 年に調査された南大原遺跡出土の土器群〔神田 1951〕は「殆んど関東地方の諸磯 A 式土器と同じ」型式内容をもつ「南大原式土器」として編年の位置づけ〔大場他 1956〕がなされた。その後麻生優氏の型式的検討〔麻生 1958〕と、上原遺跡〔大場他 1957〕などでの類似資料の検討を通じ、県下該期の土器型式として広く理解されたが、県外での研究も次第に進展した。岡野隆男氏は木の葉文・格子文等は肋骨文から派生したもので、これらを a 式土器の新しい部類とする案〔岡野 1973〕である。その後鈴木徳雄氏も諸磯式土器の編年の位置づけを、沈線の施文順序によって明らかにする中でほぼ同様の見解を示した〔鈴木 1979〕。また、東関東地方では浮島式土器の編年に関連して a 式土器の新・旧が論じられ〔川崎 1967、和田 1973、寺門 1975〕、東北地方南部では、大木式土器との関係で 2 分割案〔保角他 1975〕が発表されるなど細分説がいくつか提示されてきた。これらによっても、諸磯 a 式土器の新旧分割説



は説得力をもつが、器形、文様構成等の一層の体系的な把握を試みるとともに、今後は地域性を加味した編年作業がより必要となろう。

一方、県内においては諸磯b式土器に羽状縄文が残存するなどそこに地域性を認める指摘〔樋口1957〕が早くなされていたのにもかかわらず、その後の研究は進展せず、わずかに有明山社遺跡〔大久保他1969〕や千鹿頭社遺跡〔宮沢・根津他1975〕等で部分的にa式土器の新古に関する検討がなされたにすぎなかった。最近になって金井正三氏が特殊浅鉢形土器の変遷を論じ、諸磯a式期の前半・後半2分割案を提示し〔金井1979〕、ようやく新しい動きが台頭した。しかし、浅鉢についての個々の区分は示されたものの、深鉢等を含めた具体的変遷過程には全く触れておらず、県内におけるa式土器の変遷および細分は不鮮明なままの現状にある。

## (2) IV期の土器の特徴

### ①器形と文様構成

深鉢A・B・C 全面に単位文様aを施す土器が主体となる。この土器の全体に占める比率を住居址出土土器片の割合でみると、住居址9で82%、住居址52では63%など各住居址による相違があり、また、文様帯をもつ土器群の胴下半部の破片も含まれることを考慮しても相当高い比率を示し、土器組成上重要な位置を占めていたといえる。深鉢Aは器形、器面調整などにIII期I群の要素を受け継いだ土器(1071・1992)である。口唇部に刻目などの加飾を施さない単節斜縄文の土器が比較的多い。深鉢B・Cはこの時期の文様帯をもつ深鉢D・Eと器形、内面調整、胎土等は基本的には変わらない。口唇部に竹管による押し引きや篋・棒による刻目を施す一群(694・695・1267～1281)と、口縁部の外反が比較的緩やかで、口唇部に加飾を加えない一群(1978・1979)とに大別される。細い原体が用いられることが多く、軽く押捺されて条間に隙間をもつ土器(1053・1997)も目立つ。単節斜縄文が多数を占めるが、単節羽状縄文(1048・1993)なども一定の割合で存在する。単位文様a以外が用いられる例も少数ながらある。いずれも器形全体を窺うことができないが、単位文様eを全面に施した土器(1925・1978・2020)であろう。

深鉢D・E 文様帯が2分され、下半には単位文様aが施される土器である。上半には単位文様b～iとIV期の単位文様のほとんどがみられるが、多用されるのはb・e・f・iである。単位文様bは横位の平行沈線(1554・2218)などと、その後斜行沈線や波状あるいは鋸歯状に沈線を施すもの(1326～1329・1553・2216)に代表される。施文具は竹管と櫛が多用される。有節平行沈線の間隔をあけて施したキャタピラ文に似たもの(1563・2262)や、こぎざみなコンパス文(1341・1342・1554)などが特徴としてあげられる。単位文様cは多分にb・d・e・fとの折中的な要素をもつ。bを施文の後に施したり(1218)、fの後に施すもの(1384・2354)もある。いずれにしても阿久III期に比較的多用されるのに対し、IV期では円形竹管文を施すもの以外はあまり用いられない。単位文様dもc同様出土例が少なく、また破片のみで全体をとらえにくい。円形竹管文を施すもの(1216・2352)と垂下隆帯を施すもの(2347)が知られる。単位文様eはaに次いで多く、また変化に富むいわゆる肋骨文で竹管と櫛で描く。縦区画は平行沈線(1299・1533・1534・1983)、円形竹管文(1303・1321・1536)、平行沈線プラス円形竹管文(1959・2000・2287)の3種が基本である。縦区画を結ぶ沈線は直線(1026・1306・1983)、曲線(1185・2000)に2分されるが、同一方向の斜行平行沈線(1181・1182)も少量ある。施文方法としては、平行沈線を施す他に、押し引き、刺突、こぎざみなコンパス文などと非常に多彩な内容をもつ。口唇部とその直下に横位の凸帯をもち、その上に竹管による押し引きを加えた土器群(768・769・1301・1304・1463・1983)が多い。胎土に金雲母を多く含み、焼きのよい明褐色の色調をもつ土器で、単位文様e以外はほとんど用いられず、単位文様a(798)、b(2281)に少数みられるだけである。この土器には縦区画に円形竹管(768・1031～1033・1573等)を用い、それをこぎざみなコンパス文(769・1353・1463)などで結ぶ

など、他の単位文様 e とはやや異なる内容が多い。単位文様 f は無文帯が 1 帯(984・1945・1996)と 2 帯(1227・1660・2001)があり、無文帯の幅も狭いもの(984・1550・1945)から広いもの(1471・1547・2001)までである。区画は竹管による平行沈線、または有節平行沈線が原則で、無文部にさらに平行沈線を一巡させたり(984・1206 等)、縄文の上に円形竹管をくまなく押捺する(1213・1660・2363)などの例もある。単位文様 g は個体数が少なく、平行沈線を斜交させるだけ(880・1531)に類例が限られ、量は少ない。単位文様 h は e との区別が難しいが、縦区画を結ぶ沈線が途中で交叉するもの(1056・1543・1959)を本類とした。円形竹管文または指頭を交叉部に押捺するのみで、明瞭な縦区画をもたない土器(1302・2280)もこの中に含めた。口唇部への加飾や施文方法などに e と類似する内容が多い。単位文様 i は平行沈線(1188・2003)や有節平行沈線(1193・2004)の弧線による複雑な区画を描き、区画外の縄文を磨り消す施文方法を原則とする。区画は三角形、菱形、「コ」の字形などを組み合わせた例が多数を占めるが、三角形を主とするもの(2252・2374)も少数ながら存在する。

深鉢 F 個体数が少ない(1535・1543・2373)。内面の調整が非常に丁寧なことや、細い竹管による有節平行沈線を口唇近くに 2～3 条巡らすこと、櫛の多用など他の深鉢とはやや異なる。

深鉢 G F 同様個体数は少ない。単位文様 e をもつ土器(1999)が知られるだけで、縦区画に平行沈線を用いている点は、深鉢 D の中でも胴部上半がほぼ直立する器形の土器と共通する文様(1534・1983)である。器面の観察などにより煮沸具に使用された可能性が強いと判断し深鉢の類に組み入れた。

浅鉢 A 単位文様 a(2240・2583)と i(1376・2009・2010)をもつ土器に 2 分される。垂直に立ちあがる口縁部(2009・2010)、やや外に開く口縁部(1376・2583)、波状口縁の可能性の強いもの(1228・2225)など器形は変化に富む。胎土や内面整形は深鉢と共通する面が多い。

浅鉢 B・C 下半部に単位文様 a を施文する土器である。上半の単位文様は f(1229・1964)と i(1965・2001)がある。施文の方法等は深鉢とほとんど同様である。内面整形の入念なものが多く、赤色塗彩された土器(1470 等)も比較的多い。口縁部の形状がかなり装飾的な有孔浅鉢(2580)や、V 期の深鉢の単位文様に類似したもの(2581)、口縁をやや内湾させ、多截した竹管による押し引きを 3 条施した土器(2583)は V 期との関係が明確にならない部分もあるが一応ここに含めた。

これまでに述べた器形、単位文様ではとらえきれない土器もいくつか存在する。小さな突起を口縁部にもち、口縁に直交させて沈線文を描いた土器(2002・2372)は北信濃から新潟県に類例をみることができる。<sup>(7)</sup> また、III 群土器との折中的な浅鉢(1479)も同様である。

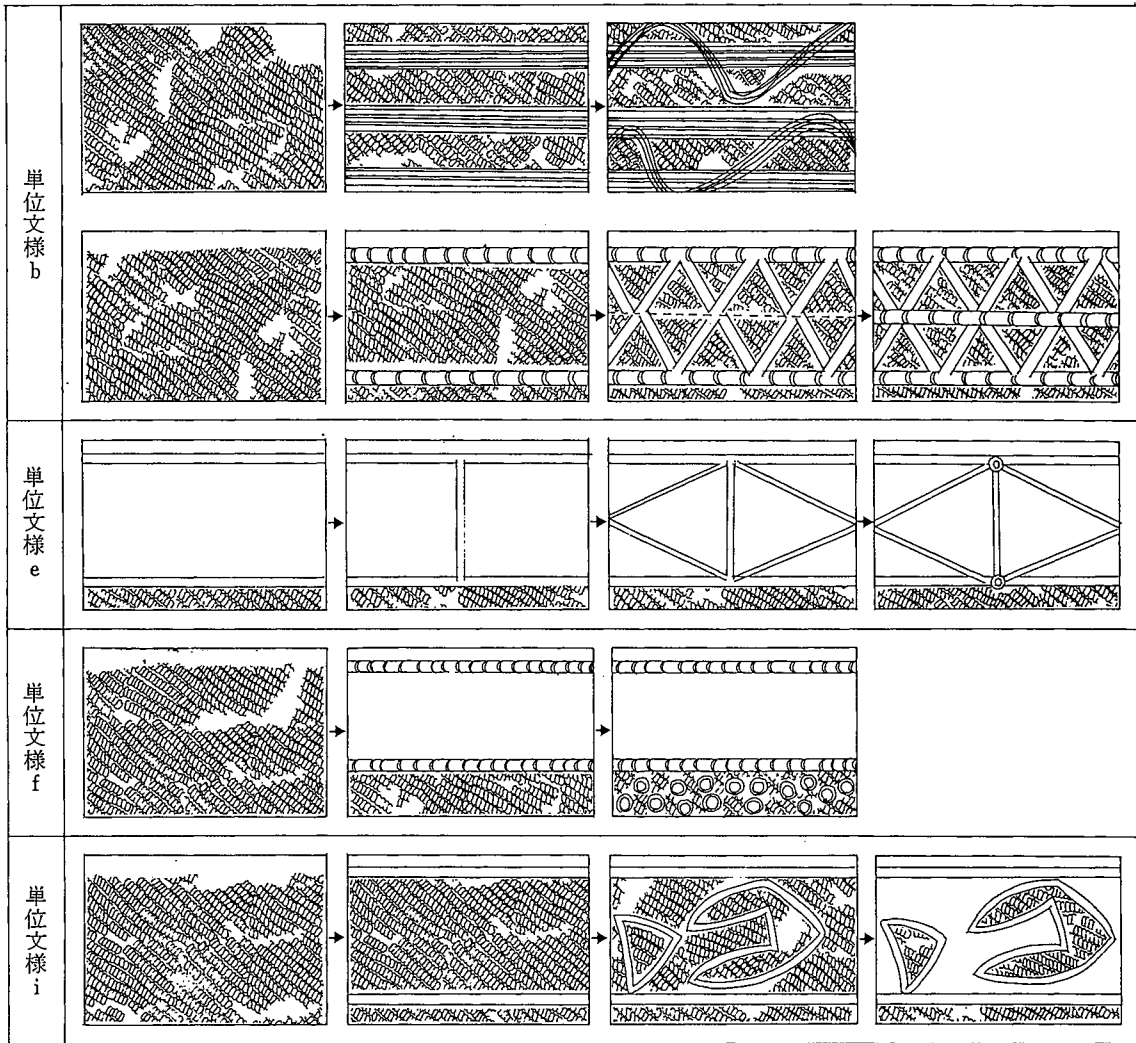
## ②施文順序

完形品が少ない上に、共通する単位文様内での類例が少ないという制約はあるが、文様の構造的理解のため、施文順序の観察を、単位文様 b・e・f・i を中心に少数例だけが行なった。(挿図 227)。

施文順序は少数の例外(2002 等)を除いて、① 縄文を施す、② 文様帯の上・下端を区切る横方向の沈線を施す(口縁部文様帯をつくる)、③ 文様帯の再区画をする(単位文様 e では縦区画が先)、④ 文様帯内の細部施文をする、の順で行なわれる。ただし、単位文様 f の大部分および b の一部は③の段階がなくなる。また、e の縦方向の円形竹管文等の施文、b・f の横方向の有節平行沈線などは④以後の段階にされる。e では先に沈線が施されており、b においても目安となる沈線等が引かれていた可能性を考えると、このような施文順序はナゾリの効果によって区画線をより強調させるねらいをもっていただけと理解できる。<sup>(8)</sup> いずれにしても、施文順序からは文様帯を上下に区画することをまず優先し、その上で再区画、および細部の施文を行なうという共通性がある。ただし単位文様 d については全くこの原則から除外される。

## ③成形

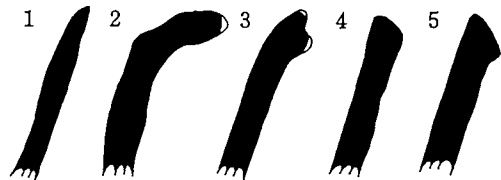
土器の成形については擬口縁部分などによって粘土の接合の方法や積み上げの単位などが、断片的に観



挿図 227 施文順序模式図(IV期)

察される程度である。特記すべき具体例は後述するがここでは口唇部の成形を中心に触れた(挿図 228)。

①口唇部の断面形がつまみだしによって三角形となるもの、②これに刻目や押し引きを加えたり、③口唇部直下に凸帯を一巡させて口唇と凸帯の両者に押し引きを加えたもの、④口唇部に横方向のナデを施したため角ばった断面形をしているもの、⑤口唇部に外側に向けてのナデを施して肥厚させ、肥厚部分が三角形になるよう再度調整しているものなどがある。



挿図 228 口縁部形態図

器形や文様との相関を特に指摘することはできないが、①はⅢ期に多用されており、⑤はⅤ期に類例が多く求められるように、ある程度の時間差が考えられる。

器面の調整は、オサエ、ケズリ、ナデなどで行なう。それらは横方向が一般であるが、胴部下半などでは斜方向と縦方向も一部にある。オサエは深鉢Aの内面調整に多く用いられ、Ⅲ期と深い結びつきのある技法と思われる。ケズリは深鉢の胴部内面などに観察されるのみである。その後の調整によって消されたこともあろうが、多くは器面の凹凸をなくすために部分的に用いられたらしい。ナデは深鉢を中心に内外面に多用される技法である。砂粒等の移動痕や工具の単位の観察できるものと、入念な調整の結果として砂粒が壁内に沈み光沢をみせてミガキに近いものがある。特に単位文様iや一部の深鉢などはほとんどミガキと同様の感じをもたせる土器も多い。

#### ④胎土

胎土については、器面および断面を肉眼とルーペによって観察したのみである。石英、長石、雲母等が含まれるが、器種によってその含有量が相違する。深鉢 De などは特に雲母を多量に含む例もあることは先述した。また、土器の中には花崗岩の細粒を含むものもみられ、これらは、本遺跡西方の茅野市金沢地区にパイラン層がみられるので、混和材として運搬してきた可能性がある。

#### (3) 編年的位置および細分

深鉢 Aa を中心にして、器形・整形・施文技法などにⅢ期の影響を強く感じさせる土器群が存在することは前述した。この土器は住居址 6・9・11 などに多出しており、出土土器片の 45～80% が深鉢 Aa、Ba など縄文のみで飾られる土器である。内面に指頭圧痕の残る土器群とともに、指頭圧痕はあるが縄文は細かな原体を用いて丁寧に回転してあるもの(1042・1043・1992)や、内面の調整のかなり入念なもの(1094・1993)など、より新しい要素を含む土器群が共存する<sup>(9)</sup>という過渡的な様相を示している。一方、深鉢 D・E は単位文様 e が多用され、縦の区画を結ぶ沈線に直線的なもの(1054・1059)やこきざみなコンパス文(1054・1059・1065)が用いられ、口唇部に竹管による加飾を施したもの(1054・1055)、単位文様 h を用いた土器(1056・1068)などが特徴としてあげられる。住居址 52 出土の土器群はさらに鮮明である。深鉢 A・B・C は前述した過渡的な土器(1287～1290)とともに、口唇部に押し引きなどを施す深鉢 Ba(1267・1281)が多出しており、縄文原体や施文法、内面調整などはⅢ期土器とは明らかに異なる。口唇部へのこのような加飾は深鉢 D・E にも盛んに用いられるが、口唇直下の凸帯に押し引きを施すものが圧倒的に多い。単位文様は e(1299～1304・1306・1307)が多く、縦区画に円形竹管文を配したり(1301～1303・1308 等)、平行沈線(1299・1300・1983)を施すなど住居址 6・9 などと共通する。こきざみなコンパス文は口唇部の凸帯や押し引きとともに、単位文様 b(1341・1342)、c(1335・1346)などを中心に用いられている。住居址 5・58・75・78 にもそれぞれ断片的ではあるが共通する特徴をもつ土器片がみられ、また、住居址 72 や環状集石群からも出土している。以上の土器群の特質を项目的に述べると、①深鉢 Aa に代表されるⅢ期的な土器が混在する。②器形は深鉢 A・B・D・E が主体であり、浅鉢は少ない。③口唇部に特徴的な加飾を加える土器が多い。④単位文様 e が多用され、b・d・h など用いられるが f はほとんどなく、i は全く存在しない。⑤ e の縦区画やこきざみなコンパス文、間隔のあいた有節平行沈線など、Ⅲ期と共通あるいは影響を受けた施文技法などが目立つ。⑥胎土に金雲母を多く含み明褐色の色調をもつ土器が比較的多い。以上 6 点があげられ、後述する住居址 45 などの土器群とは明らかに異なった様相を示す。よってこれらの土器群は阿久Ⅳ-a 期として、Ⅳ期土器群の前半に位置すると考えられる。遺構では住居址 5・6・9・11・52・58・75・79 が該当する。

Ⅳ-a 期の類例は、諏訪地方から山梨県にかけての諸遺跡に見出すことができる。特に前述した③・⑤・⑥の特徴をもつ土器群に著しい。諏訪市十二ノ后遺跡〔樋口・宮沢他 1976〕では 17 号住居址をはじめ、64・75 号住居址など数棟でかなりまとまった資料が出土している。諏訪市千鹿頭社遺跡〔宮沢他 1975〕の 6 号住居址、岡谷市海戸遺跡〔八幡他 1968〕、原村オシキ遺跡〔高桑他 1979〕、富士見町机原遺跡<sup>(11)</sup>などからも出土している。山梨県では御所遺跡〔山根他 1981〕の 2・4 号住居址出土土器中に認められ、京原遺跡〔小野 1974〕にも類列がある。しかし、報告書等での資料の照合に限られるが、関東地方にはⅣ-a 期の土器と明確に類似するものはほとんど見られない。<sup>(14)</sup>

一方、住居址 45 を始めとして、住居址 34・67・74(新)出土の土器群はかなり様相を異にする。Ⅳ-a 期にみられた深鉢 Aa はほとんど姿を消すとともに、深鉢 Ba などに施される縄文は細い原体を軽く回転させた単節斜縄文(1177～1179・1223～1226・1997)が多い。しかし、住居址 45 では傾向として土器組成の中で

全面に単位文様 a を施す土器の占める位置はIV-a 期よりも後退している。さらに角張った口唇部(1176・1177・1997)が目立ち、その部分への加飾はほとんどみられない。このような口唇部の変化は、他の深鉢にも共通し、断面三角形の肥厚部分をもつもの(1189・1193)もみられる。深鉢 D・E の単位文様は、IV-a 期の e(1181~1187・1999)とともに、f(1198~1215)、i(1188~1197 等)が盛行する。かなりくずれた施文であるが b(1220)、c(1218)も少数ある。e は縦区画に平行沈線を施したり、それを結ぶ沈線が直線的なものはほとんど姿を消し、平行沈線と円形竹管文の施された縦区画を弧線で結ぶもの(1181・1183~1187・2000)が大多数を占める。こきざみなコンパス文は全くみられない。f は無文部分が1段(1203)と2段(1227・2001)があり、縄文部分に円形竹管を施す(1213・1214)など変化に富む内容をもつ。IV-a 期に全く見られなかった g は、「コ」の字形の区画文を主にした構成で盛行し、h は姿を消す。深鉢 G は e の施文された1個体(1999)のみで、平行沈線で16単位に縦区画されるが間隔は不均等である。

浅鉢は A・B・C があり、個体数も多い。浅鉢 A は全面に単位文様 i を施すもの(1228・1230~1233・2009・2010)のみである。B は f(1229・1964)と i(1965)があり、C では i(1470・1657・2011)がある。

IV-a 期の土器と比較すると以下の点で相違がある。すなわち、① 深鉢 A を始めⅢ期の影響を直接受け継いだ土器はほとんど存在しない。② 浅鉢は土器組成の中に完全に位置づき、量が多い。③ 口唇部の加飾やこきざみなコンパス文を施した土器は姿を消す。④ 単位文様は e・f・i が盛行し、浅鉢には i が多用される。⑤ 関東地方の諸磯 a 式土器に類似した土器がより多くなる、などである。したがって、これら一群をIV期の新しい段階ととらえ、IV-b 期として位置づけたい。

IV-b 期の土器は、諏訪市十二ノ后遺跡10号住居址を始め、20・95号住居址などにみられる。さらに周辺の遺跡として茅野市よせの台遺跡〔藤森1969・宮坂虎他1978〕、岡谷市丸山遺跡〔藤森1950b、戸沢1973〕、富士見町机原遺跡、県内では東筑摩郡唐沢遺跡〔神沢他1971〕、北安曇郡有明山社遺跡、大町市上原遺跡〔樋口1957〕など幾多の遺跡で散見でき、関東地方でも類似資料は多い。

#### (4) 小括

IV期の土器の具体的内容、編年の位置、細分の大略を述べた。しかし、いくつかの問題点がある。

その第1は、諏訪地方から山梨県の一部にその分布が認められる、口唇部への加飾を施す土器群の出自および分布である。IV-a 期はほぼⅢ期にその系譜が求められるのに対して、これのみⅢ期と直接には結びつかない。関東地方にその分布範囲が及ばないことから、Ⅲ期 I 群あるいは関西・東海地方の土器の口唇部にみられる刻目により注目しなければならないが、明らかな系譜を追えず、今後の課題であろう。

次に南大原式土器との関係が問題となろう。南大原遺跡の土器については必ずしも十分な資料報告がなされているわけではないが、麻生優氏の論述〔麻生1958〕等からこの土器群の特質は以下になる。① 深鉢のうち縄文のみを施した土器は単節斜縄文が多く、器形はIV期深鉢 B に類する例がみられる。② 阿久遺跡では類例の少ない深鉢 F が特徴的にみられ、上半に単位文様 e、下半に b という特徴的な文様構成をとる。③ 単位文様 e が多く b・g なども存在するが i はほとんどない。④ 浅鉢 A に類する土器があり単位文様 a が施される。などがあげられる。南大原式土器特有のいわゆる肋骨文をもつ深鉢などは本遺跡とはかなり異なった様相も示し、むしろ、新潟県泉龍寺遺跡〔中村・小林・金子1963〕の土器群に近似する。両遺跡ともに本遺跡と100 km以上を隔てる地域性を考慮する必要があるであろう。しかし、③・④など阿久IV-a 期に共通する要素が多く、従って時間的併行関係はほぼIV-a 期になると考えたい。現在南大原遺跡の遺物の整理が進み、近い将来報告がなされると聞くので、両者の関係はより明確になるであろう。

IV-a 期の土器組成の主体となる全面に縄文を施す深鉢は、Ⅲ期との類別はほぼなされたが、IV期では明確に位置づけることができなかった。このことは逆に土器自体が変化に乏しいという、日常煮沸具として

用いられた結果を裏づけることになろうが、縄文原体等多面から追究する必要がある。

住居址9・11ではIV-a期の土器とともに微量に繊維を含む土器が出土しており、これらの土器をIII期との過渡的な所産としたが、より明確な位置づけがなされなければならない。<sup>(17)</sup>

IV-b期は浅鉢が土器組成の中に確実に位置づき多用される。これに対しIV-a期では浅鉢Aa(2240・2583)にその可能性を求められる程度である。浅鉢がどの時期から土器組成の中に位置づくかはその用途とともに重要な問題であり、その鍵はIV-a期にある。

以上、問題点を主に述べてきたが、阿久IV期の土器は、III期における地方色をもつI群土器と、関東地方の土器群と近い内容をもつII群土器とが融合する段階であり、煮沸具に主体をおく土器組成から浅鉢の出現に代表される器種分化が生じた段階であるといえよう。

- 註1 条間に隙間をもつ縄文について樋口昇一氏は軽く押捺された結果[樋口他 1957b]とし、鈴木徳雄氏は無繊維化による縄文施文時間の遅延として諸磯a式土器の縄文の変化をとらえている[鈴木 1979]。土器の無繊維化と施文の遅延とが直接結びつくかどうかには問題はあがるが、両者とも要因の一つとしては妥当であろう。
- 2 上原遺跡において樋口昇一氏が指摘した結果とはほぼ同様の傾向を示す[樋口 1957b]。
- 3 上原遺跡第二類土器中に類似資料がみられ、また黒浜式土器の中には飯山満東遺跡8号住居址出土土器[清藤 1975]を始め胴下半部まで肋骨文に類した文様が施されるものがある。
- 4 竹管の両端を交互に支点として半円を描くコンパス文はIII期に比較的多用される。同様の施文法ではあるが円をわずかに描くだけで支点を変えるため波状文に近い軌跡をみせる。技法が一致するのでここでは「細かなコンパス文」と呼称する。
- 5 北信から新潟県にかけての諸遺跡で多し、交点に円形刺突を施したものなどが目立つ。塩尻市鼻屋敷遺跡[藤沢他 1974]では格子目の中に円形竹管を施すものなどが存在するが、上原遺跡では本遺跡と同じく平行沈線のみである。
- 6 新潟県泉龍寺遺跡[中村他 1963]に好資料が多く、県内でも南大原遺跡[麻生 1958]、鼻屋敷遺跡等で多量に出ている。この土器群のもつ共通性および他の土器との差異は泉龍寺遺跡でも指摘されている。
- 7 泉龍寺遺跡第三群C類に酷似し、同様の縦の沈線は飯山市大倉崎遺跡[高橋他 1976]出土土器にある。
- 8 鈴木徳雄氏による肋骨文の施文手法についての論述[鈴木 1979]ですでに同様の指摘がされている。
- 9 住居址9では出土状況や接合関係によって両者が共存することが具体的に明らかになった(挿図125)。また微量かつ不均一ではあるが繊維を含む土器も少数存在する。
- 10 胴部にも同様の凸帯をもつ土器(1466・2224)が存在する。
- 11 根津清氏はこれらの土器群を「主体は有尾式終末ないしは南大原式初頭と考えてよい」として編年的位置づけをおこなっている。
- 12 会田進、長崎元広両氏の御厚意により岡谷考古館内で資料を実見する機会を得た。その結果断片的ではあるが類似土器片をみることができた。
- 13 武藤雄六・小林公明両氏の御厚意により未発表資料を実見させていただいた。類似する良好な資料が多量に出しており、正式報告が待たれる。
- 14 千葉県法蓮寺山遺跡[栗本他 1973]第1号住居址に単位文様hに類する土器片が存在する程度である。
- 15 前述した如く『信濃史料』においては「殆んど関東地方の諸磯a式と同じ」として南大原式土器を規定しているのに対し、麻生氏は諸磯a式土器との対比によって南大原式土器の型的検討をしており、「単に、諸磯a式土器を出す中部地方での代表的遺跡であるという意味」において南大原式土器の名を使用することは「型式の概念をいたずらに混乱におとし入れる」として否定的である。
- 16 金井正三氏は浅鉢形土器の変遷を論ずる中で、南大原出土土器を諸磯a式前半期に位置づけている[金井 1979]が妥当と考える。
- 17 同様の現象は十二ノ后遺跡、千鹿頭社遺跡でも報告されている。

## 5) 阿久V期(挿図229・230、図98~104・142・143、図版124~127・161~164)

## (1) 研究小史

諸磯式土器についての研究史は、すでにIV期で述べてあるので重複する部分は割愛する。諸磯式土器の編年的位置および3区分を確定させた山内清男氏は、諸磯b式土器が新古に2分されると想定していたらしい〔栗原1961〕。これとほぼ同様の見解に立っての2区分が、中村孝三郎他〔中村・小林1963〕、西村正衛〔西村1966〕、土肥孝〔土肥1975〕、中島宏〔中島1977・1980〕の諸氏によって試みられており、「連続爪形文段階(古)とそれ以降の段階(新)」〔中島1980〕とする区分案がほぼ共通理解されてきている。一方、施文順序に着目しての細分案が鈴木徳雄〔鈴木1979〕、今村啓爾〔今村1977・1979・1980・1981〕両氏によってなされ、b(新)段階を2分する諸磯b式土器3区分案が示された。さらに鈴木敏昭氏は深鉢形土器の器形・文様帯の変遷をもとに、文様構造の系統的变化をとらえるなかで、諸磯b式土器を4区分する編年案を提示した〔鈴木1979・1980〕。現在のこれら細分案は方法論や分期のしかたなどに相違、不一致があるものの変遷観はほぼ共通する。<sup>(2)</sup>

長野県内においては1950~52年にかけて調査された大町市上原遺跡の成果から『信濃史料』〔大場他1956〕で「上原式即ち諸磯B式土器」として、上原式土器の型式設定および編年的位置づけがなされた。翌年その報告書が刊行され、樋口昇一氏は出土土器に詳細な検討を加え、器形・文様などに多彩な型式的内容をもつ上原式土器を6分類した〔樋口1957〕。あわせて県内の諸磯式土器の変遷もある程度の系統性をもって把握できるとし、諸磯期の大別を「南大原—上原—下島」とする編年を提示した。これは長野県における前期後半の編年として、現在に至っている。その間上原式土器について何ら新しい論及がなされなかった。この背景には県内を中心とする研究者の問題意識の低さも指摘されようが、遺構と直接結びつく良好な資料に恵まれなかったことにも起因していよう。しかし、高橋桂・金井正三両氏等によって飯山市大倉崎遺跡から住居址に伴う良好な土器群が報告され〔高橋・金井1976〕、この土器群を「上原式=諸磯B式文化後半の所産」として、上原式土器の細分並びに新型式設定の可能性を指摘したことにより、該期の研究は新しい一段階を迎えた。金井氏は同様の資料として中野市立ヶ花遺跡の土器群を紹介し〔金井1977〕、さらに上水内郡丸山遺跡では一歩論を進めて諸磯b式土器2分案を提唱した〔金井他1978〕。これらの土器群がこれまでのところ北信濃に限定された地域的制約の中で語られており、上原式土器との差異が、時間的空間でとらえられるのか、地域的な内容に含まれるのかなど、新たな問題が生じてきている。<sup>(4)</sup>

以上述べたように、関東地方の諸磯b式土器の編年研究はほぼ共通性がみられ、最近の県内の研究動向もほぼ同傾向を示しているといえよう。このような現状を踏まえ、阿久V期の土器を具体的に述べたい。

## (2) V期の土器の特徴

## ① 器形と文様構成

深鉢A・B・C 縄文を全面に施す土器であるが、IV期と区別できないものが多い。この時期に帰属する住居址2棟がいずれもIV期の土器片を伴出していることと、深鉢A・BのようにIV期と器形等が類似することに起因してこよう。しかし、深鉢Cの縄文がいずれも粗大な原体を用いている(1528・2251・2584)ことから、共通する特徴をもつ土器片(1645・1646・2224)を含め、V期を特徴づける縄文の施された土器としてとらえられる。文様帯をもつ土器の地文に施される縄文も同様の傾向を示すものが多い。これにIV期にみられた繊細な縄文の施された土器が加わるであろうが、土器組成の上で縄文のみを施す土器の割合は低い。<sup>(5)</sup> 単節斜縄文が多いが羽状縄文も確実に存在(2030・2041)する。胎土・内面整形等際だった特徴はみられないが、深鉢Cの口唇部には縄文あるいは棒による縦の刻目(1528・2251・2380)がある例が多い。深鉢Aの中に縄文地文の上に平行沈線を数本巡らした帯を4帯胴下半にまで施した小形土器(1715)がある。

深鉢 D 器形・文様とともにIV期の深鉢 D・E の系譜を引く土器である。IV期と比較すれば、口縁部の外反がさらに大きくなり、底部に近い部分に胴部最大径をもつ土器が多くなるなど微妙な変化(2039・2285・2579)はあるものの、施文順序、口唇部の形態、内面整形などは共通する。口縁部は平口縁が多い。波状口縁(1567・2381)もあるものの破片が多く器形の復元ができない。金堀沢遺跡[中島 1977]などに類例の多いなだらかな頂部をもつ波状口縁(2381)がわずかにみられるのみである。胴部は上半部に単位文様 c・d、下半には a が施される。単位文様 c・d は、口縁部と胴部中央に横方向に有節平行沈線(連続爪形文)を複数巡らし、その間の文様帯を区画するもので、この文様帯区画が最初に施されることはIV期と共通している。各有節平行沈線の間は帯状に盛りあがり、斜めの刻目(1568・1570・1571)、竹管の背を押し引きする爪形文 D(1443・1573)が多く、何も施さない場合(1441・1561)もある。単位文様 c には半円形の区画文を上下対に施すもの(1577・2244)、縦区画のきちんとされないもの(2243)、鋸歯状に区画するもの(2384)などがあり、環状集石群内出土の大形深鉢(2579)もこの中に含まれよう。単位文様 d もIV期の単位文様 i に近いもの(2248)から単位文様 e に近い渦巻文(1448・2249・2385~2387)まで変化に富むが、一部平行沈線を用いるもの(1448)を除いて、幅広の竹管を用いた有節平行沈線や、円形竹管文などによって区画内を充填している。深鉢 D は混入物の多い胎土で、器面がややザラつき、ナデの単位のみえる程度の内面調整を加えた土器が多い。しかし、縦区画をもつ土器群には暗茶褐色で内面調整が光沢をもつほどに入念に磨かれるもの(2039・2285)が目立つ。その他に破片のため器形全体が明らかにならないが、単位文様 e を浮線で描いた土器(2395)が少数ある。縄文を施した浮線は完全な渦巻を形成せず、内面調整は砂粒の動きのみえるナデによっており、口縁部の外反が強い深鉢 D と考えたい。

深鉢 E 口縁部の内湾の程度と波状口縁の変化によってその形態はバラエティーがあるが、胴部で文様帯が 2 区分され、上半には単位文様 e、下半には b が施される。口縁部の立ち上がりが垂直ぎみに内湾するものは、完全な渦巻文を形成せずに入り組んだり(1583・2399)、扁平な形(2038・2157)になる。単位文様 e が浮線によって施され、沈線を用いた土器でも同様の文様(1587・1630)をもつ。住居址 45 出土の同器形の土器(2005)は、IV期の単位文様 i と V 期の c の中間的な様相を示しており、IV期から V 期の過渡的性格をもつと考えられるが一応本類に含めた。口唇部に棒による刻目のある土器が多い。内湾度が増すとほぼ正円に近い渦巻文が浮線(2025・2026)や沈線(2398)で描かれ、波頂部の突起がやや下がる(2026・2027・2258)傾向がみられる。胴下半部は単位文様 b を上半に合わせて浮線(2030・2040・2041)や沈線(2029・2031)で描くが、浮線間を直線または弧線で部分的に結ぶ例(1438・2028)もある。胴部上半に沈線が 3 条巡るのみの小形土器(1927)も本類であろう。底部は外に向かって張り出す屈曲の強いもの(2028・2038・2041)と緩やかに収束するもの(2029・2031・2273)とがあるが、後者の胴部上半の器形は不明である。浮線上の加飾は縄文(2041・2395)、やや太目の刻目(2025・2038)、矢羽根状の細い刻目(1578~1580)等を施文したり、何もしないもの(1585・2028)に大別される。胎土・内面調整などは深鉢 D に類似する。

深鉢 F 口縁部が「く」の字形に屈曲する器形で、屈曲部を境に文様帯が区画される。住居址 72 出土の 1 個体(2037)のみほぼ器形がわかる。屈曲部上半には小突起とわずかにその痕跡の窺える渦巻文が施されており、以下は平行沈線が 10 本前後の単位で集合沈線帯をなし、それが 4~5 段巡っている。従って胴部で文様帯が区画されることはない。同様の特徴をもつ口縁部破片(2223)も少数みられる。

浅鉢 A V 期の浅鉢は個体による器形のバラエティーが著しい。浅鉢 A でも同様に、角形で 2 つの大きな山形口縁をもつ特異な器形(2288)を始め、IV期浅鉢 A に類似した器形(1982)、小形の角形土器など、台付土器にも器形の変化が著しい。いずれも良質の粘土を用い焼成良好で、内外面ともに篋ミガキによる入念な調整が施されて光沢をみせている。

浅鉢 B 屈曲部の多い器面全体に、単位文様 d が主として篋描きで施される。胴部の屈曲部分は無文帯



となり、文様帯を上下に区画する。無文帯の上下は屈曲などによって隆帯化し、篋による刻目を施す。単位文様 d はIV期単位文様 i に似るが、施文具が篋であり、磨消縄文を用いない点が異なる。県内では上水内郡丸山遺跡〔高橋他 1978〕で好資料が得られているが、本遺跡では1個体(1930)以外はすべて破片(2403・2404)である。赤色塗彩の痕跡を残す土器片が多く、特に外面の調整は入念である。有節平行沈線によるやや趣の異なる文様を施した浅鉢(2406)も器形などから本類に含む。

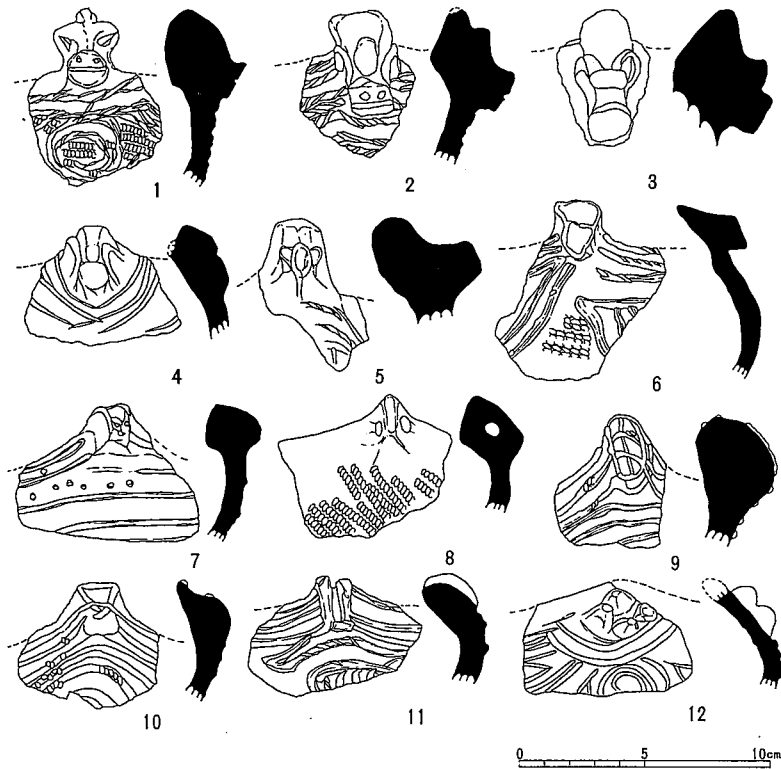
浅鉢 C B に器形が酷似する。全く無文の土器(1716・1929・2032・2043)と口縁部に屈曲部分がなく口唇部に篋切りされた浮線文を2条配し、その間に孔が穿たれるもの(2042・2402)とに2分される。混入物の少ない良質粘土が用いられており、器面はナデまたはミガキによって丁寧な調整がなされ、塗彩痕の残る土器(2042)もある。底部付近には屈曲部が変化した凸帯の巡るものも多く、丸底(1929・2032)と平底(1733・2043・2044)がある。

浅鉢 D 器高の低い皿に近い土器で器形全体を知りうるものは1例(1717)だけである。飯山満東遺跡〔清藤他 1975〕ピット群出土土器には類例が多い。胎土・焼成・整形などは他の浅鉢と共通する。

以上の類型以外に、口縁部が強く内屈し、その部分に単位文様 e を施す浅鉢(2405)が破片でみられる。御所遺跡1号住居址〔山梨大学考古学研究会 1978〕出土の浅鉢に好類例があるが、屈曲部の下に連続爪形文が施されるもの(2401)があるなど、不明確な部分も多い。

② 獣面付土器

深鉢 E の波頂部に獣面把手と呼称される突起を付加する土器で、それが変化したと思われる突起も含めると数十例が出土し、一部は深鉢 C および F にも付される(挿図 229)。突起は、①リアリティーに富み明らかに動物を模したと考えられるもの(挿図 229-1~3)、②眼・鼻などに省略のみられるもの(4・5)、③獣面を模したととらえ難い程に省略されたもの(6~11)、④単独あるいは複数の小突起(12)に4類別される。このうち①および②は口縁部の内湾度が小さい深鉢 E に付けられ、浮線(1・2・5)あるいは沈線(4)による単位文様 e が突起直下を中心に施文される。③も深鉢 C の一例が加わるが、他は①、②と同様の器形、

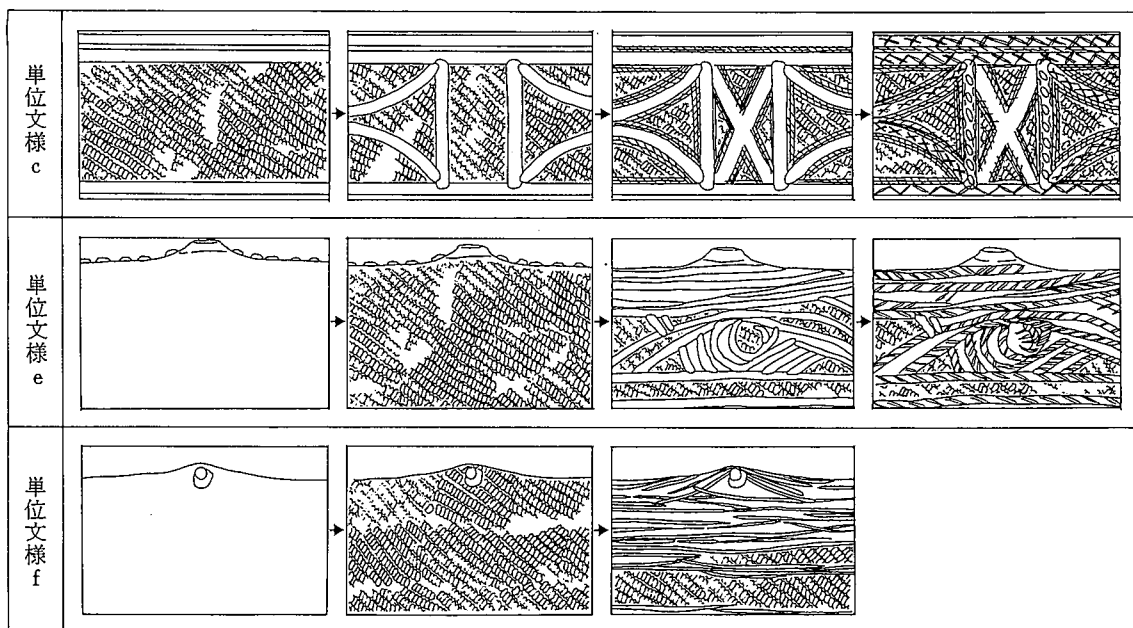


挿図 229 獣面把手実測図

単位文様をもつ土器に付けられる。④は口縁部の内湾度が強い深鉢 E および F に付けられる例が多く、突起の位置は①~③が口唇部なのに対して、ややその下方にある。遺構内からの出土は住居址 72 の 1 例(10)と集石からの 3 例(6・8・9)のみで少ない。(12)

③ 施文順序

IV期同様施文順序の観察できる個体は限定されるが、深鉢 D・E・F に施された文様について可能な限りの復元を試みた(挿図 230)。深鉢 D は単位文様 c の施された複数の土器で施文順序が確認できた。それはIV期の施文順序と共通する。ただ横方



挿図 230 施文順序模式図(V期)

向の区画がIV期では平行沈線・有節平行沈線であったものが、V期では隆帯となる。すなわち、横方向の隆帯を一定間隔を保持して上下に付し、ついでその空間部分を4単位を原則として縦位に区画し、さらにその間を再区画し、最後に区画を隈無く充填し、隆帯上に刻みなどを施すという過程をたどる。深鉢E・Fは<sup>(13)</sup>いずれも単位文様eで、波頂部付近の突起を付加した後縄文を施し、浮線、沈線による渦巻文などを施文し、最後に浮線上を処理するという順序が観察された。それまでの文様帯上下端の区画優先はこの段階で<sup>(14)</sup>みられなくなるようである。

#### ④ 成形・整形

土器成形に関しては、積み上げられる粘土帯が幅1cm前後と狭いことが接合痕から観察された浅鉢例(図242-10)をはじめ、屈曲部での接合痕などが断片的にみられるのみで、土器全体の具体例には迫り得なかった。整形ではオサエがみられなくなり、こきざみな篋ミガキを施す例が浅鉢を中心に認められるようになる。内面調整は口縁部付近の観察に限定しても、ケズリ痕や砂粒の動きのみえる粗い調整の土器から、凹凸のない光沢ある器面に仕上げられる丁寧な調整の土器まで種々の段階がある。後者に深鉢Dの一群や浅鉢Cなどが目立ち器形との関係が窺えるが、浅鉢Cの屈曲部などにはケズリが残るなどすべての土器に当てはめることはできない。

#### ⑤ 胎土

IV期で述べたことではぼつきる。浅鉢では土器表面にはほとんど大きな粒子が観察されず、良質粘土の使用が考えられるが、器面調整などと密接に関係するので全体的傾向を指摘するにとどめる。深鉢Eの中に灰褐色を基調とする他の土器とはやや趣の異なる土器片が抽出された。胎土の差異が色調の違いの主要素であろうが、使用粘土の同定や原産地の追究などが進められてより明確になろう。東光寺裏遺跡(中島1980)出土土器に認められた浮線部分の色調が異なる土器は、明確な類例を見出せなかった。<sup>(15)</sup>

### (3) 編年的位置と細分

V期の土器とはほぼ併行する諸磯b式土器は、従来から指摘されてきた新古2区分からさらに3区分、4区分する編年案が提示されている現状は研究史で述べた。本遺跡においては該期に属すると考えられる住居址は2棟のみであり、内1棟は時間的な幅をもつ土器が混在していることから、遺構に関連させての細

分は方法上困難である。しかし、幸いなことに住居址7で、その出土状態から限定された時間内に位置づくセットとしてとらえられ得る好資料が出土したことにより、これを基軸にしての編年的検討が可能である。住居址7では西側部分の埋土から集中してV期の土器片が出土した。そのほとんどが図化されて、深鉢E 7個体(2025~2031)、浅鉢C 1個体(2032)となり、他には拓影に示した土器片(1628・1630・1645・1646)などの数片のみである。深鉢Eはいずれも胴部上半に単位文様e、下半にはbを施しており、施文法に浮線と沈線という差異はあるが極めて斉一性の強い土器である。また、浅鉢Cは住居址66出土の浅鉢(1929)に類似した形態をもつであろう。縄文のみの土器は粗い原体(1645・1646)があり、地文として羽状縄文(2030)が用いられることもある。

これら住居址7出土土器は、諸磯b式土器新古2区分における新段階に明確に位置づく。また、上原遺跡第3類C・F種、およびA・E種の一部に相当する土器である。本遺跡において同様の土器は住居址72に多くみられ(1578~1585・2038・2040・2041)、環状集石群や土壌からの出土数も多い。また、隣接する大石遺跡[伴他1976]39号住居址や諏訪市十二ノ后遺跡[樋口・宮沢他1976]の46・47・80号の各住居址など周辺の遺跡に遺構単位でとらえ得る好類例がある。この他県内では茅野市よせの台遺跡[宮坂他1978]、同御座岩遺跡[宮坂他1966]、岡谷市海戸遺跡[藤森他1968]、東筑摩郡唐沢遺跡[藤沢他1971]、北安曇郡有明山社遺跡[藤沢他1969]など多数の遺跡に類例がみられる。また山梨県御所遺跡[山梨大学考古学研究会1978・1979、山根他1981]でもほぼ同様の内容をもつ良好な土器群が、1~4号の住居址に伴って出土しており、埼玉県東光寺裏遺跡[中島1980]などでも住居址単位での好資料がみられる。

一方、住居址72では深鉢Dの上半に連続爪形文による単位文様c・dを施し、下半にはaを配する土器(1439~1444・1566~1577・2039)も多出しており、前述のb式土器2区分における古段階に位置付けられる。この他に深鉢A・B、浅鉢B(1930・2403・2404)などが同時期の土器としてあげられ、やはり環状集石群や土壌からの出土数が多い。住居址72は3回の拡張による4棟の住居址が確認され、その他にも住居址の存在した可能性がある。この中に、多量に出土した諸磯b式古段階の土器を伴う住居址が存在したであろう。

県内での同段階の土器は、上原遺跡第三類B・D種およびA種の一部が相当する。十二ノ后遺跡47号住居址、諏訪郡机原遺跡に好資料がみられる他、岡谷市洩矢[樋口他1980]、海戸、よせの台、唐沢、有明山社、塩尻市舅屋敷[藤沢1974]などの諸遺跡に類例があり、上水内郡丸山遺跡[高橋・金井1978]では浅鉢の好例が土壌に伴って出土している。県外では埼玉県金堀沢遺跡[中島1977]5号住居址、同中川貝塚(栗原1961)3号住居址に好類例を摘出でき、山梨県御所遺跡、新潟県泉龍寺遺跡[中村他1963]などでもまとまった資料が指摘できる。

住居址72を中心に出土した古段階の土器群と住居址7出土土器群を比較すると、器形および施される単位文様が全く異なることや、文様帯の区画や上下区画線の優先が顕著でなくなることなど、両者は明確な相違をみせる。よって古段階をV-a期、新段階をV-b期として2区分した。IV-b期とV-a期の土器は、器形、整形、施文順序などに共通する要素が多く、強くその系譜をたどることができる。これに対し、V-a期とV-b期の土器には、器形、単位文様などに一定のヒアタスが存在することは明らかである。しかし、渦巻文などにみられる文様の類似点や、単位文様eを浮線で描く深鉢Dなどを媒介として、細いながらも連続したその系譜を把握できると考える。

#### (4) 小括

阿久V期の2分によって、出土土器がほぼ同様の内容をもつ上原式土器も2細分されることが明らかになった。最近のさらに細かな区分に位置づけると、住居址7出土土器は今村啓爾、鈴木徳雄両氏の3分案

における中段階に相当し、鈴木敏昭氏の4区分案における $b_2$ (新)段階に当てはまる好資料といえよう。しかし、当遺跡においては、その前後を埋める土器が不明確であり、県内を単位にみても地域性なども含めた検討が今後必要と思われるので、その可能性の指摘にとどめたい。また、大倉崎遺跡出土土器は、高橋桂氏が上原式後半と規定し、鈴木敏昭氏は $b_3$ 段階に位置づけている。仮に鈴木氏のいう $b_3$ 段階にV期の土器を当てはめると、深鉢F(2037)が相当し、沈線を巡らす深鉢D(1927)もこの中に含まれる可能性がある。また、上原遺跡などにおいても類似土器はみられ、諸磯b式とc式土器を結ぶ土器として大倉崎遺跡の段階が存在する可能性は高いといえよう。しかし、断片的であるにせよV期深鉢Fなどと大倉崎遺跡の土器群はかなり様相を異にしており、その理由をどこに求めるかなど究明しなければならない点が多い。

阿久V-a期とV-b期のヒアタス、つまりキャリパー形の器形と浮線文の突然の出現に対する問題がとりあげられて久しい。両者を繋ぐ土器として浮線文の施された深鉢Dを指摘したが、山梨県御所遺跡にこの好資料がある。関東地方に先行して浮線文の用いられる朝顔形の深鉢が存在するか否かは、浮線文やキャリパー形深鉢の出自を西からの影響とする考え方[鈴木1980]とも関わって重大であり、今後の大きな課題となろう。

それに関連して関西・東海系の土器と、V期の土器の要素を合わせもつ土器(2407)などの究明も、その併行関係及び土器組成上の位置づけ等絡めて、今後に残された問題である。<sup>(17)</sup>

IV期同様全面に縄文の施された深鉢を明確にできなかった。土器組成の中でこれら縄文を施す土器がどの程度の割合をもって存在するかを含め、より詳細な分析が必要である。(百瀬 新治)

- 註1 内田祐治氏の諸磯式土器の施文順序の研究[内田他1975]など施文順序に差目しての土器究明は最近いくつかの報告書でされている。
- 2 すでに今村啓爾氏[今村1981]や鈴木敏昭氏[鈴木1980]によって述べられている。
- 3 樋口氏が単なる類別にとどまらず、前後の型式との関連を含めその前後性を指摘している点は、当時の研究段階を考え合わせると評価される視点であろう。
- 4 同様の事は報告書中で高橋・金井両氏も問題点としている。その意味で松本盆地の塩尻市山の神遺跡、同鼻屋敷遺跡など住居址の発掘調査された遺跡の正式報告が待たれる。
- 5 住居址7の出土土器片をみるとV期に含まれると考えられる縄文のみを施した土器片は少数である。
- 6 山梨県御所遺跡[山根他1978]2号土壇出土土器中に好例があり、上原遺跡第三類土器C種にも類似する可能性の高い破片が存在する。
- 7 浮線を細い沈線で斜めに刻むが、隣り合う二本は必ず異方向に施す規則性があり、結果として2本一対の矢羽根状に見える。
- 8 上原遺跡で地方色を持つ土器とされた、浮線上を棒によって刺突するものはほとんど例をみなかった。浮線の両側に細かい刺突を列点状に加えたものは存在する。
- 9 末木健氏はこのような器形のバリエーションを、同時期の関東地方の浅鉢の内容が限定されていることと対比させて、中部山岳地域の独自の歩みは諸磯b式期に始まるとしている[末木1978]。
- 10 本資料の紹介[百瀬1981]で類似土器を1例としたが筆者の誤りであり、飯山満東遺跡に2例の類似土器がある。阿久遺跡では小形の台付土器に方形と考えられるものがあり、破片で3個体分を確認している。
- 11 連続爪形文を施す土器に付加された例が上原遺跡に1例あるが、基本的にはごく時間を限って用いられていると考えられる。
- 12 清水比呂之氏は獣面把手がビット内から発見された例をもとに祭祀儀礼を考えている[清水1981]。考え方は示唆に富んでいるが、浮線土器の特殊性や特定の遺構との関わりを仮定の上で論述されており、本遺跡のあり方とは異なる点が多い。具体例を通しての検討が必要であろう。
- 13 原則的には鈴木徳雄氏の示された施文順序と一致する。
- 14 今村啓爾氏の提示した施文順序と一致するが、諸磯b新段階に属する深鉢Fは突起が最初に付加されるのかどうかは

観察によっても明らかにならなかった。

- 15 上原遺跡でも浮線部分の粘土の異なる例が報告されており、本遺跡でそれらしい土器を摘出できなくはないが、細片であり鉱物分析等の検討を待ちたい。
- 16 口唇部に刻みが施されないことや内湾度、獸面把手がみられないことなど、メルクマールとされる要件は満たしている。なおB<sub>2</sub>(古)段階の土器の代表例として住居址72出土土器(2038)があげられる。
- 17 類似例が新潟県刈羽貝塚〔八幡 1958〕で諸機式系土器として報告されている。

6) III群土器(図 209~211、図版 173~175表11・12)

(1) 研究小史

長野県におけるIII群(関西・東海系)土器の認識は、その出土率の多い南信地方でまず始まり、断片的資料の摘出が報告されたが、昭和30年代初期の、『信濃史料』で全県的な資料集成分析がなされた。しかし、その後関西・東海地方と瀬戸内地方の調査研究も進み、一方県内でも新資料の増加が著しく、『信濃史料』でのいくつかの重要な指摘が補足強化される一面や、訂正せざるを得ない点も生じたのは、20年の歳月を考慮すれば当然であろう。特に北白川下層III式土器と把握した土器は、福井県鳥浜貝塚〔森川他 1979〕、岡山県里木貝塚〔間壁他 1971〕、京都府平遺跡〔手塚山大学 1966〕の調査研究の成果から、多くは北白川下層IIc式となる。

近年におけるIII群土器は上述した三遺跡以外に、岡山県羽島貝塚〔間壁他 1975〕、愛知県塩屋遺跡〔磯部他 1965〕・清水ノ上貝塚〔杉崎他 1976〕、岐阜県港町岩陰〔早川他 1979〕・根方岩陰〔小林・早川 1967〕、静岡県上長窪遺跡〔小野 1971〕等があり、増子康真氏の一連の業績がある〔増子 1975・77 a・77 b〕。また、岐阜県堂ノ上遺跡でも良好な資料が得られたという〔戸田他 1978〕。県内では中央道関係で諏訪市千鹿頭社〔宮沢他 1974〕・十二ノ后〔樋口・宮沢他 1976〕、下伊那郡田村原〔酒井 1974〕、上伊那郡中越〔藤沢他 1969・1970、友野・赤羽 1978〕、北安曇郡有明山社〔藤沢他 1969〕、東筑摩郡唐沢〔藤沢他 1971〕などがIII群土器の好資料を出土している。

このような資料増加の中にあつて、III群土器の研究は着実に進展しているものの、県内においては、搬入資料ということもあつて、在土器の付属物としての扱いが強く、主体的視野で検討した研究がないのは寂しい。僅かな資料で、単に類似するからという理由で、多くの型式名を用いているのが現状である。この理由は、例えば東海地方の土器が、型式名のみ優先し、その内容の把握ができる資料に恵まれなかったことが最大の理由であろう。だからこそ、研究者間に同一型式名を用いながら事実把握に混乱がみられ

表 11 住居址出土III群土器集成 (1は条痕あり、2はなしをあらわす)

時期	文様(帯)	A 斜走沈線文														計	伴居	出址	住名		
		A		B		C		D		E		F	G	H	I					J	K
		A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	E <sub>1</sub>	E <sub>2</sub>										
II	a		1		1												2	54			
	b	1	6						3			1					11	15、30、40、53、69			
	c		1			1											2	37			
III		5		2	1	1	4	16	6	10	1	3		1	19	6	2	78	4、12、13、33、41、42、43、49、50、51、59、61、66、74(旧)、76		
IV	a							1		10	1	1		2	19	4	1	39	5、6、9、11、52、75、79		
	b							1	1	3		3			3	1		12	45、67、74(新)		
V	a																				
	b			2	4				11		15	8	21	13		5	2	81	72		

ることになったのであろう。今後は型式内容の整理と、各地域性の把握が要求されるであろう。

このような現状の中で、住居址出土のⅢ群土器については、鳥浜貝塚で明らかにされた事実を踏えながら、以下に若干のまとめをした。なお、Ⅲ群土器は検出住居址の約半数にあたる 32 棟から 16 種 225 点(表 11)と環状集石群その他から総数約 2,000 点が出土した。

## (2) II 期

II-a 期 住居址 54 にⅢ群 A(斜走沈線文)(192)、B(刺突文)(191)がある。B は細片で文様構成は不明であるが、竹管を用いている。出土状態から II-a 期の所産と考えてよいであろう。

II-b 期 5 棟の住居址からⅢ群 A(9・152・260~263)、D(大形爪形文)(55・115・154)、G(爪形文)(153)が出土した。条痕は A と G にみられるが少ない。G は爪形文 C〔佐原 1956〕であるが、IV期以降のものと形態的に異なる。ただし、これは住居址 53 の出土で混入の可能性があるものの、鳥浜貝塚 3 群土器に類似する。A は竹管で描いた細線文で頸部に連続刺突文をもち、清水ノ上 I 式土器に類似する。D は貝殻の腹縁で描いたもの(55・115)と、篋を用いたもの(154)があり、清水ノ上 II 式に類例がある。

II-c 期 Ⅲ群 A(314)と C(「3」字状文)がある。後者は多載竹管を用いており、清水ノ上 II 式土器の中にある。

かように II 期のⅢ群土器は、清水ノ上 I・II 式、羽島下層式(鳥浜貝塚 3 群)に類するものがすべてである。

## (3) III 期

14 棟から完形品 2 点も含めて 14 種 78 点が出土した。II 期Ⅲ群土器に加えて、あらたにⅢ群 E(連続爪形文)、I(縄文)が登場し、D とともに主流を占める。Ⅲ群 A~C もあるものの、全体の中では少ない。

A は細片が多く不明な点が多いが、頸部に小さな段をもち、そこに竹管による刺突を施し、その上下に綾杉状の細線文を施す例(623)は清水の上 I 式の特徴をよく伝えるものであろう。

C は II 期と同様に多載竹管で表現している(467・1977)が、1977 は住居址 61 上層の完形土器で「3」字状文を向いあわせに描いている。竹管を束ねた施文具を用いたものと思われ、丸底で内外面に条痕をもつ羽島下層式類似の土器で、包含層出土の中に類例(2510)がある。

D は住居址 12・13・61 に好例がある。D<sub>1</sub>と D<sub>2</sub>があり、前者は条痕地に貝殻腹縁で爪形文を表現したものの(446・447・470)と竹管を用いたもの(8)とがあり、後者も貝(471・745・746)または竹管(399・445・639・735~739・742~744)を用い、貝殻使用のものには貝の背を連続して押圧した文様を併用している。竹管による爪形文は大形と中形があり、中形爪形文は、Ⅲ群 G の爪形文 C とは、頸部に指圧痕または刺突文を横方向にもつ点で区別される。以上の土器は D<sub>1</sub>が北白川下層 I 式に、他は清水ノ上 II 式にその類例が求められよう。

E はいわゆる棕櫚状文と呼ばれるもので III 期から確実に存在する。E<sub>1</sub>と E<sub>2</sub>があるが、後者がやや多い。波状口縁と平口縁があり、頸部に D にみられた刺突文を横位にめぐらし、胴部は 0 段多条の羽状縄文で飾る(2589)。底部は不安定な丸味を帯びた平底であろう(1361)。口唇部には内側または上端に刻目を入れるが、後者が多い。鳥浜貝塚の所見に従えば、北白川下層 I 式あるいは II a 式になるであろう。

F(平行沈線文)は半載竹管で平行線を描く文様で、D・E と同様に頸部に横位の連続刺突文を描き、胴部に縄文をもつ(773)。鳥浜貝塚にも類例が知られず、わずかに北白川遺跡〔梅原 1935〕などにあるにすぎない。文様構成のあり方から E と同時期であろう。

I(縄文)はいずれも羽状縄文で、E・F の胴部文様となるものも含まれるが、縄文のみの土器もある。後者は口唇部上端に刻目を加えた深鉢(400・537・775)と小形の浅鉢(1954)がある。浅鉢は住居址 74(旧)の一括

遺物の角形土器で底部は上げ底となる。口唇部内面に E と共通した刻目がある。なお、外面には手の平状の黒斑がみられる。

Ⅲ期Ⅲ群土器は多様であり、今後の検討が必要であろうが、A・C・D がそれぞれ組みあわされることはあっても、E・F と組みあわされる例は住居址 66 を除いてはない。住居址 4・12・13・33・41・50・51・61 は前者であり、住居址 42-43・49・74(旧)・76 は後者である。住居址 66 は 81 と重複関係にあり、遺物の分離ができないことを考えれば、Ⅲ期Ⅲ群土器は 2 分割できることになり、これは、Ⅲ期Ⅰ・Ⅱ群土器の分析結果ともある程度一致をみる。鳥浜貝塚の所見に従えば、Ⅲ群 E は北白川下層Ⅰ式というよりもⅡa 式に近い内容をもつことになり、従って、Ⅲ期Ⅲ群土器は清水ノ上Ⅱ式・北白川下層Ⅰ式(Ⅲ群 D)と北白川下層Ⅱa 式に分離されることになろう。ただし、住居址 61 上層出土の羽島下層類似の土器がⅢ期に属するかどうかはさらに検討が必要となろう。

(4) Ⅳ 期

Ⅳ-a 期 7 棟から 8 種 39 点が出土した。Ⅲ群 D~G・I~K があり、E と I が主体である。E は条痕または口唇部内側の刻目はない。連続爪形文の振幅の小さいもの(2590)もみられるが、総じて上述の相違以外に変化は認めがたい(1359・1360・1363~1365・1388・1405・1406)。I もほぼ同様であるが、内面に条痕のつくもの(1106)もある。G は住居址 5 に 1 点ある(1174)。

Ⅳ-b 期 3 棟からの 6 種 12 点がある。Ⅲ群 D・E・G・I・J であり、前時期に比較して G が多くなる。それには、爪形文 C(1241)と平行沈線の間には爪形文を描くもの(1174・1242)とがあり、北白川下層Ⅱb 式に比定される。D は住居址 45 から出土(1238)し、貝殻腹縁で描くが、前時期と異なり爪形状でなく、直線的で、森西式[増子 1977]の中に類例がみられる。

(5) Ⅴ 期

Ⅴ-b 期 住居址 72 から A・E を除くすべてのⅢ群土器が出土した。このうち、E(1604・1605・1607・1610・1611・1621)、G(1612・1613)、H(1614~1616)がずばぬけて多い。しかし、住居址 72 の項で述べたように、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期のⅠ・Ⅱ群土器が混在して出土しており、Ⅲ群土器もまた一括と考えるわけにはいかない。しかし、Ⅳ-b 期までみられなかった H(凸帯文土器)が G とともに約半数近く占めるのは、住居址 72 の示す時期に近い遺物と考えてさしつかえないであろう。G の大部分は北白川下層Ⅱb 式、H は同Ⅱc 式に属するであろう。

(6) Ⅲ群土器とⅠ・Ⅱ群土器との関係

Ⅲ群土器を従来の関西・東海系土器の型式名にあててあてはめ、さらに、Ⅰ・Ⅱ群土器の検討結果から関東系土器との併行関係を求めれば、表 12 となる。しかし、Ⅲ群土器を介在して、東・西の土器群の関係を比較してみると、一部

表 12 Ⅲ群土器対比表

時期区分	Ⅲ 群 土 器	関 西 ・ 東 海 地 方	関 東 地 方
Ⅱ・Ⅲ期	A (斜走沈線文)	清水ノ上Ⅰ式	関山・黒浜式
"	C (「3」字状文)	清水ノ上Ⅱ・羽島下層式	"
"	D (大形爪形文)	清水ノ上Ⅱ式	"
Ⅲ・Ⅳ期	E (連続爪形文)	北白川下層Ⅰ・Ⅱa 式	黒浜・諸磯 a 式
"	G (爪形文 C・D)	北白川下層Ⅰ・Ⅱb 式	黒浜・諸磯 a・b 式
Ⅴ 期	H (凸帯文)	北白川下層Ⅱc 式	諸磯 b 式

を比較してみると、一部に各研究者の指摘と矛盾が生ずる。特に清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器との併行関係が大きく異なる[増子 1975、戸田・大矢 1979]。これは本遺跡における比定に問題があるのか、ある

いは、清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式とした土器群に時間幅があるかのいずれかであろう。少くとも、研究者間には清水ノ上Ⅰ式土器が関山式土器に併行するという点には異論がないので、本遺跡にみられる清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器が共存し、両者ともに黒浜式土器まで併存する点に問題が生じよう。また、Ⅲ群土器でみる限り、清水ノ上Ⅰ式土器が先行することも事実である。従って、清水ノ上Ⅰ式のうち、Ⅲ群Aに類似した土器が先行し、これにⅢ群Cの加わった一群が、黒浜式土器段階のある時期まで続いたと考えざるを得ないのである。この点は、逆にいえば、清水ノ上Ⅱ式土器はⅠ式土器の一部も加えた形で成立するものではないかという事にもなる。

Ⅲ期・Ⅳ期のⅢ群土器のうち、北白川下層Ⅰ式土器は黒浜式土器の前半の部分に、北白川下層Ⅱa式土器は、後半から諸磯a式土器に併行するであろうことは、鳥浜貝塚の所見とほぼ一致しよう。また北白川下層Ⅱb式はⅡc式に先行し、諸磯a式の前半(阿久Ⅳ-a期)からあらわれ、諸磯b式段階で北白川下層Ⅱc式と共存するという点になる。この点でも鳥浜貝塚での森川氏の検討結果とほぼ同様であろう。なお、Ⅲ群H(凸帯文)が北白川下層Ⅲ式にならないことはすでに述べた。

以上、Ⅲ群土器からみた東・西土器の併行関係を示したが、搬入された少量の土器からのアプローチであるという限界もあり、ここでは問題点のみ指摘するにとどめる。(笹沢 浩)

#### 7) 彩色土器(図242、巻頭図版2-2・3)

彩色土器とは、赤色・黒色塗料が塗布されている土器をいい、中には塗料で文様を描くものもある。塗料は分析してないのでその内容ははっきりとしないが、福井県鳥浜貝塚の分析結果を参考とすれば、漆とベンガラ(酸化鉄)で、赤漆は、漆にベンガラを混ぜたものと思われる。住居址64からは、ベンガラに相当するその原材料と思われる褐鉄鉱塊とその粉が出土している。また、住居址63出土のミニチュア土器内には赤漆、黒漆らしい塗料が厚く残存していた。これらはともにⅡ期に属するものである。しかし、本遺跡からはⅡ期の彩色土器は認められないので、鳥浜貝塚に見られるごとく、木器などに塗布されたと思われる。住居址61(Ⅲ期)からは同様のベンガラらしい赤色塗料の付着したタール状の炭化物が出土している。彩色土器はほとんどが破片であるがⅢ期1点を除き、Ⅳ・Ⅴ期の所産で、主要例しか図示できなかったが、総計200点余り出土した。それを以下のように塗料によって分類した。

##### (1) 漆塗り土器(図242-1~9)

漆を器面の内外面に塗って文様を描くAと、単に塗彩するだけのBとがあり、塗料が剥げ落ちているものも多い。塗料が剥げ落ちても、塗彩されたためにその部分の器壁が塗料によって保護され、また周囲が風化していてもその部分が残っている場合もある(5)。浅鉢が多く、ほとんどが無文部と、内面などに塗彩している。漆には赤漆と黒漆があり、塗彩方法は、①単色塗彩手法、②二色で重ね塗りするか、一色をベースとして塗りその上に他の一色で文様を描く手法、③一色で文様を描き、その文様上に他の一色をそれに合わせて重ね塗りする三手法が観察される。漆塗彩色土器A(1~5)は10点あり、1~3がC手法で塗彩され、1は黒漆が下、赤漆が上に、2(巻頭図版2-2)・3は赤漆が下、黒漆が上に塗られている。4はb手法で、ベースに黒漆を塗り、赤漆で文様を描いている。5は剥離がみられはっきりとしないが部分的に赤・黒色が残っている。他はa手法である。文様は、太線、細線、塗り潰して三角形、楕円形、円形などの幾何学文様を表現している。2本の平行する太線の中に斜行する楕円文を列点状に描くものも見られる。

これら漆塗彩色土器は約50点出土した。Ⅳ・Ⅴ期のⅠ群土器が主で、Ⅲ群土器は1点のみである。1(巻頭図版2-3)は土壙35から出土した。



## (2) 漆塗り丹彩土器(図242-10~12)

赤色塗料にベンガラを、黒色塗料に黒漆を使用している彩色土器である。概して浅鉢が主体で爪形文及び無文部、内面などに塗布している。ほとんどがベンガラを初めに塗り、黒漆を上塗りしている。中にはベンガラや黒漆を三角形やレンズ形などの透き間を残して文様風に塗るものがある。

これらの土器はIV・V期のIII群E・Gが8点、同一個体と思われるI群土器が23点の計31点余がある。

## (3) 丹彩土器(図242-13~24)

赤色塗料のベンガラを塗った土器である。III群土器はおそらく赤色を目立たせる効果を狙ったと推察される明るく白っぽい胎土が多く、中には白い化粧粘土を塗ってあるものも観察される。浅鉢、深鉢が半々で、爪形文、凸帯文、平行沈線文、無文部、内面などに塗布している。中には文様風に三角形やレンズ形などの透き間を残したり、帯状に塗るものがある。

これらの土器はIII期II群が1点、IV・V期I群が60点余、III群土器は70点余りの計130点余り出土している。III群E・F・G・H・Iで北白川下層II a~II c式に比定され、IV・V期に併行するものである。

以上、彩色土器は浅鉢であること、内面にも塗られるものがあること、使用痕(煤・お焦げなど)が、3点を除いてみられないことなどから、煮沸形態の土器ではなく祭祀的供膳形態の様相をもっていたと考えられる。いずれにしても、鳥浜貝塚出土品を参考とするまでもなく、かなりの漆生産、彩色技術をもっていたことはあきらかである。

(島田 哲男)

註1 縄文前期の漆塗彩色土器で文様を描いている確実例は、福井県鳥浜貝塚[森川他1979](北白川下層II b~c式期)、長野県内では塩尻市鼻屋敷遺跡(諸磯a式期)、富士見町日向遺跡[武藤1966](諸磯b式期)に例がある。その他、栗原文蔵氏の御教示によれば、埼玉県寿能遺跡で見られるとのことである。

## 8) 阿久II・III期の土器成形(挿図231、図版178・179)

縄文土器は原則として、粘土紐巻き上げ法か、粘土帯を積み上げ(重ね)て成形する。この接合の際には、擬口縁、器面の凹凸が生じ、土器の成形過程が理解できる。また、土器の割れ方も擬口縁にそうことが多く参考となる[佐原1956・70~73]。特に、II期I群Aはそのもつ特性から、成形過程の理解できる好資料がある。しかし、II・III期II群(繊維)土器には擬口縁の観察しうる資料はきわめて少ない。

本遺跡では擬口縁は、a、丸みを持つ、b、内傾する、c、外傾するの三者がある。

## (1) II期I群土器A(挿図231)

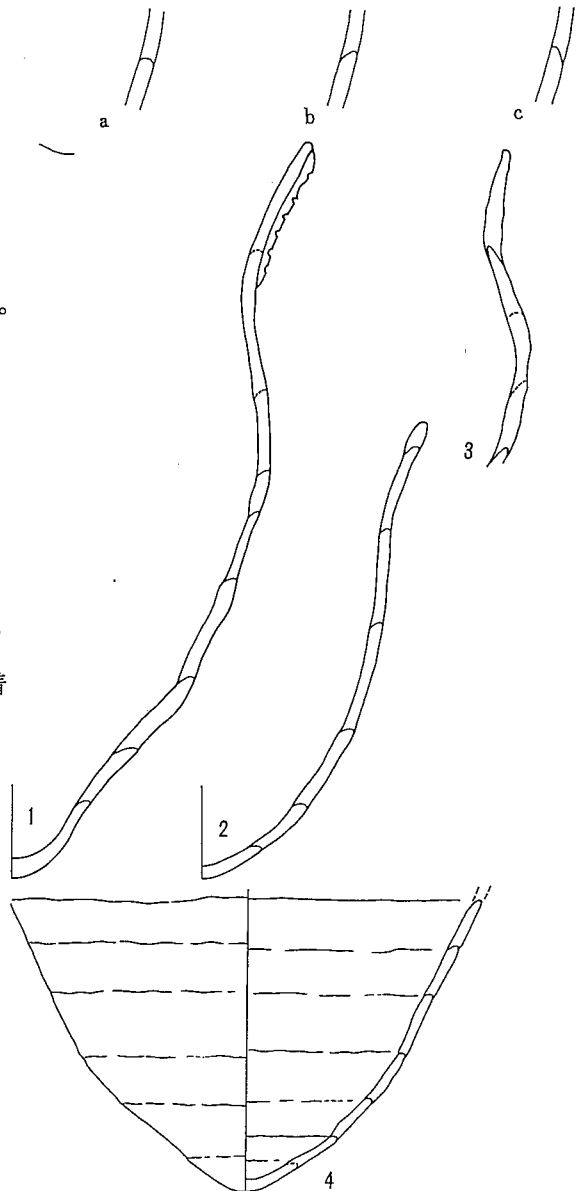
いくつかの好資料がある。bが多く(挿図231-1・2)、cは胴部径よりも径の小さい頸部部分にみられる(同-3)が、この種の土器のすべてに共通するかどうかわからない。粘土帯の幅は6cmを越えるもの(1700)もあるが大多数は3~5cmである。底部付近の急な立ち上がり部分は粘土帯の幅が狭く胴部の一部には逆に広がるなど、若干の変化はあるが、総じて均一であり、いずれも口縁に平行してまわる(同-4)が、一周させた粘土帯のつぎ目は不明である。接合部分は入念に指でオサエられている。

底部は粘土紐巻き上げ等の痕跡がみられないところから、粘土塊から一気に尖底部を作りだしたであろう。尖底部上端の径は5~8cm、高さは2~4cmが多い。

## (2) III期I群土器

口縁部および胴部の接合を系統的に知る資料は少ないが、底部にはかなり良好な資料がある。50例の底部を観察した結果、擬口縁は11例にみられ、うちbは2、cは9例にみられた。これはII期I群Aがすべてbであるのに対して、cが多いのは、尖底と平底の相違からくるものであろう。また、擬口縁まで縄文施文された例がいくつかみられる(1947・2013)。これは粘土帯を積み上げながら、順次施文したことを示しているが、1段毎か、数段毎にしたのかは不明である。III期I群土器は底部が不安定であるのに対して、器高・口径とも大きな大形土器が多い。このために、粘土帯の積み上げにはかなりの時間を必要とし、縄文施文も同時におこなわれなければならなかったであろう。IV期I群土器の中には擬口縁の中に刻目をつけたものもみられ(2008)、これも、接着をより容易にするためのものであろう。粘土帯を積み上げながら文様施文することは福井県破入遺跡出土の押型文土器にみられる〔仁科1977〕。ここでは、大形土器の接合を口縁部と胴下半を別個に成形・施文したのちに、接合したという。この点ではIII期I群土器は異なる。

底部は1例にのみ円盤(1891)が認められたにすぎない。従って、多くは、円盤成形をすることなく、粘土塊から平底を高さ3～5cmまで作りだしたようである。



挿図 231 II期I群Aの擬口縁

### (3) 土器の成形手順

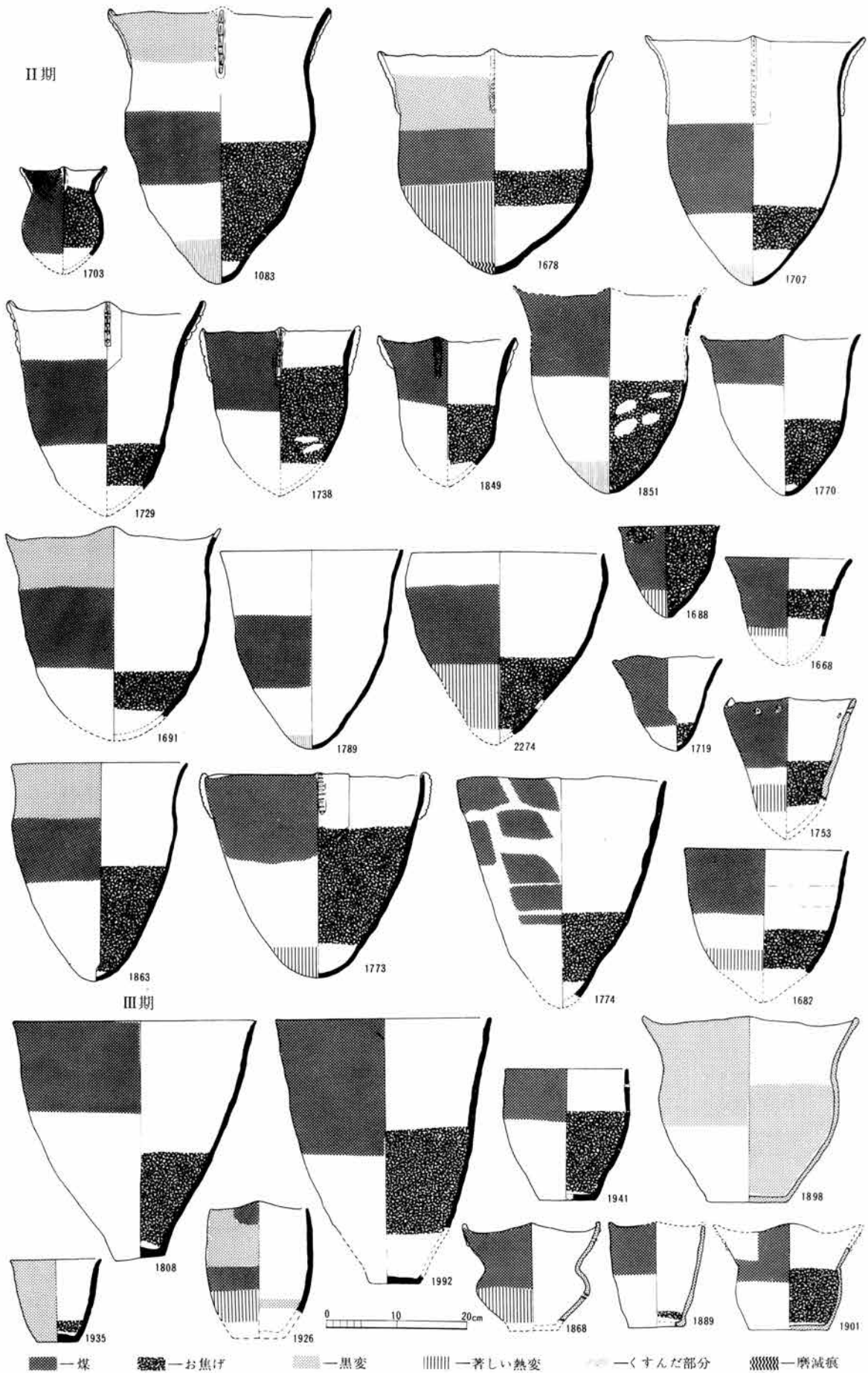
II期I群Aは擬口縁観察からみる限り、尖底部分の成形に始まり、以後、底部から口縁部まで、口縁に平行して帯状に粘土帯を積み上げて成形したと思われる。器高49.5cmの大形では8～10段(挿図231-1)、器高24.5cmの中形では6～7段(同-2)である。波状口縁の成形は大形波状(1766)では不明であるが、小形の例は口縁部に予定した粘土帯の一部から撮みだす(同-1)か、波頂部のみ粘土を盛っている(同-2)。

擬口縁が多く残された理由は、薄手で硬い胎土と器形および成形技法と密接な関係があろう。そこには土器成形にかなりの時間が必要としたことも示すであろう。しかし、II期I群Aをもって、他の尖底土器の成形がこうであったといい切ることは早計で、今後の検討が必要である。

III期I群土器の成形手順は底部から口縁にかけて、施文しながら行なったと思われるが、いまひとつ分析が不十分であり、今後の課題としたい。(佐藤 信之)

### 9) 土器の使用痕(煤とお焦げ)(挿図232・233、図版180)

土器の使用痕としては、外面に煤(炭化物付着・黒変)、熱変、磨滅痕など、内面にお焦げ(炭化物付着・黒変)が観察できる。<sup>(1)</sup> 黒変は一次的な黒斑〔佐原他1964〕とは区別される二次的な炭素の染み付きで、程度の少



挿図 232 土器の使用痕(1)

ない使用痕と理解され、外面の黒変は煤、内面の黒変はお焦げの染み付きと考えられる。熱変は二次加熱を受けて、外面胴下半部の器面がボロボロと細かく剥落したり、赤変している状態である。磨滅痕は土器を炉などに据える時につくものと考えられ、外面底部周縁が擦り減ったような痕跡が見られる。これらを煮沸形態の深鉢にしぼり時期的に観察した。

(1) II 期(挿図 232)

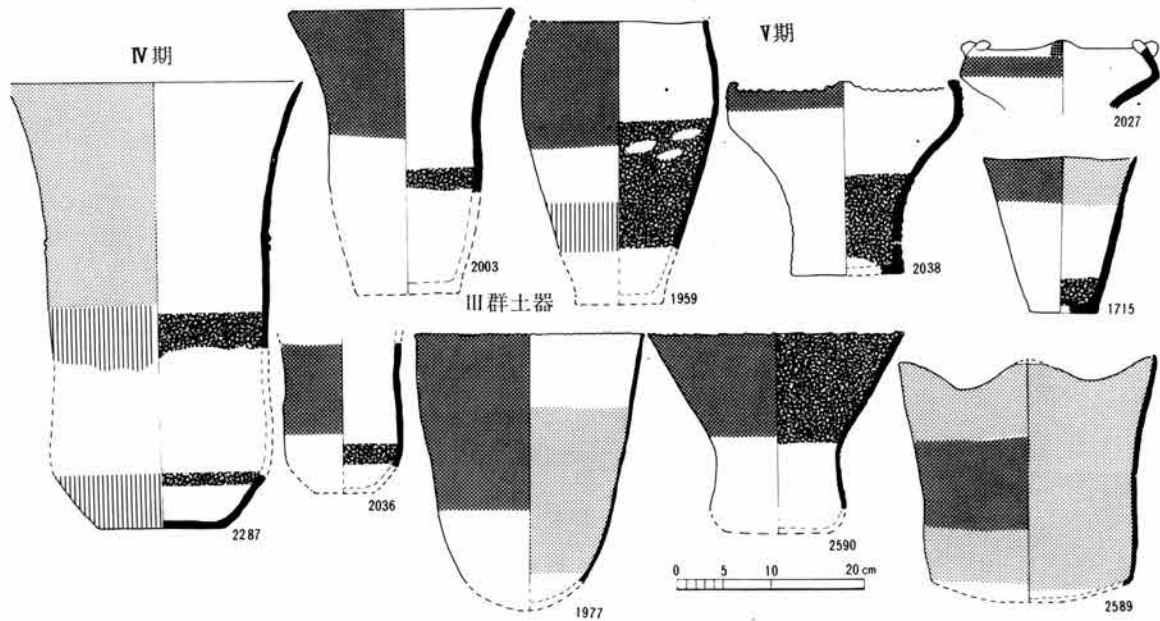
主体となる I 群 A・B をこの対象とし、他については明瞭な資料が少なく観察が難しいので除いた。胎土中の繊維有無はほとんど関係ないらしく、I 群 A・B 共にほぼ同様の使用痕がみられた。煤の付着は概して口縁部から胴上半部外面に認められ、なかには胴上半部にベルト状に付着するものもある(1083・1678・1789・2274)。お焦げは器内面の胴下部、胴上半部、全体の三種類が観察され、例外はあるがほとんど底面近くには付着していない。前二者の土器にはベルト状に観察されるものもある(1668・1678・1707)。熱変は胴下半部外面に観察された。しかし、胴下半部から底部までが熱変している例は少なく、一部に色のくすんだ部分が見られたのみである(1707・1789・1851)。おそらく、これは青森県下田代納屋 B 遺跡(三宅他 1976)で言及されているように、土中や灰に突き刺していた部分と推測される。また、一部のものに尖底周縁及び尖底頂部に磨滅痕が観察された(1678)。これは、土中・灰に突き刺し固定させる時に着いたと考えられ、函館空港中野遺跡(横山他 1979)で示されている「ねじ込み」と同じ痕跡であろうが、観察できたのが一部のみで他には見られないことから、断定できないが使用方法によっても痕跡の着き方に違いが生ずると思われる。

(2)

他に、器内外面の剥落例が見られた。これは1次焼成時のタキ割れ、2次焼成時のタキ割れ、ハジケなどと考えられるが、胎土、成形、整形が関係し、起因しているものとも推測される。

(2) III 期(挿図 232)

I・II 群土器ともほぼ同様の使用痕があり、胎土中の繊維有無は関係ないと思われた。煤の付着は概して口縁部から胴上半部外面に認められる。内面のお焦げは、胴下半部、胴部全面に付着しており、一部は



挿図 233 土器の使用痕(2)

ベルト状になるものも見られるが、内部底面にはほとんど付着していない。熱変は外面胴下半部に観察された。I群土器の深鉢E・Gの底部外面周縁には磨滅痕があり、これは口縁部が大きく、底部が極端に小さく、立てるには不安定のため、II期I群Aと同じように土や灰の中に埋め込んで使用した際の痕跡であろうが、くすんだ部分は見られない。II期の土器に認められた器面の剝落はほとんどない。

### (3) IV・V期(挿図233)

IV・V期ともにほぼ同様の使用痕があったので一括した。煤の付着は概して口縁部から胴上半部外面である。V期深鉢E、Fは口縁部外面に煤が必ずベルト状に付着するのが特徴的である(2027・2038)。お焦げは胴下半部内面にあり、一部ベルト状に付着するものも見られる(2287)が、底部内面にはほとんどない。熱変は胴下半部外面に、また、底部の磨滅痕、器面の剝落などはほとんど認められない。

### (4) III群土器(挿図233)

煤、お焦げともに内外面全面に付着するものが多く、熱変は胴下半部外面に見られる。丸底や丸底ぎみの平底に観察されるが、十分な資料が少ないので磨滅痕の判定まではっきりしない。<sup>(3)</sup> II～V期のI・II群土器で、この種の使用痕があまり見られないことから使用法、煮沸する容器の違いがうかがわれる。

以上、使用痕は繊維の有無等の胎土の違いは、無関係と思われ、縄文早期の函館空港中野遺跡、青森県下田納屋B遺跡、縄文中期の富士見町曾利遺跡、原村居沢尾根遺跡の観察と本遺跡の観察をくらべて見ても、「曾利」の中で小林公明氏が予測しているごとく、尖底・平底の相違は底の形態の違い程度で、使用痕の差はさほど見られない。ただ、III群土器は使用痕のあり方から、異なる煮沸方法であった可能性が大きい。なお、胎土内にみられる種子丘痕(図版179)については今回は省略する。(島田 哲男)

註1 土器の機能、使用痕については、煮沸、貯蔵、供膳形態などとはっきりしているためか、文様などに気を取られてしまう傾向が強く、近藤義郎氏の製塩土器の研究〔近藤1958・1962〕、武藤雄六氏の縄文中期のキャリパー形土器の研究〔武藤1965〕、有孔罎付土器の研究〔武藤1963・1970〕などのほか、機能についてはあまり述べられていなかったが、近年、青森県小田野沢下田代納屋遺跡〔三宅1976〕、富士見町曾利遺跡〔武藤他1978〕、函館空港中野遺跡〔横山他1979〕、北海道聖山遺跡〔芹沢1979〕、東京都新山遺跡〔井口1981〕、原村居沢尾根遺跡〔青沼他1981b〕など観察、機能論の報告がふえつつある。使用痕の用語はほとんど居沢尾根遺跡を踏襲したが、一部他のものを用いた。

2 神奈川県夏島貝塚〔杉原・芹沢1957〕で出土状態から推定された「尖底土器はローム面に突き刺すようにして直立させた」ことが、土器そのものの観察からも理解される。

3 鳥浜貝塚〔森川他1979〕での土器の炭化物付着状態の観察でも、「土器の大部分は、表裏に炭化物がびっしりと付着している」と同様な結果が述べられている。

### 10) 阿久X期(挿図175、図144・145、図版203～205)

阿久X期の住居址は10棟検出された。出土遺物の検討から、これらは同一時期に存在したと考えるが、住居址18と19が切り合うなど細分の可能性もあろう。土器分類に使用した十二ノ后編年によれば、十二ノ后X期に並行する時期であり、平安時代末となろう。

出土遺物には土師器杯B・C・D・E・F、皿A・C、甕C・E・F、小形甕A・C、羽釜、黒色土器杯B・C、須恵器甕・長頸壺、灰釉陶器壺・皿などと鉄器に刀子・鎌、それに住居址16より出土した磨製石鎌がある。このうち杯E(2093)は諏訪市十二ノ后遺跡ではVII期までで姿を消しているのに反し、本遺跡および周辺遺跡〔足場遺跡、岡田1974・判ノ木山東遺跡、百瀬他1979〕では、その後も検出されており、甲府盆地で展開

を続けた杯 E を受け入れる環境にあったようである。また杯 F(2081・2084 など)は口縁部が「玉縁状」にふくらんでいるのが特徴であるが、これも口縁部が頸部から急角度で大きく直線的に外反し、口縁部内面の屈曲部に段がつく甕(2091・2108・2112)や底部にケズリのある皿 C とともに、上平出遺跡[末木他 1974]、大坪遺跡[菊地他 1976]、大切遺跡[山崎他 1977]など、甲府盆地の諸遺跡で検出されており、この地域からの影響がかなり強いようである。

さきに八ヶ岳西南麓における平安時代後半の集落立地を検討した判ノ木山西遺跡の報告[小林 1981]において、共通点として指摘された部分は本遺跡でも確認される。すなわち、折戸 53 号窯期の灰釉陶器を多量にもち、住居址は長尾根状の台地の平坦面から低地への傾斜面にほぼ等高線に沿って分布し、さらに各住居址間での重複関係は少なく、分布状態もあまり密でなく、通常の土器編年上で特に時期の異なる住居址が存在しないという、近接する短期間の居住状況や、また、後背地に八ヶ岳の裾野から流れ出す小河川によって形成された谷水田が存在するなどの類似点が指摘できる。こうした共通点を持ちつつも、遺跡単位で検討すると相互に若干の差異をもっている。たとえば、灰釉陶器の産地を推定すると、判ノ木山西遺跡は篠岡窯の製品が 1 点ある他は、東濃系の製品なのに、近接する判ノ木山東・頭殿沢両遺跡では、前者は篠岡窯が 18 個体中 14 個を占め、後者は篠岡窯と東濃系の比は 7 : 13 であった[小林 1981]。本遺跡は判ノ木山西遺跡と類似しており、篠岡窯の製品は 1 点にすぎず、他は東濃系である。また、杯 E は判ノ木山東・足場両遺跡でも確認されているが、判ノ木山西、頭殿沢遺跡など本遺跡より山梨よりにある遺跡であっても出土していない点などである。このような「集落単位の差は集落の成立背景を考える際には、平安時代後半にとっては重要な現象」である[小林 1981]が、未だ十分な検討を待たず今後の課題である。

八ヶ岳西南麓の標高 900 m ライン上を横断した中央道用地内の調査は、縄文時代の宝庫であるだけに、その面での成果が強調されがちである。しかし、八ヶ岳西南麓の歴史は縄文時代が終ると長い無人の地となる。本遺跡でもわずかに一点の弥生土器が出土したが、この例以外は弥生時代の遺跡は今のところない。また、富士見町でもその遺跡数は極度に少ない。こういった意味で、本期はきわめて重要な意義があろう。特に、中央道調査によって、かならず、尾根南斜面に小規模ながら集落が形成され、本遺跡における鉄鏃・磨製石鏃、居沢尾根・判ノ木山東遺跡および御狩野遺跡における緑釉陶器、判ノ木山東遺跡の銅製八稜鏡、御狩野遺跡における鉄鐸などの、豊富な内容をもつ出土品は、単に山間地における小規模集落の存在を意味するだけではなく、すでに善光寺平で笹沢氏らが明らかにしているように[笹沢 1972]、平安時代における庄園制の問題と深い関係があるといわざるを得ない。多分、八ヶ岳西南麓は、鉄鐸に端的に示されるように、諏訪大社との深いつながりがあったものと思われる。(小柳 義男)

## 2 土製品・その他(挿図 234、図 146、図版 177)

土製品・その他を土製球状耳飾・環状土製品・不明土製品・土器片錘・土製円板・焼成を受けた粘土塊・顔面把手・ミニチュア土器に区分して簡単に説明したい。

### (1) 土製球状耳飾(2120)

1 点のみ DF 49 から出土した。形状は径 35 cm のほぼ円形で 1/3 が欠損している。断面形は高さ 14 mm、厚さ 11 mm の外側がやや膨らむ楕円形で、長石、石英粒を含む良好な胎土で周囲を丁寧に磨いている。本遺跡の滑石製球状耳飾にはこれと同様な断面形をとるものはない。土製球状耳飾は、諸磯 b ~ 十三菩提式期に関東地方(諸磯式・浮島式文化圏)を中心に分布している(藤田 1971・1975、西川 1973)ので、V 期の所産と考えられる。

(2) 環状土製品(2121・2125)

5点が出土し、A—円柱形(2121・2122)、B—扁平な円柱形(2123)、C—円錐台形(2124・2125)があり、粘土帯で輪を作るように製作されている。Aは住居址40(2121)・32(2123)からの2点があり、2121は径22×19mm、高さ25mmで、胴部がややくびれ、中央に7×5mmの楕円形の孔をもち、胴部外面は篋描斜行沈線が施される。胎土には雲母・長石粒を多く含む。2123は径・高さとも15mmで、中央に径5mmの孔があり、前者同様の文様が描かれ、胎土には長石・石英を含む。B(2123)は住居址24から出土し、径は24mm、高さ14mmで中央に径8mmの孔をもち、長石・石英を含む。CはCN57出土の2124が上底径12mm、下底径17mm、高さ16mmで中心に径6mmの孔をもち、長石粒を多く含んでいる。2125は住居址24から出土し、上底径10mm、下底径19mm、高さ12mmで、中心に上底で25mm、下底で12mmと円錐状に広がる孔をもつ。胎土は長石粒を含んでいる。これらは住居址出土の共伴遺物よりII期の所産と考えられる。

(3) 不明土製品(2126・2127)

2点ある。2126は住居址3出土。残存部長20mm、幅7mm、厚さ5mmの弓形状で棒状工具による押圧文が施されている。胎土は細砂粒を含み緻密である。共伴遺物よりX期であろう。2127はCD58出土で、残存部長45mm、断面は17mmの円形で先端に向うほど平たくなる。胎土は長石粒・石英粒・砂粒を含んでいる。

(4) 土器片錘(2128)

1点のみCN58から出土した。長軸3mm、短軸19mmの長方形で重さが5.5gあり、短軸に切り込みが見られる。胎土などからIVかV期の土器片を素材としていると思われる。

(5) 土製円板(212・2129・2139)

12点出土し、有孔(2129)、円形(2131～2134・2136～2139)、楕円形その他(212・2130・2135)に分類される。素材はすべて土器片を利用しており、時期的には2130がII期、2131がIII期、2129・2137～2138がV期、212がIII群(関西系)、2139が時期不詳である。重さは最小(2132)が4.25g、最大(2137)が21.85gである。

(6) 焼成を受けた粘土塊(図版177)

住居址57及びその周辺のグリットから、大は6mm、小は5mm程度の焼成を受けた粘土塊が230個余り出土した。粘土塊はII期の土器の胎土から砂粒その他を除いた感が強い。高い熱を受けていないらしく軟弱である。中にはスサが混入するものや半截竹管や棒などによる沈線が見られるものもある。

(7) 顔面把手(挿図234)

FT25と住居址21埋土出土例が接合したもので、顔面部1/3、後頭部1/2を欠損している。粘土板を2枚組み合わせて作られたと考えられ、内面の頂上部に接合痕が見られる。頭部から後頭部下部、目の上か

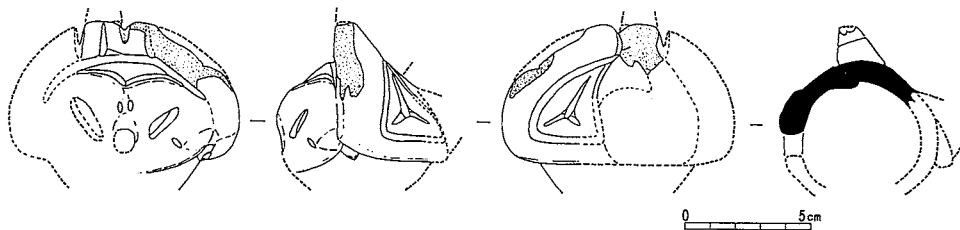


図234 顔面把手実測図

ら鼻にかけては粘土帯が貼付されており突出している。目と口はヘラ状工具によって穿孔され、鼻孔は同様の工具の先端で突き刺している。後頭部の左半分には棒状工具により三叉文が施されている。また、右半分は欠損しているのではっきりしないが、剝落痕が見られるので何らかのモチーフの突起が貼付されていたと思われる。文様などから縄文中期の井戸尻Ⅰ式期の所産と推定される。

(8) ミニチュア土器(1709・1713・1714・1771・1781・1875・1876・1914・1915・1928・2140～2145)

Ⅱ期10(1709・1713・1714・1771・1781・1875・1914・2140～2142)、Ⅱ～Ⅲ期1(1915)、Ⅲ期1(1876)、Ⅳ期2(1928・2143)、Ⅴ期2(2144・2145)の計16点がある。そのうち深鉢形がほとんどで13点、浅鉢形は3点のみである。住居址63出土例(1781)は内側にはウルシと思われる黒色と赤色の塗料が厚く付着していた。また、住居址36出土例(1713)にも底部内面付近に赤色塗料らしいものが薄く付着していた。ミニチュア土器の用途は、大形品はスス・オコゲの残存から煮沸用と考えられるが、1781・1731のごとく塗料が内部に付着したものは塗料その他の貯蔵具であろう。(島田 哲男)

- 註1 他にⅤ期の獸面把手があるが別項で述べられているので省略した。また他に、昭和53年に原村教育委員会がおこなった本遺跡南側農道拡張に伴う発掘調査の際、縄文中期の土偶、ミニチュア土器が出土している。
- 2 土製袂状耳飾は、東は宮城県、西は富山県まで分布している[藤田1971・1975]。長野県内では、諸磯b式期で富士見町日向遺跡[武藤1966]、諸磯c・十三菩提式期で富士見町籠畑遺跡[武藤1968]、下諏訪町武居林遺跡[中村1979]、塩尻市酒沢遺跡の4例がみられる。
- 3 諏訪市十二ノ后遺跡に類例[樋口・宮沢他1976]が見られる。耳飾ともみられるが耳飾との型態的な違い(特に円筒形のものが胴部に文様をもつことなど)や袂状耳飾という決った形の耳飾があることなどから環状土製品とした[高山1965]。
- 4 東京都町田市藤の台遺跡に類例がみられる[原田他1980a・b]。

### 3 石器

#### 1) 石器の型式的変化(挿図235～250、図218～241、図版189～199、表13・14)

ここでは、住居址内より出土した石器の型式を時期別に追ってみることからその変化をみた。石器の所属時期をいかにして決定するかは大きな問題である。主として直接生産用具である石器は、その機能のゆえに同一器種内における変化はきわめて乏しく、個々の石器から型式的変化をとらえて明確な時期決定をすることは困難である。そのため出土する土器等によってその所属時期を判断せざるをえなかった。本遺跡においてはドットによる資料検討を経て、住居址の所層時期を決定しているが、当然ながら他時期の土器片も混入しており、石器にもその可能性がある。したがって、石器もドット操作により出土位置を明確にして、より確実に同時期に所層する石器群を明らかにするべきであるが、本遺跡では切り合い関係の住居址も少なく遺物も比較的良好な状態で残っていたので、便宜的に同一住居址より出土した石器については、一括して同時期のものとして扱っている。

#### (1) 原石・剝片類

住居址内からは、合計すると約18,000点の原石・剝片類が出土した。これらを時期別に集計し(表10)一住居址あたりの数を算出してみると、後述するように一住居址あたりの石器数と対応して増減していることがわかる。さらに原石・剝片の重量を時期別に比較してみると、Ⅱ-a期には原石28.3g、剝片3.3gであったものが、Ⅱ-b期には17.3、3.4となりⅢ期は14.4、3.1さらにⅣ-a期には14.9、4.0となってい



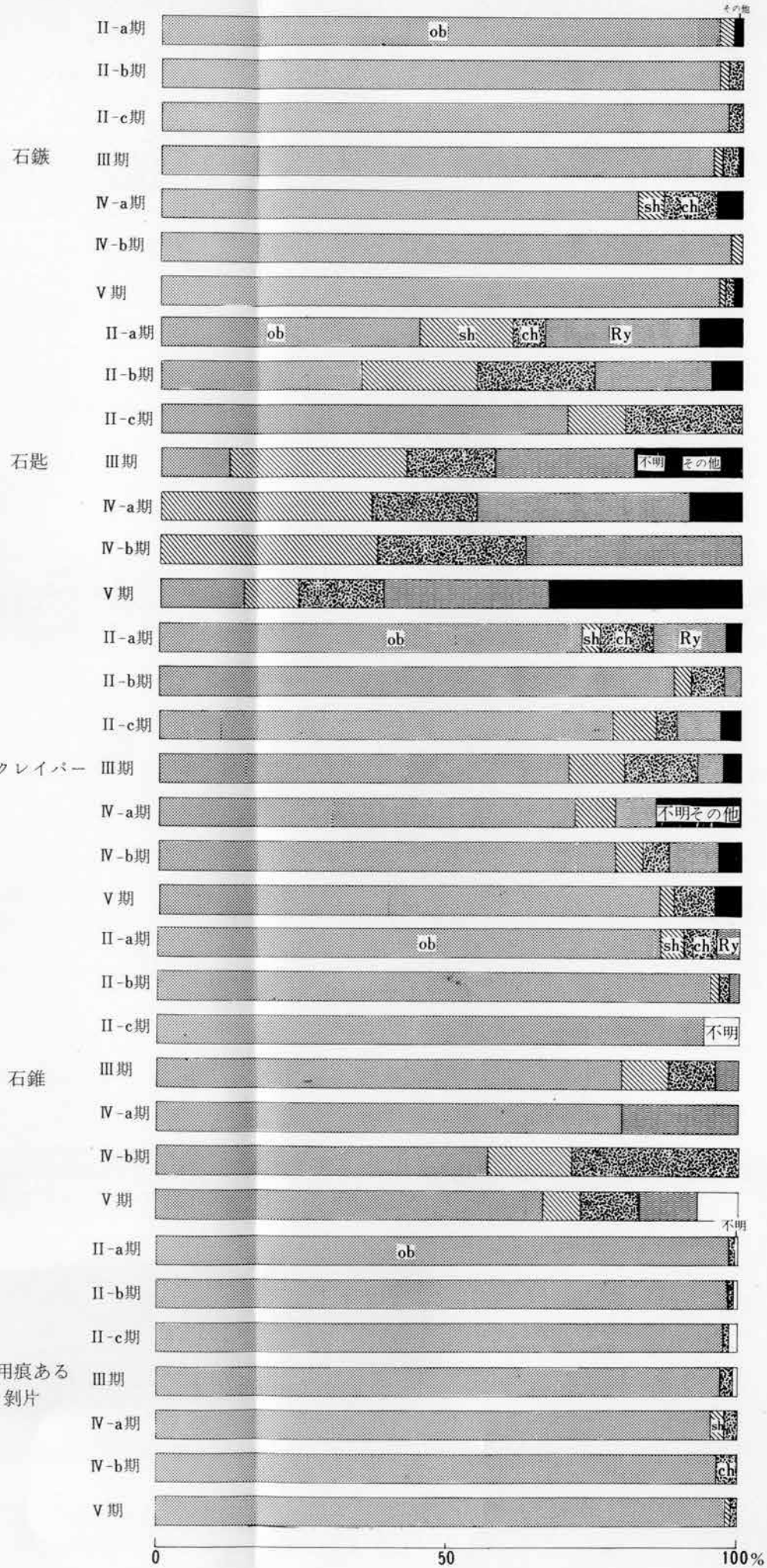
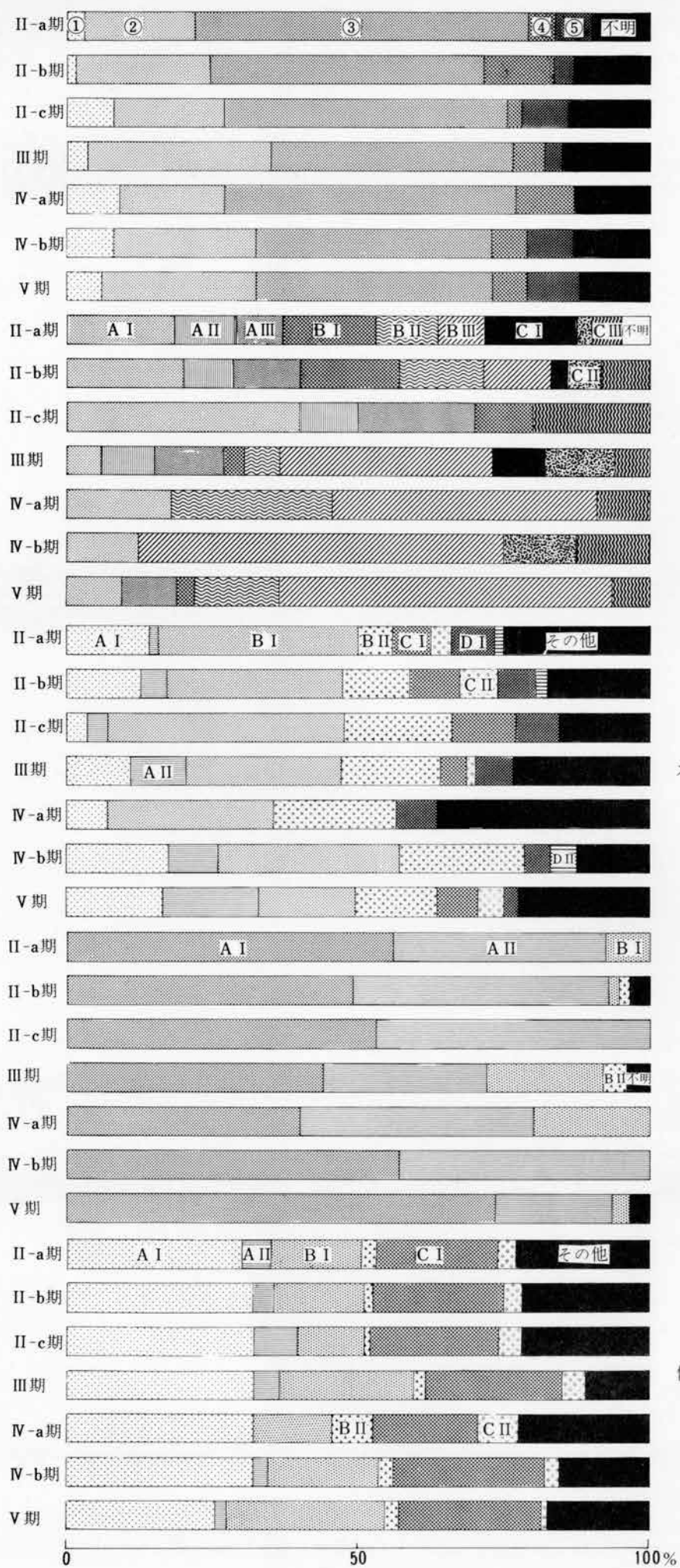


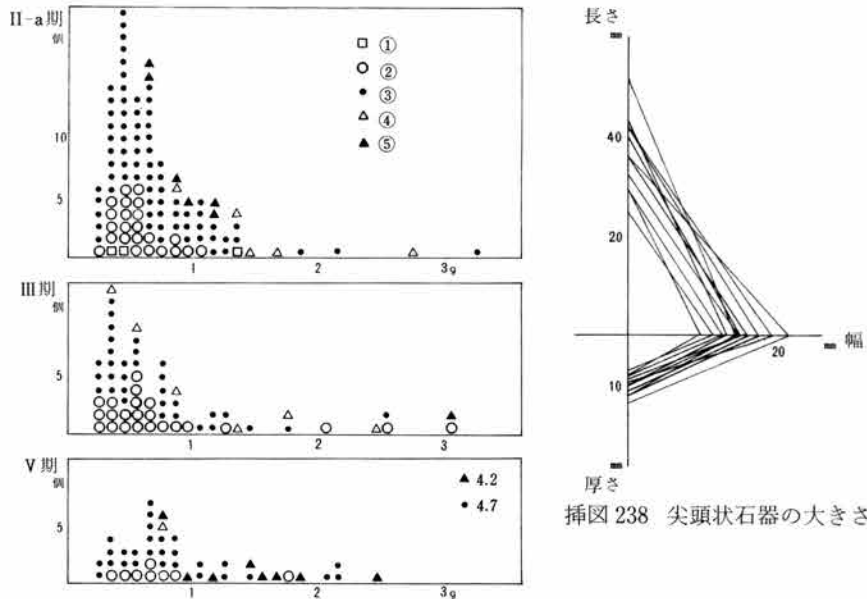
図235 住居址出土 石鏃・石匙・スクレイパー・石錐・使用痕ある剥片の時期別型式(左)と時期別石質(右)

る。剥片は3.5g前後で大きな変化は認められないが原石がしだいに軽量化(小形化)してくる傾向がうかがえる。<sup>(1)</sup>

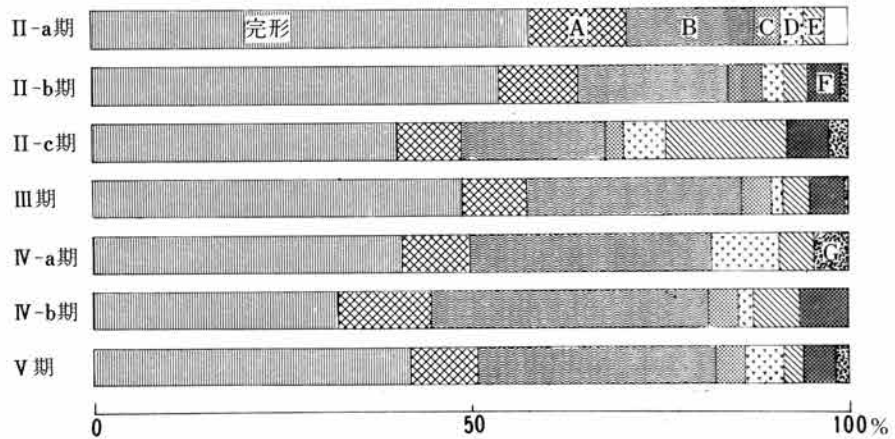
石質は黒曜石がほとんどで、その占有率は原石100%、石核99.6%、剥片99.8%となる。住居址内から出土した石器の石質については後述するが、石鏃・使用痕のある剥片などその大半が黒曜石製であるものでさえその占める割合は96~97%であり、石鏃・スクレイパー・石匙と石器が大型になるにつれさらにその割合が減少していく。この傾向はグリットでも確認されており、変質流紋岩・頁岩・チャートなどを石材とする石器の割合と本遺跡で出土した原石・石核・剥片・屑片に占める黒曜石の割合に大きな隔たりがある事実から、変質流紋岩・頁岩・チャートなどの石質の石器は他にその製作地を求める必要があるのかも知れない。<sup>(2)</sup>

(2) 石鏃

住居址内から765点出土した。II-a期208、II-b期183、II-c期37、III期145、IV-a期22、IV-b期49、V期121と量が多く、石器組成に占める割合は高いが、21.2%(III期)から10.6%(II-c期)と変化も大きい。各型式をグリットと同様、五段階に分け、それらの占有率を示せば挿図235となる。各期とも決りが全体の1/4~以下にあたる③が主体で、II-a期で57%と過半数を占め、以下IV-a期、V期には38%まで減少している。これに反してより決りの深いもの



挿図 236 住居址出土石鏃の型式別重量比較 (II-a・III・V期)



挿図 237 住居址出土石鏃の時期別破損

や平基・円基式のものが増加する傾向にある。

型式別重量は、グリットから得られた所見とほぼ一致する。さらに、これらを時期別にみた場合には、V期で③の重量が大きめである以外は、各時期とも均一で大きな変化は認められなかった(挿図236)。

石質は黒曜石が圧倒的で、各期とも95%前後をしめている。次いでチャート、頁岩の順となるがこれも各期ともほぼ同様な割合で石材の選択でも大きな相違は認められなかった(挿図235)。

破損は全体で50%(384点)であり、グリットでの状況と大差はない。しかし期毎に比較すると、II-a期では57%が完形品であったものが、しだいに破損品が多くなり、完形品はII-c期40.5%、IV-b期32.5%

と少なくなる(挿図 237)。この変化は、型式・石質・重量等に関係なく認められる。あるいは何らかの人為的影響があるのかも知れない。

### (3) 尖頭状石器

住居址内より 8 点出土し、II-a 期 3、II-c 期 1、III 期 2、IV-b 期 1、V 期 1 となっている。グリットからは 14 点出土している。型的には円基 9、平基 3 となり円基の占める割合が高い。石鏃と比較すると長さ 3 cm を越える大形のもので大半で重量も 5 g を越えることが多い(挿図 238)。また石質も黒曜石の占める割合が 62% と低く、破損状況でも F が 5 例と過半数を越えるなど明らかに石鏃とは分離される器種であるが、一部にはいずれとも判断しがたいものもある。

### (4) 抉入刺突具

本遺跡からは 12 点出土し、このうちの 10 点は住居址内である。II-a 期 7、II-b 期 1、III 期 2 とすべて III 期までである。出土した 12 点の型式をみると無茎凹基 9 点(IV 6、IV 3)、無茎平基 3 点と変化が少ない。重量は 1.2 g~5.5 g までバラツキがあるが 3.5 g 前後が多いようである。石質はすべて黒曜石である。本石器群が初めて報告された千鹿頭社遺跡以来十二ノ后遺跡、本遺跡と確認されているが、いずれも限られた時期に集中している。これまでのところ、II-a 期をさかのぼる例は知られてないが、調査例も少ないため今後より古いものが発見される可能性はある。多くは II 期に集中するが十二ノ后遺跡 64 号住居址(諸磯 A 式期)例が下限と思われる。

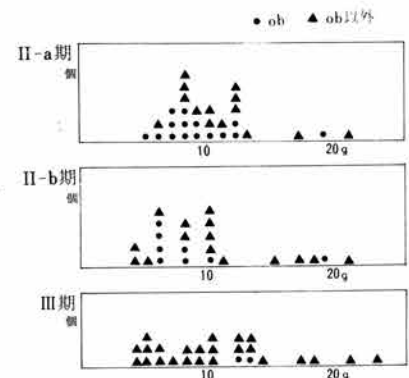
### (5) 石 匙

住居址より 156 点出土し、その内訳は II-a 期 38、II-b 期 35、II-c 期 10、III 期 33、IV-a 期 11、IV-b 期 8、V 期 21 となる。石器組成に占める割合は 7.8%(IV-a 期)から 2.9%(II-c 期)までと変化がある。時期別にみた型式別占有率は、II-a 期で A 37%、B 34%、C 24% で II 期を通して A の割合が高い。III 期は A 27%、B 46%、C 21% と B が A をしのぐ現象がみられ、以後 B がしだいに増加し、V 期には 70% 近くまで達する(挿図 235)。これまでに、中部地方では、横型が縦型をしのぐのは諸磯期[上野 1961]との見解や、東北地方南半以西では出現当初から横型を主流としているとの見解[鈴木 1981]があるが本遺跡の所見とは若干の相違をみせている。

黒曜石が主体をなす本遺跡の石器群において、石匙はその占有率の少ない石器であるが、石材の選択には時期による変化がある。すなわち、II-a 期では黒曜石の占有率は 44.7% を占め、ついで変質流紋岩(26.3%)、頁岩(15.8%)、チャート(5.3%)となっている。III 期黒曜石は 12% と減少し、頁岩(30.5%)、変質流紋岩(24%)、チャート(15%)などが多くなり、IV 期にはすべてがこれらの石材で作られたことになる(挿図 235)。石匙の大きさと石質との間に密接な関連のあることは前章でふれたが、時期別に検討してみると、若干の相違がみられた(挿図 239)。II-a 期には黒曜石製と他の石材製品との間の重量差は比較的少なく、その差が出始めるのは II-b 期からのようにみえる。

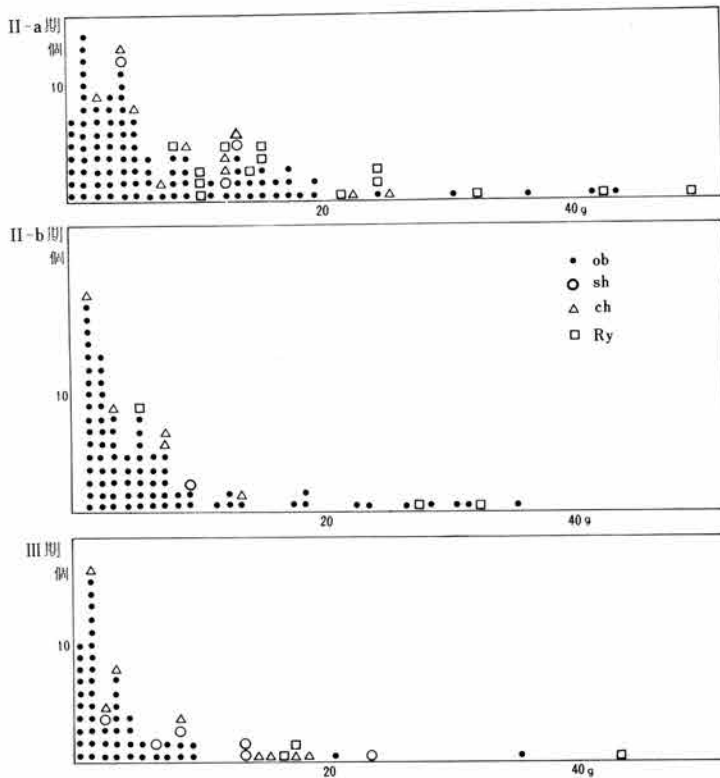
### (6) スクレイパー

住居址より 386 点出土している。II-a 期 121、II-b 期 94、II-c 期 27、III 期 64、IV-a 期 14、IV-b 期 23、V 期 43 である。これらの型式ごとの時期別変化は、各期毎にバラツキが大きくその方向をつかむこ



挿図 239 住居址出土石匙の重量分布  
(II-a・II-b・III 期)





挿図 240 住居址出土スクレイパーの石質別重量分布  
(II-a・II-b・III期)

化してゆく傾向が指摘できる(挿図 240)。特に黒曜石製の場合、II-a 期では 5 g 未満が 48.2%と半数近くを占めているとはいえ、10 g 以上も 28.7%あるのに対しII-b 期は 5 g 未満 54.4%、10 g 以上 17.7%と小形化をはじめ、III期には 5 g 未満が 76%と、よりその傾向が進む事実を指摘できる。黒曜石製石器全般の小形化傾向は先に触れた石匙においても確認されている。ともにII-a 期段階では大形品も多く、他の石材との間に大きな差がないことや、II-b 期から小形化する傾向がみられることも類似しており、小形化する背景には共通した要因があるように思える。

(4)

### (7) 複数挟入石器

住居址 80・27 から各 1 点、グリットから 4 点出土している。前者はII-a 期・III期に属するものである。いずれもすべて黒曜石製で 3～8 の挟入部をもっている。十二ノ后遺跡で出土した大形品はみられず、2 g 台を中心に 5.8 g が最大と全般に小形である。本石器群は千鹿頭社遺跡で初めて報告され、十二ノ后遺跡でも追認されたが、いずれも限られた時期に集中しており、その初源はII-a 期であり、それをさかのぼる資料は確認されていない。多くはII期に集中しているが、十二ノ后遺跡 47 号住居址(諸磯 B 式期)例が下限と思われる。

### (8) 石 錐

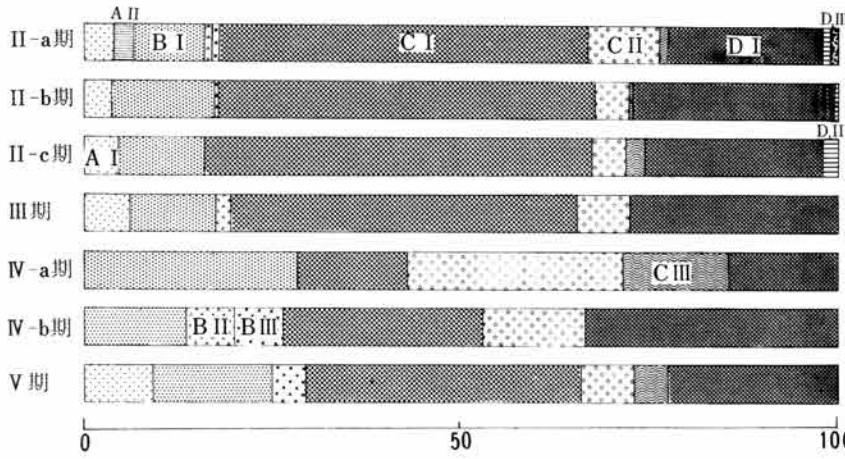
住居址より 193 点出土した。II-a 期 52、II-b 期 57、II-c 期 17、III期 25、IV-a 期 5、IV-b 期 7、V期 30 である。主体は A I である。III期にみられる B I の増加は一時的現象であるようにも思えるが、B I はグリットでは、石錐の中で 15.5%を占めるのに対して、住居址内全体では 5.7%と 10%もの差があり注意される(挿図 235)。錐部の長さも比較してみたが時期別の変化はみられず、型式別でもグリットでの所見を越えるものはなかった。

石質はII-a 期では 86.5%を黒曜石で占めるが、III期 80%、V期 66.5%と減少し、チャート等にとって

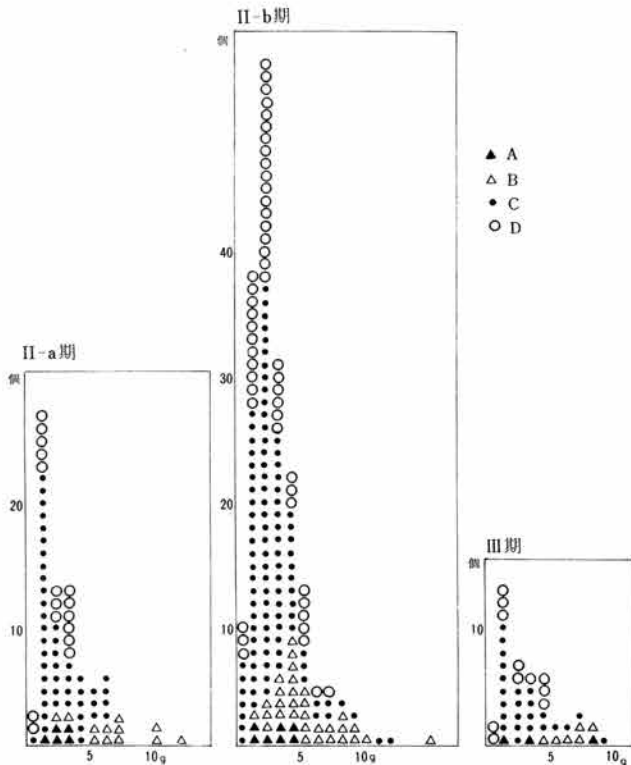
とができなかった(挿図 235)。しかし、刃部の加工状況をみると両面加工例が増加していく傾向がありそうである。すなわちII-a 期には 16.5%であったが、II-b 期 30%、III期 37%、IV-a 期 43%としたいに増加していく状況がつかめる。

石質は黒曜石が主体となり、占有率はII-a 期で黒曜石 72.7%、変質流紋岩 12.4%、チャート 9.0%、頁岩 3.3%という割合になっている。その後も黒曜石の占める割合は高く、III期に 70.5%まで減少した後はしたいに増加し、V期には 86%まで高まっている(挿図 235)。

黒曜石製と頁岩その他の石材製品のスクレイパーの重量を比較してみると、そこに、時代が下るにつれて小形



挿図 241 住居址出土ピエス・エスキーユの時期別型式



挿図 242 住居址出土ピエス・エスキーユの型式別重量分布(II-a・II-b・III期)

かわられる(挿図 235)。この傾向は石匙とほぼ同様である。なお、A IIはすべての時期にわたって黒曜石製であった。

(9) ピエス・エスキーユ

住居址から 487 点出土している。II-a 期 114、II-b 期 212、II-c 期

43、III 期 52、IV-a 期 7、IV-b 期 15、V 期 44 となっている。型式的变化は少なく比較的安定した組成をみせているといえよう(挿図 241)。石質はすべて黒曜石である。型式別の重量はほぼ、グリットでの傾向とほぼ一致する(挿図 242)。C・D は 1~2 g に集中し II-b 期ではより顕著であるが、新らしくなるにつれてそれが薄れる。また B はより大形であるが、A は C・D と重なる部分が多いようである。

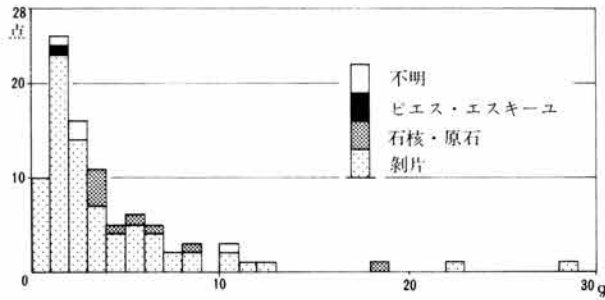
(小柳 義男)

(10) 有袂顕磨石器

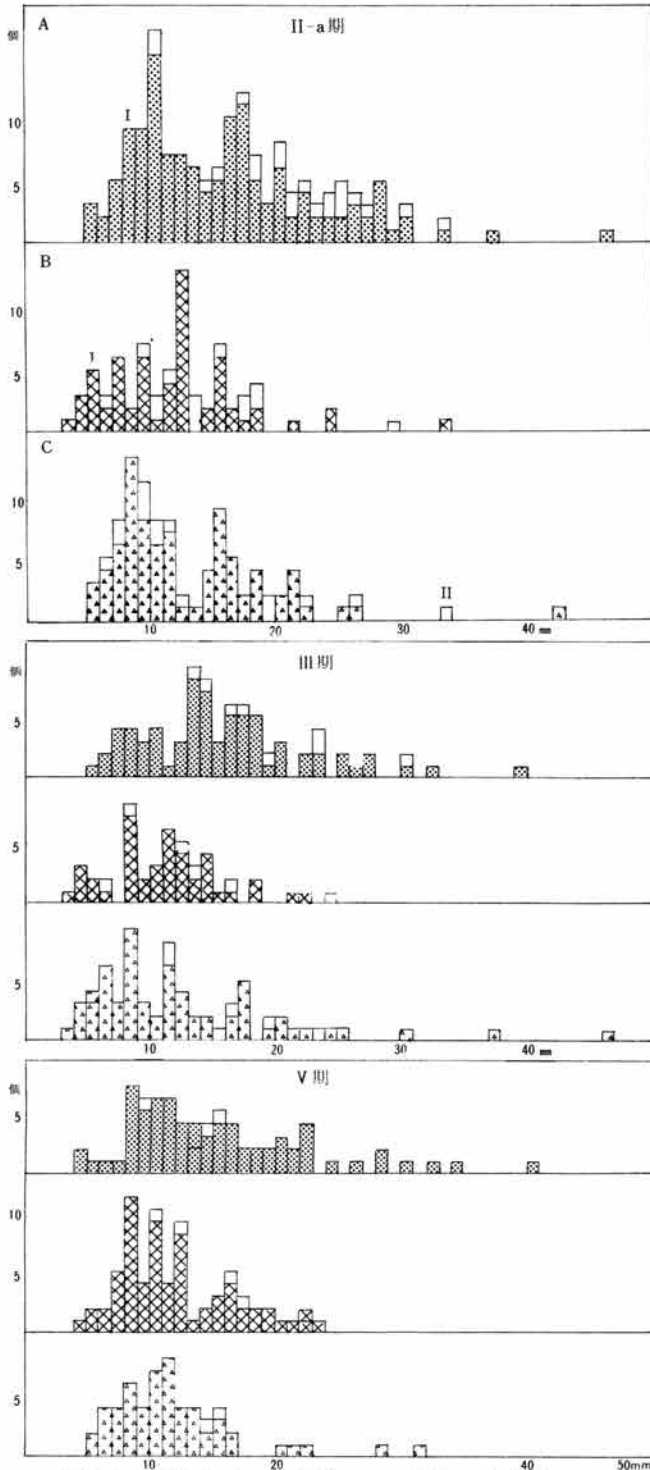
住居址 52、土壌 2、集石 1、遺構外 37 の計 92 点出土し、本遺跡出土石器に占める割合は少ないものの、1 遺跡からとしては、かつてなく多い出土量をみている。住居址の所属時期と出土点数は、II-a 期 13(1.0/1 軒)、II-b 期 27(2.1/1 軒)、II-c 期 6(1.5/1 軒)、III

期 5(0.3/1 軒)、IV-a 期 1(0.1/1 軒)である。以上の資料は II 期では、それぞれの時期の土器と明瞭な伴出関係にあり(住居址 64・30・40・37 等)、III 期では 2 例(住居址 33・74)が、その時期の、IV-a 期では、III・IV 期の土器と伴出している。さらに、土壌 790 でも明らかに II 期の土器と伴出し、遺構外でも II 期の遺構の集中する付近からの出土量が多い。以上の土器との伴出関係から有袂顕磨石器は、II 期を主体とし、わずかではあるが III 期にもあるという、限られた時期の石器とすることができる。千鹿頭社・十二ノ后両遺跡における有袂顕磨石器の出土状態も、これを裏付けている。ただ、初源については、I 期の遺構が住居址 1 棟のみで不明部分が多く、I 期以前にさかのぼる可能性もあろう。

素材は、剥片 77(84%)、石核 8(9%)の他、原石 1、ピエス・エスキーユ 1(住居址 44)、不明 4 であり、剥片とした中に、袂入刺突具・石匙の破損品を利用したものが各 1 点含まれている。二次加工のうち、ほとんどすべてにみられる 1 対の袂入(2 対が 1 例ある)の加工方法は、両面加工+両面加工 55 例、両面加工+片面加工 19 例、片面加工+片面加工 16 例である。中者の片面加工、および後者のその一部は、断面形



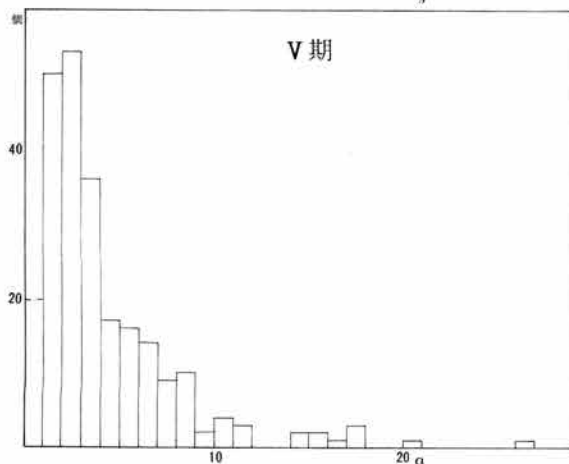
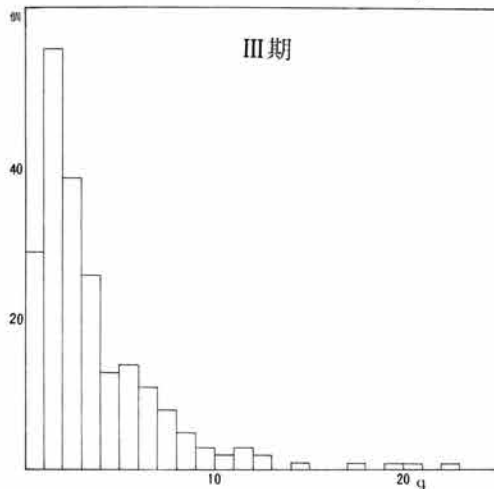
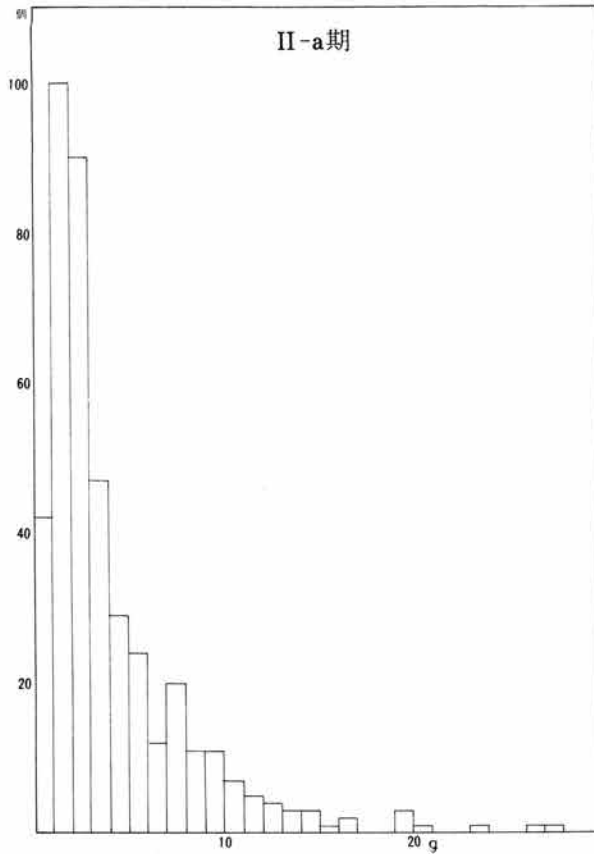
挿図 243 有扶顕磨石器素材別重量分布図



挿図 244 住居址出土使用痕のある剥片の型式別刃部の長さの比較(II-a・III・V期)

からくる必然的なものとしてすることができ、原則的に抉入は両面加工であろう。しかし、後者には意識された片面加工と判断される10例があり、特定の住居址(30・53)出土例に多く、片面加工を主とする群も存在していたらしい。抉入以外の二次加工は21例に観察された。成形加工と考えられるのは、1端を尖頭状とするもの(1390)と、丁寧な加工により分銅状とするもの(912)の両面加工の2例のみであり、他は、薄い部分や突出部を除去したと思われる15例の片面加工、厚いバルブ部を除去したと思われる2例の両面加工等であり、ある定形を作出する意図はうかがえない。従って全体形には対の抉入を有する以外に規則性がなく、剥片を素材としたものは選ばれた剥片の形に従っており、石核を素材としたものは石核状石器類が主として使われているようで、板状を呈している。このような中で、住居址出土群の間で、形態・加工に顕著な差を指摘し得る例がある。住居址30の片面加工による抉入が主で雑な作りの、使用痕のみられない一群、住居址33の厚ぼったい剥片を素材として顕著な使用痕を有する一群、住居址64の比較的整った一群、住居址69の方板状を基本形とする一群等である。一群の石器の製作者の、個性の表われとみることもできよう。

重量は、2g前後をピークとして0.7~2.2gまでが多く、大きくなるに従って漸減し、最大値は28.4g(住居址44)である(挿図243)。一方、阿久II期の剥片・屑片・石核の重量分布を、有扶顕磨石器が多く出土している住居址30・37・64出土の剥片・屑片・石核の重量分布を基に組み立ててみると、剥片・屑片は、ほぼ15g弱を最大として軽量になるに従って漸増し、3g前後から極端に多くなり始め1g以下は急増する。その分布曲線は双曲線状になると考えられる。石核は、小剥片や屑片の多い遺構



挿図 245 住居址出土使用痕のある剥片の重量分布  
(II-a・III・V期)

では石核も小さい傾向があったり、遺構によりもたらされた原石の大きさに差があるようであるが、通常、3 g を下限として 15 g 程度までが多い。有扶頭磨石器の重量分布から逆に、素材の有扶頭磨石器への用いられ方をみると、剥片は、2 g 以上はほぼ満遍なく使われているが、2 g 以下は素材として敬遠されており、二次加工による減量を考慮するならば、1 g 以下は使用されていない。石核は 3 g 台の小形のものが使用されている。極端に小さな素材は敬遠されるものの、大きさにはあまりとらわれていないようである。1 g から 6 g までかなり一定のパラツキをもつとした千鹿頭社・十二ノ后遺跡の分析結果とは多少異なり、より小形のものが、より多い傾向にある。<sup>(11)</sup>

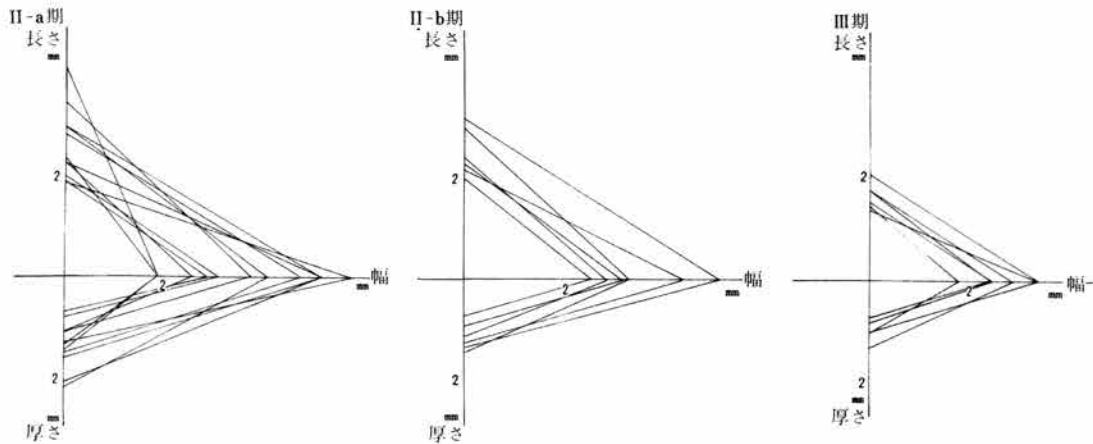
(小池 孝)

#### (II) 使用痕のある剥片

住居址から最も多く出土し、その総計は 1,628 点となる。II-a 期 411、II-b 期 451、II-c 期 171、IV 期 218、IV-a 期 44、IV-b 期 84、V 期 249 と各期 30~50% と最も高い組成率をしめしている。型式別では II-a 期が A I 30.1%、A II 5.1%、B I 15.8%、B II 2.7%、C I 20.9%、C II 3.2%、その他刃部を複数もつものが 22.2% という割合になるが、これは以後 II が減少傾向となるものの大きな変化はみせないようである(挿図 235)。素材は a がほとんどで、II-a 期には a 89.8%、b 9.2%、c 1.0% となっているが以後も類似した割合をしめしている。

刃部の長さを、II-a 期・III 期・V 期と比較してみたが、各期とも 1 cm 前後の長さに集中する割合が高い(挿図 244)。型的には A の刃部が長く、ついで B、C の順になる。重量は 1 g 台を最高に 10 g 位まで漸減する。この重量分布はまた十二ノ后遺跡での分析とも一致し、石核から作られる剥片の大きさに規定された結果をしめしているといえよう。(挿図 245)

石質は各期とも 96~98% が黒曜石で占められる(挿図 235)。



挿図 246 住居址出土石核状石器の大きさ(II-a・II-b・III期)

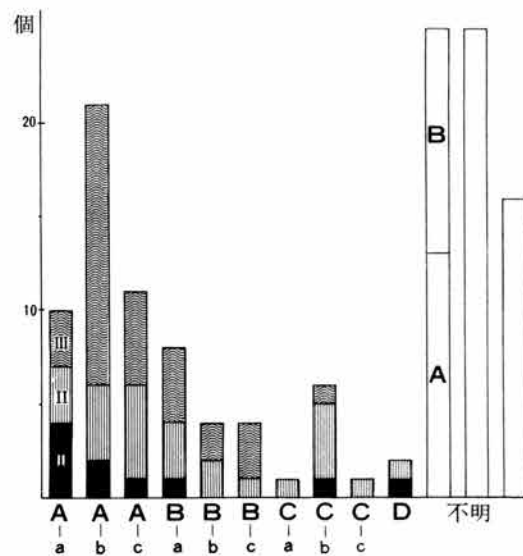
(12) 石核状石器

住居址より 38 点出土し、II-a 期 14、II-b 期 5、II-c 期 1、III 期 6、IV-b 期 6、V 期 6 となっている。その他にグリットから 38 点出土した。全体的には長さ 2 cm 前後、幅 3 ~ 4 cm、厚さ 1 cm 前後という形状をもつが、時期が下るにつれて小型化する(挿図 246)。石質はすべて黒曜石である。

本石器群は千鹿頭社遺跡で初めて仮称され、「石核なのか、石器なのか不明でない」状況であったが、剥離された剥片が小さすぎて石器としての使用が困難であり石核としては考えにくいという所見がみられるなど〔佐藤 1980〕、ようやく研究が進展しつつある。今後は剥片を含めた検討が必要である。(小柳義男)

(13) 打製石斧

138 点出土した。12 点が住居址から、他はグリット遺物である。接合資料が 5 例あり、実数は 133 点である。うち住居址出土は、II 期 4、III 期 2、IV 期 3、V 期 1、X 期 2 の計 12 点である。X 期の 2 点は混入と考えられる。これらは出土量が少く、型式的変化をたどることはできなかった。しかし、打製石斧としての形態が整いはじめるのは III 期からであり、II 期のものはスクレイパーとの区別が困難である。分布はおおよそ環状集石群に沿う(挿図 223)が、その周辺にもみられ、全体として散漫な分布を示している。接合資料はいつでもグリット間のもので、遺物番号 731+4653 は 22 m 程離れているが、隣接グリット間の接合が多い。環状集石群の年代が IV 期以降に求められ、打製石斧もほぼその時期以降に生産がさかんになったと考えられる。



挿図 247 打製石斧の類型別個体数

類型別にみた打製石斧の量は側縁形態は A(揆形)62%、B(短冊形)23%、C(分銅形)12%、D 3% であり、刃部形態は、b(円刃)47% と多く、a(直刃)、b(偏刃)の順に、30%、23% となる(挿図 247)。法量別では、III 50%、II 38%、I 12% となっており、小形が中心である。これらを中期後半の居沢尾根遺跡〔青沼他 1981〕と比較すると、居沢尾根遺跡では側縁形態で短冊形 74%、揆形 26% となり分銅形のものはない。刃部形態でも同様の傾向を示している。また法量は II が 48%、III 38%、I 14% となり、20 cm を越えるものも存在している。両遺跡の分類基準に多少の相違はあるものの、側縁形態・法量で違いがあるのは前期と中期の差であろう。しかし、粗大石匙に代表されるなど本遺跡の石器の中にも若干の VIII(中期)期のものも含まれるので、



さらに細部検討が必要である。

#### (14) 横刃型石器

37点出土した。5点が住居址からで、他はグリット遺物である。接合資料が1例あり、実数は36点である。住居址出土はII期に限られ、II-a期1、III-b期2、II-c期1となっている。形態別にみるとそれぞれ9、13、14点でほぼ出土割合は同じとなる。打製石斧との出土比をみると、1:3.5である。中期の居沢尾根遺跡、大石遺跡〔伴他 1981〕のそれを比較すると、10:1.83、1:2.26となっており中期に対して若干出土割合が低くなっている。

#### (15) 磨製石斧

磨製石斧には乳棒状・定角式・小形の三種がある。乳棒状磨製石斧 311・定角式磨製石斧 26、小形磨製石斧 13、の計 347 点が出土した。石質は乳棒状磨製石斧では変質流紋岩が 90%をしめ、他に少量の輝緑岩がある。これに対し、定角式磨製石斧では変質流紋岩類が 50%、ついでチャートが約 30%を占め、輝緑岩、変質安山岩も一部使われている。小形磨製石斧も定角式磨製石斧とほぼ同様である。

##### ①乳棒状磨製石斧(1467~1493・1495~1497)

その多くが破損品であるため、型式分類は全体の 14%しかできなかった。側辺部形態では A と B の比は 4:1 で A が圧倒的に多い。これは B が素材による制約があったからと考えられ、欠損品の再生も含まれる。刃部形態は、扁刃 58%、円刃 28%で残りが直刃であるが、典型的な直刃は認められない。法量別では I・II・III がそれぞれ 1/3 を占めている。破損は大形品に多くみられ、ほぼ完形を入れても 10%に満たない。また、再生不可能な細片が全体の 1/3 ある。折損状況は基部上端における折損(A と a)28%、胴部中央での折損(B と b)36%、刃部折損(C と c)14%、基部先端と刃部欠損(D)22%となっている。着柄部と考えられる部分の上下における折損が 64%で D を含めると 86%となる。D は同時欠損も考慮されるが、基部先端を欠損したのちの使用により更に刃部が欠損したと考えられる。こうした折損の傾向は十二ノ后遺跡などでも認められている。

再生・転用はさかんに行なわれたらしく、再生後の使用による折損も認められる。再生には大きく二つの型があり、破損面の部分再生により本来のフォームを失うものと、縮小再生とがあり、破損状況に応じて使い分けられたらしい。前者は A・B・C があり、後者は D が挙げられる。再生途上品は、小剥離を行いその部分を敲打しているもの(1487)がある。その他再生か転用かの区別は明らかでないが、破損部に敲打痕を残したものもある。

未製品が 1 点ある(図版 194)。両面が成形剥離された後敲打されている。完成品でも敲打痕を残すもの(1475 他)があり、粗割→整形(成形)剥離→敲打→研磨の製作工程〔鈴木 1981〕が認められた。

使用痕は別項で詳述されているように、斜行線状痕が認められる縦斧〔佐原 1977〕であることが確認されている。一方、乳棒状磨製石斧の着柄はスス状炭化物の付着により明瞭な着柄痕をもつものが 4 例(1476・1477・1504・1505)ある。特に 1505 は着柄部両端が著しく黒変しており、露出部にススの付着がみえ、着柄幅は 4 cm 前後である。他も同様であり、基部中央から基端にかけて着柄部をもち、基端側を 1/4 程突出させている。柄と斧身のなす角は直角よりやや小さいと考えられるが、正確に求めることができなかった。

重量は破損品で 900 g を超え、復元すれば 1 kg 以上となる大形品から、170 g 前後の小形品までである。前者はより重量を、後者は小型・形状をそれぞれ意識したと考えられ、乳棒状磨製石斧と総称される中にも、機能的分化があることを理解できる。

##### ②定角式磨製石斧(1494・1498~1503・1515~1521)

26点あるうち、住居址49・55・57・66から各1点ずつ出土した。破損品、特に刃部の破片が多く、全体の形状を知ることのできるものは5点である。

形態上2種がある。両側面をよく研磨して、面どりされ、断面形が長方形となるいわゆる定角式磨製石斧と、よく研磨されているが、面どりがされず、断面形が長楕円をなすものである。両者とも同一の素材を用い、両刃で円刃となっており、機能的にも変化が認められない。多くは扁刃傾向にある。使用痕は乳棒状磨製石斧と同様であり縦斧であろう。

### ③小形磨製石斧(1523～1529・1531～1534)

住居址15・28・63・64から計5点とグリットから9点の総計14点がある。前者は住居址15例が土壌遺物の可能性もあるが、住居址にともなうとすれば、すべてⅡ期となる。完形品は5、刃部の一部を欠くもの4、刃部を欠くもの2、基部を欠くもの3となっている。大きさは4～6cmの間にすべて入る。

形態は丁寧に研磨され、定角式磨製石斧と相似の関係にあるもの(1523～1529・1534)、不定形で再生品と考えられるもの(1531・1532)、小形磨製石斧形装飾品(1533)とがある。他の磨製石斧類との大きな違いは刃部にみられる。円刃(1531～1533)は3点と少なく、他は直刃であり、1528を除き片刃である。うち2点(1525・1526)は片平刃で、より強く片刃を意識したと考えられる。別項に詳しいが、使用痕観察の結果、片刃のものに限らず、軸線に平行な使用痕が刃部の片面に認められており、横斧として機能したと考えられる。

### ④分布

定角式・小形両磨製石斧の出土量が少なく、ここでは乳棒状磨製石斧とともに一括して扱った(挿図223)。その分布は環状集石群の立地地域とはほぼ一致し、他の石器群と同様の傾向が指摘できる。しかし、分布の濃淡が著しいが、特に環状集石群北辺部、南辺部内部地域と単位集石群B-1地域、ならびに各時期の住居址地域に多くみられ、他の石器とやや様相を異にする。

接合資料はすべて乳棒状磨製石斧であり、12例が確認されている。グリット間9、住居址とグリット2、方形柱列とグリット1となっており、東西方向の接合が多い傾向にある。遺物番号2312+5736は196m、住居址66+63+遺物番号1441+同7000は東西方向で101m、南北方向で93mと幅広く接合している。接合関係でみる限り、同一個体がかかなり広範囲に散在することが指摘できよう。また、住居址63はⅡ-c期に、住居址66はⅢ期であり、その点で接合は不合理である。しかし、住居址63例はその出土状態から、伴うとしてよいが、住居址66例は埋土がⅣ期以降の土壌の構築によって攪乱が著しく、その帰属は不明である。従って、住居址63と66という2時期にわたる住居址間出土の磨製石斧の接合は、住居址63の廃絶後の埋没途中かそれ以前において、すでに3箇所に分散していたことを意味しよう。住居址15例もまた、埋土はかかなりⅣ期以降の土壌群の構築によって攪乱しており、これについても分散時期は不明である。同時に分散した理由についても明確にできなかった。しかし、他の接合資料は環状集石内のみならず、住居址地域との接合もみられ、その分散時期およびその理由は不明である。ただ、環状集石群出土土器にも接合関係がみられることと考えあわせ、磨製石斧のかかなりの部分は環状集石群の形成と深いかかわりがあるであろう。

### ⑤年代

乳棒状磨製石斧は従来「前期中葉の黒浜式期から一般化する。」[鈴木1981]と考えられてきたが、本遺跡ではⅡ期に属する住居址から11点出土しており、すでにこの頃から一般化していると考えられる。また、定角式磨製石斧はⅡ期では、断面長楕円形(1494)と隅丸長方形(1517)とが共存しており、それは定角式磨製石斧と相似形の小型磨製石斧の存在からも推察され、Ⅲ期以降により定形化したものが出現すると考えられる。

(石上 周蔵)

## (16) 凹石・特殊磨石

表 13 凹石集計表

	a	a <sub>1</sub>	ab	abc	ac	a <sub>1</sub> c	ac	b	bc	c	c <sub>1</sub>	ca <sub>1</sub>	計
IA			29	122	1			1	11				164
IB	1									1	1		3
IC	1			2	1								4
ID				1	3								4
IE				3	19		24	1	8	3	23		81
IF	1						2			3	11	7	24
IIA	39			4	12				1				56
IIB	32	3			11	1		1		1	2		51
IIC	318	14	7	35	165		34	7	5	3	2		590
IID	192	89		3	141		10	6		3	1		445
IIE	86	2	6	11	35		2	3	4				149
IIF	68	20			20			2		4			114
II G	107	41			14								162
特磨												56	56
計	845	169	42	181	422	1	72	21	29	18	40	7	1903

破損不明167、総計2070

凹石 本遺跡からは2,070点の凹石が出土し、うち分類が可能なもの1,903点、破損・不明167点となっている。表13は形態別に、凹み(a、a<sub>1</sub>)、研磨痕(b)、敲打痕(c、c<sub>1</sub>)がどれくらい残されているかを示したものである。原材の形を残さないI型は15%にすぎず、IA・IE・IFが大半を占めている。

IAは凹み・研磨痕・敲打痕の三者を複合してもつ場合が多く、側辺部

はほとんど敲打される。研磨面のほぼ中央部に凹をもつのが一般的であるが、凹みと研磨痕の前後関係については明らかにできなかった。IE・IFは研究者によっては特殊磨石として分類する場合もあるが、研磨痕はほとんどなく、敲打(c<sub>1</sub>)によって原材の形を失っている。特にIFは意図的に断面形を丸くしているとも思えるもの(1593)もあり、c<sub>1</sub>は加工痕で、これらは別の機能をもった石器とも考えられる。

原材の形を残すII型は、楕円形をしたIIC・IIDが1000点を超え、全体の54%を占める。側辺等に研磨・敲打痕はみられず、いわゆる凹石が大多数を占める。II Gの形態はかなり変化に富んでおり、凹石はさほど形にはとらわれなかったようである。

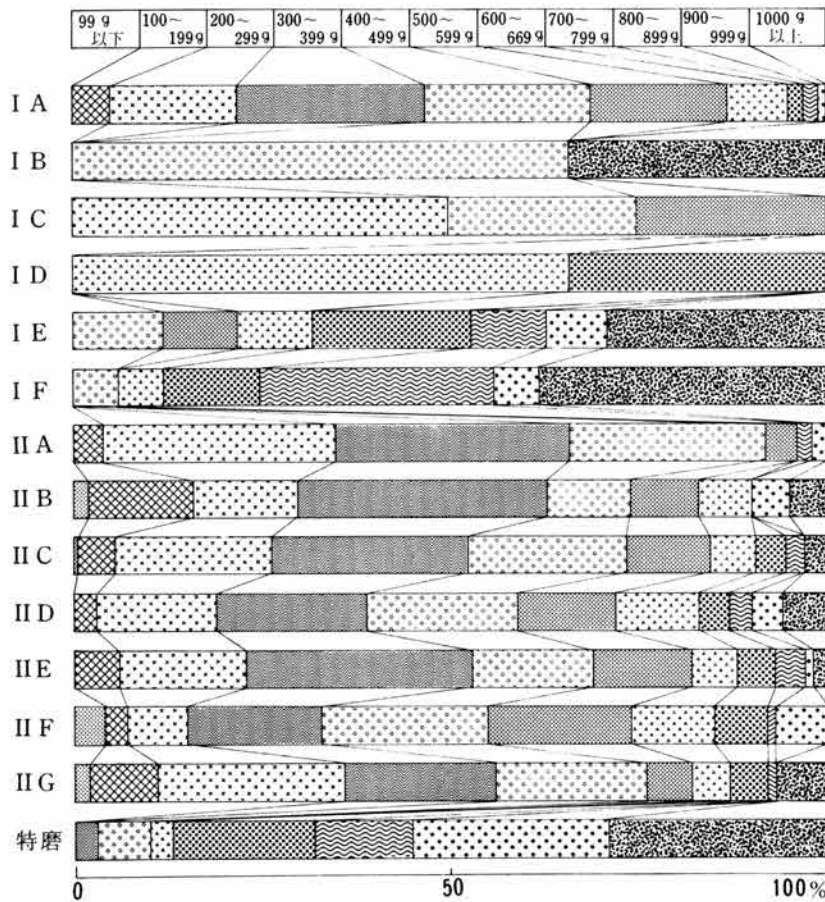
凹石にみられる使用痕は全体の91%が凹み、21%が研磨痕、40%が敲打痕をそれぞれもっている。凹み部が3面以上あるa<sub>1</sub>は厚みのあるものに多く、凹みがある程度の面を必要としたことがわかる。また、II Gの場合も平坦な面に凹みが残されており、そのことを裏付けている。凹みは溝状、円形状など種々あるが、多くは細かな点としての敲打が集中したもので、このことは逆に、対象物の先端が尖っていたことを意味しよう。磨面をもつ凹石は、三者を複合してもつ場合が多く、平坦な広い面を必要とするため、石材の形もほぼ決ってくる。敲打痕ある凹石は、敲打痕が面をなすc<sub>1</sub>のほか、先端、側面が敲打されているものがある。この場合に対象物が面をなしているため、つぶれ状になる場合と、a、a<sub>1</sub>と同様に先端が尖ったものを敲打するため、小さな点が集中している場合があり、1607・1621のように側辺が減っている例もある。

図248・249は重量を表わしているが、凹みだけをもつ場合は200~400gが多くなる。研磨痕・敲打痕を独立してもつか、三者を共有してもつ場合は、300~500gが多く、後者に重さが必要なことを窺わせる。形態別では特にIE・IFといったc、c<sub>1</sub>が主体となるものが重いようである。

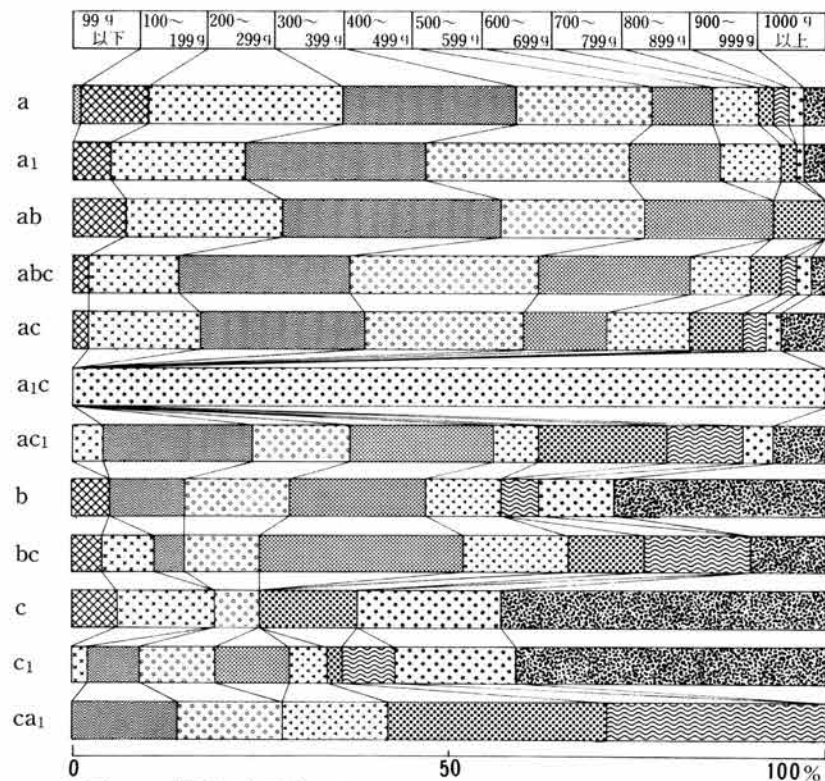
住居址から出土した凹石を時期別に検討してみたが、形態・凹み・磨減痕・敲打痕のあり方等に変化は認められなかった。石質は変質流紋岩、閃緑岩、花崗閃緑岩等が数点みられる以外、他はすべて安山岩である。ただa、a<sub>1</sub>のみのものは多孔質であるのに対して、c、c<sub>1</sub>の場合は、比較的緻密な安山岩を使っている点に注意される。

ほぼ全体の20%に当たる400点あまりの破損品がある。破損部分を観察すると、凹みの部分からではな

く、先端あるいは側辺からの衝撃による場合が多く、いわゆる叩石として使用した結果破損したと考えられる。接合例が4点あるが、いずれも同様の結果が得られており、凹み部分での打撃はさほど強いものではなかったことも示している。



挿図 248 凹石の形態別重量分布図



挿図 249 凹石の使用痕別重量分布図

はなかったことも示している。

凹石の中に赤色顔料が付着しているものが3例ある。顕著なもの、わずかなものがあるがいずれも使用面ではなく、自然面への付着であり、使用との関係は明らかではない。<sup>(12)</sup>

特殊磨石 すでに上述したが、凹石 I E の一群も含めた検討が必要であろうが、本遺跡では I E はか弱い打撃痕によって使用面が形成されており、研磨痕はほとんど認められないのに対し、特殊磨石には、双方が認められる。また、後方で使用面がみられるのは、いずれも原材の稜線上であるが、前者は平坦な面に形成されており、使用面の幅がかなり広いなど異なる点が多く、ここでは特殊磨石から除外して扱った。

特殊磨石は56点ある。緻密な安山岩で断面が三角形の石材を多く用いており、長さは12~17 cmに、幅は6~9 cm、厚さは5~7 cm、重さ900~1200 gに集中している。全体の39%にあたる22点が破損しており、使用面とほぼ直角になる方向に割れている。

特殊磨石を縄文早期の伴出例と比較すると、形態あるいは凹み等の機能を複

合してもつものが少ない点では類似するが、早期の場合調整面と呼ばれる使用面の幅を小さくするための磨面を、使用面に隣接する面にもつものが多いが、本遺跡ではそれがほとんどみられない。また、使用面の断面形が本遺跡のものはかなり丸味を帯びている。このような点から、特殊磨石は早期の押型文土器に伴う石器とされてきたが、すでに明らかとなったように相違点がみられる。本遺跡でも7片の押型文土器が出土したが、石器数に比較して数が余りにも少ない。従って、すでに富山県で明らかにされているように〔橋本 1972〕本石器を前期に帰属させてよいであろう。

### (17) 丸石

丸石として分類した石器は13点ある。うち1点は1170gもあり、全面にかなり強打したと思われる敲打痕がある(1571)。おそらく叩石の一種と考えられるが、球形を意識して使われている。他は100gを超えるもの1点を除き、すべて90~26g中に収まる。全面にみられる敲打痕は浅く、多分加工痕と思われる。平坦部をもつもの4点と、偏球状のもの2点がある(1574)。石質は花崗閃緑岩の1点を除き他はすべて安山岩である。類似する資料の増加を待たないと、時期・用途等は追求できないが、安山岩製の石器としては極めて小型な点に特徴がある。

なお、この石器はすべてグリット出土であり、所属時期を決定する傍証はない。他遺跡においても管見に触れないが、前期前半から中葉に伴う石器であることは間違いない。(佐藤 信之)

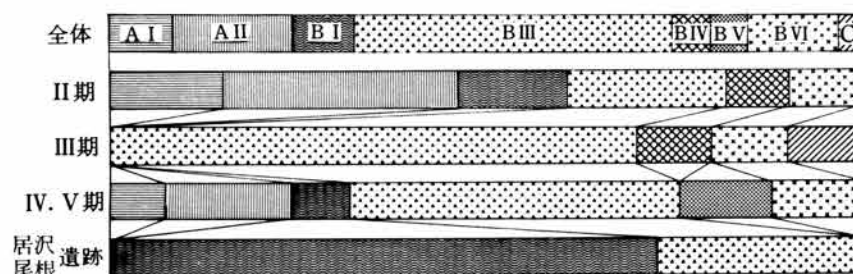
### (18) 石皿

#### ① 類型の時期別変化

総数121点あるが住居址からは39点出土した。しかし、このうち接合したものもあるので実数は総計で114点で住居址出土は38点となる。後者の時期別内訳は、阿久II-a期9、II-b期5、III期10(11)、IV-a期2、IV-b期5、V期7点となる。類型別組成は時期によって若干のバラツキがあるが、II期では半数近くが石皿Aで占められ、III期・IV期と大きな差が認められる。しかし、II期でも住居址54にはB Iがある。III期・IV期ではB IIIが大部分を占める。特にIII期にはCがあり、中期以降にみられる渦巻文をもつ石皿の先駆と考えられ注目しなければならないだろう。IV期ではさらにB Vも加わる(挿図250)。

#### ② 製作・石材・使用痕

石皿は先述したように、対象物の破碎・粉化を目的としており、その形態は機能的につくられている。石皿には製作痕を明瞭に残すものがある。製作痕には大きく、大まかな打ち割り、敲打によるつぶしがあり、前者を成形痕、後者を調整痕と考えることができる。加工される部分は、皿部と受け口部が主であるが、全面を加工する場合もある。石皿B III・Cの受け口部側辺は打撃を加えて、直または内湾ぎみに加工している。受け口の加工は石皿の機能を考える上で重要な意味をもつであろう。皿部は使用により製作時の姿をとどめないが、一部にその痕跡がある。1564は未製品と考えられ、つくり出そうとする皿部を敲打している。これはB IIIを意図したものであろう。1553は皿部に段状のずれがあり、この部分に成形時の敲



挿図 250 石皿の時期別型式割合図

打面が残されている。このように、石皿の製作は用途を意識してつくられたものである。大きさは最大のもので23kgあり、比較的大型品もあるが、多くは5kg~10kg程度

の中におさまる。重さも安定した作業をおこなうための重要な要素となったと考えられる。石材は95%以上が多孔質安山岩であり、石材が選択されている。

機能的な石皿の中にあつて石皿C(1551・1552)は非実用的な彫刻がある点注目しなければならない。1552は等間隔に11本の線刻がこまかい敲打によって施され、1551は1/3程欠くが、2本づつ組となるように8本が擦りによって施されている。可塑性のない石に線刻する点で呪術性の高い石器といえ、石皿のもつ食物加工具としての性格を表すものといえよう。

以上のように、石皿は石材の選定、重量、製作方法に一定の統一がみられる。多くの皿部はよく使用されて平滑となっているものと、敲打のみとがあるが、その多くは粗い面を残しながら磨痕をもつ。中には、丁寧な敲打が認められ再調整が行なわれたと考えられる例もある。

皿部の磨耗は、B Iが長狭な舟底状、B III・B IVがレンズ状の凹み、B Vが広く平坦とに分けられる。これは上石(凹石・磨石)の形状、運動をある程度反映していると考えられ、丸い上石でB Iは集約された直線運動、B III・B IVは楕円状の回転運動を、B Vは長楕円の接着面積の多い上石で幅広い直線運動をそれぞれおこなつたと考えられる。本遺跡では上石との伴出例はないが、北安曇郡有明山社遺跡(藤沢他1969)、塩尻市中島遺跡(小林1980)など近隣で伴出が報じられており、それを裏づけている。こうした石皿のもつ機能差は対象物と工程の差と解されるが、具体的な対象を示す付着物はみとめられなかった。

#### ③分布と接合

石皿の遺構別出土数は総数121点のうち住居址38、土壌8、方形柱列3、集石20、グリット52となる。遺構外出土の石皿の分布は環状集石群の立地範囲とほぼ一致する。

集石出土例が20点と全出土量の17%を占め、これにグリット出土とした環状集石群出土の46点を加えると57%となり、凹石を除く他の石器とその出土状態が異なる。特に、破損品の多い点注目される。

接合資料は住居址内での接合例(住居址76)1、住居址34・72とグリット出土の2、土壌934とグリットの1、方形柱列IVとグリットの1、グリット間の1の計6例がある。このうち、土壌934とグリットとの間隔は40m、グリット間のそれは20mであった。

#### ④小括

時期毎にみた石皿の類型別変化は、II期とIII期間に求められる。II期はAとBが約半数づつであるのに対して、III期以降Bが大きな位置を占める。この傾向は時代が下るにつれて著しくなり、縄文時代中期に至ってはB Iに集中するようになる。石皿Aは加工が全くなく自然状態であるのに対して、Bになると凹んだ皿部をもち側辺部加工がみられるようになり、この点で、III期は石皿が定形化し、石器組成の中でより重要な位置を占めるようになった時期ととらえられる。石皿Cの出現はさらにその点を補足するものであり、石皿には常に道具としての認識以上の、呪術的性格が背後に存在したからだと考えられる。すでにこの点については古く鳥居龍蔵氏が、そして最近では平出一治氏が指摘している(鳥居1924、平出1978)。本遺跡では明確に指摘できないが、土壌内への副葬例(小野1980)などからも補足されうる。こうした、石皿の類型変化は、石皿に対する認識の差として理解されうるし、その背後に石皿と密接な関係のある植物質食料獲得における何らかの変化が予想される。

#### (19) 固定式石皿

II-a期5、II-b期6棟から出土し、II期では約2棟に1点存在することになる(表14)。II期特有の石器でIII期以後はみられない。なお、1棟に1個が原則的であるらしいが、住居址24・30・55では複数出土している。固定式石皿の住居空間に占める位置は、北東壁際・南西壁際・炉近くの三者に寄るものに分けられる。



表 14 固定式石皿出土状況表

	住居址	出土状況	出土位置	個数	備考
II-a 期	26	床面直上	南壁中央	1	原石・フレイク多い
	28	〃	P <sub>4</sub> (西壁) 付近	1	白色粘土ブロック近くにあり
	32	〃	南壁付近	1	フレイク特に多い
	54	〃	炉址北	1	図230-1535 原石・フレイクが多い
	55	〃	P <sub>7</sub> 北側 2	2	図230-1536 他に平板石があるが、固定式石皿と断定できなかった。
	64	〃	炉址北 1	1	図230-1537
II-b 期	15	〃	炉址北	1	
	24	〃	南壁中央	3	
	30	〃	北壁付近 2、南壁 1	1	
	40	〃	中央部北西寄り 1、北壁中央 1	2	原石・フレイク多く、石核も多い
	71	〃	南壁中央	1	原石・フレイクが多い

形状では 50 cm 前後の不定形な平板状の石であるが、具体的な用途をはっきりさし示す痕跡は見い出せなかった。しかし、住居空間のある一定の場所に設置された作業的用途が考えられる。原石・石核・剥片・屑片は固定式石皿を出土する住居址で特に多く、何らかの相互関係を示している。しかし、石皿としての機能も含めた、多目的に用いられた石器とも考えられる。

## (20) 砥石

5 点と数は少ない。土壌 756 の他はすべてグリット出土である。長さはいずれも 10~15 cm 前後であり、石質は砂岩製のみである。形状は扁平状と方柱状とがある。

砥石の使用痕は研磨面にみられるわずかな溝状の凹みである。線条痕は 1568 に認められるのみである。特に 1568 は粗い面と密な面とが交互にみられ、両面を使いわけたと考えられる。研磨面は 4・3・2 の各面があり、使用痕の方向から、手で砥石を固定し、対象を動かしたと考えられる。また使用痕の幅から想定して、大型石器の研磨には耐えられなかったと思われる。出土石器に対し砥石の出土数が余りに少ないので、砥石に代用される石器が存在したのではないだろうか。(石上 周蔵)

## (21) 先端研磨石器

先端研磨石器は素材に残された使用痕の形態的特徴、すなわち、先端部にみられる長軸に対して斜行する平坦面によって認識される。<sup>(13)</sup> この使用痕は、その成因として加工痕・作用痕・加工痕プラス作用痕の 3 つが考えられ、それを区別するのは、凹石の場合と同様に非常に難しい。<sup>(14)</sup>

筆者の実験によれば、細長い河原石を右手の親指と人差指の間に挟み、平らな台石に軽く連続して叩くことにより、いとも簡単に本石器と同様な形態をつくり出すことができた。また、使用痕である平坦面の石器長軸に対する角度を調べると、素材の形にも影響を受けていると考えられるが、概して、 $\theta=45$  を中心に集中する傾向がうかがえる。<sup>(15)</sup> これは、実験した礫についても同様なことがいえる。しかし、これをもってすぐ石器の機能と結論付ける気は毛頭ない。

使用痕は一見平坦な面としてうつるが、さらに注意して見ると、そのほとんどが細かいあばた状を成しており、また、細く短い線状痕が重なり合っている例も少なくない。1680 は特に顕著である。これらは、対象物が硬く鋭いものであることを想像させる。しかし、生け花に使う剣山状のものならともかく、単独の鋭い突起物が対象であるなら、使用痕が平坦面を成している点を説明しにくくなる。<sup>(16)</sup> また、この石器には、側辺に凹みがみられ、凹石に分類してもおかしくないもの(1670・1675・1679・1681 等)、磨製石斧から

の転用と考えられるもの(1678・1681)、石棒の祖源を思わせるもの(1679)等があり、この石器の機能を追求することの難しさを感じさせる。

先端研磨石器は63点の出土をみた。全体の30%にあたる18点が住居址から、残りは土壌の1点集石の1点を除き包含層からである。住居址出土資料からみた帰属時期と点数は、II期10、III期2、IV期2、V期4である。また、平面分布は他の石器同様概して環状集石群と重なっていることがわかる(挿図221)。特にII期の住居址群付近に濃く分布している。もちろん出土層位を検討しないと簡単には結論は出せないが、住居址出土の半分以上がII期に属することからみても、II期との関係はかなり強いと考えられる。

さて、他遺跡での本石器の類例はすでに中越遺跡で注目され、「一端ないし両端に加工を施した工具と思われるもの」〔藤沢他1977〕と報告されている。しかし、そこには、はっきりした特徴が明記されていないこと、また、その形態的性格からして見落されやすいということもあって、その後はほとんど注目されることなく過ぎ、最近の報告書で叩き石、あるいは敲打器に分類されている例〔樋口・宮沢他1976、小林他1981〕が若干ある程度である。

本石器が前期前半のある種の用途をもった特徴的な石器であることは容易に予想できる。しかし、先述したように、調査時における見落としもあり、今後の調査時における注意をうながしたい。資料増加をもって現時点で不明な点、すなわち使用痕である平坦面の数、あるいは一端のみにある場合と両端にある場合での違いが石器の機能とどう結びつくか、さらに、両端に4面ずつの使用痕をもつ整った形のをこの石器の典型と見るべきなのか、等の問題を解明していきたいと思う。(岩崎 孝治)

#### (2) 敲打器

住居址より2点、グリットより10点出土している。礫の端部に明瞭な剝離をもつ点で他の石器と区別される一群であり、礫器と称される石器群と共通する要素を多くもつ。数が少なく時間的位置づけは明確にしないが、住居址内から出土した2点はII-a期、IV-b期である。

剝離は粗く、5～10回程の打撃で直線的な刃部が成形される。全体の形態、重量をみると、棒状で80g前後の一群と、塊状で400gを超える大型なもの(1464)とに分かれるようである。前者の剝離面は5cmに満たないが、後者では10cm程に及んでおり、用途からの区分があるであろう。

#### (3) 円礫状石器

住居址より7、グリットより26の計33点が出土している。本遺跡から離れた宮川等の転石を用いており、二次加工の認められないものが多い。研磨痕が観察できたのは5点ある(1488・1509・1511・1742)。住居址内から出土した7点の内訳はII-a期3点、II-b期2点、II-c期1点、III期1点であり、II期に集中する傾向をみせている。形態的には棒状(1744)と円板状(1512)、長楕円状(1746)などがある。これらの80%近くは20g以下であり、石器の素材とするには小形すぎ、研磨痕をもつ例もあり他に用途を考えたい。

#### (4) 滑石製品

##### ① 玦状耳飾(図240・241)

住居址内より7点、グリットより33点出土している。住居址内はII-a期1、II-b期、IV-b期、V期各2点ずつである。II-a期の住居址28例(1734)は床面出土で、本遺跡における滑石製品の初現である。この形態は指貫形に近く早期末か前期初頭に属することが指摘されている〔芹沢1965〕。グリットではC I 46・DD 57付近に集中する部分がみられる(挿図226)。全体の形状や中央孔の位置と断面形から以下の4種に分類できる。



①全体に薄手で肩がはり、中央孔が中心より上部に開けられているもの(1684)、②肩がはり、中央孔が中心より上部に開けられている点で①と類似するが2倍程の厚さがあり重量感のあるもの(1690)、③円形で中心孔が中心にくるもの、これは大きさ断面形によってさらに細分できる(1687・1694・1705)。④円形あるいは楕円形で、中心孔が上部にあけられているもの(1686)などである。しかし、この分類は今後他遺跡出土例を加えて再検討すべき点がある。

製作工程を示す未製品が若干あり、玦状耳飾の製作過程が理解できる。まず、素材の周囲に打撃による剝離を加えてほぼ円形に整形(資料2点検出)したのちに、これに研磨を加える(1709・1710・1715)。この段階では研磨により全体の形はかなり整うが凹凸が多くみられ、側面には研磨面の角が顕著に認められる。次の段階で穿孔されるが、観察できたものすべては両面から穿孔している。条痕が孔壁に平行にまわっており(1695)、これは回転によって穿孔されたことを示す。穿孔の後、あるいは穿孔と平行しながら一箇所に擦り切りによる切れ目を入れていく(1707・1708)。切れ目の壁にはそれと平行な条痕が観察できる。切れ目も両側から入れたようである(1691)。この後、全面に最終段階の仕上げ研磨が加えられる。中央孔や切れ目の部分にもこれと垂直な条痕が残り、研磨の加えられたことが明瞭である。また、観察したかぎりでは1684・1691などにみられる小孔は、仕上げ研磨が加えられる以前に両側より穿孔されているが、穿孔されたままで、孔壁への研磨はみられなかった。なおこの破損品の断面を研磨し垂飾状にしたものが1点ある(1698)。この他1690も上部の断面が、両側から擦り切り溝が入れられた後折られており、再利用しようとしたものと思われる。

## ② 管玉(図241)

住居址より3点、土壌より2点、グリットより7点の計12点が出土している。住居址内はⅢ期の住居址33の2点とⅣ-b期の住居址45の1点にすぎない。形態的には側面がくびれるものの多いのが注意される(1716・1720他)。

製作工程は、まず全面に研磨を加え全体の形を円柱状にかなり整える。資料は5点あり(1722~1726)、いずれも玦状耳飾と同様に研磨面の角が顕著に認められる。1725の側面には長軸に垂直な方向に浅い溝状の条痕が残り、先にふれた側面のくびれる形態を意識してのものと思われる。次に両側から穿孔する。条痕が孔壁に平行にみられるところから回転によって穿孔したと思われる。穿孔に用いた工具は少なくとも二種類は存在したようで、貫孔部を観察すると「U」字形を呈するものと、平らな孔底の中心にわずかな凸部をもつものがあつた。穿孔後さらに全面に研磨が加えられている。完成品の孔壁は平滑であり孔内修正が行なわれているようである〔寺村1971〕。

## ③ 小玉(図241)

住居址より2点、グリットより9点出土している。住居址内は、Ⅱ-a期1点、Ⅱ-b期1点である。形態的には1731・1729・1735・1736などに分類できそうである。製作過程は、すでに述べたのと同様で、研磨による整形(1728・1714)の後、両側からの穿孔(1737)、さらに仕上げの研磨が加えられる過程をとっている。この他、歯牙状の器形で中央に浅く横方向に細い溝を一周させた製品が土壌219より出土している(1738)。溝に沿って細い条線がみえ紐を結んで垂飾としたものであろう。

## (25) 軽石製品

Ⅲ期の住居址(住居址50)内より1点、グリットからも5点と全体の数は極く少ない。明確に製品の形をなしているものは3点である。そのうち浮子状(1575)としたものは千葉県飯山満東遺跡〔清藤他1975〕、埼玉県米島遺跡〔小林他1965〕、十二ノ后遺跡など前期の遺跡からの出土例が多い。用途は「実験の結果は浮子として利用にたえなかった」〔村田1970〕という所見や「タロイモ類の皮を剥くのに使う厨房器具」〔小林公

1980]との見解がある。

(小柳 義男)

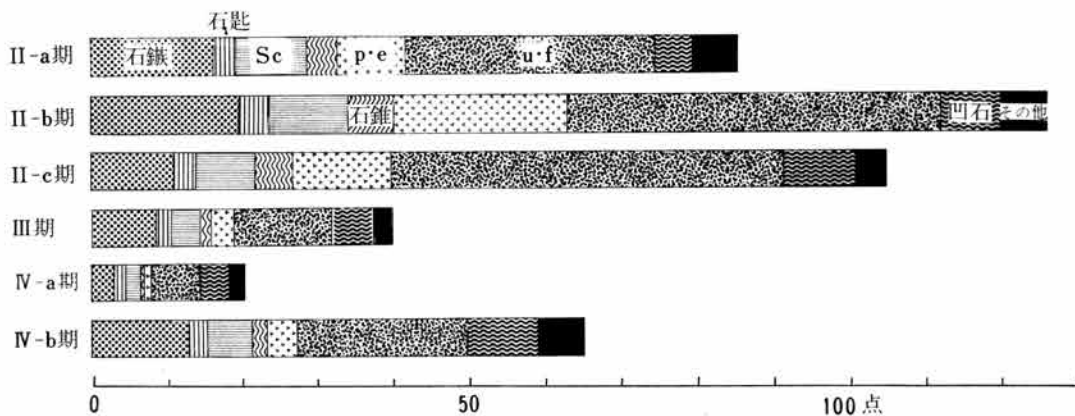
表 15 住居址出土石器時期別組成

時期	石 鏃	石 匙	S・c	石 錐	p・e	u・f	凹 石	その他
II-a	19.2	3.5	11.2	4.8	10.5	38.0	5.6	6.9
II-b	15.6	3.0	8.0	4.9	18.1	38.4	6.2	5.7
II-c	10.6	2.9	7.8	4.9	12.4	49.1	8.9	3.4
III	21.1	4.8	9.3	3.6	7.6	31.8	13.1	8.6
IV-a	15.6	7.8	9.9	3.5	5.0	31.2	20.6	6.4
IV-b	19.8	3.6	9.3	2.8	6.1	34.0	14.2	10.2
V	20.8	4.1	7.4	5.2	7.6	42.9	7.9	4.1

2)石器組成の変化

ここでは住居址の所属時期毎に石器の組成をまとめてみた。<sup>(19)</sup>出土数の多い石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、ピエス・エスキュー、使用痕のある剝片、凹

石とその他の石器を一括して、その組成率をまとめたのが表15である。凹石の組成率がしだいに高まる傾向をみせることや、ピエス・エスキューがII-b期以降減少傾向にあることなどを指摘することができるが、全般に大きな変化は認められないようである。これまで諸磯期に入ると石器組成が「植物採集活動に生産活動の中心が移行しつつある」[小林1978]と指摘されている。本遺跡においても凹石・石皿の出土数が増加傾向にあることは認めることができるが、打製石斧は一住居址0.5点に満たない。また、石器組成の上にも顕著な変化は認められない。したがって、生産形態にも大きな変化がなかったものと考えら



挿図 251 時期別一軒あたりの石器数

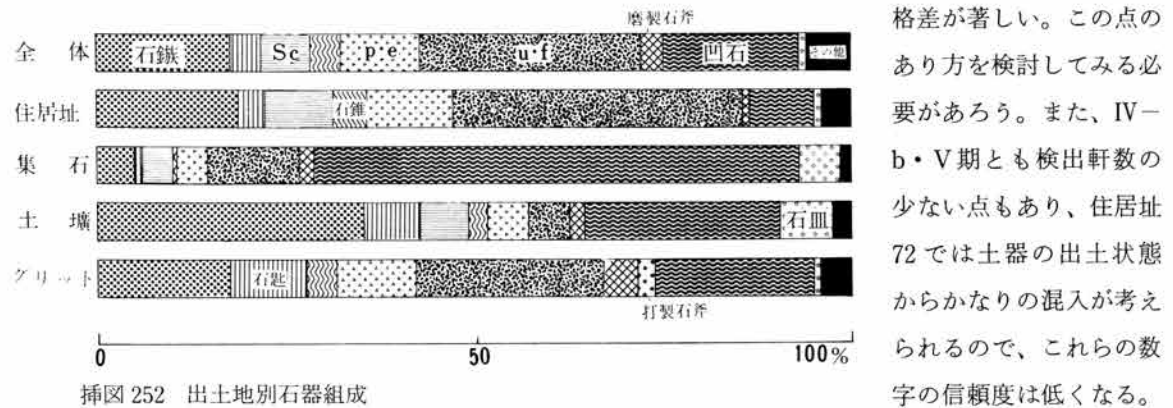
れる。しかしながら本遺跡の所見では、III期を境に抉入刺突具、有抉頭磨石器、複数抉入石器がほとんどみられなくなってしまうことから、ここに一つの画期を考えることもできよう。これらの石器の消失がどのような変化に対応したものなのか、これらの石器の機能を解明することにより明らかになってこよう。

挿図 251 は一住居址あたりの石器数をしめしている。II-a 期では住居址間の格差が大きい<sup>(20)</sup>が、平均すると 87 点と大量の石器を所持する集落が形成されていた。主体は使用痕のある剝片、石鏃、スクレイパーなどである。II-b 期はすべての器種において石器数の増加がみられ平均 128 点に達する。なかでも、使用痕のある剝片、ピエス・エスキュー、凹石などは増加が顕著である。II-c 期には若干の減少がみられ平均 105.5 点となる。石鏃、ピエス・エスキューの減少が目につく。以上、II 期全般に大量の石器のあったことが理解できる。該期の全般的傾向として出土石器が極めて少ない傾向がみられるというが[小林 1978]、本遺跡周辺には千鹿頭社・十二ノ后遺跡などの大量な石器群を持った大規模な集落が展開していたことが、これらの調査で明らかにされつつあり、本遺跡でもこれが実証されたことになろう。

III 期は平均 40 点と少なくなる。けして少ない数ではないが II-c 期から半減している点、本遺跡における生産活動の衰えを感じさせる。しかし、石鏃は横ばいぎみで、組成率の上からはむしろ倍増しており、狩猟への依存度は組成率からみればかえって高まったとも言える。また、住居間での石器所持数も平均化されてきている。

IV-a 期には石器数はさらに半減して 21 点程になってしまう。減少はすべての器種に顕著であり、III 期には横ばいぎみだった石鏃も 3.2 点と 1/3 に減少している。十二ノ后遺跡の分析からも、前期後半における石器の著しい減少が指摘されており〔小池 1981〕、本遺跡でもこれと規を一にする。なお減少傾向はすでに III 期より始まっていることも指摘できる。

IV-b 期はこれまで減少してきたものが一転 3 倍以上の増加となる。V 期にはさらに増加の傾向を強めている。しかし IV-b・V 期とも III・IV-a 期で住居間の石器保有量の格差が少ないのに対して、大きな格差があり IV-b 期では住居址 45、V 期では住居址 72 と、他の住居址に比較して多量の石器が出土しており



格差が著しい。この点のあり方を検討してみる必要がある。また、IV-b・V 期とも検出軒数の少ない点もあり、住居址 72 では土器の出土状態からかなりの混入が考えられるので、これらの数字の信頼度は低くなる。

挿図 252 出土地別石器組成

しかし IV-b 期を例にすれば、住居址 45 を除外して IV-a 期に倍する石器を所持していたことになり、IV-a 期まで減少してきた石器数が再び増加する傾向が読みとれよう。前期後半においてこのように多量の石器の出土する例は飛騨を中心とする地域にみることができが〔小林 1978〕、周辺地域では確認されておらず本遺跡でのあり方は注目されよう。

最後に住居址とグリット出土石器の組成を比較しておきたい(挿図 252)。住居址全体では、使用痕のある剥片 38.4%、石鏃 18.1%、ピエス・エスキーユ 11.5%、スクレイパー 9.1%、凹石 8.6%、石鏃 4.6%、石匙 3.7% という割合になっている。グリットにおいては、使用痕のある剥片が 25.2% と減少し、凹石、磨製石斧などが増加するなど違いもみられるが、全般に住居址のあり方と一致した部分が多い。個々の器種でみると凹石、磨製石斧、打製石斧、横刃型石器の占める割合が大きく変っている。凹石はグリット遺物の 21.4% で 2.5 倍近くになっている。また、磨製石斧、打製石斧、横刃型石器も住居址内ではそれぞれ 1.0%、0.4% であったものが、グリットでは 4.3%、2.3% と 4 倍ないし 6 倍になっている。これについては、住居址外で使用ののち廃棄されたか、集石に磔として転用されたかのいずれかであろう。ところで、凹石と磨製石斧、打製石斧の分布を比較すると、他の器種以上に類似性が指摘できる。例えば、DD 34 周辺、DM 42 周辺、EA 59 周辺での分布のあり方があげられる。ここでの出土状態はともに集石に転用された可能性をしめすものであろう。(小柳 義男)

### 3) 使用痕

石器は、使用の結果様々な損耗を受けている。この損耗については、石器の機能を解明する手段の 1 つとして、当調査団においても不十分ながら観察、検討を行ってきた。それらはおよそ、①欠損、②「使用痕」と呼ばれる石器表面の微細なキズ、とに分けられよう。ここでは、②について観察・検討を加えてみたい。①についてはすでに、形態的検討の項で述べられているが、石器機能を検討する際には、両者の総合的判断が不可欠である。

観察には肉眼と共に実体顕微鏡を使用した。しかし、時間と設備との関係から、抉入刺突具・石匙・スクレイパー・石鏃・有袂頭磨石器についてはすべてを、それ以外については肉眼で使用痕の有無を判別し

たのち、実体顕微鏡で細部観察する方法をとった。倍率は25倍前後を多用し、必要に応じ最高60倍まで拡大した。観察し得た使用痕の形態は、小形の石器で刃こぼれ・刃つぶれ・線状痕・擦痕・点状痕・つぶれ・磨耗・磨研痕、大形の石器で刃こぼれ・刃つぶれ・線状痕・つぶれ・磨耗痕・打痕・くぼみであった。<sup>(22)</sup>これ等の使用痕の組み合わせや付着状況にはいくつかの型がある。そこで、この使用痕の型に従って石器を再分類し、同一類型に含まれる石器器種とその使用痕自体について、検討を加える形をとった。観察は肉眼観察の域を出ない不十分なものであり、具体的には、観察された例数の提示と石器の作用部位とおもな運動方向を示すにとどまった。時期的変化もとらえられていない。また、莫大な量にのぼる使用痕のない剝片・石核・原石にも、刃こぼれ、刃つぶれ以外の使用痕があるはずであるが、時間の関係で見てない。今後の課題である。なお、検討はすべての使用痕を対象とすべきであったが、次の型については使用痕自体が石器分類の概念であり、形態的検討の中で詳しいので略したい。剝片型(主として黒曜石の剝片・石核・原石にみられる刃こぼれ・刃つぶれ)、凹石型(凹石のくぼみ・磨研痕等)、石皿型(石皿・砥石の磨耗)、先端研磨石器型(先端研磨石器の使用痕面の打痕・線状痕)である。欠損と、変質流紋岩製のある種のものでの著しい風化により、観察が不可能であったものがあり、観察例数は石器総数を下回っている。使用痕は大きく作用痕と装着痕に分けられるだろう。

(1) 作用痕(挿図 253~255・図版 200~202、表16・17)

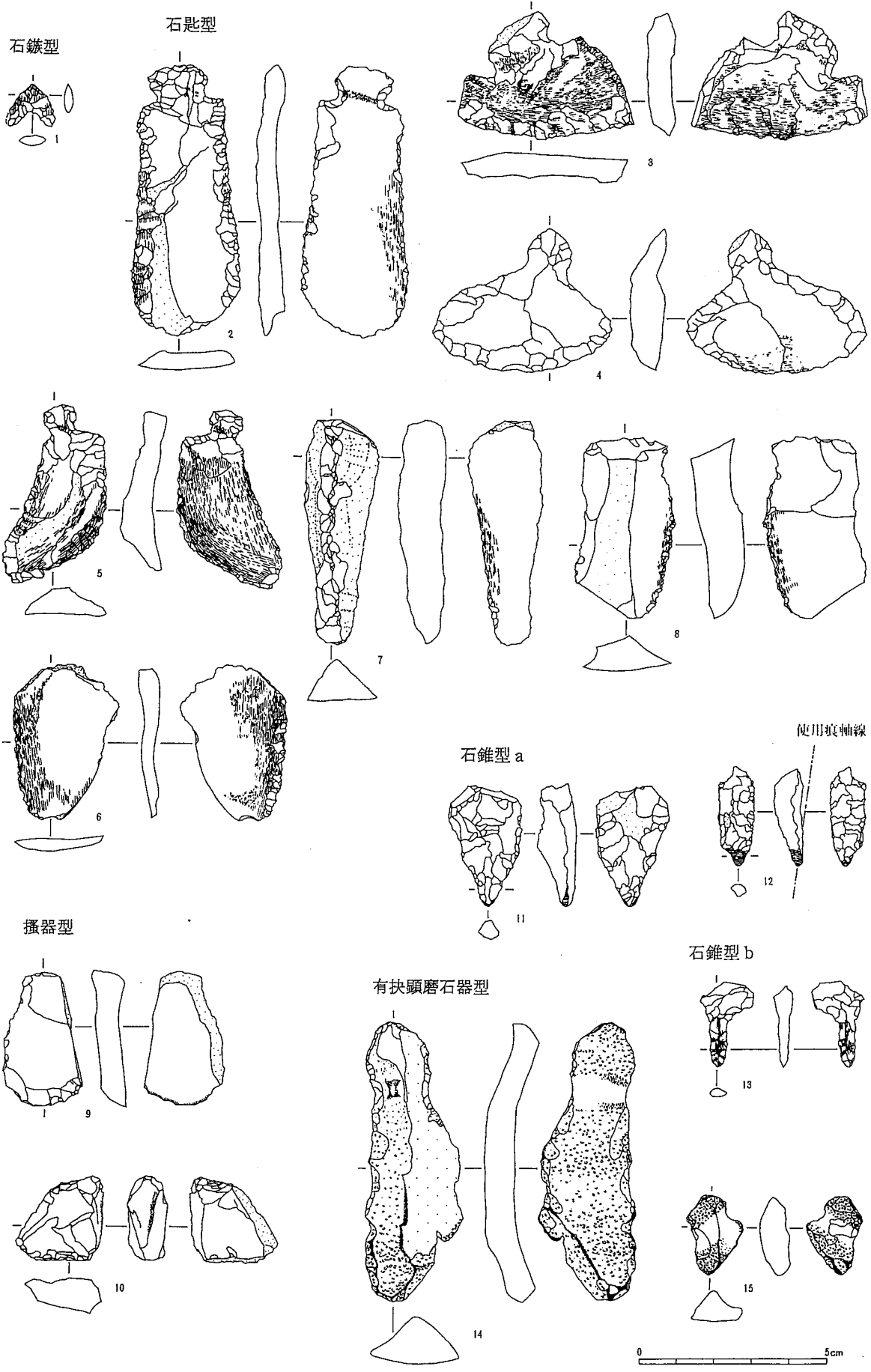
①石鏃型(挿図 253-1) 表裏面の尖端部から両側辺外側にみられる尖端角の二等分線と平行な線状痕で稜線のわずかなつぶれを伴う。2015点の石鏃中に1例のみみとめられた。黒曜石製の無茎凹基式である。他の石鏃には転用と考えられる以外の使用痕は見えず、これが石鏃の本来的機能の結果であるのかは疑問だが、位置と線状痕の方向とは、考えられている石鏃の用途と一致するものである。

②石匙型(挿図 253-2~8) 石質によって異なり、黒曜石製では縁辺と平行な線状痕、チャート・変質流紋岩・珪質頁岩製の場合は、縁辺・稜・凸部の磨研痕および磨研痕上の縁辺と平行な線状痕である。観察された部位と数は、両面加工の縁辺に9例(石鏃片側辺1、スクレイパー縁8)、片面加工の縁辺に161例(石匙刃部95、スクレイパー刃部64、石錐A IIつまみ部2)、二次加工の施されない縁辺に54例(スクレイパーの二次加工のない縁辺2、ピエス・エスキュー縁辺5、ピエス・エスキュー端部1、剝片・石核・原石の刃こぼれ・刃つぶれある縁辺46)<sup>(24)</sup>であり、石匙のすべてと片面加工の刃部をもつスクレイパーの大部分、それに一部の剝片の使用方法を示すものと考えられる(表16)。線状痕は縁辺にそうが個々は直線的であり、長目ではあるが5mmを越えるものはまれで、縁辺近くにより多い。顕著な使用痕をもつ黒曜石製の場合、すりガラス様に肉眼視される長さ2mm以下の細く短い線状痕が、広範囲にわたってみとめられる。片面加工の縁辺では、表裏面にほぼ等量みられる例と刃部裏面にのみ、またはより多くみられる例は等しく、後者にチャート・変質流紋岩・珪質粘板岩製品の磨研痕が多い。剝片・石核・原石のみでは、等量みられる例が7割、片面のみが3割であった。刃こぼれ・刃つぶれとの関係は、刃こぼれ部で

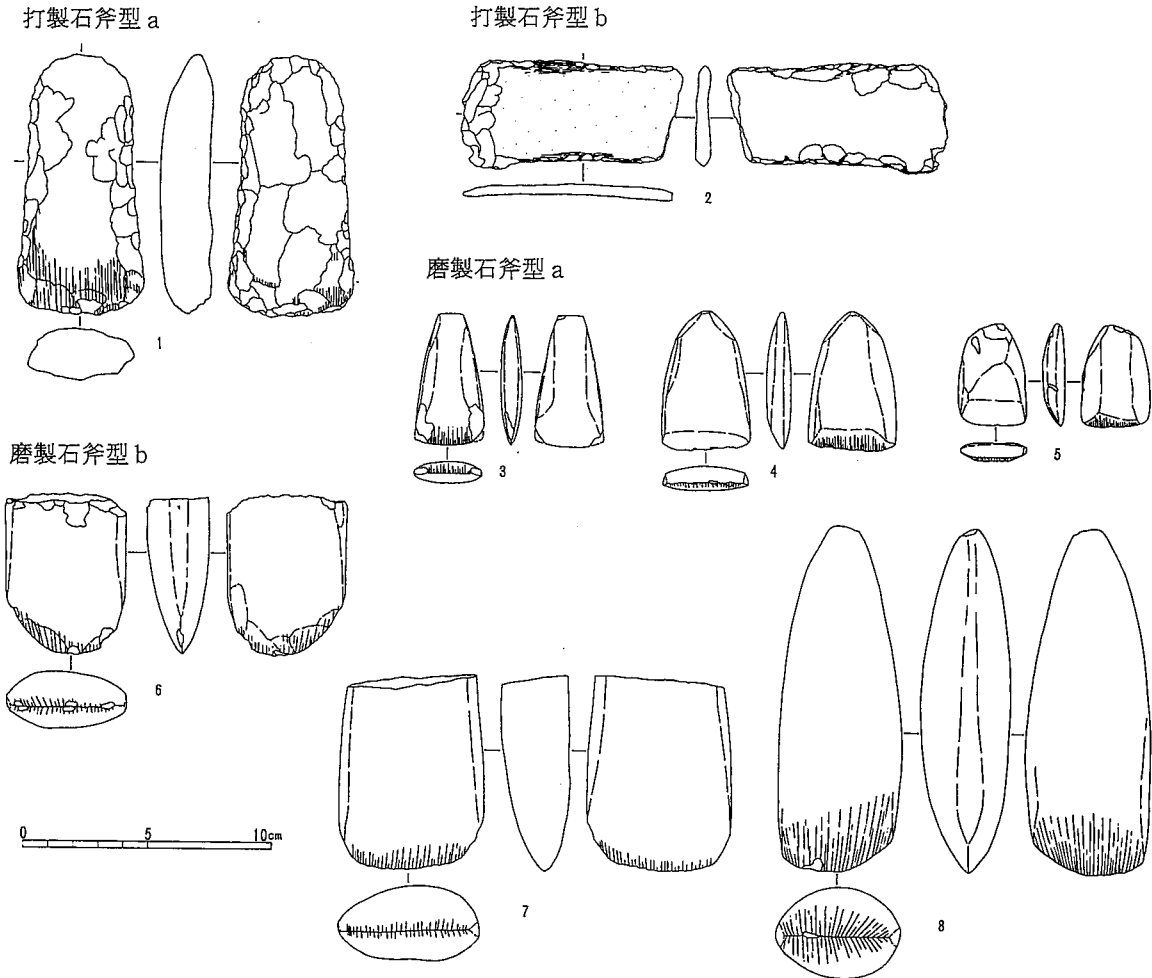
表16 石錐形式別使用痕数

使用痕部位	例数 観察数	検出数		
		計	両面	片面
石 鏃 縁 辺	(2015)	1	1	
スクレイパー調整部	122	8(0.07)	5	3
計		9	6	3
石 匙 刃 部	338	95(0.28)	44(0.46)	51(0.54)
スクレイパー刃部	371	64(0.17)	37(0.58)	27(0.42)
石錐A IIつまみ部	126	2(0.02)		2
計		161	81(0.5)	80(0.5)
スクレイパーの刃部以外	—	2	1	1
ピエス・エスキュー縁辺	(1243)	5	3	2
ピエス・エスキュー端部	(1243)	1	1	
剝片・石核・原石使用痕部	(3386)	46	33(0.72)	13(0.28)
計		54	38(0.7)	16(0.3)

観察数のカッコは総数。検出数計のカッコ内の数字は観察数に対する割合、それ以外は検出数に対する割合。



挿図 253 石器の使用痕(1)



挿図 254 石器の使用痕(2)

は片面に 11 例、両面に 17 例、刃つぶれ部では片面に 2 例、両面に 12 例と、片面のみにみられる例は刃こぼれ部に非常に多い。また、片面加工の縁辺の中に、刃面のみに線状痕のみとみられる例が 9 例ではあるが、刃面に於ては、凸部となる二次加工の稜付近に多いが、特にどちらかの側に多い傾向はみとめられない。一方石匙は、くりかえし刃をつけなおされ、結果として表面の使用痕を消してしまっている可能性もある。以上から石匙型使用痕をもつ石器は、表裏面にほぼ等しい力が加わるようにして使われていたものの方が多いようである。しかし、<sup>(25)</sup> 剝片・石核・原石の使用痕から、片面に刃こぼれを起こしながら他面に線状痕をつける使用法も考えられ、肉眼による比較のみでなく、数量化を含めたより細密、客観的データの蓄積を待ちたい。運動は縁辺と平行な往復運動であるが、その動きは、縁辺の形にかかわらず直線的である。

③搔器型(挿図 253-9・10) 縁辺から始まる縁辺と直交する線状痕である。スクレイパー I の刃部裏面に 8 例、ピエス・エスキーユの縁辺に 3 例の他、剝片の刃こぼれ部の裏面に 4 例、表裏面に 2 例、刃つぶれ部の表裏面に 2 例が観察された。例は少ないが、スクレイパーの一部とわずかの剝片の使用法を示すものである。使用痕は弱いもので、スクレイパーの線状痕は長さ 1 mm 未満と短い。縁辺と直交方向の運動が考えられ、線状痕の長さからスクレイパーは、対象物には縁辺のみが接する状態で使用されたと思われる。住居址 24 出土ピエス・エスキーユ 810(10)の、2 面の剝離面で構成された片側面には、1 面の他面との界側の縁から 1.2 mm の範囲に、縁と直交方向の長さ 0.5 mm 以下の細く短い線状痕が平均してみられる。特殊だが、成因は不明である。

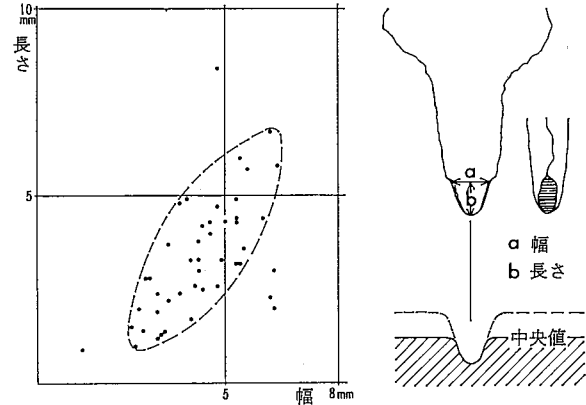
④石錐型(挿図 253-11~13) 2種類ある。a.

突出部の縁辺、稜にみられるつぶれ、突出部軸線と直角方向の磨耗(11・12)。b. 突出部面にみられる軸線と平行方向の擦痕(13)である。aは石錐錐部に71例68点、石鏃先端に1例、スクレイパー突出部に2例、ピエス・エスキューD I 端部に2例、剝片に4例がみられた。石錐はそのおもな使用方法を示すものであり、それ以外は例外的使用方法である。石錐は385点を観察した。うち68点はその18%にあたる。形式別の使用痕数と割合は、A I 45例44点(21%)、A II 4例4点(3%)、B I 20例18点(44%)、B II 1例であった(表17)。量的にはA I に多いが割合としてはB I に最も多い。128点観察できたA II に非常に少なく、その錐部形態、黒曜石製が極端に多いこと等からも、異なる使用方法が考えられる。あるいは、錐部作出の二次加工と考えた小さな剝離による縁辺角の大きい片面

表17 石器にみられる石匙型使用痕

例数 形式	観察数	使用痕 a				b
		計	つぶれ	磨耗弱	磨耕顕著	
石錐A I	210	44(0.21)	3	35	7	2
" A II	126	4(0.03)	1	2	1	
" B I	41	18(0.44)		14	6	
" B II	2	1		1		
" - I	6	1	1			

計のカッコ内は観察数に対する割合。使用痕 a の計は点数、他は例数。



挿図 255 石錐の使用痕

加工自体が使用痕跡(刃こぼれ)である可能性もあろう。使用痕付着の初期段階と判断されるつぶれは5例と少なく、面をなす磨耗が主である。磨耗面を正面にして見て左右どちらかが強く磨耗している例は無く、磨耗面からの微細な刃こぼれも両面にみられ、連続複方向回転する穿孔具の先端部とすることができよう。使用痕部軸線と錐部軸線は若干異なり、側面から見てつまみ部または基部が使用痕部軸線上に乗らない例が多い。柄が付けられていたとすれば、石錐をはさむのではなく石錐にそえて固定したものが多かったと考えられる。範囲を明確にし得た使用痕部形態から、穿たれた孔は釣鐘状を呈していたと思われ、深さ3.3 mm孔径4.2 mmという中央値から、aの使用痕が付着するような使われ方は、それほど深い孔を穿ったのではなかったようである(挿図 255)。bは石錐A I に2例のみみとめられた。いずれも中ふくらみの錐部とはっきりしたつまみ部を持つ。擦痕は鈍く短く、先端から基部に向かっているが、特に稜の部分に多いわけではない。突き入れる運動の結果であろうが、擦痕の形状から弾力性を持った対象物が考えられそうである。

⑤ピエス・エスキュー型 対をなす縁辺部もしくは両端部にみられるつぶれを伴うことのある階段状の刃つぶれである。ピエス・エスキューのみにみられるものではあるが、すべてのそれが使用痕であるのではない。分類基準から、本報告書では両極打法の石核もピエス・エスキューに含まれており、A・B類の大部分がそれに当るだろう。さらに、ピエス・エスキュー自体が両極打法で製作されとなれば、両端のつぶれと刃つぶれが、使用痕なのか製作痕なのかも分別不可能である。従って、使用痕の量的検討はできない。これ等が使用痕であった場合、それは両極敲打によるものであり、観察からその刃つぶれは縁辺もしくは端部のつぶれ以外の使用痕を伴わない。

⑥有扶頭磨石器型(挿図 253-14・15) 縁辺、稜等突出部のつぶれを伴う点状痕で、線状痕、擦痕等を伴わず1対の扶入を主とするくびれ部に帯状に点状痕を持たないことを特徴とする。有扶頭磨石器に72例、石鏃に2例、扶入刺突具に6例、石匙に4例、スクレイパーに2例、複数扶入石器に1例、剝片に5例、石核に1例みとめられた。すべて黒曜石製である。有扶頭磨石器はその79%と非常に高率で、その使用方法を顕著に示すものである。扶入刺突具でもその50%であり、おもな使用痕といえよう。尖頭器状を呈す

るが、あるいは「刺突具状に調整された有扶頭磨石器」であるのかもしれない。これ等以外の定形石器は転用であり、石鏃は先端に近い部分に對の抉入をもつ。有扶頭磨石器の形態的検討結果に加え、二次加工を全く施されない例があること、對をなす抉入をもつすべての器種からの転用がみられることなど、形態上の共通点はくびれ部をもつこと以外になく、その重さのみが機能であったと考えられよう。点状痕は突出部付近に多いが、階段状剝離の末端等を除き全面にみとめられ、顕著な場合帯状の点状痕をもたない部分との界も明瞭である。くびれ部で2分割した時、より重い側の稜等に点状痕の集中する例もある(14)。点状痕は拡大すると割れ円錐状を呈す。石核の打面にみられる剝片剝離の際の打撃痕と同形であり、小さな打撃痕と考えられる。打撃方向は、擦痕等をほとんど伴わないことから表面へほぼ直角方向であろう。稜等のつぶれもまた、打撃痕の集中したものである。縄文時代前期前半の特異な石器として、具体的使用方法の解明が待たれる。

⑦打製石斧型(挿図 254-1・2) 大形打製刃器類にみられる線状痕・磨耗痕で、2種類に分けられる。

a. 縁辺と直交する線状痕、磨耗痕で、打製石斧刃部両面に4例観察された。使用痕付着後刃部を再調整しており、刃部側縁に強い。刃縁に直角方向の運動を示すものだが、いずれも弱く、詳細な運動方向、着柄の有無・状況を規定し得るものではない。b. 縁辺と平行な線状痕、磨耗痕で、横刃型石器の刃部に3例2点みとめられた。両刃の両面、片刃の刃面にみられたが、これも弱く、刃縁と平行方向の運動を示す他に詳細は不明である。

⑧磨製石斧型(挿図 254-3~8) 磨製刃器類にみられる刃こぼれ・刃つぶれ・線状痕・磨耗痕である。

2種類に分けられる。a. 刃部片面にみられる刃縁と直交する短い線状痕で、小形磨製石斧の片刃面の裏面にみられる。観察し得た11点の刃部に6例みとめられた以外に、小形磨製石斧形装飾品(1533)にもみられ、片刃の小形磨製石斧のおもな使用方法を示している。線状痕は黒曜石製品のように石器表面そのままにあるのではなく、磨耗が線状を呈するのであり、刃縁側がより磨耗し、刃裏面と線状痕面とのなす角は $20^{\circ}\sim 30^{\circ}$ を測る。片刃面を手前に装着した横斧である。<sup>(27)</sup> b. 刃つぶれを伴い両刃面にみられる刃縁とほぼ直交する線状痕、磨耗痕で、定角式石斧、乳棒状石斧にみられる。観察結果によれば、定角式石斧では、15点中線状痕5例、刃つぶれ2例、乳棒状石斧では、95点中線状痕18例、刃つぶれ34例、刃こぼれ4例、磨耗痕13例であり、それぞれのおもな使用方法を示すものである。線状痕は小形磨製石斧と同様に線状を呈する磨耗で、微視的には刃縁最凸部を中心に両側辺(面)側へふくらむ方向が観取される。円刃の乳棒状石斧で「ふくらみ」が顕著であり、刃部の横断面形にも関係していると思われる。偏刃の線状痕が表裏面反対方向に軸線と斜交するもの、刃部横断面形と刃部最凸部が片寄ることに原因があるのではないだろうか。<sup>(28)</sup> 偏刃の強いものほど側刃角の大きい側を中心に線状痕は長く深く入っており、偏刃が使用の結果によることを裏付けている。表裏面で使用痕の強さに片寄りは見られなかった。以上の使用痕は、これ等が縦斧として使用されていたことを示している。なお、刃こぼれ・刃つぶれの上に線状痕・磨耗のみられる例もあり、多少の損耗もかまわず使われていたことが知れる。

## (2) 装着痕(挿図 253)

①小形石器の對をなす抉入部をめぐる部分に、短い線状痕のみられる例がある。黒曜石製で作用痕の顕著な石匙(2・3・5)と有扶頭磨石器(14)にみられ、いずれも軸線(抉入を結ぶ線)と直交方向に刷毛で掃いたような細いものである。前者では作用痕から考えられる使用時に石器にかかる力との関連はない。それが表裏面にみられることから着柄痕とも考え難く、両者とも、その部分を緊縛するものとのひもずれ痕的なものである可能性が強い。

②乳棒状石斧頭部には、つぶれを伴う小さな剝離が見られる例が多い。観察し得た116点中83例72%に



みとめられ、敲打痕や破損後の調整もこれに含めると、製作後何もしてない頭部は1割にも満たない。小さな剝離の稜への敲打が7例にあった。つぶれが頭頂にあり、そこから四方に向かって小剝離された形である。軸線と同方向の上からの加撃痕と思われる。痕跡から乳棒状石斧は頭部が露出した着柄方法が考えられている一方、刃部は再加工が頻繁に行なわれており、再加工するために斧身を柄からはずした際の頭部への加撃痕とも考えられよう。<sup>(29)</sup>

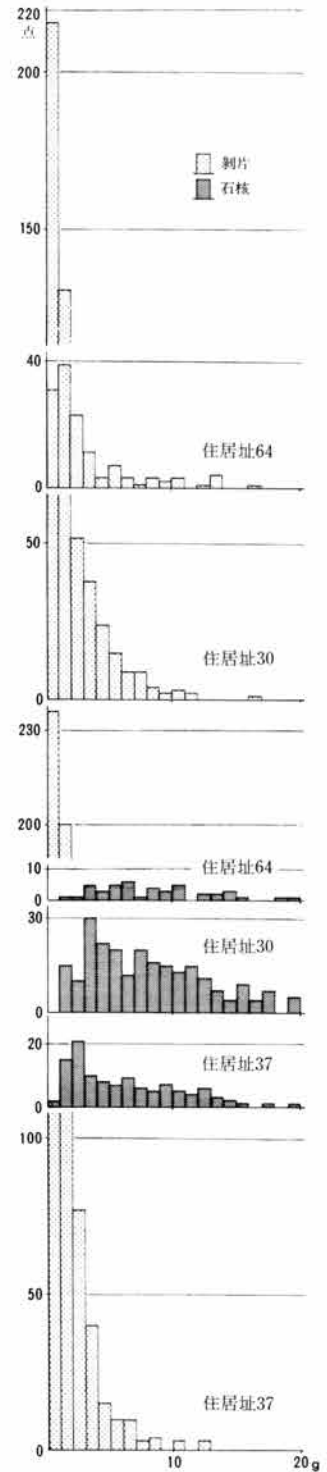
### (3) 小括

以上、前記した方法による観察から使用痕の検討を行ってきた。観察し得た使用痕とそこから得た資料はわずかであり、今回見得なかった使用痕、まとめ得なかった資料の方が多いであろう。今後、実験的な使用痕の研究と比較できるような設備ならびに資料を整えない限り、遺物に即した使用痕研究は進展しないと思われる。(小池 孝)

- 註1 これらは阿久II-a期住居址32・36・54・64・80、II-b期住居址15・29・53・65、III期住居址27・33・59・61・66・77、IV-a期住居址5・11・52各出土の原石・剝片の平均重量である。資料数は各期総数の1/4~1/3程度にあたる。
- 2 屑片は石質の区別をしていないため数字を示さなかったが、黒曜石以外の石質は極めて少ない。
- 3 さきに十二ノ后遺跡の石器の検討結果から「チャートや硅質粘板岩は、遺跡地へ供給された時、手頃な大きさの剝片、もしくは製品の形をとっていた可能性」がある[小池1981]ことが指摘されていたが本遺跡での結果もこれを裏づける形となっている。
- 4 原石・剝片類の項で原石の平均が阿久II-a期28.3g、II-b期17.3gと減少したことを指摘したが、あるいはこれとの関連があるのかもしれない。
- 5 千鹿頭社遺跡[宮沢他1975]では、阿久II-a期併行の4号住居址出土8点、II-c期併行の2号住居址出土5点、III期併行?の6号住居址-土器はIV-a期併行が注か-出土1点、十二ノ后遺跡[樋口・宮沢他1976]では、阿久II・III期併行の住居址出土8点、IV期併行の住居址出土3点である。また、現在整理作業中である上伊那郡宮田村中越遺跡でも阿久II期併行の遺構出土を中心に、管見にふれただけで、6点程が確認されている。
- 6 中越遺跡での、阿久II期より古いと思われる土器と伴出する18号住居址の1例が、管見にふれた最古の例である。
- 7 前者に、片側にのみ両面加工の挟入のある2例、中者に、断面三角形という素材の形態から、3稜に加工の施されている2例をそれぞれ含む。
- 8 片面から挟りを入れる方法(片面に両側からの剝離痕がみられる)と、相互面から挟りを入れる方法(両面の片側同位置に剝離痕がみられる)とがある。住居址30・53出土のものは後者である。
- 9 鳥浜貝塚報文[森川他1979]中で、近畿およびその周辺の縄文時代前期から晩期にかけてよく見うけられるとされている異形石器bと同形である。なお、鳥浜貝塚出土の石器については土器との伴出関係の記述がなく詳細は不明だが、異形石器bも含め、前期前半の石器としてはとらえている。
- 10 挿図253の如くである。なお、0.5g以下は手掘りによる検出が困難になるようで、住居址33(III期)のウォーターフローテーション・セパレーションの結果からは、1住居址あたり0.05g未満約27000点、0.05~0.15g未満約2000点、0.15g~0.25g未満約500点、0.25~0.35g未満約250点、0.35~0.45g未満約60点、0.45~0.55g未満約40点の屑片が手掘りでは検出できなかったと算出される。
- 11 原因の1つに、千鹿頭社・十二ノ后両遺跡の整理段階では、使用痕を有することが分類要素の大きな部分を占めていたため、小形のものを見逃していた可能性があげられよう。さらには、素材である剝片の大きさおよび量が異なっていたためとも考えられるが、両遺跡の報文中にある如く、それに関する資料は全くなく不明である。
- 12 北海道聖山遺跡においても赤色顔料の付着した凹石が検出されているが、聖山遺跡では凹みの中にも付着しており使用との関係を考えている[芹沢1979]。
- 13 筆者がかつて調査団内部で仮称したものが十分な検討がなされないまま時間が経ってしまい、石器の性格をはっきりつかめない状態で物と仮称が結びついてひとり歩きを始めてしまったきらいがある。今にして思えば、決して適当な

名称ではなかったが、内部ですでに定着しつつあることもあり、ここでは、先端研磨石器という名称をそのまま使うこととする。

- 14 ここで使う使用痕とは、素材に残された人間の行為の結果であると判断されるすべての痕跡を意味する。従って、石器が機能した時の作用痕だけでなく石器製作時の加工痕も含まれる。
- 15 あらかじめ紙面に適当な長さの2辺によって直角をつくり、それを5°きざみに区切っておく。次に、石器の長軸が直角をつくる1辺に沿うこと、石器の先端が直角の頂点にくること、石器先端の平坦面が紙面に対して垂直になるようにすること等に注意して、石器を紙面に置き、角度の計測をする。従ってここでの角度というのはかなり大きな値であり、およその傾向をつかむ程度のものである。
- 16 使用によってできた平坦面には特に中心部分がくぼんでいる様子は見受けられない。もし鋭い突起物が対称であるなら、使用痕は一点、それも端よりは中心部分に集中するのが自然である。
- 17 ごく最近出版された『日本の美術』第188号 旧石器時代—稲垣孝司編(至文堂)の第11図に、当石器にそっくりの石器が叩き石として掲載されている。ここで扱った石器と同類であることは間違いないと思われる。大阪府高槻市郡家今城遺跡とあり、これからは縄文時代だけでなく、さらに古い時代にも目を向ける必要があるだろう。
- 18 県内においては、滑石製品の製作址と考えられる遺跡が姫川流域に集中し、諸磯期に盛行することが指摘されていた[寺村・1967]が、本遺跡においても前述した製品や未製品の他、原石・剥片類の出土もみられ、これらが本遺跡で製作されていたことを示すものであろう。周辺には茅野市金沢、岡谷市横河川に滑石原産地があり[藤沢 1969]、これらの原石を利用したものと思われる。製作が開始されたのはIII期であったと考えられるが、II-b期の住居址40でも上層からではあるが未製品2点が検出されており、II期にさかのぼる可能性もあろう。
- 19 住居址33でのウォーターフローテーション・セパレーションの結果によれば、小型軽量の石器や、これらの破損品が検出される確率が高く、とりわけ石鏃の場合は12点中の4点が検出されており、全体の組成や一住居址あたりの数を検出する際は、より慎重な対応が必要となつてこよう。
- 20 遺物の検出された住居址のみを平均している。また、全面発掘できなかった住居址においては、補正値をもちいて計算している。たとえば、 $\frac{1}{2}$ 掘り残した場合は住居数を0.5と考えた。なお、V期については検出数が少ないうえに、住居址7と住居址72で極端な差があるため、挿図から除外している。
- 21 十二ノ后遺跡[樋口・宮沢他 1976]、大石遺跡[伴・土屋他 1976]、判の木山東遺跡[伴・白田他 1979]、経塚遺跡・船霊社遺跡[樋口・青沼他 1980]、判ノ木山西遺跡[小林他 1981]、頭殿沢遺跡[青沼他 1981]等である。
- 22 過去の観察結果によると、微細な線状痕等も実体顕微鏡での観察範囲であれば、肉眼でその有無を判別することが可能である。
- 23 使用痕の形態分類や呼称は、主として十二ノ后遺跡(註1)に準じた。
- 24 両極打法の剥離が使用痕面を切っており、使用痕を持つ剥片がビエス・エスキューニ化したものである。
- 25 かつて、「対象物に対して裏面により大きな力が加わるようにあてながら……[小池 1976-P 194]」とした石匙の使用方法の推定は、現状では否定も肯定もできず、保留としたい。
- 26 岡村道雄「ビエス・エスキューニについて」P.84[岡村 1976]
- 27 磨製石斧の名称、機能については、佐原真[佐原 1977]に従った。
- 28 観察し得た限りにおいて線状痕は直線的でも平行でもなく、縦斧の動きのみに原因を求めるには無理があろう。
- 29 出土砥石は据えて使用したと考えられており、それで乳棒状石斧を加工したとすれば、斧身を持って動かすことになる。刃縁と斜交方向の加工痕から、柄をつけたまま行なうのは困難である。



挿図 256 住居址出土剥片・石核重量分布(20gまで)

## 第4節 阿久遺跡の集落構造とその変遷

### 1 集落構造把握の基本的態度

#### (1) 居住域と非居住域

集落とはある単位集団が共同生活を営むための場である。その場は単位集団が生活を営む基本的な最小単位となる場——家を中心とする場合がほとんどで、集団の行動領域のひとつである。集団の行動領域はすでに指摘されているように、生産、婚姻、流通等の広域のものとして集落とがある〔林 1974・1979〕。

集団の行動領域はその時々時代の背景の中で、その土台となる生産様式〔マルクス 1859〕によって規定される。集落もまさに、単位集団の「人間行動が集約されている経済・社会・精神構造の場所」〔掘越 1972〕ではあるものの、その構造は時代によって異なるものである。しかし、それは常に家——居住地を中心に成立するものであって、居住地を離れた集団の行動領域はもう集落とはいえない。例えば、墳墓地域がそうである。しかし、より原始的な社会においては、そうした集団領域〔清水 1973・林 1974〕は未分離な場合が多い。本遺跡にみられる集落構造もまた、そうした状態を示しているといえる。この点は、個々の事例についてすでに前節までに述べてきたところである。つまり、本遺跡では居住の場としての居住域と、その他の居住域があり、前者は堅穴式住居址とそれに土壇群があり、後者は集団の精神生活の場としての立石・列石、環状集石群と土壇群の一部がある。方形柱列は、前節での指摘が正しいとすれば、阿久II期では居住域に、阿久III期以降は非居住域に含まれることになる。

本稿では、これら遺構の種類・規模・長軸方向・占地のあり方と出土遺物とその出土状態等を、総合的に検討を加えつつ、これら遺構群の組みあわせ方から、本遺跡にみられる縄文時代前期の集落構造を明らかにしてゆきたい。

#### (2) 堅穴式住居址の入口部の設定

居住域の把握は、特に住居址の上屋構造も含めた検討が必要であることは言を待たない。しかし、その構造上の特質は、今後を持ち越すとしても、とりあえず、前節に若干の補足を加えつつ、堅穴式住居の入口部の設定を試みたいと思う。

入口部はそれを直接に示す遺構が検出されれば何ら問題はないが、その確認は困難である。従って、入口部の施設そのものの検出を試みる一方、住居を構成するいくつかの要素の中から、総合的に判断せねばならないであろう。それには宮本長二郎氏が試みた屋根構造における煙り出し部の設定と入口部との関係〔宮本 1979〕、橋本正氏による床面利用からの追求〔橋本 1976・1979〕等魅力ある説がある。縄文時代中期の堅穴式住居は、埋甕や祭壇などの祭式施設等から入口部の設定がかなり容易となった〔水野 1969・長崎 1973〕。しかし、本遺跡をはじめ、前期の住居址にはこれらは現在のところ認められないために、前述した方法に、住居址群の中での占地等を含めたオーソドックスな方法を用いなければならないであろう。

そうした中で、本遺跡でもいくつかの参考となる手がかりがある。前述した入口施設と考えられる南壁ぎわの小ピットやその部分にみられる2重周溝である。また、北壁に設けられた張り出しピットや、作業台と考えられる固定式石皿と床面での完形土器の出土である。後者については、既述したように、住居址

が廃絶された状態を示すものであるとすれば、固定式石皿同様に入口部に置かれるべき遺物ではない。ただし、土器類は本来その場にあったかどうかの判断は困難であり、資料としては参考程度であろう。

以上に加えて、住居址の平面形・柱配列・炉の位置から、上屋構造も含めて入口部の設定が試みられよう。しかし、固定式石皿はII期だけのものであって、III期以降には認められない。その意味では、II期の住居址のみに用いられる資料といえる。同様に、小ピット等の検出もII・III期の住居址の一部のみに検出されたものであり、ここではII期の住居址についてのみ入口部を考えてみた。

壁ぎわの小ピットは、住居址の長軸方向と直交する短辺のうちの南壁に設けられ、A型の住居址64、B型住居址12・44、C型住居址40にみられ、II-a期1、II-b期2、III期に1の計4棟ある。他方、周溝が切れるか、2重となる住居址はA型住居址55、C型住居址30と先述の住居址12にみられ、後者では小ピットが併設されている。住居址40は、住居址中央部に東西方向に支柱穴がみられ、これが棟持柱の痕跡とすれば、棟方向は住居址の長軸方向と異なり、東西方向となる。住居址55は各壁中央に支柱穴が壁に接してあるが、入口部と思われる2重周溝部分は南壁にあり、この部分では東にずれている。もし、東・西壁中央の支柱穴が棟持柱であり、南北壁の支柱は、東・西壁のそれとともに壁または垂木を支える柱であると仮定できるとすれば、これもまた、住居址40と同様に棟方向が平面形と一致しないことになり、両者は類似することとなる。

平面形と柱配置の関係は、A型住居址では台形状プランと支柱配置が住居址32で逆行するものの、他はほぼ一致する。住居址25・26・48・80を除いて、支柱は全体に北壁寄りに設置され、壁と柱列との間は、他に比較して広い空間が設けられている。住居址26では、南・西壁寄りに、住居25は西壁寄りに空間がみられる。H型住居址78は南壁寄りに極端に広い空間がある。B型住居址は平面形が長方形で、長軸にそって支柱配置が台形で、関東地方の関山期にみられる台形状住居址と逆の関係となるが、支柱が壁ぎわになく、かつ住居址12を除いて炉は中央に設けられる点で異なる。B・C型住居址ではA型にみられた支柱の片寄った配置と空間域はB型住居址36を除いてはみられない。従って、ここで入口部を想定する場合の手がかりは、A・B型住居址は台形状に、かつ片寄らせて支柱を配置するところからくる広い空間域と支柱配置の関係であろう。その意味で小ピットが南壁がわの広い空間地域に認められることは重要である。

張り出しピットは、B型住居址36、C型住居址29・40の3例がある。住居址44はV期の遺物が埋土内から出土しており、この例にはならない。いずれも北壁に設けられているが、住居址36では東寄り、住居址29では西寄り、住居址40は北壁に2基併置されている。住居址36・40は入口部と反対側に設けられていることとなる。

固定式石皿はII期の住居址11棟にみられた(表14)。A型住居址26・32・55・64、B型住居址54・71、C型住居址15・24・30・40、H型住居址28である。検出位置は、先に指摘した住居址内の南辺の広い空間域にあるもの2例(住居址26・32)、中央部炉周辺1例(住居址64)、B型では炉北寄り(住居址54)、南壁に接する(住居址71)の各1例がある。C型では、南壁寄りの住居址15以外は北壁より(住居址24・30)、中央東壁寄り(住居址40・55)となる。以上、固定式石皿の検出位置は住居址71を除いては、住居空間の中では壁・柱をさけた比較的広い空間の中で、検出されたことになる。固定式石皿の用途が、作業台であるとするならば、ある程度の住居内の空間は必要であり、入口施設に近接することはあっても、そこへ直接設置することはまず考えられないであろう。固定式石皿が作業台として動かされていない限り、その検出位置は入口部そのものでないということになる。しかし、住居址71のそれは南壁にかけて立てかけてあったともとれる状態で出土しており、利用の必要に応じて片づけられた可能性もある。しかし、住居空間内の利用は原則として固定されていたと思われ、住居址71例を除く他の固定式石皿の出土位置はほぼ原位置を保っているものと思われる。

以上、いくつかの入口部設定上の根拠となると思われる遺構・遺物を検討してきた中で、共通する要素が何点が認められる。すなわち、①小ピットは住居短辺側の南壁ぎわに設けられ、住居址内の広い空間部のあるものはその部分にあり、それは支柱配置では台形状の上底側にみられる。②張り出しピットはいずれも北壁にあり、小ピットはその対辺側になる。③固定式石皿は、住居内の比較的広い空間内に設置され、その大部分は南壁ぎわをさけている。

従って、以上3点から、A～C型住居址の入口部は小ピット部分とその施設の痕跡であり、その対辺に張り出しピットを設け、入口部には固定式石皿は設置されなかったということになる。入口部はA・B型住居址では、平面形および支柱配置によって作りだされた広い空間の一部に設置されたであろう。A・B型住居址の構築が、かなり計画的になされている所から、単に入口部の造作の必要性だけで、このような構造をとったとは思われないが、構築上のひとつの条件となったことは考えられる。

## 2 集落の変遷

### 1) 阿久I期以前

阿久尾根における人間の痕跡は旧石器時代末にさかのぼる可能性がある。住居址39埋土出土の神子柴型石槍〔藤沢・林1961〕がそれである。一点のみの出土で定かでないが、柏木南〔岩崎1979〕、大石〔五味1981〕等の隣接する諸遺跡でも旧石器時代の石器が少量ではあるが、出土しているからである。

縄文時代早期の押型文土器も10点余出土した(2289～2291)。高山寺式〔会田1971〕類似の楕円押型文土器片などがある。一時期、阿久尾根も生活の舞台となったであろう(挿図52、図204)。

### 2) 阿久I期

阿久尾根の集落は本期から始まったであろう。前期初頭の住居址38の1棟だけの検出ではあるが、周辺には遺物の出土もみられ、小規模な集落が住居址38を中心とする尾根西地域にあったと思われる。しかし、II期との関係は不明であるが、II期の住居址群の占地より西にずれ、一致しない点は注目される。

### 3) 阿久II期

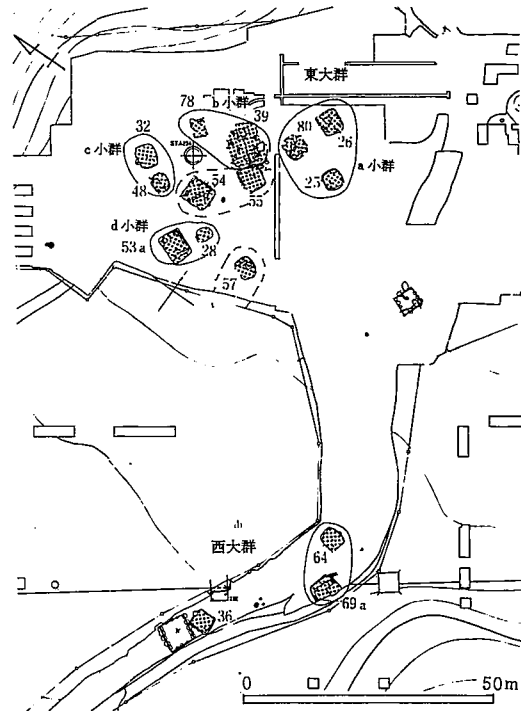
II期の住居址群は尾根中央地域の西寄りにある。未調査地域を多く残すものの、II期を通してほぼ尾根の北縁部に沿いながら、途中で尾根を横断したのち、尾根南縁部に至る馬蹄形に分布すると思われる。これは、II期の土器群の分布とも一致する。すなわち、住居址群は南斜面に開口部をもつ馬蹄形集落と考えてまず間違いないであろう。中央広場には方形柱列が構築されている。これは土壌とともに一部は住居址群に近接しているものもある。<sup>(2)</sup>なお、土壌および方形柱列の所属時期が不鮮明な部分もあるが、II期のいずれかには確実に属する。また、拡張・建て替えがいくつかの住居址に認められたが、その占有率はII-a期16%、II-b期35%、II-c期75%と時期が下るにつれて高くなる。

#### (1) II-a期(挿図257)

住居址13棟、方形柱列VII・a号の2基と数基の土壌がある。住居址の分布は住居址25を南限として、南北方向で直径約100m、幅35mに分布し、広場の直径は約60mである。住居址群は、入口部、住居址形態、占地のあり方等からいくつかのまとまりがある。馬蹄形集落の東北部と西南部にみられるもので、これらを大群ととらえ、前者を東大群、後者を西大群と呼ぶ。これら大群は調査範囲内だけをみれば、<sup>(3)</sup>相対峙する二つのグループとみえるけれども、II-b期の住居址群のあり方からすれば、両者に挟まれた未調査地域

にも、少なくとも一大群があると考えられる。

東大群は住居址 25・26・28・32・39・48・54・55・57・78・80 の 11 棟がある。このうち、大形住居址 39 と切りあう住居址 55 と B 型住居址 54、C 型住居址 57 は、切りあいと住居址類型からみた場合には後出の可能性が強く、II-a 期後半になろう。また、II-b 期の住居址 53 は拡張が 3 回に亘ってみられ、その当初の a は、A 型の住居址類型で、本期までさかのぼると思われる。従って、東大群は 9 棟からなると考えてよい。入口部は近接する住居址 25・26 のみ西側に、他は南側にあると推定できる。住居址 39 は大形で、住居址 28・78 は小形であるが、後者は住居としての構造を備えており、小形であるという理由で、特別視することはできない。これらを、入口部と住居形態の類似点を考慮しながら、地域的にまとめてみると、いくつかの小グループとなる。大形住居址 39 を中心に南側に住居址 25・26・80、西側に住居址 28・53 a、北側に住居址 32・48 とやや離れて住居址 78 がある。住居址 25・26 は入口部を西側にもち、構造的にも類似し、入口部の不明な住居址 80 もこの点では共通するので、このグループに入ろう。住居址 78 は、住居址 25・26・48・80 よりも住居址 39 に近い。これらをここでは小群と呼ぶ。そうすると、東大群は、住居址 25・26・80(a 小群)、住居址 39・78・(b 小群)、住居址 32・48(c 小群)、住居址 28・53 a(d 小群) の 9 棟 4 小群からなるといえよう。小群は 2 棟 1 組を原則とし、一部 3 棟 1 組のものも含まれることになる。



挿図 257 集落変遷図(II-a 期)

II-a 期後半は住居址 39 が廃絶し、住居址 54 と 55 が構築され、これで 1 小群が、従前の住居群に加わったと思われ、この間に住居址 53 と 80 は 1 回の拡張が行なわれたであろう。多分、住居址 53 と 55 は住居址 39 の居住者からの分離であろう。しかし、すべての小群が II-a 期後半まで存続したという確証はない。

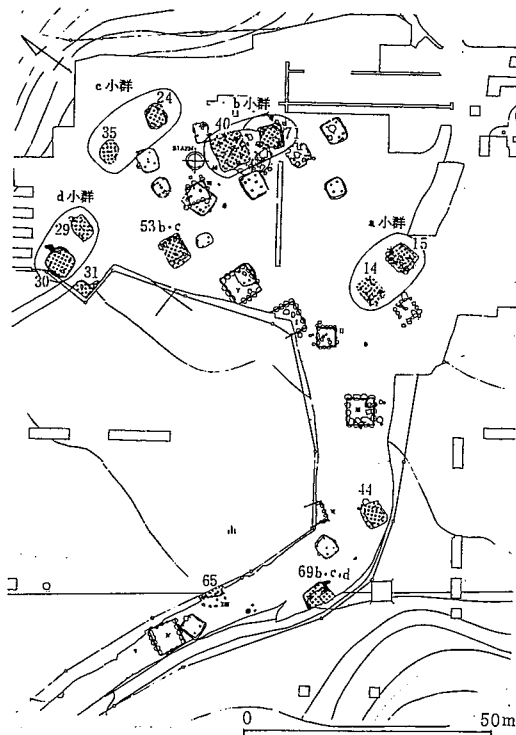
西大群には、住居址 36・64 の 2 棟がある。いずれも広場に背をむけ、南斜面に入口部をもつと推定できる。II-b 期の住居址 69 は 3 回の拡張がみられるので、拡張前の a は構築されていたと考えてよい。また、住居址 44 a も A 型住居址と思われ、住居址 69 a と同様に考えられる。従って、住居址 64 は近接する住居址 69 a と小群を、住居址 44 a、36 は未調査地域に存在が予想される住居址とそれぞれ小群を構成するとすれば、西大群は 3 小群か、それ以上の小群からなると想定できよう。住居址数の広がり方から、多分東大群とほぼ同様の規模が予想される。しかし、II-a 期後半については不明である。

以上、本期は馬蹄形集落であり、東西大群の間に別の大群の存在を仮定するとすれば、3 大群からなり最大 12 小群、48 棟前後の集落が若干の時間を前後しながら存在したことになろう。

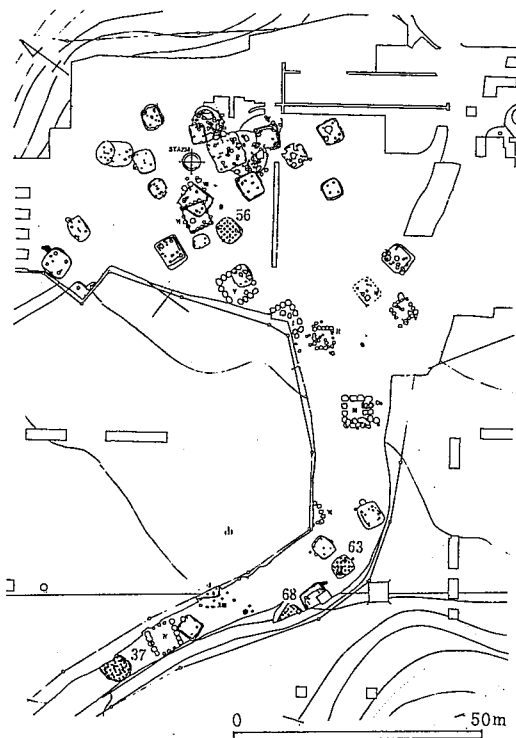
(2) II-b 期(挿図 258)

II-a 期の馬蹄形集落を基本としながらも、南側にも住居址 14・15 の 2 棟が作られるなど、その集落は拡大する。前代にみられた 2 棟 1 組の原則が確立する一方、大群の把握が困難となる。しかし、広場中央部分には、規格化された大形の方形柱列が何基もみられ、住居自体も規格化が著しい。住居の中には、明らかに前代からの占地を守り、拡張し続けたものもある(住居址 44・53・69)。

南側より、住居址 14・15(a 小群)、住居址 40・71(b 小群)、住居址 24・35(c 小群)、住居址 29・30(d 小群)



挿図 258 集落変遷図(II-b期)



挿図 259 集落変遷図(II-c期)

が認められ、他に住居址 31・44b・53c・65b・69があり、これらは未調査地域に存在が予想される住居址と組みあわせられよう。従って、II-b期には9小群以上で構成された集落が存在したことになる。多分、機械的に占地面积からその総数を割りだせば、15以上の小群からなり住居数も30棟以上となる。

方形柱列はI~VI・VIIIの7基がある。これらがすべて本期に入って構築されたものではないにしても、ある時期には共存していたとするならば、方形柱列は約4棟の住居に1基作られたことになろう。

このように、II-a期にみられた大群が解体し、2棟1組の小群からなるようにみえる。前代では、何らかの関係で結ばれていた大群が、ここで確認できないことは、その背後に、前代以上に単位集団の同族としての意識が強く働く一方、小群の規格化にみられるような、小単位での結びつきが強くなったともとれる現象である。この傾向は、II-a期後半の住居址39の解体と住居址54・55の発生とも規を一にするとと思われる。大形住居の解体は大家族の解体を意味し、いわゆる核家族化をうながしたのであろう。すなわち、大群の解体と小群の強化は、単位集団維持のために、一見矛盾する。しかし、この背後に大形化・規格化された方形柱列の数量増加があることを考えれば、この矛盾は解決できよう。方形柱列が高床式の構造物であろうという推定は前項ですでになされた。中央広場に設けられた、この建物こそ、同族集団としての意識高揚のための宗教的施設であったと考えたいのである。  
(5)

### (3) II-c期(挿図259)

調査範囲内での検出住居址数も4棟にすぎず、不明な点が多いが、包含層からの遺物の出土量も少なく、集落規模は明らかに縮少している。住居址の占地は、前代に比較して、全体に西に移動したであろう。このために、前代までの住居址占地地域の主体であった東部地域にはわずかに住居址56の1棟しかみられない。多分未調査地域に、かなりの住居址数はあるにしても、本期に属する

と考えられる方形柱列はVIIの1基のみである。他方、拡張が1棟を除くすべての住居址にみられることは、前代からの継続性を物語るものといえる。

資料不足でこれ以上の追求は困難であるが、集落規模の縮少と、本期をもって集落が他へ移動したことを考えあわせると、その原因が本期の中に求められよう。

II期の生産活動の主体が狩猟にあったことは、多種・多量の石器類の出土、とりわけ住居址内から出土する多量の黒曜石類から容易に判断できる。その黒曜石は良質のものから、明らかに石器製作に不適と思われる悪質のものまでも採集してきている。その背景には、生産活動のはげしさが雄弁に物語られていよう。しかし、数十棟近くで構成される集落の維持には、強力な共同帯的紐帯と、かかんな生産活動が必要であったろうが、生産力にも限界があり、やがて、矛盾激化の中で、集落は解体に向かった。II期以降続いてきた集落の崩壊であり、移動である。以後、しばらく、阿久尾根は無人の野となる。

#### 4) 阿久III期

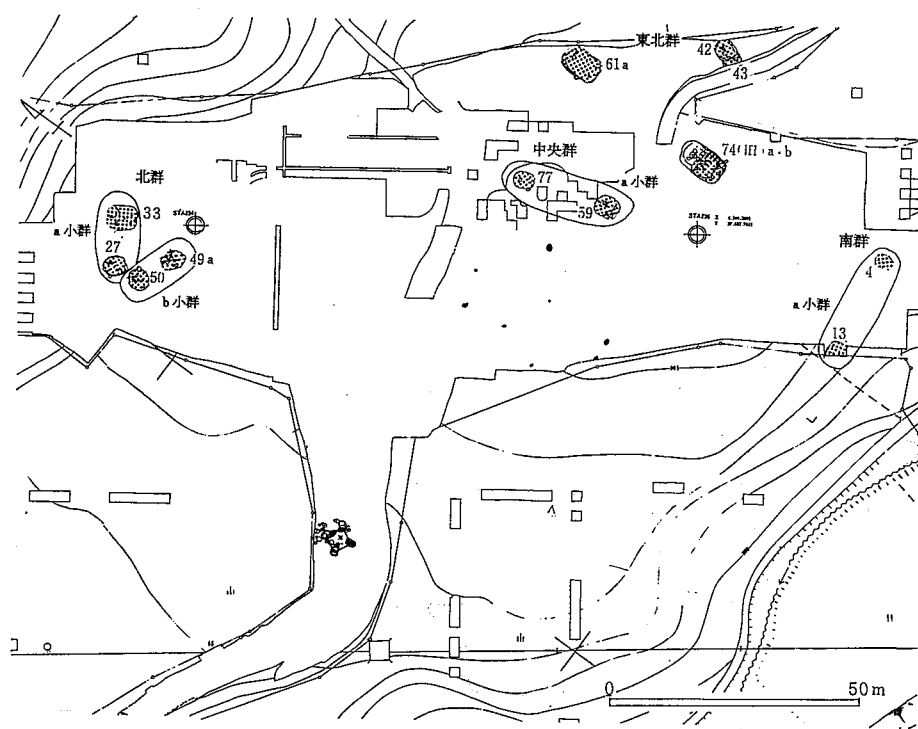
II-c期をもって、一時期無人の野となった阿久尾根に再び本期から集落が形成されることになった。住居址群はII期と北辺で一部占地を重複しながらも、尾根北縁に沿いながら、東上し、尾根の最も狭くなった部分を横断して、南斜面まで弧状に分布する。未調査地に住居址の存在する可能性もあるが、西に開口部のある馬蹄形集落となり、その径は約160mである。住居址19棟、方形柱列1基と土壌がある。住居址42・43と住居址12・59・66・81に重複が、住居址49・61・74(旧)に拡張がみられ、拡張率は15%と少ない。

調査範囲内でみた場合に住居址群は大きく4地区に集中してみられる。すなわち、尾根北縁部にそう北群(北地区)、東北辺部の東北群(東北地区)、尾根中央部の中央群(中央地区)、南斜面の南群(南地区)である。この住居址立地はIV期以降と基本的には同一であり、呼称もこれに従う。

III期の住居址群はさらに古と新の2段階に分離される。

##### (1) III期古段階(挿図260)

北群に住居址27・33・50、東北群に住居址42・43、中央群に住居址59・77、南群に住居址4・13の計9棟がある。このうち住居址50は古段階でも後出的である。住居址類型では、不明の住居址43を除いていずれもD型であり、住居址4・50はI型で、土器様相からみた見解と一致する。D型住居址は、II-c期からの伝統をもつだけに住居址の形態別変遷からも住居址50を保留すると、ほぼ一括でとらえられる。



挿図260 集落変遷図(III期古段階)

北群は住居址27・33があり、ややおくれ住居址50が加わったことになる。III期新段階の住居址49aが、I型住居址であり、古段階までさかのぼれそうなので、当初住居址27・33(a小群)があり、のちに住居址49・50(b小群)が加わったものと思われる。従って、2棟1単位の小群が2群あったことになる。ただし、a小群からb小群へ



と移動したことも考えられようが、この点は後述する。

東北群は住居址 42・43 が重複しているが、出土土器の様相をみるとさして時間差は認められないところから、建て直しと考えられる。新段階の住居址 61 にも拡張が認められ、拡張前の a が住居址 42 と組みあわせられ、小群を形成していたらしいが、未調査地にも住居址の存在が予想されるので、断定はできない。もし、後者だとすれば、東北大群は 2 小群からなることになる。

中央大群は住居址 59・77 で構成される小群と、さらに住居址 74(旧)a・b と、未調査地域に存在が予想される住居址からなる別の小群からなると思われる。住居址 74(旧)は新段階であるが、5 回の拡張があり、大形化する前の a・b を古段階にまであげて考えてもよいであろう。

南群には住居址 4・13 の 2 棟があり、これで小群が考えられる。しかし、調査区西側の未調査地に住居址があり別の組み合わせも考えられる。

### (2) III 期新段階(挿図 261)

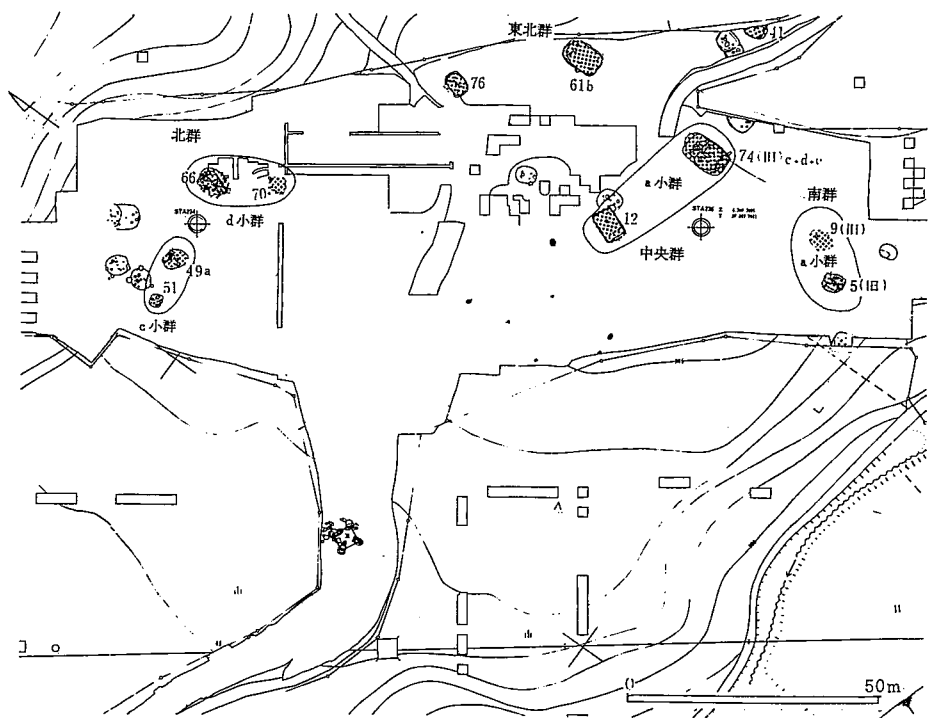
住居址 10 棟が検出された。住居址類型 B・D・E・I・G と変化に富み、II-c 期的住居形態から IV 期的住居形態への過渡の様相を示す。大形住居址が 2 棟出現するのも注目される。

北側に住居址 49b と 51(c 小群)、住居址 66 と 70(d 小群)がそれぞれ近接しており、2 小群からなるであろうが、住居址 66 は 81 と重複関係にある。しかし、出土遺物からさして大きな時間差は認められず、また、古段階にさかのぼらせても、組み合わせられる住居址が見当たらないので、本期の建て直しと理解しておきたい。

東北群には住居址 76・61b・41 がほぼ一定間隔を保持しながら、尾根北縁部に沿って、東西方向に並ぶ。距離からみて、前二者で 1 小群を構成するが、やや間隔が広く、三者とも未調査地に存在が予想される別の住居址とおおの組み合わせられるかも知れない。前者だとすれば 2 小群が、後者であれば 3 小群からなることになるが、他の小群のあり方からみて、後者の可能性が強い。

中央群は住居址 12 と 74(旧)c・d・e とが組みあわされる。ともに中または大形住居址である。74(旧)は 3 回の拡張がみられるところから、住居址 12 の構築以前に 74(旧)c が、未調査地に予想される別の住居址と組みあわされるかも知れないが、そうだとすると、中央群は 2 棟からなる 1 小群から構成されたことになる。

南群には該当する住居址はみられない。しかし、IV-a 期の住居址 5・6・9・11 は数回の建て替え、または拡張があ



挿図 261 集落変遷図(III期新段階)

り、それらの構築時期は、本期までさかのぼると考えられる。特に住居址5・9は1または2回の建て替えがみられるので、建て替え前の(旧)が本期までさかのぼるであろう。だとするならば、南群にも2棟からなる1小群があったことになるろう。

以上、Ⅲ期の住居址は新築・建て替え・拡張をくりかえしながら、群の範囲内の中で、継続して営み続けたことが理解できよう。先に、Ⅲ期古段階の住居址の変遷を述べる中で保留した、北群のa・b両小群の併存は、継続性という点を考えると、 $a \rightarrow b \rightarrow c$ という図式が考えられ、出土遺物の点からも、この点が裏付けられるのである。

従って、集落規模はⅢ期古段階では4群4小群の8棟の住居があったことになる。Ⅲ期新段階は、北で2小群、東北群で2小群が増加し、結局、4群7小群14棟から構成される。つまり、半数の群内で住居数の増加が認められ、継続して集落が営まれたことを示していると推測できる。この背後には、住居占地の厳格な規制が強く働いていたことを暗示している。群を構成した小集団が、気ままに住居を定めることは、タブー視されており、その集団は集落のおきてに従って、当初から決められていたのである。つまり、集落の定着性である。これはⅡ期の住居設定にもいえることであるが、その住居の構築は小群の構成は厳格に守られていたものの、群の形成にはさして強い規制はⅡ-b期以降には認められない。Ⅱ-a期においても、その厳格性はⅢ期の比ではない。Ⅱ期とⅢ期の差は集団規制の強弱であったともいえよう。時期が下るにつれて、拡張・建て替えが多くなるのもこれに起因しよう。

中央広場には土壇群と方形柱列Ⅺがある。前者の9基はほぼ本期と考えられ、特に、中央群の西方に集中してみられる。グリットの遺物もこの地域に特に集中しており、何らかの関係があろう。他に土壇群の中にも本期に属するものがいくつかあると思われるが決め手はない。A型土壇を初めいくつかの形態の土壇があり、このうち少なくとも立石土壇などは墳墓と考えられるものである。

方形柱列はⅡ期のそれと比較して、構造上にも相違があり、その性格も異なるであろう。墓域にあることを思えば、それは葬送儀礼と深い関係のある構造物であったといえよう。

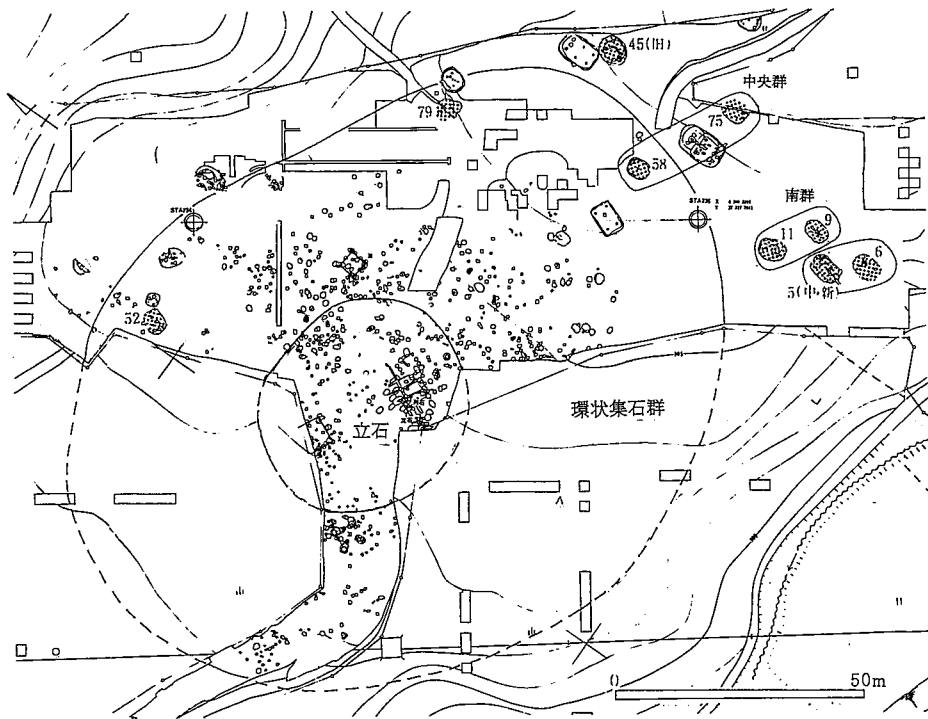
環状集石群に沿って、遺物の広がりが見られる点は、Ⅳ・Ⅴ期と同一傾向にある。従って、Ⅲ期から、それが作られたとすることは可能ではあるが、北・東北群との関係もあって困難である。しかし、土壇群は再葬墓である可能性が強いとすれば、集石の存在も完全に否定することはできない。しかし、先述したように、考古学的知見がこの点を否定する以上、再葬祭式は行なわれたにせよ、この場合に集石の構築はなかったとみるのが妥当であろう。従って、そこには立石・列石も作られず、蓼科山を信仰の対象とする祖先崇拜がどの程度のものであったかは不明である。しかし、石器生産活動がⅡ期に比較して、極端に低下する傾向が本期からみられ始めることは重要である。

## 5) 阿久Ⅳ期

広場の中央に立石・列石が設置され、それを中核として、土壇群(内帯Ⅰ)、環状集石群(内帯Ⅱ)、住居址群(外帯)が3重にとり囲む集落構造が本期に成立したと思われる。さらに内帯ⅠとⅡの接点に方形柱列も構築された。Ⅲ期に始まる馬蹄形集落と土壇群はⅣ期に始まる集落構造の先駆となったものと思われる。しかし、本期の馬蹄形集落はⅢ期の居住地を厳格に継承してはいるものの、内帯Ⅰ・Ⅱ(非居住域)の規模拡大にともない次第に形骸化し、Ⅳ-b期を経てⅤ期に至ると、それは居住地としての意味もほとんど薄れてしまう。その萌芽時期がまさにⅣ-a期にあるといえよう。

### (1) Ⅳ-a期(挿図262)

住居址8棟が検出され、うち7棟に建て替えまたは拡張が認められるなど、拡張率は87%に達する。住

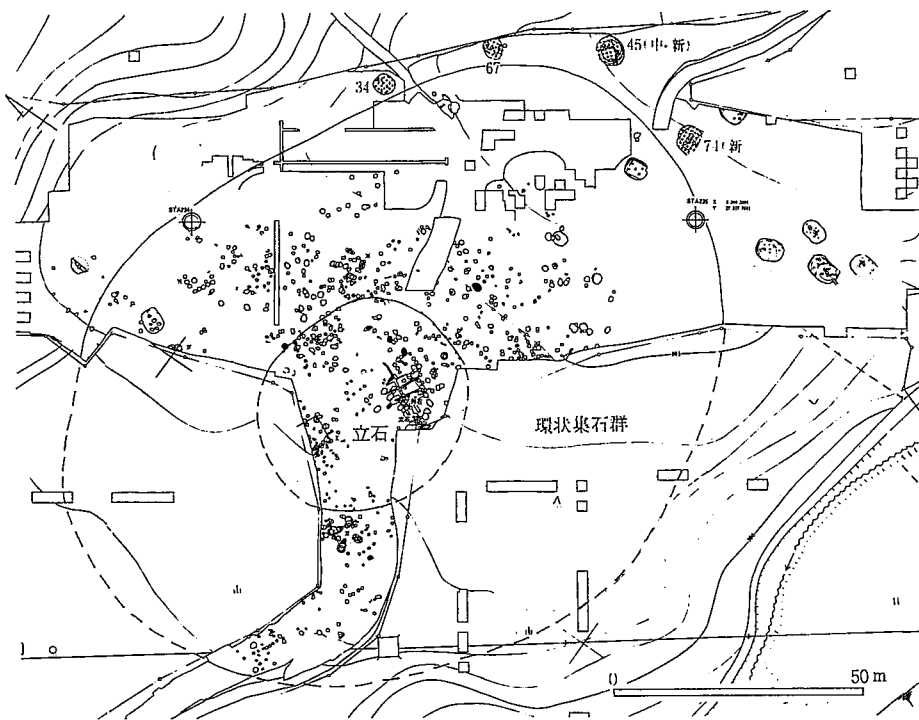


挿図 262 集落変遷図(IV-a期)

居址はD型が多いが、E・I型もあり、そこにはⅢ期的住居址の様相は極度に少ない。占地はⅢ期同様北・東北・中央・南地区にあるが、居住地の比重は北から南に移る。

北群は住居址52の1棟が検出されている。その西寄りの未調査地に組となる住居址が存在する可能性もあるが、本址1棟のみかも知れない。

東北群は住居址79、中央群は住居址58・75、南群は住居址5・6・9・11がある。住居址52・58・79は、その埋土あるいは周辺にいくつかの集石が構築されており、廃絶後は環状集石群の外郭地域となった。従って、東北群の住居址79も、未調査地域が尾根外周部にあるものの、北群同様に、小群となる住居址があるかどうかの判断は微妙

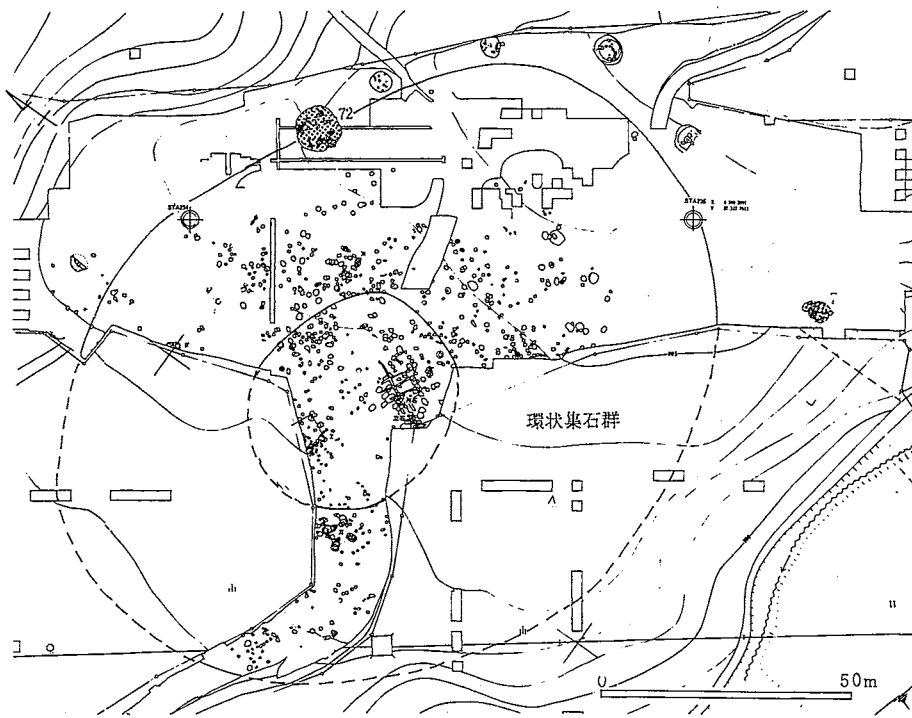


挿図 263 集落変遷図(IV-b期)

である。しかし、IV-b期には東北群に3棟以上が予想されるので、そのうち住居址45(旧)が本期に構築されたとしても、住居址79は別の1棟とで組みあわせる小群であった可能性が強い。つまり、東北群は少なくとも2小群4棟からなると思われる。

中央群は住居址58・75からなる小群のみであろう。しかし、住居址58には拡張が、住居址75にはそれが認められないが、后者は未調査部分をかなり残すところから、拡張がなかったと断定する訳にはゆかない。

南群は4棟があり、うち、住居址5・9には1～2回の建て替えが認められ、建て替え前はⅢ期新段階



挿図 264 集落変遷区(V期)

になるであろうことは前述した。従って本期には拡張後のそれらと、あらたに登場した、住居址6・11とで組みあわされる2小群があったものと思われる。すなわち、南群は住居址9(新)と11、住居址5(新)と6とがそれぞれ組みあわされる2基の小群からなる。ただし、住居址9を除く他の3棟には1回以上の拡張がみられ、かつ出土土

器の中にはIII期新段階の土器様相を強く残すなど前代とのかかわりが強くみられる。これらは、明らかに、III期から継続して住居が営まれてきたことを如実に示すものであろう。

以上、IV-a期の住居地域はIII期以来の故地を占地する4群があり、1ないし2の小群からなる。従って、本期の住居数は12棟前後あったことになる。

土壌は11基確認されているが、実数はこの数倍に達するであろう。単位集石群A-12・13、B-1に接した地域に密集してみられるが、時期の判明したものであるだけにそれらが時期別のまとまりを示すものであるとは断言できない。

環状集石群の大多数はIV期に構築されたと思われる。これは環状集石群に沿う形で出土した土器の大半はIV期で、その構築と深いかかわりが指摘できるからである。

## (2) IV-b期(挿図 263)

住居址は東北群に住居址34・67・45(新)、中央群に住居址74(新)の計4棟が検出されている。拡張は住居址45に認められるだけで他にはない。前代に比較して、北・南群に全く住居址が認められず、それだけに住居数の減少を意味し、かつ、馬蹄形集落としての形態は完全に崩壊している。また、これらは、北から住居址34・67・45(新)・74(新)と一定距離を保持しつつ弧状にみられる。ここには、前代にまで認められた群の把握はむしろ困難である。つまり、2棟1単位からなる小群と、それらがいくつか集合してできる群を把握する方がむしろ無理である。住居址の占地状態からは、すでに一部で行なった、未調査地の住居址を予想して小群を把握することはできないのである。言葉をかえれば、前期的集落の構成の基本がII期にめばえ、III期で完成したとすれば、それはここでは完全に崩壊しているといえるのであり、そのきざしはIV-a期にすでに認められる。その要因はいうまでもなく、環状集石群の構築にある。

環状集石群・土壌群は本期にも盛んに構築された。年代の想定できる土壌は29基あり、立石・列石付近から、蓼科山を望む方向に特に濃密に分布する。

## 6) 阿久V期(挿図264)

IV-b期に認められた前期的集落の崩壊は本期で端的に示される。すなわちV-a期で廃絶された住居址は認められず、V-b期の住居址7・72の2棟があるにすぎない。それも、東北地区と南地区に孤立した形で存在する。

V-a期の確実な住居址はみられない。しかし、住居址7・72はともに3回以上の拡張が認められ、その拡張前のいくつかは、本期に属すると考えられる。逆にいえば、住居址7と72はV期を通じて存続したことになる。しかし、両住居址は規模等が極端に異なる。特に住居址72は径が10m近くある大形住居址で、床面・柱配列等が本遺跡の住居址の中では特異である。支柱穴の掘り方形態は方形柱列C型に類似し、床面が住居中央にむかって傾斜し、かつ、壁柱穴が周壁にまわるなど、一般の住居址とは規模・構造等が異なる。特に、占地が回廊状の列石を通して蓼科山を望むライン上にある点は偶然とは思えない。一種の集會場で、その背景にはIV期以降の祭式と密接な関係のある建造物と考えたい。

環状集石群は本期まで確実に構築された。時期の推定できる土壌数はV-a期16、V-b期14と前代に比較して半減している。もとより、これは傾向を示すにすぎない。また、環状集石群にともなう土器片も前代をピークとして、本期では減少する。つまり、本期の集石・土壌の構築は盛行はしていたものの、それは前代の比ではなかったであろう。

## 7) 阿久VI・VII期

前期末にあたる本期の遺物は全体量では少なく、その分布も、環状集石群の占地とは一致しない。遺構の検出も認められず、本期には環状集石群は構築されなかったことを示すものであろう。土器編年上ではV期に後続するVI期がくるであろうが、本遺跡における継続性は認めがたい。

IV期に始まる立石・列石を中心とした祭式はV期をもって終了したと考えられるのである。

以上、本遺跡の集落の変遷を縄文時代前期に限定してみてきた。そして、そこに示された集落構造は、断絶期(神ノ木式期・有尾式期)を境として、前半(II期)と後半(III~V期)とでは大きな相違が認められる事実が指摘できる。

## 3 阿久IV・V期における宗教的儀礼

阿久IV-a期に始まり、V-b期で終る宗教的儀礼は立石・列石を中心として実施されたものである。それがどのような内容であったのか、具体的に示すことはできない。阿久遺跡にみられる諸遺構は考古学的に未知見のものが多く、これらから考えられる宗教的儀礼の復元は、想像の域に立ち入っていることはもとより承知ではあるが、一つの試みとしてあえて以下に示した。

### (1) III期以降の集落構造の性格

すでに前項までに述べてきたIII期以降の本遺跡の性格を示すいくつかの事例をまとめると以下の通りとなる。

- ①立石・列石を中核として、土壌・環状集石群がドーナツ状にとりまき、その外帯の一部に居住域がある。また、土壌群と環状集石群の接する地域に方形柱列(C型)がある。
- ②立石・列石は蓼科山との関係を示す立体的構造をとる。すなわち、立石前面に回廊状の列石が蓼科山の方角に向けて構築され、立石はこの回廊を通して蓼科山と結ばれる。

- ③立石は遺跡地にはみられない岩石で、少なくとも10数km離れた諏訪湖盆地から運搬されてきたものである。立石をとりまく円形石組の中には火床がみられ、立石自体も火熱を受けているところから、一種の火祭りがここで挙行されたと思われる。
- ④土壌群は立石土壌など多種多様であり、それらはⅢ期以降Ⅴ期に至るまで、構築され続けたものである。しかも、構造的に類似する土壌がまとまって群をなすが、一時期に構築されたものではない。かように、土壌群の構築には規格性・継続性と単位性が読みとれるのであり、これらは、それを構築した集団の差と理解されるのである。土壌はその構造上の特徴から墳墓、それも、再葬墓と考えられる性格をもつ。以上の点から、本遺跡の土壌墓群は複数の集団の墓域からなり、Ⅲ期以降Ⅴ期に至る長い期間構築され続けてきた結果のあらわれと判断できる。
- ⑤環状集石群は土壌墓群の外側に、一部それと重複しながら環状に分布する。これは明らかに居住地と非居住地、世俗の世界と聖なる世界、つまり墓域を区割する、後世の玉垣や地蔵信仰にみられる塞の河原的な性格をもつと理解できる。
- ⑥環状集石群も土壌墓群と同様に、規格性、継続性と単位性がみられる。これも、複数の集団のⅣ期以降にわたる構造物で、領域が定められていたといえる。
- ⑦環状集石群内からは多量の遺物が出土した。しかし、土器はすべて破片で完形品はみられない。これらの遺物は、宗教的儀礼にともない廃棄されたものと解釈できる。
- ⑧居住域における住居はⅢ期以降Ⅴ期まで継続して営なまれたが、その占地はⅢ期にすでに成立し、集落の廃絶まで維持された。
- ⑨集落成立時(Ⅲ期古段階)には居住域は2棟1単位の小群4群からなる8棟からなり、Ⅲ期新段階では4群7小群の14棟と大きく住居数が増加する。しかし、Ⅳ-a期には4群6小群の12棟となり減少し始め、Ⅳ-b期には群構成はみられず4棟、Ⅴ期には同様に2棟となる。ここには、Ⅳ-a期以降、住居数の減少とともに、集落成立時に確立していた集団関係が崩壊していくことを意味している。
- ⑩以上を要約すると、集落開始以降拡大傾向にあった本集落がⅣ-a期以降、居住域の縮小が始まり、逆に非居住域が拡大してゆくことを意味しよう。すでに指摘したように、北群の消滅と集石の構築は端的にこのことを物語る。また、土壌・集石の構築のピークがⅣ-b期にあることもあわせて、参考とせらるう。

以上のように、本遺跡後半の集落構造は、蓼科山を信仰の対象とする祖先崇拜があり、その言わば祭場としての性格を強く持つものであると考える。それは同族集団としての意識の高揚の場でもあったであろう。

## (2) 宗教的儀礼発生の際機

縄文時代前期という時代を、本遺跡が発見される以前に正しく評価したのは岡本勇氏であった〔岡本1975・1979〕。研究者の多くが、縄文時代中期の社会を積極的に評価する中で、岡本氏の見解は、前期の調査例が乏しい中であっただけに、学史に残る業績といえよう。

阿久Ⅱ期にみられる本遺跡の集落構造は決して早期的な小集落でないことをはっきりと示している。中期に一般に認められる馬蹄形集落の構造をとり、数十棟からなる住居址群と規格化された大形建造物の存在は、まさに、岡本氏の指摘の通り縄文社会発展史の上で、前期が重要な役割を荷っていたといえよう。これは上伊那郡中越遺跡〔藤沢・1969・1970〕、千葉県幸田貝塚〔岩崎・関根他1970・1971・1972・1974・1975・1976〕、埼玉県打越遺跡〔麻生他1978・新井他1979〕等にみられる大規模集落が前期前半にあったことと歩調をあわせる。その文化内容は福井県鳥浜貝塚でみられるように、すでに栽培植物さえあったといわれる〔岡本・

森川他 1979]。

阿久Ⅱ期における生活基盤の基礎は自然経済と考えるのが、多量の石器生産活動から妥当といえよう。だからこそ、すでに指摘したように、集落の規模拡大にともない、矛盾が生じた結果、Ⅱ期集落は解体し終ったと思われるのである。しかし、Ⅱ期の社会の質的向上が十分にあったことは認めざるを得まい。地域性の強い中越式土器や神ノ木式土器の祖源的土器(阿久Ⅰ群D)が生じたのも、そうした中で始めて理解できるのである。

本遺跡は、Ⅱ期集落の解体をもって一時断絶期をむかえる。

阿久Ⅲ期に再び集落が構築された。その集落構造は質的にも大きな変貌をとげる。しかし、集落内の住居数はⅡ期が一時期数十棟に近い数字であったものが、Ⅲ期の集落開始時には8棟前後であり、以降、そう大きな増減はⅢ期の中ではみられない。これはまさにⅡ期集落の反省の上にたった、矛盾解決のための結果であろう。つまり、自然経済のいきづまりからくる、食料資源の保護と確保はひとつには分村を、いまひとつは焼畑農耕の開始によってはかられたのであろう。Ⅲ期段階における居住域の住居数は古段階8棟、新段階14棟と増加の傾向がみられるものの、Ⅳ-a期以降減少してゆくことは、Ⅲ期新段階における分村と、それと密接な関係の中で生じた、本遺跡が単なる母村以上の、祭場としての役割を荷うことになったからにはかならない。そして、その直接の契機となった経済的基盤は自然経済体制の変質である。それは、具体的には焼畑農耕の導入によって生じたものと思われる。本遺跡にみられる、石器生産活動はⅡ期に比較して、Ⅲ期には著しく後退する。この傾向はⅣ期以降さらに著しくなり、中期的石器[小林1978]が多くなる。土器組成の大きな変化も浅鉢の出現にみられるようにⅣ-a期に求められ、その基本的内容は中期縄文土器の祖源ともいえる。この意味で八幡一郎氏がかって諸磯式期をもって縄文時代中期の開始と主張された[八幡1953]のも十分に根拠のあるところである。しかし、Ⅲ期からⅣ期への土器様式の基本的流れは漸進的である。このようにⅢ期からⅣ期にかけては、漸進的な文化の流れの中にも、例えば土器の器種分化にみられるようなより高度となった文化内容が知りうるのである。つまり、このようなⅢ期文化からⅣ期文化への高揚は、その背後に経済体制の変質があったと考えられるのである。

焼畑農耕の導入による生産性の向上と人口増は分村を作ることとなった。それは当初、焼畑農耕をおこなうための出作村であったのかも知れない。しかし、こうした出作り村から分村の形成は、必然的に、蓼科山を母なる山として、信仰の対象とした祖霊崇拜が生じてきたものであろう。焼畑農耕と祖霊崇拜は民俗学的にも認められているところである[藤井・1980]。かくして、同族集団としての意識の高揚と結束を高め、祖霊を崇める祭式がⅢ期新段階に生じてきた。その当初は集石の構築はなく、分村で死亡した集団の構成員を母なる大地に再葬しただけであった。しかし、Ⅳ-a期になると、それが定形化した。つまり、立石・列石を立体的に構築し、それを中心として環状に集石を構築することで、墓域空間を作った。墓域は単位集団ごとに設定され、洗骨の埋納時に、単位集団ごとに定められた区域に集石を構築していったのであろう。集石下部に炭化材等がみられるのは、集石が単に聖域を画するだけの役割でなく、火を用いた儀式が行なわれたことを示すものと思われる。

かように、かつて阿久尾根上で、同族集団に属する全単位集団が定められた日に年1回か、あるいは一定の年毎に集まり、祖霊崇拜の祭式がとり行なわれた。Ⅳ-b期以降の居住域の規制変化は、祭場としての役割りが強調された結果であり、Ⅴ期にみられる2棟の住居址のうち、大形住居址72は、集団としての利用の場——集会場であり、住居址7は祭場管理の家であるともいえよう。方形柱列C型も、祭式を行なう上での何らかの施設であったと思われる。

やがて、Ⅵ期以降、この祭式は中期的な祖霊崇拜の祭式[長崎1976]に受けつがれてゆく。それは、静岡県千居遺跡[小野1975]や山梨県牛石遺跡[奈良1981]にみられる環状列石へと受け継がれる一方、屋内祭式が

他方では行なわれ始めたと考えられる。この意味でも、阿久遺跡にみられる文化は中期文化の先駆をなすものであり、八ヶ岳山麓に華麗に展開する中期文化の土台となったものといえよう。<sup>(10)</sup> [笹沢 浩]

- 註1 上伊那郡中越遺跡第12・17・26・37号住居址〔藤沢他1969・1970〕、茅野市茅野和田遺跡東26・28号住居址〔宮坂他1970〕にそれと思われるものがある。報告書に明記されていないものもあり、断定できないが、実測図から判断する限り、固定式石皿と考えられる。ただし、中越遺跡第26号住居址は周辺からかなりの石が出土しているため、実測図からの判断ではやや困難である。いずれも阿久II期のもので、入口部と想定される場所には認められない。
- 2 縄文時代前期に馬蹄形集落の存在を初めて指摘したのは和島誠一氏であった〔和島1948〕が、のちに岡本勇氏とともに神奈川県南堀貝塚の調査を通じて、黒浜式期以降における馬蹄形集落の存在を実証した〔和島・岡本1958〕。その後、千葉県幸田貝塚の数次に及ぶ調査で、阿久II期にはほぼ併行する馬蹄形(あるいは環状)集落が明らかにされつつあり〔岩崎・関根他1970・1971・1972・1974・1976・1977・1978〕、この成果は認められている〔清藤1978〕。
- 3 「大群」「小群」の把握は範囲確認調査で得られた土器片の分布状況を参考とすることで、ある程度可能であるが、未調査地域を多く残すことで、不確定部分を多分に含んでいる。また、「大群」「小群」の用語は水野正好氏に従った〔水野1969〕が、水野氏のそれらは、縄文時代中期の集落分析の上で、これら集団の単位一部族・家族・小家族に対応させ「祭式構造と集落構成とを統一的にとらえる図式を示したものである」〔長崎1980b〕。その意味では、本節でそうした水野氏の分析内容にまでたちいった用語としては用いておらず、適切ではないかも知れない。しかし、屋外祭式と屋内祭式という前期と中期の祭式構造上の相違はあるにしても、祭式から規定される集落構造の基本は大きく変わるものではないように思われ、あえてこの用語を用いた。
- 4 縄文時代前期の大形住居址を集会場施設と考えたのは岡本勇氏である〔岡本1975〕。住居址39もこれにあたると思えば、II-a期の小群把握も異なる。住居址78をc小群に含め、住居址39を独立させるべきであろう。しかし、後者は住居址49にかなりの部分が切られており、不鮮明な部分が多く、ここでは一般住居と考えておく。
- 5 もっとも、大形住居址39を集会場とすれば、方形柱列出現の契機をさぐる上で一つの示唆を与えてくれよう。しかし、方形柱列との構造上の類似点が少なく、ここでは別個のものと考えておきたい。
- 6 住居址61bとしたが、この場合aを古段階とする根拠は本文中に述べたように、さして強いものではなく、ここにaを含めてもよい。
- 7 小林康男氏は中期的石器は諸磯c式期から多くなることを指摘している〔小林1978〕が、本遺跡では凹石・打製石斧はIV期から多くなる傾向を示している。
- 8 縄文農耕は武藤雄六・小林公明両氏の考えられている内容〔武藤1978〕であるかどうかはさておき、少なくとも藤森栄一氏の主張された焼畑農耕〔藤森1963〕をここでは考えている。
- 9 大場磐雄氏は上原遺跡の積石遺構にみられる炭化物について祭式の行なわれたことを指摘している〔大場1957〕。
- 10 祭式、儀礼の発生については永峯光一〔永峯1979〕、水野正好〔水野1975〕両氏に啓発されるところが多かった。



## 第5章 ま と め

阿久遺跡の調査で得られた学問上の成果は、すでに前章までに、多岐にわたって述べられてきた。それらは、調査の中でわれわれも指摘し、また、多くの研究者によって取り上げられてきたように、まさに、縄文時代の前期観を変えるものであった。前期という時代は、大部分の研究者によって、過少評価されていたのである。その意味で、本調査で明らかにされた阿久遺跡の内容は、八ヶ岳山麓に開花する縄文時代中期文化の先駆となるものといえよう。

阿久遺跡は前期中葉の一部を除いて、ほぼ一貫して居住地であったことが明らかにされた。しかし、そこにみられる検出遺構は、今後の縄文時代研究の出発点ともなりうるいくつかを含んでいる。それらは、単に集落構造のみならず、これらを通して、縄文時代前期の社会や文化、わけてもその精神構造等の究明の出発点となるものを含んでいよう。

前期前半の阿久Ⅰ・Ⅱ期の集落は、特にⅡ期で明らかにされた。そこには、方形柱列と土壇をとりこむ、馬蹄形集落があった。後半の阿久Ⅲ～Ⅴ期には、次第に、縄文前期祭式ともいうべき、祖霊崇拜をとり行う場として、阿久遺跡は変化していったらしい。立石・列石、土壇群、方形柱列、環状集石群、住居址群の占地のあり方と規模等は、Ⅱ期の集落構造と相違するといわざるを得ない。しかし、馬蹄形あるいは環状にめぐるといふ基本は共通する面がある。

かように、阿久遺跡にみられる集落構造は、中期にどのように受け継がれていったかが、今後の課題となろう。

本遺跡では多量の出土遺物が得られた。特に土器と石器は膨大な量にのぼるが、それらのほんの一部しか、整理・分析できなかつた。基本的資料の図示は可能な限りおこなったものの、すべてではない。

土器は、例えばⅢ期など、本遺跡でそのセット関係のとらえられたものがある。同様にⅡ期・Ⅳ期にもみられるが、あえて型式名は与えなかつた。また、各群土器の分有関係から、土器を通じた地域圏あるいは影響関係が、ある程度明らかにされたが、ほとんどふれることができなかった。

以上、今後の課題とすべき多様な問題のいくつかを指摘してきた。しかし、もっと基本にふれる問題点も多くあろう。これらを含め、今後の課題としていきたい。

(笹沢 浩)

引用文献(五十音順)

(『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』は『中央道報告』と略記し、)  
また、西暦年号の「19」は省略してある。

- |   |               |             |  |
|---|---------------|-------------|--|
| ア | 会田 進          | 71          | 「押型土器編年の再検討—特に施文法・文様構成を中心として」『信濃』23巻3号         |
|   | 〃             | 74          | 「土器」『扇平遺跡』岡谷市教育委員会                             |
|   | 青沼 博之他        | 81a         | 『中央道報告茅野市その4・富士見町その3(頭殿沢遺跡)』長野県教育委員会           |
|   | 〃             | 81b         | 『中央道報告原村その4(居沢尾根遺跡)』長野県教育委員会                   |
|   | 麻生 優          | 58          | 「長野県下水内郡南大原遺跡出土の土器」『考古学手帖』5                    |
|   | 麻生 優他         | 78          | 『打越遺跡』富士見市教育委員会                                |
|   | 阿部 朝衛         | 79          | 「ビュス・エスキュー(楔形石器)」『聖山』東北大学文学部考古学研究会             |
|   | 新井 和之         | 77          | 「植房貝塚の土器とその周辺」『奈和』15号                          |
|   | 〃             | 80          | 「黒浜式土器小考」『日本考古学研究集報II』日本考古学研究所                 |
|   | 新井 幹夫他        | 79          | 『富士見市中央遺跡群II』富士見市教育委員会                         |
|   | 荒木 伸介         | 80          | 「先史時代の住居の構造」『歴史公論』50号                          |
|   | 安蒜 政雄         | 79          | 「石器の形態と機能」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣                     |
| イ | 井口 直司         | 81          | 「新山遺跡出土土器の観察と検討」『新山遺跡』東久留米市教育委員会               |
|   | 石井 寛          | 77          | 「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録第2冊』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 |
|   | 石野 博信         | 75          | 「考古学から見た古代日本の住居」『家』社会思想社                       |
|   | 磯部幸男・杉崎章他     | 65          | 「愛知県知多半島南端における縄文文化早期末～前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41号      |
|   | 稲垣 栄三         | 77          | 「古代の神社建築」『日本の建築 古代1』第一法規                       |
|   | 稲田 孝司編        | 82          | 『日本の美術1 旧石器時代』至文堂                              |
|   | 井上 晃夫         | 81          | 「土器の製作工程に関する諸問題」『神谷原I』八王子市栢田遺跡調査会              |
|   | 今村 啓爾         | 79          | 「諸磯式土器の施文工程の変遷」『人類学雑誌』88巻2号                    |
|   | 〃             | 81          | 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」『考古学研究』27巻4号                 |
|   | 今村啓爾・宮本常一     | 73          | 『霧ヶ丘』霧ヶ丘遺跡調査団                                  |
|   | 岩崎 孝治         | 79          | 「柏木南遺跡」『中央道報告茅野市・原村その2』長野県教育委員会                |
|   | 岩崎卓也・関根孝夫     | 70~72・74~78 | 『幸田貝塚』松戸市教育委員会                                 |
| ウ | 上野 佳也         | 61          | 「有柄石匕試論」『考古学研究』8巻2号                            |
|   | 内田 祐治         | 75          | 「いわゆる諸磯式の施文順序について」『三宅島の埋蔵文化財』三宅村教育委員会          |
|   | 梅沢太久夫         | 71          | 「縄文時代の葬制について(1)—土壌の性格と意義についての試論—」『台地研究』19号     |
|   | 梅沢太久夫他        | 78          | 『八幡遺跡』都幾川村教育委員会                                |
|   | 梅原 末治         | 35          | 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』十六       |
| エ | 江坂 輝弥         | 51a         | 「縄文式文化について(9)」『歴史評論』29号                        |
|   | 〃             | 51b         | 「縄文式文化について(10)」『歴史評論』30号                       |
|   | 〃             | 54          | 『樺山遺跡調査報告』岩手県教育委員会                             |
|   | 〃             | 59          | 「日本各地の縄文式土器型式編年と推定文化圏」『世界考古学大系1』平凡社            |
|   | 〃             | 79          | 「縄文式土器編年表」『世界考古学事典』上巻 平凡社                      |
| オ | 大江 上          | 81          | 「岐阜県内に於ける縄文式前期の土器II」『岐阜県考古』8号                  |
|   | 太田文雄・高橋桂・金井正三 | 78          | 『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』牟礼村教育委員会                       |
|   | 大場 磐雄         | 51          | 「伊那村第一次調査概報」『信濃』3巻6号                           |

大場 磐雄他	55	『平出遺跡』朝日新聞社
〃	56	『信濃史料』1巻上・下 信濃史料刊行会
〃	57	『上原』長野県教育委員会
大林 太良	71	『縄文時代の社会組織』『季刊人類学』2巻2号
岡田 篤子	79	『中越式土器をめぐる周辺』『地域研究の方向(研究ノート3)』千曲川系古代文化研究所
岡田 正彦他	74	『足場遺跡』『中央道報告富士見町その1』長野県教育委員会
〃	75	『荒神山遺跡』『中央道報告諏訪市その3』長野県教育委員会
岡野 隆男	73	『平台貝塚』
岡村 道雄	76	『ピエス・エスキューについて』『東北考古学の諸問題』寧楽社
〃	79	『縄文時代石器の基礎的研究法とその具体例—その1—』『東北歴史資料館研究紀要』第5巻
岡本 勇	65	『住居と集落』『日本の考古学II』河出書房
〃	75	『原始社会の生産と呪術』『岩波講座日本歴史』1 岩波書店
〃	79	『縄文文化の発展』『歴史公論』第5巻2号
大塚 和義	79	『縄文時代の葬制』『日本考古学を学ぶ(3)』有斐閣
小野 真一	71	『上長窪遺跡群』静岡県長泉町教育委員会
〃	75	『千居』加藤学園考古学研究所
小野 正文	74	『京原』山梨県教育委員会
〃	81	『塚越北A地区の特殊な土壌墓について』『どるめん』30号
カ 河西清光・大久保知巳他	69	『土器』『有明山社』長野県考古学会研究報告書9
河西清光・長崎元広他	74	『扇平遺跡』岡谷市教育委員会
梶原 洋・阿子島香	81	『頁岩製石器の実験使用痕研究』『考古学雑誌』67巻1号
加藤明秀・芹沢長介	36	『静岡県に於ける細線文指痕薄手土器と其伴出石器』『考古学』7巻9号
金井 正三	77	『中野市立ヶ花遺跡出土の前期縄文式土器について』『高井』41号
〃	79	『縄文前期の特殊浅鉢形土器について』『信濃』31巻4号
金井 正三他	78	『牟礼村丸山遺跡発掘調査報告書』牟礼村教育委員会
金沢和夫・本間信昭	77	『堂の貝塚』金井町教育委員会・佐渡考古歴史学会
川崎 純徳	67	『茨城県八幡脇遺跡調査報告』常総台地研究会
神沢昌二郎・藤沢宗平他	71	『唐沢・洞』長野県考古学会研究報告書10
神田 五六	51	『長野県下水内郡豊井村南大原縄文諸磯式遺跡概報』『信濃』3巻8号
キ 菊島 美夫他	76	『大坪』山梨県教育委員会
桐原 健	69	『岡谷市海戸遺跡出土の磨製石鏃』『信濃考古』17・18号
〃	76 a	『床面浮上土器の取扱いについて』『信濃』28巻8号
〃	76 b	『土器が投棄された廃屋の性格』『考古学ジャーナル』127号
〃	79	『土壙か小竅穴か』『信濃考古』55号
桐原 健他	71	『中央道報告宮田村その1』長野県教育委員会
清野 謙次	46	『日本民族生成論』
ク 工染 善通	77	『竅穴住居と高床住居』『日本の建築 古代1』第一法規
栗原 文蔵	61	『中川貝塚発掘報告書』大宮市教育委員会
栗本 佳広	73	『法蓮寺山遺跡』『小金線』千葉県都市公社
桑山 龍進	80	『菊名貝塚の研究』菊名貝塚研究会
コ 小池 孝	76	『縄文時代石器の分類—小形石器—』『中央道報告諏訪市その4』長野県教育委員会
〃	81 a	『十二ノ后遺跡出土小形石器の検討』『信濃』33巻5号
〃	81 b	『中期後葉の土器—使用痕—』『中央道報告原村その4』長野県教育委員会

河野広道・藤本英夫	61	「御殿山墳墓群第三次発掘調査報告」『考古学雑誌』46巻4号
紅村 弘	63	『東海の先史遺跡』総括編
紅村 弘・増子康真	75	『東海先史文化の諸段階(本文編)』
小金井良精	22	「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38巻1号
児玉 卓文	80	「縄文時代前期」『編年—中部高地における型式—』千曲川水系古代文化研究所
後藤 守一他	53	『大湯環状列石』文化財調査報告2 文化財保護委員会
後藤 祥夫	81	「新山遺跡における遺物遺存状態の観察」『新山遺跡』東久留米市教育委員会
小林 公明	78	「煤とお焦げ」『曾利』富士見町教育委員会
〃	80	「縄文前期における南方的要素」『山麓考古』12号
小林 達雄	74	「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』93
〃	79	『縄文土器1』(日本の原始美術)講談社
小林 達雄他	65	『米島貝塚』庄和町教育委員会
小林知生・早川正一	67	「岐阜県根方岩陰」『日本の洞穴遺跡』平凡社
小林 秀夫他	81	「判ノ木山西遺跡」『中央道報告茅野市・原村その3』長野県教育委員会
小林 正春他	74	「千鹿頭社遺跡」『中央道報告諏訪市その3』長野県教育委員会
小林 康男	78	「縄文前期の生産活動」『どるめん』16号
〃	80	『中島遺跡』塩尻市教育委員会
駒井 和愛	52	「日本に於ける巨石記念物」『考古学雑誌』38巻5・6号
駒形敏朗・寺崎裕助	81	『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
五味 一郎	81	「長野県原村大石遺跡発見の尖頭器」『長野県考古学会誌』41号
近藤 義郎	58	「師楽式遺跡における塩生産の立証」『歴史学研究』23号
〃	62	「縄文時代における土器製塩の研究」『岡山大学法文学部学術紀要』15号
サ 酒井 幸則他	74	『田村原遺跡』豊丘村教育委員会
坂上克弘・石井寛	76	「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究集録第1冊』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
坂上克弘・今井康博	80	「横浜市大熊仲町遺跡の縄文中期集落址について」『日本考古学協会第46回総会研究発表要旨』
榊原 政職	21	「相模国諸磯石器時代遺跡調査報告」『考古学雑誌』11巻8号
佐々木 勝他	80	『東北新幹線埋蔵文化財調査報告書VII』岩手県教育委員会
笹沢 浩	72	「善光寺平における古墳時代以降の集落遺跡立地の基礎的研究」『信濃』24巻4号
笹沢 浩・青沼博之他	78	『長野県諏訪郡原村阿久遺跡調査概報昭和51・52年』中央道遺跡調査団
笹沢 浩・矢島宏男	79	「入の日陰遺跡」『中央道報告茅野市・原村その2』長野県教育委員会
佐藤 信之	80	「いわゆる石核状石器について」『しなのろじい』100号 千曲川水系古代文化研究所
佐原 真	56	「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』3号
〃	70~74	「土器の話」『考古学研究』64~80号
〃	74	「一括遺物」『古代史発掘5』講談社
〃	77	「石斧論」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会編
佐原 真他	64	『紫雲出』香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会
シ 清水比呂之	81	「多聞寺前遺跡出土の獣面付土器」『どるめん』30号
清水 芳裕	73	「縄文期の集団領域」『考古学研究』20巻4号
庄野 靖寿他	74	『関山貝塚』埼玉県教育委員会
新藤 康夫	81	「神谷原遺跡におけるムラと墓」『どるめん』30号
ス 末木 健	77	「縄文時代中期土器廃棄の再検討」『考古学ジャーナル』133号
〃	78	「縄文時代前中期浅鉢形土器研究序論」『奈和』16号
末木 健他	74	『山梨県中央道報告北巨摩郡小淵沢町地内』山梨県教育委員会

	75	【山梨県中央道報告北巨摩郡長坂・明野・葺崎地内】山梨県教育委員会
杉崎 章・磯部幸男・山下勝年	76	【清水ノ上貝塚】南知多町教育委員会
杉原荘介・芹沢長介	57	【神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚】明治大学文学部研究報告考古学第二冊
杉山 博久	77	「愛名島山遺跡の『焼石炉』をめぐって―類型遺構の集成とその分析―」【小田原城内高等学校図書館紀要創刊号】
鈴木 孝志	67	「長野県北安曇郡松川村鼠穴字桜沢遺跡」【考古学雑誌】42巻2号
鈴木 敏昭	80a	「諸磯b式土器の構造とその変遷」【土曜考古】2号
鈴木 敏昭他	80b	【足利遺跡】久喜市教育委員会
鈴木 徳雄他	79	「白石城」【埼玉県遺跡調査会報告書36集】
鈴木道之助	81	【図録石器の基礎知識Ⅲ】柏書房
セ 清藤 一順	78	「集落の居住領域と土壌」【どるめん】16号
清藤 一順他	75	【飯山満東遺跡】千葉県都市公社
瀬川裕市郎・笹津海洋・関野哲夫他	76	「清水柳遺跡の土器と石器」【沼津市歴史民俗資料館紀要1】
関野 克	38	「鉄山秘書高殿に就いて」【考古学雑誌】28巻7号
セミョーノフ, S.A. (田中琢抄訳)	68	「石器の用途と使用痕」【考古学研究】14巻4号
芹沢 長介	65	「周辺文化との関連」【日本の考古学Ⅱ】河出書房
芹沢 長介編	79	【聖山】東北大学文学部考古学研究会
タ 高桑 俊雄	79	「オシキ遺跡」【中央道報告茅野市・原村その2】長野県教育委員会
高橋 敦他	78	【打越遺跡】富士見市教育委員会
高橋 桂・中島庄一	76	「北信濃大倉崎遺跡調査報告」【信濃】28巻4号
高山 純	65	「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」【人類学雑誌】73巻4号
田中 琢	79	「考古学研究の基礎的方法―型式学の問題―」【日本考古学を学ぶ(2)】有斐閣
田辺 昭三	66	【陶器古窯址群Ⅰ】平安学園考古学クラブ
ツ 都出比呂志	75	「家とムラ」【日本生活文化史1】河出書房新社
坪井清足・小林達雄	79	【世界陶磁全集1】小学館
テ 寺門 義範	75	【茨城県所作貝塚発掘調査報告】霞ヶ浦文化研究会
寺村 光晴	67	「縄文時代前期飾玉生産の一考察」【和洋女子大学紀要】12号
〃	71	「石工(玉工)」【新版考古学講座9】雄山閣
ト 戸沢 充則	50	「古期縄文式文化」【諏訪考古学】5号 史実会
〃	73	【岡谷市史】上巻
戸沢充則・岡本勇	65	「縄文文化の発展と地域性―関東一」【日本の考古学Ⅱ】河出書房
戸田 哲也他	78	【堂ノ上遺跡第1次～5次調査概報】久々野町教育委員会
戸田哲也・大矢昌彦	79	「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」【長野県考古学会誌】34号
友野 良一	72	「長野県における縄文期復原住宅の現状と問題点」【信濃】24巻5号
友野良一・赤羽義洋	78	「移動生活と中越遺跡」【どるめん】16号
鳥居 龍蔵	24	【諏訪史】第一巻
ナ 長崎 元広	73	「八ヶ岳南麓の縄文中期集落における共同祭式のあり方とその意義(上)・(下)」【信濃】25巻4・5号
〃	79	「中部地方における縄文前期の竪穴住居」【信濃】31巻2号
〃	80a	「黒曜石貯蔵例と交易」【山麓考古】12号
〃	80b	「縄文集落研究の系譜と展望」【駿台史学】50号
中島 宏	77	【金堀沢遺跡】入間市金堀沢遺跡調査会

	80	「伊勢塚・東光寺裏」『埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集』埼玉県教育委員会
長野県教育委員会編	71	『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧(その1)』
長野県史刊行会編	81	『長野県史考古資料編 1巻(1)遺跡地名表』
永峯 光一	65	「縄文文化の発展と地域性—中部—」『日本の考古学II』河出書房
〃	79	「縄文人の思考序説」『歴史公論』5巻2号 雄山閣
中村孝三郎・小林達雄他	63	「新潟県中魚沼郡中里村泉龍寺遺跡調査報告」『上代文化』33輯
中村 龍雄他	68	『海戸(第2次調査報告書)』長野県考古学会研究報告書4
〃	79	『武居林遺跡』下諏訪町教育委員会
並木 隆	78	「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」『埼玉県遺跡調査会報告書第35集』
奈良 泰史	81	「牛石遺跡の大環状列石」『どるめん』30号
ニ 西川 博孝他	73	『古和田台遺跡縄文前期集落址発掘報告書』船橋市教育委員会
ハ 橋本 正	72	「小杉町田山遺跡」『富山県埋蔵文化財報告書II』富山県教育委員会
〃	76	「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』23巻3号
〃	79	「縄文時代の住居と集落」『歴史公論』5巻2号 雄山閣
〃	80	『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
原田 昌幸他	80a	『藤の台遺跡II』藤の台遺跡調査会
〃	80b	『藤の台遺跡III』同上
浜田 耕作	32	『考古学研究法』
早川正一・長瀬仁・吉田英敏	79	『港町岩陰』美濃市教育委員会
林 謙作	65	「縄文文化の発展と地域性—東北—」『日本考古学II』河出書房
〃	74	「縄文期の集団領域」『考古学研究』20巻4号
〃	79	「縄文期の集落と領域」『日本考古学を学ぶ(3)』有斐閣
林 茂樹	66	『上伊那の考古学的調査』上伊那郡誌編纂会
林 茂樹他	71	『舟山遺跡緊急発掘調査報告(第1次および第2次調査)』駒ヶ根市教育委員会
伴 信夫・臼田武正他	79	『中央道報告茅野市・原村その2』長野県教育委員会
伴 信夫・土屋積他	76	『中央道報告茅野市・原村その1、富士見町その2』長野県教育委員会
ヒ 樋口 昇一	57a	「中部山岳地帯における前期縄文時代住居址」『信濃』9巻11号
〃	57b	「遺物—土器」『上原』長野県教育委員会
樋口昇一・青沼博之他	80	「経塚遺跡・船霊社遺跡」『中央道報告岡谷市その4』長野県教育委員会
樋口昇一・宮沢恒之他	76	「十二ノ后遺跡」『中央道報告諏訪市その4』長野県教育委員会
樋口 昇一他	80	「洩矢遺跡」『中央道報告岡谷市その4』長野県教育委員会
樋口 誠司	81	「金山沢北遺跡—縄文時代早期の土器」『中央道報告茅野市・原村その3』長野県教育委員会
平出 一治	78	「縄文時代の石皿—こわされた石皿をめぐる」『信濃』30巻4号
〃	80	「原村上前尾根遺跡出土の顔面把手付釣手土器」『長野県考古学会誌』36号
フ 藤井 正雄	80	「祖先崇拜と家」『歴史公論』6巻1号
藤沢 宗平	56	「中越遺跡について」『伊那路』1巻3号
〃	57	「宮田村中越西原遺跡について」『伊那路』1巻9号
〃	65	「萱野遺跡—押型文土器文化の生活遺構について—」『伊那路』9巻10号
〃	69	『中越遺跡—昭和43年度緊急発掘調査概報—』宮田村教育委員会
〃	70	『中越遺跡—昭和44年度緊急発掘調査概報—』宮田村教育委員会
藤沢宗平・林 茂樹	61	「神子柴遺跡第1次発掘調査概報」『古代学』9巻3号
藤沢 宗平他	69	『有明山社』長野県考古学会研究報告書9
藤沢 宗平他	74	『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第2巻歴史上(別冊)原始・古代編』

藤田憲司・間壁葎子・ 間壁忠彦	75	「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第11号
藤田富士夫	71	「耳栓の起源について―飾玉の在り方と関連して―」『信濃』23巻4号
〃	75	「帛状耳飾の素材の在り方について」『信濃』27巻9号
藤森 栄一	35	「諸磯式土器の竹管施文と浮線文の問題」『考古学評論』1巻2号
〃	50	「長野県岡谷市丸山遺跡の資料」『日本考古学年報』3
〃	63	「縄文時代農耕論とその展開」『考古学研究』38号
〃	69	「茅野市寄の台の土器」『信濃考古』28号
藤森 栄一他	50	「岡谷市南部遺跡群の研究―滝沢コレクション集成―」『諏訪考古学』5号
〃	65	『井戸尻』中央公論美術出版
藤森栄一・武藤雄六	63	「中期縄文土器の貯蔵形態について」『考古学手帖』20号
ホ 保角 里志	75	『小林遺跡―縄文前期遺跡と平安時代集落跡』東根市教育委員会
堀越 正行	72	「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31号
マ 間壁忠彦・間壁葎子	71	「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』7号
増子 康真	77	「いわゆるオセンベ土器の研究」『信濃』29巻4号
増子康真・紅村弘	77	『東海先史文化の諸段階(資料編II)』
松沢 亜生	79	「器具の製作と用途―旧石器の製作技術―」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣
マルクス, K. (松本俊郎抄訳)	1859	『経済学批判・序文』大月書店
ミ 水野 正好	69	「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』21巻3・4号
〃	75	「祭式・呪術・神話の世界」『日本生活文化史1』河出書房新社
三宅 徹也	76	「土器における使用痕について」『小田野沢一下田代納屋 B 遺跡発掘調査報告書』青森 県立郷土館
宮沢 恒之他	75	「千鹿頭社遺跡」『中央道報告諏訪市その3』長野県教育委員会
〃	76	「十二ノ后遺跡」『中央道報告諏訪市その4』長野県教育委員会
宮坂 虎次他	71	『棚畑遺跡』茅野市教育委員会
〃	78	『よせの台遺跡』茅野市教育委員会
宮坂 英弼	57	『尖石』茅野市教育委員会
宮坂英弼・宮坂虎次	66	『蓼科』尖石考古館研究報告叢書第II冊
宮坂 虎次他	70	『茅野和田』茅野市教育委員会
宮坂 光昭	80a	「方形配列土壇と方形配置土坑」『小田原考古学研究会会報』9号
〃	80b	「八ヶ岳山麓にみられる縄文中期集落の移動と領域」『日本民族文化とその周辺』(国 分直一博士古稀記念論集)
宮坂光昭・宮坂虎次	79	「長野県下ノ原遺跡発見の一遺構について」『日本考古学協会第45回総会研究発表要 旨』
宮本長次郎	79	「住生活」『日本考古学を学ぶ(2)』有斐閣
ム 向坂 鋼二	62	「埋葬」『観塚遺跡総括編』浜松市教育委員会
武藤 雄六	65	「中期縄文土器の蒸器」『信濃』17巻7号
〃	66	「八ヶ岳南麓における縄文時代前期末の遺跡」『信濃』18巻4号
〃	68	「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』4巻1号
〃	70	「有孔鏝付土器の再検討」『信濃』22巻7号
〃	76	「有孔鏝付土器の文化的意義」『山麓考古』5号
〃	80a	「縄文前期のムラ?」『日本の屋根』10号 信越放送
〃	80b	「カリントウ状炭化食品発見の意義」『どるめん』27号
武藤雄六・小林公明	81	「机原遺跡発掘概要」『長野県考古学会昭和56年度大会発表要旨』

	武藤 雄六他	78	『曾利』富士見町教育委員会
	村田 文夫	70	「関東地方における縄文時代前期後半の生産活動について」『古代文化』22巻4号
モ	百瀬 新治	81	「阿久遺跡出土の高台付角形浅鉢土器」『長野県考古学会誌』41号
	百瀬 長秀	79	「土製耳飾に関する諸問題—その最盛期の諸相を中心に—」『信濃』31巻4号
	百瀬 長秀他	79	「判ノ木山東遺跡」『中央道報告茅野市・原村その2』長野県教育委員会
	守 茂和	80	「縄文時代集落址の住居廃絶と遺物廃棄の性格」『考古学研究』27巻3号
	森川 昌和	78	「ウンコ・縄・ヒョウタン」『どるめん』16号
	森川 昌和・岡本 勇他	79	『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』福井県教育委員会
	森嶋稔・笹沢浩	66	「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡報告その1」『信濃』18巻6号
	〃	75	「男女倉C地点」『男女倉』和田村教育委員会
	森嶋稔・笹沢浩・ 小林 孚	67	「長野県埴科郡戸倉町市田遺跡調査報告(3)」『信濃』19巻3号
ヤ	八木 光則	77	「いわゆる『特殊磨石』について」『信濃』28巻4号
	山崎 金夫他	77	『大切遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会
	山下勝年・杉崎章	76	『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会
	山梨大学考古学研究会	78	「山梨県大泉村御所遺跡発掘調査報告」『丘陵』5号
	〃	79	「大泉村御所遺跡第2次発掘調査概報」『丘陵』6号
	山根 弘人他	81	『御所遺跡』山梨大学考古学研究会
	山内 清男	36	「考古学の正道」『ミネルヴァ』1巻6・7号
	〃	39	『日本先史土器図譜』第2輯
	山本 暉久	78	「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』3号
	八幡 一郎	53	『日本史の黎明』有斐閣
	〃	78	『稲倉考』慶友社
ヨ	横山 英介他	79	『函館空港・中野遺跡—東日本における縄文時代早期貝殻文土器文化の研究—』
	和島 誠一	48	「原始聚落の構成」『日本歴史学講座1』
	和島誠一・岡本勇	58	「南堀貝塚と原始集落」『横浜市史1』
ワ	渡辺 誠	80	「雪国の縄文家屋」『小田原考古学会会報』9号

#### 阿久遺跡関係文献目録(年代順)

1972	長野県教育委員会	「諏訪郡原村(塩水遺跡)」	『昭和46年度農業振興地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
1974	諏訪清陵高等学校地歴部考古班	「横久保遺跡」	『土』8
1976	伴信夫	「塩水遺跡(阿久遺跡)」	『中央道報告 茅野市・原村その1・富士見町その2』 長野県教育委員会
1977	大沢和夫	「阿久(塩水)遺跡」	『日本考古学年報』28
	中央道遺跡調査団	「諏訪郡原村阿久遺跡調査速報」	『信濃考古』43(文責 青沼博之)
	〃	「阿久遺跡調査概報」	『信濃考古』44(文責 中島庄一)
	〃	「長野県阿久遺跡の調査」	『考古学ジャーナル』142(文責 笹沢浩)
	戸沢充則	「学問の創造性ということについて」	『月刊多摩湖の記録』16
	長崎元広	「諏訪原村の阿久遺跡から」	『地歴』17
	長野県考古学会	「阿久遺跡保存問題特集」	『信濃考古』44
	平出一治	「阿久遺跡 原村の考古学散歩1」	『館報はら』93
1978	青沼博之	「阿久遺跡」	『日本の屋根』212
	阿久遺跡保存対策委員会	「長野県阿久遺跡の完全保存に支援を」	『文全協ニュース』45
	〃	「阿久通信」1	長野県考古学会



- // 【阿久通信】 2 //  
 // 【阿久通信】 3 //  
 今村善興・笹沢浩・青沼博之 「長野県諏訪郡原村阿久遺跡の調査」 【日本考古学協会昭和53年度総会研究発表要旨】  
 江坂輝弥 「縄文時代の配石遺構と阿久遺跡」 【阿久通信】 1  
 芸術新潮編集部 「瓦版日本風土記 謎の縄文大遺跡」 【芸術新潮】 337  
 笹沢浩・大沢和夫 「阿久遺跡」 【日本考古学年報】 29  
 笹沢浩 「阿久遺跡」 【平凡社百科年鑑1978】 平凡社  
 信濃路編集部 「阿久遺跡発掘ニュースから」 【特集信濃路】 32  
 末木健 「阿久村幻想」 【山麓考古】 9  
 滝沢忠義 「阿久遺跡の周辺」 【信州の東京】 776  
 田中基 「山中謝肉祭へ」 【日本原初考—諏訪信仰の発生と展開—】  
 中央道遺跡調査団 「座談会八ヶ岳西南麓阿久遺跡のスケッチ」 【どるめん】 16  
 長野県教育委員会 「昭和52年度中央道遺跡調査の状況」 【教育長野】 256  
 長野県考古学会 「阿久遺跡保存問題の経過(2)」 【信濃考古】 47  
 長野県広報課 「阿久遺跡の保存策決まる」 【ながのけん】 116  
 長野県中央道遺跡調査団 「県内各地の状況—阿久遺跡」 【文化財信濃】 第5巻第1号(文責 青沼博之)  
 1978 長野県中央道遺跡調査団 「長野県諏訪郡原村阿久遺跡発掘調査中間報告」 【信濃】 第30巻第4号(文責 笹沢浩)  
 // 【長野県諏訪郡原村阿久遺跡発掘調査概報—昭和51・52年度—】  
 // 【長野県諏訪郡原村柏木阿久遺跡発掘調査(昭和53年度)現地説明会資料】  
 原村教育委員会 「阿久遺跡発掘調査」 【広報はら】 27  
 // 「阿久遺跡の保護について」 【広報はら】 31  
 樋口昇一 「信濃の縄文文化」 【地方文化の日本史(1)・光は西から】 至文堂  
 平出一治 「阿久遺跡の環状集石群 原村の考古学散歩2」 【館報はら】 94  
 // 「原村の阿久遺跡」 【信州リゾートニュース】 3  
 // 「阿久遺跡範囲確認調査の成果 原村の考古学散歩3」 【館報はら】 96  
 藤森 明 「阿久遺跡の保存に思う」 【茅野】 5  
 宮坂光昭 「阿久遺跡の保存運動」 【どるめん】 16  
 // 「八ヶ岳山麓阿久遺跡の保存運動」 【環境文化】 33  
 // 「報告・いま阿久遺跡は」 【東アジアの古代文化】 16  
 // 「阿久遺跡保存と地域主義」 【地域と創造】 5  
 // 「八ヶ岳山麓の遺跡群と阿久遺跡の保存」 【文化財保存全国協議会第9回大会要旨】  
 武藤雄六 「阿久遺跡のことども」 【富士見町公民館報】 184  
 森 浩一 「壮大な縄文農耕の舞台」 【歴史と人物】 昭和53年10月号  
 山中鹿之介 「阿久と秋庵 八ヶ岳西南麓の山中聖地」 【どるめん】 17  
 「縄文都市 長野県原村・阿久遺跡」 【アサヒグラフ】 2896  
 「阿久遺跡保存の声・県民全国に広がる」 【文全協ニュース】 46  
 1979 大塚和義 「縄文時代の葬制」 【日本考古学を学ぶ(3)】 有斐閣  
 岡本 勇 「縄文文化の発展」 【歴史公論】 第5巻第2号  
 樋口昇一 「阿久遺跡」 【日本歴史地名大系20 長野県の地名】 平凡社  
 笹沢 浩 「阿久遺跡の調査をおえて」 【館報はら】 98  
 // 「阿久遺跡」 【中央道報告書—茅野市・原村その2】 長野県教育委員会  
 // 「長野県阿久遺跡」 【日本考古学年報】 30  
 十菱駿武 「阿久遺跡土盛り保存についてのコメント」 【文化財を守るために】 20

- 〃 「埋蔵文化財保存運動の現状と課題」 『歴史評論』 346
- 武居幸重 「阿久人と諏訪余穂」 『茅野』 6
- 戸沢充則 「縄文時代を概説する」 『歴史公論』 第5巻第2号
- 長野県考古学会 「縄文人の声をきけ」 『信州自治研』 9
- 〃 「阿久遺跡保存運動をふりかえって」 『文化財を守るために』 20
- 樋口昇一 「中越と阿久」 『伊那路』 第23巻第12号
- 水野正好 「縄文祭式と土偶祭式と」 『日本原始美術 土偶埴輪』 講談社
- 宮坂光昭 「諏訪地方における考古学の成果」 『歴史手帳』 第7巻第3号
- 武藤雄六 「阿久遺跡と古代の原村」 『阿久』 1
- 1980 小林公明 「縄文前期における南方的要素」 『山麓考古』 12
- 長崎元広 「縄文集落研究の系譜と展望」 『駿史史学』 50
- 平出一治 「阿久(第5次発掘調査)」 『長野県考古学会誌』 36
- 〃 「阿久(第6次発掘調査)」 〃
- 〃 「阿久遺跡(第6次)」 『日本考古学年報』 31
- 〃 「阿久遺跡この一年」 『長野県考古学会誌』 37
- 宮坂光昭・平出一治 「阿久遺跡(第5次)」 『日本考古学年報』 31
- 宮坂光昭 「方形配列土壇と方形配置土坑」 『小田原考古学研究会会報』 9
- 〃 「地域文化活動と地域像の形成」 『ジュリスト増刊総合特集』 18
- 森島 稔 「動向(長野県)」 『日本考古学年報』 31
- 1981 桐原 健 「阿久遺跡」 『中央道遺跡調査のあゆみ』 長野県中央道遺跡調査会
- 笹沢 浩 「中央自動車道西の宮線(長野)」 『第2次埋蔵文化財白書』 日本考古学協会 学生社
- 原村教育委員会 「阿久遺跡 文化財めぐり8」 『信州自治』 第34巻第9号
- 平出一治 「原村の中央道用地内遺跡 柏木・阿久遺跡」 『中央自動車道を歩こう』
- 宮坂光昭 「原村阿久遺跡」 『長野県埋蔵文化財白書』 長野県考古学会
- 百瀬新治 「口絵解説 阿久遺跡出土の高台付角形浅鉢土器」 『長野県考古学会誌』 41
- 山本暉久 「縄文時代中期後半期における屋外祭祀の展開」 『信濃』 第33巻第4号
- 1982 岡本東三 「ムラの成立とその掟」 『縄文時代I』 日本の美術189 至文堂
- 土肥 孝 「精神生活」 『縄文時代II』 日本の美術190 至文堂
- 樋口昇一 「阿久遺跡」 『縄文土器大成1 早・前期』 講談社
- 宮坂光昭 「定住する村ができてきた縄文前期 諏訪の考古学その6」 『オール諏訪』 6

# 写真測量

写真測図研究所

杉本 幸治

写真測量とは、被写体に対して撮影された一対の写真より、その中に含まれる各種情報を、アナログ的またはデジタル的に抽出する方法である。その抽出方法は撮影方法により、航空写真測量と地上写真測量という2種類に大別される。航空写真測量とは、航空機により連続撮影された航空写真より情報抽出する方法であり、現在、国土地理院等で実施している公共関連測量における地形図作成などが、この主流をなすものである。地上写真測量とは、航空機を利用せず、地上において撮影された一対の写真より情報抽出する方法であり、現在、交通事故処理あるいは文化財保護法等による文化財調査に利用されている。本論においては、これら写真測量を利用した阿久遺跡発掘調査に関して、その具体的手法を明示し、その利点および改善しなければならない問題点をここに簡単に述べる。

## 1 写真測量の工程

写真測量の工程は、航空、地上を問わず、大きな流れは下記の通りとなる(図1)。

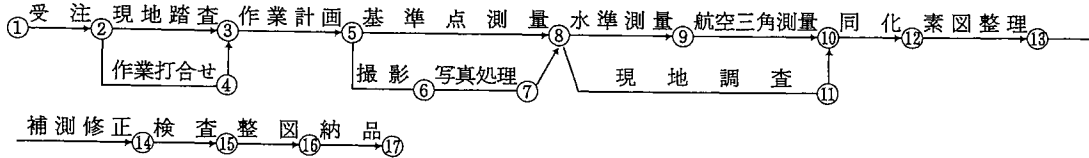


図1 写真測量の工程

阿久遺跡の調査についても、この工程により作業を実施した。

### (1) 現地踏査・作業打合せ

現地の状況がどのような様子になっているかを、実際に現地に行き調べる作業である。この踏査により、次の要因を発注機関と打合せ、そして決定する。

- ① 平面図の作成範囲
- ② 平面図の縮尺および表示方法
- ③ 撮影方法

阿久遺跡に関しては、範囲は図2に示す範囲という事になった。平面図の縮尺は、1:20で決定されていたが、整図完了後に1:200、1:1000を縮小編算により作る事も同時に決定した。なお、1:20のシート割図は図2に示した。1年次は地上法により実施し、2年次においては1年次の状況判断によりヘリコプターによる撮影も検討するという事になった。

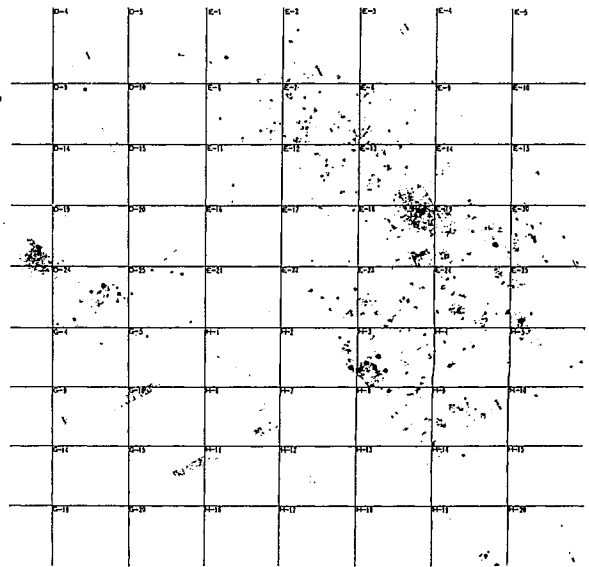


図2 環状集石群実測図(1/20)シート割り図

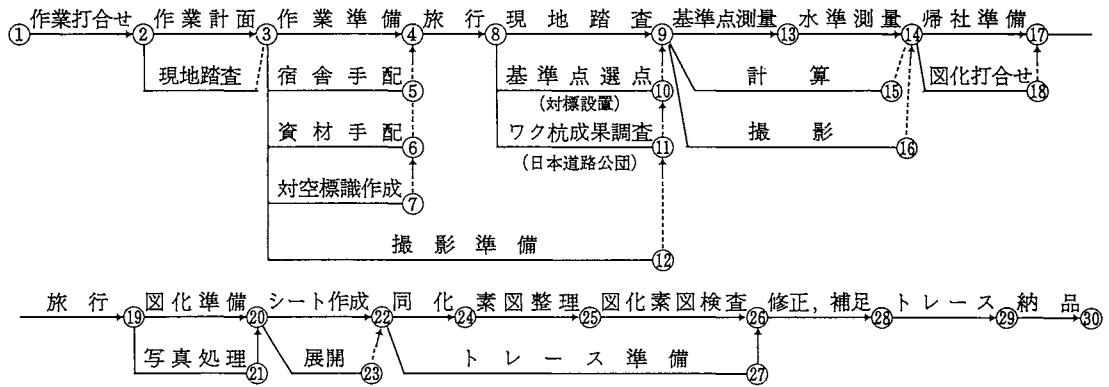


図3 作業計画

## (2) 作業計画

細部にわたる作業計画は図3に示す。

## (3) 基準点測量・水準測量

遺跡調査は、一般的に公共座標によらず、任意座標によるものが多いと思われるが、阿久遺跡については大規模かつ、重要な遺跡という理由により、公共座標で実施する事とした。また発掘調査が3次調査以降2ヶ年間にわたるといふ事から、基準点の埋設箇所は、今後の発掘調査において破壊や移転されることなく、なおかつ地盤の安定性のある所に置くという条件が付け加えられた。この理由は、平面図の作成において、基準点が位置決定の原点となり、住居址、環状集石群等遺構の位置関係も決定されるからであり、次年度調査における平面図作成もすべてこの基準点を利用して実施した。観測は、三角点より調査区域内に3点の基準点を設定すると同時に、日本道路公団により測量された中央道の中心杭の座標も点検用として利用した。また、図化を実施する時に利用する標定点を、この3点を用い調査区域内に2 m 毎の細部基準点を設定し、この点についてはすべて、対空標識(ターゲット)を設置した。これは航測法についても同様で、対空標式点を使用している。この2 m 毎の基準点はすべて正方眼になる様に設定し、それぞれの座標を計算した。これにより航空三角測量をはぶいたわけである。また水準測量は道路公団の中心杭の成果を利用し、2 m 毎の基準点上のターゲットの高さをすべて観測した。

## (4) 撮影・写真処理

撮影は地上法による撮影(昭和52年度)と航空測法による撮影(昭和53年度)で実施した。地上法による撮影は、クレーン車にステレオカメラ(SMK 120, C-120)をつるし、地上よりエアパイプにより、シャッターを押す方法を採用した。またクレーン車の進入できないところは、単体のカメラ(ハッセルブラウト)を使い、遺跡の両側にポールを設定し、その間のカメラ移動という形でステレオ写真を撮影した。航測法による撮影は、ヘリコプターを使い撮影を実施した。撮影縮尺は、平面図の縮尺が1:20という事より、地上・航測を問わず図化に使用する写真は、1:100とした。全景写真は任意の縮尺で撮影した。撮影と平面図の縮尺の関係は、およそ次の関係式で考えられるが、地形状況によりかわることもある。

撮影縮尺：機械縮尺：図化縮尺≒ 4：2：1 但し撮影縮尺＝焦点距離／撮影高度

ステレオカメラによる撮影は、オーバーラップ、サイドラップの関係により撮影位置をあらかじめ地上に設定し、1カットごとにクレーンを操作し、ガラス乾板のセット、取りはずしおよび次の撮影地点への移動を行ない撮影高度の維持および撮影地点の決定はカメラの本体に垂球を吊すことで行なった。

## (5) 航空三角測量

公共測量等により大規模な範囲の地形図作成に必要な作業であるが、阿久遺跡は、前述した様に地上・航空を問わず、1カット(1モデル)の写真の中に標定点として4点以上の基準点がある為今回は実施しなかった。

## (6) 図化

図化は撮影された1カットの写真を図化機にセットし、あらかじめ基準点・標定点(2 m毎に設定した点)を展開した図化シートを使い、図化作業を進めていった。図化機はメトログラフを使用し、図上での位置誤差は0.3 mm、また、高さの誤差は2.5 cmを限度とした。しかしながら地上法による場合には、航測法のように撮影フィルムから直接ポジフィルムを作り作業をする方法ではなく、2倍に拡大したポジフィルムを使用したために、現実としては接合部および周辺部での位置誤差が図上1 mm程度あらわれる所もあった。これは撮影高度が一般の航空写真の場合と異なり、低いために周辺部の集石群や遺構に死角となる部分が見られた結果と考えられる。

## (7) 素図整理

図化された環状集石群、住居址、土壙等を整理する作業であり、今回は特に集石に係る石についての表現が一番の問題となった。この点については後述するが図化をするオペレーター、また整理を行なう技術者が、文化財に対しての知識・経験等がまだ浅い点から生ずる問題であると考えられる。

## (8) 整理

素図整理された図面を、発注者側に提出し、検査・補足修正された図面に墨入れをする最終工程である。

## 2 問題点の提起

写真測量の文化財への利用は、次のようないくつかの問題点が指摘できよう。

① 地上法における撮影高度とカメラの焦点距離により、被写体が写真の周辺部分において、傾斜状態となり、中心投影の影響が著しく現れる。このことより、ステレオカメラによる撮影の場合には、モデル数を多くすることにより、この影響を消去しなければならない。但し、航測法においては、このような現象はみられない。

② 航空写真測量に比較すると、ヘリコプターの撮影は、経費の面で撮影費用のしめるウエイトが高くなってしまふ。単純比較で考えると、一般的な航空写真測量の撮影費用のウエイトは、全体の10%前後と考えられるが、ヘリコプターの撮影の場合は25~30%程高くなってしまふ。

③ オペレーターに文化財調査での特殊性——図面に表示するもの——を教育する必要がある。

④ 発注者側と業者側の「技術的な打ち合せ」というものが、図面作成の上で特に重要である。

上記以外にもまだ、解決しなければならない問題点は数多くあるが、その中でも特に大切なことは、「文化財に対する認識」を、今後関係方面に広く働きかけていくという一点にまとめることができるのではないだろうか。

## 放射性炭素年代測定結果報告書

学習院大学木越研究室

木越 邦彦

1979年2月19日受領致しました試料についての $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果を下記通り御報告致します。

なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期として Libby の半減期 5570 年を使用しています。また付記した誤差は  $\beta$  線計数値の標準偏差  $\sigma$  にもとずいて算出した年数で、標準偏差(one sigma)に相当する年代です。試料の  $\beta$  線計数率と自然計数率の差が  $2\sigma$  以下のときは、 $3\sigma$  に相当する年代を下限とする年代値(B.P.)のみを表示してあります。また試料の、 $\beta$  線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が  $2\sigma$  以下のときは、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$  を付記してあります。

## 記

Code No.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)
Gak-8004.	Charcoal from Akyu	5370 $\pm$ 820
	No. 1.SAUB(住居址 40)	3420 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -27.3 \pm 0.5$
Gak-8005.	Charcoal from Akyu	5590 $\pm$ 70
	No. 2.SAUB.(住居址 30) (dated by process B)	3580 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -28.0 \pm 0.3$
Gak-8006.	Charcoal from Akyu	5370 $\pm$ 70
	No. 3.SAUB.(住居址 45) (dated by process B)	3420 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -28.2 \pm 0.2$
Gak-8007.	Charcoal from Akyu	5670 $\pm$ 70
	No. 4.(住居址 37) (dated by process B)	3720 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -26.2 \pm 0.5$
Gak-8008.	Charcoal from Akyu	5700 $\pm$ 140
	No. 5.(住居址 67)	3750 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -26.7 \pm 0.5$
Gak-8009.	Charcoal from Akyu	5630 $\pm$ 70
	No. 6.(集石 200 下部) (dated by process B)	3680 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -29.37 \pm 0.2$
Gak-8010.	Charcoal from Akyu	5510 $\pm$ 120
	No. 7.(集石 29 下部)	3560 B.C. $\delta^{13}\text{C} = -24.8 \pm 0.2$

表示した B.P.年代値は測定した  $\delta^{13}\text{C}$  により同位体分別による誤差の補正を行った値であります。以上

(1979・8・2)

別章 3

花粉分析 (付 大石遺跡)

パリノ・サーヴェイ株式会社 (昭和54年)

1 試料

以下の19点である。

阿久遺跡	試料番号	土質	花粉・孢子化石産出状況
30号住居址	No. 1	黒色土	少ない
	No. 2	〃	〃
	No. 3	〃	〃
	No. 4	〃	〃
	No. 5	〃	〃
	(+) 焼土	黒褐色土	〃

32号住居址	No. 1	黒色土	普通
	No. 2	黒褐色土	〃
	No. 3	黒色土	〃
	No. 4	〃	〃
	No. 5	〃	〃
	No. 6	黒褐色土	少ない

33号住居址	No. 1	黒色土	普通
	No. 2	〃	〃
	No. 3	〃	〃
	No. 4	〃	〃

65号住居址	pit中の土器内	黒色土	普通
--------	----------	-----	----

大石遺跡	試料番号	土質	花粉・孢子化石産出状況
18号住居址	No. 1	黒褐色土	少ない
	No. 2	〃	〃

2 花粉・孢子化石の種類

花粉分析結果は、検出した花粉・孢子化石総数を基数とした百分率で各試料の花粉・孢子化石の割合を表わし、主要な化石についてはダイアグラムで表わした(図4)。同様に写真(図版206)を作成したので参照されたい。分析の結果得られた花粉・孢子化石には、以下のものが挙げられる。

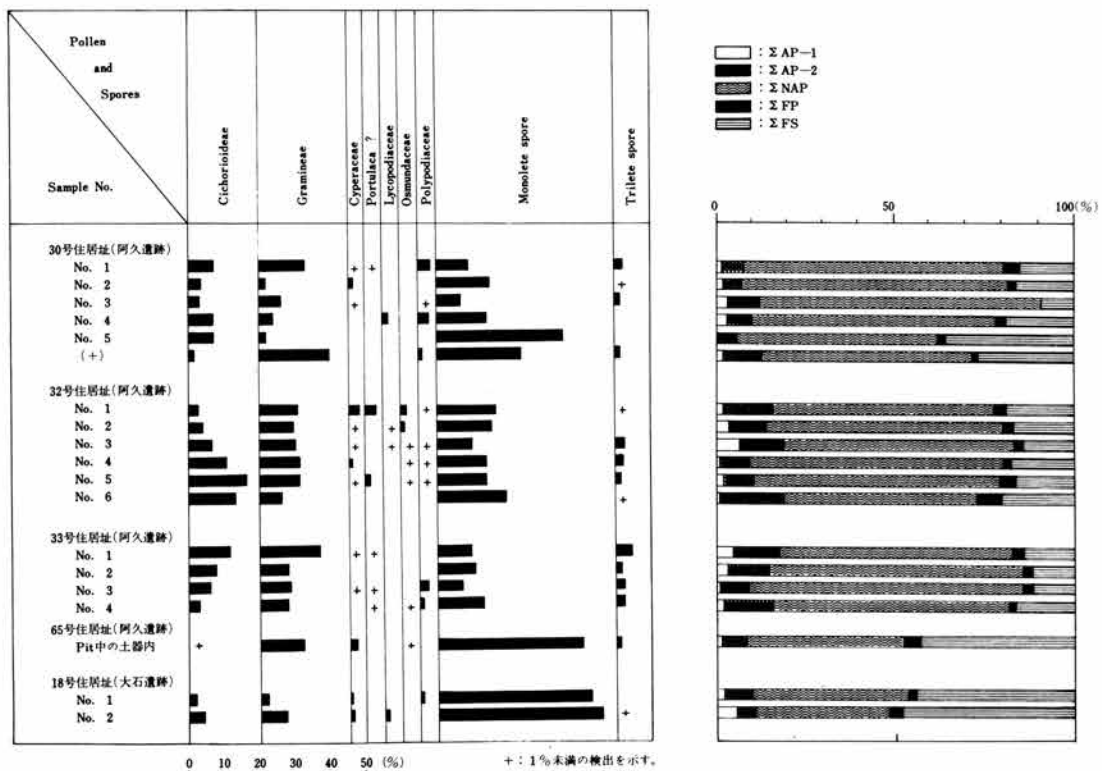
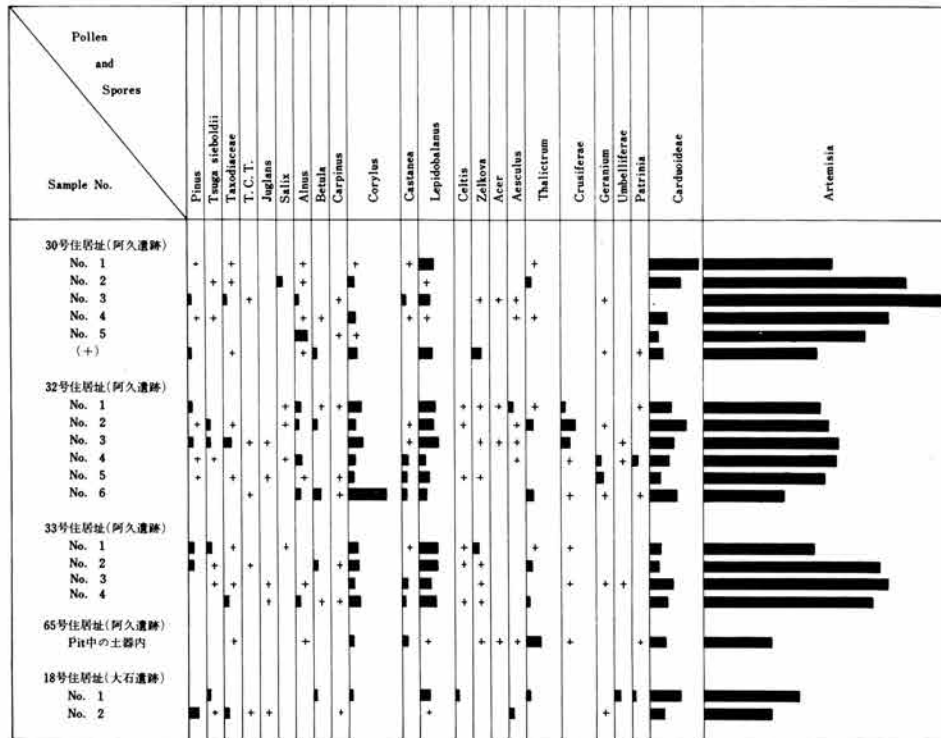


図4 花粉・孢子化石産出状況図

AP-1 (針葉樹花粉)

Abies (モミ属)・Pinus (マツ属)・Tsuga sieboldii(ツガ)・Tsuga diversifolia(コメツガ)・Taxodiaceae (スギ科)・Cryptomeria(スギ属)・Sciadopitys(コウヤマキ属)・T.C.T.(Taxaceae イチイ科, Cupressaceae ヒノキ科, Taxodiaceae(スギ科))

AP-2 (広葉樹花粉)

Juglans(クルミ属)・Pterocarya(サワグルミ属)・Salix(ヤナギ属)・Alnus(ハンノキ属)・Betula(カバノキ



属)・Carpinus(クマシデ属)・Corylus(ハシバミ属)・Castanea(クリ属)・Castanopsis(クリカシ属)・Fagus(ブナ属)・Cyclobalanopsis(アカガシ亜属)・Lepidobalanus(コナラ亜属)・Celtis(エノキ属)・Ulmus(ニレ属)・Zelkova(ケヤキ属)・Acer(カエデ属)・Aesculus(トチノキ属)・Tilia(シナノキ属)・Styrax(エゴノキ属)・Fraxinus(トネリコ属)

#### NAP(草本花粉)

Persicaria(サナエタデ属)・Caryophyllaceae(ナデシコ科)・Chenopodiaceae(アカザ科)・Thalictrum(カラマツソウ属)・Crusiferae(アブラナ科)・Geranium(フウロソウ属)・Myriophyllum(フサモ属)・Umbelliferae(セリ科)・Patrinia(オミナエシ属)・Carduoideae(キク亜科)・Artemisia(ヨモギ属)・Cichorioideae(タンポポ科)・Gramineae(イネ科)・Cyperaceae(カヤツリグサ科)・Plantago(オオバコ属)・Portulaca(スベリヒユ属)・Utricularia(タヌキモ属)・Fagopyrum(ソバ属)・Scabiosa(マツムシソウ属)

#### FP(形態分類花粉)

Monocolpate pollen(単溝型花粉)・Tricolpate pollen(三溝型花粉)・Tricolporate pollen(三溝孔型花粉)・Inaperturate pollen(無口型花粉)

#### FS(羊歯類孢子)

Lycopodiaceae(ヒカゲノカズラ科)・Osmundaceae(ゼンマイ科)・Polypodiaceae(ウラボシ科)・Monolete spore(単条型孢子)・Trilete spore(三条型孢子)

#### その他の微化石

Pseudoschizaea(淡水生藻類)

### 3 結果及び考察

各住居址の試料ごとに、花粉・孢子構成の特長ならびに古環境について述べる。

#### <阿久遺跡>

##### 住居址 30

###### No.1

この試料は、草本花粉の割合が合計で72.9%検出され、非常に多かった。主なものとして Artemisia が36.4%検出されたのをはじめ、Carduoideae が13.6%、Gramineae が12.9%、Cichorioideae が7.1%検出された。その他 Scabiosa も若干検出された。これに対して樹木花粉は少なく、合計で7.9%検出された。この内で主なものは Lepidobalanus であり、その他に落葉広葉樹類の花粉が若干検出された。

従って古植生は Artemisia, Carduoideae, Gramineae, Cichorioideae などを主体とする草地が考えられる。この草地の近くには、Lepidobalanus 等の落葉広葉樹類も僅かに生育していたものと推定される。古気候は温帯であろう。

###### No.2

この試料もやはり草本花粉の割合が合計で75.0%検出され優占した。その殆どが Artemisia であり、57.1%検出された。その他に Carduoideae が8.9%、Cichorioideae が3.6%および Thalictrum, Gramineae, Cyperaceae が若干検出された。羊歯類孢子では Monolete spore が15.2%検出され多かった。樹木花粉は合計で7.1%と少なく、Tsuga sieboldii, Taxodiaceae, Salix, Corylus などが僅かに検出された。

従って古植生は、*Artemisia* を優占とし、*Carduoideae*, *Cichorioideae* などの生育した草地が考えられる。古気候は温帯に相当するであろう。

#### No. 3

この試料も草本花粉が優占し、合計で 78.8% 検出された。内訳は、*Artemisia* が 67.3% 検出され大部分を占めた。その他に *Gramineae*, *Cichorioideae* 等が若干検出された。また、この試料中より、*Myriophyllum* が僅かに検出された。樹木花粉としては *Pinus*, *Taxodiaceae*, *Alnus*, *Castanea*, *Lepidobalanus* などが若干検出された。

従って古植生としては、*Artemisia* を優占とし、*Gramineae*, *Cichorioideae* などから成る草地が考えられる。古気候としては、前述の樹木の存在により、温帯に相当すると考えられる。

また、この試料中より *Myriophyllum* や *Pseudoschizaea* が検出されたことにより池沼的な環境も推定される。

#### No. 4

この試料も草本花粉が非常に多く、中でも *Artemisia* が 52.3% 検出され優占した。そのほかに *Cichorioideae*, *Carduoideae*, *Gramineae* などが若干検出された。樹木花粉としては、*Sciadopitys*, *Corylus*, *Lepidobalanus*, *Aesculus* などが若干検出された。羊歯類孢子は合計で 18.9% 検出された。その主なものとして、*Polypodiaceae*, *Lycopodiaceae*, *Monolete spore* があげられる。

従って古植生は、*Artemisia* を優占とし、*Cichorioideae*, *Carduoideae*, *Gramineae* などの草本や、*Polypodiaceae*, *Lycopodiaceae* などの羊歯類が生育した草地が推定される。古気候は温帯に相当しよう。また、*Pseudoschizaea* の検出により水の影響も考えられる。

#### No. 5

この試料も、これまでのものと同様に、*Artemisia* を優占とし、*Cichorioideae*, *Carduoideae* などの草本花粉が検出された。樹木花粉としては、*Alnus* や *Carpinus*, *Corylus* が僅かに検出された。羊歯類孢子としては、*Monolete spore* が 35.5% 検出され多かった。

従って古植生は、*Artemisia* を優占とし、*Cichorioideae*, *Carduoideae* や羊歯類が良好に生育した草地が推定される。古気候はやはり温帯であろう。また、*Pseudoschizaea* の検出により、水の影響も考えられる。

#### 焼 土

この試料では、草本花粉が合計で 59.4% 検出され多かった。主な花粉は、*Artemisia* が 32.1% 検出されたのをはじめ、*Gramineae* が 20.0%、*Carduoideae* が 4.2% 検出された。特に *Gramineae* の多産は、これまでの試料とは異なる点である。羊歯類孢子としては、*Monolete spore* が 23.6% 検出されたのをはじめ、*Polypodiaceae*, *Trilete spore* が若干検出された。樹木花粉は、*Lepidobalanus*, *Corylus*, *Zelkova*, *Betula* や *Pinus* が若干検出された。

従って古植生は、*Artemisia*, *Gramineae*, *Carduoideae* などの草本や羊歯類が良好に生育した草地が考えられる。また、この草地の周囲には、前述の樹木類が散在して生育していたものと推定される。古気候は、以上の樹木の存在から温帯であろう。また、*Pseudoschizaea* の存在から水の影響も考えられる。

#### 住居址 32

##### No. 1

この試料は草本花粉の割合が合計で 61.7% 検出され多かった。主なものとして、*Artemisia* が 32.

9%、Gramineae が 10.8% 検出された。他に Carduoideae, Cyperaceae, Portulaca? が良好に検出された。樹木花粉としては、Lepidobalanus が 4.5%、Corylus が 3.6% および Alnus, Aesculus, Pinus などが若干検出された。羊歯類孢子としては、Monolete spore が 16.7% 検出され多かった。

従って古植生は、Artemisia と Gramineae を主体とし、Carduoideae, Cyperaceae 等の草本や羊歯類から成る草地が推定される。また、この草地の周囲には、Lepidobalanus, Corylus などの樹木も散在して生育していたものと思われる。

古気候は、これらの樹木の存在により温帯に相当しよう。また、この試料から Pseudoschizaea が検出されることから、水の影響も考えられる。

#### No. 2

この試料の花粉・孢子化石の産出傾向は、No. 1 と良く似たものであった。従って古植生は、Artemisia と Gramineae を主体とし、Carduoideae, Cichorioideae などの草本や、羊歯類から成る草地が推定される。また、この草地の周囲には、Lepidobalanus, Corylus などの樹木も散在していたものと考えられる。

古気候は、前述の樹木花粉の検出により、温帯であると思われる。また、Pseudoschizaea の検出から水の影響も考えられる。

#### No. 3

この試料も草本花粉の割合が高く、合計で 64.8% 検出された。主なものとして Artemisia が 38.0%、Gramineae が 9.7%、Carduoideae が 6.5%、Cichorioideae が 6.5% 検出された。樹木花粉としては、Lepidobalanus が 4.2%、Taxodiaceae が 2.3%、Pinus が 1.4%、Tsuga sieboldii が 1.4% 検出された。羊歯類孢子としては Monolete spore が良好に検出された。

従って古植生は、Artemisia を主体とし、Gramineae, Carduoideae, Cichorioideae 及び羊歯類から成る草地が考えられる。古気候は温帯に相当すると考えられる。また、Pseudoschizaea が検出されたことにより、水の影響が推定される。

#### No. 4

大まかな花粉構成は、No. 1、2、3 に近似し、Artemisia, Cichorioideae, Gramineae, Carduoideae などの草本花粉と、Monolete spore, Osmundaceae などの羊歯類が主体となった検出を示す。樹木花粉は合計で 9.3% と低率であった。

従って古植生は、Artemisia, Cichorioideae, Gramineae などの草本類から成る草地が考えられる。この草地には羊歯類も良好に生育していたと思われる。古気候は温帯であろう。また、Pseudoschizaea の存在により、水の影響も併せて推定される。

#### No. 5

この試料もやはり草本花粉の割合が高く、Artemisia をはじめ、Cichorioideae, Gramineae や、Carduoideae, Geranium が良好に検出された。樹木花粉としては、Lepidobalanus, Castanea, Corylus が若干検出された。羊歯類孢子は Monolete spore の割合が高かった。

従って古植生は、Artemisia, Cichorioideae, Gramineae を主とする草地が考えられる。そして、この草地には羊歯類も良好に生育していたであろう。前述の樹木花粉の存在により、古気候は温帯に相当すると思われる。また、Pseudoschizaea が検出されることにより水の影響が考えられる。

#### No. 6

この試料も草本花粉が合計で 54.2% 検出され多かった。主なものとして Artemisia, Cichorioideae, Gramineae が検出されたが、何れも No. 5 試料に比して少なかった。一方、Carduoideae や羊歯類に増

加がみられた。更に広葉樹花粉の *Corylus* も増加した。特に *Corylus* の増加は、これまでの試料に見られなかった特長といえる。

従って古植生は、*Artemisia*, *Cichorioideae*, *Gramineae* を主体とする草地の環境が推定される。この草地の周囲には、*Corylus* が良好に生育していたことが考えられる。また、*Pseudoschizaea* が検出されたことにより、水の影響が考えられる。

#### 住居址 33

##### No. 1

この試料は草本花粉の割合が合計で 64.9% 検出され多かった。主な花粉として *Artemisia* が 31.1%、*Gramineae* が 16.7%、*Cichorioideae* が 11.7% 検出された。樹木花粉としては、*Lepidobalanus*, *Corylus* などが良好に検出された。羊歯類孢子も良好に検出された。

従って古植生は、*Artemisia*, *Gramineae*, *Cichorioideae* が主体となった草地が考えられる。この草地の周囲には、*Lepidobalanus*, *Corylus* などの樹木も若干生育していたであろう。古気候は、先の樹木の存在により温帯であろう。

##### No. 2

この試料では No. 1 よりも *Artemisia* が増加して検出され、約 50% を占めた。その他 *Gramineae*, *Cichorioideae*, *Carduoideae* が良好に検出された。これに対して樹木花粉は少なく、*Lepidobalanus*, *Corylus*, *Zelkova* 等が若干検出された。羊歯類孢子も良好に検出された。

従って古植生は、*Artemisia* を優占とし、*Gramineae*, *Cichorioideae* 等から成る草地が考えられる。上述の樹木の存在から、古気候は温帯であろう。また、*Pseudoschizaea* が検出されたことにより、水の影響も考えられる。

##### No. 3

この試料の花粉・孢子構成は No. 2 に近似する。従って古植生も古気候も、No. 2 と同じであろう。

##### No. 4

この試料も大まかな点で No. 2 に近似した構成を示す。従って古植生、古気候も、ほぼ No. 2 と同じである。

#### 住居址 65

この試料は、草本花粉と羊歯類孢子とで、ほぼ 90% を占める。草本花粉の主なものとして *Artemisia* が 18.9%、*Gramineae* が 12.2% 検出され、羊歯類としては、*Monoletespore* が 41.0% 検出された。

従って古植生は、上記の草本類、羊歯類から成る草地が推定される。

#### <大石遺跡>

##### 18 号住

##### No. 1

この試料は、草本花粉、羊歯花粉、羊歯類孢子ともに 44.2% 検出され多かった。草本花粉の主なものとして *Artemisia* が 26.9%、*Carduoideae* が 8.7% 検出され多かった。羊歯類孢子としては *Monoletespore* が殆どを占めて検出された。

従って古植生としては上記の草本類や羊歯類から成る草地が考えられる。古気候は温帯に相当しよう。

No.2

この試料もNo.1に近似した花粉・孢子構成を示し、Artemisiaを主体としてGramineae, Carduoideae, Cichorioideaeなどの草本花粉、Monolete sporeなどの羊歯類孢子が高い割合で検出された。

従って古植生は、上記の草本類や羊歯類から成る草地在推定される。古気候は温帯である。

以上各試料の花粉・孢子構成について述べたが、全体としての傾向は、阿久遺跡の30、32、33号住居址とも位置的に若干の相違こそあれ、草本花粉のArtemisiaを主体とし、Gramineae, Cichorioideae, Carduoideaeが主要な構成要素となっている。

また樹本花粉では低率ではあるものの、Lepidobalanus, Corylusが一般的に良好に検出された。羊歯類においては、30号住居址において量的変動がみられたものの、全体としては主要な構成要素となっている。

従って30、32、33号住居址は、古植生、古環境的には、あまり違わなかったものと言えよう。しかし65号住居址中の土器内の試料では、羊歯類孢子が多産する点において違いがみられた。

大石遺跡の18号住居では、No.1、No.2ともに阿久遺跡の試料と較べてArtemisiaやGramineae, Cichorioideae, Carduoideaeが少なく、羊歯類孢子のMonolete sporeが多く検出された。

従って大石遺跡の古環境は、阿久遺跡のそれと若干異っていたものと思われる。

別章 4

ウォーターフロテーション・セパレーション

ウォーターフロテーション・セパレーション法は埋土を水洗し、残存する浮上物および沈澱物を採集・分析することによって微細遺物を再生させる方法で、東京都中山谷遺跡〔小田・森川他 1975〕とほぼ同様の方法によって遺物採集を試みた。炭化物の多出する遺構にしぼり、住居址 3 棟および数十基の土壌の埋土を水洗にかけた。しかし、これによって得られた数千のビニール袋に納められた資料を選別する作業は多大の人手と時間が要求され、住居址 33 について約 33% の選別、分類、集計を終えたのみである。採集過程は以下の手順でおこなった。

①住居址 33 の南半を 4 区分し、さらに上下 2 層に分けて埋土をポリ袋に採集(図 5)。

②土を水洗し残存する浮上物、沈澱物などを 2mm メッシュの金網製ふるいなどで採集。

③浮上物・沈澱物を乾燥させた後、ピンセットで選別・分類。

④分類された各遺物の数量・重量・サイズなどを集計。

表 1 地区別遺物出土数集計表

地区	土器片	石器	原石・石核	剥片	屑片	炭化物		
						オニグルミ	ドングリ	その他(g)
I 上面	29	S.c 1	1		588	約 170	7	
I 下面	36	P.e 1	1	5	521	約 260	7	
II 上面	16				326	約 250	1	
II 下面	20	石鏃 1		1	253	約 250	4	
III 上面	12			1	599	約 500	10	
III 下面	19				259	約 310	11	
IV 上面	17	石鏃 2	1	1	737	約 500	8	
IV 下面	22	石鏃 1 Uf 1 滑石製品 1	1	1	1806	約 430	11	
総計	171	8	4	9	5100	約 2670	59	185g
手掘り総計	約 600	56	44	188	135			

ウォーターフロテーション・セパレーション法で採集できた遺物の類別および数量は、表 1 に示した結果となった。集計途中であるので数値のもつ意味の限界はもちろんあるが、屑片および炭化物など微細な遺物の採集数量の多さは注目される。試みに埋土全体の量を推計すると、屑片約 30,000 点、オニグルミ 16,000 点、その他の炭化物 1,100 g となり、そのほとんどが 2~5mm 程度の極細片である。屑片の多さについては、住居址 33 が阿久 III 期としては石器・剥片などの手掘りによる出土数が多くないことも関連して、今後類例の増加するのを待って検討する必要がある。しかし、手掘りによる採集数が前述の方法で得られた資料の 0.5% にも達しないことから、見逃される屑片数の膨大なことが明確になった。また石鏃など小形石器の破片もかなりの割合で見逃されており、石器の破損原因などを考える際の手がかりになる。炭化物は堅果類の類別をおこなったのみであり、種子類の存否など

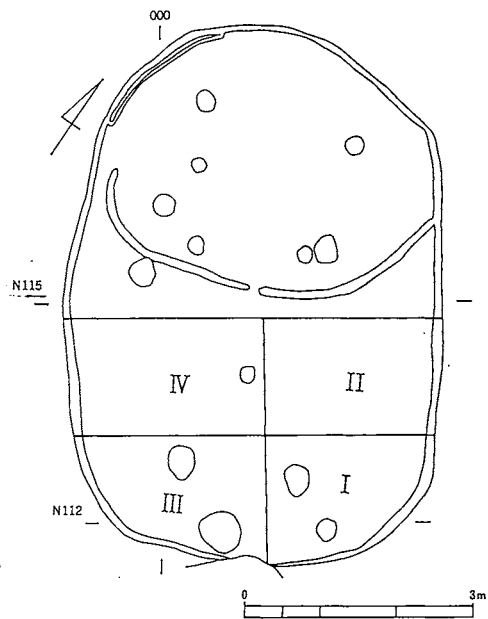


図 5 資料採取区画図

を含めて今後の課題であるが、オニグルミ・ドンダリ<sup>(3)</sup>の多出が明らかになったことにより当住居址の食料資源の一面が裏付けられた。

以上の結果から、微細遺物の採集方法として、この方法が有効であることはある程度証明された。しかし、区画の単位の大きさや水洗の方法など採集過程での精度、動植物専門分野での詳細な分析など、今後の調査に向けての課題は多い。またこれからの分析によってはさらに重要な事実が明らかになる可能性もある。今後作業を完了させ、データを再提示したい。(百瀬 新治)

- 註1 中山谷遺跡の採集過程に準じたが、選別・分析の過程が不十分であり、遺物の再生という段階にまでは至っていない。
- 2 面積比率では住居址埋土の47%を水洗し、残存量の重さから計算すると33%の分類・集計をしたことになる。したがって埋土全体の約15%がデータとして示されたという計算上の値は求められるが、統計的な信頼度は低い。
- 3 専門分野での鑑定が済んでいないが、ブナ科の堅果ということでこう呼ぶことにする。

## 別 表 目 次

別表 1	住居址一覧表	1
別表 2	集石一覧表	4
別表 3	土壌一覧表	9
別表 4	方形柱列掘り方・土壌対比表	21
別表 5	石器集計表	23
	(1) 住居址出土石器	23
	(2) 出土地別石器	23
別表 6	石器一覧表	25
	(1) 住居址	25
	(2) 集 石	57
	(3) 土 壌	59
	(4) 方形柱列	60
	(5) グリット	61
	石 鏟	61
	石 匙	69
	石 錐	74
	複数挟入石器	80
	石核状石器	81
	磨製石斧	82
	丸 石	84
	砥 石	94
	敲打器	95
	滑石製品	96
	石製円板	96
	尖頭状石器	69
	スクレイパー	71
	ピエス・エスキュー	76
	有抉頭磨石器	80
	打製石斧・横刃型石器	81
	凹 石	85
	石 皿	94
	先端研磨石器	95
	円礫状石器	95
	軽石製品	96
	(グリット追加分)	97



別表1 住居址一覧表

縄文時代前期

(Pは主柱穴)

住居址番 号	平面形	長軸方向	規 模 m	壁高 cm	周溝	炉数	炉 位 置	遺物出 土状態	柱 穴 cm	備 考
38	不明	不明	(3.00)×(3.00)	16	なし	1	中央?	A <sub>5</sub>	P <sub>1</sub> -19	
25	A	N-33°-E	3.80 × 3.50	34	1	1	中央	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -52, P <sub>2</sub> -60, P <sub>3</sub> -29, P <sub>4</sub> -45	
26	A	N-25°-E	4.55 × 4.05	42	1	不明	—	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -57, P <sub>2</sub> -53, P <sub>3</sub> -70, P <sub>4</sub> -29, P <sub>5</sub> -15	
28	H	N-63°-W	3.20 × 2.55	30	なし	1	中央	A <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -53, P <sub>4</sub> -47, P <sub>2</sub> -27, P <sub>3</sub> -19, P <sub>5</sub> -19	
32	A	N-33°-E	4.45 × 3.60	65	1	1	中央	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -64, P <sub>2</sub> -62, P <sub>3</sub> -50, P <sub>4</sub> -63, P <sub>5</sub> -22, P <sub>6</sub> -16	焼失
36	B	N-1°-W	3.90 × 3.45	46	1	1	中央	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -60, P <sub>2</sub> -60, P <sub>3</sub> -45, P <sub>4</sub> -43, P <sub>5</sub> -34	張出しピット
39	G	N-10°-E	(9.25)×(8.40)	30	なし			不明	P <sub>1</sub> -63, P <sub>2</sub> -48, P <sub>3</sub> -54, P <sub>4</sub> -36, P <sub>5</sub> -78	
48	AC?	N-25°-E	4.00 × 3.05	41	1	1	中央	A <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -40, P <sub>2</sub> -55, P <sub>3</sub> -63, P <sub>4</sub> -39, P <sub>5</sub> -38, P <sub>6</sub> -38, P <sub>7</sub> -60, P <sub>8</sub> -38, P <sub>9</sub> -53, P <sub>10</sub> -31	
54	B	N-3°-W	5.40 × 4.24	48	1	1	中央やや北寄り	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -68, P <sub>2</sub> -64, P <sub>3</sub> -55, P <sub>4</sub> -89, P <sub>5</sub> -35, P <sub>6</sub> -30, P <sub>7</sub> -25, P <sub>8</sub> -20, P <sub>9</sub> -11, P <sub>10</sub> -47	
55	AE	N-25°-E	5.00 × 4.24	55	2	1	ほぼ中央	A <sub>4</sub>	P <sub>2</sub> -56, P <sub>3</sub> -64, P <sub>7</sub> -57, P <sub>9</sub> -57, P <sub>1</sub> -23, P <sub>3</sub> -16, P <sub>4</sub> -36, P <sub>6</sub> -46, P <sub>8</sub> -18, P <sub>10</sub> -67, P <sub>11</sub> -17, P <sub>12</sub> -11, P <sub>13</sub> -9, P <sub>14</sub> -13, P <sub>15</sub> -11, P <sub>16</sub> -10, P <sub>17</sub> -7, P <sub>18</sub> -15	
57	CC	N-26°-E	4.30 × 3.36	28	なし	1	ほぼ中央やや北寄り	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -30, P <sub>2</sub> -66, P <sub>3</sub> -54, P <sub>4</sub> -27, P <sub>5</sub> -35, P <sub>6</sub> -52, P <sub>7</sub> -59, P <sub>8</sub> -26	
64 a b	A AD	N-7°-E N-7°-E	3.95 × 3.75 4.30 × 3.75	55	1	1	中央 中央(拡張?以前の)	A <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -45, P <sub>2</sub> -36, P <sub>4</sub> -35, P <sub>5</sub> -27 P <sub>1</sub> -45, P <sub>2</sub> -36, P <sub>3</sub> -29, P <sub>4</sub> -35, P <sub>5</sub> -27, P <sub>6</sub> -15, P <sub>7</sub> -21, P <sub>8</sub> -22, P <sub>9</sub> -20	
78	HA?	N-45°-E	3.90 × 2.82	50	1	1	中央南寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -62, P <sub>2</sub> -27, P <sub>3</sub> -33, P <sub>4</sub> -30, P <sub>5</sub> -27, P <sub>6</sub> -23, P <sub>7</sub> -15, P <sub>8</sub> -40, P <sub>9</sub> -35	焼失
80 a b	A AE	不明 N-22°-E	— 4.32 × 4.08	不明 29	1 なし	不明 #	— —	(A)	P <sub>2</sub> -52 P <sub>1</sub> -56, P <sub>3</sub> -15, P <sub>4</sub> -48, P <sub>5</sub> -22, P <sub>6</sub> -50, P <sub>7</sub> -47, P <sub>8</sub> -13, P <sub>9</sub> -40	焼失
14	C?	N-14°-E	不明	不明	不明	1	中央	不明	P <sub>1</sub> -55, P <sub>2</sub> -60, P <sub>3</sub> -(40), P <sub>4</sub> -60	
15(旧) (新)	C CC	不明 N-8°-E	(4.50)×(3.90) 4.82 × 4.55	20 45	# 1	不明 #	— —	B <sub>1</sub>	不明(P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> ?) P <sub>1</sub> -40, P <sub>2</sub> -54, P <sub>3</sub> -111, P <sub>4</sub> -15, P <sub>5</sub> -60, P <sub>6</sub> -32, P <sub>7</sub> -43, P <sub>8</sub> -8, P <sub>9</sub> -10	
24	C	N-32°-E	4.00 × 3.35	48	1	1	ほぼ中央	B <sub>2</sub>	P <sub>1</sub> -33, P <sub>2</sub> -53, P <sub>3</sub> -44, P <sub>4</sub> -39, P <sub>5</sub> -31, P <sub>6</sub> -25, P <sub>7</sub> -35, P <sub>8</sub> -15	
29	C	N-18°-E	4.55 × 3.30	30	1	1	中央	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -58, P <sub>2</sub> -58, P <sub>3</sub> -53, P <sub>4</sub> -68, P <sub>5</sub> -48, P <sub>6</sub> -81	張出しピット
30	CA	N-2°-E	5.12 × 4.90	58	1	不明	—	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -84, P <sub>2</sub> -70, P <sub>3</sub> -63, P <sub>4</sub> -71, P <sub>5</sub> -59, P <sub>6</sub> -56	
31	不明	不明	不明	30	1	不明	—	不明	P <sub>1</sub> -67, P <sub>2</sub> -61, P <sub>3</sub> -40, P <sub>4</sub> -16	
35	C?	N-72°-E	(4.70)×(3.50)	20	1	1	中央	不明	P <sub>1</sub> -28, P <sub>2</sub> -38, P <sub>3</sub> -56, P <sub>4</sub> -22	
40	CD	N-41°-E	6.60 × 6.18	58	1	1	中央	A <sub>1</sub>	別紙	
44 a b	CB C	N-24°-E "	(4.30)×(3.60) 5.10 × 4.40	不明 20	1 1	1 1	中央 中央やや北	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -81, P <sub>2</sub> -53, P <sub>3</sub> -47, P <sub>8</sub> -70, P <sub>9</sub> -53, P <sub>12</sub> -34 P <sub>5</sub> -80, P <sub>6</sub> -88, P <sub>7</sub> -73, P <sub>8</sub> -70, P <sub>10</sub> -8, P <sub>11</sub> -18, P <sub>4</sub> -16	張出しピット
53 a b c	C " "C?	N-22°-E " "	4.46 × 3.55 5.05 × 4.21 5.80 × 4.21	不明 30 30	1 1 1	1 1 1	北寄り, F <sub>1</sub> とF <sub>2</sub> の間 "(F <sub>1</sub> ) やや北寄り(F <sub>2</sub> )	B <sub>2</sub>	P <sub>3</sub> -91, P <sub>4</sub> -55, P <sub>5</sub> -50, P <sub>7</sub> -27 P <sub>1</sub> -72, P <sub>2</sub> -26, P <sub>3</sub> -91, P <sub>4</sub> -55 P <sub>1</sub> -72, P <sub>2</sub> -26, P <sub>3</sub> -91, P <sub>4</sub> -55, P <sub>6</sub> -48, P <sub>8</sub> -33, P <sub>9</sub> -15, P <sub>10</sub> -29, P <sub>11</sub> -17, P <sub>12</sub> -28, P <sub>13</sub> -33, P <sub>14</sub> -8, P <sub>15</sub> -5	
65	不明	不明	不明	36	1	不明	—	A <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -40, P <sub>2</sub> -54, P <sub>3</sub> -35, P <sub>4</sub> -16, P <sub>5</sub> -15, P <sub>6</sub> -17, P <sub>7</sub> -5, P <sub>8</sub> -13, P <sub>9</sub> -22, P <sub>10</sub> -9, P <sub>11</sub> -8, P <sub>12</sub> -19, P <sub>13</sub> -21, P <sub>14</sub> -17, P <sub>15</sub> -8, P <sub>16</sub> -6, P <sub>17</sub> -10, P <sub>18</sub> -46	
69 a b c d	C " " "A?	(N-18°-E) " " "	×(4.30) ×(4.60) ×(5.40) ×(5.60)		1 1 1 1	1 1 1 1	ほぼ中央 " " "	A <sub>4</sub>	P <sub>32</sub> -50, P <sub>33</sub> -51, P <sub>34</sub> -45, P <sub>35</sub> -53, P <sub>36</sub> -13, P <sub>37</sub> -17, P <sub>38</sub> -14, P <sub>39</sub> -12, P <sub>40</sub> -10, P <sub>41</sub> -16, P <sub>42</sub> -12, P <sub>43</sub> -15, P <sub>44</sub> -13, P <sub>45</sub> -12, P <sub>46</sub> -16, P <sub>49</sub> -23, P <sub>32</sub> -50, P <sub>33</sub> -51, P <sub>35</sub> -53, P <sub>47</sub> -13, P <sub>48</sub> -13 P <sub>20</sub> -39, P <sub>21</sub> -51, P <sub>22</sub> -40, P <sub>23</sub> -28, P <sub>25</sub> -21, P <sub>30</sub> -18, P <sub>31</sub> -13 P <sub>1</sub> -91, P <sub>2</sub> -71, P <sub>3</sub> -41, P <sub>4</sub> -45, P <sub>5</sub> -9, P <sub>6</sub> -12, P <sub>7</sub> -10, P <sub>8</sub> -10, P <sub>9</sub> -12, P <sub>10</sub> -14, P <sub>11</sub> -15, P <sub>12</sub> -25, P <sub>13</sub> -12, P <sub>14</sub> -15, P <sub>15</sub> -12, P <sub>16</sub> -13, P <sub>17</sub> -10, P <sub>18</sub> -9, P <sub>19</sub> -19	
71 a b	B B	N-43°-E N-40°-E	4.20 × (3.60) 4.86 × 4.50	不明 55	1 1	1 1	中央 中央	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -47, P <sub>2</sub> -52, P <sub>5</sub> -65, P <sub>7</sub> -57 P <sub>1</sub> -47, P <sub>3</sub> -70, P <sub>4</sub> -65, P <sub>5</sub> -37, P <sub>8</sub> -88, P <sub>9</sub> -18, P <sub>10</sub> -39, P <sub>11</sub> -18, P <sub>12</sub> -55, P <sub>13</sub> -36, P <sub>14</sub> -45, P <sub>15</sub> -35, P <sub>16</sub> -35, P <sub>17</sub> -70, P <sub>18</sub> -20, P <sub>19</sub> -46, P <sub>20</sub> -25, P <sub>21</sub> -15, P <sub>22</sub> -65, P <sub>23</sub> -40, P <sub>24</sub> -26, P <sub>25</sub> -18, P <sub>26</sub> -52, P <sub>27</sub> -13	焼失
37(旧) (新)a (新)b	C " D	N-49°-W N-4°-W "	不明 (4.80)×(3.60) (5.70)×4.70	30 不明 56	なし 1 1	不明 1 1	— 石囲い(石なし)中央南より 石囲い 中央北より	(A?)	P <sub>4</sub> -63, P <sub>5</sub> -52, P <sub>6</sub> -51, P <sub>7</sub> -35 P <sub>1</sub> -29, P <sub>2</sub> -25, P <sub>3</sub> -53, P <sub>8</sub> -32, P <sub>9</sub> -21 P <sub>1</sub> -29, P <sub>2</sub> -25, P <sub>3</sub> -53, P <sub>10</sub> -34, P <sub>11</sub> -25, P <sub>12</sub> -26, P <sub>13</sub> -47, P <sub>14</sub> -44, P <sub>15</sub> -26, P <sub>16</sub> -15	焼失, もう一回拡張の可能性
56	D	N-18°-E	4.82 × 4.00	30	1	1	ほぼ中央	A <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -34, P <sub>2</sub> -36, P <sub>3</sub> -27, P <sub>4</sub> -46, P <sub>4</sub> -29, P <sub>5</sub> -26, P <sub>6</sub> -27, P <sub>8</sub> -38, P <sub>9</sub> -37, P <sub>7</sub> -33	
63	DA	N-72°-E	4.20 × 3.70	24	なし	1	"	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -24, P <sub>2</sub> -53, P <sub>3</sub> -14, P <sub>4</sub> -34, P <sub>5</sub> -18, P <sub>6</sub> -29, P <sub>7</sub> -21, P <sub>8</sub> -21, P <sub>9</sub> -13, P <sub>10</sub> -20, P <sub>11</sub> -47, P <sub>12</sub> -52, P <sub>13</sub> -38, P <sub>14</sub> -33	西へ拡張
68	D?	不明	不明	28	1	不明	—	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -10, P <sub>2</sub> -9, P <sub>3</sub> -20, P <sub>4</sub> -14, P <sub>5</sub> -13, P <sub>6</sub> -84, P <sub>7</sub> -26, P <sub>74</sub>	
4	I	N-10°-W	3.44 × 2.52	32	なし	なし	—	A <sub>3</sub>	なし	
12	B	N-19°-E	6.20 × 4.10	40	1	1	北寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -45, P <sub>2</sub> -68, P <sub>3</sub> -41, P <sub>4</sub> -59, P <sub>5</sub> -19, P <sub>6</sub> -15	
13	D?	N-7°-W	—	73	なし	1	"	(B <sub>4</sub> )	P <sub>1</sub> -21, P <sub>2</sub> -7, P <sub>3</sub> -22, P <sub>4</sub> -7, P <sub>5</sub> -22	

住居 番 号	平面形	長軸方向	規 模 m	壁高 cm	周溝	炉数	炉 位 置	遺物出 土状態	柱 穴 cm	備 考
27	D	N-37°-W	4.50 × 3.93	20	1	1	中央	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -40, P <sub>2</sub> -36, P <sub>3</sub> -35, P <sub>4</sub> -50, P <sub>5</sub> -20, P <sub>6</sub> -47, P <sub>7</sub> -13, P <sub>8</sub> -19, P <sub>9</sub> -50, P <sub>10</sub> -23, P <sub>11</sub> -15	
33	D	N-30°-W	4.72 × (6.30)	35	なし	1?	中央(?)	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -53, P <sub>2</sub> -51, P <sub>3</sub> -61, P <sub>4</sub> -26, P <sub>6</sub> -38, P <sub>7</sub> -56, P <sub>8</sub> -23, P <sub>9</sub> -8, P <sub>10</sub> -17, P <sub>11</sub> -22, P <sub>12</sub> -9	
41	不明	不明	(4.00) × 3.80	38	なし	1	ほぼ中央	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -25, P <sub>2</sub> -20, P <sub>3</sub> -15-16, P <sub>4</sub> -不明, P <sub>5</sub> -44, P <sub>6</sub> -不明	
42	DA?	N-15°-E	4.00 × 3.30	47	1	1	やや北寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -26, P <sub>2</sub> -49, P <sub>3</sub> -27, P <sub>4</sub> -43, P <sub>5</sub> -43, P <sub>6</sub> -55, P <sub>7</sub> -41	
43	不明	不明	× 3.30	27	なし	—	—	不明	P <sub>1</sub> -51, P <sub>2</sub> -78, P <sub>3</sub> -35	
49 a	E	N-29°-W	(5.10) × (3.70)	32	なし	1	中央北寄り (F <sub>1</sub> )	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -53, P <sub>2</sub> -52, P <sub>3</sub> -71, P <sub>4</sub> -50, P <sub>5</sub> -42, P <sub>6</sub> -36, P <sub>7</sub> -19, P <sub>9</sub> -14 P <sub>2</sub> -52, P <sub>3</sub> -71, P <sub>4</sub> -50, P <sub>8</sub> -40	
b ?	E(?)	—	—	不明	なし	1	南寄り (F <sub>2</sub> )			
50	I	N-29°-E	4.30 × 3.65	40	なし	1	北寄り	A <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -50, P <sub>2</sub> -41, P <sub>3</sub> -34, P <sub>4</sub> -48, P <sub>5</sub> -46, P <sub>6</sub> -47, P <sub>7</sub> -14, P <sub>8</sub> -44, P <sub>9</sub> -4	
51	I	N-10°-W	2.55 × 2.35	38	なし	1	#	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -35, P <sub>2</sub> -96, P <sub>3</sub> -8, P <sub>4</sub> -10	
59	DC?	N-5°-W	4.75 × (4.30)	18	なし	2	中央北東寄り (F <sub>1</sub> , F <sub>2</sub> )	(B <sub>2</sub> )	P <sub>1</sub> -55, P <sub>2</sub> -58, P <sub>3</sub> -30, P <sub>4</sub> -55, P <sub>5</sub> -56, P <sub>6</sub> -38, P <sub>7</sub> -22, P <sub>8</sub> -16, P <sub>9</sub> -20, P <sub>10</sub> -40	
61 a	G	N-2°-W	7.20 × 5.00	48	1	1	北寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -47, P <sub>3</sub> -50, P <sub>4</sub> -48, P <sub>5</sub> -73, P <sub>6</sub> -50, P <sub>7</sub> -40 P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> -72, P <sub>3</sub> -50, P <sub>4</sub> -48, P <sub>5</sub> -73, P <sub>6</sub> -50, P <sub>7</sub> -40	
b	G	#	7.65 × 5.00	48	1	1	#			
66	D	N-3°-W	6.00 × 5.20	49	なし	不明	—		P <sub>3</sub> -60, P <sub>6</sub> -66, P <sub>7</sub> -72, P <sub>8</sub> -63, P <sub>9</sub> -54, P <sub>11</sub> -45, P <sub>18</sub> -17, P <sub>19</sub> -22, P <sub>20</sub> -37, P <sub>21</sub> -36, P <sub>22</sub> -28, P <sub>23</sub> -49, P <sub>24</sub> -51, P <sub>25</sub> -27, P <sub>26</sub> -30, P <sub>27</sub> -31, P <sub>28</sub> -17, P <sub>29</sub> -47, P <sub>30</sub> -42, P <sub>31</sub> -44	
70	不明	—	—	10	—	—	—	不明	P <sub>1</sub> -45, P <sub>2</sub> -20, P <sub>3</sub> -22	
74(古) a	—	N-90°-W	(3.70) × (3.70)	70	1	1	中央東寄り (F <sub>1</sub> )	A <sub>1</sub>	P <sub>13</sub> -48, P <sub>22</sub> -33, P <sub>23</sub> -42, P <sub>24</sub> -39 P <sub>12</sub> -72, P <sub>21</sub> -48, P <sub>28</sub> -77 P <sub>10</sub> -50, P <sub>15</sub> -38, P <sub>17</sub> -43, P <sub>19</sub> -40 P <sub>15</sub> -35, P <sub>16</sub> -58, P <sub>20</sub> -36, P <sub>25</sub> -42 P <sub>1</sub> -65, P <sub>3</sub> -60, P <sub>6</sub> -50, P <sub>8</sub> -79, P <sub>11</sub> -72, P <sub>12</sub> -72 他は別紙	
b	—	#	(5.40) × (4.40)		1	1	中央 (F <sub>2</sub> )			
c	D?	N-0°-S	(7.20) × (3.90)		1	1	北寄り (F <sub>3</sub> )			
d	#	#	#		1?	1	北寄り (F <sub>3</sub> )			
e	G	#	9.37 × 5.74		1	1	中央 (F <sub>4</sub> )			
76	D	N-20°-E	4.44 × 3.80	46	1	1	北寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -47, P <sub>2</sub> -37, P <sub>3</sub> -50, P <sub>4</sub> -46, P <sub>5</sub> -39, P <sub>6</sub> -21	
77	D	N-24°-W	4.00 × 3.17	40	なし	1	ほぼ中央	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -40, P <sub>2</sub> -30, P <sub>3</sub> -29, P <sub>4</sub> -44, P <sub>5</sub> -20, P <sub>6</sub> -17, P <sub>7</sub> -17	
81	E	N-26°-W	(4.00) × (3.60)	11	1	焼土 2ヶ所	中央、北西寄り	(A <sub>1</sub> )	P <sub>1</sub> -25, P <sub>2</sub> -44, P <sub>3</sub> -39, P <sub>4</sub> -37, P <sub>10</sub> -22, P <sub>12</sub> -30, P <sub>13</sub> -22, P <sub>14</sub> -31, P <sub>15</sub> -23, P <sub>16</sub> -18, P <sub>17</sub> -21, P <sub>22</sub> -53	
5(旧) a		N-25°-E	3.30 × (3.00)	70	1	1	中央 (F <sub>1</sub> )	(B)	不明 P <sub>2</sub> -29, P <sub>5</sub> -53, P <sub>9</sub> -44, P <sub>8</sub> -35, P <sub>3</sub> -20, P <sub>4</sub> -30, P <sub>6</sub> -17 P <sub>7</sub> -58, P <sub>10</sub> -45, P <sub>14</sub> -55, P <sub>17</sub> -58 P <sub>1</sub> -58, P <sub>8</sub> -35, P <sub>12</sub> -45, P <sub>16</sub> -24, P <sub>11</sub> -41, P <sub>13</sub> -35, P <sub>15</sub> -31	
b		#	(4.50) × (3.80)		1	1	中央 (F <sub>2</sub> )			
(中)		N-30°-E	(4.30) × (3.80)		なし	不明	—			
(新)		N-25°-E	(4.30) × (3.60)		なし	#	—			
6 a	D	N-2°-E	(3.30) × (4.30)	50	1	1?	北寄り (F <sub>1</sub> )	A <sub>3</sub>	P <sub>2</sub> -40, P <sub>4</sub> -不明, P <sub>9</sub> -36, P <sub>10</sub> -54, P <sub>1</sub> -30 P <sub>3</sub> -45, P <sub>5</sub> -不明, P <sub>6</sub> -30, P <sub>7</sub> -30, P <sub>8</sub> -30	
b	D	N-5°-E	(4.00) × 5.10		なし	2	北寄り (F <sub>2</sub> )			
9(旧)	I	N-7°-E	(3.70) × 3.30	45	なし	1	南寄り (F <sub>1</sub> , F <sub>2</sub> )	B <sub>4</sub>	P <sub>1</sub> -32, P <sub>2</sub> -15, P <sub>3</sub> -7, P <sub>9</sub> -12, P <sub>10</sub> -13, P <sub>11</sub> -50 P <sub>4</sub> -5, P <sub>5</sub> -2, P <sub>6</sub> -25, P <sub>7</sub> -9, P <sub>8</sub> -3	
(新)	I	N-5°-E	(4.00) × 3.25	40	1	1	# (F <sub>3</sub> , F <sub>4</sub> )			
11 a	E	N-56°-W	3.60 × 3.20	40	1	1	北寄り (F <sub>1</sub> )	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -52, P <sub>2</sub> -23, P <sub>6</sub> -36, P <sub>7</sub> -44 不明 P <sub>1</sub> -52, P <sub>3</sub> -31, P <sub>4</sub> -27, P <sub>5</sub> -38, P <sub>7</sub> -44, P <sub>8</sub> -31, P <sub>9</sub> -20	
b	E	N-11°-E	(4.60) × (3.90)	40	1	1	略中央 (F <sub>1</sub> )			
c	E	N-24°-W	5.60 × 4.30	50	1	1	# (F <sub>3</sub> )			
52 a	I	N-25°-E	4.60 × 3.55	24	1	1(?)	北西寄り	B <sub>4</sub>	P <sub>2</sub> -51, P <sub>3</sub> -55, P <sub>12</sub> -56 P <sub>7</sub> -23, P <sub>8</sub> -54, P <sub>11</sub> -37, P <sub>1</sub> -35, P <sub>3</sub> -33, P <sub>4</sub> -50, P <sub>6</sub> -56, P <sub>9</sub> -44, P <sub>10</sub> -30, P <sub>13</sub> -49, P <sub>14</sub> -31	
b	I	#	#	24	なし	1(?)	#			
58 a	D	N-5°-W	3.95 × 3.20	60	1	1	北寄り	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -54, P <sub>2</sub> -60, P <sub>3</sub> -53, P <sub>4</sub> -59 P <sub>1</sub> -54, P <sub>2</sub> -60, P <sub>3</sub> -53, P <sub>4</sub> -59	
b	D	N-5°-W	4.46 × 3.60		1	1	ほぼ中央			
75	D	不明	(5.00) × (4.00)	30	なし	不明	—	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -55, P <sub>2</sub> -41, P <sub>3</sub> -27, P <sub>4</sub> -16, P <sub>5</sub> -16, P <sub>6</sub> -7, P <sub>7</sub> -10	
79	不明	不明	× (3.90)	33	なし	不明	—	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -46, P <sub>2</sub> -62, P <sub>3</sub> -46	
34	I	N-37°-E	4.06 × 4.30	24	なし	1	やや北寄り	B <sub>3</sub>	P <sub>1</sub> -47, P <sub>2</sub> -52, P <sub>3</sub> -39, P <sub>4</sub> -46, P <sub>5</sub> -59, P <sub>6</sub> -32, P <sub>7</sub> -41, P <sub>8</sub> -21, P <sub>9</sub> -34	
45(旧)	E	N-20°-E	× (4.80)	42	—	不明	—	(B <sub>2</sub> )	P <sub>1</sub> -64, P <sub>4</sub> -80, P <sub>12</sub> -20, P <sub>17</sub> -72 P <sub>1</sub> -64, P <sub>2</sub> -54, P <sub>3</sub> -72, P <sub>4</sub> -80, P <sub>5</sub> -48, P <sub>7</sub> -29, P <sub>8</sub> -40, P <sub>9</sub> -38, P <sub>10</sub> -47, P <sub>12</sub> -20, P <sub>14</sub> -15, P <sub>15</sub> -20, P <sub>16</sub> -25, P <sub>17</sub> -72 P <sub>6</sub> -35, P <sub>11</sub> -65, P <sub>13</sub> -42, P <sub>18</sub> -53	
(中)	E	#	5.34 × 4.92	48	1	#	—			
(新)	E	N-16°-E	4.00 × 3.96	—	3?	—	—			
67	I	N-9°-W	3.90 × 3.90	18	なし	1	ほぼ中央	B <sub>1</sub>	P <sub>1</sub> -68, P <sub>2</sub> -44, P <sub>3</sub> -61, P <sub>4</sub> -37, P <sub>5</sub> -36, P <sub>6</sub> -46, P <sub>7</sub> -56, P <sub>8</sub> -22, P <sub>9</sub> -37, P <sub>10</sub> -56, P <sub>11</sub> -58, P <sub>12</sub> -16, P <sub>13</sub> -45, P <sub>14</sub> -23	
74(新)	E	N-23°-E	6.40 × 3.60	70	なし	1	北寄り (F <sub>7</sub> )	不明	P <sub>9</sub> -47, P <sub>42</sub> -20, P <sub>43</sub> -20, P <sub>45</sub> -24, P <sub>46</sub> -41	
7 a	F	N-4°-W	2.60 × 2.60	54	1	1	(F <sub>1</sub> )	B <sub>4</sub>	P <sub>4</sub> -52, P <sub>6</sub> -59, P <sub>10</sub> -32, P <sub>11</sub> -34, P <sub>13</sub> -20, P <sub>26</sub> -20 P <sub>3</sub> -38, P <sub>5</sub> -25, P <sub>9</sub> -42, P <sub>11</sub> -34, P <sub>13</sub> -20, P <sub>20</sub> -24, P <sub>27</sub> -25, P <sub>28</sub> -35, P <sub>29</sub> -18, P <sub>2</sub> -36 P <sub>1</sub> -46, P <sub>7</sub> -35, P <sub>8</sub> -36, P <sub>12</sub> -44, P <sub>14</sub> -42, P <sub>15</sub> -40, P <sub>16</sub> -24, P <sub>17</sub> -18, P <sub>18</sub> -32, P <sub>19</sub> -30, P <sub>20</sub> -24, P <sub>21</sub> -21, P <sub>22</sub> -40, P <sub>23</sub> -35, P <sub>24</sub> -26, P <sub>25</sub> -20, P <sub>30</sub> -17, P <sub>31</sub> -21	
b	F	N-17°-W	3.20 × 3.20		1	1	(F <sub>2</sub> )			
c	F	N-6°-W	3.80 × 3.60		1	1	(F <sub>3</sub> )			
a	F	N-13°-E	(6.60) × (6.60)	55	不明	不明	—	不明	P <sub>10 (a)</sub> -67, P <sub>4 (a)</sub> -52, P <sub>5 (a)</sub> -26, P <sub>8 (a)</sub> -59 P <sub>10 (b)</sub> -46, P <sub>4 (b)</sub> -58, P <sub>5 (b)</sub> -38, P <sub>8 (b)</sub> -50 P <sub>10 (c)</sub> -60, P <sub>4 (c)</sub> -50, P <sub>5 (c)</sub> -20, P <sub>8 (c)</sub> -72 P <sub>10 (d)</sub> -93, P <sub>4 (d)</sub> -109, P <sub>5 (d)</sub> -116, P <sub>8 (d)</sub> -62 他は別紙	
b	F	N-17°-E	(7.50) × (7.20)		#	#	—			
c	F	N-15°-E	(7.50) × (7.20)		#	#	—			
d	F	N-14°-E	(9.03) × (7.80)		1	#	—			

40号住居址柱穴

P<sub>1</sub>-80、P<sub>2</sub>-85、P<sub>3</sub>-86、P<sub>4</sub>-83、P<sub>5</sub>-79、P<sub>6</sub>-25、P<sub>7</sub>-27、P<sub>8</sub>-25、P<sub>9</sub>-76、P<sub>10</sub>-40、P<sub>11</sub>-38、P<sub>12</sub>-25、P<sub>13</sub>-44、P<sub>14</sub>-30、P<sub>15</sub>-21、P<sub>16</sub>-22、P<sub>17</sub>-28、P<sub>18</sub>-38、P<sub>19</sub>-56、P<sub>20</sub>-36、P<sub>21</sub>-40、P<sub>22</sub>-54、P<sub>23</sub>-50、P<sub>24</sub>-32、P<sub>25</sub>-33、P<sub>26</sub>-35、P<sub>27</sub>-24、P<sub>28</sub>-24、P<sub>29</sub>-27、P<sub>30</sub>-25、P<sub>31</sub>-21、P<sub>32</sub>-40、P<sub>33</sub>-30、P<sub>34</sub>-30、P<sub>35</sub>-20、P<sub>36</sub>-22、P<sub>37</sub>-26、P<sub>38</sub>-52、P<sub>39</sub>-10、P<sub>40</sub>-12、P<sub>41</sub>-25

74号住居址柱穴

P<sub>2</sub>-10、P<sub>4</sub>-44、P<sub>5</sub>-58、P<sub>7</sub>-55、P<sub>14</sub>-18、P<sub>18</sub>-27、P<sub>25</sub>-28、P<sub>27</sub>-22、P<sub>29</sub>-48、P<sub>30</sub>-45、P<sub>31</sub>-18、P<sub>32</sub>-42、P<sub>33</sub>-32、P<sub>34</sub>-20、P<sub>35</sub>-30、P<sub>36</sub>-40、P<sub>37</sub>-40、P<sub>38</sub>-29、P<sub>39</sub>-40、P<sub>40</sub>-37、P<sub>41</sub>-28、P<sub>44</sub>-24、P<sub>47</sub>-33

72号住居址柱穴

a. P<sub>15(4)</sub>-13、P<sub>20(4)</sub>-17、P<sub>29</sub>-51、P<sub>32</sub>-18、P<sub>36(4)</sub>-18、P<sub>42</sub>-23、P<sub>43</sub>-22、P<sub>50</sub>-16、P<sub>52</sub>-22、P<sub>54</sub>-27、P<sub>59</sub>-13、P<sub>62(4)</sub>-27、P<sub>70</sub>-11、P<sub>75</sub>-19、P<sub>82</sub>-14、P<sub>83</sub>-27、P<sub>95</sub>-13、P<sub>99</sub>-2、P<sub>102</sub>-29  
b. P<sub>13(2)</sub>-21、P<sub>15(4)</sub>-22、P<sub>18(2)</sub>-24、P<sub>19</sub>-18、P<sub>20(2)</sub>-26、P<sub>23</sub>-28、P<sub>27</sub>-33、P<sub>30(4)</sub>-39、P<sub>36</sub>-23、P<sub>38(2)</sub>-39、P<sub>41(4)</sub>-22、P<sub>45</sub>-17、P<sub>15(4)</sub>-23、P<sub>56(4)</sub>-36、P<sub>57</sub>-26、P<sub>58(4)</sub>-42、P<sub>62(2)</sub>-33、P<sub>64(4)</sub>-35、P<sub>71</sub>-40、P<sub>79</sub>-38、P<sub>85(4)</sub>-25、P<sub>87</sub>-27、P<sub>96</sub>-30、P<sub>98</sub>-37、P<sub>101</sub>-28、P<sub>103(4)</sub>-18  
c. P<sub>13(4)</sub>-35、P<sub>15</sub>-34、P<sub>22</sub>-21、P<sub>26</sub>-12、P<sub>30(2)</sub>-30、P<sub>33</sub>-39、P<sub>37</sub>-37、P<sub>39(4)</sub>-17、P<sub>41(2)</sub>-27、P<sub>49</sub>-25、P<sub>51(2)</sub>-8、P<sub>56(2)</sub>-23、P<sub>58(2)</sub>-26、P<sub>60</sub>-19、P<sub>62(2)</sub>-32、P<sub>64(2)</sub>-32、P<sub>66(4)</sub>-40、P<sub>68</sub>-40、P<sub>72(4)</sub>-46、P<sub>78</sub>-11、P<sub>81</sub>-21、P<sub>84</sub>-35、P<sub>90</sub>-17、P<sub>97</sub>-64、P<sub>100</sub>-6、P<sub>103(2)</sub>-18、P<sub>104</sub>-13  
d. P<sub>13(2)</sub>-63、P<sub>14</sub>-16、P<sub>17</sub>-22、P<sub>21</sub>-17、P<sub>25</sub>-31、P<sub>31</sub>-31、P<sub>35</sub>-16、P<sub>39(2)</sub>-30、P<sub>40</sub>-15、P<sub>55</sub>-13、P<sub>58(2)</sub>-22、P<sub>61</sub>-52、P<sub>63</sub>-22、P<sub>65</sub>-34、P<sub>66(2)</sub>-55、P<sub>67</sub>-48、P<sub>72(2)</sub>-38、P<sub>73</sub>-16、P<sub>74</sub>-46、P<sub>76</sub>-32、P<sub>77</sub>-35、P<sub>80</sub>-31、P<sub>85(2)</sub>-29、P<sub>86</sub>-27、P<sub>89</sub>-27、P<sub>91</sub>-14、P<sub>92</sub>-16、P<sub>1</sub>-49、P<sub>2</sub>-63、P<sub>3</sub>-66、P<sub>6(4)</sub>-104、P<sub>6(2)</sub>-83、P<sub>7</sub>-70、P<sub>9</sub>-79、P<sub>11</sub>-62、P<sub>12</sub>-68、P<sub>16</sub>-19、P<sub>24</sub>-60、P<sub>28</sub>-41、P<sub>44</sub>-20、P<sub>46</sub>-29、P<sub>47</sub>-26、P<sub>48</sub>-21、P<sub>53</sub>-20、P<sub>69</sub>-27、P<sub>88</sub>-27、P<sub>93</sub>-8、P<sub>94</sub>-26

別表2 集石一覧表

分類	集石番号	図番号	群	法量				構成磔数			長軸方向	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	厚さ	人頭大	三並し	計			
DIa1	1		A-16	65	60	9	9	2	20	22	N35°W		
CIc2	2	30	"	100	92	25	25	5	232	237	N77°W		
欠番	3												
BIVc3	4	26	A-16	116	115	22	22	0	133	133	N22°E		
欠番	5												
AIb2	6	23	A-16	170	166	32	25	129	69	198	N35°E		
CIa1	7		"	85	65	8					—	石鏃1、P-e2、uf1	
CIc2	8	30	"	120	98	25	25				N64°E		
CIVa1	9		"	86	70	8		0	104	104	N68°E		
CIIb2	10	28	その他	98	95	15	15	3	125	128	N25°E		
CIa1	11		A-16	80	65	15		36	38	74	N13°E	凹石3、IV期1、土器片8	
"	12		"	100	85	10		0	136	136	N70°E	凹石1、IV期2、土器片12	
CIb4	13		A-6	115	60	15		0	35	35	—		
CIVa1	14		その他	85	32			2	15	17	—		
欠番	15											磨製石斧1	
CIVb2	16	28	A-15	100	70	15	15	0	127	127	N78°E	凹石2	
BIa4	17		"	115	90	15	15	9	85	94	N55°E		
CIa1	18		"	71	55			6	61	67	N83°W		
CIIa1	19		"	90	70	10	10	1	60	61	N76°W		中央石、抜ける
AIc2	20	23	A-11	160	140	20	20	21	303	324	N35°W		
BIc2	21	26	B-1	142	110	30	30	29	159	188	N15°E	凹石2、石皿1	
DI d3	22	31	"	70	66	20	14	3	55	58	N55°E	凹石2	
BIc2	23	25	"	120	100	43	30	44	200	244	N57°E	凹石2、石皿1	底部に炭あり
AIc2	24	23	"	175	165	70	66	98	740	838	N89°E	P-e1、凹石9、石皿1	"
CIa1	25		A-11	130	70	8	8	22	129	151	N35°E		
AIc3	26	25	B-1	190	150	46	36	56	175	231	N54°E	uf1、IV期1、V期1、土器片2	底部に炭あり
AIc2	27	23	"	150	130	40	37	71	357	428	N5°W	凹石3、IV期3、土器片1	"
"	28	23	"	150	150	25	20	27	183	340	N3°E	uf2、凹石1、石皿1 IV期3、V期6、土器片4	"
"	29	23	"	166	165	40	30	—	—	300	N85°E	sc1、凹石3	"
CIa4	30	27	A-11	80	60	10	—	0	83	83	N54°E	IV期28、V期1、土器片24	
CIa1	31		"	84	52	10		7	50	57	N72°W	凹石1	
CIVc2	32	29	A-12	92	90	28	24	34	303	337	N84°W	凹石3	
CIVb4	33	28	A-13	103	83	20	15	8	81	89	N72°W	磨製石斧1	
BIc2	34	26	"	130	117	30	30	25	256	281	N17°E	石錐1、凹石1	
CIa2	35		A-12	80	55	—	—	4	95	99	N90°W		集石? 集石122と重複
CIIIb2	36	28	"	110	92	15	15	12	161	173	N76°W	凹石1	
CIVb4	37	28	"	115	90	20	20	11	174	185	—	凹石3	
BIb2	38	26	A-13	140	115	23	23	53	71	124	N55°E	石鏃1、Sc1、P-e1、凹石1	
"	39		"	150	105	20	20	39	468	507	N86°W	凹石3、石皿1	
欠番	40												
DIa2	41	31	B-1	65	60	10	10	1	79	80	N2°W		
CIb2	42	30	A-14	106	95	22	22	4	129	133	—	凹石1	
欠番	43											P-e1、凹石1	
"	44											石鏃1、凹石1	
DIVd4	45		B-1	62	53	22	22	3	243	246	N23°E	凹石2、石皿1	
DIVb4	46	31	"	70	48	15	15	0	184	184	N37°W		
DIVd4	47	31	"	65	65	14	14	1	119	120	N55°W		
DIVa1	48	31	A-16	70	36	10	10	1	17	18	N60°W		
欠番	49												
DIVd4	50		A-16	70	65	20	20	3	50	53	N18°E		
AIc2	51	24	B-1	160	145	36	32	77	521	598	N17°E	uf1、凹石21、III期1、 IV期8、V期27、土器片19	埋土に炭あり
欠番	52												
DIa4	53		A-11	70	67	10	12	4	42	46	—		
CIVa4	54		"	103	65	15	—	3	57	60	N11°W		
DIc3	55		A-16	70	58	25	25	1	85	86	N4°W	Sc1	西側石抜けるか?
欠番	56												
CIIIb2	57	28	A-14	100	90	20	20				—		
DIa1	58	31	"	70	65	15	15	0	57	57	N63°W		
DIa4	59	31	B-1	70	64	10	10	2	196	198	N2°E	石匙1、凹石1	
欠番	60											凹石1	
AIc2	61	25	B-1	190	160	50	50	85	554	639	N6°E	石鏃1、uf1、凹石6、 IV期2、V期2、土器片6	底部に炭あり
欠番	62												
CIa1	63		A-14	71	60	—	—	7	12	19	—	凹石1、石皿1	埋土に炭あり
欠番	64												
BIV	65	27	A-4	120	120	—	—	12	28	40	—	uf1	方形凹と凹形凹の2つから なるが下部未調整 80住埋土
CIc3	66	29	"	100	86	54	40	7	30	37	N5°E	凹石1	集石121と切り合う
CIVb1	67		"	80	60	25	15	11	13	24	N64°W		
DIb4	68		"	70	68	15	15	—	—	—	N9°E	石鏃1、Sc1、uf1、凹石1	

分類	集石番号	図番号	群	法量				構成礫数			長軸方向	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	厚さ	人頭大	三六	計			
DIVa1	69		A-4	65	50	—	10	10	23	33	—	u-f1	
BIVc2	70	29	A-6	110	100	32	32	42	—	—	N6°W	Sc1	
CIVb1	71	28	"	90	55	20	20	7	22	29	N54°W		径35cm以上の大石から成る
CIV	72		"	110	80	—	—	20	41	61	—	有扶頭磨1	
CIVc2	73	29	"	75	75	18	18	4	146	150	N12°W		
CIB4	74	29	"	80	55	20	20	4	73	77	N4°W	u-f3、凹石1、IV期6、土器片22	集石120と切り合う
BIB2	75	25	"	140	100	20	20	—	—	—	N24°E	磨製石斧1、凹石1	
CIIB4	76	28	"	92	70	23	16	13	75	88	N72°W		
CIa1	77	26	"	125	98	15	15	5	27	32	N0°W	石皿1	
BIA4	78		"	105	100	(15)	10	6	52	58	N9°E		
CIVa4	79		"	82	50	12	12	0	18	18	N28°E	丸石1	
DIA1	80		A-7	45	20	—	—	0	30	30	—		
欠番	81												
CIa1	82		A-7	75	70	—	10	7	20	27	—	石皿1	
CIc3	83		"	111	60	35	35	28	79	107	N80°E		石積下方の石は少ない
欠番	84												
"	85												
"	86												
CIVa4	87		A-5	100	65	13	13				N7°W		
欠番	88												
CIVd4	89		A-14	80	55	12	12				N55°E		
CIB2	90	30	A-5	95	60	27	22				N86°W		
欠番	91												
"	99												
BIC2	100	26	外A-1	142	100	32	30	32	543	575	N90°W	Sc1	
BIIB2	101	26	"	125	105	10	10	19	102	121	N63°W		
欠番	102												
BIC3	103	27	A-14	145	115	55	55	93		237	N55°E	石鉄1、Sc1、凹石7	タール状炭化物あり 土粒一部焼ける
CIc2	104	30	"	95	73	20	20				N64°W		
欠番	105												
CIVa1	106		A-14	100	70	16	16				N15°W	凹石1	
BIA4	107		A-13	135	100	15	15				N73°W	凹石1、石皿1、IV期2、土器片5	底部に炭あり
欠番	108											石鉄1、u-f1	
"	109												
CIa4	110		A-13	110	80	—	—				N36°W	石鉄1、u-f1、凹石1	底部に炭あり
CIVa1	111		A-15	80	70	10	10				N75°W	石鉄1	
DIB2	112	31	B-1	50	30	20	10				N36°W	P-e1、凹石3	底部に炭あり
CIa4	113		"	100	45	—	10				N79°E		
BIC3	114	29	"	115	100	50	40				N80°W	石鉄1、凹石3	底部に炭あり
DIA1	115		A-7	65	50	12	12				N62°E		
DIB2	116		"	70	55	30	20				N36°E	u-f1、凹石1	
CIc3	117	30	"	95	75	54	50	84	28	112	N26°E		
CIVb4	118	32	その他	140	75	24	24				N35°W		
欠番	119											石匙2、P-e1、磨製石斧1、凹石6	
BIVb4	120	29	A-6	130	70	—	—				N88°W		
DIVb2	121	29	A-4	55	45	55	20				N70°E	u-f1	底部に炭あり
欠番	122												
DIA2	123		その他	60	30	30	5				N51°W		
DIA1	124		A-13	50	36	—	—				N35°W		
CIc2	125	30	B-1	95	94	35	25				N53°E	石鉄1、P-e1	
DIC4	126		"	34	—	—	—	3	51	54	—		
BIB2	127	25	A-6	115	115	35	35				N15°E		
CIVb2	128		A-7	71	60	25	20	3	48	51	—		
AIC3	129	24	A-1	145	130	135	130	55	372	427	N84°W		底部に炭あり
DIB4	130		"	50	40	—	15				N76°W	IV期2、土器片1	
BIC3	131	27	"	115	100	48	25	63	56	119	N20°E	石鉄2	底部に炭あり
DIC3	132	31	"	70	62	37	35	22	50	72	N25°E		
欠番	133												
CIVc2	134		A-1	125	66	42	35	44	275	319	N35°W	凹石4、II期2、III期1、IV期1、V期4、土器片7	底部に炭あり
CIa2	135		"	90	60	30	20	24	69	93	N85°E	凹石1	
BIC2	136	32	"	145	105	35	25	50	198	248	N53°E	凹石4、II期1、V期1、土器片6	
"	137	32	"	130	110	35	25	13	27	40	N51°W		
BIC2	138	32	"	140	100	35	30	48	217	265	N10°W	凹石3、IV期3、V期2、土器片21	底部に炭あり
"	139	32	"	160	120	35	25	32	111	143	N53°W	II期1、IV期3、V期3、土器片15	"
DIVc2	140-1		"	70	50	20	20	7	25	32		磨製石斧1、凹石4	"
CIc2	140-2	30	"	100	90	30	20	25	130	155	N64°E		"
CIVb2	141		"	80	55	20	20	13	77	90	N77°W	凹石2	
BIB4	142	29	"	135	125	25	25	26	164	190	N71°W	u-f1、凹石2、II期1、滑石製品	
DIVa3	143		A-2	45	30	35	15	6	23	29		IV期1、土器片6	

分類	集石番号	図番号	群	法量				構成礫石			長軸方向	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	厚さ	人頭大	こぶし大	計			
CIIc2	144	28	A-2	112	90	25	23	12	67	79	N79°E	II期1、土器片4	底部に炭あり
CIIc2	145	28	"	82	65	36	30	31	143	174	N11°E	凹石7	
CIVb2	146	28	"	110	65	35	22	7	118	125	N26°E	凹石2	底部に炭あり
CIIc2(?)	147-1	27	"	140	105	30	30	36	284	320	N75°W	Se1、凹石1、II期6 III期1、IV期1、土器片23	" 147-2(?)
CIc3	148	30	"	100	80	35	35	21	113	134	N120°E	凹石1	"
BIIc2	149	26	"	120	115	25	25	40	219	259	N4°W	凹石3	
CII d4	150		"	110	70	22	15	5	120	125	N76°W	凹石2	底部に炭あり
CIc2	151		A-3	90	75	25	20	27	80	107	N15°E	凹石1	
CIIb2	152	30	A-2	125	98	33	20	19	192	211	N43°W	石匙1、凹石2	
DIVb4	153	31	"	65	55	25	20	7	42	49	N55°E	凹石2	
BIVb2	154		"	130	110	32	20	9	28	37	—	uf1、凹石2	底部に炭あり
DIa3	155	31	"	65	46	35	15	3	28	31	N75°E	—	"
BIVb2	156	32	"	143	105	30	23	30	64	94	N55°E	凹石2	
CIc3	157		"	88	55	30	20	6	149	155	N0°S	凹石2	
DIa1	158	31	"	65	40	12	—	9	61	70	—	凹石1、丸石1	
CIb2	159-1		"	85	56	35	20	—	—	—	—	—	
DIb4	159-2		"	62	42	20	20	10	72	82	N86°W	凹石2	底部に炭あり、重複
BIa4	160-1		"	122	100	10	10	10	167	177	N9°W	—	
BIb2	160-2		"	130	105	18	15	1	18	19	N5°E	P-e1、凹石4	重複
DIa3	161		"	42	35	25	10	0	28	28	N55°W	P-e1、uf1	
DIIb4	162		A-1	60	58	20	20	16	35	51	N25°E	石皿1	
DIVb4	163	31	その他	56	34	20	20	—	—	—	—	凹石4	
CIVb4	164	29	A-4	107	55	16	16	13	45	58	N0°S	—	
BIVb2	165		"	114	105	35	30	21	49	70	N40°W	凹石1	
BIb4	166		A-2	115	110	—	—	5	211	216	N55°E	uf1、凹石1	
DIb4	167		"	52	37	20	18	1	35	36	N26°E	—	
DIb3	168	31	"	60	55	25	15	0	135	135	N38°W	凹石2、石皿1	底部に炭あり
AIVb4	169	25	"	190	160	22	22	72	167	239	—	uf1、凹石6	
CIIIb2	170	28	"	90	80	25	22	26	132	158	N67°E	凹石1	底部に炭あり
BIII	171		C-1	155	100	—	—	—	—	—	N31°W	—	
DIc2	172	31	A-7	65	55	25	25	—	—	—	N35°E	凹石1	
CIb2	173		A-1	130	80	21	28	14	64	78	N85°E	III期1、V期1、土器片8	
CIVa4	174	32	"	135	75	75	25	14	48	62	—	磨製石斧1	
欠番	175			—	—	—	—	—	—	—	—	凹石1	
CIIb2	176	31	A-1	75	54	20	12	14	37	51	N50°E	—	
DIa2	177		A-2	60	40	30	15	4	24	28	N33°W	凹石2	底部に炭あり
BIb2	178	26	"	115	110	30	15	14	71	85	N70°E	—	"
DIVb3	179		"	60	55	20	20	2	15	17	—	凹石1	"
CIc2	180		"	90	50	28	20	19	71	90	N8°W	—	"
欠番	181			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
"	182			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
"	183			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
BI	184		A-8	130	110	—	—	—	—	—	N36°W	—	下部未調査
"	185		"	110	100	—	—	—	—	—	—	—	"
BIV	186		"	110	100	—	—	—	—	—	N76°W	—	"
DI	187		"	35	30	—	—	—	—	—	—	—	"
欠番	188			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
欠番	189			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
DIc3	190	31	A-7	55	40	52	20	3	50	53	N74°W	—	
CIIc2	191	30	A-17	90	85	35	28	—	—	—	—	—	
DIVd3	192	31	"	70	55	35	25	—	—	—	—	—	
DIa4	193	29	"	68	40	15	15	—	—	—	N77°W	—	
CIb4	194	30	A-18	90	80	15	15	—	—	—	N15°E	石皿1	
DIb2	195	31	A-6	30	30	30	20	—	—	—	N36°W	—	
BIVc2	196	27	A-18	120	110	25	25	—	—	—	N62°E	Sc1	
DIa1	197		"	50	40	—	10	—	—	—	—	—	
"	198		"	50	40	—	8	—	—	—	—	凹石1	
CIIb4	199		"	105	75	25	25	—	—	—	N27°E	石匙1	
BIVc2	200	27	"	130	115	35	35	3	269	272	N75°E	石匙2、Sc2、P-e1、uf5、 凹石1、石皿1	炭化材、焼土粒あり
AIIc2	201	24	"	130 <sup>半</sup>	130	26	35	100	251	351	N27°E	IV期1	
BIVc2	202	26	"	125	100	30	30	—	—	—	N75°W	uf1、凹石1	
BIc2	203	26	"	115	115	23	25	—	—	—	—	凹石1	
CIVb4	204		"	90	80	15	15	—	—	—	—	—	
CIVa1	205		A-2	90	45	10	10	0	9	9	N17°E	P-e1、uf1、凹石4	
欠番	206			—	—	—	—	—	—	—	—	—	
DIVa4	207		A-2	65	30	20	14	2	16	18	N80°W	—	
CIVa1	208		"	80	70	—	10	8	46	54	—	—	
DIVa4	209		"	50	35	18	15	6	35	41	N47°W	—	
DIVb2	210		"	70	35	30	20	4	24	28	N79°E	—	
欠番	211			—	—	—	—	—	—	—	—	—	

分類	集石番号	図番号	群	法量				構成礫数			長軸方向	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	厚さ	人頭大	こぶし	計			
欠番	212												
DIVa1	213-1		A-2	70	65	8	8	11	11	22	N83°W	土器片 7	
CIa1	213-2		"	75	75	15	15	4	38	42	N12°E		底部に炭あり
CIb4	214		"	95	45	18	—	7	24	31	N22°W		
DIVb4	215		"	50	45	18	18	15	114	129	N35°W	u-f1	
CIVb2	216		A-18	80	52	15	15			—	N3°E		底部に炭あり
DIVb4	217		"	70	50	18	18			—	N20°E		
CI	218		C-2	80	80			32	85	117	—	Sc1	下部未調査
BIc2	219	24	"	120 <sup>±</sup> <sub>±</sub>	120	30	35	34	258	292	N55°E	u-f3、土器片1	底部に炭あり
DIC4	220	31	A-11	60	55	10	10			—	N54°E		
DIIc2	221	31	"	70	48	22	22			—	N11.5°E		
CI	222		A-10	79	46					—	—		以下集石280まで
DIV	223		"	54	49					—	—		↓ 下部未調査
DIII	224		"	50	45					—	—		
BII	225		A-11	128	120						N0°S		
"	226		"	110	100						N54°E		
BI	227-1		A-9	115	90						N27°W		重複
227-2			"	120	100						N68°E		
CIV	228		"	130	65						N26°E		
DIII	229		"	65	45						N36°W		
BI(?)	230		"	130	110						N27°E		
CIV	231		A-11	80	70						—		
欠番	232												
"	233												
CIV	234		A-12	90	45						N45°W		
CI	235		"	85	55						N80°E		
欠番	236												
DI	237		A-12	68	46						N70°W		
BII(?)	238		C-1	160	110						N5°W		
CI	239		A-5	110	70						N36°W		
"	240		"	95	90						N30°W		
"	241		"	170	85						N11°E		
BI(?)	242		"	140	100						N78°W		
欠番	243												
BIV	244		A-4	110	100						N85°E	凹石 1	
BI	245		A-5	135	100						N9°E		
CIV	246		A-4	105	80						N13°W		
欠番	247												
CI	248		A-5	100	65						N20°E		
"	249		"	75	50						N81°W		
"	250		C-1	110	80						N28°W		
CIV	251		"	(80)	(55)								
"	252		"	135	75								
DIV	253		A-9	65	65						N7°W		
DI	254		"	70	60						N28°W		
欠番	255												
DIV	256		A-4	70	50						N46°E		
BI	257		A-8	105	100						—		
"	258		"	135	117						N13°E	II期2、IV期5、V期4、土器片51	
欠番	259												
"	260												
"	261												
CIV	262		A-8	75	50						—		
BI	263		"	150	100						N8°W		
DII	264		"	70	50						N35°W		
欠番	265												
"	266												
BI	267		A-18	115	100						N64°W		
BIb2	268		A-1	156	100	20	20	30	117	147	N18°W	u-f1、凹石 2	
欠番	269												
AI	270		その他	135	130						N85°E		
欠番	271												
"	272												
BI	273		A-12	160	110						—	石鏡2、u-f6、凹石1、磨製石斧1、II期2、III期3、IV期22、V期16、土器片87	
欠番	274											先端研磨1、凹石 2	
CI	275		その他	110	80						N78°E		
AI	276		A-10	175	150						N0°S		
DII	277		"	65	55						N18°E		
BIII	278		"	120	100						N40°W		
BII	279	26	A-8	120	100						N2°E		
CII	280		"	125	80						N7°W		

分類	集石番号	図番号	群	法量				構成礫数			長軸方向	出土遺物	備考
				長径	短径	深さ	厚さ	人頭大	こぶし	計			
B I	281		A-8	110	100						N15°E		以下集石326まで ↓ 下部未調査
C II	282		"	112	87						N30°E		
C IV	283		"	95	85						—		
C II	284		"	90	64						N79°E		
"	285		A-9	120	85						N61°W		
欠番	286												
A I	287		A-9	165	160						N44°E		
欠番	288												
B II	289		A-9	150	100						N48°E	石皿1	
C IV	290		"	125	80						N81°W		
C I	291		A-12	75	50						N32°E		
C IV	292		"	80	60						N70°W		
"	293		"	110	70						N60°E		
B IV	294		"	150	110						N70°E		
B I	295		"	125	100						N87°W		
C IV	296		"	100	96						—		
C II	297		"	100	70						N37°W		
D IV	298		A-8	48	30						N75°W		
A III	299	24	"	200	150						N74°W		
B IV	300		"	120	100						—		
欠番	301												
D IV	302		A-8	45	40						N8°W		
B IV	303		C-1	130	100						N48°E		
D IV	304		"	65	60						—		
D I	305		"	60	55						N22°W		
A I	306		"	155	130						N8°E		
B I	307		"	120	120						—		
欠番	308												
B I	309		A-5	120	105						N37°W		
D IV	310		"	65	48						—		
欠番	311												
"	312												
D IV	313		A-3	70	65						—		
C IV	314		C-1	80	55						—		
C I	315			100	70						—	原村調査分	
D I	316		その他	60	40						N83°W		
D IV	317		A-3	70	45						—		
C I	318		"	80	45						N40°W		
C IV	319		A-4	110	70						—		
"	320		"	120	75						—		
D IV <sub>c4</sub>	321		A-10	50	40	14	14				N55°E		
欠番	322												
"	323												
D IV	324		A-10	65	40						N49°E		
B I	325		A-5	150	100						N3°W		Pe1, urf1
A I	326	24	C-1	170	170						W0°S		

(注) 出土遺物は集石上面出土のものも含む。集石内遺物については本文(3章4節3)を参照されたい。



別表3 土 壤 一 覧 表

(1) A型土壌

分 類	遺 構		位 置	規 模 (cm) 長径・短径・深度	埋 土 観 察	出 土 遺 物	遺 物 図 番 号	備 考
	番 号	図番号						
AIa1γ	567	44	CQ79	76 69 10	a			
"	608	44	CR83	116 109 14	a	Ⅱ期2、Ⅳ期1、Ⅴ期1、石錐1	石器1227	住居址44を切る
"	1011		CP45	82 80 18	a	土器片7、剥片2、屑片2		
AIa3α	343		CN55	84 74 25	c			土壌143を切る
AIb1β	855	44	CC58	104 98 16	a	Ⅴ期3、剥片1、炭化物		
AIc1α	130	44	DE57	84 72 62	c	Ⅳ期9、Ⅲ群1、炭化物	土器2263	土壌300を切る
"	292		CK52	70 56 48	a	土器片1		
AIc1αと1β	87	44	CM62	78 70 56	c	Ⅱ期3、土器片3、凹石1		土壌89に切られる
"	570	44	CQ81	54 52 26	a			
AIc1β	35		CM61	38 34 32		Ⅱ期2、Ⅴ期1、土器片4、凹石1、石核1		土壌36と切り合う
"	63	44	CR56	74 64 30	c			
"	117		DA52	68 56 26	c	土器片3		
"	133	44	DD59	44 40 28	c	Ⅴ期2		
"	194		CO58	98 92 76	c	Ⅳ期4		
"	234		DA57	58 54 24	a	滑石製品1		
"	542		CM77	56 50 22	d			土壌541と切り合う
"	731	44	CD53	70 64 30	c	Ⅱ期1、剥片1		
"	745		CF57	69 64 26	e			
"	773		BT60	66 56 30	d	土器片1		住居址52を切る
"	985		DF46	66 57 42	c	" 2		
AIc1βと1α	154		CP57	78 72 60		Ⅳ期7	土器2228	
"	624		CF61	100 92 32	c			
AIc1γ	800		CU63	70 64 65	a			
"	132		DD59	48 40 16	a	土器片2		
"	732	44	CE54	82 74 20	a	屑片1		
"	770		BY51	58 58 47	c	Ⅱ期1、石核4、剥片4、屑片9		
"	950		CU63	83 72 51	a			
AIc1αと2β	82	44	CL62	74 56 48	a			土壌90を切る
AIc2γ	115	44	DB52	98 94 36	c	Ⅳ期2、Ⅴ期2		
AI d1α	898	44	CX66	80 70 55	a			
AI d1β	305		DD54	34 28 24	a	Ⅳ期1		
"	517		CK55	62 57 20	a			
AI d1γ	90	44	CL62	70 62 22	a	Ⅴ期3、剥片1、屑片1		土壌82に切られる
"	122		DA55	72 62 32	c	土器片1、剥片2		
"	250		DJ57	64 52 36	c	Ⅱ期1、有珉頭磨1、原石13、石核2	石器1334	
"	258		DG62	88 78 46	c	Ⅳ期10、剥片1	土器2239	
AIe1α	680		CM80	(74) 62	c	Ⅱ期1		土壌679を切る 半掘
"	189		CJ51	62				
AI f2β	578		CQ83	49 48 50	c			
AI g1β	11	44	CM63	64 60 86	b	Ⅱ期2、炭化物		
"	660	44	CK90	48 38 49	c			
AI g2β	334		DH63	52 46 54	a	Ⅳ期6、炭化物		土壌333、520を切り 土壌331に切られる
AI g1γ	26		CJ62	48 (47) 58	a	土器片1、石錐1、剥片1		土壌70、139を切る
"	549		CM80	56 52 80	c			土壌544と切り合う
AI a1γ	555		CN81	68 46 16	c			土壌556、807に切られる
"	29	45	CJ60	116 62 12	a			
"	301	45	DL51	114 62 11	a	Ⅲ期2、Ⅳ期1、石核1、剥片2		
AI a2γ	948	45	CT67	201 142 52	a	Ⅳ期2、土器片5		
AI a3γ	947	45	CS67	127 94 37	a			
AI b1γ	274		DF56	92 74 16	a	Ⅲ期1、Ⅳ期3		
"	982	45	DI46	55 44 4	a	Ⅳ期一括土器	土器2277	
"	983		DH47	85 59 7	a	"	" 2287	
AI c1β	101		CP63	58 38 22	e	石匙1		
"	173		DG61	88 70 38	a	Ⅱ期1、Ⅳ期2、Ⅴ期1	土器2240	土壌172を切る
"	335		DH61	62 30 32	c	Ⅳ期2、Ⅴ期1	" 2229	
"	461		CL72	36 26 27	a	石皿1、剥片1、屑片1		土壌463を切る
"	670		CF51	(102) (76) 37	a	Ⅱ期32、凹石1、剥片3、 屑片2、炭化物(グルミ)		住居址55内
"	949	45	CU65	74 54 70	a	Ⅱ期1、剥片1		
AI c1γと2β	202	45	DE54	98 76 60	c	Ⅲ期1、Ⅳ期6、石核2、原石2、炭化物	土器2279	
AI c2β	168	45	" 60	106 73 92	c	Ⅱ期1、Ⅳ期1、土器片17、石核1		
AI c2γ	795		CU60	(100) (70) (90)		Ⅱ期6、Ⅳ期1、Ⅴ期1、原石3、 石核18、剥片2、P.e1	土器2211 " 2242 石器1235	住居址15内
AI c3γ	953	45	CV65	91 70 58	a	Ⅱ期2、Ⅲ期1、Ⅳ期5		
"	969	45	CI61	86 66 28	a		石器1322	土壌28に切られる
AI d1αと1γ	13		CL64	92 56 38	d	Ⅴ期1、剥片1		
AI d1β	314	45	DG62	73 59 40	c	Ⅱ期1、石錐1、屑片1		土壌315を切る
AI d1γ	981		CE47		b	Ⅱ期2、Ⅲ期1、剥片1		住居址40内
"	992		CF47	114 82 82	e	Ⅱ期2、Ⅲ期4、Ⅳ期2、Ⅴ期1、S-c1、剥片4	土器2262	

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土観察	出土遺物	遺物番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
AIIe1α	503	45	DM60	66	50	38	c	凹石1		
AIIe1β	319		DH61	70	56	24	a	Ⅲ期1、Ⅳ期1、Ⅴ期2、石核1		
AIlg1α	320	45	"	48	35	52				
AIIIc1β	136	46	DF59	64	59	40	c	Ⅲ期1、Ⅳ期4	土器2221	
AIIIc1γ	793		CU60	78	62	52		Ⅱ期4、Ⅳ期1、凹石1、剥片2		住居址15内
AIIIc2β	791	46	" 59	94	79	68	a	Ⅱ期19、Ⅲ期3、Ⅳ期11、石匙1、S-c1、U-f1、凹石1、剥片8	土器2213 土器2247 # 2220 石核1225 # 2245	住居址15内
AIVg1α	267	46	DM55	58	40	108	c	Ⅳ期10、土器片14、石鏝1、凹石1、炭化物		
AVa1β	249	46	DI58	88	81	14	a	Ⅳ期6、土器片12、剥片3		
AIIIb?	66		CR57	50	46	8	a			土壌65と切り合う
AIIIg?	986		DK49	37	33	39	b	土器片2		
AI?	94		CN61	70	60					
A?	979		DH45					Ⅳ期一括土器	土器2281	住居址77を切る 住居址67内
"	996		DF33							

(2) B型土壌

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土観察	出土遺物	遺物番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
B I a1	118	46	DB53	80	76	16	c	土器片3、剥片1		
"	220	44	DE55	50	48	14	a	土器片9、剥片2	土器2222	
"	254		DF63	73	70	21	a			土壌175に切られる
"	684		CO83	58	54	17	d	石皿1		
"	705	46	" 87	84	72	21	d			
B I b1と2	671		CA55	110	96	28	c	石匙1、炭化物		
B I c1	129		DE57	78	68	58	c	Ⅲ期1、Ⅳ期13、剥片2、屑片5	土器2254	土壌299を切る
"	266		DL54	58	58	56	c			
"	271		DE53	56	48	20	a			
"	272		" 55	72	64	25	a	Ⅲ期1、Ⅳ期9、剥片3		
"	275		DF57	42	42	16	a			
"	548		CN80	88	82	75	c	Ⅱ期1、Ⅲ期1、Ⅳ期3		土壌543に切られる
"	566		CP80	28	26	14	a			
"	631	46	CD93	44	44	36	a			
"	632		"	34	32	25	a			
"	637		CF93	42	34	33	a			土壌630を切る
"	755	46	CG54	80	79	38	c	Ⅳ期3、土器片2		
"	924		CX85	66	64	58	f	Ⅳ期1、Ⅴ期1		土壌923に切られる
"	934	45	CW65	76	64	34	a	石皿1	石器1547	土壌953に切られる
"	232	46	DB54	52	47	50	b	Ⅳ期2、土器片3		
B I c1と2	796		CE50	98	83	54	c	Ⅱ期4、Ⅳ期3、Ⅴ期14、土器片27、石匙1、U-f2、凹石1、炭化物	土器2224 土器2258 # 2251 # 2284 # 2252 # 2286 # 2253 石核1222 # 2256	住居址39内 焼土層あり
"	633	46	" 93	50	50	38	a			
B I c2	131	46	DD58	82	76	56	e	Ⅲ群1、土器片2、石核3、炭化物		
"	201	46	DB53	108	96	32	f	Ⅴ期9、水晶、骨片	土器2243	焼土層あり
"	248		DF56	70	62	59	c	Ⅳ期一括土器、石核1、剥片1	# 2227	
"	544		CN80	46	42	28	a			土壌549と切り合う
"	681		CM81	50	50	20	a	土器2、石鏝1		
"	736		CE53	60	56	36	b			
"	903	46	CW67	91	90	80	a	土器片1、剥片1		
"	946		CV64	80	74	60	a			
B I c3	936		"	102	94	38	a			
B I d1	80		CM60	74	64	30	a	Ⅳ期1、土器片1		
B I d2	754	46	CH54	95	80	25	c	Ⅱ期1		
B I e2	753	46	" 55	106	100	29	c			
B I f1	572	46	CR81	44	38	74	b			
B I g1	852		CF50	56	50	60	c	Ⅲ期1、Ⅳ期3、土器片5、剥片1		住居址39内
"	923		CX65	52	52	67	a	石鏝1		土壌924を切る
B II a1	109	50	DC56	220	158	45	c	Ⅳ期23、石鏝3、S-c1、凹石2	土器2217 # 2218 # 2235	
"	155	47	DG51	60	38	8	a			
"	171		DF61	74	58	20	f			
"	110		DL50	102	74	20	a			
"	556		CN81	86	69	30	a			土壌555を切り、 557に切られる
"	746	47	CF56	130	98	18	a	Ⅱ期6、土器片11、石鏝1、凹石1		
"	967	47	CT67	156	92	28	a			
B II a2	965	47	CG50	95	64	36	a	Ⅳ期19、土器片多数、石鏝2、磨製石斧1、剥片25	土器2233 # 2259	住居址39内
B II b1	797	47	"	112	76	28	c	Ⅲ期31、土器片28、石鏝1、凹石2	土器2232 土器2265 # 2234 石核1232	
"	864	47	CR87	118	60	30	a			
"	989		CU45	76	65	7		Ⅳ期30	土器2269 # 2271	
B II c1	404		CQ68	42	33	33	a			土壌405を切る
"	733		CE53	61	44	24	a	Ⅲ群1		
"	772		BT58	79	60	30	b			
"	878		CN91	94	64	74	d	Ⅱ期4、石核1		土壌876を切る
"	931		CW66	68	58	68	a	土器片1		土壌932と切り合う

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土観察	出土遺物	遺物番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
BIIc1	964		CG49	96	72	40	a	IV期21、土器片多数、石鏝1、U-f1	土器2285 " 2283 石器1365 " 1209	住居址39内
"	968		"	70	40	26		II期4、石鏝2、石皿1、剥片4		
"	973		CV65	78	50	35	a			
BIIc2	233		DC54	86	68	24	a	III期1、土器片8		土壌146と切り合う
"	243		CL53	88	60	56	c	III期2、土器片3、剥片2		
"	515		CO56	92	67	52	b			
"	591	47	CW51	110	86	58	c	IV期5、剥片1		
BIIId1	295		DH61	88	72	58	c	IV期2、凹石1		
"	329		DK56	50	40	24	a	III期2、IV期2、剥片2		
BIIId2	363	47	CN65	74	44	70	c	II期1、土器片2、炭化物		
BIIe1	9		CU64	74	70	42	e	V期1、凹石1		
BIIe1と2	799	47	" 63	194	116	52	a			
BIIe2	928		CT61	84	56	84	c			
BIIIa1	302		CX58	107	72	24	a	IV期1、剥片1		
BIIIc1	805		CU60	64	44	35		III期1、U-f1、石核6	住居址15を切り、 土壌795に切られる	
BIIIId1	332		DH63	70	60	28	c			
BIVe1	606	47	CW50	76	58	38	c	土器片5		
BVa1	639		CF92	114	84	19	f	II期2、剥片1		
BVd2	997		CD49	74	40	54	f			
B Ic?	65		CR57	44	40	22	a			土壌66と切り合う
B I?	192		CM60	48	38					土壌191に切られる
B II?	543		CN79	70	48			II期1		土壌546、548を切る
B?	105		CS61			62	e	V期1		

(3) C型土壌

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土観察	出土遺物	遺物番号	備考	
	番号	図番号		長径	短径	深度					
CIa	46		CK61	70	66	17	a	IV期3、剥片2		半掘	
"	57	47	CT54	72	66	14	a				
"	67		CS57	48	46	10	a				
"	72		CL62	48	46	14	a				
"	116		DA52		86	14	c	IV期2、V期2、石核2、屑片4			
"	141		CQ57	62	62	18	c				
"	158		CY60	52	46	7	c				
"	180		DD64	76	68	17					
"	188					38	c	土器片5、原石1、炭化物(クルミ)			
"	221		DD56	72	66	16	c	IV期2			
"	238		CY62	45	43						
"	264		DJ54	121	115						
"	284	47	BS55	110	108	26	c	III期1、IV期4、土器片32、剥片7、滑石製品	土器2219 石器1719		住居址50を切る
"	304		DJ58	61	58	16	a				
"	311		DM55	113	104	20	a				
"	323	47	DO57	108	92	32	c	II期1、III期2			
"	339		CK57	54	54	16	c				
"	399		CQ66	54	52	8	a				
"	402	47	" 67	96	80	24	c	II期2個体			土器を敷きつめる
"	487		CP54	68	56	13					
"	563		" 80	58	53	17	a				
"	574		CQ80	68	60	12	a				
"	577		CR82	60	55	16	a				
"	590		CW51	52	52	17					
"	672		BT108	(52)		12	a	土器片1			住居址38を切る
"	698		CP83	57	45	13	a				
"	702		" 86	64	60	11					
"	759		CH53	68	65	16	c	II期1、V期1、土器片3、石核2			
"	761		" 50	68	66	20	c	剥片1			土壌909に接する
"	919		CT62	72	66	14					
"	957		CW69	133	124	24	a				
"	988		DJ49	44	40	8	a	土器片4			
"	999	47	CM49	104	100	28	a	IV期4			
"	1003		CQ49	84	76	20	c	土器片10、石鏝1、原石1、剥片2			
"	1004		" 48	110	108	34	e	IV期4、剥片1		土壌1013を切る	
"	1005		CS48	64	62	20	c	III期1、土器片2			
"	1006		CX37	74	72	18	c				
"	1015		DT41	72	60	18	a				
CIb	60		CS54	92	86	6	a	V期1			
"	144		CQ57	76	72	22	c				
"	242		CP54	90	82	18	c	IV期2、土器片6			
"	306	47	DK56	56	55	12	a			土壌307と接する	
"	307	47	"	90	86	17	a			土壌306と接する	

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CIb	308	49	DN55	226	196	18	c	Ⅱ期14、Ⅲ期10、剥片5、炭化物		
"	466		CM72	42	37	14	a			
"	468		"	68	56	22	a			土壌469に切られる
"	496		DJ63	70	58	25	a	土器片2、石鏝1		
"	607		CW51	40	35	12	c	Ⅳ期2		
"	700		CF57	106	92	11	.			
"	873		CN91	90	90	25	d	石匙1		土壌874に切られる
"	877		CT81	44	42	10	d	土器片7		
"	889		CU70	60	51	15	d			
"	905		CW66	65	65	20	c	Ⅱ期1		土壌929に切られる
"	912	47	CU61	84	82	15	a	土器片3、剥片1		
CIc	6		CT55	34	30	28	a			
"	20		CJ64	108	100	26	c	Ⅳ期4、Ⅴ期4、屑片1		
"	25		" 62	141	118	52	e	Ⅳ期6	土器2278	
"	32		CK61	64	54	52	b	Ⅱ期1、Ⅲ群1、凹石1	土器2272	
"	33		CL61	88	80	36	c	Ⅱ期2		土壌185に切られ、186を切る
"	39		CN59	96	92	68	a	Ⅲ群1、土器片2	土器2260	
"	45		CK61	40	34	18				
"	50		CN59	85	72	40	a			土壌49に切られる
"	55		CT55	50	50	22	a			
"	58		CS54	62	58	56	a	Ⅱ期1、土器片3		
"	70		CK62	88	82	15	a	Ⅳ期3、剥片1		土壌26に切られる
"	71		" 63	44	42	26	a			
"	74		"	64	56	44	a			
"	83		CM61	52	46	24	a	土器片2		
"	88	44	" 62	66	66	38	a			土壌89に切られる
"	103		DD62	36	36	25	a	Ⅱ期6、Ⅴ期1、石核2		
"	114		" 53	70	64	58	d	Ⅳ期1、Ⅲ群1、土器片5、屑片2		
"	123		" 55	80	72	48		剥片2		
"	137		DE51	74	70	30	e	凹石1		
"	138		CL57	97	92	42	e	Ⅱ期1、Ⅴ期1、剥片3		
"	146		CO57	90	80	32	f	Ⅴ期1		土壌515に切られる
"	169		DE61	64	56	20	a			
"	186		CL61	46 (44)	14					土壌33に切られる
"	193		CJ55	62	56	44	e	Ⅱ期1、Ⅳ期2、Ⅲ群1、原石1	土器2273	
"	224		CY64	60	52	56	a			
"	227		CX64	56	48	50	a			
"	229		CY64	60	49	46	a			
"	255		DH63	66	58	26	a			
"	262	48	DI62	72	69	26	c	Ⅳ期2		
"	270		DE56	30	28	14	a			
"	285		BQ56	42	40	16	a			
"	286	48	BO59	43	39	16	a			
"	288		BL54	64	54	36	a			
"	293		DJ60	63	54	55	c	Ⅳ期2		土壌231を切る
"	298		CJ56	34	30	22	b	土器片2		
"	299		DE57	80	76	52		土器片4、剥片3		土壌129と切り合う
"	313		DJ56	56	46	52	a			
"	317		DH55	58	56	34	a			
"	333		" 63	(72)	70	30	a	Ⅳ期2、炭化物		土壌334、520に切られる
"	341		CL56	51	50	32	c			
"	344		CP57	78	74	72	d			土壌519を切り、153に切られる
"	348		CL53	43	36	28		Ⅳ期一括土器、剥片4、屑片3		
"	382		CM65	44	42	24	a			
"	389		CO66	40	38	18	a			
"	396		CP67	40	34	39	a			
"	413		CN68	42	40	36	a	炭化物		土壌412を切る
"	417	48	" 69	58	56	36	a			
"	427		" 71	66	48	41	e			
"	429		CO72	40	34	30	a			土壌428を切る
"	467		CM72	68	64	58	a			
"	495		DI63			42	c			半掘
"	498		DJ63	52	44	34	d	土器片2		
"	501		DN61	64	52	21	a			
"	519		CO57	56	54	24	a			土壌344に切られる
"	546		CM79	40	38	22	c			土壌543に切られる
"	547		"	50	42	50	c			
"	554	48	" 81	102	93	63	c	Ⅱ期2		土壌710に切られる
"	559		CO79	72	60	50	c			土壌558を切る
"	564		CP80	52	50	20	a			

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 番号	備考		
	番号	図番号		長径	短径	深度						
C I c	576	48	CR82	60	56	44	c	II期10、IV期一括土器、石核2、屑片10	土器2223			
	604		CN74	48	43	38	e					
	630		CF93	36	32	32	c					
	635		" 94	102	94	42	e					
	638		" 93	54	52	42	e					
	640		"	43	37	40						
	653		CJ90	56	48	34						
	663		CF91	53	47	44	c					
	677		CP77	55	50	20	a					
	678		"	28	25	20	a					
	689		CN73	38	30	22	e				II期1	
	692		CR77	46	44	34	e					土壌693に接する
	693		"	66	66	58	c					土壌692に接する
	695		" 78	36	31	17	a					
	696	" 81				c		土壌575を切る				
	699	CQ84	58	51	42	c						
	704	CO86	70	66	26	c						
	711	CM87	52	52	32	d						
	712	CL87	43	40	20	c						
	730	CD54	56	50	42	a						
	734	CE53	43	42	21	a	土器片4					
	740	CF54	46	45	23	c						
	741	CG55	51	50	36	e	剥片1					
	750	CH56	42	38	16	a						
	758	CG54	80	80	46	a	II期1、III期3、IV期28、V期3、 土器片43、剥片2、炭化物	土器2261 " 2237	土壌764に切られる 土壌763を切る			
	763	CB60	52	50	47	b						
	764	"	58	54	31	a						
	767	CA51	60	50	32	c						
	768	" 50	42	38	35	c						
	806	CN81	46	42	38	a			土壌555を切り、 807に切られる 土壌806を切る			
	807	"	53	46								
	809	CL87	44	44	18	c						
	811	" 88	40	38	36	c						
	812	CK88	58	54	46	e						
	813	CH53	70	68	26	c	IV期一括土器、III群土器2、土器片30、 S-c 1、剥片2、屑片2	石器1226	土壌815と切り合う			
	816	BP102	41	34	30							
	844	BO103	50	48	34	c						
	856	CF50	44	40	22	c	II期1、原石1、剥片1		土壌965に切られる 住居址39内			
	865	CT81	49	42	36	a						
	867	CR87	28	25	24	a						
	872	CQ89	56	50	50	e	II期1					
	875	CM90	66	59	62		"					
	880	CT80	53	50	32	a						
	881	" 79	50	42		a						
	882	CR79	48	44	40	a						
	884	CS78	42	32	30	a						
	885	"	50	48	46	a						
888	CT71	52	46	36	a							
892	CX64	46	44	28	a	IV期2、石鏃1、凹石1		土壌893に切られる				
897	CY66	66	64	58		II期1、IV期4、剥片2、先端研磨石器1		土壌896、927と切り合う				
904	CW66	62	60	48	a	II期1						
906	"	61	56	54	c							
908	" 65	96	86	38	a							
913	CV60	86	78	46	f							
920	CR60	74	68	70	a	炭化物		土壌869、897と切り合う				
927	CY66	66	66	60	a	土器片3		土壌931、933と切り合う				
932	CW67	70	64	60	a	" 1						
939	CT64	80	72	36	a							
944	"	71	66	59	d							
961	CV67	33	33	32	a							
977	DN54	51	48	26	c							
987	DK49	54	50	21	a	II期1、土器片2						
1012	CS45	86	78	30	a	土器片3、屑片3						
1021	BT49	46	39	32	b			住居址32内				
1030	CT58	80	67					住居址15を切る				
1038	CD57	50	47	44	e			住居址56を切る				
C I d	143	CN55	76	70	30	e	V期1、土器片4、石核1		土壌343に切られる			
	172	DG61	54	54	42	c			土壌173に切られる			
	182	BR58	40	40	24	a						
	190	CJ53	60	54	34	c						

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CI d	223		DE58	58	50	45	e	土器片 3、S・c 1		
"	225		DA64	58	46	40	a			
"	231		DJ61	62	56	36	c			土壌293に切られる
"	246		CK58	62	58	23	c	IV期 2		
"	252		CO56	60	58	60	c			
"	280		BQ54	40	38	26	b			
"	281		"		56	34	e			住居址27を切る
"	282		BM59	74	64	31	c			
"	309		DM56	65	65	16	a			
"	322		DQ57	62	56	44	c			
"	324	48	CM58	120	119	114	d	III期 1、IV期10、V期 7、石鏃 1		
"	328		DH63	42	35	16	c	V期 1、III群 1、土器片 2、剥片 1		
"	330		"	72	66	26	a	III期 3、V期 2、石匙 1、炭化物(クルミ)	土器2244 石器1221	土壌331と切り合う
"	338		CK57	40	35	21	c	土器片 1、剥片 1		
"	340		" 56	48	46	21	c			土壌245に切られる
"	342		CM56	58	48	30	c			
"	359		CL67	52	46	18	a			
"	361		CS75	50	44	48	a			
"	422		CK67	62	54	33	a		土器2253	
"	493		DI62	60	50	26	c	V期 1、III群 1		土壌494と接する
"	502		DN61	40	38	18	c			
"	504		DM61	48	42	38	e			
"	595		CM67	50	44	18	e			
"	625		CF62	82	79	70	d	II期 2、凹石 1、剥片 2、粘土塊 3		
"	627		CB62	69	65	35	c	剥片 1		
"	648		CH91	34	30	30	a			
"	658		CI91	54	46	30	a			
"	709		CN90	76	64	60	c			
"	743		CG56	65	56	30	c	IV期 4、石鏃 1	石器1217	
"	744		CF56	68	68	32	d	II期 1、IV期 3、S・c 1	石器1224	
"	850		" 50	46	43	35	e	IV期 4		住居址39内、 土壌853に切られる
"	866		CR87	46	42	18	a			
"	869		" 89	65	56	24	c			
"	871		CQ88	42	36	30	a	土器片 1		
"	887		CS73	50	45	22	a			
"	910		CT61	110	90	30	c	IV期 1		
"	914		CW59	48	43	23	a			
"	916		" 57	66	62	30	c			
"	942		CU64	54	53	23	a			
"	966		CF49			36	e	V期 1、土器片 4、剥片 2		住居址39内
"	1002		CP48	86	86	59	a	III期 1、IV期 3、剥片 3		
"	1007		DF32	74		28	c			
"	1008	48	CS46	88	88	58	a	III期 1、土器片17、石鏃 1、炭化物	石器1215	
CI e	54		CT54	84	70	42	a			
"	73		CM61	44	44	10	c			
"	84		CO60	80	78	36	e			
"	85		CN59	65	56	26	f			
"	92		CO61	56	48	26	a			
"	93		" 62	56	52	40	e			
"	95		CN60	56	56	18	a			
"	99		CR63	40	30					
"	125	49	DC56	102	92	46	c			
"	126		DA57	114	100	30	f	土器片 2		
"	140		CN56	66	60	40	c	II期 1		土壌326に接する
"	178		DD63	60	56	28	c			
"	195		CL58	98	90	42	e	石鏃 1、V期 3	石器1218	
"	205		CV63	74	64	68	a			
"	218		DB59	86	84	22		原石 1、剥片 1、屑片 1		
"	222		CY56	84	66	52	d	土器片 4		半掘
"	253		CJ56	70	64	39	c	II期 1、屑片 2		
"	294		DI60	94	88	68	c	V期 1、土器片 2、原石 3、屑片 2	土器2249	
"	358		CK67	42	32	30	a	土器片 1		
"	482		CM56	80	70	36	f			
"	541		" 77	46	28	34	c			土壌542と切り合う
"	586		CS53	76	76	50	b			
"	598		CN67	69	60	50	c	IV期 1、炭化物		
"	739		CF54	81	78	29	c	IV期 6、土器片 9		
"	742		CG55	59	58	20	c			
"	752		CH55	48	43	35	c	土器片 2		
"	810		CL87	64	60	36	c			

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
C I e	896		CY66	98	86	64	e			土壌897と切り合う
"	976	49	CK54	106	94	38	a			集石74の下
"	1000		CN49	78	72	23	c	IV期3、剥片1		
"	1001		CO48	74	70	40	e	II期3、土器片6、剥片3		
"	1010		CQ47	72	72	26	a			
"	1013		CR48	86	76	38	c	石匙1		土壌1004に切られる
C I f	12		CM64	54	50	60	b	土器片4、炭化物		
"	31		CL62	53	50	68	c	II期6、剥片3		
"	128		CT57	58	52	78				
"	187		CN60	50	38	52	a			土壌37を切る
"	540		CM77	37	34	50	c			
"	565	48	CP80	40	40	64	c			
"	636		CG94	52	52	59	b	II期6		
"	662	48	CH94	54	52	84	b			
"	674		CO78	41	37	41	c			
"	676		CP78	38	36	52	c			
"	710	48	CM81	50	48	51	d	II期3、剥片4		土壌554を切る
"	814	48	CH54	48	44	70	a			
"	820		BP102	32	32	33	c			
"	929		CW66	38	32	58	a			
"	930		"	42	40	62	a			土壌905を切り、 930と切り合う
"	1039		CM52	38	34	48				土壌929と切り合う 住居址25を切る 土壌48を切る
C I g	69		CN62	57	50	85	b			
"	142		"	70	58	86	c	IV期1、土器片5		
"	153		CP57	50	52	56	c			土壌344を切る
"	156		DH51	38	34	76	a	V期2		
"	185		CL61	50	44	52	a			土壌33を切る
"	228		CY64	42	38	52	a			
"	303	49	DH58	55	48	56	c	土器片5、石鏃1	石器1214	
"	360		CL69	44	42	44	a			
"	407		CP69	37	36	41		II期1、剥片1		土壌406と切り合う
"	421		CK69	56	55	62	d	土器片1		
"	425		CN71	44	38	58	b	IV期2、V期1	石器2246	
"	480	48	" 73	58	54	80	b	II期1、剥片1		
"	597		CK70	62	50	79	b	IV期2、石核1		
"	605		CW51	41	38	56	b	土器片5、石核1		
"	642		CG92	40	35	50	b			
"	644		"	50	48	64	b			
"	645	48	CH92	50	50	71	b			
"	646		"	57	48	70	b			
"	647		" 91	54	44	58	b			
"	651		" 90	28	28	30	b			
"	654		" 93	47	43	58	b			
"	685		CN76	36	34	41	a			
"	688		CL73	(44)		49	d			半掘
"	690		CN72	32	31	36	a	II期2、屑片1		
"	765	48	CA61	64	61	70	e	剥片1		
"	817		BP102	37	36	59				
"	821		BQ102	60	50	60	a			
"	829		BP103	52	42	57	c			
"	853		CF50	66	61	88	c	II期2、IV期8、石鏃1、U-f1		住居址39内、土壌850を切る
"	876		CN91	66	56	78	b	II期6、石核2、剥片1、屑片1		土壌878に切られる 住居址69と切り合う
"	883		CR78	38	34	44	a			
"	900		CW66	26	23	32	a			土壌899に切られる
"	917		" 54	46	36	68	a			
"	925		CX65	52	49	60	a			土壌926を切る
"	952		CS66	40	37	46	a	II期4、V期1		
"	970		CF50	37	36	40		土器片1、原石1		
C I ?	1		CR64	40	32					
"	61		CS57	32	28			石鏃2	石器1210	
"	62		" 56	32	30					
"	76		CR57	44	42			凹石1		
"	81		CP61	34	32					
"	98		CR63	28	26					
"	113		CL61	56	46					
"	124		BU56	68	64					
"	151		CQ55	58	52					
"	191		CM60	44	40					土壌192を切る
"	512		DM63	40	38					
"	691		CN78	36	36					

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CI?	706		CP87							
"	707		"							
CIIa	2		CQ64	96		22	c			
"	4		CO64	111	76	14	a	IV期一括土器、凹石1		
"	7	49	CN63	114	78	16	a			
"	8		" 64	104	78	10	a			
"	28		CI60	94	66	12	a	IV期同一個体、P-e1	土器2216 " 2280 石器1236	
"	37		CN60	72	52	20	a	III群1、土器片2、剥片1	土壌187に切られる	
"	38		CL60	106	84	22	d	II期2、剥片1、屑片1		
"	40		CT58	140	90	14	a	IV期一括土器		
"	43		" 57	72	52	18	d			
"	44		CM59	118	68	8	a			
"	48		CN62	158	86	34	a	土器片1	土壌69に切られる	
"	59		CT54	70	36	10	a			
"	64		CU56	144	106	22	a	IV期2		
"	68	46	" 55	78	54	20	c			
"	96		CR63	132	108	28	c	石匙1	住居址14内	
"	139		CJ62		60	12	a		土壌26に切られる	
"	157		DA61	48	36	6	a			
"	160		DB60	50	35	6	a			
"	163		DA63	62	50	15	a			
"	166		DD62	62	46	21	a			
"	176	49	"	106	86	10	a			
"	177		" 63	82	64	14	a			
"	184	49	BP60	98	70	28	b			
"	196		CK58	118	96	22	e	V期1		
"	199		CO55	120	92	40	d			
"	212		CW61	86	44	11	a			
"	213		CX61	65	52	12	c			
"	216		CY60	72	56	9	a			
"	217		" 61	78	52	9	a			
"	219		DE58	100	64	22	c	土器片15、滑石製品1、屑片3		
"	269		DM56	110	80	28	c	IV期4、V期2、石鏝3、石匙1	石器1220	
"	276		BP57	70	46	20	d		土壌268に切られる	
"	290		BN56							
"	300	44	DE58							
"	331		DH63	74	42	20	a	炭化物(クルミ)	土壌330と切り合う	
"	346	49	CK54	130	100	28	a	IV期一括土器、III群1、石核1		
"	347		" 55	98	74	20	c			
"	351	49	CS75	106	78	22	c		上面に焼土	
"	392		CO67	66	48	12	a			
"	401		CR67				a			
"	405		CQ68	46	40				土壌404に切られる	
"	406		CP69	40 (22)	10				土壌407と切り合う	
"	499		DN62	(64)	20		a	炭化物	半掘	
"	500		DO62	102	65	22		III期一括土器	土器2276	
"	506		DL63	90	69	8	a			
"	575		CR81	56	40	12	c		土壌696に切られる	
"	708		CO88	80	66	22	c			
"	729	49	CD54	118	85	26	d	II期10、石鏝2、石匙2、U-f1、凹石1	石器1219 " 1216 " 1223	
"	737		CE52	85	64	20	a	剥片2、屑片1		
"	747	49	CH58	94	68	18	c	IV期1、V期1		
"	891	49	CR68	142	106	22	c	II期1、IV期一括土器	土器2226 " 2231	
"	958		CU68	166	80	34	b	土器片8	列石下、土壌959を切る	
"	959		"		100	26	b	" 2	列石下、土壌959に切られる	
"	1014		DT41	146	96	20	d			
"	1031		EN59						住居址7を切る	
"	1032		EL58	78	64				住居址7内	
CIIb	18		CK63	164	80	22	a			
"	36		CM61	86	44	18	a		土壌35と切り合う	
"	47		" 62	84	58	14	a			
"	56		CU55	104	86	8	d			
"	161		DB61	51	40	20	a	土器片1		
"	197	49	CK59	136	100	32	c	IV期5、III群1	土器2268 " 2225	
"	336		DQ60	140	98	16	a	III期1	土器2214	
"	337		DA62	96	76	32	c	IV期6	土壌162を切る	
"	539		CM77	58	41	12	a			
"	679		" 80	98	72	26	c		土壌680に切られる	
"	701		CQ86	72	60					
"	823		BN103	146		38	c	土器片1	半掘	



分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CIIb	911		CU61	110	74	11	a	IV期一括土器、P.e1		
"	926		CX65	72	35	16	a			土壌925に切られる
"	971		CU66	58	44					
"	975		CX68	163	102	24	a			
"	995		CE48	116	76	22	c	IV期2、凹石1		
CIIc	14	50	CL65	58	40	52	d	II期3		
"	27		CJ62	112	82	60	e	IV期2		
"	42		CK61	58	38	20				
"	86		CO59	56	40	34	f			
"	89	44	CM62	86	60	50	a			土壌87、88を切る
"	111	49	DK51	155	118	52	c	II期6、石核1、原石2、屑片5、炭化物		
"	119		CL63	42	36	20	c			
"	134		CH61	58	48	26				
"	135		"	56	42	26				
"	256		DG63	76	60	22	a	V期1、土器片3		
"	261	49	DI63	84	58	50		III期5		
"	268		DM55	70	52	40	a	土器片1		土壌269を切る
"	277		BQ58	64	52	34	a			
"	283		BT54	98	82					住居址50と切り合う
"	287		BM58	104	60	31	c			
"	289		BL57	60	48	28	a			
"	321		DI62	90	72	46	c			上面に集石114がかかる
"	325		DF59	66	56	40	a	III期2、IV期2、土器片8		
"	326		CN56	66	52	24	a			土壌140に接する
"	350		DB62				d	土器片1		土壌349を切る
"	354		CS75	42	34	40	a			
"	403		CR68	44	34	22	a			
"	416		CN69	60	40	50	a	剥片2		
"	420		CM71	64	48	56	a	" 1		
"	423		CL70	44	32	26	b			
"	428		CO72	50	26	20	a			土壌429に切られる
"	430		CL71	88	41	30	a	IV期1		
"	463		"	60	32	26	a	U-f1		土壌461に切られる
"	465		CM72	38	30	30	a			
"	470		" 73	46	34	16	a			土壌471に切られる
"	471		"	48	32	16	c			土壌470を切る
"	472		CL72	48	34	28	a			
"	477		" 73	52	36	17	a			
"	478		"	53	32	25	c	II期1、III期1		
"	497		DJ63	74	50	38	c			
"	508		DL63	60	42	28	e			
"	513		DM63	50	40	30	c			
"	514		DK63	60	44	23	c			
"	558		CO79	80	61	50	d			土壌559に切られる
"	634		CF93	54	45	30	b			
"	656		CG93	56	44	40	f			
"	657		CI92	84	69	29	a			
"	675		CP78	47	38	30	e			
"	686		CN76	36	26	21	a			
"	694		CR77	54	32	34				
"	703		CO84	68	54	26	c			
"	766		CC52	44	37					
"	776		BX62	168	116					方形柱列IXと切り合う
"	779		CQ76	41	30	40	c			
"	780		CT59	130	110			II期7、IV期6、土器片16、剥片3	土器2238	住居址15内
"	794		CU60	74	48					住居址15内、 土壌795に切られる
"	798		" 63	64	45	60	a			
"	907	49	CW65	70	56	58	a	II期1、IV期2		
"	933		" 67	53	40	36	a			土壌932を切る
"	935		" 64	86	48	44	a	凹石		
"	938		CV65	78	56	36	a			
"	1019		CF48	62	32	50	e			
CIIId	175		DF63	66	54	42	a			土壌254を切る
"	236		CV52	74	58	26	e			
"	251		CX58		60	50	c	V期浅鉢1		半掘
"	297		CJ56	79	62	44	c	V期1		
"	409		CD67	49	38	47	a	II期1		
"	426		CN71	52	39	28	a	土器片1		
"	469		CM72	58	42	32	a			土壌468を切る
"	479		CN73	50	40	37	b			

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CII d	505	50	DL62	57	46	47	e			
"	507		DK63	68	53	49	d	炭化物		
"	589		CU51	59	40					
"	592		CX50	56	40	20	e			
"	593		CX50	70	56	38	c			
"	600		CM73	52	38	18	a			
"	649		CH91	46	32	30	c			
"	655		CI91	97	62	39	d	II期2、土器片2、剥片1		
"	687		CO72	42	30	23	e	土器片1		
"	751		CH56	58	48	27	c	原石1		
"	862	49	CG51	70	52	28	c	V期4、土器片9、剥片2		焼土層をもつ
"	868		CR88	38	30	15	a			
"	870		CQ88	82	44	38	d		土器2248	土壌900を切る
"	899		CX66	42	32	24	c			
"	915		" 57	54	43	34	c			
"	980		CI46	70	49	57	c	土器片7	土器2270	住居址70内
"	1009		CL49	62	52	28	a			
CII e	148		CP56	76	54					
"	152		CQ55	50	40	48				
"	174		BS57	76	60	34	f			
"	179		DE63	66	50					
"	181	50	BR58	78	52	62	b			
"	203		CW64	98	72	64	c			
"	204		CV64	84	62	50				
"	244	50	CM53	82	52	36	a	II期1、屑片1		
"	265	50	DK54	123	104	84	c	III期2、IV期8、P-e1、剥片5		
"	327		DF58	74	48	34	a			
"	349		DB62	86	67	45	d	IV期1		土壌350に切られる
"	516		CO56	62	48	55	b			
"	599		CM74	48	36	51				
"	748		CH58	94	64	26	b	II期1、V期1、凹石1		
"	874		CO91	151	63	104	e	II期2、土器片3、屑片1		土壌873を切る
"	909	50	CT61	140	98	110	d	II期1、IV期1、剥片1		土壌919に接する
"	960		CV70	133	100	68	c	V期1、石匙1		列石下
"	1017		CG48		52		c			
CII f	260		DI63	49	38	68	a	II期1、III期1、石鏝2		土壌259に接する
CII g	147		CO56	44	34	72	c	IV期1		
"	312		DG62	58	38	68	a			
"	398		CQ66	37	28	40	c	土器片1、屑片1		
"	557		CN81	40	31	42	a			土壌556を切る
"	650		CH90	48	36					
"	756		" 55	48	40	68	a	砥石1	石器1570	
"	757		CG55	60	43	62	d			
"	815		BP102	54	42	78	e			土壌816と切り合う
"	827	50	BO103	80	58	80	a			
CII h	79		CI63	76	40	50	a			
CII ?	52		CS56	72	54					
"	53		"	140	64					
"	77		CR56	42	32					
"	97		" 63	52	40					
"	211		CW60							
"	473		CL72			74	c	土器片2、石鏝1、P-e1、剥片2		半掘
"	511		DM63	66						半掘
"	669		CG94	58	40			II期4		
"	978		CY68							半掘
CIII a	34		CN61	148	96	40	c	V期1		
"	78		CJ65	108	62	30	a			
"	165		DC62	66	54	16	a			
"	209		CX61	62	50	18	a		土器2282	
"	278		BP53	94	70	18	b			
"	489	50	CQ54	78	54	20	a	V期1		
"	490		CP55	90	56	10	a	屑片1		
"	494		DJ62	66	46	10	a			土壌493と接する
"	890	50	CT68	138	80	26	c	IV期1、土器片2、剥片1		
"	951		CS65	35	34					
CIII b	434		DA61	108	64	10	a	土器片1		
"	587		CT52	74	60	18	c			
CIII c	49		CR59	72	60	30	a			土壌50を切る
"	257		DG63		84	48	c			半掘
"	263		DH62	78	62	24	c			

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
CIIIc	315	45	DG61	62	46	20	a			土壌314に切られる
"	318		DH56	61	54	18	a			
"	641		CF91	50	38					
"	643		CG92	53	38					
"	652		CH91	64	35	24	d			
"	792		CU59	68	50			II期2、凹石1、石核2、剥片3	土器2230	住居址15内
"	937		CV65	68	56	56	a			
"	940	50	CU65	52	52	44	a			
CIII d	596		CM67	44	34	18	a			
"	659	50	CK91	94	72	36	c			
"	661		CL91	100	100	40	e			
"	735		CF53	42	42	27	c			
"	774		BT60	78	64	30	e	土器片7、剥片2		
CIII e	106		CS61	48	34	20	a			
"	121		DA54	90	68	34	f	土器片1、剥片1、屑片2		
"	259		DI63	44	40	42	c	IV期1		土壌260に接する
"	316		DG54	66	50	32	a	III期1、土器片2、剥片1		
"	886		CS73	74	68	22	a			
CIII g	603		CM75	56	45	68	a	II期2		
"	760		CH52	52	48	56	c	土器片2、石鏃1	石器1213	
CIII ?	41		CS58	82	54		a			
CIV a	167	50	DD60	152	54	28	c			
"	208	50	CW62	94	64	10	a			
"	215		CY61	80	50	8	a			
"	237		# 62	54	32					
CIV b	291		BJ58	194	136	36	f	II期7		
"	310	50	DL56	153	88	34	f	IV期3、剥片3	土器2241	
CIV d	356		CL68	64	44	40	c	炭化物		
"	602		# 74	56	42	32	a	II期1、剥片1、屑片1		
CIV e	362		# 66	52	40	52		III期1、IV期1		
"	571		CQ80	60	36	26	a			
"	893		CX65	113	64	57	a	V期浅鉢4、石核1		土壌892に切られる
CIV ?	207		CW63	114	52	26	a			
CV a	159		DB60	70	62	10	a			
"	393		CP66	42	42	10	a			
"	956		CW69	152	104	21	a	土器片5		
CV b	104		CR62	47	24	15	a			
"	162		DA62	64	56	14	a			土壌337に切られる
"	412		CN68	76	66	7	a			土壌413に切られる
CV c	3		CT55	34	24	16	a			
"	10		#	36	26	15	a			
"	30		CK62	82	68	42	b			
"	51		CR57	72	64	30	f			
"	108		CM64	58	56	36	e	III期1、土器片3、屑片1		
"	601		# 74	46	36	16	a			
"	738		CD52	72	60	37	c			
"	945		CT66	142	106	52		土器片4、凹石1		列石下
"	1035		EC38	98	70	76	a			住居址42内
CV d	164		DB63	64	58	24	c			
"	588		CT51	58	49	27	c			
"	749		CH56	80	60	37	c	IV期5、V期1、剥片3		
"	998		CD49	84	58	44	e			
CV e	16		CK64	40	36	36	a	II期1		
"	75		CR57	84	66	34	f			
"	91		CO60	72	58	48	e	IV期1、石皿1		
"	112		DG50	104	26	76	a			
"	120		DB54	116	110	42	a	III期1、土器片12、石核1		
"	127	50	# 57	128	96	40		III期1、原石1、屑片2		
"	245		CK57	160	96	18		II期4、III期2、IV期3、V期5	土器2257	土壌340を切る
"	594		CM67	90	54	46	a	IV期3		
"	921		CR60	178	82	105	c	III期2、IV期7、石核3	土器2215	
"	941		CS64	84		58				
"	1018		CG48				d			
CV ?	5		CB57							
"	149		CP56	52	40					
"	790		CT58					II期4、有執頭磨1、石核1	石器1333	住居址15を切る
C ?	210		CV61							
"	226		DA64							半掘
"	509		DL63							土壌510を切る、半掘
"	510		DM63							土壌509に切られる、半掘

分類	遺構		位置	規模 (cm)			埋土 観察	出土遺物	遺物 図番号	備考
	番号	図番号		長径	短径	深度				
C?	520		DH63	60						土壇333を切り 土壇520に切られる
"	775		BX62							方形柱列IXと切り合う
"	954		CT65					石核1、屑片1		列石下
"	955		"					Ⅱ期3、Ⅳ期2、Ⅴ期1、剥片10		"
"	962		CV67	52			a			半掘
"	963		"	82			e			"
"	972		CU68	40			a	完形浅鉢	土器2288	列石下
"	974		" 67	21				Ⅱ期2、Ⅴ期1、石核1	土器2211	"
"	984									欠番
"	990		CH48	52				Ⅱ期1、Ⅲ期3、Ⅳ期9、Ⅴ期2		住居址71内、上面に集石320
"	1016		" 49							
"	1020		CG49				c			
BIIb	1023		FO39	163	86	13				住居址22内、 土壇1022に切られる
CIa	1024		FN38	94	92	12				住居址22内、土壇1026を切る
"	1026		"	( 94) 8						" 土壇1024に切られる
CIIa	1025		"							住居址22内、土壇1026を切る
"	1028		FY53							住居址1内、土壇1029を切る
"	1029		" 52							住居址1内、 土壇1028に切られる
"	1033		ES52							
CIIb	1037		FP35				c			住居址18内
CIIh	100		FB51	106	72	46	d	剥片1、石皿1		住居址1内
CIIIa	1022		FO39							住居址22内、土壇1023を切る
CVa	1034		FM43	144	78					住居址2内
CVb	1036		FP34							住居址18内
CIIc	1040		" 39							

別表4 方形柱列掘り方・土壌対比表

遺構 番号	掘り方 番号	旧土壌 番号	規模 cm			柱痕跡 径 cm	埋土 (主体となる土層)	遺構 番号	掘り方 番号	旧土壌 番号	規模 cm			柱痕跡 径 cm	埋土 (主体となる土層)	遺構 番号	掘り方 番号	旧土壌 番号	規模 cm			柱痕跡 径 cm	埋土 (主体となる土層)	
			長径	短径	深さ						長径	短径	深さ						長径	短径	深さ			
I	2	23	(110)	95	60	(30)	ロームブロック多	IV	14	528	54	40	85	ロームブロック	XII	5	488	78	72	87	ロームブロック多			
	3	22	117	96	60		ローム粒少		15	527	62	(58)	62	ローム粒少		6	145	201	113	111	"			
	4	24	98	123	71		ロームブロック多		16	526	65	48	90	"		XIII	2	433	31	28	53(15)			
	5	19	120	105	111		"		Y	1	615	120	(110)	125			(32)		ロームブロック	3	45		35	64(25)
	6	21	113	98	57		ローム粒少			2	616	124	98	140			(25)		"	4	37		32	32
	7	17	120	86	52		ロームブロック多			3	617	110	110	104			(18)		ロームブロック多	5	57		34	62
	8	15	105	85	52		ロームブロック			4	619	90	90	126			(20)		"	6	45		42	68
	9	355	113	102	59		"			5	621	100	99	102			(22)		"	7	56		40	49
	10	353	102	83	45		ローム粒少			6	622	83	66	(80)			ロームブロック		8	33	32		22	
	11	352	91	77	93		ロームブロック多			7	623	85	76	(70)			(31)		ローム粒少	土壌				
											8	618	104	89		65	(12)	ロームブロック	a	1	83	70	50	
II	1	364	81	73	83	ローム粒少	9	609	122	100	105	(19)	"	2	800	70	65	65						
	2	381	78	77	71	ロームブロック多	10	610	120	101	123	ロームブロック多	3	799	85	50	52							
	3	380	78	78	73	"	11	611	122	86	140	(14)	ロームブロック	4	798	65	45	60						
	4	379	77	69	71	"	12	612	117	100	106	ローム粒少	5	205	75	65	45							
	5	378	69	67	66	ローム粒少	14	620	132	96	70	ロームブロック	6	204	75	65	50							
	6	376	45	36	34	"	15	613	118	106	78	"	7	203	105	85	60							
	7	374	48	40	62	ロームブロック	16	614	114	105	97	"	8	946	80	75	60							
	8	373	62	57	55	"	VI	1	724	106	97	112	23	ロームブロック	9	937	70	55	55					
	9	372	71	52	54	"		2	860	69	65	(97)	17	ロームブロック多	10	938	80	60	35					
	10	375	59	40	26	"		3	859	64	61	(100)	"	12	940	55	50	45						
	11	371	82	73	31	ロームブロック密		4	858	65	64	(104)	"	13	939	80	70	35						
	12	370	75	67	75	ロームブロック		5	857	85	62	(100)	"	14	944	65	60	60						
	13	369	69	67	73	"		7	854	77	62	83	ローム粒多	b	1	409	50	40	52	(7)				
	14	368	86	77	61	"		8	728	79	71	82	ロームブロック		2	396	42	32	38					
	15	367	98	66	75	ロームブロック多		9	713	84	74	103	23		3	398	35	28	40					
	16	366	76	65	72	ローム粒少	10	718	95	81	101	ロームブロック多	4		403	43	35	22						
	17	377	57	41	78	"	11	717	92	78	136	27	5		404	65	42	34						
							12	719	89	79	106	31	6		405	55	40	30						
III	1	435	115	98	74	ロームブロック多	13	720	80	73	102	(23)	ロームブロック多	c	1	815	53	40	77					
	2	436	108	103	78	"	14	721	81	71	77	(33)	"		2	817	35	35	62					
	3	437	108	110	82	"	15	722	86	83	83	ロームブロック	3		820	32	32	34						
	4	<sup>438</sup> 439	142	110	84	(32)	ロームブロック密	16	723	77	67	82	ローム粒多		4	821	60	50	60					
	5	440	145	117	70	(22)	ロームブロック多	VII	5	697	77	65	80		ロームブロック	6	829	55	43		57			
	6	441	136	125	90	ロームブロック	6		664	82	72	80	"		7	827	80	60	80					
	7	460	140	113	103	ロームブロック多	7		665	79	75	78	(25)	"	8	844	50	47	32					
	8	442	100	103	ロームブロック	8	666		84	70	66	ロームブロック多	9	816	40	33								
	9	443	120	50	105	ローム粒少	9		667	105	80	74	ローム粒少											
	10	444	112	103	100	ロームブロック多	11		808	55	(80)	"												
	11	459	110	107	80	"	VIII		2	725	106	95	115	ロームブロック多										
	12	445	95	80	ローム粒少	3			726	99	89	104	(30× 20)	"										
	13	445	90	79	ロームブロック多	4		727	103	71	111	(20)	"											
	14	458	110	110	80	"		5	863	62	53	50	ローム粒少											
	15	457	121	100	75	ロームブロック多		6	—	42	35	(100)	"											
	16	454	90	68	"	7		857	(55)(45)(100)	ロームブロック多														
	17	455	78	72	ロームブロック	8		858	(55)(45)(100)	"														
	18	481	100	90	70	ロームブロック多		10	861	92	75	(100)	23	"										
	19	446	125	98	80 <sup>以上</sup>	"		IX	1	—	(105)	(105)	(22)	ロームブロック多										
	20	456	35	ロームブロック多	2	—			100	"														
21	453-A	68	53	52	ロームブロック	X	1	357	100	105	ローム粒多													
22	453-B	70	41	ローム粒少	2		<sup>418</sup> 419	195	105	124	ロームブロック多													
23	452	90	80	30	ロームブロック多		3	424	146	114	81	"												
24	451	56	39	40	ローム粒少		4	<sup>462</sup> 464	173	130	104	"												
25	447	118	92	26	ロームブロック多		5	474	130	128	89	"												
26	450	92	92	66	"		6	476	70	ロームブロック密														
27	448	145	100	83	"	XI	1	<sup>550</sup> 553	306	146	148	ロームブロック多												
28	449	92	(80)	ロームブロック密	2		<sup>560</sup> 562	243	145	97	"													
IV	1	525	97	93	115		ロームブロック多	3	<sup>569</sup> 568 777 778	220	140	113	"											
	2	524	93	90	118		"	4	<sup>582</sup> 584	282	152	130	"											
	3	523	103	100	116		"	XII	1	<sup>200</sup> 518	254	115	76	ロームブロック多										
	4	522	85	78	133		"		2	<sup>492</sup> 183	192	106	102	"										
	5	521	90	73	122		"		3	<sup>483</sup> 484	210	115	106	ロームブロック										
	6	537	50	43	93		ローム粒少		4	<sup>241</sup> 491														
	7	536	68	53	100		ロームブロック多																	
	8	535	53	50	105		"																	
	9	534	92	72	140		"																	
	10	<sup>523</sup> 533	85	<sup>110</sup> 130	26		"																	
	11	531	88	<sup>183</sup> 132	20		"																	
	12	530	98	<sup>115</sup> 133	45	"																		
	13	529	95	<sup>63</sup> 123		"																		

#### 阿久遺跡石器一覧表について

- 1 住居址、集石、土壌内出土の石器は遺構別に、グリット出土の石器は器種別に記載した。さらに、住居址分については所属時期毎にまとめて記載した。ただし住居址 13 と住居址 55 はこの限りでない。
- 2 器種名の略語は次のように示されている。  
スクレイパー→Sc、ピース・エスキュー→P・e、横刃型石器→横刃、有抉頭磨石器→有抉頭磨、使用痕のある剝片→U・f、先端研磨石器→先端研磨、円礫状石器→円礫
- 3 登録番号は、遺構内出土の石器については、遺構別に遺物全点に付された通し番号である。これは保管している図と照合することで出土位置を確認できる。また、グリット出土の石器については、調査時に石器として通し番号を付された分(4310 まで)は保管しているカードで出土位置を確認できる。整理の段階で認定したものは順次通し番号を付した。これらは出土グリットと層位の記録がある。
- 4 一覧表の器種名で打製石斧には横刃型石器、凹石には特殊磨石をも含めている。
- 5 破損や未加工のため型式の不明な部分は一とし、推測可能な部分は( )でかこんだ。
- 6 計測値はいずれも誤差を含んでいる。石皿の長さで±0.5 cm、重さで±50 g 位を最大に、石鏃の長さで±0.5 mm、重さで±0.05 g 位まで、器種により若干精度が異なる。  
・長さ・幅・厚さはmm単位で表記しているが打製石斧、横刃型石器、磨製石斧、凹石、石皿に限りcmを単位としている。したがって同一の表中であっても単位の異なることを承知されたい。重さはすべてgを単位としている。( )内は破損品の残存値である。  
なお、刃部の長さ、刃角、つまみ角の計測値は記載の余裕がなかったが、保管している台帳に記録してある。
- 7 石質は次のように記号化した。  
黒曜石→ob、チャート→ch、頁岩(珪質頁岩を含む)→sh、変質流紋岩→Ry、安山岩→An、輝石安山岩AA、花崗岩→Gr、花崗閃緑岩→Gd、閃緑岩→D・p、石英閃緑岩→Q・d、緑色片岩→Gs、輝緑岩→di、蛇紋岩→Sp、カンラン岩→ol、泥岩→ms、砂岩→ss、粘板岩→cs、滑石→ta
- 8 破損状況は備考に記した。完形品及び明確に判断できないものは記載していない。なおピース・エスキューにおける「下端欠」は階段状剝離の一辺が欠損していることを表わすのみである。
- 9 なお、一覧表にはグリット出土の使用痕のある剝片および破損のいちじるしい凹石は記載していない。固定式石皿は本文中に記載がある。
- 10 器種等の判断については統一を計ったが、なお、若干の相違を残している。
- 11 本文中の数値・記載と相違した場合は、一覧表の数値・記載によられたい。

別表5 石器集計表

(1) 住居址出土石器

II-a 期

住居址 No.	石 鏃	扶 入 刺 突 具	石 匙	スクレ イバー	石 錐	P・e	有 類 扶 磨	U・f	石核状 石 器	打石斧 横 刃	磨 石	製 斧	凹 石	石 皿	先 端 磨 擦	そ の 他	計	備 考	
25 住	12			3	2	8		39			1		9	1			75		
26 住	28		5	8	4	12	2	34						1(1)			94	1/2未掘	
28 住	1	2	3					7			2		1	1(1)		瑠状耳飾1	18		
32 住	24		3	19	11	10	1	58	3				1	1(1)			131		
36 住	4		4	7	3	8		28		1	1		3	1			60		
39 住	45		2	11	7	8	1	24	1		1		9			尖頭状石器1	110		
48 住	6		1	6	3	1		8			1			1			27		
54 住	28	1	4	13	9	12	1	79					7	4(1)	2	尖頭状石器1 円礫2	163		
55 住	27		5	15	3	27	2	74	1	1	1		15	4(2)	1	尖頭状石器1 敲打器1	178		
57 住	2		1	3		7		8	1		1		4			小玉1	28		
64 住	17	2	7	30	7	18	6	25	7		1		11	2(1)	1	円礫1	135		
78 住	1	1	1	2				4										9	
80 住	13	1	2	4	3	3		23	1	1			1		1	複数扶入1	54	1/2未掘	
計	208	7	38	121	52	114	13	411	14	3	9		61	16(7)	5	10	1,082		
平均	16.7	0.6	3.0	9.7	4.2	9.1	1.0	33.0	1.1	0.2	0.7		4.9	1.3(0.6)	0.4		86.8	12.47で除する (13-1/2-1/2)	

II-b 期

15 住	7		2	6	2	5	3	21			3		6	2(1)		瑠状耳飾1	58	
24 住	17		5	3	5	19		27			1		5	4(3)	1		87	
29 住	7	1		7	1	3	2	24					3				48	
30 住	23		8	14	7	26	10	32		1	1		3	2(2)			127	
31 住	15		1	3	2	12		12								小玉1	46	1/2未掘
40 住	48		9	19	17	34	4	104		3			17	3(1)	1	滑石未製品2	261	
44 住	8		2	4	3	8	2	7					11				45	
53 住	10			9	3	7	3	28	1				9			円礫2	72	
65 住	2			2	2	3		25					2	1			37	1/2未掘
69 住	24		5	18	8	60	3	150		2			14		1	瑠状耳飾1	286	1/2未掘
71 住	22		3	9	7	35		21	4		1		3	1(1)			106	
計	183	1	35	94	57	212	27	451	5	6	6		73	13(8)	3	7	1,173	
平均	20.0	0.1	3.8	10.3	6.2	23.2	3.0	49.3	0.5	0.7	0.7		8.0	1.4(0.9)	0.3		128.4	9.13で除する (11-1/2-1/2)

II-c 期

37 住	26		7	9	12	10	4	70					13		2	尖頭状石器1	154	1/2未掘
56 住	7		2	6	4	24		68					4				115	
63 住	3		1	9	1	7	1	25	1		1		4			円礫1	54	
68 住	1			3		2	1	8					10				25	1/2未掘
計	37		10	27	17	43	6	171	1		1		31		2	2	348	
平均	11.2		3.0	8.2	5.2	13.0	1.8	51.8	0.3		0.3		9.4		0.6		105.5	3.3で除する (4-1/2-1/2)

III 期

4 住	1																1	
12 住	12		2	8	3	7		55	1				11				99	
13 住													1				1	1/2未掘
27 住	2			1		1		2					1				8	
33 住	12		2	8	1	6	1	19					3				54	

住居址 No.	石 鏃	抉 入 刺 突 具	石 匙	スクレ イバー	石 錐	P・e	有 抉 類 磨	U・f	石核状 石 器	打石斧 横 刃	磨 製 石 斧	凹 石	石 皿	先 端 磨 擦	そ の 他	計	備 考
41住	1			1				7				2				11	1/2未掘
42住	1				1	1		5			1	2	1			12	
49住	7		5	8	3	3		16			3	12			尖頭状石器1 滑石未製品1	59	
50住	9		1	6		4	1	11			1	7			軽石1	41	
51住	2		2	1	3		1	8			1	3				21	
59住	8		1	3		8		8				1	1			30	
61住	11		3	4	1			6			4	11	3	1		44	
66住	28	1	9	9	2	10		25	3	2	3	10				102	81住の遺物含む(重複)
70住		1		1		2						6				10	
74住(叫)	23		2	8	4	2	1	32		1		9	4		滑石未製品4 円礫1	91	
76住	17		3	2	2	3	1	13	2		1	10	1	1	尖頭状石器1	57	
77住	11		3	4	5	5		11				2				41	
計	145	2	33	64	25	52	5	218	6	3	14	91	10	2	12	682	
平均	8.5	0.1	1.9	3.8	1.5	3.1	0.3	12.8	0.4	0.2	0.8	5.4	0.6	0.1		40.1	17で除する (17-1-1+1)

IV-a 期

5住	7		3	1				7		1	1	4				24	
6住						1		7				7				15	
9住	1					1	1			1	2	2				8	
11住			1	2	1			2				1				7	
52住	9		4	6	4	2		12			1	7	1			46	
58住	1		1	1				8				4	1			16	
75住	1			2		1		3								7	1/2未掘
79住	3		2	2		2		5				4				18	1/2未掘
計	22		11	14	5	7	1	44		2	4	29	2			141	
平均	3.2		1.6	2.0	0.7	1.0	0.1	6.4		0.3	0.6	4.2	0.3			20.6	6.84で除する (8-1-1-1)

IV-b 期

34住	1					1		3		1	2	6	3			17	
45住	33		4	8	4	4		52	2		3	21	2		管玉1 珠状耳飾1 尖頭状石器1	136	
67住	8		1	7	1	5		7				4	1			34	1/2未掘
74住(脚)	7		3	8	2	5		22	4			4	1		珠状耳飾1 敲打器1	58	
計	49		8	23	7	15		84	6	1	5	35	5	2	5	245	
平均	13.1		2.1	6.1	1.9	4		22.4	1.6	0.3	1.3	9.3	1.3	0.5		65.3	3.75で除する。(4-1-1)

V 期

7住	3		1	6	1	3		21				3				38	
72住	118		20	37	29	41		228	6	1	4	43	7	4	尖頭状石器1、 珠状耳飾2	541	
計	121		21	43	30	44		249	6	1	4	46	7	4	3	579	
平均	60.5		10.5	21.5	15	22		124.5	3	0.5	2	23	3.5	2		289.5	2で除する

(2) 出土地別石器

出土地	石 鏃	尖頭状 石 器	抉 入 刺 突 具	石 匙	S c	石 錐	P・e	有 抉 類 磨	U・f	石核状 石 器	打石斧 横 刃	磨 製 石 斧	凹 石	石 皿	先 端 磨 擦	滑 石 製 品	そ の 他	計
住居址	765	8	10	156	386	193	487	52	1,628	38	16	43	366	53(1)	18	19	複数抉入2、敲打器2、円礫7、軽石製品1	4,250
集石	17			4	13	2	13	1	40			7	212	20	1	2		332
土壌	55			12	10	6	9	2	9			3	42	11	1	3	砥石1 丸石2	166
グリット	1,178	14	2	309	375	254	734	37	1,709	38	158	294	1,450	52	43	64	複数抉入4、丸石11、敲打器11、円礫26、砥石4、軽石製品5、石製円板1	6,772
計	2,015	22	12	481	784	455	1,243	92	3,385	76	174	347	2,070	136(1)	63	88		11,519

・住居址32の乙遺物はグリットに含めて数えている。土壌には方形柱列の遺物も含んでいる。

・集石遺物の数には検討の結果、集石と認めず欠番としたものから出土した遺物も含んでいる。・グリットの凹石には、一部集石に伴うと思われるものも含まれている。

○石皿の( )内は固定式石皿の数。○凹石には特磨磨石の数も含んでいる。



別表6 石器一覽表

(1) 住居址

住居址25

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鎌	140	GWa	21.7	15.5	3.2	0.6	ob	28	
"	671	IV-	(26.3)	(11.5)	(2.4)	(0.8)	"		半欠
"	1252	Hmb	16.5	11.2	3.2	0.3	"	25	
"	1282	-(III)a	(20.0)	(11.0)	(3.0)	(0.4)	"	30	F
"	1301	(D)(IV)-	(12.0)	(13.0)	(2.8)	(0.3)	"		E
"	1309	DVe	15.8	(15.8)	3.2	(0.5)	"		B
"	1325	FVb	14.0	12.8	2.5	0.4	"	29	
"	1422	III(a)	(20.8)	18.6	4.5	(1.2)	"	24	A
"	1644	IVb	23.8	17.5	2.8	1.3	"		未製品
"	1677	IVe	17.0	13.5	3.5	0.7	"	26	
"	1678	HVb	13.5	(13.5)	3.5	(0.3)	"		B
"	1726	(E)-c	(14.2)	(10.8)	3.6	(0.5)	"	27	C
Sc	492	(C+B)Ia	35.7	58.8	10.8	23.9	不明	31	
"	1331	CIa	21.0	22.6	3.5	1.9	ob		
"	1618	AIa	33.3	44.5	8.7	13.2	sh	36	
石 錐	298	AI	19.0	11.3	3.2	0.3	ob	32	
"	1476	AII	17.1	22.2	4.0	1.4	"	33	
P·e	100	A(C)I	(16.4)	11.3	6.8	(1.0)	"		下端欠
"	237	A(C)II	29.3	33.0	13.0	13.7	"	35	
"	332	DI	27.2	14.3	7.5	2.5	"		
"	426	CII	20.0	20.8	8.5	3.0	"		
"	554	CI	(27.1)	(14.8)	7.8	(2.5)	"		下端欠
"	636	DI	24.3	11.3	5.6	1.4	"		
"	765	CI	17.6	13.0	3.8	0.8	"		
"	1625	CII	17.6	16.5	9.5	2.1	"		
U·f	202	AIa	16.4	20.6	8.0	2.2	"		
"	262	(A+C)Ia	16.2	17.1	2.9	0.8	"		
"	324	BIb	38.9	29.6	14.3	11.6	"		
"	337	(B+C)Ia	30.7	37.3	10.0	6.3	"		
"	349	AIa	25.3	14.1	3.8	1.0	"		
"	420	CIa	35.0	30.1	11.0	8.2	"		
"	472	"	17.3	23.3	6.4	2.4	"		
"	510	AIa	15.0	20.8	9.2	2.9	"		
"	561	"	20.7	16.1	3.8	0.9	"		
"	680	"	22.0	21.0	9.4	3.5	"		
"	695	(A+B)Ia	18.7	9.0	3.5	0.6	"		
"	764	CIIa	19.3	26.1	9.5	4.0	"		
"	805	AIa	21.8	21.8	7.7	2.1	"		
"	824	"	19.8	28.3	4.9	2.3	"		
"	832	"	17.5	11.0	8.8	1.4	"		
"	880	CIa	25.8	16.8	4.2	2.3	"		
"	943	"	39.8	47.5	6.5	8.0	"		
"	958	"	19.6	28.1	3.0	1.2	"	38	
"	1118	"	16.9	22.0	6.5	1.1	"		
"	1145	"	25.0	38.8	9.9	4.6	"		
"	1219	BIa	19.2	15.6	3.7	1.0	"		
"	1283	CIa	22.6	32.9	4.8	3.8	"	37	
"	1287	"	19.5	35.2	16.0	6.0	"		
"	1425	AIa	23.5	20.4	2.3	0.6	"		
"	1432	"	16.3	15.0	5.2	1.0	"		
"	1438	AIb	32.8	20.4	10.5	7.1	"		
"	1474	"	33.2	19.4	9.6	4.3	"		
"	1531	CIa	24.8	18.2	4.2	1.2	"		
"	1542	AIa	23.2	14.8	6.8	1.6	"		
"	1563	"	16.8	12.2	2.4	0.3	"		
"	1620	(A+C)IIa	45.6	21.6	6.5	3.9	"		
"	1635	AIIb	56.2	31.7	13.5	19.8	"		
"	1661	AIb	29.0	19.8	7.3	3.6	"	34	
"	1663	(C+A+C)Ia	20.8	17.4	7.4	1.7	"		
"	1671	CIa	17.6	28.2	5.2	2.4	"		
"	1673	(A+C)Ia	29.2	16.3	4.0	1.3	"		ピエス(CI)の転用
"	1683	(A+A)Ia	21.9	11.2	3.5	0.7	"		
"	1704	AIa	14.3	27.2	4.7	1.4	"		
"	1761	CIa	23.0	21.8	7.3	1.1	"		
磨石	213	-	(2.9)	(1.8)	(3.6)	(2.4)	不明		
製斧石	240	IIcAc	12.0	10.1	5.6	820	An		
"	459	-	10.9	(4.2)	4.1	(185)	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹石	523	IIDac	9.9	7.7	7.1	630	An		
"	608	IIGa	6.5	6.0	3.5	235	"		
"	619	IAabc	9.5	7.0	3.5	330	"		
"	995	-	6.5	4.8	3.1	(85)	"		
"	1365	IIDac	9.0	6.1	4.9	315	"		
"	1382	"	8.7	9.6	5.7	(550)	"		破
"	1522	IAabc	8.8	7.8	4.5	430	"		
石皿		AII	15.6	12.3	7.7	2500	"		No1389F

住居址26

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鎌	16	IIa	22.0	13.0	3.4	0.5	ob	48	
"	86	HVb	16.5	12.4	2.4	0.3	"	52	
"	93	HV-	(18.3)	10.5	10.2	(0.2)	"		A
"	187	HVa	15.8	8.4	1.8	0.2	"	51	
"	282	-Va	21.6	11.9	3.3	0.5	"		未製品
"	289	円基Vc	17.4	13.1	3.2	0.6	"	54	未製品?
"	314	HVb	14.8	13.2	2.6	0.3	"		
"	525	-b	(23.6)	(16.8)	4.4	(1.0)	"		F
"	652	(I)IIb	23.3	(13.4)	3.3	(0.7)	"		B
"	674	HVd	26.2	(19.7)	4.6	(1.8)	"		B
"	687	HVa	18.1	13.5	5.6	0.9	"	47	
"	689	HV-	(12.6)	12.7	3.2	(0.3)	"		A
"	883	HVa	16.5	10.6	2.5	0.3	"		
"	907	-d	(12.4)	(12.5)	2.8	(0.3)	"		F
"	942	EIVb	16.3	13.1	3.3	0.5	ch	46	
"	966	GVb	11.6	16.3	2.0	0.2	ob		
"	1025	-a	(19.0)	(13.1)	2.6	(0.4)	"		C
"	1071	(H)IV-	(13.4)	(15.5)	3.3	(0.6)	"		D
"	1084	-b	20.5	10.6	1.4	0.4	"		未製品
"	1295	IVd	15.2	11.0	3.8	0.7	"		
"	1392	平基IIb	17.7	12.0	5.0	0.8	"		
"	1417	円基Vb	17.0	(12.5)	4.3	(0.8)	"		B
"	1431	HIIa	25.8	5.5	4.3	1.1	"	53	
"	1453	-(IV)-	(10.3)	(9.6)	2.8	(0.1)	"		E
"	1457	EIV(a)	(17.8)	16.2	3.1	(0.6)	"		A
"	1469	HIVc	32.0	19.4	4.9	2.1	"	50	
"	1485	GV(a)	(25.3)	(15.4)	2.8	(0.7)	"	49	D
"	1511	HIIb	23.5	(15.2)	3.7	(1.0)	"		B
石 匙	77	-III-	(13.6)	(16.2)	5.1	(0.7)	"		つまみ部のみ
"	83	CIIIb	48.5	42.3	5.6	8.7	Ry	55	
"	245	(A)II-	(20.3)	(19.8)	6.8	(2.0)	ob		刃部欠
"	533	BIIIa	(22.3)	42.6	8.8	(5.1)	sh		刃部、つまみ部欠
"	1020	BIb	31.5	40.5	8.7	8.1	ob	56	
Sc	153	AIIa	16.8	13.8	4.8	1.0	"		
"	631	BIa	47.0	25.4	8.2	8.2	"	59	
"	786	(B+C+B)Ia	22.0	29.8	6.9	4.1	"		
"	904	CIIa	37.4	34.8	8.7	13.1	"		
"	1123	"	41.0	30.5	11.2	16.3	"	62	
"	1277	CIa	31.4	21.8	5.8	3.4	"	61	
"	1352	AIa	23.0	19.3	6.3	2.1	"		
"	1396	BIa	20.3	41.0	9.2	6.1	"	60	
石 錐	160	AI	30.2	22.6	3.4	1.5	"		
"	297	"	36.8	34.5	7.4	7.2	Ry	58	
"	1146	"	30.5	20.6	6.7	2.5	ob		
"	1297	"	20.2	14.9	4.3	1.0	"	57	
P·e	179	BI	26.8	20.3	15.0	6.0	"		
"	182	CI	20.8	10.0	5.7	1.0	"		
"	242	DI	23.4	21.6	11.8	4.0	"		
"	298	"	30.5	12.3	6.3	2.4	"		
"	392	"	29.2	14.8	10.4	4.1	"		
"	414	CI	23.1	20.2	13.2	4.2	"	66	
"	443	DI	30.4	11.2	9.0	2.8	"		
"	570	CI	25.8	4.4	11.7	5.8	"		
"	616	"	19.8	16.2	10.1	2.2	"		
"	752	DI	33.8	15.8	9.7	4.2	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P-e 有類 扶磨	798	BI	20.3	16.8	16.4	3.3	ob	65	
	1395	CI	18.2	12.3	5.3	1.1	"		
	496		(45.4)	(36.5)	8.7	(10.1)	"		
U-f	827		16.4	16.2	5.1	0.7	"	64	ピエス(CI)の転用
	12	AIb	23.2	39.3	8.5	6.7	"		
	55	(C+C)Ia	16.7	14.3	3.8	1.0	"		
	146	CHa	28.5	17.8	8.0	3.2	"		
	253	CIa	13.9	21.4	7.1	1.3	"		
	277	BIa	22.8	24.8	13.9	3.8	"		
	279	AIb	21.3	37.3	10.6	7.1	"		
	284	CIb	23.3	44.5	20.3	12.5	"		
	412	CIa	15.3	48.7	18.5	10.9	"		
	426	AIb	31.0	36.3	12.3	11.4	"		
	451	BIa	32.0	27.4	6.2	4.2	"		
	481	BIIa	28.8	29.3	11.4	4.5	"		
	524	(AI+CH)a	30.8	14.3	5.7	1.9	"		
	526	(B+A)Ia	27.2	16.2	5.7	1.9	"		
	577	AIa	21.0	17.3	6.6	2.5	"		
	643	CIa	14.2	21.0	3.6	0.8	"		
712	BIa	48.3	22.4	13.7	7.8	"			
742	CIa	30.8	20.4	12.8	3.4	"			
756	AIIa	25.5	21.2	5.7	1.9	"			
760	CIa	21.7	35.3	5.7	3.0	"			
788	(C+C)IIa	29.5	35.3	10.0	5.6	"			
792	BIa	46.8	14.8	6.7	2.9	"			
810	CIb	32.8	36.5	16.3	11.9	"			
819	AIa	37.2	34.0	4.5	4.4	"			
823	CIa	25.8	21.2	6.8	2.2	"			
826	"	36.3	16.8	8.5	3.8	"			
909	AIa	32.6	50.0	11.7	8.8	"			
1096	BIa	13.8	26.7	6.8	2.1	"			
1112	"	23.1	13.1	5.4	1.1	"			
1205	BIIa	37.5	19.1	5.7	3.2	"			
1213	CIb	23.4	43.2	21.8	14.6	"			
1360	CIa	51.5	51.0	11.7	19.9	"			
1492	BIa	26.7	11.2	2.2	0.8	"			
1509	AIa	19.3	24.3	4.8	1.7	"			
1515	(B+B)IIa	27.0	21.8	10.8	3.9	"			

## 住居址28

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄 扶刺突具	138	HII-	(15.5)	16.3	3.5	(0.7)	ob	39	A
	30	IVc	36.2	23.4	4.0	3.5	"	40	
	84	IVc	22.6	16.9	4.2	1.2	"	41	
石匙	56	CIc	44.2	49.3	10.3	19.4	"	45	
	63	CIIIa	48.5	43.0	7.8	12.7	"	43	両刃
U-f	89	AIIIa	50.8	30.2	5.8	10.8	ch	42	
	43	AIIa	17.3	25.4	7.6	2.5	ob		
	65	(C+A)Ia	24.7	23.8	7.2	3.3	"		
	73	(A+C+A)Ia	30.8	30.7	12.3	4.7	"		
	77	(A+A)Ia	22.5	20.6	5.8	3.0	"		
	90	CIa	50.2	25.2	9.3	9.3	"		
	114	(C+A)IIa	55.8	20.6	10.3	10.7	"	44	
	147	BIa	15.4	19.3	4.8	1.6	"		
	18	小型	4.1	3.6	1.0	(20.7)	"	1526	刃部半欠
磨石	78	"	4.1	2.7	0.8	14.5	"	1525	
	37	IIAabc	12.0	9.4	5.0	805	An		
滑製石品	6824	袂状耳飾	(0.8)	(1.2)	(0.4)	(1.1)	Ta	1734	

## 住居址32

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄	20	EIIb	27.0	(12.2)	2.8	(0.6)	ob	150	B
	29	ENVb	17.8	11.2	2.7	0.4	"	161	
	34	HW(b)	(14.8)	12.5	2.8	(0.4)	"	167	A
	78	HIIIb	18.3	11.4	2.4	0.4	"	159	
	81	CIV-	12.7	14.8	2.7	0.4	"	171	先端が2つに分かれている
	85	GVB	20.6	12.8	2.3	0.6	"	158	鋸歯状

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	
石鉄	97	GII-	(11.0)	13.2	2.2	(0.3)	ob	152	A	
	103	FIa	14.5	13.4	2.1	0.4	"	166		
	106	IIb	22.1	14.0	3.0	0.7	"	151		
	124	HWa	14.2	11.6	3.5	0.4	"	165		
	164	HV-	(19.8)	15.5	3.5	(0.9)	"	157	A	
	232	Ive	16.6	12.5	3.0	0.6	"	163		
	279	HIIIb	16.8	13.2	2.5	0.4	"	156		
	346	HIIa	24.5	(14.2)	2.8	(0.7)	"	149	B	
	362	GIIIc	23.5	18.5	4.5	1.2	"	147		
	396	IIIb	20.5	(12.7)	2.9	(0.6)	"	155	B	
	440	(E)III(a)	(26.5)	14.8	3.2	(0.9)	"	153	A	
	584	HVb	14.8	11.0	2.1	0.3	"	164		
	589	III(c)	18.2	16.2	5.7	1.1	"	168	未製品	
	621	EIV(b)	(23.2)	(15.4)	3.2	(0.8)	"	148	D	
	631	HVa	18.7	13.0	3.6	0.6	"	154		
	641	DIVb	18.0	(13.2)	3.5	(0.5)	"	162	B	
	658	IIVd	27.8	20.4	6.0	3.2	"	169		
	794	EVa	16.5	12.0	2.0	0.3	"	160		
	石匙	2	AIa	58.2	20.0	7.6	8.1	"	174	
		150	CIa	44.2	43.0	8.3	10.2	"	176	
Sc	253	AIII(a+c)	53.5	34.2	8.0	8.8	"	173		
	74	BIIa	14.5	25.0	4.2	1.2	"			
	100	BIa	31.6	24.2	9.2	4.7	"	183		
	105	(D+C+B)IIa	29.5	29.6	5.8	3.5	"	196	石匙?	
	110	(B+C)Ia	28.5	20.2	8.6	3.5	"	180		
	137	AIa	35.3	24.5	7.8	5.4	"			
	182	CIb	39.8	45.2	11.2	13.3	"	182		
	231	BIa	26.0	30.2	5.7	4.0	"			
	261	"	44.2	31.5	9.0	9.3	"	175		
	300	(B+B)Ia	36.8	13.2	7.8	3.8	"	177		
石錐	462	DIIa	41.0	24.5	8.1	9.1	"	178		
	559	BIIa	17.0	19.8	4.5	2.2	ch			
	569	(B+B)Ia	33.7	25.8	8.0	6.2	ob			
	666	BIa	38.5	34.2	9.2	15.2	"	181		
	749	"	31.5	34.5	10.5	8.0	"	172		
	797	DIa	54.1	36.3	12.5	17.7	"	179		
	876	"	22.0	48.8	12.2	11.9	ob	195		
	881	(B+B)Ib	17.6	40.8	21.4	13.5	"	194	石匙(AII)?	
	885	CIIa	26.8	35.8	10.8	9.9	ch			
	947	DIB	23.0	47.6	22.7	17.2	ob		ピエス(BI)の転用	
	33	AI	31.1	20.9	8.6	3.0	"	184		
	53	AII	25.0	23.9	6.0	2.6	"	192		
	391	"	25.0	15.5	10.2	2.7	"			
	418	AI	32.0	15.8	6.2	1.9	"	186		
	425	"	21.8	10.4	4.2	0.8	"	188		
	524	"	22.3	13.5	5.7	1.3	"	187		
	588	"	28.7	20.8	5.8	2.4	"	185		
	642	"	22.3	17.6	4.5	1.6	ch			
663	BI	30.7	7.3	6.3	1.2	"	190			
920	"	(25.9)	9.5	6.4	(1.4)	ob	191	先端欠		
922	AI	18.8	9.0	4.2	0.6	"	189			
P-e	181	DI	26.2	15.0	10.8	4.2	"			
	203	BI	32.4	17.3	9.4	5.4	"			
	345	CI	(22.5)	16.0	4.5	(1.5)	"		下端欠	
	448	"	30.3	24.3	6.6	4.9	"			
	475	"	24.5	13.8	4.8	1.6	"	199		
	475	"	25.8	14.2	5.8	2.1	"			
	490	"	15.7	15.1	5.5	1.2	"			
	688	A(B)I	20.8	17.2	10.0	3.0	"			
	790	BI	29.8	22.6	10.3	10.4	"	197		
	826	CII	17.6	20.5	4.3	1.4	"			
有類 扶磨 U-f	694		25.6	15.4	4.4	2.0	"	193		
	15	AIa	19.8	33.2	4.6	3.2	"			
	36	"	20.8	23.8	4.5	1.9	"			
	39	AIb	19.2	47.2	12.5	10.9	"			
	47	CHa	22.3	15.4	10.4	2.5	"			
	54	AIa	43.2	32.0	14.3	13.4	"			
	54	CIa	25.6	12.3	3.0	0.8	"		Naダブり	
67	BIa	19.2	26.2	5.0	2.3	"				
67	AIa	32.2	27.8	10.5	8.1	"				

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U・f	67	CIa	19.6	16.7	3.2	0.8	ob		
"	73	BIa	41.0	39.4	7.8	8.6	"		
"	74	A Ib	37.8	10.4	12.8	2.9	"	170	
"	89	BIb	22.4	28.3	10.9	6.9	"		
"	89	BIa	19.6	14.4	5.6	0.8	"		
"	89	CIa	17.0	23.5	11.5	2.9	"		
"	96	"	28.4	16.5	7.1	2.7	"		
"	130	(C+A)Ia	38.2	26.4	7.5	4.9	"	202	
"	138	BIb	22.3	45.5	8.7	7.1	"	198	
"	147	AIa	42.7	27.2	13.0	11.7	"		
"	151	CIa	28.6	24.3	10.4	4.2	"		
"	171	BIa	38.8	18.0	8.5	5.0	"		
"	175	"	28.8	22.0	5.4	1.9	"		
"	179	AIa	29.8	16.8	8.0	3.1	"		
"	206	"	34.8	30.3	9.7	7.4	"		
"	214	AIIa	45.8	27.4	17.3	13.3	"		
"	242	AIa	30.0	13.3	7.2	1.9	"		
"	283	(A+C)Ia	34.7	12.5	3.8	1.3	"		
"	301	CIa	32.8	39.5	14.8	5.6	"		
"	305	CIb	32.5	8.5	6.5	1.1	"		
"	339	AIa	25.3	31.7	9.0	4.9	"	201	
"	360	CIa	16.5	30.1	5.0	3.0	"		
"	405	(A+C)Ia	15.2	23.3	2.2	0.7	"		
"	431	CIa	19.7	17.4	4.2	1.2	"		
"	503	AIa	31.0	16.0	3.8	1.9	"		
"	515	(C+A)Ia	18.7	22.8	2.2	0.8	"		
"	528	BIb	29.2	49.8	9.8	9.4	?		
"	554	(A+B)Ia	30.8	35.7	9.7	9.8	ob		
"	557	AIa	27.8	28.3	8.0	4.9	ch		
"	573	"	25.7	21.2	6.6	2.8	ob		
"	591	BIa	14.8	16.4	1.9	0.5	"		
"	630	(A+C)Ib	46.7	44.3	17.8	23.8	"		
"	635	AIa	54.0	34.6	10.5	16.5	"	200	
"	651	"	34.0	25.8	13.5	8.5	"		
"	656	(A+A)Ia	51.5	26.7	7.8	8.6	"		
"	660	CIa	11.4	20.8	3.5	0.9	"		
"	675	AIa	27.0	24.2	6.3	3.0	"		
"	690	"	15.0	28.2	3.8	1.9	"		
"	716	(B+C)Ia	34.2	11.7	5.8	1.0	"		
"	716	BIa	14.8	16.8	4.0	0.9	"		
"	719	CIa	19.6	36.8	6.7	2.3	"		
"	732	BIa	17.8	17.6	3.0	0.8	"		
"	752	AIa	43.5	20.8	12.2	7.9	"		
"	763	BIa	54.0	10.0	9.8	3.5	"		
"	766	CIa	38.0	10.0	12.2	4.2	"		
"	766	AIa	27.4	26.3	8.2	3.6	"		
"	792	BIb	37.5	48.2	14.4	15.4	"		
"	813	BIa	19.2	31.0	10.4	5.3	"		
"	856	A Ib	24.0	19.4	16.0	6.5	"		
"	902	"	23.0	17.8	10.2	3.6	"		
石核状石	805	"	23.0	25.5	10.5	5.5	"		
"	894	"	17.6	49.2	15.3	10.6	"		
"	961	"	19.3	42.5	14.7	10.4	"		
凹石	425	II Eac	9.3	9.1	5.1	525	An		
石鏃	Z-12	HW-	(17.8)	(14.7)	(4.8)	(0.9)	ch		埋土 E
"	Z-13	IVc	14.3	(11.8)	(3.1)	(0.4)	ob		" B
"	Z-19	"	13.7	(12.5)	3.3	(0.4)	"		" B
石匙	Z-11	—	(13.8)	(16.7)	(5.0)	(1.1)	ch		刃部先端のみ
Sc	Z-2	BIa	18.8	19.8	3.7	1.1	ob		
"	Z-3	"	11.5	20.8	4.3	0.8	"		
"	Z-7	BIa	11.6	19.8	5.8	0.9	"		
"	Z-15	"	13.7	39.8	3.0	1.4	"		
"	Z-17	(A+D)Ia	21.6	48.6	4.7	4.0	"		
"	Z-18	CIa	20.8	12.3	4.5	0.8	"		
"	Z-20	BIa	12.7	11.5	2.8	0.4	"		
P・e	Z-5	CI	18.8	16.4	6.3	2.0	"		
U・f	Z-1	A Ib	24.5	11.8	6.2	1.5	"		ピエス(CI)の転用
"	Z-4	CIa	25.5	13.8	4.7	1.6	"		
"	Z-6	AIa	14.2	26.5	6.3	1.6	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U・f	Z-8	AIa	21.4	12.7	5.5	0.7	ob		埋土
"	Z-9	"	19.5	9.8	4.6	0.7	"		"
"	Z-10	CIa	14.8	20.8	4.3	0.9	"		"
"	Z-14	AIa	16.8	13.2	3.0	0.6	"		"
"	Z-16	AIIa	33.7	31.5	7.4	6.9	"		"
"	Z-21	(C+C)Ib	16.8	25.6	7.8	2.8	"		"
"	Z-22	(A+C)Ia	19.0	24.1	4.0	1.3	"		"
"	Z-23	(A+A)Ia	30.3	19.5	5.0	2.7	"		"
"	Z-24	A Ib	20.8	12.5	6.8	1.8	"		"
"	Z-25	AIa	30.2	23.2	6.8	2.9	"		"
"	Z-26	"	28.2	15.7	3.6	1.9	sh		"
"	Z-27	BIb	12.5	10.8	6.8	1.8	ob		"
"	Z-28	(A+A)Ia	25.0	17.9	5.8	2.2	"		"
"	Z-29	AIa	34.7	22.0	4.3	2.9	"		"
"	Z-30	(A+A)Ia	27.4	27.2	7.7	5.1	"		"

住居址36

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	15	GNb	16.6	10.2	2.0	0.3	ob	204	
"	65	FIIb	14.8	(13.5)	3.8	(0.5)	"	205	B
"	66	HIIb	28.7	19.1	4.3	1.5	"	203	
石匙	31	BIIa	37.0	64.5	9.2	12.1	sh	206	
"	36	AI (b+b)	81.5	24.1	8.6	12.0	ob	215	
"	86	A Ic	36.8	47.2	7.7	9.0	"	208	
"	139	AIa	47.0	24.3	5.8	6.5	"	207	
Sc	14	"	17.9	22.8	2.8	1.3	"	212	
"	85	D Ic	49.8	42.0	14.2	30.2	"	211	
"	163	AII d	42.5	46.2	22.8	43.6	"	209	
"	Z-4	CIa	27.6	15.2	8.4	5.5	"		
"	Z-5	BIa	25.3	22.8	6.4	2.9	"		
"	Z-6	CIa	20.5	27.5	4.3	2.6	ch		
"	Z-7	(B+B)Ia	10.5	20.7	2.7	0.7	ob	210	
石鏃	12	AII	22.0	17.5	8.0	2.3	"		
"	98	"	32.6	25.7	7.4	4.0	"		
"	Z-8	"	18.4	12.5	3.6	0.7	"	213	
P・e	13	DI	27.8	14.6	13.3	3.15	"		
"	23	"	(32.3)	13.0	13.2	(3.1)	"		下端欠
"	29	CI	(21.3)	17.2	6.3	(1.5)	"		下端欠
"	64	BI	29.8	20.3	13.0	7.8	"	214	
"	120	DI	20.2	7.2	5.6	0.6	"		
"	Z-1	A(B)I	16.3	13.7	9.2	1.9	"		B
"	Z-2	CI	16.0	17.8	4.2	1.3	"		
"	Z-3	"	21.2	17.4	3.0	1.1	"		
U・f	25	CIa	20.4	28.2	10.2	3.8	"		
"	25	BIa	22.5	22.8	7.2	3.4	"		
"	46	BIb	21.5	30.0	8.8	4.2	"		
"	48	A Ib	19.4	54.8	26.9	26.3	"		鋸齒状
"	62	CIa	17.9	28.7	7.5	2.3	"		
"	98	AIa	20.8	20.7	11.8	2.5	"		
"	99	A Ib	29.8	23.0	12.8	7.6	"		
"	113	CIb	21.0	38.6	10.2	0.6	"		
"	113	AIa	20.8	17.5	2.3	6.0	"		
"	114	"	38.1	47.5	13.3	12.5	"		鋸齒状
"	117	AIIa	27.6	50.2	13.1	13.9	"		
"	120	BIb	35.3	13.4	9.8	3.1	"		
"	131	AIa	35.8	26.2	12.8	11.9	"		
"	141	"	52.3	24.2	4.8	5.1	"		
"	167	"	17.7	22.3	3.5	1.2	"		
"	Z-1	(A+B)Ib	26.4	52.8	18.1	20.0	"		
"	Z-2	(C+A)Ia	26.7	11.2	11.2	3.8	"		
"	Z-3	CIa	28.0	25.7	5.1	2.2	"		
"	Z-4	BIa	26.7	16.4	9.9	3.2	"		
"	Z-5	(B+B)Ia	20.5	17.3	2.8	1.0	"		
"	Z-6	AIa	21.5	20.5	6.3	1.7	"		
"	Z-7	(C+B)Ia	25.0	14.2	4.2	1.0	"		
"	Z-8	C(I+II)a	17.7	28.8	3.0	1.4	"		
"	Z-9	BIa	37.8	29.0	8.3	7.0	"		
"	Z-10	BIa	23.1	20.1	4.5	1.6	"		
"	Z-11	"	33.7	13.2	6.7	1.4	"		

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
U・f 打石 磨石 皿 凹石 四石	Z-12	B I a	10.0	20.4	6.0	1.2	ob		
	Z-13	"	26.2	18.8	2.6	1.2	"		
	56	—	( 8.0)	( 6.2)	( 1.8)	( 95)	不明		半欠
	1411	—	( 3.6)	( 3.6)	( 1.9)	( 29)	"		a <sub>1</sub>
		AII	44.5	(16.6)	6.2	(7500)	Ry	1538	No1305 A <sub>2</sub>
	33	—	5.5	6.4	4.6	(195)	An		
	60	II Da	10.0	6.5	4.5	320	"		
	I Aabc	10.2	7.3	3.6	355	"			

住居址39

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石鏃	38	HV a	20.2	13.4	5.0	0.9	ob	254	(B)
"	56	GVd	22.5	18.2	3.0	0.9	"	255	(73)
"	58	CVc	10.8	13.8	2.3	0.3	"		
"	68	平基 Vc	19.2	15.7	5.8	1.3	"		
"	77	平基 V-	(17.1)	22.6	5.4	(1.7)	"	A	
"	77	FVb	14.0	13.0	2.7	0.3	"		
"	77	IV-	(18.3)	20.0	4.1	(2.0)	"		(製作時)A
"	77	FIIIc	15.8	16.4	3.8	0.7	"		
"	78	平基 Vd	21.2	(14.6)	3.4	(1.0)	"	268	(73)(製作時)B
"	79	IVd	21.5	(17.0)	2.6	(0.7)	"	262	B
"	100	IV-	(12.8)	17.3	3.1	(0.7)	"		(73)A
"	128	—b	14.5	12.8	3.7	0.5	"		(B)C
"	157	IV-	(16.2)	17.4	2.8	(0.8)	"	A	
"	187	平基(V-)	(15.7)	(16.1)	(5.2)	(1.0)	"	E	
"	203	IV-	(17.5)	(15.6)	(5.2)	(1.1)	"	271	(73)F
"	203	平基 V-	(22.6)	21.2	7.9	(3.8)	"		(製作時)A
"	208	DVb	16.4	14.1	1.6	0.4	ch	259	(B)
"	209	CVb	17.6	(15.9)	2.5	(0.4)	ob	252	B
"	229	HV-	17.1	14.9	4.7	(1.0)	ch		(B)A
"	252	DIIIa	24.3	13.5	2.2	0.4	ob	253	(73)
"	274	EIIIa	16.9	16.9	3.1	0.5	ch	258	(B)
"	328	平基 Vd	21.1	23.3	7.0	2.7	ob	270	
"	356	GVb	14.3	15.3	2.8	0.4	"	260	
"	391	DVb	21.8	17.1	3.3	0.6	"	256	(73)
"	495	CVd	20.5	24.7	3.5	1.3	"	265	破損(A)を補修 (製作時)A
"	518	平基 V-	(19.1)	21.5	5.8	(2.2)	"		
"	521	FVb	15.3	16.5	2.8	0.5	"	261	
"	557	IV-	13.8	19.0	2.8	(1.6)	"		(B)(製作時)A
"	565	—c	(20.4)	(14.3)	4.6	(1.0)	"	C	
"	570	HIIIb	12.6	11.8	1.5	0.2	"	266	(B)
"	635	GVc	(17.8)	12.3	3.5	(0.6)	"	B	
"	680	HVc	17.7	19.8	3.3	0.7	"		未製品
"	706	平基 Vb	18.9	14.0	3.1	0.6	"	269	(B)
"	824	IIIa	14.8	(10.6)	2.2	(0.3)	不明		B
"	848	IV-	(16.3)	19.0	4.5	(1.2)	ob		(製作時)A
"	864	IVb	17.8	13.5	3.5	0.7	"	267	
"	890	GIIIa	15.2	(11.1)	2.5	(0.3)	"		(B)B
"	1049	FVc	20.6	16.3	3.8	0.8	"	263	
"	1114	HVa	12.5	11.3	2.0	0.2	"	264	
"	1204	IIIa	23.8	14.6	3.5	0.8	sh	257	
"	1205	(D)IV-	17.6	(16.0)	2.8	(0.5)	ob		D
"	Z-1	IVc	16.7	(14.4)	3.9	(0.6)	"		(73)B
"	Z-2	DIIIb	20.8	(14.4)	2.4	(0.4)	"		" B
"	Z-3	—a	(18.4)	(17.4)	2.5	(0.7)	"		" C
"	Z-4	GVb	19.3	11.2	2.5	0.45	"		
尖頭状 石匙	1213	—	(57.3)	(33.0)	12.6	(27.5)	不明		F
	223	BII-	(26.8)	(51.2)	(10.0)	(9.9)	Ry	272	刃部欠
	1051	B I a	29.1	42.6	8.7	9.1	"	273	
Sc	5	BIIc	23.6	22.6	7.2	3.6	ob		(B)
"	164	B(I+II)a	17.7	23.8	4.3	1.9	"		
"	322	B I a	28.8	42.2	8.7	12.0	Ry		(73)
"	455	(C+B)Ia	26.4	33.0	5.5	2.1	ob		
"	549	B I a	41.6	17.5	5.3	4.4	sh		(B)U・f?
"	601	A I a	20.1	26.8	7.5	4.9	ch		(73)
"	640	(B+A)Ia	14.8	23.3	2.8	1.3	ob		
"	757	A I a	22.9	19.8	4.5	2.5	"		(B)
"	916	B I a	80.3	33.2	15.3	41.2	"	274	
"	1022	A I b	32.5	34.6	7.3	8.8	Ry		

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
Sc	1192	A I a	33.3	31.0	3.5	4.2	ob	282	
石鏃	293	A I	21.7	17.9	3.9	1.3	sh		
"	312	"	42.0	22.5	9.3	5.3	ob	278	(73)
"	351	"	36.5	19.7	6.0	2.8	"	276	(B)
"	508	A II	25.7	24.6	8.7	3.0	"	280	
"	573	A I	17.7	29.0	6.6	2.5	"	275	
"	779	"	41.2	11.7	8.6	2.4	"	279	(B)
"	834	"	55.2	17.2	6.8	3.7	"	277	
P・e	89	C I	23.8	24.3	13.0	7.0	"		(73)
"	196	"	19.5	11.6	5.8	1.2	"		(73)
"	243	D I	20.6	15.5	7.4	1.9	"		
"	344	B II	32.5	26.4	15.1	10.8	"		
"	380	D I	16.2	8.2	4.1	0.5	"		
"	458	B I	17.3	15.6	13.8	2.8	"		
"	539	C I	22.2	26.0	7.1	4.5	"		(73)
"	760	"	28.2	25.4	11.0	7.3	"		
有頭 扶磨 U・f	499	"	21.1	16.5	2.3	0.7	"	281	
"	22	A I a	19.5	25.3	5.5	2.1	"		(B)
"	130	"	20.4	16.6	5.5	(1.6)	"		(73)刃部先端欠
"	131	C I a	23.5	22.2	8.8	3.1	"		(B)
"	162	A I a	27.0	20.6	9.8	5.0	"		(73)
"	222	C I a	30.5	30.6	10.6	6.6	"		(73)
"	243	"	14.8	33.8	9.8	3.7	"		(B)
"	290	A I a	19.8	13.8	2.5	0.4	"		(B)
"	363	"	19.6	26.6	3.8	1.5	"		(B)
"	369	A II a	22.0	33.8	5.7	3.6	不明		(B)
"	386	(A+A)Ia	28.2	32.0	13.7	5.6	ob		(B)
"	423	C I a	13.3	22.0	6.0	1.1	"		
"	492	B II a	21.0	18.4	7.5	2.0	"		(B)
"	572	(C+C)Ia	23.2	30.3	6.9	4.0	"		(73)
"	575	C I a	21.2	20.3	5.5	2.4	"		
"	613	A I a	22.8	15.8	7.2	2.1	"		
"	708	"	44.2	33.3	11.2	9.5	ch		(73)
"	709	"	19.5	15.2	2.3	0.9	ob		(73)
"	846	A I c	24.3	11.0	5.2	1.2	"		(B)
"	919	A I a	34.1	18.3	7.5	4.2	"		(B)
"	965	B I a	28.4	25.1	5.5	2.3	"		(B)
"	1045	A I a	30.0	13.2	2.1	0.9	"		
"	1176	"	17.7	22.8	4.8	2.1	"		
"	1195	B II a	18.1	30.5	4.2	2.0	"		
"	Z-5	C I a	18.1	22.7	3.5	0.9	"		
石鏃 扶磨 U・f	649	"	20.2	31.4	8.2	5.0	"		(B)
"	375	—	(7.6)	(5.7)	(2.7)	(160)	"		
凹石	136	I Fac2	14.5	7.7	6.4	890	An		
"	246	II Da	(12.7)	8.0	5.6	(580)	"		破
"	288	"	8.8	6.9	4.9	320	"		遺物紛失
"	478	"							
"	656	II Ca	11.4	6.3	3.9	385	An		
"	792	"	9.7	8.5	4.4	400	"		
"	998	II Cac	10.2	8.8	5.1	515	"		
"	1063	I Aabc	12.0	8.3	4.4	615	"		
"	1179	II Da	10.9	6.6	4.4	410	"		

住居址48

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石鏃	82	(F)IV-	(11.3)	(13.6)	3.5	(0.5)	ob		D
"	197	IIIa	19.3	13.4	2.4	0.4	"	384	
"	244	HVa	31.3	17.3	3.6	1.1	"	383	鋸齒状
"	311	HVc	15.8	14.3	3.3	0.4	"	386	
"	332	EWb	17.5	14.1	3.4	0.5	"	385	
"	345	EWd	12.2	(14.6)	2.2	(0.3)	"		B
石匙	88	B I a	35.1	50.3	8.8	12.7	Ry	387	
Sc	8	"	24.7	18.7	7.9	2.7	ob	391	
"	289	A I a	35.0	22.3	9.7	4.7	"		
"	310	B I a	34.8	20.7	12.3	5.8	"	394	
"	323	(C+A)Ia	48.3	35.8	9.8	22.3	ch	388	
"	323	B II a	25.5	36.3	5.7	5.4	ob	393	
"	519	B I a	39.8	33.4	10.7	9.3	"		
石鏃	54	A II	26.7	23.3	10.2	6.5	"	390	鏃部3

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石錐	205	AII	24.8	35.3	11.8	5.1	ob	392	
"	307	"	27.6	18.3	6.8	3.2	"	389	
P·e	163	CI	18.5	15.8	8.2	1.8	"		
U·f	15	AIIb	28.8	30.2	10.4	7.6	"		
"	30	CIa	32.4	16.4	3.5	1.6	"		
"	64	"	30.7	17.0	5.8	2.1	"		
"	105	"	23.8	27.2	5.2	2.4	"		
"	206	A Ia	22.5	23.8	3.7	1.9	"	395	
"	209	"	14.4	27.5	5.8	2.1	"		
"	315	"	22.0	18.8	5.2	1.9	"		
"	330	B Ia	20.3	23.8	6.6	2.1	"		
製斧	1425	AMb	13.8	4.8	3.5	345	Ry	1481	先端僅かに敲打
石皿	1	BI	(19.8)	(19.2)	( 8.4)	(2200)	An		No.1323 F

住居址54

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	53	HII-	(18.2)	18.8	3.5	( 0.8)	ob	428	A
"	114	GII-	(15.5)	(14.3)	2.4	( 0.4)	"		D
"	153	GIV-	(18.8)	13.8	3.4	( 0.7)	"	433	A
"	205	-Vc	(26.1)	(17.2)	4.3	( 1.7)	"		C
"	267	IVb	24.2	14.2	4.3	1.2	"	443	
"	315	-b	(16.8)	(11.2)	( 2.8)	( 0.4)	"	438	C
"	435	HV(b)	19.5	16.0	2.5	0.6	"	444	未製品
"	458	HIIc	29.1	(15.7)	3.8	( 0.9)	"	427	B
"	490	GIIa	27.5	12.5	3.2	0.6	"	426	
"	514	平基IVc	23.7	(15.6)	4.3	( 1.5)	"	447	B No.ダブリ
"	514	(I)Vc	22.8	15.2	5.0	1.6	"		未製品
"	620	HIII-	(21.5)	19.5	4.2	( 1.8)	"	441	A
"	758	HVa	20.0	14.6	2.2	0.4	"	435	
"	780	HVb	16.8	14.3	4.2	0.7	"	439	
"	812	GIIIb	20.5	16.0	2.8	0.5	"	431	
"	861	HIIa	24.3	17.9	4.5	1.0	"	429	
"	861	HVe	19.6	16.7	4.6	1.3	"	440	No.ダブリ
"	895	ENV-	(26.2)	(13.5)	3.2	( 0.8)	"	425	D
"	1036	円基Vc	23.2	13.5	3.2	1.1	"	445	
"	1085	ANb	19.2	(13.8)	2.5	( 0.3)	"	432	B
"	1091	HV-	(19.7)	22.2	3.6	( 1.4)	"	446	A
"	1131	IV-	(22.5)	(16.4)	( 2.8)	( 1.2)	"		E
"	1188	GNVb	21.1	(13.3)	2.6	( 0.5)	"	434	B
"	1277	HIII-	(17.4)	15.2	3.0	( 0.6)	"	430	A
"	1309	ENVb	18.3	14.7	2.8	0.5	"	437	
"	1325	(円基)Vb	20.4	17.5	2.7	0.8	"		未製品
"	1398	IIIb	17.5	12.1	2.5	0.4	"	442	
"	1428	HIIb	18.9	(12.8)	2.2	( 0.3)	"	436	B
製斧	1425	円基V-	28.8	24.6	6.1	5.5	"	448	A
石匙	502	IVd	28.1	23.0	4.6	2.5	"	458	
"	247	CI(a+a)	42.2	43.4	9.2	11.7	"	451	
"	658	AI(b+a)	40.0	23.3	8.2	6.0	不明	453	
"	1188	B Ia	39.4	51.2	10.8	17.8	ch	452	
"	1244	AI-	(25.2)	(23.0)	5.4	( 2.8)	不明	449	先端欠
Sc	15	B Ia	39.3	39.3	10.5	10.6	Ry		
"	183	"	32.6	51.2	7.4	12.5	ch	459	
"	240	A Ia	29.5	39.2	8.8	8.5	ob		
"	269	B Ic	36.3	23.0	9.3	3.8	"		
"	300	D Ia	55.8	25.8	10.9	11.9	"		
"	519	B Ib	13.2	27.8	6.3	2.2	"		
"	595	B Ia	36.5	32.3	6.2	5.2	ch		
"	756	(B+C)IIa	59.8	49.8	10.6	36.4	ob	455	
"	801	A Ia	34.6	30.3	7.4	7.9	ch	456	
"	959	B Ia	22.0	15.5	2.8	1.1	ob		
"	1189	(B+D)Ia	27.0	20.2	6.2	3.4	"	457	
"	1234	A Ib	25.8	27.7	6.3	3.5	"	454	
"	1395	D Ic	43.2	49.8	6.0	14.3	"		
石錐	72	A I	31	13.5	3.2	1.3	"	465	
"	84	"	32.3	15.4	6.1	1.9	"	460	
"	320	AII	31.0	42.9	16.3	5.5	"	468	
"	320	"	19.0	33.8	10.8	14.1	"		No.ダブリ
"	477	"	21.8	25.7	5.3	2.7	"	467	
"	714	"	24.2	15.3	2.6	0.9	"	466	

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石錐	1218	BI	20.7	10.2	5.5	0.8	ob	464	
"	1296	AI	22.8	13.8	2.8	0.6	ch	461	
"	1391	"	34.6	22.6	8.7	3.3	ob	463	
P·e	79	BI	38.8	12.4	23.5	12.8	"		
"	83	CIII	19.3	37.3	8.2	5.3	"		
"	187	CI	22.2	19.8	5.2	2.0	"		
"	256	"	18.3	18.2	8.9	3.0	"		
"	408	"	18.8	20.3	4.6	1.9	"		
"	410	DI	(24.7)	13.2	8.8	( 2.0)	"		下端欠
"	440	CI	17.6	16.3	7.4	1.9	"		
"	514	"	21.8	16.8	7.5	3.0	"		
"	546	"	19.8	14.3	5.7	2.0	"		
"	1336	"	27.0	10.3	6.4	2.5	"		
"	1349	"	21.5	16.6	5.0	1.8	"		
"	1408	"	27.6	17.6	8.0	3.8	"		
有頸	1329		19.8	14.3	2.7	0.7	"	450	
扶磨	36	(A+C)Ia	39.9	20.3	9.6	7.6	"		
U·f	65	"	19.3	17.2	8.8	1.8	"		
"	84	(C+C)Ia	30.3	13.2	3.3	1.3	"		No.ダブリ
"	113	CIa	20.4	21.7	4.3	1.3	"		
"	127	A Ia	30.8	19.0	10.6	3.4	"		
"	149	(A+C)Ia	14.8	16.9	4.2	0.9	"		
"	195	CIa	20.5	22.2	6.4	2.6	"		
"	224	A Ia	17.9	30.0	6.8	2.2	"		
"	238	(C+A)Ia	23.7	19.8	7.8	3.0	"		
"	248	CIa	33.4	28.8	10.8	7.7	"		
"	259	(A+A)Ia	51.6	26.0	9.4	14.5	"		
"	262	(A+C)Ib	30.8	29.3	12.1	7.8	"		
"	266	AIIa	24.0	10.2	6.5	1.3	"		
"	274	(A+B)Ia	19.3	17.4	2.8	0.6	"		
"	287	(A+C)Ia	32.8	25.7	8.0	4.9	"		
"	292	(B+A)Ia	25.6	39.7	10.2	3.0	"		
"	313	B Ia	27.0	13.5	6.2	2.2	"		
"	334	CIa	27.0	11.3	6.3	2.0	"		
"	338	CIIa	16.2	26.8	5.3	2.0	"		
"	339	(C+B)Ia	20.2	17.5	3.5	0.9	"		
"	347	(C+A)Ia	33.3	17.0	6.9	3.2	"		ビス(CI)の転用
"	349	CIb	18.7	31.0	12.6	4.7	"		
"	349	A Ia	28.3	14.2	4.7	1.8	"		
"	350	B Ia	17.4	10.5	3.2	0.5	"		
"	376	"	17.6	21.5	7.2	2.1	"		
"	401	A Ia	21.3	25.0	7.9	3.3	"		
"	436	(B+C)Ia	41.0	20.6	8.2	5.6	"		
"	442	A Ia	23.8	22.6	8.3	( 3.2)	"		刃部一部欠
"	450	(AI+BI)A	36.4	21.0	12.0	5.0	"		
"	468	A Ia	23.0	22.8	5.0	2.0	"		
"	528	"	26.5	28.6	6.5	4.1	"		
"	533	BIIa	28.8	32.5	8.7	6.2	"		
"	566	CIa	35.1	15.4	8.0	2.7	"		
"	584	A Ia	19.8	21.3	4.0	1.5	"		
"	590	CIa	23.8	15.0	3.8	0.9	"		
"	597	CIIa	34.8	48.6	13.3	19.2	"		
"	598	(B+C)Ia	28.8	52.3	6.6	9.0	"		
"	692	A Ia	35.6	25.8	5.5	4.2	"		
"	723	B Ia	14.0	23.3	3.5	1.0	"		
"	753	BIIa	29.2	14.2	6.8	2.7	"		
"	758	(C+A)Ia	29.8	15.2	6.2	2.6	"		
"	773	(B+C)Ia	35.7	18.7	7.5	3.4	"		
"	782	(A+C)Ia	16.8	24.5	4.1	1.2	"		
"	794	B Ia	25.4	30.5	7.3	3.9	"		
"	826	A Ia	30.8	18.0	4.8	2.0	"		
"	840	(C+A)Ia	19.8	29.0	6.4	2.5	"		
"	846	B Ia	30.8	18.2	5.9	2.1	"		
"	875	(A+C)Ia	32.2	23.2	5.6	3.0	"		
"	1016	AIIa	33.0	23.1	12.5	7.5	"		
"	1043	CIIa	27.8	11.8	5.2	2.8	"		
"	1086	A Ia	15.6	23.8	4.2	1.1	"		
"	1087	(C+C)Ia	22.0	12.7	2.8	0.7	"		
"	1149	CIa	22.2	18.3	8.0	3.2	"		
"	1157	CIIa	29.5	14.5	5.1	1.1	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	1162	CIa	32.6	14.3	3.3	0.9	ob		
"	1172	BIIa	22.3	14.2	5.5	1.5	"		
"	1184	CIa	32.7	16.2	8.9	2.6	"		
"	1184	BIIa	27.0	12.8	5.2	1.1	"		No.ダブり
"	1193	AIIa	21.0	15.2	7.0	1.5	"		
"	1216	AIIa	18.4	18.2	4.9	1.2	"		
"	1259	"	16.2	18.2	6.2	1.0	"		
"	1270	(A+C+B)IIa	32.8	24.8	5.8	2.6	"		
"	1273	(B+B+A)IIa	35.2	49.8	14.2	16.9	"		
"	1276	CIa	16.3	22.0	4.8	1.3	"		
"	1303	BIIb	34.8	16.5	7.9	3.4	"		ピエス(CI)の転用
"	1319	AIIa	54.3	20.8	10.6	6.9	"		
"	1330	BIIa	33.4	43.2	10.2	6.5	"		
"	1338	CIa	37.6	11.4	6.4	2.5	"		
"	1340	AIIa	48.8	22.3	7.3	5.8	"		
"	1347	BIIa	36.6	27.8	8.6	5.8	"		
"	1380	CIa	19.2	21.4	4.8	2.3	"		
"	1389	"	20.8	37.2	7.3	3.2	"		
"	1401	AIIa	20.5	21.8	8.5	2.9	"		
"	1422	(C+C)IIa	20.4	18.3	6.8	1.9	"		
"	1424	AIIa	38.6	27.6	7.3	5.6	"		
"	1437	(C+B)IIa	20.8	32.5	9.8	3.0	"		
"	1442	CIa	34.2	23.8	8.2	3.5	"		
"	1481	"	17.0	12.8	1.7	0.3	"		
"	1489	CIIa	28.7	29.8	10.0	4.0	"		
凹石	6	IIca	11.0	5.7	2.4	225	An		
"	368	"	8.2	7.2	4.0	260	"		
"	505	"	11.5	9.4	5.7	690	"		
"	762	II Ea	9.6	8.1	4.8	410	"		
"	811	—	10.0	4.9	4.1	(215)	"		破
"	1269	II Cac	(7.5)	6.4	3.8	(215)	"		破
"	1470	II Bac	16.2	8.4	7.0	925	"		
石皿		AI	36.5	34.0	6.1	10800	"	1540	No.1303
"		"	33.9	25.5	6.1	5100	"		No.1316
"		BI	35.2	30.4	9.4	11000	"	1544	No.1299
先端磨	6910	A(2.0')	(73)	48	26	132	"		断面形角 一端欠
円礫	204	A(1.0')	(74)	42	23	75	"		"
"	1127		42.1	26.2	6.8	10.9	"		

<55住は37頁>

住居址57

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	105	GIVb	17.0	12.3	2.5	0.4	ob	469	O
"	241	ENVb	16.2	(11.8)	3.0	(0.4)	"	470	B(製作時)
石匙	37	BIIa	32.3	25.6	7.9	7.1	"	471	
Sc	6	BIIa	65.7	40.8	10.1	21.3	Ry		
"	164	AIIa	31.0	26.8	8.9	4.3	ob	474	
"	270	CIIb	33.4	30.4	5.5	5.4	"	473	
P.e	14	CI	(20.0)	21.5	6.1	(2.3)	"		下端欠
"	80	DI	(25.0)	15.7	9.1	(3.7)	"		下端欠
"	147	CI	15.5	19.7	6.2	1.4	"		
"	154	CII	14.5	16.8	6.3	1.3	"		
"	223	"	25.3	14.8	6.5	2.3	"		
"	287	"	22.5	15.8	7.8	2.0	"		
"	456	CI	21.0	20.6	8.8	2.9	"		
U-f	29	AIIa	36.6	23.8	10.0	8.1	"	477	
"	79	AIIa	29.2	14.8	6.8	1.8	"		
"	122	(C+A)IIa	22.7	30.0	5.8	2.6	"		
"	139	BIIa	38.3	13.5	8.0	2.9	"		
"	182	AIIb	26.7	9.8	4.1	1.1	"		ピエス(DI-下端欠)の転用
"	288	AIIa	36.5	17.5	4.8	2.6	"	475	
"	514	CIIb	32.5	27.0	9.3	5.3	"	472	
Z-1	AIa		28.2	18.4	6.3	2.9	"		埋土
瓦礫	468		30.0	52.0	9.2	16.1	"	476	
凹石	77	定角	(9.2)	6.0	2.6	(260)	"	1494	B <sub>1</sub>
"	160	IAabc	11.1	7.7	4.2	410	An		
"	230	II Cabc	12.6	7.4	4.6	610	"		
"	264	II Ea	10.1	9.3	5.4	590	"		
"	335	II Da	9.9	8.0	5.8	605	"		

住居址64

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	36	GIVb	23.5	(13.1)	3.3	(0.7)	ob	509	B
"	43	HIVb	20.9	13.2	4.3	1.0	"	511	
"	175	IVa	17.0	14.6	3.4	0.6	"	513	
"	184	(円基)Vc	26.7	16.4	8.2	3.5	"	522	
"	327	II(b)	(14.2)	12.4	3.0	(0.5)	"	516	A
"	347	GIIb	20.5	15.4	2.8	0.5	"	508	
"	353	GIVb	16.7	14.0	2.8	0.4	"	514	
"	404	HIIb	15.2	13.5	2.6	0.4	"	515	
"	430	(円基)Vb	24.3	(18.8)	2.8	(1.2)	"	520	B
"	436	円基VIb	27.8	23.0	4.2	2.3	"	519	
"	452	HVb	19.8	13.2	3.3	0.6	"	510	
"	489	FIVb	11.0	(12.0)	1.8	(0.3)	"	518	B
"	499	GIVb	19.8	13.8	3.2	0.7	"	512	
"	504	IIb	23.5	15.9	3.5	0.8	"	507	
"	S-19	HII-	(16.5)	(18.2)	4.3	(1.1)	"	490	D
"	上層(1)	—c	16.9	14.5	4.9	1.2	"	521	
"	Z-1	HVd	13.3	10.5	3.2	0.5	"	517	
扶入	85	IVc	33.2	21.5	6.3	3.8	"	548	
刺突具	108	IVd	34.1	22.2	4.3	2.75	"	551	
石匙	138	BIIa	35.8	34.2	5.3	5.5	"	524	両刃
"	247	AII(c+a)	61.3	24.8	7.8	11.2	Ry	525	
"	309	AIII(a+a)	(28.8)	33.1	7.2	(5.8)	sh	527	
"	366	BIIb	31.1	54.3	5.1	8.8	Ry	528	
"	400	AIIb	38.3	31.8	9.3	9.2	ob	523	
"	517	AII(b+b)	52.0	26.7	7.7	8.8	Ry	529	
"	S-17	—	40.7	(12.3)	(7.3)	(3.8)	"	495	つまみのみ
Sc	2	(C+B)IIa	33.8	16.7	7.2	6.4	ob	534	
"	192	BIIa	57.9	35.0	13.7	24.5	Ry	533	
"	209	BIIa	73.0	31.2	10.5	19.2	ob	533	
"	242	(B+D+B)IIa	30.2	29.8	6.8	4.5	"	538	
"	279	BIIa	32.2	32.2	9.6	5.8	"	535	
"	293	CIa	49.5	39.6	8.4	14.3	Ry	539	
"	345	DIa	56.9	38.2	13.8	17.8	ob	537	
"	471	(D+B)IIa	53.3	22.0	8.7	8.4	"	541	
"	500	BIIa	39.0	28.8	9.2	10.4	Ry	530	
"	525	"	23.0	13.4	3.1	0.9	ob	536	
"	546	(CI+BI)a	30.3	21.2	7.0	4.5	"	536	
"	564	BIIa	77.8	23.2	9.6	14.9	"	526	
"	567	DIb	33.5	33.6	10.5	12.7	ch	540	
"	S-2	BIIa	49.8	24.0	10.5	12.0	sh	482	
"	S-3,15	BIIb	52.3	51.2	10.8	(34.0)	Ry	493	刃部欠
"	S-4	BIIa	44.1	30.8	10.7	13.7	ob	481	
"	S-5	(D+D)IIa	41.2	67.2	7.7	15.3	Ry	483	
"	S-6,7	(DI+CII)a	71.9	34.2	11.7	24.0	"	492	
"	S-8	BIIa	51.8	78.2	10.3	42.3	"	491	
"	S-9	"	32.6	29.5	11.6	10.3	"	488	
"	S-11	"	30.7	57.0	8.2	15.5	"	486	
"	S-12	BIIb	37.4	30.0	11.8	13.2	ch	484	
"	S-13	(D+D)IIa	50.6	45.2	9.3	18.7	ob	485	
"	S-14,16	BIIb	51.5	67.0	14.2	49.5	Ry	479	
"	S-18	(B+D)IIa	48.8	31.2	12.3	15.8	ob	480	
"	S-22	(CI+BII)a	26.0	29.5	5.5	4.8	"	489	
"	S-24	(D+B)IIa	80.8	37.4	11.4	35.0	An	478	
"	S-32	CIa	(48.3)	36.2	9.8	(18.7)	Ry	487	先端欠
"	Z-9	BIIa	21.8	20.3	6.8	2.1	ob	532	
"	Z-10	AIa	24.8	13.9	4.2	1.6	"	531	
石鏃	44	AII	26.5	30.3	8.7	7.4	"	543	
"	140	"	22.2	20.2	6.1	1.8	"	544	
"	341	AI	33.5	51.7	13.5	14.6	"	546	先端欠
"	465	BI	38.0	30.2	7.9	8.7	"	545	鏃部2
"	528	AI	26.4	35.3	7.0	4.4	"	542	
"	S-1	"	26.2	23.1	4.9	1.6	"	496	
"	S-23	"	61.6	25.5	7.8	12.4	Ry	494	
P.e	54	BI	28.8	23.4	19.3	7.6	ob		
"	118	"	25.5	18.3	12.5	5.4	"		
"	122	CI	32.0	27.9	9.5	5.8	"		
"	150	"	17.8	17.8	5.8	1.6	"		
"	185	"	25.0	11.2	8.5	2.2	"		
"	216	"	(21.8)	19.0	7.3	(3.5)	"		下端欠

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P·e	337	CI	38.2	23.7	9.6	7.8	ob		
"	399	A(C)I	19.6	14.8	7.2	2.0	"		
"	403	DI	23.2	11.8	7.8	2.2	"		
"	483	BI	26.3	16.2	11.7	(4.0)	"		下端欠
"	488	CI	25.5	17.5	8.5	2.8	"		
"	513	CI	23.8	16.4	9.5	3.1	"		
"	525	"	23.3	18.9	8.3	3.3	"		
"	558	DI	38.5	13.0	9.2	3.6	"		
"	581	"	25.6	9.1	5.5	1.4	"		
"	Z-2	CI	18.6	27.5	9.8	5.0	"		
"	Z-3	DI	19.3	12.0	5.8	1.6	"		埋土
"	Z-4	CI	20.7	14.8	4.4	1.2	"		埋土
有頭 抉磨	115	"	46.6	30.4	9.8	10.9	"	549	下端欠
"	259	"	43.4	(22.8)	9.4	(8.1)	"	547	
"	473	"	28.7	20.1	7.7	4.1	"	552	
"	513	"	20.7	11.2	5.4	0.8	"	553	
"	557	"	34.0	26.4	7.4	6.2	"	550	
"	S-20	"	(16.6)	(15.4)	(5.7)	(1.5)	"	497	
U·f	27	CIa	14.4	25.3	10.0	6.2	"		
"	33	BIa	53.3	19.8	15.5	14.4	"		
"	63	(B+A)Ia	19.0	29.2	5.7	2.7	"		
"	86	AIIa	35.1	30.3	13.1	10.6	"		
"	94	BIa	45.1	25.3	10.0	7.6	"		
"	185	AIa	18.0	20.8	6.0	1.7	"		
"	215	AIIa	25.3	26.6	12.5	5.0	"		
"	216	BIa	26.8	16.5	7.0	2.9	"		
"	216	CIa	37.5	37.6	8.6	8.4	"		
"	216	"	26.5	15.2	4.3	2.1	"		
"	230	AIa	24.8	17.8	9.4	2.6	"		
"	245	"	23.3	46.5	9.2	6.8	"		
"	333	(B+C)Ia	24.9	33.6	10.8	5.8	"		
"	346	CIa	29.6	18.5	8.6	2.3	"		
"	350	(A+C)Ia	28.5	24.8	5.2	2.4	"		
"	430	BIa	23.3	18.2	8.7	2.3	"		
"	472	AIa	28.0	13.2	3.0	1.2	"		
"	513	"	24.3	11.0	5.7	0.8	"		
"	525	"	25.9	15.2	5.2	1.7	"		
"	566	CIa	24.8	30.7	7.6	5.1	"		
"	574	(A+B)Ia	13.5	22.8	2.8	1.0	"		
"	581	AIIa	34.8	18.6	10.0	4.9	"		
"	S-10	AIa	18.2	23.2	4.1	1.5	"		
"	Z-5	AIIc	29.0	25.2	7.6	7.1	"		埋土
"	Z-6	(C+B)Ia	33.4	45.5	9.8	12.1	ch		"
石核 抉磨	126	"	26.8	51.8	31.8	39.5	ob		
"	333	"	30.4	40.5	22.3	19.3	"		
"	405	"	23.2	52.5	21.0	25.2	"		
"	507	"	34.8	38.9	11.0	15.4	"	554	
"	Z-7	"	18.9	28.7	6.8	4.2	"		埋土
"	Z-8	"	28.6	47.5	15.4	14.0	"		
"	551	"	24.0	18.5	14.6	7.8	"	555	
磨石 製斧石	93	小形	3.6	2.0	0.4	4.6	不明	556	
"	90	IIDac	9.3	6.4	5.1	310	An		
"	187	IIDa	14.6	7.5	5.1	645	"		
"	409	—	7.1	6.5	2.6	120	"		
"	417	IICa	10.4	7.8	3.8	375	"		
"	423	IICac	13.7	9.4	5.4	900	"		
"	477	IICa	13.6	8.1	4.0	470	"		
"	479	—	6.4	7.2	5.0	(305)	"		
"	487	IIBa2	10.1	4.9	3.9	220	"		
"	492	IIGa	(10.9)	5.5	3.3	(240)	"		破損
"	559	IIDa	9.3	6.1	4.5	285	"		
"	640	IIGa	12.0	5.9	3.1	320	"		
石先 磨石	BIII	"	37.3	25.8	7.3	8400	"	1542	No.1304
"	6919	B(3.21)	93	34	27	125	"	1671	断面形丸、一端一部欠
円	305	"	41.4	25.0	9.1	14.7	Ry	557	

住居址78

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	3	HIa	34.9	20.5	3.8	1.8	Ry	711	
入	1626	平基IVc	39.5	21.5	8.0	5.5	ob	714	
突	239	CIa	63.8	43.0	7.5	13.3	Ry	715	
具	1600	(AII+BI)a	42.6	53.6	10.3	24.8	ob	712	
石	2455	BIa	64.0	30.2	12.6	19.7	"	713	
匙	441	CIa	26.8	23.8	12.0	4.8	"		
U·f	1635	(A+C)IIa	26.5	24.3	6.7	3.2	"		
"	1637	(C+C)Ia	27.0	36.7	9.0	9.0	"		
"	2354	CIa	22.2	21.5	4.3	1.3	"		

住居址80

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	15	IVc	18.2	14.5	7.4	1.6	ob		
"	102	DIVa	17.5	13.2	2.3	0.3	"	718	(B)
"	111	DV-	17.3	15.4	3.8	0.9	"		(B)未製品
"	141	IIIa	15.7	12.2	2.7	0.3	"		(B)
"	155	平基IVb	23.1	18.6	5.0	1.4	"	719	(B)
"	166	-(III)a	(21.3)	(13.1)	(2.8)	(0.7)	"		F
"	179	EMa	24.8	(12.2)	2.8	(0.6)	"	717	(B)B
"	248	-(III)b	(17.1)	(13.5)	(3.8)	(0.5)	"		B
"	255	EVa	25.5	(11.2)	(2.8)	(0.4)	"		B
"	256	IVc	19.8	11.9	3.8	0.8	"	720	(B)
"	272	FIIe	20.7	(13.8)	4.6	(0.8)	"		(B)B
"	275	HV(a)	(15.0)	11.8	3.8	(0.4)	"		(B)A
"	380	GIII(a)	(21.3)	14.0	2.3	(0.5)	"	716	(B)A
抉 入	51	IVc	27.8	23.6	6.4	3.6	"	721	(B)
突	52	BIIIc	34.6	51.8	4.0	7.4	sh	723	(B)
具	295	CIc	48.0	58.8	7.2	12.7	不明	722	(B)
石	100	BIa	42.3	40.3	7.0	1.1	ob		
匙	291	"	29.5	25.6	9.0	4.4	"	726	(B)
U·f	315	"	57.2	48.7	12.8	32.2	Ry		(B)
"	374	(CII+BI)b	30.6	56.0	10.1	16.0	ob		(B)
石 鏃	57	AII	22.5	13.6	3.0	1.0	"	728	(B)
"	100	AI	29.3	18.8	7.0	3.8	sh		(B)
"	300	"	33.5	16.2	3.3	1.1	ob	727	(B)
P·e	78	CI	28.8	22.3	8.0	5.0	"	730	
"	100	"	(20.1)	18.8	4.8	(1.1)	"		下端欠
"	116	DI	24.0	10.8	4.3	1.1	"	729	B
複 数	27	"	37.2	16.6	5.6	2.7	"	725	3 対
抉	18	(A+C)Ia	30.2	17.8	5.0	1.7	"		
入	46	(A+B)Ia	21.5	16.6	3.5	(1.2)	"		刃部中央欠
具	50	CIa	31.5	36.8	9.6	7.0	"		
U·f	59	"	28.8	45.3	3.5	2.8	"	731	B
"	82	BIIa	25.5	14.3	4.5	1.4	"		B
"	85	AIa	19.8	28.4	6.2	2.4	"		B
"	116	CIa	31.0	29.7	6.3	4.3	"		
"	120	(A+A)Ia	10.8	30.3	14.2	2.8	"		
"	162	(C+C)Ia	40.7	24.3	10.3	6.8	"		
"	175	AIa	32.8	35.0	11.8	7.4	"		B
"	183	(C+A)Ia	26.7	22.2	5.1	2.4	"	732	
"	184	CIa	31.9	12.8	4.0	1.0	"		
"	185	AIa	37.6	19.2	8.5	4.3	"		B
"	186	(C+A)Ia	52.5	13.1	4.2	2.7	"	724	
"	188	AIIa	13.3	25.8	2.9	1.1	"		B
"	188	CIa	15.5	25.4	8.7	1.7	"		
"	219	BIa	24.8	28.0	5.3	1.5	"		
"	224	"	22.0	17.8	3.2	0.8	"		
"	234	(C+C)Ia	26.8	22.1	6.2	2.5	"		
"	252	BIb	23.5	40.8	17.4	10.2	"		B
"	293	AIa	31.0	26.6	9.3	7.2	"		B
"	353	CIa	36.2	15.3	3.0	1.4	"		B
"	402	BIa	24.0	49.0	6.2	6.5	"		B
石核 抉磨	99	"	19.0	57.6	12.8	14.3	"		
打	816	AMb	8.1	4.8	1.2	40	"	1415	
凹	B132	IICa	9.3	5.6	4.0	245	An		
先	B 80	A(x'·o')	(81)	(28)	(20)	51	Sp		No.6921 断面形丸長軸に対し斜に欠

住居址15

Table with 11 columns: 器種, 登録No, 型式, 長さ, 幅, 厚さ, 重さ, 石質, 図番号, 備考. Contains data for various stone tools and artifacts from site 15.

住居址24

Table with 11 columns: 器種, 登録No, 型式, 長さ, 幅, 厚さ, 重さ, 石質, 図番号, 備考. Contains data for various stone tools and artifacts from site 24.

Table with 11 columns: 器種, 登録No, 型式, 長さ, 幅, 厚さ, 重さ, 石質, 図番号, 備考. Contains detailed data for various stone tools and artifacts, including measurements and classifications.



器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
凹石	126	II Ca	10.3	6.9	3.9	270	An		
"	667	I Aabc	8.7	7.4	3.5	300	"		
"	床823	II Ca	11.1	8.7	4.9	445	"		
"	864	I Aabc	10.1	6.9	3.4	315	"		
石先研	657	BVI	(7.3)	(7.8)	(1.9)	(200)	"	No1386F	
皿端磨	7232	A(2'0)	121	32	12	84	"		断面形丸(平)

住居址29

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鎌	8	GIIb	14.6	14.5	2.3	0.3	ob	69	
"	75	FVb	14.6	14.6	2.7	0.4	"	71	
"	86	EV-	(17.8)	(12.2)	2.3	(0.4)	"	D	
"	101	FVb	19.8	18.9	4.8	1.4	"	67	
"	234	DIIa	17.4	10.5	2.4	0.2	"	70	
"	261	GIIa	15.7	(10.6)	2.5	(0.2)	"	B	
"	265	HIIIc	19.4	(12.5)	4.2	(0.6)	"	68	B(製作時)
扶突具	119	平基Vd	34.5	23.2	7.3	5.3	"	72	
Sc	3	(B+B)Ib	20.7	25.2	9.3	4.4	"		
"	81	AIa	52.0	48.5	12.8	28.5	"	73	
"	100	"	24.5	31.5	5.1	2.4	"	74	
"	156	DIa	51.3	48.0	13.7	26.6	"	76	
"	242	CIIa	27.6	34.2	10.0	7.4	"		
"	252	BIIa	18.8	18.0	4.8	1.7	"	82	
"	270	AIa	18.7	21.4	4.8	1.8	"	81	
石 錐	51	AII	21.5	14.2	6.5	1.7	"	79	
P·e	44	DI	30.2	15.8	9.8	3.5	"		
"	243	A(C)I	20.4	12.3	10.2	3.5	"		
"	280	BI	23.7	18.1	11.2	4.3	"		
有頭	147		32.4	11.1	9.4	1.9	"	78	
"	270		16.3	17.8	6.5	2.0	"	83	No.ダブリ
U·f	8	AIa	21.4	11.9	3.1	0.8	"		No.ダブリ
"	16	"	28.3	15.5	5.2	1.7	"		
"	32	A Ib	32.4	23.6	16.5	11.5	"		
"	43	AIa	31.5	16.8	6.8	2.2	"		
"	46	BIIa	22.3	19.2	7.2	2.2	"		
"	76	AIa	42.3	40.1	9.8	11.2	"		
"	80	(A+C)Ia	34.2	9.8	4.2	1.2	"		
"	90	AIa	23.4	24.8	8.8	4.3	"		
"	93	(A+A)Ia	58.7	17.2	12.8	5.2	"		
"	104	C I a	20.4	16.2	6.7	1.7	"		
"	107	(B+C)Ia	24.7	20.6	8.8	2.9	"		
"	117	C I b	40.7	37.6	17.2	(15.5)	"		刃部一部欠
"	131	B I a	20.7	20.1	7.1	2.1	"		
"	131	"	23.2	17.8	4.6	1.6	"		No.ダブリ
"	184	CIIa	35.0	48.7	9.0	12.3	"	77	
"	190	AIa	32.6	14.7	5.4	2.3	"		
"	197	(B+C)Ia	18.2	21.7	8.2	2.6	"		ピエス(CII)の転用
"	200	B I a	20.4	25.8	4.5	1.8	"		
"	226	AIa	32.0	19.8	6.8	3.9	"		
"	234	"	50.0	25.8	7.7	8.0	"	80	
"	236	"	20.2	19.7	3.1	1.1	"		
"	245	(C+C+B+B)Ia	42.3	32.2	12.5	10.0	"	74	
"	250	AIa	27.4	17.2	7.6	2.5	"		
"	277	AIIa	43.8	44.3	5.2	16.0	"	75	ピエス(CI)の転用
凹石	17	I Aabc	10.3	7.4	3.0	225	An		
"	123	II Cac	10.6	8.5	4.9	565	"		
"	227	I Aabc	10.4	7.7	4.2	420	"		

住居址30

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鎌	167	平基IV-	(11.0)	15.3	3.2	(0.6)	ob		A
"	271	GIIa	21.5	(12.0)	2.8	(0.4)	"	101	B
"	370	- - c	(18.0)	(10.7)	(3.0)	(0.4)	"		F
"	388	HV (b)	(14.3)	10.6	3.9	(0.4)	"		A
"	421	(平基)IVa	19.4	13.0	4.7	0.9	"	104	未製品
"	515	GIVa	12.4	11.8	3.2	0.4	"		
"	533	平基-a	17.0	(15.6)	4.0	(0.9)	"	106	B(製作時)
"	569	平基IVb	16.0	13.1	3.5	0.5	"		

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鎌	610	平基IV-	(13.0)	12.2	3.0	(0.5)	ob		A
"	615	- - a	(14.2)	(11.3)	(3.8)	(0.4)	"		F
"	624	HV a	15.5	10.1	3.0	0.3	"	102	
"	625	円基Vb	15.5	10.7	2.9	0.4	"		
"	628	- - d	16.7	12.5	2.3	0.4	"		未製品
"	629	IVa	21.0	(13.4)	3.7	(0.7)	"	103	B
"	691	- - b	(11.0)	(12.0)	(2.5)	(0.3)	"		F
"	699	GIVb	11.8	10.3	2.0	0.2	"		
"	700	平基IVb	17.5	14.7	3.0	0.7	"		
"	811	FVa	18.2	11.0	2.4	0.3	"	100	
"	944	円基Vd	13.2	12.8	2.5	0.4	"		
"	955	平基IVa	24.3	(11.6)	2.6	(0.6)	"		B(製作時)
"	992	平基IVb	17.9	(14.1)	3.0	(0.7)	"		B
"	1017	- - e	(15.1)	(9.6)	2.2	(0.2)	"		C
"	1047	IVa	18.7	12.0	2.5	0.4	"	105	鋸歯状
石 匙	84	CII(a+a)	44.0	28.6	8.0	8.3	"	107	
"	266	A I b	63.9	31.8	11.2	19.2	"	108	
"	305	C I b	33.2	27.2	7.3	6.2	"	109	
"	373	BIIa	36.6	64.8	10.2	17.7	An		
"	526	AII(a+a)	(42.2)	30.2	8.0	(9.8)	ch		刃部先端欠
"	542	AIIIa	28.7	25.5	3.9	4.9	Ry		
"	728	B I b	40.0	(42.0)	8.3	(13.6)	ob		刃部両端欠
"	802	CII(a+c)	50.8	60.2	9.6	21.9	Ry		
Sc	9	CIIb	29.7	15.3	6.0	3.3	ch		
"	25	B I a	26.6	23.0	6.9	4.2	ob		
"	161	"	40.3	27.5	6.5	5.2	"	114	
"	252	(C+B)IIa	36.5	31.6	7.3	7.2	"		
"	414	AIa	21.1	16.7	3.8	1.4	"		
"	511	(C+B)Ia	31.6	21.0	8.3	5.5	"		
"	601	AIa	17.0	28.5	6.8	2.6	"		
"	632	BIIa	31.8	60.0	8.0	12.2	"	111	
"	703	CIIa	28.2	21.0	7.5	6.7	"		
"	884	(D+C)Ia	47.5	34.6	6.5	7.4	"	113	
"	1003	DIIa	57.8	41.7	17.9	31.0	"	110	
"	1055	B I a	36.3	25.6	4.7	3.2	"		
"	1090	"	78.2	27.5	17.0	35.0	"	112	
"	1093	BIIa	30.0	18.0	5.5	2.2	"		
石 錐	157	A(I)	(16.0)	15.8	3.6	(0.9)	"		錐部先端欠
"	473	AII	28.9	43.4	12.4	11.4	"		
"	611	AI	26.8	15.2	4.8	1.2	"	115	
"	797	A(II)	(23.5)	19.3	2.7	(1.0)	"		錐部先端欠 つまみ部と錐部 先端欠
"	970	A I	(18.9)	(8.3)	(7.5)	(1.0)	"		
"	1089	AI	32.6	18.1	8.5	3.1	"	116	
"	1101	- I	(14.2)	(7.5)	(3.8)	(0.3)	"		錐部先端のみ
P·e	11	BI	24.2	18.9	11.9	5.2	"		
"	30	CI	30.2	20.8	10.6	4.9	"		
"	60	"	21.3	25.5	6.8	3.8	"	119	
"	81	BI	20.7	11.8	10.0	3.0	"		
"	342	"	27.8	25.5	24.4	15.3	"		
"	355	CI	15.5	11.0	3.8	0.6	"		
"	391	BI	28.7	21.7	18.7	8.4	"		
"	464	CI	23.2	20.6	6.3	2.7	"		
"	483	"	22.0	16.6	6.0	2.2	"		
"	488	"	30.2	14.4	6.4	3.0	"	120	
"	500	DI	26.6	11.5	9.8	2.8	"	118	
"	516	"	18.6	12.8	8.6	1.4	"		
"	591	BI	29.7	20.5	17.5	9.7	"		
"	616	CI	20.7	16.3	7.0	2.1	"		
"	636	DI	36.0	14.5	12.5	5.3	"		
"	710	"	32.6	13.4	10.5	4.3	"	117	
"	715	BI	21.0	19.8	12.4	4.7	"		
"	796	CI	22.8	19.6	7.3	2.8	"		
"	869	"	25.5	19.3	7.5	2.6	"		
"	1096	"	22.7	17.2	4.3	(1.6)	"		下端一部欠
"	焼土40	"	(14.0)	14.3	4.0	(0.7)	"		下端欠
"	焼土46	"	23.3	19.5	9.5	3.4	"		
"	焼土98	BI	22.4	18.4	13.0	4.2	"		
"	焼土39	DI	22.0	10.8	9.7	2.4	"		
"	焼土48	BI	18.4	15.5	9.7	2.6	"		
"	焼土54	CI	20.8	15.6	5.2	1.1	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	
有頰 扶磨	52		24.4	14.2	5.8	1.4	ob	127		
	136		28.5	18.8	7.7	3.6	"	124		
	142		26.7	13.4	6.6	1.6	"	125		
	202		36.2	14.8	5.1	3.4	"	123		
	383		22.6	12.7	5.1	1.1	"	128		
	580		21.1	17.2	7.4	3.2	"	121		
	691		24.3	18.5	4.4	1.7	"	129		
	841		30.8	17.5	9.9	2.9	"	126		
	929		37.4	24.6	9.8	7.5	"	122		
		焼土51		27.2	17.6	7.5	2.0	"	130	
	U・f	42	C I a	28.2	12.0	4.3	1.2	"		刃部一部欠
		59	(A+C)I a	24.0	42.2	6.0	3.8	"		
		75	B I b	24.0	36.5	16.4	8.8	"		
		81	B I a	19.7	18.2	9.0	(1.9)	"		
		109	(B+C)I b	22.0	42.7	7.2	7.4	"		
		150	C I a	20.8	18.8	6.4	2.5	"		
163		A I a	37.2	21.0	6.0	2.1	"			
169		"	22.0	23.8	8.3	4.2	"			
209		(C+B)I a	17.8	21.3	6.2	2.0	"			
231		A I a	14.3	12.5	2.3	0.4	"			
234		B I a	20.7	15.3	6.2	2.0	"			
241		A I a	42.4	21.0	9.5	6.8	"			
304		C I a	25.5	29.1	8.6	3.8	"			
309		A I a	21.6	21.5	4.2	1.4	"			
356		A II a	22.6	18.1	6.6	1.8	"			
430		B I a	15.5	22.5	3.2	0.9	"			
446		(B+A)I a	19.5	32.8	10.2	6.0	"			
457		C I a	24.7	21.3	6.8	2.3	"			
473		"	43.1	25.6	9.7	"	"	131 遺物紛失		
484		"	36.0	28.9	9.6	(5.5)	"	刃部中央欠		
512		"	29.0	15.5	4.8	1.5	"			
529	A I a	45.8	12.1	7.1	2.2	"	133			
534	"	36.0	47.4	8.9	8.7	"				
538	"	23.3	30.0	7.6	3.3	"				
548	"	18.5	15.3	3.2	1.2	"				
555	A I b	32.1	26.4	9.8	7.1	"				
576	B I a	22.3	37.8	10.6	4.0	"				
812	C I a	16.1	27.4	4.0	0.9	"				
814	"	44.0	17.8	6.4	3.3	"	132			
964	A II a	32.8	22.1	13.8	3.6	"				
981	C I a	27.8	31.5	5.2	2.4	"				
1028	"	31.2	34.3	9.0	10.4	"				
打石磨 製屑 製屑 凹石	1106	横刃A	7.6	12.5	3.0	340	不明	1452	a <sub>1</sub>	
147	—	(3.9)	(3.6)	(1.9)	(25)	"				
951	II Gac	12.1	7.7	3.6	330	An				
1014	II Ca	11.3	8.1	4.0	441	"				
1107	I Aabc	10.2	8.2	4.2	520	"				

住居址31

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考		
石鏃	30	平基IV d	17.0	15.6	5.2	1.0	ob		D 未製品 A A A B G B		
	31	GIV a	22.7	11.7	3.8	0.7	"	135			
	39	GIV -	16.7	14.5	4.8	0.8	"				
	48	平基II (a)	(20.4)	(15.0)	5.3	(1.1)	"				
	63	平基IV b	18.0	14.0	4.3	0.3	"	138			
	73	HIV b	17.6	11.0	2.3	0.4	"				
	91	(平基)IV d	20.9	14.3	3.8	1.1	"	140			
	93	FV (b)	(13.2)	14.2	2.9	(0.4)	"	134			
	119	平基IV -	(17.7)	16.5	4.2	(1.1)	"				
	183	IIV a	15.9	12.8	2.7	0.4	"	136			
	202	平基IV -	(14.0)	13.8	2.8	(0.3)	"	137			
	240	— — —	(15.8)	(12.2)	(2.8)	(0.5)	"				
	255	FIV b	15.7	(12.8)	2.5	(0.4)	"				
	Z-1	平基IV b	23.0	13.8	4.0	1.0	"	139			
	Z-2	"	18.1	10.9	3.2	0.6	"				
	石匙 Sc	142	A I a	(47.4)	(30.0)	5.9	(6.7)	"		141	刀端部欠
		213	"	27.0	20.8	6.8	2.9	"		142	
		244	C II a	22.0	17.1	6.1	(1.5)	"			
		Z-5	"	23.0	14.8	4.0	1.1	"			

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考		
石鏃	228	A II	25.4	25.6	9.5	3.0	ob		143 鏃部先端欠		
	293	A I	(31.0)	13.3	10.5	(2.3)	"				
	P・e	11	B I	25.5	15.2	15.3	6.0	"			
	"	87	A(C) I	19.7	18.2	7.9	3.1	"			
	"	176	C I	22.4	16.4	7.0	2.5	"			
	"	237	"	24.8	19.3	5.0	2.1	"		144	
	"	Z-4	"	19.8	16.7	4.5	1.4	"			
	"	Z-6	D I	(26.0)	14.0	6.3	(2.0)	"		下端欠	
	"	Z-8	A(D) I	35.3	13.9	13.8	4.0	"			
	"	Z-9	C I	30.3	19.2	7.2	3.8	"			
	"	Z-10	B I	22.8	16.2	13.0	4.0	"			
	"	Z-11	C I	18.9	15.2	6.7	1.9	"			
	"	Z-12	B I	23.3	12.6	14.0	3.6	"			
"	Z-13	C II	21.3	15.6	5.6	2.0	"				
U・f	9	C I a	21.2	19.1	4.9	1.6	"		146		
	95	A II a	30.0	21.2	9.4	3.4	"				
	108	C I a	19.0	21.7	5.0	1.4	"				
	154	B I a	23.0	28.4	9.2	4.9	"				
	167	"	34.8	20.5	6.7	(2.8)	"				
	188	A I a	46.5	39.0	7.5	8.6	"				
	191	C I a	23.9	14.3	4.0	1.2	"				
	207	A I a	13.3	16.4	3.4	0.8	"				
	210	(AII+BI) a	34.8	15.2	15.0	3.2	"	145			
	290	A I a	10.2	15.3	5.3	0.8	"				
清製 石品	Z-7	B I a	20.0	30.0	12.6	6.4	"				
	Z-14	C I a	15.8	20.2	4.5	1.2	"				
85	小玉	20.0	19.0	0.9	4.5	Ta	1731				

住居址40

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	370	G III a	25.5	14.6	3.2	0.6	ob	291	
	410	E V e	21.4	(15.8)	4.7	(1.0)	"	307	B(製作時)
	672	—(III) b	(23.6)	(21.4)	5.6	(1.3)	"	287	F
	793	H V -	(16.2)	(20.2)	2.8	(0.8)	"	312	D(先端製作時)
	794	D V b	15.7	(12.8)	3.0	(0.4)	"	290	B(製作時)
	826	円基V b	21.6	14.0	4.9	1.5	ch	316	
	833	A III e	12.6	(12.3)	2.3	(0.2)	ob		B
	869	D V a	16.9	(12.8)	3.3	(0.3)	"	296	B
	875	— — b	(15.3)	(13.2)	5.2	(0.8)	"	309	C
	881	I V b	23.4	20.0	4.3	1.4	"	313	挟入刺突具?
	1104	I V (b)	(21.6)	16.8	4.3	(1.0)	"	304	A
	1155	H II b	13.8	10.6	2.9	0.2	"	300	
	1374	D V c	18.9	(14.2)	3.5	(0.6)	"	297	B
	1517	I V -	(13.6)	16.2	4.0	(0.8)	"		A(製作時)
	1596	D V a	19.6	14.2	2.6	0.3	"	284	
	1747	E V b	12.7	(10.6)	2.4	(0.2)	"	289	B
	1748	G III b	23.3	17.1	3.5	0.8	"		
	1773	G V b	13.3	(11.6)	2.5	(0.2)	"	301	B(製作時)
	1786	I V -	(14.5)	21.3	3.5	(1.1)	ch	311	A
	1803	(I) - -	(9.8)	(12.9)	(2.0)	(0.1)	ob	314	E
	1831	H V c	20.0	13.8	5.3	0.9	"	295	
	1896	— — -	(8.8)	(9.3)	(2.3)	(0.1)	"		E
	2101	H V b	25.3	(21.8)	3.3	(1.4)	"	305	B(製作時)
	2159	H V a	20.2	(15.2)	3.4	(0.5)	"		B
	2190	円基V b	21.2	(16.0)	4.0	(1.0)	"		B
	2253	F V a	21.5	19.8	4.0	0.8	"	283	
	2290	H V b	25.1	16.0	3.2	1.0	"	306	
	2405	G II b	12.5	12.1	2.3	0.2	"	303	
	2456	— — a	(19.8)	(12.2)	2.8	(0.4)	"	302	C
	2536	(F) V -	(13.2)	(15.5)	(3.5)	(0.4)	"		E
2563	— — e	(17.2)	(13.2)	4.0	(0.8)	ch		C	
2602	円基III b	22.8	17.0	4.1	1.1	ob	315		
2705	平基IV -	(17.9)	16.5	4.0	(1.0)	"		A	
2813	D V a	13.4	12.7	2.5	0.2	"	286		
2922	E V b	19.3	15.6	2.9	0.5	"	285		
2959	H III a	15.3	13.3	2.5	0.4	"	298		
2970	F V b	15.2	(16.8)	2.4	(0.4)	sh	288	B	
3304	G III a	20.0	11.6	2.7	0.3	ob	293	鋸歯状	
3388	D V a	16.3	12.1	2.5	0.2	"	294		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	3448	HV-	(17.8)	17.4	2.7	( 0.7)	ob		A	P-e	2280	DI	21.8	7.5	3.4	0.7	ob		
	3740	DVc	23.0	18.2	2.8	0.8	"		"		2309	"	19.5	9.0	5.8	1.1	"		
	3749	(平基)IVc	19.2	(22.3)	3.7	( 1.1)	"		B		2787	"	31.9	20.8	10.4	5.5	"		
	3996	DIII d	17.2	18.6	3.3	0.6	"	308			2927	"	(33.0)	18.0	9.6	( 4.7)	"		下端欠
	4279	GIV b	22.9	15.4	2.6	0.6	"	292			3005	CI	16.5	23.8	7.5	2.4	"		
	4320	GVe	15.7	17.0	3.1	0.5	"	310			3173	DI	(21.0)	12.0	8.2	( 2.7)	"		下端欠
	4388	IVc	17.0	(12.3)	3.5	( 0.5)	"	299	B		3539	A(C)I	17.0	16.5	7.6	2.1	"		
	Z-1	HIII b	24.0	15.7	4.8	1.4	"				3881	A(D)I	33.8	16.0	9.3	4.2	"		
	Z-2	GIV d	22.9	20.6	9.6	4.0	ch		埋土、未製品		3886	DI	23.5	12.3	8.0	( 2.3)	"		下端一部欠
	500	A Ia	(53.0)	(45.8)	10.7	(20.0)	不明	318	刃部一部欠		4058	CI	(27.4)	12.7	6.0	( 1.5)	"		下端欠
	810	B(II) a	(29.3)	48.0	7.2	( 9.3)	sh		つまみ上部欠		4130	"	25.5	25.4	12.2	6.0	"		
	2502	B Ia	30.8	40.5	4.8	6.5	ob	317			4218	CII	24.2	15.0	10.2	4.2	"		
	2832	BII (a)	(23.8)	(33.7)	( 4.8)	( 3.2)	ch	320	刃部半欠		4551	CI	18.7	15.0	6.8	1.5	"		
	3412	BI -	29.4	(33.5)	8.8	( 9.5)	"		刃部先端欠		4892	"	17.0	12.0	6.2	1.2	"	346	
	3811	BII b	33.0	46.2	7.6	10.7	Ry	321			4988	"	25.0	17.3	7.2	1.3	"	347	
4191	BIII a	30.1	45.5	8.3	8.0	ch	319		Z-4	DI	22.8	11.5	8.5	2.2	"				
4924	"	35.0	51.2	11.0	15.6	Ry	323		Z-16	"	(30.8)	13.7	4.8	( 1.9)	"		下端欠		
Z-1	"	26.0	50.0	6.7	6.1	sh	322		Z-19	CI	(14.2)	12.6	3.6	( 0.6)	"		下端欠		
S c	102	A I b	29.2	31.0	7.6	7.4	ob	328		有 跡	4161	"	22.3	18.3	5.8	2.2	"	349	
	585	(III+AI) a	15.7	20.3	5.6	1.3	"		4631		"	23.0	18.0	5.9	1.8	"	350		
	593	B Ia	24.5	34.4	8.8	4.2	"	354			4682	"	29.2	16.5	6.2	2.4	"	351	
	646	B I c	38.2	26.3	7.2	6.3	"		4757		"	27.3	16.0	5.5	2.2	"	352		
	774	B Ia	65.3	40.1	22.3	5.1	Ry	326			U-f	2 (C+A+C)Ia	41.8	63.9	8.3	13.5	"	362	
	879	"	26.0	12.3	9.5	5.2	ob		ピエス(CIII) ?		44	B Ia	17.3	36.2	6.7	2.9	"		
	946	AII a	24.5	26.2	6.0	4.9	"	325			60	CI a	29.4	22.3	10.5	4.1	"	359	
	1494	(B+B)IIa	19.2	17.6	3.8	1.1	"				180	AII a	43.2	19.6	3.9	2.7	"		
	3103	B I c	21.6	17.4	4.9	1.3	"	353			250	B I b	23.1	28.6	8.2	4.2	"		
	3230	B Ia	36.2	49.0	7.6	9.6	sh	329			408	CI a	35.1	32.5	10.4	5.5	"	357	
	3325	"	17.3	18.5	6.2	1.8	ob				418	A Ia	21.2	22.1	7.6	2.7	"		
	3413	CI a	39.8	25.4	8.7	8.5	"				430	CII a	17.9	15.5	5.2	0.8	"		
	3681	(A+A)Ia	20.8	14.5	3.4	1.6	ch	324			475	A I b	35.0	20.5	12.8	7.7	"		
	4103	B Ia	20.8	15.6	3.8	1.1	ob				498	(A+A)Ia	15.3	18.9	4.3	1.2	"		
	4357	A Ia	27.0	43.5	10.2	6.4	"	327			532	AII b	25.2	30.9	9.8	5.4	"		
4424	B Ia	25.1	28.7	4.9	3.0	"			554	AII a	34.0	17.3	5.4	2.2	"				
4629	"	19.7	26.1	5.9	2.5	"	355		556	B I b	25.6	43.3	6.8	5.9	"				
Z-3	AII d	13.9	15.2	6.2	1.2	"			568	A I a	16.5	27.9	6.8	2.5	"				
Z-6	BII a	44.8	29.7	5.3	7.5	ch		埋土	571	"	29.6	18.4	5.0	2.1	"				
石 錐	39	A I	23.0	18.2	5.8	1.5	ob	334		580	CI a	24.8	18.5	14.0	6.1	"			
	111	AII	25.8	17.4	5.2	2.4	"	341		583	(A+C)Ia	24.3	17.8	5.5	1.8	"			
	1333	"	23.7	21.8	8.2	2.4	"			594	CI a	52.0	17.7	8.7	6.3	"			
	1358	B(II)	(25.2)	6.1	3.2	( 0.4)	"	340	錐部先端欠	605	(A+A)Ia	21.5	22.3	11.0	2.6	"			
	2454	A I	29.0	12.7	6.6	1.4	"	337		611	CI a	21.8	24.5	6.9	1.8	"			
	2492	"	20.3	15.7	7.8	2.1	"			639	AII a	21.6	14.8	3.0	0.9	"			
	3217	"	(17.8)	14.0	3.6	( 0.4)	"	336	錐部先端欠	658	CI a	27.2	19.8	4.5	1.4	"			
	3233	"	24.2	19.1	4.8	1.2	"	332		662	"	24.4	18.8	4.8	2.4	"			
	3543	"	22.5	25.0	7.0	2.5	"	343		847	(C+A)Ia	39.8	21.2	5.5	3.2	"			
	3586	"	26.6	15.6	5.9	1.8	"	333		861	A I a	29.3	14.3	7.0	2.3	"			
	4292	"	16.2	17.7	3.8	0.6	"	335		883	CI a	20.8	17.5	7.4	2.5	"			
	4424	"	(27.6)	11.7	7.7	( 5.2)	"	330	Naダブリ 錐部先端欠	961	B I b	20.6	22.0	10.5	3.4	"			
	4430	"	32.9	25.3	7.0	4.5	"	331		967	A I a	19.8	26.8	7.1	3.1	"			
	4433	AII	33.8	22.5	4.3	2.7	"	342		1015	"	23.3	19.9	8.8	2.1	"			
	4447	A I	19.3	29.5	6.5	2.3	"	338		1085	"	24.8	18.3	11.0	2.9	"			
4710	"	20.7	39.0	5.7	4.1	"	339		1199	CI a	36.2	23.6	6.5	3.4	"				
4719	AII	38.9	11.5	8.6	3.1	"			1386	A I a	24.7	16.8	4.5	1.7	"				
P・e	96	CI	37.5	34.5	10.6	12.3	"			1406	"	18.8	19.0	3.0	0.6	"			
	136	DI	35.4	16.3	11.8	6.5	"			1419	B I a	22.6	9.8	5.7	1.2	"			
	139	CI	22.5	13.4	3.2	0.8	"	348		1514	B I b	31.0	12.6	14.8	4.6	"			
	165	"	21.4	14.5	6.6	1.5	"	344		1718	A I a	40.2	17.0	10.3	4.8	"			
	173	"	16.3	12.3	3.1	0.7	"			1740	"	19.7	22.8	7.4	3.7	"			
	180	DI	20.5	8.5	7.8	1.9	"	345		1967	B I b	14.8	19.2	5.3	1.4	"		P・e(CI)の転用	
	354	CI	19.2	13.2	6.0	1.7	"			2193	(B+A)Ia	13.0	20.2	4.8	1.2	"			
	580	"	(18.9)	19.0	4.5	( 2.1)	"		下端欠	2256	B I b	23.1	27.4	10.4	4.3	"			
	599	"	16.8	14.1	5.2	1.5	"			2317	A I a	27.0	32.3	8.4	5.9	"			
	693	"	22.6	17.7	9.6	3.4	"			2449	B I a	27.9	19.8	12.0	2.7	"			
	974	DI	18.5	8.6	4.8	0.7	"			2455	CI a	29.3	22.4	4.8	2.2	"			
	1110	"	38.9	15.4	9.8	3.4	"			2592	"	16.8	19.5	4.9	1.1	"			
	1593	"	26.3	13.0	8.7	2.6	"			2603	"	26.1	25.3	5.5	2.0	"			
	1823	"	17.6	11.6	3.6	1.5	"			2686	A I a	19.0	31.5	7.3	3.8	"			
	1906	"	28.2	13.6	5.2	1.8	"			2725	BII b	19.8	12.7	7.8	2.2	"			
2060	"	18.1	7.3	6.5	0.7	"			2815	A I a	17.5	17.4	4.6	0.9	"				

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	2932	CIa	53.0	22.3	12.6	11.5	ob		
"	2946	AIa	15.3	20.0	4.8	1.0	"		
"	2982	CIa	10.2	19.8	5.2	0.6	"		
"	3096	"	14.8	20.0	7.2	1.0	"		
"	3108	AIa	16.4	16.4	6.2	1.4	"		
"	3265	BIa	31.0	29.8	11.3	5.5	"		
"	3343	(A+C)Ia	21.7	23.5	7.8	7.5	"		
"	3363	(C+A)Ia	31.4	14.8	6.8	1.9	"		
"	3397	BIa	15.0	11.6	12.5	2.0	"		
"	3405	AIa	32.1	22.3	12.4	4.6	"		
"	3429	BIa	20.8	25.3	5.2	2.0	"		
"	3446	CIa	29.0	30.3	4.2	2.7	"		
"	3467	AIb	32.9	25.8	9.9	9.4	"		
"	3469	(C+A)Ia	20.2	18.7	7.5	2.2	"		
"	3478	AIb	25.5	13.4	4.8	1.0	"		
"	3504	CIa	25.5	30.0	5.0	2.2	"	358	P・e(DI)の転用
"	3527	AIa	27.4	18.3	4.5	2.2	"		
"	3558	BIa	38.8	23.2	9.0	3.6	"		
"	3559	CIa	34.0	13.3	8.5	3.1	"	361	P・e(DI)の転用
"	3569	CIb	40.1	21.3	16.2	8.4	"		
"	3574	AIa	19.7	24.4	3.3	1.6	"		
"	3746	"	38.2	16.4	6.1	3.3	"		
"	3772	CIa	27.2	11.6	4.8	1.4	"		
"	3782	"	26.3	22.8	10.7	4.3	"		
"	3812	"	36.0	14.5	6.7	1.9	"		
"	3913	(A+C)Ia	32.0	20.8	12.7	7.9	"		
"	3918	AIa	20.7	16.0	5.7	1.6	"		
"	3921	AIb	39.8	34.0	13.8	10.7	"		
"	3937	CIa	24.2	24.3	6.0	3.3	"		
"	4011	AIa	35.5	22.0	7.3	2.9	"		
"	4011	CIa	17.6	22.4	3.6	1.3	"		Noダブリ
"	4105	BIa	18.3	21.7	5.8	2.1	"		
"	4149	AIa	18.8	20.7	2.6	1.1	"		
"	4153	CIa	23.7	35.7	9.7	5.2	"		
"	4154	AIa	37.5	26.3	5.0	3.9	"	356	
"	4162	BIa	17.6	33.3	3.7	1.7	"		
"	4223	(CI+AI)a	28.3	14.2	5.4	2.0	"	360	
"	4250	CIa	23.8	12.8	8.0	1.4	"		
"	4299	AIa	38.8	15.0	4.5	2.0	"		
"	4395	BIb	31.0	17.0	7.1	2.6	"		P・e(DI)の転用
"	4409	AIb	36.8	23.5	10.6	7.8	"		
"	4428	(A+C)Ia	22.3	25.8	10.7	5.2	"		
"	4751	(B+C+B)Ia	39.8	21.3	6.9	4.4	"		
"	4784	AIa	20.5	43.6	7.0	6.6	"		
"	Z-5	A(I+II)a	17.3	12.8	5.2	1.0	"		
"	Z-7	CIb	25.2	16.8	8.8	3.4	"		
"	Z-8	CIa	19.7	13.8	2.8	0.6	"		
"	Z-9	(BI+AI)b	31.7	15.0	9.8	3.5	"		P・e(DI)の転用
"	Z-10	CIa	27.8	10.8	5.4	1.4	"		
"	Z-11	AIa	26.8	21.7	7.4	2.4	"		
"	Z-12	CIa	23.6	15.1	4.7	0.6	"		
"	Z-13	AIa	27.8	17.6	8.6	3.2	"		
"	Z-14	"	23.0	19.8	5.3	1.9	"		
"	Z-15	"	19.2	12.3	2.9	0.7	"		
"	Z-17	(A+B)Ib	23.7	18.4	7.6	3.2	"		P・e(CI)の転用
"	Z-18	(C+B)Ia	28.7	35.5	10.2	6.6	"		
打石	276	横刃B	(52)	(86)	(17)	(75)		1454	
"	917	横刃C	72	77	11	85		1461	
"	1062	—	(71)	(56)	(10)	(70)			
凹石	6	II Cabc	11.4	6.5	4.1	420	An	1647	
"	894	IEb	17.6	9.7	7.7	1820	"		
"	918	IIDa	8.4	6.2	5.4	275	"		
"	919	—	(8.2)	8.5	3.7	(345)	"		
"	1081	II Cac	8.5	7.2	3.7	265	"	1650	
"	1082	II Ca	11.9	8.3	5.0	625	"		
"	1116	"	7.5	6.7	4.2	250	"	1651	
"	1240	IIDa	8.9	7.9	5.5	440	"	1648	
"	2924	II Aa	11.9	5.7	2.9	265	"	1644	
"	3006	II Ca	10.5	8.4	3.6	430	"		破
"	3615	II Aabc	10.0	7.6	4.4	405	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹石	3630	II Cac	14.0	8.9	5.2	905	An		
"	3715	IIDa	9.2	7.8	6.5	565	"		
"	4158	II Ca	8.6	5.9	3.8	200	"	1646	
"	4427	IIDabc	9.1	6.9	5.0	350	"	1649	
"	4448	II Aa	12.1	6.1	4.4	420	"	1645	
"	5095	II Cab	10.5	8.2	4.3	450	"		
石皿		AII	(19.8)	(28.6)	(10.5)	(8400)	"	1546	No1307 F・
"	3489	BIV	(22.2)	15.1	(8.2)	(2200)	"		No1308 C。
先鋒 磨石 製	6916	A(3'0')	(85)	30	23	72	"		断面形角一端完欠 側辺にも使用仮粗
"	3927		28.0	24.0	8.0	8.1	Ta	1715	未製品
"	3981		15.0	12.0	4.0	1.5	"	1712	"

住居址44

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	44	GIIIa	19.2	(12.2)	2.0	(0.3)	ob		B
"	54	DIVb	17.7	(13.4)	2.6	(0.4)	"	364	B
"	92	(円基) Vc	25.9	19.6	3.5	1.5	"	370	未製品
"	325	-(IV)c	(15.8)	(11.2)	2.5	(0.4)	"		C
"	346	— c	(21.8)	(21.4)	5.0	(1.8)	"	367	F
"	368	EIIIa	21.2	(14.4)	2.8	(0.5)	"	365	B
"	388	HIIIb	23.4	15.2	3.0	0.7	"	363	
"	457	HVc	20.3	13.3	2.1	0.5	"	366	
石匙	224	BIa	34.6	53.2	10.5	(15.8)	sh	369	刃部一部欠
"	508	CIa	49.2	27.8	6.3	8.0	Ry	368	
Sc	55	AIa	34.5	21.3	8.7	5.5	ob	372	
"	77	BIb	21.6	57.8	9.0	8.1	"	373	
"	299	BIa	26.0	14.6	6.9	2.2	"	371	
"	Pit	(A+A)Ia	64.0	27.0	11.3	12.9	"	374	
石錐	162	AI	37.0	24.8	6.0	4.9	Ry	378	
"	164	"	27.7	12.7	6.3	1.8	ob	377	
"	458	AII	28.7	23.2	3.5	2.6	"	376	
P・e	133	DI	39.2	14.2	12.3	5.8	"		
"	267	BI	21.4	17.4	13.7	3.9	"		
"	386	CI	31.3	19.5	11.0	7.3	"		
"	425	DI	33.3	21.8	13.5	7.3	"		
"	457	CI	21.6	15.6	9.8	3.0	"		
"	493	DI	19.0	10.5	9.0	1.5	"		
"	498	CI	28.0	25.0	15.6	9.0	"	379	
"	514	"	25.6	16.0	10.0	3.4	"		
有頭 抉磨	157		64.8	48.4	11.5	28.4	"	380	
"	275		26.2	12.8	5.9	1.6	"		
U-f	72	AIa	25.5	41.5	12.6	8.3	"		
"	133	"	35.0	35.9	8.6	4.7	"		
"	221	"	35.0	11.3	8.0	2.0	"		
"	393	(A+A)Ia	39.0	18.8	8.2	6.3	"	375	
"	481	BIa	28.0	17.0	2.8	2.1	"		
"	515	AIb	20.8	27.8	7.8	3.9	"	382	
"	P-11	AIa	20.5	34.8	4.8	1.8	"	381	
凹石	123	—	(5.8)	5.2	3.0	(83)	An		
"	152	II Ba <sub>2</sub> c	12.0	6.2	4.7	380	"		
"	170	II Ca	11.4	9.0	4.1	450	"		
"	207	II Bac	13.0	8.0	5.5	620	"		
"	230	II Fa	10.0	8.9	7.7	785	"		
"	311	II Ca	7.0	5.1	2.8	105	"		
"	344	II Cac <sub>2</sub>	12.3	7.4	4.5	505	"		
"	345	II Fa	9.9	9.7	7.4	760	"		
"	421	II Aabc	9.4	7.0	4.8	314	"		
"	446	IIDa <sub>2</sub>	7.9	7.0	5.5	350	"		
"	516	IIDc	7.4	6.3	4.5	250	"		

住居址53

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	210	(D)II-	(10.7)	14.2	3.7	(0.4)	ch	402	A
"	223	GVa	22.8	14.2	3.6	0.8	ob	397	
"	306	EIIIb	18.8	(14.2)	2.8	(0.4)	"		B
"	351	HVe	32.3	16.3	4.0	1.3	"	396	未製品
"	805	HIIIb	19.7	12.3	2.8	0.3	"	401	
"	964	EIIIa	18.8	14.4	2.8	0.5	"	399	

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鎌	978	EIVb	18.8	13.8	3.2	0.5	ob	398	
"	1160	FVc	17.4	(15.8)	3.6	(0.6)	"	B	
"	1218	--	(12.5)	(12.5)	2.3	(0.4)	ch	403	G
"	1370	CIc	10.0	14.8	1.8	0.2	ob	400	
Se	270	CIa	38.9	21.0	11.3	5.0	"		
"	273	(B+C)Ia	30.4	19.7	4.8	2.7	"	416	
"	332	(C+B)Ia	34.0	20.3	6.6	3.3	"	415	
"	447	BIb	18.7	18.9	6.6	2.3	"		
"	463	BIa	19.3	24.7	6.2	2.4	"	405	
"	842	BIa	18.5	20.7	4.3	1.1	"		
"	930	BIb	30.2	21.7	7.2	3.5	"		石鎌未製品?
"	1375	AIIa	16.4	20.0	3.7	1.2	"	404	
"	Z-2	AIa	19.5	20.8	5.7	1.8	"		
石 錐	436	AII	27.0	19.5	8.8	3.2	"	406	
"	1245	AI	20.8	14.5	3.0	0.6	"	407	
"	1262	BI	25.8	8.5	6.8	1.2	"	408	
P.e	513	CI	(19.2)	16.7	6.2	(1.9)	"		下端欠
"	626	BI	24.8	22.1	12.0	4.8	"		
"	686	CI	17.5	18.6	4.8	1.3	"	412	
"	853	"	20.7	19.2	5.7	2.0	"	410	
"	898	"	34.3	27.5	8.2	8.2	"	411	
"	1181	"	18.0	20.5	7.5	3.3	"	409	
"	1201	CII	17.2	24.1	6.4	2.6	"	413	
有頭 扶磨	7		25.8	9.3	3.2	0.8	"	423	
"	666		39.9	25.5	0.7	6.4	"	414	
"	710		25.4	17.3	7.1	1.8	"		
U.f	261	BIa	28.8	38.7	8.2	8.6	"		
"	287	AIa	24.3	16.6	9.0	3.0	"		
"	293	BIa	18.2	21.2	7.7	1.8	"		
"	350	CIa	29.7	14.5	3.2	1.1	"	420	
"	616	AIb	20.7	19.3	7.0	2.0	"		
"	706	BIa	26.4	9.7	2.3	0.5	"	417	
"	737	CIa	33.0	19.0	8.2	3.9	"		
"	803	(C+C)IIa	18.0	17.0	7.4	2.3	"		
"	814	(C+C)CIa	45.0	20.5	8.7	10.4	"	424	
"	817	CIa	26.3	19.8	7.8	2.9	"	419	
"	821	BIa	31.7	15.0	4.3	1.4	"		
"	825	CIa	28.1	20.8	11.0	4.7	"	421	
"	851	(A+C)Ia	57.8	13.8	12.2	4.8	"		
"	884	BIa	26.6	45.6	13.8	10.9	"		
"	885	"	24.2	43.7	9.0	5.3	"		
"	895	CIa	25.7	32.4	8.5	3.5	"		
"	933	AIIa	28.6	21.6	7.4	2.9	"		
"	943	(C+C)Ia	20.8	12.7	3.2	0.7	"		
"	958	CIa	25.7	11.0	2.5	0.5	"		
"	977	(C+C)Ia	25.8	18.2	3.8	1.0	"	422	
"	1058	AIIa	24.5	22.6	8.9	3.9	"		
"	1071	(C+C)Ia	19.1	21.0	4.5	1.6	"		
"	1093	AIa	21.7	25.2	8.2	3.4	"		
"	1172	CIa	26.8	17.6	7.8	2.7	"		
"	1231	BIa	34.8	20.0	9.7	5.7	"		
"	1302	(A+A)Ia	32.5	14.0	2.5	1.0	"	418	
"	1393	CIa	25.2	19.7	5.2	2.6	"		
"	Z-1	(B+B)Ia	19.5	25.2	4.6	1.6	sh		
石核 扶器	581		19.8	25.3	7.2	3.8	ob		
石 凹	70	II-Cab	9.5	7.8	4.2	395	An		
"	331	--	6.0	5.4	3.8	100	"		
"	775	II-Bac	9.4	3.9	3.8	186	"		
"	868	II-Ca	10.1	7.5	4.2	340	"		
"	886	--	(6.9)	6.0	3.4	(130)	"		
"	1095	II-Gac	9.3	8.9	3.6	240	"		
"	1182	II-Ca	9.9	6.6	3.1	230	"		
"	1387	"	11.0	6.4	3.6	270	"		
"	1389	II-Ba	12.5	5.7	4.5	500	"		
円 礫	534		38.5	13.3	8.3	4.9	不明	1745	
"	539		42.6	20.0	8.3	11.5	"	1746	

住居址55

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鎌	1	GIIc	20.3	17.4	2.3	0.6	ob	632	
"	317	HVa	19.0	16.0	2.5	0.6	"	634	
"	394	DIIIc	19.2	15.8	3.6	0.8	"	638	
"	394	円基Vc	20.3	13.0	4.8	0.9	"	640	Naダブリ
"	701	GIIb	18.6	15.0	3.0	0.5	"	625	
"	708	HVb	19.4	14.3	3.0	0.6	"	630	
"	790	DVc	10.2	10.3	2.5	0.2	"	637	
"	803	FVa	18.0	14.2	3.3	0.6	"		
"	835	GIIb	18.4	16.2	3.0	0.6	"	631	
"	1016	--c	19.0	12.1	3.2	0.8	"		未製品
"	1058	GVb	26.0	12.6	2.5	0.4	"	633	
"	1180	FVc	20.5	(16.0)	4.1	(1.0)	"		B
"	1394	平基V-	(20.0)	20.1	5.0	(1.8)	"		A
"	1405	HIb	18.9	13.7	3.0	0.5	"	626	
"	1417	FWb	18.5	18.1	5.0	1.0	"	639	
"	1464	円基Vb	20.0	14.3	3.9	1.1	"	641	
"	1530	HIIa	19.3	12.5	3.0	0.5	"	628	
"	1649	HIVb	14.3	13.2	2.5	0.4	"	627	
"	1665	--b	21.2	14.2	2.8	0.8	"	643	未製品
"	1684	GIIb	14.5	13.5	3.7	0.5	"	635	
"	1744	GIIa	15.8	13.9	2.0	0.2	"	624	
"	1746	HVa	15.6	11.4	3.0	0.3	"	629	
"	1751	H(II)-	(12.3)	11.4	2.8	(0.3)	"		A
"	1756	(円基)Vb	(16.0)	(12.7)	3.2	(0.2)	"		B
"	1756	--b	(10.6)	(11.4)	(2.0)	(0.5)	"		F Naダブリ
"	1766	FIIb	17.7	14.8	3.7	0.5	"		鋸歯状
"	1932	FIIIb	14.1	11.5	2.8	0.3	"	636	
尖頭 扶器	320	平基Vc	28.3	(21.6)	6.8	(3.3)	"	642	B石鎌?
石 匙	385	CIIIa	53.4	31.9	4.8	7.6	"	645	
"	864	BIa	33.8	(38.2)	8.5	(8.5)	sh	650	つまみ・刃端部少欠
"	1071	CIIa	49.0	43.8	5.3	10.1	Ry		
"	1901	AI-	(26.4)	20.3	3.2	1.6	ob	649	
"	Z-1	BIIIa	45.0	81.0	8.3	21.0	sh		
Se	378	BIa	53.8	22.8	9.2	9.5	ob		
"	815	(DI+BI)a	19.5	29.8	6.4	3.6	"	644	
"	904	BIa	20.6	25.0	4.8	2.0	"		
"	949	AIa	63.1	29.6	9.2	15.9	"	646	
"	1164	BIIa	37.2	23.0	7.8	5.2	"		
"	1220	(B+B)Ia	54.8	32.5	9.0	(17.6)	sh	647	刃端部欠
"	1253	AIa	41.7	31.2	6.4	5.7	不明		
"	1286	BIa	24.7	11.8	3.8	1.3	ob		
"	1293	DIa	18.3	18.5	5.0	1.6	"		
"	1489	(B+B)Ia	41.7	28.6	14.2	7.3	"		
"	1544	CIa	39.8	39.7	9.5	12.3	"		
"	1583	BIa	20.5	24.6	3.1	1.2	"		
"	1646	(B+B)Ia	45.2	34.0	15.0	25.7	ch	648	
"	1878	BIa	17.3	25.6	2.3	0.8	ob		
"	1912	AIa	35.8	35.3	8.0	6.6	"		
石 錐	443	AII	21.2	16.8	4.3	1.5	"	653	
"	799	"	24.5	20.0	8.8	3.1	"	652	
"	969	AI	33.0	13.0	4.5	1.2	"	651	
P.e	9	DIII	27.3	17.2	12.8	4.3	"		
"	17	DI	30.6	18.2	3.3	5.2	"		
"	64	CI	27.3	39.8	9.8	6.9	"		
"	69	"	26.7	26.7	12.0	6.4	"		
"	182	A(C)II	21.2	19.6	11.5	3.6	"		
"	188	CI	23.5	16.5	4.2	1.3	"		
"	212	A(C)II	22.0	20.8	9.7	2.9	"		
"	229	CI	26.5	18.9	5.5	2.4	"		
"	272	"	28.7	27.9	8.3	5.4	"		
"	295	BIII	21.9	28.8	12.7	6.9	"		
"	322	CI	(26.2)	18.2	5.2	(1.8)	"		下端欠
"	339	"	23.3	24.2	7.8	3.7	"		
"	488	DII	30.7	14.2	9.7	3.7	"		
"	656	CI	19.2	19.0	3.8	1.2	"		
"	698	"	22.4	23.1	6.3	2.1	"		
"	775	CII	34.6	15.2	10.8	4.3	"		
"	921	CI	(24.3)	17.3	4.8	(1.6)	"		下端欠
"	1167	BI	32.3	21.3	11.7	7.6	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P.e	1438	DI	29.8	12.0	5.2	2.2	ob		
"	1456	CI	(21.3)	16.8	4.9	(1.4)	"		下端欠
"	1465	"	16.2	19.4	8.3	1.9	"		
"	1521	CII	27.8	26.0	9.5	6.7	"		
"	1612	CI	21.0	15.7	4.5	1.7	"		
"	1696	DI	(29.8)	12.8	9.6	(3.0)	"		下端欠
"	1760	CII	22.5	22.2	5.0	2.4	"		
"	1871	"	37.8	26.4	8.4	7.5	"		
"	1957	CI	16.0	17.6	5.1	1.5	"		
有 扶 磨	961	"	19.5	21.6	5.2	2.1	"		
"	1192	"	43.8	20.8	8.5	5.5	"		
U.f	33	(B+B)Ia	20.4	20.8	5.3	1.9	"		
"	38	(A+A)Ia	26.2	21.0	3.2	1.7	ch		
"	45	(C+C)Ia	27.8	21.0	8.2	4.1	ob		
"	103	CIb	20.6	37.4	16.2	8.5	"		
"	154	BIa	18.2	25.6	4.2	1.6	"		
"	172	BIIa	42.6	16.5	14.5	6.7	"		
"	179	A Ib	32.6	24.7	13.3	9.4	"		
"	204	(C+B)Ia	33.2	25.3	3.0	2.1	"		
"	215	CIa	25.7	22.7	3.0	1.5	"		
"	225	A Ia	29.3	16.3	16.0	6.8	"		
"	265	(B+B)Ia	14.0	33.2	3.6	1.1	"		
"	274	CIa	16.8	13.3	6.2	1.1	"		
"	313	A Ia	25.3	20.6	7.8	3.8	"		
"	387	(A+A+C)Ia	20.2	31.0	8.8	2.5	"		
"	430	CIa	33.4	29.8	12.3	7.7	"		
"	438	BIa	16.8	22.0	5.3	1.8	"		
"	480	A Ia	22.8	24.2	2.8	1.4	"		
"	551	BIa	24.6	16.5	8.2	3.4	"		
"	677	(C+A+C+CIa	32.0	37.0	8.2	7.9	"		
"	736	CIa	27.8	24.3	9.5	4.8	"		
"	742	A Ib	25.2	52.1	30.8	27.6	"		
"	751	BIa	26.7	9.9	4.7	1.4	"		
"	754	(A+A)Ia	59.6	31.8	8.4	10.8	"		
"	845	BIa	26.2	19.8	7.3	3.2	"		
"	877	A Ia	64.8	30.3	10.5	9.8	"		
"	901	"	20.3	21.0	4.8	1.8	"		
"	925	A(I+II)a	35.7	37.8	9.0	5.7	"		
"	989	A Ia	12.3	24.6	9.5	2.3	"		
"	1034	(B+A)Ia	22.5	27.0	8.3	3.4	"		
"	1035	(C+A+A)Ia	32.4	18.3	4.2	1.8	"		
"	1054	(A+C)Ia	29.4	8.5	3.4	0.6	"		
"	1108	BIa	47.5	23.8	5.1	0.7	"		
"	1205	CIa	28.8	26.2	6.3	2.8	"		
"	1210	A Ic	15.0	31.8	4.5	1.8	"		
"	1221	A Ia	44.2	26.8	13.3	10.1	"		
"	1248	CIa	23.8	39.0	11.8	4.2	"		
"	1259	BIa	19.3	32.4	6.6	3.6	"		
"	1259	A Ia	26.0	19.8	8.3	2.4	"		No.グブリ
"	1266	(C+C)Ia	42.5	25.6	7.8	5.7	"		
"	1268	(A+A)Ia	22.8	19.8	4.0	1.0	"		
"	1268	CIa	20.7	18.8	11.5	4.6	"		No.グブリ
"	1278	BIa	18.8	24.6	35.2	9.6	"		
"	1280	A Ia	23.6	15.3	10.1	2.9	"		
"	1321	"	24.2	25.4	5.8	1.9	"		
"	1380	"	19.5	39.7	8.2	5.8	"		
"	1408	(A+C)Ia	27.1	21.3	7.3	2.9	"		
"	1443	A Ia	31.2	15.0	7.1	2.6	"		
"	1445	"	23.2	21.5	7.5	2.1	"		
"	1448	CIa	29.8	33.9	4.7	2.1	"		
"	1466	A Ia	44.8	16.5	10.0	5.4	"		
"	1482	"	20.3	14.8	4.3	1.0	"		
"	1495	"	24.3	15.3	4.2	1.3	"		
"	1512	(C+A)Ia	24.3	36.8	8.4	4.9	"		
"	1564	A Ic	31.5	30.8	13.8	8.9	"		
"	1579	CIIa	22.5	17.2	7.8	2.0	"		
"	1583	BIb	48.0	31.7	9.2	13.6	"		No.グブリ
"	1601	A Ia	23.8	24.8	4.6	2.5	"	654	
"	1608	(A+C)Ia	27.8	40.6	7.2	(5.5)	"		刃部一部欠 (A Ia)
"	1621	BIIa	17.3	22.7	6.5	1.8	"		
U.f	1648	BIb	27.0	22.0	7.0	2.4	ob		
"	1648	A Ia	35.3	20.2	12.0	5.2	"		No.グブリ
"	1742	"	53.5	20.8	8.2	5.8	"		
"	1742	AIIa	26.8	22.3	6.0	2.9	"		No.グブリ
"	1742	A Ia	16.3	18.0	4.2	1.0	"		No.グブリ
"	1760	CIa	16.7	17.1	4.1	1.0	"		
"	1790	A Ia	24.6	21.8	3.8	(1.8)	"		刃部一部欠
"	1793	"	15.0	12.6	3.0	0.4	"		
"	1793	(A+B+C)Ia	17.5	24.8	4.2	1.4	"		No.グブリ
"	1859	CIIa	22.5	23.8	5.5	2.1	"		
"	1882	A Ia	19.5	17.7	6.5	0.8	"		No.グブリ
"	1882	BIa	22.2	15.0	3.4	0.7	"		
"	1915	A Ia	13.3	19.2	4.0	1.2	"		
"	1973	(C+C+A)Ia	26.4	22.9	4.1	2.0	"		
"	1988	(C+A)IIa	35.6	38.2	7.3	5.5	"		
1291	"	"	23.3	30.8	14.2	5.1	"		
石核	1771	横刃C	4.3	8.4	1.1	4.5			
打石	410	定角	(8.2)	4.7	1.6	(100)	Ry	1517	C <sub>1</sub> スズ着柄痕のこる
凹石	110	IIAa	13.8	7.0	4.9	465	An		
"	164	II Ea	7.4	6.9	3.5	205	"		
"	188	II Ba	6.2	5.7	4.2	165	"		
"	399	IIDac	10.1	8.3	5.9	580	"		
"	526	II Ca	9.2	6.7	4.3	310	"		
"	792	—	5.0	7.4	4.6	(180)	"		
"	996	IIDac	11.8	8.4	5.6	645	"		
"	1198	IAabc	10.2	7.6	4.1	415	"		
"	1288	II Ga	11.5	6.0	2.8	205	"		
"	1339	II Ea	7.9	8.4	3.9	225	"		
"	1350	II Ca	12.1	7.0	2.4	235	"		朱
"	1642	IIDa	8.7	7.4	5.5	340	"		
"	1644	IAabc	10.2	7.6	4.1	415	"		
"	1763	II Ca	8.6	5.8	3.1	170	"		
"	1817	"	11.4	7.1	4.2	395	"		
石皿	"	AII	(20.2)	(16.4)	(6.4)	(3000)	Gr	1545	No.1299 C <sub>2</sub>
先研	"	BIII	(19.2)	(20.5)	(7.4)	(2600)	An		No.1282 D <sub>3</sub>
端磨	6911	(3.x')	(94)	41	36	(165)	Di		断面形角、長軸 に対し斜めに欠
敲打器	1356	"	(101)	54	22	(135)	"		

住居址65

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏡	S-1	EVa	21.0	12.3	2.5	0.4	ob	564	
"	S-2	(E)IV-	(10.3)	(10.7)	(2.7)	(0.2)	"	565	E
Sc	44	BIb	47.3	44.5	13.0	18.7	"	571	
"	158	BIIa	19.8	13.8	5.4	1.2	"	566	石鏡未製品?
石錐	30	AII	24.3	17.8	9.8	3.1	"	568	
"	47	"	18.8	17.7	4.5	0.8	"	567	
P.e	53	BI	26.3	23.7	15.0	9.0	"	570	
"	69	"	21.0	18.1	12.0	4.4	"	569	
"	Z-1	CI	21.5	22.1	8.4	4.5	"		
U.f	5	A Ia	28.8	18.4	5.2	2.1	"		
"	30	(C+C)Ia	29.6	19.6	2.0	1.2	"		
"	35	A Ia	17.8	20.8	6.7	1.5	"		
"	39	CIa	34.2	17.0	11.7	5.5	"		
"	52	AIIa	59.7	17.2	9.8	8.3	"		
"	56	CIa	18.3	18.2	6.5	1.3	"		
"	67	(C+A)Ia	19.0	13.3	3.2	0.7	"		
"	71	BIIa	12.5	22.7	9.8	2.2	"	572	
"	71	A Ib	39.8	20.6	18.1	10.1	"		No.グブリ
"	96	(B+B)Ia	20.5	24.8	7.2	3.3	"		
"	97	A Ia	22.8	28.2	9.0	5.2	"		
"	114	BIa	47.8	41.0	10.0	16.6	"		
"	117	"	29.7	28.8	8.8	5.7	"		
"	117	(B+B)IIa	28.7	30.8	10.7	8.3	"		No.グブリ
"	124	BIb	20.4	28.7	9.7	4.7	"		
"	133	CIa	26.6	26.1	10.2	5.2	"		
"	136	"	26.5	18.3	10.0	2.9	"		
"	159	A Ia	18.7	28.2	8.6	2.5	"		
"	Z-2	BIa	17.2	17.0	3.8	0.9	"		
"	Z-3	"	28.3	17.4	9.5	3.4	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U·f	Z-4	CIa	36.8	33.3	10.0	9.7	ob		
	Z-5	BIb	33.8	31.8	10.0	6.7	"		
	Z-6	(C+C)Ia	29.8	24.6	7.3	3.6	"		
	Z-7	AIa	21.0	14.1	7.4	1.4	"		
	Z-8	"	24.8	19.0	6.3	2.3	"		
凹石	23	—	6.5	6.0	2.8	(115)	Am		
	95	II B <sub>ac</sub>	9.4	5.3	3.5	(235)	"	1541	破損
石皿		AII	36.4	(27.9)	8.6	(6200)	"		1306 A <sub>1</sub>

住居址69

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	38	GIVa	19.8	11.8	3.4	0.4	ob	574	
	47	HIIIa	12.2	11.6	2.3	0.3	"	590	
	222	I(III)-	(11.4)	15.0	3.5	(0.6)	"	591	A
	327	-IVc	20.2	15.7	5.6	1.5	"	587	未製品
	517	GIVb	19.2	13.0	3.2	0.6	"	573	
	676	- - a	(17.0)	(10.3)	(3.2)	(0.5)	"	592	F
	679	HIVc	18.7	(14.3)	3.5	(0.6)	"	578	B
	787	HIVb	25.0	16.7	4.5	1.2	"	575	
	800	IIVb	18.7	(13.8)	2.5	(0.5)	"	582	B
	844	IVc	18.9	13.7	3.8	0.8	"	588	
	862	円基Vd	23.2	12.5	4.5	1.5	"	595	
	918	IVb	19.2	17.8	6.4	1.7	"	586	
	921	(尖基)Vb	22.5	14.6	3.2	(0.7)	"	594	B
	1026	HVb	23.0	(18.3)	4.8	(1.5)	"	584	B
	1044	(D)V-	(19.0)	(11.5)	(3.6)	(0.6)	"	593	E
	1142	IV-	(15.7)	20.6	2.6	(0.8)	"	589	A(製作時)
	1215	FIIb	20.0	14.2	3.3	0.6	"	577	
	1241	HV-	19.0	13.5	6.0	1.5	"	596	未製品
	1258	HIIIb	20.5	13.8	3.2	0.6	"	576	
	1378	平基Vb	21.8	16.6	4.8	1.5	"	585	
	1398	IIIb	18.3	14.2	9.8	0.8	"	579	
	1422	FVb	17.7	12.5	2.6	0.4	"	581	
	1431	IIIb	18.2	13.6	2.7	0.4	"	580	
	1487	FVa	11.7	9.7	1.8	0.2	"	583	
石匙	316	AI(b+a)	57.2	35.0	7.7	18.4	sh	597	
	536	AMc	40.2	28.3	4.9	5.7	ch	599	
	787	AMa	43.8	28.9	6.8	6.7	ob	601	
	1011	BIb	27.8	36.5	6.3	(5.6)	ch	598	刃端部欠
	1040	AI(b)	34.8	38.8	10.2	(11.8)	ob	602	"
Sc	111	BIa	73.8	35.2	10.7	32.2	Ry	611	
	178	AIa	(29.6)	23.5	5.2	(3.6)	sh		刃端部欠
	302	(C+B)Ia	40.2	27.3	8.6	11.6	ob	604	
	600	BIa	25.3	37.7	11.0	7.7	"		
	645	BIIb	28.8	36.8	12.5	13.8	ch	613	
	791	(B+B)Ia	22.1	46.7	5.2	3.7	ob	610	
	861	CIa	37.0	37.3	8.5	9.5	"		
	869	DIa	18.4	35.4	8.3	5.3	"		
	896	AIa	36.0	20.3	9.5	6.3	"	607	
	955	BIb	24.7	15.2	5.8	2.5	"		
	1097	BIa	39.6	63.5	8.9	18.5	"	608	
	1198	(DI+BI)a	59.5	33.6	12.0	17.7	"	603	
	1238	BIa	23.8	30.5	7.0	3.6	"	606	
	1253	CIa	20.5	25.7	6.0	3.5	"		
	1395	BIIa	26.6	34.8	13.2	9.2	"	609	
	1479	BIa	24.5	29.8	9.2	7.5	ch	600	
	S-1	DIb	31.0	60.9	15.2	22.1	ob	605	
	S-1	CIa	24.8	35.2	8.3	4.8	"	612	Noダブリ
石鏃	294	AII	18.3	21.2	5.0	2.1	"		
	371	"	16.2	17.9	4.5	1.5	"	615	
	558	"	18.5	25.8	6.5	2.2	"	617	
	828	AI	50.2	23.8	12.2	19.8	ch	618	
	874	"	(35.8)	13.8	8.7	(3.4)	ob	614	錐部先端欠
	1027	AII	30.2	37.9	8.3	5.6	"	619	
	1070	"	25.0	23.0	5.8	2.7	"	620	
	1276	"	24.5	47.8	8.6	8.9	"	616	
P·e	17	CI	20.4	21.6	3.3	1.1	"		
	18	DI	24.5	14.3	8.5	2.3	"		
	18	CI	22.2	19.3	10.6	3.5	"		Noダブリ

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P·e	44	CI	30.2	20.2	8.2	5.0	ob		
	80	DI	30.2	14.5	9.2	4.0	"		
	93	BI	29.0	25.3	11.7	5.5	"		
	132	CI	25.3	18.2	8.0	2.4	"		
	202	"	15.5	10.8	5.8	0.9	"		
	305	"	33.3	18.3	7.5	4.4	"		
	310	"	(29.6)	14.2	4.8	(1.8)	"		下端欠
	371	DI	18.8	9.8	6.5	1.1	"		
	374	BI	28.2	22.3	9.8	5.3	"		
	493	DI	29.8	13.2	6.2	2.4	"		
	515	CI	26.0	10.8	2.0	0.5	"		
	527	"	21.5	15.4	8.9	2.7	"		
	548	BI	20.7	27.2	17.2	8.6	"		
	636	CI	21.2	13.8	7.0	2.1	"		
	641	"	(26.4)	24.5	6.3	(4.4)	"		下端欠
	655	DII	39.3	15.7	10.0	3.4	"		
	686	CI	18.6	14.0	3.0	0.8	"		
	808	CII	32.4	20.8	5.8	3.7	"		
	858	"	21.8	14.3	6.5	2.2	"		
	900	CI	22.5	13.7	6.7	2.1	"		
	906	"	20.5	12.7	4.7	1.2	"		
	909	"	17.1	11.9	4.0	0.8	"		
	937	"	23.0	15.7	8.2	2.9	"		
	952	"	24.2	30.3	8.2	5.6	"		
	979	BI	26.0	19.9	12.7	5.2	"		
	980	CI	29.8	25.9	5.2	4.1	"		
	990	"	22.0	15.0	7.2	1.8	"		
	1013	"	14.8	13.0	9.5	2.0	"		
	1038	"	21.4	17.7	7.8	3.0	"		
	1090	DI	40.0	11.2	9.0	2.5	"		
	1161	CI	27.0	18.2	4.8	2.6	"		
	1182	DI	26.5	14.3	12.8	3.4	"		
	1185	CII	22.0	17.3	7.8	3.1	"		
	1194	CI	19.3	14.7	9.4	3.2	"		
	1271	"	20.8	26.3	7.8	3.6	"		
	1298	"	24.5	20.8	6.8	2.6	"		
	1306	CII	24.7	19.3	7.3	2.0	"		
	1313	CI	18.2	14.3	7.0	1.5	"		
	1325	"	18.3	18.6	6.5	2.3	"		
	1341	"	21.2	15.0	8.3	2.6	"		
	1371	"	25.3	19.9	8.2	4.2	"		
	1374	DI	(38.8)	9.7	6.1	(2.0)	"		下端欠
	1375	"	23.5	9.8	6.8	1.5	"		
	1389	CI	30.2	20.2	8.2	5.0	"		
	1389	"	23.8	18.7	8.5	2.6	"		Noダブリ
	1390	"	(27.5)	11.2	3.5	(1.2)	"		下端欠
	1414	BI	21.4	13.5	9.3	2.5	"		
	1414	CI	26.8	19.5	8.8	4.0	"		Noダブリ
	1415	CII	18.8	18.3	5.7	2.1	"		Noダブリ
	1452	DI	24.0	12.6	9.5	3.0	"		
	1486	"	27.2	13.5	8.2	2.5	"		
	1489	CI	20.6	19.4	5.8	2.2	"		
	Z-10	"	22.5	11.7	4.5	1.3	"		
	Z-11	CII	18.7	14.0	4.8	1.3	"		
	Z-12	CI	20.6	20.9	7.5	3.9	"		
	Z-13	DI	22.4	15.1	8.7	2.3	"		
	Z-14	CI	20.7	12.0	6.7	1.7	"		
有頭 抉磨	364		43.9	28.9	8.5	11.0	"		622
	742		26.2	17.3	5.6	2.4	"		623
	1086		39.0	27.2	9.8	8.4	"		621
U·f	8	(C+A)Ia	39.3	32.8	16.6	13.8	"		
	23	CIa	39.8	21.2	8.7	5.4	"		
	26	AIa	35.3	33.5	9.4	6.3	"		
	37	"	32.3	25.7	6.2	3.4	"		
	43	(B+A)Ia	30.8	35.3	9.4	7.7	"		
	53	AIa	29.9	22.6	7.5	3.6	"		
	53	CIa	26.2	15.5	4.1	(1.4)	"		Noダブリ
	58	(A+B)Ia	25.0	12.3	4.5	1.1	"		刃部一部欠
	83	CIa	32.6	21.5	6.8	3.1	"		
	88	AIa	26.0	15.2	3.2	1.1	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	125	CIIa	22.8	22.3	5.9	1.7	ob			U-f	968	AIa	32.0	15.2	5.2	2.1	ob		
"	126	BIa	20.8	16.8	3.4	1.0	"			"	974	BIc	23.7	34.5	15.6	10.7	"		
"	145	(C+C)Ia	23.3	13.5	3.3	0.9	"			"	980	CIa	20.0	20.2	3.8	1.7	"		Naダブリ
"	158	CIa	20.8	24.8	9.3	2.4	"			"	988	(C+B)Ia	20.5	15.2	1.5	0.4	"		
"	165	BIa	17.2	16.7	3.8	1.1	"			"	991	AIa	25.7	34.2	6.8	3.7	"		
"	175	AIa	33.9	23.6	8.2	5.6	"			"	995	(C+A)Ia	19.0	33.7	8.0	4.4	"		
"	203	BIa	18.2	29.3	7.2	2.5	"			"	1001	BIb	32.4	25.2	16.8	5.8	"		
"	207	CIIb	32.2	22.3	9.0	4.6	"			"	1038	CIa	21.8	15.3	1.8	1.2	"		
"	218	CIIa	23.0	39.8	9.0	5.1	"			"	1038	AIa	25.3	22.5	3.5	0.7	"		Naダブリ
"	224	(B+A+C)Ia	21.2	32.0	6.5	3.9	"			"	1063	"	14.0	22.4	6.8	1.5	"		
"	250	CIa	32.6	32.5	7.2	5.6	"			"	1063	"	30.2	15.5	4.3	1.9	"		Naダブリ
"	260	AIa	20.5	30.3	11.2	4.7	"			"	1063	CIa	21.8	12.2	6.8	1.4	"		Naダブリ
"	260	"	19.2	35.2	7.4	3.4	"		Naダブリ	"	1066	(A+C)Ia	26.0	19.8	4.0	1.1	"		
"	272	"	29.7	18.7	12.6	4.1	"			"	1069	C(I+I)a	26.2	15.5	5.3	1.9	"		
"	284	"	20.5	31.7	10.3	4.1	"			"	1069	(C+C)Ia	20.3	20.8	8.2	1.7	"		Naダブリ
"	286	"	32.8	27.2	11.6	8.0	"			"	1073	AIa	22.8	23.0	2.9	1.2	"		
"	304	BIb	21.3	50.3	13.3	11.8	"			"	1095	"	26.8	14.3	5.2	1.6	"		
"	309	CIa	25.8	15.2	4.2	1.8	"			"	1095	(C+B)Ia	23.8	16.8	6.8	2.3	"		Naダブリ
"	320	(A+C)Ia	24.0	13.9	4.0	1.2	"			"	1112	AIa	22.5	16.8	2.4	1.1	"		
"	327	AIa	39.8	33.5	8.2	7.0	"			"	1130	(C+A+C)Ia	18.8	23.8	5.7	2.3	"		
"	340	(B+A)Ia	16.7	30.8	8.3	2.2	"			"	1149	AIa	22.0	20.5	6.8	2.2	"		
"	357	CIa	16.0	17.8	3.9	0.7	"			"	1167	BIa	28.3	24.7	8.0	4.7	"		
"	367	AIa	38.5	31.8	8.1	5.7	"			"	1182	AIb	19.3	18.2	6.2	1.5	"		
"	392	CIa	40.7	17.7	3.5	2.0	"			"	1210	C(I+II)a	26.4	30.5	6.7	3.3	"		
"	403	BIa	11.9	17.0	2.5	0.5	"			"	1245	AIa	37.0	33.1	10.6	7.7	"		
"	424	AIa	24.2	14.3	5.2	1.3	"			"	1245	(A+A)Ia	18.8	23.2	3.8	1.3	"		Naダブリ
"	431	(C+C)Ia	28.2	24.3	6.6	3.3	"			"	1247	(C+C)Ia	40.3	17.2	12.3	4.8	"		
"	437	CIa	22.2	21.7	4.3	2.1	"			"	1252	AIa	43.6	35.2	3.2	3.7	"		
"	460	BIa	22.7	15.7	3.5	0.8	"			"	1271	(A+A+C)Ia	19.5	21.5	10.5	1.7	"		
"	460	AIa	25.0	30.8	4.6	3.3	"		Naダブリ	"	1273	BIa	29.3	25.0	5.4	3.1	"		
"	471	CIa	25.6	17.2	4.0	1.2	"			"	1281	(C+C)Ia	29.3	23.0	4.5	1.9	"		
"	471	CIIa	29.8	19.0	7.3	2.3	"		Naダブリ	"	1296	AIa	24.0	18.3	3.8	1.2	"		
"	472	AIa	24.2	26.2	4.7	4.4	不明			"	1297	CIa	23.8	21.7	6.8	2.8	"		
"	502	"	22.5	19.2	2.8	1.0	ob			"	1322	AIa	19.2	19.2	4.1	1.1	"		
"	525	BIa	21.7	12.3	8.5	1.6	"			"	1355	CIa	21.5	20.0	3.5	0.9	"		
"	554	(C+B)Ia	33.5	24.7	5.7	3.3	"			"	1361	A(I+II)a	39.2	50.1	14.5	17.2	"		
"	558	(A+A+A)Ia	16.8	17.1	4.0	1.5	"			"	1363	(A+C+A)Ia	21.5	20.7	7.6	3.3	"		
"	569	(C+A)Ia	24.0	29.3	6.3	3.4	"			"	1365	BIa	42.3	27.6	9.4	8.7	"		
"	607	CIIb	25.7	25.7	5.0	3.1	"			"	1378	"	32.4	20.4	6.0	2.2	"		
"	628	CIa	31.0	22.8	5.5	3.6	"			"	1378	AIIa	15.0	15.0	3.0	0.8	"		Naダブリ
"	636	(C+C)Ia	20.8	21.3	9.5	0.9	"			"	1388	BIa	22.5	20.5	5.3	1.6	"		
"	636	CIa	17.2	18.3	3.8	2.3	"		Naダブリ	"	1397	AIa	20.8	26.2	10.8	3.7	"		
"	667	(B+B)Ib	47.5	29.5	9.0	14.0	"			"	1399	CIa	23.5	27.5	6.0	3.0	"		
"	686	(C+A)Ia	26.5	25.0	4.5	1.9	"			"	1415	AIa	21.3	21.0	8.0	2.3	"		
"	695	AIa	17.3	22.7	11.8	5.7	"			"	1418	(A+C+A)Ia	21.5	17.8	3.5	1.0	"		
"	696	(A+C)Ia	31.5	20.9	3.4	1.5	"			"	1425	BIa	35.7	27.8	8.3	5.8	"		
"	719	BIa	15.2	15.7	6.5	0.8	"			"	1429	(C+A)Ia	37.3	37.4	8.2	8.1	"		
"	719	(B+A)Ia	26.2	26.2	6.2	3.0	"		Naダブリ	"	1430	AIa	20.0	18.5	4.3	1.2	"		
"	726	(C+C)Ia	22.0	18.3	5.2	1.5	"			"	1430	CIa	22.8	19.8	5.9	1.6	"		Naダブリ
"	730	CIa	18.2	22.2	3.5	1.5	"			"	1433	"	21.0	30.7	5.8	3.1	"		
"	750	AIa	18.9	13.7	1.8	0.5	"			"	1439	(A+A)Ia	24.1	21.0	5.5	2.1	"		
"	752	(C+A)Ia	29.8	28.0	6.4	3.7	"			"	1452	(C+A)Ia	34.6	21.8	5.1	1.7	"		Naダブリ
"	763	AIa	18.2	27.4	5.8	2.6	"			"	1467	AIa	20.5	17.3	5.2	1.6	"		
"	800	BIIa	38.5	24.5	7.7	5.7	"			"	1467	(A+C)Ia	14.3	24.8	3.0	0.8	"		Naダブリ
"	817	BIa	27.6	17.4	6.3	2.2	"			"	1467	CIa	11.8	16.7	2.5	0.5	"		Naダブリ
"	832	"	21.0	17.6	4.5	1.6	"			"	1469	(B+A)Ia	29.8	14.2	4.8	2.2	"		
"	865	(A+C)Ia	33.8	28.8	8.2	5.9	"			"	1473	(C+C+C)Ia	19.8	19.3	4.6	0.8	"		
"	869	CIIa	48.2	32.0	11.3	16.2	"		Naダブリ	"	1477	AIb	28.4	25.8	13.8	7.3	"		
"	882	AIa	26.5	14.5	6.2	1.9	"			"	1484	AIa	29.3	19.2	6.5	3.0	"		
"	889	(A+B)Ia	75.8	45.7	18.8	32.5	"			"	1485	CIa	29.6	22.4	10.5	6.5	"		
"	895	CIIa	30.8	7.3	9.2	1.2	"			"	1489	(A+B)Ia	23.4	12.5	5.2	1.1	"		Naダブリ
"	898	(B+B)Ia	18.3	26.5	7.0	2.5	"			"	Z-1	AIa	21.5	25.8	7.4	3.2	"		
"	906	CIa	28.7	24.7	9.6	3.1	"			"	Z-2	"	34.0	19.4	7.0	3.7	"		
"	906	(C+A)Ia	26.0	16.2	6.0	1.1	"		Naダブリ	"	Z-3	CIIa	22.7	15.8	11.6	4.6	"		
"	909	AIa	19.8	27.8	6.8	2.1	"			"	Z-4	CIa	14.3	18.6	4.3	0.9	"		
"	923	CIa	22.6	32.3	7.2	3.3	"			"	Z-5	"	22.5	33.7	7.6	3.4	"		
"	942	AIa	23.2	15.4	7.7	2.4	"			"	Z-6	(A+A)Ia	14.8	22.0	3.7	1.4	"		
"	953	BIa	30.0	21.2	8.2	3.7	"			"	Z-7	(A+C)Ia	23.6	27.5	13.4	6.8	"		
"	953	AIc	52.7	25.0	17.7	21.4	"		Naダブリ	"	Z-8	C(I+II)a	30.8	40.3	9.5	6.0	"		
"	959	AIIa	31.8	36.8	14.3	10.7	"			"	Z-9	AIa	36.4	15.8	4.0	1.7	"		



器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
打製	348	—	(8.6)	(3.1)	(1.6)	(6.0)	Ry		
石斧	1385	横刃	5.0	6.8	0.7	36.8	Qd		
凹石	1	II Eab	10.4	9.7	5.6	725	An		
"	172	II Ga	12.4	5.4	4.4	245	"		
"	312	II Cac	10.7	8.8	4.6	510	"		
"	366	III Cac	15.2	12.0	6.5	1640	"		
"	384	II Ca	8.6	4.6	2.7	115	"		
"	438	II Da	8.6	5.7	4.1	215	"		
"	687	II Dac	10.6	6.4	4.7	395	"		
"	810	—	(6.1)	2.4	3.9	(100)	"		
"	866	II Ga	12.8	5.7	2.8	210	"		
"	950	—	(9.2)	6.3	2.9	(260)	"		
"	970	—	(9.6)	6.1	2.1	(140)	"		
"	1184	II Ca	(9.5)	8.6	4.4	(335)	"	破損	
"	1191	II Ga	14.9	5.9	3.2	245	"		
"	69柱内	II Da	10.4	6.1	4.7	360	"		
新製	7233	A(x.0') 珠状耳飾	(10.2)	2.9	1.4	69	Sp		断面形丸遺物紛失

住居址71

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	37	— c	(16.5)	(12.7)	4.5	(0.7)	ob		
"	136	III a	16.8	(10.6)	2.5	(0.2)	"		C B
"	186	F V b	11.6	12.5	2.3	0.3	"	701	
"	252	G III a	25.8	13.3	2.8	0.6	"	689	
"	519	I V b	16.8	16.7	5.5	1.3	"	699	
"	531	III a	17.9	13.7	3.0	0.5	"	693	
"	744	F V b	15.5	13.6	3.5	0.5	"	698	
"	763	H V (a)	(15.7)	12.9	2.6	(0.4)	"		A
"	786	G III a	17.5	11.8	4.8	0.4	"	695	
"	787	— b	(16.8)	(13.7)	(3.6)	(0.6)	"		F
"	874	I V b	9.6	9.0	1.5	0.2	"		
"	881	F I —	(12.5)	12.4	2.0	(0.3)	"		A
"	1266	E III b	18.9	(14.6)	2.3	(0.4)	"	696	B
"	1342	— IV c	21.8	16.3	7.8	2.2	"		未製品
"	1433	C V a	15.7	(13.0)	2.2	(0.3)	"		B
"	1556	G III a	22.3	14.1	3.7	0.8	"	692	
"	1657	"	24.0	(17.2)	2.6	(0.6)	"	691	B
"	1703	H III c	11.6	12.8	2.6	0.3	"	697	
"	1780	H V b	13.7	12.0	3.0	0.4	"	700	
"	1927	I V b	25.2	(13.8)	6.8	(1.7)	"		B
"	1975	H V —	(16.5)	23.2	3.6	(1.1)	"	690	A
"	1875	平基 V b	26.2	(16.8)	4.0	(1.2)	"	694	B No. グブリ
石 匙	195	C III c	51.0	41.9	8.7	11.3	Ry		
"	1304	AI (c+c)	(45.9)	22.3	10.2	(5.8)	ch	703	先端欠
"	1549	B III a	28.9	42.5	4.3	4.6	Sh	702	
Sc	2	D I a	60.3	28.8	12.8	13.4	ob	707	ob 集中区内
"	6	B II a	26.7	26.2	7.6	2.8	"		
"	35	(A+A) I a	29.6	20.1	5.5	2.4	"	709	
"	239	C II a	(21.3)	31.8	7.0	(4.1)	"		刃端部欠
"	408	B II a	28.8	(22.8)	5.2	(2.9)	"		刃端部欠
"	444	C I a	22.3	15.5	4.6	1.4	"		
"	580	B II a	(10.3)	(15.8)	(3.7)	(0.6)	"		半欠
"	1154	B I a	20.7	23.8	6.4	2.1	"	710	
"	1879	C I c	20.9	25.3	13.3	5.6	"		
石 錐	131	A II	29.3	28.0	4.2	2.3	"	705	
"	418	A I	31.3	14.0	7.4	2.1	"		
"	1181	"	(29.8)	12.8	5.0	(1.7)	"		錐部先端欠
"	1275	A II	(25.3)	11.4	3.2	(0.7)	"		錐部先端欠
"	1702	"	19.0	5.1	3.7	1.1	"	706	
"	1756	— I	(16.5)	(5.4)	(3.0)	(0.3)	Sh		錐部のみ
"	1978	A I	27.2	17.2	7.2	2.5	ob	704	
P·e	20	C I	35.6	32.6	8.3	11.6	"	708	
"	112	D I	25.2	14.6	14.0	2.3	"		
"	161	C I	21.9	23.8	6.0	1.2	"		
"	281	"	15.8	20.2	3.7	1.2	"		
"	286	C III	22.8	30.8	11.2	7.0	"		
"	385	C I	25.0	17.2	5.0	1.5	"		
"	386	D I	31.4	15.0	8.5	3.0	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P·e	388	D I	36.6	12.4	6.5	2.4	ob		
"	491	"	(19.0)	12.0	7.1	(1.5)	"		下端欠
"	572	"	30.7	10.0	10.8	2.8	"		
"	595	"	31.2	13.6	6.8	2.7	"		
"	665	C I	23.2	21.5	5.9	2.8	"		
"	782	C II	25.8	27.1	6.3	4.4	"		
"	839	C I	(22.0)	13.3	4.0	(1.1)	"		下端欠
"	902	B I	19.8	14.3	17.2	5.3	"		
"	953	D I	26.8	15.2	17.3	5.9	"		
"	1055	"	18.2	10.2	8.6	1.5	"		
"	1123	"	21.2	12.5	7.8	1.2	"		
"	1180	"	20.9	12.8	8.8	2.4	"		
"	1325	B II	38.3	16.9	13.6	8.1	"		
"	1345	C I	28.0	21.8	4.3	2.0	"		
"	1415	D I	19.0	10.8	8.6	1.6	"		
"	1455	C I	32.5	15.2	2.8	1.5	"		
"	1535	D I	18.6	13.8	5.6	1.4	"		
"	1552	"	24.2	12.0	6.7	2.5	"		
"	1552	"	(44.5)	12.0	9.1	(3.9)	"		No. グブリ
"	1625	"	47.2	15.7	5.8	4.3	"		
"	1876	"	21.3	14.3	10.3	2.9	"		
"	1926	C I	16.3	12.3	4.6	1.0	"		
"	1939	"	24.8	22.5	6.8	4.8	"		
"	Z-3	A(B) I	25.7	22.8	11.6	7.8	"		
"	Z-5	C I	19.4	16.5	8.6	2.4	"		
"	Z-6	B I	19.8	16.2	12.2	3.1	"		
"	Z-7	C I	25.0	11.5	3.3	1.1	"		
"	Z-8	D I	(18.5)	10.8	4.0	(0.7)	"		下端欠
U·f	29	A I a	20.7	22.3	6.4	2.2	"		
"	137	C II a	20.1	28.4	11.3	5.1	"		
"	137	A I a	19.6	18.8	3.3	1.2	"		No. グブリ
"	141	C I b	31.3	53.8	10.6	16.1	"		
"	156	A I a	16.4	27.3	4.8	2.6	"		
"	212	"	42.1	15.6	4.3	2.2	"		
"	508	"	25.2	20.3	8.7	3.5	"		
"	546	(C+A) I a	32.4	25.8	4.4	2.7	"		
"	563	A I a	34.2	13.8	5.6	2.2	"		
"	601	C I a	23.5	25.0	4.8	1.9	"		
"	662	B I a	28.9	31.4	7.6	5.1	"		
"	858	(C+AI) a	19.7	22.1	5.0	2.0	"		
"	1274	A I a	18.8	25.4	5.3	1.6	"		
"	1318	C I a	20.0	13.6	4.4	0.8	"		
"	1326	A I a	27.6	18.0	7.8	3.6	"		
"	1360	"	23.5	23.4	6.5	3.1	"		
"	1363	(A+C) I a	24.3	23.8	4.7	2.3	"		
"	1626	C I a	43.4	22.5	5.2	3.6	"		
"	Z-1	A I a	26.2	15.4	3.8	1.0	"		
"	Z-2	"	18.5	30.0	7.2	2.8	"		
"	Z-4	C II a	20.6	12.7	4.6	1.0	"		
石核状石	5		21.8	43.4	12.0	7.8	"		
"	36		32.1	49.8	13.0	15.2	"		
"	780		30.2	33.0	9.4	8.0	"		
"	1296		24.2	27.8	10.8	6.2	"		
磨製凹石	1751	A 1	(12.0)	(3.6)	(3.3)	(220)	Ry		B <sub>3</sub>
"	412	I Aabc	9.8	8.1	4.9	470	An		
"	976	II Ca	9.4	7.1	3.1	195	"		
"	1529	"	12.0	9.5	4.4	520	"		

住居址37

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	110	G III —	(19.6)	17.3	3.0	(0.8)	ob		A
"	247	D IV a	22.7	(15.5)	3.0	(0.6)	"		鋸歯状 B
"	368	I V e	14.0	13.5	3.6	0.6)	"	226	
"	464	H IV a	13.8	(9.8)	2.1	(0.2)	"	222	B
"	488	(F) (IV) —	(19.4)	(14.2)	(3.4)	(0.6)	"		E
"	558	F IV c	13.5	12.4	2.5	0.3	"		
"	610	I V —	(16.2)	(11.7)	(2.5)	(0.4)	"		E
"	706	III a	15.3	14.8	3.5	0.5	"	224	

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	
石 鎌	718	---c	(17.5)	(13.9)	4.1	( 0.7)	ob		(片脚製作時)C	
	787	円基V-	(18.0)	(11.0)	( 3.1)	( 0.5)	"		E	
	989	---	(15.7)	(12.7)	( 3.2)	(0.65)	"		G	
	1015	円基Vb	18.7	11.0	3.8	0.7	"		"	
	1103	HIII-	(16.0)	(13.8)	4.0	( 0.7)	ch		D	
	1128	---e	(17.6)	(15.6)	( 4.8)	( 0.7)	ob		鋸齒状F	
	1212	HIIIb	16.3	(16.3)	2.6	( 0.5)	"		B	
	1259	ANb	12.6	14.6	2.9	0.3	"	216		
	1362	(E)(IV)-	(10.7)	15.7	2.6	( 0.4)	"		A	
	1401	HVb	17.2	16.2	3.1	0.7	"	220		
	1570	GVa	18.0	14.2	3.0	0.5	"	221		
	1690	IIIIa	15.2	(12.2)	2.8	( 0.4)	"		B	
	1818	GVa	18.0	12.9	3.0	0.5	"	218		
	1830	GIIa	16.5	10.3	2.7	0.3	"	223		
	1831	GIIIa	19.7	11.2	3.0	0.4	"	219		
	1864	"	28.9	14.7	5.2	1 35	"		鋸齒状	
	1964	HVb	15.5	11.2	3.1	0.4	"	217		
	2007	平基Vb	22.3	15.8	5.2	1.6	"	225		
	尖頭状 石 匙	1245	(円基)V(d)	(37.4)	30.5	8.3	( 9.0)	ch	227	未製品
		149	AIa	55.0	21.0	6.5	6.7	ob	228	
		197	CIIIa	37.0	45.0	5.6	7.5	sh	231	
		754	AII(c+c)	57.3	21.4	6.3	3.7	ob	229	
		953	AI(a+a)	(39.6)	23.8	6.0	( 4.4)	"	230	刃部先端欠
		1623	CIII(a+b)	52.6	(41.8)	10.7	(15.1)	ch	232	刃部先端欠
		2276	(A)I-	(28.3)	(24.3)	(11.6)	( 6.9)	ob		刃部欠
		2406	BI(b)	35.0	36.8	8.5	11.3	ch		
		578	BIb	39.2	25.8	6.5	7.85	不明		
		762	AIa	21.3	14.5	3.8	1.1	ob		
	895	BIIa	18.3	18.7	4.4	1.3	"			
	1358	BIa	36.8	25.2	8.4	6.3	ch			
	1654	"	22.8	16.4	5.4	1.2	ob			
	1961	(B+B)Ia	28.0	38.7	12.3	10.2	"			
2192	BIa	48.7	20.5	5.8	4.5	"	246			
Z-1	(C+A)Ia	65.5	32.2	12.8	26.6	Ry		埋土		
Z-3	BIIa	17.0	13.0	2.4	0.7	ob				
63	AII	15.7	25.8	6.8	1.9	"	235			
263	AI	27.8	18.6	4.2	1.6	"	237			
734	"	29.8	21.8	6.0	1.0	"	233			
862	"	26.3	16.2	4.0	1.0	"	234			
964	AII	21.0	14.5	6.1	1.2	"				
1078	AI	(27.0)	14.8	7.2	( 1.4)	"		先端欠		
1231	AII	18.6	15.4	3.2	0.7	"				
1308	"	19.0	23.3	5.2	1.5	"	249	U·f?		
2144	AI	17.6	20.8	4.7	1.9	"	236			
Z-2	"	24.8	7.3	3.0	0.5	"				
Z-4	AII	27.0	21.5	7.2	2.7	"				
Z-5	"	17.3	15.8	3.3	0.9	"				
P·e	136	CI	21.0	22.4	8.8	3.0	"			
189	A(C)	23.5	17.0	12.5	4.1	"				
543	CI	21.0	19.8	8.7	3.8	"				
856	DI	39.3	15.6	12.6	5.5	"		U·fを転用		
881	CI	21.5	27.9	8.2	3.9	"	239			
964	"	19.8	11.5	3.2	0.8	"				
1112	"	25.8	23.5	7.9	4.9	"				
1567	"	17.8	19.0	7.2	2.2	"				
1670	CII	34.0	22.5	8.2	7.3	"				
1689	"	18.6	13.8	4.1	1.2	"	238			
205	有 扶 磨	33.8	20.9	6.9	4.0	"	242			
217	"	27.7	21.7	5.8	5.2	"	241			
1195	"	29.7	27.5	6.6	3.1	"	240			
2351	"	29.3	12.3	6.8	2.2	"	243			
U·f	16	CIa	26.5	9.6	7.3	1.1	"		ピエス(CI-下 端欠)の転用	
	51	CIb	27.8	22.3	6.2	2.2	"			
	53	(A+A)Ia	24.3	16.3	7.5	2.3	"			
	53	AIa	14.0	26.8	4.7	1.5	"			
	99	"	23.7	16.4	5.8	1.8	"			
	102	AIIa	17.8	31.2	12.0	4.5	"			
	157	CIa	23.0	22.7	5.3	2.2	"			
	182	CIIa	19.3	22.4	10.3	2.4	"			
	187	AIb	29.2	35.3	10.3	11.0	"			
	85	凹 石	85	II Ca	13.3	7.6	5.2	635	An	
	88	II Cac	( 9.3)	8.5	4.7	( 480)	"			
103	II Ca	10.0	6.5	3.2	205	"				
625	I Aabc	10.9	7 5	4.0	425	"				
698	II Cac	13.5	7.1	4.6	( 350)	"		破		
774	IIDa	9.5	5.1	3.8	205	"				
887	II Ca	8.5	8.9	4.9	310	"				
1236	"	9.6	6.4	2.7	260	"				
2356	II Cac	12.8	9.2	5.0	765	"				

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U·f	231	(CII+AI)a	32.9	40.0	9.8	7.9	ob		
	266	BIa	31.7	34.5	2.5	1.8	"		
	349	AIa	35.8	29.3	10.8	8.4	"		
	353	(CI+AI)a	29.6	36.8	7.8	11.0	ch	245	
	365	AIa	41.7	22.6	7.4	6.7	ob		
	391	(B+C)Ia	33.4	23.8	6.3	3.7	"		
	410	BIb	24.5	16.4	7.8	2.5	"		ピエス(DI-下 端欠)の転用
	489	AIa	23.6	23.2	5.3	2.8	"	251	
	494	CIa	16.8	14.2	5.2	1.0	"		
	498	AIa	14.4	26.1	4.3	1.0	"		
	610	BIa	17.6	17.2	3.4	0.8	"		
	610	CIIa	21.3	19.3	2.6	1.1	"		247
	689	(C+A)IIa	32.5	13.7	4.3	1.9	"		
	738	AIa	18.1	19.5	7.2	1.7	"		
	805	"	55.2	30.5	10.8	6.5	"		
	812	(C+A)Ia	16.3	28.3	5.7	2.3	"		
	856	AIIa	27.1	24.4	6.0	5.1	"		
	893	BIa	29.6	31.6	7.8	6.2	"		
	895	AIa	30.0	32.6	10.2	6.35	"		
	895	BIIa	13.6	32.3	4.0	1.5	"		
	903	CIa	21.0	17.2	5.5	1.8	"		
	950	(C+C)Ia	34.2	17.8	5.6	2.3	"		
	1099	CIa	23.8	16.4	6.3	1.8	"		
	1154	BIa	19.8	24.8	4.3	1.3	"		
	1222	AIa	25.7	16.4	8.5	2.0	"		
	1227	"	18.6	31.5	7.0	2.1	"		
	1231	"	21.8	14.2	7.2	1.8	"		
	1231	CIa	12.2	15.8	1.5	0.3	"		
	1262	AIb	37.6	32.4	5.9	7.2	不明		
	1269	(C+C)Ia	42.5	26.0	11.5	11.5	ob		
	1282	CIa	22.0	17.7	4.0	1.2	"		
	1295	"	19.5	13.8	4.5	0.8	"		250
	1311	AIIa	33.0	14.0	5.0	2.4	"		
	1353	CIa	24.6	19.8	8.2	2.3	"		
	1489	"	39.4	21.8	11.5	9.9	"		
	1546	(B+B)Ia	18.7	25.5	5.6	1.6	"		
	1550	CIa	25.5	16.5	5.6	1.7	"		
	1647	AIa	19.0	31.7	5.0	2.5	"		
	1745	(A+A)Ia	22.0	18.3	6.5	1.8	"		石鎌未製品?
	1775	(CII+BI)a	20.7	22.5	4.8	11.1	"		
	1872	(C+A)Ia	14.8	20.3	5.4	0.9	"		
	1876	AIIa	27.0	10.8	8.7	1.9	"		
	1889	AIa	21.4	17.3	7.2	2.4	"		
	1916	CIIa	34.3	10.8	6.4	1.4	"		
	1926	CIa	28.0	13.9	7.6	1.7	"		
	1929	"	25.0	23.2	8.2	3.7	"		
	2019	(C+C)Ia	35.6	19.2	6.4	2.3	"		
	2026	BIa	14.0	18.9	5.7	0.9	"		
	2064	CIa	24.3	34.6	5.9	3.8	"		
	2133	"	23.8	16.3	8.2	2.3	"		
	2180	(A+C)Ia	26.2	17.5	12.4	4.65	"		ピエス(CI-下 端欠)の転用
	2211	AIIb	24.8	15.4	6.3	3.7	"		
	2227	AIa	25.2	19.6	5.5	1.8	"		
2324	BIIb	23.4	12.6	8.0	2.2	"		ピエス(DI-下 端欠)の転用	
2347	BIa	28.6	14.8	4.0	1.4	"			
2354	AIb	29.8	37.6	8.7	5.2	"			
2367	AIa	43.5	17.2	5.3	4.0	"			
2387	CIIa	23.6	38.3	8.5	5.4	"			
2388	(BII+AI)a	29.3	17.7	6.5	0.4	"			
2407	(B+A)Ia	31.7	31.4	8.2	8.7	"		244	
2419	(C+C)IIa	26.2	17.5	12.4	4.7	"		248	

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹石	2358	ⅡEac	9.2	8.0	5.4	470	An		
"	2360	ⅡGa	11.5	7.4	5.6	530	"		
"	2380	ⅡAa	12.8	6.0	3.4	305	"		
	Z	ⅡDa	13.1	11.5	8.9	1600	"		
先端磨	2357	B(2.1)	106	53	27	220	"		
"	2418	A(2.x')	137	31	20	158	"	1680	No.6909欄にも使用 既あり。断面形丸 No.6914一添 定欠欄に 使用既あり 断面形角

住居址56

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	294	(A)Ⅲ-	(16.8)	(14.5)	2.5	(0.4)	ob	655	D
"	593	Ⅳ-	(24.5)	21.5	4.8	(2.2)	"	658	A 未製品
"	600	ⅣⅤb	23.8	(15.8)	4.6	(1.0)	"	657	B(製作時)
"	Z-1	(F)(Ⅳ)-	(12.3)	(12.4)	(2.3)	(0.3)	"		E 埋土
"	Z-2	円基(Ⅲ)-	(14.8)	(11.0)	(1.8)	(0.3)	"		E "
"	Z-3	(F)(Ⅲ)-	(9.5)	(15.6)	(2.8)	(0.3)	"		E "
"	Z-4	FⅣb	13.3	(12.8)	3.3	(0.3)	"	656	B "
石匙	204	AI(a+a)	51.7	43.3	8.9	16.3	"	660	
"	464	AM(c+b)	36.0	18.2	5.6	2.3	"		
Sc	147	BⅡa	20.0	15.9	3.7	1.2	"		
"	259	CⅠa	21.8	30.5	10.7	6.0	"	663	
"	Z-10	BⅠa	19.8	20.6	4.5	1.5	"		埋土
"	Z-11	BⅡa	32.8	23.1	4.6	4.0	"	662	"
"	Z-12	CⅠa	21.4	31.2	10.5	5.9	"		"
"	Z-13	BⅡa	21.0	21.8	3.0	1.2	"		"
石錐	380	AⅠ	(20.5)	20.0	6.4	(2.2)	"	664	先端欠
"	541	AⅡ	22.0	24.1	9.8	3.0	"		
"	Z-5	AⅠ	(23.9)	13.8	4.0	(1.1)	"	665	埋土 先端欠
"	Z-6	AⅡ	15.2	9.4	3.3	0.5)	"	666	埋土
P·e	6	CⅠ	25.0	22.7	9.0	3.8	"		
"	54	DⅡ	17.5	8.3	5.6	0.8	"		
"	113	BⅠ	(32.5)	14.2	11.4	(5.9)	"		下端欠
"	143	CⅠ	17.6	16.2	5.3	1.5	"		
"	144	DⅠ	(32.5)	16.2	6.8	(3.4)	"		下端欠
"	180	CⅠ	(25.2)	17.5	6.8	(3.4)	"		下端欠
"	191	"	27.0	26.7	7.2	4.9	"		
"	206	"	27.5	24.0	9.1	5.7	"		
"	257	"	20.7	22.0	7.8	2.3	"		
"	343	"	16.2	12.4	3.8	0.6	"		
"	349	"	(20.8)	16.0	6.2	(1.6)	"		下端欠
"	357	BⅠ	38.6	31.5	20.7	12.6	"		
"	362	DⅠ	23.8	8.8	5.8	1.4	"		
"	395	A(C)Ⅰ	18.9	19.8	7.3	2.6	"		
"	404	DⅠ	(22.5)	10.8	7.2	(1.6)	"		下端欠
"	418	BⅠ	(17.0)	9.3	11.2	(2.1)	"		下端欠
"	479	CⅢ	28.0	34.5	9.0	8.6	"		
"	561	CⅠ	22.4	16.4	5.3	1.5	"		
"	562	DⅠ	(20.8)	13.0	6.1	(1.4)	"		下端欠
"	580	BⅠ	21.3	16.4	12.5	3.0	"		
"	604	DⅠ	27.5	13.0	4.8	1.5	"		
"	Z-7	CⅠ	17.1	14.9	7.5	1.2	"		埋土
"	Z-8	"	26.4	20.0	6.5	3.3	"		"
"	Z-9	"	24.8	12.7	6.6	2.5	"		"
U·f	4	BⅠb	31.0	11.8	13.0	1.3	"		
"	12	AⅠa	28.8	11.7	9.2	2.8	"		
"	15	(B+A)Ⅰa	21.8	19.2	6.1	1.6	"		
"	18	CⅠa	24.0	39.0	9.4	5.9	"		
"	29	AⅠb	13.1	24.8	9.8	2.7	"		
"	64	(A+A)Ⅰb	28.8	21.0	10.5	5.8	"		
"	77	AⅠa	22.6	17.8	6.2	1.7	"		
"	77	"	20.3	21.6	6.2	2.0	"		
"	81	"	12.9	16.9	1.9	0.4	"		
"	96	"	19.4	18.5	2.6	0.7	"		
"	107	AⅠb	13.2	19.8	9.6	1.9	"		ビエス(CⅢ)の転用
"	116	BⅠa	26.9	9.8	4.0	1.0	"		
"	120	AⅠa	23.4	8.7	6.0	0.7	"		
"	128	CⅠa	25.9	14.8	5.3	1.1	"		
"	140	(C+C)Ⅰa	26.2	15.8	5.5	1.6	"		
"	143	(C+A)Ⅰa	24.3	18.4	6.5	2.2	"		
"	143	AⅠa	25.5	23.2	5.7	3.2	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U·f	170	CⅠa	19.6	29.8	3.3	1.2	ob		
"	180	AⅡa	24.0	36.7	10.7	5.7	"		
"	190	(AⅠ+Ⅱ+Ⅲ)Ⅰa	16.7	17.5	3.5	1.4	"		
"	220	(A+A)Ⅰa	19.8	20.3	5.5	1.8	"		ビエス(DⅠ-下 端欠)の転用
"	271	AⅠb	20.3	9.7	5.4	0.7	"		
"	302	BⅠa	20.8	16.6	4.7	1.3	"		
"	305	AⅡa	6.0	10.7	2.5	0.2	"		
"	318	AⅠa	23.8	12.8	5.5	1.1	"		
"	329	"	20.6	28.0	7.0	2.7	"		
"	363	"	14.8	23.0	3.8	1.0	"		
"	365	AⅡa	26.5	11.7	5.6	1.4	"		
"	367	AⅠa	19.8	13.5	3.2	0.8	"		
"	369	"	12.2	13.5	1.9	0.3	"		
"	373	CⅠa	19.9	16.3	1.9	0.5	"		
"	373	(A+A)Ⅰa	26.7	14.5	2.9	0.7	"		
"	384	(B+A)Ⅰa	17.8	31.1	8.2	8.7	"		
"	385	"	21.5	13.7	8.2	0.8	"		
"	402	BⅠa	38.0	20.2	6.6	4.0	"		
"	406	CⅠa	16.8	16.9	2.0	0.5	"		
"	412	AⅠa	37.8	25.2	8.5	4.6	"		
"	414	CⅠa	21.5	29.8	6.8	3.1	"		
"	423	AⅠa	18.7	10.2	1.5	0.4	"		
"	430	"	31.8	12.3	3.5	0.8	"		
"	436	(A+C)Ⅰa	28.8	11.8	5.3	1.6	"		
"	442	AⅠa	23.3	16.3	4.8	1.2	"		
"	449	(A+C)Ⅰa	21.6	18.3	5.4	1.2	"		
"	458	AⅡa	20.0	18.6	3.8	1.1	"		
"	470	AⅠa	20.0	27.0	7.6	2.2	"		
"	475	"	23.2	12.2	5.2	0.9	"		
"	475	"	21.2	13.7	5.8	1.6	"		
"	476	AⅠb	27.8	28.0	9.0	4.2	"		
"	482	AⅠa	10.8	19.0	5.6	1.9	"		
"	483	BⅠa	24.2	17.2	4.3	1.3	"		
"	487	CⅠa	25.0	23.0	7.8	2.3	"		
"	490	"	41.5	31.2	3.9	3.6	"		
"	491	(C+C+C)Ⅰa	17.2	17.8	3.2	0.7	"		
"	529	CⅠa	17.5	22.0	5.5	1.2	"		
"	537	"	17.7	10.6	4.9	0.6	"		
"	590	AⅠa	16.8	12.5	3.1	0.6	"		
"	591	AⅡb	38.8	20.2	11.3	7.3	"		
"	594	AⅠa	13.3	19.8	5.5	1.1	"		
"	602	BⅠa	18.3	15.3	2.7	0.7	"		
"	605	"	16.5	12.5	2.5	0.3	"		
"	P4内	CⅠa	62.8	41.5	9.1	28.2	sh		
"	Z-14	AⅠa	35.5	19.2	4.4	2.1	ob		埋土
"	Z-15	"	21.8	17.7	4.5	0.9	"	659	"
"	Z-16	CⅠa	15.2	8.3	3.2	0.3	"	"	"
"	Z-17	(AⅠ+CⅡ)Ⅰa	25.1	16.6	8.5	3.1	"	"	"
"	Z-18	AⅡa	27.7	14.7	7.5	2.1	"	661	"
"	Z-19	BⅠa	14.7	9.3	1.8	0.3	"	"	"
"	Z-20	AⅠa	20.7	9.5	5.5	1.3	"	"	"
凹石	1	ⅡCac	7.9	6.3	3.7	220	An		破
"	51	-	5.1	6.3	2.6	(90)	"		
"	244	I Aabc	9.3	6.4	3.3	260	"		
"	275	ⅡGa	11.5	6.5	3.9	255	"		

住居址63

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	193	GⅣⅤb	29.0	15.2	3.8	1.25	ob	668	
"	342	CⅣⅤb	15.5	(12.8)	2.8	(0.35)	"	667	B
"	Z-1	-(Ⅳ)Ⅴb	23.5	11.8	3.8	0.75	"	669	未製品
石匙	423	AM(a+a)	40.5	11.6	6.7	2.7	"	670	
Sc	100	BⅠa	71.3	46.2	19.7	60	Ry	672	
"	222	DⅠa	31.2	34.2	6.5	5.1	ob	675	
"	228	BⅠa	34.5	14.2	9.5	3.8	sh		半欠
"	271	CⅠa	16.1	18.9	5.7	1.8	"		
"	283	BⅠa	40.6	28.5	5.2	5.2	ob	671	
"	314	DⅠa	33.0	40.0	8.9	10.2	"	673	
"	323	BⅠa	35.8	20.3	9.6	5.8	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
Sc	327	AIa	19.4	16.4	5.5	1.5	ob		
"	416	(C+B)Ia	23.8	18.0	8.8	4.6	"	674	
石錐	235	AI	48.4	36.8	8.0	(8.7)	不明	676	つまみ一部欠
P.e	131	DI	38.0	11.7	5.6	2.0	ob		
"	222	"	18.0	9.0	7.5	1.1	"		
"	274	CI	19.0	17.3	5.0	1.7	"		
"	424	"	19.2	11.8	6.0	1.1	"	677	
"	428	DI	30.5	13.8	7.0	2.0	"	678	U-fとして転用?
"	533	BI	30.6	13.3	14.1	5.3	"	679	
"	683	DI	20.0	9.8	3.2	0.7	"		
有類	41		25.2	23.3	10.0	5.5	"	680	
扶磨	7	(B+B)Ia	15.7	18.7	4.7	1.4	"		
U-f	40	CIa	23.4	31.4	7.2	5.1	ch		
"	87	BIa	21.8	21.9	9.2	3.8	ob		
"	101	AIa	54.8	33.4	10.6	16.5	"		
"	229	CIa	16.4	20.7	3.8	1.0	"		
"	230	BIa	31.4	23.8	8.1	3.4	"		
"	247	AIa	22.5	21.0	5.5	2.0	"		
"	250	CIIa	22.8	16.2	10.3	2.8	"		
"	278	(G+AI+AM)a	32.3	18.9	9.2	3.7	"		
"	299	CIIa	38.8	20.2	5.6	2.8	"		
"	330	AIa	21.5	28.8	8.5	3.6	"		
"	336	CIa	17.1	13.6	5.5	0.8	"		
"	395	CIIa	25.2	24.7	6.8	2.9	"		
"	407	AIa	30.5	22.1	5.2	1.6	"		
"	409	CIa	35.7	14.6	5.1	1.5	"		
"	412	(C+A)Ia	24.2	12.8	4.0	0.8	"		
"	422	(A+B)Ia	33.5	12.2	4.8	1.8	"		
"	440	AIa	25.3	24.8	5.6	2.5	"		
"	496	CIa	14.8	14.3	2.0	0.5	"		
"	497	AIa	27.0	15.5	8.3	3.0	"		
"	533	(CI+BI)a	31.2	19.3	4.8	2.0	"		
"	566	CIa	36.8	29.0	7.0	6.4	"		
"	592	AIa	14.8	14.3	2.0	0.5	"		
"	612	CIa	26.8	19.8	10.2	8.0	"		
"	647	AIa	20.8	30.8	8.2	3.5	"		
石核	304		25.6	44.4	9.6	8.9	"		
扶磨	37	II Gac	9.5	10.7	7.0	968	An		
石	102	II Aabc	10.5	6.9	4.8	475	"		
凹	280	II Ba	10.6	4.7	3.2	190	"		
石	631	I Aabc	9.2	8.1	4.6	460	"		
製	95	小形	4.7	3.0	0.8	19.8	不明	1529	
石	242		26.3	20.5	8.8	7.9	GS		

## 68号住

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石	162	--c	(15.5)	(15.7)	(2.8)	(0.6)	ob	558	F
Sc	92	BIb	16.1	20.7	10.2	2.4	"	559	
"	106	BIa	20.5	22.5	4.5	2.2	"	562	
"	163	B(II+I)a	28.7	40.5	9.8	11.0	"	561	
P.e	75	CI	16.4	13.3	4.2	0.9	"		
Z-1	"	"	13.0	10.5	5.6	0.7	"		
有類	114		20.8	15.0	6.2	1.7	"	560	
扶磨	43	CIa	32.4	21.8	6.5	4.1	"		
U-f	52	"	19.6	19.5	4.1	1.2	"		
"	82	AIb	25.3	18.4	33.6	10.2	"		
"	90	BIb	17.2	24.6	13.5	4.4	"		
"	112	(C+B)Ia	23.3	14.2	4.9	0.8	"		
"	135	BIa	49.8	20.3	11.8	10.7	"	563	
"	155	CIa	25.0	18.6	11.8	3.4	"		
"	165	BIa	22.3	19.2	6.6	1.9	"		
凹	1	II Cabc	10.0	7.5	4.7	490	An		
"	11	-	(10.4)	9.2	6.2	(495)	"		
"	22	II Aa	12.2	5.9	3.4	290	"		
"	48	II Da	9.0	6.4	6.5	405	"		
"	71	II Aa	13.2	5.6	2.5	205	"		55と接合
"	80	-	(6.6)	6.7	3.2	(115)	"		
"	104	II Da <sub>2</sub>	10.5	7.6	5.7	470	"		
"	181	II Aac	12.2	6.0	3.6	310	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹	191	II Cac	13.1	9.9	5.2	740	An		
"	192	II Ca	14.2	11.6	4.5	790	"		

## 住居址4

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石	58	CIc	10.8	13.8	2.3	0.3	ob	733	

## 住居址12

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石	1	HWc	13.2	10.5	1.8	0.3	ob	739	
"	27	--b	20.7	(11.9)	2.8	(0.5)	"	743	F未製品
"	1028	--Vd	26.0	18.5	7.5	3.2	"	747	未製品
"	1063	IIIb	18.7	12.5	3.0	0.5	"		
"	1103	IVc	18.6	(13.2)	3.0	(0.7)	"	742	B
"	1231	平基Vb	21.7	(12.0)	2.5	(0.8)	"	746	B
"	1257	IV(b)	(17.2)	16.3	3.7	(0.7)	"	741	A
"	1258	FVa	20.5	(13.7)	2.0	(0.5)	"	740	B
"	1298	EVc	17.6	14.8	2.6	0.5	"	738	
"	1326	平基IVc	17.8	13.4	4.2	0.8	"	745	
"	1362	EWb	18.0	12.5	3.5	0.5	"	737	
"	P-1	平基IIIc	22.3	17.4	4.5	1.3	"	744	
石	186	AI(a+a)	71.4	28.8	6.7	13.2	"	748	
匙	1313	BIIIa	35.5	49.5	6.3	9.3	sh	749	
Sc	1069	(C+B)Ia	52.0	38.5	4.5	13.2	"	750	
"	1115	BIa	21.3	18.8	5.1	1.8	ob		石錐(AII)?
"	1253	AIa	47.8	51.3	11.0	15.9	ch	753	
"	1256	"	47.6	38.0	8.3	16.7	Ry		
"	1289	BIIa	38.7	43.2	9.5	17.4	ch		
"	1307	(D+B)Ia	58.7	33.3	9.2	14.6	"	751	
"	1386	BIa	50.2	35.1	10.4	18.1	"	752	
"	1453	"	19.3	44.8	3.8	3.7	"		
石	1090	AII	24.4	20.5	5.8	2.3	ob	755	
錐	1291	"	17.6	19.5	5.0	1.1	"	754	
"	Z	AI	34.7	11.3	5.7	1.4	"	756	
P.e	254	CI	21.3	15.5	8.1	2.4	"		
"	1047	"	26.7	17.8	7.4	3.1	"		
"	1098	BII	26.3	16.3	12.0	4.7	"		
"	1099	CI	25.1	15.8	5.2	1.8	"	757	
"	1208	"	36.8	19.0	10.0	6.6	"		
"	1260	AI	41.7	19.5	11.0	8.3	"		
"	1359	CII	31.7	36.5	12.0	9.0	"		
U-f	108	AIa	24.3	22.8	6.8	3.6	"		
"	164	CIa	39.4	31.8	11.0	8.8	"		
"	1002	"	24.3	20.3	6.3	2.2	"		
"	1006	"	32.0	43.5	12.7	8.9	"		
"	1023	"	18.7	18.8	6.6	3.3	"		
"	1025	AIa	30.8	17.0	8.8	3.0	"	758	
"	1027	"	16.2	36.8	5.6	3.0	"		
"	1044	BIa	50.2	14.3	14.8	5.1	"		
"	1059	(B+B)Ia	19.5	22.6	5.8	1.8	"		
"	1075	AIb	15.4	53.3	18.2	9.4	"		
"	1089	AIa	15.4	25.5	4.3	1.6	"		
"	1091	"	10.2	19.3	6.7	0.8	"		
"	1096	CIa	31.3	22.6	5.8	2.7	"		
"	1100	AIa	32.2	30.8	14.0	9.1	"		
"	1103	CIa	27.5	36.5	5.6	2.6	"		
"	1107	AIIa	37.2	24.8	12.2	8.3	"		
"	1111	AIa	16.7	19.4	2.8	0.7	"		
"	1112	AIIa	28.4	16.3	7.8	3.3	"		
"	1118	AIa	21.5	22.8	5.3	2.2	"		
"	1127	"	22.5	17.7	4.0	1.7	不明		
"	1145	CIIa	22.5	20.2	5.3	1.4	ob		
"	1146	(A+B)Ic	25.6	36.4	10.8	8.1	"		
"	1159	CIa	23.5	22.9	11.3	5.9	"		
"	1181	"	37.3	12.1	8.2	1.9	"		
"	1199	AIc	29.8	22.6	15.0	9.7	"		
"	1201	AIa	19.0	21.4	4.3	1.8	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	1204	BIa	13.8	43.2	11.5	5.0	ob		
"	1209	"	19.2	8.3	2.6	0.4	"		
"	1228	AIa	28.2	21.0	4.5	2.0	"		
"	1232	"	14.5	22.0	3.5	0.6	"		
"	1233	BIa	10.4	15.5	3.8	0.5	"		
"	1238	AIa	25.5	18.5	3.2	1.0	"		
"	1249	A Ib	50.8	25.6	12.4	12.4	"		
"	1252	BIa	14.6	20.5	5.6	1.2	"		
"	1254	AIa	36.5	20.6	11.5	7.1	"		
"	1270	"	39.2	15.2	7.1	3.6	"		
"	1272	CIa	25.4	11.0	5.4	1.1	"		
"	1286	CIc	32.8	31.5	16.3	14.9	"		
"	1292	BIa	19.9	24.8	3.5	1.6	"		
"	1297	CIb	24.2	28.7	10.5	3.4	"		
"	1308	AIa	18.4	19.2	2.5	0.9	"		
"	1309	CIa	13.3	19.2	6.2	1.3	"		
"	1311	B(II+I)a	20.8	15.8	5.0	1.2	"		
"	1335	(C+C)Ia	27.2	21.8	6.6	2.4	"		
"	1337	CIb	21.0	29.7	10.2	5.7	"		
"	1339	AIa	19.7	36.0	8.7	5.5	"		
"	1346	(B+C)Ib	27.2	32.8	20.8	10.4	"		
"	1349	CIa	32.1	24.2	5.1	2.3	"		
"	1358	AIa	28.8	15.3	6.5	1.6	"	759	
"	1389	BIa	36.1	17.0	10.3	2.9	"		
"	1393	AIa	25.8	19.0	8.7	4.7	"		
"	1396	BIb	20.0	20.2	10.6	3.0	"		
"	1405	"	34.8	29.8	17.5	11.3	"		
"	1408	CIa	30.2	17.3	9.2	3.6	"		
石核状器	Z-1	BIa	42.8	7.2	4.5	0.9	"		
凹石	1405	"	14.1	34.4	9.7	4.2	"		
"	226	IIDac	8.6	6.8	6.3	400	An		
"	235	II Ca	8.9	7.1	4.0	315	"		
"	1016	II Cac	13.3	9.1	5.1	745	"		
"	1029	—	(8.0)	9.4	4.7	(370)	"		
"	1080	IAabc	10.7	9.3	3.7	345	"		
"	1180	II Ca	10.2	6.3	3.0	190	"		
"	1290	"	11.2	6.5	3.8	335	"		
"	1312	II Cb	10.7	8.2	5.0	555	"		
"	1319	II Da <sub>2</sub>	10.3	8.3	6.5	585	"		
"	1320	II Gac	9.2	8.8	4.7	440	"		
"	1360	IAabc	10.4	8.6	4.2	520	"		

住居址27

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄	220	GIVb	24.4	14.9	2.9	0.7	ch	735	
"	244	HIIB	16.7	12.8	2.6	0.4	ob	734	
Sc	132	BIa	21.0	17.7	6.3	1.6	"		
P.e	89	DI	29.0	13.2	9.3	1.1	"		
複数状器	225	"	25.3	21.8	4.8	2.3	"	736	
U-f	223	BIa	17.7	17.3	3.4	0.6	"		
"	272	(A+B)Ia	13.8	13.2	3.1	0.5	"		
凹石	274	II Ca	11.0	8.5	5.1	570	An		

住居址33

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄	133	HIId	27.0	17.8	6.5	1.7	ob	760	
"	301	DIVb	23.6	17.5	3.7	0.9	"	761	
"	435	—b	(12.0)	(11.0)	(1.8)	(0.2)	"		F
"	437	IVa	12.2	12.0	1.5	0.2	"	764	
"	551	IVb	13.5	12.8	2.0	0.3	"	763	
"	636	EWb	19.8	(14.2)	4.5	(0.9)	"		B
"	689	(E)IV-	(12.9)	15.1	3.2	(0.6)	"	762	A
"	759	円基Vb	18.3	(11.5)	2.7	(0.7)	"		B
石匙	319	CIII(a)	36.4	28.3	3.6	(4.3)	Cs	768	刃端部欠
"	761	CIIIa	42.7	31.8	7.2	5.5	sh	767	
Sc	121	(C+B)Ia	15.5	17.2	4.3	1.0	ob	772	
"	221	BIa	22.6	30.9	10.2	6.5	sh		
"	451	(AII+CI)a	16.2	16.3	3.8	1.2	ob	765	

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
Sc	682	(A+A)IIa	26.4	17.3	8.3	3.7	ob		
"	682	AIIc	26.6	27.2	9.8	5.4	"	771	No.ダブリ
"	747	(B+C)Ia	19.8	27.4	9.8	3.6	"		
"	752	BIb	52.8	21.4	19.7	20.9	"	769	
石錐	220	BI	29.2	11.4	4.7	1.3	sh	766	
P.e	131	DI	22.5	10.8	9.3	2.1	ob		
"	332	CI	30.5	9.2	7.8	2.2	"		
"	505	CII	16.7	24.8	8.3	3.0	"		
"	599	CI	26.8	13.0	7.8	2.1	"		
"	695	BI	29.7	18.7	11.4	5.1	"		
有頭扶磨	537	"	24.0	13.7	3.2	0.8	"		
U-f	27	AIa	25.5	20.6	4.8	2.0	"		
"	113	BIIb	18.8	22.7	14.8	5.2	"		
"	118	(B+C)Ia	19.6	22.0	7.5	1.9	"		
"	124	CIa	21.2	15.0	2.3	0.8	"		
"	164	"	36.4	20.8	13.3	8.0	"		
"	241	BIa	21.0	22.3	7.8	1.7	"		
"	316	AIa	29.4	16.6	3.3	1.1	"		
"	381	"	28.0	32.4	5.3	2.6	"		
"	475	"	34.2	23.4	8.9	3.7	"		
"	515	"	25.8	20.8	11.2	5.9	"		
"	556	CIIb	19.7	31.7	10.4	5.4	"		
"	669	CIa	38.5	11.3	7.2	2.4	"		
"	698	BIc	38.3	36.8	12.0	17.1	"		
"	710	CIa	20.1	10.2	6.7	0.9	"	770	
"	717	A Ib	19.7	33.5	11.0	4.5	"		
"	747	AIIa	14.0	20.7	4.8	1.2	"		
"	Z-1	BIa	22.8	28.9	8.0	2.5	"		
"	Z-2	CIIa	18.2	7.6	4.8	0.5	"		
凹石	732	II Ca	111	78	46	420	An		
"	769	II Bac	153	64	54	605	"		
"	③	I Eabc	18.0	8.2	5.6	1400	"		
清製石品	439	管玉	15.0	(9.0)	(7.7)	(0.9)	Ta	1720	
ウォーターフローテーション・セパレーションによる検出遺物									
石鉄	上層	DIVb	16.6	(11.5)	2.0	(0.2)	ob		B
"	2-下層	—b	(7.9)	(5.3)	(1.9)	(0.1)	"		F(先端のみ)
"	4-下層	—a	(13.2)	(10.7)	(2.9)	(0.3)	"		F
"	4-下層	—b	(9.0)	(9.5)	(2.4)	(0.1)	"		F(先端のみ)
P.e	1-下層	DI	(23.8)	10.5	6.3	(1.7)	"		下端欠
Sc	1-上層	AIIa	14.2	13.5	3.7	0.6	"		
U-f	4-下層	AIa	15.8	20.7	3.5	1.2	"		
清製石品	4-下層	管玉	(9.4)	(0.5)	(2.4)	(0.2)	Ta		

住居址41

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄	38	-IVb	23.0	19.4	3.3	1.4	ob		未製品
Sc	Z-3	(B+B)Ia	28.6	14.2	3.7	1.3	"		
U-f	6	CIa	17.2	18.5	5.9	1.7	"		
"	21	A Ib	32.2	37.6	9.3	11.8	"		
"	128	CIb	22.8	42.6	16.5	12.6	"		
"	154	AIa	20.3	15.8	6.8	1.9	"		
"	159	CIb	18.8	39.2	14.8	7.9	"		
"	Z-1	CIa	33.6	27.2	5.0	2.9	"		埋土
"	Z-2	(A+B)Ia	20.3	29.1	8.2	2.2	"		
凹石	69	IAabc	9.5	6.5	4.0	305	An		
"	96	IIDa	12.9	6.5	6.1	555	"		

住居址42

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鉄	353	(F)IVa	(12.8)	(8.9)	2.6	(0.2)	ob		C
石錐	257	AI	(35.7)	21.2	7.0	(5.1)	ch		錐部先端欠
P.e	17	CII	19.1	22.6	7.3	3.0	ob		下端欠
U-f	10	AIa	30.3	27.8	10.0	7.2	"		
"	80	"	20.9	14.6	3.5	1.1	"		
"	181	A Ib	20.5	23.5	6.8	1.8	"		
"	231	AIIc	20.8	10.8	6.3	1.5	"		
"	253	BIa	22.0	20.2	9.3	3.1	"		
磨石	24	AIII	(8.7)	4.3	2.8	177	di		A <sub>3</sub>

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
凹石	339	II Ca	12.1	7.1	4.1	380	An		
"	358	II Da	11.5	6.9	5.3	(480)	"		破
石皿	387	BIII	(12.0)	(11.1)	(6.1)	(820)	"		No1385 F

住居址49

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
石鏡	16	IV a	21.6	12.3	5.2	1.1	ob	788	
"	245	IV b	16.0	15.2	2.7	0.7	"	789	
"	848	EMc	25.2	(15.2)	2.8	(0.8)	"	784	B
"	1111	EV b	20.2	(14.3)	4.4	(0.7)	"	785	B
"	1432	EII b	17.2	15.7	3.1	0.5	"	786	
"	1637	HW d	17.2	(14.2)	3.6	(0.7)	"		B
"	1707	HV -	(14.6)	15.7	2.6	(0.7)	"		A
尖頭状石匙	2041	- - c	31.9	21.5	10.1	5.1	"	787	未製品
"	525	AIII (c+a)	65.5	19.6	6.9	9.8	sh	791	
"	592	CI a	46.0	41.1	8.2	10.2	"	795	
"	1167	BIII a	47.3	80.2	9.5	21.3	不明	793	
"	1415	AI -	(31.3)	(30.2)	6.5	(5.8)	"		刃部半欠
"	P-2	BII a	37.5	57.3	9.8	14.9	ch	792	
Sc	161	(B+B)Ia	57.0	45.0	9.7	25.0	An	803	
"	509	BI a	51.1	24.0	7.2	8.1	sh	796	
"	616	AI a	25.3	20.3	9.5	4.5	ob		
"	1150	"	20.4	20.2	5.2	1.7	"		
"	1439	BII d	18.8	28.8	3.7	1.6	"	790	
"	1474	CI a	34.5	32.0	6.3	4.6	"	805	
"	1767	BI a	51.2	30.0	7.3	8.4	"	794	
"	Z-2	AI a	15.5	19.6	4.0	1.0	"		
石錐	263	AI	30.2	15.0	7.0	2.6	"	800	
"	425	"	26.2	20.2	5.5	1.95	"	798	
"	1788	"	27.3	16.0	7.5	1.9	"	799	
P-e	1196	BI	28.2	29.6	12.0	7.6	"		Noダブリ 下端欠
"	1637	CI	(17.3)	16.2	4.5	(1.1)	"		
"	1674	"	26.5	21.4	6.6	4.0	"	804	
U-f	398	AII a	31.8	22.8	9.8	6.5	"		
"	842	BI a	32.6	32.3	4.0	2.3	"		
"	1002	AI a	25.8	30.2	7.5	5.3	"		
"	1366	"	22.5	14.0	4.2	1.2	"		
"	1506	AII a	17.0	24.7	7.0	2.0	"		
"	1618	AI a	28.5	19.2	9.8	3.9	"		
"	1653	BI a	10.8	18.3	3.8	0.7	"		
"	1662	"	22.0	9.0	8.7	1.0	"		
"	1674	"	13.6	14.9	4.2	0.9	"		
"	1767	AI a	15.7	12.2	2.8	0.6	"		Noダブリ
"	1870	(CI+II) a	21.0	33.7	5.7	2.2	"		
"	1889	CI a	34.7	24.1	6.5	4.0	"	797	
"	1956	BI a	18.7	9.0	4.5	0.7	"		
"	1964	CI a	39.4	16.2	8.9	4.2	"	801	
"	2053	"	16.3	18.2	4.3	1.4	"		
磨石製斧	Z-1	"	19.2	18.3	5.2	1.3	"	802	
"	495	-	(3.9)	(3.1)	(1.4)	(197)	Ry		
"	648	AI	(10.7)	(6.3)	(3.4)	(345)	di		B <sub>2</sub>
"	997	定角	(5.1)	(2.1)	(1.5)	(151)	"		
凹石	78	IA ac	11.1	5.2	3.6	235	An		
"	197	II Ga	10.1	4.9	4.7	225	"		
"	201	II Ca <sub>2</sub>	12.6	8.1	5.7	630	"		
"	274	II Fa <sub>2</sub>	5.8	5.5	4.1	120	"		
"	333	II Ca	6.6	4.9	1.9	85	"		
"	584	"	7.7	5.9	3.2	170	"		
"	1019	-	(6.6)	8.2	3.8	(240)	"		
"	1278	II Fac	8.6	7.7	5.4	430	"		
"	1755	II Da <sub>2</sub>	11.4	5.3	5.3	350	"		
"	1992	II Ca	9.2	7.3	3.6	265	"		
"	2040	"	8.7	6.6	3.4	215	"		
洗製石皿	Z	IA abc	10.0	6.8	3.3	295	"		
"	75	"	11.0	9.0	6.5	1.2	Ta	1728	未製品

住居址50

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
石鏡	111	HIII c	15.5	14.0	2.8	0.4	ob	808	
"	139	GII b	18.5	12.3	2.2	0.3	"	806	
"	142	EIV a	15.8	(11.7)	3.3	(0.4)	"		B
"	171	BV b	18.2	(13.0)	3.0	(0.4)	"		B
"	298	(E)IV -	(12.8)	12.0	3.0	(0.5)	"		A
"	375	DII b	17.2	13.8	2.8	0.4	"	807	
"	463	HII b	17.8	13.0	1.9	0.3	"	811	
"	614	円基 V c	27.8	21.7	6.8	3.0	"		
"	623	HIV b	13.4	11.2	1.8	0.2	"	810	
石匙	179	AII b	48.2	42.2	9.0	12.3	"	813	
Sc	62	AII a	47.4	38.5	12.2	23.4	sh	815	
"	205	(A+B)I a	17.8	23.8	4.9	1.7	ob	816	
"	501	DI a	20.6	12.8	9.8	3.2	"	812	
"	501	BI a	48.0	22.8	9.5	9.6	"		Noダブリ
"	655	DI a	14.1	20.2	5.3	1.1	"		
"	682	"	32.3	27.8	6.3	4.4	"	814	
P-e	6	BI	24.6	17.6	11.1	5.2	"		
"	133	CI	15.3	20.2	7.0	1.8	"		
"	404	"	21.0	14.3	4.3	1.2	"	819	
"	582	"	19.2	16.7	5.5	1.6	"		
有頭抉磨	U-f	37	(A+C)I a	24.7	15.6	7.0	2.2	"	
"	74	CI a	28.6	25.3	7.4	3.7	ss		
"	104	"	19.8	48.2	10.3	7.0	ob		
"	122	(CI+II) a	27.3	18.7	9.2	6.1	"	820	
"	136	CHI a	49.3	44.8	5.2	7.3	"		
"	513	BI a	17.5	28.7	4.2	1.7	"		
"	534	"	20.0	17.1	5.8	5.4	"	819	
"	543	(A+C)I a	52.0	40.8	17.8	22.8	"		Noダブリ
"	543	CI b	25.0	42.8	22.3	20.0	"		
"	576	CHI b	16.6	21.3	7.4	2.6	"		
"	712	BI a	24.5	13.2	5.2	1.2	"		
磨石製斧	367	-	(10.2)	(6.1)	(2.3)	(110)	Ry		No5559と接合 E <sub>2</sub>
凹石	52	II Ca	11.5	7.4	4.2	460	An	1653	
"	119	II Aa	12.1	6.1	4.0	385	"	1652	
"	143	II Ga	11.9	6.3	3.3	250	"		
"	149	II Abc	9.5	7.6	3.6	433	"		
"	411	II Ca	10.0	6.9	3.9	305	"	1654	
"	566	II Fa	6.0	5.7	5.4	200	"		
"	621	II Ba	12.0	4.9	4.6	335	"	1655	
磨石	173	"	22.3	18.9	6.4	0.3	"		

住居址51

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
石鏡	139	(D)IV -	(11.8)	14.0	2.3	(0.3)	ob	773	A
"	Z	-(IV) d	(14.6)	(4.2)	2.1	(0.2)	"	774	C
石匙	242	BIII a	41.5	52.1	7.2	10.2	sh	775	
"	243	AII (a+b)	66.9	25.3	9.8	12.7	"	777	
Sc	78	CI a	14.8	14.8	5.8	1.1	ch	780	
石錐	10	AI	18.2	17.8	4.3	1.0	ob	780	
"	44	"	24.7	11.8	5.5	1.3	"	776	
"	234	"	45.0	28.7	7.0	5.9	sh	779	つまみ部に挟入あり
有頭抉磨	U-f	47	36.0	17.2	7.2	3.0	ob	783	
"	124	(A+A)I a	32.6	14.6	5.3	2.5	"	778	
"	148	BI a	35.8	18.8	10.2	4.2	"	781	
"	175	(B+C)I a	20.8	17.8	3.3	1.1	"		
"	197	AI a	20.8	31.1	15.3	6.5	"		
"	223	CI a	27.2	14.5	6.4	1.6	"		
"	245	AI a	21.6	14.8	6.9	1.7	"		
"	271	CHI a	40.8	19.3	9.0	3.2	"	782	
"	281	AI b	19.2	21.6	8.3	3.1	"		
磨石製斧	318	AI	(10.1)	(5.5)	(3.4)	(270)	Ry		D <sub>1</sub>
凹石	79	II Cac	16.4	11.9	7.4	1760	An		
"	195	II Ca	11.4	9.0	4.3	555	"		
"	239	I Abc	10.6	8.3	4.0	515	"		

住居址59

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鏃	24		13.1	20.0	2.5	0.7	ch	827	
"	188	-- a	(12.5)	(10.0)	2.8	( 0.2)	ob	823	C
"	208	FVb	18.6	(10.8)	3.3	( 0.5)	"	821	B
"	418	-- b	(11.2)	(10.6)	( 2.8)	( 0.2)	"		F
"	606	円基V-	(11.5)	13.8	2.8	( 0.4)	"	826	A
"	736	DVa	19.7	( 9.6)	2.6	( 0.2)	"	825	B
"	756	IV-	15.8	(13.8)	3.2	( 0.6)	"	822	D(製作時)
"	1107	HWb	11.4	13.2	3.2	0.3	"	824	
石 匙	599	CIII(a+a)	45.1	41.8	13.5	23.4	ch	828	
Sc	437	CIIa	20.5	10.2	5.7	0.9	ob	"	
"	656	(B+B)Ia	32.8	20.4	7.4	4.3	"	829	
"	745	(C+C)Ia	24.8	17.5	8.3	3.4	"	830	
P·e	65	DI	20.8	9.6	9.6	( 1.6)	"		下端一部欠
"	82	"	23.5	14.4	7.8	2.0	"	833	
"	97	"	17.8	12.8	7.7	1.6	"	832	
"	168	"	28.5	14.5	14.6	( 3.7)	"		下端一部欠
"	349	CI	(15.4)	13.7	5.5	( 1.1)	"		
"	414	A(C)III	18.8	19.4	10.6	3.0)	"		
"	479	DI	23.2	11.4	6.0	1.4	"		
"	696	BI	27.2	23.2	15.6	8.3	"	831	
U·f	116	B I a	17.3	14.2	5.2	0.8	"		
"	126	A I a	27.7	30.8	8.8	6.1	"		
"	139	B(I+II)a	18.6	11.0	1.8	0.5	"		
"	169	A I b	13.0	25.4	8.6	2.3	"		
"	234	C I a	19.2	21.2	6.3	1.3	"		
"	536	B I a	11.8	23.0	6.5	1.4	"		
"	642	A II a	19.5	36.5	8.5	1.4	"		
"	730	A I a	24.0	25.2	8.0	3.0	"		
石 皿	412	B III	(15.6)	(14.3)	( 9.6)	(2300)	An		No1300 F
凹 石	411	II Ga	(11.4)	10.5	10.9	(1080)	"		

住居址61

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鏃	7	FVb	14.8	(11.3)	2.3	( 0.3)	ob		B(製作時)
"	228	(E) V-	(16.2)	(15.7)	2.2	( 0.5)	"		D
"	252	-- b	28.5	12.3	4.8	1.2	"	840	未製品
"	372	IV d	27.3	(21.8)	7.1	( 2.3)	"	835	B
"	389	-IVc	28.6	22.6	5.2	2.5	"	841	未製品
"	422	ENVc	13.4	12.0	2.8	0.3	"	837	
"	521	HWb	18.5	(13.2)	2.1	( 0.5)	"		B
"	565	HVa	19.0	12.8	2.5	0.4	"	836	
"	664	HVc	19.0	11.3	4.1	0.8	"	838	
"	763	HWb	18.2	13.8	3.0	0.5	"	834	
"	1763	IVb	15.0	12.8	2.4	0.5	"	839	
石 匙	236	A III a	32.0	42.3	5.5	6.3	sh	845	
"	1119	B III a	27.3	50.0	9.0	10.3	"	842	
"	1144	B(III)a	32.7	49.2	13.0	18.3	ch	843	つまみ半欠
Sc	300	B II b	21.2	13.3	3.8	1.1	ob		
"	515	B I a	22.0	31.3	9.8	5.0	水晶		
"	1252	(A+B)Ia	28.8	23.9	5.2	3.6	ob	846	
"	1836	B I a	32.0	8.7	7.4	1.9	"		先端欠
石 鏃	708	BI	(20.6)	10.2	7.0	( 1.4)	ch		
U·f	72	(A+C)Ia	23.3	13.2	2.1	0.4)	ob		
"	273	(B+A)Ia	29.5	17.4	5.6	2.5	"		
"	420	(C+A+A)Ia	48.8	25.2	7.3	6.8	ch	844	
"	497	A II a	23.3	18.2	4.2	1.6	ob		
"	1161	(C+A)Ia	64.3	33.1	16.8	34.5	ch		
"	1645	(B+A)Ia	40.5	31.0	5.6	6.4	"		
磨石	301	A I	(12.6)	6.0	( 3.1)	( 410)	Ry	1489	C <sub>2</sub>
"	411	B II	(10.9)	( 4.3)	( 2.9)	( 160)	"		b <sub>2</sub>
"	442	--	( 8.3)	( 3.4)	( 2.4)	( 95)	"		a <sub>2</sub>
"	1694	--	( 4.8)	( 5.5)	( 3.2)	( 145)	di		D <sub>1</sub>
凹 石	229	II Cabc	10.6	8.6	5.0	570	An		
"	829	II Eac	9.0	6.4	6.6	460	"		
"	830	--	6.5	6.2	4.6	( 235)	"		
"	971	II Dac	8.9	5.6	4.6	230	"		
"	972	--	9.6	( 5.7)	5.7	( 280)	"		
"	1122	II Da	10.7	6.2	4.4	340	"		

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
凹 石	1127	II Ea	9.9	7.0	4.1	295	An		
"	1564	II Ca	12.0	11.3	5.1	870	"		
"	1618	II Ba	11.7	7.4	4.9	422	"		
"	1849	II Ga	11.5	5.7	3.2	210	"		
"	"	Z	8.2	5.6	4.2	250	"		
石 皿	451	BVI	10.7	9.8	3.6	600	"	1563	
"	"	B III	(19.3)	(17.9)	6.3	(3200)	"		1302 C <sub>1</sub>
鉄 器	6917	BIV	(27.4)	(21.2)	( 8.7)	(7000)	"		1301 C <sub>1</sub>
鉄 器		A(3.0')	102	35	22	111	"	1676	断面形丸 一端完欠

住居址66

器種	登録No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備 考
石 鏃	153	GVb	12.2	12.2	3.2	0.3	ob	855	
"	258	H III-	(11.5)	11.2	2.7	( 0.3)	"		A
"	318	D III a	11.8	13.5	2.4	0.2	"	859	
"	330	E III b	18.5	18.4	3.6	0.8	"	852	
"	496	FVb	18.4	(14.5)	3.2	( 0.4)	"		B
"	608	G II (a)	(20.2)	19.8	3.4	( 0.9)	"		D
"	701	FVc	21.3	20.7	3.5	1.2	"		856
"	1034	D IV e	15.6	14.8	3.5	0.6	sh		854
"	1213	(E)(IV)-	(14.2)	25.0	3.3	( 0.9)	ob		A
"	1284	(円基) Vc	(26.1)	21.8	7.3	( 3.0)	"		862 B
"	1332	H --	(12.3)	17.7	3.3	( 0.2)	"		A
"	1413	DVa	16.2	14.5	2.6	0.3	"		
"	1425	D III a	25.6	18.3	3.0	2.5	ch	849	
"	1578	IVc	23.4	(17.3)	6.2	( 1.8)	ob		B
"	1684	円基IVb	22.3	20.3	6.6	2.4	"		857
"	2036	E III-	(11.8)	20.2	3.3	( 0.8)	"		A
"	2163	GVa	20.7	(14.3)	2.8	( 0.6)	"		B
"	2347	H IV-	(21.4)	18.9	4.5	( 1.4)	"		A
"	2540	G III a	20.7	13.1	4.1	0.7	"		848
"	2610	-- c	22.7	16.8	5.2	1.8	"		860 未製品
"	2656	II Id	24.5	21.7	5.7	2.5	"		861
"	2667	HWa	21.5	(15.8)	4.5	( 1.0)	"		B
"	2710	円基IIIa	11.8	11.5	2.3	0.3	"		858
"	2995	D IV b	15.5	13.8	3.2	0.6	"		853
"	3063	G III a	14.2	11.4	2.6	0.3	"		
"	3117	DVa	17.8	(12.4)	3.4	( 0.6)	"		851 B
"	3414	DVa	19.8	14.8	2.7	0.5	sh		850
"	3416	IVc	17.2	15.2	4.2	0.8	ob		
抉入 刺突具 石 匙	455	IVc	31.5	22.2	7.0	3.8	"		863
"	480	C III b	46.0	43.8	5.5	5.2	Ry		
"	929	B I-	(33.8)	(29.0)	(12.5)	(11.9)	ob		刃部欠
"	1161	C I a	35.6	31.2	8.5	8.2	"		866
"	1644	"	42.8	56.7	8.6	17.5	Ry		867
"	1743	B III a	34.3	(36.0)	6.7	( 6.9)	不明		刃部先端欠
"	2828	A III a	29.5	45.9	4.3	6.5	sh		865
"	2887	B III a	29.1	46.8	5.7	4.9	Ry		864
"	2952	-- (a)	(18.0)	(27.5)	( 4.8)	( 1.8)	不明		刃部先端のみ
"	3088	-II-	(22.3)	(19.3)	( 6.5)	( 2.5)	Ry		つまみのみ
Sc	187	A II a	18.7	35.6	7.2	3.4	ob		876
"	229	B II a	33.3	47.5	6.2	8.5	"		869
"	406	"	25.0	40.4	8.3	8.8	ch		
"	736	"	18.3	32.4	4.8	2.1	ob		870
"	894	(CI+D II) b	25.7	27.2	6.3	3.4	"		
"	1088	A I a	33.8	52.3	9.8	17.1	Ry		
"	1379	B I a	36.8	25.5	9.8	7.4	ob		
"	2645	C I a	55.6	27.4	10.8	9.8	"		868
"	3048	(A+B)Ib	24.3	28.5	13.2	7.5	"		
石 鏃	1303	B I	(23.6)	6.6	4.6	( 0.8)	"		872 鏃部先端欠
"	3121	B II	20.5	11.0	6.2	1.9	"		871
P·e	250	C I	17.0	15.8	5.5	1.2	"		
"	669	"	20.0	18.8	5.5	2.2	"		874
"	1785	D I	21.8	6.8	5.6	0.8	"		
"	2171	C I	20.2	13.8	4.3	1.4	"		
"	2361	"	26.8	24.5	13.0	7.1	"		
"	2493	D I	26.3	18.5	9.0	3.7	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P・e	2604	CI	22.0	22.9	9.2	4.7	ob	873	
"	3025	BI	25.2	17.5	10.0	6.8	"		
"	3102	CI	24.3	11.8	7.0	1.8	"		
"	3378	DI	32.6	18.5	7.3	4.1	"	875	
U・f	244	AIa	21.0	20.8	12.3	4.0	"		
"	281	(B+C)Ia	18.6	27.6	7.0	2.9	"		
"	414	CIa	21.8	14.6	2.3	0.9	"		
"	454	(C+A)Ia	23.2	22.6	8.7	3.2	"		
"	602	BIa	32.3	36.7	14.7	11.4	"		
"	861	CIa	28.5	36.2	8.7	5.5	"		
"	949	AIa	33.6	14.2	3.6	1.6	"		
"	1151	BIa	23.5	19.6	6.2	3.4	"	877	
"	1345	AIa	35.7	20.2	8.0	4.7	"		
"	1508	BIa	17.4	26.8	7.7	2.6	"		
"	1581	AIIa	7.8	30.0	3.6	1.1	"		
"	1795	CIa	30.2	39.2	9.0	6.3	"		
"	1809	"	18.0	34.7	5.0	2.3	"		
"	2289	AIIa	39.3	13.7	6.2	3.3	"	878	
"	2450	(B+C)Ia	30.8	20.3	4.2	1.9	"		
"	2537	(B+A)Ia	25.6	22.8	6.2	2.6	"		
"	2561	BIa	20.2	11.6	1.8	0.3	"		
"	2623	(B+B)Ia	35.5	15.6	4.7	2.6	"		
"	2657	(A+C)IIa	26.5	17.0	8.3	2.2	"		
"	2679	CIa	33.7	25.0	7.8	5.9	"		
"	2862	BIa	25.5	18.1	9.0	1.5	"		
"	3230	AIb	23.3	17.7	5.7	2.1	"		
"	3407	(C+C)Ia	33.4	18.8	11.0	3.9	"	879	
"	3493	AIa	20.2	13.4	3.2	0.8	"		
"	3517	CIa	32.9	18.7	7.5	1.8	"		
石核状器	1059	"	21.0	33.8	9.5	4.3	"		
"	1259	"	18.3	23.6	7.1	3.6	"		
"	3243	"	15.8	25.0	7.9	3.7	"		
打石製斧	501	—	(5.0)	(3.4)	(1.5)	(35)	不明	1515	
"	173	定角	(8.0)	4.9	1.9	(115)	Ry		
"	1238	—	(9.1)	(5.4)	(3.8)	(145)	"		
"	2734	—	(6.9)	(4.2)	(1.7)	(85)	"		
凹石	978	—	8.8	(4.7)	4.5	(136)	An		
"	1048	II Ca	6.7	4.8	3.5	110	"		
"	1456	II Ba	(12.0)	5.4	3.6	366	"		
"	1839	II Ca <sub>c</sub>	12.3	8.7	5.5	785	"		
"	1840	II Ca <sub>c2</sub>	13.1	7.9	4.6	765	"		
"	2735	"	13.5	9.3	6.4	950	"		
"	3210	II Ca	11.6	8.1	3.6	305	"		
"	3219	II Ca <sub>c</sub>	13.3	8.5	3.9	545	"		
"	3220	—	(7.5)	8.2	7.5	(400)	"		
"	3319	II Ca	11.1	7.5	5.0	430	"		

住居址70

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
扶入刺突具	Z-1	IVd	28.2	(19.7)	5.7	(2.9)	ob	880	B
P・e	19	(BII+CI)a	41.5	15.0	12.0	6.2	"	881	
"	45	DI	15.2	8.5	5.7	0.5	"		
"	148	BI	28.2	24.2	15.2	7.9	"	882	
凹石	113	II Fa	10.0	9.1	6.7	725	An		
"	156	II Ga	8.7	7.4	4.8	325	"		
"	157	II Da	11.6	6.8	4.6	390	"		
"	185	II Ca	8.7	8.1	4.7	355	"		
"	186	"	13.6	9.5	5.1	630	"		
"	住居内	II Fa	12.1	11.3	7.4	1020	"		

住居址74(旧)

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	81	GVe	12.7	9.2	2.3	0.2	ob	885	
"	156	FVc	16.2	(16.8)	2.2	(0.4)	"	897	B
"	167	— a	(16.2)	(9.8)	(2.4)	(0.3)	"	887	C
"	501	HIVb	11.6	9.8	3.8	0.3	"	902	
"	515	HIIB	17.6	14.8	2.8	0.4	"	883	
"	788	IVc	17.5	(14.3)	4.4	(0.9)	"	900	B(片脚?)

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	796	-IV-	(15.0)	(10.3)	(2.6)	(0.2)	ob		
"	1034	HVb	23.2	16.5	4.2	1.4	不明	898	
"	1123	IVc	17.3	14.2	4.6	1.1	ob	903	
"	1174	HIIC	17.8	(11.3)	1.8	(0.3)	"	884	B
"	1176	GVd	16.8	(9.4)	2.4	(0.5)	"	901	B
"	1180	IIVb	17.9	(14.3)	3.2	(0.8)	ch	886	B
"	1181	FVc	20.0	19.8	7.3	2.0	ob	899	
"	1185	— (b)	(19.4)	(14.1)	2.6	(0.6)	"	889	G
"	1341	GNb	14.8	(12.6)	3.2	(0.4)	"	893	B
"	1449	GIIa	19.2	(12.3)	2.0	(0.4)	"	890	B
"	1480	GVb	14.5	(10.2)	3.1	(0.3)	"	894	B
"	1481	— b	(14.8)	(14.4)	2.6	(0.5)	"		C黒カツ下層
"	1939	FIVb	16.3	(12.6)	2.8	(0.5)	"	891	B
"	1966	FVc	16.3	(13.7)	3.8	(0.5)	"	896	B
"	1986	-Vd	13.8	19.6	4.3	0.8	"		未製品
"	B-18	(D)(IV)b	(14.4)	(12.2)	2.5	(0.3)	"	888	C
"	P-3	EVb	16.2	13.8	2.3	0.4	"	892	
石匙	B131	BIIa	40.9	66.8	7.3	13.6	Ry	905	
"	504	BIIIa	30.2	41.2	6.1	7.1	ch	904	
Se	85	AIb	21.5	22.7	7.6	2.9	ob		炉B ビエス(CI)?
"	108	BIIa	26.8	9.6	6.4	1.3	"		
"	134	"	12.1	15.7	2.3	0.4	"		
"	665	"	18.2	22.0	4.7	1.8	"	919	
"	1501	"	15.5	23.3	5.9	1.6	"	911	
"	1686	"	15.2	24.7	2.6	0.8	"	913	
"	1711	BIa	32.3	27.1	6.8	5.4	"	917	黒カツ上層
"	1712	DIc	35.8	63.2	19.3	35.0	"		"
石錐	18	BI	23.4	6.0	3.7	0.5	"	906	両頭
"	1175	"	16.5	5.9	3.8	0.4	"	909	"
"	1626	AI	(27.8)	11.8	5.9	(1.4)	"	908	刃部先端欠
"	1679	AII	(19.5)	13.3	6.2	(1.9)	"	910	"
P・e	105	CI	(27.2)	25.6	5.5	(3.0)	"		下端欠
"	118	"	21.0	8.7	7.3	1.9	"		
有頭抉磨	1843	"	17.1	14.2	5.4	1.0	"	912	
U・f	39	BIa	35.2	10.2	9.0	2.2	"		
"	82	CIb	28.5	12.6	10.3	3.4	"		炉B
"	117	"	16.8	10.2	2.5	0.5	"		
"	120	(C+C)Ib	20.8	39.8	9.3	6.3	"		
"	175	AIa	22.0	13.5	6.0	2.8	"		
"	371	CIa	21.7	30.2	6.7	3.4	"		
"	380	AIa	16.2	26.2	3.0	1.6	"		上層
"	411	CIa	24.8	36.7	14.3	6.5	"		
"	464	CIIa	49.3	27.0	7.0	4.6	"	921	上層
"	467	BIa	28.7	25.5	9.1	4.0	"		
"	503	CIa	26.5	24.5	7.2	2.7	"		
"	555	AIa	17.8	19.3	2.2	0.5	ch		
"	591	"	23.5	17.8	5.5	1.3	ob		
"	601	CIa	12.8	20.0	3.2	0.8	"		
"	632	(BII+CI+BIII)	30.8	21.7	10.8	7.2	ch		ビエス(CI)?
"	681	AIb	18.7	21.4	14.3	3.7	ob		
"	691	AIa	15.6	23.8	4.2	1.6	"		上層
"	749	CIIa	45.3	32.9	10.8	10.0	"	916	
"	811	CIb	17.6	38.7	15.6	7.7	"		
"	994	(A+A)IIa	18.2	22.6	7.8	2.2	"		
"	1007	CIa	22.6	15.8	3.7	1.1	"	918	
"	1349	"	37.0	18.2	8.2	2.8	"		
"	1371	BIa	22.8	15.0	10.4	4.2	"		黒カツ上層
"	1437	AIa	12.8	37.2	9.3	6.3	"	915	
"	1464	(A+C)Ia	28.8	48.3	7.3	4.8	"	920	黒カツ
"	1476	(C+C)Ia	20.8	36.7	5.8	4.5	"		
"	1501	CIa	29.8	15.2	5.3	2.3	"		黒カツ下層
"	1793	BIIa	25.8	31.8	10.2	5.1	"		黒カツ
"	1805	AIIa	35.4	25.2	13.3	7.7	"		
"	1840	AIa	28.3	26.3	5.7	4.6	"		黒カツ
"	1844	AIc	43.2	15.3	7.7	5.1	"		上層
"	1886	(B+C)Ib	26.8	46.8	17.8	19.1	"		
凹石	1823	IIDa	(9.0)	5.2	3.6	(186)	An		破
"	B 5	II Ca	12.0	8.5	5.0	450	"		
"	B 26	II Ba	12.5	4.1	4.5	247	"		
"	B 28	IIDa	10.0	6.6	5.3	335	"		



器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹石	B 64	II Cac	12.1	6.4	4.1	425	An		
"	B 73	II Da	13.8	11.5	8.6	1510	"		
"	B 99	"	9.2	7.4	5.8	410	"		
"	B100	II Ca	13.1	7.4	3.0	290	"		
"	P 16	II Bac	11.9	7.0	5.7	575	"		
石皿	114	BIII	(31.4)	(19.7)	(12.0)	(7100)	"	1550	No.1312 A <sub>2</sub>
"	42	"	25.5	(22.3)	6.3	(3700)	"	1549	No.1315 C <sub>2</sub> のみ欠
"	12	"	(16.4)	16.3	( 6.3)	(1600)	"		No.1313 E <sub>1</sub>
"	21	"	13.9	(21.6)	7.6	(2300)	"		No.1314 A <sub>2</sub>
打製石	431	AIIb	8.8	6.1	1.0	69		1428	

住居址76

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	157	GVc	17.1	17.4	6.3	1.0	ob		未製品?
"	601	DVa	22.2	16.6	2.8	0.6	"	926	
"	656	(F) Vc	27.0	17.7	8.3	3.0	"	928	未製品
"	690	HIa	26.7	15.8	4.6	1.2	"	922	
"	765	DVb	15.2	(12.3)	2.3	( 0.3)	"		B補修している
"	798	平基IVc	14.6	12.4	3.7	0.5	"	932	
"	806	平基Vc	19.5	17.3	6.2	1.7	"	930	
"	808	(尖基) Vc	21.2	(14.4)	4.5	( 1.1)	"	933	B
"	965	FVa	15.5	16.8	3.0		"	925	B 遺物紛失
"	1008	CVc	15.2	(14.8)	2.0	( 0.3)	"	B	
"	1110	DVb	14.6	(12.1)	2.0	0.2	"	924	B
"	1190	ENb	18.4	14.4	3.5	0.5	ch	923	
"	1272	HWb	18.6	(15.5)	3.8	( 0.7)	ob	B	
"	1279	平基W-	(13.5)	10.5	3.4	( 0.4)	"	934	A
"	1358	FVc	16.8	(17.0)	4.1	( 0.9)	"	929	B
"	1578	CVc	15.1	18.4	3.2	0.7	"	927	
"	1974	-(IV)d	24.0	18.3	7.2	3.0	"		基部未加工
尖頭杖器	220	(平基) Vd	25.0	17.0	6.8	2.2	"	931	石鏃?
石匙	1364	BIIIc	25.0	35.3	5.5	4.8	不明	935	
"	1575	BIIIa	36.8	46.4	5.8	5.4	sh	936	
"	1580	BIII-	(43.0)	(37.4)	( 7.6)	(10.4)	Ry?		刃部欠
Sc	19	BIIa	70.4	46.5	14.1	43.9	Ry		
"	1654	BIa	43.5	54.4	11.6	13.5	sh	937	
石錐	186	-I	(18.3)	( 4.4)	( 3.7)	( 0.4)	不明	939	錐部先端のみ
"	264	AI	22.7	11.8	6.8	1.2	ob	938	
P.e	166	CI	30.8	18.8	4.8	3.0	"	941	
"	427	CII	22.4	27.4	7.6	4.5	"		
"	803	DI	27.8	16.0	10.3	4.6	"		
有頭杖磨	1018		22.4	17.8	5.0	1.7	"	942	
U.f	17	CIa	15.7	8.9	1.4	0.2	"		
"	126	"	40.7	27.5	7.0	6.9	"		
"	180	A Ia	15.0	21.8	6.0	2.1	"		
"	213	BIa	16.2	17.4	10.6	0.4	"		
"	790	"	16.7	24.5	5.2	1.5	"		
"	975	BIIa	27.3	11.7	8.2	2.9	"		
"	1164	A Ia	19.6	24.8	8.0	3.8	"		
"	1262	"	27.5	14.2	2.5	0.9	"	940	
"	1469	"	33.8	17.3	7.5	3.0	"		
"	1676	(A+A+A)Ia	18.1	14.5	4.3	1.0	"		
"	1704	A Ia	14.5	19.5	4.0	0.8	"		
"	1872	"	16.3	20.5	4.5	1.3	"		
石核杖器	1880	CIa	23.4	14.2	5.0	1.3	"		
"	293		24.5	17.7	10.3	5.1	"		
"	977		18.3	28.5	13.0	6.3	"		
磨石凹	1504	A Ia	(20.4)	7.5	4.0	( 965)	Ry	1467	C <sub>2</sub>
"	132	II Ca	8.5	7.3	4.0	320	An		
"	352	II Da	9.4	6.0	4.2	270	"		
"	1094	II Cab	11.7	9.9	4.2	505	"		
"	1317	II Gac	12.6	7.4	3.8	460	"		
"	1355	II Cac	9.2	7.1	3.5	230	"		
"	1417	-	7.8	7.4	5.2	( 355)	"		
"	1490	-	5.1	7.2	3.0	( 115)	"		
"	1814	-	5.7	7.2	3.2	( 155)	"		
"	2045	II Da <sub>2</sub>	10.5	5.8	5.0	320	"		
"	2046	特磨	4.6	7.0	5.0	( 225)	"		破
石皿	2024	C	31.0	(23.2)	7.2	(6500)	"	1552	No.1319 E <sub>3</sub> +C <sub>1</sub>

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石皿 先研	2025 6918	A(x.0')	( 770)	40	31	130	AA		No.2024と接合 断面形角一端先欠

住居址77

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	293	GVa	16.0	13.7	4.4	0.7	ob		
"	295	(A) IV-	(13.3)	( 9.2)	( 2.0)	( 0.2)	"		E
"	319	GV-	(15.7)	(13.5)	( 2.8)	( 0.5)	"		E
"	387	GVa	13.4	(12.8)	2.9	( 0.4)	"	943	B
"	486	GVb	21.5	( 9.9)	( 2.4)	( 0.4)	"		E (半欠)
"	543	IVb	16.5	(10.6)	2.3	( 0.4)	"	947	B
"	613	EVa	13.5	10.2	1.5	0.2	"	945	
"	616	DVa	14.5	11.9	2.4	0.4	"	944	
"	648	IVb	19.8	( 9.8)	( 3.0)	( 0.5)	"		E (半欠)
"	715	GVa	18.2	14.2	3.0	0.7	"	946	
"	Z	IVa	17.2	( 5.7)	( 2.0)	( 0.2)	"		E (半欠)
石匙	56	BIIa	37.6	42.9	7.5	8.6	Ry	949	
"	423	(A) III-	(26.4)	(19.3)	( 5.2)	( 2.5)	ch		刃部半欠
"	556	AIb	30.8	28.8	9.8	12.2	Ry	948	
Sc	21	AIIa	22.3	18.8	6.4	2.8	ch		
"	279	BIIa	15.4	27.3	5.6	2.4	sh		
"	442	"	19.1	15.8	3.0	0.7	ob		
"	446	AIIa	22.8	20.9	5.5	2.3	"	953	
石錐	158	AII	19.5	15.2	7.3	1.8	"	950	
"	158	AI	23.1	14.4	5.2	1.4	"		No.ダブリ
"	355	AII	21.6	12.5	6.8	0.8	"		
"	430	"	15.8	22.7	5.6	1.6	"	951	
"	602	"	(15.6)	17.7	6.4	( 1.5)	"		錐部先端欠 下端欠
P.e	59	DI	(29.6)	18.7	9.7	( 4.3)	"		
"	361	CI	18.0	16.3	9.4	1.6	"		
"	487	"	16.5	18.0	9.5	2.4	"	954	
"	573	"	(17.4)	17.3	4.7	( 2.0)	"		下端欠
"	649	A(C) I	13.5	13.0	10.2	1.7	"		
U.f	124	A Ia	17.7	18.4	5.2	1.9	"	952	
"	131	"	15.5	21.9	8.3	2.3	"		
"	364	BIa	11.8	27.5	4.8	1.8	"		
"	411	CIa	25.4	14.8	7.0	1.8	"		
"	481	BIa	29.3	37.4	8.6	3.7	"		
"	497	CIa	26.6	12.6	7.2	1.7	"	955	
"	562	(A+B) Ia	18.2	19.2	6.2	( 1.5)	"		刃端部欠
"	816	AIa	17.7	21.1	4.2	1.3	"		
"	815	"	17.0	27.3	6.0	( 1.8)	"		刃部一部欠
"	828	BIa	21.6	14.1	6.8	1.9	"		
"	909	"	18.9	24.8	4.4	1.6	"		
凹石	325	I Aabc	11.1	6.0	3.7	450	An		
"	567	II Da	10.1	7.8	5.5	500	"		

住居址5

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	172	IVb	22.4	17.5	4.3	1.5	ob	960	未製品
"	175	HVc	19.0	(13.2)	4.8	( 1.0)	ch	961	B片脚?
"	216	平基Vb	20.4	20.2	6.0	2.1	ob	971	未製品
"	276	FVb	20.2	(14.4)	2.8	( 0.6)	"	958	B
"	316	EVa	16.3	12.2	2.5	0.4	"	956	
"	415	FVb	20.5	(18.2)	3.5	( 0.8)	"	957	B
"	428	CVb	10.8	12.7	2.5	0.3	"	959	
石匙	379	BIII(a)	30.8	(52.0)	7.2	(10.5)	sh	965	刃部先端欠
"	441	BIIc	34.0	53.8	7.7	10.4	ch	963	
"	463	BIIIa	30.7	48.2	6.3	7.6	不明	964	
Sc	100	BIIa	77.8	39.8	14.5	50	"	970	
U.f	238	A Ia	25.2	15.4	3.7	1.6	ch		
"	340	CIa	18.7	18.8	4.1	0.9	ob	962	
"	351	A Ia	22.3	23.8	7.6	2.7	"	969	
"	385	BIa	14.3	21.0	4.7	1.0	"	968	
"	399	A Ia	22.8	21.1	3.5	1.2	"	967	
"	422	AIb	30.7	22.3	11.2	4.3	"	966	
"	458	CIb	14.3	34.3	13.5	3.9	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
打石製 磨石 凹石	322	—	157	58	47	335	sh	1447	半磨製 b <sub>1</sub> No5735と接合 凹部皿状
	147	A I	(13.8)	(6.1)	(3.8)	(410)	Ry		
	126	—	8.9	6.5	3.3	(205)	An		
	288	II Ca	12.7	9.7	4.6	720	"		
"	461	—	11.9	8.5	6.4	665	"	"	
"			8.9	6.5	3.3	(205)	"	"	

### 住居址 6

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P.e	131	C II	22.3	20.1	6.7	2.4	ob	979	石核状石器? P.e(CI・下端欠)の転用
U.f	41	B I b	17.6	46.4	16.5	13.0	"		
"	52	A I b	22.8	21.7	7.7	2.6	"		
"	"	"	23.4	25.9	10.4	7.0	"		
"	108	B I a	17.0	26.2	6.0	2.2	"		
"	114	A I b	42.2	23.1	24.3	10.8	"		
"	137	A I a	12.8	17.0	4.5	1.0	"		
"	175	C I a	27.2	17.5	5.0	1.7	"		
凹石	5	II Ca	12.9	7.9	2.8	280	An		
"	67	II Dac	10.4	7.7	6.2	560	"		
"	72	I Aabc	10.2	7.6	3.3	355	"		
"	84	II Ea	4.6	4.1	2.5	50	"		
"	170	II Fac	7.4	7.2	6.2	400	"		
"	173	II Da	9.0	6.6	5.8	290	"		
"	196	II Dac	11.7	9.0	5.5	640	"		

### 住居址 9

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃 P.e 有須打石 磨石 凹石	5	—c	32.0	23.1	14.0	7.7	ob	1479	未製品 先端僅かにワレ A <sub>1</sub> スス付着
	4	B I	32.0	20.8	11.7	5.8	"		
	150	—	28.6	14.6	5.3	1.9	"		
	77	—	(4.2)	(4.7)	(1.6)	3.0	Ry		
1	A III	13.8	3.7	3.5	170	"			
249	"	(4.6)	(2.7)	(3.5)	(45)	"			
60	II Ga	10.8	7.7	5.5	485	An			
"	213	II EB	10.8	10.1	3.9	540	"		

### 住居址 11

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	86	C III a	31.8	(30.4)	7.4	(5.0)	sh	976	刃部両端欠
Sc	279	(A+A) I a	77.0	51.0	21.0	110	不明	974	
"	Z-2	A I a	16.2	17.1	5.0	1.3	ob	972	埋土
石鏃	Z-1	A I	35.4	20.8	6.4	3.3	"	975	"
U.f	56	A I b	32.6	19.8	7.0	3.4	"	973	P.e(CI・下端欠)の転用
"	133	C I c	33.0	20.0	11.2	7.5	"	977	"
凹石	155	II Da	6.6	5.3	4.7	190	An		

### 住居址 52

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	235	I V a	16.6	15.6	3.7	0.7	ob	1025	
"	307	I(IV) -	(17.3)	(13.5)	(4.2)	(1.0)	ch	1026	D
"	458	-V -	(17.9)	(22.5)	(4.5)	(2.0)	ob		E
"	847	HV -	(14.7)	(11.3)	(2.2)	(0.3)	"	1024	D
"	1051	HV -	(17.3)	18.2	4.7	(1.4)	"	1022	A
"	1219	I V c	21.5	19.2	5.0	1.7	"	1027	
"	1344	HV c	12.8	12.3	2.0	0.3	"	1023	
"	Z-1	C V d	21.5	(18.2)	3.6	(0.8)	"		B
"	Z-2	F V b	24.6	(14.4)	4.0	(0.9)	"		B
石鏃	10	AI(c+a)	27.7	29.3	7.8	8.7	sh	1029	
"	715	B III a	28.7	37.7	7.2	5.4	ch	1028	
"	1060	B III (a)	(37.0)	(45.5)	10.3	(17.2)	Ry	1030	刃部先端欠
"	1257	B II (a)	(33.4)	(37.4)	8.2	(7.8)	"		"
Sc	80	(B+C) II a	24.2	18.4	5.7	2.0	ob		
"	138	D I b	21.3	25.2	9.0	5.7	"		
"	190	B I b	19.8	27.0	8.2	4.6	"		
"	412	B I a	16.3	27.3	3.2	1.3	"		
"	806	(B+B) II d	19.4	21.7	5.5	2.2	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
Sc	1292	B I a	40.9	45.4	9.6	12.2	ob		
石鏃	402	A II	21.2	22.3	5.7	1.8	"	1032	
"	640	B I	32.3	9.7	6.7	1.6	"	1034	
"	765	A I	48.1	22.2	11.3	7.4	Ry	1031	
"	908	A II	23.1	19.0	5.3	1.5	ob	1033	
P.e	379	B I	33.7	19.3	12.8	7.3	"		
"	996	C I	26.8	20.7	7.8	4.9	"		
U.f	169	(C+B+C) I a	22.5	13.2	4.6	1.1	"		
"	242	(AI+AI+BI) a	33.7	22.6	10.5	3.4	"		
"	312	(A+B) I a	10.7	24.2	8.2	1.4	"		
"	318	(A+B+A) I a	14.0	26.2	5.9	2.2	"		
"	334	B I a	17.8	30.0	10.2	6.0	"		
"	454	(A+A) I a	18.2	22.8	6.2	2.7	"		
"	624	(C+A) I b	36.5	20.3	9.8	8.4	"		
"	755	A I a	31.6	22.8	4.2	2.5	"		
"	1011	C I a	43.2	16.2	7.3	4.3	"		
"	1018	C I b	24.3	43.2	11.5	10.9	"		
"	1123	C II a	22.7	25.0	5.0	2.2	"		
"	1315	(A+C+B) I a	17.6	22.9	3.0	0.9	"		
磨石	594	A III	(7.8)	(4.6)	(2.0)	(105)	Ry		B <sub>2</sub> 火熟うける
凹石	P 3	III Dabc	10.1	9.0	5.7	680	An		
"	230	—	12.3	8.2	4.5	(500)	"		
"	233	I Aabc	9.6	6.4	3.5	(280)	"	1658	破
"	395	II Aa	11.5	4.7	3.0	145	"	1657	
"	433	I Aabc	12.5	7.1	4.5	(445)	"		破
"	993	"	11.5	6.9	4.6	520	"	1656	
"	1295	II Cac	10.1	9.5	5.0	550	"	1659	
石皿		BV	(8.3)	(6.1)	(4.8)	(200)	不明	1559	No1333 F

### 住居址 58

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	182	H V b	24.0	(13.5)	4.0	(0.9)	ob	1017	B(製作時)
石鏃	1	B II a	46.9	74.8	8.5	27.4	Ry	1018	
Sc	180	"	14.3	43.7	7.0	3.2	ob	1019	
U.f	68	C I a	35.7	30.7	8.7	4.7	"		
"	77	B II a	28.5	18.5	5.2	1.7	"		
"	86	C II b	34.8	26.4	9.4	6.3	"		
"	103	(C+B) I a	39.6	21.6	5.2	4.4	sh		
"	116	B II a	43.3	43.2	8.2	5.2	ob	1021	
"	119	C II b	47.1	36.7	17.8	24.1	"	1020	
"	156	C I a	28.4	46.7	9.1	7.7	"		
"	173	B II b	42.9	22.7	14.0	7.7	"		
凹石	D 2	II Dac	14.0	12.3	7.6	1180	An		
"	70	II Ga	10.2	(5.1)	3.6	(175)	"		
"	93	II Cabc	10.0	8.1	4.7	565	"		
"	117	II Dac	11.5	9.2	5.8	805	"		
石皿		A I	33.4	28.0	9.4	1500	"	1539	No1297

### 住居型 75

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	167	-III c	(13.7)	(10.2)	3.2	(0.3)	ob	1037	F
Sc	24	B II c	17.8	22.2	6.8	2.7	"	1035	
"	126	(B+B) II d	20.8	16.0	6.3	1.9	"	1036	
P.e	257	C III	19.7	14.8	5.2	1.5	"	1038	
U.f	5	A I a	54.7	33.8	18.3	29.7	"	1040	
"	107	B I b	41.7	25.2	14.8	17.4	"		
"	185	A I a	15.2	15.1	3.8	0.6	"	1039	

### 住居址 79

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	19	G IV b	21.2	15.3	2.5	0.6	sh	1042	
"	80	平基 V c	27.5	(18.8)	3.5	(2.2)	不明	1043	B
"	354	F V b	(25.3)	20.2	8.3	(2.6)	ob	1041	B
石鏃	20	B III a	31.5	41.0	7.8	8.5	Ry		
"	181	AI(c+a)	29.5	19.0	3.5	1.7	sh	1044	
Sc	5	(DII+BI) a	15.8	36.1	6.8	5.2	"		石鏃破片?
"	320	B I a	32.3	71.3	8.0	14.9	Ry		

器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
P·e	24	CII	31.6	22.0	6.8	5.3	ob		下端欠
"	212	DI	25.3	14.3	6.0	1.9	"		
U·f	23	A I b	31.5	25.6	18.0	8.2	"		
"	78	A I a	22.4	12.5	3.8	1.1	"		
"	81	(A+C)Ia	43.2	43.6	11.3	18.2	ch		
"	205	A I b	17.3	28.1	14.3	4.7	ob		
"	294	B I c	48.7	18.7	8.3	6.4	"		
凹石	143	II Ca	11.3	9.1	5.4	750	An		
"	240	II Da	8.6	7.7	5.7	445	"		
"	263	II Ca	( 9.5)	7.0	3.9	( 350)	"		破
"	328	II Fa <sub>2</sub>	9.3	8.8	5.8	570	"		

住居址34

器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石 鐵	264	FVb	14.5	14.0	4.6	0.7	ob		
P·e	153	BI	39.2	21.0	12.8	10.3	"		
U·f	312	A I a	27.8	49.0	17.4	16.3	"		
"	319	C I a	22.0	17.3	3.2	0.8	"		
"	390	"	39.5	22.3	10.8	6.6	"		
打 磨 石 磨 器	249	—	(28.8)	(37.6)	(12.0)	(12.2)	不明		刃部先端のみ
南壁	AI	—	14.2	5.4	3.1	320	"		基部先端敲打ありC <sub>2</sub>
"	Z	—	( 7.6)	( 4.2)	( 2.8)	( 120)	"		a <sub>1</sub>
凹石	37	II Da	9.4	7.4	5.8	405	An		
"	208	"	9.2	6.1	5.2	325	"		
"	267	"	12.5	8.3	6.0	710	"		
"	314	I Fa <sub>2</sub>	15.6	8.2	7.2	1200	"		
"	330	II Ga	11.4	9.5	5.2	545	"		
"	405	II Fa	9.3	8.9	6.5	675	"		
石 皿	354	BIII	30.6	18.1	5.4	(4900)	Dp	1554	No.1363 B <sub>1</sub> +B <sub>2</sub>
"	407	"	14.9	12.9	5.8	820	An		No.1384 F
"	409	"	36.2	19.7	6.5	6000	"		No.1298 B <sub>1</sub>

住居址45

器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石 鐵	142	平基Vc	24.6	(20.3)	6.2	( 2.6)	ob	994	B
"	175	CVa	12.7	14.0	2.8	0.4	"	983	
"	184	FIIIa	14.7	12.3	1.8	0.3	"	981	
"	294	円基V(d)	(21.5)	(15.0)	5.8	( 1.3)	"		D(基部製作時)
"	309	IVd	23.8	19.3	8.7	2.1	"		
"	470	FVa	22.9	(17.4)	2.8	( 0.6)	"		B
"	502	FVb	20.8	(12.4)	3.2	( 0.5)	"		B
"	588	FVa	19.8	17.0	3.7	0.8	"	982	
"	1256	IVd	19.3	(15.0)	3.2	( 0.9)	"		B
"	1511	(c)V-	(16.6)	20.2	2.7	( 0.6)	"		A
"	1869	H(III)-	(15.2)	18.7	3.0	( 0.7)	"	996	A
"	2032	(円基)Vd	25.8	18.1	7.6	2.5	"		未製品
"	2052	IVc	23.0	(14.5)	3.2	( 0.9)	"		B
"	2100	DIIIa	23.6	(14.5)	3.2	( 0.7)	"		B
"	2205	HVc	15.1	15.0	3.5	0.5	"	986	
"	2261	(H)V-	(18.3)	19.0	6.0	( 1.1)	"	990	A
"	2264	—d	(12.3)	11.3	2.6	( 0.2)	"	984	C
"	2274	(平基)IV-	(20.0)	(15.0)	( 5.6)	( 1.2)	"	995	E
"	2325	H(IV)-	(17.7)	(15.0)	( 3.7)	( 0.8)	"	993	E
"	2327	DVb	27.5	(20.8)	3.8	( 1.2)	"	991	B
"	2602	HVb	22.4	(17.8)	4.5	( 1.4)	"		B
"	2621	III d	18.8	16.2	5.2	1.2	"		
"	2784	EVa	14.8	(11.6)	2.3	( 0.3)	"		B
"	2820	IVc	18.6	(13.6)	3.2	( 0.6)	"	985	B
"	2895	GMb	12.6	(12.8)	3.4	( 0.4)	"	988	B
"	3103	IMb	17.5	(17.0)	3.4	( 0.8)	"	989	B
"	3114	IVd	18.6	(13.9)	4.0	( 0.8)	"	992	B(製作時)
"	3126	IMc	20.5	15.2	4.1	1.1	"		
"	Z-1	IVc	21.5	(10.8)	4.7	( 0.8)	"		B(製作時)
"	Z-2	FIIa	21.8	15.6	4.2	0.8	"		
"	Z-3	GMa	17.4	11.0	2.7	0.3	"	980	
"	Z-4	GIV(b)	(13.4)	11.6	4.0	( 0.5)	"	987	A

器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石 鐵	Z-5	IVd	22.3	16.2	4.8	1.4	ob		997
鉄 匙	2314	円基Ve	36.3	31.5	13.5	12.0	"		998
石 匙	192	CIIa	53.2	48.8	7.5	17.1	Ry	1000	
"	916	BIIIb	38.6	51.6	6.3	10.4	ch	1002	
"	1499	BIIIa	39.2	47.9	7.6	11.5	sh	999	
"	1963	"	37.6	53.8	4.7	7.9	"	1001	刃端部少欠
Sc	439	BIIb	53.8	39.8	12.7	24.5	Ry		
"	561	B I c	17.3	45.2	9.7	5.9	ob	1014	
"	1745	B I b	38.4	13.8	7.0	4.1	"		
"	2774	B I a	18.8	21.8	4.4	1.5	"	1005	
"	2836	A I a	16.4	19.2	6.8	1.5	"	1004	
"	2893	BIIb	(18.3)	(12.7)	( 4.7)	( 0.9)	"		半欠 石鐵未製 品の一部?
"	2900	AII d	26.0	21.5	6.5	3.8	ch	1003	
"	2964	C I a	28.6	19.8	4.8	2.8	不明		
石 錐	717	AI	42.7	26.8	9.6	10.3	ch	1008	
"	892	"	(20.8)	24.5	8.5	( 2.6)	"	1006	刃部先端欠
"	2275	"	20.6	14.5	3.5	0.8	ob	1007	
"	2746	"	31.3	20.3	3.2	1.9	sh		
P·e	541	CI	19.5	38.2	10.2	5.7	ob		
"	580	DI	24.8	11.5	8.5	2.0	"	1009	
"	1450	BIII	35.8	28.2	13.5	11.8	"		
"	2947	DI	23.3	18.3	7.1	2.8	"	1010	
U·f	103	C I a	38.0	29.2	10.2	10.2	"		
"	138	A I a	37.3	16.3	6.7	4.9	"		
"	164	(B+C)Ia	18.4	17.8	6.2	1.7	"		
"	202	AIIa	21.3	38.7	17.4	8.3	"		
"	271	B I a	20.0	22.4	5.2	1.9	"		
"	310	A I a	26.3	16.7	10.2	3.2	"		
"	570	C I a	40.3	22.5	11.0	4.9	"		
"	573	A I b	23.3	21.0	9.7	4.8	"		
"	602	B I b	25.6	29.4	11.0	6.2	"		
"	618	(A+A)Ia	23.4	22.0	6.3	3.0	"		
"	644	(C+A)Ia	34.9	28.2	12.5	8.6	"		
"	648	A I b	15.0	28.2	10.8	3.2	"		
"	748	A I a	30.7	13.7	6.8	2.5	"		
"	782	(B+B)Ia	24.3	14.8	8.5	4.6	"		
"	924	A I a	24.3	28.2	2.8	1.4	"		
"	1272	C I a	40.2	32.2	7.5	7.3	"		
"	1307	A I a	25.3	13.8	5.5	1.6	"		
"	1356	"	26.3	20.1	9.0	2.9	"		
"	1442	(A+B)Ia	33.0	25.5	10.8	6.0	"		
"	1449	C I b	52.2	23.8	18.2	14.0	"		
"	1503	"	33.3	22.0	10.4	6.5	"		
"	1515	A I b	36.0	42.1	15.9	13.5	"		
"	1607	BIIa	26.0	23.0	5.4	2.5	"		
"	1655	C I a	21.5	23.6	5.8	2.2	"		
"	1765	B I a	19.5	19.3	5.8	2.0	"		
"	1845	C I a	23.2	14.5	5.2	1.5	"		
"	1888	B(I+II)a	28.8	29.5	13.8	7.2	"		
"	1966	A I b	(32.3)	29.3	16.5	( 9.8)	"		刃部先端欠
"	2042	"	18.6	24.5	5.3	1.4	"		
"	2225	B I b	12.4	29.3	10.3	2.8	"		
"	2237	A I a	24.3	36.2	15.8	10.9	"		
"	2249	(C+A)Ia	25.0	20.5	12.3	3.2	"		
"	2262	A I a	31.0	21.4	6.5	3.8	"	1013	
"	2272	C I b	26.0	28.5	9.0	3.8	"	1012	
"	2369	C I a	22.3	17.8	4.6	1.8	"		
"	2370	B I a	23.0	22.5	10.3	4.0	"		
"	2409	A I a	(33.0)	55.0	10.5	(15.9)	ch		刃端部欠
"	2575	CIIa	30.3	23.8	10.2	4.9	ob		
"	2680	B I b	43.5	37.8	10.0	15.3	"	1015	
"	2714	CIIc	31.0	24.2	21.4	10.2	"		
"	2763	AIIa	17.1	26.5	5.2	2.1	ch		
"	2839	(A+B)Ic	36.5	32.3	14.2	12.5	ob		
"	2892	A I a	21.0	17.3	10.5	5.2	"		
"	2897	C I a	45.8	34.0	9.1	8.8	"		
"	2912	A I a	22.8	22.4	5.2	3.0	"		
"	2917	C I a	24.5	19.2	2.5	0.9	"		
"	2941	A I a	16.5	20.6	7.3	1.8	"		
"	2953	B I a	14.7	25.5	5.8	2.0	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	2981	AIa	20.5	21.0	8.5	3.5	ob		
"	3011	BIb	23.1	18.2	6.6	3.0	"	1016	
"	3020	BIa	39.2	24.5	9.5	5.9	"	1011	
"	3140	AIb	22.0	34.8	11.4	8.6	"		
石核状器	1030		26.8	27.6	9.9	8.4	"		
石磨	2219		28.8	24.8	10.0	7.0	"		
製斧	24	AII	(8.8)	(4.4)	(2.8)	(175)			半欠
"	1982	—	(3.3)	(1.4)	(0.7)	(5)			
"	2976	—	(5.3)	(1.2)	(1.2)	(10)			A <sub>3</sub>
凹石	183	IEc	14.2	8.5	5.2	780	An		
"	274	IAabc	10.9	7.8	5.2	575	"		
"	362	II Ga	11.2	7.9	5.0	495	"		
"	414	"	11.7	7.3	4.4	370	"		
"	558	IIDa	11.1	7.3	6.4	545	"		
"	582	II Ca <sub>2</sub>	11.1	7.9	5.1	535	"		
"	1556	IAabc	(6.8)	6.3	3.2	(170)	"		破
"	1630	IDac	11.8	9.3	5.9	760	"		
"	1633	IEc	14.3	8.5	7.7	1060	"		
"	1713	—	4.3	5.6	1.8	(50)	"		
"	1877	IEc	17.1	10.5	6.1	1570	"		
"	2229	—	8.1	7.7	3.4	(260)	"		
"	2299	—	6.6	9.9	2.7	(160)	"		
"	2381	IA	4.3	4.4	3.9	(60)	"		破
"	2397	IBa	12.2	6.2	4.7	445	"		
"	2434	IIDa	8.4	6.2	5.0	260	"		
"	2639	II Ga	11.2	8.0	3.9	340	"		
"	2675	IEac	15.9	8.9	8.0	1140	"		
"	3063	II Cac	9.2	7.7	3.0	260	"		
"	3076	IIDa	8.4	7.2	4.6	295	"		
"	3153	IFc	17.5	6.8	6.6	1110	"		
石皿	568	BV	(23.4)	(11.7)	(3.5)	(500)	"	1560	No1318 F
"		BIII	(6.3)	(6.0)	(4.0)	(100)	"		No1267 F
清製石品	1738	管玉	(12.0)	(10.0)	(4.5)	0.7	Ta	1721	
"	1681	球状耳飾	(25.5)	(16.5)	4.0	(2.7)	"	1685	

住居址67

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	60	BIVb	16.8	15.4	3.2	0.5	ob	1079	
"	104	— c	(20.0)	(16.0)	(3.3)	(0.9)	"	1083	F
"	g-9-II	IV-	(11.2)	18.3	3.2	(0.7)	"	1081	A
"	j-7-II	平基III-	(16.8)	(13.1)	(3.0)	(0.5)	"	1082	E
"	j-8-II	FVd	20.1	22.9	5.5	2.0	"	1084	
"	k-6-I	FVc	23.9	(20.5)	3.9	(1.4)	"	1080	B
"	k-6-II	(円基) Vd	27.7	20.1	7.3	(3.3)	"		未製品
"	P <sub>r</sub> -1	円基 V-	(24.8)	25.2	8.1	(4.5)	"	1085	A(製作時)
石匙	71	BIIIa	25.2	59.8	4.0	8.8	sh	1086	
Sc	5	AIb	38.8	39.9	10.5	14.2	ob		
"	18	CIIb	26.2	41.3	9.2	11.8	"	1088	
"	26	B(I+II)a	27.5	24.7	5.5	4.1	Ry		
"	27	BIa	32.2	22.4	9.0	6.3	ob	1087	
"	45	(C+B)Ia	45.5	7.8	4.8	2.3	"		
"	h-12-II	BIa	31.7	16.2	3.7	1.6	"	1089	
"	j-6-III	AII d	17.7	13.8	7.8	1.6	"	1090	
石鏃	j-11-II	AI	20.3	18.3	5.8	1.5	"		
P-e	33	DI	38.4	21.5	11.7	6.3	"		
"	h-10-I	BI	23.5	19.1	16.1	6.3	"		
"	i-7-III	CI	20.2	31.5	7.7	7.6	"		
"	i-12-III	CII	17.8	19.2	7.0	1.6	"		
"	k-8-III	CI	20.0	17.2	18.7	3.0	"		
U-f	i-6-I	AIa	23.0	19.5	6.9	2.5	"		
"	i-6-I	CIb	24.5	33.1	27.8	15.9	"		
"	i-7-II	AIa	24.6	23.7	5.8	2.5	"		
"	i-7-III	CIa	20.7	16.5	4.9	1.2	"		
"	床	AIa	34.3	21.5	7.0	3.0	"	1092	
"	P <sub>r</sub> -5	CIb	20.0	34.3	13.2	5.6	"	1091	
"	P <sub>r</sub> -6	BIb	40.5	15.6	12.5	6.3	"		
凹石	6	IEa	6.7	6.4	4.4	175	An		
"	23	II Ca	15.9	8.4	5.5	840	"		
"	50	II Ga	(11.0)	6.7	4.3	(335)	"		破

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
凹石	6923	Z IIFc	12.8	12.6	8.3	1580	An		
先端磨		A(3.0')	(45)	30	28	50	"	1674	断面形角 一端完欠

住居址74(新)

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石鏃	17	— c	(14.8)	(14.6)	2.7	(0.4)	ob	1047	C
"	96	FIVa	17.7	(12.8)	4.0	(0.5)	"	1049	B
"	217	ANa	17.3	(10.5)	2.4	(0.2)	"	1045	B
"	296	HWb	16.5	(15.6)	3.2	(0.6)	"	1048	B
"	1288	GVc	25.8	16.1	4.1	1.1	"	1046	
"	1643	— b	(16.6)	(11.8)	5.0	(0.6)	"	1050	F
"	1969	— b	(18.8)	(11.4)	(2.7)	(0.7)	sh	1051	F
石匙	97	BIIIa	25.8	40.7	6.2	5.6	ch	1052	
"	708	CIIIb	65.3	38.2	9.7	13.3	Ry		
"	1445	AI-	(33.5)	38.2	8.3	(10.4)	"	1053	刃部欠
Sc	27	AIa	18.5	18.0	3.4	1.1	ob	1057	
"	844	(D+D)IIc	38.2	12.8	9.2	4.3	"	1055	
"	880	BIIb	28.3	36.4	10.8	9.0	sh		
"	936	BIIc	34.1	17.1	12.4	6.8	ob	914	(旧)?
"	976	BIc	37.8	51.8	10.4	17.0	"	1063	
"	1253	BIIc	17.5	12.3	3.7	1.1	"	1059	
"	1317	AIa	20.8	21.2	8.8	2.9	"	1060	
"	1918	BIIa	25.5	19.3	4.3	1.9	"	1056	
石鏃	1789	AI	26.5	13.7	4.0	0.8	"	907	(旧)?
"	2013	"	(20.8)	10.5	5.2	(1.1)	"	1054	先端欠
P-e	758	CI	28.6	16.4	6.3	2.7	"	1075	
"	865	DI	27.8	10.5	6.2	1.6	"	1076	
"	1192	"	28.1	11.7	7.3	2.3	"	1069	
"	1628	BII	24.7	25.3	15.7	9.3	"	1068	
"	1669	CII	22.5	11.7	5.1	1.8	"	1077	U-fの転用
U-f	23	CIa	38.8	12.2	5.2	2.0	"	1062	
"	269	BIa	19.8	23.1	4.8	1.0	"		
"	294	AIa	14.2	18.8	7.0	1.4	"	1065	
"	320	CIa	21.6	15.4	4.5	1.1	"	1066	
"	339	(AI+CI)a	30.8	28.7	7.3	5.1	"		
"	343	AIa	17.3	18.1	5.0	1.2	"		
"	704	(C+B)Ic	45.8	44.2	9.0	5.6	"		
"	776	CIa	17.7	16.6	4.8	1.6	"	1070	
"	933	AIa	31.6	15.8	6.2	2.7	ch		
"	955	BIc	23.8	27.8	14.8	8.8	ob		
"	971	BIIa	15.5	16.3	3.5	0.7	"	1058	
"	1105	CIb	29.8	15.3	6.2	1.8	"		
"	1146	CIa	31.8	8.2	4.8	1.1	"	1061	
"	1204	(A+B+B)Ic	26.3	26.8	15.0	9.3	"		
"	1289	AIa	21.0	30.0	7.7	3.4	"		
"	1557	(AI+BI)a	19.0	27.8	6.8	2.6	"	1064	
"	1637	BIa	19.3	24.1	5.1	1.6	"		
"	1680	CIc	19.7	21.6	5.8	3.0	"		
"	1955	(A+A)Ia	25.8	21.5	7.8	3.6	"	1078	
"	1962	BIa	29.9	38.6	14.0	10.7	"		黒カツ
"	1985	BIc	38.2	25.2	21.0	14.4	"	1067	黒カツ下層
"	1993	BIa	31.8	22.3	12.8	3.6	"		黒カツ
石核状器	739		18.3	21.8	9.2	3.4	"	1071	
"	1120		19.5	26.3	10.0	5.2	"	1074	
"	1192		13.8	29.8	8.2	2.9	"	1073	
"	1927		18.2	25.8	8.5	4.7	"	1072	黒カツ
凹石	256	II Cab	8.3	6.9	4.2	305	An		
"	283	II Da	10.8	6.5	4.7	360	"		
"	1268	II Dac	12.0	7.8	4.1	445	"		
"	1387	II Cac	11.2	7.5	3.6	361	"		
先端磨	6915	A(1.0')	(56)	18	12	19	Sp	1673	断面形丸 一端完欠
敲打器	1534		89	87	52	580	不明	1464	

住居址7

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	192	円基V-	(14.3)	19.2	4.3	( 1.1)	ob	1095	A
	335	円基Vc	19.8	15.2	5.2	1.4	"	1093	"
	490	"	18.5	14.0	3.8	0.9	"	1094	"
石 匙	23	A Ia	38.2	30.0	6.2	6.9	sh	1099	"
	26	B(II+I)a	22.8	37.3	10.2	9.0	ch	1100	"
	53	B IIa	23.9	30.4	9.3	5.9	ob	1097	"
石 錐	255	B Ia	59.6	19.3	13.0	12.3	"	1106	"
	366	"	22.5	19.6	5.8	2.3	"	1101	"
	492	(B+B)Ia	26.8	32.5	4.0	4.1	ch	"	"
	Z-1	B II d	19.8	27.5	7.7	2.8	ob	"	"
	41	A I	28.0	20.7	10.3	5.0	Ry	1102	"
	80	A(C)I	20.5	14.2	13.0	2.6	ob	"	"
	375	B I	26.2	31.0	12.3	7.3	"	"	"
	Z-2	C I	34.7	22.3	7.7	3.5	"	"	"
	57	C I b	40.0	17.8	14.4	7.1	"	1103	Naダブリ
	57	C I a	16.0	19.0	3.6	0.9	"	"	"
U・f	64	A I a	20.5	26.0	8.2	3.7	"	1105	Naダブリ
	70	B I a	14.5	29.3	4.0	1.4	"	"	ピエス剥片?
	132	(A+C)Ia	21.7	31.0	6.8	2.5	"	"	"
	214	C I a	16.8	18.0	3.0	0.6	"	"	"
	237	A I b	26.0	25.5	8.5	5.0	"	"	"
	239	B I a	16.7	15.7	2.7	0.5	"	1098	"
	243	A I c	38.3	35.6	11.5	17.1	"	"	"
	250	B I a	10.3	11.0	4.2	0.8	"	1104	"
	262	C I a	21.0	20.5	2.4	1.4	"	"	"
	274	A I a	(18.6)	17.4	2.3	0.6	"	"	刃端部欠
	326	B I a	21.4	22.8	5.4	2.0	"	"	"
	375	A I a	20.6	16.2	5.4	1.6	"	"	"
	433	C I a	22.0	14.6	4.5	1.0	"	"	"
	459	B II b	32.8	19.0	12.6	5.6	"	"	"
	488	C I c	19.5	37.2	23.8	14.5	"	"	"
497	A I a	18.0	30.6	4.9	2.4	"	"	"	
523	(A+C)Ia	24.5	39.0	7.1	6.3	ch	"	"	
Z-3	C I b	24.0	28.5	8.8	3.9	ob	1096	"	
Z-4	A I a	14.0	14.0	1.8	0.3	"	"	"	
凹 石	58	II Ga	10.2	6.3	5.1	300	An	"	"
	202	II Dac <sub>2</sub>	11.0	6.1	5.2	490	"	"	"
	410	II Ca	11.7	10.3	4.9	810	"	"	"

住居址72

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	75	HV-	(14.8)	17.0	2.3	( 0.6)	ob	"	A
"	169	GV a	21.3	13.2	3.0	0.6	"	1131	"
"	234	平基IVc	18.4	(11.4)	2.5	( 0.6)	"	"	B
"	235	FV-	(12.8)	(12.5)	1.8	( 0.2)	"	1125	D
"	387	G III a	16.8	( 9.8)	2.7	( 0.3)	"	"	B
"	428	HVc	16.7	11.6	3.8	0.7	"	"	"
"	430	GV(a)	(21.8)	13.0	3.4	( 0.8)	メノウ	1114	A
"	646	GV b	13.2	11.3	2.6	0.3	ob	"	"
"	796	円基V a	21.5	15.9	9.7	2.4	"	"	"
"	918	(E)-b	(20.7)	(14.6)	2.8	( 0.7)	sh	"	C
"	924	CV b	13.3	(14.2)	2.9	( 0.4)	ob	1107	B
"	1097	平基IV b	20.1	14.7	3.3	0.7	"	1144	"
"	1116	E III b	17.9	(14.3)	2.7	( 0.5)	"	"	B
"	1157	GV-	21.2	13.8	3.2	0.2	"	"	未製品
"	1254	円基Vc	20.7	(13.3)	4.0	( 0.8)	"	1147	B
"	1283	円基V b	25.2	19.8	9.7	4.2	"	"	"
"	1300	CV(a)	(21.7)	(15.7)	3.8	( 0.9)	"	"	D
"	1360	GV a	16.4	14.0	2.7	0.4	"	1121	"
"	1363	平基V-	(23.3)	20.6	8.7	( 4.0)	"	"	A
"	1608	IV a	18.6	15.3	2.7	0.6	"	1119	"
"	1618	-- b	(13.5)	(15.2)	2.8	( 0.4)	"	"	C
"	1839	-(IV) b	21.3	15.6	8.3	2.2	"	"	未製品
"	1875	円基Vc	22.3	11.4	6.5	1.5	"	1150	"
"	1900	F III a	17.2	(12.5)	2.9	( 0.3)	"	"	B
"	1912	-- c	(16.4)	(14.3)	5.0	( 0.8)	"	"	F
"	1914	G III(a)	(13.0)	12.2	2.5	( 0.3)	"	"	A
"	2210	DIVc	18.6	(13.2)	4.1	( 0.7)	"	"	B

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
石 鏃	2413	HVc	15.7	15.6	3.2	0.6	ob	"	"
	2434	"	12.8	11.2	2.3	0.3	"	"	"
石 鏃	2448	DV(a)	(18.3)	(12.9)	2.6	( 0.3)	"	"	D
	2506	I III a	24.3	(17.4)	3.4	( 1.0)	"	1111	B
	2554	平基Vb	20.7	10.6	3.3	0.7	"	"	"
	2560	F III-	(25.3)	(13.0)	( 4.1)	( 0.8)	"	"	F
	2671	(G)IV-	(10.8)	13.9	3.3	( 0.4)	"	"	A
	2720	平基IV-	(17.3)	14.3	6.2	( 1.1)	"	"	A
	2733	HV b	16.7	14.3	3.1	0.6	"	"	未製品
	2733	IV-	(20.6)	(14.0)	( 3.5)	( 0.7)	"	1118	E Naダブリ
	2931	IVc	20.4	(16.2)	4.0	( 1.1)	"	"	B
	3014	-- c	(12.0)	(16.1)	( 6.3)	( 0.8)	"	"	F
	3101	I Vc	16.6	13.2	3.2	0.5	"	"	"
	3297	IV a	21.0	(21.1)	6.7	( 1.5)	"	"	B
	3344	EVc	23.1	(15.8)	3.7	( 0.8)	"	"	B
	3353	-- b	(23.5)	(19.6)	7.7	( 2.1)	"	"	C
	3474	(円基)V-	20.8	12.4	4.8	1.1	"	"	未製品
3592	FV a	16.2	(15.0)	3.5	( 0.6)	"	1127	B	
3877	E III a	18.5	(11.8)	3.2	( 0.4)	"	"	B	
4013	GV a	13.1	9.7	2.0	0.2	"	"	1128	
4156	G III(a)	(15.7)	(12.2)	2.1	( 2.5)	"	"	D	
4194	GV a	16.5	13.2	2.5	0.4	"	"	1122	
4351	DV b	15.2	11.9	2.3	0.3	"	"	1124	
4450	GV b	26.0	(16.7)	3.8	( 0.9)	"	"	1113	B
4692	IV b	25.0	(16.2)	5.3	( 1.6)	"	"	1138	B
4862	-IV b	17.7	12.4	2.6	0.6	"	"	未製品	
5102	GV b	21.0	18.2	5.7	1.0	"	"	1132	
5314	(G)IV-	(13.6)	17.5	3.2	( 0.6)	"	"	A	
5357	円基V-	(21.3)	19.3	3.7	( 1.6)	"	"	A	
5366	IVc	16.8	15.3	5.5	1.2	"	"	1133	
5416	(E)IV-	(18.8)	24.3	4.3	( 1.5)	"	"	A	
5423	IV b	19.3	17.3	2.5	0.6	"	"	1120	
5458	CV b	21.7	(18.3)	2.8	( 0.7)	"	"	1112	B
5599	DV a	17.3	12.4	2.9	0.4	ch	"	"	
5623	C III a	25.0	(16.2)	3.5	( 0.8)	ob	"	B	
5625	HV b	20.3	(18.6)	5.3	( 1.7)	"	"	B	
5629	GV b	17.9	14.7	3.7	0.7	"	"	未製品	
5643	HVc	28.9	25.5	10.1	4.7	"	"	1137	
5649	G III b	21.0	(19.3)	5.4	( 1.3)	不明	"	B(製作時)	
5676	--	(15.4)	(18.0)	5.0	( 1.3)	ob	"	G(先端製作時)	
5689	-(III) a	(20.8)	(15.8)	4.4	( 1.2)	"	"	G	
5889	FV a	26.6	20.0	6.2	1.7	"	"	1109	
6072	GV a	13.9	20.6	3.0	0.3	"	"	"	
6177	HV b	17.6	14.6	4.8	0.8	"	"	1135	
6248	DV a	19.2	(13.6)	2.9	( 0.4)	"	"	B 鋸歯状	
6249	(G)(III)-	(15.3)	23.6	3.2	( 0.9)	"	"	A	
6253	(E)III-	(15.8)	(19.8)	3.5	( 0.7)	"	"	D(先端製作時)	
6275	FV a	18.5	17.0	3.9	0.8	"	"	1117	
6352	CVc	18.6	(15.8)	4.8	( 0.7)	"	"	B	
6427	HV b	18.8	17.5	5.8	1.4	"	"	1141	
6446	IVc	20.6	18.2	7.5	2.1	"	"	"	
6449	-- b	25.0	17.8	3.3	1.2	"	"	1142	未製品
6457	DV a	21.7	(15.4)	3.5	( 0.6)	"	"	B	
6457	DV b	16.3	(11.9)	3.0	( 0.3)	"	"	B Naダブリ	
6481	GV b	18.7	(12.2)	4.3	( 0.6)	"	"	B	
6507	-- b	(16.5)	(18.7)	( 3.4)	( 0.7)	"	"	F	
6761	(G)IV-	(13.9)	(10.0)	( 3.0)	( 0.3)	"	"	E	
6889	IV b	26.8	15.5	6.2	2.0	"	"	1129	
6901	IV d	17.0	15.6	2.5	0.8	"	"	未製品	
6912	BV e	17.2	(11.7)	3.2	( 0.4)	"	"	B	
7028	DV a	20.0	14.6	3.7	0.7	"	"	1115	
7074	HV b	19.4	12.6	4.5	0.8	"	"	"	
7094	IVc	10.1	13.5	3.3	0.7	"	"	1143	
7177	-- b	30.2	23.3	9.2	4.1	"	"	未製品	
7246	DV a	23.6	(13.2)	3.8	( 0.7)	"	"	B	
7291	F III a	26.5	(17.7)	2.4	( 0.6)	"	"	1108	B
7295	IV b	22.9	(20.6)	4.2	( 1.6)	"	"	1140	B
7302	EV b	20.1	15.7	3.2	0.6	"	"	1116	
7388	G III(a)	(19.2)	(13.5)	3.1	( 0.6)	"	"	D	
7411	(円基)Vb	27.5	18.6	3.7	1.6	"	"	1149	未製品

器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考	器種	登録 No.	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図 番号	備 考
石 鎌	7418	AVa	24.2	(17.3)	3.0	(0.7)	ob		B	Sc	7099	BIa	23.4	21.3	4.6	1.7	ob		
"	7428	FVb	18.5	(15.3)	3.5	(0.6)	"		B	"	7172	"	12.0	29.8	4.8	2.3	不明		
"	7666	EIIIa	21.8	(16.2)	2.3	(0.6)	ch		B	"	7238	(B+C)Ib	23.4	19.8	3.0	4.8	ob		
"	7676	EVb	26.2	(15.0)	3.7	(1.0)	ob	1110	B	"	7272	AIa	16.7	(22.3)	5.7	(1.9)	"		刃端部欠 石鎌未製品?
"	7677	IVc	20.7	18.6	3.0	1.0	"	1146		"	7342	(B+B)Ia	25.3	23.2	4.7	2.1	sh		
"	7696	"	22.0	18.2	3.9	1.2	"	1130		"	7579	AIa	30.0	21.7	9.0	3.8	ob		
"	7719	円基Vb	22.3	16.4	6.5	1.8	"	1148		"	7656	BIa	22.5	31.6	7.0	5.3	"		
"	7751	EVa	15.1	13.8	3.5	0.5	"	1123		"	Z-4	AIIa	14.6	17.8	3.8	0.9	"		
"	7772	HVc	25.0	15.2	5.3	2.1	"	1139		"	Z-5	"	12.5	13.5	2.8	0.4	"		
"	7792	DVb	16.8	14.1	4.2	0.6	"			石 錐	402	AI	28.7	13.0	6.3	1.4	"	1182	
"	7798	(F)(III)-	(19.5)	(13.3)	(2.5)	(0.5)	"		E	"	791	"	27.2	12.9	5.6	1.4	"	1174	
"	7800	DIIIa	21.2	(16.3)	4.3	(0.8)	"		B	"	1117	"	(21.5)	17.8	5.8	(1.9)	ch		錐部先端欠
"	7813	--c	(18.2)	(12.8)	2.7	(0.5)	"	1126	C	"	1447	-I	(19.6)	(6.5)	(4.8)	(0.5)	ob	1188	錐部のみ
"	7818	平基Vb	22.8	(20.3)	4.6	(1.9)	"		B	"	1476	AII	16.8	11.5	10.8	0.8	"		
"	7852	HIIIa	20.1	(19.7)	3.2	(0.8)	"		B	"	1489	AI	(20.7)	9.8	9.5	(2.1)	"	1184	
"	7868	DIIIa	13.8	(10.2)	2.8	(0.3)	"		B	"	1915	"	22.7	19.6	7.2	2.3	sh		
"	7891	GVa	18.0	13.0	3.2	0.5	"	1134		"	2727	"	24.4	16.1	7.1	1.9	ob		
"	7901	--b	(14.4)	(15.3)	3.2	(0.5)	"		C	"	2928	"	28.0	11.5	2.8	0.8	"	1181	
"	7904	平基IVc	20.3	(14.3)	2.8	(0.9)	"		B	"	3417	"	(27.1)	26.4	5.5	(2.3)	sh	1173	錐部先端欠
"	7934	EVe	18.8	(16.2)	3.7	(0.6)	"		B	"	4404	AII	(18.8)	14.2	5.1	(1.0)	ob		
尖頭状 石 匙	Z-2	--d	(16.5)	(14.2)	(3.0)	(0.7)	"		F	"	5263	AI	18.0	12.8	7.3	1.2	"		
"	4559	-Vb	30.0	15.3	7.6	3.4	"	1136	未製品	"	5275	"	27.8	14.2	7.1	1.6	"	1176	
"	1113	BIIIa	22.8	42.7	5.3	5.8	不明			"	5400	AII	21.0	20.0	5.2	2.1	"	1178	
"	1410	BIIa	28.6	45.0	8.2	7.9	ob	1160		"	5637	"	29.2	13.2	7.2	1.8	"		
"	2387	BIIIa	45.7	78.8	14.5	40.7	Ry	1154		"	5724	AI	19.5	19.0	5.0	1.1	"		
"	2940	BIIa	32.3	(49.5)	6.4	(9.2)	不明	1157	刃端欠	"	5823	"	25.2	15.5	7.0	1.8	"	1175	
"	2974	AI(a+b)	44.0	36.6	7.0	14.4	ch	1152		"	5954	"	26.8	19.0	5.5	2.2	Ry		
"	3040	BIIIa	37.3	46.7	9.2	13.5	Ry	1159		"	6169	"	48.5	27.8	12.5	10.6	ob	1171	
"	3223	BIIIb	24.5	(24.6)	8.0	(2.7)	ob		刃部先端欠・両刃	"	6176	"	31.1	24.7	8.3	6.5	Ry		
"	3340	"	25.7	(50.7)	7.1	(6.1)	Ry	1162	刃部先端欠	"	6295	"	(29.5)	17.7	6.5	(2.5)	不明	1177	錐部先端欠
"	4880	AIII(a+a)	52.5	20.0	5.7	5.4	ch	1153	前者両刃	"	6438	AII	18.6	25.4	4.2	1.7	ob	1180	
"	5152	BIIIa	24.4	48.2	4.5	3.7	不明			"	6669	"	15.7	13.7	5.6	0.9	"	1179	
"	5381	BIII(a)	(42.8)	(54.0)	10.2	(18.0)	"		刃部先端欠	"	6939	AI	34.1	15.2	5.3	2.7	不明	1185	
"	5398	BIa	30.0	42.8	5.5	6.4	Ry	1158		"	7349	"	17.5	21.7	8.3	1.7	ob		
"	5618	BIIIa	26.0	55.6	5.3	7.6	"	1155		"	7458	BI	30.0	14.2	9.3	2.9	ch		
"	6014	AIIIa	74.8	30.3	6.4	(14.8)	不明	1151	刃部先端少欠	"	7482	AI	(29.2)	9.2	5.0	(1.3)	ob	1183	錐部先端欠
"	6375	BIIIa	27.2	36.8	7.1	5.4	ob	1156		"	7754	"	28.3	22.6	9.5	4.6	"	1172	
"	6882	CIIIb	42.0	31.8	4.2	3.6	不明	1163		"	7861	"	29.0	26.3	7.5	4.0	ch		
"	7395	BIIIb	21.8	51.0	8.5	11.0	Ry			P·e	403	DI	34.0	20.3	10.7	5.0	ob		
"	7808	BIIIa	24.0	39.3	7.8	5.1	ch	1161		"	736	CII	(34.6)	31.0	10.8	(8.7)	"		下端欠
"	7810	"	31.8	(44.0)	7.0	(5.3)	sh		刃部先端欠	"	2337	CI	32.4	21.5	7.8	4.2	"		
"	Z	"	25.8	44.3	6.5	6.1	不明			"	2407	CII	26.0	22.0	9.8	4.9	"		
Sc	241	(B+C)IIc	23.2	22.0	6.8	4.0	ob			"	2567	CI	(29.3)	21.6	10.3	(6.4)	"		
"	299	(B+B)Ia	33.8	14.5	4.5	1.6	"	1169		"	2571	A(C)I	14.3	22.8	6.0	2.0	"		
"	1162	BIa	24.6	18.4	6.3	2.7	"			"	2763	BI	22.0	34.7	16.2	8.6	"		
"	1164	BIB	25.7	23.8	9.5	3.8	"			"	2780	"	25.3	22.0	13.3	6.5	"		
"	1563	BIIb	18.5	26.7	10.6	4.7	"			"	2936	DI	21.3	13.0	9.8	2.5	"		
"	1845	AII(a)	25.6	33.5	14.4	7.9	"	1170	ヒエスの転用	"	3014	BI	21.8	18.5	14.4	4.6	"		Noダブリ
"	2068	AIa	40.4	48.9	10.6	17.5	不明	1164		"	3192	CIII	33.6	30.0	9.6	9.2	"		
"	2656	BIIb	18.6	26.0	5.8	3.2	ob			"	3530	A(B)I	33.7	26.0	18.2	12.3	"		
"	2757	CIIa	15.8	20.0	8.3	2.1	"			"	3980	CI	38.4	21.0	10.1	8.5	"		
"	2868	BIIa	20.5	24.5	8.0	3.6	"			"	4038	CIII	24.3	21.4	11.3	5.7	"		
"	3019	AIIb	26.9	24.8	8.6	4.4	"			"	4097	DI	28.0	17.0	11.7	4.4	"		
"	3019	AIa	16.0	22.1	6.7	1.8	"	1166	Noダブリ 挿入あり	"	4168	"	22.5	11.6	6.8	1.9	"		
"	3985	CIa	18.2	12.3	3.7	0.5	"			"	4692	"	27.7	16.5	8.6	3.8	"		
"	4290	BIIa	13.5	19.0	4.3	1.0	"			"	4735	"	30.3	14.8	13.8	5.4	"		
"	4956	CIa	30.3	26.7	8.5	5.4	"	1165		"	5040	CII	20.8	15.7	9.1	2.9	"		
"	5233	AIIa	19.0	26.6	5.8	2.0	"	1167		"	5217	BI	(32.4)	35.3	16.2	(16.8)	"	1186	下端欠
"	5293	AIa	32.3	23.5	6.7	4.1	"			"	5247	DI	26.6	16.4	13.3	4.7	"		
"	5383	CIa	18.3	21.5	4.8	1.4	"			"	5249	CI	15.5	16.4	5.7	(1.3)	"		下端一部欠
"	5429	AIIb	26.8	20.8	12.5	5.6	"			"	5296	BI	26.4	18.9	13.0	4.5	"		
"	5470	AIa	19.7	13.2	3.0	0.9	"			"	5355	CI	27.7	26.2	12.4	6.1	"		
"	5693	CIIb	24.5	32.5	7.5	5.1	"			"	5356	A(B)I	(24.4)	17.0	19.2	(6.6)	"		
"	5787	AIIb	44.8	42.8	13.2	19.8	"			"	5406	DI	32.3	15.0	13.0	6.5	"	1189	
"	6037	(BII+DI)a	22.5	25.3	9.0	6.2	"		刃部両端欠	"	5434	CI	(22.5)	13.9	6.6	(1.9)	"		
"	6118	DIa	39.2	13.4	7.8	4.1	"	1168		"	5480	"	19.1	12.0	4.0	1.0	"		
"	6135	AIa	19.4	13.9	4.0	1.3	"			"	5514	BIII	35.0	29.0	17.0	17.7	"		
"	6159	AIIb	25.0	26.0	8.3	5.6	"			"	5765	BI	32.1	18.4	17.5	7.4	"		
"	6402	BIB	29.5	28.2	13.3	7.0	"			"	5799	CI	(21.8)	23.4	9.8	(3.2)	"		
"	6825	(BII+DI)a	20.2	27.7	7.5	4.3	ch			"	5915	"	22.4	21.5	7.0	2.8	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
P-e	5953	DI	23.3	14.8	6.3	2.1	ob		
"	6453	CI	29.3	27.7	7.0	6.0	"	1187	
"	6569	"	27.7	20.5	7.0	4.7	"		
"	7052	DI	22.8	16.2	9.0	3.2	"	1190	
"	7318	BIII	29.2	37.6	15.5	13.7	"		
"	7579	CI	(26.8)	18.9	8.9	(4.8)	"		下端欠
"	7624	"	(26.3)	21.6	12.8	(5.6)	"		下端欠
"	7752	"	19.2	17.0	5.5	1.8	"		
"	7819	"	17.1	25.7	5.6	2.3	"		
U-f	60	B Ia	29.8	20.0	7.2	3.2	"		
"	100	A Ia	30.0	24.7	8.7	5.8	"		
"	160	B Ia	22.5	22.3	8.9	2.8	"	1201	
"	163	B IIa	14.8	25.2	6.0	2.0	"		
"	348	C I b	10.0	34.5	10.2	3.9	"		
"	379	(B+C)Ia	16.5	22.3	16.0	4.2	"		
"	422	C I a	16.8	19.8	7.2	1.3	"		
"	439	B I a	20.3	18.2	9.3	1.8	"		
"	442	A I a	21.8	25.8	11.8	3.8	"		
"	446	"	22.6	20.0	7.1	2.4	"		
"	514	B I a	28.5	24.9	11.3	7.8	"		
"	601	C I a	24.3	21.5	4.7	2.0	"		
"	688	(B+B)Ia	20.6	13.2	2.0	0.6	"		
"	688	C I a	37.0	9.2	8.3	1.7	"		No.ダブリ
"	693	(B+C)Ic	50.0	17.3	9.8	7.9	"	1205	
"	715	B IIc	25.0	19.6	18.5	7.4	"		
"	764	B I b	36.3	30.0	13.5	15.1	"		
"	800	C I b	23.5	17.8	16.8	4.4	"		
"	826	C I a	23.7	14.2	7.3	1.9	"		
"	832	"	16.7	14.6	3.9	0.7	"		
"	964	(C+A)Ia	22.5	30.0	8.3	6.0	ch		
"	966	A I a	16.7	24.3	8.3	2.7	ob		
"	989	"	40.5	23.8	11.5	6.6	"		
"	1002	A I b	21.0	21.0	9.7	3.2	"		
"	1030	A I a	33.0	34.5	11.3	8.5	"		
"	1055	B I a	32.4	27.0	10.5	8.1	"	1204	
"	1105	C I a	21.8	19.2	5.7	1.7	"		
"	1127	B I a	20.0	12.3	2.5	0.7	"		
"	1140	(C+A+C)Ia	50.3	50.8	9.7	17.4	sh	1207	
"	1240	(B+AI)c	23.5	39.2	11.5	8.4	ob		
"	1281	C I a	22.5	20.0	6.5	2.5	"		
"	1368	(B+B+B)Ia	13.5	13.8	2.8	0.3	"		
"	1381	C I a	12.8	29.2	7.5	2.5	"		
"	1404	"	19.6	22.0	6.3	1.9	"		
"	1474	A I a	42.0	15.7	5.7	2.8	"	1194	
"	1532	B IIc	36.7	23.0	10.3	8.2	"		
"	1605	A I a	13.8	19.5	2.8	0.6	"		
"	1662	A IIa	22.0	23.5	4.3	2.0	"		
"	1675	B I b	24.3	24.5	10.0	5.8	"		
"	1731	C I b	21.5	21.6	10.0	3.9	"		
"	1779	A I a	23.6	28.1	11.2	5.0	"		
"	1794	B I a	22.2	15.0	4.3	1.1	"		
"	1900	C I a	20.8	12.5	4.6	1.0	"		
"	1984	A I a	18.4	12.1	4.0	1.0	"		
"	2078	B I a	22.6	17.4	10.0	3.1	"		
"	2171	B I b	18.4	31.8	7.7	3.2	"		
"	2267	(B+A)Ia	32.0	34.6	8.5	9.0	"		
"	2389	B I a	34.1	14.8	5.1	2.0	"	1193	
"	2407	A IIa	31.7	17.3	10.5	4.2	"		
"	2499	B I c	32.7	32.5	12.0	6.5	"		
"	2499	(C+A)Ia	20.1	21.2	9.0	2.3	"		No.ダブリ
"	2504	A I a	17.8	25.4	4.2	1.3	"		
"	2538	"	28.3	24.6	5.0	2.6	"		
"	2616	"	27.0	18.6	8.2	3.4	"		
"	2685	C I b	18.6	42.8	14.0	10.0	"		
"	2688	B I a	23.0	14.0	6.3	1.2	"		
"	2771	A I c	24.8	26.0	10.4	5.4	"		
"	2923	"	16.1	43.2	14.8	8.8	"		
"	3014	C I a	24.3	13.1	2.7	0.8	"		
"	3014	B I b	16.2	18.9	6.7	1.5	"		No.ダブリ
"	3093	"	23.7	32.6	11.7	8.3	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U-f	3096	C I a	25.0	40.2	6.7	(3.9)	ob		刃部少欠
"	3098	B I c	28.6	24.0	10.9	6.0	"		
"	3110	B I a	24.8	18.2	6.8	2.0	"		
"	3276	(A+C)Ia	12.4	17.3	3.9	1.0	"		
"	3349	B I a	16.0	22.7	6.0	2.0	"		
"	3354	C I a	24.0	23.0	6.2	2.6	"		
"	3541	(A+A)Ia	45.0	30.8	16.5	20.9	"		
"	3682	C I a	24.1	16.8	6.2	2.2	"		
"	3708	B I a	23.2	19.8	12.9	3.5	"		
"	3739	A IIa	21.4	14.3	3.5	0.7	"		
"	3826	B I a	26.3	36.5	11.6	7.6	"		
"	4014	(B+A)Ia	34.3	12.5	6.7	2.1	"		
"	4061	B I a	14.2	28.5	8.2	3.0	"		
"	4077	A IIb	23.7	30.2	14.5	4.4	"		
"	4112	A I c	29.5	18.7	18.5	7.4	"		
"	4121	A I a	29.4	17.2	9.8	3.9	"		
"	4167	"	20.0	22.8	7.2	1.6	"		
"	4187	"	15.2	23.8	5.5	2.0	"		
"	4193	"	26.0	30.1	13.3	7.7	"		
"	4257	C I b	30.4	11.3	8.3	1.9	"		
"	4340	A I a	23.8	24.2	3.0	1.5	"		
"	4385	C I a	17.9	17.8	3.0	0.8	"		
"	4413	A I a	30.0	24.5	4.5	2.3	"		No.ダブリ
"	4413	C I a	20.3	19.4	4.8	1.3	"		
"	4543	(B+C)Ib	42.3	22.7	14.7	10.2	"	1206	
"	4559	B I a	14.8	19.2	5.6	1.2	"		
"	4610	A I b	19.8	20.5	10.7	2.6	"		
"	4673	(C+C)Ib	19.1	40.7	17.0	6.4	"		
"	4718	B I a	19.7	21.3	7.2	2.7	"		
"	4744	"	18.7	18.7	3.2	0.9	"		
"	4744	"	23.0	11.5	3.3	0.7	"		No.ダブリ
"	4753	"	29.3	23.7	8.1	3.6	"		
"	4781	(B+B)Ic	36.6	23.7	14.0	11.9	"		
"	4856	B I a	29.2	38.9	10.0	9.2	sh		
"	4862	"	23.5	18.7	7.0	1.9	ob	1197	
"	4930	C I a	31.7	31.5	4.8	3.0	"		
"	5034	(A+C)Ia	20.6	30.5	10.6	5.4	"		
"	5060	A I a	19.2	16.5	14.4	4.7	"		
"	5080	B I a	14.2	15.8	5.1	0.7	"		
"	5121	C I a	23.8	16.8	7.9	2.5	"		
"	5174	(C+B)Ia	32.4	14.6	8.1	3.2	"		
"	5188	(B)Ia	22.7	(22.0)	5.4	(1.7)	"		刃部先端欠
"	5219	C I a	30.5	33.8	9.8	6.4	"		
"	5242	B I b	20.8	43.0	14.8	14.0	"		
"	5249	C I a	31.0	19.7	8.1	2.4	"		
"	5277	C I c	16.0	18.7	10.1	2.5	"		
"	5297	B I a	24.3	13.8	8.6	2.2	"		
"	5332	A I a	32.3	26.8	15.5	10.7	"		
"	5358	"	26.4	19.8	6.8	2.1	"		
"	5366	C I a	21.7	11.0	4.6	1.0	"		
"	5373	B I a	15.5	28.2	9.0	2.6	"	1203	
"	5373	"	34.2	20.0	5.7	3.4	"		No.ダブリ
"	5383	B I b	26.2	14.5	12.0	4.0	"		
"	5411	A I a	14.3	22.6	5.8	1.6	"		
"	5430	(G+AI+CH)a	39.8	59.7	13.0	11.9	"		
"	5442	B I a	19.0	32.6	9.5	3.5	"	1200	
"	5453	C I b	18.0	26.8	10.6	4.7	"		
"	5514	A I b	32.0	20.3	9.4	4.4	"		
"	5543	C I a	31.2	25.7	9.2	3.9	"		
"	5552	B I a	14.6	19.6	2.7	0.6	"		
"	5576	C I a	30.4	18.2	7.4	2.6	"		
"	5616	A I b	33.0	40.9	17.6	17.8	"		
"	5625	(A+B)Ia	22.8	18.9	6.5	2.4	"		
"	5674	B I a	20.1	24.0	7.2	1.8	"		
"	5675	A I a	14.7	25.8	9.8	3.9	"		
"	5687	(AI+CI)a	12.3	34.0	9.5	5.6	"		
"	5695	C I a	21.2	16.4	4.1	1.4	"		
"	5716	C I b	17.4	29.8	6.9	2.8	"		
"	5766	(A+C)Ia	20.7	30.0	8.8	2.7	"		
"	5768	C I a	23.6	16.8	5.8	1.8	"		

器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考	器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番号	備考
U·f	5780	(A+A+C)Ib	25.8	35.5	7.3	4.3	ch			U·f	7356	AIa	43.0	28.0	9.8	6.7	ob		
"	5798	BIa	33.4	15.5	3.8	2.3	ob	1192		"	7380	(C+B)Ib	39.8	43.6	21.4	26.6	"		
"	5926	BIb	16.3	23.8	8.0	3.0	"			"	7448	BIa	29.4	17.3	10.3	3.4	"		
"	5934	CIb	30.8	16.7	9.3	4.3	"			"	7457	AIa	21.3	10.0	6.7	1.2	"		
"	5970	(C+A)Ia	31.8	41.4	13.0	8.5	"		Noダブリ	"	7468	"	43.0	20.3	12.6	6.0	"		
"	5970	AIa	18.2	21.8	6.7	2.7	"			"	7479	BIc	26.2	27.7	8.7	5.5	"		
"	6008	(C+C)Ia	20.2	29.1	7.0	2.7	"			"	7482	CIIa	23.2	24.8	7.2	2.9	"		
"	6025	AIa	20.2	17.8	8.6	2.3	"			"	7496	(A+A)Ia	30.3	20.6	7.6	4.8	"		
"	6028	BIa	24.3	12.2	6.4	1.3	"			"	7546	CIb	16.3	37.0	10.7	5.7	"		
"	6078	AIb	28.7	30.7	13.8	6.2	"			"	7579	CIIa	17.4	27.0	4.6	1.8	"	1202	
"	6092	(A+A)Ib	24.5	22.2	16.4	6.2	"			"	7584	AIa	36.2	28.0	11.2	10.0	"		
"	6110	(C+C)Ia	19.7	21.2	5.2	1.6	"			"	7602	CIa	21.8	24.0	9.5	3.5	"		
"	6120	BIa	20.4	13.0	4.0	1.0	"			"	7608	BIa	18.2	22.3	4.7	2.1	"		
"	6129	"	20.0	28.0	9.3	3.3	"			"	7620	AIa	17.3	13.2	4.5	1.2	"		
"	6135	AIa	26.5	32.7	10.5	6.6	"	1191		"	7634	BIa	24.5	35.3	6.3	3.4	"		
"	6144	"	27.3	17.4	5.0	1.8	"			"	7655	CIa	24.3	23.8	4.1	1.7	"		
"	6154	"	17.1	23.1	5.8	1.6	"			"	7656	"	22.3	22.7	5.5	2.0	"		
"	6156	CIa	34.8	22.3	6.7	3.5	"			"	7659	BIIa	34.6	24.4	14.7	11.5	"		
"	6168	"	25.2	13.0	3.7	0.9	"			"	7669	CIa	31.8	18.6	6.8	3.1	"		
"	6256	BIIa	39.4	16.0	7.3	3.9	"	1196		"	7708	(A+B)Ib	22.7	22.7	9.5	5.8	"		
"	6310	BIa	17.3	21.4	3.9	1.5	"			"	7709	(A+A)Ia	33.8	28.9	8.5	6.5	"		
"	6362	AIa	28.3	18.5	8.2	3.5	"			"	7714	(A+B)Ia	22.0	25.6	7.1	3.3	"		
"	6402	CIa	18.3	34.0	8.3	2.8	"			"	7740	AIa	25.6	20.8	7.5	2.8	"		
"	6416	(B+B)Ia	24.7	21.5	8.6	5.5	"			"	7759	(A+A)Ia	18.7	27.6	7.6	4.0	"		
"	6416	BIc	23.7	14.7	9.7	3.0	"		Noダブリ	"	7889	(B+C)Ib	34.5	37.9	11.9	15.7	"	1208	
"	6416	AIb	28.4	15.7	13.7	4.3	"		Noダブリ	"	Z-1	AIb	17.6	22.6	8.8	2.4	"		
"	6437	BIa	24.0	15.9	6.5	1.9	"			"	Z-3	AIa	17.3	17.8	4.0	1.5	"		
"	6448	AIa	20.7	16.1	4.0	0.9	"			石核状器	392	"	19.7	50.2	8.7	8.8	"		
"	6449	BIa	14.8	21.5	4.8	1.1	"			"	1416	"	17.8	37.5	9.0	7.1	"		
"	6459	(C+C)Ia	23.5	21.3	8.2	2.4	"			"	2585	"	15.3	36.5	13.2	4.8	"		
"	6483	CIb	27.2	40.3	6.5	7.3	"			"	2710	"	21.7	42.3	18.0	8.6	"		
"	6503	AIb	35.2	24.7	11.8	8.2	"			"	3202	"	28.9	45.2	12.9	16.2	"		
"	6508	AIa	33.2	18.4	8.9	2.5	"			"	3944	"	24.0	36.5	12.8	9.7	"		
"	6508	CIa	11.0	37.4	14.6	2.9	"		Noダブリ	打石磨石	Z	AIb	8.2	6.7	2.8	330			
"	6508	BIb	23.8	24.6	16.7	5.0	"		Noダブリ	"	736	-	( 4.9)	( 3.2)	( 1.3)	( 31)	Ry		a <sub>1</sub>
"	6545	(A+A)Ia	21.7	19.4	5.6	1.5	"			"	2653	-	( 5.2)	( 3.1)	( 1.2)	( 24)	"		E <sub>s</sub>
"	6545	CIa	26.8	12.8	6.5	1.8	"		Noダブリ	"	5022	AI	(10.7)	( 5.4)	( 3.3)	( 265)	di		b <sub>1</sub> 火熱うける
"	6590	AIa	23.8	24.1	9.3	2.7	"			"	6395	-	( 4.8)	( 5.7)	( 1.2)	( 38)	Gs		
"	6667	CIa	21.2	23.8	5.7	3.7	"			凹石	7	II Ga	11.1	6.6	5.2	340	An	1667	
"	6717	AIa	34.6	14.0	3.8	1.8	"			"	87	IIDac	10.1	7.7	5.9	560	"		
"	6719	"	29.6	16.6	5.8	2.5	"			"	153	II Cac	8.2	5.3	3.5	165	"		
"	6767	"	26.7	13.5	7.7	2.3	"			"	239	IIDa	8.7	6.6	4.5	250	"		
"	6781	(C+B)Ia	14.1	29.3	6.8	1.7	"			"	246	II Cabc	11.9	8.0	5.8	730	"	1660	
"	6830	(C+A)Ia	27.5	20.8	6.1	1.8	"			"	262	II Fa	9.2	9.0	5.7	450	"		
"	6835	BIa	19.8	21.7	5.2	1.5	"			"	916	IIDac	8.1	5.5	4.3	225	"		
"	6848	AIa	20.5	23.2	5.3	1.7	"			"	983	-	( 9.4)	9.9	5.4	( 593)	"		
"	6865	CIa	18.1	35.2	11.9	3.9	"	1199		"	1115	IIDa	30.0	15.8	13.1	5900	"		
"	6922	CIb	13.2	17.8	18.5	3.9	"			"	1178	"	11.9	6.8	5.0	455	"		
"	6956	(C+A)Ia	19.2	18.6	3.7	0.7	"			"	1203	IIDac	10.3	7.8	6.0	455	"		
"	6965	AIIa	11.7	22.7	4.0	1.1	"			"	1600	II Ga	13.2	10.2	7.4	950	"		
"	6965	BIa	38.2	20.3	12.8	5.3	"		Noダブリ	"	2390	-	( 5.6)	5.6	2.5	( 100)	"		
"	7006	"	34.2	10.0	11.0	3.4	"			"	2702	II Ga	11.0	6.3	3.2	275	"		
"	7041	(B+C)Ia	39.4	22.5	4.5	2.5	"	1198		"	3941	IIDa <sub>2</sub>	6.2	5.9	4.6	200	"		
"	7059	BIa	26.0	24.0	9.2	4.2	"			"	4848	II Ca	9.2	6.1	3.8	265	"	1664	
"	7062	"	16.0	24.5	5.2	1.6	"			"	4849	IIDa	10.1	8.8	5.7	485	"		
"	7099	CIb	33.5	35.2	9.8	5.5	"			"	4850	II Ga	10.5	7.3	5.5	500	"		
"	7123	BIa	28.7	14.3	12.1	4.0	"			"	4994	IIDa	8.3	7.2	5.6	355	"	1666	
"	7149	AIc	21.3	27.7	7.9	4.4	"			"	5025	II Eac	10.8	10.3	5.4	695	"		
"	7149	CIa	23.8	25.2	10.3	3.4	"		Noダブリ	"	5177	II Ga	10.6	8.2	3.0	250	"		
"	7211	AIa	39.2	20.3	7.9	3.9	"			"	5178	I Aabc	( 8.5)	7.5	4.5	( 395)	"	1661	破
"	7213	CIa	24.3	19.2	10.8	2.9	"			"	5315	IIDa	7.5	6.5	5.0	270	"		
"	7223	BIb	42.8	18.0	14.2	8.1	"			"	5810	II Ga	11.4	7.8	3.0	325	"	1665	
"	7224	CIa	23.4	41.5	9.8	5.2	"			"	5907	IIDa	8.4	7.0	6.8	460	"		
"	7229	"	29.3	26.2	13.3	7.1	"			"	6170	I Aabc	10.6	7.3	4.9	595	"		
"	7279	(C+A)Ia	22.5	25.4	10.2	( 3.7)	"		AIaの刃部先端欠	"	6175	II Ca	10.8	8.6	5.5	620	"		
"	7283	AIc	33.3	28.7	18.6	16.6	"			"	6183	IIDa <sub>2</sub>	7.6	6.3	5.0	260	"		
"	7289	BIb	30.3	29.5	13.4	8.8	"			"	6298	II Ca	(10.2)	7.6	5.2	( 465)	"		破
"	7313	CIa	42.4	18.4	12.7	6.9	"	1195		"	6301	IIDa	7.7	6.6	4.8	270	"		
"	7324	BIb	27.2	26.3	10.0	4.3	"			"	6330	II Fac	8.5	7.6	5.8	390	"		
"	7332	BIa	26.2	24.8	9.5	2.6	"			"	6591	I Eac	7.8	5.8	6.0	300	"		



器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
凹石	7464	II Cab	10.4	7.6	4.7	550	An		
"	7568	I Fc	15.9	7.9	7.2	1150	"	1662	
"	7593	I Aabc	11.4	7.6	3.6	425	"		
"	7599	II Ea	4.9	4.2	2.8	65	"		
"	7646	II Ca	(11.2)	9.4	4.0	( 525)	"		破
"	7829	—	( 6.0)	5.9	3.6	( 145)	"		
"	住内	II Da <sub>2</sub>	9.0	5.7	4.9	220	"		
"	Z-1	II Cac	12.1	7.2	4.1	410	"	1663	
"	Z-2	II Ba	13.4	6.4	4.5	435	"		
"	Z-3	II Cac	12.0	10.6	6.1	1100	"		
"	⊙	II Fc	10.2	11.3	8.2	1075	"		
石皿		BI	(17.3)	(14.0)	( 9.2)	(3100)	"		No1374 F
"		BIII	(16.9)	(15.3)	( 4.6)	(1400)	"		No1381 F
"	509	"	( 6.7)	( 6.2)	( 6.0)	( 200)	Dp		No1383 F 1367+2963と接合
"		BVI	(12.4)	( 8.4)	( 8.4)	( 460)	An		No1388 F
"		"	9.1	7.3	4.1	280	"		No1267
"	5042	A II	(19.6)	(19.8)	( 7.7)	(4700)	"		No5042 F
"		"	( 9.2)	(16.2)	( 7.2)	(2100)	"		No7603 F
先端磨	6912	B(x.x)	106	28	17	75	Sp		断面形丸
"	6920	A(x.0')	( 63)	( 24)	( 18)	37	"		" "
"	6922	B(x.x)	79	30	27	87	AA		" "
滑製石品	7231	A(1.x)	( 91)	34	15	45	An		断面形角、一端完 欠、磨石体の転用
"	34	块状耳飾	(11.5)	(19.3)	( 7.4)	( 3.2)	Ta		
"	6254	"	(15.5)	( 8.6)	( 3.0)	( 0.6)	"		

(追加)

住居址No.	器種	登録No.	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	図番	備考
13	凹石									遺物紛失
36	石 鑱	512	炉内小玉	17.8	12.0	2.1	0.3	ob		
57	石 鑱	1771	横刃C	11.0	12.0	8.0	1.2	Ta	1735	
66	石 鑱	176		8.2	4.6	13.0		不明	1460	
74(旧)	石 鑱	386		25.0	22.0	15.0	11.4	Ta	1722	未製品
"	"	1141		35.5	10.5	3.4	2.8	"	1739	"
"	"	1826		36.0	18.5	18.5	17.4	"	1723	"
"	"	1947		28.5	17.0	3.5	2.3	"	1740	"
74(新)	石 鑱	1110	块状耳飾	16.8	6.7	1.3	0.7	不明	1742	
"	石 鑱			1684				Ta	1684	

(2)集石

集石No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録No.	備考
7	U・f	AI a	18.0	16.4	2.7	0.7	ob	7597	
"	石 鑱	FV c	17.4	(14.3)	2.2	( 0.4)	"	7594	B
"	P・e	DI	21.7	11.3	8.0	1.8	"	7600	
"	"	BI	29.3	19.3	14.0	6.6	"	7601	
11	凹石	IIDa	10.5	5.8	4.1	320	An	8585	No15
"	"	II Ca	12.0	8.5	5.6	640	"	8582	No11
"	"	"	8.4	6.2	3.5	230	"	8581	No9
12	"	特磨	13.1	7.6	7.6	920	"	8759	
15	磨石	製斧定角	9.1	5.0	2.0	145		7001	集石欠番図1503
16	凹石	IIDac	10.3	7.0	4.9	430	An	8588	
"	"	II Ca	12.6	( 6.5)	4.0	( 420)	"	8587	破
21	石皿	BIII	(14.0)	(16.1)	( 6.0)	1300		1368	B <sub>1</sub>
"	凹石	IIDac	9.6	6.6	4.9	390	"	8573	
"	"	I Aabc	9.6	8.1	4.2	400	"	8593	
22	"	II Ca	12.9	7.0	4.2	450	"	8592	
"	"	—					"	8688	
23	"	II Ca	14.1	7.6	3.9	480	"	8591	
"	"	II Ga	17.8	14.8	6.3	1690	"	8597	
"	石皿	BV	(13.0)	(11.9)	( 7.0)	( 86)	"	1380	F
24	P・e	A(B)III	24.3	17.3	12.4	4.6	ob	7002	
"	石皿	BIII	(20.8)	(13.7)	( 5.8)	(1600)	An	1326	D <sub>2</sub>
"	凹石	II Ga	14.1	9.1	5.7	760	"	8599	
"	"	IIDa	11.3	6.4	4.4	390	"	8600	
"	"	"	9.3	5.8	5.0	350	"	8629	
"	"	II Cac	11.0	9.5	5.0	620	"	8602	
"	"	"	12.3	( 9.6)	5.4	( 790)	"	8598	破
"	"	I Eac	12.2	6.6	6.7	790	"	8601	
"	"	II Eab	10.6	8.8	5.3	760	"	8603	
"	"	I Aabc	10.4	7.6	3.8	370	"	8595	

集石No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録No.	備考
"	"	II Fa	11.0	10.3	6.3	690	"	8594	
26	U・f	(A+A)IIa	31.3	26.5	5.3	3.6	ch	7003	
27	凹石	IIDa	9.6	6.3	4.6	260	An	8606	
"	"	II Ca	12.5	8.1	4.7	540	"	8608	
"	"	II Ga <sub>2</sub>	8.0	8.7	6.7	390	"	8607	
28	U・f	AI a	27.8	20.2	6.3	2.5	ob	7004	
"	"	BI b	47.4	27.8	11.0	16.5	"	7568	
"	石皿	BIII	(12.3)	( 9.6)	( 5.6)	( 840)	An	1378	F
"	凹石	II Cac	9.5	7.0	4.4	350	"	8610	
29	Sc	BII a	24.4	20.6	6.8	2.5	ob	7005	
"	凹石	IIDa <sub>2</sub>	9.6	6.2	5.0	320	An	8605	
"	"	IIDac	10.6	7.8	5.9	550	"	8662	
"	"	IIDa	9.2	7.1	6.0	390	"	8861	
31	"	I Aabc	11.0	7.1	3.6	400	"	8643	
32	"	II Cac	11.5	8.4	4.0	540	"	8612	No.2
"	"	—					"	3783	
"	"	I Aabc	11.9	8.3	3.8	490	"	8611	
33	磨石	製斧	( 9.1)	( 5.3)	( 2.2)	( 140)		7006	D <sub>3</sub>
34	石 鑱	AI	25.3	17.3	5.8	2.0	ob	7007	
"	凹石	IIDac	11.5	8.5	6.3	690	An	8781	R-1
36	"	II Cac	10.1	6.5	3.4	240	"	8783	
37	"	"	10.5	8.5	3.6	300	"	8614	
"	"	I Aabc	10.0	7.5	5.8	640	"	8613	
"	"	II Ca	10.5	6.1	2.9	170	"	8785	
38	石 鑱	平基Vb	22.4	17.6	6.3	2.0	ob	7009	図1276
"	Sc	AII a	15.5	21.3	3.9	1.6	"	7008	
"	P・e	DI	29.8	12.2	10.5	3.9	"	7022	
"	凹石	II Ba	15.3	7.4	5.0	695	An	8903	
39	石皿	BVI	16.6	15.8	5.6	1720	"	1278	
"	凹石	II Ca	10.1	8.0	4.3	400	"	8791	
"	"	II Cac <sub>2</sub>	13.6	8.2	5.7	770	"	8787	DI55-56
"	"	I Aabc	9.5	7.8	3.8	320	"	8795	
42	"	—					"	7010	
43	P・e	BIII	17.8	18.0	11.0	2.9	ob	7011	集石欠番
"	凹石	IIDac	9.5	7.2	6.7	460	An	8792	
44	"	II Fa	8.7	7.7	5.0	360	"	8793	集石欠番
"	石 鑱	III b	12.2	(10.9)	3.1	( 0.3)	ob	7083	B
44.45	凹石	II Cac	13.6	8.3	4.7	800		8800	
45	石皿	BI	(20.0)	(16.6)	( 8.6)	(2180)	An	1278	F
"	凹石	II Cabc	9.8	8.10	4.2	410	"	8794	F
"	"	I Eac	10.7	6.9	6.4	580	"	8803	
45.49	"	II Ga <sub>2</sub>	9.4	7.1	4.1	250	An	8815	集石欠番
"	"	II Ca	11.1	7.2	3.8	390	"	8799	
"	"	II Cac	10.8	9.0	4.9	640	"	8804	
"	"	I Aabc	7.9	7.7	4.1	360	"	8865	
"	"	I Eac <sub>2</sub>	( 9.1)	6.0	5.7	( 380)	"	8798	破
"	"	特磨	12.4	7.6	6.7	860	"	8796	
"	"	I ac	12.0	7.5	3.9	( 300)	"	8822	破
"	"	特磨	(10.0)	8.4	6.0	( 600)	"	8885	"
"	"	"	(11.9)	8.1	( 4.5)	( 415)	"	8886	"
"	"	I Aabc	10.4	8.1	4.9	470	"	8898	
"	"	II ca	11.9	9.3	4.0	470	"	8899	
"	"	特磨	(17.6)	7.9	6.4	(1220)	"	8883	破
"	"	IIDc	13.1	9.8	7.3	1046	"	8902	
46.49	"	II Cac	( 8.2)	7.4	( 3.6)	( 220)	"	8823	破
"	"	II Ga	(10.9)	8.0	4.4	( 350)	"	8826	"
"	"	"	9.4	6.5	2.9	290	"	8818	
"	"	II Da <sub>2</sub>	8.9	6.5	5.3	330	"	8822	
"	"	II Ca	10.4	6.0	3.3	200	"	8824	
"	"	II Fa <sub>2</sub>	7.2	6.6	6.0	300	"	8825	
"	"	特磨	18.1	9.1	7.3	1290	"	8811	
"	"	I Eac <sub>2</sub>	13.2	7.7	6.6	710	"	8821	
51	U・f	AI a	28.5	12.0	5.5	1.3	ob	7647	
"	凹石	II Aac	13.3	7.1	5.5	510	An	8615	
"	"	IIDac	12.9	6.8	5.1	( 540)	"	8617	破
"	"	"	10.8	7.0	5.4	490	"	8618	
"	"	"	10.2	7.0	5.0	450	"	8619	No.12
"	"	"	11.0	8.1	6.3	750	"	8626	
"	"	"	10.4	8.0	5.8	( 440)	"	8622	No.11
"	"	IIDa	9.0	6.3	4.0	230	"	8625	

集石 No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録 No.	備考	集石 No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録 No.	備考
	"	"	9.4	7.0	5.4	410	"	8624		"	"	IIAac	13.3	6.9	4.6	420	"	8660	
	"	"	10.4	9.5	3.6	420	"	8620	No.13	"	"	IIDac	10.9	8.8	5.9	620	"	8662	
	"	"	14.6	7.7	6.5	700	"	8623		116	U・f	AI a	20.2	16.8	2.6	0.7	ob	7028	
	"	"	14.8	9.0	7.1	1030	"	8627		"	凹石	IIDa	11.0	7.6	6.3	540	An	8665	
	"	"	9.3	8.6	6.1	780	"	8621		119	石匙	BI Ia	(29.7)	(44.7)	9.1	(8.8)	sh	7029	刃部半欠 集石欠番
	"	"	12.3	7.2	6.1	450	"	8616		"	"	"	29.0	43.5	8.6	9.4	"	7030	
	"	"	13.7	11.2	7.3	1130	"	8622		"	P・e	CI	19.0	22.3	10.2	3.6	ob	7032	
	"	"	9.0	7.8	3.3	300	"	8888		"	磨石	"	14.9	15.5	4.1	0.7	"	7603	
	"	"	9.6	8.8	4.2	415	"	8889		"	凹石	II Ca <sub>2</sub>	9.4	8.0	5.2	450	An	8670	
51	凹石	II Ga	11.3	7.7	5.5	450	An	8890		119	凹石	II Ga	11.0	7.6	4.7	370	An	8663	集石欠番
	"	"	11.9	(6.4)	5.2	(450)	"	8890	破 No.ダブリ	"	"	IEac	14.8	8.5	7.3	1130	"	8666	
	"	"	11.8	8.3	6.2	654	"	8891		"	"	II Cac	9.9	7.6	4.4	360	"	8667	
	"	"	8.2	8.3	5.4	405	"	8892		"	"	I Aabc	5.3	7.8	3.3	170	"	8669	
	"	"	13.0	9.2	6.2	816	"	8894		"	"	I Ebc	12.4	7.3	5.1	550	"	8671	
55	Sc	AIIa	25.5	20.1	10.3	4.6	ob	7012		121	U・f	AI a	24.3	20.0	5.4	2.3	ob	7599	
59	石匙	BIIIa	(40.8)	(32.8)	8.0	(6.6)	ch	7082	半欠	125	石錐	-I	(17.5)	(9.0)	(5.3)	0.9	ch	7033	先端・基部欠
	凹石	IIDa	7.8	6.0	4.0	220	An	8632		"	P・e	CI	(16.3)	16.3	7.8	(1.8)	ob	7604	下端欠
60	"	II Cac	12.4	7.3	4.0	470	"	8633	集石欠番	131	石鑢	FVb	23.3	(16.5)	3.4	(0.9)	"	7034	B
61	石鑢	(円基) V a	20.6	11.6	5.5	1.1	ob	7013	未製品	"	"	HIVb	23.8	17.6	5.0	1.3	"	7035	図1260
	U・f	(B+A)Ia	25.5	15.8	6.8	1.9	"	7598		134	凹石	IIDa	8.6	6.5	4.4	250	An	8670	
	凹石	IIDac	11.7	7.5	5.0	490	An	8634		"	"	II Cac	15.6	12.3	6.8	1480	"	8675	
	"	"	8.8	7.0	(4.3)	(300)	"	8637	破	"	"	"	10.4	8.5	5.6	500	"	8678	
	"	"	11.1	8.6	4.1	440	"	8638		"	"	II Fa	10.4	9.5	6.0	620	"	8676	
	"	"	10.4	9.1	6.3	750	"	8636		135	"	IIDac	10.6	9.2	6.1	760	"	8682	
	"	"	8.5	8.5	3.8	330	"	8635		136	"	II Ca	8.5	6.6	3.2	180	"	8679	
	"	I Aabc	6.8	6.8	4.3	260	"	8640		"	"	IEac	10.1	4.8	4.7	390	"	8681	No.2
63	石皿	BIII	(116)	(98)	(43)	(580)	"	1370	C <sub>1</sub>	"	"	II Cc	14.6	9.3	5.3	885	"	8680	
	凹石	I Aabc	(7.4)	6.5	4.3	(340)	"	8516	破	"	"	I a	12.8	9.0	4.6	470	"	8684	
65	U・f	BI a	27.8	28.7	8.7	5.9	ob	7014		138	"	IIDa	8.3	6.9	4.8	290	"	8686	No.20
66	凹石	IIDac	12.1	9.0	6.2	(710)	An	8639	破	"	"	II Cabc	12.2	8.2	4.7	530	"	8687	
68	Sc	BI a	28.1	53.5	12.5	6.1	sh	7017	図1309	"	"	IEac <sub>2</sub>	14.7	8.1	7.8	1080	"	8685	
	U・f	AI b	30.0	19.8	15.3	5.6	ob	7016		140	磨石 製斧石	-	(6.8)	(3.0)	(2.9)	(60)	"	7036	A <sub>2</sub> 火熱うける
	凹石	IEac <sub>2</sub>	11.5	6.6	5.2	420	An	8642		"	"	II Ca	9.5	7.5	4.4	320	An	8692	No.2
	石鑢	—b	(17.6)	(15.5)	7.2	(1.4)	ob	7648	F	"	"	"	9.3	6.0	3.7	270	"	8690	No.2
69	U・f	AI b	36.2	24.8	6.3	12.6	"	7018		"	"	II Cac	(14.1)	9.1	4.7	(620)	"	8689	Z 破
70	Sc	BI a	26.8	30.0	9.8	5.8	sh	7054		"	"	II Fac	8.7	10.0	8.1	690	"	8688	No.2
72	有頸 扶磨		27.8	18.5	7.3	2.9	ob		O	141	"	II Ca	10.8	7.2	4.0	270	"	8695	
74	U・f	BI b	20.9	25.4	8.3	4.2	"	7019		"	"	II Ga	10.2	7.5	4.7	490	ol	8694	
	"	AI a	21.2	16.3	4.9	1.4	"	7645		142	"	II EB	10.1	9.4	5.2	550	An	8693	
	"	AIIa	21.5	13.8	4.9	1.3	"	7646		"	"	IIDac	10.6	6.4	5.6	480	"	8696	
	凹石	IIDac	11.5	8.3	7.3	840	An	8644		"	U・f	AI a	32.3	35.9	13.8	13.5	ob	7037	
75	磨石 製斧石	BI	(10.6)	(4.3)	(2.4)	(175)	"	7020	C <sub>2</sub>	145	凹石	-					An	8703	
	凹石	特磨	9.1	6.7	5.5	450	An	8647		"	"	IIDa	8.3	6.2	4.6	240	"	8701	
77	石皿	BV	(8.5)	(8.5)	(4.3)	(230)	"	1369	F 図1558	"	"	"	9.6	5.5	3.4	210	"	8702	
82	"	BIII	(17.0)	(14.7)	(7.1)	(1100)	"	1371	E <sub>2</sub>	"	"	IIDa <sub>2</sub>	11.0	8.2	5.6	480	"	8698	
100	Sc	BIIa	20.6	16.7	4.8	1.8	ob	7021		"	"	II Ca	10.6	7.0	4.1	310	"	8699	
103	石鑢	CV-	(16.6)	(9.5)	3.0	(0.4)	"	7023	E	"	"	II Ga <sub>2</sub>	14.1	8.9	7.2	650	"	8700	
	Sc	CI a	26.4	26.0	7.0	4.1	"	7024		"	"	特磨	16.5	8.8	6.1	1090	"	8704	
	凹石	IIDa	12.5	(7.5)	7.3	(720)	An	8651		146	"	IIDac	12.8	9.6	7.3	980	"	8708	
	"	"	17.4	8.1	6.5	1190	"	8649		"	"	II Ca	9.7	8.5	5.7	550	"	8710	
	"	"					"	8662		147	Sc	DI a	49.9	34.4	9.0	15.8	ch	7039	
	"	IIDac	15.2	7.8	6.2	800	"	8652		"	凹石	II Aac	13.6	5.5	3.4	250	An	8709	No.2
	"	II Cac	10.2	9.1	5.0	530	"	8650		148	"	II Ea	10.5	9.7	5.4	700	"	8712	No.1
	"	"	13.7	7.7	4.6	610	"	8654		149	"	II Cbc	12.4	9.0	5.1	670	"	8714	
	"	特磨	8.5	10.7	6.3	740	"	8653		"	"	IIDac	10.2	8.1	6.0	510	"	8713	
105	"	II Ga	10.2	6.2	3.5	220	"	8655	集石欠番	"	"	II Cac	9.1	8.2	4.2	300	"	8716	
106	石皿	BIII	(11.0)	(14.0)	(4.6)	(580)	"	1377	F	150	"	II Fa <sub>2</sub>	8.0	7.8	4.8	410	"	8718	
	凹石	II Ca	12.9	8.2	3.2	380	"	8658		"	"	II Ca	12.5	9.1	3.4	440	"	8717	
107	石鑢	GIVa	20.2	14.8	2.1	0.4	ob	7081	図1259	151	"	II Fa	6.3	5.9	4.4	210	"	8720	
	U・f	AIIa	13.5	12.5	3.8	0.7	"	7644		152	"	II Ca	10.2	8.9	5.5	640	"	8721	
110	石鑢	平基IVb	20.1	16.5	4.2	1.1	"	7025	図1277	"	"	"	10.5	8.3	4.4	460	"	8722	
	U・f	AI a	19.6	19.2	3.4	1.0	"	7026		"	石匙	BIIIa	27.2	42.8	9.2	7.1	ch	7040	
	凹石	II Ga <sub>2</sub>	11.3	7.7	5.0	490	An	8659		153	凹石	IIDa	11.3	7.8	5.7	540	An	8723	
111	石鑢	IVe	22.3	14.2	6.1	2.0	ob	7027	図1267	"	"	I Aabc	(6.2)	8.0	4.3	310	"	8724	
112	P・e	DI	33.2	16.3	9.5	4.3	"	7602		154	U・f	CI a	40.3	40.7	9.0	14.0	ob	7567	
	凹石	IIDa	8.5	6.7	4.9	310	An	8663		"	凹石	II Ca	9.8	6.9	4.4	350	An	8725	
	"	"	8.2	7.6	4.5	(210)	"	8664	破	"	"	II Cac	(14.1)	8.1	5.0	(630)	"	8726	破
	"	IIDa	9.0	5.2	4.2	260	"	8703		156	"	IIDa	9.5	6.8	5.0	370	"	8728	
114	石鑢	(H)III-	(14.5)	(13.8)	2.3	(0.4)	ob	7595	D	"	"	特磨	17.1	7.2	5.6	970	"	8729	
	凹石	II Ca <sub>2</sub>	10.4	8.4	4.6	480	An	8661		157	"	IIDac	13.4	8.7	6.2	880	"	8730	

集石 No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録 No.	備 考
158	II Fa		9.2	8.8	6.2	560	II	8731	
158	II Aa		12.4	6.4	4.5	300	II	8732	
159	II Ca		10.2	7.4	4.8	420	II	8734	
	II Da		11.1	8.4	5.6	550	II	8737	
160	P·e DI		27.0	14.3	8.6	3.4	ob	7041	No.2
	凹石 II Da		9.0	7.1	4.8	290	An	8738	
	II Ca		13.0	6.8	3.5	330	II	8735	No.2
	II Fa <sub>2</sub>		9.5	8.0	7.5	600	II	8739	
	II Da		10.7	8.1	5.6	480	II	8740	
161	P·e CI		21.4	22.7	9.6	3.9	ob	7042	
	U·f (A+A)Ia		45.5	23.5	8.3	5.7	II	7043	
162	石皿 BVI		22.8	13.0	5.5	1600	An	1325	
163	凹石 II Da		9.5	5.7	5.7	370	II	8741	
	II Fa		8.8	8.0	5.4	480	II	8743	
	II Ca		8.8	6.6	4.3	340	II	8742	
			10.6	8.2	4.7	500	II	8742	
165	II Ga		12.0	9.4	4.8	600	II	8744	
166	U·f BIa		24.8	34.3	12.5	9.9	ob	7044	
	凹石 I Ec <sub>2</sub>		16.3	9.3	7.2	1220	An	8745	
168	I Ga		7.8	6.6	4.3	220	II	8748	
	II Da		8.5	6.9	4.5	280	II	8749	
	石皿 AI		(12.2)	(22.0)	( 8.3)	(2400)	II	1267	C <sub>2</sub>
169	U·f BIb		21.5	27.0	18.5	6.9	ob	7045	
	凹石 II Aca		12.2	5.5	3.1	270	An	8736	
	II Ca		10.7	9.4	3.7	400	II	8753	
	I Ec <sub>2</sub>		13.7	7.0	6.3	990	II	8746	No.323と接合
	II Dac		13.0	6.7	6.2	570	II	8752	
	特磨		12.5	8.0	7.0	1100	II	8754	
	II Fa		10.1	9.3	8.5	920	II	8755	
170	II Ea		7.6	7.1	4.0	290	II	8757	
172	II Ca		11.6	9.3	5.4	660	II	8758	
174	製斧 凹石								E <sub>3</sub> 細片 集石欠番
175	II Fa		9.7	8.5	5.9	590	An	8762	
177	II Ca		10.0	7.0	2.4	200	II	8764	
	II Da		13.3	11.6	6.4	990	II	8763	
179	II Ea		8.3	7.9	4.0	340	II	8766	
194	石皿 BW		( 9.8)	(15.4)	( 8.3)	1300	II	1327	F
196	Sc BIa		17.8	24.8	5.8	2.6	ob	7057	
198	凹石 II Da		12.8	10.3	5.6	870	An	8767	
199	石鏡 IVb		22.3	(14.5)	3.3	( 0.7)	ob	7596	B
200	IV-		(15.3)	14.4	3.0	( 0.9)	II	7061	A 未製品
	-IV-		19.5	20.2	4.5	1.5	II	7066	未製品
	Sc AIa		19.4	23.4	6.5	2.7	II	7058	図1304
	BIIa		23.9	22.3	8.7	3.7	II	7059	
	P·e CI		(25.7)	10.2	3.7	( 1.3)	II	7062	端部欠
	U·f AIa		24.5	19.5	5.6	1.2	II	7060	
	(A+C)IIa		20.8	18.5	2.3	0.5	II	7063	
	BIa		26.3	11.3	5.3	1.3	II	7064	
	CIa		13.7	23.5	5.3	1.4	II	7065	
	(C+A)IIb		18.8	11.0	3.3	0.7	II	7068	ビス(CI)を転用
	石皿 BIII		(17.7)	(10.6)	( 5.0)	(1600)	An	1283	D <sub>3</sub> 裏面に凹みあり
	凹石 I Ga <sub>2</sub>		9.0	7.4	6.4	430	II	8768	
202	II Da		11.3	6.7	4.4	390	II	8769	
	U·f AIa		40.2	35.0	11.3	9.3	ob	7056	
203	凹石 II Da		9.7	7.7	5.3	420	An	8770	
204	P·e A(c)I		19.8	16.0	7.1	2.1	ob	7045	図1342
	U·f CIa		23.3	18.2	8.0	2.7	II	7047	
	凹石 II Ca		12.4	8.2	2.6	340	An	8772	
			9.3	7.1	4.0	340	II	8771	
	II Dac		10.0	5.3	4.5	250	II	8774	
	II Da		13.4	8.1	5.9	680	II	8773	
215	U·f BIIc		25.2	14.5	14.4	4.0	ob	7048	
218	Sc AIIa		12.5	17.2	3.8	0.8	II	7053	
219	U·f CIa		15.3	36.2	6.7	2.3	II	7569	
	IIa		26.3	15.8	5.2	1.1	II	7570	
	CIa		23.1	23.8	3.2	1.2	II	7571	
244	凹石 II Da <sub>2</sub>		9.1	6.9	5.3	350	An	8648	
268	U·f BIa		19.8	33.4	13.3	5.0	ob	7049	
	凹石 II Ga		11.8	6.2	3.3	250	An	8778	No.5
	II Dac		10.6	8.8	5.5	490	II	8777	

集石 No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録 No.	備 考
273	石鏡 HVc		22.0	11.2	2.8	0.6	ob	7376	未製品?
	BIVb		18.5	16.2	4.5	0.8	II	7378	
	U·f AIa		34.2	11.7	5.0	1.8	II	7346	
	BIIb		28.6	21.4	7.6	2.3	II	7347	
	(A+C)Ia		20.4	15.0	3.7	1.0	II	7348	
	AIa		18.8	23.0	4.8	1.6	II	7349	
	CIIa		22.7	21.8	6.3	2.4	II	7350	
	BIIa		6.6	16.8	3.8	0.4	II	7389	
	製斧 凹石		( 70)	( 44)	( 22)	( 90)	II		
273	磨石 石皿						An	7050	
274	凹石 B(2.1')		106	54	31	310	di	7084	図1678、周辺に使用 破 集石欠番
	凹石 II Dac		(16.5)	9.8	6.9	(1180)	An	8882	
	II Cabc		10.1	7.4	4.0	370	II	8884	
289	石皿 BIII		(25.3)	(22.0)	9.1	(4500)	An	1310	B <sub>1</sub>
325	P·e CI		22.8	24.3	7.8	4.4	ob	7051	
	U·f (C+C)Ia		17.4	19.2	2.3	0.8	II	7052	
B	磨石 石皿		(37.6)	(26.0)	5.3	( 8.4)	Ta	7072	図1741 B <sub>1</sub> 未製品裏面に凹み 7個 図1564
Z	凹石 BVI		(15.5)	(18.8)	( 7.1)	(2000)	An	1379	
	Sc BIIc		32.1	52.8	12.8	19.7	ob	7073	
	石皿 BIII		(13.1)	(11.8)	( 4.6)	( 580)	An	1276	F
			(12.2)	(12.3)	( 3.9)	( 620)	II	1281	F
			(20.0)	(14.4)	( 8.4)	(2500)	II	1268	C <sub>2</sub>
			(17.6)	(12.5)	( 4.5)	(1800)	II	1274	F

(追加)

集石 No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	登録 No.	備 考
142	磨石 石皿	垂飾	( 7.5)	( 7.0)	( 4.5)	( 0.3)	Ta		

(3) 土壌

土壌No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備 考
4	凹石 II Eabc		12.0	10.7	6.9	1110	An	埋土
9	II Ga		13.9	7.0	3.0	350	II	
26	石鏡 CW(a)		(21.6)	(14.6)	3.5	( 0.8)	ob	D
28	P·e CI		(27.3)	18.2	5.2	( 2.7)	II	図1236 下端一部欠
32	凹石 II Cbc		13.5	7.8	5.5	660	An	
35	II Ca		17.3	12.5	8.1	2200	II	
61	石鏡 HVb		18.5	(14.7)	3.3	( 0.8)	ob	B 埋土
	DVb		21.3	19.6	3.8	1.0	II	図1210
76	凹石 II Fa		5.9	5.3	4.3	130	An	
87	II Dac		12.6	9.8	8.3	1240	II	
91	石皿 BIII		(16.1)	(24.9)	(10.2)	(4500)	II	E <sub>3</sub> No.1295
96	石匙 BIIIa		25.8	44.7	9.5	7.7	Ry	
100	石皿 BIII		(21.6)	(31.0)	(10.1)	(3500)	An	D <sub>1</sub> No.1296
101	石匙 CIa		48.3	46.2	6.0	13.5	sh	
107	凹石 I Aabc		14.3	8.8	4.6	910	An	
	II Fac		8.0	7.5	5.1	420	II	
109	石鏡 (H)(IV)-		20.3	16.7	6.5	1.7	ob	未製品
	BIVb		21.2	(16.1)	3.5	( 0.6)	II	B
	凹石 I Aabc		( 7.5)	6.3	3.7	( 280)	An	
	Sc (B+C)IIa		23.9	25.5	8.0	4.5	sh	
	石鏡 DVa		14.2	12.3	2.9	0.2	ob	
137	凹石 II Cac		10.2	7.4	2.7	260	An	
183	"		12.2	8.5	3.5	410	II	
195	石鏡 (平基) Vc		19.8	14.0	4.2	0.9	ob	未製品 図1218
200	凹石 I Dabc		( 8.3)	6.7	5.0	( 440)	An	
	II Ca		11.0	8.5	4.7	490	II	
209	特磨		( 9.5)	8.2	5.9	( 640)	II	
223	Sc AIa		15.8	16.6	4.2	1.1	ob	
250	有頭 扶磨石		25.6	12.0	3.8	1.2	II	○ 図1234
260	石鏡 (F)IV-		(12.8)	(13.5)	( 2.4)	( 0.3)	II	E
	(I)IVb		27.8	(21.8)	7.0	( 2.3)	II	B
264	管玉 石皿		17.5	10.3	10.3	2.4	ta	No.6832 図1719
265	P·e CI		17.5	12.7	5.7	1.5	ob	B
267	石鏡 FVb		24.2	(20.2)	3.0	( 0.9)	II	
	凹石 II Cac		15.4	11.3	5.0	1100	An	接合
269	石匙 BIIIa		40.8	(67.0)	8.1	(19.5)	ch	図1220
	石鏡 GIVa		25.0	19.0	2.9	( 0.9)	ob	側面一部欠
	--c		(17.8)	(12.7)	( 3.5)	( 0.8)	II	F
	(E)IV-		(14.6)	(15.6)	( 3.0)	( 0.5)	II	E

土壌No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
295	凹石	ⅡCa	(11.9)	9.9	3.4	(460)	An	
303	石鏝	DVb	21.3	13.4	3.2	0.7	ob	図1214
314	"	HWa	17.5	(12.3)	3.8	(0.5)	"	B
324	"	DIVb	21.8	(11.3)	3.7	(0.6)	"	B
330	石匙	BⅢ(b)	30.0	(48.7)	5.5	(8.4)	sh	先端欠 図1221
357	凹石	a	(8.5)	(7.2)	4.3	(320)	An	
"	"	I Dac	15.3	7.8	6.9	820	"	
419	"	ⅡAac	(9.0)	10.2	4.9	(450)	"	
"	"	ac	(10.0)	6.5	(4.0)	(310)	"	
461	石皿	AⅠ	39.2	27.3	11.8	11200	"	Na1317
463	U·f	BⅠa	117.9	45.0	23.0	118	不明	
473	P·e	DⅠ	30.2	13.3	14.0	4.7	ob	
"	石鏝	—a	(17.7)	(14.0)	3.1	(0.6)	"	F
496	"	(H)Ⅳ(b)	(21.5)	20.3	4.3	(1.4)	"	A
503	凹石	ⅡCac	(13.0)	9.0	6.2	1020	An	
608	石錐	AⅠ	(44.0)	25.3	5.1	(3.9)	sh	図1227
625	凹石	ⅡCa	9.0	5.8	4.0	230	An	
670	"	ⅡCc	12.2	10.0	6.4	960	"	
671	石匙	AⅠ(b)	52.4	26.3	7.4	9.1	Ry	先端欠
681	石鏝	平基Ⅳa	20.3	11.5	3.5	0.6	ob	
684	石皿	BⅢ	(20.6)	(30.5)	(10.5)	(8900)	An	Na1293 B <sub>2</sub>
729	石匙	AⅠb	66.7	28.9	7.0	9.2	ob	図1219
"	石鏝	平基Ⅳb	26.5	17.6	6.5	2.8	"	図1216
"	石匙	CⅡb	59.8	60.0	6.8	18.5	Ry	図1223
"	石鏝	GNb	19.6	(10.8)	2.5	(0.4)	ob	B
"	U·f	BⅠa	23.8	23.5	6.8	2.5	"	
"	凹石	ⅡDb	11.0	9.4	6.4	800	An	
743	石鏝	(円基)Ⅳa	(22.5)	(15.2)	2.8	(0.8)	ob	図1217 F
744	Sc	AⅡa	18.1	34.8	5.4	3.6	"	図1224
746	石鏝	Ⅳ—	(15.2)	(13.4)	(4.2)	(0.6)	"	E
"	凹石	ⅡFa	6.3	6.0	4.0	180	An	
748	"	ⅡDa	10.0	5.1	3.9	260	"	
760	石鏝	HWa	24.8	13.3	4.3	0.9	ob	図1213
790	石有類	扶磨	36.7	29.8	4.9	6.4	"	◎図1233
791	凹石	ⅡCa	10.8	9.2	5.8	670	An	
"	Sc	CⅠa	20.4	29.8	5.1	(2.0)	ob	刃部一部欠 図1225
"	石匙	AⅢ(b+b)	52.6	29.5	3.6	5.3	"	
"	U·f	CⅡa	36.3	21.4	9.9	6.4	"	
792	凹石	ⅡBa	(13.7)	5.8	4.6	(480)	An	
793	"	ⅡDac	9.8	5.8	4.0	260	"	
795	P·e	CⅠ	29.0	18.9	7.4	3.5	ob	図1235
796	U·f	AⅠa	26.8	37.7	12.5	9.9	"	
"	石匙	CⅢb	42.2	41.5	5.8	9.6	不明	図1222
"	U·f	BⅡb	45.2	23.5	12.4	10.7	ob	図1237
"	凹石	ⅡDac	8.6	5.3	4.5	210	An	
797	"	ⅡDb	14.5	9.5	7.5	1320	"	
"	"	特磨	17.4	8.5	7.5	1460	"	
"	石錐	AⅡ	25.8	19.6	5.6	1.9	ob	図1232
805	U·f	AⅠb	35.0	49.1	16.3	24	"	
813	Sc	(B+B)Ⅱa	49.7	72.5	22.0	60	ch	図1226
853	石鏝	(円基)Ⅳb	22.0	14.6	4.2	1.2	ob	未製品
"	U·f	BⅡa	35.0	46.0	15.6	20	"	
873	石匙	BⅢc	41.7	42.7	13.5	18	"	
891	凹石	ⅡAac	12.8	6.2	3.0	330	"	
892	"	ⅡCac	11.4	8.8	3.7	410	An	
"	石鏝	—Ⅳb	17.0	(11.5)	4.5	(1.1)	ob	E 縦に半欠基部一部未加工側面にも使用痕あり
897	石先研磨	A(4.0)	88	52	42	230	An	
903	石皿	BⅥ	(7.6)	(9.5)	(4.5)	(260)	"	F Na1366
911	P·e	DⅠ	25.4	18.4	9.4	2.9	ob	
914	石鏝	HWa	17.2	(12.1)	5.0	(1.1)	ch	B
923	"	(H)Ⅳ—	(21.5)	17.7	6.0	(2.1)	ob	未製品 A
934	石皿	BⅡ	(15.6)	(15.2)	(5.4)	(1900)	Dp	Na1364 No2544と接合C <sub>1</sub> 図1547
944	凹石	I Aabc	12.8	7.2	4.6	590	An	
945	"	ⅡCac	11.8	7.5	4.3	480	"	
960	石匙	AⅠ(c+a)	62.3	44.2	8.5	19.1	ch	
964	U·f	CⅠa	19.5	31.0	6.3	3.1	ob	
965	"	BⅠa	22.0	16.3	6.5	1.9	"	
"	石鏝	GNb	20.9	(13.8)	4.1	(0.8)	"	B
"	石鏝	HVb	24.8	14.8	7.7	3.8	"	
"	磨石	—	(6.9)	(5.9)	(1.8)	(70)	"	C <sub>3</sub> 先端敲打

土壌No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
"	凹石	ⅡCac	9.1	7.6	4.3	330	An	二点同一No
"	凹石	AⅠ	(16.5)	(6.0)	(3.5)	(455)	"	刃部欠
"	石鏝	—a	(20.6)	(19.6)	4.2	(0.8)	ob	C
968	"	AVa	27.3	(20.8)	2.8	(0.9)	"	B 図1209
"	"	GNb	16.2	11.3	2.5	0.35	"	
"	"	—d	(12.1)	(11.5)	2.8	(0.4)	"	C
"	石皿	BⅡ	(14.1)	(9.5)	(5.4)	(900)	An	F No1365
969	"	AⅠ	(30.0)	(10.7)	(10.5)	(6800)	"	A <sub>2</sub> No1322
989	石鏝	ⅣVa	12.5	16.0	2.6	0.35	ob	
992	Sc	CⅡa	(39.2)	(40.0)	(14.0)	(25)	Ry	半欠
995	凹石	I Ab	(12.6)	11.8	6.5	(1330)	An	
1003	石鏝	HWa	21.5	15.0	2.5	(0.5)	ob	B
1008	"	平基Ⅳc	24.5	11.8	3.6	1.55	ch	図1215

## (追加)

219	磨石	垂飾	18.0	6.0	5.0	0.8	Ta	図1738
234	磨石	管玉	14.0	(10.0)	(3.0)	(0.7)	"	製作時破損
756	磨石	—	104	77	35	330	ss	図1570
935	凹石	ⅡCa	12.5	10.5	6.0	800	An	

## (4) 方形柱列

土壌No.	器種	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
200	石鏝	Ⅳc	17.3	13.2	3.0	0.6	ob	
352	"	(D)Ⅳ—	(14.2)	13.0	4.0	(0.6)	"	A
357	P·e	CⅠ	17.2	14.8	9.8	2.4	"	
"	石鏝	DVb	21.8	(14.8)	4.8	(1.0)	"	B
419	"	FⅢc	17.1	17.5	2.7	0.55	"	図1212
"	"	平基Ⅳd	22.0	15.5	5.5	1.8	"	側面一部未加工
"	"	—	(12.9)	(14.2)	(2.8)	(0.4)	"	G
"	"	—	(12.2)	(13.2)	(2.3)	(0.3)	"	G
424	"	CⅢc	21.7	(19.0)	1.7	(0.6)	"	B 図1211
"	"	HWd	17.3	(12.5)	3.7	(0.6)	"	B
462	"	Ⅳ—	(27.7)	(13.3)	5.3	(1.7)	"	E 図1241
"	P·e	CⅠ	18.0	12.3	4.1	0.95	"	図1245
"	石鏝	DVb	15.6	(10.2)	2.1	(0.2)	"	B
474	"	HWb	19.8	15.0	3.2	0.85	"	
"	"	円基Ⅲe	17.8	15.7	4.8	1.0	"	
516	凹石	ⅡEa	10.0	9.4	5.2	530	An	
553	石匙	—(Ⅲ)—	(21.7)	(26.8)	(10.5)	(5.0)	sh	
561	石皿	BⅢ	(20.8)	(23.1)	(6.0)	(2300)	An	B <sub>2</sub> No1292
569	Sc	BⅠa	42.0	21.9	5.3	4.0	ob	図1242
583	石鏝	平基Ⅳc	23.7	20.0	6.5	2.25	"	
"	P·e	DⅠ	29.7	15.0	9.7	3.0	"	
611	Sc	(B+D)Ⅰa	49.9	58.3	7.5	24.4	"	図1247
615	凹石	ⅡDa	8.6	6.5	4.9	302	An	
616	石鏝	HWb	14.7	12.8	2.6	0.4	ob	鋸齒状 図1240
717	石皿	BⅠ	(20.9)	(15.6)	(7.5)	4900	An	Na1328, 3993と接合、1329と同一
718	磨石	AⅢ	(14.6)	(5.8)	(3.9)	(445)	"	Na1356, 3459と接合
719	石皿	—	"	"	"	"	"	Na1329 C <sub>3</sub> +C <sub>1</sub>
724	Sc	CⅠa	32.3	41.5	11.0	8.9	ob	図1548
727	凹石	I Aabc	(5.8)	6.2	4.5	(283)	An	破
854	Sc	AⅠb	26.8	34.8	8.2	9.3	ob	ピース(CⅠ)の転用?
857	石鏝	HⅡ—	(14.7)	13.0	2.1	(0.3)	"	A 図1239
858	P·e	BⅠ	34.5	14.8	12.4	4.1	"	図1244
861	石鏝	HⅢb	21.3	14.2	3.0	0.6	"	
"	石錐	AⅠ	29.4	12.2	5.2	1.5	"	図1231
"	"	AⅡ	31.7	22.3	11.0	3.5	"	図1228

## (追加)

109	石錐	AⅡ	28.5	25.0	7	4.3	ch	図1229
345	"	"	18.3	19.5	4.5	1.0	ob	図1230
586	石鏝	HWb	24.2	17.8	5.8	1.9	"	図1238

## (5) グリット

## 石鉄

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7	DO60	(E)Ⅲb	15.5	11.8	2.7	0.4	ob		198	DM 51	EⅢa	20.0	(15.2)	3.5	(0.7)	ob	B
8	CO58	BⅣb	13.6	(14.0)	2.5	(0.3)	"	B	199	DH55	DⅣb	19.0	15.0	3.8	0.6	"	
9	CM 59	HⅣa	21.6	18.8	5.0	1.3	"		200	DQ62	円基Ⅴb	21.0	(14.7)	4.3	(1.2)	"	B
10	CN56	(F)Ⅲb	(23.0)	(16.0)	4.1	(1.2)	"	C	201	"	(C)Ⅴ-	(16.8)	21.7	3.0	(0.8)	"	A
13	CP50	DⅣc	16.7	(18.5)	3.2	(0.7)	"	B	204	DH56	DⅢ-	(13.9)	(12.8)	2.4	(0.3)	"	D
23	CL61	GⅣ-	(11.5)	11.9	2.3	(0.3)	"	A	205	DQ57	HⅡ(a)	(17.3)	14.8	3.5	(0.5)	"	A
30	DN58	HⅣb	18.5	15.2	4.5	0.9	"		207	DI63	EⅣb	15.0	(13.3)	2.7	(0.4)	"	B
31	DJ58	(F)-c	(16.0)	(18.5)	5.0	(0.9)	"	C	209	DE60	GⅣa	21.3	16.7	3.9	0.9	"	
36	DU52	平基Ⅰa	21.6	(20.3)	4.7	(1.5)	"	B	210	DC55	FⅣb	13.7	14.3	2.9	0.5	"	
40	DM 62	GⅢa	21.9	(14.7)	3.5	(0.6)	"	B	211	DE60	HⅢb	15.2	13.6	3.4	0.5	"	
41	EC55	HⅣb	22.0	(18.5)	3.0	(0.9)	"	B(製作時)	216	DC57	EⅣa	15.5	(14.3)	2.3	(0.3)	"	B
49	EB53	GⅢb	14.2	13.5	3.7	0.4	"		218	DB51	HⅣd	12.3	13.6	3.5	0.5	"	
50	DN51	HⅢb	16.5	10.7	4.5	0.6	"		245	DC56	DⅣa	19.1	15.6	3.4	0.7	"	
52	DJ63	DⅢ(a)	(15.4)	10.5	2.5	(0.2)	"	A	246	DE40	(D)Ⅳ-	(15.5)	(12.0)	2.4	(0.3)	"	D
53	DM 57	EⅣb	15.0	12.5	2.3	0.4	"		250	" 34	(E)Ⅲa	(24.4)	(20.8)	4.4	(0.9)	"	C
56	CM 62	HⅣ-	(20.3)	24.5	4.5	(1.6)	"	A	258	DJ34	DⅣa	15.5	13.2	2.6	0.3	"	
61	DJ58	(E)Ⅲ-	(12.7)	14.9	3.0	(0.4)	"	A	260	DP33	DⅣa	14.7	10.0	2.6	0.3	"	
63	DC64	FⅢa	12.9	13.1	1.5	0.2	"		264	EE31	EⅣa	27.6	(18.8)	3.5	(1.1)	ch?	B
65	DG61	(E)Ⅲ-	(13.1)	14.8	2.5	(0.4)	"	A	265	"	IⅣb	20.1	(15.6)	3.2	(0.7)	ob	B
68	DJ57	EⅢc	13.5	12.4	2.6	0.3	"		267	EF30	EⅣb	17.3	13.0	3.2	0.5	"	
69	DC62	EⅣb	12.5	(11.4)	2.7	(0.3)	"	B	268	"	--b	(14.8)	(9.3)	2.3	(0.2)	"	F
70	"	GⅣb	13.3	(11.6)	4.0	(0.5)	"	B	270	"	HⅣd	20.6	19.6	4.8	1.8	"	
71	"	DⅣb	17.2	(12.5)	3.8	(0.5)	"	B	276	DN34	HⅣa	20.5	(12.5)	1.8	(0.4)	"	B
72	"	BⅣa	15.5	(15.8)	2.5	(0.3)	"	B	277	CU51	DⅡa	18.5	(13.6)	2.5	(0.3)	"	B
83	DE61	(E)Ⅳa	(12.4)	(10.3)	3.4	(0.2)	"	C	279	CE63	AⅡa	15.5	16.7	3.4	0.4	"	
84	DJ56	BⅢa	21.2	(16.2)	3.3	(0.6)	"	B	280	" 59	--a	(23.6)	(18.5)	3.8	(1.2)	"	F
86	DA60	EⅠb	19.7	15.6	3.0	0.7	"		283	CG55	EⅣa	15.4	(14.0)	3.5	(0.9)	"	B
88	DB60	BⅢb	18.8	(16.4)	3.5	(0.5)	"	B	284	" 52	GⅣb	12.5	12.0	1.9	0.2	"	
95	DC61	平基Ⅴb	19.3	17.5	4.3	1.2	"		286	CB51	平基Ⅳd	26.2	16.0	6.6	3.0	"	図1271
96	DD61	DⅣb	11.5	15.1	3.0	0.3	"		287	BY50	平基Ⅱa	16.9	(12.6)	4.0	(0.6)	"	B(製作時)
100	DK55	EⅢa	22.0	20.4	3.5	0.9	ch		289	" 53	IⅢc	9.6	10.5	1.8	0.2	"	
103	DD60	EⅣa	13.5	13.4	2.5	0.3	ob		290	" 54	BⅢa	21.2	(15.5)	3.7	(0.6)	"	B
106	DK54	平基Ⅲb	20.5	18.7	5.9	1.9	"		294	"	-(Ⅲ)b	(20.5)	(14.3)	4.2	(1.1)	"	F
109	DD61	HⅢb	13.0	11.5	3.0	0.3	"		296	CA59	BⅢa	21.1	15.8	3.0	0.6	"	
112	" 60	FⅣb	16.6	16.5	2.8	0.6	"		299	BT60	GⅣb	19.8	17.2	6.7	1.8	"	未製品
114	DM 62	HⅣb	14.8	12.8	5.0	0.8	"		300	CD61	HⅢb	18.4	14.9	3.3	0.7	"	
123	DE56	有基GⅡa	20.8	15.5	3.5	0.6	"	鋸歯状	345	CV58	GⅢ(a)	(12.3)	12.0	2.5	(0.3)	"	A
125	DL52	GⅣa	21.7	14.3	3.7	0.8	"		383	BX60	HⅢb	26.3	18.5	7.7	2.8	"	
126	DL51	FⅣb	12.4	12.6	2.3	0.3	"		392	BW53	円基Ⅴb	26.7	19.8	7.9	3.2	"	未製品
127	DD59	GⅢ-	(15.8)	(13.5)	2.8	(0.5)	ch	D	410	CB53	HⅢ(a)	(13.9)	12.5	3.0	(0.5)	"	A
128	DC59	BⅣa	20.5	13.8	3.0	0.5	ob		413	CD61	GⅢa	16.6	13.5	2.4	0.4	"	
130	DO59	(E)Ⅴ-	(14.1)	21.8	3.0	(0.9)	ch	A	415	" 60	HⅢb	20.3	18.2	7.3	1.4	"	
132	DB56	DⅣa	14.1	(12.6)	2.5	0.2	ob		416	CE62	HⅢe	18.6	(11.8)	3.6	(0.6)	"	B
133	DC58	HⅢb	16.8	(13.3)	3.5	(0.5)	"	B	421	" 60	---	-	-	2.5	(0.3)	"	E
136	DY57	DⅣb	15.4	12.5	3.8	0.4	"		424	CC61	BⅢb	22.4	19.8	3.0	0.8	"	
137	DC57	(E)Ⅲ-	(10.4)	12.5	2.5	(0.3)	"	A	425	CB62	平基Ⅲa	12.6	11.8	2.6	0.3	"	
138	DD57	GⅡa	17.3	(13.4)	3.7	(0.7)	"	B	430	BX58	GⅢa	17.0	13.1	3.0	0.4	"	
139	DC57	HⅣb	(15.1)	(10.2)	4.8	(0.6)	"	B	437	BT55	EⅣb	21.2	(17.9)	6.6	(1.4)	"	B(製作時)
140	DE58	-Ⅲ(a)	(22.6)	(14.5)	4.1	(1.0)	"	G	445	" 61	円基Ⅴb	20.7	15.6	4.2	1.1	"	
141	DD57	平基Ⅳb	21.8	20.8	6.0	2.4	"		449	BW62	GⅣc	15.8	9.1	3.2	0.4	"	
143	DC57	GⅣb	15.0	(10.5)	3.0	(0.3)	"	B	451	CE61	IⅣd	20.1	18.0	4.0	1.2	"	
146	"	AⅣc	13.0	14.5	3.5	0.5	"		454	CF61	EⅣb	15.2	13.8	2.6	0.4	"	
147	"	HⅢb	13.0	13.2	3.1	0.4	"		455	CG61	EⅣa	17.0	15.0	2.5	0.4	"	
159	DD55	HⅢ-	(17.2)	(15.4)	3.5	(0.6)	"	D	456	CH60	EⅢa	13.0	(12.3)	2.8	(0.3)	"	B
162	CY56	HⅣb	18.5	(13.7)	4.6	(1.0)	"	B	457	" 59	BⅣc	15.6	17.8	3.0	0.5	"	
163	DD55	HⅢb	22.4	(10.2)	3.1	(0.6)	"	B	462	" 56	DⅣa	18.2	12.3	3.1	0.5	"	
164	DC53	平基Ⅱ(b)	(20.2)	17.8	6.9	(1.9)	"	A	465	BU60	DⅣb	15.3	(13.0)	2.8	(0.3)	"	B(製作時)
170	" 55	HⅡb	16.0	14.6	4.3	0.7	"		468	" 57	GⅣa	22.3	13.5	3.3	0.7	"	
172	" 54	GⅢa	16.8	(11.3)	2.1	(0.3)	ch	B	471	BT55	GⅣa	20.6	(13.6)	2.5	(0.5)	"	B
173	DA53	HⅢb	15.8	14.4	3.3	1.0	ob		474	BV52	GⅡa	17.0	13.1	2.8	0.4	"	
179	DP53	BⅣb	16.5	(14.7)	2.0	(0.3)	"	B	482	" 53	平基Ⅲa	14.8	12.1	2.5	0.5	"	
182	DM 56	DⅣb	17.7	13.5	3.0	0.5	"		483	" 54	DⅢ(a)	(16.3)	(12.7)	2.5	(0.3)	"	B(製作時)
185	DS62	(平基)Ⅳ-	17.3	19.1	6.8	1.7	"	未製品	484	"	AⅢa	16.4	(10.4)	2.5	(0.2)	"	B
191	DK51	DⅣa	14.3	11.2	1.8	0.3	ch		485	BW54	-(Ⅳ)-	(12.0)	(15.8)	2.8	(0.4)	"	E
193	DM 56	HⅢa	22.1	17.0	4.3	1.0	ob		491	BV 52	GⅢa	20.8	(11.7)	3.7	(0.6)	"	B
195	DK63	GⅢ-	(15.3)	14.5	2.5	(0.4)	"	A	495	BW53	(E)Ⅳ-	(20.5)	(18.1)	2.7	(0.6)	"	D鋸歯状
196	DJ54	DⅢa	11.5	10.5	3.1	0.2	"		506	Z	IⅣa	26.3	14.2	5.5	1.2	"	

登録 No.	出 土 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 土 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
509	BW53	EVe	16.0	13.5	4.0	0.6	ob		932	CS48	IⅢa	15.1	(13.2)	2.1	(0.3)	ob	B
514	BU59	EVa	21.3	(14.5)	4.1	(0.8)	"	B	935	CT45	-Ⅲb	(18.3)	(10.6)	2.6	(0.5)	"	C
515	BS55	EMe	17.6	(15.3)	3.4	(0.7)	"	B	945	CS47	EⅢc	22.3	16.4	3.5	1.0	"	
518	BW53	DVb	12.0	10.5	3.2	0.2	"		946	CT46	EVa	17.5	(11.5)	3.5	(0.4)	"	B
519	Z	DVa	20.6	14.4	3.6	0.6	"		947	CU46	(D)---	(6.8)	(7.0)	1.5	(0.1)	"	E
521	BV58	EVa	15.6	13.2	3.5	0.4	"		955	CK48	--V--	(16.7)	(15.5)	2.7	(0.5)	"	E
533	CA50	EV(b)	(16.3)	14.5	4.4	(0.8)	"	A	974	CO45	DⅢa	17.0	13.7	2.8	0.4	"	
536	BX51	GⅢa	14.4	11.3	2.4	0.3	"		976	CL48	BVb	22.6	(14.6)	3.2	(0.5)	"	B
541	CD63	GⅢ(a)	(29.5)	19.3	3.5	(1.5)	"	A	977	"	AⅢc	14.4	18.5	2.2	0.4	"	
543	BT58	EWb	19.1	12.5	3.8	0.6	"		986	CF49	HVb	22.2	18.0	5.3	1.6	"	
544	BU61	円基Vb	30.0	10.1	3.2	1.1	ch	図1273	991	" 48	EVb	12.5	12.7	2.6	0.4	"	
545	BV60	ANc	13.6	15.4	1.5	(0.2)	sh	(A)	994	CE49	EMb	20.6	16.6	5.0	1.0	"	
554	BX60	DⅢ(a)	(22.2)	17.2	2.3	(0.6)	ob	A	1027	CL55	HⅢ-	16.4	11.9	2.8	0.4	"	D
555	BW58	EVa	12.6	11.6	1.3	0.2	"		1031	Z	AVb	12.8	14.5	2.2	0.3	"	
556	BV58	-(Ⅲ)a	(18.5)	(12.5)	4.0	(0.6)	"	C	1032	CK55	GⅢb	18.2	12.5	3.8	0.8	"	
563	BY59	DVb	13.2	(12.7)	2.3	(0.3)	"	B(製作用)	1045	CJ54	-Vb	32.3	17.5	8.9	3.4	"	未製品
564	"	--a	(10.0)	(6.5)	2.5	(0.1)	"	F	1062	CU56	HV-	(16.8)	(17.4)	3.7	(0.8)	"	D
566	"	GVa	18.0	11.6	3.0	0.4	"		1065	Z	CIVc	15.0	17.0	2.6	0.5	"	図1251
568	"	GⅢa	25.0	14.3	2.5	0.6	"		1002	CR63	GIVd	25.4	23.2	6.7	2.5	"	未製品?
574	CD56	"	19.8	(12.2)	2.3	(0.3)	"	B	1104	"	EMb	19.3	(12.6)	2.8	(0.4)	"	B
577	BY58	HⅢa	15.8	12.4	3.2	0.4	"		1113	" 52	HⅢb	18.4	13.2	2.7	0.5	"	
578	CF56	HVd	16.2	17.3	5.9	1.5	"		1124	CK65	DIVb	13.1	(12.6)	2.8	(0.3)	"	B
581	CC51	EV(b)	(19.0)	18.3	4.4	(0.9)	"	A	1125	CT57	---	(14.8)	(12.0)	(4.5)	(0.6)	"	F
604	Z	EMa	14.8	(12.2)	3.0	(0.4)	"	B	1128	CO60	HⅢ-	(28.0)	16.5	3.0	(0.9)	"	A鋸歯状
605	CD57	(E)(V)-	(6.5)	12.5	1.9	(0.2)	"	A	1137	CS63	HV-	(13.3)	14.2	3.7	(0.6)	"	A
611	BX54	FⅢd	15.8	(16.0)	3.5	(0.6)	"	B	1150	CM59	HⅢb	24.7	(21.8)	9.5	(2.5)	"	B
622	CG53	GⅢa	19.8	13.9	2.7	0.4	"		1156	CR56	(E)Ⅲ-	(15.4)	17.8	3.4	(0.7)	"	A
627	" 52	HV-	(18.0)	16.0	3.5	(1.0)	"	A	1159	CI62	EIVa	17.1	(13.8)	3.5	(0.5)	"	B
630	CB51	EWb	17.3	(11.9)	3.6	(0.4)	"	B	1160	CR60	---	22.3	15.4	3.0	1.0	"	未製品
661	CO50	ANa	17.4	(12.6)	3.0	(0.4)	"	B	1170	Z	FIVa	17.5	20.8	3.4	0.9	"	
665	CF50	-(Ⅲ)a	(19.0)	(10.5)	3.2	(0.5)	"	F	1171	CL61	HⅢa	18.0	13.0	2.0	0.3	"	
671	CA53	IⅢa	23.0	19.4	3.2	1.0	"		1179	"	HVe	16.5	13.3	3.3	0.6	"	
679	CB56	HVa	19.0	12.2	3.5	0.7	"		1180	CI61	EVb	(22.5)	(20.5)	4.0	(1.3)	"	C
683	BY54	HⅢ-	(12.0)	12.2	3.1	(0.4)	"	A	1181	CJ60	平基Ⅲa	17.3	14.4	3.0	0.7	"	図1275
693	DR48	HVa	20.3	14.3	4.0	0.6	"		1184	CR55	-(Ⅲ)e	(13.9)	(17.7)	3.3	(0.6)	"	C
695	DS49	GⅢa	24.0	14.3	3.2	0.8	"		1185	DN56	(I)IV-	(19.8)	24.1	2.9	(0.9)	"	A
696	" 46	GVa	11.3	9.0	2.7	0.2	"		1186	CK51	I---	(13.3)	(20.5)	2.8	(0.7)	"	A
697	DR46	EVa	(15.5)	16.3	3.6	(0.5)	"	A	1187	DD52	平基Vb	19.1	15.1	6.5	1.8	ch	
703	CN44	GVa	16.7	13.6	3.0	0.5	"		1188	DE50	EIVa	18.5	15.1	5.0	0.5	ob	
705	CE51	GⅡa	20.2	17.4	4.7	1.2	"		1189	DN57	CIVa	20.0	(17.1)	3.5	(0.6)	"	B
711	CA48	HNb	12.1	10.1	2.5	0.3	"		1190	FB41	HVb	21.9	(16.0)	4.5	(1.2)	"	B
722	DL47	-(V)b	(19.8)	(18.4)	6.5	(2.0)	"	F	1197	CF64	EⅢ(a)	(20.8)	(14.2)	3.6	(0.8)	"	D
743	DO48	HW-	(12.3)	16.6	2.7	(0.5)	"	A	1198	CE61	HⅢa	20.1	(16.0)	2.7	(0.6)	"	B
748	DA54	HWd	19.8	18.8	8.0	2.0	"		1199	EC54	平基Vd	22.3	18.8	5.3	1.6	"	未製品
749	CC50	GⅢ-	(17.1)	17.3	3.6	(0.9)	"	A	1200	DK55	(B)IV-	(14.0)	17.6	2.6	(0.4)	"	A
752	CG51	DVa	(17.6)	15.2	2.6	(0.5)	"	A	1201	BY54	HVe	11.2	15.3	4.5	0.5	"	
753	DO47	FVe	16.5	14.0	3.6	0.7	"		1202	CW62	(B)Ⅲ-	(28.3)	21.4	3.3	(0.9)	ch	A
754	"	DVa	20.8	(11.7)	5.3	(0.7)	"	B	1203	CN50	CIVb	28.0	(20.7)	3.1	(1.0)	ob	B
764	" 48	DVb	13.5	12.3	4.7	0.4	"		1204	BU48	HⅢa	15.8	(10.5)	3.2	(0.4)	"	B
773	DP47	平基Ⅲb	21.0	16.4	3.4	1.2	"		1205	BW51	"	27.8	16.0	3.6	0.9	"	
799	DJ47	HⅢa	16.6	15.7	2.8	0.4	"		1206	BT57	DⅢ(a)	(17.0)	(15.9)	2.4	(0.5)	"	D
801	CB57	HⅡa	17.9	11.0	2.4	0.3	"		1207	BQ57	GⅢa	22.6	14.5	2.6	0.6	"	図1261
806	CD56	GⅢa	16.1	12.2	3.1	0.4	"	鋸歯状	1208	CO50	GIVb	13.7	(10.6)	3.2	(0.3)	"	B
809	CA57	EⅢa	19.3	13.7	2.6	0.4	"		1210	" 51	HⅢa	25.1	22.3	4.2	0.6	"	図1266
811	CB58	IⅢb	17.0	14.1	4.0	0.8	"		1211	"	HVe	26.3	17.6	9.0	2.7	"	
815	DH45	CⅢa	18.1	(19.3)	3.1	(0.6)	"	B	1212	"	平基Ⅲa	15.5	(8.0)	2.6	(0.3)	"	B
819	BY62	平基IVb	19.8	14.7	6.5	1.4	"		1213	CT50	EⅢa	16.4	15.6	4.2	0.8	"	
841	CU49	HVa	18.3	11.6	5.2	0.8	"		1214	CL53	GⅢa	16.5	11.5	2.6	0.4	"	鋸歯状
856	DA46	FⅢ-	(16.4)	(19.5)	2.8	(0.7)	"	D	1215	CO52	HⅢa	18.3	12.8	1.9	0.4	"	
858	CA46	(E)(Ⅱ)-	(15.4)	(12.8)	3.1	(0.5)	"	D	1216	CM51	EMb	17.3	(12.7)	3.0	(0.4)	"	B(製作時)
876	CV48	EVb	12.4	(11.6)	3.3	(0.3)	"	B	1217	CN51	GⅢb	14.5	12.6	2.3	0.3	"	
880	CT46	(E)V-	(15.8)	(9.6)	2.5	(0.2)	"	E	1218	DN62	HⅢ(a)	(20.1)	15.4	4.3	(1.0)	"	A
892	DI49	円基Vb	20.6	15.3	8.0	1.4	"	未製品	1219	DQ57	HVb	14.0	11.6	3.1	0.3	"	
904	CT47	HVb	18.2	13.6	3.6	1.0	sh		1221	DJ60	DⅡa	15.6	13.2	2.6	0.4	"	
906	" 46	HⅢd	9.6	12.0	2.9	0.3	ob		1222	DB59	HⅢe	17.7	(21.5)	5.2	(1.7)	"	B
908	CV45	--a	(11.0)	(9.5)	2.7	(0.2)	"	F	1223	DA59	GV(a)	(17.1)	15.0	2.7	(0.6)	sh	A
924	CT49	HVb	16.8	(13.2)	4.6	(0.7)	"	B	1224	ET60	EVa	22.4	(13.1)	3.5	(0.7)	ob	B
925	CK49	GⅢa	12.8	9.0	1.3	0.1	"		1225	"	HⅢa	18.5	(11.6)	2.6	(0.4)	"	B
926	"	EIVa	16.4	(11.0)	2.4	(0.3)	"	B	1226	ES60	DⅢa	22.3	(15.2)	5.9	(1.3)	"	B
928	"	GⅢa	21.0	12.5	3.2	0.7	"		1227	EQ59	DⅡa	16.7	(13.5)	2.9	(0.4)	"	B

登録No.	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No.	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1228	ES58	EIVb	14.5	11.3	2.8	0.3	ob		1801	CY53	円基Vb	22.2	17.0	7.1	2.1	ob	No.3
1229	FF49	GVa	15.3	10.8	2.5	0.3	"		1802	" 37	HVc	24.0	(11.5)	5.2	(0.9)	"	B
1230	ER60	F Ib	15.2	8.0	3.7	0.4	"	図1256	1803	" 38	円基Vc	20.8	(20.8)	4.3	(1.2)	"	B
1231	DS59	HIe	19.1	19.4	5.1	1.2	"		1827	CW44	平基V-	(24.0)	22.4	6.3	(2.8)	"	A
1247	DA40	円基Va	23.7	16.2	7.5	2.2	"		1829	" 47	平基III-	(20.2)	(13.5)	3.6	(0.9)	"	E
1249	DO60	平基Vc	14.6	12.3	5.0	0.8	"		1836	" 52	平基Va	24.0	(14.5)	3.0	(0.8)	"	B
1250	DN62	EIVa	21.5	(16.5)	4.5	(0.9)	ch	B	1845	" 69	一一c	(17.5)	(25.7)	5.0	(1.9)	"	F
1251	DB59	IVc	17.8	15.6	4.7	1.0	ob		1847	"	IVb	(17.8)	17.2	4.0	(1.0)	"	A
1331	BV53	AMb	21.6	(17.6)	3.5	(0.6)	"	B	1854	CO41	IIIb	30.1	(22.0)	3.6	(1.5)	"	B
1453	CXZ	円基IIIb	32.2	21.3	9.1	4.2	"		1864	" 50	平基IIIb	22.9	(17.0)	3.6	(1.1)	"	B
1457	CO90	GIIIb	28.5	15.2	4.6	1.2	sh		1875	" 77	GVa	18.2	(15.7)	3.3	(0.7)	"	B
1462	BY58	IIIa	23.0	(13.5)	4.8	(0.8)	ob	B	1897	CS45	平基IIIe	22.9	17.0	7.8	2.1	"	"
1467	" 60	平基IIIc	23.5	(16.5)	5.7	(1.8)	"	B	1904	" 47	FVc	18.5	(17.3)	2.5	(0.6)	"	B
1473	" 61	円基Vb	21.5	(14.7)	6.0	(1.3)	"	B	1913	" 66	III-	(14.0)	16.7	4.7	(0.5)	"	A
1474	BX57	円基Vb	15.5	15.1	2.0	0.5	"		1921	CP50	IIIe	15.0	17.0	5.0	1.3	"	未製品
1484	BW58	平基III-	(17.4)	20.5	3.5	(1.2)	"	A(製作時)	1931	CI49	CIIIb	22.4	(16.0)	5.0	(0.6)	"	B
1486	" 61	HVb	21.2	18.7	10.6	3.0	"	未製品	1934	CT53	(F)III-	(17.5)	21.5	5.2	(0.9)	ch	A
1491	BU60	HVb	17.3	(16.5)	4.8	(1.0)	"	B	1935	"	III-	20.0	18.6	5.3	1.4	ob	(製作時)
1492	"	III(b)	(26.2)	(17.4)	4.4	(1.2)	"	D	1936	"	"	(13.7)	(18.1)	2.9	(0.7)	"	D
1493	"	III(b)	24.0	14.8	4.5	(1.4)	"	G	1938	"	平基Vc	15.2	12.5	5.2	0.7	"	"
1497	" 61	平基(III)-	(17.3)	20.0	4.1	(1.4)	"	A(製作時)	1961	CU49	HVc	17.8	14.0	2.8	0.8	"	"
1507	BV59	HVb	16.1	16.7	5.0	1.0	"	"	1968	"	IVd	21.7	(21.8)	6.9	(2.4)	"	B
1509	"	IVc	28.5	(13.0)	6.0	(1.7)	"	B	1988	CV51	円基IIIa	26.9	15.0	7.0	1.9	"	図1279
1512	" 60	HV(c)	(23.2)	19.6	6.5	(2.1)	"	A	1994	CD49	HVb	14.8	12.4	4.8	0.7	"	"
1516	CA57	IIIa	(22.7)	(12.0)	3.2	(0.6)	"	C	1996	" 54	円基Ve	26.5	21.3	13.2	4.8	"	"
1557	CC51	円基Ve	27.8	18.2	7.5	3.7	"	未製品	1999	"	-(III)b	(17.0)	(14.8)	5.0	(0.6)	"	F
1563	BP51	IVc	20.8	(19.1)	4.2	(1.4)	"	B	2003	DB62	CVa	13.7	16.3	2.4	0.4	"	"
1565	BR50	円基III-	(18.6)	16.0	3.5	(1.2)	"	A	2012	CU64	HIIIe	13.1	12.5	2.6	0.4	"	"
1569	" 49	IIIc	22.1	15.8	3.3	0.9	"	未製品	2019	DF54	(C)III-	(21.2)	(23.0)	3.8	(1.1)	"	D
1598	CE47	(B)III-	(21.3)	(17.3)	4.2	(1.0)	"	E	2020	CV64	DVb	17.8	14.4	2.9	0.5	"	"
1599	"	-(III)c	(22.6)	(18.6)	4.4	(1.7)	"	F	2021	"	GIIIa	21.6	(12.0)	4.5	(0.7)	"	B
1600	"	HVb	21.1	(17.5)	4.5	(1.4)	"	B	2029	DP58	EMb	18.4	15.8	2.4	0.5	"	"
1602	"	円基Vc	20.5	16.5	7.1	1.7	"	"	2032	DL54	DIIIa	15.5	(10.0)	2.5	(0.3)	"	"
1610	" 48	HVc	23.7	18.6	9.7	3.3	"	O	2033	DM54	GIVd	8.6	8.5	2.0	0.1	"	図1268
1612	" 50	HVb	15.5	13.5	4.7	0.6	"	"	2045	DK54	EIIIa	16.0	15.1	3.0	0.5	"	"
1613	"	"	19.8	(13.2)	4.8	(0.9)	"	B	2049	DC50	HVb	17.5	16.5	4.0	0.8	"	"
1617	"	平基III-	(23.6)	19.8	3.7	(1.6)	"	A	2050	DL35	EVa	20.3	16.6	3.3	0.7	"	"
1623	" 56	円基IIIa	28.0	19.8	6.0	2.4	"	図1278	2052	DI60	平基IIIb	(17.0)	(22.5)	3.5	(1.0)	"	C
1632	" 59	IVc	17.5	19.3	3.2	0.8	"	"	2053	DH62	AVb	14.0	15.0	3.0	0.5	"	"
1642	" 61	V-	(14.8)	17.1	4.2	(0.9)	"	A(製作時)	2054	DG62	IVb	12.1	(10.8)	4.5	(0.5)	"	B
1647	" 63	平基Va	26.7	(20.1)	5.6	(2.0)	"	B	2071	DC54	HVa	18.2	(16.3)	4.8	(0.6)	"	B
1657	CF48	CIIIb	23.5	(14.8)	2.9	(0.5)	"	B	2077	DJ54	EIIIa	17.8	16.0	3.4	0.7	"	"
1658	" 49	GIIb	19.8	17.6	3.7	0.9	"	"	2078	DG61	HVb	22.0	17.5	5.5	2.0	"	"
1663	CG48	平基III-	(14.5)	(18.0)	4.9	(1.4)	"	B	2082	CX59	G Ia	(16.5)	11.0	4.0	(0.6)	"	B
1672	CG50	平基IIIb	24.2	24.1	9.2	3.9	"	未製品	2087	DL54	IVb	16.5	15.5	3.5	0.8	"	"
1673	"	HVc	20.0	(18.4)	3.6	(1.1)	"	B	2092	DE63	(E)III-	(12.6)	13.4	2.3	(0.4)	"	A
1675	" 51	平基IV-	(16.6)	15.5	5.7	(1.2)	"	A	2098	DA53	AVa	11.6	10.5	2.5	0.2	"	"
1679	CN40	一一e	18.8	12.0	4.6	0.9	"	未製品?	2002	DH59	GIII-	(20.0)	19.0	4.0	(1.3)	不明	A
1680	" 41	平基Vd	21.4	16.6	7.0	0.4	"	"	2103	DD62	EIIIb	(16.5)	(13.5)	3.5	0.6	ob	B
1681	" 45	平基V-	(16.5)	(16.0)	4.6	(0.9)	"	D(製作時)	2110	DE58	EIVb	13.1	11.2	2.0	0.3	"	"
1683	" 50	円基Vb	17.4	14.0	6.4	1.3	"	"	2115	DD50	III-	(15.4)	20.2	3.2	(1.0)	"	A
1684	"	一一b	(11.5)	(12.6)	2.8	(0.3)	"	F	2116	DE50	平基III-	(19.5)	15.0	5.0	(1.6)	"	A
1685	" 51	平基IIa	14.2	7.0	5.3	0.3	"	"	2132	DE60	DIVb	16.6	12.0	2.7	0.4	ch	"
1686	"	(B)III-	(16.1)	(18.0)	2.7	(0.5)	"	D	2139	DD59	平基III-	(12.5)	15.0	5.5	(0.9)	ob	A
1687	"	BIIIad	17.0	(14.0)	2.8	(0.4)	"	B	2141	DE58	D--	(16.5)	(11.0)	3.0	(0.5)	"	E
1689	" 53	平基III-	(17.4)	22.3	4.6	(1.6)	"	A(製作時)	2142	"	GIIIa	23.9	14.2	3.0	0.7	"	"
1697	" 68	円基Vb	24.6	21.5	9.0	3.8	"	図1280	2154	CI54	一一a	(22.5)	(19.0)	5.5	(2.5)	"	F
1698	" 71	GIII(b)	(21.7)	15.0	4.8	(0.8)	"	A	2163	CK57	AMb	19.6	17.8	2.6	0.5	"	"
1699	"	HIIIc	14.4	(13.0)	2.8	(0.6)	"	B	2164	"	FIIIb	26.0	16.0	3.0	0.9	"	"
1711	" 88	IV-	(16.4)	26.5	4.7	(1.3)	"	A	2187	DH61	GIIIc	(20.0)	(15.0)	4.5	(0.9)	"	B
1734	CL53	III-	(17.8)	15.8	5.5	(1.5)	"	A(製作時)	2189	CQ50	BIVb	21.1	17.2	3.6	1.0	"	"
1735	"	平基V-	25.2	17.0	5.5	3.0	ch	未製品	2202	CS51	D Ic	13.0	15.6	2.5	0.4	"	"
1738	" 67	GIIIa	24.8	15.6	3.3	0.7	ob	"	2203	DN53	HIIIa	22.5	13.8	3.7	0.7	"	"
1740	" 88	AM(b)	18.4	(14.6)	2.8	(0.5)	"	D	2205	CO53	IVc	25.6	19.3	7.6	3.5	"	"
1744	" 91	III(a)	18.1	9.2	6.6	1.0	ch	未製品	2213	" 51	DIIIb	(16.0)	(10.5)	2.5	(0.3)	"	B
1749	CG50	平基III(c)	19.3	(16.5)	3.7	(0.9)	ob	B	2214	CN51	DIVa	29.9	17.8	3.5	1.5	"	鋸齒状
1753	" 54	円基Vb	21.1	18.7	5.6	1.6	"	"	2216	CT51	(A)IV-	(24.3)	(14.0)	5.2	(1.3)	"	E
1763	" 62	IIIb	22.5	(24.0)	4.7	(1.7)	"	B	2220	CS52	-(III)-	(12.0)	(12.7)	4.5	(0.5)	"	G
1780	CH64	平基V-	(14.3)	14.9	2.5	(0.6)	"	A	2225	CX51	EVa	21.8	18.5	2.8	0.8	"	図1253
1781	" 91	HIII-	(18.7)	15.8	4.3	(1.2)	"	A(製作時)	2234	CK59	HIV-	(13.6)	14.4	3.5	(0.6)	"	A

登録No	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
2235	CJ59	AVb	18.2	(16.5)	2.6	(0.5)	ob	B	2479	CD60	(E)IV-	(9.4)	14.0	2.0	(0.3)	ob	A
2242	BW59	DVa	16.3	(14.2)	3.5	(0.5)	"	B(製作時)	2490	CA60	IIIb	15.9	15.8	5.2	1.0	"	"
2244	" 60	HVa	17.0	13.8	6.2	1.1	"	"	2499	CD59	IIIe	14.0	12.2	2.4	0.4	"	"
2246	BY62	EMb	20.6	(14.9)	3.5	(0.7)	"	B	2509	CF62	HVa	16.4	14.0	3.2	0.6	"	"
2252	" 61	AVa	12.0	14.0	2.5	0.4	"	"	2509	"	-IIIa	(11.1)	(8.0)	2.0	(0.2)	"	F
2257	BU59	AMb	19.8	(13.5)	4.1	(0.6)	"	B	2511	CE61	BVa	14.5	(14.5)	2.6	(0.4)	"	B
2259	BW59	-IIIa	(17.2)	(10.6)	3.3	(0.6)	"	F	2512	CF61	GIII(a)	(22.3)	(16.6)	3.0	(0.8)	"	D
2271	BT60	平基IVd	14.5	13.6	5.2	1.0	"	"	2515	CA58	GIVb	11.4	(8.0)	3.0	(0.2)	"	B
2274	BP60	GIIIa	16.0	11.9	2.3	0.3	"	"	2518	BV50	HIVd	12.5	14.1	3.6	0.8	"	図1270
2279	" 59	GIII(a)	(15.5)	11.1	3.0	(0.4)	"	A	2520	BN63	GIIIa	14.9	11.8	2.0	0.3	"	"
2282	BU60	HVb	10.8	(9.4)	3.2	(0.2)	"	B	2522	CF61	GIIIa	25.0	14.0	3.0	0.7	"	"
2283	BG59	GIVa	15.8	12.6	4.8	0.8	"	"	2523	CH65	EMb	(19.3)	(18.1)	2.7	(0.7)	"	C
2285	BQ59	EVb	12.4	(12.3)	2.7	(0.4)	"	B	2524	CE60	-(III)a	(17.2)	(12.3)	2.7	(0.4)	"	C
2288	BW58	EIIIc	15.9	14.6	2.2	0.4	"	鋸歯状	2531	" 52	GIIIa	18.2	11.0	3.0	0.4	"	"
2290	Z	IVb	17.1	13.1	3.4	0.6	"	"	2533	CA55	-b	(17.5)	(15.3)	4.0	(1.0)	"	F
2292	BW57	CIVc	14.0	15.7	2.7	0.3	"	"	2538	" 51	EIIIb	23.8	(18.0)	4.0	(1.0)	"	B
2293	" 59	AVb	13.4	14.1	2.0	0.3	"	"	2539	"	HIIIa	17.5	19.6	4.5	1.4	"	"
2294	BV57	DVa	17.5	(12.5)	2.5	(0.4)	"	B(製作時)	2549	CF52	HVb	19.8	(13.7)	3.1	(0.5)	"	B
2295	BS56	(D)IV-	(21.2)	(23.9)	3.2	(1.3)	"	D	2551	" 53	APIb	12.0	13.8	3.2	0.3	"	"
2296	BV56	BVb	15.3	(13.9)	3.2	(0.5)	"	B	2554	" 54	AMa	21.0	(13.0)	3.1	(0.5)	"	B
2299	BR58	IV-	(12.2)	13.7	2.3	(0.3)	"	A(製作時)	2559	Z	GIIIb	12.9	12.8	3.3	0.4	"	"
2301	BU58	IVb	24.6	18.2	6.5	2.2	"	"	2560	CF55	HIVb	22.6	23.2	6.4	2.3	"	"
2308	BO57	EVa	18.5	(13.8)	2.2	(0.4)	"	B	2561	"	EIIa	22.7	(16.3)	4.5	(0.8)	"	B
2315	BT56	GIIIe	32.3	16.5	4.1	1.6	"	"	2562	" 57	EIIb	21.3	(16.4)	3.6	(0.7)	"	B
2317	BQ56	HIIa	17.6	12.6	3.6	0.5	"	"	2563	"	GVc	23.3	(13.5)	4.0	(1.0)	"	B(製作時)
2322	BP57	HIIIa	16.4	12.2	2.0	0.3	"	"	2570	CG50	HIIIc	18.1	17.3	4.7	1.0	"	"
2325	BY56	"	16.7	17.0	2.4	0.3	"	"	2576	CF51	EIIIb	15.5	13.3	4.5	0.5	"	"
2327	BN59	GIIIa	18.7	10.8	2.0	0.3	"	"	2577	CG53	-Vb	29.5	22.4	9.2	4.9	"	未製品
2332	CA62	EVa	16.8	13.5	3.0	0.5	"	"	2581	" 57	DVa	14.0	16.0	2.5	0.4	"	"
2334	CE63	BVe	13.2	15.6	2.5	0.4	"	"	2587	CE56	HIIIc	20.1	17.4	4.5	1.3	"	"
2336	CA61	H--	(10.0)	12.0	1.5	(0.2)	"	A	2594	CH53	(平基)III-	(15.3)	(9.6)	3.2	(0.4)	"	E
2341	BO58	円基IIIa	16.4	12.5	3.9	0.6	"	"	2595	CG51	EIIIc	11.7	9.5	2.5	0.3	"	"
2342	BN58	EIIIc	11.9	11.0	2.1	0.2	"	"	2599	CF51	円基Vb	21.6	(10.5)	3.5	(0.8)	"	B
2347	CA62	FIIIb	15.6	(12.0)	2.0	(0.3)	"	B	2600	" 53	GIIIa	19.7	12.9	2.5	(0.4)	"	B
2349	BO57	-(III)-	(13.2)	(16.6)	3.2	(0.9)	"	G	2601	CE51	-Vb	(20.6)	(22.5)	4.5	(1.8)	ch	F
2352	BT54	GIIIa	14.1	15.9	4.2	0.6	"	"	2619	CA52	--c	(16.6)	(17.3)	4.8	(1.1)	ob	C
2356	BU60	HVb	18.5	(16.5)	3.5	(0.8)	"	B	2624	BY50	DIII-	(14.8)	13.2	3.3	(0.5)	"	A
2364	BQ54	FIVc	21.3	15.2	4.5	1.1	"	"	2626	" 51	GIVa	19.6	15.5	2.8	0.5	"	"
2365	BD53	有基円基Vc	23.4	11.5	5.2	1.3	"	図1250	2630	" 52	HIIb	21.0	15.9	4.0	1.0	"	"
2366	BV58	GIIa	15.4	12.7	2.7	0.4	"	"	2632	BX53	AVb	17.5	(13.6)	2.4	(0.3)	"	B
2370	CD60	HIII-	(19.4)	(11.5)	3.4	(0.6)	"	E	2635	BV53	EIII-	(14.9)	(14.8)	3.3	(0.5)	"	A
2374	BY53	FIIa	20.5	(10.2)	4.7	(0.6)	"	B	2648	CB54	-(III)-	(13.6)	(11.6)	2.8	(0.4)	"	G
2387	BS53	IIE	22.8	15.6	2.7	0.7	"	"	2652	BW56	EVa	15.0	12.2	2.5	0.3	"	"
2390	" 52	GIIIa	21.2	11.5	2.8	0.4	"	鋸歯状	2653	CF53	HIIIa	13.7	10.4	2.0	0.3	"	"
2391	BT52	HIIIb	17.4	15.2	3.0	0.7	"	"	2655	" 52	HIIIb	18.0	14.2	4.1	0.9	"	"
2392	"	-(III)a	(13.8)	(13.2)	3.0	(0.3)	"	C	2664	BV55	EVa	15.3	10.0	3.5	(0.3)	"	B
2401	BS55	HVa	31.1	15.5	3.4	1.9	"	図1263	2666	CF52	EMb	13.2	11.0	2.3	0.3	"	"
2403	BV51	FIIIa	23.0	13.6	3.0	0.6	ob	鋸歯状	2667	CE56	EVa	12.5	(11.6)	2.3	(0.2)	"	B
2404	BU50	DIIIa	21.5	17.8	2.3	0.7	"	"	2674	CH54	平基IIIb	18.5	16.5	4.5	1.1	"	"
2408	"	EIIIc	19.6	16.0	3.1	0.7	"	"	2677	" 55	平基IVb	19.8	13.6	3.0	0.8	"	"
2409	BS50	GIIIa	22.0	14.5	2.7	0.6	"	"	2681	CG53	平基IIIa	13.5	11.9	2.3	0.3	"	"
2415	" 51	円基IIIb	24.3	(13.6)	3.0	(0.8)	"	B(製作時)	2700	CA60	DVa	15.3	12.8	2.5	0.3	"	"
2416	" 54	円基Vb	18.8	17.2	8.3	2.2	"	未製品	2707	PQ62	-(III)(b)	(13.0)	(11.4)	2.8	(0.4)	"	G
2420	BT20	EIIIa	16.0	14.2	3.2	0.5	"	"	2712	CE52	HV-	(15.4)	14.6	4.5	(0.9)	"	A
2421	" 50	EVa	15.0	13.6	2.5	0.4	"	"	2713	CF53	DIVb	18.5	(16.0)	3.3	(0.6)	"	B
2434	BU49	FIIIa	16.0	15.0	2.4	0.4	"	"	2727	Z	CVa	14.8	15.2	2.4	0.4	"	"
2435	BV49	HVb	31.6	(15.4)	3.6	(1.5)	"	B	2728	BX53	HIb	22.3	(12.7)	4.4	(1.1)	"	B(製作時)
2437	"	(I)IIIc	16.5	(13.3)	2.9	(0.5)	"	B	2738	CC58	HIVb	27.8	27.3	5.8	3.5	不明	未製品
2439	"	平基IVb	26.5	20.5	10.7	3.5	"	未製品	2745	BW52	平基IIIa	15.8	23.0	6.6	1.8	ob	"
2445	"	HIIIc	12.7	11.7	2.0	0.2	"	"	2746	"	HIII-	(22.0)	24.0	7.0	(2.7)	"	A
2446	BW49	EVb	21.0	(19.7)	4.0	(1.1)	"	B	2753	BV58	EVa	13.0	(12.5)	4.0	(0.4)	"	B
2451	BU49	EVa	16.2	(14.6)	3.2	(0.4)	"	B	2754	" 59	GIIa	14.4	12.0	3.0	0.3	"	"
2452	"	GIIIb	22.5	15.5	3.5	0.8	"	"	2761	BT55	DIVb	10.6	10.6	3.0	0.2	"	"
2454	Z	IIIIe	14.5	11.5	4.0	0.5	"	"	2764	" 58	DVb	7.3	7.7	1.2	0.1	"	"
2464	"	HIIIe	13.0	13.2	3.0	0.4	"	"	2770	" 55	GIIa	20.6	17.5	3.0	0.6	"	"
2466	BN62	HIIIa	11.2	11.5	2.5	0.3	"	"	2771	" 56	"	19.5	14.0	3.0	0.5	"	"
2472	CE61	HIIIb	17.6	16.0	3.5	0.5	"	"	2773	BU59	HIII(a)	(17.0)	17.0	3.3	(0.6)	"	A
2474	CO60	CIVb	16.2	(18.5)	2.6	(0.4)	"	B	2776	BV59	-(III)b	(14.0)	(11.8)	4.5	(0.7)	"	F
2475	CB63	EIVc	9.6	14.8	2.5	0.3	"	"	2777	"	DVa	16.0	(10.6)	1.9	(0.2)	ch	B
2478	BL60	(I)IV-	(22.5)	(9.5)	2.6	(0.5)	"	E	2779	" 60	IV(b)	(26.0)	(28.2)	7.0	(4.2)	ob	図1272



登録 No.	出 地 土 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 地 土 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
2793	CC58	DⅢ-	(15.6)	13.0	2.3	(0.4)	"	A	3171	CO87	GⅤe	19.4	17.4	4.4	1.1	ob	
2801	CE58	GⅤa	15.8	(12.2)	3.3	(0.5)	"	B	3173	" 86	BⅢb	14.0	(12.0)	2.4	(0.3)	"	B
2809	" 67	GⅡa	20.4	13.2	2.5	0.3	"	"	3174	" 89	AⅣb	9.2	9.7	1.6	0.1	"	"
2826	CA57	GⅢ-	(11.6)	13.0	2.5	(0.3)	"	A	3195	CM88	EⅣa	15.0	(12.5)	2.6	(0.3)	"	B
2862	CBZ	EⅤe	15.1	(12.4)	2.3	(0.3)	"	B	3200	" 89	DⅣb	13.8	11.8	2.8	0.4	"	"
2867	CD54	-(Ⅲ)(b)	(16.8)	(13.0)	3.3	(0.3)	"	F	3207	" 90	HⅣ-	(17.5)	17.6	4.5	(1.1)	"	A鋸齒状
2871	CE55	CⅤd	14.6	14.7	3.9	0.7	"	"	3233	CG94	AⅣb	14.3	15.0	3.0	0.4	"	"
2872	"	HⅢa	16.6	(12.4)	2.0	(0.3)	"	B	3262	" 88	円基Ⅲ(b)	14.5	13.2	4.8	0.7	"	未製品
2873	CC54	GⅢb	(13.0)	14.7	2.7	(0.4)	"	A	3264	CT71	-b	(14.9)	(14.5)	5.1	(0.5)	"	F
2876	" 55	IⅢb	17.9	14.6	5.6	(1.2)	"	"	3265	CS72	IⅤc	14.9	(15.5)	3.8	(0.7)	"	B
2878	" 56	IⅤ-	(13.4)	16.3	(2.6)	(5.6)	"	A	3270	CG52	平基Ⅴ-	(25.8)	25.3	5.0	(3.0)	"	A(製作時)
2879	"	(E)(Ⅳ)b	26.3	(16.5)	4.2	(1.7)	Ry	(B)	3271	"	AⅢb	20.7	(12.8)	3.0	(0.6)	"	B
2880	"	GⅢb	19.0	(17.1)	4.3	(1.0)	ob	B	3306	DI42	CⅤd	12.7	14.1	4.0	0.6	"	"
2884	BY53	-Ⅲ(a)	(20.6)	(15.6)	4.0	(1.0)	"	G	3307	"	HⅣ-	(22.7)	20.0	2.9	(1.2)	"	A
2885	"	GⅢa	18.0	12.0	2.5	0.3	"	"	3312	CE48	GⅣb	17.6	14.0	6.0	0.9	"	"
2886	BX52	GⅢ(a)	(26.5)	16.0	3.1	(1.1)	"	A	3314	CN40	IⅤ(b)	15.0	(9.6)	3.0	(0.4)	"	B
2888	CE53	CⅢ(b)	(23.6)	(16.5)	3.1	(0.8)	"	D	3330	CU44	(円基)Ⅴc	(17.4)	(18.7)	5.0	(1.3)	"	F
2893	CH52	EⅤb	19.7	(17.2)	3.6	(0.9)	"	B	3358	DE42	HⅢ-	(21.5)	12.5	3.5	(0.9)	"	A
2894	" 53	(H)Ⅲa	(18.5)	(16.8)	3.2	(0.8)	"	C	3361	CH52	円基Ⅴb	26.2	23.3	9.5	4.6	"	"
2895	"	HⅤb	17.4	(14)	2.9	(0.6)	"	B	3371	DA39	HⅣb	13.7	13.6	3.5	0.6	"	"
2898	CF52	IⅤc	11.5	9.3	2.0	0.2	"	"	3375	CH52	-(Ⅲ)b	(20.5)	(15.6)	3.6	(0.9)	"	F
2899	"	HⅤb	13.4	11.5	3.0	0.4	"	"	3400	CA49	HⅡa	26.4	17.0	3.0	0.8	"	"
2900	"	FⅢ(a)	(11.6)	(10.5)	2.5	(0.2)	"	D	3401	CF48	FⅤe	15.5	16.2	4.5	0.9	"	"
2902	" 51	GⅢb	17.5	(11.0)	2.4	(0.4)	"	B	3402	"	EⅢa	23.8	17.6	2.3	0.6	"	"
2903	"	DⅤb	16.3	14.0	3.3	0.5	"	"	3403	CG48	IⅢa	18.5	11.2	2.4	0.4	"	"
2905	CG52	-Ⅲb	(19.0)	(18.0)	4.2	(0.9)	"	C	3404	BS46	DⅤe	14.8	12.6	3.0	0.3	"	"
2908	CH52	平基Ⅴ-	(17.2)	18.2	5.6	(1.4)	"	A	3407	" 47	EⅣa	11.4	8.3	2	0.2	"	"
2909	" 51	平基Ⅲ-	(13.6)	18.3	3.0	(0.7)	"	A(製作時)	3408	" 46	-a	(8.0)	(7.5)	2.0	(0.1)	"	F
2911	CE50	HⅠc	17.6	13.0	3.0	0.6	"	図1265	3410	" 45	HⅤ-	(20.7)	15.6	5.0	(1.6)	"	A
2913	" 51	IⅢa	15.2	12.4	3.0	0.4	"	"	3456	CB46	EⅣa	19.5	(13.4)	2.3	0.4	"	B
2915	CF52	HⅢb	15.0	13.0	3.1	0.4	"	"	3457	" 47	GⅢa	17.0	15.4	2.4	0.4	"	"
2916	CE53	-(Ⅲ)a	(13.4)	(8.1)	(2.9)	(0.2)	"	F	3466	CL43	--d	(20.4)	(14.0)	5.0	(1.1)	"	C(脚部は製作時)
2917	" 54	EⅤb	20.5	(17.6)	3.1	(0.8)	"	B	3467	CI46	DⅣa	21.5	(13.3)	3.2	(0.5)	"	B
2918	"	(円基)Ⅴb	30.4	23.3	7.8	4.3	"	未製品	3468	"	CⅢb	18.0	17.7	3.0	0.7	"	"
2919	"	EⅤb	17.5	15.5	2.1	0.6	ch	"	3469	CM48	-Ⅴc	31.9	16.7	7.1	2.9	"	未製品
2921	CA50	HⅢc	23.8	(19.9)	4.9	(1.5)	ob	B	3470	CO47	AⅣa	13.6	(10.6)	2.2	(0.2)	"	B
2922	BY57	CⅢc	20.5	20.0	2.5	0.7	"	"	3471	"	円基Ⅴb	19.5	15.7	3.3	0.7	"	未製品
2924	BV60	EⅢb	21.0	(13.5)	2.6	(0.5)	"	B	3474	CL46	EⅣb	16.2	12.3	4.7	0.6	"	"
2925	"	-Ⅲb	(18.3)	(16.6)	3.0	(0.6)	"	C	3475	CM45	AⅣa	27.5	(16.0)	4.1	(1.0)	"	B
2926	CH52	CⅤa	20.0	14.7	2.6	0.5	"	"	3477	CO43	IⅤ-	(16.9)	15.4	6.3	(1.3)	"	A
2927	CF52	EⅢa	19.7	13.5	3.0	0.5	"	C鋸齒状	3478	CP43	DⅣa	15.2	(11.6)	1.8	(0.2)	"	B
2928	CE52	(円基)Ⅴb	(23.5)	(20.5)	3.9	(0.6)	"	B	3481	CO42	IⅤc	21.8	(17.3)	4.9	(1.5)	"	B
2929	" 51	-(Ⅵ)(e)	(12.0)	14.5	3.1	(0.5)	"	A(製作時)	3483	CN42	DⅤc	14.8	10.8	3.4	0.5	"	"
2931	CU51	DⅤa	18.4	(13.0)	3.4	(0.5)	"	B	3484	CO41	IⅤb	25.2	10.8	4.2	2.1	"	未製品
2933	" 50	GⅢc	17.0	10.6	4.5	0.7	"	"	3486	CL40	GⅣa	14.2	14.0	4.7	0.6	"	"
2935	DN56	HⅢ-	(12.0)	(11.5)	2.0	(2.2)	"	D	3488	CN49	HⅤ-	(23.6)	(16.0)	5.1	(1.6)	"	D
2936	CW50	AⅤa	10.5	(18.4)	3.0	(0.6)	"	B	3496	CQ40	EⅣa	13.8	(12.3)	3.2	(0.4)	"	B(製作時)
2937	DN58	BⅢb	16.5	(17.2)	3.0	(0.5)	"	B	3497	CM40	GⅢ(a)	(13.7)	14.7	3.0	(0.4)	"	A
2939	DJ61	BⅤa	17.5	16.4	3.5	0.6	"	"	3498	"	EⅢa	11.5	12.1	2.5	0.3	"	"
2943	CW49	DⅡ-	(19.0)	(14.9)	4.2	(0.8)	"	D	3499	"	DⅤc	14.7	13.0	2.5	0.4	sh	"
2950	BU50	IⅤ(e)	(15.7)	17.0	4.1	(1.1)	"	A(製作時)	3500	DE32	EⅡa	21.4	14.3	3.2	0.5	ob	"
2980	DR32	FⅢe	20.8	(14.2)	3.7	(0.8)	"	B	3504	DH36	---	(9.1)	(10.6)	2.5	(0.1)	"	E
2989	CA62	HⅡa	18.3	12.5	3.3	0.5	"	"	3508	C区Z	GⅡa	12.6	(13.3)	2.6	(0.3)	"	B
2991	CC61	HⅢc	17.5	14.0	4.3	0.9	"	"	3525	DC34	IⅤ-	(15.2)	20.7	3.5	(1.2)	"	A(製作時)
3004	CM71	IⅡ-	(18.2)	20.5	4.8	(1.5)	"	A	3526	DB35	CⅤd	12.0	18.1	2.8	0.5	"	"
3016	" 66	(C)Ⅲ-	(15.6)	(14.8)	2.8	(0.4)	"	D	3598	" 34	EⅤb	11.4	10.0	2.5	0.2	"	"
3017	" 69	FⅣa	24.5	(16.9)	2.4	(0.6)	"	B	3607	CH25	DⅣb	25.4	(18.3)	3.5	(0.9)	"	B
3024	CN75	HⅣ-	(11.0)	15.0	2.5	(0.3)	"	A	3611	CG48	FⅤ(a)	(14.6)	13.5	3.4	(0.4)	"	A
3025	" 76	-(Ⅱ)c	(19.5)	(9.0)	3.2	(0.4)	"	F	3657	CW46	HⅣa	19.0	14.6	4.1	0.7	"	"
3027	" 77	GⅣb	14.8	11.5	3.6	0.4	"	"	3712	Z	GⅣb	16.1	13.6	3.3	0.6	"	"
3040	CP88	DⅣa	20.6	(14.0)	3.0	(0.6)	"	B	3715	Z	HⅣa	21.5	12.7	4.3	0.9	"	"
3042	" 89	GⅢa	19.5	12.1	4.5	0.4	"	図1258	3745	CN49	HⅤb	18.2	15.2	4.1	0.9	"	"
3043	CO89	AⅢa	14.0	14.2	2.7	0.4	"	鋸齒状	3800	CR44	AⅣb	16.0	14.2	2.3	0.4	"	"
3060	CN77	GⅣa	24.3	(17.5)	4.4	(1.1)	sh	B	3812	CN40	---c	(17.1)	(15.8)	3.2	(0.9)	ch	F
3077	CJ89	AⅣb	10.0	12.0	1.8	0.2	ob	"	3813	CV44	EⅤd	14.0	12.8	3.3	0.5	ob	"
3095	BR101	EⅣb	20.0	17.8	4.9	1.2	"	"	3814	"	HⅣb	17.4	13.6	4.3	0.7	"	"
3116	BY97	GⅢ-	(13.9)	14.0	3.0	(0.6)	"	A鋸齒状	3815	CT41	(E)Ⅳd	16.5	(17.2)	3.2	(0.8)	"	B(製作時)
3138	CW89	IⅤ-	(14.3)	18.1	5.1	(1.1)	"	A	3817	CV44	HⅣa	13.0	13.6	2.2	0.3	"	"
3148	CO88	-Ⅲ(a)	(25.4)	(13.6)	4.6	(1.3)	"	G	3818	" 42	円基Ⅴe	21.5	15.2	5.6	1.7	"	"
3164	CJ90	AⅣb	14.0	15.5	3.4	0.4	"	"	3819	"	GⅤa	13.5	9.4	2.8	0.3	"	"

登録 No.	出 地 点	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備 考	登録 No.	出 地 点	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備 考
3821	CV41	DIVa	21.4	12.3	3.2	0.6	ob		4393	CM87	円基Va	16.1	10.6	3.7	0.6	ob	
3825	CW41	HVb	13.6	10.7	3.8	0.5	"		4398	" 89	-(III)b	(21.4)	(13.4)	3.0	(0.8)	"	C
3826	"	GIVa	12.0	10.0	3.5	0.3	"		4403	CJ46	平基IIIb	20.0	(20.2)	7.3	(2.4)	"	B
3829	CJ46	HIVa	18.0	10.4	2.1	0.4	"		4411	" 54	IVc	22.4	17.6	6.5	2.3	"	
3831	DA36	EIIIa	17.3	(10.5)	2.9	(0.3)	"	B	4418	CF55	平基IIIe	19.0	13.3	5.0	1.1	"	
3840	CK42	IIIa	14.8	11.0	1.7	0.3	"		4420	"	(H)Vb	22.3	(18.5)	4.9	(1.6)	"	B(製作時)
3853	DA38	HIVe	26.5	(14.8)	5.4	(1.7)	"	B	4425	" 56	-III-	(15.9)	(20.3)	4.5	(1.5)	"	G未製品
3863	CV43	EIIIa	23.7	16.2	4.3	1.2	"		4442	" 63	平基III-	(15.7)	20.3	3.8	(1.1)	"	A
3864	DE38	AVb	13.7	14.3	2.5	0.4	"	片脚?	4451	CE51	円基Vb	23.0	(16.1)	3.3	(1.3)	"	B
3867	DG38	CIvc	17.2	(15.1)	3.7	(0.6)	"	B	4470	" 52	平基IVb	18.8	15.7	4.6	1.2	"	
3869	EA44	IIa	16.9	16.6	3.8	0.8	"		4484	CF52	-Vc	21.0	12.8	10.0	2.5	"	未製品
3870	EC43	IIIb	19.6	14.7	4.8	0.9	"		4485	"	平基IIIc	20.8	(18.5)	4.0	(1.0)	"	B
3874	EE40	IIb	15.5	(11.7)	3.5	(0.5)	"	B(製作時)	4486	"	-III-	(12.8)	(12.5)	2.7	(0.5)	"	G
3876	EF43	GVb	17.0	13.5	3.7	0.8	"		4499	" 54	平基(V)b	16.5	14.5	3.2	0.7	"	未製品
3881	EC43	IIIa	12.2	12.3	2.5	0.3	"		4561	BS45	(G)Vb	25.0	(15.2)	5.5	(1.3)	"	F
3885	CT41	IVa	15.2	11.1	1.8	0.3	"		4565	BT50	HIIIb	24.2	(17.6)	5.0	(1.5)	"	B
3886	CX43	(E)(III)-	(14.1)	(9.5)	3.5	(0.4)	"	E	4581	" 41	平基IIIb	21.8	(15.5)	2.8	(0.9)	"	B
3891	DP39	円基Vc	28.3	20.8	13.5	5.7	"	未製品	4597	" 57	EIIIb	15.2	(11.5)	2.4	(0.3)	"	B
3908	DQ46	GVb	17.3	12.6	3.5	0.6	"		4604	BO62	IIII-	(19.5)	14.8	2.3	(0.8)	"	A
3909	DJ48	"	15.8	11.8	2.5	0.3	"		4606	DA65	平基Vc	19.2	15.3	6.8	1.8	"	
3910	EA44	AVb	12.0	9.8	1.8	0.2	"		4632	DB36	平基Vd	19.0	17.6	3.9	1.3	"	
3911	DL43	DVb	19.2	12.7	2.8	0.5	"		4640	" 50	AIIIb	20.2	21.5	4.0	1.0	"	
3914	DF49	GV-	(14.5)	(20.6)	3.0	(0.8)	ch	D(先端製作時)	4662	DC35	-IVb	21.6	23.4	8.5	4.2	"	未製品
3916	"	IVc	20.1	(13.4)	3.2	(0.7)	ob	B	4675	" 56	尖基Vb	21.5	13.1	3.8	0.9	"	
3917	DI45	IIa	25.3	16.0	6.0	1.5	"	未製品(石錐?)	4679	" 60	平基III(b)	(18.8)	17.5	7.7	(1.8)	"	A
3918	DM48	(A)IV-	(15.7)	(13.1)	(3.5)	(0.5)	"	E	4712	DD54	GVc	17.3	(15.3)	3.5	(0.9)	"	B
3919	DD47	(D)IV-	(24.8)	15.8	4.3	(1.1)	"	D	4719	" 60	円基Vb	21.0	(16.5)	4.5	(1.3)	"	B
3922	DL49	EVb	16.2	12.0	3.2	0.4	"		4720	"	GIII(b)	14.3	(17.3)	4.6	(0.8)	"	B未製品?
3924	DF49	--a	(12.3)	(13.7)	(2.4)	(0.3)	"	C	4724	" 54	平基Vc	24.5	20.1	6.5	2.8	"	
3935	"	DVc	41.0	25.5	5.5	5.0	ms?	図1255	4729	" 61	(I)--	(13.0)	(14.5)	3.2	(0.5)	"	E
4051	CM49	HIVa	16.0	14.5	2.5	0.5	ob		4739	DP46	平基(III)-	(13.5)	(16.5)	2.7	(0.7)	"	E
4060	" 48	HIII(a)	(15.6)	(11.4)	3.2	(0.5)	"	D	4745	" 61	平基Ve	20.6	19.8	6.0	2.5	"	未製品
4071	CY56	GIIIa	22.6	14.0	3.2	0.7	"		4751	DS50	平基IIIc	32.3	21.0	8.5	4.7	"	未製品?
4075	CI48	EIIIa	25.5	(17.8)	3.0	(0.9)	"	B(製作時)	4757	DW58	平基III-	(15.4)	24.5	3.6	(1.4)	"	A
4077	CH48	EIII(a)	(16.2)	15.5	2.8	(0.5)	"	A	4760	DU57	IVc	21.0	(18.7)	4.6	(1.9)	"	B
4090	"	-IVd	24.5	26.0	9.6	4.1	"		4761	"	HV-	(14.4)	(19.5)	4.2	(0.9)	"	D
4092	CI47	-(IV)-	(20.6)	(10.5)	4.5	(0.9)	"	F	4780	D区Z	GIIIb	13.9	13.2	3.0	0.4	"	
4110	CN47	DIVc	16.2	(13.7)	3.1	(0.5)	"	B	4781	"	平基IIIb	21.2	19.0	4.0	1.4	"	
4133	CG48	HVb	15.2	15.0	5.0	0.8	"		4782	"	-(III)b	(10.5)	(12.4)	(2.9)	(0.3)	"	F
4138	CI46	IVb	24.5	(11.4)	5.6	(1.8)	"		4783	"	IIIIb	20.7	(16.6)	4.3	(0.9)	"	B
4141	CJ46	GIVa	34.0	15.5	4.2	1.8	"	図1262	4810	C区Z	DIVb	27.5	(17.2)	6.5	(1.6)	sh	B
4161	CC48	GVb	11.0	10.2	2.0	0.2	"		4811	"	IIIIb	16.8	(11.2)	2.9	(0.4)	ob	B
4165	CN46	HIVa	12.5	12.5	2.5	0.3	"		4812	"	平基Vc	24.3	(19.8)	4.0	(2.0)	"	B
4175	CX49	EVe	17.0	12.5	3.3	0.4	"		4813	"	AIIIb	16.0	(11.5)	2.5	(0.3)	"	B
4181	CI46	GIII-	(14.5)	17.4	2.7	(0.6)	"	A	4816	D区Z	HIII-	(13.0)	14.9	3.2	(0.5)	"	A
4188	CA48	EVb	12.2	11.5	3.2	0.3	"		4822	EB43	"	(20.0)	(14.5)	3.0	(0.8)	"	D
4212	CB47	GIIIa	16.1	13.8	2.2	0.3	"	鋸歯状	4826	EC40	--b	18.7	15.5	4.5	(1.2)	"	F
4236	DI53	GIIIc	17.5	(19.0)	5.6	(1.5)	"	B(製作時)	4838	EE39	平基III-	(16.0)	15.6	4.1	(1.1)	"	A
4247	" 62	(G)IVb	(12.7)	(13.0)	2.6	(0.4)	"	C	4867	C区Z	HIII(b)	(21.0)	14.5	3.0	(0.8)	ch	A
4252	CD49	IV-	(19.5)	17.5	4.0	(1.3)	"	A(製作時)	4868	"	平基IIIb	(19.0)	(16.0)	3.9	(1.1)	ob	E
4253	CE49	HIVa	15.4	(11.3)	2.0	(0.3)	"		4870	"	(尖基)Vc	20.3	10.5	5.6	1.0	"	未製品?
4255	DD49	EVa	13.7	12.1	2.6	0.3	"		4880	Z	HIVa	16.5	12.8	2.9	0.5	"	
4263	DA52	HIVc	18.5	12.8	4.6	1.1	"		4888	"	BIVb	21.0	(14.3)	2.5	(0.5)	"	B
4282	CO49	GIIIa	18.0	11.2	2.5	0.4	"		4921	CF51	円基V-	(15.0)	12.7	2.4	0.6	"	A
4313	CD55	平基IIIb	16.0	13.0	3.6	0.6	"		4931	DB31	(F)--	(14.9)	(15.0)	4.0	(0.6)	"	E
4315	"	平基IIIc	24.5	(16.6)	5.5	(1.2)	"	B	4933	" 57	円基V(c)	18.2	(10.5)	4.0	(0.7)	"	E
4316	"	HV(b)	(21.4)	(17.6)	2.6	(0.8)	"	D	4935	" 60	--c	(20.0)	(24.4)	(4.0)	(1.7)	"	F
4317	"	EVb	24.0	(12.5)	5.4	(0.9)	"	B	4936	" 61	---	(9.7)	(23.4)	5.2	(1.1)	"	G
4321	" 56	平基V(d)	(25.0)	19.3	5.0	(1.7)	"	A	4940	DC62	--b	(18.0)	(14.5)	3.0	(0.6)	"	C
4322	"	--c	(11.9)	(13.0)	(3.4)	(0.5)	"	F(製作時)	4949	DD58	HIVb	19.2	(16.0)	5.5	(1.4)	"	B
4331	" 57	平基IIIb	17.1	(16.4)	2.4	(0.5)	"	B	4950	" 54	EVa	19.3	(14.5)	3.5	(0.6)	"	B(製作時)
4333	" 58	平基IVb	28.8	24.5	8.6	5.5	ch	未製品	4952	" 56	平基IV-	(13.5)	27.2	3.5	(1.2)	"	A
4358	C区Z	平基Vd	15.5	(13.5)	4.2	(0.9)	ob	B	4953	"	I(IV)-	(16.9)	(12.6)	3.3	(0.7)	"	F
4367	"	平基IIIc	25.1	(17.6)	4.6	(1.5)	"	B	4954	"	(E)(IV)-	(14.6)	(15.2)	2.6	(0.6)	"	D
4370	CM39	円基Vc	25.7	20.0	8.4	1.9	"	未製品?	4970	DF59	-IIIb	24.8	(17.8)	3.5	(1.4)	ch	B未製品
4371	"	HIIc	24.5	15.2	5.0	1.6	"	未製品?	5560	DL46	HIIIb	16.0	14.4	3.8	0.5	ob	B
4376	" 40	HIIIb	19.7	13.0	4.7	0.8	"		5561	CP40	HVb	19.7	(16.2)	6.4	(1.3)	"	B
4377	"	-IIa	20.4	11.9	3.3	(0.5)	"	F	5563	" 52	平基III-	(17.0)	24.5	3.5	(1.6)	"	A
4384	" 73	円基III-	(22.9)	21.6	4.5	(1.9)	"	A	5565	" 84	GIIa	22.7	17.6	3.5	0.9	"	
4388	" 84	HIII-	(14.5)	23.6	4.0	(1.7)	"	A	5567	" 85	-IIIb	15.9	9.0	3.8	0.6	"	未製品

登録 No.	出 土 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 土 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
5568	CP87	-IIIb	26.3	16.7	6.8	1.9	ob	未製品	6030	BM61	EVb	15.5	(11.2)	2.7	(0.3)	ob	B
5577	CQ47	平基Vb	17.1	14.9	6.5	1.5	"	"	6050	BO51	円基Vb	21.6	16.1	8.0	2.7	"	未製品
5578	" 45	(円基)Vc	17.0	(13.4)	5.8	(1.1)	"	B	6060	" 62	-Vb	21.6	18.1	8.0	3.1	"	未製品
5580	" 47	(F)III-	(15.4)	(12.9)	3.0	(0.4)	"	G	6061	"	HV-	(17.3)	22.4	4.7	(1.8)	"	A
5585	" 71	--b	30.3	12.2	6.0	1.8	"	未製品	6069	BP52	HIIa	16.4	(12.3)	3.4	(0.4)	"	B
5587	" 49	--a	24.6	21.2	7.5	2.6	"	未製品	6075	" 58	平基IVb	19.2	11.6	5.4	0.8	"	未製品
5588	" 50	EIIIb	19.0	(13.5)	3.3	(0.4)	"	B	6076	"	平基Vb	19.4	14.5	4.3	1.1	"	"
5604	DF55	(F)(IV)-	(12.3)	(10.2)	2.2	(0.2)	"	E	6079	" 60	I(IV)-	(13.5)	18.5	2.9	(0.6)	"	A
5608	DD53	(F)-	(13.3)	(11.2)	3.0	(0.3)	"	E	6080	BQ52	HVa	24.3	(14.5)	3.2	(0.8)	"	B
5613	DA59	平基IVb	26.5	(22.2)	6.0	(3.2)	ch	B	6083	" 54	E(II)-	(17.0)	(11.9)	5.3	(0.7)	"	D
5618	DC57	HVd	16.0	15.2	7.3	0.7	ob	"	6087	" 50	FVd	18.3	(20.9)	6.8	(1.5)	"	B(製作時)
5624	" 64	円基Vc	23.0	17.7	7.7	2.4	"	"	6091	" 60	円基Vb	14.2	11.3	3.6	0.5	"	"
5625	DG52	-IVa	20.4	10.6	3.9	0.6	"	未製品	6095	BR50	-IVe	13.7	13.2	4.2	0.6	"	未製品
5634	DK55	平基Va	22.4	(14.7)	2.5	(0.5)	"	B	6120	BS55	--b	(22.5)	(16.5)	5.6	(1.6)	"	未製品
5636	DT59	GVc	14.2	(15.7)	2.3	(0.4)	"	B	6127	BS100	IVa	23.3	15.3	4.6	1.0	"	鋸歯状
5653	DK63	平基V-	(19.3)	17.3	6.2	(1.8)	"	A	6131	BT55	-Va	24.1	14.4	5.9	1.5	"	未製品
5658	DL53	GV-	24.6	20.4	6.7	3.1	"	未製品	6136	" 49	HIIIe	20.3	(12.5)	3.0	(0.5)	"	B
5659	" 54	HV-	(17.4)	12.7	3.3	(0.6)	"	A	6146	BW55	--b	(12.8)	(11.8)	4.7	(0.5)	"	F
5665	DM50	円基Vb	23.8	(17.6)	6.0	(1.7)	"	B	6148	" 60	- (III)d	(26.0)	(14.1)	4.8	(1.4)	"	F
5673	DN62	--(b)	(16.3)	(19.2)	5.7	(1.4)	"	F	6152	EC31	BIIIb	13.2	15.2	2.3	0.3	"	D
5695	DT59	(平基)IVe	15.0	(17.4)	3.3	(0.9)	"	B(製作時)	6181	BY43	円基Ve	15.2	13.8	2.7	0.5	"	"
5710	EB56	-III-	(18.3)	(14.0)	2.6	(0.7)	"	G	6185	CE49	(F)Vb	25.1	16.5	3.0	1.0	"	"
5716	EC51	(F)IV-	(12.7)	18.0	3.2	(0.6)	"	A	6186	"	平基III-	(21.4)	26.6	5.0	(2.4)	"	A
5728	EN59	円基Vb	31.6	20.0	6.6	3.9	"	"	6192	CI46	円基IIIb	20.0	15.0	5.2	0.8	"	"
5730	EO57	(円基)Vb	26.8	18.7	4.5	1.3	"	未製品	6200	CA44	-Vb	23.4	18.4	6.2	2.5	"	未製品
5731	" 60	EVb	22.4	(17.3)	3.4	(0.8)	"	B	6205	" 45-46	平基IVe	30.4	17.8	12.0	7.7	"	未製品?
5733	EP57	HVb	21.2	(17.3)	7.0	(1.7)	"	B	6210	CB46	IVc	20.4	19.1	5.2	1.6	"	"
5746	EQ57	GVd	20.3	12.0	5.8	1.1	不明	"	6211	"	--b	(17.4)	(17.4)	7.3	(1.3)	"	F
5750	"	IVc	21.8	16.1	8.0	2.0	ob	No60	6212	"	H--	(12.7)	12.9	3.5	(1.2)	"	A(製作時)
5751	"	GVb	20.8	14.2	4.7	0.8	"	No66	6235	CH48	-Vc	(21.8)	(19.8)	6.9	(1.8)	"	F
5756	"	CVb	20.8	(17.5)	7.6	(0.6)	"	B No83	6238	"	平基IIIb	27.6	17.1	7.9	2.7	"	未製品
5758	"	EIIIa	16.1	(16.7)	2.8	(0.5)	"	B No114	6244	"	- (III)c	(16.0)	(15.6)	4.2	(0.9)	"	F(製作時)
5759	"	円基Vb	19.3	(16.0)	5.2	(1.3)	"	B No128	6254	CD52	HV(b)	25.5	(22.2)	8.4	(3.4)	"	D(脚部は製作時)
5760	"	HVc	22.3	20.7	3.6	1.2	"	No129	6278	DQ59	HIV-	(16.7)	15.6	4.7	(1.2)	"	A(製作時)
5761	" 60	(H)(III)-	(10.7)	16.1	2.3	(0.3)	"	A	6307	DK61	HVa	21.4	21.2	8.2	2.7	ch	図1274
5762	ES57	円基Vd	15.8	8.5	3.6	0.5	"	"	6310	DF61	HIIIb	26.8	(18.3)	4.2	(1.4)	ob	B
5764	" 58	(円基)V-	10.2	15.3	2.8	0.5	"	"	6313	BW54	HVd	16.5	13.8	4.7	1.0	"	"
5766	ET60	FV-	(17.8)	23.3	4.4	(1.2)	"	A	6332	CF52	HIIIc	16.6	13.1	3.8	0.8	ch	"
5767	ES58	HVc	25.6	(19.8)	5.3	(1.6)	"	B	6333	" 58	EVb	18.5	12.5	3.0	0.5	ob	"
5768	" 59	円基Vc	23.2	18.7	11.0	3.2	"	未製品	6334	DN55	AIIa	17.8	(12.8)	2.0	(0.3)	"	B
5769	"	IV-	(11.8)	14.3	3.0	(0.5)	"	A	6337	CN71	HIII-	(15.0)	13.4	3.3	(0.6)	"	A
5781	" 57	平基IVb	26.2	(14.8)	5.2	(1.6)	"	B	6339	CD55	HIVb	13.1	(11.0)	2.5	(0.3)	"	B
5786	ER60	IVb	14.5	13.6	3.7	0.5	"	"	6343	CA62	HIII-	(16.6)	16.2	3.3	(0.9)	"	A
5788	"	--d	(20.1)	(19.5)	(2.7)	(0.6)	"	F	6344	BR53	(円基)Vb	(25.3)	(18.9)	5.2	(1.9)	"	F
5801	CA96	(円基)Vb	19.6	16.6	4.5	1.5	"	未製品	6352	CK44	EIIb	16.2	14.5	2.8	0.4	"	"
5819	CI53	(III)	(15.7)	(15.7)	3.6	(0.8)	"	G	6359	CP75	FVb	25.0	(12.0)	2.8	(0.5)	"	B
5851	CK54	平基(IV)-	(11.6)	21.7	3.8	(1.2)	"	A	6367	CR81	IIII-	(16.1)	14.2	4.3	(1.0)	"	A(製作時)
5859	CL51	円基Vd	21.4	(13.9)	2.5	(0.8)	"	B	6373	" 55	平基V-	(19.4)	(15.5)	3.3	(0.9)	"	E
5863	" 54	HII-	(14.4)	(14.0)	2.8	(0.4)	"	D	6383	CO49	平基Vc	17.7	12.5	3.2	0.7	"	"
5865	"	IVa	23.3	(22.5)	4.1	(1.7)	"	B	6384	"	HVa	20.6	16.0	5.0	1.0	"	"
5875	" 64	- (III)a	(20.3)	(12.7)	3.8	(0.5)	"	F	6424	BX45	円基Vb	24.6	(14.8)	4.2	(0.9)	"	B
5882	CM60	円基Vb	22.6	14.5	3.5	1.1	"	"	6425	" 48	(I)Vd	20.1	20.0	6.8	(2.1)	"	未製品
5906	CN63	--a	(20.4)	(17.0)	3.5	(0.9)	"	C	6434	" 53	-Vb	19.0	15.0	5.5	1.2	"	未製品
5912	CO51	円基Vb	19.4	18.2	3.5	1.1	"	O	6456	BY95	円基Vc	24.5	14.0	4	1.3	"	"
5914	"	--c	(14.4)	(13.8)	(2.5)	(0.6)	"	F	6457	BW49	-Vb	(20.0)	(18.0)	5.2	(1.2)	"	B
5916	" 52	HIII-	(19.3)	(15.0)	4.0	(0.9)	"	D(製作時)	6464	" 52	円基Ve	17.2	13.4	3.6	0.7	"	"
5922	" 77	HIIIb	21.6	(15.3)	3.8	(0.8)	"	B	6547	CN52	GIIIa	(20)	(13)	3.5	(0.6)	"	B No6
5940	CQ60	-III(a)	17.8	12.5	4.9	0.9	"	未製品	6556	DM40	EV-	(19.5)	14.5	4	(0.8)	"	D No11
5949	CR56	HIIIc	29.2	(19.2)	5.4	(1.6)	"	B	6563	DN61	平基Ve	19.9	(10.0)	3.5	(0.7)	"	B
5952	" 51	H(III)-	(13.0)	(15.7)	4.8	(0.9)	"	D	6591	DE61	平基II-	(15.2)	14.8	4.8	(0.8)	"	A
5960	" 63	- (III)-	(13.5)	(15.6)	3.2	(0.4)	"	G(先端製作時)	6642	DK56	円基Vd	25	18.1	5.2	3.2	"	未製品?
5961	CS59	GVc	16.6	15.0	2.2	0.5	"	"	6657	" 62	平基IIIb	15.6	16.0	5.0	0.9	"	"
5971	CT50	IVb	12.8	16.3	4.2	0.7	"	"	6664	DL52	円基Va	20.	(20.0)	4.0	(2.5)	"	B
5982	CU58	HIIIc	20.9	14.9	3.5	0.8	"	"	6668	" 54	-Vc	22.8	19.0	4.3	1.5	"	"
5996	CY63	平基IVb	20.4	17.4	5.6	1.6	"	"	6669	"	HV-	(14.8)	17.9	2.6	(0.6)	"	A
5997	" 57	(A)IV-	(16.1)	(7.5)	2.5	(0.3)	"	E	6674	" 55	--b	(24.8)	(18.5)	3.3	(1.3)	"	C
5999	CL51	HVc	17.3	12.6	3.6	0.7	"	"	6675	"	IV-	(13.)	18.8	2.8	(0.7)	"	A
6002	DD55	-Va	23.4	16.3	7.5	2.6	"	未製品	6676	"	円基Vd	21.6	19.8	4.5	1.4	"	未製品
6021	DH60	IVd	19.8	(16.0)	3.7	(1.0)	"	B	6677	"	平基Vd	25.0	24.0	7.1	3.1	"	未製品
6025	BL58	- (IV)b	(18.5)	(14.2)	4.5	(0.8)	"	F	6688	DM54	円基Vc	25.1	(21.1)	12.5	(5.4)	"	B

登録 No.	出 土 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 土 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
6698	DE32	ANa	18.7	(13.1)	2.7	(0.5)	ob	B	6940	BY53	HII—	25.5	23	3.5	(1.5)	ob	D
6704	"	#41 —Vb	17.1	10.0	3.8	0.7	"	未製品?	6941	CA56	—(III)—	(13.7)	(17.0)	2.8	(0.7)	"	G
6717	"	#51 Gvd	16.3	13.0	4.5	0.8	"	"	6942	CB53	平基(III)—	(15.0)	17.0	2.5	(0.6)	ch	A
6718	"	DV	(18.9)	(14.6)	3.1	(0.5)	"	D	6944	"	HIIIb	27.5	(13.2)	3.2	(1.2)	ob	B
6723	"	#52 (E)—	(14.5)	(12.5)	2.5	(0.3)	"	E	6957	"	—Vb	25.8	17.1	7.4	2.1	"	未製品
6734	"	#58 D—	(14)	(11.0)	3.0	(0.4)	"	D	6967	CC50	HVd	22.4	(18.2)	5.0	(1.5)	"	B
6737	"	#60 HVd	21.0	(15.8)	3.9	(0.9)	"	B	6974	CT59	円基Vc	30.2	18.9	4.8	1.9	"	側辺一部欠
6738	CE60	IV(d)	(17.9)	(22.2)	4.5	(1.6)	"	D	6976	CB49	平基IVd	22.4	21.6	6.2	2.7	"	(製作時)
6740	DF35	DVa	17.5	12.4	3.1	0.4	"	"	6980	CA48	円基Vb	30.8	24.2	8.4	6.5	ch	未製品
6748	"	#48 平基Vd	(27.5)	(18.4)	3.7	(1.6)	"	E	6987	BU61	IVb	17.5	15.5	5.5	1.0	ob	"
6751	"	#45 円基Vc	25.2	(17.5)	2.9	(1.1)	"	D	6988	DG51	—-a	(14.0)	(13.7)	2.5	(0.4)	"	C(製作時)
6752	"	#54 HV—	(19.0)	(14.8)	2.6	(0.8)	"	B	6989	DH61	HVa	18.5	13.9	3.5	0.6	"	"
6753	"	"	(18.3)	(16.4)	3.2	(0.8)	"	D	6990	Z	IVb	21.2	14.8	3.2	0.7	"	"
6756	DG45	円基V—	(22.4)	(16.6)	5.0	(1.3)	"	E	6991	"	CVa	15.3	(15.0)	2.9	(0.4)	"	B
6762	CG53	平基IIIb	22.2	(13.6)	5.0	(1.3)	"	B	6993	"	円基Va	28.0	(20.3)	7.7	(2.9)	"	B
6766	DG63	平基Vb	33.3	(26.2)	8.8	(5.1)	"	B	6994	BE50	HVa	17.6	15.1	4.6	1.0	"	"
6773	DH51	I, IVc	14.6	(16.4)	3.0	(0.6)	"	B	6995	DM54	EVa	15.2	11.5	3.5	0.5	"	"
6774	"	#54 E Vb	17.6	13.3	3.1	0.5	"	"	6996	DB33	DVa	13.8	10.5	3.0	0.3	ch	"
6781	"	#58 —(V)b	(20.6)	(16.9)	4.2	(1.2)	ch	F	6997	Z	HVa	19.8	(15.3)	2.7	(0.6)	sh	B
6783	"	#49 平基V—	18.6	(15.4)	5.2	(1.2)	ob	E	6998	BL60	ENb	15.5	13.8	2.0	0.3	ob	"
6784	"	#48 有基GVb	(22.5)	(15.7)	5.3	(1.5)	"	B	6999	CIZ	DNc	17.2	14.8	5.0	0.8	"	"
6800	DJ54	円基IIIb	17.5	14.0	3.6	0.7	"	"	7080	Z	F—a	22.3	(15.6)	2.7	(0.6)	"	B(製作時)
6806	"	"	(17.7)	(15.2)	5.6	(1.1)	"	C	7090	"	—b	25.8	20.0	7.1	3.4	ch	未製品
6840	Z	B IIIa	25.6	(13.8)	3.0	(0.6)	"	B	7091	BY57	GVa	16.2	12.3	3.5	0.5	"	"
6841	CIZ	HIIIc	20.3	(16.6)	4.5	(1.1)	"	B	7092	DE55	FVa	17.1	(15.0)	3.4	(0.5)	ob	B(製作時)
6842	"	"	13.3	12.9	2.2	0.3	"	"	7093	DB53	FIVd	22.6	17.2	8.5	2.8	"	"
6843	Z	—IIIc	(19.0)	(14.5)	4.0	(0.8)	"	C	7094	CL44	FIV(a)	(12.5)	13.5	3.1	(0.4)	"	A
6845	CIZ	DIII—	(11.5)	(11.6)	2.4	(0.2)	"	D	7095	DC36	HV—	(17.5)	15.6	5.6	(1.1)	"	A
6846	BY51	DVb	15.0	(10.6)	2.5	(0.3)	"	B	7096	Z	EVc	12.0	11.5	1.5	0.2	"	"
6847	CIZ	GII—	(15.0)	16.1	3.4	(0.6)	"	A	7097	CW64	ENb	25.3	18.3	5.0	1.6	"	No4
6848	"	"	(14.1)	17.2	3.8	(0.8)	"	A	7098	Z	HVa	18.6	15.3	3.6	0.8	"	No21
6849	"	"	23.3	12.2	3.9	0.7	"	"	7099	CW66	FVa	19.7	16.5	3.9	0.6	"	No10
6850	"	"	10.5	12.2	2.5	0.3	"	図1257	7100	DC50	E Ia	27.0	(17.0)	4.5	(1.2)	ch	B
6851	"	"	20.9	16.1	3.6	1.1	"	"	7101	BS101	HVb	19.0	17.9	3.2	1.0	ob	図1269
6852	"	"	25.3	(17.4)	4.0	(1.0)	"	B	7102	Z	BVa	13.0	12.3	2.2	0.2	"	"
6853	Z	"	14.4	(11.2)	3.5	(0.2)	"	B	7103	"	EVc	26.5	21.4	3.2	1.2	"	"
6854	CIZ	"	21.9	(16.7)	4.2	(0.8)	"	B	7104	DH61	EVa	13.6	(13.5)	2.6	(0.3)	"	B
6855	DIZ	"	18.0	15.2	3.7	0.6	"	"	7105	Z	—-a	(14.6)	(11.3)	2.7	(0.4)	"	C
6856	Z	HIII—	(13.4)	17.0	2.8	(0.6)	"	A	7106	DA36	FVa	16.3	(12.5)	2.5	(0.4)	"	B
6857	CIZ	HVb	24.5	(17.6)	5.2	(1.4)	"	B	7108	CIZ	DVb	17.1	(9.5)	2.8	(0.4)	ch	B
6858	"	"	(17.7)	(18.5)	3.7	(0.8)	"	D	7109	"	FV—	(20.2)	(17.2)	3.1	(0.6)	ob	D
6859	"	"	(18.7)	(16.5)	5.0	(1.1)	"	D	7110	"	I IIIa	15.8	10.5	3.6	0.4	"	"
6860	"	"	(14.6)	(17.3)	3.0	(0.5)	"	B	7111	"	HVc	19.3	19.5	4.7	1.5	"	未製品
6861	"	"	19.1	(19.2)	2.8	(0.6)	"	C	7112	Z	G IIIa	17.5	11.6	1.9	0.3	"	"
6862	"	"	(15.6)	(13.7)	4.0	(0.6)	"	C(脚部製作時)	7181	"	—IV—	24.3	17.5	3.6	1.5	"	未製品
6863	DIZ	I IIIb	23.4	(17.1)	2.7	(0.9)	"	B	7182	CC46	HV—	(21.5)	20.0	5.6	(2.1)	"	A
6864	CIZ	(H) Vb	12.8	(10.4)	2.1	(0.2)	"	B	7183	CH55	—Vb	20.1	(18.5)	5.7	(1.3)	"	B
6865	"	"	(16.2)	(10.8)	3.0	(0.4)	"	C	7184	CJ65	HVb	21.0	(13.1)	3.0	(0.6)	"	B
6866	"	"	18.1	12.6	5.4	1.0	"	"	7185	CK42	(円基) Vb	(21.4)	13.7	3.2	(1.0)	"	B
6870	"	"	16.6	8.6	2.4	0.3	"	"	7186	CI58	円基Va	24.4	14.6	4.4	1.3	"	"
6871	"	"	(33.6)	17.7	5.0	(1.9)	"	H 図1249	7187	CD63	円基—b	21.4	17.8	5.4	1.8	"	未製品
6872	"	"	(20.2)	(14.5)	3.2	(0.7)	"	C	7188	CJ46	(F)(II)—	(14.8)	(13.1)	3.2	(0.5)	"	D
6873	"	"	24.7	18.2	7.0	2.1	"	図1264	7189	CW47	DNa	21.2	16.1	3.3	0.9	不明	"
6878	CE60	円基Vb	24.5	19.6	9.6	2.9	"	未製品	7190	DF33	(I) IV—	(18.0)	22.8	4.7	(1.9)	ob	A(製作時)
6881	DR56	GVb	17.3	14.4	4.2	0.6	"	No.1	7192	DL40	GVa	16.8	13.6	2.1	0.4	"	"
6882	CIZ	HVb	25.1	(16.4)	4.1	(1.3)	"	B	7193	DP41	—-—	(17.3)	(6.2)	(1.9)	(0.1)	"	E
6883	Z	(G) IIIa	(12.6)	(13.8)	3.1	(0.3)	"	C	7224	CJ52	尖基Vc	21.9	15.4	4.6	1.2	"	"
6884	CL55	D III(a)	(15.1)	(11.6)	3.3	(0.3)	"	D No.6	7225	CK53	—-c	(14.8)	(14.8)	(4.4)	(0.7)	"	F
6885	Z	(E) IV—	(9.3)	14.2	2.1	(0.2)	"	A	7226	CL61	—IVc	25.2	15.8	6.3	2.0	"	未製品
6905	CS65	有基H IVa	26.3	14.8	3.6	1.1	"	No.1 図1248	7230	BA59	(F) IV—	(19.0)	(19.3)	4.2	(0.9)	"	D
6906	CA64	BVb	33.4	28.7	5.6	(2.9)	"	No.2 図1254	7240	CK44	円基V—	(22.1)	22.0	6.6	(3.4)	sh	A
6931	CA51	IV—	(21.5)	14.5	6.0	(1.4)	"	A	7261	CN70	FIV—	17.3	(17.5)	3.0	(0.8)	ob	B(製作時)
6932	DY53	C IIIc	(21.5)	(13.0)	3.5	(0.7)	"	B	7285	CM77	(H) IVd	21.8	21.2	10.0	4.2	"	未製品
6933	CB52	D III—	(19.0)	(11.0)	2.0	(0.4)	"	D	7374	CR88	円基V—	(19.2)	15.8	4.0	(1.0)	"	A
6934	BU59	IVa	16.0	17.0	3.0	0.7	"	"	7375	CU52	HVb	19.4	12.0	2.9	0.5	"	"
6935	CB49	GVb	11.5	(11.5)	2.3	(0.3)	"	B	7377	#47	円基Vc	(19.6)	16.8	5.5	1.6	"	"
6936	CB53	平基III—	(17.0)	(19.1)	3.5	(1.2)	"	A	7379	CQ85	—-b	(20.8)	(16.2)	(2.8)	(0.9)	"	F
6937	CT59	HVc	22.0	23.0	5.5	2.9	"	"	7380	CU48	円基Vc	22.5	(17.3)	3.7	(1.2)	"	B
6938	CC54	—-—	(13.0)	(15.0)	3.6	(0.5)	"	E	7439	CC58	—-b	(12.8)	(11.6)	(1.8)	(0.2)	"	C
6939	CA53	E III—	(19.0)	(20.0)	3.0	(0.7)	不明	D	7440	CA59	(G)(III)—	(13.5)	(13.7)	3.5	(0.6)	"	D

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7441	CX51	円基Vd	17.2	(17.7)	3.7	(1.1)	ob	B
7464	CC60	(円基)Vc	25.0	17.5	5.2	2.2	"	未製品
7465	"	(H)(IV)b	(25.0)	(15.0)	4.5	(1.5)	"	C
7466	"	HVa	15.2	(17.4)	2.5	(0.6)	ch	B
7467	" 62	平基IV-	(14.2)	20.8	5.7	(1.8)	ob	A
7471	CG49	HVc	21.3	(17.8)	4.5	(1.4)	"	B(製作時)
7472	Z	(A)IV-	(13.7)	(12.9)	(2.5)	(0.2)	"	E
7535	CB63	IVd	15.6	16.0	2.8	0.8	"	"
7536	DA52	FVc	20.6	(16.2)	2.5	(0.6)	"	B
7589	DC51	ENVb	18.8	(14.1)	2.7	(0.5)	"	B
7590	C区Z	HIIIa	16.2	11.8	1.7	0.2	"	"
7735	DL59	円基Vc	22.3	(18.0)	3.6	(1.3)	"	B
7736	DO45	GIII-	(14.7)	17.3	4.3	(0.9)	"	A
7737	DP39	ENVb	19.5	18.6	3.2	0.8	"	"
7738	" 50	円基Vc	27.2	20.7	4.0	2.7	ch	"
7739	DU52	CVa	16.6	18.0	3.2	0.6	ob	"
7740	DY41	-IVc	23.8	19.4	6.3	1.8	"	未製品
7741	DH52	円基Vb	18.6	16.3	5.0	1.1	"	"
7742	D143	---	(13.8)	(14.5)	(4.0)	(0.6)	"	E
7743	DL41	---a	(15.7)	(12.4)	(2.8)	(0.5)	"	F
7744	EC41	---	(13.8)	(19.7)	(3.0)	(0.6)	"	E
7745	EG42	IVc	18.2	17.8	5.7	1.5	"	"
7746	OP51	---	(18.4)	(12.0)	(3.2)	(0.6)	"	G
7756	CH48	FVa	20.1	20.2	2.4	0.7	"	図1252
7757	CE62	EIII(a)	(21.8)	15.8	3.2	(0.6)	"	A
7758	" 61	EVIa	23.2	13.5	2.9	0.5	"	E
7759	CH91	HVa	14.2	(14.6)	3.7	(0.5)	"	B
7760	BM60	HIIIa	19.3	13.5	2.7	0.6	ch	"
7761	CM60	(D)V-	(13.5)	13.0	2.8	(0.4)	ob	A
7762	BW60	HVb	13.2	11.3	3.3	0.3	"	"
7763	Z	EIIIb	17.0	(13.0)	2.3	(0.4)	"	B
7764	"	FIE	20.8	15.8	3.6	0.8	"	"
7765	"	FVc	19.6	(20.5)	2.8	(0.8)	"	B(製作時)
7766	"	HIIIe	18.7	26.7	8.2	2.8	"	未製品
7767	BX59	ENVc	18.2	13.0	3.9	0.6	"	"
7768	BY54	HIII d	15.0	14.0	2.1	0.3	"	"
7769	BG49	GNc	14.3	14.0	3.2	0.5	"	"
7770	CS51	(F)Ve	14.5	(15.8)	3.0	(0.5)	"	B
7771	BR50	ENVb	18.8	(14.0)	2.9	(0.5)	"	B
7772	Z	ENVb	14.0	10.5	1.8	0.2	"	"
7773	"	AIIIa	15.0	(10.2)	2.7	(0.2)	"	B
7774	"	FVc	14.4	12.8	3.5	0.4	"	"
7775	"	HIIIa	20.8	14.2	3.5	0.6	"	"
7776	DI42	平基Id	15.5	11.5	4.0	0.6	"	"
7777	Z	HIIIa	16.0	13.2	2.3	0.4	"	"
7778	"	IVb	14.5	16.3	5.3	0.9	"	"
7779	CG59	"	20.2	19.8	6.2	2.1	"	未製品
7780	CF93	EIIIa	16.2	11.2	2.8	0.3	"	"
7781	CG48	GIIIa	18.0	13.5	2.5	0.4	"	"
7782	Z	平基IIIa	14.2	10.0	2.7	0.3	"	"
7783	"	円基Vd	24.3	19.3	8.0	3.2	"	"
7784	CE53	円基V-	(19.8)	18.5	5.2	(2.0)	"	A(旧4474)

尖頭状石器

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
257	D134	円基Vb	43.4	20.0	10.3	8.1	ch	図1284
1853	CO40	円基Vb	42.3	25.9	8.8	9.8	不明	図1281
1895	CS41	---b	(19.5)	(21.0)	(7.6)	(2.2)	ob	F
3895	DS40	(平基)VC	52.3	21.8	12.3	16.0	ch	図1283
4381	CM52	円基Vc	40.9	28.8	8.9	6.7	ob	図1282
4626	DA62	-IVc	29.8	18.9	8.0	4.0	"	未製品
4756	DW58	円基V-	(30.2)	17.4	6.5	(3.2)	"	A
6325	ET59	---c	(22.8)	(19.0)	(9.2)	(3.3)	"	F No.20
6371	CR38	(円基)Vc	35.8	24.0	10.8	7.1	"	未製品
7532	CY65	---b	(15.8)	(22.3)	(6.2)	(0.6)	不明	F(先端のみ)
7785	Z	---d	(32.3)	23.8	8.2	(6.3)	ob	F
7786	DJ56	円基V-	(28.7)	25.0	9.8	(6.4)	"	A

抉入刺突具

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
2027	DP58	平基IVb	27.8	19.7	9.8	3.5	ob	"
2650	Z	I Vc	21.2	14.0	3.2	1.0	"	"

石匙

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
18	DQ54	CIVb	46.6	34.6	5.1	6.7	Ry	"
29	DJ58	BIIIb	40.0	57.8	7.5	18	"	"
32	DT52	BIIIa	25.3	49.7	8.2	8	ob	"
43	DR51	BIIIb	56.0	71.0	8.5	30	ss	"
44	EB52	AIIIb	47.9	19.7	5.3	4.4	ch	"
51	DN51	CIIa	34.3	39.6	6.5	8.2	不明	"
64	DI60	BIIIa	(38.7)	(61.0)	(8.1)	(16)	Ry	刃部両端欠
66	"	"	44.2	49.3	9.1	15	"	"
78	"58	BIIa	52.7	53.7	13.8	30	ch	"
91	DK56	BIIIb	28.8	39.3	5.9	5	ch	"
92	"	---	(22.4)	(29.2)	(5.0)	(4.3)	sh	先端部のみ
94	DE59	BIIIa	29.5	47.2	8.1	12	Ry	"
99	DH54	AII(a+b)	(52.1)	(30.1)	10.3	(15)	不明	先端欠
107	DE58	BIIIb	26.0	53.4	5.3	6.8	An	"
111	DG52	BIIa	26.6	29.4	7.0	5.1	ch	"
124	DL51	BIIa	30.1	38.9	7.0	6.8	sh	"
178	DU56	BIIIc	33.2	43.0	8.6	7.1	Ry	"
184	DO53	BIIIa	36.0	50.7	7.6	10	sh	"
190	DS58	"	36.5	51.8	11.9	16	Ry	"
215	DQ57	CIIIa	37.0	36.3	10.6	12	ch	"
222	EE40	"	46.8	41.2	8.3	10.1	sh	"
239	CM49	---III-	(22.3)	(18.2)	(4.3)	(1.9)	sh	刃部欠
241	CJ43	BIIb	31.2	43.9	10.2	11	ob	"
242	DF39	BIIIa	30.1	43.6	7.1	7.5	Ry	"
248	DI56	"	25.8	33.3	6.9	5.2	ch	"
273	EJ29	"	22.1	24.2	6.8	3.1	sh	図1295
295	CA55	CIIIa	45.3	52.1	5.8	10.2	不明	"
298	BV60	BIIc	37.1	53.5	6.2	5.4	Ry	"
411	BY56	AIIb	47.5	30.6	6.5	11.1	ob	"
418	CF62	CIIa	59.0	49.5	12.3	31	"	"
448	BT60	BIIa	29.0	41.5	8.5	9.1	ch	"
459	CT57	BIIIc	24.5	22.5	7.0	3.2	ob	"
469	BU57	BIIIa	27.4	45.1	5.5	5.8	sh	"
490	BV53	AIIa	40.6	40.4	7.6	11.3	ch	図1286
496	BW53	AIIa	42.0	20.6	5.5	4.2	sh	"
511	CF53	BIIa	30.9	33.6	6.5	5.6	ob	"
525	BV57	BIIb	40.5	49.4	8.5	14.3	Ry	"
526	BU60	BIIIa	37.5	46.0	7.8	10.5	ss	"
538	BX59	BIIa	34.2	56.3	9.6	10	An	"
557	" 60	BIIIc	27.6	44.5	6.6	4.6	?	"
560	CP59	BIII-	(23.2)	(29.8)	4.8	(3.1)	Ry	刃部先端欠
567	BX59	BIIIa	40.9	52.6	7.7	15.5	?	"
575	CD56	BIIa	53.0	53.2	16.5	44	An	"
598	CF54	BIII-	(25.5)	(34.8)	(6.0)	(2.5)	?	刃部大半欠
603	CD57	BIIa	14.5	20.5	6.3	1.4	ob	"
606	BX53	BIIa	(43.1)	(48.9)	(8.4)	(17.2)	Ry	半欠
607	" 54	"	(28.6)	(40.5)	4.6	(4.4)	"	刃部先端欠
609	DM49	BIIIa	35.0	45.7	12.3	15	ch	"
647	DG48	CIIIb	47.6	23.5	5.2	4.4	Ry	"
662	CE50	---	(9.8)	(22.1)	(5.2)	(0.9)	"	刃部先端のみ
674	CD57	CIIIb	28.0	(43.5)	6.3	(5.7)	sh	先端欠(刃部)
677	"	"	(57.6)	32.0	8.6	(14.4)	Ry	先端欠
709	CE52	CIIb	45.0	50.8	7.8	21	ss?	"
733	DN48	BIII(a)	(30.5)	(46.2)	7.3	(7.5)	sh	刃部先端欠
736	DM47	BIIIa	21.3	30.2	7.5	3.9	"	"
738	DK46	"	36.2	(41.2)	9.1	(9.3)	"	半欠
756	DO47	CIIIb	37.8	55.0	8.5	16.2	Ry	"
761	"	BIIIb	26.6	32.9	8.5	4.6	ob	図1293 両刃
774	DP47	BIIIb	30.2	48.0	6.0	6.2	Ry	"
777	"	---II-	(18.4)	(37.8)	(10.8)	(7.4)	"	つまみ部のみ
781	" 48	BIIa	52.0	(66.3)	9.3	(28)	sh	図1292 刃部先端欠
794	DM45	CIIa	(67.5)	81.2	7.3	(19.5)	Ry	刃部欠
797	DJ45	BIVa	22.5	35.8	6.5	3.5	ob	"
810	CA58	CIIIa	40.0	37.0	6.8	8.5	"	"
818	DF48	BIIIa	(21.9)	(22.0)	3.8	(2.1)	不明	刃部半欠
831	DG47	---III-	(18.1)	(21.5)	(5.5)	(1.8)	ob	つまみ部のみ

登録No	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
855	DI46	BIIIa	49.0	65.0	8.2	13.5	sh		2504	CB60	CIIc	48.0	51.8	7.2	10	cs	
866	CX46	BIII-	(24.7)	(30.2)	(5.6)	(3.0)	Ry	刃部半欠	2527	CD55	BIIa	52.0	79.2	10.6	26	Ry	
881	CT47	AII-	(45.5)	(27.1)	(7.8)	(9.1)	"	刃部先端半欠	2532	CP52	CIIb	37.2	49.0	7.5	20	"	
898	CS49	BVa	26.8	26.7	5.5	2.7	ch		2548	CF50	BIIIa	31.0	44.2	7.5	10	ch	
923	CU45	BIa	51.0	69.0	13.5	40.0	"		2590	CA54	C Ib	41.4	49.4	9.6	15	Ry	
927	CK49	AI(b+a)	52.7	33.3	8.3	7.9	sh		2596	CF50	BIIIb	23.7	49.6	3.0	3.7	"	
940	"	CIIIb	(45.0)	(40.3)	6.5	(6.2)	"	先端部欠	2620	CA52	BIVb	19.0	(24.3)	3.2	(1.1)	sh	図1294 先端欠
948	CU45	BIIIa	37.5	(39.2)	(5.5)	(6.3)	"	刃端部欠	2669	BW55	BIa	57.0	59.8	14.2	40	"	図1289
953	CK48	AIII(a)	(24.5)	(26.2)	6.4	(3.4)	"	半欠(刃部)	2678	CH55	BIIc	52.0	74.0	8.0	22	Ry	
956	CD49	BIIIb	27.6	30.8	6.9	3.8	ob		2739	CC58	BIIIb	21.6	56.5	6.3	6.3	"	
980	CL49	BIIIa	28.5	37.6	6.7	5.6	ch		2756	BL58	CIIb	50.5	60.2	5.3	7.2	"	
1061	CS54	"	29.4	33.0	5.7	3.8	不明		2757	BU57	BIIb	59.0	73.0	11.6	25	"	刃部半欠? 磨減
1152	CN61	"	33.0	47.0	6.5	7.8	sh		2762	BT55	AIIa	58.2	17.0	5.5	6.3	"	
1191	CA57	BIII-	(27.2)	(22.5)	(2.7)	(1.4)	"	刃部両端欠	2787	BU54	BIa	49.0	(59.0)	12.5	(30)	"	先端欠
1193	DC64	BIIIa	(27.0)	49.2	6.1	(4.7)	"	つまみ部欠	2859	CB55	BIVa	29.4	40.6	8.0	5.8	ss?	
1194	DR53	CIII(b)	(35.2)	32.4	5.5	(3.7)	"	刃部先端欠	2883	CA54	BIIIa	29.2	37.0	5.4	6.1	?	
1195	EQ53	BIIIa	(36.1)	41.0	4.7	6.7	Ry		2896	CF57	CIIIb	34.2	34.1	9.8	9	ch	両刃
1196	DA50	BVa	24.5	29.6	4.5	2.8	ob		2901	" 52	BIIIa	26.5	35.7	5.2	4.1	"	
1232	DT59	BIIa	42.3	(53.1)	11.0	(21.0)	不明	刃部先端欠	2912	CE50	---	63.0	25.7	6.0	9.4	Ry	つまみ2つあり
1233	DE63	BIa	44.1	49.7	8.1	15.2	sh		2914	" 52	BIa	45.0	(65.1)	8.6	(20)	"	図1300 刃部先端欠
1234	DW60	BVa	26.3	38.7	5.2	5.3	Ry		2932	DO53	"	24.8	54.0	6.8	7.1	sh	
1235	DJ57	CIIa	55.0	38.5	7.9	12.0	sh		2959	DC36	AIII-	(33.8)	(32.0)	5.2	(6.2)	"	刃部欠
1236	DT60	BIIa	31.4	40.4	4.8	5.4	sh		2977	CX50	BIIIa	21.6	31.2	5.6	2.6	ch	
1237	DQ60	BIIIa	(33.4)	(38.5)	(8.4)	(7.0)	Ry	半欠	2979	DS34	CIIIa	37.2	33.2	6.0	4.5	sh	
1239	EQ60	BIIIb	28.1	44.9	6.1	5.9	sh		2981	DD35	BIIIb	22.9	36.1	7.1	4.5	ch	
1240	ES59	BIIIa	23.7	34.8	4.3	(2.6)	ob	つまみ一部欠 両刃	2990	CB61	BIa	46.7	(47.5)	3.1	(29)	Ry	先端欠
1355	CA59	BIIc	32.5	49.8	9.6	15.0	sh		2998	CA52	BIIIa	30.8	33.7	7.5	6.9	sh	
1513	BV60	BIIIa	(36.0)	(37.3)	8.0	(7.4)	ch	先端欠	3015	CL66	"	(28.3)	(24.4)	7.0	(3.8)	ch	刃部半欠
1579	CA95	CIIIa	63.4	41.0	10.3	14.0	ob	図1299	3019	CM71	"	(22.4)	26.4	5.0	(3.6)	ss	先端欠
1754	CG54	BIa	35.8	40.0	8.5	12.0	sh		3032	" 86	CIIIa	39.2	60.0	9.5	14	An	
1866	CO54	CIII-	31.2	34.4	5.2	3.8	ob	未製品	3034	CO87	(B) I -	(45.2)	(65.8)	14.3	(28)	Ry	刃部欠
1908	CS53	BI(b)	29.2	(29.3)	5.3	(6.2)	ch	半欠	3036	CM 88	BIIIc	30.8	28.9	8.3	5.0	ch	両刃
1939	CT53	BVa	16.0	23.0	4.7	1.2	ob		3044	CN89	"	30.5	35.5	7.0	6.0	"	
2006	DJ55	BII(a)	70.8	(72.2)	11.9	(39.0)	不明	刃部両端欠	3052	CK91	CIIb	50.1	55.3	6.5	12.5	Ry	
2009	DG62	BIIIa	35.8	46.9	9.4	12.0	ch		3076	" 90	BIb	29	37.4	6.7	6.6	"	
2017	CQ54	CIa	52.3	55.5	11.5	26.0	不明		3087	CI91	BIIIb	34.0	(54.0)	7.0	(7.6)	"	先端小欠
2038	DJ52	BVa	14.7	20.6	2.8	0.8	ob		3149	CO89	AIIIb	87.2	24.0	9.6	15	sh	
2068	DB54	BII(b)	48.0	(48.3)	7.8	(13.3)	sh	刃端部欠	3150	CL90	CIIIa	51.3	48.8	9.2	25	Ry	
2089	"	CIIIa	31.0	36.8	5.8	4.7	"		3175	CP87	CIa	35.9	34.5	9.5	9.2	sh	
2095	DC56	BIII(b)	31.0	(51.6)	10.0	(11.9)	"	刃端部欠	3177	CQ85	AII(b+a)	(65.6)	29.2	6.7	(11.0)	"	先端部欠
2107	DE51	CIIIb	36.5	44.8	6.5	4.6	ob		3193	" 87	BIIa	(55.7)	(34.9)	9.7	(16.0)	Ry	半欠
2117	" 50	B---	(21.0)	(23.6)	3.2	(3.0)	ch	刃部半欠 つまみ部ナシ	3321	DQ42	BIIIa	41.2	42.6	12.6	17.0	ch	
2125	DH55	BIIIa	32.5	52.6	8.4	11.0	sh		3337	DB40	"	(20.3)	(39.5)	(38.8)	(7.2)	不明	刃部半欠
2150	DE55	BIIIb	20.0	30.0	4.1	1.6	ob		3339	DD41	"	29.5	30.4	6.2	5.7	ch	図1298
2166	DG56	BI(a)	(35.6)	(63.0)	6.5	(20)	Ry	刃端部半欠	3345	CY38	"	31.5	35.2	6.2	5.9	不明	図1296
2180	DK63	BIIa	27.5	47.0	7.5	8.8	"		3349	" 39	"	29.5	37.4	5.5	(5.2)	ch	刃部一部欠
2223	DR52	BVb	17.9	18.5	3.0	0.7	ob	図1291	3370	DB42	BII-	(45.8)	(49.0)	(8.9)	(15.5)	sh	刃部半欠
2250	BU60	CIIIb	36.5	46.5	3.8	4.8	Ry		3387	DH40	AI-	(48.5)	34.8	6.8	(10)	"	刃部欠損
2276	BV56	CIIIc	37.3	25.2	6.5	5.9	ch		3448	CC44	AI(a+b)	61.7	20.4	5.5	7.5	"	図1288
2303	BQ57	CIIa	70.0	65.0	10.6	(20.0)	sh	背 中央部欠	3476	CM 45	BIa	60.1	68.3	13.2	40	Ry	
2343	BO58	BIII(a)	31.6	(26.5)	4.3	(3.6)	Ry	半欠	3479	CO43	AII-	62.8	(44.3)	14.2	(31)	sh	刃部両端欠
2348	" 57	AIIa	49.5	29.0	7.0	9.4	sh		3493	" 48	BIIIc	25.7	(39.8)	5.8	(5.8)	"	刃部先端欠 両刃
2378	BV52	AIII(b+b)	49.0	17.9	5.6	4.3	"		3495	CR43	BIIIa	30.2	50.3	4.8	5.9	"	
2381	BR55	CIII(a)	(70.2)	(64.0)	11.5	(30.0)	Ry	刃部先端欠	3569	DA42	BIIa	39.0	49.5	9.5	11.4	"	
2385	BW51	A Ib	60.3	28.0	11.3	(12.9)	ob	刃端部欠	3767	CM44	BIIIa	37.3	40.8	5.4	7	"	
2395	BU51	AIIIa	48.3	22.1	8.4	7.3	Ry		3805	CL48	BIIa	38.7	52.8	9.5	15	Ry	
2405	BR53	B-(b)	(35.2)	(19.2)	(5.5)	(3.8)	sh	半欠	3816	CT41	BIb	31.2	39.5	6.4	9	"	
2413	BU50	AI(a+a)	64.7	53.2	12.4	(40.0)	ob	左刃部 一部欠	3820	CV41	BIa	33.7	59.5	9.1	15	sh	
2422	BT49	BIb	39.6	57.6	9.2	15.0	Ry		3823	CW42	BIIa	22.1	36.2	9.5	5.8	ch	両刃
2423	" 50	A Ia	(42.8)	32.4	4.5	(6.9)	sh	刃部先端欠	3838	DI37	"	26.5	46.5	6.6	5.5	An	
2425	BS49	BIIIa	57.0	83.7	9.8	26	Ry		3856	DX42	BIIIa	24.1	45.2	5.8	5.0	sh	
2427	"	AIII(b+a)	52.0	30.8	12.8	19	sh		3859	" 59	BIIIa	(36.5)	(42.5)	(5.6)	(8)	Ry	刃部半欠
2431	BU49	AIIa	60.6	44.2	7.4	6.6	ob		3941	CY39	BI-	(39.8)	(46.1)	(12.6)	(18)	"	"
2467	BN62	BIII(a)	(26.4)	(22.6)	8.2	(5.5)	sh	半欠・刃部先端欠	4004	CQ48	AIa	63.0	31.0	(5.6)	(9.7)	sh	裏面剝離
2469	BP60	---	(17.3)	(25.6)	(6.8)	(2.9)	"	刃端部のみ	4043	CO48	BIIb	30.5	59.1	7.1	12.0	"	
2488	CA60	B-(a)	(31.7)	(39.5)	10.0	(20.0)	"	半欠	4058	" 47	BIIIb	26.2	(25.9)	9.0	(5.1)	ch	刃部半欠
2496	CD60	BIIb	(32.1)	34.9	6.5	(4.1)	ob	刃部先端欠	4061	"	BIII-	(29.7)	(32.2)	(6.2)	(3.9)	不明	刃部半欠
2500	CA59	AI(b+a)	(63.4)	(28.9)	7.6	(15)	sh	先端欠 図1287	4067	CJ49	BIIb	28.9	38.6	8.7	8.8	Ry	
2501	BU49	AIa	50.4	30.0	8.5	13	"		4068	CL46	BIa	55.3	107.1	7.6	40	"	
2503	CB57	BIIIa	27.0	38.6	7.5	6.9	ch		4072	CY56	CI(b+b)	(36.4)	(31.0)	6.0	(6.3)	sh	刃部先端欠

登録No	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
4100	CH47	BIIIa	29.6	32.8	7.9	5.2	Ry	
4120	CC49	AII (b+c)	43.8	29.0	7.5	9	ob	
4123	"	CIa	56.1	45.0	15	27	Ry	
4134	CG48	BIIIc	38.0	42.2	7.6	8.9	sh	
4136	"	AII-	(22.4)	(23.5)	(8.3)	(4.9)	ch	つまみ部残
4147	CO45	BIa	25.9	52.0	7.0	8.7	sh	図1297
4186	CC48	"	24.7	49.8	8.6	8.8	ch	
4191	CB47	BII (a)	34.5	(37.6)	5.5	(7.3)	Ry	先端欠
4213	DC48	BIII (a)	(31.2)	(39.0)	5.4	(5.9)	不明	刃部先端欠
4279	CE49	CIIa	51.3	65.4	10.4	2.0	Ry	
4318	CD55	AIII (b)	33.2	(21.8)	5.0	(3.0)	ob	刃部半欠
4414	CJ90	B-(a)	(26.8)	(15.5)	(5.4)	(2.0)	ch	半欠・刃部先端欠
4422	CF55	---	(20.7)	(18.2)	(6.5)	(2.3)	不明	刃部先端のみ
4434	" 59	BIIIa	(27.4)	(31.2)	(5.0)	(4.5)	Ry	刃部半欠
4589	BT56	(B)I-	(34.9)	(33.0)	7.4	(7.2)	Ry	刃部半欠
4710	DD52	-I-	(44.0)	(50.0)	(9.8)	(22)	不明	つまみ部のみ大型粗製
4735	DP43	BIVa	26.2	29.8	5.6	2.9	Ry	
4768	DIXZ	-I-	(35.0)	(38.3)	(9.1)	(10)	"	刃部欠損
4769	"	BIa	45.5	60.3	10.5	30	"	
4805	FT52	A I (b+c)	(115.0)	53.8	13.2	(91)	不明	大型粗製
4841	ER59-60	BIb	48.6	47.5	8.6	15	Ry	
4865	CIXZ	CIb	34.8	40.5	7.5	9	"	
4930	DA30	-II-	(16.2)	(17.2)	(8.2)	(2.3)	不明	つまみのみ
4955	DD59	-III-	(17.6)	(27.6)	5.4	(0.9)	sh	つまみ部のみ
4968	DF58	-I-	(49.6)	47.0	9.6	(22)	Ry	刃部欠
4992	DI63	A Ia	44.6	49.0	8.0	(19)	"	刃部中央欠
5671	DN62	-III-	(28.3)	(29.8)	4.7	(3.0)	不明	半欠・未製品
5675	DO56	BIIa	(40.0)	(48.2)	9.5	(16)	sh	刃部半欠
5700	DX52	(B)-a	(17.2)	(42.7)	8.1	(5.5)	ch	つまみ部欠
5701	" 60	BIa	30.2	36.1	9.8	(8.1)	"	刃部先端欠
5702	" 54	"	30.3	37.3	7.9	(8.3)	ss	刃部先端欠
5713	EB58	BIIIb	37.3	40.6	9.7	11.2	Ry	
5717	EC52	-I-	(67.0)	(57.0)	(9.0)	(35)	不明	つまみ部のみ 大型粗製
5720	ED57	BIIIa	26.2	(33.4)	5.4	(4.1)	ob	刃部欠
5773	ET54	"	36.0	63.2	7.0	12.5	sh	
5835	CJ59	CIIa	63.4	47.0	9.8	21	ob	
5849	CK52	CIIIb	55.2	41.3	6.6	12	Ry	
5877	CM50	B--	37.8	(31.4)	7.0	(10)	"	半欠
5885	" 85	BIIIa	27	(27.5)	5.0	3.3	ch	両刃
5895	CN54	BIII (a)	(21.3)	(20.7)	(3.7)	(1.7)	"	半欠
5896	" 57	-I (a)	(34.4)	(42.8)	11.2	(16)	Ry	刃部半欠
5901	" 59	BIIc	51.7	67.0	8.6	26	不明	
5924	CP50	BIIIb	34.2	(56.3)	8.5	(12)	sh	刃部先端欠
5973	CT50	-II-	21.2	32.8	8.6	(6.2)	ch	"
5977	" 56	BIIIa	37.5	(51.3)	7.3	(15)	Ry	"
6007	DE60	BIIc	32.0	56.5	7.3	10	"	
6191	CI46	BIa	31.2	(39.7)	9.1	(13)	"	刃部先端欠
6259	CK48	---	(14.0)	(19.2)	(5.8)	(18)	sh	刃部先端のみ
6283	DR53	---	(22.4)	(21.7)	(7.2)	(3.0)	ch	刃部先端のみ 両刃
6297	DT62	AII-	45.5	31.0	8.4	11	sh	未製品
6316	BW50	-II-	(27.7)	(41.6)	11.5	(6.2)	不明	刃部欠
6338	CC54	C(III)(b)	(27.5)	(25.0)	(26.4)	(3.3)	sh	刃部先端欠
6348	CU51	BIIIc	38.5	60.2	7.6	10	Ry	
6355	CP81	BIa	33.9	(49.8)	9.6	(15)	sh	刃部先端欠
6441	BY54	BIIIb	21.8	47.0	2.9	4.4	sh	未製品か
6471	BW57	BIa	34.9	42.8	7.6	8.1	Ry	
6475	" 61	CIc	60.9	57.2	10.6	25	ch	図1290
6548	DE56	BIIIa	43.0	62.1	11.2	22	Ry	
6636	DK54	BI-	(39.8)	(40.3)	(8.2)	(9.2)	不明	刃部大半欠
6648	" 57	BIa	(31.2)	(54.3)	(10.4)	(15)	Ry	つまみ部欠
6649	" 58	-I-	(29.4)	(31.4)	(9.7)	(8.5)	ch	つまみ部のみ
6672	DL55	BI-	(39.0)	(33.0)	10.2	(10)	"	刃部両端欠
6682	DM43	-I-	(31.4)	(24.6)	(8.4)	(6.9)	"	刃部大半欠
6733	DE56	---	(27.7)	(17.7)	(5.3)	(3.1)	Ry	刃部先端のみ
6763	DG55	CIb	51.5	40.0	8.5	11	"	
6793	DJ50	BIb	(31.0)	47.6	11.1	(15)	不明	つまみ一部欠
6868	DIXZ	BIII-	(31.8)	(35.5)	(5.5)	(4.2)	sh	刃部半欠
6869	Z	BIVa	17.6	27.9	3.3	1.4	ob	両刃
6876	CIXZ	---	(24.3)	(22.0)	(8.2)	(3.2)	不明	刃部先端のみ
6880	Z	BIa	24.8	50.3	6.7	6.5	Ry	

登録No	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
6881	DP59	BIIIa	29.4	41.4	7.4	10	ch	
6973	CC51	AIIIb	52.5	24.5	7.6	7.9	Ry	
7107	DE53	CIa	40.0	(47.5)	8.0	(10)	sh	先端一部欠
7113	DIXZ	BIIc	30.0	47.5	6.0	6.7	"	
7114	BO57	-II-	(45.0)	(32.1)	(6.8)	(6.3)	ob	刃部欠損
7115	BU48	BIa	56.5	59.4	11.0	30	Ry	
7123	DM57	BIIIa	21.7	24.5	4.3	1.7	ob	
7129	CR53	BIIIb	(21.0)	30.8	7.7	(4.9)	ch	つまみ部上端欠
7130	Z	BIIa	30.1	47.2	7.5	10	sh	
7131	CB47	CIb	37.0	61.2	9.8	17.3	ob	
7137	CJ59	CIa	(61.3)	55.0	8.6	(26)	Ry	刃部欠
7141	CY65	BIIIa	(31.5)	(18.6)	(7.2)	(4.9)	sh	刃部両端欠
7142	CJ49	CIIIa	49.8)	51.2	10.8	22	"	
7143	CA50	BIIIa	50.5	58.4	8.4	29	不明	
7144	DM59	BIIIa	41.4	82.4	10.6	40	Ry	
7145	Z	CIIa	38.6	35.5	8.3	6.6	不明	
7146	CY65	BIb	24.5	44.6	7.2	8.5	ch	
7147	DIXZ	CIIIa	39.4	42.5	7.5	9.2	"	両刃
7148	"	BIIIb	34.6	41.2	7.5	8.2	"	
7149	EB44	"	23.8	41.4	4.6	3.8	不明	
7234	CI46	A Ia	35.0	28.6	7.8	6.7	ob	
7385	CT <sup>78</sup> <sub>80</sub>	C(II)a	(44.0)	(35.0)	9.6	(7.9)	ch	つまみ刃部一部欠
7592	DC50	BIIIa	(81.0)	(81.0)	10.4	(6.2)	不明	刃部大半欠 大型粗製
7643	DF47	CIIIa	(43.5)	(33.2)	9.1	(11.5)	sh	先端欠
7719	DJ55	BIIIa	29.3	60.0	8.2	13.4	ch	
7720	DL54	"	30.0	42.1	5.7	5.7	sh	
7721	" 57	BIIIb	32.8	28.6	8.2	6.7	ob	
7727	DR42	-II-	(35.2)	(25.5)	10.1	(6.1)	"	つまみのみ
7788	Z	BIIIa	47.8	75.0	8.7	25.0	Ry	
7789	"	CIIIc	37.2	34.3	9.6	8.0	ch	

スクレイパー

登録No	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
12	CN60	CIa	40.5	38.9	10.4	15	Ry	
47	EF55	D(I+I)a	40.0	39.5	8.5	20	ch	
74	DJ57	AII d	16.0	23.1	5.5	2.3	ob	
98	DI56	(C+A)IIa	43.2	57.3	10.5	23	Ry	
110	DM62	CII d	25.7	27.5	5.4	3.3	ob	
206	DI55	AIIa	13.8	14.3	3.7	0.9	"	
208	DG62	BIIa	26.0	20.3	5.4	2.4	"	
214	DF60	CIa	16.3	29.0	4.8	3.5	ch	
244	DA39	A Ia	26.6	39.0	9.6	11.0	sh	
440	BT56	BIIa	39.8	64.3	9.5	31	Ry	
466	BU60	"	23.3	18.9	6.2	2.4	ob	
475	BV52	DIa	83.5	42.0	14.2	20	"	図1314
534	BA50	(C+B)Ia	48.3	47.6	8.5	18	"	
550	CD59	BIIa	35.6	41.2	9.8	20	Ry	
562	CC58	(BI+CII)a	58.5	53.4	17.3	42	ob	
590	DE49	AIIa	25.5	11.7	5.7	1.5	ch	
614	Z	CII d	13.2	23.5	5.2	1.4	ob	
617	CB58	BIa	50.7	18.5	10.3	13.6	Ry	
619	CF54	A Ia	49.5	54.8	6.7	19.7	ob	
626	CE52	BIIa	30.4	20.9	4.7	2.2	"	
669	" 50	DIa	39.9	51.8	9.8	22	Qd	
721	DL47	CIa	49.6	62.6	7.5	25	An	
775	DP48	BIa	45.8	52.3	11.0	29	sh	
784	DO48	(D+B)IIa	32.8	18.0	6.2	2.6	ob	
791	DN47	BIC	48.3	51.0	18.1	39	"	
897	CU47	CIIc	49.8	32.0	8.9	16	"	図1311
921	CS49	BIIa	28.6	25.5	8.5	6.8	ch	
929	CK49	CIa	44.8	34.0	10.5	15	不明	
1004	Z	CIIb	19.0	14.4	4.1	0.9	ob	石鏃?
1033	CK55	(BII+CII)c	37.4	18.0	9.5	5.4	"	
1108	CR62	A Ia	38.7	29.5	13.0	13.1	"	
1127	CT58	CIa	12.0	22.5	4.3	1.0	"	
1151	CP62	(B+C)Ia	28.2	66.6	8.5	18	ch	
1246	DK50	(C+C+B)Ia	60.0	80.7	11.5	36	sh	
1460	DP50	BII d	40.8	65.7	14.0	40	不明	
1461	BY58	(B+C)Ia	(37.0)	(28.5)	7.8	(9.0)	ss?	半欠

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1470	BY60	CIIa	27.3	27.5	10.5	6.8	ob		3092	CD95	(C+C) Ia	59.1	29.0	8.9	18.7	Ry	
1472	# 61	"	43.6	22.0	6.5	6.5	"	図1313	3109	BT101	AIIa	(39.4)	38.0	10.5	(18)	sh	少欠
1476	BX58	CIIb	14.2	21.2	7.0	1.8	"		3118	CA95	(B+C) Ia	42.5	29.0	6.2	6.5	"	
1478	# 59	A Ia	13.6	21.5	6.1	2.1	ss?		3185	CN81	AIIa	15.2	15.8	6.5	1.7	ch	
1482	# 60	(B+B) Ia	21.6	16.6	6.2	2.0	ob		3188	CO83	CIa	22.8	25.5	9.3	3.2	"	
1503	BO58	B Ia	22.4	40.0	26.6	6.3	sh		3267	CS66	C Ib	43.3	30.1	10.8	12.5	"	
1520	CA57	CIIa	18.6	23.6	6.8	2.1	ob		3281	CG53	(DII+CI)a	43.2	42.0	11.2	26	"	
1522	"	B Ia	32.0	45.8	12.3	(12.0)	"	刃端欠	3292	"	A Ia	28.9	15.5	4.0	2.0	ob	
1530	CA61	C Ia	42.6	51.2	13.2	32.5	Ry		3297	# 52	C Ia	18.3	15.7	5.6	1.3	"	ピエスの転用?
1532	CB60	DII d	13.7	27.8	7.2	2.5	ob		3362	CH52	(C+B) Ia	24.8	24.6	8.7	3.4	"	
1534	CB61	CIIb	36.0	17.0	6.2	5.0	"		3392	# 53	A Ia	14.0	16.2	4.3	0.9	"	
1537	BU57	B Ia	45.4	32.8	11.6	12.1	"		3398	DQ42	B( I+II) a	28.7	33.3	6.6	2.0	不明	
1539	BY50	A Ia	33.5	33.0	15.0	12.5	"		3446	BY45	(C+B+C) Ia	31.2	55.0	11.4	24	"	
1566	BS50	B Ib	40.0	19.8	6.6	4.6	ch		3472	CK46	(B+D) Ia	57.2	33.9	7.4	11.9	Ry	
1568	CA96	C Ia	39.4	23.8	8.7	4.2	sh		3487	CN49	B Ia	29.0	44.0	11.0	12	ch	
1583	CB56	CIIa	22.3	47.0	6.7	9.4	Ry		3576	DA43	C Ia	(29.5)	47.6	10.4	(13)	Ry	半欠
1590	# 58	C Id	34.0	46.8	9.5	20	"		3606	Z	B( I+II) a	19.8	11.7	4.3	0.8	ob	
1618	CE53	B Ib	23.0	(41.9)	8.3	( 5.4)	sh	刃端欠	3824	CW42	A Ia	26.3	32.0	10.5	8.1	"	
1661	CG47	BIIa	21.8	13.8	3.2	0.9	ob		3879	EH45	C Ia	47.9	78.0	7.3	28.9	Ry	
1692	CN57	C Ib	(41.3)	44.9	7.2	(15)	sh	刃端欠	4029	CL47	BIIa	17.3	(47.3)	8.7	( 7.0)	ch	刃端欠
1696	# 68	(D+B) Ia	94.3	51.8	15.2	80	An		4065	CI48	B Ia	(30.3)	53.6	12.5	(15.5)	ms	刃端欠
1717	CC57	AIIa	17.7	18.0	8.2	2.3	ob		4074	"	A Ia	46.3	36.2	13.4	19.5	ch	
1726	CL41	C Ia	23.8	25.4	7.2	4.3	"	ピエスの転用	4081	CO47	B Ia	46.8	64.0	13.5	44	Ry	
1736	# 57	AIIa	32.2	17.1	6.6	6.6	"		4084	CH47	(BII+CI) a	56.5	48.0	9.0	28	"	図1308
1737	# 64	B Id	51.5	29.5	14.7	20	ss?		4103	CI49	BIIa	70.1	31.7	7.2	18.4	不明	
1747	CG50	BIIc	34.4	27.3	11.8	10.4	ob		4109	CN47	B Ia	35.6	25.5	6.2	6.2	不明	
1761	# 61	B Ia	22.3	(17.6)	8.7	( 3.9)	"	刃端欠	4130	CG47	B Ia	35.3	30.7	9.5	11.3	sh	
1762	"	(C+B) Ia	29.5	46.0	7.0	9	Ry		4148	CO45	C( I+II) d	30.3	17.6	9.4	2.9	ch	
1786	CK50	B Ia	23.2	28.0	8.0	4.9	ob		4150	"	C IC	27.3	38.0	7.0	6.2	ob	
1805	CY39	B Ib	30.0	21.2	8.1	4.9	"		4159	CB48	A Ia	51.8	46.2	11.7	30	Ry	
1810	# 46	B Ia	31.8	(43.0)	10.0	(12)	ch	少欠	4160	CC48	BIIa	54.8	48.9	10.2	20	"	
1814	# 65	C Ia	39.5	32.2	12.0	10	ob		4210	CF49	B Ia	34.2	25.2	4.1	3.7	"	
1824	CX68	AIIc	22.8	20.8	8.7	4.2	"		4243	DI55	BIIa	30.5	15.9	6.5	2.7	ob	
1831	CW50	DIIa	46.8	45.5	9.6	26	Ry		4311	CD55	(B+D) IIa	42.4	38.0	9.0	13	"	
1835	# 51	B Ia	25.5	50.6	8.0	6.8	sh		4326	# 57	B Ia	17.8	16.8	3.8	0.9	"	
1886	CO90	B( I+II) a	30.3	20.5	9.3	4.4	ch		4348	# 94	A Ia	21.5	27.0	27.3	3.8	"	
1892	CS39	A Ia	66.0	36.2	20.0	30	sh		4351	"	"	45.0	23.5	11.0	8.4	"	
1893	# 40	"	27.0	13.6	5.8	1.8	ob		4361	CIXZ	C Ia	26.6	14.1	4.0	1.9	"	
1917	# 85	"	48.7	43.0	10.4	16.5	"		4363	"	B( I+II) a	18.4	21.3	5.4	1.4	"	
1970	CU42	B Ia	13.8	16.2	4.2	0.8	"		4364	"	AIIa	23.0	22.7	8.2	3.0	"	
1974	CV38	AIIa	17.7	16.7	3.7	1.2	"		4408	CJ46	B Ia	27.1	23.2	8.5	4.2	"	
1975	# 39	C( I+BII) a	80.0	55.2	9.5	22	Ry		4410	# 53	"	29.9	20.8	4.0	2.0	"	
1982	# 46	AIIa	24.5	24.8	8.5	4.7	ob		4426	CF57	C Ic	22.0	29.7	6.4	5.0	ch	
2001	D I50	D Ia	40.2	27.8	8.1	10.7	sh		4454	CE51	BIIa	21.0	16.0	3.4	1.1	ob	
2022	DG52	(C+A) IIa	23.3	17.2	14.0	1.5	ob		4471	# 52	B Ia	31.2	18.0	8.0	5.0	sh	
2025	"	A Ia	22.1	16.3	6.7	2.1	"		4475	# 53	BIIa	23.2	22.7	5.7	2.3	ob	
2169	DI56	AII d	63.9	39.0	12.2	36	sh		4477	CF50	B Ia	25.0	12.8	3.9	0.9	"	
2269	BX50	C Ia	54.4	25.8	9.5	15.6	"		4490	# 53	A Ia	17.5	26.4	7.0	2.3	"	
2306	BQ58	BIIa	20.7	15.2	2.5	0.7	ob		4497	# 54	AIIa	28.2	21.2	9.2	5.8	"	
2314	BX56	AII d	13.3	14.7	7.3	1.4	"	図1303	4508	BM60	A Ia	18.2	24.0	6.5	2.2	"	
2345	BO57	(D+B) Ia	40.0	30.0	10.5	13	ch	図1307	4517	BO56	"	22.5	16.8	5.5	1.8	"	
2368	BR59	C Ia	50.5	17.2	5.8	5.5	ob		4526	# 58	"	20.1	13.6	3.6	1.0	"	
2399	BQ52	(B+C) Ia	73.8	39.5	10.2	35	An		4530	BR50	B( II+ I) d	(18.6)	(26.4)	( 6.0)	( 3.1)	"	
2460	BM62	A Ia	44.8	28.5	5.4	5.9	sh		4574	BT51	AIIb	15.5	22.6	12.2	4.0	"	
2473	CC60	"	20.6	30.7	7.3	5.0	ch		4577	# 44	C Ia	38.0	24.5	11.0	9	"	
2483	"	AIIa	15.8	23.0	5.2	1.5	ob		4579	# 42	A Ia	21.5	14.2	4.5	1.4	"	
2505	CB60	A Ia	41.2	36.9	10.0	11.4	"		4583	# 60	(B+C) IIc	28.2	20.7	13.2	5.0	"	
2606	CF54	C Ia	38.0	23.0	7.6	7.1	"		4587	# 46	A Ia	28.8	26.2	6.2	4.2	"	
2611	CE53	CIIa	26.9	18.8	7.2	2.4	"		4614	DA45	(C+C) IId	(23.0)	48.2	10.2	(15.2)	"	尖頭器の破片?
2627	BY51	C Ia	29.9	42.3	8.0	7.7	"		4620	# 54	B Ia	24.5	15.4	5.8	2.6	"	
2633	BX54	BIIb	20.3	21.3	7.5	3.5	"		4624	# 55	AIIa	25.5	(19.2)	5.7	( 2.2)	"	側辺一部欠
2637	BU53	BIIa	(23.6)	(20.6)	4.7	( 1.6)	"	刃部半欠	4627	# 67	C Ia	35.7	(42.9)	7.8	( 8.1)	"	刃端欠
2661	Z	(C+B) IIa	(16.8)	(14.8)	( 3.6)	( 1.0)	ch	石匙刃部先端?	4628	# 68	A Ia	26.0	22.2	5.8	2.7	"	
2693	BY58	BIIa	13.5	20.7	3.8	1.1	ob		4649	DB53	B Ia	29.5	39.0	11.0	9.0	ch	
2698	BX56	A Ib	25.0	27.3	11.0	8.1	"		4666	DC41	A Ia	50.8	30.2	11.5	13	"	
2742	CC59	(C) Ia	32.5	(48.6)	9.8	(19)	Ry	刃端欠	4716	DD58	"	32.7	16.4	8.1	3.2	ob	
2775	CG55	B Ia	60.8	69.9	10.9	55	An?		4733	# 61	BIIb	21.1	20.3	8.9	4.2	ch	
3021	CN70	"	35.3	56.1	10.5	17.5	"		4741	DP47	C( II+BI) a	54.5	26.5	11.8	15	"	
3061	CP75	"	63.4	37.6	8.1	25	Ry		4742	# 48	CIIa	21.0	16.9	5.4	1.5	ob	
3066	CO87	(A+A) Ia	(12.8)	25.0	10.8	( 4.1)	sh	刃端欠	4743	# 50	CIIb	21.3	19.3	8.1	3.1	"	



登録No.	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
4748	DR39	B Ia	16.4	36.4	4.3	1.9	sh	
4759	DW58	B II a	25.3	40.2	10.7	8.0	ob	
4770	D区Z	D Ia	67.0	57.0	14.3	21	sh	
4815	"	C Ia	(23.8)	21.5	6.8	(3.4)	"	両端欠
4844	EH53	B(I + II)a	48.4	21.3	9.2	(10)	"	B II の刃端欠 図1306
4845	EJ44	C II b	32.8	20.6	8.9	5.9	ob	
4866	C区Z	B Ib	30.6	52.0	10.3	18.8	不明	
4892	CF52	D II a	28.7	18.9	8.0	2.4	ob	
4908	" 51	C Ia	19.5	18.6	7.5	2.5	"	
4920	"	A Ia	26.0	28.1	11.0	4.0	ch	
4942	DC62	B Ia	20.5	12.3	7.2	1.6	"	
4943	DD54	A Ia	14.2	18.8	6.4	1.7	ob	
4948	" 58	C Ia	18.4	11.6	5.2	1.0	"	
4967	DF51	A Ia	16.3	16.4	4.3	0.8	"	
4971	" 61	D II a	23.1	22.5	10.0	3.8	"	
4979	DH59	B Ia	30.4	30.2	11.5	11.6	sh	
4990	DI57	A Ia	22.8	33.4	17.2	9.8	ob	
4999	DJ58	C Ia	20.4	43.2	7.5	6.3	"	
5509	CW44	(B+C) II a	32.3	19.0	7.4	(5.1)	sh	刃部少欠
5534	CR62	A Ia	19.5	21.2	4.2	1.7	ob	
5562	CP40	B Ia	18.6	31.0	8.2	5.1	"	
5584	CQ72	"	39.0	26.4	10.6	8.0	"	
5591	" 53	D Ia	20.6	24.5	5.0	1.7	"	
5605	DF55	C Ia	26.8	19.0	4.0	2.2	"	
5614	DB51	A II a	19.5	29.3	5.4	2.9	"	
5620	DC59	A Ib	34.5	29.6	6.8	7.2	sh	
5627	DG60	D II b	20.3	27.0	6.8	3.8	ob	
5642	DD54	A II a	17.7	27.0	4.5	2.4	"	
5657	DL52	C II a	21.3	32.8	6.6	4.8	ch	
5674	DO54	C Id	22.8	45.6	3.5	5.9	Ry	
5681	DP50	D II a	19.3	23.5	7.3	2.2	ob	
5686	DQ50	B(I+II) a	49.2	27.1	11.8	14.5	ch	
5687	" 54	B II a	23.2	29.0	6.0	3.3	ob	
5692	DS59	C II a	21.0	24.0	7.9	2.8	"	
5705	EA57	C Ia	58.3	46.0	7.8	20.5	不明	
5706	" 59	B Ia	42.0	69.0	15.6	50	ch	
5708	EB53	(B+C) II a	(33.6)	29.2	7.6	(11.0)	sh	刃部両端欠
5821	CI56	C II c	19.4	25.8	6.2	2.9	ob	
5824	" 63	A Ia	29.1	17.5	7.2	3.3	"	
5839	CT64	C Ia	25.3	32.8	8.9	5.2	ms	
5840	CJ60	A Ia	13.4	35.5	4.6	2.6	ch	
5852	CK55	C(I+II) a	18.0	14.5	3.5	1.2	ob	
5887	CN51	(B+C) II a	16.5	16.5	2.6	0.6	"	
5893	" 54	C II d	25.3	24.9	6.0	3.4	sh	
5898	" 58	A Ia	27.0	25.5	8.3	6.1	ob	
5899	" 59	C Ia	26.0	15.0	9.4	2.9	ch	
5903	" 61	B II a	27.0	17.0	8.2	2.6	ob	
5927	CP53	B Ic	47.6	27.8	10.2	14.2	"	
5939	CQ52	A Ib	22.5	28.3	8.4	5.0	"	
5945	CR61	A II a	23.3	20.8	7.0	4.3	"	
5951	" 51	"	21.8	17.7	3.5	1.3	"	
5953	" 62	(C+B) Ia	41.5	35.7	10.0	14	"	
5969	CS62	B Ia	29.3	48.8	8.5	10	ss	
5981	CU58	"	37.4	25.0	11.2	8.1	ob	
5986	CW51	C Ia	35.2	21.0	8.2	4.7	"	
6009	DF32	A Ic	27.3	31.0	11.2	8.1	"	石鏃未製品?
6034	BN62	A II a	20.5	21.6	5.5	2.4	"	
6051	BO52	B Ia	46.0	20.8	12.6	9.3	"	
6053	" 55	A II a	20.4	26.0	7.8	3.1	"	
6054	" 57	A Ia	22.6	20.8	7.2	2.4	"	
6055	" 60	D Ia	30.2	17.0	10.7	4.4	"	
6088	BQ58	B Ia	55.5	38.6	17.8	39	ch	
6089	" 59	A Ia	16.0	9.9	3.9	0.5	ob	
6134	BT48	B Ia	37.2	39.8	11.8	12.4	"	
6149	BW60	A Ib	19.0	29.4	10.6	6.3	"	
6202	CA45	(C+C) Ia	27.1	47.0	11.7	10.0	"	
6214	CB48	C II a	32.5	12.5	6.8	2.0	"	
6228	CC53	B II a	13.0	25.3	3.3	0.9	"	
6243	CH50	B Ia	53.0	58.0	11.0	15	"	
6246	CD46	A II a	32.6	21.7	9.7	5.6	"	

登録No.	出地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
6248	CD47	B II d	30.8	24.5	13.1	9.1	ob	
6249	"	"	31.3	17.2	4.5	2.3	"	
6266	CJ51	C Ia	26.2	26.0	7.0	5.9	ch	
6268	BY40	B Ia	30.1	29.0	5.5	5.3	"	
6276	DP54	D Ia	26.8	30.8	6.3	4.0	ob	
6292	DJ51	(B+B) Ia	56.0	33.2	11.2	20	ch	図1305
6295	DT60	B Ia	38.7	24.2	9.0	7.0	ob	
6357	CR41	C Ia	42.5	21.0	10.0	6.1	"	
6360	" 89	"	46.0	18.5	10.0	6.7	"	
6364	" 85	"	53.5	49.0	14.0	(28)	"	刃部中央欠
6366	" 84	A Ia	49.0	54.8	17.2	50	Ry	図1310
6380	CN45	C Ib	25.4	(28.3)	5.3	(4.1)	不明	
6385	CO49	A II a	11.7	30.5	9.5	3.2	ch	
6405	BV53	A Ia	18.5	22.8	6.5	2.7	ob	
6408	" 52	B Ia	36.3	36.6	10.0	5.8	"	
6410	"	A Ia	23.7	25.2	6.8	4.0	"	
6411	"	A II b	22.6	28.3	7.3	3.7	"	
6412	"	A II a	16.5	19.2	3.4	1.1	"	
6416	" 51	A Ib	16.4	20.2	8.5	2.4	"	
6428	BX51	B Ia	20.5	15.9	5.2	1.6	"	
6429	" 52	A II b	36.6	34.0	14.0	13	"	
6439	" 59	D II a	17.8	16.4	4.6	1.4	"	
6448	BY55	C Ia	20.7	23.3	4.1	1.8	"	
6454	BY95	C Ia	62.0	81.0	10.7	31	ss	
6460	BW52	B Ia	61.0	47.0	9.0	35	An	
6468	" 54	A Ia	19.4	37.8	10.5	6.3	sh	
6472	" 57	C Ia	25.0	28.9	9.4	4.9	ob	
6473	"	"	28.5	22.4	22.5	6.2	"	
6476	" 62	A Ia	19.7	19.4	5.4	2.0	"	
6477	"	D II a	21.9	17.3	4.8	1.4	"	
6479	" 96	C Ia	29.6	(26.0)	11.5	(10)	ch	刃部両端欠
6508	BR55	B II a	26.5	14.0	3.8	1.4	ob	
6514	BQ61	"	18.2	16.6	2.4	0.9	"	
6533	BN52	B Ia	21.6	32.2	14.3	5.4	"	
6535	BM57	A II a	27.8	31.0	11.4	8.1	"	
6569	DP40	C Ia	26.0	29.8	10.8	4.9	"	
6615	DO56	B(II+I) b	17.3	22.5	10.3	4.2	"	
6618	DX60	B II d	29.4	25.0	6.7	(3.7)	"	刃部中央欠
6633	DK54	A Ib	6.0	36.5	11.2	8.7	"	
6634	"	A II a	24.4	22.5	4.7	2.5	"	
6647	" 57	C(I+B II) c	32.0	23.3	14.5	7.4	"	
6651	" 58	A Ib	37.4	37.2	11.2	14	"	図1301
6660	DL43	B Ia	33.2	42.8	10.1	11	Ry	
6662	" 46	B II a	26.2	12.0	3.8	1.1	ob	
6665	" 52	A Ib	33.4	26.2	8.6	6.3	"	図1302
6731	DE55	(B+B) II a	15.7	19.3	3.0	1.3	"	
6735	" 58	B II c	32.8	20.3	14.3	6.5	"	
6743	DF35	B Ic	(22.2)	(35.7)	8.3	(5.6)	"	一部欠
6786	DJ39	C Ic	26.3	31.8	11.0	7.5	"	
6810	" 55	B(I+II) a	19.2	14.8	3.3	1.0	"	
6844	CC57	(C) Ia	(13.3)	(12.5)	(3.5)	(0.5)	"	刃端部のみ
6879	C区Z	A II a	1718	14.2	5.2	1.2	"	
6886	Z	B II a	(56.0)	(35.0)	9.3	(14)	sh	半欠
6887	C区Z	B Ia	23.0	40.0	10.0	(9)	ch	刃端欠
6888	"	A II a	20.0	23.3	6.7	2.1	ob	
6943	CB52	"	17.0	25.2	5.2	1.5	"	
6954	" 48	A Ia	41.4	27.3	10.6	5.6	"	
6964	CC54	(B II + A I) a	31.6	35.5	8.6	9.3	ch	
6975	CA50	(B+C) Ia	24.8	22.4	6.0	3.3	sh	
6977	" 55	A Ia	25.6	15.6	5.3	2.1	ob	
6978	" 56	C(C+C) Ia	37.0	21.6	11.2	7.0	sh	
6979	CC54	C Ia	28.2	45.7	9.7	15	"	
7075	Z	B Ia	29.8	47.8	10.8	18.9	ch	
7119	CF92	A II a	32.8	43.8	12.9	15	ob	
7120	BY59	A Ia	36.2	24.5	6.3	3.6	"	
7121	DI62	D Ia	58.9	47.0	12.0	29	sh	
7122	DB50	A II a	32.0	26.4	8.1	5.7	ob	
7127	Z	B Ia	45.3	27.0	9.7	10.9	ob	
7128	DK53	(B+C) Ia	50.2	42.8	10.9	18	ch	
7133	CK40	B II a	39.7	38.9	8.8	10	"	

登録 No.	出 土 地 点	型 式	長さ	幅	厚 さ	重 さ	石質	備 考
7134	CH55	C Ib	23.3	52.1	13.1	15	ob	
7135	"	(C I + II) a	15.9	19.8	8.7	2.4	"	
7136	DQ54	B I a	25.5	52.2	6.9	11.1	Ry	
7139	Z	D I a	66.5	20.1	8.7	10.6	ob	
7140	"	A II a	19.8	16.4	3.3	1.0	"	
7219	CK54	D I a	44.2	65.5	7.5	2.2	Ry	
7236	Z	A II b	35.5	27.3	11.7	10.6	ob	
7237	CL55	A I a	28.9	28.8	10.7	11.2	ch	
7238	# 52	B II b	28.8	26.2	7.2	5.2	"	
7239	# 47	A II a	23.7	22.2	4.8	2.1	?	
7262	CN43	B II d	42.2	54.3	6.3	21.2	?	
7286	CM 82	D I d	41.6	28.2	7.3	8.8	Ry	
7290	CO70	(B + B) I a	51.8	31.2	8.0	13.4	"	
7381	CS48	A II a	22.8	23.8	7.6	3.4	ch	
7382	CS52	B I a	23.4	14.5	5.4	1.6	ob	
7383	CU47	A II a	17.4	15.3	6.5	1.4	"	
7412	CC58	B I a	15.9	21.7	4.9	1.3	"	
7430	Z	"	60.0	66.8	11.6	40	Ry ?	
7431	CC58	B II a	24.8	13.8	3.8	1.1	ob	
7432	"	B I a	17.3	23.3	4.8	1.3	"	
7433	# 59	"	39.2	19.8	8.3	5.0	"	
7434	# 61	A I a	36.6	41.8	10.8	15.4	Ry	
7469	# 60	D II a	29.2	19.7	5.8	3.7	ob	
7470	"	B I a	24.8	9.8	5.6	1.1	"	
7475	CB56	(A + D) I a	17.8	17.4	5.8	1.7	"	
7476	"	B I a	26.6	42.7	5.6	5.0	"	
7478	CR46	(B + B) II a	34.2	21.3	17.6	9.6	"	
7479	BU60	A I a	17.2	19.6	6.3	1.5	"	
7533	CG48	(B) I a	(19.8)	(10.0)	(6.2)	(1.5)	sh	石匙刃部?
7613	DD47	(C I + B II)	19.2	20.2	6.2	1.7	ob	
7639	DE59	B II b	27.8	39.5	8.4	12.2	ch	
7722	DI 58	A I d	52.0	52.8	17.8	40.2	"	
7723	DK48	D I a	20.2	21.6	8.0	4.2	"	
7724	DO55	B I a	57.0	26.4	6.5	12.5	sh	
7725	DQ39	"	31.5	29.0	7.0	6.3	"	
7726	# 55	B I d	38.5	52.0	15.2	26.8	Ry	
7749	EL42	B I b	19.7	23.8	9.2	3.9	"	
7790	Z	"	25.0	33.4	8.3	10.7	ch	
7791	"	C I a	40.3	18.7	9.7	9.0	"	
7792	"	"	27.0	18.0	9.3	3.1	ob	
7793	CR62	(D + D) I b	61.0	22.6	10.8	16.2	Ry	

石錐

登録 No.	出 土 地 点	型 式	長さ	幅	厚 さ	重 さ	石質	備 考
3	CP63	A I	(25.0)	14.5	7.4	(2.0)	ob	先端欠
27	DR53	"	29	15.0	5.5	2.4	"	
53	DM 57	"	37.2	10.1	4.3	1.3	sh	図1338
73	DF59	"	23.9	15.3	8.2	2.2	ch	
175	DD53	"	23.0	19.3	7.4	2.3	ob	
263	ED31	B I	45.5	10.4	6.3	2.7	sh	
414	CD61	A I	26.0	19.7	5.4	1.2	ob	
464	BU60	"	33.2	17.4	7.5	3.2	sh	
602	CD58	B I	51.8	13.7	7.3	4.5	不明	両頭 図1336
610	DF49	A I	(31.1)	23.9	9.2	(5.6)	ch	先端欠
670	CA52	"	21.2	12.5	7.2	1.1	ob	図1328
751	CH50	"	20.1	17.2	2.5	0.5	"	
771	DP47	"	28.9	20.0	7.0	2.5	"	
800	CB56	"	55.0	19.4	7.1	7.5	ch	図1316
930	CS48	"	31.2	16.2	5.5	2.2	ob	
981	CL49	- I	(18.6)	(6.2)	(3.9)	(0.4)	"	先端のみ残
990	CF49	A I	52.9	22.7	8.8	9.4	Ry	両頭?
1106	CR62	"	(24.3)	12.0	3.7	(0.6)	ob	つまみ部一部欠
1182	CI60	"	(15.8)	18.7	4.6	(1.0)	不明	
1192	CT50	"	44.8	26.8	7.7	5.1	sh	つまみ部に挟入あり
1209	CO51	"	32.4	14.7	7.1	3.1	"	
1220	DJ54	B I	23.0	9.5	5.2	1.0	ob	
1238	DB60	A I	(45.2)	24.4	4.2	(4.3)	sh	先端欠 つまみ部に挟入あり
1242	ET59	"	(47.2)	17.0	7.3	(4.1)	不明	先端欠 つまみ部に挟入あり
1243	"	"	37.8	19.8	5.6	2.2	ch	
1450	CX51	A I	19.8	17.1	3.3	0.7	ob	図1329
1479	BX59	A II	17.3	20.3	5.2	1.9	"	錐部 2 図1331
1485	BW60	"	35.6	26.3	9.7	8.5	"	つまみ部に挟入あり
1495	BU60	A I	23.4	16.5	6.3	2.3	ch	
1501	BV54	"	23.8	21.4	5.8	2.8	ob	石錐未製品?
1505	BW58	"	19.7	22.2	3.5	1.1	"	
1521	CB57	"	27.5	15.4	5.7	1.7	ch	
1525	CA58	A II	20.5	16.7	5.1	1.9	ob	石錐未製品?
1528	# 59	A I	19.3	10.2	4.2	0.8	"	
1531	CB60	A II	32.4	15.1	7.5	3.3	"	錐部 3
1547	CA53	"	27.5	17.3	3.3	1.5	"	錐部 3 図1333
1548	# 54	"	24.8	19.0	4.3	1.5	"	図1330
1564	BR50	A I	(23.4)	12.0	5.3	(1.3)	"	先端欠
1614	CE50	"	(26.0)	11.8	3.8	(1.0)	"	"
1646	# 63	A II	19.8	18.8	5.1	1.7	"	錐部 2
1654	CF46	A I	(30.9)	19.2	7.2	(2.8)	"	先端欠
1682	CN48	"	(21.3)	16.5	4.8	(1.1)	"	先端欠
1688	# 51	B I	23.1	7.9	7.0	1.2	"	
1694	# 57	A I	31.5	17.5	9.2	4.5	"	
1712	# 89	A II	40.3	45.3	6.3	12.5	"	
1720	CC57	"	23.1	32.2	11.1	6.7	"	
1722	"	"	36.8	26.2	12.3	7.5	"	
1727	CL41	B I	30.0	7.5	6.3	1.4	"	
1792	CK56	A II	21.8	24.6	7.6	3.1	"	
1852	CM51	"	19.4	22.8	4.7	1.5	"	
1915	CS80	"	22.2	25.8	6.8	2.8	"	
1916	CS83	"	21.8	27.0	8.0	3.6	"	
1929	CT39	"	(20.8)	16.3	5.8	(1.7)	"	先端欠
1941	# 63	A I	(26.6)	23.4	8.3	(4.1)	"	先端欠
1955	CU56	"	(24.2)	11.5	8.5	(2.7)	"	"
1971	# 41	A (I)	(24.0)	19.0	6.8	(3.2)	"	"
1972	# 40	A I	33.3	22.6	16.5	7.6	"	
1977	CV41	A II	15.1	18.8	4.4	1.1	"	
2008	DK55	A I	34.3	26.1	7.8	5.1	sh	図1323
2013	DL54	B I	25.0	9.1	5.6	1.0	ob	
2023	CG52	A II	30.2	23.3	5.1	2.3	"	
2024	"	A I	(32.6)	21.5	8.2	(4.7)	sh	先端欠
2028	DP58	- I	(17.6)	(8.5)	(4.5)	(0.8)	ch	つまみ部欠
2042	CJ54	A I	24.1	17.4	3.7	1.3	Ry	
2085	DL54	"	38.0	17.0	7.2	4.5	ob	図1319
2151	DE55	"	(24.4)	26.4	5.3	(3.3)	ch	先端欠
2237	CX50	"	(50.6)	40.6	6.7	(14.2)	"	" 図1315
2256	BT60	"	26.4	24.8	7.9	3.9	"	
2281	BX58	"	38.6	15.3	4.8	1.3	ob	図1326
2336	CA61	"	17.8	14.8	4.0	0.6	"	
2354	BO53	"	17.8	15.5	3.2	0.8	sh	
2371	BY54	B I	32.8	10.4	4.3	1.6	ch	
2398	BR51	A I	(31.4)	(30.7)	12.8	(6.7)	sh	先端、つまみ部一部欠 図1339
2407	BY50	B I	16.3	6.5	3.5	0.3	ob	
2418	BT49	A I	27.9	11.8	7.9	1.5	"	
2426	"	"	23.3	19.7	6.5	2.0	"	
2436	BV49	B I	29.8	13.3	6.0	2.4	ch	両頭 図1327
2447	BS51	- I	(16.3)	(4.7)	(2.9)	(0.3)	ob	先端部のみ
2458	BL61	A I	28.5	11.4	5.4	0.9	"	両頭
2493	CA60	"	25.0	11.6	7.5	2.0	ch	両頭
2588	CD56	"	(17.9)	13.1	8.3	(1.7)	ob	先端欠
2680	CF54	"	22.8	12.0	3.8	1.1	sh	
2836	BW52	"	36.9	26.0	7.1	6.4	ch	図1317
2861	CB55	B I	31.0	11.5	6.5	1.5	ob	
2869	CH54	A I	35.2	15.9	10.0	3.1	"	
2877	CC55	B I	(21.0)	7.9	5.9	(0.8)	"	先端欠(製作時?)
3080	CF91	"	29.3	7.2	5.4	1.3	メノウ	
3144	CN89	A I	24.3	14.3	6.2	1.5	ob	
3156	CI92	"	25.1	15.0	9.2	2.0	"	図1322
3327	Z	B I	27.5	6.8	3.6	0.8	"	
3360	CH52	A II	23.4	15.7	3.9	0.9	"	
3376	DM 40	A I	34.0	12.0	5.1	1.8	sh	
3449	BY43	B I	24.3	8.3	5.2	1.1	"	
3473	CM 45	A I	29.4	16.8	4.9	2.4	ch	
3580	Z	B I	(34.1)	6.3	4.9	(1.1)	"	先端欠 錐部 2 図1335

登録 No.	出 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
3602	Z	AI	32.3	9.6	3.7	1.2	Ry		6081	BQ54	AI	30.6	12.4	8.0	1.6	ob	
3753	CN55	AII	26.1	17.2	6.3	2.0	ob		6086	" 50	AII	25.8	14.8	4.5	1.4	"	
3871	DX42	AI	23.0	25.5	4.4	2.0	不明	図1325	6092	" 60	AI	(21.6)	11.0	4.8	(1.2)	"	先端欠
3880	DY43	BI	25.5	9.3	6.4	1.5	Ry	両頭	6105	BR60	BI	19.3	9.5	2.9	0.6	"	
3937	" 42	AI	35.8	19.7	4.9	1.7	"	図1320	6108	" 100	AII	18.3	19.6	5.1	(1.5)	"	錐部2
4042	CN47	BI	40.2	19.9	7.2	5.3	"	つまみ部一部欠 両頭	6121	B 54	BI	23.5	5.8	6.2	0.8	"	
4070	BY56	AI	73.2	14.6	6.9	3.2	ob	図1318	6126	BS100	AI	24.9	10.5	4.8	1.1	"	
4093	CI47	"	(37.2)	20.3	10.6	(6.6)	"	先端欠 図1324	6129	" 101	AII	17.0	17.8	2.4	0.7	"	
4119	CC49	"	(25.1)	13.7	6.5	(1.5)	"	"	6206	CA46	AI	27.6	12.7	7.0	2.2	"	
4330	CD57	AII	15.4	23.6	4.5	1.3	"		6207	" 48	BI	(49.8)	14.2	8.6	(4.5)	"	先端欠 図1337
4356	C区Z	"	23.2	34.5	5.5	3.4	"		6209	CB46	AI	(20.1)	15.2	4.5	(1.6)	"	先端欠
4386	CM73	AI	(20.0)	18.6	3.7	(1.4)	sh	先端欠	6213	" "	"	15.7	11.5	4.8	0.8	"	
4387	" 79	"	(22.8)	20.6	10.8	(3.4)	ob	"	6236	CH48	BI	(23.5)	6.5	5.5	(0.7)	"	先端欠
4396	" 89	"	(28.7)	21.5	7.6	(3.8)	"	"	6240	" 49	AII	23.7	18.8	4.2	2.2	"	錐部3 図1334
4435	CF60	"	(24.3)	12.5	8.3	(2.3)	"	"	6253	CD51	"	32.7	26.8	6.6	4.0	"	図1332
4448	" 95	"	23.8	19.5	8.3	2.8	"		6370	CR46	AI	(29.5)	14.5	9.9	(2.8)	"	先端欠
4548	BS50	AII	22.8	10.3	3.7	0.8	"		6413	BV52	"	(23.1)	16.0	4.0	(1.1)	"	先端欠
4575	BT51	A(II)	(24.0)	16.5	4.1	(1.5)	"	先端欠	6436	BX55	"	50.7	22.4	8.4	7.8	"	
4576	"	AI	26.8	15.2	4.8	1.5	"		6466	BW52	"	42.0	15.8	10.8	5.6	"	
4584	" 59	AII	14.6	27.0	8.8	2.0	"		6503	BS57	"	31.4	16.1	7.9	4.9	"	
4609	DA38	AI	(58.6)	26.0	13.0	(16.1)	"	先端欠	6521	BP62	AII	39.2	17.4	7.4	5.1	"	錐部3
4610	" 39	"	46.0	22.5	11.6	9.0	"		6523	" 60	"	26.5	24.3	7.3	2.7	"	
4667	DC50	"	31.5	21.7	6.3	4.2	"		6524	" AI	"	23.1	20.9	11.0	1.5	"	
4680	" 60	AII	24.7	17.3	6.5	1.9	"	錐部2	6575	DB52	AII	19.7	27.8	7.1	2.8	"	
4686	BT55	AI	31.2	13.4	10.0	3.1	"		6628	DK53	"	(19.8)	24.4	5.2	(1.9)	"	先端欠
4688	DD35	BI	22.8	10.0	7.3	1.2	"		6654	" 60	BI	24.4	8.5	5.0	0.9	"	
4702	" 49	AII	25.3	23.0	6.5	3.0	"	錐部2	6667	DL54	AI	31.4	27.5	9.9	7.1	"	
4705	" 51	"	22.0	23.3	4.6	1.6	"		6707	DE48	AII	15.6	17.4	5.5	1.4	"	
4744	DP58	AI	(16.7)	10.3	3.7	(0.5)	"	先端欠	6716	" 51	AI	31.6	20.2	5.8	2.1	sh	
4746	DQ48	AII	25.5	17.4	5.1	1.7	"		6725	" 52	"	21.2	15.1	8.2	2.4	ob	
4747	"	"	18.3	14.5	4.3	1.3	"		6754	DF54	AII	21.3	19.8	7.2	2.8	"	錐部3
4771	D区Z	"	12.8	21.3	3.4	0.9	"		6761	DG53	AI	42.3	33.0	10.4	9.2	ch	つまみ部に挟入部
4806	FT27	"	32.0	37.9	11.0	8.0	"		6769	DH35	AII	20.0	12.6	5.7	1.0	ob	
4850	ET54	AI	37.6	19.8	9.2	6.6	ch		6776	" 55	AI	(30.3)	23.6	8.5	(5.2)	ch	先端欠
4881	西尾道区 Z	AII	24.6	34.4	9.5	6.3	ob		6796	DJ52	AII	11.9	21.0	5.7	2.0	ob	錐部2
4883	"	"	20.0	22.6	4.7	1.6	"		6802	" 54	AI	(22.3)	21.2	5.7	(1.8)	"	先端欠
4898	CF52	"	20.4	13.6	4.5	0.8	"		6807	" AII	"	27.1	26.5	14.5	6.2	ch?	
4945	DD56	"	14.7	24.3	10.7	2.9	"		6837	DH64	BI	42.2	8.2	6.4	2.2	ob	
4947	" 57	AI	19.3	18.2	3.5	0.9	"		6874	C区Z	AI	(28.2)	14.3	8.5	(3.6)	不明	先端欠
4961	" 58	"	(25.5)	29.8	9.9	(5.7)	"	先端欠	6875	" BI	"	26.0	6.6	2.4	0.6	ch	尖基の石鏝?
4963	DF49	"	(19.1)	14.6	3.5	(0.9)	"	"	6945	CA55	AI	20.6	11.3	8.3	1.6	ob	
4969	" 58	"	19.5	14.8	6.8	1.4	"		6946	" "	"	24.5	12.1	6.3	1.7	ch	
5542	CT50	AII	24.7	24.6	10.0	3.6	"		6947	BU56	"	(25.3)	(22.0)	9.8	(3.9)	sh	基部一部欠
5554	CY57	AI	23.3	13.5	9.4	1.4	"		6948	CC49	"	(32.3)	16.2	7.8	(3.3)	ob	先端欠
5596	CL45	"	23.5	13.8	5.1	1.1	"		6949	CB54	AII	18.9	14.0	3.0	0.8	"	
5601	DE50	"	(19.2)	20.2	8.0	(1.7)	"	先端欠	6950	CA54	"	17.6	21.8	5.3	2.0	"	
5616	DB61	"	31.5	20.4	8.3	6.9	ch		6965	CC52	AI	19.5	11.2	6.2	1.1	"	
5641	" 59	"	30.8	18.3	6.0	1.5	ob		7126	Z	AII	(37.2)	29.8	10.3	(6.6)	"	先端欠
5661	DL55	"	(27.5)	21.0	12.8	(4.0)	"	先端欠	7132	CC46	BI	26.3	9.4	7.8	1.6	"	
5690	DQ61	"	33.3	18.5	11.0	2.8	"		7150	DP60	AII	16.7	27.3	9.3	2.4	"	
5826	CI63	AII	25.2	33.5	10.8	4.4	"		7151	BT51	AI	33.3	18.2	6.2	2.6	"	
5857	CK63	AI	(32.0)	18.1	6.0	(2.6)	"	先端欠	7152	C区Z	"	24.6	19.3	7.6	1.5	"	
5915	CO51	"	20.3	19.8	5.0	1.1	"		7153	DB49	"	23.2	14.2	5.8	1.1	"	
5955	DR62	"	(23.5)	19.4	10.8	(3.5)	"	先端欠	7154	C区Z	"	(33.1)	21.0	7.8	(3.5)	"	先端欠
5963	CS59	"	29.8	20.0	8.0	3.4	"		7155	DB49	BI	35.1	11.8	7.7	2.5	"	
5972	CT50	"	25.2	13.0	4.9	1.4	sh		7156	CU53	"	(37.4)	9.5	5.5	(2.3)	"	先端欠
5975	" 54	"	25.0	24.2	5.6	2.0	ob		7157	CC57	"	24.2	10.4	6.1	1.3	不明	両頭
5976	" 55	"	18.4	13.0	4.6	0.7	"		7158	CE55	AI	19.1	10.3	3.7	0.7	ob	
5985	CV55	"	(24.0)	12.6	7.2	(2.1)	"	先端欠	7159	CD54	"	34.6	14.0	8.2	2.0	"	
5989	CT55	"	32.4	20.0	11.4	6.4	"		7191	CM39	BI	20.5	8.5	5.4	0.9	"	
6032	BM61	AII	22.1	22.0	6.9	2.3	"		7197	CH54	AI	(25.8)	17.7	7.3	(2.7)	"	先端欠
6035	BN62	BI	22.6	9.6	6.7	1.4	"		7216	CS48	AII	15.7	17.7	8.5	1.7	"	
6036	BV55	"	(20.7)	10.6	5.0	(1.2)	"	先端欠	7217	CT52	AI	25.3	20.2	8.5	3.0	"	
6038	BN57	AI	14.6	18.5	4.9	1.0	"		7227	CC51	AII	18.1	19.1	4.0	1.0	"	
6042	" 58	BI	20.0	8.6	4.5	0.6	"		7228	Z	AI	28.8	25.3	8.3	4.3	"	
6049	" 62	AII	17.8	19.8	3.2	1.0	"		7229	DK55	AII	19.8	23.9	5.6	2.3	"	
6052	BO53	AI	35.8	15.2	12.3	5.7	"		7384	CV46	"	22.1	20.8	6.8	2.7	"	
6066	" 63	AII	13.8	25.0	4.3	1.3	"		7435	CX68	BI	26.5	9.2	6.4	1.2	"	
6068	" 86	BI	(34.8)	10.8	4.3	(1.2)	"	先端欠	7436	" AII	"	16.7	35.5	10.5	4.7	"	
6074	BP57	"	(24.3)	10.2	7.3	(1.5)	"	先端欠	7437	CG55	AI	(19.5)	19.2	7.6	(2.6)	sh	先端欠

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7438	CX36	AI	(26.3)	13.3	7.5	(2.0)	ob	先端欠
7468	CG62	AII	19.3	17.9	3.3	0.9	"	"
7473	SA62	AI	(14.8)	17.5	5.3	(1.3)	"	先端欠
7537	CR44	BI	25.4	11.7	6.5	1.8	"	"
7538	DC55	AI	20.5	16.0	6.7	2.0	"	"
7593	F区Z	"	35.8	19.8	6.3	4.1	"	"
7640	YX5	"	33.0	26.5	8.5	7.2	sh	"
7641	DF44	AII	22.3	19.5	12.3	2.6	ob	"
7642	" 57	AI	24.5	11.3	2.2	0.5	"	"
7715	DH64	"	23.8	19.2	6.2	2.6	ch	"
7716	DM 55	AII	22.8	15.0	4.5	1.3	ob	"
7717	DP42	"	21.3	16.8	6.8	2.0	"	"
7718	DR43	AI	20.2	17.5	8.6	2.4	"	"
7755	Z	BI	30.6	11.3	6.7	2.0	"	図1340
7787	"	"	28.5	12.8	5.0	1.3	"	"

ピエス・エスキーユ

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
212	DI 50	CI	25.1	13.4	7.2	2.2	ob	"
1420	EA58	CI	22.1	17.4	5.8	2.5	"	図1352
1451	DI55	"	17.7	12.5	5.2	1.2	"	"
1463	BY59	CII	16.7	14.7	3.5	1.1	"	"
1468	" 60	BI	24.0	18.7	11.0	4.5	"	図1347
1469	"	"	27.8	22.2	13.8	7.0	"	"
1475	BX58	CI	18.6	15.8	5.5	1.6	"	"
1480	" 59	CII	22.8	20.7	10.5	4.1	"	"
1489	BU58	CI	(28.2)	22.8	7.2	(3.5)	"	下端欠
1499	" 61	CII	23.3	32.8	10.2	8.0	"	"
1504	BV58	A(B)IV	21.5	23.3	9.5	5.1	"	"
1514	CA55	DI	24.0	14.6	10.2	3.5	"	図1365
1517	" 57	CI	19.2	18.7	7.0	3.3	"	"
1518	"	BI	21.8	21.7	13.4	5.7	"	"
1523	" 58	DI	31.6	12.4	9.6	3.4	"	図1364
1526	" 60	CI	25.5	18.7	8.4	3.8	"	"
1570	" 55	"	20.0	13.2	5.5	1.3	"	"
1575	" 57	"	(23.5)	12.8	4.4	(1.7)	"	下端欠
1576	" 63	A(B)II	25.8	25.6	12.2	7.9	"	"
1577	" 95	CI	19.8	17.7	7.9	2.3	"	"
1578	"	BI	33.0	19.5	10.1	5.2	"	"
1587	CB57	DI	(23.6)	17.2	10.6	(3.2)	"	下端欠
1589	"	BI	20.4	14.0	8.3	2.6	"	"
1592	" 59	DI	22.0	11.0	7.7	1.8	"	"
1595	" 63	A(B)I	23.5	19.5	15.2	5.6	"	"
1596	CE43	CII	25.0	16.4	8.1	3.2	"	"
1603	" 47	A(B)I	28.1	21.3	14.4	7.5	"	"
1604	"	CII	18.5	17.0	7.0	2.7	"	"
1607	"	A(C)I	24.9	24.7	7.4	6.3	"	"
1608	" 48	DI	22.3	10.2	6.1	1.3	"	"
1619	" 54	DIII	27.2	14.3	9.7	2.8	"	"
1620	"	CI	27.1	18.4	9.0	3.4	"	"
1625	" 56	BI	21.3	11.3	16.3	2.7	"	"
1626	"	CI	26.7	18.5	8.0	3.8	"	下端欠
1627	"	DI	28.6	15.6	10.3	3.8	"	"
1629	"	BI	21.6	28.2	12.8	6.8	"	"
1649	" 92	CI	19.5	18.7	7.8	2.5	"	"
1651	" 95	"	27.0	29.5	8.5	7.0	"	"
1656	CF46	BI	18.0	14.6	9.9	2.3	"	"
1669	CG49	CI	21.9	19.0	10.4	4.5	"	"
1671	" 50	"	22.1	12.7	5.5	1.6	"	"
1678	CN40	BI	23.5	18.6	11.4	4.3	"	"
1691	" 54	DI	(21.3)	13.6	6.8	(1.7)	"	下端一部欠
1701	" 79	CI	18.2	14.6	6.8	1.6	"	"
1703	" 87	DI	(23.3)	14.3	8.5	(2.6)	"	下端欠
1704	"	"	21.4	9.3	6.7	1.3	"	"
1706	" 88	CIII	15.0	26.3	6.8	2.7	"	"
1715	" 78	CII	31.4	18.0	8.9	3.7	"	"
1718	CC57	CI	21.3	21.7	9.5	3.2	"	"
1719	"	A(C)I	26.7	8.5	9.5	4.0	"	"
1721	"	DI	21.3	9.2	7.3	1.8	"	"

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1724	CL39	CI	21.5	15.2	8.6	2.3	ob	"
1732	" 48	CII	20.0	18.6	10.0	3.0	"	"
1733	"	BIII	26.0	29.6	14.8	9.1	"	"
1739	" 87	CIII	24.8	14.0	5.5	1.9	"	"
1742	" 90	CI	21.0	20.8	8.6	3.5	"	"
1743	" 91	CIII	26.2	28.7	8.8	7.6	"	"
1745	"	DI	19.2	8.5	8.8	1.6	"	"
1766	CG91	CI	17.4	18.8	4.5	1.4	"	"
1767	" 92	"	18.6	14.5	5.3	1.7	"	"
1773	CH57	"	15.5	16.5	5.3	1.5	"	"
1777	" 61	BI	(25.4)	19.5	11.2	(4.4)	"	下端欠
1778	"	DI	(27.3)	15.0	7.7	(2.6)	"	"
1779	" 64	CI	(22.5)	17.0	6.9	(2.5)	"	下端一部欠
1788	CK50	"	27.0	20.8	8.1	4.1	"	"
1794	" 89	BI	33.6	30.1	12.1	11.5	"	"
1804	CY39	CI	(21.9)	12.5	6.8	(1.9)	"	下端欠
1819	CX50	"	20.0	22.6	8.4	3.8	"	"
1822	" 65	BI	(19.6)	17.8	11.7	(3.5)	"	下端欠
1823	" 67	CI	19.6	18.7	10.8	3.0	"	"
1826	CW41	DI	29.1	12.4	12.7	4.6	"	"
1833	" 50	CI	21.8	17.5	10.8	3.6	"	"
1837	" 52	DI	27.5	10.8	8.0	2.2	"	"
1838	"	"	17.3	12.4	8.5	1.5	"	"
1842	" 60	CI	15.6	15.4	4.6	1.1	"	"
1844	" 69	DI	(31.0)	12.8	7.0	(3.0)	ch	下端欠
1849	" 70	"	28.8	15.2	12.8	3.8	ob	"
1855	CO41	CI	25.9	11.9	5.0	1.3	"	"
1861	" 43	"	(20.0)	20.7	11.8	(3.4)	"	下端一部欠
1862	" 49	"	13.7	15.3	6.4	1.4	"	"
1867	" 56	CII	(19.1)	14.7	5.0	(1.2)	"	下端欠
1869	" 57	CI	18.0	18.9	6.5	2.2	"	"
1877	" 79	DI	36.2	22.6	12.9	7.6	"	"
1878	" 82	CI	(25.1)	21.6	10.4	(4.7)	"	下端欠
1879	" 87	DI	(32.3)	17.2	10.1	(5.0)	"	下端一部欠
1881	"	"	25.0	14.8	6.4	2.8	"	"
1882	"	CI	19.4	18.6	4.7	(1.7)	"	下端一部欠
1883	" 89	"	14.3	14.9	5.8	1.0	"	"
1884	" 90	DI	27.6	14.3	10.0	4.4	"	"
1885	"	CI	28.7	18.3	10.7	4.7	"	"
1889	" 91	BI	24.5	14.8	14.2	5.1	"	"
1890	" 87	DI	22.6	14.2	8.3	1.8	"	"
1896	CS45	BI	29.4	17.0	19.4	9.6	"	"
1899	" 46	CI	(23.8)	22.1	11.4	(4.4)	"	下端欠
1900	"	"	14.6	13.0	4.0	0.7	"	"
1901	"	BI	25.8	22.3	15.2	7.2	"	"
1906	" 49	A(B)I	25.0	18.6	10.8	6.0	"	"
1907	" 52	DIII	(33.0)	12.4	12.5	(5.0)	"	下端一部欠
1914	" 66	DI	20.8	10.6	6.6	1.4	"	"
1918	" 87	"	36.3	20.8	13.1	6.7	"	"
1919	"	BI	(22.6)	18.0	10.1	(3.5)	"	下端欠
1924	CQ83	CI	24.6	16.4	6.2	2.3	"	"
1925	"	"	22.2	15.6	4.0	1.6	"	"
1930	CT49	DI	29.5	17.7	10.8	3.4	"	"
1932	"	BI	26.0	18.9	17.0	7.7	"	"
1940	" 62	CI	(21.2)	16.2	7.3	(1.9)	"	下端欠
1944	" 81	"	20.7	12.4	6.2	1.3	"	"
1949	" 86	"	17.5	14.3	6.2	1.4	"	図1351
1952	CU46	DI	(25.1)	14.2	7.3	(2.2)	"	下端欠
1956	" 65	BI	19.5	14.2	11.3	3.0	"	"
1962	" 47	A(B)I	25.9	23.8	12.6	7.5	"	図1346
1969	" 42	BI	15.2	14.2	7.0	1.6	"	"
1973	" 39	CI	17.0	13.3	4.5	0.9	"	"
1983	CV46	DI	23.4	11.8	9.0	2.0	"	図1362
1987	" 50	CI	24.7	26.2	8.7	6.2	"	"
1989	" 51	CII	32.7	24.8	16.4	6.4	"	図1359
1990	"	CI	20.8	17.2	6.3	2.0	"	"
1995	" 52	DI	36.0	14.4	8.6	3.6	"	"
1997	" 54	CI	26.3	15.2	7.2	2.5	"	"
2465	BL61	"	29.5	24.9	7.2	5.0	"	"
2673	CH54	DI	18.7	9.1	5.9	0.9	"	"

登録 No.	出 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考	登録 No.	出 地 点	型 式	長 さ	幅	厚 さ	重 さ	石 質	備 考
3277	CG52	BII	19.1	18.3	11.6	3.2	ob		4456	CE51	DI	24.1	10.8	6.8	1.7	ob	
3278	"	CI	(20.1)	17.7	4.0	(1.5)	"	下端欠	4457	"	CI	21.6	13.2	5.6	2.0	"	図1350
3279	"	DI	23.0	12.5	8.5	2.3	"		4458	"	"	16.0	13.8	8.0	1.4	"	
3288	" 53	CI	29.1	30.6	6.8	5.4	"		4464	" 52	"	26.0	15.0	5.6	2.2	"	
3289	"	A(C)I	18.3	14.0	7.1	2.0	"		4465	"	"	(20.6)	15.2	5.6	(1.3)	"	下端欠
3290	"	DI	(24.7)	10.8	9.4	(1.5)	"	下端欠	4466	"	"	(19.5)	11.3	5.0	(1.2)	"	"
3291	"	CI	23.2	20.1	8.3	2.8	"		4467	"	DI	(25.1)	10.8	7.9	(1.9)	"	"
3299	CH52	"	16.5	16.4	6.2	1.6	"		4468	"	CI	(20.5)	15.8	6.0	(1.7)	"	下端一部欠
3310	DP41	CIII	28.7	23.5	7.7	5.6	"		4469	"	"	20.5	14.0	5.6	1.4	"	
3359	CH52	CI	17.8	16.9	7.6	2.3	"		4472	" 53	"	16.8	23.3	6.4	2.3	"	
3377	" 53	"	18.7	17.6	3.6	1.2	"		4479	CF50	"	(19.1)	16.4	5.5	(1.4)	"	下端欠
3378	"	CIII	16.6	17.4	6.5	1.7	"		4480	" 52	DI	(23.4)	11.6	9.5	(1.8)	"	"
3379	"	DI	20.1	11.3	9.4	2.2	"		4481	"	CI	(15.9)	13.0	6.3	(1.1)	"	"
3420	CA59	CI	27.1	13.7	5.9	2.2	"		4482	"	DI	25.0	9.5	6.8	1.2	"	下端欠
3422	"	DI	(23.1)	13.6	10.6	(2.6)	"	下端欠	4483	"	CI	13.5	14.7	5.7	1.1	"	
3505	C区Z	"	26.4	15.6	5.2	1.3	"		4487	" 53	"	(19.6)	19.4	3.4	(0.7)	"	下端欠
3506	"	CI	21.0	19.1	7.6	2.5	"		4488	"	"	21.4	20.0	9.5	3.0	"	裏面は自然面
3515	CI56	DI	16.4	14.2	14.0	4.2	"		4489	"	"	18.5	21.2	8.3	2.4	"	
3516	" 61	CI	18.6	13.0	4.8	1.1	"		4498	" 54	"	(22.0)	20.5	5.3	(2.0)	"	下端欠
3517	" 63	DI	22.8	12.3	8.5	2.0	"		4506	BK60	BI	25.3	13.4	10.1	3.1	"	
3519	CJ53	CI	20.8	15.0	7.2	2.3	"		4507	BM60	DI	24.6	11.5	7.3	1.7	"	
3528	" 54	DI	33.4	16.6	12.5	6.4	"		4518	BO62	BI	29.4	19.7	11.5	6.7	"	裏面は自然面
3529	"	CI	19.8	22.5	10.2	2.9	"		4521	BP60	"	27.0	16.5	12.2	5.3	"	
3530	"	DI	16.4	9.5	7.0	1.0	"		4522	"	DI	20.5	10.2	5.0	1.0	"	
3532	" 59	"	33.1	18.5	10.0	4.6	"		4523	"	CI	20.2	15.3	6.8	2.2	"	
3533	"	CI	14.8	15.0	5.4	1.5	"		4525	BQ53	DI	28.6	11.0	12.6	3.1	"	裏面は自然面
3534	"	DI	22.1	12.3	11.6	2.6	"		4533	BR58	CI	24.5	13.5	9.8	2.9	"	
3535	"	CI	20.2	15.0	5.8	1.6	"		4534	" 60	CII	15.0	12.7	4.6	0.9	"	
3539	" 63	"	13.2	11.3	4.5	0.6	"		4535	" 48	CI	15.6	12.8	5.7	1.1	"	
3540	CK56	DI	32.0	13.8	8.6	3.7	"		4536	" 49	"	15.1	16.0	7.0	1.6	"	
3541	" 62	CI	27.7	17.8	9.7	4.1	"		4537	"	CIII	19.6	13.8	5.6	1.7	"	裏面は自然面
3542	" 63	DI	24.5	13.4	6.5	1.5	"		4538	" 50	CI	15.5	12.3	8.0	1.1	"	
3547	CL56	CI	19.6	14.8	8.7	(2.3)	"	下端欠	4539	"	"	18.3	19.0	5.6	2.3	"	
3548	" 61	"	21.5	12.0	4.4	1.0	"		4541	" 51	BI	29.4	20.2	14.8	7.0	"	
3549	" 62	DI	18.9	12.7	5.4	1.1	"		4542	"	DI	29.8	8.8	9.8	2.3	"	
3612	" 63	CI	25.6	19.6	9.0	4.2	"		4543	" 55	A(B)III	30.3	22.2	18.3	13.7	"	裏面は自然面
3613	CM54	DI	18.0	10.5	5.6	1.1	"		4544	" 57	BII	37.0	29.3	22.6	18.1	"	u・fとして転用?
3614	" 61	"	28.0	11.5	7.5	1.9	"		4552	BS52	CI	25.2	15.7	10.8	(3.7)	"	下端大半欠
3708	CN51	CI	20.5	14.8	3.6	1.0	"		4553	" 51	DI	23.1	16.1	10.5	3.4	"	
3906	" 52	DI	22.3	12.2	9.3	1.8	"		4554	" 56	A(B)I	25.6	18.4	10.5	4.8	"	裏面は自然面
3907	"	BI	36.6	28.0	15.0	13.9	"		4555	" 90	CI	19.5	12.5	5.4	1.3	"	
4234	DI48	CI	(18.8)	13.2	4.6	(1.0)	"	下端欠	4556	"	AI	25.2	22.0	12.3	5.8	"	
4235	" 53	BII	31.0	24.5	13.4	9.3	"		4557	" 55	BI	22.5	15.6	12.2	4.1	"	
4240	" 54	DI	26.5	11.6	6.9	1.6	"		4559	" 49	CI	14.6	18.4	11.3	2.3	"	裏面は自然面
4246	" 61	A(B)I	26.5	22.5	21.2	13.1	"		4560	" 100	DI	19.0	10.7	7.8	1.7	"	
4249	DJ37	CI	19.8	14.2	6.7	1.6	"		4568	BT51	BI	24.3	12.6	14.1	4.5	"	
4319	CD56	DI	26.4	10.0	10.4	2.3	"		4569	"	CI	26.2	30.6	11.6	6.0	"	裏面は自然面
4327	" 57	CII	20.6	23.4	8.2	7.2	"		4570	"	A(B)I	23.6	1.3	11.4	6.3	"	
4328	"	CI	16.3	9.8	6.4	0.9	"		4578	" 41	DI	30.5	16.1	10.2	4.0	"	
4329	"	BI	16.4	15.6	10.4	2.5	"		4580	" 60	CII	25.3	19.3	6.2	2.7	"	
4335	" 58	CI	16.7	17.2	7.5	2.1	"		4582	" 41	DI	36.5	14.9	10.8	4.3	"	裏面は自然面
4336	"	DI	19.0	9.4	4.6	0.9	"		4585	" 58	CI	23.2	17.5	8.3	2.9	"	
4341	" 60	BI	22.0	19.2	14.8	5.8	"		4586	"	CII	19.8	20.8	6.2	2.4	"	
4345	"	CI	24.6	23.0	6.2	6.6	"		4588	" 52	A(B)I	18.4	15.1	15.3	3.3	"	
4346	" 93	CIII	22.2	16.3	4.8	1.8	"		4594	BU60	CI	20.3	12.8	6.0	1.4	"	
4347	" 94	BI	22.3	15.4	9.4	6.4	"		4596	BT60	"	18.2	15.4	5.7	1.3	"	
4355	C区Z	DI	31.5	13.5	11.2	2.9	"	図1367	4599	BU51	DI	34.7	17.7	11.6	6.0	"	
4357	"	CI	17.2	16.3	7.4	2.3	"	図1349	4600	" 60	"	12.5	10.7	7.2	1.4	"	
4359	"	"	24.5	17.5	7.4	3.2	"		4601	" 51	AI	22.4	19.4	21.8	4.8	"	
4360	"	DI	29.8	11.0	7.4	1.8	"	図1361	4611	DA41	A(B)I	28.2	13.4	17.0	7.5	"	
4362	"	CI	21.7	13.9	5.1	1.9	"	図1355	4612	" 39	CI	17.1	16.8	7.8	1.8	"	
4369	CM39	"	17.7	14.5	6.5	1.8	"	図1357	4613	" 42	"	28.6	20.4	8.8	5.2	"	
4375	" 40	CIII	22.5	23.8	7.6	4.0	"		4615	" 45	"	26.7	17.5	7.8	3.2	"	
4385	" 73	CI	20.2	13.3	7.2	1.4	"		4619	" 54	"	20.5	18.7	7.3	2.2	"	
4392	" 87	"	13.2	11.6	5.8	1.0	"	図1356	4621	" 56	BI	20.6	12.7	10.7	2.6	"	
4395	" 88	BIII	19.5	18.1	13.3	4.3	"		4625	" 62	CI	18.4	17.6	7.5	2.3	"	
4405	CJ44	CI	23.4	20.8	7.0	2.0	"		4634	Z	BIII	24.5	15.5	15.0	5.9	"	
4413	" 58	"	18.8	16.7	7.0	2.2	"		4637	DB49	CI	26.7	19.2	10.1	3.7	"	u・fとして転用?
4423	CF56	"	16.5	13.8	6.6	1.7	"		4638	"	BI	22.0	12.4	9.3	2.4	"	
4429	" 57	"	18.1	17.8	9.5	2.3	"	図1341	4643	" 51	CI	21.8	16.7	9.2	3.1	"	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考	登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
4660	DB61	BI	29.7	15.6	6.7	6.2	ob		5531	CR62	BI	24.8	17.7	12.9	4.2	ob	
4661	DC34	DI	45.2	13.6	11.0	8.9	"		5532	" 58	"	25.8	16.6	14.6	5.7	"	
4668	" 52	CI	15.5	22.0	10.7	2.3	"		5536	" 63	"	30.8	16.4	13.0	5.5	"	
4671	" 54	A(C) I	24.1	17.6	9.4	3.9	"		5537	CS56	DI	22.3	16.0	9.6	2.9	"	
4693	DD45	CI	25.4	18.0	7.3	3.4	"		5538	" 60	CI	17.3	15.2	4.5	1.2	"	
4699	" 50	BI	22.2	15.5	13.3	4.1	"		5540	CT50	A(C) III	15.3	22.5	8.9	3.2	"	
4706	" 51	A(C) I	22.8	16.1	6.2	2.2	"		5541	"	CI	19.2	19.5	10.7	2.9	"	
4707	" 52	BI	27.2	17.7	11.8	6.1	"		5545	" 54	DI	24.0	12.3	7.2	1.9	"	
4711	" 54	A(B) II	27.5	11.2	8.9	2.2	"		5546	" 59	CI	21.5	16.4	7.9	2.6	"	
4714	" 56	A(C) I	20.7	24.7	9.8	4.1	"		5547	"	DI	26.0	13.4	10.7	2.5	"	
4717	" 59	A(B) I	24.4	23.0	20.4	11.6	"		5549	CX63	"	45.4	15.4	11.0	7.7	"	
4718	"	CI	22.5	22.6	6.7	2.5	"		5551	CY55	BI	19.0	14.5	12.1	3.2	"	
4722	" 60	"	28.0	16.6	7.7	3.5	"		5553	" 57	DI	16.7	11.2	8.5	1.3	"	
4727	" 61	BII	21.7	13.4	10.6	3.2	"		5556	Z	A(B) I	22.6	18.8	14.5	6.4	"	
4728	"	DI	24.5	10.0	7.0	1.3	"		5566	CP85	A(C) I	24.2	18.6	10.4	4.0	"	
4736	DP45	BI	(18.5)	13.3	10.7	(2.7)	"	下端欠	5571	" 90	CI	23.3	15.4	9.0	2.6	"	
4740	" 46	"	22.8	16.4	12.2	4.2	"		5572	"	"	(17.3)	12.2	5.3	(1.2)	"	
4753	DY44	"	34.8	22.0	20.7	10.6	"		5573	CQ88	"	16.9	15.4	7.8	2.0	"	
4763	DU44	CI	21.5	19.2	8.5	3.0	"		5575	" 41	BI	26.4	18.0	10.6	5.9	"	
4772	D区Z	DI	48.0	12.6	11.2	8.1	"		5576	"	CI	21.0	14.8	8.5	2.8	"	
4773	"	CI	17.2	14.5	6.4	1.6	"		5583	CQ87	"	25.0	21.1	9.0	4.5	"	
4774	"	"	20.0	20.1	6.8	2.6	"		5590	" 52	"	22.3	13.5	7.3	2.2	"	
4775	"	DI	19.8	7.5	4.6	0.8	"		5599	CR42	A(C) I	25.8	28.9	14.8	8.5	"	
4786	FG17	"	24.1	12.0	6.9	1.4	"		5628	DH58	CI	27.8	22.3	8.4	5.5	"	
4814	B区Z	CI	22.4	16.2	10.0	3.0	"		5649	DK55	"	18.3	22.5	9.7	3.9	"	
4818	EA50	"	14.8	12.2	5.7	1.0	"		5651	" 61	"	22.5	17.7	6.3	2.2	"	
4819	" 53	BI	30.6	20.0	11.8	4.8	"		5808	CD58	BI	32.3	17.0	15.8	6.0	"	
4820	" 56	CII	33.8	16.8	4.7	2.0	"		5869	CL61	CII	21.3	16.5	9.4	3.4	"	
4824	EB43	DII	(36.1)	16.7	14.8	(8.0)	"	下端欠	5873	" 62	CIII	22.6	30.0	9.6	5.7	"	
4825	EA59	CI	19.2	13.0	5.4	(0.9)	"	下端一部欠	5878	CM52	CI	23.3	19.6	6.3	2.8	"	図1353
4827	EC47	BIII	33.5	23.0	12.8	8.2	"		5883	" 62	"	23.3	24.5	8.0	3.6	"	
4830	ED30	DI	26.5	9.8	6.9	1.7	"		5886	CN51	CII	19.7	16.5	6.2	2.0	"	
4832	" 31	"	24.5	23.9	9.2	4.3	"		5923	CO77	BI	18.7	15.2	10.0	2.7	"	
4834	" 40	"	21.6	25.2	6.7	2.9	"		5931	CP61	CIII	17.2	16.4	5.0	1.7	"	
4836	" 42	"	22.2	26.3	11.1	4.6	"	下端欠 図1363	5935	" 80	DII	28.5	11.3	6.7	2.1	"	
4837	" 54	CII	16.1	18.4	6.6	2.1	"		5998	CY55	BI	22.3	19.6	11.3	4.4	"	
4839	EE55	CI	23.5	22.7	8.4	3.9	"		6024	BK59	CI	20.3	16.1	5.0	1.5	"	
4854	EP60	A(B) I	20.0	17.3	12.5	3.8	"		6027	BL60	A(C) I	24.5	17.8	9.3	(3.9)	"	下端欠 図1343
4855	EQ58	DI	20.3	12.5	8.7	2.0	"		6031	BM61	CI	27.5	24.5	10.4	6.3	"	
4856	" 59	"	26.5	9.3	14.0	3.7	"		6043	BN58	"	16.3	15.5	4.8	1.6	"	図1358
4860	ER58	"	20.3	8.9	4.2	0.8	"		6056	BO60	"	18.7	22.9	6.5	2.7	"	
4861	ES54	CI	22.2	15.2	4.3	1.1	"		6057	" 60	BI	25.5	22.3	18.2	6.7	"	図1348
4862	" 57	A(B) I	19.9	27.3	12.9	5.4	"		6070	BP52	CI	15.2	20.6	4.1	1.0	"	
4863	" 58	BI	30.0	17.8	13.1	4.8	"		6082	BQ55	BI	17.2	22.5	10.1	3.7	"	
4871	C区Z	"	21.5	12.5	11.2	2.9	"		6084	" 56	CIII	20.9	23.0	8.3	3.5	"	
4872	E区Z	CI	(27.4)	14.3	5.2	(2.0)	"	下端一部欠	6090	" 59	CI	28.0	14.6	4.8	2.2	"	図1366
4882	Z	"	26.6	15.0	11.7	2.9	"		6094	" 102	"	25.0	14.6	5.2	1.6	"	図1360
4893	CF52	"	20.7	16.3	7.8	3.2	"		6104	BR59	CIII	20.7	12.7	8.6	3.7	"	
4894	"	BI	(20.0)	13.8	13.1	(3.3)	"	下端欠	6125	BS59	DI	25.5	17.4	9.3	3.1	"	u-fとして転用?
4895	"	CI	24.3	22.0	10.7	3.8	"		6139	BT59	CIII	(25.3)	(20.0)	8.0	(4.3)	"	下端欠
4896	"	DI	15.0	7.5	4.6	0.6	"		6184	BY46	CI	25.7	17.8	6.8	3.1	"	
4897	"	CIII	27.7	29.8	8.2	6.3	"		6208	CB43	A(C) III	(19.8)	22.4	(9.0)	(3.9)	"	下端欠 図1344
4899	"	CI	(26.2)	17.4	3.4	(1.9)	"	下端欠	6216	CC41	BI	21.9	17.5	10.5	4.1	"	図1354
4900	" 50	DI	25.6	11.8	8.4	2.1	"		6221	" 46	CIII	17.5	23.2	2.8	1.2	"	
4901	"	CI	(13.5)	7.0	4.5	(0.4)	"	下端欠	6242	CH50	CII	25.5	18.0	10.5	4.7	"	
4902	"	DI	15.3	9.2	6.3	0.8	"		6257	CK48	CI	21.5	15.2	7.7	2.3	"	
4922	" 51	"	30.4	12.5	11.5	3.4	"		6260	"	DI	(28.4)	14.8	8.3	(2.9)	"	下端一部欠
4923	"	"	26.5	12.4	11.6	4.0	"		6356	CR38	CI	20.7	21.0	8.3	3.4	"	
4924	"	"	20.0	8.9	5.2	0.8	"		6378	" 47	"	22.6	16.2	9.4	3.0	"	
5517	CN51	CI	22.6	13.9	5.6	1.4	"		6379	" 45	"	21.2	21.6	6.0	2.7	"	
5519	" 65	CII	17.4	16.6	5.1	1.3	"		6381	CN46	"	30.6	23.3	8.0	5.8	"	
5521	CO54	DI	20.5	14.8	8.4	2.4	"		6382	" 47	DI	29.9	16.2	10.6	4.1	"	
5523	" 61	A(B) I	18.2	3.4	12.7	5.9	"		6387	CO48	"	37.1	16.4	13.2	8.4	"	
5524	" 64	DI	16.5	8.2	8.0	0.9	"		6388	"	"	31.2	16.4	11.6	4.6	"	
5525	" 77	CI	21.0	14.1	9.0	2.7	"		6389	"	BI	29.5	19.8	14.0	7.9	"	
5526	CP61	DI	20.8	8.5	3.5	0.6	"		6390	" 45	"	25.3	23.0	19.5	11.0	"	
5527	" 62	CI	15.4	16.4	3.4	0.9	"		6391	"	CI	20.0	26.4	6.5	3.2	"	
5528	" 85	DI	23.5	11.4	10.6	2.6	"		6393	" 47	DI	30.7	12.3	10.6	2.7	"	
5529	CQ63	CI	15.6	15.1	5.6	1.5	"		6394	CM47	BI	40.6	20.0	13.8	9.8	"	
5530	CR50	CII	22.0	18.6	8.4	2.8	"		6396	" 46	CI	25.1	18.9	10.6	4.6	"	

登録 No.	出 土 地 点	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備 考	登録 No.	出 土 地 点	型 式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備 考
6397	CM46	CII	27.4	21.5	7.7	2.8	ob		6611	DM52	DI	22.8	10.4	5.8	1.5	ob	
6398	CP45	BI	23.4	15.9	12.2	3.7	"		6616	DE55	CI	19.7	12.3	5.0	1.3	"	
6399	" 46	"	31.5	19.5	20.7	7.7	"		6619	DV60	A(D)I	26.4	8.8	12.3	3.1	"	
6403	BV53	CI	12.8	11.8	4.6	0.7	"		6620	" 56	CI	(18.5)	12.1	5.7	(1.4)	"	下端欠
6404	" "	"	(14.3)	14.7	5.2	(1.2)	"	下端欠	6621	DU50	DI	19.2	10.6	8.6	1.3	"	
6414	" 52	DI	27.2	13.7	11.5	3.4	"		6627	DK51	"	(29.5)	15.2	8.3	(3.0)	"	下端欠
6415	" "	CI	19.6	18.5	7.6	2.4	"		6658	" 63	"	29.2	15.3	8.5	3.0	"	
6417	" 51	BI	17.8	13.6	11.0	2.1	"		6661	DL46	"	27.9	12.4	12.0	4.2	"	
6418	" "	CI	21.7	16.0	5.5	1.5	"		6663	" 50	CI	18.6	13.9	6.6	1.5	"	
6419	" "	DI	21.0	11.0	6.7	1.2	"		6666	" 53	"	16.3	18.2	4.8	1.3	"	
6420	" 50	BI	28.8	20.9	15.5	5.1	"		6673	" 55	CIII	20.0	12.8	7.6	1.7	"	
6423	BX43	CI	17.8	16.6	5.9	1.7	"		6687	DM53	BI	32.6	21.5	17.5	10.5	"	
6426	" 51	DI	26.3	12.8	8.4	2.8	"		6691	" 63	CI	21.0	12.8	6.2	1.6	"	
6430	" 52	"	(28.2)	13.7	11.0	(4.0)	"	下端欠	6693	DN49	"	18.2	11.3	4.9	1.0	"	
6431	" "	CI	(22.2)	15.4	5.6	(2.3)	"	"	6694	" 56	"	19.4	19.8	10.6	3.1	"	
6432	" "	"	19.1	17.1	10.5	2.7	"		6697	DU50	BI	27.4	27.2	13.2	10.2	"	
6433	" 54	DI	25.4	10.2	8.9	2.2	"		6712	DE50	CI	18.0	20.0	9.3	3.6	"	
6437	" 59	BI	32.7	20.8	9.7	7.2	"		6719	" 51	"	(20.6)	14.5	8.7	(3.0)	"	下端欠
6442	BY54	DI	42.6	22.5	12.8	8.2	"		6720	" "	CII	24.8	23.2	11.5	5.6	"	
6444	" "	CI	(22.7)	13.4	4.6	(1.7)	"	下端欠	6721	" "	CI	23.8	16.5	8.3	3.1	"	
6449	" 55	"	(19.5)	15.4	8.2	(2.5)	"	"	6724	" 52	DI	31.3	13.0	10.3	3.7	"	
6450	" 56	DI	(30.0)	14.6	7.3	(2.4)	"	"	6726	" 53	CI	(26.8)	16.5	9.3	(3.1)	"	下端欠
6451	" 57	"	24.7	9.9	13.3	2.2	"		6730	" 55	BIII	24.5	32.4	12.3	9.5	"	
6455	" 95	CI	36.2	28.9	10.1	10.5	"		6741	DF32	CIII	41.4	33.5	14.4	20.7	"	
6458	BW51	A(C)I	16.0	18.1	7.8	2.3	"		6745	" 47	BI	26.3	18.6	11.4	5.6	"	
6465	" 52	CI	25.2	21.4	7.2	3.8	"		6757	DG47	CI	17.7	17.5	3.8	1.2	"	
6470	" 56	CIII	19.2	22.3	9.8	3.2	"		6758	" 48	"	19.3	16.4	7.1	2.2	"	
6478	" 97	CI	24.5	13.1	3.7	1.1	"		6764	" 59	DI	(28.6)	10.2	6.3	(2.0)	"	下端欠
6480	" 45	"	20.5	17.4	9.3	2.8	"		6775	DH54	CI	25.1	19.2	8.6	3.2	"	側面にU・f状の剝離
6485	" 60	A(C)I	18.8	16.4	8.5	(3.0)	"	下端一部欠	6779	" 58	A(B)III	25.4	27.6	11.5	8.1	"	
6486	" "	BI	25.5	21.7	11.1	6.2	"		6780	" "	DI	(32.5)	15.0	10.2	5.0	"	下端一部欠
6487	" "	DI	16.9	8.8	5.4	1.0	"		6787	DJ40	BI	19.7	12.5	26.7	1.6	"	
6488	" 59	"	27.0	15.6	13.6	4.2	"		6791	" 46	CI	22.7	18.1	9.6	3.6	"	
6490	" 50	BI	30.6	17.8	19.6	7.9	"		6795	" 52	DI	32.6	11.4	14.4	3.9	"	
6491	" "	CI	26.5	20.8	6.4	2.2	"		6797	" 53	"	26.3	14.6	10.1	3.8	"	
6506	BS55	"	18.9	20.3	4.7	1.7	"		6801	" 54	CII	24.7	12.9	8.0	2.8	"	
6516	BQ59	"	(15.6)	13.4	4.0	(0.8)	"	下端欠	6804	" "	"	22.6	14.1	5.5	1.7	"	
6517	" 57	"	18.9	15.6	3.6	1.0	"		6805	" "	CI	27.5	18.3	9.3	4.4	"	
6518	" 54	"	32.2	21.3	12.2	4.9	"		6808	" 55	BII	17.8	23.0	24.8	10.2	"	
6519	" "	"	17.1	23.7	7.2	2.2	"		6815	" 63	A(C)II	22.7	31.5	13.4	8.7	"	
6522	BP60	"	(35.6)	14.6	8.3	(3.4)	"	下端欠	6820	" 55	CI	14.0	18.9	6.6	1.6	"	
6525	BO63	"	19.1	12.5	4.3	1.2	"		6877	C区Z	BI	27.1	35.9	11.3	10.9	"	図1345
6528	" 61	BI	25.4	23.0	12.2	5.2	"		6951	CB51	CI	(17.8)	12.5	5.3	(1.3)	"	下端一部欠
6529	" 58	CI	22.5	22.5	6.3	3.0	"		7067	CO90	DI	24.1	9.8	4.1	1.0	"	
6530	BN60	BI	21.2	13.6	9.6	2.1	"		7074	Z	A(B)I	17.7	13.9	7.4	2.1	"	
6555	DL-DM	CI	25.6	14.8	6.7	2.9	"	Na7	7160	CE53	CI	(25.5)	19.8	10.1	(4.4)	"	下端一部欠
6574	DA63	A(C)I	20.4	20.6	7.4	3.9	"		7161	BO62	DI	22.2	15.1	8.5	2.4	"	
6577	DC55	DI	28.7	13.5	8.2	2.5	"		7162	DE53	BI	20.2	17.1	10.8	2.6	"	
6578	" 59	CI	19.4	14.3	6.4	1.4	"		7163	CH93	CI	17.8	16.1	5.4	1.6	"	
6579	" "	DI	27.5	11.6	10.1	(3.0)	"	下端一部	7164	" 92	DI	(23.2)	12.6	11.2	(1.8)	"	下端一部欠
6580	" 62	CI	21.7	16.5	6.4	2.2	"		7165	" "	"	(20.5)	5.6	6.1	(0.6)	"	"
6581	DD54	"	20.6	18.8	9.3	2.7	"		7166	DJ43	"	(20.8)	9.6	9.2	(2.2)	"	"
6583	" 55	A(B)I	28.7	18.4	12.3	5.4	"		7167	CL90	CIII	21.7	35.4	14.4	8.1	"	
6585	" 58	DI	19.8	12.0	10.0	2.3	"		7168	CK42	"	(20.1)	20.4	9.2	(3.1)	"	下端欠
6586	" "	BI	26.5	22.3	15.5	6.5	"		7169	CH94	CI	20.2	16.7	8.3	2.6	"	
6587	DE50	CI	22.5	21.0	7.4	3.7	"		7170	" "	"	(16.4)	17.5	4.5	(1.2)	"	下端欠
6588	" 58	DI	24.3	12.1	6.3	1.6	"		7171	CI65	DI	(26.9)	18.4	10.2	(2.8)	"	下端一部欠
6592	DF49	"	24.8	12.5	11.3	2.8	"		7172	" 92	BI	17.3	15.3	8.9	2.0	"	
6594	" 61	BI	34.3	13.0	18.1	13.5	"		7173	CH55	CI	(25.6)	19.1	6.8	(1.9)	"	下端一部欠
6595	" 61	"	23.6	16.1	13.3	4.6	"		7174	" "	"	16.2	18.3	8.3	2.3	"	
6596	DG53	"	15.3	15.7	20.5	10.6	"		7175	" "	BI	22.8	14.8	10.4	3.6	"	
6598	" 62	DI	32.7	7.9	7.4	1.6	"		7176	" 54	CI	24.8	18.9	7.8	4.1	"	
6599	" "	BI	20.7	14.6	12.9	4.5	"		7177	" 46	CI	(22.7)	13.4	5.0	(0.9)	"	下端欠
6600	DH60	A(D)III	28.0	12.3	12.6	4.0	"		7178	CG95	A(B)I	26.5	23.6	13.5	8.3	"	
6601	" 52	BI	25.3	18.3	17.2	6.4	"		7179	" 91	DI	19.4	9.5	7.2	1.3	"	
6606	DJ54	CII	18.2	16.5	5.9	2.0	"		7180	" 62	A(B)I	22.6	23.6	15.0	5.7	"	
6607	DK55	DI	25.7	16.8	8.2	3.7	"		7220	CK60	DI	(27.3)	10.6	8.2	(2.2)	"	下端欠
6608	" 57	DI	(19.6)	10.5	7.4	(1.5)	"	下端一部欠	7221	CL39	D(I)	(16.5)	16.6	8.4	(1.8)	"	"
6609	DL53	"	26.5	9.8	10.6	2.1	"		7222	CT52	DI	(24.7)	12.2	6.2	(1.5)	"	下端一部欠
6610	" 55	CI	20.4	14.2	6.2	1.9	"		7223	CL61	CI	16.7	13.8	7.1	1.5	"	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7241	CK49	CI	28.1	18.8	5.8	2.6	ob	
7242	CM47	BI	35.4	24.3	14.8	9.2	"	
7243	CL51	"	28.1	30.2	15.2	10.4	"	
7244	"	A(B)I	20.3	14.2	13.5	2.1	"	
7245	# 52	DI	30.6	13.0	6.5	1.9	"	
7246	# 53	CI	19.1	12.5	8.1	1.4	"	
7274	CN71	CII	(23.5)	13.8	7.8	(2.1)	"	下端欠
7275	# 55	"	(12.1)	14.3	3.1	(0.5)	"	"
7276	"	CI	21.2	15.3	9.8	2.6	"	
7277	CM92	DI	24.8	11.8	6.8	1.8	"	下端一部欠
7278	"	"	16.8	7.2	5.7	0.6	"	下端欠
7279	"	CI	20.3	16.2	6.2	1.8	"	
7280	"	"	14.1	12.8	5.0	0.8	"	
7281	# 82	"	22.3	14.7	9.2	3.1	"	
7282	# 75	BI	32.8	21.3	15.3	8.3	"	
7283	CN68	CI	24.8	15.6	2.8	2.3	"	
7284	# 88	"	24.0	22.0	6.1	3.9	"	
7291	CD67	BIII	34.6	23.6	14.5	10.6	"	
7292	CU54	CI	18.1	10.7	4.2	0.6	"	
7293	CO89	"	24.3	18.0	7.5	3.0	"	
7341	CR47	DI	35.7	10.0	9.7	2.3	"	
7351	CV70	BI	25.8	20.7	12.6	5.9	"	
7352	CU47	"	18.2	20.0	12.5	3.6	"	
7353	# 48	DI	22.3	12.0	9.2	2.4	"	
7354	"	CI	20.7	15.7	7.3	2.7	"	
7355	# 46	CIII	20.8	20.0	14.7	5.6	"	
7366	CS53	BIII	(26.7)	14.3	5.2	(2.1)	"	下端欠
7357	# 46	"	(19.8)	16.8	3.6	(0.9)	"	"
7358	# 45	"	(17.3)	13.7	5.8	(1.1)	"	"
7359	CT47	"	(15.8)	14.0	6.3	(1.1)	"	"
7360	"	DI	20.6	8.7	7.2	1.3	"	
7361	# 49	BI	27.8	21.3	14.3	8.8	"	
7362	CU44	CI	21.5	20.2	6.4	2.9	"	
7363	CS79- 81	"	18.8	15.8	6.8	1.6	"	
7364	CT45	BI	28.3	25.5	15.6	6.2	"	
7365	"	A(B)I	23.1	17.3	12.1	4.9	"	
7366	CU45	CI	17.2	13.8	5.8	1.1	"	
7367	CR57	DI	28.7	12.0	10.6	4.0	"	
7368	CV48	CI	24.8	30.1	8.6	4.6	"	
7369	"	BII	31.0	18.6	12.7	7.2	"	
7370	CP72	CI	17.9	17.1	5.6	1.3	"	
7371	CF93	"	22.0	18.6	7.1	2.2	"	
7372	CQ81	BII	19.7	19.8	8.9	2.8	"	
7373	C区Z	BI	27.8	22.3	14.1	7.1	"	
7421	CX68	BI	27.5	21.3	12.0	5.7	"	
7422	CF59	A(C)I	18.9	13.3	7.3	1.9	"	
7423	CT93	CIII	18.7	27.4	13.1	4.8	"	
7424	CC58	BI	22.9	18.2	10.0	4.2	"	
7425	"	DI	18.5	5.8	5.1	0.5	"	
7426	"	BIII	26.2	19.0	10.7	4.6	"	
7427	"	CII	19.8	12.9	5.2	1.5	"	
7428	CX36	DI	(18.2)	11.3	7.1	(1.0)	"	下端欠
7429	# 44	CI	(25.8)	14.8	6.7	(2.1)	"	"
7456	CC60	DI	31.8	13.3	4.8	1.3	"	
7457	"	CI	16.5	12.6	5.2	1.0	"	
7458	"	"	16.8	12.8	4.8	0.9	"	
7459	"	"	12.3	14.0	2.6	0.5	"	
7460	# 62	BI	25.3	21.5	12.0	4.3	"	
7461	# 63	CII	31.5	35.7	8.3	9.8	"	
7462	# 93	BI	30.8	22.5	15.6	7.2	"	
7463	# 94	CI	21.8	14.7	4.2	1.1	"	
7477	CA62	"	14.7	14.6	3.4	0.7	"	
7480	CB56	BI	21.8	14.5	10.3	2.9	"	
7481	CD54	DI	17.0	11.6	7.3	1.3	"	
7482	CB56	"	20.0	17.0	6.4	1.6	"	
7483	"	"	20.8	16.7	7.6	2.0	"	
7484	CA95	"	22.3	9.8	6.8	1.5	"	
7485	# 62	"	25.3	12.6	6.0	1.9	"	
7486	# 48	CI	15.7	20.2	5.0	1.1	"	
7487	CD93	"	26.0	22.3	7.8	4.6	"	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7489	CQ90	A(C)I	31.0	27.3	10.1	7.2	ob	
7539	DB55	BI	(12.5)	(23.3)	(13.2)	(2.9)	"	半欠
7540	CB94	DI	30.7	11.7	5.8	2.9	"	
7541	"	"	25.7	14.0	5.5	2.4	"	
7542	# 63	"	24.3	8.9	6.5	1.5	"	
7543	# 62	CI	22.7	15.0	7.8	2.5	"	
7544	"	"	13.6	8.5	3.5	0.5	"	
7545	# 59	BI	24.8	17.6	10.8	3.5	"	
7546	"	CI	16.7	15.2	4.2	1.0	"	
7547	# 57	DI	14.3	14.7	12.3	2.2	"	
7548	"	"	25.6	14.5	7.2	2.9	"	
7565	CC62	"	19.3	6.7	3.4	0.6	"	
7586	DC48	"	(21.3)	11.3	9.7	(2.2)	"	
7587	DD36	CI	21.8	21.6	5.1	1.9	"	
7588	F区Z	A(C)I	29.8	26.3	12.2	6.6	"	
7609	DD50	DI	27.2	13.3	8.5	3.1	"	
7610	# 53	"	34.8	12.3	3.0	1.0	"	
7611	"	BI	24.5	19.7	10.1	4.8	"	
7612	"	DI	29.7	9.8	4.4	1.3	"	
7631	DF56	CI	21.2	18.9	6.0	2.5	"	
7632	DE45	"	13.5	11.5	6.0	0.9	"	
7633	DD46	DI	33.7	20.0	12.7	6.9	"	
7634	DE60	BI	30.3	18.9	10.5	6.1	"	
7635	"	CIII	19.0	16.2	5.0	1.5	"	
7636	# 62	DI	33.2	12.6	7.1	2.6	"	
7637	DF52	BI	15.8	25.6	15.0	4.7	"	
7700	DG38	DI	23.8	14.0	8.3	1.8	"	
7701	# 55	"	21.0	9.3	4.2	0.8	"	
7702	DL55	"	27.8	17.6	9.5	3.6	"	
7703	# 57	CI	18.8	15.2	4.8	1.2	"	
7704	# 59	"	25.3	16.3	8.6	3.3	"	
7705	# 60	"	14.1	8.0	3.2	0.4	"	
7706	# 62	DI	26.4	9.3	9.0	1.6	"	
7707	"	CI	26.6	16.3	8.2	4.0	"	
7708	DM56	"	28.2	15.2	8.0	3.7	"	下端欠
7709	# 57	"	26.0	16.2	7.4	5.1	ch	
7710	DO43	DI	26.6	16.3	7.5	3.2	ob	
7711	DQ51	CI	21.5	15.7	6.2	1.7	"	
7712	DS44	CIII	18.2	20.6	10.0	3.4	"	
7713	# 46	CI	20.2	16.6	5.2	1.3	"	
7714	DW56	DI	20.7	10.5	10.0	2.6	"	
7747	EF58	CI	17.8	16.3	8.7	2.4	"	
7748	EH48	"	25.2	19.4	8.3	4.3	"	

複数挟入石器

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1662	CG47	22.3	19.6	5.0	1.9	ob	挟入6
2430	BU49	39.7	28.0	6.8	5.8	"	挟入8 つまみつき 図1285
5978	CT68	22.0	20.5	6.3	2.1	"	挟入3
6272	BX53	41.2	23.3	9.1	5.4	"	挟入3?

有挟頭磨石器 \* ◎顕著 ○有

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	使用痕	備考
4	CS61	22.1	14.5	4.1	1.1	○	図1387
493	BW52	(52.6)	(28.4)	10.3	(10.8)	◎	図1370
1648	CE64	33.0	19.6	7.3	4.0	◎	図1376
1891	CS39	25.7	17.8	6.8	2.5	◎	図1379
1943	CT67	33.8	23.5	8.7	4.6	○	図1375
2206	CO53	25.0	15.8	3.5	1.4	○	
2240	CL57	38.2	26.2	12.0	8.5	○	
2350	BO57	30.1	23.5	8.4	3.7		
2428	BU49				3.1		遺物紛失
2517	BV51	38.9	28.2	5.5	5.2	○	図1373
4397	CM89	33.7	21.2	5.5	3.5	◎	図1377
4507	CL57	44.7	24.7	9.3	7.5	○	図1372
4545	IR0	15.6	17.4	4.8	1.2		図1386
4562	BS50	38.2	18.5	6.1	3.2	○	
4778	D区Z	22.0	18.2	6.1	1.8	○	



打製石斧・横刃型石器

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	使用痕	備考
4873	E区Z	23.8	15.2	5.1	1.8	◎	図1382
5932	CP63	27.2	13.4	6.8	1.8		図1383
5954	CR62	23.0	17.4	5.5	2.1	◎	図1380
6078	BP60	24.6	12.0	3.2	0.9	◎	図1388
6096	BR53	25.9	21.2	4.0	1.5	◎	図1384
6117	BS55	24.6	20.9	5.7	2.0		
6304	DK58	45.2	26.1	11.8	12.5	◎	図1369
6327	CH51	53.2	34.5	12.9	18.7	○	挟入2対 図1368
6361	CR86・87	16.6	17.0	3.7	0.8	○	図1389
6406	BV53	37.1	18.7	9.8	5.1	◎	図1374
6409	" 52	30.3	23.8	8.5	4.5	○	
6459	BW51	30.2	20.0	7.6	3.2	○	図1378
6469	" 54	44.8	19.3	7.8	6.9	○	図1371
6631	DK54	26.0	16.3	5.5	1.8	○	図1381
6772	DH49	26.4	15.3	11.5	2.1	◎	
6826	BW59	45.1	19.0	10.7	6.1	○	
6969	CC54	19.6	16.5	3.4	0.9		
6970	CA54	19.8	10.0	3.5	0.7	○	図1390
6971	BY53	18.6	16.9	4.5	1.4	○	図1385
7263	CN38	19.3	18.0	3.8	1.2	○	
7615	DF49	25.9	21.6	6.1	3.4	◎	

石核状石器

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1496	BU60	12.0	37.8	10.7	4.0	ob	
1533	CB60	20.9	19.3	10.8	3.7	"	
1573	CA36	22.6	28.7	14.8	6.8	"	
1606	CE47	18.6	26.0	8.7	4.0	"	
1693	CN57	23.4	40.0	15.4	10.1	"	
1746	CL92	22.2	33.6	5.3	4.8	"	
1748	CG50	25.5	29.2	19.8	14.1	"	両面
1774	CH59	21.7	49.7	11.6	13.1	"	
1807	CY40	20.6	27.8	8.8	4.6	"	
1820	CX54	22.0	28.5	11.2	7.4	"	
1863	CO49	21.0	26.0	6.8	2.9	"	
1905	CS48	18.8	22.5	10.2	4.6	"	
1953	CU63	22.7	21.8	12.5	5.5	"	
2644	CG57	42.0	95.0	25.0	7.4	"	
3070	CO89	19.5	30.8	16.1	8.3	"	両面
4312	CD55	28.3	31.0	8.8	7.8	"	
4353	C区Z	20.2	30.5	12.4	7.7	"	
4354	"	20.5	40.0	11.4	10.9	"	
4449	CF95	19.5	34.3	10.3	5.0	"	両面
4524	BP60	17.7	29.1	8.6	4.2	"	
4639	DB49	16.0	22.3	8.7	3.5	"	両面
4989	DI55	13.8	36.3	14.8	6.4	"	
5812	CF58	25.4	45.2	12.3	13.6	"	
5813	CG63	20.3	31.5	11.3	7.3	"	
5881	CM61	14.1	32.3	8.3	3.6	"	両面
5911	CO50	14.2	27.8	11.3	3.1	"	
5995	CY63	19.3	39.0	11.5	7.9	"	
6093	BQ60	15.8	23.6	6.5	3.1	"	
6286	DT57	16.0	22.7	7.3	3.0	"	
6632	DK54	24.0	45.7	10.3	10.2	"	
6685	DM50	19.3	26.7	12.2	6.7	"	両面
6742	DF33	22.4	29.3	10.2	6.7	"	
6750	" 50	20.2	25.5	8.2	4.7	"	両面
6777	DH56	22.3	33.8	13.2	8.0	"	両面
7235	CK49	15.8	52.6	11.2	9.2	"	両面
7254	CN55	20.3	55.0	10.2	10.2	"	
7591	DC48	26.7	38.2	16.8	12.5	"	両面
7638	Z	22.8	45.8	23.3	19.4	"	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
15	CL59	横刃B	5.0	(7.0)	1.5	(57)	Ry	刃端部欠
42	EC55	横刃C	4.7	8.9	9.0	40	"	
108	Z	横刃B	5.4	9.9	1.3	60	不明	図1457
119	DH51	AIIIb	7.6	3.8	1.1	40	"	
213	DT62	—	(9.1)	(5.2)	(2.1)	(95)	Ry	基部破片
259	DJ35	横刃B	3.6	5.7	1.6	40	"	図1465
275	DA34	BIIa	(10.6)	4.4	1.9	(100)	ad	先端欠 図1430
301	CA50	横刃A	(4.1)	(8.4)	(1.9)	(65)	Ry	刃部のみ
307	CH54	—	(8.5)	(4.8)	(1.0)	(45)	不明	
558	BX60	横刃A	5.2	9.2	1.9	116	"	図1453
587	DG49							No3308と接合
589	DF49	AIIIa	8.7	4.4	1.1	55	Gs	
595	CC54	AIIb	10.6	5.2	1.3	90	"	図1416
615	CB56	A-b	(8.9)	5.7	1.2	(70)	"	先端欠
641	DF46	横刃C	6.4	10.5	1.2	80	ss	図1456
649	"	横刃B	7.6	10.8	2.3	175	"	図1458
720	DP47	A--	(11.2)	(4.5)	1.6	(80)	Gs	刃部欠
731	DH46							No4653と接合
750	CH50	AIIIb	9.0	4.9	1.4	70	Ry	
832	DA47	BIIa	(10.3)	5.0	2.1	(135)	"	先端欠 図1432
963	CS46	A Ia	(9.1)	10.9	2.5	(360)	"	図1414
968	CR46	AIIIc	7.4	4.3	0.9	30	不明	
987	CF49	CIIc	11.7	5.9	2.4	170	ss	図1422
989	"							No4280と接合
1041	CK54		(5.2)	(4.3)	(1.5)	(40)	不明	先端破片
1055	CU57	AIIIc	8.9	4.1	0.9	50	Gs	図1425
1060	CR56	CIIb	10.4	8.6	1.3	165	Ry	図1446
1097	" 50	横刃B	4.2	7.5	2.0	64	ss	図1459
1154	" 56	AIIIc	9.1	5.0	1.8	85	Ry	図1421
1155	"	AIIb	10.1	4.6	1.2	60	"	
1158	CP59	A Ia	13.1	5.8	2.4	250	"	磨製石斧を転用 図1411
1390	B区Z	横刃C	3.9	6.6	0.9	35	磨製石斧を転用	図1411
1394	D区Z	B-C	(8.0)	4.8	1.7	(90)	Ry	半欠
1395	"	AIIIb	8.4	4.8	1.6	65	"	
1396	"	—	(3.2)	(5.0)	(0.9)	(15)	"	先端欠
1401	FS26	AIIc	10.3	6.7	1.3	105	"	図1426
1403	FH47	CIIIb	8.1	5.4	1.5	80	ss	図1442
1404	DX59	B--	(10.0)	5.7	3.0	(193)	不明	刃部欠
1405	DV61	CIIa	9.0	6.3	1.5	95	Ry	図1441
1406	FH47	CIIb	9.9	7.5	1.6	105	ss	図1443
1407	EV59	C Ib	(12.8)	8.0	2.6	(240)	Gs	先端欠
1408	DX51	—	(7.2)	(5.4)	(1.5)	(90)	Ry	No1 先端破片
1409	" 59	C-B	(7.9)	7.2	1.5	(95)	Gs	先端欠
1410	" 49	横刃A	7.2	9.5	1.8	195	"	
1411	CS62	横刃C	5.3	7.4	1.3	65	不明	
1412	DC48	—	(7.0)	(4.4)	(1.1)	(40)	Ry	基部破片
1413	DE32	B--	(8.5)	5.7	2.3	(135)	不明	刃部欠
1414	DB40	—	(4.3)	(4.6)	(1.1)	(25)	Sh	刃部破片
1415	Z	横刃B	6.6	8.9	1.8	145	ss	図1451
1416	CT43	BIIIa	7.8	5.0	1.2	70	Ry	図1440
1776	CH60	横刃C	5.3	8.6	1.0	60	"	
1782	CK39	—	(4.5)	(4.3)	(0.7)	(20)	Gs	基部破片
1789	" 51	横刃A	3.7	6.9	2.4	80	Ry	
1868	CO57	A--	(8.1)	(4.2)	1.0	(50)	Gs	刃部欠
1942	CT64	AIIc	11.8	5.2	2.2	160	Ry	
1991	CV53	A-b	(6.7)	4.3	0.8	(55)	不明	半欠
2014	DE54	BIIIc	8.7	4.4	1.7	90	ss	図1434
2031	DL54	BIIIa	9.1	5.8	0.9	65	Ry	図1433
2120	DD59	B--	(7.6)	4.5	1.4	(60)	不明	半欠
2133	" 60	—	(5.7)	(4.4)	(1.5)	(45)	Ry	
2261	BW59	—	(11.4)	(6.8)	(2.7)	(180)	Ad	刃部のみ
2266	"	AIIIb	9.7	4.4	1.2	60	ms	
2291	BR58	CIIb	12.4	7.8	2.8	350	Ry	図1445
2313	BS56	"	11.0	5.5	1.1	110	"	図1444
2316	"	—	(3.7)	(4.0)	(1.3)	(25)	"	
2386	BT51	BIIIc	(9.2)	4.2	1.2	(80)	Gs	先端欠 図1439
2394	BU51	AIIc	10.5	4.0	1.8	90	Ry	図1427
2402	BQ51	横刃B	4.2	7.4	1.6	55	不明	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
2573	CG51	BIIc	11.4	6.0	3.1	220	ss	図1436
2604	CE53	A-a	(5.2)	5.5	1.1	(40)	不明	半欠
2668	CF57	A Ia	6.6	13.9	1.6	220	Gs	図1410
2782	BV70	—	(6.7)	(5.0)	(1.3)	(7)	—	基部破片
2976	CW49	B--	(8.1)	4.3	1.8	(57)	不明	刃部側半欠
3058	CQ79	AIIIb	7.6	7.4	1.9	130	Ry	図1419
3081	BW86	AIIIa	9.7	7.8	1.7	170	—	図1418
3090	CD93	AIIa	12.1	5.4	1.7	125	不明	No7079と接合
3100	BW97	—	11.3	7.8	3.2	320	変質安山岩	
3205	CF90	横刃A	10.7	11.8	2.4	505	Gs	図1449
3229	CF92	DIIb	15.0	8.3	2.3	320	Ry	図1448
3308	DK44	A I b	14.9	6.3	2.2	245	Ry	No587と接合
3319	DO41	AIIIc	9.3	4.0	1.7	70	Ry	図1413
3322	DQ42	BIIIc	8.6	5.0	1.5	85	不明	図1438
3405	BP46	DIIa	10.5	11.2	2.1	260	ss	図1437
3415	BS41	CII-	(9.5)	6.1	0.9	(75)	Gs	先端欠
3482	CO42	AIIIb	9.1	4.2	0.9	50	—	
3553	DJ41	—	(7.2)	(4.2)	(1.5)	(50)	Ry	基部破片
3597	DI42	—	(3.1)	(4.7)	(0.5)	(10)	不明	刃部破片
3711	DB43	AIIc	10.5	5.7	1.3	93	Ry	
3822	CW40	B	9.0	4.5	0.9	50	—	
3832	DA36	AIIIb	(9.8)	4.6	2.1	(105)	Gs	先端欠 図1417
3833	CY35	BIIIb	(8.0)	5.2	1.3	(75)	Ry	—
3875	EI40	BIIIa	(7.8)	3.4	1.0	(40)	変質安山岩	—
3878	EH44	CIIb	9.4	6.7	0.8	70	Gs	
3893	DR40	A--	(9.8)	(4.6)	1.1	(75)	ms	刃部欠
3894	DS40	AIIb	11.3	4.1	1.3	70	Gs	側面一部欠
3903	ET42	横刃C	6.1	10.9	1.9	140	Ad	
3966	CR42	横刃A	7.1	12.4	2.2	310	Gs	図1450
3970	CL43	横刃C	4.2	7.1	1.2	50	不明	図1462
3995	CB41	AII-	(10.4)	6.3	2.2	(160)	Gs	刃部欠 図1423
4002	CQ47	AIIIc	9.0	4.9	1.2	55	Ry	図1424
4078	CL46	横刃A	18.2	9.4	3.0	685	不明	No6551と接合
4085	CH47	AIIIb	9.8	5.7	1.8	125	—	No4087と接合
4087	—	—	—	—	—	—	変質安山岩	No4085と接合
4089	—	AIIa	10.5	5.0	2.1	170	Gs	磨製石斧の転用 図1412
4280	CE49	CIIIb	10.3	4.8	1.0	75	Ry	No989と接合
4305	DK48	BIIb	(11.7)	5.0	2.1	(140)	ss	先端欠 図1431
4653	DB55	A I c	14.2	5.8	2.0	215	—	No731と接合
4656	# 59	—	(3.7)	(4.6)	(0.7)	(20)	変質安山岩	刃部破片
4663	DC37	AIIIa	9.1	5.5	1.2	74	Ry	
4664	EB58	A-c	(8.9)	4.6	1.8	(68)	—	先端欠
4750	DR41	C--	(5.8)	5.8	1.5	(65)	不明	
4766	DV57	A-b	(9.2)	7.5	0.9	(82)	Ry	先端欠
4789	FJ46	BIIac	7.1	3.4	1.5	60	Bs	
4795	FR24	—	(4.8)	(4.5)	(1.2)	(30)	—	
4800	FS23	A-c	(9.2)	(5.0)	(2.4)	(130)	ss	
4804	FT36	A-b	(8.3)	5.5	1.1	(75)	Gs	先端欠
4833	ED39	B-a	(7.2)	4.8	1.8	(75)	Ry	半欠
4879	Z	横刃A	6.8	9.2	1.8	140	Gs	
5654	DL51	—	4.7	7.2	1.5	70	Ry	
5685	DP62	—	(5.5)	(5.1)	(1.3)	(30)	—	刃部破片
5715	EC52	AIIIb	8.7	5.1	1.4	70	An	
5718	CC56	横刃C	5.8	8.4	0.7	45	Bs	図1455
5719	EC58	B-b	(8.0)	5.7	2.0	(120)	不明	半欠
5721	ED50	横刃C	4.4	8.8	0.6	35	Bs	図1463
5723	EI60	横刃B	4.7	12.2	2.0	115	Ry	
5726	EM59	横刃C	5.1	10.3	0.8	50	—	
5744	EP59	横刃B	8.0	8.2	2.0	160	ss	
5844	CK49	BIIIc	9.5	4.0	2.6	117	—	
5867	CL54	BIIIa	7.2	5.7	2.1	105	—	
5928	CP54	—	(4.9)	(4.5)	(1.7)	(55)	Ry	
5950	CR58	横刃C	3.6	6.5	1.2	40	Cs	
5992	CY57	—	3.1	4.4	0.7	14	変質安山岩	
6144	BW50	AIIIb	8.4	4.7	0.9	42	ms	
6227	CC50	—	(4.1)	(4.7)	(1.1)	(35)	Ry	
6317	Z	—	(5.0)	5.9	1.4	—	—	
6330	BT99	AIIIb	10.0	5.1	1.8	105	—	
6331	# 52	B--	(9.8)	3.6	1.3	(60)	Gs	刃部欠
6347	CG52	A--	(9.8)	(5.3)	1.1	(75)	不明	—

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
6541	CA57	横刃B	6.0	9.1	1.4	11.5	不明	No13
6551	DJ56	横刃A	9.4	11.6	2.0	27.0	Gs	No4078と接合
6554	DL42	横刃B	4.8	7.2	1.4	7.0	Ry	No5
6561	DN57	AIIIb	8.9	5.2	1.0	7.5	Gs	No13
6570	DU58	—	8.5	7.6	2.4	150	ss	No47
6982	BV56	—	(7.5)	(5.4)	(0.8)	(45)	変質安山岩	刃部破片
7079	Z	—	—	—	—	—	—	No3090と接合
7116	FT37	BIIa	(10.5)	4.9	2.1	(150)	ss	先端欠 図1429
7117	DW60	B I c	13.0	5.0	2.3	285	Ry	図1435
7118	DY55	A--	(9.6)	(4.8)	2.4	(160)	Gs	刃部欠
7393	BT45	—	(7.1)	(6.2)	(1.8)	(81)	不明	刃部破片
7731	DL55	—	(5.7)	(3.4)	(0.7)	(18.2)	—	
7732	DM46	—	(3.0)	(3.3)	(0.4)	(6.3)	—	
7733	DQ62	—	(6.6)	(3.3)	(1.2)	(32.1)	—	
7734	DS41	—	(5.8)	(4.8)	(1.3)	(42.5)	—	
7750	EJ53	—	(5.0)	(4.8)	(1.2)	(40.3)	—	
7804	ER26	CIIIb	9.2	6.7	1.7	100	—	
9003	ET55	—	(5.0)	(6.0)	(1.4)	40	ss	旧No5776
9004	ES57	—	(5.7)	(4.9)	(0.9)	42	不明	
9035	Z	AIIIc	9.5	5.7	1.4	—	Ry	旧No8305

磨製石斧

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
28	DS53	A I b	(13.0)	(5.6)	(3.1)	(390)	Ry	図1490 B3
35	EB54	定角	(9.9)	(5.5)	(3.0)	(240)	ch	b3
45	DP52	AII	(11.1)	(4.2)	(2.2)	(240)	Ry	No588と接合 D1
54	DK61	—	(9.5)	(3.8)	(2.4)	(110)	di	
60	DG63	定角	(11.4)	(5.5)	(2.4)	(225)	Ry	図1498 D3
79	# 57	—	(9.0)	(3.8)	(3.0)	(115)	—	A3
87	DE60	A I	(12.1)	(6.1)	(3.2)	(395)	—	D3
131	DK50	—	(9.4)	(5.0)	(4.0)	(235)	di	b1
144	DB55	AII	(11.3)	(4.2)	(3.0)	(210)	Ry	b1
158	DD55	小形	3.7	2.2	0.9	10.3	—	図1532 磨製石斧の破片再利用
165	CY54	A I	(17.7)	(7.9)	(5.2)	(955)	—	D3
171	DC55	—	(7.8)	(2.6)	(3.0)	(55)	—	E3 火熱痕あり
272	EJ72	定角	(6.4)	5.0	1.8	(100)	di	図1521
363	CA55	A I	(12.1)	(6.6)	(3.5)	(205)	Ry	b2
385	BY55	—	(8.5)	(3.4)	(2.1)	(80)	—	D3
405	# 59	AII	(13.0)	(4.4)	(3.1)	(220)	—	c3
467	BW59	—	(7.6)	(4.1)	(1.6)	(70)	—	E3
529	# 58	定角	(4.8)	(4.2)	(2.3)	(55)	—	A3
540	BV57	—	(3.4)	(2.5)	(1.3)	(15)	—	a2
542	BU57	定角	8.2	3.5	1.1	47	不明	図1518
579	CG56	定角	(1.8)	(3.3)	(0.4)	(4)	—	
588	DC48	—	—	—	—	—	—	No45と接合
592	DD46	—	(4.1)	(3.1)	(1.3)	(20)	Ry	a1
593	CD52	AIIIc	(10.3)	(4.2)	(2.2)	(160)	—	A1 図1486
618	CC58	—	(6.1)	(3.4)	(1.2)	(24)	—	E3
650	DF46	—	(4.9)	(6.1)	(2.1)	(75)	di	a2
653	DH49	AII	(14.1)	(5.0)	(3.0)	(275)	Ry	b2 火熱痕あり
664	CB50	—	(6.7)	(2.7)	(2.3)	(50)	Ss	D3
708	CG51	—	(9.2)	(4.1)	(1.8)	(95)	Ry	No6256と接合 D3
782	DD48	—	(5.9)	(3.4)	(2.5)	(60)	—	a2
789	DN46	—	(8.8)	(4.3)	(3.1)	(142)	—	b1
805	CD57	A I b	(12.2)	5.7	2.9	(335)	—	E3
808	# 58	—	(10.0)	(1.4)	(2.2)	(25)	—	
827	CO45	—	—	—	—	—	—	No3325と接合
893	CU49	定角	(5.9)	(4.8)	(2.1)	(105)	不明	D3
896	CV47	—	(5.6)	(6.3)	(1.3)	(50)	Ry	E3
950	CQ46	—	(7.6)	(6.3)	(3.4)	(242)	—	D1
957	CD49	—	(10.0)	(1.6)	(2.6)	(50)	—	E3
959	# 47	定角	(8.4)	(7.7)	(2.4)	(220)	—	図1502 B3
978	CL49	AII	(8.9)	(3.9)	(2.5)	(110)	—	a2 火熱痕あり
1046	CT52	BII	(13.5)	(5.0)	3.0	(350)	—	D1
1054	CI53	A I c	(10.6)	6.2	(3.5)	(385)	—	図1493 B1
1120	CQ60	—	(7.3)	(3.9)	(3.6)	(90)	—	A3
1332	BV52	A I	(11.5)	(5.6)	(3.3)	(380)	—	D2 火熱痕あり、中央に敲打痕
1340	DC60	—	(3.4)	(3.5)	(1.9)	(35)	—	
1342	DV57	定角	(3.1)	(3.3)	(1.2)	(15)	不明	

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1343	BQ53	—	(4.8)	(3.3)	(2.5)	(40)	E <sub>2</sub>	
1351	“	—	(4.4)	(1.4)	(0.7)	(5)	Ry	E <sub>3</sub>
1356	Z							No3459、土718と接合
1357	C区Z	定角	(5.4)	(4.9)	(2.6)	(90)	Ry	D <sub>1</sub>
1358	D区Z	AIIc	(13.4)	(4.9)	2.4	(265)	“	c <sub>2</sub> 刃部再生
1359	“	A I	(11.4)	(5.9)	(3.4)	(295)	不明	b <sub>2</sub>
1402	CY41	“	(17.2)	(6.0)	(3.5)	(565)	Ry	ひものあとを残る E <sub>3</sub> 図1504 火熱痕あり
1417	CC53	“	(12.2)	(5.1)	(3.0)	(245)	“	b <sub>2</sub>
1418	DM42	“	(12.3)	(6.0)	(3.3)	(385)	“	B <sub>1</sub>
1419	EA53	BIIIc	(8.8)	(3.2)	(2.2)	(105)	“	図1497 B <sub>1</sub>
1421	Z	BIII	(9.1)	(4.2)	(2.0)	(130)	“	B <sub>1</sub>
1422	C区Z	AIII	(7.9)	(4.4)	(2.3)	(100)	“	E <sub>3</sub> 火熱痕あり
1423	DW55	“	(10.4)	(4.2)	(2.5)	(190)	“	B <sub>1</sub>
1424	DB57	B I a	21.3	6.7	3.7	865	“	図1475
1426	DC62	A I	(11.2)	(5.7)	(3.0)	(255)	“	No.1 ひものあとを残る 図1505
1427	DW56	“	(12.9)	(4.7)	(3.6)	(245)	“	No.5 b <sub>2</sub> 火熱痕あり
1428	Z	“	(8.5)	(5.4)	(3.4)	(220)	“	D <sub>2</sub>
1429	CG55	“	(14.9)	(5.9)	(3.3)	(385)	“	b <sub>2</sub>
1430	CV85	—	(6.8)	(5.8)	(2.2)	(90)	“	E <sub>3</sub>
1431	DE53	—	(4.6)	(6.3)	(1.5)	(45)	“	A <sub>2</sub>
1433	CV70	A II	(8.3)	(4.0)	(2.7)	(125)	“	b <sub>1</sub>
1434	“68	—	(10.3)	(4.2)	(2.6)	(140)	“	b <sub>3</sub>
1435	DF55	A I	(9.8)	(5.2)	(3.2)	(220)	Ry	D <sub>1</sub>
1436	“36	“	(12.2)	(7.1)	(4.7)	(545)	“	D <sub>3</sub> 火熱痕あり
1437	DO61	—	(4.9)	(3.8)	(2.5)	(70)	“	a <sub>1</sub>
1438	DQ57	A I	(11.2)	(5.4)	(3.1)	(290)	“	b <sub>1</sub> 火熱痕あり
1439	D区Z	—	(6.2)	(3.0)	(1.7)	(40)	“	E <sub>3</sub>
1440	EA58	—	(6.8)	(4.1)	(3.0)	(115)	“	No.4 a <sub>1</sub> 先端スリ
1441	“57							No.7000 63住-570、 66住-2734と接合、E <sub>3</sub>
1442	EB56	—	(7.0)	(3.8)	(2.2)	(45)	di	No.11 E <sub>3</sub>
1443	ED52	A II c	(8.9)	(4.5)	(2.5)	(190)	Ry	D <sub>1</sub>
1444	DD58	AIII	(8.8)	(4.2)	(2.1)	(130)	“	B <sub>2</sub>
1445	DI52	A I c	(9.0)	(5.7)	(2.7)	(200)	“	“ 火熱を受ける
1446	CT50							15住 No55と接合 C <sub>1</sub>
1456	DJ54	定角	(6.1)	(4.6)	(2.4)	(70)	ch	A <sub>3</sub>
1477	BX59	—	(2.0)	(3.5)	(2.7)	(15)	Ry	E <sub>3</sub>
1515	CA55	—	(5.2)	(2.7)	(1.4)	(25)	di	“
1536	BU58	—	(4.6)	(4.6)	(1.7)	(40)	Ry	“
1597	CE46							No.2457、No.4122、No.6188 と接合
1616	“50	—	(3.6)	(2.7)	(1.1)	(10)	Ry	E <sub>3</sub>
1665	CG48	—	(2.8)	(2.6)	(0.6)	(5)	“	“
1668	“49	—	(3.4)	(2.5)	(1.0)	(10)	“	“
1741	CL90	—	(4.5)	(1.8)	(0.9)	(10)	“	“
1757	CG57	—	(5.9)	(4.4)	(0.9)	(42)	“	“
1768	CG93	—	(4.0)	(3.7)	(0.8)	(15)	“	“
1769	CH46	—	(6.4)	(2.3)	(4.2)	(70)	“	“
1790	CK53	—	(5.5)	(4.6)	(2.8)	(90)	“	“ 火熱を受ける
1832	CW50	—	(6.2)	(3.9)	(2.0)	(55)	“	“
1870	CO60	—	(6.5)	(4.2)	(2.2)	(75)	di	a <sub>1</sub>
1909	CS53	—	(4.7)	(2.7)	(0.5)	(10)	Ry	E <sub>3</sub>
1933	CT52	—	(4.3)	(1.0)	(0.9)	(5)	“	“
1976	CV39	—	(2.9)	(3.0)	(0.7)	(10)	“	“
1992	“65	定角	(8.3)	(4.5)	(1.7)	(65)	“	変質 安山岩 図1522
2015	DH50	A I	(9.8)	(5.5)	(4.7)	(360)	Ry	b <sub>2</sub>
2041	DJ53	—	(5.6)	(4.2)	(2.1)	(85)	不明	“
2156	CM56	A I	(17.1)	(6.1)	(3.5)	(460)	di	No.2642と接合 C <sub>2</sub>
2171	DK55	A II	(11.7)	(5.1)	(2.6)	(220)	Ry	b <sub>2</sub>
2200	CL52	—	(5.7)	(3.4)	(0.5)	(17)	“	E <sub>3</sub>
2201	CS50	定角	(5.2)	(4.8)	(2.3)	(110)	“	B <sub>1</sub> 図1496
2217	CT51	A I	(15.9)	(6.5)	(3.8)	(570)	“	c <sub>1</sub>
2219	CS52	A II c	(17.0)	(4.6)	(2.8)	(325)	“	図1473 No.2593と接合
2247	BY62	—	(6.1)	(3.4)	(0.9)	(20)	“	E <sub>3</sub>
2258	“60	B II	(12.0)	(4.0)	2.7	(210)	“	c <sub>1</sub>
2298	BS58	A II b	(11.0)	(4.8)	(2.8)	(240)	“	B <sub>1</sub> 火熱痕あり
2312	BQ56	A I b	(10.5)	6.2	(3.9)	(350)	“	No.5736と接合 A <sub>3</sub>
2324	CA62	A II	(14.2)	(4.4)	(3.0)	(240)	“	b <sub>2</sub> 火熱痕あり
2358	BN50	—	(6.8)	(4.2)	(2.3)	(85)	“	A <sub>2</sub> “
2382	BT53	—	(4.9)	(3.1)	(2.4)	(55)	“	A <sub>3</sub>
2388	BS53	A II	(13.0)	(4.7)	(3.1)	(295)	“	D <sub>2</sub>
2411	BY50	A I	(9.5)	(5.9)	(3.3)	(230)	“	“

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
2442	BR49	—	(9.5)	(4.1)	(2.1)	(90)	“	E <sub>3</sub>
2457	“48	A I	(18.5)	(5.9)	(3.8)	(475)	“	No.1597、No.4122、No.6188 と接合 D <sub>3</sub>
2487	CA60	小形	5.5	3.5	1.0	34	不明	図1523
2529	“56	“	4.0	2.8	0.7	21	Sp	図1533
2558	CF55	A II	(11.0)	(4.9)	(2.9)	(215)	Ry	b <sub>2</sub>
2571	CG51	“	(10.0)	(5.2)	(3.0)	(220)	“	“ 先端再生 火熱痕あり
2574	“57	—	(4.6)	(1.7)	(3.6)	(35)	“	E <sub>3</sub>
2579	CH55	定角	(7.0)	8.5	(2.9)	(225)	“	図1499 B <sub>1</sub>
2580	“53	BIII	(9.1)	(3.9)	(2.1)	(150)	Ry	B <sub>1</sub> 図1485
2583	CA56	(A I)	(8.5)	(6.0)	(2.1)	(125)	“	B <sub>2</sub>
2592	CH50	—	(2.8)	(2.5)	(1.7)	(10)	“	E <sub>3</sub>
2593	“							No.2219と接合
2615	CB51	—	(6.2)	(5.4)	(1.8)	(7.0)	di	E <sub>3</sub>
2617	CA51							No.2799と接合
2642	CB53							No.2156と接合
2649	“	B II c	16.9	(5.4)	3.2	(415)	Ry	No.2996、No.6983と接合 図1474 火熱痕あり
2710	CF50	—	(5.1)	(3.5)	(1.8)	(3.0)	di	E <sub>3</sub>
2711	CE52	—	(4.0)	(2.3)	(1.9)	(1.5)	Ry	a <sub>2</sub>
2769	BT54	—	(6.8)	(4.5)	(1.9)	(6.5)	“	A <sub>3</sub>
2799	CB52	—	(7.8)	(5.0)	(2.1)	(9.5)	“	No.2617と接合 B <sub>2</sub>
2847	CH55	A II c	17.4	5.0	3.8	38.0	“	図1470
2863	CB56	(A I)	(7.8)	(6.8)	(1.9)	(12.5)	“	E <sub>3</sub> 火熱痕あり
2938	CW49	—	(4.7)	(2.2)	(1.2)	(15)	Ry	a <sub>2</sub>
2940	“	—	(6.4)	(4.0)	(3.2)	(115)	di	a <sub>1</sub>
2952	DF54	AIII	(9.2)	(4.0)	(2.4)	(120)	Ry	D <sub>2</sub>
2958	DC36	—	(6.0)	(3.8)	(2.5)	(50)	“	a <sub>3</sub> 火熱痕あり
2960	DB34	—	(7.2)	(3.2)	(1.1)	(29)	“	E <sub>3</sub> “
2965	DD34	A II b	(11.3)	(5.2)	(2.8)	(280)	“	図1492 “ A <sub>1</sub>
2967	“36	—	(6.1)	(4.0)	(1.1)	(30)	“	A <sub>3</sub>
2982	DF35	AIIIc	(11.2)	4.9	2.5	(240)	“	図1483 先端再生 火熱痕あり
2994	CC57	定角	(8.2)	(5.7)	(3.7)	(170)	ch	D <sub>1</sub>
2996	CB53							No.2649、No.6983と接合
3041	CP88	—	(6.0)	(2.8)	(3.5)	(60)	Ry	E <sub>3</sub>
3047	CK89	A II	(8.9)	(4.4)	(3.1)	(180)	“	D <sub>1</sub>
3073	“	小形	(5.2)	(3.2)	(1.1)	(26)	“?	図1527
3074	“	AIIIc	13.1	3.6	2.5	170	“	図1480
3075	“	B I b	22.7	5.6	3.3	630	“	図1476
3078	CJ91	—	(8.4)	(4.8)	(1.0)	(50)	“	b <sub>3</sub>
3079	CK93	A I a	21.3	6.2	3.4	715	不明	図1468
3094	CJ91	—	(3.1)	(3.5)	(0.6)	(10)	Ry	E <sub>3</sub>
3117	CA94	小形	(4.7)	(2.2)	(1.1)	(154)	“?	c <sub>1</sub> 図1534
3159	CH92	BIIIc	(12.2)	(5.1)	(3.0)	(280)	不明	図1487
3216	CK91	B II c	18.1	4.8	2.7	385	Ry	図1477
3318	DN42	—	(7.4)	(4.6)	(2.5)	(105)	di	a <sub>2</sub>
3325	DT41	—	(5.2)	(5.5)	(2.3)	(70)	Ry	No.827と接合
3329	DK43	—	(6.7)	(5.5)	(2.8)	(280)	di	E <sub>3</sub>
3344	DG43	A II	(8.8)	(4.8)	(2.5)	(175)	“	D <sub>1</sub>
3383	CY41	A I	(18.5)	(5.3)	(3.0)	(370)	Ry	D <sub>2</sub>
3399	DP43	—	(4.4)	(3.2)	(1.7)	(30)	“	C <sub>2</sub>
3411	BR44	—	(9.4)	4.1	2.0	(109)	“	図1530
3419	BS45	A II	(11.3)	(4.7)	(2.4)	(185)	“	D <sub>2</sub>
3428	CH53	—	(5.9)	(2.4)	(2.6)	(40)	“	E <sub>3</sub>
3435	BT46	A II	(12.2)	(5.0)	(2.9)	(255)	di	B <sub>2</sub>
3445	BY45	—	(7.7)	(4.0)	(3.2)	(115)	“	a <sub>1</sub>
3447	“46	—	(4.9)	(3.7)	(2.7)	(45)	Ry	a <sub>1</sub> 火熱痕あり
3459	CC45							No.1356、土718と接合
3462	CG43	A II	(9.9)	(5.4)	(3.5)	(280)	Ry	B <sub>2</sub>
3465	CL38	A I	(15.8)	(5.6)	(3.2)	(460)	“	c <sub>1</sub>
3480	DP43	—	(5.0)	(3.1)	(0.9)	(15)	“	E <sub>3</sub>
3490	CN47	A II b	18.9	5.4	3.2	480	“	図1472
3521	CY38	A II	(13.4)	(5.0)	(3.3)	(325)	不明	C <sub>1</sub>
3552	DJ42	—	(3.8)	(3.2)	(1.7)	(20)	Ry	E <sub>3</sub>
3557	DC41	定角	(6.8)	(4.1)	(1.1)	(45)	“	変質 安山岩 図1516 c <sub>1</sub>
3560	DJ41	A II a	16.6	4.2	2.7	305	不明	図1471
3567	“43	A I	(10.9)	(4.9)	(3.3)	(200)	Ry	b <sub>2</sub>
3594	DL41	AIIIb	(10.7)	4.2	2.2	(150)	“	“
3599	DI41	—	(5.2)	(1.1)	(2.1)	(10)	“	E <sub>3</sub>
3607	DD53	—	(8.5)	(4.9)	(1.9)	(70)	di	A <sub>3</sub>
3722	CY40	—	(10.3)	(2.6)	(3.2)	(90)	Ry	E <sub>3</sub>
3728	“39	定角	(5.4)	(7.4)	(2.6)	(135)	“	図1500 A <sub>1</sub>

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
3729	CW38	AIa	(7.7)	(5.8)	(2.8)	(210)	不明	図1495 B <sub>1</sub>
3802	CR40	—	(3.4)	(4.0)	(1.6)	(30)	Ry	
3822	CV40	—	(4.9)	(4.5)	(2.6)	(85)	di	
3827	CW40	—	(7.4)	(3.7)	(1.0)	(34)	Ry	A <sub>3</sub>
3861	DE38	AI	(14.9)	(6.4)	(3.2)	(420)	—	b <sub>2</sub>
3888	EM45	BII	(10.5)	(3.8)	(2.0)	(115)	—	D <sub>2</sub>
3912	DP46	定角	(6.2)	(5.4)	(2.1)	(110)	—	B <sub>3</sub>
3920	DF49	AI	(13.6)	(5.3)	(4.1)	(400)	di	D <sub>2</sub>
3921	# 50	AIII	(10.4)	(3.8)	(2.3)	(125)	Ry	—
3923	EF39	AI	(13.2)	(7.3)	(3.7)	(655)	—	—
3955	CU43	—	(2.8)	(4.3)	(8.0)	(15)	di	E <sub>3</sub>
3957	CR43	BII	(10.1)	(4.1)	(2.8)	(170)	Ry	c <sub>1</sub>
3958	#	AI	(5.3)	(6.0)	(2.6)	(80)	—	A <sub>3</sub>
4025	CS46	#	(9.0)	(5.2)	(2.9)	(210)	—	—
4041	CN48	AII	(10.8)	(5.0)	(3.1)	(225)	—	b <sub>1</sub>
4122	CC49	—	—	—	—	—	—	Na1597、No2457、No6188と接合
4225	CY47	AI	(11.0)	(6.1)	(3.2)	(365)	Ry	b <sub>1</sub>
4227	CJ48	#	(8.9)	(4.8)	(3.1)	(145)	di	b <sub>2</sub>
4242	DI55	定角	(6.9)	(4.0)	(2.3)	(65)	ch	図1501 E <sub>3</sub>
4261	DP58	AIIIb	(9.3)	4.3	2.6	(170)	Ry	A <sub>1</sub> 図1484
4307	# 46	—	(4.4)	(3.2)	(1.5)	(20)	—	E <sub>3</sub>
4391	CM86	—	(2.1)	(3.3)	(0.7)	(5)	—	—
4400	CM90	—	(6.1)	(1.3)	(2.4)	(16)	Ry	E <sub>3</sub>
4455	CE51	—	(7.6)	(4.7)	(10.1)	(50)	—	Na1356+3459 B
4590	BT56	—	(3.3)	(2.1)	(0.7)	(7)	—	E <sub>3</sub>
4605	BW59	—	(2.1)	(2.5)	(0.8)	(5)	—	—
4655	DB57	—	(4.5)	(4.0)	(2.1)	(40)	—	# 火熱痕あり
4669	DC52	—	(5.7)	(3.7)	(0.9)	(21)	—	—
4672	# 55	—	(3.7)	(4.8)	(1.0)	(25)	di	—
4677	# 57	—	(8.7)	(2.4)	(2.7)	(46)	Ry	E <sub>3</sub>
4678	DL85	AII	(8.6)	(4.7)	(3.0)	(190)	—	D <sub>1</sub>
4696	DD46	—	(3.9)	(4.7)	(1.4)	(30)	—	A <sub>3</sub>
4697	DL85	—	(4.2)	(2.8)	(1.8)	(16)	—	E <sub>3</sub>
4701	DD48	—	(4.2)	(2.9)	(0.7)	(8)	—	—
4737	DP46	—	(5.6)	(3.1)	(0.5)	(9)	—	—
4738	#	—	(3.8)	(2.8)	(1.2)	(15)	—	A <sub>3</sub>
4752	DY60	—	(3.3)	(2.7)	(0.9)	(6)	不明	E <sub>3</sub>
4762	DV49	定角	(2.4)	(2.8)	(1.6)	(10)	—	—
4784	FA43	AII	(10.7)	(4.5)	(3.1)	(195)	Ry	b <sub>2</sub>
4791	FR25	(B)II	(12.9)	(6.3)	(2.7)	(225)	—	未製品
4829	EC57	—	(7.1)	(4.1)	(1.9)	(65)	—	D <sub>1</sub>
4887	Z	—	(3.2)	(2.6)	(0.7)	(9)	—	E <sub>3</sub>
4941	DC62	—	(3.5)	(2.7)	(0.8)	(10)	—	—
4951	DD54	—	(5.6)	(1.2)	(1.1)	(8)	—	—
4975	DG62	—	(2.9)	(3.7)	(1.1)	(10)	—	—
4980	DH58	—	(5.1)	(3.4)	(2.5)	(48)	—	a <sub>1</sub>
4996	DJ54	—	(6.3)	(3.2)	(0.9)	(22)	—	E <sub>3</sub>
5555	Z	—	(3.0)	(2.2)	(0.3)	(4)	—	—
5559	DQ59	—	—	—	—	—	—	50住 No367と接合 E <sub>3</sub>
5594	Z	—	(9.6)	(5.1)	(3.1)	(210)	Ry	図1506 b <sub>1</sub> 礫石として利用
5595	#	AIIc	(10.8)	(5.0)	(2.7)	(190)	—	D <sub>2</sub>
5597	#	—	(2.7)	(1.0)	(2.1)	(5)	Ry	E <sub>3</sub>
5598	CR41	—	(4.5)	(2.2)	(1.6)	(10)	—	—
5729	EO53	小形	(4.6)	3.3	(0.7)	(18)	—	図1531
5735	EP58	—	—	—	—	—	—	5住 No147と接合
5736	#	—	—	—	—	—	—	Na2312と接合
5747	EQ54	—	(7.9)	(4.0)	(2.5)	(100)	—	a <sub>2</sub>
5858	CK52	AI	(13.2)	(5.2)	(2.8)	(270)	di	c <sub>2</sub>
5919	CO54	AII	(10.2)	(4.5)	(2.2)	(135)	Ry	b <sub>1</sub>
5943	CQ82	—	(9.3)	3.8	(2.8)	(166)	不明	—
6166	Z	AIc	20.1	6.3	3.5	645	Ry	図1469
6178	DP58	BIIc	19.0	5.1	2.9	400	—	図1478
6179	Z	AIc	(12.9)	5.8	2.9	(380)	di	図1491 A <sub>1</sub>
6187	CD53	—	(2.1)	(5.1)	(1.1)	(11)	Ry	E <sub>3</sub>
6188	# 44	—	—	—	—	—	—	Na1597、No2457、No4122と接合
6229	CC55	—	(4.0)	(0.8)	(1.3)	(4)	Ry	E <sub>3</sub>
6256	CD53	—	—	—	—	—	—	Na708と接合
6296	DT62	—	(4.4)	(4.8)	(1.9)	(48)	di	—
6336	CE53	—	(6.3)	(3.9)	(2.3)	(55)	Ry	A <sub>3</sub>
6363	CR85	—	(6.5)	(4.3)	(2.2)	(105)	—	D <sub>1</sub>

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
6372	# 56	—	(3.1)	(5.0)	(1.5)	(22)	—	E <sub>3</sub>
6402	BV54	小形	5.2	2.7	0.9	20	—	図1528
6544	CJ54	AIII	(9.2)	(4.6)	(2.9)	(130)	—	No1 B <sub>3</sub>
6545	# 58	AI	(13.4)	(5.7)	(3.4)	(455)	—	D <sub>2</sub> 火熱痕
6568	DR42	—	(4.4)	(3.0)	(1.1)	(15)	—	No3 E <sub>3</sub>
6571	DW51	—	(8.6)	(4.0)	(3.2)	(120)	—	No33 b <sub>1</sub>
6572	# 60	—	(11.3)	4.6	(2.6)	(220)	不明	No6 B <sub>1</sub> 凹石に転用
6622	DK41	—	(5.7)	(3.5)	(1.5)	(25)	Ry	—
6705	DE45	—	(5.0)	(4.2)	(1.2)	(45)	—	E <sub>3</sub>
6714	# 50	—	(5.6)	(1.0)	(2.3)	(15)	—	—
6722	# 52	—	(2.5)	(2.1)	(0.8)	(5)	—	—
6729	# 55	—	(6.5)	(4.1)	(1.9)	(70)	—	# 火熱痕あり
6816	DJ63	小形	(2.2)	1.7	(0.6)	(35)	—	# ?
6838	DC55	—	(2.6)	(1.7)	(0.3)	(2)	—	E <sub>3</sub>
6983	BY52	—	—	—	—	—	—	No2649、No2996と接合
6984	CC53	—	(5.5)	(4.0)	(1.2)	(30)	Ry	E <sub>3</sub>
6985	CB49	—	(4.0)	(1.8)	(1.1)	(5)	—	#
6986	# 54	—	(2.6)	(2.2)	(1.0)	(5)	—	#
7000	EA56	—	—	—	—	—	—	No1441、63住-570、66住-2734と接合
7071	CW42	AI	(15.2)	(5.7)	(3.4)	(385)	不明	c <sub>1</sub>
7076	Z	—	(5.3)	(3.7)	(2.5)	(60)	Ry	a <sub>2</sub> 火熱痕あり
7077	#	—	(6.9)	(3.7)	(2.7)	(65)	—	A <sub>3</sub>
7078	Z	定角	(5.8)	(3.2)	(1.8)	(35)	Ry	E <sub>3</sub> 火熱痕あり
7124	CL50	AI	(10.5)	(6.0)	(2.8)	(280)	—	a <sub>1</sub>
7125	CP82	—	(5.6)	(3.2)	(1.8)	(35)	—	—
7209	CK92	—	(2.6)	(2.5)	(0.7)	(4)	不明	E <sub>3</sub>
7211	DA55	—	(4.3)	(3.2)	(1.3)	(14)	Ry	—
7390	DD53	定角	(6.9)	(4.5)	(2.3)	(95)	—	No1 図1519 B <sub>1</sub>
7391	CS47	AII	(8.9)	(4.2)	(3.2)	(170)	—	B <sub>3</sub>
7614	DD51	—	(7.2)	(3.7)	(1.7)	(55)	不明	—
7729	DL48	—	(3.5)	(1.8)	(0.3)	(2.7)	—	—
7730	DN44	—	(2.8)	(2.6)	(0.4)	(5.3)	—	—
7800	BT52	—	(3.3)	(2.0)	(1.1)	(4.7)	—	—
7801	FR25	—	(3.6)	(3.5)	(1.0)	(9.9)	—	—
9005	BV54	—	(2.8)	(2.5)	(1.0)	(8.7)	—	IBNo5594
9006	EQ59	—	(4.5)	(4.2)	(2.3)	(32)	—	IBNo5755
9007	EW56	—	(4.3)	(4.1)	(1.0)	(20)	—	IBNo5796

丸石

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
319	CF53	—	4.5	4.0	2.8	42	An	図1573
325	CE58	—	4.0	4.0	4.0	62	Gd	図1572
498	BX51	—	3.5	3.3	3.0	33	An	—
851	CV59	—	3.9	3.7	3.1	54	—	—
4154	CP46	—	4.6	4.3	4.0	75	—	—
4562	DB54	—	4.4	4.3	3.1	69	—	図1574
8645	79集石	—	6.3	5.4	5.2	173	—	—
8733	158集石	—	4.6	4.4	4.2	90	—	—
9008	BY59	—	3.9	3.8	4.2	50	—	—
9009	C区	—	3.3	3.0	2.7	26	—	—
9010	Z	—	4.4	3.9	2.9	49	—	—
9011	Z	—	4.2	4.0	3.1	40	—	—
9012	DM54	—	10.3	9.8	9.5	1170	—	図1571

凹石

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
5	DW56	ⅡCa	8.4	7.3	5.0	350	
14	DX54	ⅡCa	9.2	5.7	4.2	210	
15	BV53						No378と接合
16	CN59	ⅡEabc	9.2	9.3	4.8	480	
19	CO64	ⅡCa	9.4	7.5	3.3	250	
20	CN62	ⅡDa1	10.6	6.4	6.4	480	
37	DU52	ⅡCa	9.8	6.4	3.6	330	
55	DK61	"	9.7	5.6	4.8	200	
67	DM56	ⅠEac1	(11.4)	7.5	4.2	(570)	破
73	DF59	ⅡCa	12.3	7.0	3.0	350	
80	DE62	ⅡFa	7.3	7.0	5.5	310	図1581
101	" 58	ⅠAab	9.0	6.7	3.5	230	
120	Dm61	ⅡCa	9.7	6.7	4.2	350	
"	DM61	"	9.6	6.5	4.1	360	
150	DB54	ⅠAabc	10.6	9.1	5.0	500	図1612
151	DA56	"	10.8	7.4	4.2	410	
152	DD56	ⅡDa1	10.5	6.7	6.0	500	
160	DC56	ⅡCbc	12.5	7.5	4.8	670	
220	DF55	ⅠEac1	13.9	7.6	5.6	710	
221	BP47	ⅡEa	10.3	8.7	4.0	400	
261	DO38	ⅡCa	8.1	7.2	4.3	340	
262	"	ⅠEabc	12.5	8.6	7.2	930	
274	EB32	ⅡCa	12.8	8.7	5.5	630	
278	DU31	"	10.2	7.3	4.3	420	
"	DC31	"	10.2	7.1	4.2	420	
302	CG51	ⅡEa	8.0	8.6	4.5	370	
303	"	ⅡCa	9.5	7.8	5.5	440	
305	CH53	ⅠEac1	(5.3)	6.3	4.8	(210)	破
309	CG57	ⅡAa	12.5	5.9	4.2	430	
311	CF50	ⅡGa	(11.2)	10.4	6.8	(930)	破
312	" 51	ⅠEac1	12.3	7.3	6.7	850	
313	CE52	ⅡGa1	9.2	6.3	4.3	150	
314	"	ⅡCa	13.4	9.2	6.0	710	
315	"	ⅡGa1	11.3	7.0	5.8	460	
316	CE51	ⅡDa1	8.0	6.5	5.0	300	
317	CF53	ⅡDac	13.4	9.4	6.2	910	
320	" 55	ⅡCa	10.4	6.4	4.0	280	
321	"	ⅡCa	9.2	7.3	4.5	460	
323	" 57	ⅠEc1	13.7	7.0	6.3	990	No8746と接合
327	CE59	"	14.0	8.5	8.2	1,100	
329	CC50	ⅡDac	14.7	9.0	6.0	830	
331	"	ⅡFa	11.7	11.4	6.7	960	
332	" 51	ⅠAabc	9.2	6.5	4.6	360	
333	"	ⅡDa	8.2	5.5	4.8	190	
334	"	ⅡCa	9.9	7.5	4.7	460	
338	CA52	ⅡCabc	9.9	8.0	4.0	420	
339	"	ⅡCa	10.5	6.1	4.0	320	
343	CC52	ⅡEa	9.0	7.9	4.2	400	
346	CD52	ⅡAa	10.0	5.0	2.5	120	
347	" 53	ⅡEac	10.7	9.0	4.7	490	
348	"	ⅡCa	10.7	6.2	3.4	250	
350	CC53	ⅡCb	15.3	10.0	6.1	1,480	
351	"	ⅡDac	8.5	7.6	5.6	360	
354	" 54	ⅡCa	10.5	8.3	5.5	530	
356	CD54	ⅡEa	10.1	9.4	4.2	500	
357	CC55	ⅡCa	12.2	8.8	4.0	(470)	破
360	CA54	ⅡAa	13.0	7.3	3.2	350	
364	DU43	ⅡCb	8.6	5.7	4.7	180	
365	CC56	ⅠEc1	(10.7)	7.2	5.6	(390)	破
368	" 57	ⅡGa	8.3	7.6	3.8	230	
370	"	ⅠDc1	15.1	10.2	6.4	1,230	図1586
373	" 59	ⅡDac	11.3	9.2	6.0	740	
374	CB58	ⅠEc1	(7.4)	6.4	6.0	(440)	破
375	CA57	ⅡDac	11.5	7.7	6.9	670	
378	BV53	ⅠAabc	10.3	8.1	4.4	570	No15と接合 図1579
379	BW52	ⅡCa	9.8	9.1	2.8	220	
380	" 53	ⅠEac1	(10.7)	7.9	(4.2)	(390)	破
381	" 55	ⅡDac	10.6	8.9	7.3	690	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
382	BW55	ⅡGa	(9.2)	8.2	4.8	(430)	破
384	BX55	ⅡDa	12.8	9.5	6.2	770	
386	BY55	ⅡEa	7.0	7.9	4.2	240	
387	"	ⅡDa	7.6	6.2	4.1	210	
388	BX56	ⅠAab	(5.6)	6.8	3.1	(130)	破
389	BW56	ⅡDac	8.3	5.0	4.8	190	
390	BV56	ⅡCbc	(12.1)	10.0	6.3	(880)	破
391	BU56	ⅡEa	11.7	10.9	5.2	1,000	
"	"	"	12.4	9.8	4.0	510	
394	BY57	ⅡEac	11.7	10.0	6.3	700	
396	" 58	ⅡCa	9.9	5.7	4.0	260	
397	" 59	ⅡDa1	9.0	6.9	5.5	330	
403	BW58	ⅡEa	9.8	8.9	4.0	390	
407	" 60	ⅡCa	8.7	6.7	3.8	200	
408	BV60	ⅡCa1	8.0	5.8	4.2	230	
409	BT55	ⅡCa	11.0	7.5	4.7	430	
416	DE62	ⅡDa1	8.8	6.5	5.3	350	
417	CF62	ⅠAabc	8.2	7.0	4.2	330	
431	BW54	ⅡDa1	9.9	7.2	6.0	450	
432	BV53	ⅡEac	9.2	10.0	6.0	570	
433	BY55	ⅡCa	12.1	8.1	4.6	450	
434	BU57	"	8.3	6.2	3.6	210	
438	BX55	ⅡFa	6.7	6.5	6.0	250	図1582
442	BU58	ⅡBa	11.2	5.7	4.3	300	
443	" 59	ⅡDa	8.6	6.5	5.4	310	
444	" 60	特磨	(9.4)	6.4	5.7	(480)	破
450	BW61	ⅡEa1	9.2	8.4	4.6	360	
452	CF59	ⅡDa	7.8	6.2	5.1	210	
458	CG57	ⅡAa	10.8	5.8	3.8	250	
461	CH56	ⅠAabc	9.7	7.3	5.0	460	
463	"	ⅡGa1	13.6	9.7	9.3	1,370	
470	BU57	ⅡCa	9.4	5.5	4.3	320	
479	BV52	ⅠAabc	9.5	(5.0)	4.0	(200)	破
480	"	ⅡCa	(8.2)	5.3	3.2	(135)	破
486	BW57	ⅡCa	9.2	6.3	3.8	250	
487	" 55	ⅡGa	8.2	5.3	4.0	150	
488	BY56	ⅡDa	8.4	6.8	4.3	210	
494	BW52	ⅡCac	9.5	6.0	1.6	120	Ry
500	CA53	"	17.8	11.5	8.4	1,560	
501	" 55	ⅡAa	14.5	5.8	3.5	340	
503	CB57	ⅡCa	11.6	7.5	3.7	270	
505	BV53	ⅡDac	10.0	7.0	4.9	400	
516	BW52	ⅡDa	15.2	10.3	9.2	1,620	
520	BV58	ⅡDac	7.8	5.5	4.6	190	
522	"	ⅡDa1	8.7	5.0	5.0	230	図1616
537	DX51	"	9.0	6.9	4.8	250	
539	BY59	ⅡCa	9.9	7.0	3.8	300	
549	CE59	"	9.8	7.3	3.4	260	
553	BT52	"	9.9	6.4	3.1	240	
561	CD60	ⅡEa	8.2	7.5	3.9	310	
570	EB49	ⅡCac1	9.9	7.0	4.6	390	
"	"	"	9.7	6.7	4.4	390	
572	CC56	ⅡEa	(5.1)	5.8	3.8	(120)	破
585	DE49	ⅡGa1	11.3	7.3	4.9	450	
596	CB54	ⅡCa	12.6	9.7	5.3	690	
601	CD59	"	10.7	8.5	4.5	410	
613	" 53	ⅡBa	12.3	6.6	4.5	340	
620	CG53	ⅡFa1	10.0	(8.1)	5.7	(450)	破
"	"	ⅠAabc	11.1	7.7	3.5	385	
632	CB51	ⅡDac	13.0	7.5	6.0	660	
640	DF46	ⅡFa	6.2	5.7	4.3	180	
651	" 41	ⅡCa	9.1	7.6	3.9	320	
660	CC51	ⅡEac	8.1	7.2	4.2	350	
668	CF52	ⅡCac	11.1	6.6	4.5	465	
685	DG	"	12.0	10.2	5.8	850	
694	DR49	ⅡEa	8.5	8.2	3.8	290	
701	DL48	ⅡDa1	11.2	7.5	5.0	440	
702	CP45	ⅡDa	10.6	7.0	5.4	430	
707	CG51	ⅡCabc	(8.0)	7.8	4.6	(350)	破
713	CV50	ⅠAabc	10.0	7.8	5.5	560	

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
714	CU50	特磨	( 9.3)	8.1	5.3	( 690)	破 図1641	1069	CS60	IIDac	10.9	7.2	5.4	500	
718	DM51	II Cac	10.2	6.5	4.0	300		1070	" 61	I Aab	11.0	8.2	5.6	720	
724	DL47	II Ba	( 7.8)	3.3	3.3	( 150)	破	1071	CT60	I Fc1	( 9.4)	6.5	6.4	( 550)	破
732	DG46	I Ebc	14.4	6.7	5.7	830		1075	CR60	II Ca	6.4	6.3	3.3	330	
735	DJ47	II Ca	12.4	7.3	3.4	350		1077	CP55	IIDac	( 9.5)	9.3	4.0	( 380)	破
739	DG46	II Ca1	11.4	9.0	4.3	490		1078	" 56	II Cac	10.9	6.5	5.0	420	
740	DM48	IIDac	12.9	9.5	7.0	1,030		1080	CR54	IIDa	11.2	8.6	6.4	660	
741	"	II Cac1	(12.5)	7.4	4.8	( 500)	破	1081	CK54	II Ca	9.9	5.8	4.0	260	
"	"	"	12.3	7.2	4.8	500		1083	CR62	"	9.0	6.5	3.2	210	
742	DN48	II Da1	10.0	7.5	5.7	420		"	"	II Cabc	10.0	7.2	4.1	360	
744	DO48	II Da	14.7	10.0	7.8	1,420		1087	CL53	IIDa	13.5	7.5	6.3	660	
779	DP47	II Ga	( 8.3)	6.8	3.8	( 200)	破	1089	CN53→CO50	II Da1	12.7	6.3	5.3	490	
788	DN46	I Aabc	8.9	6.5	4.8	310		1090	CO50	IIDa	9.4	7.6	6.3	490	
790	" 47	I Ebc	14.6	8.0	6.1	893		1092	CP51	II Ca	11.3	8.1	3.7	440	
793	" 48	II Da	11.5	6.9	5.5	550		1096	CQ61	II Cac	12.5	8.8	4.3	540	
798	DI46	II Ga	11.0	9.3	3.9	491		1109	CS59	II Da1	12.7	7.6	6.5	610	
799	BJ47	I Aabc	7.6	9.3	5.0	( 460)	破	1112	CR52	II Ca1	(10.2)	6.0	3.4	( 240)	破
803	CB57	"	10.4	7.4	5.1	510		1114	CQ61	II Cabc	11.0	7.2	2.9	210	
804	CD58	II Eac	9.0	9.0	4.8	430	図1628	1130	CO60	I Fca1	( 8.3)	5.9	5.7	( 390)	破
807	" 56	II Ca	9.1	5.5	3.3	200		1134	CP63	II Ca	9.7	5.9	3.4	230	
812	DD49	IIDac	10.2	6.7	5.1	480		1139	CN39	IIDa	8.5	6.3	6.0	350	
813	" 48	II Cabc	13.0	8.7	4.2	580	図1608	1153	Z	"	13.4	8.5	6.7	980	
816	DH48	I Ec1	15.5	7.2	6.6	1,230	ol	1161	CR62	I Aab	9.7	7.2	3.4	260	
817	DO45	II Cac1	11.7	8.1	4.2	560		1174	CL61	I Aabc	9.8	7.7	4.2	410	図1577
"	DD45	"	11.6	8.2	4.5	570		1183	CR55	IIDa	12.6	6.9	6.0	460	
818	CN59	II Eabc	( 9.3)	9.4	4.8	( 480)	破	1571	CT52	II Cabc	11.4	6.3	3.2	260	
820	BY62	II Cab	13.0	9.0	5.1	730		2002	Z	II Gca	9.5	7.6	3.0	250	
821	CC63	II Cac	10.3	6.5	4.5	320		"	DJ55	II Ca	(11.9)	8.2	4.6	( 450)	破
824	CJ54	II Eabc	9.8	9.3	4.7	570		2004	"	II Cabc	9.4	9.3	6.0	540	
"	DM48	I Ec1	16.0	7.6	5.0	940		2005	CV64	"	9.5	8.3	4.3	280	
825	"	I Aabc	7.2	7.6	5.1	350		2007	DG63	IIDac	(11.0)	7.3	6.5	( 550)	破
837	CY48	"	9.5	10.1	4.3	490		2018	CP54	I Aabc	11.1	8.3	5.3	660	
853	DA46	II Da1	9.6	6.0	5.0	320		2034	DL53	II Cac	11.5	7.9	5.3	( 570)	破
871	CW48	II Cac	8.4	7.4	4.8	270		2035	"	I Aab	( 5.6)	7.2	4.3	( 250)	"
876	BX51	特磨	15.0	8.0	6.0	780		2039	DJ53	II G	7.0	6.0	3.0	170	
877	CV48	IIDac	11.1	8.6	6.0	680		2040	DI53	II Cb	11.4	7.0	4.0	450	
883	CT48	I Aabc	( 7.3)	7.0	4.4	( 320)	破	2041	DJ53	II Bac	12.2	5.2	3.9	240	
894	CU50	II Ca	8.3	6.3	4.2	210		2043	CB55	II Fa	6.9	7.3	5.5	330	
909	CV45	II Fa	8.0	6.9	6.0	400		2046	DE52	I Aabc	11.6	7.2	4.7	610	
913	CU45	IIDac	10.5	9.0	5.4	610		2048	"	II Fa1	7.7	6.7	4.9	280	
918	CV45	II Aa	12.4	5.3	4.0	250	図1597	2056	DG63	I Aabc	8.8	6.4	3.5	260	
934	CT45	II Ba	10.8	4.8	4.0	320		2057	DF62	I Ec1	(15.2)	6.9	4.9	( 690)	破
937	" 46	"	14.4	7.3	5.2	570		2058	"	特磨	19.0	9.3	6.5	1,620	
939	CK49	II Ca	11.7	8.8	4.5	500		2060	DG62	II Da1	9.5	7.9	5.1	340	
942	CR48	I Aabc	12.2	8.0	4.7	530		2063	DC52	IIDa	7.6	6.0	4.8	250	
951	CO46	II Ba	11.2	5.3	3.6	280		2065	DA63	"	( 9.6)	8.1	5.8	( 480)	破
958	CD47	IIDa	9.2	7.3	6.0	420		2066	"	II Ga1	9.6	9.3	6.0	510	
960	CT46	特磨	( 6.5)	6.3	4.7	( 180)	破	2070	DC55	II Ea	6.2	5.7	4.0	130	
965	"	II Cabc	11.7	9.6	5.3	750		2073	DB54	II Cac	11.9	8.1	4.0	450	
969	CR45	II Ca	9.6	6.9	3.0	200		2074	DC54	I Aabc	9.7	9.5	4.8	550	
971	" 46	I Aabc	9.6	8.2	4.6	530	図1625	2080	DG61	IIDa	10.2	8.5	5.8	570	
972	" 45	"	( 7.7)	6.9	4.2	( 310)	破	2083	CX60	II Cac	10.2	7.3	5.5	480	
973	" 46	IIDac	9.3	6.0	4.6	( 300)	"	2086	DL54	II Ca	( 8.8)	7.8	4.2	( 330)	破
984	CK47	II Da1	( 9.3)	( 6.1)	4.9	( 300)	"	2088	DD64	特磨	16.6	8.4	6.1	1,200	
997	CD48	II Ea	6.7	6.3	3.0	130		2091	DE64	II Eac	10.8	9.7	5.0	560	
1018	CS62	IIDac	14.3	11.0	8.2	1,400		2094	DS56	II Ca	11.9	7.0	3.1	310	
1025	CP51	IIDa	8.1	6.1	4.9	260		2096	DK54	I Ebc	15.3	7.7	5.4	1,010	図1589
1026	" 50	II Ca	11.0	8.8	3.8	390		2099	DD54	II Da1	9.3	7.3	4.8	310	
1028	CL54	"	10.9	6.4	4.3	340		2100	CQ57	II Ca	7.8	5.2	4.0	200	
1029	CM55	I Eac1	( 9.5)	7.5	5.4	( 500)	破	2101	DA54	II Fa	8.8	8.7	6.1	510	
1035	CI59	II Ca	10.8	8.1	5.6	500		2104	"	II Eac	10.4	9.4	4.3	460	
1037	CL56	IIDac	9.4	7.2	5.2	420		2105	"	特磨	(11.5)	9.5	6.3	( 900)	破
1042	CP50	I Aab	10.3	6.5	4.5	( 340)	破	2106	"	II Ba	(12.2)	5.7	4.8	( 460)	"
1048	CJ54	II Eabc	9.9	9.0	4.8	570		2118	DH54	II Cac	14.5	9.8	4.9	735	
1049	"	II Ca	11.1	7.1	3.4	240		2124	DA56	II Ca	10.8	8.6	6.0	715	
1058	CK54	IIDa	9.3	7.5	4.7	350		2127	DE61	II Ca1	11.7	7.0	3.8	270	
1064	CR55	IIDac	17.0	11.9	9.3	2,125		2130	" 54	IIDa	9.6	7.4	5.4	380	
1066	CR54	II Cac1	12.2	7.4	4.1	510		2137	" 59	II Ca	10.6	8.1	4.2	330	
"	"	"	12.3	7.6	4.4	560		2145	DF59	II Cabc	11.4	6.3	3.6	370	Ry
1068	CU56	II Eac	9.5	7.8	2.8	210		2146	" 58	I Aabc	10.2	7.9	3.6	420	

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
2147	CR55	II Ea	8.4	7.9	3.3	250	図1624	2419	BV49	I Aabc	( 7.0)	6.6	4.1	( 350)	破
2148	DG56	II Da	10.6	8.5	6.9	690		2424	BS49	II Da	10.2	8.0	6.7	570	
2153	DA56	II Ca	( 8.7)	5.2	3.3	( 160)	破	2427	"	II Ca	10.9	6.5	3.1	240	
2157	DH55	I Eac	14.9	7.8	5.2	720	図1591	2441	DS49	II Da1	10.4	6.2	4.7	330	
2158	CQ56	II Aac	(14.2)	6.0	3.7	( 470)	破・図1599	2456	BT49	II Ea	9.8	9.9	4.5	500	
2159	CP57	II Cac	12.3	8.1	5.0	520		2461	CC62	II Dac	12.8	7.1	4.9	( 380)	破
2168	DE53	"	8.7	6.7	5.2	340		2462	"	II Da1	9.9	7.4	6.0	410	
2172	DJ57	II Cabc	11.0	9.0	5.0	610		2471	BQ60	II Da	7.3	5.5	4.8	240	
2175	CR55	II Cac	( 9.3)	( 6.6)	4.3	( 330)	破	2480	CO60	II Da1	( 8.4)	7.7	5.2	( 480)	破
2176	DB58	II Da	10.1	6.4	5.7	510		2485	CD60	II Cac	9.0	7.5	4.5	330	
2177	CQ54	II Fac	8.0	8.0	6.0	390		2492	CE60	II Dac	(11.3)	7.5	5.2	( 490)	破
2182	CK55	I Aab	10.5	8.4	4.7	570		2510	CF61	II Cac	11.9	7.7	4.5	400	
2183	DH54	II Da1	9.8	6.3	5.2	350		2513	CC59	II Dc	12.1	7.0	7.0	910	Gd
2184	CL58	II Fac	9.8	9.2	6.1	600		2535	CA51	II Dac	11.0	9.0	6.0	730	
2185	CM58	II Cac	8.7	6.1	3.3	210		2537	"	I Aab	9.4	7.0	4.2	330	
2186	CL50	"	8.3	6.9	( 4.2)	( 230)	破	2543	CC52	II Da	10.1	5.8	4.6	340	
2188	CK58	II Da	10.6	7.7	6.2	620		2557	CF55	II Eac	8.8	7.9	5.0	410	
2190	CE61	II Dac	11.8	6.5	6.1	580		2565	CE58	II Cac	( 9.2)	8.0	2.7	( 270)	破・bp
2192	DE54	II Da	7.1	5.8	5.0	200		2572	CG51	I Ebc	8.6	6.6	6.2	520	
2193	" 53	I Aabc	8.9	7.7	4.5	440		2582	" 57	II Ea	8.0	7.8	4.8	370	
2198	CM52	II Cac	10.3	5.7	4.0	210		2585	CA58	II Cac	10.0	5.6	3.5	200	
2199	CP52	I Fc1	( 9.8)	6.6	6.5	( 640)	破	2597	CF50	"	9.0	8.0	4.4	370	
2208	CL52	II Cabc	10.8	7.5	5.0	430		2598	"	II Da1	10.2	8.3	6.5	640	
2209	CT50	II Ca	12.8	7.3	4.1	490		2605	CE50	II Ca	11.0	9.0	4.8	570	
2211	CN51	I Eac1	15.1	8.1	6.0	1,000		2613	CD52	I Aabc	( 6.9)	7.6	4.2	( 290)	破
2218	CS51	II Ca	10.9	7.2	4.6	410		2614	CC59	I Ec	14.3	8.2	6.8	900	図1587
2221	CS52	"	8.7	7.3	4.4	280		2616	CB51	II Ga	( 9.6)	( 7.8)	2.7	( 280)	破・図1636
2226	CW51	I Fca1	13.0	7.1	6.8	860		2628	BY51	I Aabc	11.5	6.6	4.5	480	
2228	"	II Da1	11.0	6.8	5.8	480		"	"	II Fa	10.5	9.0	6.4	930	
2230	"	I Fc1	15.8	7.7	7.5	1,300		"	"	II Fb	10.4	8.8	6.4	920	
2241	BX62	II Cac	9.3	6.9	4.4	320		2645	CG55	II Ca	10.6	7.6	4.8	340	
2248	BW61	II Ea	10.0	8.5	4.6	440		2665	BW55	II Aa	13.2	6.5	3.7	360	
"	"	II Ebc	9.8	8.3	4.7	440		2670	BX59	II Cac	13.2	8.2	4.9	660	図1610
2253	DW60	II Da1	9.9	6.7	5.3	360		2704	PQ59	特磨	12.8	7.0	5.2	680	図1640
2254	BW60	II Ga1	7.5	7.2	6.2	330		2714	CG55	II Ca	10.3	6.1	4.2	230	
2263	"	II Da	8.9	6.5	5.8	350		2718	CE58	II Dac	8.5	7.0	4.9	310	
2264	BX60	II Ca	10.8	7.5	4.1	320		2719	" 57	II Ca	10.1	8.5	3.0	250	
2265	"	"	9.9	5.5	3.3	250		2724	BX30	特磨	10.3	9.1	5.0	730	
2273	BP60	II Dac	9.0	7.3	5.1	400		2731	BY54	II Ca	9.6	6.7	3.9	260	
2278	" 56	II Fac	6.7	5.4	4.3	150	図1633	2733	" 56	"	8.7	6.2	3.3	200	
2284	BS59	II Ca	10.7	8.8	5.7	630		2759	BU53	II Ba	12.2	6.5	4.5	470	
2287	BW58	II Dac	10.2	6.5	4.0	250		2775	CG55	II Cb	9.3	7.3	4.4	360	
2297	BS58	II Da	12.2	10.3	6.4	880		2781	BV70	II Da1	9.5	7.2	5.6	350	
2302	BQ57	II Cac	(13.8)	8.8	4.0	( 530)	破・図1607	2783	CG57	II Cac	10.0	6.0	3.6	280	
2304	BO59	II Eac	9.2	8.5	4.9	310	図1627	2791	BY59	特磨	(10.4)	6.7	4.7	( 540)	破
2305	BS58	II Ca	13.6	8.9	4.6	740		2797	CF58	II Dac	9.0	7.4	6.0	450	
2307	"	"	(10.1)	7.6	3.6	( 300)	破	2800	BW52	II Cac	11.0	7.6	4.8	380	
2311	BQ57	II Ga1	( 8.4)	( 7.7)	4.5	( 280)	"・図1635	2802	CD58	II Eac	10.2	9.8	4.7	580	
2318	DT56	II Ca1	9.9	7.3	3.5	280		2804	CA58	I Aab	11.0	7.6	4.4	520	
2319	BQ56	II Ba	10.7	5.3	5.5	300		2807	CL57	II Aac	(10.8)	( 5.2)	4.5	( 310)	破
2321	BP57	II Ca	11.8	7.2	4.0	320		2815	CE56	II Cabc	12.5	9.4	4.0	650	
2331	CB62	II Aa	13.3	6.2	2.7	280	図1596	2817	CL55	II Ca	(11.7)	7.8	5.0	( 500)	破
2333	CC62	II Cac	(10.0)	7.4	5.2	( 390)	破	2818	CM55	"	11.2	7.7	4.3	360	
2338	BM59	I Aab	10.0	5.5	3.5	290		2820	CE58	II Cac	10.2	8.2	5.0	460	
2340	BF60	II Ea	( 8.7)	9.3	4.6	( 400)	破	2821	"	II Da	11.8	7.0	6.5	630	
2344	BO57	II Ca	(10.2)	6.2	3.9	( 240)	"	2824	CF62	II Cac	12.3	7.7	5.0	500	
2351	BN54	II Ea	6.5	6.2	3.4	140		2825	CA58	II Da	8.9	6.5	4.8	270	
2353	BS55	II Da	10.3	9.5	5.3	430		2831	BY51	"	10.0	6.8	4.8	340	
2357	BM53	I Aab	11.4	7.3	3.8	340		2833	BW51	II Cac	10.6	8.8	5.5	580	
2359	BS55	II Dac	7.0	5.3	3.5	170		2834	"	II Aa	( 9.5)	5.5	3.2	( 150)	破
2360	DR55	"	12.8	7.0	5.1	530		"	"	I Eac1	( 8.9)	6.6	5.9	( 420)	"
2361	BW55	II Ea	7.1	6.5	4.0	225		2837	BX52	II Ca	12.3	9.3	5.4	690	
2362	BR55	II Eac	8.5	7.9	4.9	350		2838	BU54	II Cac	10.5	7.6	4.5	380	
2367	DK62	II Ba	9.4	4.5	3.6	190	図1600	2839	BS54	II Ca	11.7	9.2	3.0	330	
2372	BW54	II Cac	10.3	7.6	4.9	410		2840	BT55	II Cac	(12.3)	9.1	5.0	( 610)	破
2375	BX52	I Aabc	8.8	8.6	3.7	420		2841	BV54	II Cc	13.0	8.4	5.0	720	
2376	BT53	II Eac	8.9	8.9	4.4	320		2845	BU55	I Aabc	( 9.8)	7.5	4.6	( 360)	破
2377	BR53	II Ca	14.4	10.7	4.6	850		2848	" 50	II Gac	11.2	9.7	6.9	800	
2396	BT51	II Bac	16.3	6.0	4.9	480		2850	" 57	II Cac	11.1	6.8	3.0	220	
2397	"	II Ea	9.2	8.3	4.0	350		2851	BV57	II Ea	9.5	9.5	5.5	550	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
2856	BT59	II Eac	11.2	9.8	6.0	810		3315	DN40	IIDac	10.1	6.3	4.6	350	
2858	BP56	II Ca	13.3	8.5	3.2	350		3316	" 39	II Ea	8.2	8.3	5.1	330	
2864	CR50	II G	10.6	8.1	5.5	355		3317	" 41	II Fa1	8.8	8.8	7.3	540	
2941	BW51	II Ca	9.6	7.7	4.2	360		3320	DO41	IIDa1	10.3	5.7	4.5	270	
2942	CV50	II Cac	(14.3)	8.0	4.5	( 590)	破	3326	Z	特磨	16.2	7.3	5.2	770	
2946	CX49	II Ca	10.1	7.0	4.0	310		3331	DK40	IIDa1	(10.3)	6.6	5.2	( 390)	破
2947	" 50	II Ea	9.0	8.4	4.7	440		3332	DL40	II Ea	12.1	10.6	5.0	630	
2949	BW51	"	8.5	8.2	4.5	340		3333	DM39	II Cac	11.4	8.9	5.2	550	
2951	"	I Eac	15.0	6.2	5.3	640		3336	DB38	II Ca	12.4	8.7	3.6	390	
2961	DA34	II Cac	11.1	8.4	4.0	560		3347	CY38	II Fac	7.9	7.9	5.2	330	
2962	CA34	I Dac	10.4	8.1	6.7	610		3355	DA40	II Ea1	8.4	8.2	5.0	320	
2984	DE35	I Fc1	( 9.2)	6.7	6.6	( 570)	破	3357	DG43	I Eabc	13.7	7.0	6.5	800	
2989	CA62	II Ea	9.9	8.7	4.2	400		3362	CI39	I Aab	10.2	7.9	4.0	400	
2993	CG62	II Cac	10.5	7.0	4.0	330		3382	CX40	II Ea	9.0	7.7	4.2	300	
3002	CM68	IIDa	10.2	6.6	5.0	290		3385	DB51	I Aabc	10.5	7.7	4.6	550	
3018	" 70	特磨	( 7.3)	7.0	6.2	( 380)	破	3391	" 41	II Ca	( 7.5)	7.5	3.4	( 190)	破
3026	CN76	II Ca	9.7	5.9	3.0	170		3412	BB44	IIDa	12.5	8.2	6.0	650	
3062	CM84	II Aa	( 9.8)	3.7	( 2.8)	( 150)	破	3414	BS44	II Ga1	7.8	5.5	5.0	170	
3072	CL89	II Fa	7.6	6.3	5.2	250		3421	BT45	I Aabc	11.8	7.3	4.5	480	
3075	CK89	II Cac	9.4	5.0	3.0	170		3423	BR43	IIDa	14.2	10.2	7.2	1,450	
3104	BO103	II Ea	6.7	6.6	4.0	200		3425	"	II Ga	8.0	6.6	2.0	110	
3121	CA96	IIDa	10.0	6.0	3.9	280		3427	BS	"	13.8	13.2	7.7	1,640	
3139	CN89	II Ca	11.8	8.7	3.9	380		3428	"	"	5.4	4.6	2.4	70	
3143	"	II Ea	12.5	10.6	5.0	830		3432	CV41	I Ec1	14.1	7.9	7.0	920	
3151	CM90	I Aab	( 5.6)	7.4	3.6	( 150)	破	3443	CR50	II Ca	(10.5)	7.6	4.0	( 295)	破・図1604
3160	CF92	II Eac	8.2	7.0	4.2	340	Ry	3452	CA44	II Cac	12.9	7.4	4.4	480	
3163	CG92	IIDac	9.5	7.6	5.5	420		3523	DA38	II Ga1	8.2	7.2	6.7	380	
3170	CO88	II Ea	7.0	7.9	4.2	( 310)	破	3551	DF38	I Ec1	17.9	8.5	5.8	1,040	
3189	西取付道路	IIDac	12.7	9.0	6.2	850		3555	DE38	特磨	( 7.4)	6.6	4.4	( 200)	破
3191	Z	II Ga	20.5	17.4	15.0	7,900	図1638	3556	PC41	"	(13.8)	8.2	6.0	(1,000)	"
3198	CM88	II Cbc	12.6	8.2	5.2	770		3570	DC41	I Ga1	10.4	6.7	4.3	290	
3199	CN88	I Aabc	12.4	8.1	4.2	490		3572	" 49	II Ea	7.9	7.2	3.5	200	
3208	CL90	II Ba	10.6	5.3	4.3	300		3575	DS38	II Fa	8.5	8.2	5.7	410	
3210	" 89	"	10.0	5.7	4.1	330		3577	CY42	II Ca	10.3	8.5	3.8	370	
3213	CK89	II Ca	11.7	7.8	4.0	470		3585	DM42	特磨	( 8.5)	6.8	5.5	( 350)	破
3215	CJ90	IIDa	10.8	7.7	6.0	570		3587	DJ38	IIDa	11.2	9.2	7.6	980	
3218	CI92	"	8.5	6.5	5.5	250		3595	DE41	II Ca	7.8	5.3	3.8	200	
3219	"	II Cabc	14.5	9.2	6.7	1,100		3600	DI41	IIDa	6.8	5.3	4.2	160	
3222	CG93	II Ca	8.6	7.4	3.5	300	Gd	3620	DK35	II Aa	13.8	6.4	4.5	450	
3224	CG91	IIDa	9.0	6.9	5.8	320		3622	CC46	II Cac1	13.3	9.6	6.0	850	
3225	"	II Ga	8.1	7.0	4.3	220		"	"	"	13.1	8.5	5.8	850	
"	"	II Ea	10.2	9.7	4.3	600		3624	CE45	I Aabc	13.0	8.5	5.0	770	
3226	"	II Ba	( 9.2)	4.6	4.0	( 190)	破	3625	CF43	IIDa1	10.3	7.7	6.2	620	図1613
3228	"	II Eb	10.2	9.0	4.3	600	図1585	3629	CJ43	II Ga1	11.2	7.0	6.0	510	
3230	CF92	I Aabc	10.8	9.5	4.5	670		3631	DR43	II Ga	11.0	7.5	6.3	530	
3235	CE93	IIDa	16.8	12.1	8.0	1,819		3632	" 42	II Cac	( 9.2)	( 8.1)	4.9	( 400)	破
3236	CF93	II Ca	11.2	8.1	3.6	350		3633	DQ42	IIDa	8.5	6.1	4.3	270	
3237	CE93	"	18.6	17.5	6.6	2,300		3638	BV53	I Eac1	( 6.0)	6.5	5.6	( 270)	破
3238	CF94	IIDac	13.6	10.1	7.5	1,240	図1621	3639	DO42	IIDa1	10.3	7.7	6.2	520	
3239	CC93	IIDa	9.3	( 7.3)	7.0	( 500)	破	3640	DD42	II Cac	9.8	8.7	4.7	500	
3243	" 94	II Cac	10.0	7.3	5.7	400		3642	DP43	II Ea	5.8	5.3	3.7	130	
3244	CD94	II Fac	( 7.7)	8.1	7.5	( 420)	破	3643	"	II Eac	14.0	12.0	7.0	1,400	
3245	"	II Eac	9.3	8.2	5.9	490		3644	CN89	II Ca	7.4	5.8	5.2	150	
3246	" 95	II Cabc	12.0	8.4	3.5	380		3646	DN44	II Cac	12.0	6.6	5.1	470	
3247	"	II Fa1	11.2	10.3	9.8	1,250		3653	DK41	II Ca	9.6	7.3	4.1	340	
3248	CC96	I Aabc	12.2	8.0	4.5	570		3656	DM48	II Ga	(10.0)	8.4	( 3.7)	( 300)	破
3249	Z	II Aa	11.0	4.8	3.2	260		3658	CY44	II Ca	7.8	6.5	3.0	180	
3250	CO86	IIDa	7.6	4.6	4.2	145		3659	DG36	I Ec1	21.4	7.9	6.6	1,480	図1588
3251	CN84	II Ca	14.6	8.4	3.4	580		3660	DC48	IIDa	16.2	11.5	9.3	830	
3252	CM81	I Eac	14.7	6.0	5.4	760	図1590	3661	" 49	IIDac	10.0	7.1	5.3	420	
3253	CN88	II Ca	12.0	8.5	3.7	450	Ry	3662	"	II Fa	8.5	7.5	6.0	410	
3255	CN87	II Cabc	( 9.6)	9.2	5.0	( 480)	破	3663	DB50	II Aac	12.5	5.2	3.2	280	
3256	CL87	II Cac	9.0	7.1	4.6	380		3664	CA48	IIDac	12.3	7.9	6.7	730	
3257	Z	IIDac	12.0	10.3	8.0	990		3665	DA48	II Ca	6.4	6.3	3.3	( 140)	破
3259	CR89	II Aa	11.6	6.4	( 3.7)	( 300)	破	3666	DE45	"	9.8	7.8	5.0	390	
3260	" 87	I Aabc	7.6	7.5	4.0	280	図1583	3668	DF48	II Ea	14.2	13.7	6.8	1,500	
3268	CS65	II Ca	12.1	8.3	5.0	560		3669	DG43	特磨	(11.0)	6.5	5.1	( 460)	破
3301	BU51	IIDac	12.3	9.0	6.2	740		3672	DB38	II Ca	9.1	7.4	4.9	370	
3303	CI39	II Fac	8.3	7.5	5.7	370		3673	DJ40	"	10.5	7.3	4.1	390	図1603
3305	CU44	特磨	( 8.4)	7.5	4.7	( 310)	破	3675	" 41	I Aab	( 8.6)	8.0	5.3	( 470)	破



登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
3677	DI41	II Fa1	8.5	7.8	6.0	500		3830	CW36	II Ca	10.0	8.5	4.3	330	
3678	DG36	II Ca	9.8	7.8	4.5	380		3834	CY35	II Cac	( 9.4)	6.2	2.1	( 207)	Ry 図1611
3680	DB43	"	12.0	9.5	5.1	700		3835	CB37	"	14.5	11.0	5.5	1,100	
3681	DC38	II Ga1	8.6	5.9	5.0	250		3836	CA37	II Ca	9.7	8.7	5.5	490	
3682	"	II Dac	13.0	9.0	6.2	960		3839	DJ37	II Dac	10.4	6.8	5.5	450	
3685	CB42	"	7.2	5.3	4.2	200		3845	DA36	II Eac	8.4	7.8	5.0	340	
3687	CW40	II Ca	9.3	8.2	4.7	460		3847	CH48	II Cac	(12.7)	6.5	3.3	( 330)	破
3688	CY41	I Abc	12.4	7.0	4.0	530	図1578	3848	CG48	II Ca	11.7	7.8	4.5	400	
3689	CS41	II Ga	9.7	8.5	5.7	600		3854	DX40	II Ea	7.0	6.4	3.9	1190	
3690	CT41	I Aab	( 9.8)	7.6	4.7	( 340)	破	3855	DY40	II Da1	12.1	8.3	6.6	640	
3691	CS43	II Ca	( 7.9)	8.3	4.2	( 390)	"	3856	DD38	II Eab	8.3	7.7	3.6	300	
3692	CT42	II Cac	10.8	8.6	5.6	620		3858	"	II Eabc	8.5	7.6	3.4	300	
3693	CS42	II Ca	9.7	6.2	3.4	180		3872	EE40	II Eac	8.3	8.3	4.5	350	
3695	CR42	"	(12.2)	( 8.0)	4.3	( 420)	破	3873	CE52	II Ca	11.0	9.6	5.5	660	
3697	" 43	II Da	7.3	5.9	4.2	230		3884	EP41	II Fa1	10.1	9.5	7.3	770	
3702	DT41	II Bb	11.4	5.4	3.9	320		"	"	II Fac	9.6	9.2	7.0	770	
3704	DF42	II Ea	11.0	10.0	7.5	680		3891	DS39	II Ga1	( 6.2)	6.3	3.6	( 120)	破
3706	DJ46	"	8.0	8.2	4.7	250		3899	EP59	II Da	11.3	6.3	5.4	460	
3714	DB42	II Fa	8.2	8.2	5.6	350		3900	DU43	II Ga1	9.5	5.9	4.9	220	
3716	CS41	I Aabc	10.0	7.7	4.4	470		3901	ED43	II Cac	10.8	8.0	( 4.5)	( 450)	破
3720	DA43	II Cac1	9.8	8.2	4.5	490		3904	EK42	I Aabc	(12.2)	9.0	4.5	( 670)	"
"	"	"	9.9	8.4	4.7	490		3912	DI47	II Cac	9.4	7.1	5.0	360	
3721	CX20	II Cac	11.7	10.0	5.1	600		3925	DF49	II Bc	9.4	5.5	4.0	250	図1618
3724	" 39	"	11.1	7.6	3.1	348		3926	"	II Cac	13.4	7.9	4.8	565	" 1615
3725	CY39	I Fca1	12.0	5.9	5.9	620	図1594	3927	DE49	I Ebc	9.4	7.3	5.0	440	
3726	"	II Ca	10.7	9.4	4.8	460		3928	DH45	II Da1	9.3	6.3	4.8	300	
3727	"	II Fac	9.2	7.6	7.0	550		3930	CM44	II Fa	8.0	6.8	5.1	290	
3730	CX39	II Da	9.9	7.6	4.9	400		3931	OP48	II Da	9.8	8.7	5.7	675	
3731	"	"	8.3	7.1	4.3	250		3932	DO46	II Ca	11.2	9.0	5.4	690	
3733	DC42	II Ga1	8.3	5.5	4.2	150		3933	"	II Cac	8.9	6.4	4.0	270	
3734	DB41	特磨	(13.5)	8.7	6.0	( 830)	破	3934	CY46	II Ca	10.0	7.2	3.8	290	
3735	" 43	II Da1	(10.3)	7.8	5.6	410		"	"	II Dac	8.4	7.0	5.2	370	
3736	DA46	II Ca	11.0	7.9	( 4.7)	( 470)	破	3937	DY42	II Ea	7.3	7.5	3.4	205	図1623
3737	DI42	I Aabc	( 9.2)	7.9	3.3	( 310)	"	3938	CW44	II Ca	(11.5)	7.5	3.1	( 250)	破
3738	" 40	II Ca	9.6	7.7	4.7	400		"	CV41	II Cac	11.8	7.0	( 2.7)	( 280)	"
3740	DG40	I Fca1	14.9	6.8	6.4	710	図1592	"	CW44	I Fc1	( 8.0)	6.4	5.8	( 500)	"
3741	DP39	II Da	8.4	6.3	5.2	320		3940	CN61	I Aabc	11.1	7.1	3.7	( 370)	"
3746	DG40	"	11.6	8.4	5.6	570		3942	CU44	II Ca	11.9	7.8	5.7	630	
3748	CW38	II Ea	9.2	8.3	4.7	385		3943	CV43	II Da	9.3	6.5	5.1	370	
3750	"	I Fca1	15.0	6.7	6.2	880		3944	CY43	I Aabc	11.1	8.6	5.1	580	
3751	CX38	II Da1	11.0	8.7	6.6	680		3947	CV43	II Da	9.5	5.7	4.0	210	
3752	CW39	II Fa1	9.5	8.0	6.5	520		3940	CW42	II Ga1	10.0	7.0	5.4	350	
3755	CX38	II Aa	13.5	6.6	4.4	510		3950	"	II Ea	8.5	7.3	4.0	250	
3756	CY38	II Ba	10.2	4.6	4.6	230	図1598	3952	CV43	II Ca	7.4	6.1	3.4	175	
3761	CX39	II Fa	6.5	5.7	5.4	190	" 1630	3956	CX43	特磨	13.7	8.5	6.5	1,500	図1639
3766	DA39	II Da1	10.4	8.5	5.8	510		3960	CR42	II Eac	8.9	8.7	4.6	390	
3768	"	II Ca	10.8	6.7	3.7	330		3962	CT39	特磨	(10.5)	7.0	6.1	( 560)	破
3769	DB40	I Bc1	17.6	9.9	8.4	1,755		3965	" 41	II Ba	(10.7)	5.5	4.8	( 270)	"
3770	DB40	特磨	(11.8)	8.1	6.6	( 940)	破	3968	CP43	I Aabc	( 5.8)	6.6	4.5	( 190)	"
3772	DD41	I Ec1	14.0	7.6	6.2	960		"	" 44	I Ga	8.8	6.6	4.7	310	
3773	DC43	II Ca1	8.5	5.6	4.9	190		3972	CJ44	II Fa	8.2	8.2	5.0	490	
3774	"	II Ea	11.1	9.2	3.3	400		3973	"	II Cb	13.1	11.0	6.9	1,220	
3777	"	II Ca	8.7	6.1	3.8	210		3978	CD41	II Ca1	9.7	7.5	5.2	380	
3779	DA43	"	( 8.9)	6.2	4.6	( 270)	破	3980	CE46	II Fa	7.9	7.4	4.9	300	
3781	" 45	II Ga1	9.2	7.0	7.2	420		3981	CL44	I Aabc	(10.8)	7.2	3.8	( 370)	破
3782	"	II Ca	12.2	7.0	5.0	480		3982	" 45	II Ba	9.7	5.1	3.7	240	
3784	ED41	II Da	10.0	4.8	3.7	220		3983	CB43	I Aabc	11.2	8.5	5.9	830	
3785	DA46	I Eac1	12.8	7.4	6.5	720		3987	CA45	II Da	8.2	6.3	4.9	240	
"	DQ43	II Ea	8.5	8.0	4.3	370		3988	BT43	I Ec1	( 6.7)	6.8	6.7	( 350)	破
3789	CX46	II Da1	10.5	6.2	5.1	320		3989	BP44	II Ca	8.1	6.4	3.2	150	
3790	DJ40	I Fc1	13.2	7.3	7.3	990		3990	BX44	II Da1	9.7	5.5	4.5	210	
3798	DR40	II Ea	11.7	10.0	5.1	670		3996	"	"	10.8	9.5	6.5	630	
3799	DQ41	II Ca	10.1	5.4	3.0	180		3997	CA44	II Fa	9.4	9.0	5.7	490	
3800	CR44	"	11.4	8.5	4.8	525		3999	CI44	II Da	11.3	6.9	5.2	540	
3804	CS40	II Da	(12.6)	6.3	4.1	( 340)	破	4001	CQ46	I Fc1	( 8.2)	6.4	6.2	( 460)	破
3806	CJ45	II Dac	10.2	6.5	4.9	390		4006	CS46	II Da	7.6	6.1	4.5	250	
3807	CK45	II Cac	8.4	6.6	4.5	320		4009	CP49	II Da1	9.8	8.0	5.8	410	
3808	"	II Ca	9.0	6.8	2.5	170		4014	CQ46	II Ca	( 9.0)	7.5	3.6	( 290)	破
3809	CP41	I Aabc	9.3	8.0	4.7	500		4016	" 47	"	12.8	10.3	4.5	700	
3813	CV44	II Cac	9.2	8.1	5.0	440		4020	CS48	II Da	( 9.2)	5.2	4.8	( 300)	破

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
4021	CS47	I Ebc	11.5	7.3	6.0	540		4319	CD56	II Cac	10.0	7.1	4.2	290	
4023	"	I Aabc	( 7.8)	8.1	4.7	( 450)	破	4994	DJ55	I Abc	( 5.8)	6.7	4.3	( 220)	破
4026	CT46	II Ca	11.5	7.9	5.6	590		5502	DD46	I Aabc	( 6.2)	6.9	4.1	( 250)	破
4031	CP49	II Dac	10.4	7.3	5.7	470		5503	CW42	II Ca	11.0	7.8	5.1	510	
4035	CK49	I Ca	12.5	6.7	2.7	220		5505	CH41	II Cac	13.6	8.6	4.8	590	
4044	CP49	I Aab	( 4.8)	7.4	4.0	( 130)	破	5507	CP47	I Ec1	14.7	9.0	8.0	1,300	
4046	CS46						Na4082と接合 図1593	5512	DJ42	I Aabc	10.0	8.0	4.7	540	
4050	CR48	II Da1	9.5	5.8	5.3	350		5513	DI43	II Cac	11.0	7.3	4.9	430	
4059	CN59	I Aabc	9.2	9.2	5.0	560	図1584	5515	DF42	II Ga	8.6	( 7.4)	4.2	( 380)	破
4073	CI48	特磨	19.4	6.3	6.7	1,280		5516	?	II Da1	12.9	10.4	7.9	1,030	
4082	CT46	I Fc1	13.2	6.6	6.5	830	Na4046と接合 図1593	5790	EU59	II Ca	( 8.7)	( 7.9)	3.9	( 315)	破
4087	CM48	II Eabc	9.8	8.8	5.0	540		5845	CK59	II Dac	12.3	8.5	5.2	600	
4088	CI47	I Aab	9.9	8.2	4.6	500		6314	EN59	II Ca	8.0	6.3	3.3	230	
4091	"	"	( 7.2)	9.0	5.6	( 420)	破	6572	DW60	II Aac	(11.5)	4.9	2.5	( 223)	磨製石斧の転用 Ry
4095	"	I Aabc	11.4	7.6	4.7	660		6656	DK61	II Ca	11.2	5.9	2.5	210	
4097	"	II Dac	11.2	8.4	4.3	370		7697	CT65	II Cabc	11.7	7.8	5.4	602	
4098	"	II Da	9.2	6.8	5.5	380		8000	DH56	I Eac1	14.9	7.3	4.1	550	
4099	"	II Ga1	11.0	( 7.0)	5.3	( 420)	破	8001	DL51	II Eac	8.8	7.7	5.0	430	
4124	CB49	II Dac	10.5	9.0	6.5	720		8002	C 45	II Ca	10.2	6.6	4.0	290	
4125	"	I Ec1	( 6.1)	8.6	6.3	( 380)	破	8003	C区Z	II Cabc	11.7	9.6	4.5	750	
4126	CD46	II Fa	8.3	7.3	6.0	390		8005	"	II Cac	11.0	9.3	5.4	650	
4127	CE48	II Ca	8.0	6.2	3.6	210		8006	CL47	II Ca	12.9	10.3	6.1	850	
4129	CF47	II Aa	14.0	7.4	4.6	480		8007	CS52	II Da	13.4	7.9	3.2	330	
4142	CK46	II Ea	6.3	5.6	2.8	100		8009	EQ60	"	12.4	9.5	6.0	710	
4143	CJ47	II Eabc	10.8	9.2	4.0	510		"	"	II Da1	10.0	8.0	5.5	460	
"	"	"	10.7	9.7	3.9	510		8010	DY53	II Fa	5.9	5.4	4.6	148	
4144	"	II Da1	11.7	8.2	6.0	680		8012	ET59	II Ca	10.1	8.3	4.6	420	
4164	CM47	II Cac	11.0	8.1	3.7	390	図1609	8013	EC54	I Aab	13.0	8.0	4.9	495	
4166	CP46	I Aab	( 6.0)	8.4	5.8	( 270)	破	8014	EM59	II Da1	10.0	7.8	6.5	550	
4172	CQ46	II Cac1	( 9.0)	6.6	4.9	( 330)	"	8015	CL66	II Ca	9.0	7.1	3.5	250	
"	"	"	( 9.0)	6.7	5.0	( 320)	"	8016	EC58	II Fa1	9.9	9.0	6.5	600	
4173	CV48	II Ca	6.4	3.9	2.6	90		8017	ED52	II Da	8.2	6.4	4.5	190	
4174	"	II Ga	( 8.6)	( 6.6)	2.7	( 140)	破	8018	DP53	II Fa	( 9.2)	8.2	6.1	( 550)	破
4175	CX48	II Da	10.2	6.4	4.8	370		8019	DY59	II Ea	10.0	9.5	4.9	450	
4177	CG46	II Cac	9.8	8.5	5.2	480		8021	DX52	II Ca	11.4	9.5	5.0	550	
4178	CK46	II Dac	12.2	8.5	5.1	670		8022	DL52	"	10.5	6.2	4.2	260	
4183	CE48	II Ga	7.1	6.3	2.3	90		8023	DS59	II Ga	( 6.8)	8.3	4.7	( 270)	破
4184	CD48	II Dac	8.6	7.0	4.9	240		8024	EV44	II Eac	11.8	10.0	4.8	670	
4189	CA48	"	8.8	6.5	6.4	360		8025	DS59	II Fa	7.8	6.7	5.3	310	
4195	CF46	II Ca	11.4	9.1	5.0	620		8026	DC59	"	10.9	10.2	7.2	940	
4197	CG49	II Dac	11.5	8.8	7.5	940		8027	DM62	II Da1	12.1	8.3	6.5	670	
4198	CH46	II Da1	10.8	7.0	7.0	500		8028	DX59	I Cac	10.1	8.7	5.3	560	
4207	CK48	II Ca	9.6	8.0	3.8	290		8029	DH55	II Cac	11.7	8.8	3.6	( 390)	破
4209	CJ49	II Ea	8.5	7.4	4.0	270		8030	DE63	II Da	9.6	8.0	6.7	560	
4215	CR46	II Ga	( 7.8)	( 7.3)	4.4	( 260)	破	8031	DL51	II Ea	11.9	10.1	6.0	910	
4216	DM47	II Da1	13.3	10.9	8.0	1,230		8032	DY56	II Cac	12.0	9.1	4.1	480	
4220	DG48	I Eac	14.2	6.8	6.0	660		8033	CS54	II Ca	10.1	6.6	3.3	270	図1601
4221	"	II Aa	11.3	4.0	3.5	210		8034	DO54	I Aab	10.3	7.7	5.6	560	
4223	CO49	II Ga1	(10.3)	7.3	3.7	( 280)	破	8037	DN53	II Fa	6.2	5.8	5.1	200	
4226	DC49	"	(10.8)	8.2	3.7	( 360)	"	8038	DY58	"	6.0	5.9	4.2	160	
4251	CC48	II Fa	9.8	8.7	5.5	500		8039	DU58	I Aabc	12.6	8.3	4.2	680	図1576
4258	DF49	II Cac	8.5	5.3	2.6	( 235)	破・磨製石斧の転用 図1507	8040	CL50	II Fa1	9.1	8.3	6.3	550	
4260	DE46	II Da	13.8	10.5	6.4	980		8041	CU60	II Dac	10.0	7.5	4.9	360	
4268	DA52	II Ca	10.0	6.5	4.5	300		8042	DU57	II Fa	7.3	8.2	5.0	330	
4273	DE49	II Ga	9.0	8.3	5.5	450		8043	" 56	II Ca	9.5	6.5	4.4	280	
4277	CH49	II Dac	10.0	6.7	5.3	480		8044	" 61	I Aab	9.8	6.4	4.6	330	
4283	CD49	II Aa	14.5	6.4	4.5	370		8046	DW53	II Ca	11.1	8.7	4.0	470	
4285	CE49	II Ca	10.6	8.1	4.5	450		8047	" 59	II Gac	9.1	8.0	5.0	310	
4287	DD35	II Fac	9.3	8.5	6.5	490	図1632	8048	DV61	II Aa	13.8	6.3	4.0	420	
4288	"	II Dac	8.1	7.1	4.0	270		8049	CL49	"	12.5	6.5	4.5	430	
4289	DE34	II Da1	9.4	8.9	6.0	450		8050	DW55	II Ga	8.5	7.8	3.4	225	
4291	DF33	II Ca	10.4	8.4	5.0	500		8051	DT57	II Ca	9.7	6.8	3.4	260	図1602
4292	DG36	II Da	9.9	7.9	5.4	470		8052	BY60	"	12.7	7.8	5.2	530	
4293	" 34	II Ea	7.7	6.6	5.1	230		8055	BT60	II Cac	9.5	8.3	4.0	300	
4295	"	II Da1	9.0	7.0	5.0	350	図1606	8056	DF55	II Da	8.4	6.6	4.9	290	
4296	CP49	II Aa	12.5	5.3	4.0	340		8057	" 61	II Aac	20.5	9.8	4.3	930	
4297	DG34	I Ec1	(10.8)	7.9	6.4	( 770)	破	8059	DG50	II Fa	7.3	6.4	4.5	220	
4300	DH34	II Ea	8.2	7.7	3.8	250		"	"	II Eab	7.3	6.2	4.6	220	
4303	BL48	I Eac1	(12.3)	7.4	5.1	( 600)	破	8060	BV61	I Aabc	( 5.3)	7.7	4.0	( 230)	破
4304	"	II Bac	10.7	6.5	4.7	320		8061	CL51	II Cac	10.6	7.1	4.5	390	

登録No	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録No	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8061	DU58	I Abc	11.2	8.0	4.4	550		8152	DC54	II Dac	10.0	5.8	( 4.3)	( 250)	破
8062	DW60	II Ca	8.8	6.3	3.9	260		8153	DG53	"	13.5	6.3	4.2	390	
8063	BW60	II Ea	8.5	7.5	4.2	330		8154	DC54	"	12.2	8.3	5.6	600	
8065	CG50	II Eabc	10.4	9.2	5.0	520		8155	DF58	I Eac1	( 9.0)	6.8	5.7	( 470)	破
8068	BS53	II Ga1	( 7.9)	7.7	4.5	( 140)	破	8156	DO59	II Da1	11.0	5.5	4.7	350	
8069	BR53	II Fa1	5.4	5.2	4.3	100		"	"	II Cabc	6.4	8.1	4.7	360	No1
8072	J 48	II Da1	9.3	6.5	4.7	280		8157	CJ59	II Ga	8.3	6.3	3.0	270	
8073	CS64	II Dac1	13.5	9.9	6.7	904		8158	DO62	II Fa	7.5	7.4	5.5	330	
8074	"	II Cac	12.3	7.3	4.6	530		8159	DG60	II Ca	9.0	7.0	4.0	280	
8076	DD52	II Ga1	8.5	6.4	4.9	310		8160	DF58	"	9.3	7.6	4.3	370	
8078	"	"	8.5	7.0	4.2	320		"	"	"	6.7	6.8	4.0	140	
8079	BQ59	I Aabc	10.0	8.0	4.7	570		8161	DE59	II Dac	11.0	7.5	4.5	390	
8080	CU69	特磨	15.9	8.0	6.6	( 960)	破	8162	DC58	II Ca	8.5	6.4	4.0	220	
8082	CE51	II Ca	11.2	7.3	3.7	320		8163	DO59	"	12.4	7.9	5.0	570	
8083	CT64	"	12.2	7.4	4.5	380		8164	DG57	II Da1	8.1	6.5	5.1	250	
8084	"	II Da	11.2	6.5	5.0	390		8165	DE60	II Da	10.4	7.0	5.5	450	
8085	"	II Da1	10.3	7.3	5.5	450		8167	DP51	II Ga	8.5	7.5	2.4	150	
8086	"	II Da	7.3	5.6	4.1	200		8169	EB59	II Dac	( 8.6)	7.2	6.0	( 400)	破
8087	"	II Cac1	11.6	9.1	5.5	( 770)	破	8170	" 56	II Cac1	12.7	9.0	4.2	630	
"	"	"	11.8	9.2	5.5	760		"	"	"	12.7	8.6	4.0	630	No4
8088	"	II Fa	5.2	5.8	4.6	180		8171	" 58	II Da	10.7	8.1	7.0	680	
8089	CA60	II Cac	11.3	6.9	3.7	330		8172	" 60	II Fa	7.7	7.8	( 6.0)	( 310)	破
"	"	II Da	9.6	7.8	5.8	510		8173	" 58	II Ga	10.8	8.0	5.3	410	
8091	CD51	II Cac	10.5	7.5	4.9	440		8174	" 56	II Da	9.6	6.9	6.1	400	
8092	CM61	II Ba	12.0	5.3	5.1	360		8176	DF55	II Ca	9.2	7.0	4.0	310	
8093	BX91	II Da	10.2	7.4	6.0	460		8177	"	II Da1	11.1	7.0	5.0	415	図1617
8094	CM69	II Fac	10.5	10.0	6.5	850		8178	"	II Fa1	8.6	8.0	7.2	530	
8095	"	II Cac	11.0	8.5	5.1	640		8182	EB44	II Dac	11.8	9.5	4.5	576	
8096	CK50	特磨	13.4	7.5	6.0	810		8183	EG42	"	8.8	7.6	3.1	220	
8098	CT46	I Ec1	( 8.6)	6.9	5.2	( 270)	破	8184	CX45	"	11.6	7.8	5.0	460	
8101	CI55	II Db	10.1	5.9	5.0	446		8185	CX	II Ca	9.3	8.0	5.5	420	
8102	DA67	特磨	16.4	8.1	7.0	980		8186	BW51	II Fac	8.2	6.5	5.9	290	
8103	CK50	I Bc	11.9	6.5	4.5	405	図1620	8187	DH48	II Fa	6.6	6.4	4.6	190	
8104	DD50	II Cb	10.5	9.1	6.0	640		8189	DP40	I Aab	( 7.4)	6.9	4.0	( 240)	破
8105	CL61	II Ca	5.3	4.4	2.5	60		8190	CK43	I Aabc	13.7	8.8	5.4	900	
8107	DD58	I Fc1	16.6	7.0	7.0	1,200		8192	DP54	II Cac1	10.6	6.4	4.0	320	
8108	CY67	I Aabc	13.7	8.2	5.6	840	図1619	"	"	"	10.6	6.3	3.7	320	
8109	" 68	II Da1	10.5	6.0	5.0	410		8193	CU45	II Ca	10.0	8.3	4.6	440	
8110	" 67	II Ca	( 8.9)	8.3	3.3	( 340)	破	8194	DL58	I Eac1	( 7.7)	8.5	5.5	( 450)	破
8112	DK54	II Cabc	10.6	8.2	5.7	710		8195	DC49	II Fa	8.8	8.0	5.9	400	
8115	CP90	II Cac	9.7	6.9	4.2	340		8196	CX48	II Da1	8.0	5.9	5.5	290	
8117	DK63	"	9.8	8.2	4.5	360		8197	ER59	I Eac	8.2	6.7	5.8	460	
8118	DI60	II Da	8.1	6.0	5.3	250		8199	DV35	特磨	( 9.5)	5.9	5.0	( 410)	破
8119	" 62	"	7.1	5.3	4.4	190		8200	CF52	II Cac	11.0	9.5	6.2	760	
8121	" 63	II Cac	9.4	6.9	4.8	( 260)	破	8201	" 57	II Ea	8.0	8.5	5.0	350	
8122	DP55	II Cac1	9.2	6.6	4.2	310		8202	CV38	II Ba	12.3	5.7	4.6	380	
"	DD55	"	9.1	6.7	4.2	310		8203	CM90	II Ca	13.0	8.7	3.7	550	Ry
8123	" 54	II Fac	9.7	9.3	6.2	510		8205	FK47	特磨	( 9.3)	6.7	3.8	( 300)	破
8124	DI59	II Ca	9.5	6.6	4.0	270		8206	DF56	I Eac1	14.0	7.0	6.4	810	
8125	" 61	II Cac	18.2	9.3	4.0	700		8208	DM47	II Ea	11.1	9.9	5.2	660	
8126	"	II Da1	10.5	6.4	4.5	340		8210	EV50	II Ca	10.3	8.5	4.0	450	
8127	DH57	I Aab	( 8.2)	7.3	4.2	( 360)	破 Gr	8212	DD57	I Aab	(10.0)	8.5	6.0	( 590)	破
8128	CQ77	II Dac	13.0	10.5	4.8	650		8213	FH47	II Ga	16.0	8.0	4.5	490	
8129	DK63	II Fa	10.0	9.9	8.2	860		8214	DS51	I Fc1	( 6.0)	6.5	6.4	( 400)	破
8130	DF59	II Cac	10.8	8.0	3.8	330		8215	DO57	I Abc	11.6	5.1	( 4.3)	( 250)	破
8131	DH62	II Ga1	8.6	7.7	5.3	280	図1637	8219	ET59	I Ec1	( 7.9)	6.8	6.0	490	
8132	DK63	II Ca	8.0	6.2	4.0	200		8220	EV57	II Ea	8.5	7.3	5.7	400	
8133	DI61	II Da	8.8	6.0	6.0	320	図1614	8221	DE58	II Da1	10.0	7.2	7.0	565	
8134	DX63	II Da1	9.8	4.5	5.3	220		8222	CW51	I Aabc	9.0	6.6	3.5	240	
8136	DE60	II Ca	10.0	7.6	5.1	490		8223	CS61	II Da	8.2	6.0	4.8	285	
8137	DG61	I Aabc	9.9	7.0	4.0	410		8226	DN48	I Aab	10.2	9.2	4.7	480	
8138	"	II Ca	9.4	7.0	5.1	430		8227	CP56	II Ga1	10.5	6.0	4.3	375	
8139	CM51	II Cac	10.0	6.8	4.5	320		8228	DR54	II Ea	8.0	7.4	3.9	260	
8140	DC58	II Da	10.6	8.9	6.5	530		8229	CX46	II Dac	9.8	6.7	4.4	310	
8141	DW57	II Dac	11.0	6.6	5.0	460		8231	DP46	II Ca	7.6	5.7	3.6	160	
8142	DE56	II Cac	12.5	6.6	4.5	390		8232	CY40	II Da1	9.5	8.5	6.5	430	
8143	" 60	II Ca	10.8	6.1	3.2	270		8233	DN45	I Ec1	( 9.4)	7.1	5.3	( 520)	破
8144	DW57	II Da	14.3	10.0	7.0	1,070		8235	DB54	II Da	10.3	7.6	5.4	550	
8148	DG57	II Ga	11.4	9.6	3.7	450		8236	BS56	II Ea	9.0	7.9	4.7	360	
8151	DW57	II Dac	9.0	7.5	4.5	350		8237	BY50	II Dac	8.2	10.2	6.5	550	

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備 考
8238	CY43	II Ca	8.8	6.6	3.6	200		8340	"	II Da1	10.5	5.2	4.4	260	
8239	CL58	"	9.0	7.1	4.2	300		8341	"	II Dac	12.0	6.2	5.4	430	
8240	CQ47	"	( 5.4)	7.0	3.5	( 140)	破	8343	"	I Eac	16.0	5.8	5.0	720	
8241	CT43	II Dac	12.3	7.5	6.0	710		8346	C区Z	II Cabc	10.5	8.6	5.2	630	
8242	BX50	II Aa	12.0	5.5	3.5	210		8348	Z	特磨	18.0	8.2	6.0	( 1,300)	破・図1643
8244	DD51	II Gab	11.8	8.7	3.4	390		8349	C区Z	II Ea	10.5	9.9	5.8	520	
8245	CF53	II Cabc	13.6	9.0	6.3	920		8350	Z	特磨	16.6	16.9	6.5	960	
"	"	II Da1	10.8	5.5	3.9	250		8351	C区Z	I Aabc	13.0	7.3	5.0	700	
8247	DM49	II Dac	11.0	7.1	5.0	510		8352	"	II Ca	11.2	7.8	4.6	410	
8250	EH42	I Aabc	9.2	6.5	4.6	380		8354	Z	II Cac	12.6	8.3	5.5	640	
8251	CQ40	II Ea	( 9.0)	8.1	4.5	( 370)	破	8355	C区Z	II Fa	( 7.6)	7.2	5.9	( 370)	破
8252	DN44	II Ca	8.7	6.2	4.7	270		8356	Z	II Ga	10.2	9.1	7.6	900	
8253	DD33	"	10.0	7.2	4.4	330		8358	Z(西農道)	II Ca1	13.6	6.5	4.8	400	
8255	DK34	I Aab	10.5	7.3	4.4	370		8361	DN58	II Ca	12.3	9.2	4.0	500	
8257	CC57	I Aabc	( 6.7)	8.0	5.2	( 330)	破	8367	DK62	II Cac	10.5	7.5	4.4	350	
8258	CQ45	II Da1	9.4	6.0	5.1	310		8368	"	II Dac	10.5	7.7	6.5	590	
8259	CR90	I Abc	10.9	7.0	4.8	660		8370	" 51	"	10.2	6.7	5.2	405	
8260	BP56	II Ga1	11.8	9.1	6.5	790		8373	DJ54	I Aabc	9.9	6.8	4.3	390	
8261	DC47	II Ca	15.9	7.5	4.0	480		8374	" 62	I Eac1	( 9.6)	7.5	5.5	( 470)	破・No3
8262	DK34	II Ga	( 8.7)	6.5	3.5	( 195)	破	8375	C区Z	II Dac	9.0	6.4	4.2	260	
8263	DF40	II Eac	10.3	9.3	3.4	320		8376	"	II Ga	10.2	7.8	4.7	360	
8264	DO40	I Aabc	( 8.7)	6.5	5.0	( 340)	破	8377	"	II Da1	8.0	5.7	4.2	200	
8265	DL60	II Fa	9.7	10.0	6.6	( 650)	"	8378	"	II Da	8.7	7.5	6.3	440	
8268	EA58	II Ebc	11.5	10.4	4.9	790	図1626	8379	CP47	II Ga1	8.9	7.3	6.2	330	
8271	D区Z	II Ea	9.7	8.4	3.4	270		8380	C区Z	II Fa	7.7	7.2	4.0	250	
8272	"	"	14.3	12.2	5.7	1,050		8381	"	II Fa	8.6	8.2	4.8	450	
8273	DL52	II Dac	11.2	6.5	3.0	280		8383	DN44	II Eac	9.2	7.9	4.1	360	
8274	" 62	II Ga	( 9.0)	8.7	5.2	( 400)	破	8384	BU51	II Dac	14.3	6.8	5.4	660	
8275	EA58	II Ca	7.0	5.9	4.0	180		8385	BX54	II Ga1	10.1	7.8	7.5	740	
8276	DW55	II Fa1	8.4	7.4	6.2	410		"	"	II Ga	11.2	7.4	3.7	380	
8279	CP47	II Ea	7.0	7.2	4.5	250		8386	BS60	II Dac	12.0	7.6	7.0	625	
8283	C49	I Aabc	( 7.0)	6.8	4.1	( 280)	破	8387	CH53	II Da	10.8	7.2	6.2	660	
8284	DK51	II Ca	10.2	6.5	4.5	250		8388	CA59	特磨	12.0	6.5	6.2	750	
8285	DL62	II Da	8.5	6.0	5.0	270		8389	C区Z	II Cac	13.3	8.4	4.5	550	
8289	DX51	II Dac	10.9	6.0	4.8	400		8390	CW50	II Da1	11.4	7.9	6.4	660	
8290	" 55	II Ca	9.3	7.2	3.4	280		8391	CG54	II Dac	( 8.6)	7.2	6.0	( 400)	破
8291	D区Z	II Da	8.2	6.9	5.2	350		8392	BY56	II Ba	11.3	5.8	3.6	190	
8292	DA55	II Ea	6.0	5.9	4.2	170	図1629	8393	CG55	II Ea	9.3	8.0	5.8	440	
8294	CO49	II Aa	11.3	4.0	3.0	220	Ry	8294	CH55	II Ga	8.0	5.5	3.0	130	
8296	CP49	II Cac	11.5	8.3	4.0	440		8395	" 53	II Db	9.4	6.1	5.1	444	
8297	EL42	II Ca	10.0	7.3	3.8	210		8396	CE61	II Da1	10.1	7.8	4.7	430	
8298	BT56	"	10.3	5.9	3.4	210		"	CX36	I Eac	13.2	6.3	5.4	670	
8300	CF61	II Ga1	12.9	10.5	8.7	1,650		8399	BP59	II Cac	10.5	6.8	3.8	300	
8301	C区	II Ga	( 12.8)	9.2	6.2	( 810)	破	8400	CN66	II Fac	6.9	6.0	5.7	230	
8302	Z	II Ca	9.2	( 8.7)	4.7	( 360)	"	8401	BX47	特磨	14.1	7.6	5.6	811	
8303	"	II Aa	11.6	5.3	3.5	270		8402	FC41	II Dac	9.8	7.3	4.8	430	
8306	E区Z	II Da1	9.0	7.5	6.2	480		8403	DJ55	II Fb	10.5	9.2	6.3	656	
8308	"	II Dac	13.8	8.6	6.0	680		8404	DI61	II Da1	9.7	7.7	5.0	440	
8309	Z	II Cac	10.5	6.8	4.5	400		8405	DB52	II Fa	7.5	6.4	4.9	230	
8311	"	II Bc1	15.3	9.0	6.1	1,283		8406	CL47	II Ba	10.8	( 4.1)	4.5	( 250)	破
8312	C区Z	II Cac	8.9	6.7	4.2	280		8408	CN66	II Fa	4.6	4.7	3.5	70	
8313	"	I Aab	( 5.6)	8.6	5.3	( 290)	破	8409	EQ60	I Aabc	11.7	7.0	4.5	480	
8314	"	II Eac	8.2	7.5	4.4	310		8410	DI63	"	9.0	6.8	4.6	410	
8316	"	II Cac	9.5	7.4	5.5	490		8411	CK68	II Ca	9.6	7.6	4.2	315	
8317	B区Z	I Ga	12.6	9.0	5.9	650		8412	DA65	II Dc	12.6	9.0	7.0	968	
8318	D区Z	II Fa	9.7	7.2	7.0	580		8413	" 61	I Aabc	11.1	6.4	4.0	370	
8319	B区Z	I Ga	( 11.3)	9.1	4.2	( 420)	破	8414	DE54	II Da	10.0	6.6	6.0	450	
8320	"	II Dac	12.8	8.8	6.9	960		8415	DA67	II Dac	11.7	7.5	4.5	460	
8322	C区Z	II Cac	8.1	6.3	4.0	200		8416	CO49	II Da	9.7	8.0	5.1	520	
8323	B区Z	II Ga1	9.0	7.6	5.7	450		8418	BG57	II Bac	11.3	4.5	4.5	260	
8326	"	II Ga	9.5	7.2	3.3	220		8420	Z	II Ca	12.2	8.9	3.0	360	
8327	"	II Da	9.6	5.5	5.0	320		8423	"	I Eabc	8.9	7.3	5.4	510	
8328	C区Z	I Eac	12.8	6.1	4.5	460		8424	D区Z	I Aabc	10.8	8.0	4.6	540	
8330	"	II Ca	10.9	8.8	5.0	490		8425	"	II Da	8.2	5.7	4.0	220	
8332	"	"	10.2	8.0	3.6	420		8426	BY58	II Cabc	10.0	7.4	5.0	540	
8334	CY43	II Da	10.7	7.4	5.6	420		"	D区Z	II Dac	8.0	7.8	6.2	630	
"	C区Z	II Cac	8.5	6.7	4.7	300		8427	"	II Da	9.2	8.2	5.8	410	
8336	"	II Da	12.0	( 5.7)	6.0	( 530)	破	8428	DK54	II Cac	( 10.7)	7.7	5.0	( 490)	破
8338	"	II Dac	13.0	7.0	5.1	550		8429	"	"	9.2	7.4	4.8	380	
8339	Z	II Ca	16.0	11.5	7.0	1,450		8430	D区Z	II Fac	8.9	7.0	6.0	530	

登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録 No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8431	D区Z	II Da	8.6	7.4	5.0	370		8511	FA53	II Da1	9.0	6.4	5.6	370	
8432	B区Z	II Dac	9.5	6.8	5.5	470		8512	Z	I Aabc	9.4	6.9	4.3	400	
"	"	II Ga	13.6	11.3	3.2	660		8513	EC59	I Aab	( 6.5)	6.4	4.0	( 210)	破
8433	Z	II Dac	10.4	7.4	5.4	430		8514	Z	II Ca1	10.0	7.5	4.8	360	
8434	D区Z	II Ga1	(10.7)	9.5	6.4	( 560)	破	8515	集石内	II Ea	9.8	8.5	5.5	520	
8435	B区Z	II Ga	13.7	11.5	8.2	1,430		8517	Z	II Ca	10.1	8.4	5.3	460	
8437	D区Z	I Eac1	14.2	8.2	5.3	760		8518	"	II Ca1	10.8	7.7	4.5	420	
8438	"	II Ea	10.8	9.8	5.5	800		8520	"	II Cac	10.0	7.2	3.3	230	
8440	"	II Da	10.1	6.4	4.2	350		8521	CN60	I Aabc	9.4	6.6	3.5	320	
8441	B区Z	II Aa	(13.5)	6.2	3.0	( 330)	破	8522	DK56	II Dac	(15.1)	10.3	4.8	(1,050)	破
8442	CB区Z	II Da	11.7	7.4	6.6	650		8523	Z	II Ga	7.6	5.7	4.3	210	
8443	"	II Ca	9.1	7.7	4.3	330		8524	DS53	II Ca	11.8	8.6	5.6	690	
8444	"	"	7.5	5.0	3.5	155		8525	BW58	II Ca1	8.0	6.0	3.5	220	
8445	"	II Ea	9.8	9.3	( 4.0)	( 300)	破	8527	DI45	II Eac	11.8	10.4	5.5	770	
8446	"	"	( 8.2)	9.4	5.0	( 510)	"	8528	BW51	II Ga	11.7	7.5	4.3	410	
8447	"	II Ga	9.2	6.3	2.4	130		8529	DW56	I Abc	9.3	8.7	4.3	500	
8449	"	II Fac	8.9	8.6	6.0	500		8531	CM57	II Dac	8.5	6.7	4.5	280	
8450	BG57	II Ga	11.5	6.4	3.5	250		8532	CP53	II Ea	10.3	9.7	4.3	480	
8451	CB53	II Db	17.5	11.3	7.4	1,630		8533	DY53	II Ca	10.4	6.0	3.8	230	
8452	CB区	II Ga	8.6	6.3	3.8	230		8538	C区Z	II Ebc	10.8	9.4	5.4	800	
8453	C区Z	I Ec1	14.2	8.4	7.8	1,380		8540	CL60	II Ca	13.0	9.8	4.1	600	図1605
8454	D区Z	II Ca	11.7	9.6	3.5	450		8541	EQ60	II Da1	8.0	5.5	4.5	250	
8455	"	"	9.2	7.3	4.0	420		8542	DU58	II Ea	9.4	7.9	4.8	390	
8456	"	II Fa	8.2	8.0	6.1	400		8543	"	"	8.5	8.0	4.3	300	
8457	C区Z	II Ga1	10.9	( 7.8)	5.4	( 390)	破	8544	DM47	II Ca	9.7	7.0	4.0	280	
8458	D区Z	II Ea	8.8	8.5	3.7	290		8545	CO49	II Ea	9.9	9.7	6.5	710	
8459	DEZ	II Ga1	( 9.5)	8.7	6.6	( 430)	破	8546	CA44	"	( 9.1)	7.7	4.2	( 300)	破
8460	"	II Da	11.0	6.5	5.0	540		8547	C-2	II Fa	9.4	8.5	5.3	460	
8461	"	II Cac	8.2	5.8	4.1	230		8548	CL69	II Ca	10.0	7.7	5.1	410	
8462	D区Z	"	10.1	9.8	5.0	580		8549	BU59	II Cac	10.3	9.1	4.7	480	
8463	C区Z	"	9.5	7.2	4.2	330		8550	CE53	II Dac	9.7	5.0	4.6	240	
8464	D区Z	II Da	11.7	7.5	5.6	610		8551	CC49	II Ca	14.6	10.4	5.3	920	
8465	C区Z	II Ca	9.5	5.2	3.5	190		8552	D区Z	II Ga	10.0	7.6	5.0	330	
8466	Z	II Aa	(13.5)	5.0	2.0	( 220)	破 Ry 砾石	8553	DX52	"	8.2	6.7	4.0	240	
8468	CF62	II Ca	8.3	7.1	3.8	250		8554	" 40	"	9.2	8.3	4.9	330	
8469	"	"	8.2	7.1	4.7	310	図1580	8555	CQ77	II Ga1	7.7	6.2	5.3	265	
8470	環状集石内	II Da	8.8	6.9	5.1	400		8556	DO57	"	11.0	6.0	3.7	250	
8471	"	I Ebc	13.0	8.0	6.4	1,020		8557	DN61	II Cac	10.0	7.5	4.3	400	
8472	"	II Aac	13.1	5.3	4.1	350		8558	DK53	II Aa	13.5	5.8	4.0	390	
8473	CF62	II Fa	9.7	9.8	7.3	740		8559	DY60	II Da1	( 9.4)	7.5	6.7	550	
8474	C区環状集石内	II Ca	13.3	11.3	6.4	1,020		8560	CP49	I Abc	( 8.9)	9.0	5.1	( 630)	破
8475	集石	I Ec1	12.8	8.6	6.4	( 980)	破	8562	C区Z	II Da1	12.4	8.5	7.5	940	
8477	Z	II Ga	11.3	8.0	6.0	570		8563	D区Z	"	9.8	5.2	4.7	230	
8478	C区Z	特磨	9.7	7.6	5.7	590		8564	"	II Cac	10.3	7.7	4.5	420	
8480	DG51	II Dac	11.1	7.9	6.4	560		"	CM47	II Aa	(13.7)	( 6.3)	4.0	( 340)	破
8481	DH50	II Eac	9.1	8.5	4.7	450		8565	CG57	"	13.0	( 6.9)	2.8	( 310)	"
8482	DN58	特磨	16.1	8.1	5.6	1,100		8566	集石	特磨	12.7	6.6	5.3	560	接合
8483	" 25	II Ea	8.5	8.5	( 3.2)	( 220)	破	8567	"	"					
8484	環状集石内	II Ca	11.2	9.7	5.5	730		8570	西農道区	"	13.5	8.5	7.7	990	
8485	DG46	II Fa	7.9	7.5	4.7	290		8571	"	II Fa1	8.0	7.9	6.1	460	
8486	CP45	II Cac	12.2	9.5	5.4	650		8573	C区Z	II Ca	10.0	7.3	2.8	200	
8487	C区Z	II Ca	10.7	8.7	5.6	580		8574	D区Z	II Fa	12.0	11.9	6.6	970	
8488	"	"	9.2	6.5	4.8	260		8575	Z	II Dac	16.1	9.8	7.0	1,390	
8489	C区環状集石内	II Db	14.0	9.0	5.9	970		8576	Z	"	14.1	11.2	7.1	1,450	
8490	C区Z	II Cabc	12.5	7.5	5.0	720		8577	西農道区	II Cac	9.3	7.4	4.5	360	
8493	"	II Ea	8.9	8.4	4.1	340	赤色顔料付着	8578	"	II Fa	9.5	6.6	4.9	270	
8494	"	II Fa	8.2	7.5	6.5	380		8736	集石	II Ca	9.3	7.1	2.8	170	
8495	C区環状集石内	II Dac	11.4	6.5	6.4	670		8789	DI55、56	II Fa	5.2	5.1	4.0	80	図1631
8500	C区Z	II Ga	6.7	6.2	3.3	180		8790	"	II Gac	9.1	7.5	3.5	200	
8501	"	II Fa1	8.2	7.8	5.1	370		8802	C区Z	II Ca	7.6	6.6	3.3	220	
8502	"	II Eab	( 8.5)	8.0	4.2	( 320)	破	8827	46、49集石	II Da	9.6	7.6	5.4	450	
"	"	"	8.3	7.8	4.2	320		8828	環状集石内	II Ce	16.2	10.0	6.6	1,700	
8503	"	II Da	9.2	6.5	5.5	410	赤色顔料付着	8829	"	I Eac1	( 9.6)	9.1	6.4	( 640)	破
8504	CX36	特磨	15.9	8.2	6.7	1,400	図1642	8830	"	II Cb	12.7	9.1	6.1	800	
8505	CA52	II Ca	9.6	7.6	4.0	280		8831	"	II Cac1	10.2	7.9	4.8	520	
8506	CQ40	II Da	13.0	9.6	8.6	1,080		8833	集石	II Da1	10.5	8.1	5.8	530	
8507	DA67	"	12.8	7.5	5.2	540		8834	C区集石	II Ea	(10.7)	11.7	3.5	( 600)	破
8508	Ca52	"	10.5	5.3	4.5	230		8837	環状集石内	II Da	14.0	7.9	5.3	580	
8509	DG53	II Ga	8.8	5.3	3.2	140		8838	"	II Ga	9.4	7.3	4.5	320	
8510	CO56	II Ga1	8.6	6.3	4.8	230	No1	8839	集石内	II Dac	10.5	8.0	5.8	530	

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
8840	集石	II Da1	11.5	7.0	5.3	420	
8841	"	II Ca	11.0	7.0	2.7	470	
8843	環状集石内	"	9.5	8.3	5.0	460	
8844	"	II Eac	11.3	10.4	5.8	820	
8845	集石	I Ea	6.5	6.5	3.9	180	
8846	"	II Dac	10.0	6.7	4.9	360	
8847	"	II Da	15.4	7.5	( 4.8)	( 750)	破
8848	C区集石群内	II Ca	8.4	6.7	3.8	280	
8849	"	II Cac	9.9	7.5	5.0	420	
8850	環状集石内	I Ga1	10.4	8.5	7.6	720	
8851	C区集石群内	II Ca	11.2	7.7	4.6	450	
8852	C区Z	II Ea	10.7	10.0	5.0	620	
8854	集石	II Da	11.0	7.0	6.8	570	
8856	C区集石群内	II Fac	10.2	9.0	7.5	700	
8857	"	II Fa	8.0	7.5	5.2	370	
8866	CQ50	II Cac	(10.1)	6.2	3.8	( 260)	破
8867	CX59	II Fa	7.4	6.4	4.8	260	
8869	CN57	II Da1	9.3	7.6	5.6	410	
8871	CR62	II Cac	10.8	8.0	4.5	490	
8874	CX60	II Gac	12.1	9.6	4.7	500	
8876	CQ55	I Fca1	( 7.1)	6.6	6.6	( 440)	破・No1
8877	DV51	II Dac	15.1	7.2	6.5	850	
8878	Z	II Cac	10.2	7.4	4.7	370	
8879	—	特殊磨石	12.2	8.0	5.1	600	
8887	CY63	II Dac	11.1	8.9	5.1	530	
8896	集石区	II Ga	10.1	10.9	6.5	795	
8897	" Z	II Da	15.4	11.3	7.8	1,570	四部皿状
8900	集石群	II Cabc	15.9	10.3	6.2	1,180	
8901	"	II Ea	7.9	7.2	5.1	330	
8904	CH55	II Dabc	7.7	6.5	4.1	264	
8905	HA 5	II Ga	9.4	8.7	5.5	420	
8906	Z	I Abc	10.9	8.1	4.0	563	
8907	"	I Aabc	11.9	8.2	4.1	612	
8908	"	II Cac	12.0	8.5	4.2	390	
8909	"	II Da	10.7	7.2	6.9	610	
8910	"	II Ca	10.6	6.0	3.3	250	
8911	BR49	II Ga	10.4	7.7	5.8	350	
8912	EE45	II Fa	5.8	4.8	3.8	85	
8913	CY65	II Cac	11.0	7.2	4.0	305	
8914	Z	II Ca	11.6	9.1	5.5	610	
8916	CF53	I Eac1	13.1	7.8	6.1	705	
8917	EP	II Fa	10.8	7.9	6.3	475	
8918	Z	II Ba1	11.0	6.3	5.0	370	
8919	"	"	11.9	6.9	6.1	585	
8920	DP43	II Aa	( 8.9)	5.7	3.2	( 150)	破・No1
8921	Z	II Da	9.8	6.6	4.8	330	
8922	BX57	II Ca	9.9	8.8	5.2	493	
8923	DM48	"	12.3	7.1	2.6	346	Ry
8924	CQ82	II Ba	9.2	3.8	2.8	160	"
8925	DR60	II Ca	( 9.7)	6.5	2.1	( 190)	破
8926	DE33	I Aabc	9.5	6.2	2.5	236	
8927	DF59	"	( 7.7)	7.1	5.0	( 371)	破
8928	CK47	III Dac1	11.4	7.9	6.3	761	
8929	DF57	"	10.6	6.4	4.5	364	
8930	DG37	"	10.6	8.1	6.0	576	
8931	CA57	"	15.1	9.0	6.2	1,006	
8932	CW69	"	12.9	8.6	6.5	777	
8933	CO51	"	14.0	9.0	7.4	941	
8934	CB57	"	13.7	8.5	6.5	745	
8935	Z	II Ba	12.2	4.5	3.5	250	図1595
8936	DA44	II Ga	10.2	8.7	2.7	420	# 1634

石皿

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
82	DM54	BIII	(12.0)	(10.9)	( 4.2)	( 400)	An	B2
594	CD56	"	(17.0)	(11.1)	( 6.0)	(1,360)	"	F
663	CC51	"	(16.3)	(16.7)	( 5.8)	(1,660)	"	C3
1063	CR55	"	(18.1)	(17.2)	( 8.5)	(2,600)	"	C1
1269	DO61	"	( 8.7)	( 6.6)	( 4.7)	( 400)	Dp	F
1270	Z	BIV	(18.0)	(22.1)	(10.3)	(3,500)	An	D1
1271	DD50	BIII	(19.7)	19.5	( 7.4)	(3,000)	"	B1
1272	EP59	BIV	(31.8)	(15.6)	( 8.0)	2,900	"	A1 図1553
1273	EQ59	"	(25.9)	(15.9)	( 6.7)	(1,900)	"	A2 図1556
1277	EF59	BIII	(14.4)	(16.8)	( 6.4)	(1,500)	"	F
1279	DP62	BIV	(14.7)	(15.2)	( 7.4)	(1,140)	"	"
1280	DE58	BIII	( 8.3)	( 7.4)	( 5.0)	( 860)	"	"
1284	C区Z	BV	(12.2)	( 9.6)	( 5.3)	( 620)	"	図1561
1285	Z	BVI	(17.0)	19.3	( 5.2)	(1,940)	"	B2 図1565
1286	"	BIII	(17.2)	(11.4)	( 8.4)	(1,240)	"	F
1287	"	"	(11.0)	( 9.7)	( 6.7)	( 680)	"	"
1288	CW68	A I	21.5	15.4	6.5	2,300	"	"
1289	Z	BIII	( 9.2)	(15.3)	( 5.5)	(1,200)	"	B2
1290	C区Z	BVI	21.2	18.3	8.1	3,400	"	図1564
1291	ER60	BIII	(21.0)	(29.7)	( 8.4)	(4,500)	"	E1
1311	ES60	B I	(13.3)	(23.3)	( 9.9)	(3,500)	"	D1
1320	DC40	C	25.0	21.0	6.5	3,300	"	図1551
1321	Z	A II	42.5	35.9	12.0	23,000	"	図1543
1360	DD53	A I	(21.6)	(20.9)	( 5.2)	(2,800)	"	D1
1362	DK56	B I	(12.0)	(14.2)	( 7.0)	(1,500)	"	C1
1367	DA37	"	"	"	"	"	"	No1383 No2963} と接合
1373	DJ62	A II	(18.8)	( 9.2)	( 5.6)	(1,400)	An	F
1375	CS64	B I	(13.6)	(14.0)	( 8.6)	( 550)	"	"
1376	BW60	BIII	(11.0)	(14.0)	( 4.6)	( 580)	"	"
1382	DC34	"	"	"	"	"	"	No3707 と接合
2215	CT51	BIII	( 8.4)	(12.2)	( 5.7)	( 520)	An	F
2333	DA35	BVI	10.0	8.4	4.4	390	"	図1566
2544	CC57	"	"	"	"	"	"	No1364 と接合
2607	CE55	BIII	18.1	16.1	6.9	2,300	An	"
2816	" 59	"	(14.8)	( 9.0)	( 7.9)	(1,000)	"	C4
2963	DA35	"	"	"	"	"	"	No1383 No1367} と接合
2997	CA54	BVI	16.6	13.8	8.0	760	An	"
3335	DH38	BIII	(20.2)	(21.5)	( 6.9)	(3,400)	"	C1
3442	CC46	"	"	"	"	"	"	No1363 と接合
3707	DF42	BIII	(19.8)	31.8	( 7.2)	6,700	Gr	C1+C4 No1328 と接合
3810	CR44	"	(30.1)	33.3	(13.3)	14,000	An	B1 図1555
3942	CK46	"	(20.0)	(21.6)	( 6.8)	(3,400)	"	F2
3948	CX44	"	(27.4)	(19.2)	(11.6)	(6,700)	"	C3
3978	CF45	A II	(17.3)	(14.0)	( 8.0)	(2,500)	"	F
3979	CE43	BIII	(13.4)	(15.2)	( 8.2)	(1,620)	"	E1
3993	BQ47	"	"	"	"	"	"	No1328 No1329} と接合
4021	CS46	BIII	( 5.7)	(12.3)	( 4.6)	( 400)	An	A2
4076	CJ43	BV	(15.2)	( 5.9)	( 4.0)	230	"	F
4234	CE49	BVI	(10.2)	( 9.7)	( 3.4)	1,550	"	D2
4262	DA52	BV	( 8.2)	( 7.2)	( 3.3)	( 110)	"	F 図1557
4284	CE49	BVI	(10.1)	(10.3)	( 4.5)	( 400)	"	"
4308	DP45	BIII	(27.3)	16.3	( 6.9)	(3,500)	"	B1

砥石

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
3759	BA40		150	99	17	390	ss	図1569
6614	DN58		123	21	40	120	"	図1567
6562	DD40		155	40	37	240	"	図1568

先端研磨石器

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	断面形	破損状況	図番号	備考
404	BX59	A (x, 0')	66	30	28	71	ss	丸	一端欠		使用痕 粗
528	BV56	B (2, 1')	82	48	25	138	Sp	〃		1681	
571	CC56	B (2, 1)	102	35	35	161	〃	角		1672	
580	CS55	A (3, 0')	53	32	21	52	An	丸	一端欠		
608	BX54	A (2, 0')	(72)	40	26	(89)	Sp	〃	〃		
667	DF52	B (2, x')	87	39	25	126	An	〃			側辺にも使用痕あり
672	CE57	B (4, 4)	71	34	25	90	〃	〃		1669	〃
681	CA57	A (x, 0')	(79)	35	35	(145)	変質安山岩	(丸)	一端欠		
706	CF51	B (1, x')	(118)	51	28	(190)	An	丸(平)			
854	DA46	B (x, x')	(71)	31	30	(70)	〃	丸			No.1044と接合
900	CT46	B (x, x')	(110)	56	41	(350)	Di	角			側辺にも使用痕あり
1044	CM54	B (x, x')	(70)	31	30	(80)	An	丸			No.854と接合
1067	CR58	A (x, 0)	140	59	34	409	〃	丸(平)			
1860	CO41	B (x, x')	(69)	14	12	(18)	〃	丸	長軸に対し斜に欠		
2129	DH50	A (2, 0')	68	21	19	37	〃	〃	両端一部欠		
2195	CL53	B (3, x)	119	36	37	249	〃	〃		1679	細い溝が一周する 側辺中央に小さい凹あり 側辺にも使用痕あり
2224	CX51	A (2, 0')	(69)	20	17	(34)	変質安山岩	〃	一端欠		
2236	CJ57	A (x, 0')	90	28	21	77	An	角	〃	1677	
2629	BY51	A (3, 0')	88	48	35	153	〃	〃	〃	1675	側辺にも使用痕あり
2631	BX50	A (x, 0')	103	38	29	129	変質安山岩	丸			
2686	CC57	A (x, 0')	63	32	25	70	An	丸	一端欠		
3049	CJ90	B (2, x)	81	34	27	118	変質安山岩	丸			
3167	CM86	A (1, 0')	(69)	35	34	(105)	An	〃	一端欠		使用痕 粗
3202	CN89	A (2, 0)	108	35	30	132	〃	角			
3269	CS64	A (1, 0)	167	63	24	364	Sp	角(平)			
3280	CG53	A (x, 0)	70	28	26	82	di	角			
3454	CA46	B (2, 1')	67	34	25	54	ss	丸	両端一部欠		
3455	CB46	A (2, 0')	50	28	22	32	〃	角	一端欠		
3520	CX37	A (2, 0)	87	27	21	82	Sp	〃			
3705	DS42	A (x, 0')	(59)	29	29	(75)	di	丸	一端欠		
3954	CU43	B (2, 2')	97	38	25	110	変質安山岩	角			
3969	CO44	B (2, x)	65	29	22	63	An	丸			
5724	EM51	A (x, 0')	34	32	30	39	ss	〃	一端欠		側辺にも使用痕あり
6001	DB53	B (x, x)	90	17	10	32	An	〃			
6474	BW61	A (2, 0')	(56)	32	26	(51)	〃	〃	一端欠		
6623	DK44	A (1, 0)	54	32	21	51	di	〃			使用痕 粗
6907	CR63	A (2, 0)	129	45	33	285	〃	角			側辺の使用痕 粗
6908	CI40	A (2, 0')	113	55	32	284	Sp	(角)	一端欠		側辺にも使用痕あり
6924	CT50	B (x, x)	75	31	15	50	変質安山岩	丸(平)			
6926	BV58	A (4, x)	152	46	39	450	An	丸		1670	側辺にも使用痕あり
6927	CN90	A (1, 0)	64	25	17	49	変質安山岩	角			
6928	DA41	B (3, 1)	111	37	24	160	〃	丸			側辺に線状痕著しい
6929	CA56	B (4, 4)	67	34	28	89	An	〃		1668	

敲打器

登録No.	出土地点	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
58	DG63		101	43	11	78	ss	
3030	CO80		(77)	32	10	(35)	不明	
4121	CC49		88	40	13	62	〃	
4592	BT56		(108)	44	27	(200)	Ry	
4801	FT25		(127)	(45)	(17)	(130)	不明	
5506	CB47		126	53	16	150	Q-d	
6270	DI61		87	110	44	460	Ry?	
6422	BV53		(88)	46	18	(70)	Ry	
6542	CI56		84	46	13	76	An?	No.1
6565	DO56		135	71	31	370	不明	No.3

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
1966	CV43		64.5	41.5	8.5	17.7	y	図1513
2181	CL55		48.0	24.0	24.0	10.1	Tr	図1509
2569	CG62		48.0	24.0	4.5	7.6	Ry	図1488
2786	BU55		37.0	12.0	9.0	7.8	〃	図1744
3030	CO88		79.5	31.5	10.0	41.0	Tr	
3039	CP88		45.0	35.0	10.0	28.9	〃	
3214	CJ86		55.0	48.0	17.0	72.0	Gd	図1512
4121	CC49		88.0	39.0	11.0		Ry	
4399	CM90		37.5	19.0	6.5	7.9	〃	図1743
4406	CJ43		21.0	28.0	7.0	5.5	Cl	図1747
4431	CF57		49.0	21.0	12.0	14.4	Hr	図1508
4441	〃 63		66.5	36.0	10.0	36.2	〃	
4444	〃 80		58.0	15.0	6.5	10.2	Cl	図1510
4445	〃 91-92		54.0	24.0	9.0	18.4	Ry	図1514
4803	FT26		58.5	25.0	12.0	17.8	〃	
5795	EU55		52.6	35.0	8.0	18.5	ss	図1511
5798	EY55		18.5	14.0	5.5	0.9	Ry	
6683	DM45		41.0	(15.0)	7.5	(6.8)	ss	
6755	DG37		35.5	14.0	10.5	5.7	Ry	
6759	〃 49		32.0	27.0	11.5	15.2	〃	

円盤状石器

登録No.	出土地点	型式	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	備考
134	Z		30.0	10.0	2.0	0.9	ss	
1549	CB48		12.5	11.5	8.0	1.8	ch	
1584	〃 57		53.5	27.0	14.5	25.4	Ry	
1818	CX47		(17.5)	(16.5)	3.0	1.0	ss	
1865	CO54		28.0	17.0	6.5	7.6	Ry	
1954	CU63		19.5	14.0	12.5	4.0	Cl	

滑石製品

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
148	DD56	块状耳飾	(18.0)	(12.5)	6.0	(1.7)	Ta	図1704
153	"	"	"	"	"	"	"	No.148と接合
166	DC54	"	(25.5)	(11.5)	5.0	(1.9)	"	"
168	" 55	"	(17.5)	(13.5)	(2.5)	(0.7)	"	"
510	BW53	"	(21.0)	(22.5)	(8.0)	(3.9)	"	"
623	CG53	"	(32.0)	(17.5)	7.0	5.9	"	図1696
931	CS48	"	—	6.0	13.0	2.8	"	"
1040	CK54	"	(12.0)	(22.0)	2.5	1.1	"	図1702
2067	DA61	"	—	—	—	0.8	"	"
2143	DE58	"	(35.0)	(19.5)	8.0	(8.3)	"	図1692
2161	CU51	"	—	(6.0)	—	1.0	"	"
2172	CQ55	"	(35.5)	(20.5)	7.0	(6.8)	"	図1693
2766	CH50	"	(26.5)	(15.5)	11.0	(6.6)	"	図1701
2920	CD52	"	(31.0)	(23.0)	8.0	(8.7)	Ta	図1689
3054	" 95	"	(42.5)	(23.0)	(6.0)	(9.6)	不明	図1690
3187	CN81	"	(19.0)	(40.0)	10.0	(8.1)	Ta	"
3524	Z	"	(20.0)	(12.0)	(5.0)	(2.1)	"	図1703
3590	DM42	"	21.5	27.5	6.5	7.4	"	図1700
3867	DY44	"	(41.0)	29.0	(8.0)	(12.7)	"	図1686
4200	CH46	"	26.0	(26.0)	6.0	(4.5)	"	図1699
4964	DD57	"	(11.0)	(28.0)	9.5	(3.0)	"	"
6189	CI46	"	(6.0)	(21.5)	9.5	(1.3)	"	"
6821	CB43	"	(32.0)	24.0	8.0	6.6	"	図1688
6823	CL66	"	(23.5)	(5.5)	(4.5)	(0.9)	"	"
6829	CU45	"	(39.0)	(23.5)	5.0	(7.1)	"	図1687
6830	Z	"	(24.0)	(12.0)	(3.5)	(1.4)	"	No.1688 块状耳飾を部材に再加工
6839	CJ46	"	(21.5)	(18.5)	2.5	1.8	Ta	図1683
6892	Z	"	35.5	36.5	6.5	13.1	"	図1694
6898	"	"	28.5	35.5	6.0	9.6	"	図1695
6900	DR51	"	(44.5)	(28.5)	5.5	(10.2)	"	図1691

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
4808	FC49	15.0	15.0	18.0	8.0	図1711 "
4823	EB43	21.5	15.5	12.5	6.4	"
5933	DP40	18.0	19.0	2.0	2.3	図1708 块状耳飾未製品
6822	DJ36	17.0	11.5	8.0	2.4	図1727 角柱状
6872	DT16	17.0	11.0	8.0	2.4	"
6898	Z	39.0	38.0	6.5	16.7	図1707 块状耳飾未製品

軽石製品

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
2849	BT55		94.5	74.3	33.0	10.0		石けん状
2995	CW51		45.4	47.1	35.7	10.9		浮子状
7728	DL55		37.2	29.0	24.2	4.2		図1575
9008	Z		72.1	34.8	16.2	5.5		紡錘形
9009	"		29.8	22.4	19.8	6.9		丸玉

石製円板

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
9010	Z		29.8	22.4	8.4	7.7		

小玉

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
746	CA53	小玉	21.0	23.0	18.0	7.4	Ta	図1730
3396	DO50	"	10.0	12.0	5.0	0.9	"	図1732
3485	CQ42	"	11.0	11.0	0.9	1.3	"	"
3502	DI35	"	—	—	—	(1.3)	"	細片
3709	CN51	"	—	—	—	(0.4)	"	"
3860	DX42	"	(12.0)	(9.0)	9.0	(1.2)	"	図1733
5586	CQ71	"	—	—	—	0.7	"	細片
6893	DA35	"	18.0	18.0	6.0	3.5	"	図1729

管玉

登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
4374	CM40	管玉	24.0	(10.0)	5.0	(1.2)	Ta	
5586	CQ71	"	(19.0)	(15.0)	5.0	(1.9)	"	
6825	DD56	"	12.0	7.0	3.0	0.5	"	
6836	CM63	"	20.0	11.6	4.0	1.2	"	
6895	Z	"	14.0	7.0	9.0	2.9	"	図1717
6894	CN61	"	18.0	10.0	4.5	2.9	"	図1718
6899	"	"	24.0	11.0	4.0	3.0	"	図1716

滑石未製品

登録No.	出土地点	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
757	DO47	29.0	(32.5)	11.0	(18.3)	Ta	図1709 円板状
933	CJ45	16.0	16.0	3.0	1.7	"	図1714 "
1241	EP57	12.0	29.0	5.0	1.8	"	図1737 小玉未製品
1551	CB50	15.0	12.5	8.0	2.2	"	角柱状
2212	CK53	20.0	17.0	5.0	3.0	"	図1710 円板状
2586	CF56	15.0	10.5	9.5	2.5	"	図1726 角柱状
3176	CP89	38.0	10.0	10.0	7.6	"	図1724 "
3386	BQ41	19.0	9.0	9.0	2.7	"	図1725 "
4057	CN47	23.0	18.0	7.5	5.1	"	図1724 "
4264	DE52	11.0	11.0	3.0	0.7	"	図1736 小玉未製品



グリット(追加)

器種	登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
石鏃	7816	BU60	平基Vc	24.8	18.9	8.2	3.0	ob	
"	7817	BW52	IVc	14.8	(14.5)	3.2	0.6	"	B
"	7818	" 62	円基V-	(21.2)	(11.2)	3.8	(0.9)	"	E
"	7819	BX59	FVa	30.0	(14.7)	4.0	(1.1)	"	B
"	7820	" 57	IVc	17.8	16.4	3.8	0.9	"	"
"	7821	BY56	EIIIe	21.6	(11.2)	2.5	(0.5)	"	B
"	7822	" 62	平基IVc	15.0	(12.5)	2.8	(0.4)	"	B
"	7823	CW51	(G)IV-	(11.3)	13.0	3.8	(0.5)	"	A 旧No.2229
"	7824	EP42	平基Vc	16.0	(10.8)	2.4	(0.5)	"	B
尖頭状石器	7802	BV54	尖基Vc	40.2	21.6	11.5	8.3	ch	未製品
"	7803	DR48	円基Vc	33.1	(16.2)	5.3	(3.4)	"	B 旧No.693
石匙	7806	FJ51	BIIIc	31.5	50.7	6.3	6.5	sh	
"	9011	ES57	-I-	(18.0)	(24.2)	(9.8)	(4.4)	ob	旧No.5765
Sc	7811	BT51	CIIb	24.2	24.3	8.1	3.5	"	
"	7812	" 56	BIIb	37.3	18.7	8.6	5.6	sh	石鏃?
"	7813	BW99	B Ia	43.0	17.8	6.3	5.0	ob	
"	7814	BY55	D Ia	33.3	53.0	9.8	17.8	"	
"	7815	" 54	AIIa	23.5	25.5	8.8	5.0	"	
"	7996	ES59	AIIb	23.7	16.8	8.4	2.7	"	旧No.5702
"	7997	EQ59	A Ic	40.8	24.8	18.6	14.1	"	旧No.5748
"	7998	EU59	CIIc	27.0	21.2	10.3	5.6	"	旧No.5792
"	7999	EC52	B Ia	21.8	26.7	4.5	2.8	Ry	旧No.6156
"	9001	EE30	BII d	24.8	27.3	6.7	4.0	ob	旧No.6161
"	9002	Z		15.3	14.7	4.7	1.1	ch	旧No.2545 縄形
石鏃	7807	BX53	A I	36.8	14.0	5.2	2.6	sh	
"	7808	BW60	"	26.8	16.8	9.2	3.2	ob	
"	7809	BV52	A II	22.5	47.1	5.2	4.0	"	
"	7810	BW57	A I	25.7	12.6	3.5	1.2	"	
Pe	7825	BT56	C I	18.0	14.0	5.6	1.4	ob	
"	7826	"	"	16.5	13.2	4.5	0.7	"	
"	7827	" 57	D I	20.5	12.5	7.8	2.1	"	
"	7828	"	"	21.3	8.0	3.1	0.6	"	
"	7829	"	C I	14.8	16.2	3.0	0.9	"	
"	7830	" 61	"	(22.0)	18.5	5.3	(2.9)	"	下端欠
"	7831	BU52	D I	27.6	11.0	10.0	2.9	"	
"	7832	BT60	C I	22.0	21.0	7.5	3.2	"	
"	7833	"	D I	19.6	13.4	9.2	2.2	"	
"	7834	"	D II	21.3	22.2	6.2	0.8	"	
"	7835	BW52	B I	21.3	20.0	17.0	5.6	"	
"	7836	"	D I	22.8	23.3	7.7	2.0	"	
"	7837	"	B I	25.8	24.0	15.0	7.3	"	
"	7838	BU60	D I	23.2	10.6	8.2	1.8	"	
"	7839	" 100	"	24.5	10.6	7.2	1.3	"	
"	7840	" 60	C I	17.0	15.8	3.0	0.7	"	
"	7841	"	D I	21.8	13.7	5.6	1.3	"	
"	7842	BW53	"	23.7	12.5	7.0	1.8	"	
"	7843	" 54	"	22.7	10.5	6.0	1.6	"	
"	7844	"	C I	27.3	27.3	8.8	6.5	"	
"	7845	" 53	"	23.8	21.7	5.5	2.4	"	
"	7846	"	D I	29.2	17.2	9.8	3.7	"	
"	7847	"	C I	19.8	19.3	9.4	2.8	"	
"	7848	" 56	D I	21.8	8.8	5.7	1.0	"	
"	7849	" 60	D II	37.3	16.2	12.3	5.4	"	
"	7850	"	"	14.3	7.8	6.5	0.6	"	
"	7851	" 57	B III	18.2	26.7	11.1	4.1	"	
"	7852	"	D I	26.3	11.5	6.6	1.3	"	
"	7853	"	C I	23.3	16.8	7.4	3.0	"	
"	7854	"	B I	17.3	23.1	10.0	4.4	"	
"	7855	" 60	D I	20.2	14.8	10.3	2.1	"	
"	7856	" 61	C I	19.4	19.8	5.1	1.3	"	
"	7857	"	"	20.5	23.8	7.8	3.1	"	
"	7858	"	D I	24.3	9.8	6.4	1.5	"	
"	7859	"	C I	19.0	13.0	3.1	0.7	"	
"	7860	BX53	"	17.6	19.2	6.3	1.5	"	

器種	登録No.	出土地点	型式	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
Pe	7861	BX53	C I	24.8	17.2	6.6	2.9	ob	
"	7862	"	D I	32.6	17.0	8.9	3.7	"	
"	7863	"	C I	16.8	16.2	5.3	1.4	"	
"	7864	BW62	D II	20.3	11.5	7.7	1.6	"	
"	7865	"	C I	20.2	19.8	8.2	2.3	"	
"	7866	"	D I	(19.2)	7.5	6.4	(0.7)	"	下端欠
"	7867	"	C I	12.7	15.2	4.0	0.6	"	
"	7868	"	D II	18.2	11.8	7.3	1.1	"	
"	7869	"	C I	20.9	15.5	16.8	2.1	"	
"	7870	BX54	"	17.3	18.7	9.2	2.7	"	
"	7871	"	"	20.0	12.8	10.3	1.1	"	
"	7872	" 55	B II	16.4	17.2	26.5	7.2	"	
"	7873	"	C I	16.8	13.4	3.5	0.9	"	
"	7874	"	D I	18.2	12.7	7.6	1.1	"	
"	7875	" 56	C I	(20.5)	14.4	3.2	(1.0)	"	下端欠
"	7876	BK57	D I	28.3	16.2	8.5	4.0	"	
"	7877	BO46	"	26.3	18.3	10.8	4.0	"	
"	7878	BX58	C I	20.8	15.5	4.3	1.1	"	
"	7879	"	D I	17.6	8.7	6.1	0.8	"	
"	7880	" 96	B II	33.3	25.0	19.7	12.0	"	
"	7881	"	C I	20.8	15.0	7.8	1.7	"	
"	7882	BY62	D I	(15.8)	12.0	5.9	(1.3)	"	下端欠
"	7883	"	"	16.2	10.3	7.5	1.0	"	
"	7884	" 57	C II	16.4	18.3	5.2	1.4	"	
"	7885	" 63	B I	23.3	21.3	9.4	4.0	"	
"	7886	"	C I	(22.0)	23.0	11.3	(3.9)	"	下端欠
"	7887	BX97	C II	23.0	20.2	12.0	5.0	"	
"	7888	DU61	C I	(18.0)	13.4	10.8	(1.5)	"	下端欠
"	7889	Z	B II	19.3	19.0	11.6	4.0	"	
"	7890	"	D I	30.8	17.0	14.2	6.2	"	
"	7891	"	C I	21.0	13.8	7.2	1.5	"	
"	7892	"	"	(21.8)	22.0	9.4	(3.7)	"	下端欠
"	7893	ET59	"	25.8	22.8	4.9	2.1	"	旧No.5777
"	7894	EQ57	"	21.6	29.8	5.8	3.6	"	旧No.5754
"	7895	ET57	B III	31.2	38.8	12.5	12.0	"	旧No.5774
砥石	4787	FG48	"	91.0	34.0	31.5	15.5	ss	
磨製石斧	1341	DY57	小型	60.2	21.5	13.0	36	Ry	先端研磨石器に 転用 図1520
滑石製品	2167	DK54	珠状耳飾	(27.0)	(30.5)	6.0	(8.1)	Ta	図1682
"	"	2867	CF55	"	(28.5)	(26.5)	"	"	図1687 遺物紛失
"	6896	Z	"	16.5	18.0	3.5	1.6	"	図1705 土城内?
有抉頭磨	7799	BO53	"	20.5	15.0	4.8	1.2	ob	◎

## 跋

発掘調査・整理作業各3年ずつ、計6年間を費やした阿久遺跡の報告書がようやく発刊となった。6年といえば長いですが、実質的には他遺跡の分担もあり2年に満たない整理執筆期間での集約といえる。当初から関係した者は数名のみという人的構成面でのマイナスを、以後加入した主任、調査員、調査補助員諸氏が、献身的な努力を重ねてカバーし、ここに実質1000頁という大冊を刊行するまでにいたった。関係者各自には、まだ納得いかぬ点が多々あろうが、団長として厚く御礼申し上げる次第である。

中央道関係遺跡の調査開始以来、丸12年を経過し、発掘調査した193遺跡の最後のしめくくりが、この最大の報告書となった阿久遺跡であることは、偶然とはいえ、関係者全員に何か複雑な心境を抱かしめるのではないだろうか。記録保存という名のもとに、緊急発掘体制がとられる状況の中で、中央道関係で唯一の保護措置がとられ、国史跡の指定をうけたのが阿久遺跡であった。ここに報告書刊行にあたり、我々は大冊を誇示する気は毛頭なく、むしろ如何に検約するかに配慮したつもりである。そのぎりぎりの限度内で、各自最善を尽した結果が本書であり、その内容については「緊急発掘」という場での報告書作りの在り方に全員が真剣に取り組んだというささやかな自負はもっている。忌憚のない御叱正を仰ぎたい。

さて、昭和45年度発足以来、記録保存さるべき193遺跡の埋蔵文化財を、37冊、合計約1万頁の報告書の中に集録したが、勿論、完全であろう筈はなく、幾多の事実誤認や力量不足による不十分さがあった点は素直に反省し、今後への研究課題としたい。12年間といえば、その組織自体が不変であり得ず、紆余曲折があって、関係各位の御期待に添えない点が多々あったこと深くおわび申し上げたい。こうした流れの中で、常に本調査体制の中心的存在として活躍された調査員・調査補助員諸氏は、身分的保証もないまま営々と下積みの仕事に精励され、事業推進の最大の荷い手となり、その存在なくして12年間が無事経過しなかったであろうことをここにとくに明記し、あらためて感謝申し上げる次第である。

この長期間にわたる事業遂行にあたり、我々調査団に対して、物心両面からの御指導、御援助を賜わった方々は列記できない程であり、最後の報告書となる本書の末尾ではあるが、調査団結成以来の団員一同を代表してここに満腔の敬意を申し上げ御礼としたい。

昭和57年3月20日

長野県中央道遺跡調査団長

樋口 昇一

## あとがき

思えば短い6年間であった。昭和51年、いまだ冬さめやらぬ八ヶ岳山麓で調査を始めて以来、3年間の発掘とそののちの整理作業は、常に時間に追われる日々であったといえる。一生に一度お目にかかるかどうかという大遺跡の調査と整理・報告書の作成は、正直の所、私には大変な重荷であった。しかし、若い諸君が、陰に陽に手助けをしてくれた。また、樋口団長以下調査団内部の、多くの人々のご助言とご指導があり、何とか、本書を世に出せることになった。この意味で、本報告書は、まさに調査団全体の成果である。

本書は、できるだけ基礎資料を公にすることを第一義とし、若干の考察をおこなった。しかし、膨大な資料と、限られた時間の中では、十分な検討がなされてはいない面もある。また、膨大な資料を整理するために、記号化を試みたが、かえって繁雑となり、理解しにくいかも知れない。ご了解願いたい。なお、当初意欲的に取り組む予定だった自然科学や他部門との連携は、種々の都合でほとんど実現できず、各部門からの結果を収録するのみに終わった。この点も今後の課題としたい。

阿久遺跡はその調査期間中から、保存運動がおこり、結果として、保存され、これからは史跡公園化がはかれるという。本報告書も、そうした中であって、原始社会究明の一助になれば幸いである。

本書がなるについて多くの人々からご協力を得た。御芳名は本文にかかげてあるので、略するが、特に小林庄吉原村長以下原村の皆さん、戸沢充則・武藤雄六・宮坂光昭・平一治氏ら諏訪在住の研究者、信濃毎日新聞吉川康男記者をはじめとする報道関係者、および信毎書籍宮川源治・森山公一氏には何かとお世話になった。感謝申し上げたい。

(笹沢 浩)

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

——原村その5 昭和51・52・53年度——

〈阿久遺跡〉

本文編

昭和57年3月10日 印刷

昭和57年3月20日 発行

編集 長野県中央道遺跡調査団

発行者 日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

印刷所 長野市西和田470  
信毎書籍印刷株式会社

〔非売品〕

長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—昭和51・52・53年度 正誤表

頁	行	誤	正
本文篇			
xiv	上 5	挿図225 グリット出土石皿分布及び接合関係図	挿図225 グリット出土滑石製品分布図
〃	上 6	挿図226 グリット出土滑石製品分布図	挿図226 グリット出土石皿分布及び接合関係図
14	下 13	昭和55(1970)年度…	昭和55(1975)年度…
17	上 4	…(挿図9・10…	(挿図10・11…
〃	〃 11	…〔岩崎1976〕…	…〔岩崎1979〕…
〃	〃 12	…〔伴他1975〕…	…〔伴他1976〕…
18		挿図10阿久……(1:50,000)	挿図10阿久…(1:50,000)(1阿久、2居沢尾根、3大石、4上前尾根、5茅野和田)
20	上 14	…挿図11・12に…	…挿図12・13に…
〃	下 11	…(挿図11・12)。	…(挿図12・13)。
21	上 11	…〔林・宮坂虎1970〕…	…〔宮坂虎1870〕…
28	上 1	…種子炭化塊?…	…種子炭化塊?…
47		挿図21の説明追加	左側I・Jの欄の下に「K(その他)」、右側左の下の欄に「I(その他)」を入れる
52	上 9	…〔間壁他1975〕…	…〔藤田・間壁1975〕…
65	上 13	なお、住居址南壁…	なお、住居址南東壁…
179		挿図144 住居址7土器出土状態、接合関係図	挿図144 住居址7変遷図
196		挿図159中の土壇1027は削除する。	
265		挿図225 グリット出土石皿分布及び接合関係図	挿図225 グリット出土滑石製品分布図
266		挿図226 グリット出土滑石製品分布図	挿図226 グリット出土石皿分布及び接合関係図
275	下 7	…なさるべきであろう。	…なさるべきであろう。(岩崎孝治)
297	下 5	…X期に並行する…	…X期に併行する…
298	下 5	形状は径35cmの…	形状は径3.5cmの…
299	上 18	長軸3mm、…	長軸30mm…
〃	〃 27	大は6mm、…	大は6cm、…
300	折込図	図235 住居址出土…	挿図235 住居址出土…
313	上 16	③分布と接合	③分布と接合(挿図226)
315	下 2	…(挿図226)。	…(挿図225)。
324	下 11	10 挿図253の…	10 挿図256の…
あとがき	下 3	…吉川康男記者…	…吉川康雄記者…



# 阿久遺跡分類記号要覧(1)

時期区分	中部	関東	東海	近畿	
前期	I a, b, c	+ 花積下層	木島		
	II	中 越	関 山	安土N上層	
	III	神ノ木	黒 浜	北白川下層I	
	IV a, b, c, d	南大原	諸磯 a	北白川下層II a	
	V	上 原	b	北白川下層II b, c	
	VI	下 島	c	北白川下層III	
中期	VII	晴方崎	十三菩提	大蔵山	
後期	IX	* (『日本の考古学』の編年表に一部加筆) 併行関係の詳細は本文によらう。			
平安	X				

## 土器細別

### 群別

- I群 在地系
- II群 関東系
- III群 関西・東海系

### II期I群土器

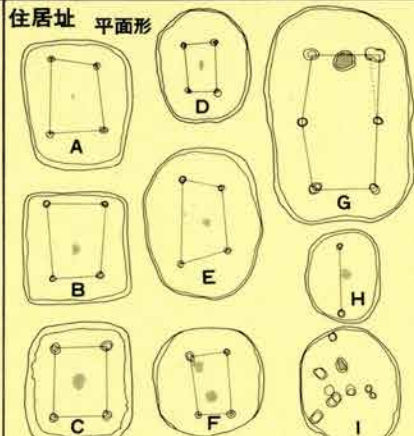
- A 無文・尖底
- B 織維・無文
- C 織維・縄文
- D 無織維・縄文・平底
- E 無織維・縄文・尖底

- E 連続爪形文
- F 平行沈線文
- G 縄文
- H 条線文
- J 無文・その他

## III群土器

時期区分	III群土器	関西・東海地方
II・III期	A (斜走沈線文)	清水ノ上I式
・	B (『3』字状文)	清水ノ上II・羽鳥下層式
	C (大形爪形文)	清水ノ上II式
	D (連続爪形文)	北白川下層I-IIa式
III・IV期	G (爪形文C・D)	北白川下層I・IIb式
V期	H (凸帯文)	北白川下層IIc式

(1)は条線あり、2はなしをあらわす



## 土壌

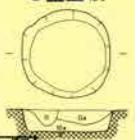
### A型土壌



### B型土壌



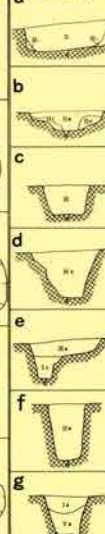
### C型土壌



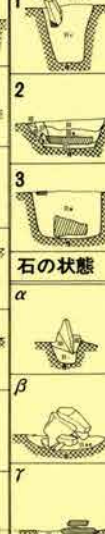
## 平面形



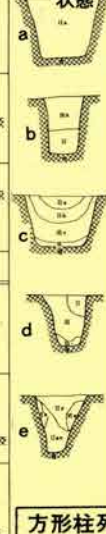
## 断面形



## 石の位置



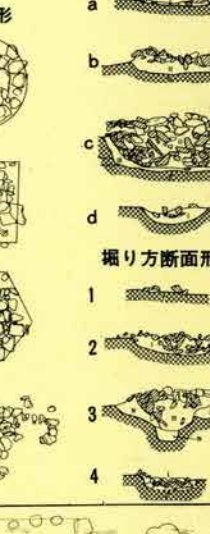
## 埋土の推積状態



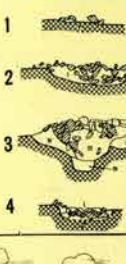
## 集石



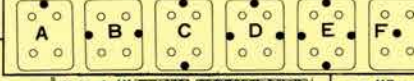
## 石積状態



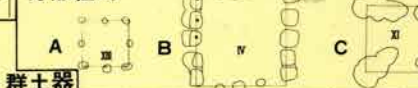
## 掘り方断面形



## 支柱穴類型

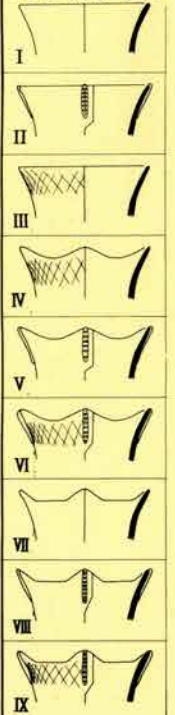


## 方形柱列

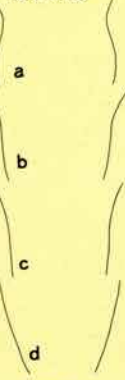


## II期I群A土器

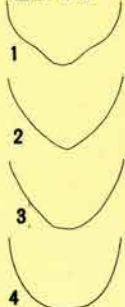
### 口縁部形態・文様



### 頸部形態

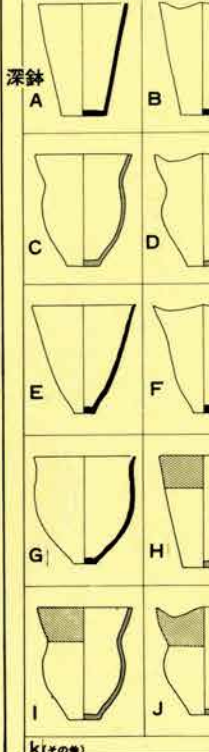


### 底部形態

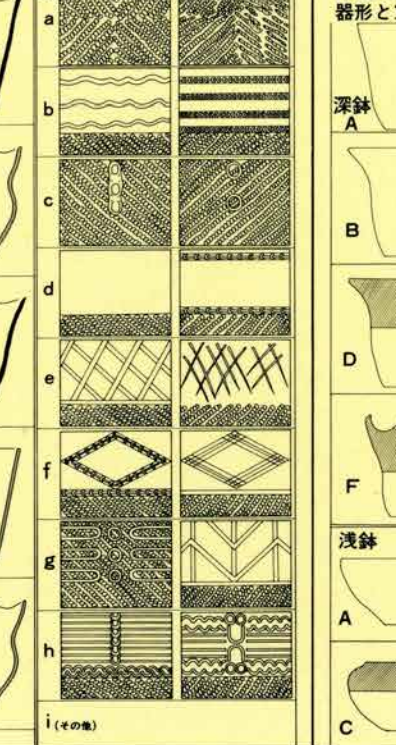


## III期I・II群土器

### 器形と文様構成

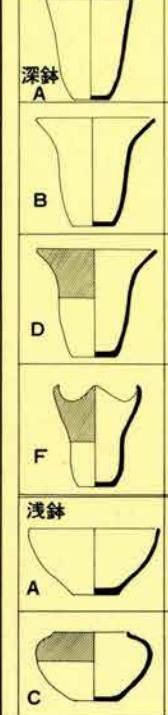


### 単位文様

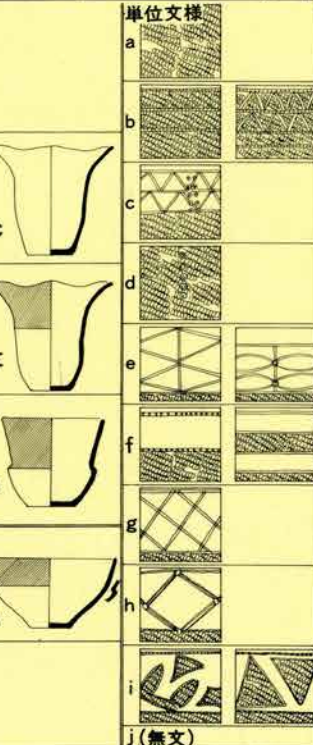


## IV期I群土器

### 器形と文様構成

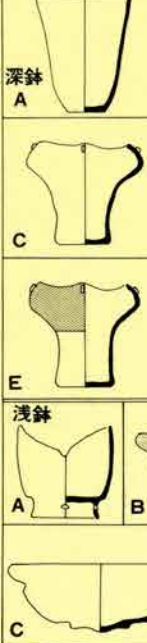


### 単位文様

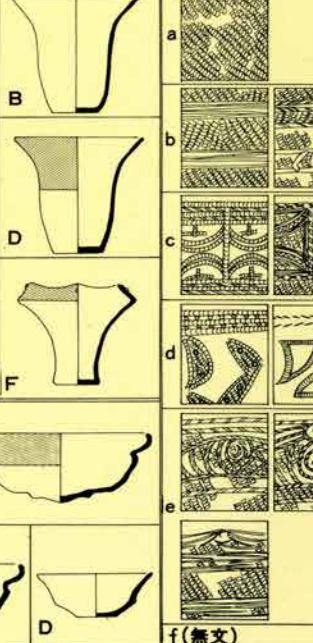


## V期I群土器

### 器形と文様構成



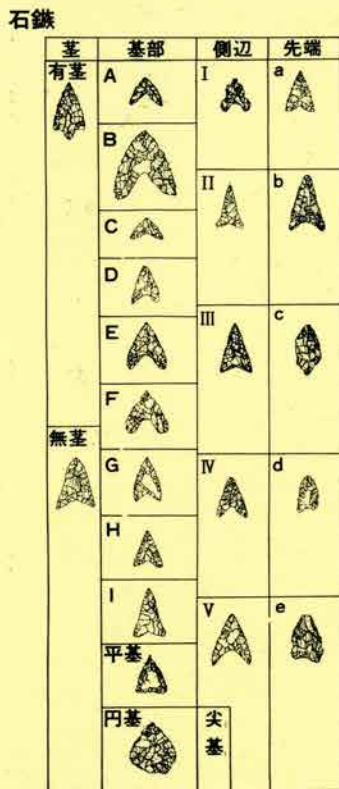
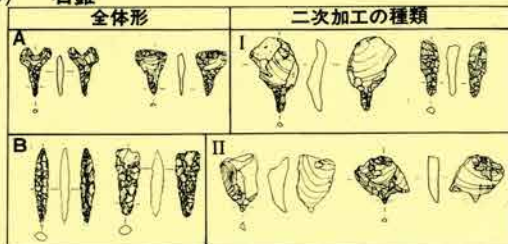
### 単位文様





# 阿久遺跡分類記号要覧(2)

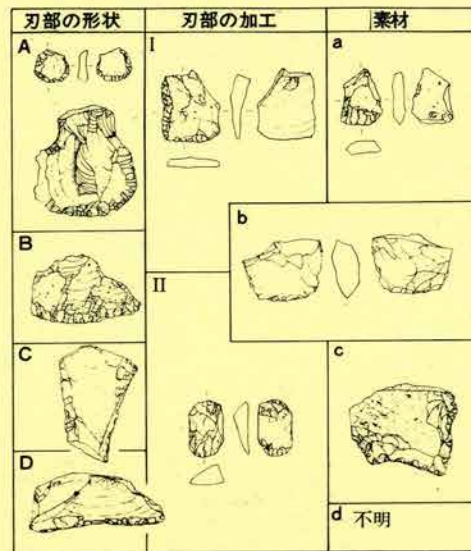
## 石錐



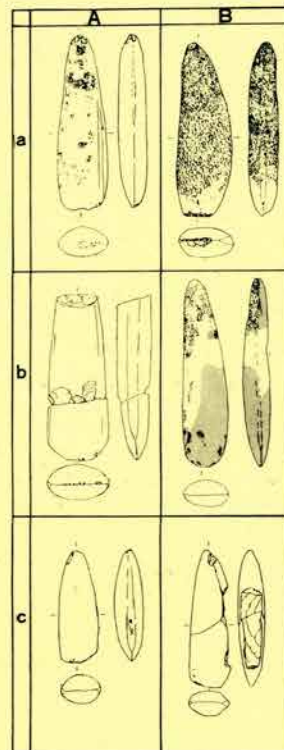
## 石匙



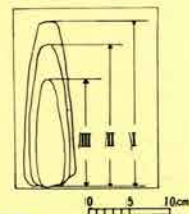
## スクレイパー



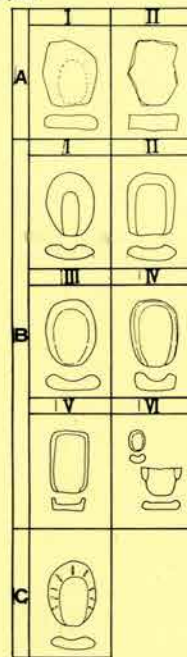
## 磨製石斧



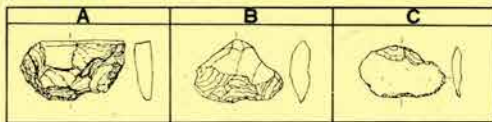
## 磨製石斧の長さ



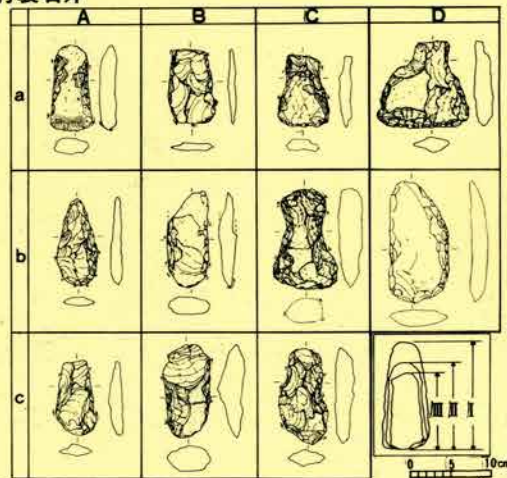
## 石皿



## 横刃型石器



## 打製石斧



## 使用痕のある石核・剥片・原石



## ピエス・エスキーユ

